ユーノ・スクライア外伝・絆

重要大事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ユーノ・スクライア外伝・絆

【Ｎコード】
Ｎ７０９７Ｘ

【作者名】
重要大事

【あらすじ】
新暦００７９年秋頃。次元世界の全てを我が物にしようとした広域次元犯罪者カトゥーンと彼の率いる漫画キャラによる大事件が勃発。次元世界の平和を守るために立ち上がったのは、数々の闇から世界を守り続けてきた、翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアと特定遺失物管理部機動六課の仲間だった。

戦いの末に次元世界を救った英雄・ユーノ・スクライアと機動六

課だったが、代償としてユーノは魔導死神として戦う力を失い、その力は魂の相棒である斬魄刀・晩翠と共に地獄へと誘われた。
翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアの名はやがて伝説の存在になり、この戦いはカトゥーン事件と呼ばれるようになった。

それからおよそ1年後、とある遺跡に眠っていたはずの９５０年前につくられたメダルの怪人、グリードが１５０年の眠りから復活する。しかし、彼らの身体の力の源となるメダルが足りず、その復活は不完全。グリードたちは完全復活のため、メダルと身体に埋め込まれた崩玉の欠片「アンゴルモア」を探し求める。そのために、人間たちの欲望をエサに成長する、ヤミーを作りながら・・・。

偶然、グリード復活の事件に巻き込まれたユーノは、持ち前の正義感から果敢にグリードに戦いを挑む。そんな折、グリードと共に１５０年の眠りから寝覚めた七大元帥ユーノス・スレイアによってユーノは完現術者として戦う力を与えられる。

そして、グリードに集団で立ち向かうスカリエッティ達の真の目的は？

さまざまな思惑をはらみつつ、絆の完現術士ユーノ・スクライアの新たな戦いが始まった。

消失と欲望と七大元帥（前書き）

ユ「僕は、ついてゆけるだろうか・・・――君のいない世界のスピードに」

消失と欲望と七大元帥

新暦００７９年――――――

全次元世界存亡がかかったあの「カトゥーン事件」において、多大な功績を残し次元世界を救った「翡翠の魔導死神」と言う一人の男がいた。

人間離れした戦闘力・ずば抜けた頭脳、そして・・・いくつもの死線を潜り抜け培った鋼鉄の魂で・・・この世界の闇と言う闇を斬り裂き光を守り続けた次元世界最強の男――――――ユーノ・スクライア。

しかし彼は――――――「カトゥーン事件」で己の力の全てを失ってしまった。

時と共に、「翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア」の名は――――――伝説となっていった。

そして、月日は流れた――――――――――――――――――

新暦００８０年

ミッドチルダ郊外　特定遺失物管理部機動六課男性局員隊舎寮

１２月８日　午前７時００分　月曜日

様々な伝説を残した生き証人は、この世界にて健在であった。

彼が窓の外を何も考えず見渡していると、そこで彼を慕う少女の噛んだ高い声が響いてきた。

「ユーノパパ――――！朝ですよ――――！！起きて――――！！」

その男、詳細は以下の通りだ。

ユーノ・スクライア／２４歳

髪の色／クリーム　瞳の色／翡翠　職業／駄菓子屋店主

魔法は、使えない。

ユウレイは、見えない。

故に、魔導死神ではない。

少女の声、義理の娘であるヴィヴィオの声に促され、ユーノは寝起きの顔を窓に向けた状態で徹夜疲れで未だ眠気の取れない声で第一声を発する。

「眠い・・・」

＞ｉ２８７１５―７０９＜

〈ユーノＳｉｄｅ〉

緑の甚平、深緑の羽織、そして帽子がトレードマークのこの男、ユーノ・スクライア２４歳（一応独身）は大あくびをしながら、ここ機動六課の局員のほとんどが食事をするため集まる食堂へと向かっていた。

クリーム色の髪をたなびかせ、丸みのあるメガネの位置を直し、その穏和な表情で見かける者すべてを虜にする。

そして、暫くしてから彼は食堂へとたどり着きやはり眠気の取れない様子であくびをしつつ朝の挨拶を行う。

「ふぁ～～～お早う・・・」

彼の声を聞くと、真っ先に言葉を返したのは彼の恋人で誰よりも彼を理解し、同時に愛する者・・・時空管理局のエースオブエースこと、高町なのはだ。

「あ、お早うユーノ君！」

飛び切りの笑顔を彼に向けたなのは。

なのはがそう言うと、他のメンバーもまた同様の言葉を向けユーノの方に振り返った。

ユーノもまたそんななのはや全員に柔らかな表情で返事を返す。

「うん。お早うなのは、みんな。えっと・・・ヴィヴィオは今日、終業式だっけ？。」

ユーノがそう言うと、なのはとその親友のフェイト・T・ハラオウンの隣で食事をしていた愛娘のヴィヴィオが笑顔で言う。

「そうだよ！それにしても漸く起きるなんて、最近パパ御寝坊さんだよ。またどうせ徹夜仕事でもしてたんだしょ？」

「あはは。図星だ・・・いや。新型のハイパーマシンと新装備研究とか論文の原稿の仕上げで色々あってさ、寝るの遅くなっちゃって♪」

飄々とした笑顔でそう答えるユーノに若干あきれ顔となるヴィヴィ

オやなのは達。

すると、それを聞いたなのはの戦友で同じスターズ分隊副隊長のヴィータがウィンナーを口に放り込んでからユーノに言う。

「たく、相変わらず働くのが好きな奴だぜ。それでまた体壊しても私達知らねぇぞ。」

「努力しま～す」

二人の会話がそのようにして区切りがつくと、ユーノの右腕でスクライア商店従業員の熊谷金太郎がユーノに席に座ることを促す。

「ささ、店長も着たところで朝食行きましょうか。」

「店長、早く座ってください！」

金太郎に便乗して、同じスクライア商店従業員、桃谷鬼太郎も言う。

「ああ。」

二人の言葉を聞き、ユーノはなのは達と同じテーブルに着席。

ごくごく平和な朝食にありつくのであった。

そのうち、鬼太郎が目の前に出されたデザート、大好物のプリンを見るなり目を輝かせて大興奮を覚える。

「うっひょう！今日のデザートは俺の大好物のプリンちゃんがついてるぜ！！おい、亀！お前の分も俺によこせよ人参やるから！」

鬼太郎は隣に座るスクライア商店従業員、同い年の亀井浦太郎に恐喝的な口調でそう言うが、勿論浦太郎は嫌そうな表情を見せる。

「え～～～嫌だよ！僕だってこのプリン食べたいんだからさ！そもそも自分の嫌いな食べ物押しつけるなんて性格悪すぎだよ先輩！」

「るっせー！交換だよ交換！」

「だったらそれ相応の価値のあるものにしてよ！ハーゲンダッツかハーゲンダッツとかハーゲンダッツとか。」

「全部ハーゲンダッツではないか・・・」

ハーゲンダッツと言う言葉を連呼する浦太郎を話を聞いていた機動六課ライトニング分隊副隊長、シグナムは真顔のままそう言う。

彼らのやり取りを見ていた機動六課部隊長、八神はやては思わず笑みをこぼす。

「あはは。ほんま朝から賑やかでええもんやな。」

「けど聞いてる分にはガキの喧嘩だよなあれ。」

ヴィータが鼻で笑いながらはやてにそう言うと、耳にした鬼太郎が剣幕を浮かべながらヴィータに詰め寄り、がんを飛ばしてきた。

「ああ？何だとヴィータ・・・てめぇこそ喧嘩売ってるのか！！」

「んだと！！私に喧嘩売ろうなんていい度胸じゃねぇか鬼太郎！何

ならグラーフアイゼンの錆してやろうか！！」

「上等だコノヤロー！烈火の炎でその髪正真正銘のチリチリパーマにしてやろうか！！」

二人は互いに火花を散らし合わせながら自分の相棒、もとい武器であるデバイス・グラーフアイゼンと斬魄刀・烈火を取り出す。

一触即発の彼らの行動を見ていた前線フォワードの一人で、なのはの愛弟子でもあるスバル・ナカジマは二人の間に入ろうとする。

「ちょ！落ち着いてくださいよ二人とも！ヴィータ副隊長も鬼太郎さんも食事中に・・・！」

「「るっせー！てめぇはすっこんでろ！」」

二人の怒号を浴び、スバルは半泣きの状態で自分の席まで退散。

思わずパートナーでもあり訓練校時代からの親友、ティアナ・ランスターに助けを求めるかのように詰め寄る。

「う～～～／／／二人とも怖いよティア／／／」

「余計な事言ったアンタも災難だったわね。ほら、何時までも泣かない。」

些か哀れにも感じながら言葉としてはその程度で済ませるティアナ。

その横ではフォワードメンバーの残り、ギンガ・ナカジマ、エリオ・モンディエル、キャロ・ル・ルシエがほくそ笑んでいた。

これが、新暦００８０年１２月現在の機動六課の朝食の風景なのである。

ユーノはこの光景を目の当たりにしながら、和やかな表情で思わず呟いた。

「あはは。平和だな――――――」

◇

〈ユーノ語り〉

あの戦いから１４カ月。

１年とちょっと。

そう・・・――次元世界の崩壊と存亡を懸けたカトゥーン事件からちょうど今日で１４カ月。

僕は２４歳となった。

体調も戻って元気になった。

あれから１４カ月の時が過ぎたが、次なるアンゴルモアの反応はまるで見受けられず、こうして比較的平穏な日々が続いている。

まるで、僕があの事件以降大人しくなったようにアンゴルモアもスカリエッティの動きもすっかり大人しくなった、そんな感じである。

なのは達も、そして従業員一同も戦いの傷が癒えて本当に良かった。

ちなみに、本来ならここに居そうな恋次さん達死神組は半年前、尸魂界からの緊急の帰還命令が下った為、今は六課には居ない。

山本総隊長の話では、今月中にはまたミッドチルダの方に向かわせるとのことだ。

機動六課はスカリエッティの逮捕とその目的であるとされるアンゴルモアの回収を念頭に引き続き任務を続けている。

ＪＳ事件が集結し、満期１年の頃とは大分事情が違う。

◇

朝食を終え、身支度を済ませた学校の制服に身を包んだヴィヴィオがユーノやなのは達に見送られながら元気よく学校へと向かう。

「行ってきま――――す！！」

「いってらっしゃい、ヴィヴィオ！」

「車には気を付けるんだよ。」

「は――――い！」

なのはやユーノ、それに他の者も同様にヴィヴィオに手を振った。

一応、まとまった休暇が無い限りヴィヴィオの家はなのはやユーノ達の仕事場であるここ機動六課になっている・・・今更ながら。

〈ユーノ語り〉

だけど、今の僕に――――――――魔導師の力も死神の力も残っていない。

僕の卍解、「月霊晩翠」の代償として僕の魂の相棒である「晩翠」が自分の命を引き替えに僕を守ってくれて、本来僕が向かうはずだった場所――――――――地獄へと堕ちて行った。

◇

ヴィヴィオを見送ったあと、機動六課教導官を務めるなのははスバル達フォワード五人を集合させると、この後の予定の為の準備について説明する。

「じゃあみんな、この後は11時ごろから機動二課のみなさん達と交流戦をする時間だから、その迎え入れと訓練場のセット始めようか。」

「「「「「「はい！」」」」」」

なのは達前線メンバーは真っ直ぐ訓練場へと向かい、普通の人間である元々が後方支援だったユーノはそんな彼女たちの背中を見送ると、何も言う事無く隊舎の方へと戻っていくのであった。

◇

〈ユーノ語り〉

今の僕は能力も何も持たない、言わば“普通の人間”だ。

だから今はこの六課で、アドバイザーと言う形のまま留まり専ら事務処理とか裏方仕事法に精を出している。

え？別に魔導死神じゃなくても戦う方法ならあんじゃないかって？

確かにその通りだ。

実際、腰に差してる大切な友人から譲り受けた「逆刃刀・真打」と「洞爺湖木刀」があれば戦えなくはないが、それでも僕は戦わないだろう。

だって、今の僕が戦って傷つけばきっとなのは達六課にいるメンバー全員が悲しむことになるから――――――

そう言えば、力を失くしてから気が付いたけど――――――リンカーコアも霊力もない状態って言うのは意外と身体が“軽い”のだ。

それは恐らく魂の質量、即ち晩翠と言う存在が居なくなったことで、極端にそれが小さくなったからだと思う。

魔導師の力と死神の力、その両方を失くしてから、僕の世界は流転していたものから一変、毎日が止まって見える。

今となっては血塗れになって来る日も来る日も戦っていたあの時の出来事が嘘のようだ。

◇

長々とそのように独白するユーノであった。

午後1時を過ぎ、普通の人間なら数時間で参ってしまいそうな膨大な量の事務仕事をこなしていたユーノは、ある程度の区切りをつけると書類をまとめ、身支度を始める。

「さてと・・・・・そろそろ約束の時間かな。」

時計を気にしながら、身支度を進めるユーノ。

するとそこへ運よくはやてとユニゾンデバイスのリィンフォース？が通りかかり、ユーノは声をかける。

「あ、はやて。丁度良かった。僕ちょっと出かけてくるよ。前々から知人と約束があってさ。」

「お・はいはい。了解したよ。ユーノくんも事故にだけは気を付けるんやで。」

「いってらっしゃいです、ユーノさん！」

「ああ。そんなに遅くならないから、夕方までには戻るよ。」

ユーノは二人にそう言うと、特に持ち物などはないが最低限必要なものと、大切な友人より譲り受けた逆刃刀と木刀を携え、六課自慢の転送ポートへと向かい、第９７管理外世界「地球」のとある場所へと向けて出発した。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ユーノは転送ポートで地球の日本、その中の東京都に位置するごくごく平凡な街、友枝町へと降り立つと、付近に人がいないことを確認し徐にビルの隙間から姿を見せる。

そして、そのまま事件を通して知り合った友人宅の元へと向かった。

地球：友枝町　木之本家

ユーノがやって来たのは、閑静な住宅街の中に佇む表札に「木之本」と書かれた一軒家であった。

ユーノは徐に石段を上り、玄関のインターホンを押す。

すると、スピーカーから女性の声が聞こえてきた。

『はい。木之本です。どちら様ですか？』

そう言って来たのはここの家の者で、ユーノの友人でもある木之本桜。

ユーノはさくらの声を聞くと、徐に返事をする。

「あ。どうもこんにちは。ユーノ・スクライアです。」

『あ、ユーノさん！待ってました。今、鍵開けますね。』

さくらはユーノが到着したことを受け、玄関の鍵を開ける。

ドアが開くと、目の前に映ってきたのはさくらと、彼女の夫でありユーノの親友、李小狼（日本国籍の為、本来ならば木之本小狼）、そしてさくらとさくらカードを守護する封印の獣（仮の姿であるためぬいぐるみ）、ケルベロスがお待ちかねだった。

「いらっしゃい、ユーノさん！ようこそ。」

「ユーノ。久しぶりだな。」

「よう、兄ちゃん！元気やったか！？」

「はい。ご無沙汰しています。さくらさん。小狼さん。ケルベロスさん。その節は色々と♪」

「立ち話もなんだ。上がってくれ。ちょうど大道寺も来ている。」

「そうですか。じゃあ、上がらせて・・・」

小狼に促され、早速上がろうとしたユーノだったが、直後彼は鏡に映ってきた自分の背中から見えた黒い痣に目をやり、思わず静止。

「・・・・・」

不審に思ったさくらが声をかける。

「あの、どうかしたんですか？」

「え？ああ・・・いえ。何でもありませんよ。お邪魔します。」

ユーノは適当に誤魔化すと、靴を脱いでスリッパに履き替えた。

◇

〈ユーノ語り〉

そう言えば、“地獄の呪い”だけは背中に刻まれたままだったかな。

両方の力を失くしてから地獄の呪いも一緒に消えるのかと思っていたけど、やっぱりこれだけは消えることはなかったらしい。

地獄の呪いはいまでも僕の魂の隙を見付ければいつでも侵食しかねない状況だ。

気を抜けばまた僕はクシャナーダと化し、それこそ僕の所為でこの次元世界が滅んでしまう。

だからそうならないように普段から気を付けてないといけないけど、皮肉なことに・・・今となってはこいつが僕が魔導死神だった事を証明する手元に残った唯一の証拠だ。

◇

ユーノはそんな事を読者に独白しながら、目の前の光景に目が点になっていた。

それは、ケルベロスがさくらが作っておいたお茶請け用のケーキを多く食べてしまったことで起こったさくらとの些細な喧嘩である。

「コラッ！！ケロちゃん駄目だってば！！」

「ええやないか、さくら！！一つぐらい多く食べても！！」

そんな二人の光景をユーノと同じように見ていた小狼は頭を抱え、その横ではほほえましい様子で紅茶を啜るさくらの親友、大道寺知世がいた。

「おほほ。ケロちゃんも相変わらずですね♪」

「全く・・・食い意地の張った奴だ。すまないな、ユーノ。騒がしくて。」

「あ、いえ。別に構いませんよ。」

ユーノはそう言いながら、二人の喧嘩の収拾がつくまで、紅茶を啜っていた。

◇

〈ユーノ語り〉

今や魔法使いでもない僕がこうして“同じではない魔法使い”の友人の家に来ている。

その魔法使いに仕え命を賭して主の命を守る守護獣もいる。

そして、僕と同じで魔法の力はないけど、そんな魔法使いの近くで何時も優しく見守る女性も揃って、何だか僕の周りは凄い人がいっぱいだったことに気づく。

そんなを事を考えながら、ユーノは今だ収まる気配の見えない二人

の喧嘩と、自分の存在を確認しながら場違いではないかと言う錯覚に陥る。

「あはは・・・・・何だか僕だけ浮いてるような気もするのは、気のせいかな・・・？」

そうやって一年の月日が過ぎた今も、晩翠が戻ってくる気配はない。

◇

〈小狼Ｓｉｄｅ〉

漸く喧嘩が収まり、午後のティータイムを満喫することが出来るようになったユーノ達。

さくらや小狼、それに知世を交えて基本的に非常に明るい話題の会話が中心だった。

しかし終盤に差し掛かり、ユーノは今まで彼らには伏せていた自分の身の上の変化を赤裸々に暴露。

それを聞いた瞬間、小狼は声を上げる。

「え？力をすべて失った・・・！」

小狼の言葉が同じように驚愕で一杯のさくら達の胸に響く。

ケルベロスは躊躇った様子でユーノに問い直す。

「ほんまかいな、兄ちゃん・・・その話・・・」

「ユーノさん・・・・・・」

さくらも心配そうな眼差しでそう口にすると、ユーノは飄々とした様子で頭に手を添えながら言う。

「あはは。いや～～～突っ走りすぎちゃいましてね、もう綺麗さっぱり何にもなくなっちゃいましたよ♪」

「そ、そんな飄々とした口調でさらっと片付けといてな！わいらもまだ混乱してるところなんやで！」

「そうですわね。魔法の力も、更には死神の力もすべて失ってしまったとなると・・・ユーノさんはもう二度と力は使えないということでしょうか・・・・・・」

悲しむどころか逆に開き直った様子のユーノの姿を見、ケルベロスたちは余計不安な気持ちとなってしまう。

「力の根源である僕の魂の相棒が地獄から戻ってくるまで、僕は力を使えません。尤も、その相棒が何時戻って来るかもよく分かったモノじゃないですし・・・極端な話、もう二度と帰ってこないってことも考えられますしね・・・・・・それこそ、僕だってまた――――」

と、自分がまさか二度と戻らないような言い方をしかねると、さくらは思わず張り裂けそうな声で言う。

「！え、縁起でもない！」

「可能性の話です。一度は僕も地獄に堕ちてますからね――――――」

「せ、せやけど・・・！」

さくらやケルベロス、知世も俄かには信じがたい地獄でのユーノの体験記、そして力の喪失に声を詰まらせる中、小狼は次のように尋ねる。

「・・・柊沢にはこのことは。」

彼が話題に出したのは、ユーノがイギリスでの遺跡発掘旅行で援助を受けたさくら達とユーノの友人である柊沢エリオルのことであった。

ユーノはこう返事を返す。

「手紙で伝えました。恐らく向こうも直ぐに分かってくれたと思います。」

「そうか・・・・・・」

小狼はそれを聞くと、再び浮かない顔つきで手を組んだ。

暫くの間沈黙が流れたのち。

さくらが唐突にユーノに向かって激励の言葉を口にしてきた。

「あの！たとえ今は力が戻らなくても、絶対いつかユーノさんの所に魔法も霊力も・・・それに晩翠さんも戻ってきますよ！だから、

絶対大丈夫ですから！」

「さくらちゃん・・・そうですわね。さくらちゃんの無敵の呪文がそうあるのですから、絶対戻ってきますわユーノさん。」

「せや！あんましょんぼりした顔しとってもアカんで！ほら、わいのケーキでも食って元気ださんかい！」

ケルベロスがそう言って口ごもった様子のユーノにそう言うと、隣に座っていた小狼はかなり驚いた様子でこう言う。

「な！ケルベロスが自らの食べ物を差し出すとは・・・これは今夜は土砂降りだな。」

「な・・・何やて！！！小僧！！！しばかれたいのか！！！！」

「だ、誰が小僧だ！！！お前こそいい加減人の事そう呼ぶのは止めろって言ってるだろう！！」

二人はいがみ合い、火花を散らして向かい合う。

傍らで見ていたさくらはかなりの動揺を見せながら二人の喧嘩の仲裁に入る。

「ああ！小狼君もケロちゃんも喧嘩は駄目だよ！ほら、二人とも仲直りして！」

「止めんといてな、さくら！！今日と言う今日は勘弁ならん！」

「俺だってな・・・我慢の限界ってものがあるんだよ・・・！その

ぬいぐるみみたいな顔に火神招来を浴びせてやる！」

「だ、ダメダメ！！小狼君、そんなことしたら火事になっちゃうよ！」

話しがどんどん進んでいく光景に取り残されたユーノと知世。

ユーノはそんな光景を見ながら和やか表情を浮かべる。

「はは。相変わらず仲がいいですね、小狼さんもケルベロスさんも。」

「そうですわね。」

と、その時さくらたちを見守る傍ら、知世は紅茶を啜るユーノを気に留め一瞥。

ユーノはそれに気づくと知世に尋ねる。

「？どうしたんですか、知世さん。」

すると、知世はかなりいいずらそうな表情を浮かべながら思い切ってこう言う。

「・・・晩翠さんが居なくなって・・・淋しくないのですの？」

思わずその言葉を聞き、表情が少し変わるユーノ。

さくら達もそれを耳にし、全ての動作を停止させユーノに注目する。

ユーノは残りの紅茶を啜り終わり、ケーキを一口入れてから徐に答える。

「まぁ、多少は淋しいですかね。」

「「「「・・・・・・」」」」

「そりゃ今まであったものが急になくなったりしたら物寂しくもなりますけど、ずっとイジイジしてても仕方ありません。何なら、このまま死ぬまで平和であっても大いに結構です。」

小狼はそんなユーノの言葉を聞くと、思わず胸が痛んだ。

そして、深いため息をついてからユーノに言う。

「・・・俺は、お前がそれで幸せならいいんだが、お前の仲間は本当にそう思ってるのだろうか？力を失くして、戦わなくなったお前を見てなのは達はどう感じているかは分からないが、俺から言わせれば“今のユーノ”は戦えなくて辛そうにも見える。」

小狼の言葉を聞き入れ、ユーノも思わず何処か寂しそうな表情を浮かべる。

◇

〈ユーノ語り〉

確かに、戦えないことに多少の辛さがあるのも事実。

だけど戦えることで優越感なんて感じた事なんて一度も無かった。

それで食べていこうとも。

それで誰かを助けられるのは嬉しかったけど、それ以上に無茶してみんなに迷惑をかけることや足手纏いになることの方がよっぽど嫌だった。

ただ、目の前に映る光を・・・困ってる人を理不尽な痛みに消されたくはないとは思っていた。

今も昔も、これからも――――――

魔導死神として戦う術はなくしても、今は自分に出来る精一杯の事をやるだけ。

だから僕は戦わずして、なのは達みんなの為に裏に徹することにする。

それが僕に出来る最善の事だと信じて。

◇

〈ティアナＳｉｄｅ〉

それから二日ほど経過した。

ティアナはユーノと共にとある用事を済ませるためにミッド市街地へと出ていた。

用事を済ませ、ヴァイスのヘリが待つポイントへ向けて歩いた二人。

ティアナは横のユーノに何度も自分から話しかけるが、ユーノは上の空の状態だった。

「ユーノ先生。ユーノ先生――――――」

何度か大きい声で隣を歩くユーノに話しかけるティアナ。

すると、ユーノも漸くそれに気づく。

「え。ああ・・・何？」

「あの、大丈夫ですか。上の空でしたけど・・・」

「あ・・・ごめんごめん。どうも最近駄目だね僕♪気が抜けちゃうことが多くて。」

ティアナは事件以後、本当の笑顔を見せづらくなってしまったユーノになのは達同様心を痛めながら、徐にこう呟こうとする。

「あの・・・ユーノ先生。やっぱりまだ晩翠さんの事――――――」

だが、その時事件は起こった。

「きゃあ！！！」

「「！」」

樹のを裂くような女の悲鳴が二人の耳に入る。

「銀行強盗だ！！」

二人がその声が聞こえてきた方へ走り出すと、目の前に映ってきた人だかりの向こうに人質となった女性に管理局法では保有が禁止されている質量兵器、オートマチックガンを突きつけた銀行強盗が立っていた。

「道を開けろ！！局員退がれ！！」

局員が動くに動けず対応に苦慮していると、時空管理局執務官でもあるティアナは犯人の近くまで駆け寄り、強い口調で人質の解放を求める。

「あなた、人質を放しなさい！」

「ああ？何だてめぇは！？邪魔するとこの女の命はないぞ！！」

ティアナは懐から愛機であるクロスミラージュを取り出そうとするが、直後ユーノによって止められてしまう。

「止すんだ。」

「ユーノ先生、しかし！？」

「一般の者が巻き添えを食う。任せて」

そう言うと、ユーノは徐に犯人の方へと近づいて行き、犯人はその表情とは裏腹に刺すような殺気を発するユーノに恐怖を覚えながら、追い返そうとする。

◇

〈ユーノSide〉

そう言えば、あれから僕の手元に残った――――魔導死神の証明がもう一つ。

「こ、こら!!緑色!!退がれ!!」

「娑婆とのお別れにいいものあげよう・・・」

「何?」

すると、ユーノは懐から数枚の写真を取り出し犯人見せびらかした。

「これ何~~~だ♪」

ユーノが犯人に見せつけたのは、管理局は勿論巷でも希少価値の高い売れは相当な高値がつくであろう八神はやて秘蔵でユーノの宝物、高町なのはのセクシー写真だった。

なのはのあられもない姿のセクシー写真を見た瞬間、犯人の顔が突然緩みだし鼻の下を延ば涎を垂らし出し始めた。

「おお!!!」

その隙を見たユーノは直ぐに犯人に近付き、右拳を犯人の顔面目掛けて殴りつけた。

「てああ!!」

ユーノの拳を喰らった犯人は壁に顔を食い込ませ、持っていた現金と人質を手から離し、拳を放した瞬間鼻血を出して昇天していた。

「わ・・・わたしは・・・見た・・・」

犯人が気絶し、ティアナや周りのギャラリー、さらにはその場の局員が唖然とする中ユーノは低い声で気絶した犯人に言葉を吐いた。

「悪く思わないでくれ。こいつは僕の宝物なんだ。もとより上げるつもりはないんでね・・・」

ユーノはここで独白する。

“勝つ為に鍛え上げた身体と反射神経はそれなりに役立っている”。

「あはは・・・ユーノ先生・・・ちょっとやり過ぎなような気も・・・」

ティアナが苦笑いを浮かべながら局員に連行されていく犯人を気に掛ける。

何しろ、ユーノは元・翡翠の魔導死神・・・それも次元世界最強と言われた強者だ。

普通の人間がどう足掻いたところで適うはずもない相手だったりすると、逆にそう言うことになりかねない。

すると、そんなティアナの問いにユーノは真顔で答える。

「大丈夫。適度に加減はしといたから。」

「（本当に大丈夫なのかしら・・・・・・）」

それでも、心配の拭えないティアナだったりする。

ユーノは解放された人質の女性の元へと近づき、安否を気遣う。

「お怪我はありませんか？」

「あ、はい！どうもありがとうございます！助かりました！！あの、よろしければその・・・お礼をさせてください！この近くに美味しいお店あるんで！」

ユーノに助けられ、顔を赤くしながらそう言う女性だが、ユーノはその性格から遠慮する。

「いいですよ。これでも一応公務中ですし、大したことはしてませんので。ティアナ、行くよ。」

「あ、はい！」

ユーノはティアナを連れて女性の元から立ち去っていく。

女性は一人取り残されポツんとする。

「は、はい・・・そうですか・・・残念です」

ユーノ達がいなくなり、人だかりも徐々に減っていくと・・・――その女性は胸元を開き、不敵な笑みを浮かべる。

「へぇ・・・・・・」

そして、自分を助けてくれた、“態と助けさせた”ユーノを見つめながら意味深な言葉を残す。

「力を失くしたって割には、意外と強いじゃないの・・・・・・ユーノ・スクライア」

この女の素性は一体――――その目的と真相はこの章を読んでいくとわかる。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ユーノが先のような活躍を見せたその日の夜――――――床に就き深き眠りに入ったユーノはその夢の中で実にリアリティな奇妙な光景を夢として見ていた。

とある世界の荒廃した大地に、一人の男がいた。

黒髪が特徴的なその男は満身創痍で、四体の敵を前にして完全に防戦一方のまま片膝をついていた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

その男と向かい合った四体の敵、もとい怪人どもは不敵な笑みを浮かべながら男に近づいていく。

「「「へへ（ふふ）。」」」」

「く・・・」

男は歯を噛みしめながら、手の内の無いこの状況に動揺する。

「そろそろ終わりにしようか？」

「ああ。俺達相手に人間一人でここまでよくやったと褒めておくとするか。」

「でも惜しいわね。私結構タイプだったんだけど」

「俺、コイツ嫌い！」

四体の怪人がそれぞれにそう言うと、その男・・・ユーノス・スレイアは言う。

「誰が・・・・・ここでくたばってなるものか！」

その瞬間、ユーノスは立ち上がるや否や足元にミッド式の魔法陣を展開。

色はユーノと同じ翡翠色だった。

「「「「！」」」」

ユーノスが魔法陣を展開した瞬間、四体の怪人は四方八方を翡翠に輝く特殊な結界で覆われ、ユーノスは印を結びながら魔力供給を続ける。

「俺の命を賭してでも、この世界は・・・守ってみせる!!!」

ユーノスの膨大な魔力が結界に供給されると、四体の怪人たちはその結界の中から出ることは不可能と化す。

そんな光景を遠い場所で見ていたユーノスの恋人、コトハ・タカナシはいても経ってもいられず彼の元に向かおうとするが、それを仲間のロメ・ヘンルーダ、グランマーダ・ラースに引き留められる。

「放して!!放してよ!!」

必死に抵抗しようとするコトハを二人は必死で抑えつける。

「ダメよコトハ!あなたまで行ったら・・・!」

「死にてぇのか!!」

二人はコトハと同じ気持ちではあったが、それでも自然と身体がコトハを止めようとし、コトハもまた死にたくないという気持ちもあったせいか徐々に抵抗する力が弱くなっていき、目から多量の涙が溢れ返ってくる。

「いや!!いや!!これで終わりなんてイヤ!!!ユーノス君・・・ユーノス君!!!!」

恋人の身の上に起きようとしていることが分かっているコトハにとって、この状況はまさにこの世の終わりとも思えるものでもあった。

その間に、ユーノスは最終詠唱を完了させようとしていた。

「“邪なる悪しき存在よ、我が命と引き換えに永劫の牢獄にてその命を幽閉せよ”」

〈Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｂｌｏｃｋ〉

その瞬間、彼が所持する蓋の表面に六角クリスタルが刻まれた懐中時計、最強の結界魔導師だけが持つことを許された称号、『結界印（シールドツァイヘン）』が強い光を発する。

光が強くなるにつれて、永遠の牢獄の異名をとる結界魔法奥義・・・エターナルブロックが発動し、四体の怪人たちはその中へと封印されていく。

「「「「ぐあああああああああ！！！！」」」」

「眠れ！！！！グリード！！！！」

ユーノスは己の命と全ての魔力をこの魔法に費やす覚悟だった。

コトハはその現状をモニターで確認しながら甲高い声を上げる。

「ダメ！！！！！！！！！！！！！！」

コトハが声を上げたその直後、ユーノスの体は結界の中へと引きずられていき、ユーノスは為す術もなく四体の怪人、グリード達と共にエターナルブロックの中へと封印されることとなってしまった。

「うわあああああああああああああ！！！！」

「ユーノス君！！！！！！！！！！！　／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

朦朧とする意識の中、ユーノスは最後恋人のコトハの事を思い浮かべながら長い長い眠りへとつくのであった。

「（コトハ・・・――――――）」

この夢は夢でしかなかった・・・そう言いたかった。

だがしかし運命の物語は、いま――――――

ここから再び動き出し始める。

そんな夢を見た後、ユーノはまた別の夢を見ていた。

今度の夢は先ほどの様なものとは違い、誰かが自分に対して朝が来たことを伝えようと呼びかける、そのようなものだった。

『いつまで寝てんだ、ユーノ！鼻の中にイチゴ牛乳流し込むぞ！！』

『いい加減目覚ませよ、ユーノ。』

『ユーノ殿。朝でござるよ。早く起きるでござる』

脳内に響き渡る独特の口調と声色。

「（今の声は――――――）」

声の主の事を考えながらユーノが夢の世界を抜け、現実の世界に戻ってきた。

夢から覚めたユーノだったが、その時両手に不自然なものが当たっていることに気づく。

「・・・何だ・・・妙に柔らかいこの感触――――――」

ユーノはその妙に柔らかいものの正体を知っている気にもなりながら、その感触をよく確かめるためようく揉む。

その後、徐に目を開けるとそこに映ってきたのは――――――

「あ、起きた♪お早う、ユーノ君。」

恋人でありユーノの弟子でもある高町なのはその人だった。

そう・・・・・・彼はそこで確信した。

この柔らかいものの正体は彼女の豊満な胸なのだと。

「・・・・・・」

一瞬の沈黙が流れ、ユーノは顔中を沸騰させ、更には股にぶら下がってるもう一人の自分を覚醒させると、隊舎全体に響き渡る大音声を発した。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

ユーノはベッドが飛び上がると、なのはの方に背を向け自分の股を気にしながら狼狽した様子で言う。

「なななななななななななななのは！！！！！！！！ななななななななななんで僕の部屋に！！！！！！！！！それよりぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ僕はひょっとして君のむむむむむむむ胸を！！！！！！！！！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

激しい動揺の所為で冷静さを完全に欠いているユーノに対し、なのはは至って平静な様子で言う。

「にゃはは。リアクションオーバーだよ、ユーノ君。別に大したことないって。将来はそれぐらいのことそのベッドで当たり前のようにやる訳だし、赤ちゃんつくる際はもっと口では言えないあ～んなことやこ～んなことも～～～？」

「何露骨にとんでもないこと言ってるの！！！僕の理性がもたないから止めて！！！！大体、さっきも言ってるけど何でなのはが僕の部屋にいる訳！？」

「あ、それはほら。ユーノ君の部屋の鍵。はやてちゃんがもしもの為にって持たせてくれたの。へへ♪」

なのはは自分の手に握られたユーノの部屋のスペアキーを見せ、ユーノは密かにはやてに怒りの炎を燃やす。

「（あのタヌキ娘！！！！！！）」

「えっと・・・もしかして迷惑だったかな？」

「い、いや！そんなことないよ！！起こしに来てくれたことにはありがたいけど／／／／今度はその・・・もっと普通に起こしてくれると嬉しいかなって・・・／／／／」

「てへ。は～い。気を付けます♪」

舌をちょっと出して反省の態度をユーノに見せたなのは。

ユーノは漸く冷静さを取り戻し、安どのため息をつくとなのはと向き合う。

「はぁ・・・朝からびっくりしたな・・・もしかしてヘンな夢見たのはその所為だったのかな。」

「・・・？ヘンな夢？どんな夢なの？」

なのはが尋ねると、ユーノは暫く考え込んだが肝心のその内容を忘れてしまい、間の抜けた様子で言う。

「・・・何だっけかな。喋ろうとしたら忘れたよ」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

そんなユーノ達とは違い、第１６０管理外世界「ＯＯＯ（オーズ）」と呼ばれる一つの異世界で静かに運命を齎す歯車が回り始めようとしていた。

ここには古代人が残した数多くの遺跡が残されており、そのほとんどが今もって解明されていないものばかりだ。

その遺跡の一つに、一際巨大な神殿を構えるものがある。

そこに、二人の盗掘者が入り込んだ。

鬼塚英吉、弾間龍二と言う地元では相当気合いの入ったチンピラ二人組だった。

二人は遺跡のトラップを掻い潜り、漸く神殿の奥へと侵入することが出来た。

神殿の中には目に余るほどの貴重なものが取り揃えられており、英吉はそれを見るなり目を輝かせて大声を上げた。

「ふふふはははは・・・宝の山だ俺達の！！！すっげーな！！おい、とっと運び出そうぜ！」

「し！お前気づかれるぞ！俺達以外にも誰かいるかもしれねぇだろ？」

「大丈夫だ。この遺跡はまだ未発掘なところが多い。ここまで来れた奴なんざ俺達以外にいねぇよ。」

「そうか。じゃ、お仕事お仕事♪」

英吉と龍二は欲望に駆られた目を浮かべながら、盗掘者らしく宝の山を運び出そうとする。

「丁寧に扱えって。」

「大丈夫だって。お、これあれじゃねぇか。古代ベルカの、なんかいい壺なんだよ・・・」

「はははは！」

完全に欲望に支配された二人は我を忘れて、お宝に目がくらんでいた。

英吉は思わず壺を一つ手に取り、更にまた一つとる。

「俺達のだ！これも！これも！！」

だがしかし、そんな二人の欲望はこの遺跡のこの内部にあったとある一つの石棺に異常をもたらすこととなった。

二人はまだ気づいていないようだったが、石棺の蓋が徐々に解放され始めていき、その中から不気味な光が出始める。

この石棺には一体何が入っているのか？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

そんな事など全く知らないでいるこの男、元・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは今朝の出来事を思い出しながら顔を少し赤くしていた。

「ふう・・・」

自分のオフィスの椅子に深く背をかけてから、忘れてしまった今朝見た夢の事をどうにか思い出そうとし、結果ユーノは一番最初に見たあのシリアス系の夢について考える。

「（今朝見たあの変な夢・・・何か妙に臨場感ある夢だったな・・・・・それと僕に語りかけてきたあの声・・・三人いたけど、あれはひょっとして――――――）」

そんな事を考えていると、ユーノの元に小包が届いた。

「店長。小包が届いておりますぞ。」

「ああ。そこに置いといてよ。あとで見るから。」

「承知しました。」

金太郎は抱えた荷物をユーノの指示通りその辺に置くと、別の仕事の為にオフィスから出ていく。

金太郎が出た後、一通りの書類に目を通してからユーノは届けられた小包を開け、同封されていた一冊の本と差出人の名前が書かれた電子メールを見る。

「ラングバード大学のホワイト教授からだ。何だろうな・・・」

ユーノが手に取ったほんの表紙を窺うと、それは驚くべきものであった。

「これは――――――」

本の表紙にはこう書かれていた。

「『七大元帥の伝説』・・・・・七大元帥ってまさかあの・・・」

ユーノはこの七大元帥と呼ばれるものについて一体、何を知っているのであろうか？

◇

〈鬼塚・弾間Ｓｉｄｅ〉

さて、一方で相変わらず盗掘作業に熱中していた鬼塚英吉と弾間龍二の二人であったが、その時あの石棺の光が強さを増し、二人の注目を集めた。

「「？」」

突然輝きを見せた石棺を凝視しつつ、英吉は怪訝そうな顔で呟く。

「何だ・・・」

と、その直後だった。

石棺が突如として崩壊したかと思えば、崩壊した素材はすべて灰色に輝く無数のメダルへと還元され、更にその中に混じった黄色・緑・灰色・青のそれぞれ7枚・5枚・7枚・8枚のメダルが中央に集まり無数のメダルを取り込んでいく。

「うおおお!!!」

「ひえええええ!!!」

奇怪な光景に思わず腰を抜かす二人。

そして、メダルが集合し怪人の姿へと形を成すと、天井裏で窺っていた一人の女・・・ユーノ・スクライアが偶然にも助けたあの女が呟く。

「メダルの覚醒が始まったようね・・・」

女は目を通して見た情報をある男に送信する。

「こちら破面魔導虚、リリス・ジャックスターン。次の指示をお願いします。」

リリスの連絡を受けたその男・・・・・失われた世界アルハザードと呼ばれる未だかつて人類が足を踏み入れたことのない世界に恐らく初めて降り立ったそ異形の天才科学者、ジェイル・スカリエッティは何故かケーキ作りをしながらリリスに対して指示を出す。

「殲滅」

「了解しました」

リリスはそう言うと、一旦その場から退却。

直後、覚醒の始まったメダルの怪人はその実体を露わにし、英吉と竜二は隅の方に隠れてその様子を恐ろしげな眼差しで窺う。

すると、退却したリリスは外の方で待機させていた破面魔導虚（アランカルロギア）と呼ばれる自分の部下に名を下し、神殿に向けて一斉攻撃を促す。

攻撃を受けると、神殿は崩壊を始め復活した怪人たちはその身体をメダルに還元すると、その場から避難。

だが英吉と龍二の二人は悲惨にもその被害を受けることとなった。

「「うわあああああああああああ！！！」」

崩れゆく神殿。

そんな神殿の中に取り残されたのは何もこの二人だけではなかった。

石棺の近くに一匹のフェレットがいた。

「う・・・・・・く・・・・」

フェレットの側には結果印と、赤色に輝くメダルが置かれてあった。

メダルの怪人はこのメダルとフェレットの存在に偶然にも気づかなかった。

怪人たちが逃げ出すと、リリスは探査神経（ペスキス）と呼ばれるものを全開にし、月席を開始し始める。

「破面魔導虚第一小隊、追跡を開始します」

リリス達破面魔導虚小隊が怪人の追跡をしている間、アルハザードに設けられた研究施設にて、ジェイル・スカリエッティは無限の欲望から生まれた趣味の一つ、ケーキ作りに没頭しながら隣で音楽を流す妖艶の美女、プレシア・テスタロッサの横で歌を口ずさむ。

「ハ～～～ピバ～～～スデ～～～トゥ～～～ユ～～～ハ～～～ピバ～～～スデ～～～トゥ～～～ユ～～～ハ～～～ピバ～～～スデ。ハ～～～ピバ～～～スデ～～～トゥ～～～ユ」

ホイップクリームを泡立て、生地に塗り、仕上げに取り掛かるスカリエッティ。

「ハ～～～ピバ～～～スデ～～～トゥ～～～ユ～～～ハ～～～ピバ

～～～スデ～～～トゥ～～～ユ～～～ハ～～～ピバ～～～スデ～～～ディア～～～」

スカリエッティはチョコレートソースでケーキに英語で誕生日を迎えたあるものの名前を書いた。

その名は――――――

「『グリード』・・・」

そして、最後にスカリエッティは大きく手を広げて音楽に乗せ、声高らかに言う。

「ハ～～～ピバ～～～スデ～～～トゥ～～～ユ～～～！！！！！！」

スカリエッティのこの不気味な行動は一体何なのか？

そんな事を考える暇もなく、リリスを除く破面魔導虚小隊はほぼグリードの力の前に全滅。

周辺は瞬く間に火の海と化してしまった。

その惨状を耳にし、崩壊した遺跡の中を這いずり回りながら動きつづける先ほどのフェレットがいた。

フェレットは人間の言葉を発しながら、実に弱々しい動きを続ける。

「追いかけなければ・・・・・・早く追いかけなければ・・・・・・この世界が・・・・・・この大地に生きる全てのものが・・・・・・奴らに・・・・・・グリードに駆逐されてしまう・・・・・・だが

この体では・・・・・・誰か・・・・・・誰か俺の声を聞いてくれ・・・・・・誰か・・・・・・力を貸してくれ・・・・・・！」

このフェレットの目的は一体何のか？

そして、何故彼が人間の言葉を発して、あの結界印を所持しているのだろうか――――――

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方その頃、ユーノはオフィスの方で自分の知り合いの教授から送られてきた一冊の本を読みふけり、徐に呟いていた。

「七大元帥・・・か・・・そう言えば、管理局が設立された当初、そんな人たちがいたって無限書庫の方でも一度見たことがあるよな・・・」

『七大元帥』

今から１５０年ほど前、時空管理局創設当初に存在したという他を超絶した魔力と技術を兼ね揃えた七人の名誉元帥のことである。

現在の名誉元帥とは意味合いが異なり、全ての能力的に於いて上位に立っていたのが彼ら七人なのだが――文献上、記されているだけでもその実力は一魔導師のそれを遥かに超えていた。

１から７つに分けられていたエース級の魔導師だけで構成された最強クラスの武装隊の各々の頂点に立っていた彼らは、先天固有能力

と同時に魔導体系にあわせての最強の称号が与えられていた。

その七人とは、『結界』・『砲撃』・『炎熱』・『氷結』・『雷光』・『幻影』・『剣戟』の分野に於ける鬼才達で・・・中でもその七人を統べ最強と謳われた結界魔導師こそ・・・以前『灰頭事件』の際、クロノがなのは達に話した人物であることはこのとき、ユーノ以外誰も知らなかったのだ。

そして、この七大元帥の一人が今――――――――１５０年の長い時を経て、今この世界に災いと共に復活を遂げたとは夢にも思わなかっただろう。

・・・――――――――

夕方、なのは達は午後の訓練を丁度終え、なのは達隊長陣はスバル達を整列させる。

「はい。では本日はここまで。」

「「「「「ありがとうございました。」」」」」

「さて、訓練後に言うのもなんだけど・・・なんと、本日午後7時に恋次さん達死神組がこっちに合流することになりました。」

「え！本当ですか？」

「うん。だから、これからお迎えの準備をしようと思ってるんだ。みんなも、手伝ってくれる？」

「「「「「「はい！」」」」」」

「じゃ、着替えてロビーに集合して準備に取り掛かろうか。」

そう・・・この半年尸魂界に帰宅していた恋次達が向こうの事情を終え、漸くこっちに合流することとなったのだ。

スバル達は心躍らせながらなのはと一緒に隊舎の方へ向かう。

「恋次さん達が戻ってくるんだ。何だか久しぶりだね！」

「そうね。半年ぶりになるけど、居ないと結構物静かで逆に落ち着かなかったしね。」

「慣れてしまったってこともあると思いますが、僕は恋次さん達には随分とお世話になりましたし、嬉しいですよ。」

「私も！」

「みんな誰だって嬉しいわよね。」

「早く着替え済ませて戻ろう。」

スバル達は手早く着替えを済ませると、恋次達の迎え入れの為の準備に取り掛かり、隊舎内はすっかりそれらしい飾りで一杯となっていった。

するとその時、ヴィヴィオとフェイト一緒に飾りとなる折り紙を折っていたなのははふと思い出したように言う。

「あ。」

「なのは？」

「なのはママ、どうしたの？」

「ごめんヴィヴィオ。フェイトちゃん。ユーノ君にもちょっと手伝ってほしいから呼んで来たいんだけど・・・」

「あ、いいよそれぐらい。多分ユーノなら自分のオフィスに居ると思うから。」

「うふふ。パパにも手伝ってもらわないとね！」

「あはは。そうだね。じゃあ、ちょっと行ってきます。」

「「いってらっしゃい。」」

なのはは二人にその場を一次任せると、ユーノのオフィスへと向かった。

ユーノのオフィスにたどり着くと、なのはは一度ドア越しに声をかける。

「ユーノ君。居る？」

すると、ユーノの声は聞こえてこなかった。

「・・・あれ？返事がないけど・・・もしかして寝てるのかな・・・ユーノ君。入るね。」

なのははそう言って扉を開け、薄暗い中の方に足を入れると目の前に映ってきたのは予想した通り椅子に背を懸け熟睡しているユーノの姿だった。

「あ。案の定寝てる。」

「く～～～～～」

「にゃは。気持ちよさそうだな。何だか起こすの悪い気がしてきたし、このままもう少し寝かせてあげてもいいかな。」

ユーノの笑顔に思わず頬を染めるなのはは、辺りを見渡しブランケットを持ってくるとそっとユーノの身体にかぶせる。

「よいしょっと。」

「ばん・・・すい・・・」

「え」

寝言を聞き、一瞬聞き間違いではないかと思うなのは。

だが直後、ユーノははっきりとした発音で言う。

「晩翠・・・・・・」

「！」

ユーノが口にしたのは、一年前・・・魔導死神の喪失と共に自分の前から姿を消した魂の相棒、晩翠だった。

なのははそれを耳にするなり、目を見開きながら後ずさり。

「（ユーノ君・・・・・・く！）」

どうしてだかわからないが、なのはは思い切り飛び出して行った。

そして、廊下の前で立ち止まり荒く息を立てながら心の中で考える。

「は、は、は、は、は（ユーノ君・・・ずっと私達に隠してたんだ・・・・・自分が戦えないことの辛さを・・・・・・そうだよね・・・ユーノ君は辛いんだ・・・・・・・自分の力で私や周囲のみんなの為に戦えないことが・・・・・・護れないことが辛いんだ・・・・・だけどそれで自分がそんな欲を持ったところで、意味はない・・・・・戦いたいと思えば私達が悲しむ・・・・・・だからそれを無理矢理押し殺して、抑え込んで・・・・・・私は・・・／／／）」

ジレンマのように込み上げるユーノを悲しませたくないという欲望と、ユーノに戦って欲しくないという欲望。

その二つか交錯し、なのはの心を惑わせ、一滴の涙を流させる。

「ユーノ君には戦ってほしくない・・・だけどどうしてだろう・・・そう思ってるのにどうして涙が出るんだろう・・・／／／どうして・・・・・心の片隅でユーノ君に戦って欲しいって思っちゃうんだろう・・・／／／」

深く悩み続けるなのはと、心の奥で闘うことを欲しているユーノ。

だがユーノの場合、ある事情によって自分に対する欲を失っているため、それを欲するというよりある種の使命感からくる啓示なのかもしれない――――――

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

アルハザード、スカリエッティの研究施設。

そこでスカリエッティはリリスより送られてきたデータを参照しながら、御満悦な様子で不敵な笑みを浮かべ、傍らスカリエッティが作ったケーキを食べる９歳前後の少女、アリシア・テスタロッサを微笑ましい様子で見守るプレシアが尋ねる。

「それで、どうなの。グリードとやらの力は？」

「ああ。素晴らしい・・・実に素晴らしいよ。私が造り上げた作品たちが悉く倒されほぼ全滅とは・・・・・・流石は“アンゴルモアグリード”。私の実験は成功のようだ！」

「あらそう。ひょっとしてこうなる事を予測していたんじゃないの。とても残念そうな顔には見えないもの。」

「当然だよプレシア。どんな無意味で役に立たない小さき命であったも、この世に生まれるということは素晴らしい！！！それに、グリード復活は、悪い事ばかりとも限らない。」

意味深な言葉を残すスカリエッティ。

彼はこのグリードと呼ばれる怪人と、ユーノ達が探し求めている禁忌の遺産・・・ロストロギア「アンゴルモア」を使って何をしでかしたというのか？

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

その頃、スカリエッティが感服する強力な力を秘めしメダルの怪人こと、グリードはそれぞれの色に合わせた布を出現させ、人気のない場所で自分たちの体の異常を確かめていた。

「ん？何だ・・・・・この体・・・・・・・変だ・・・・・・」

灰色のグリードで、重力系幹部のガメルがそう言いながらセルメンと呼ばれる不完全な体を見ながらそう言うと、青色のグリード、水棲系幹部のメズールが言う。

「決定的に足りないのよ。アンゴルモア・・・あとはメダル・・・それもコアメダルが」

メズールの言葉を聞き、緑色のグリードの昆虫系幹部ウヴァは驚愕する。

「何故だ？アンゴルモアは兎も角、メダルが勝手になくなるはずはない！」

すると、それを聞いた黄色のグリード、猫系幹部のカザリは次のように言う。

「そう言えば、あのユーノスって奴が握ってるのを見たよ。」

「「「何？」」」

カザリの言葉に、驚き返る三人。

「ユーノス・・・」

「ユーノス・スレイア！？まさか・・・・・あの時てっきり死んだとばかり思っていたのに・・・」

「ヤツ目！俺達と一緒に目覚めたか・・・くそ！復活しても食えない奴だ！」

「ははは。はぁ～～～あ」

彼らの失われたコアメダル・・・それを所持していると思われる１５０年前の戦いで自分たちを封印した存在、ユーノス・スレイア。

一体、その男の正体は・・・彼の運命は如何に？！

消失と欲望と七大元帥（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「どうも♪普通の人間になって初めてのこのコーナーになるけど、頑張っていきたいと思います。そんな訳で、本日は今回の章でキーワードの一つとなってくる七大元帥について紹介しよう♪」

「七大元帥とは、時空管理局創設直後に管理局全体を束ねていた七人の魔導師のことだ。常人を遥かに凌ぐ魔力と先天固有スキルを持っており、各部門のスペシャリストがのちに七大元帥と呼ばれるようになったんだ。」

「ちなみに、今回の章ではその七大元帥最強と言われるある男の人が出てくるのだけれど・・・」

？「きゃああ！！ユーノ様！！お久しぶりですわ！！！」

ユ「なぬ！？」

突然現れた謎の女。

そして思い切り抱きつく。

？「あの時の御恩はわたくし今でもはっきりと覚えていますわ！！！またお会いできて何よりです！！！」

ユ「ちょ／／／いきなり何なの一体！？て言うかあなた誰／／／」

？「もう?ユーノ様ったら、忘れてしまわれたのですか?」

ユ「忘れたも何も僕は全然覚えがないんだけど／／／て言うか、胸が当たってる!!!胸が!!!!!」

この女の正体は次回明らかになるが、晩生なのは一年たっても治らないユーノであった。

果たして、この女性は何者なのであろうか?

魔導師図鑑ハイパー!

すっかりご無沙汰となってしまったマッドサイエンティスト、スカリエッティ。

そしていよいよその彼が今回の章で再び動き出そうとしていた。

ス「ふふふ。いよいよ私達の出番がやって来たんだよ。ああ!!この時をどれほど待ったことやら!!さぁ、今日は宴だ!!」

スカリエッティは破面魔導虚とアルハザードで行動を共にする有能な助手にして実のフェイトの母親、プレシア・テスタロッサを加え盛大な宴を開いていた。

プ「随分と浮かれているところ申し訳ないけど、ジェイル。あなたに一つ言伝があるわ。」

ス「ほう、何だねプレシア。私への言伝とは?」

有頂天になってワインを呑み干すスカリエッティにプレシアは真顔

で口にする。

プ「今回の章では飽く迄も敵はグリードとヤミーを想定しているから、当面はあなたの表立った動きはないそうよ。」

ス「ぐさっ！！！」

スカリエッティの胸に心の矢が突き刺さった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝

小「本日只今より機動六課へと出向になります、四番隊七席の小鳥遊万梨阿と申します♪」

ト「自分はトム・ジキルです！先生の論文は毎回拝見させてもらっています！」

グ「これはお前の欲望が生んだお前の姿そのもの」

ユ「楽して助かる命が無いのは・・・何処も一緒だな！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユ「変身！」

第１４０話　メダルと懐中時計と謎のフェレット

メダルと懐中時計と謎のフェレット（前書き）

ユーノス「時は常に背後から迫り、唸りを上げて眼前に流れ去る。」

「踏み止まれ。時がお前を美しい過去へと押し流そうとどれほど牙を剥こうとも。」

「前を見るな。お前の希望は背後に迫る。冥冥たる濁流の中にしか無い。」

メダルと懐中時計と謎のフェレット

＞i28716―709＜

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

その頃、機動六課の隊舎では恋次達の迎え入れの為の準備がほぼ完了し、あとは中央管理局に立ち寄った恋次達が乗った車が来るのを待つだけであった。

隊舎の前に整列し、恋次達の到着を待つなのは達前線メンバー。

シグナムが時計を確かめると、約束の時間まであと１・２分であることが分かった。

「そろそろだな。」

「恋次さんに吉良さん、ルキアさん・・・それに白鳥さん元気ですかね？」

「あの四人が元気じゃねぇことが今まであったかよ」

「然様。余程の事がない限りあの四人は健康そのものですぞ。」

そんな談笑をしながら心待ちにしていると、機動六課の方に一台の車が停車し、なのは達はそれを見て恋次達のだと確信する。

「お。帰って来たぜ。」

全員が車のドアを凝視し、開放されるのを待っていると、徐にドアが開き中からはアンゴルモア捜査で一年前、出会って以来一緒に協力してきた異世界・尸魂界の使いであり護廷十三隊三番隊隊長、阿散井恋次が私服姿で登場する。

「よう、てめぇら！元気してたか！？」

恋次が車から出ると、それに便乗して同じ三番隊で副隊長の吉良イヅルと、恋次の幼馴染の六番隊副隊長、朽木ルキア。

そして嘗ての事故でユーノと同じ魔導死神として覚醒した八番隊の第三席、自称“白翼の魔導死神”の白鳥礼二が登場。

「恋次さん！ルキアさん達も御久しぶりです！！」」

なのは達は嬉々とした表情で彼らの元に近づき、恋次達もまた半年ぶりの再会に思わず表情が崩れる。

「ああ。なのは達は相変わらず元気そうだな。」

「結構長い事一緒に居た所為かあんまり久しぶりって気がしないね。」

「まぁな」

「皆の衆。待たせたな。態々の出迎えご苦労。」

「け。誰もてめぇの出迎えをしたつもりはねぇよ！」

白鳥とは犬猿の中である鬼太郎が舌打ち交じりにそう言うと、それを聞いた白鳥は不満ありげにこう言い返す。

「何と無礼な。半年ぶりの再会にも関わらず横柄な態度・・・進歩の無いピーチはこれだから困る。」

「ああ！何だとこの手羽野郎！！もう一遍言ってみろ！！」

自分の事をピーチと言う風に独特に罵る白鳥に憤慨した鬼太郎は烈火を解放し、白鳥に向かおうとするがそれを慣れた様子で浦太郎と金太郎が止めにかかる。

「ちょっと先輩抑えて抑えて！だから馬鹿にされるんだよ。」

「全くであるな。」

「てめぇらもてめぇらで俺の事馬鹿にしやがって！！」

従業員にも馬鹿にされ、フラストレーションの高まる鬼太郎に追い打ちをかけるように白鳥は真顔で言う。

「馬鹿なのだから仕方ないであろう。」

「んだと！！」

その時、耳を抑えながらずっと我慢していた恋次は大声を上げる。

「ってうるせーぞてめぇら！！横でギャーギャー騒ぐんじゃねぇよ！」

「そうだぞ貴様ら。今日は折角我々の方から紹介したい者がいるというのにこれでは全くその趣旨が伝わらんではないか。」

「え？紹介したい人って・・・」

ルキアの意外な言葉に一同は唖然とする。

恋次は一息ついてから、次のように説明をする。

「実はな、山本総隊長とミゼット・クローベルが今後の事を話し合ってな、ユーノの力の喪失とスカリエッティのことも考えて、尸魂界から一人助っ人を送ることになった。」

「紹介する。護廷十三隊、四番隊第七席・・・小鳥遊万梨阿（たかなしマリア）さんだ」

吉良はそう言って、助手席のドアを開くと、その中から出て来たのはそれこそまるで絵に描いた様な絶世の美女で、白い美脚を見るなり鬼太郎と浦太郎は鼻の下を伸ばす。

「「うっひょーーーー！！」」

そして、同じようになのは達も素直な感想を口にする。

「綺麗・・・」

女性はすっかり自分に見取れているなのは達の前に近づくと、懇切丁寧な口調で自分の事を名乗り出した。

「どうも初めましてみなさん。本日只今より機動六課へと出向になります、四番隊七席の小鳥遊万梨阿と申します♪」

「あ、こちらこそ！機動六課課長・部隊長の八神はやてです。」

「スターズ分隊隊長、高町なのはであります！」

「ライトニング分隊隊長、フェイト・T・ハラオウンです」

マリアの挨拶に伴い、先ずは隊長陣の三人が敬礼。

マリアはその後笑顔を浮かべ言う。

「はい。みなさんのことは阿散井隊長達よりよく聞かされております。えっとそちらの方たちが、フォワードのみなさんでよろしいのですね？」

「はい。スバル・ナカジマ一等陸士です！」

「ティアナ・ランスター執務官です。」

「エリオ・モンディエル二等陸士です」

「同じくキャロ・ル・ルシエ二等陸士と使役竜のフリードです」

「スバル・ナカジマの姉で、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

動揺にスバル達フォワードメンバーも挨拶をきっちりと行い、マリアはそれに応えるように可愛らしい形の敬礼をする。

それを見て、鬼太郎と浦太郎はもうメロメロだった。

「小鳥遊は卯ノ花隊長の推薦なんだ。だから鬼道による治癒とバックス系の技が得意なんだ。足手まといにはならないと思うから心配するな。」

「と言うかそこの二人はいつまで鼻の下を伸ばしておるのだ。」

ルキアはあきれ顔でそう言うと、マリアの虜になっている鬼太郎と浦太郎の姿を見る。

「「でへへへ♪」」

まぁこんな二人はどうでもいいとして、取り敢えずマリアの方は最後にこう締めくくる。

「みなさん、この世界に来たのは今回が初めての事ですから色々と分からない事が多々ありますが精一杯努力いたしますのでどうかよろしくお願いします。」

「「「「「「「「「「「「はい。よろしくお願いします。」」」」」」」」」」」」

すると、恋次は徐に辺りを見渡し一番会いたいと思っていた人物の姿が見えないことを疑問に思った。

「?おい、なのは。ユーノはどうした?姿が見えねぇぜ。」

「ああ。ユーノ君なら多分まだお昼寝から覚めてないと思いますけど・・・」

「何だよ久しぶりの再会だって言うのにそれはねぇよな・・・」

「あ。でも噂をしたら来たみたいだよ。」

吉良はそう言うと、あくびをしながら廊下の方を歩いてきたユーノ

の姿を発見。

ユーノはまだ少し寝ぼけた様子でもあった。

「ふぁ～～～ちょっと寝過ぎたかな～～～」

恋次達は元気そうなユーノの姿を見て安どの表所を浮かべる。

そして、徐にユーノの元へ近づいて行った。

「ようユーノ！元気そうだな。」

「あ、恋次さん♪吉良さんにルキアさん、それに白鳥さんも――――」

と、ユーノが半年ぶりとなるかけがえのない仲間の再会に笑顔を浮かべていたその時。

唐突に脱兎のごとく勢いをつけて駆け出した小鳥遊万梨阿が長い時を待ち侘びたようにユーノの身体飛びつきこう言った。

「ユーノ様～～～？」

「ぐっぎ！！！」

マリアの突然の行動と、ユーノに対する言葉を耳にした瞬間、辺りは凍りつきなのは達もそうだが恋次達もまた表情を一変させる。

「ふぇ！？ゆ・・・」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「ユーノ様！？」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

声を揃えて耳にしない言葉を復唱する一同。

「げっほげっほ！！」

ユーノは豪快に地面に倒れると、きつく自分の体を抱きしめるマリアの力に苦しみながら抱きつかれていることに関しての羞恥心から顔を赤くする。

マリアはユーノを顔を見ながら、頬を染めこのように言う。

「お逢いできてマリアとっても嬉しいですわ？？？」

すると、マリアはユーノの頬に軽くキスをし、直後ユーノは自分に起こったあり得ない出来事に一瞬で沸騰する。

「なななななな／／／／／／／／／／／」

なのは達もまた、大声を上げて驚き返るしかなかった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「ええええええええええええええええ！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

恋次はみなの気持ちを代表して、マリアに尋ねる。

「ちょ！ちょっと待て！！！！小鳥遊！！！お前ユーノに何してんだ！！」

「と言うか小鳥遊。貴様はユーノ殿を知っていたのか!?」

「はい!勿論ですわ!それにしても相変わらずその端正な顔は何とも素敵ですわ!!マリア益々惚れ込んじゃう??」

マリアはそう言いながらユーノの首をきつく抱きしめる。

「／／／／／／／／」

ユーノの思考回路はマリアの行動によってショート寸前の状態であり、傍らで見ていた一同は唖然としていた。

「こ、こんな展開って・・・ありなの・・・!?」

と、その時リィンは横から凄まじい殺気を感じとり、その殺気を発している魔王と化したなのはの様子に気が付き、全員に警告を促す。

「そ、それよりみなさん!なのはさんが・・・／／／／」

「な、なのはちゃん!?」

「ママ・・・燃えてる・・・／／／／」

全身から殺気と共に嫉妬の炎を燃やすなのはに、思わずその場から退いてしまう一同。

「うううううううううううう!!!!!!!!!!嫉妬の炎が!!!!!!」

なのははそう言いながらレイジングハートを起動させ、ユーノをたぶらかすごみを配乗しようと動き出すが、咄嗟にこの場にいる全員に止められ更にはユーノの説得もあってか何とか魔王と化したなのはを抑え込むことが出来たのであった。

ひと段落がついてから、恋次は早速ユーノと何かしらの因縁があると思われるマリアから事情を窺うことにした。

「で・お前はユーノとはどういう関係なんだよ?つうか、ユーノはこいつのこと知ってるのか?」

「ユーノ君・・・ちゃんと話してくれないと・・・」

未だに嫉妬の炎を燃やすなのはに恐怖しながらユーノは身に覚えのない出来事に困惑する。

「だ、だから／／／僕は記憶にないって・・・・・・あ」

その直後、呆気にとられたような声でユーノはあることを思い出す。

「思い出されましたかユーノ様?」

「そう言えば・・・・・・思い出した気もする」

「本当ですか?では、小鳥遊とはどういう・・・」

「あれは確か3年前の事でした――――――」

今から三年の前の出来事。

出会いの舞台は地球の京都である。

「京都の方に用事があって、出掛けたその日の夕方でした。鴨川の上流付近で巨大虚（ヒュージホロウ）に追い詰められていた女の死神を助けた事がありまして・・・」

「その時の死神と言うのが、この私ですの♪」

「え！マジで！？」

驚き返る一同。

マリアはその時の事を赤裸々に暴露する。

「護廷十三隊に入りたてで、経験を積むために現世に送り込まれた私ですが、突如襲って来た虚に追い詰められ、もう駄目かと思った矢先でした。彼方より颯爽とユーノ様が飛んできて、私を守りながら造作もなく虚を退治してくれたのですわ？」

〈マリア回想〉

巨大虚を前にし、自分の命を覚悟したマリアの前に突如現れた緑色の格好をしたその男・・・当時の翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは斬魄刀晩翠で巨大虚の頭を斬り裂くと、助けたマリアの安否を気遣った。

『大丈夫ですか？』

『あ・・・はい・・・私は何とも・・・』

『なら良かった。一応死神の知り合いがいましてね、きっとこの辺りに派遣された死神なんでしょうね。これも何かの縁だ。ひょっとしたらまた遭えるかもしれませんね。それじゃ、僕はこれで』

ユーノはそう言って刀を元の姿に戻し、その場から立ち去ろうとするが、マリアは咄嗟にユーノに名前を尋ねた。

『あ、あの！お待ちください！せめてあなたのお名前を！』

『え？ああ・・・僕はユーノ。ユーノ・スクライアです。』

『ユーノ・スクライア・・・様・・・／／／』

その時、マリアは確信を持った。

自分は今、この男に“恋”をしているのであると――――――

◇

〈マリアＳｉｄｅ〉

そんな昔の事を語りながら、ユーノの横でマリアはハートマークを浮かべながら更に話を続ける。

「それが私達の運命の出会いだったのですわ♪以来、ユーノ様に会える日を心の底から待ちつづけながら、いくつものトレーニングを重ねながら上昇を収拾を続け、、ついにユーノ様の情報を掴んだと言う訳ですわ！！あっは！！ユーノ様！！」

マリアはそう言うと再びユーノの身体に抱きつき女とは思えないほ

どの馬鹿力で抱きしめ、ユーノは思わず険しい表情を浮かべ苦しみだす。

「ぐあああああ！！！くくくく苦しい！！！！」

「あああ！！！駄目！！！！！ユーノ君にくっつかないで下さい！」

恋人であるなのははこの現状に我慢できるはずもなく、自分もマリアに負けないようにユーノの身体に抱きつききつく抱きしめる。

結果ユーノは二重の苦しみを味わうことになった。

「ぐあああああ！！！なのは！！！！！苦しい！！！！」

「ユーノ様？マリアはもう、離しませぬわ／／／／／／」

「絶対絶対絶対ユーノ君は渡さないの／／／／／／」

離れたところで、恋次達は額に困惑の汗を浮かばせながら、この面倒な状況を今後どう処理していくかに関して考察をしていくのであった。

「何だか・・・・・面倒な奴が増えちまったな・・・おい・・・」

「そうですね・・・・・・・」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

恋次達が帰還して、一夜明けたその日の朝方だった。

ユーノは知り合いの大学教授からの依頼を受け、第１６０管理外世界「ＯＯＯ」で発見された遺跡の調査の為、発掘作業に出かけることとなった。

なのは達にかなり不安げな様子で見守られ、六課を出発したユーノはヴァイスのヘリで目的地までやってくると、発掘に必要なものが欠けていないかどうか入念にチャックし、逆刃刀と木刀を携え発掘現場に足を踏み入れた。

ユーノが目的の遺跡付近を見渡していると、依頼主である教授の仲間であり発掘作業員の二人がユーノの到着を見、嬉々とした表情を浮かべる。

「お！来ましたよ、班長。」

「ああ。やはり本物は写真とは全く違うな。威厳が肌からバシバシと感じ取れる。」

二人は徐にユーノへと近づいていく。

その傍らユーノはあちこちで出土した貴重な考古学的代物に目を奪われる。

「久しぶりだな♪こう言う遺跡発掘の調査は。最近、熱血バトルアクション路線でつっぱしって来たから偶にはこういうのも入れて気を落ち着かせないとね♪」

と、その時作業員の二人がユーノの元へと歩み寄ってきた。

「お待ちしておりました、ユーノ先生。私、この現場で指揮を取らせてもらっています班長のゴーレ・ハイドです。」

「自分はトム・ジキルです！先生の論文は毎回拝見させてもらっています！いや～～～この間のフライデーに掲載された『クスクシュエ文明と農耕発達の考察』、実に興味深いものでした。いや～～～相変わらず素晴らしいのなんのって！！」

「ははは。褒めすぎですよ。まぁ～でも嬉しいですよ♪一応今は普通の人間で何が出来るかは分かりませんが、こんな僕でよければ是非とも協力させていただきます。」

「とんでもない！目に余る光栄でありますよ！！」

「いや、全くですな。ははははは」

「はは。大げさですってそれは。」

「兎に角、ご案内いたします。こちらへ。」

ハイドとジキルは早速ユーノを今回発掘されたばかりの新しい遺跡へと案内する。

ユーノが案内された場所までやってくると、目に映って来た光景に思わず口を開く。

発見されたばかりの遺跡は原型こそは何とか保たれてはいるものの、奥の方に会った貴重な神殿が見るも無残に破壊されていたのだから。

「あ～あ・・・・・これはまた派手にやられましたね・・・神殿の外も内部も完全に崩れ落ちて原型をとどめていない。」

「どうも盗掘団らしきものが先に入り込んでいたらしくてですな・・・」

ハイドはそう言いながらモニター画面を開き、そこに映し出されたベッドで絶対安静の状態でいるその盗掘団・・・鬼塚英吉と弾間龍二の二人の姿を見せた。

「無事なんですか？」

盗掘団とは言え、一応心配するユーノ。

「数日前に調査団が発見して、病院に運びました。意識不明の状態だったらしいのですが、幸い命に別状はないとのことです」

「よかった・・・」

安どのため息をつくユーノ。

しかしハイドとジキルは寧ろこの二人に嫌悪感を感じていた。

「だが全く何ともけしからん連中ですよ。貴重な古代の遺物を金儲けのために盗もうなどとは・・・！」

「こう言う輩がいるから、古代人の遺物がどんどん壊されていくのですよ！」

「あはは・・・・・しかし崩壊は人為的に起こったものなんでしょうか・・・遺跡を守る自動プログラムが働いたとしても、守る側にある神殿までここまで破壊するとは思えない・・・」

長年遺跡発掘を専門にしてきたユーノがそのような見解を述べると、ハイドは腕組みをしながらこう言う。

「そのことについて、一つ妙な痕跡が見つかりまして・・・」

「痕跡・・・ですか？」

「ちょっとこちらを」

ハイドは先ほどの映像を切り替え、調査の結果判明した神殿内部の見取り図を参照しつつ、そこに安置されていた例の石棺の映像をクローズアップし、ユーノに説明する。

「どうやら石棺のようなものらしいのですが・・・――解析してみたところ、かなり厳重な結界魔法が施されておりまして、しかもそれは我々の魔法科学では開けることが出来きぬほどに強固な・・・」

「成程。それが今回何らかの事で石棺が開放され、何かが外に飛び出してきたと・・・」

「ええ。しかし何が飛び出してきたかは私どもにも皆目見当がつきませぬ。万が一それがロストロギアであるという可能性を考えれば危険性は否めません。何とか、ユーノ先生のお力を貸してはもらえないかと思いまして。」

「そうですか。分かりました。非才の身ではありますが、全力にて承りました。」

「ありがとうございます。いや～～～本当に光栄ですな！次元世界最強と言われる『翡翠の魔導死神』のユーノ先生に協力してもらえるなんて。」

「元・翡翠の魔導死神ですよ、ハイドさん。今はただのユーノ・スクライアですから・・・」

「あ・・・」

「班長。」

言ってはならない言葉を口にした瞬間、ユーノ達の間に沈黙が流れる。

そして暫くして、ハイドは申し訳なさそうな表情でユーノに謝罪する。

「す、すまない。私としたことがつい・・・」

すると、ユーノは些か寂しそうな表情で返事を返す。

「いえ。気にしてませんよ。本当の事ですから。ささ、取りあえずテントの方へ向かいましょう。そこでより詳しい調査のお話を伺いたい。」

「そうですな・・・では参りましょう。」

ハイドとジキルはユーノをテントの方へと案内するため移動を開始する。

ユーノはその後に続いて歩きはじめようとした矢先だった。

「ふう～～～ん？」

ユーノは自分の足元に光るものを発見した。

「何だこれ・・・・・・」

ユーノはその場にしゃがみ込み、砂の中に埋もれていた光るものの姿を露わにすると、出て来たのは赤に輝くメダルと六角クリスタルが刻まれた懐中時計だった。

「メダル・・・それに・・・懐中時計・・・・・・誰かの落とし物かな・・・・・・それとも遺跡の中で見つかったのか・・・」

そんな事を考えながら、ユーノは取り敢えず二つの代物を懐に仕舞い込むと、のちの調査の為にテントに持ち帰ることにした。

だが偶然にも彼が拾ったその代物・・・・・・それはがれきに埋もれていたとあるフェレットが落としたものだとはこの時、誰も気づいてなどいなかった。

「う・・・・・・」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

さて、ユーノが発掘調査に精を出す中、遺跡からそう遠くない場所にある市街地で一つの事件が起こっていた。

ある宝石店でグリードの一人、昆虫系幹部のウヴァが突如襲撃。

顧客たちは異形の怪人の姿に恐怖し、声を上げた。

「「「きゃあああああああ!!!」」」

後ずさりしながら徐に歩み寄ってくるウヴァに恐怖する顧客たち。

その時、ウヴァはある女性の姿に目を奪われた。

「ん」

その女性とは、この宝石店のリピーターで財力もそれなりにある尖貴子（とんがりたかこ）なる婦人だった。

婦人は恐怖のあまり頭を押さえてしゃがみ込んでいた。

ウヴァはそんな婦人の姿を見て、利用できると判断すると無理矢理に彼女を立たせた。

「おい！」

「ひゃああ！」

「・・・その欲望・・・ちょうどいい」

そう言うと、ウヴァはカマキリの柄が刻まれたセルメダルを取出し、それを婦人の頭に突如として現れた投入口に投入。

直後、女性の体からセルメダルと彼女の持つ欲望から誕生した全身を包帯で覆われたかのような怪人が出現。

思わず婦人は声を上げて更に恐怖した。

「きゃああ！！！！ああああああ！！」

「騒ぐな！これはお前の“欲望”が生んだお前の姿そのもの」

ウヴァがそう言うと、欲望より誕生せし怪人は婦人が身に付けていた指輪を食らい、婦人はなくなった指輪に深い悲しみと後悔を覚える。

「あああああ！！！一億の指輪が！！！」

婦人は悲しみのあまり他の顧客達の中へと入り込んで隅の方で泣き始める。

指輪を食らった怪人はそれだけでは飽き足らず、店内に展示されていたありとあらゆる宝石を食らいつくし、セルメダルを増殖させ、一通りの捕食を終えると体に変化が訪れた。

怪人はその姿を新しい姿へと成長させ、現れたのはカマキリの様な容姿が特徴的なヤミーと呼ばれる怪人だった。

顧客たちは姿を変化させたヤミーに更なる恐怖を覚え、ウヴァはそのヤミーに指示を下す。

「俺のコアメダルを探せ。取り戻せ。」

「御意」

そのヤミー・・・カマキリヤミーは命を受けるとその場から飛び出し、目的のコアメダルを探しに行くのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

宝石店が襲撃される少し前、ユーノ達はディスプレイと睨めっこしながら、未知なる科学力を秘めた遺跡と問題となっている謎の石棺の謎の解明に勤しんでいた。

ユーノ自身、これほどまでに高度な魔法構成技術を見たのは生まれて初めてであった。

「凄い・・・・・破片だけからでもかなりの高エネルギーが感じ取れる。」

「先生も不審に思いますでしょ？調査の結果、この遺跡がおよそ５０００年も前に建造された神殿なのですが、何故かこの石棺だけは大きく年代が違っていまして、破片から残っていた魔力反応を逆算すると大体１５０年前のものだと推測されます。」

「１５０年前！？確かに・・・妙ですねそれは・・・」

「あ～一体この石棺の中に何が封印されていたというのだ・・・！

？何故そこまでして頑丈な結界で覆わねばならなかったんだ・・・
！？くそ！！何ともどかし！！」

ジキルはそう言いながら悔しそうに頭を掻き毟り出す。

ユーノもまた、頭の中でこの一際奇妙な石棺の謎に頭を抱えていた。

「（ハイドさんとジキルさんの言う通り、これが強壮型の結界魔法・・・それも超ハイレベル奥義と言っても過言ではないほどに強力なものであることは間違いない・・・だけど、これは本当に一魔導師の結界魔法なのか！？僕がこんな事を言うのも変だが・・・現代魔法科学と嘗ての僕の力を以てしても、こんな途轍もなく精密さを有して莫大な魔力を消費する結界を作るのは不可能だろう・・・それが１５０年もの大昔にいた魔導師がやったとなると・・・そんなことが出来るのは僕の知る限りあの人しかない・・・・・・！？）」

ユーノはそう考えながら、つい先本で読んだものの中に出て来た、伝説の七大元帥・・・それも最強の結界魔導師と言われた男、ユーノス・スレイアについて思い出す。

「（伝説の七大元帥最強の結界魔導師、ユーノス・スレイア元帥・・・！）」

と、その時ハイドは時計を見て昼食の時間となったことを確認した。

「お、もうお昼の時間ですな。ちょっと街まで買い出しに出かけてきますが、ユーノ先生はご要望とかありますか？」

「俺達で良ければ腕によりをかけて上手いもん作りますよ！」

「え・・・ああいやでも悪いですよそんな・・・」

「遠慮なさらずとも。何でも言ってください。」

「ありがとうございます・・・気持ちだけで嬉しいですよ。お二人の一番得意なもので結構ですから。」

「では、ちょっとばかし席を外します。留守をお願いしますね。」

「はい。お気をつけて」

その場を後にした二人は市街地の方まで車でひとっ走り。

一通りの食料品を買いそろえ、ユーノの元へと戻ろうとしていた。

「買い忘れはあるか？」

「多分大丈夫だと思いますが・・・」

ジキルはそう言って安全運転を続けていた・・・その時だった。

通りかかった宝石店から窓を豪快に突き破って先ほどのカマキリヤミーが飛び出してきた。

「「！」」

思わず車を止めてカマキリヤミーを凝視する二人。

カマキリヤミーは二人のことなど一切気にも留めずに、次のような事を言う。

「・・・匂う・・・コアメダル・・・」

そして、カマキリヤミーは高い跳躍力を活かしてその場から飛んでいく。

「何だよ・・・つうかあいつ遺跡の方に向かってる・・・！」

「と、兎に角追え！」

「はい！」

二人はユーノの身の危険を覚えると、急いでカマキリヤミーが向かった遺跡現場へと向かって車を走らせた。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、待つ傍ら一人調査の方を続けていたユーノはある程度の区切りをつけると、思い切り伸びをした。

「ふう～～～少し休憩するかな」

ユーノはそう言って、目の前に置いていた先ほど拾ったタカの絵が刻まれた赤いメダルと、懐中時計を手に取り訝しげな様子で覗き込む。

と、その時だった。

「おい。」

「？」

突然何処からともなく誰かの声が聞こえ、自分に話しかけて来たではないか。

しかしユーノが辺りを見渡してもそこには誰もいなかった。

ユーノは仕方なくテントの外へと出てみたが、やはり誰もいなかった。

「あれ？声が聞こえたと思ったんだけど・・・気のせいかな・・・」

「こっちだ。」

「え」

ユーノは声が聞こえてきた方、即ち自分の足元に目を向けるとそこに居たのは嘗ての自分のように人間の言葉を話す一匹のフェレットの姿であった。

「ふぇ！？」

思わず呆気にとられた声を上げるユーノと、いたって冷静な様子で話しかける体中痣だらけのフェレット。

「俺が話しかけた。」

「フェレット・・・て言うか喋ったってことはもしかして変身魔法

か。」

「ああ。物わかりが早くて何よりだ。それより話がある。お前の持っているメダルと結界印(シールドツァイヘン)を今すぐ俺に返せ」

「結界印・・・！？」

「その手に握った懐中(それ)時計のことだ。あと、コアメダルもな。それは危険なものだ」

「え・・・このメダルが・・・？」

ユーノは不審に思いながらフェレットがコアメダルと口にした赤いメダルをまじまじと見つめる。

「早く渡すんだ。でなければ、とんでもないことになりかねない。」

かなり急であるこのフェレットからの要求に思わずたじろぐユーノ。

「ちょちょ、ちょっと待ってよ！この二つは偶々遺跡の周辺で・・・！」

「ああ。俺が落とした。」

「ああ・・・あそこに居たんだ。奇遇だね・・・」

「早くしろ。」

そんな会話を続けていた二人。

と、その時事態は急変する。

「コアメダル・・・・・・渡せ」

二人がその声に反応して、徐に目を向けるとそこ居たのは鎌を構えて攻撃をしようとしているあのカマキリヤミーであった。

ユーノは思わずカマキリヤミーの姿に度胆をぬいた。

「うわぁ！なんか変なのが！」

「ヤミーか・・・！」

ヤミーは四つの鎌を作り出すと、それをユーノ目掛けて攻撃を行う。

すると、咄嗟にあのフェレットがユーノを庇おうと防御を展開するが、力のほとんどを使い切っていた彼にとってヤミーの攻撃を凌ぎ切るのは容易ではなかった。

「ぐ！！」

カマキリーヤミーは一度攻撃を中断すると、そのフェレット・・・変身魔法によって姿を変えている１５０年の時を超え甦ったユーノス・スレイアの魔力波長を感じとり言う。

「！　お前・・・ユーノス。」

「え（ユーノス・・・！？）」

思わずその言葉に反応するユーノと、満身創痍になりながらユーノ

を庇おうとするユーノス。

「手を出すな。この男は関係ない。そしてこのコアメダルは渡すわけにはいかない」

「渡せ」

カマキリヤミーはそう言いながらユーノスの方へと近づき、容赦なくユーノスの体を切り刻んで地面に叩きつける。

「ぐあああああああ！！！」

「は！」

自分を守るため、ヤミーの攻撃を受け続けるユーノスの姿を見て、ユーノは思わず表情を一変させる。

ヤミーはボロボロとなったフェレット姿のユーノスを鷲掴みにし、強引に彼を投げ飛ばす。

「邪魔するな」

「ぐあああああああ！」

投げ飛ばされたユーノスは更にヤミーの攻撃を受け続け、最早虫の息に近い状態にまで追い詰められる。

「がっは・・・」

「おいおい・・・一方的すぎるだろ・・・ちょっと待て！」

状況を上手く理解できていないユーノだが、この光景には見ていられなくなり、ユーノスを傷つけるカマキリヤミーを止めようと前に出る。

だが、カマキリヤミーは圧倒的な力でユーノを投げ飛ばす。

「うおわあああ！」

地面に激しく叩きつけられ、思わず苦い表情を浮かべるユーノだったが、直後彼の危機に駆けつけたハイドたちが車を走らせ戻って来た。

「ユーノ先生！」

「今お助けします！！」

ハイドは運転するジキルの隣で魔力弾を発射し、カマキリヤミーを攻撃するがカマキリヤミーはそれをものともせずに受け流し、鋭い鎌からの斬撃を飛ばし、車ごと攻撃。

車は横転し、額から血を流す二人。

意識を失うハイドと、何とか車から這い出てヤミーに向かおうとするジキル。

「ぐっふ・・・くっは・・・」

だがそこで体力の限界に達したのか、ジキルはその場に倒れ込んだ。

「ジキルさん！」

ユーノはジキルの元へと急ぐ。

カマキリヤミーはユーノの持つコアメダルを奪おうとするが、それを咄嗟に満身創痍のユーノスが止めにかかる。

「させ・・・るか！」

ユーノスを振り払おうと奮闘するカマキリヤミー。

その間にユーノは意識を失ったジキルとハイドに声をかける。

「ジキルさん！ジキルさん！！大丈夫ですか！？ハイドさんしっかり！」

ユーノはいくら呼びかけても目を覚まさない二人と、今も尚ヤミーと闘い苦しんでいるユーノスの姿を見、心の底から湧き上がった放っておけないという気持ちが今まで戦うことを封じていた彼の心と体を突き動かした。

「ぐううううう・・・」

ユーノスを握りしめ、窒息させようとしていたカマキリヤミーだったが、直後背中に鋭い斬撃が飛んで来た。

“一刀流　三十六煩悩鳳（さんじゅうろくボンドほう）”！」

「「！？」」

カマキリヤミーはその斬撃を浴びると、徐に振り返り、ユーノすも

またその攻撃をしてきた主・・・腰に差していた逆刃刀を抜いたユーノ・スクライアの方を見つめる。

ユーノは刀を構えながらカマキリヤミーに向かって言う。

「何だか知らないけどもう止めろって!!」

「邪魔するな。お前に関係ない」

だがしかしそこで、カマキリヤミーの言葉にユーノは強い口調で言う。

「ある!」

「?」

「あるよ。ハイドさんにジキルさん、それにそのフェレットも、朝からの長い付き合いだから!」

「(あいつ・・・・・・)」

ユーノスは命を顧みずハイドたちだけでなく、出逢ってからまだ数分程度しか経っていない自分の事まで助けようとするユーノの行動と言葉に思わず感嘆する。

「ふん」

だがそれでもカマキリヤミーはユーノの言葉を無視して、ユーノスに止めを刺そうとする。

「やめろ！！」

ユーノはそれを見て声を上げる。

直後ユーノスはカマキリヤミーの攻撃を受け、後方へと吹き飛んだ。

「ぐあああ！！」

「このおおおおおお！！！飛天御剣流、龍槌閃！！」

ユーノは高い身体能力を駆使して空中へと飛び上がると、逆刃刀をヤミーの頭部へと振り下そうとするが、直後振り返ったヤミーの鎌によって簡単に止められてしまう。

「！？」

「ふん！」

そして、逆に自分が返り討ちを食らってしまう。

「ぐあああああああ！」

ユーノは逆刃刀によって幸いにも切り傷は避けられたが、打ち身を撃ってしまいその箇所を手で抑える。

「（くそ・・・一年間のブランクってのもあるけど、それ以前にこいつのこの防御力はなんだ！？まるで、普通の攻撃が一切受け付けない・・・そんな感じだ！）」

ヤミーのあり得ないぐらいの防御力の高さに驚き返るユーノ。

そんなユーノを傷ついた体で見詰めるユーノス。

「何という奴だ・・・ヤミー相手に真正面からぶつかっていくなど正気の沙汰じゃない・・・・・・だが」

ユーノスはそう言いながらヤミーに止めを刺されそうなユーノを危惧し、傷ついた体でありながら全力疾走。

その間にユーノは無抵抗のままカマキリヤミーに鷲掴みにされ、勢いよく放り出される。

「うわあああああ!!」

「間に合え!!」

ユーノスはそう言うと、己の少ない魔力を振り絞ってユーノの落ちる箇所に不ローターを設置し、ユーノは辛うじて助かるのであった。

「!」

「は、は、は、は、は」

「フェレット君・・・?」

ユーノスの行動に思わず驚くユーノと、かなりの息を切らすユーノス。

そんなユーノスの姿を見て、カマキリヤミーは言う。

「ユーノス。見ず知らずの人間を助ける気か？」

「目の前で苦しんでいる人間を、見す見す見逃すなど俺の矜持に反するからな。」

「・・・！」

その言葉を聞き、自分と同じものを感じたユーノ。

すると、ユーノスは徐に名前を尋ねた。

「お前・・・名前は？」

「え？ユーノ・スクライアだけど・・・」

「ユーノ。お前には感心した。だがこれ以上無関係な人間を危険な目に遭わせる訳にもいかん。ここは俺に任せてあの二人を連れて早く逃げろ。」

「な！？何言ってんだよ！そ、そんなこと出来ないよ！」

「いいから早く逃げるんだ！！」

ユーノスは強引にそう言い切ると、無謀にもボロボロの体のままカマキリヤミーの方へと突っ込んでいった。

「ま、待つんだ！！その状態で！？」

「ほおおおおお！！」

ユーノスは自分の周りに結界を施すと、勢いよくカマキリヤミーに体当たりする。

ユーノはそれを見た途端、思わず目を疑った。

「な・・・あれは・・・結界・・・!?（あのフェレット君も、僕と同じ・・・・・・“結界魔導師”・・・・!?）」

「ぐ・・・・!」

ユーノスは残り少ない魔力とその傷ついた体で必死に立ち向かおうとするが、やはり力の差は歴然だった。

「俺も舐められたものだな。その程度の小細工、痛くも痒くもないわ!」

カマキリヤミーはユーノスの攻撃をかき消すと、鋭い鎌でユーノスの体を斬り裂いた。

「ぐあああああ!!」

「ああ!」

「死ね!!」

カマキリヤミーが止めを刺そうとした時、咄嗟にユーノはその場から飛び出し逆刃刀と洞爺湖木刀を使ってカマキリヤミーを殴りつける。

「く!おおおおおお!!!」

「ぶっふ！」

カマキリヤミーは不意を衝かれその場に倒れると、その隙にユーノはユーノスを拾い上げる。

「大丈夫！？」

「あ・・・ああ・・・お前・・・どうして・・・」

「君と一緒だよ。目の前で苦しんでいる人を黙って見過ごすなんて、僕だって嫌いだよ！」

「ユーノ・・・」

ユーノス自身、ここまで自分と同じ匂いを発するものを見た事は無かった。

だがそんな事を考えている間にカマキリヤミーは復活し、攻撃をしてきたユーノに反撃を使用とか間を飛ばしてきた。

「き、貴様・・・！」

ユーノスはそれを見るや否や、無理にでも魔力を供給させユーノの前にラウンドシールドを展開するが、防御はすぐに破壊されユーノスな攻撃をまともに受けてしまう。

「ぐあああああ！」

「フェレット君！！」

ユーノスはその場に倒れ込み、見るに堪えない姿と化し、カマキリヤミーに踏みつけられる。

ユーノはそんな光景を目の当たりにしながら、自分の歯がゆさを呪い出す。

「（僕は・・・何もできないのか・・・？僕はまた・・・何も守れないで終わってしまうのか・・・？）」

「ぐっは！」

来るしを与え続けられるユーノス。

ユーノは無意識のうちに懐の納めていた彼の私物である結界印を強く握りしめていた。

「（戦えることで優越感なんて感じたことはなかった・・・それで食べていこうとも思っていない・・・僕が戦って無茶でもすれば・・・またなのはやみんなに悲しい思いをさせるのが嫌だから・・・・・だから僕は戦いから身を引いた・・・・・・みんなに迷惑をかけることや足手纏いになるぐらいなら、僕はもう力なんていらない・・・！そう思ってた・・・・・・だけどその為に・・・・・・今ここで・・・・・僕の目の前で闘っている人が傷つく姿を見るのは、僕にはよっぽど耐えられない・・・！！）」

そんな事を考えながら、結界印を握るユーノの力は強くなり、そして同時に彼は喪失した魂の相棒、晩翠に対して心の中で呟く。

「（晩翠・・・・・・もしこの声が聞こえてるなら・・・・・・ど

んな形でもいい・・・どんな形でもいいから・・・・・・僕の我儘を聞いてくれよ・・・・・僕に少しだけ力を貸してよ・・・・・・・でないと僕はまた後悔する・・・！嫌なんだよ・・・・・・何もできないまま何かを失って後悔するのは・・・・・・頼む・・・頼む！頼む頼む頼む頼む頼む――――――――！！）」

ユーノはそう強く思いながら、柄にもない大音声で切なる思い叫んだ。

「僕に力を貸してくれ――――――――――――――――！！」

と、その時。

彼の切なる思いは思わぬ形で実現した。

彼が握りしめていた結界印がその言葉を聞くや否や、眩いばかりの光を発し出したのだ。

「！？」

思わず驚き返るユーノと、同じようにその予想だにしなかった光景に目を奪われるカマキリヤミー。

「何！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・これは・・・・・・・」

状況が全く把握できていないユーノと、自分の所有物であり自分以外の者が持つことは決してできないと思っていた結果印がユーノの

想いに強く反応していることに、ユーノスは心底驚いていた。

「何だ・・・一体何が起こっている・・・・・・！？（俺の結界印が反応している・・・・・・何だこの肌に伝わる巨大な力は・・・・・・あの男に・・・ユーノの強い心に結界印が反応したというのか――――――――）」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ〉

「へ？」

その時、結界印から聞こえてきた声にユーノが魔の抜けた声を出した途端、ユーノは天空へと舞い上がり、結界印の光は雲を劈く。

全く以て今起きていることに皆目見当がつかないでいるユーノだが、直後結界印からユーノに向けて言葉が聞こえてきた。

〈Ｆｉｒｓｔ　ｌｅｔ　ａｌｏｎｅ，ｉｔ'ｓ　ｂｅｅｎ　ｃｈｏｓｅｎ　ｔｏ　ｐｕｌｌ　ｏｕｔ　ｔｈｅ　ｓｏｕｌｓ　ｏｆ　ｓｅｒｖａｎｔｓ　Ｅｕｎｏｓ.（初めまして、ユーノスの魂を引き出しし選ばれしものよ）〉

「あ、はい。初めまして・・・て言うか、ユーノスの魂・・・？」

〈Ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ　ｔｈｅ　ｍａｓｓ　ｃｏｅｆｆｉｃｉｅｎｔ　ａｎｄ　ｑｕａｌｉｔｙ　ｏｆ　ｙｏｕｒ　ｓｏｕｌ.　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｖｅ　ｃｌｏｔｈｉｎｇ　ｆｏｒ　ｂｏｔｈｃｏｍｂａｔ　ｓｙｓｔｅｍ　ｔｈａｔ　ｗｉｌｌ　ａｕｔｏｍａｔｉｃａｌｌｙ　ｓｅｌｅｃｔ　ｔｈｅ　ｂｅｓｔ　ｓｈａｐｅ，ｙｏｕ　ｓｕｒｅ？（あなたの魂の質量係数及び資質を確認しました。戦

闘体系・防護服ともに、最適な形状を自動選択いたしますが、よろしいですか？）〉

「言ってることは大体分けるけど、よく分からないところもあるな・・・でもこの状況でいちゃもんつけてる暇はない・・・分かった。それで頼む」

〈ＯＫ．Ｗｅ ｗｉｌｌ ｅｎｄ ｔｈｅ ａｕｔｏｍａｔｉｃ ｓｅｌｅｃｔｉｏｎ．Ｔｒａｎｓｆｏｒｍａｔｉｏｎ ｉｓ ｐｏｓｓｉｂｌｅ ａｔ ａｎｙ ｔｉｍｅ．（了解。自動選択を終了いたします。いつでも変身可能です。）〉

結界印がそう言い終わると、ユーノはゆっくりと地上へと降り立ち、先ほどまでのまばゆい光はすべて結界印に吸収された。

「今のは一体・・・」

唖然とした表情で握りしめた結界印を見つめるユーノ。

すると、そんなユーノの元に満身創痍のユーノスが近づいて来た。

「ユーノ」

「え？君は――――――」

ユーノスは一度考えてから、ユーノの足を伝って肩まで上ると、ユーノに対してこう言って来た。

「こんなことを頼んで申し訳ないのだが、今の俺の魔力ではあれを倒せない。だから、それを使って俺の代わりに奴を倒して欲しい。」

「奴を・・・」

ユーノはそう言うと、警戒するカマキリヤミーを凝視。

「ああ。その結界印がお前にそうしろと言っている。」

「これが僕に――――――」

ユーノは徐に手に握られた結界印を覗き込む。

すると、カマキリヤミーが徐に歩きだしユーノに言う。

「乗せられるなユーノスに。使えば、たたでは済まない」

「え？」

思わずその言葉に反応してしまうユーノ。

ユーノスはユーノの耳元で闘うことを促す。

「おい！多少のリスクが何だ。ここで二人とも死ぬよりマシだろ。早くしろユーノ。変身するんだ」

「止せ！」

闘いを促すユーノスと、それを止めようとするカマキリヤミー。

ユーノはユーノスの方を一瞥すると、鼻で笑う。

「・・・ふん。」

「？」

そして、徐に前の方へと歩き出すとこんな事を呟く。

「あちこち行ったけど・・・楽して助かる命が無いのは・・・何処も一緒だな！」

ユーノは直後、手に持っていた結界印を頭上に放り投げそれをキャッチすると、自分なりの構えを取って変身する体制となる。

ユーノの準備が整うと、結界印も用意をする。

〈Ｇｅｔｔｉｎｇ　Ｓｔａｒｔｅｄ　ｐｒｏｖｉｄｅｓ（起動準備用意）〉

そして、ユーノは徐に懐中時計である結界印の蓋を開放し、変身を行う。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

音声と共に、時計の長針が光を発すると同時に一回転。

ユーノは金色の光に包まれると、その姿を変化させた。

カマキリヤミーと離れたユーノスが注目する中、光の先に現れたのは・・・メガネがなくなり基本カラーが茶色とクリーム色の長手袋・

襟の長いコート・スラックス・ブーツと、全身をくまなく覆う防護服に身を包んだユーノ・スクライアの姿であった。

「馬鹿が・・・！」

「よし。成功だ」

大いに後悔するカマキリヤミーと、無事に変身完了したユーノに喜ぶユーノス。

そして、一番何よりも驚いているはずのユーノは今の自分の姿に度胆をぬいた。

「・・・なんだこれ・・・魔法でもないのに・・・一体ぜんたい僕に何があったって言うんだ?!」

リアクションに困り果てるユーノだが、直後ユーノスは近づき言う。

「取りあえず今は気にするな。それがお前の力。結界印が授けたお前が望んだ姿。どれだけのものかは、戦って見れば分かるだろう。」

「え」

そうユーノが口にした途端、カマキリヤミーが鋭い鎌を構えてユーノに攻撃を仕掛けに来た。

「おっと」

ユーノは咄嗟に両腕を前に出して防御の姿勢に入る。

直後結界印がそれに反応して腕の防御力を高める。

〈Ｉｎｖｉｎｃｉｂｌｅ　Ｇｕａｒｄｅｒ〉

「!?」

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｂｌａｄｅ〉

カマキリヤミーの攻撃はその力によって阻止され、同時にユーノは右腕に結界印の力で作り出した鋭い刃で反撃する。

「は!」

カマキリヤミーはその攻撃を受けると、深く傷つき傷口から数枚のセルメダルを放出。

その間にユーノは全身から漲る力に興奮を覚える。

「おお・・・何か力が体の中にたまってくる!」

ユーノは両足にその力を集束させると、軽く飛ぶ準備をしてから傷を修復させたばかりのカマキリヤミーの元へと飛んでいく。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｊｕｍｐ〉

「は!」

ユーノの放った飛び蹴りの効果で、カマキリヤミーは一方的に追い詰められ、また数枚のセルメダルを体からまき散らす。

ユーノスはこの未知なる力を手にしたユーノの力に驚き返っていた。

「凄い・・・この力は予想以上だ・・・！だがお前の力があれば、あれを止められる！結界印の力であれを止めるんだ！」

「く、この！！」

カマキリヤミーは防戦一方の状態から一変、今度はユーノに対して容赦ない攻撃を加え、ユーノはそれを受けダメージを食らう。

「ぐ！」

ダメージ箇所を軽く手で抑えながら距離を取って牽制するユーノ。

するとユーノスは離れた個所からユーノに促す。

「ユーノ！もっと念じろ。そうすれば、結界印はお前の心に応えてくれる！」

「念じる・・・・・ん～～～どうすれば・・・」

すると、ユーノの悩みに結界印が口を挟む。

〈Ｔｏ ｋｉｌｌ，ｙｏｕ ｎｅｅｄ ａ ｂｉｇ ｐｏｗｅｒ ｏｒ ａｒｔｉｌｌｅｒｙ ｆｉｒｅｐｏｗｅｒ ｏｆ ｔｈｅ ａｔｔａｃｋ ｔｒｉｇｇｅｒｅｄ ｂｙ ｔｈｅ ｐｒｏｘｉｍｉｔｙｏｆ ｔｈｅ ｄｅａｄｌｙ ｂｌｏｗ.（倒すためには、接近による一撃必殺の攻撃の発動か大威力火力砲撃が必要です。）〉

「大威力火力砲撃なんて・・・僕は苦手だよ。前者の方で何とかな

らない？」

〈Ｓｏ　ｉｍａｇｉｎｅ　ｙｏｕｒ　”ｍｏｒｔａｌ　ｂｌｏｗａｔｔａｃｋ”　Ｐｌｅａｓｅ　ｉｍａｇｅ．（では、あなたの思い描く『必殺一撃の攻撃』をイメージしてください。）〉

「必殺一撃の攻撃か・・・」

と、そう考えようとした矢先、カマキリヤミーは一度標的をユーノから、ユーノスへと変更し、無防備のユーノスに狙いをつけたカマキリヤミーは鋭い鎌で斬りかかる。

「！」

「な！いけない！！」

ユーノはそれに気づくとすぐにユーノスの元へと駆け寄り、途端爆風が巻き起こる。

ユーノスが徐に目を開けると、そこに居たのは自分を守るためカマキリヤミーの攻撃を防ぐユーノの姿だった。

「・・・な！」

ユーノは結界印の力を借り、カマキリヤミーの攻撃に耐え続ける。

すると、その時結界印がユーノにこう促す。

〈Ｐｌｅａｓｅ　ｐｕｔ　ｏｕｔ　ｂｅｆｏｒｅ　ｔｈｅ　ａｕｄｉｅｎｃｅ．（利き手を前に出してください。）〉

「何?利き手・・・こうか?!」

言われた通り利き手を前に出すユーノ。

直後結界印はユーノの魂を媒介にして、カマキリヤミーの背後から奇襲攻撃を仕掛ける。

〈Ｔｉｍｅ　ｔｅｌｌｓ　ｆｌａｍｅ〉

すると、カマキリヤミーの背後から突如として炎が燃え上がり、カマキリヤミーはその炎による攻撃を受けると、大ダメージを負い大量のセルメダルを放出。

ユーノは未だに自分が何をしたのかわからないでいた。

「おいおい・・・僕は何をしたんだ!?」

〈Ｙｏｕｒ　ｓｏｕｌｓ　ｐｏｗｅｒｓ　ａｒｅ　ｉｍｐｒｅｓｓｉｖｅ.（非常にいい魂の力をお持ちですね）〉

「何・・・その魂の力って・・・」

この時、ユーノは自分の秘められた力に気づいていなかった。

魔導死神としての力を失ってからの１４カ月の間、ユーノの秘められた力が力の喪失に伴い魂の奥底に質量を小さくして深い眠りにつき、それがこの事を切っ掛けに覚醒したなどと言う事など。

と、直後大ダメージを負いセルメダルを大量喪失したカマキリヤミ

ーは怪我を癒す為、不足したセルメダルを獲得するため、一旦戦場を離脱し、市街地の方へと向かった。

「く！！くそ！」

「しまった！逃げるぞ！」

「逃がすか！」

ユーノはユーノスを肩に乗せると、全速力で走り出す。

力を失って以降、いざという時の為に常に体だけは鍛えていたユーノは、息を荒げることもなくかなりの速力と跳躍力で障害物を飛び越え、カマキリヤミーを追いかける。

「何としても逃がしてたまるか。このまま市街地に出たら、大変なことになる。こうなったら意地でも一撃必殺の攻撃を加えるしかないな・・・ねぇ、出来るかい？」

〈Ｉｆ　ｙｏｕ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｄｏ　ｉｔ．（あなたがそれを望むなら。）〉

ユーノは結界印の言葉を聞くと、ユーノスを適当な場所で下してから心を澄ませカマキリヤミーを追いかける傍ら両腕に力を集めていく。

〈Ｃｈｅｃｋ　ｔｈｅ　ｔａｒｇｅｔ．　Ｐｌｅａｓｅ　ｈａｖｅ　ｆｏｃｕｓｅｄ　ｏｎ　ｒｉｃｅ　ａｒｍｓ．（目標を確認。両腕に力を込めてください。）〉

「ああ」

〈Ｍｏｄｅ　ｃｈａｎｇｅ　Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ〉

すると、ユーノは、右手のツインブレードから出るもう一本の剣を左手に持ち、二刀流を作り出す。

ユーノスはそれを見て思わず目を疑う。

「！二刀流・・・・・・まさかこいつ・・・・・・・さっきのといい、剣士なのか・・・」

ツインブレイドの生成に成功したユーノは、そのまま高く飛び上がりカマキリヤミーの正面に現れる。

そして、驚くカマキリヤミーに狙いを定めて止めの一撃を加える。

「はあああああ・・・・せいやあああああ！！」

「ぐおおおおおおおおおお！！！！」

ユーノのツインブレイドによる攻撃を受けると、カマキリヤミーは高く飛び上がると同時に声を上げて爆発を起こし消滅する。

消滅すると、カマキリヤミーはすべてセルメダルに分解され、戦ってるときには一切その事に気づかなかったユーノは改めてその事に驚いた。

「・・・メダル・・・で出来てたのか・・・今の奴・・・」

離れたところでユーノの一撃必殺の攻撃を目の当たりにしたユーノスは唖然とした表情を浮かべる。

「一撃で・・・倒した・・・・・・うっ」

だが直後、ユーノスは体力の限界に達しその場に倒れ込んだ。

ユーノはすぐにその状態のまま倒れたユーノスの元へ駆け寄った。

「あ！フェレット君！！しっかり！今救護隊を呼ぶから！！」

だがこの時、そんなユーノの戦闘の様子をこっそり監視していた者がいた。

それは、スカリエッティが作り出し破面魔導虚の一人、リリスだった。

リリスは戦闘の様子を全て記録し、スカリエッティの元まで届けると、届けられた映像を見ながらスカリエッティはまた別のケーキを作り始める。

「ハ～～～ピバ～～～スデ～～～トゥ～～～ユ～～～ハ～～～ピバ～～～スデ～～～トゥ～～～ユ～～～ハ～～～ピバ～～～スデ～～～ディア～～～」

そう歌いながら食べられる板にチョコレートソースで書いた名前は・・・――――

「『新ユーノ・スクライア』・・・」

スカリエッティは名前を書き終えると、不敵な笑みを浮かべた。

そして、モニター画面に映って来たユーノスの安否を気遣うユーノを見つめる。

「フェレット君！ねぇ、しっかりしてよ！！」

同様に、監視役のリリスもまた不敵な笑みを浮かべながら、懐から赤い缶ジュースの様なものを取り出した。

「ふふ・・・・・・面白くなってきそうだわ・・・・・・」

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ一枚

メダルと懐中時計と謎のフェレット（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「何だか僕に凄いことが起こったらしいけど、詳しくは次回以降と言うことで今日はこの章のキーワードの一つ『グリード』について教えるよ♪」

「元ネタは『仮面ライダーオーズ』に出てたメダルの怪人。この小説の設定では１５０年前に七大元帥ユーノス・スレイアの秘術によって封印されたんだけど、現代になって人の欲望に反応にして蘇ったという訳。」

「セルメダルを用いてヤミーという怪物を生み出し人々を欲望によって滅ぼすんだ。」

一「つうか、お前力失ってたんじゃなかったのかよ・・・」

ユ「いや、よく分からないんですよね・・・あの時は僕ヤミー倒すのに必死でしたから・・・」

一「けどまぁお前がまた戦えるようになってくれて俺的にはほっとした気持ちだ。戦えなくなったお前を見ているのは正直きつかったからな。」

ユ「一護さん・・・」

師・一護の気持ちを耳に胸打たれるユーノ。

一「どんな形であれ、やっぱりお前には戦えて欲しい。ただし、無理なつめこみは止しとけよ。」

ユ「はい、わかってますよ♪次回は、もう少し僕の力の詳しい事実が明らかになるから、お見逃しなく♪」

一「序でに、俺の活躍も忘れるんじゃねぇぞ！」

魔導師図鑑ハイパー！

嘱託魔導師・・・それはれっきとした試験を受け認められたものが許された資格。

では、恋次達やスクライア商店組はどうか・・・もちろん試験を受けて合格したからこうして六課に協力しているわけだが、その道のりは険しいものだった。

魔導虚事件の後、正式な試験を受けるため恋次・鬼太郎はユーノ達の指導の下日夜猛勉強を繰り返した。

ユ「はい、ではこの問題の答えは？」

恋「わ、わかんねぇ・・・！」

フェ「じゃあ、問３の答えは？」

鬼「な、夏川理沙子！」

魔法とは一切関係ない答えを聞かされ、ユーノ達は正直頭を抱えた。

しかしテストに合格しなければ嘱託魔導師（あるいは嘱託死神）として任務に就くことは出来ない。

ユーノは心を鬼にして二人の頭にあるものを強制させた。

恋・鬼「ぎゃあああああああああ！！！」

二人の頭に付けられたもの・・・それは剣山。

寝ようとする二人に容赦なく剣山が突き刺さり、血が噴き出る。

な「駄目ですよ二人とも。ちゃんと起きて勉強しないと」

恋「いくら何でもやり過ぎだろ！！俺達出血多量で死んじまうぞ！！」

浦「これぐらいで弱音吐かないの。ささ、勉強勉強♪」

鬼「くそ・・・！ふざけやがって・・・！！」

こうして眠気も吹っ飛ぶ地獄の勉強会はしばらく続き、見事試験をパスした二人だが、真夜中に響き渡る叫び声は一種のオカルトだった。

恋・鬼「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝

ス「欲望!!なんて純粋で素晴らしいエネルギー!!」

ユーノス「奴らグリードにとって重要なのはコアメダルだ。」

ユ「そ、そんな事があったなんて・・・?!」

恋「俺達の知らないところで不穏な影が蠢き出したって事か・・・」

ユーノス「セルもコアも、メダルの元は人間の欲望」

シャ「大変です!ミッド市街地にアンノーンが出現!」

な「ダメ!ユーノ君!行っちゃダメ!!」

ユ「メダルなんかの為に人の命が奪われてたまるか!!」

第１４１話　ユーノとユーノスと完現術

登場人物

尖貴子

声優：大野由佳

ウヴァの最初の標的とされた婦人。派手好きで見栄っ張りな性格。

いつも語尾に「ザマス」をつける。金銭の貸借は嫌い。小学５年生

の時は通知表オール５の秀才だったが、その頃は少し太っていた（

１３６ｃｍ、５７ｋｇ）。外国製の一流ブランドメーカーの眼鏡をかけていてコンタクトよりも眼鏡派を強調しておりかなり小さい頃からかけていた。ネズミが苦手。

登場ヤミー

カマキリヤミー

声：前野智昭

身長　２０４？　体重　１１２？

特色／力：両手の鎌から放つ複数の刃による攻撃

ウヴァが作り出した昆虫系成長ヤミー。　宝石好きの夫人の欲望から生み出され、婦人の指輪を始めとした店内の宝石を食べることでこの姿に成長した。両腕に鎌の形に発達した外骨格を備え、体内のセルメダルのパワーを増幅することで５つの鎌状のエネルギーを生成し、あらゆる方向から相手を切り刻む攻撃を得意とする。ウヴァの命令を受け、彼の奪われたコアメダルを探すために街中を捜索。その過程でユーノスを発見し、彼が持つバッタとカマキリのコアメダルを奪うために攻撃し、居合わせた発掘員たちに重傷を負わせた。しかし、ユーノが結界印の力で変身させたことで形勢が逆転。　ユーノのスレイアーモードに対抗するも、ツインブレイドによる攻撃でユーノに圧倒され、止めのスレイアースラッシュに斬り裂かれ爆散した。

ユーノとユーノスと完現術（前書き）

一「運命の歯車が回り出した。くるくる。くるくる。」

「どんな結末も受け入れよう。どんな形となるかはわからない。」

「それでも俺達は――――――信じた道をただ突き進むだけ」

ユーノとユーノスと完現術

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事

一つ、１５０年の眠りから目覚めたメダルの怪人が動き出す。

二つ、元・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアが謎のフェレット、ユーノスと遭遇。

そして、三つ。ユーノが結界印の力で変身した！

ユ「せいやあああああ！！」

ヤ「ぐおおおおおおおおおお！！！！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ一枚

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ユーノは現在、目の前で倒れているフェレット、伝説の七大元帥の一人で結界魔導師ユーノス・スレイアの安否を確認しようと名前を呼びかける。

「フェレット君！ねぇ、しっかりしてよ！！」

ユーノ自身、ユーノスの素性・・・と言うより名前すらまだはっきり聞いていない為、彼が七大元帥の一人であるとは夢に思わず取り敢えずそのように呼称していた。

ユーノが必死で呼びかけた結果、ユーノスは満身創痍で既に虫の息にも等しかった状態であるにも関わらず、驚異的な生命力の高さで以て息を吹き返し、徐に目を開けた。

「う・・・・・す・・・すまない」

「良かった・・・息はあるみたいだ・・・」

ユーノスが目を覚ますと、内心かなりほっとするユーノ。

「・・・それより・・・ユーノ・・・」

「え？ああ・・・そう言えばこのままだった。変身解除ってね♪」

〈Ｒｅｌｅａｓｅ〉

ユーノは自分が現在身に纏っている防護服を解除し、元の甚平服に羽織、メガネを着用すると、防護服の解除と共に姿を現したユーノ

スの私物、結界印を手に取りユーノスに手渡す。

「はい。これ、返すね」

「態々済まない・・・これが無いと色々と不便な事が多くてな。それより、今更だがお前はこれに触ってなんともなかったのか？」

ユーノスはかなり驚いた様子で結界印に今の今まで触れていたユーノにそう尋ねると、ユーノは思わず呆気にとられた声を発する。

「え？それってどういう・・・・・」

と、ユーノが口にしようとした時、ユーノスは目の前に映ってきた光景に目を奪われ声を上げた。

「！おい、お前何してる？」

「？」

ユーノスの言葉につられて、ユーノが後ろに振り返ると、そこ居たのは散らばったセルメダルを回収しているタカの姿をしたカンドロイドと呼ばれる自動機械であった。

「それに触るな！」

ユーノスはいても経ってもいられず自分が重傷であることを忘れてカンドロイドの方へと走り出そうとすると、タカカンが一斉にセルメダルを集め始め、それを口に咥えて飛び立っていった。

「やめろ！それは危険なものだ！」

ユーノスは執念からセルメダルを持ち去ろうとするタカカンの一匹からセルメダルを強引に回収するが、残りはすべて根こそぎタカカンに持っていかれてしまった。

ユーノも思わずその光景に唖然とする。

すると、ユーノスはセルメダルをコアメダルが封印されている結界印の中へと収納すると、ユーノにタカカンのことを尋ねる。

「おい、今のは何だ？」

「知らないよ。それよりそんな体でよく・・・！」

「く。どうも妙だな・・・封印されてた間に、何か起こっている・・・」

腑に落ちない表情のユーノスと、訝しげな表情を浮かべるユーノ。

そんな二人の様子を離れたところで見守る破面魔導虚、リリス。

「・・・ふふ」

不敵な笑みを浮かべたのち、彼女は「解空（デスコレール）」と言う空間に裂け目を生み出し移動する破面魔導虚独特の方法でアルハザードへの道を開き、そこを通ってその場を後にする。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

同様にタカカンも予めリリスが用意していた穴を通って今まで誰もたどり着いたことのない未知なる世界、アルハザードで待ち構えているスカリエッティに集めたセルメダルを届け、役目を終えたタカカンはすべて完の姿となってプレシアの側のテーブルに綺麗に於かれた。

スカリエッティは不敵な笑みを浮かべると、集められたセルメダルを見ながらケーキを頬張るプレシアに言う。

「ふふふ・・・見給えプレシア。たった一日でこれだよ。」

「そうね・・・」

スカリエッティはその後、自分の机の床下にある収納スペースのルーフを開放し、その中に集められた多量のセルメダルと禁忌の欠片、アンゴルモアを見ながら次のように口にする。

「やはり私の今後のライフワークの為には必要なのかもしれぬな。アンゴルモアも・・・グリードも・・・そしてユーノ・スクライアも」

そう言った直後、プレシアが食べようとした「新ユーノ・スクライア」と書かれたプレートが二つに割れた。

「あ」

スカリエッティは、アンゴルモアだけでなくセルメダルも集めて一体何を考えているのであろうか？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、ヤミーの攻撃を受け大怪我を負った発掘作業員のハイドとジキルを救護隊に送り届けたユーノは、フェレット姿のままのユーノスの体に応急処置を施し、無事に手当てを終えるのであった。

全身包帯で巻かれたユーノスを見ながら、思わずため息をつくユーノ。

「やれやれ・・・怪我も治せないほどに疲労困憊した状態でよくもまぁ・・・僕がこう言っても全然説得力がないけど、一応自分の命ぐらい大事にしなくちゃ」

「ああ・・・悪かった・・・だがどうしてもな・・・」

「取りあえず応急手当は完了♪これで少しは況しに動けるよ」

ユーノの手厚い保護を受けたユーノスは素直に感謝の気持ちを表す。

「ありがとう。ユーノ」

「へへ♪あ、そうだ・・・僕未だ君に名前聞いてなかったよね？あの時は切羽詰った状態だったからちゃんとした自己紹介も出来なかったからさ。改めて。僕はユーノ・スクライア。２４歳。性別男。職業は考古学者兼駄菓子屋の店主かな♪」

「俺はユーノス。ユーノス・スレイアだ。」

と、ユーノスが自分の名前を名乗り終えた直後、ユーノは目を点にして表情を凍りつかせ、もう一度その名を復唱する。

「!え・・・ユーノス・スレイア・・・!?」

「何だ。俺の事を知っているのか?」

「えええええ・・・えええええ・・・!!!ちょちょちょちょちょちょちょっと待ってくださいね!!確かこの辺に・・・・・・・・あ、あった!」

ユーノはかなり狼狽した様子で懐から例の本を取出し、ユーノスについて書かれている個所を見つけ出すと、それはまぁ柄にもないぐらいの驚き方でユーノスに人差し指を向けた。

「あああああああ!!!!やっぱり!!!あなた!!!!まさかとは思いますが、伝説の七大元帥の一人にして、最強の結界魔導師のユーノス・スレイア!?」

「あ、ああ・・・そうだが。それがどうかしたか?」

ユーノスが少々言葉に詰まらせながらも正直に答えると、ユーノはまるで魂が抜け落ちたかのような表情を浮かべ絶句する。

「?ユーノ・・・」

ユーノの突然の状況変化に困惑するユーノスだが、直後ユーノは意識を取り戻すと地面に頭を擦りつけ、ユーノスに向かって深く頭を下げてこう言う。

「大変ご無礼致しました！！！度重なるため口・そして手荒な真似！！！！この淫獣フェレットもどき、今ここで腹を掻っ捌いて死んでお詫び申し上げます！！」

ユーノの先ほどとのギャップの違いにどう反応していいか、判断がつかなくなる伝説の七大元帥ユーノス・スレイア。

「おい・・・・・ユーノ・・・・・・俺は別に気にしてないからな・・・言っとくが・・・（と言うかなんだその淫獣フェレットもどきって・・・）」

そんな事を一瞬考えるユーノスであった。

その後ユーノスはユーノが落ち着くまで詳しい話をするのを抑えていた。

ユーノも漸く落ち着きを取り戻し、それを見て一瞬のため息をつくユーノス。

「落ち着いたか？」

「ええ・・・まぁ・・・自分でも少し頭がどうにかなってました」

「それでいい。これで話しやすくなった」

「あはは・・・本当・・・手間を取らせてすみませんでした。」

「いや。謝らなければならないのは俺の方だ。お前を、ユーノを巻き込んでしまった――――――」

ユーノスはそう言うと、意気消沈した様子で項垂れてしまう。

ユーノはそれを見て昔の自分のそれとを比較してしまうが、直ぐにこのように言い返してきた。

「あ・・・その・・・僕は全然平気ですよ♪ほんのちょっと前はそんなのごく日常茶飯事でしたし。あ、そうだ！ユーノス元帥怪我していますし、ココじゃ落ち着かないと思いますから取り敢えず僕の仲間がいる場所に行きましょう。後の事はそれからでも構いません♪」

「お前の・・・仲間・・・」

ユーノスはユーノの言葉を徐に復唱すると、そのままユーノに連れられミッドチルダにある特定遺失物管理部機動六課へと出向くこととなった。

隊舎寮の前につくと、ユーノは肩に乗せたユーノスに簡単な説明を始める。

「ここです。時空管理局本局所属の特定遺失物管理部機動六課。色々ありまして、僕はここで嘱託勤務をしながらアドバイザーと言う仕事をしているんです。」

「ほう・・・遺失物管理部と言うことは、ロストロギアの回収を扱っているという事か」

「はい。ささ、中の方にご案内しますね♪」

ユーノはそう言うと、徐に玄関の扉を開放し、何事も無かったかの

ように帰宅後の挨拶を口にしようとした。

「ただいま――――――」

と、その時ユーノが帰宅するや否やなのはとマリアがほぼ同時に飛びついてきた。

「「ユー君（様）！！！」」

「ぐおお！！！！」

ユーノは二人の豪快な飛びつきを受けると、その場に倒れ込み、なのはとマリアはまるで競い合うかのようにユーノの身の上の心配する。

「大丈夫！ユーノ君！！怪我してない！！訊いたよ！なんか変な化け物に襲われたって！！」

「お怪我はないようですわね！？ユーノ様にもしものことが遭ったら、マリアどうにかなってしまいますわ！！あ～あユーノ様！！」

マリアはそう言いながら顔を真っ赤にする暇もなく目を回すユーノの身体をきつく締め上げる。

すると、ここでまた嫉妬心に火がついたなのはが低い声でマリアに言う。

「マリアさん・・・あんまりユーノ君にべたべたくっつかないでくれません？一応私ユーノ君の彼女なんですから・・・」

「あら♪そうでしたかしら？ユーノ様は皆に平等に接するお方ですから、そのような方はいないと思っていたのですが♪」

この瞬間に、ユーノ・スクライアを巡って管理局の白き魔王の高町なのはと、護廷十三体四番隊第七席、小鳥遊万梨阿の熾烈な女の争いが勃発するのであった。

そんな二人の争いの被害者となっているユーノは目を回した状態で二人にその場から退くことを要求する。

「な・・・なのは・・・小鳥遊さん・・・ちょっと退いて・・・／／／」

すると、二人はユーノの言葉を聞くや否や、一度素に戻りユーノの身体から退いた。

「ふぇ？あああ！！ご、ごめんユーノ君重かった！？」

「申し訳ありませんユーノ様！！私としたことが！！」

ユーノは罰の悪そうな表情の二人を見ると、自分の頭を抱えながら次のように言う。

「い、いや・・・別にいいんだよ・・・それよりみんなに紹介したい人がいる」

「え？紹介したい人？」

なのはとマリアが呆気にとられた様子でそう言うと、奥の方からやって来た恋次達がユーノに駆け寄り、肩に乗っていた一匹の見慣れ

ない動物を見る。

そして、一度考えてから恋次は尋ねる。

「?おいユーノ。まさか・・・それってそのネズミの事か?」

「あ、本当だ。ユーノ先生の肩にネズミが・・・て言うかフェレットですよ」

スバルが恋次の言葉をそう言って訂正した直後だった。

ユーノスはユーノの肩から飛び降りると、嘗てのユーノのように人の言葉を発する。

「すまない。少しの間邪魔をするぞ。」

「「「!」」」

一同はユーノスが人間の言葉を聞いた瞬間、思わず目と耳を疑いとかく鬼太郎と浦太郎は大いに驚く。

「のあああああああああ!!!フェレットが口を利いた!?」

「怪奇現象だ!!!!!!!!!」

すると、そんな二人のリアクションを見ると、ユーノスは至って冷静な言動でこう言い返した。

「何をそんなに騒ぐ?俺は変身魔法でこうなってるだけだぞ。」

そんな彼らのやり取りを傍らで見ながら、フェイトは苦笑いを浮かべる。

「あはは・・・何て古典的な展開なんだろう・・・」

なのはたち全員がそのような事を考えて、リアクションに困り果てていると、ユーノの帰還を受けて部隊長のはやてとユーノの悪友で時空管理局の提督を務めるクロノ・ハラオウンが奥より現れた。

「ああ。お帰りなユーノくん。無事やったみたいやなって・・・きゃあ!!!なんやその子は!!」

「？」

はやてはその場にいたフェレット姿のユーノスを見るや否や、衝動が押さえられなくなり、ユーノスを抱きかかえ頬ずりを始める。

「きゃあああ!!かわいらしいな!!!なんや、ユーノくんとうとうお仲間さんをペットにする気でもなったんか？」

これを聞いたユーノは思わず癇癪を起す。

「御仲間って言うな!!そんな訳ないだろ!て言うかその人は人間だよ!」

すると、悪友のクロノはそんなユーノの言葉を聞いて次のような言葉でおちょくってきた。

「何を言っているんだフェレットもどき。こんなお前とそっくりなもどき人間がこの世にいる筈ないだろう」

クロノのあまりに失礼極まりない言葉を聞いた直後、ユーノは焦りと怒りが同時に湧き上がると、クロノの砲に洞爺湖木刀の一太刀を浴びせる。

「て、てめぇ！！！！！ユーノス・スレイア元帥になんば口利いてんだよ！！！！！」

「のおおおおおおおおお！！！」

豪快な一太刀を受けたクロノは鼻血を出しながら後ろの方へと叩きつけられる。

そして、ユーノスの名をその場で初めて聞いたなのはやティアナは思わず復唱する。

「ゆ、ユーノス・スレイア・・・！？」

「元帥・・・・・・？」

事の成り行きが全然見えないでいる一同の為、ユーノはため息交じりに説明を始めることとした。

「全く。ちょっと集まってくれるかい。このユーノス元帥から事の事情と詳しい話を説明してもらうから」

一同は言われた通り、一旦司令室の方へと集まるとユーノス自身からその素性と来歴、経緯を聞かされ、聞いた瞬間一同は驚きのあまりそれはまぁ鼓膜が破れるぐらいの大音声を上げたそうな。

「えええええええええ！！！！じ、時空管理局創設の第一人者！！！！」

「あ、あの伝説の七大元帥・・・しかも最強の結界魔導師にして歴代最強と恐れられたとされるユーノス・スレイア元帥で・・・！！」

「まぁな。」

ユーノスが多少恥ずかしげに公的の言葉を口にすると、クロノは完全に壊れ、何処からともなく取り出した脇差と白い和服に身を包むと自分の腹を突き刺そうとし始めた。

「さようならクロノ！！！私は今日限りで提督の職を辞させていただきます／／／」

クロノの暴挙を見るや否や、スクライア商店の三人が全力で止めにかかった。

「お、落ち着けバカ黒！てめぇなにふざけたことやってんだよ！！！！」

「前々から馬鹿だバカだと思っていたけど、ここまでクルクルパーだと思わなかったですよ！」

「いけませぬぞクロノ殿！これ以上のバカはやめてくだされ！」

「あああ！！！！！バカっていったい何回言えば気がすむんですかチクショー！！！！！！」

恋次は思わずその光景にあきれ返り、ユーノに目を合わせてこう言

う。

「おい、いいのかよあれほっといて？」

「あいつは無視して構いませんよ。それより今はこっちの方が重要です」

ユーノはそう言うと、改めて机の上で説明をするユーノス・スレイアに目を向け、はやて達もまた真剣な眼差しでユーノスに向き合った。

「せやな・・・えっと改めて機動六課部隊長の八神はやてです。ユーノス・スレイア元帥でしたか。何故１５０年も前の人物であるあなたがこの現代に存在して、尚且つこの私達の大切な友人でもあるユーノ・スクライアくんに一体何が起こったというのでしょうか？詳しく説明願いたいものですが、宜しいですかな？」

「ああ。先ずは何故俺がこの時代に存在しているのかだ・・・――話せば長くなるのだが、俺は“グリード”の封印が解かれると同時にこの世界に蘇ったんだ」

「グリード・・・――あの化物のことですか？」

ユーノが先ほどの出来事を思い出したかのようにカマキリヤミーの事を想定してそう言うが、ユーノスは首を横に振る。

「いや。あれは“ヤミー”だ。」

すると、二人だけで会話が流暢に進んでいることに危機感を覚えたエリオやキャロが咄嗟に口を挟む。

「？ちょ、ちょちょちょっと待ってください！二人だけ納得されても困りますよ！」

「私達の事置いてけぼりにしないで下さい！」

「ああ済まなかった。話を戻そう。今から１５０年前の事だ。次元世界の平和と秩序を守るため俺を始めとする志の同じくする俺達七人は、時空管理局の元となる結社を作り上げ、そこから現在に至るまでの礎を築きあげた。そして、俺達七大元帥が中心となってその頃は技術も知識もまだ未熟だった戦闘魔導師の育成と、同時に時空犯罪者の取り締まりに全霊を注いでいたんだ。」

ユーノスの話を聞く傍ら、ユーノスは手にした七大元帥について書かれた書物を比較しながら、それが矛盾していないことを確かめる。

「ふんふん。文献に書いてある通りだ」

「だが、そんな慌ただしい日々の中で一つの事件が起こった。とある遺跡から９５０年ほど前につくられたグリードと呼ばれるメダルの怪人が永い眠りから目覚め、人々を襲い始めたんだ。」

「メダルの怪人・・・？」

「ああ。グリードは主に二種類のメダルから出来ている――――――」

ユーノスはそう言うと、疑問符を浮かべる全員に端的な説明するための二枚のメダル、同じタカの絵が刻まれた赤のコアメダルと灰色のセルメダルを結界印より出現させる。

「“コアメダル”と“セルメダル”だ」

「あ。さっき僕が倒した奴と同じメダルが・・・・・・」

これが不用意な発言だった。

なのは達はユーノがヤミーを倒した・・・即ち、ユーノが自らの意志で戦いに挑んだということを聞くや否や表情を一変させ、かなり心配した様子でユーノに詰め寄った。

「え！ユーノ、まさか戦ってたのそのグリードと・・・！？」

「ええ！！！ユーノ君！！！！！どどどどうしてそんな危ないこと一人で！！！」

あまりの迫力に思わず顔を退かせるユーノは必死で弁解する。

「ごごご誤解だって！！！第一僕が倒したのはグリードじゃない！さっきユーノス元帥が口にしてたヤミーって奴だよ！！！」

「その通りだ。」

「じゃあ、そのグリードって奴とヤミーって奴・・・一体どこがどう違うんだよ！？」

何故か真冬なのにアイスキャンディーを頬張る鬼太郎がそう言うと、ユーノスは真剣な表情で説明の仕方を考える。

「噛み砕いて言えばそうだな――――――――お。お前が食べているそ

のアイスキャンディー」

「あ？」

ユーノスは鬼太郎の元まで駆け寄っていくと、鬼太郎の足を伝って肩まで上り、アイスキャンディーを指さしながら全員にグリードとヤミーの違いを説明する。

「このアイスキャンディーのアイスの部分がセルで、棒がコアだ。コアを中心にセルがくっついているのが奴等、封印されていたグリード。そして、ユーノが先ほど倒したヤミーが棒の無いアイスだと思っていてくれ」

「成程。棒が無ければアイスはくっつかないように、セルメダルだけのてヤミーはグリードと比べて非常に脆いと言う訳ですね」

「呑み込みが早く結構だ。」

「い・・・今ので分った・・・なのは・・・」

「ぜ・・・全然・・・」

ちなみに、ユーノスの説明を受けて最も早く理解できたのはやはりユーノその人であり、他のメンバーはイマイチぴんと来ない様子であった。

◇

〈鬼爆・弾間Ｓｉｄｅ〉

さて、ミッドチルダ聖王強化附属病院に二人の男が入院中だった。

第１６管理外世界「ＯＯＯ」にて、盗掘作業をしていた矢先、グリードの復活に乗じて起きた混乱に巻き込まれ、大怪我を負ってしまった鬼塚英吉と弾間龍二の二人組だった。

二人は他の患者とまじって中庭のベンチに腰掛けながら、骨折した腕や足を見ながら疲労困憊な声で言う。

「いや～酷い目に遭ったなあ。これも泥棒なんかしたから罰が」

龍二はとっくに懲りた様子で自分の腕を見つめる中、英吉の方は未だ懲りた様子もなくあの時の出来ごとを否定的に捕える。

「そんなわけねえだろ。なんかのトリックだよ、トリック。おい龍二、それよりな」

「いたい、いたい・・・」

「もっといい仕事があんだよ」

「なんだよ英吉」

「今度なあ」

「なんだよ」

英吉は徐にポケットから一枚の紙切れを取出し、それを広げると書いてあったのは何かの道順が書かれたもので、訝しげな表情の龍二にこう説明した。

「現金輸送車を襲う」

「げ、現金輸送車！？」

「ああ」

「俺、もういいよ！」

龍二はこの前の一件ですっかり懲りてしまったようで、英吉の無謀な作戦には実に消極的な姿勢であった。

すると、英吉は何とか龍二を説得しようと必死になる。

「バカ！金だぞ！金！もう輸送ルートだって分かってる！」

と、龍二が嫌そうな表情で何気なく英吉の方を見た時、龍二は英吉の額に浮かび上がったメダルの投入口に驚き返る。

「あれっ？英吉・・・お前、それなんだ？」

「えっ？」

言っている意味が分からなかった英吉。

すると直後、そんな二人の元に唐突に無数のセルメダルが集まりだしセルメダルは緑色のコアメダルを中心に実態を作りだし、現れたのはグリードの一人、ウヴァだった。

「うわあああああああああ！！！あああああああああ！！！！」

龍二はウヴァの姿を見た途端腰が抜けてしまい、思わず声を上げて後ずさり。

「？竜二・・・」

未だ事態に気づいていない英吉だったが、徐に振り返った先に映ってきたウヴァの姿に目を奪われる。

「その欲望・・・解放してやる」

「うわあああああああああ！！！！！ぎゃあああああ！！！！！」

ウヴァは英吉の投入口にセルメダルを投入。

その瞬間、英吉の欲望から生まれし白ヤミーが体の中から飛び出し、そのまま現金輸送車の元へと急いでいった。

ウヴァの今回の行動は別世界のとある森を仮の塒としていた他のグリード、カザリ・メズール・ガメルの元へとしっかり伝達されていた。

カザリは両腕を伸ばしながらメズールに言う。

「ウヴァがまたやるらしいね。セルメダルだって大切なのに、余裕あるよね。」

「少なくともあいつのコアメダルは二枚、ユーノス・スレイアの手にあるのは確かだもの。じっとしていられないでしょう」

二人がそんな話をしている間に、思考力が幼稚園児並みのガメルは飛んでいる虫を捕まえようと手で追いかけ、木にとまった虫を取ろうと力を入れた途端、その木の幹が簡単肉が枯れてしまい、ガメルは思わず呟く。

「あ～れ？」

そして、メズールは不完全な体をまじまじと見つめながらこう言う。

「コアメダルとアンゴルモアさえ揃っていれば、今頃この世界を飲み込めていたものを！」

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

グリード達がメダル集めに躍起になり始め、本格的に活動を起こそうとしているその頃、機動六課のユーノ達はユーノスからのグリードに関する説明を受けている真っ最中だった。

「グリードは唯一封印する力を持った存在、「オーズ」と呼ばれる力が何らかの作用によって消失した事を切っ掛けに、人間とこの次元世界の全てを飲み込もうとした。俺達七大元帥は辺境の世界に奴らを誘い込み、奴らを倒そうとしたのだが・・・人間の常識を超えた強さを秘めた奴らの力の前に為す術もなく、俺が自らの命と多量の魔力を引き替えに発動した結界魔法奥義『エターナルブロック』の力で奴らを再び封印することが出来たんだ。だが、その代償に俺は力のほとんどを消耗してしまい、結果この姿を余儀なくされた。しかも悪いことに、封印したはずのグリードも人の欲に反応して蘇ってしまった始末・・・」

「そ、そんな事があったなんて・・・?!」

「俺達の知らないところで不穏な影が蠢き出したって事か・・・」

恋次は重苦しい表情でユーノの近くに腰を下ろし、腕組みをする。

そして、ユーノスは真剣な眼差しで全員に訴えかけるようにこう言う。

「奴らグリードにとって重要なのはコアメダルだ。俺は目覚めの寸前、奴らよりも先に何枚かのコアメダルを押収してきた。だが悪いことに、封印されている間にその何枚かが紛失している事も分かった。そのため、誰一人完全な復活が出来ていない状況だ。ここまではいいか?」

「はい・・・しかし、グリードにヤミー・・・途方もないものがこの世界に蘇ってしまったとなると・・・」

「アンゴルモアよりも先にそっちの方を何とかしないとな・・・」

「アンゴルモア?」

はやて達の言葉を聞き、訝しげな顔を浮かべるユーノス。

ユーノは何も知らないユーノスにアンゴルモアに関する説明をする。

「ここ機動六課、もとい僕達が探し集めてる第一級指定のロストロギアです。本来ならば、そこに居る恋次さん達死神さん達の世界の代物なんですが、どう言う訳か一個だったものが異世界中に散らば

ってしまったんですよ。」

「そうか。随分と入り組んだ話のようだな・・・実をいうとこのコアメダルもロストロギアみたいなものなんだがな・・・」

「でしょうね話を聞く限りでは・・・あはは・・・」

ユーノはユーノスを話しを受け、思わず苦笑いを浮かべるのであった。

と、話が一通り終わった直後だった。

ヴィータは机の上に置かれたユーノが最初から所持していた謎の懐中時計・・・最強の結界魔導師だけが持つことを許された称号、結界印を見るなりこう言う。

「ん？なぁ・・・さっきから気になってたんだけど、それってアンタの所持品か・・・」

ヴィータは徐にその結界印に手を触れようとしたが、直後ユーノスは表情を一変させて触れることを禁じようとした。

「！止せ！！それは！！」

だが、時すでに遅し。

ヴィータはユーノスの言葉の前に結界印に不用意に触れてしまい、その結果彼女は突如として体中に流れてきた凄まじい電圧に声を上げた。

「ぎゃあああああああああ！！！」

「ヴぃ、ヴィータ副隊長！？」

「ヴィータちゃん！！」

突然の事態に驚き返るなのは達。

ヴィータは電撃によって全身黒焦げとなってその場に倒れてしまう。

「ハラホレハラホレ・・・・・・」

「だ、大丈夫ですか！？」

「おいヴィータ、しっかりしろ！」

シグナムは気絶したヴィータの意識を確認しようとし、はやては守護騎士の非常事態に関して鋭い目つきでユーノスに言及する。

「ユーノス元帥、どうなってるんですの！？なんでウチのヴィータがこんな！」

ユーノスは罰の悪そうな顔を浮かべ、その間に意識を取り戻したヴィータが結界印を指さしながらはやて達に言う。

「いきなりそいつから電撃が・・・！」

「すまない。悪気はなかったのだが」

「どういうことなんですか？」

吉良がユーノスに尋ねると、ユーノスは徐にこの結界印の特徴について説明を始めた。

「代々最強の魔導師が持つことを許された七つの称号『七大印（セブンスツァイヘン）』と呼ばれるもので、これはその中でも最強の結界魔導師だけが持つことを許された『結界印』だ。」

「シールドツァイヘン・・・？」

「それぞれの称号を司る紋章が刻まれ、蓋を開ければいたって普通の懐中時計なんだが、これは持ち主・・・即ち人を選ぶんだ。最強の結界魔導師ないしは結界印が認めたもの以外の者は触れることを許されず、今のように拒まれてしまう」

「へぇ・・・」

ユーノはそう呟きながら、先ほどの自分の事を思い出し、なぜあの時自分がこれに手を触れたとき何も起こらなかったのかを考えながら恐る恐る結界印に手を伸ばそうとする。

なのはとマリアをそれを見るな否や直ぐに止めに入ろうとする。

「あ！ユーノ君危ないよ！！」

「ユーノ様！それは危険ですわ！！」

しかしユーノはそんな二人の言葉を無視して、結界印に手を触れる。

すると、結界印は先ほどのヴィータのように電撃を出して拒む様子

は見せず、ユーノは大丈夫であることを確信するとそれを徐に握りしめる。

ユーノスやなのは達は呆気にとられた様子で驚き返った。

「あ、あれ？」

「何ともない・・・！？」

「僕が最初にこれを拾ったときも、別に何も異常は起こらなかった。全然拒まれる素振りもなかったですよね・・・」

「そうなんだ。しかも、不可解な事にあの時ヤミーとの戦闘中、何故かこの結界印がユーノの意識に反応した。」

「ユーノ先生の意志に・・・！？」

「詳しくは俺にもよく分からないが、兎に角あの時結界印がユーノに力を貸したのは事実だ。」

「ユーノ君はその時何があったか覚えてないの？」

「う～～～ん・・・僕自身も何が何だかさっぱりなんだ。ただ、ユーノス元帥を助けないとって一心で頭がいっぱいだったからね」

ユーノはそう回答すると、自分の手に握りしめられたこの結界印を凝視しながら、あの時なぜこの代物が自分に力を貸したのか、疑問符を浮かべるばかりであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

その頃、ミッドチルダの首都を移動中の英吉が襲撃を企てていた例の現金輸送車だが、突如として現れた白ヤミーの襲撃を受けてしまった。

「ぐおおお！！！」

「うわっ！！」

フロントガラスに降りてきた白ヤミーを見るなり運転手は急ブレーキを踏もうとしたが、直後白ヤミーはガラスを破り、走行不能の状態に陥れる。

現金輸送車はその場に横転し、動かなくなると白ヤミーは積み荷である大量の現金を掴みとり、それを欲望として食し始めた。

白ヤミーが欲望を食らうと、セルメダルの枚数は加速度的に増していき、このセルメダルの音を遠く離れたところで聞き取った機動六課のユーノとユーノスは表情を一変させる。

「「！」」

「どうしたの？」

ユーノは何故自分がセルメダルの音を聞き取れたのか知らないが、この時本能が行かないとまずいことになるという事を促したので、かなり慌てた様子でシャマルの治療を受け怪我が癒えたばかりのユーノスに言う。

「ユーノス元帥・・・今のは・・・！」

「お前にもわかるのかユーノ・・・ああ。メダル・・・セルメダルの音だ！」

「え？」

二人の異変になのは達はきょとん顔となるが、直後この事は緊急アラートと言う形で全員の元にはっきりと伝わった。

「「「「！」」」」

「これは・・・！」

「一体何が！？」

隊舎全体に響き渡る第一級警戒レベルの緊急アラート。

すると、モニター画面に現れた管制室のシャーリーがその旨を伝える。

『大変です！ミッド市街地にアンノーンが出現！今映像を出します！』

シャーリーは早速アンノーンが出現したポイントの映像を映し出す。

モニター画面に映ってきたのは、ミッドのとある銀行に玄関から侵入しようとしている白ヤミーの姿であり、なのは達は初めて見るヤミーの姿に目を疑った。

「あれは・・・！」

「ヤミーだ！」

「え？」

ユーノスは危機感を感じ取ると、強引にユーノの手を引くようにユーノを白ヤミーの元へと誘導し始めた。

「すまないユーノ、来てくれ！」

「え！？ちょっとちょ！！」

「あ！ユーノ君！」

「ユーノ！」

ユーノスに連れられていくユーノを呼び止めようとするなのは達だが、二人は彼らの言葉を無視してどんどん進んでいき、ユーノが隊舎の玄関を出るとちょうどそこで冬休みの宿題をしに無限書庫から帰ってきたヴィヴィオとすれ違った。

「ただいまユーノパパって・・・何処行くのそんなに慌てて？」

「ごめんヴィヴィオ！説明してる暇はないんだ・・・！」

ヴィヴィオは本を抱えたまま、傍から見ればかなり浮いている今のユーノの姿を見て、疑問をふを浮かべるのであった。

さて、ユーノとユーノスが白ヤミーの元へと向かってるその間に、白ヤミーは銀行の中へと潜入。

「お待たせいたしました・・・・・きゃあ～～～！」

接客を担当していた女性局員は突如として現れた白ヤミーの姿に腰が抜け、他の利用者も声を上げて恐怖感情に支配される。

咄嗟に警備員が駆け付け、白ヤミーを止めようとする。

「何やってる！止まれ！止まれ！」

だが、白ヤミーは警備員を人間離れした力で投げ飛ばしてしまう。

「ぐあああああ！」

奥の方で書類仕事などを担当していた他の銀行員も狼狽し、急いで白ヤミーの側から離れていく。

白ヤミーは代を飛び越え、一目散に金庫の方へと向かうと、強引に厳重なロックが施された金庫の扉を突き破り、保管されていた大量の金の延べ棒を食らい始めた。

すると、ちょうどその時ユーノとユーノスが駆けつけ、ユーノは目の前に映ってきた白ヤミーの姿を見ると、肩に乗ったユーノスに問いただす。

「ユーノス元帥。あれも何とかってメダルの怪人なんですか？」

「そうだ。ヤミー。棒の無いキャンディーだ。尤もあれは“白ヤミ

ー”と言って、成長途中のヤミーだがな」

その説明を受けた後、ユーノは金庫の方で延べ棒を食らい続ける白ヤミーを見て、不意に疑問に思った。

「あいつ・・・何を!?」

「ヤミーは餌を食って成長する。“欲望”と言う名の餌を――――」

「“欲望”？」

一瞬驚き返るユーノだが、ユーノスは真顔のままユーノの肩でこう言う。

「セルもコアも、メダルの元は人間の欲望」

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

白ヤミーが成長を続けようとしている頃、アルハザードで最近ではすっかり趣味の域に達したケーキ作りに熱中するスカリエッティは改めて欲望と言うものに関して絶賛していた。

「欲望!!なんて純粋で素晴らしいエネルギー!!ケーキも・・・テーブルも・・・家もビルも、街も国も、そして魔法も!!すべて人の欲しいという思いから出来た欲望の塊!そうだろ!リリス？」

スカリエッティはそう言いながら、目の前のリリスに尋ね、リリス

は平静とした表情で答えた。

「ええ。全く」

すると、その時プレシアが一枚のカードを持ってきた。

「その一つから招待状よ。高層ビルの竣工記念パーティー」

スカリエッティはそれを受け取って中身を確認してから、絶賛した様子でカードを豪快に放り投げた。

「すばらしい！」

そして、スカリエッティは徐にホイップクリームがたっぷりと詰まった袋を手に取り、別の机に垂らして無限大と表記する。

「赤ん坊は生まれた時に欲しいと言って泣く。生きるとは、欲することなんだ。その最高にして、最強の力から生まれたメダルとアンゴルモアを、最大限に集めたとき！手に入るのは無限大・・・――――よりもさらに大きい」

スカリエッティは無限大と表記した更にその横にもう一つの円を描き、三つのＯＯＯと表し、体の底から雄たけびを上げた。

「オーーーーズ！！！！！！！」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃白ヤミーの様子を窺っていたユーノ達は、ちょうど白ヤミーが欲望を食らったことでオトシブミヤミーへと成長をするところを伺いつつ、見つからないように警戒していた。

ユーノは徐にユーノスから聞かされたメダルの元となるもの・・即ち欲望と言う言葉を繰り返した。

「欲望・・・！」

そう言ったあと、ユーノの肩に乗っていたユーノスは眉間に皺を寄せながら言う。

「このまま放っておくとマズイ。親の欲望を貪り喰らい、際限なく成長する！」

と、その直後オトシブミヤミーは移動を開始し、銀行の外へと向かった。

「追うぞ！」

「はい！」

二人はオトシブミヤミーの追跡を開始した。

オトシブミヤミーが次なる欲望を食らうために向かったのは、ちょうどスカリエッティに招待状を送った彼と密接なかかわりを持つ違法魔導師結社が集う高層ビルの竣工記念パーティーが開かれている会場であった。

会場内にはドレスやタキシードに身を包んだ違法魔導師達がワイン

グラス片手に優雅な時を過ごしている。

そこへ、係の者がジェイル・スカリエッティ特製（匿名）のケーキを持って入場する。

「みなさん！Ｄｒ．Ｊ様よりお祝いのケーキが届きました！」

参列者は一応に拍手喝采で盛り上がり、パーティーはいよいよ大詰めを迎えようとしていた。

だが、そんな彼らの元に恐怖の影が忍び寄ろうとしていた。

「「「きゃあああああああ！！」」」

オトシブミヤミーはそのビルの隣に佇むビルの真下の方から壁を伝って登っていき、障害となるものやビルの壁を食らいながら先ほどにも増して巨大化を続けた。

ヤミーに追いついたユーノ達が目のあたりにした時は、既に隊長２０メートルにまで成長を遂げており、思わず二人は表情を一変させた。

「な！あんなにデカく・・・！」

「マズイぞ・・・！このままでは・・・！」

すると、そんな二人の元にバリアジャケット姿のなのはと死覇装だが特注の義骸に身を包んだ恋次がやってきた。

「ユーノ君！」

「ユーノ！」

「なのは！恋次さんも！」

二人はユーノの元に駆け寄ると、同じように自分たちの想像を絶する大きさにまで成長した化物の姿に目を疑った。

「うっわ！なんだこいつは！？」

「ユーノ君・・・これって・・・！？」

「ああ。ヤミーだ。それもかなりの大きさの！」

オトシブミヤミーはとかく壁を、天井を食らって行き、人々を一緒に巻き込みながら際限なく成長を続け、ユーノ達が確認した時には既にヤミーは体長２５メートルにまで成長を遂げ、ビルは真ん中より崩壊し、隣に立つパーティーが行われている会場のビルへと激突。

「きゃああ！」

「「「「うわああ！」」」」

パーティーを楽しんでいた人々は突然の出来事に声を上げ、騒ぎ立て、自分の命を守るためみな一斉に会場から逃げ出して行った。

この騒ぎはすぐに他の部署にまで伝達され、管理局員が住民の避難と誘導を始める中、機動六課のユーノ達四人はこの巨大なヤミーをどうやって対処するか、それに頭を悩ませていた。

「くそ・・・！」

「こんな大きな相手・・・一体どうすれば・・・！」

下手に攻撃をすれば間違いなく崩れたビルが更に崩壊を進め、それこそ二次災害が起こりえないことになる。

いくら砲撃において右に出るものが居ないと言われるエースオブエースのなのはでも、状況によってはあまり役に立たないこともあるのだ。

と、その時突然ユーノが神妙な表情となるや否やユーノスを肩から下し、ふと呟いた。

「・・・泣いてる・・・」

「何？」

「え」

「ユーノ・・・？」

訝しげな様子の三人に、ユーノは真剣な表情で言う。

「泣いてるんだ・・・」

この時、ユーノの脳裏に浮かんできたのは・・・アフリカの内戦に巻き込まれおり、村で一番最初に仲良くなったが、結局自分の手で助けることが出来ないで終わった少女ユウの鳴き声だった。

ユーノはそれを思い出しながら、拳を強く握りしめ、局員でもなかなか突入できないでいるビルに向かってユーノは走りだし、見ていたなのは達は思わず声を荒げる。

「おいっ！」

「ユーノ！」

「ダメ！ユーノ君！行っちゃダメ！！」

三人はユーノを止めようと声を上げるが、ユーノはそれを無視して瓦礫で道幅が狭くなった箇所を通り抜け、ビルの内部へと潜入。

エレベーターが使えない中で、非常階段を伝って行き、彼は人の声が聞こえるところまで一直線に駆け抜けていった。

その間に、オトシブミヤミーは崩壊したビルを伝って竣工記念パーティーが行われていたブルへと移動し、会場内にまで取り残されていた人々は脱出を急ぐが、直後窓ガラスを破って巨大オトシブミヤミーの爪が食い込み、人々は恐怖に駆られた。

ユーノは全速力で３０階建てビルの階段を伝って行き、会場の方へと目指す。

そして、会場内に取り残され腰の抜けてしまった一人の男がオトシブミヤミーの手に掴まれてしまい、絶体絶命の危機に瀕した。

「た、助けてくれ！！！」

手に掴まれ外へと引きずり込まれる男。

と、その時そんな男の手を掴んで来たのが駆けつけたユーノだった。
ユーノは男の手を引っ張りオトシブミヤミーから引き離す。
男はその場に尻をつき、息を立てながら自分の命が助かったことを実感する。

「うわっーーー!!」

だが、ビルの崩壊は止まらず揺れは激しさを増し男はその場から退却した。

「うおおおお!!」

ユーノも思わず足場を崩してしまい、そのまま割れた窓ガラスの向こうへと身体を放り投げられ、ユーノは間一髪のところで手すりに掴まるが、完全に宙ずりの光景である。

ユーノは横の方に居るオトシブミヤミーの動きを警戒しながら、何とか這い上がろうとするも、滑って片手が外れてしまい、正に生と死の瀬戸際を争う状態となった。

その時、そんなユーノの元になのは達三人が急いで駆け付けてきた。

「ユーノ君!」

「ユーノ!掴まれ!」

恋次は急いでユーノの手を掴もうと自分の手を伸ばしてきた。

その間になのはの肩に乗っていたユーノスはユーノの無謀な行動を厳しく叱咤する。

「ユーノ。お前、無茶にも程があるぞ！自分の命を何とも思っていないのか！？」

すると、ユーノスの言葉を受けたユーノは険しい表情を浮かべながら次のように語る。

「く・・・誰かが泣いているのに・・・誰かが助けを求めているに・・・それを黙って聞き過ごしたり見過ごしたりするなんてこと・・・僕にはできない・・・！」

「「「！」」」

「力を失っても・・・戦うことを止めたとしても・・・これ以上・・・メダルなんかの為に人の命が奪われてたまるか！！」

「ユーノ・・・」

「ユーノ君・・・」

事情を詳しく知らないユーノスもそうだが、ことの経緯をよく知っていたなのはも恋次も、この時のユーノの言葉にはさぞかし胸打たれたことだろう。

そう・・・彼は戦うことを止めたとしても、力を失ったとしても、なのはや恋次の様な組織の一員として人を助けることと同じように、自らの心の声に従い人を助けるという使命感を常に抱いているので

ある。

それは決して彼自身の欲望なのではなく――――――

と、その時。

「！おい！」

ユーノスは後ろに迫ってきたオトシブミヤミーの攻撃を警戒し、なのは達にそれを促そうとした。

なのは達はそれを見た途端表情を凍りつかせる。

これが命取りだった。

恋次はその一瞬のうちに力が抜けてしまい、掴んでいたユーノの手を放してしまったのだ。

「うわあああああ！！！」

ユーノは高層ビルの屋上近くから真っ逆さまに落下していった。

「「「ユーノ（君）！！」」」

「うわあああああああああああ！！！」

なのははすぐに飛んで行こうとするが、オトシブミヤミーがそれを邪魔をして飛ぶに飛べないでいた。

その間にユーノは魔法も霊力も、そして運悪くジェットエンジン付

のブーツも整備に出しているため履いておらず、万事休すでいた。
すると、ユーノスはユーノを助ける方法として、持っていた結界印を取り出し、それを落ちていくユーノの掌目掛けて投げつけた。
「く！ユーノ！！！これを！！！！！」
ユーノは上から降ってくる結界印を手に取ると、思わず目を疑う。
「！これは！！」
「いいから、早くそれを使え！！」
ユーノスの言葉を受け、ユーノは心の中で強く念じる。
「（頼む・・・僕に応えてくれ！）」
ユーノは意を決すると、結界印の蓋を開放して最後の賭けを行った。
「変身！」
〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉
すると、ユーノの願いが通じたのか結界印は以前と同じように強い光を発しユーノを包み込むと、ユーノを特注の防護服で身を包み、ユーノは変身を完了させるとツインブレイドを作りだし、壁に食い込ませながら速度を落とそうとした。
「止まれーーー！！」

頭上からユーノを窺っていたなのはと恋次は見たことのない防護服に身を包んだユーノの姿に思わず目を疑った。

「！ユーノ君！？」

「なんだ・・・あの姿は！？」

ユーノが必死になった結果、何とかユーノは地面に激突する寸前で止まることに成功し、一回転をした後に地面に着地する。

そして、ユーノスは改めてはじめてヤミーを倒した時同じ姿に身を包んだユーノの姿を確かめてみた。

「（やはり・・・あの結界印がユーノの魂に反応している・・・！ユーノ・・・お前はどうやら俺と同じく結界印に選ばれたもののようだな・・・！）」

「ふう。助かった・・・！」

安どのため息をつくユーノ。

するとそこへ、なのはと恋次が飛んできて駆け寄った。

「ユーノ君、その格好！？」

「どういう事だよ一体！？」

「いや・・・詳しくは僕にもわからないんですよ・・・それよりこいつを・・・！」

ユーノは二人にそう言うと、当初とはまた比べ物にならないほどにまで巨大化したオトシブミヤミーを仰ぎ見ながらその対策を考える。

「随分と食ってデカくなりやがったな。だが、これ以上食わせるかよ！」

「ユーノ君はユーノス元帥と一緒にここで待ってて。私と恋次さんで止めるから！」

二人はそう言うと、自分の武器である蛇尾丸とレイジングハートを手に取り、オトシブミヤミーに向かって飛び出し、取り残されたユーノは二人を心配する。

「なのは！恋次さん！」

「ユーノ！後ろだ！」

肩に乗っていたユーノスがそう口にすると、崩壊したビルの瓦礫が降ってきた。

「うわあ！」

ユーノは急いでその場から避難する。

その間に、オトシブミヤミーに向かって行った恋次となのはは協力して攻撃を始める。

「蛇腹連刃！！」

「アクセル・・・シュートッ！」

二人は先ず己の得意技を披露し、オトシブミヤミーの皮膚を傷つけようとするが、流石に巨大なだけあって貫通することもなく、全て跳ね返されてしまう。

「頑丈な皮膚だな・・・なら！」

恋次は意を決すると、蛇尾丸の刃節を目いっぱい伸ばしてオトシブミヤミーの首を狙った。

「つらあああああああああ！！！」

オトシブミヤミーは首を蛇尾丸に絡め取られ、苦しみだす。

これを見た瞬間、なのはは更なる追い打ちをかける。

「レイジングハート！」

〈Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　ｒｏｃｋ〉

なのははオトシブミヤミーに接近しながら上位拘束魔法であるレストリクトロックを発動し、オトシブミヤミーの動きを完全に封じ、それを見ていたユーノも思わずガッズポーズ。

「上手い！あの距離からのバインドなら！」

しかしその一方で、ユーノスは不安一色の顔を浮かべながらこんな事を思っていた。

「（なんだ・・・この悪寒は・・・・・・）」

ユーノスの悪寒はこの後見事的中するのだが、そんなことは一切知らないなのははこの機を逃さないために砲撃で一気に片を付けようとした。

「一気に行かせてもらうよ！」

そう言うと、なのははレイジングハート・エクセリオンをマニューバスターアサルトと呼ばれる状態へと変化させ、身動きのできないオトシブミヤミーに突撃を行い強力な突き繰り出す。

「マニューバS・S・Aッ！（シューティングスターアサルト）ファイアーーーッ！！」

その瞬間、途轍もない爆風と爆音が発生し、離れていたはずの恋次でさえその余波を受ける。

「ぐ！！！」

そして、下の方でそれを窺っていたユーノスはそんななのはの攻撃を見た途端、自分の恋人の事を思い出し唖然とした。

「な、何て火力だ・・・（まるでコトハそっくりだな・・・そうか。なのはは砲撃魔導師だったのか・・・道理で）」

「だけどこれなら――――――っ！」

ユーノもこのなのはの攻撃には流石のヤミーもくたばったと思っていた。

しかし、現実は違っていた。

爆風が晴れた瞬間、なのはと恋次・・・そしてユーノとユーノスが見た光景はあまりに残酷なものであった。

「え！」

「何！」

「そ、そんな・・・！」

「バカな・・・！魔王の攻撃が通じねぇってのかよ！」

恋次は目を見開きながら、目の前に佇むセルメダルを一切放出することなく、魔法が一切通じていないこのオトシブミヤミーに驚きを隠せずにいた。

ユーノも恋次同様自分の恋人であり、管理局のエースオブエースと言われるなのはの攻撃がまるっきし通じない事には言葉を失った。

「なのはの攻撃が効いていない・・・何で！」

「あのヤミー・・・ただのヤミーじゃないのか！？」

ユーノスはこれまでの経験から即座に今回のヤミーが魔法が一切通じないものだと確信する。

と、驚き返って言葉の出ないでいるなのはにオトシブミヤミーの攻撃が襲う。

「きゃあああ！！」

「なのは！」

直後、なのはと一緒に今度は恋次もまたオトシブミヤミーの攻撃を受ける。

「ぐあああああ！」

「なのは！！！恋次さん！！！！」

二人はビルの屋上に叩きつけられると、目の前のヤミーに何故魔法が通じないか甚だ疑問に思うばかりであった。

「ぐ・・・どうして・・・魔法が・・・！」

オトシブミヤミーはそんな事を考えるなのはと恋次に容赦なく腕を伸ばそうとする。

「ち！破道の三十一、赤火砲！」

恋次は咄嗟に赤火砲を放ってヤミーに攻撃するが、何とさらに悪いことに鬼道による攻撃もこのヤミーに一切通じていなかったのだ。

「鬼道も効果なしだと！」

二人はただただ目を疑うばかり。

すると、オトシブミヤミーはそんな二人の体を押しつぶそうと巨大な手を乗せて圧迫してきた。

「「ぐあああああああ！！」」

「なのはッ！！！！！！！！！！！！！！！！」

なのはの絶体絶命の危機に、ユーノの感情が昂ぶる。

そして、ユーノは無意識のうちにその場から駆け出す。

「うおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」

「！ユーノ！」

地面の上に降りていたユーノスはユーノの行動を止めようと声を荒げたが、直後彼は驚くべき光景を目の当たりにした。

なんと、ユーノが無意識のうちに空気の滑空し、そのまま空気の上を走っていったのだ。

「な！空気の上を走っているだと！？」

魔導師としての力も、況して死神としての力も失った普通の人間のはずのユーノが何故こんな人間離れした能力を使いこなせるのか、ユーノスは疑問に思うばかりであった。

ユーノは全速力で空気中を走り抜け、なのはと恋次の元へと急ぐ。

その間に二人はオトシブミヤミーの攻撃を受け、絶体絶命の状態であった。

「ぐ・・・」

「くそ・・・」

ビルも崩壊を進め、天井が崩れるとビルの中に取り残されていた人々が恐怖する。

「「「うわあああああああ!!」」」

と、その時。

なのはと恋次のもとにスレイヤーブレイドを装備したユーノが飛んで来、オトシブミヤミーの体に傷をつけた。

「セイヤっ!」

「「!」」

ユーノがスレイヤーブレイドで傷をつけると、なのはと恋次達とは違いちゃんとセルメダルが放出された。

「なのは!恋次さん!」

ユーノは二人の元に駆け寄り体を起こしてやった。

「ユーノ君・・・!」

「すまねぇ・・・助かった・・・だけどどうやってここまで?」

「あ。そう言えば・・・どうやって来たんだ僕・・・?」

ユーノは二人を助けることで頭がいっぱいであったらしく、自分がどうやってこの高さまで来れたのか、考えるばかりだった。

しかし直後、そんなユーノになのははすぐに危機を伝える。

「！ユーノ君！前、前！」

ユーノが前に目を向けると、オトシブミヤミーが体に生えた何本もの腕を伸ばしてユーノ目掛けて攻撃をしてきた。

「いけない！」

ユーノはなのはと恋次と一緒にその場から退避し、攻撃の機会を伺っていると、ユーノの頭の中にユーノスからの念話が伝達される。

「（ユーノ！ツインブレイドを使え！）」

「あ、そうか！はい！」

ユーノはユーノスの指示を受けると、両腕に力を込める。

〈Ｔｗｉｎ　ｂｌａｄｅ〉

すると、ツインブレイドが生成され、ユーノはそれを使ってオトシブミヤミーの懐へと飛び込み二刀流を披露する。

「セイヤ！セイヤっ！」

ユーノがツインブレイドで傷つけると、オトシブミヤミーの足からは大量のセルメダルが放出。

見ていたなのはと恋次は唖然としてしまう。

「す・・・凄い・・・・」

「ああ・・・だが何であいつの攻撃だけは野郎には効いてやがるんだ・・・・！？」

「はあああああああ！！」

ユーノは止めの一撃を加えようと、右腕に力を込めたが、直後沈みかけていたオトシブミヤミーがユーノの身体を顔で吹き飛ばした。

「あああああーーー！！」

「「「ユーノ（君）！」」」

ユーノはそのままビルの下へと真っ逆さま。

だがその直後ユーノはまた無意識のうちに、足の裏に力を込める。

するとその瞬間、ユーノは空中に浮遊し、ユーノは器用にも地面にぶつかる寸前で空中に浮遊するという状態となった。

「「「！？」」」

三人は普通の人間ならあり得ない光景に目を疑い、当のユーノはそのことよりも命が助かったことの方に重きを置いていた。

「ふう～～～助かった・・・」

だがその直後、彼もまたようやく自分の現状に気が付くと、大いに驚き考えた。

「（ええ！・・・何この状態――――――）」

そう思いながらユーノは体制を整え、オトシブミヤミーの方へと高く飛び上がる。

ビルの屋上につくと、ユーノは心の中で呟く。

「（今のといい・・・さっきのといい・・・僕の体に一体何が・・・――）」

その時、ユーノは不意に足元が奇妙な光を発したことに気が付き、その光を見た瞬間彼はある事を思い出し表情を一変させる。

「！まさか・・・・・・この力って――――――」

ユーノはそう言うと、目の前のオトシブミヤミーの背中に飛び乗りスレイヤーブレイドを突き刺し、オトシブミヤミーを地面へと落とす。

「ユーノ君ッ！」

「「ユーノ！」」

ユーノの身を案じ、離れたところから援護に回ろうとするヤミーの戦闘に関しては全くの無力と言っても過言ではないなのは達。

ユーノは地面に落下させたオトシブミヤミーの注意を引きつけながら、徐に腰の逆刃刀に手をかけ、心の中で念じた。

「（剣心さん・・・弥彦・・・僕に力を！）」

そして、逆刃刀片手にユーノは勢いよく飛び出しオトシブミヤミーの懐へと飛び込んだ。

「おおおおおおおおおお！！！！」

「！逆刃刀を！？」

「何をするつもりだ！」

訝しげな様子でユーノの行動を見守るなのは達。

ユーノはオトシブミヤミーの体に逆刃刀で傷をつけながら背後へと回り込み、その逆刃刀の刀身に力を込めた。

「上手くいけーーーーーー！！！」

すると、逆刃刀の刀身に光が宿りだし、ユーノは構えを取った。

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｓｌａｓｈ〉

そして、光り輝く逆刃刀による一撃をオトシブミヤミーへと仕掛ける。

「セイヤっーーー！」

ユーノが逆刃刀の一振りをした瞬間、標的のオトシブミ―と一緒に空間もろとも一刀両断され、切断後、標的であるオトシブミヤミー以外のものが時間を逆行したように修復されると同時にオトシブミヤミーが爆発・飛散した。

飛散した瞬間、オトシブミヤミーを構成していた数百枚と言う数のセルメダルが放出される。

地上に降り立ったなのは達はユーノが未知なる力を使って自分たちではどうすることも出来なかったヤミーを倒したことに驚きを隠せずにいた。

「や・・・やった・・・！」

「あいつが・・・やりやがった・・・」

「・・・・・・」

ユーノは静かに逆刃刀を納めると、周り落ちていた大量のセルメダルの内の一枚を拾い上げる。

「こんなにたくさん」

ユーノはこの時、人の欲望とは計り知れないものだと実感する。

するとユーノの元になのは達が駆け寄って来た。

「ユーノ君！怪我は！？」

「え。ああ・・・・・・うん・・・大丈夫」

「お前・・・何で・・・・」

「その事なんですけど・・・一つ分かったことがあるんです。この僕の力が、一体何なのか・・・・」

「え？」

なのは達はユーノのその言葉に声をももらし、ユーノは今回備わった自分の力が一体何であるかを今一度考えた後、確信したようにこう言った。

「これは・・・・・・“完現術（フルブリング）”だ！」

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ一枚

ユーノとユーノスと完現術（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は結界印についてだ♪」

「これは最強の魔導師に与えられる称号『七大印』のうちの、最強の結界魔導師にのみ与えられる代物だ」

「見てくれは懐中時計なんだけど、選ばれたもの以外が触れることを許さず無暗に触れようとすると――――――」

そう言いながらユーノはユーノスが持っていた結界印を無断で触れようとするコンを一瞥し、その途端コンは激しい電撃を浴びる。

コ「ぎゃあああああああああ！！！」

コンは真っ黒となって気絶する。

ユ「こんな感じにまっ黒焦げとなっちゃうんだ♪」

コ「てめぇ！！俺様を実験体みたいに使うんじゃねぇよ！！」

魔導師図鑑ハイパー！

石「今日は、ユーノ君の完現術と言うことで、スレイヤーモードについてだ」

「完現術の中でも異彩を放つユーノ君のこの力は、七大元帥ユーノ

ス・スレイアが所持している結界印に宿る彼の魂を引き出してそれを自らに纏わせるんだ。全体的にバランスのとれた戦闘力を発揮し、その得意技は魂で形作られた剣・スレイヤーブレイドだ」

一「だけど何でユーノが完現術を・・・しかもあいつは結界印なんて愛着もくそもまだないものをどうして？」

石「詳しくは、次回以降でユーノ君の口から話すようだから心配はするな。それより、君の昔の完現術に比べれば大分ましだとは思うがな・・・」

一「な！それを言うなよ！！俺だって好き好んであんなライダーマンみたいな格好してた訳じゃねぇ！！」

石「隠す必要はないだろ。あれも実は君の趣味だろ？」

一「ゼッテー違う！！」

次回予告

ド「僕、ドラえもんです」

「いっつも人から色んなものを取り上げて、限りなく欲しがるジャイアン。だけど、そのジャイアンが正体不明の力に憑りつかれて、好き勝手に暴れ出しちゃった！」

「その時、ジャイアンと僕らが出逢った謎の青年とフェレットとは――――――」

ド「ユーノ・スクライア外伝　第１４２話　ドラえもんと進化とジ

ャイアン　楽しみに待っててね！」

登場人物

鬼塚英吉

声：二又一成

ウヴァの欲望の標的となった金髪のリーゼントが特徴の男。愛車はゼファー１１００のＭＫミッドナイトのカスタム仕様。第１６管理外「ＯＯＯ」ではかなり有名な不良の一人。不良社会を支配し、暴走族「暴走天使（ミッドナイトエンジェル）」を親友の龍二とたった２人で潰したなどの伝説を残す。

弾間龍二

声：堀秀行

英吉の親友。愛車はＣＢＸ４００Ｆ（後にプロアーム仕様となる）。イチモツの大きさは英吉より大きいスッポンモドキ。家は金持ちだが、父親を始め厄介者扱いされていて心を許せるのは姉のみ。英吉に比べ、危ない橋は渡らず慎重に行動する。

登場ヤミー

オトシブミヤミー

身長　２５ｍ　体重　１２ｔ

特色／力：巨大化

ウヴァが作り出した昆虫系成長ヤミー。　遺跡嵐をしていた際に、破面魔導虚部隊のグリード殲滅に巻き込まれ入院していた警備員（強盗犯）の一人、鬼塚英吉の欲望から誕生した。最初は小さな姿だったが、鬼塚の金への強い欲望により現金輸送車を襲い、銀行の札束や金塊等を食らううちに巨大化していき、高層ビルを食べることで超巨大な姿へと進化した。　高層ビルの屋上で暴れ続けるも、スレイアーモードに変身したユーノに阻まれ地上に落下。　そして完現術の力でパワーを増幅させ放たれた逆刃刀によるスレイアースラッシュにより空間ごと切断され爆散した。

ドラえもんと進化とジャイアン（前書き）

ジャ「ほしいものは手に入れるのが、おれのやりかたさ。」

ドラえもんと進化とジャイアン

＞i29690―709＜

ユーノ・スクライア外伝　ここまでのハイライト

ユーノス「お前、名前は・・・」

ユ「ユーノ・スクライアだけど」

「いや～～～突っ走りすぎちゃいましてね、もう綺麗さっぱり何にもなくなっちゃいましたよ♪」

ユーノス「とある遺跡から８００年の眠りからグリードと呼ばれるメダルの怪人が目覚め、人々を襲い始めたんだ。」

「その結界印がお前にそうしろと言っている。」

ユ「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユ「セイヤーッ！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ一枚

〈ユーノSide〉

オトシブミヤミーを倒し、一通りの後始末も完了したその日の夜、はやてはなのは達でも倒すことが出来なかったオトシブミヤミーを唯一倒すことが出来たユーノの能力について、ユーノ本人から直接事情を聴くことにし、全員を司令室に集めた。

そして、徐に席に着くとはやては早速目の前のユーノに事情を問いただした。

「それで、何なんやユーノくん。その・・・・・・完現術って言うんは？」

「うん。それを説明する前に少し喉が渇いたから――――――」

ユーノはそう言うと、冷蔵庫の中からオレンジジュースを取出し、グラスに注いだ後、徐にソファーに腰かけ説明を始めるのであった。

「飲み物でも飲みながら話そう。」

全員は息を呑んでユーノの話に耳を傾けるのであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

その頃、異世界のとある場所では人だかりができていた。

人だかりは一応に携帯電話を取出し、カメラ機能を作動させると目の前に映ってきた光景を撮影し始める。

「撮影だって」

人々が撮影に夢中になっていると、いつの間にか警察のパトカーまで駆けつけ、騒ぎはどんどん大きくなる。

その事に疑問に感じた一人が徐に尋ねる。

「なあ、何あれ？」

「知らね。テレビか何かじゃねぇの？」

野次馬の何人かそう思ってもいたが、実際はテレビの撮影などではなかった。

本当に警察当局が動いたのだ。

何の為にと言われれば・・・――――

「なんですかあれ？バケモノじゃないですか！？」

「こっちへ来るぞ！」

人々の生活を脅かすであろう異形の怪人・・・そう、グリードの四体をたまたまこの世界の住民が発見し通報したのがきっかけだった。

グリード達は封印から目を覚ますと、あちこちの異世界を転々としながらあるものを探し続けていた。

それは自分たちの体の形作る重要な代物、コアメダルでありもう一つはその体の中に埋め込まれた強力な力を秘めた結晶、アンゴルモアであった。

グリード達は目の前で自分たちの事を興味津々に見つめる野次馬と警戒心をあらわにする警察関係者を目の当たりにしながら、呆れ顔を浮かべる。

そして、徐にカザリ・メズール・ウヴァの順に言葉を発した。

「僕たちグリードが封印されてる間に、人間たちも変わったんだよ・・・かなり面倒くさくなってる」

「そうね・・・愚かさは同じみたいだけど。悲しいこと」

「まったく。何処へ行ってもこれか・・・随分うるせぇな・・・」

すると、人間たちの行動に業を煮やしたガメルが自分の鼻を像のように長く伸ばすと、警察のパトカーを引き寄せ、乗っていた警官に襲い掛かっていった。

「ぐっは！」

警官はガメルの恐るべき力に圧倒され、満身創痍となって意識を失いそのまま仲間の元へと投げ飛ばされる。

「ぐっほ！」

「撃てっ！」

警察官は一斉に銃を構えてグリード達に発砲するが、その程度の鉛玉では到底このグリードを倒すことなど不可能な事だった。

ガメルとウヴァは銃弾を全て跳ね返すと、反撃へと移り、その場にいた警官全てを洋酒なく手にかけていった。

すると、ガメルは元気のない声で側に居たメズールにこう言ってきた。

「メズール。俺、セルメダルが足りなくなってきた・・・」

「あなたは消費が早いから・・・ほら、分けてあげる」

メズールはまるで母親のような慈愛をガメルに抱きながら、自分の体の中からセルメダルを放出し、それをガメルに分け与えていった。

「ユーノス・スレイアを追うのも結構だけど、セルメダル、それにアンゴルモアも集めないとね」

「分かってるよ」

メズールの言葉にカザリが答えると、カザリは残り全ての警官と止

まっていたパトカーを自分の手から巻き起こした突風で吹き飛ばして行った。

そして、ガメルが引き寄せたパトカーの上に乗ると、次は自分が作戦を実行すると主張してきた。

「今度は僕がやる。きっと簡単だよ。人間たちは変わったけど、その欲望も変わった。とてつもなく大きく、底なしにね――――――」

カザリは一体どんな方法で人間の欲望を掻き立てると言うのか――――――

その頃、第97管理外世界「地球」の日本。

その中心都市東京の練馬区に、哀れにもこのカザリの標的となってしまう少年がいた。

「ははははは！」

間違ってもこの少年ではない。

ちなみに、今漫画を読みながら少ないお小遣いを元手に肉まんを買って帰ろうとしているのは、〇×小学校に通う五年生、『野比のび太』と言う少年だ。

成績は常にドベ、運動神経もまるでない典型的な馬鹿にされがちな自称“世界一不幸な少年”。

そんなのび太は漫画に夢中のあまり前をおろそかにしていると、目の前にあった何か大きなものに頭をぶつけてしまう。

「ぐ・・・いてて・・・うっわ!!」

不審に思いながら目を見てみると、そこ居たのはのび太にとっての天敵の様なものであり、周りからはジャイアンと言う呼称で子供たちから恐れられている存在、同じ○×小学校五年生、「剛田武」であった。

武はのび太が持っている肉まんと漫画を蛇の様な眼つきで凝視すると、徐に言う。

「のび太・・・美味そうなもん食ってるじゃんか・・・」

「じゃ、ジャイアン!!」

「おまけにそいつは新しい漫画か?ちょうどいい、俺に貸せよ」

「い、嫌だよ!じゃ、ジャイアンに貸したら二度と帰って来な・・・」

と、後ずさり気味にのび太が拒否の姿勢を見せると、武は強引にそれを奪おうと襲い掛かってくるのであった。

「いいから貸せっつてんだろ!!」

「ぎゃあああああ!!」

のび太は武の襲撃を受け、すっかりボロボロとなってしまうと、持っていた漫画も少ないお小遣いで買った肉まんも根こそぎ武に奪われてしまったのであった。

「序でにこいつも貰っておくぜ。はははは！」

高らかに笑いながら人様のものを強奪する武。

のび太は地面に横たわり、舌を出しながらぼろぼろの状態で呟く。

「な・・・何でこうなるの・・・！！」

だがこの時、のび太も武も、そしてユーノ自身も気づいていなかった。

まさか今回の標的が皮肉にもあの物欲の強い剛田武になるとはと――――――

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

少し時間は遡って再び機動六課司令室。

ユーノはヴィヴィオを含めて全員が注目する中で、今回自分に備わった未知なる力、完現術と呼ばれるものに関して詳しい説明を始める。

「“完現術（フルブリング）”とは、一護さんや織姫さん、茶渡さんが使っている特殊な力の事だよ。」

「え？一護さん達が・・・・・・だけど一護さんは死神じゃ・・・」

思わずそうツッコミを入れたくなるなのは達だが、ユーノは落ち着いた様子で次のようにつづけた。

「一護さんの場合、ある経緯があってね・・・死神の力と完現術の力が合わさったものなんだよ。で、完現術ってものを知ってもらう上で・・・・・一つ僕がその能力の一端を見せてあげるよ。そうだな――――――例えば」

ユーノは実演を踏まえての完現術を説明するちょうどいいものを探していると、机の上に置かれていたオレンジジュースのコップを手に取り、それを見せながら口にする。

「今、ここに出されたジュース。これを“手や魔法を使わないで口に運ぶ”ことってできる?」

「え?手を使わずに・・・ですか?!」

一同はそれを聞いた途端呆気にとられたような表情を浮かべ、一部は真剣に頭を使って考え込んだりしていたが、暫くしてからヴィヴィオが口を開く。

「そ、そんなの無理だよパパ。幾らなんでも手を使わず、況して魔法も使わないで飲むのなんか・・・」

「足使っても届かないっすよ!」

鬼太郎はそう言いながらコップを足の裏を器用に使って持とうとするが、やはり無理であると確証する。

「はは♪困惑してるみたいだね。では――――――僕がその方法を

実演するね」

「？」

行っている意味がよく分からないでいたなのは達だが、ユーノはここで一度深呼吸をして精神を統一すると、徐にジュースの入ったグラスに手を乗せる。

「上手くいってほしいな――――――」

すると、ユーノが手を乗せてから暫くして、グラスの中に唐突に光り輝くものが出現し、ユーノスはその光景にを目を凝らす。

「（何だ・・・あの光は――――――――――・・・！？）」

と、その時。

「「「「！」」」」

「「「「え！」」」」

一同はグラスの中のジュースが何もしていないのに、勝手に宙に浮かび上がると思った瞬間、それがまるでユーノの口の中に吸い寄せられるように飛び込んでいく光景に目を疑った。

ユーノは吸い込まれたジュースを飲み干し、グラスの中に残ったのは氷のみとなった。

一同は驚愕のあまり絶句し、暫くの間沈黙が流れた。

そして、徐になのはが目を見開きながら言葉を発した。

「何・・・どうなってるの！？」

「ジュースが・・・店長の口の中に一人で吸い込まれていった・・・！？」

すると、そんな驚きばかりが頭を支配するなのは達に一人冷静な様子でこう言った。

「・・・今のは、“グラスの中のジュース”の“魂”を引き出して“それを飲み込む手伝い”をさせたんだよ」

「・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・・・・・！？」

一瞬ユーノの言葉を聞き間違いではないかと錯覚するなのはだが、ユーノは革新的な事を口にする。

「“完現術”とは、“物質”に宿る“魂”を引き出して使役させる事さ」

「？」

ユーノを言葉を聞いた後、ユーノスも含め一同（恋次達死神組はある程度理解していた）は顔を見合わせ目を点にする。

ユーノはそんなメンバーの様子を見た後、仕方ないとばかりの表情を浮かべる。

「意味が分からないって顔してるね。ま、それも当然か。じゃあ訊くけど、みんなは魂を持っているのが生物だけだと思っているのかな？」

「え・・・ち、違うんですか？」

「この世界のありとあらゆる物には魂が在る。動物や草木だけでない。魂の質量は小さいけど、電柱だったり椅子だったりそれぞれに魂を持っている。使い慣れた道具を使う時、普段の自分よりも高い能力が発揮できると感じた事は無い？それはその道具の“魂”を使い手が理解したって事だよ。なのは達の場合はＡＩ機能が搭載されたデバイスだから、実感しにくいなんてこともあるかもしれないけど、要はそう言う事。」

「魂を・・・理解する・・・！」

思わずそう言葉を復唱するギンガ。

「うん。物の魂には元来、使い手を助ける力が備わっている。完現術を使うもの、完現術者（フルブリンガー）はそれを引き出して自分の魂でブーストをかけて大きな力にする事が出来るんだ。アスファルトの魂を引き出して反発力の補助をさせて高くジャンプする事もできるし、液体なら今みたいに自分から口の中に飛び込ませたり、足元を支えさせて水の上に立つ事が出来る。そして――――――自分に相性の良い使い慣れた道具なら、その『形』そのものを変える事ができる。」

「形を？」

フェイトが疑問符を浮かべながらそう言うと、ユーノは一自分と護や織姫の例を取り上げる。

「例えば、一護さんなら死神代行証を変化させて死神化したり、織姫さんだったらヘアピンを盾舜六花として使ったり、僕だったらユーノス元帥の結界印で変身する事。ユーノス元帥。」

「・・・ああ」

ユーノスは一瞬考え込んだ後、ユーノに言われた通り亜空間から結界印を取出し、それをユーノに手渡した。

ユーノはその場に立ち上がると、真剣な眼差しとなって、全員が注目する中結界印の二人を開放し、完現術を発動させる。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

「変身」

その途端、ユーノの身体が光に包まれ一同は思わず目を瞑ってしまう。

そして、目を開けた途端ユーノはメガネをはずした長手袋・襟の長いコート・スラックス・ブーツと、全身をくまなく覆う防護服を身に纏った姿となり、なのは達はその姿に目を疑った。

「・・・・・・な・・・・・・・・」

「ほ、ホンマに・・・・・・・・」

「変身しちゃった・・・・・・・・！」

実演を踏まえ、一同が取り敢えず完現術と呼ばれるものの存在を理解できたことを確認すると、ユーノは変身を解いて結界印をユーノスに返還し、飄々とした笑顔で言った。

「・・・こういう事かな♪」

そして、完現術に関する説明会が終わり、仕事を終えるとユーノ達は寮へと戻るが、ここで問題となるのはユーノスが何処で寝るという事だったが、意外にもユーノスはユーノとそれなりに行動を共にしていたことから、ユーノの部屋で寝ると言いだし、ユーノもそれに賛同した。

よく話し合った結果、ユーノスのベッドは以前ユーノがフェレットだったときになのはの家で使っていたバスケットと言うことで妥協した。

だが、なのは的には少々不満もあった。

と言うのもなのはにとってこのバスケットは今でもユーノのものであり、自分の部屋に置いて置きたいという気持ちも強かったのだが、ユーノの説得で仕方なく貸し出すこととなった。

ユーノスはバスケットの中に入ると、居心地よさそうな様子だった。

ユーノは寝間着に着替え、ユーノスの居心地よさげな様子に安堵した。

「どうですか？昔の僕の寝床は？」

「悪くない。と言うか、満足とも言っていい。」

「あはは。それは良かったです。なのはが時々手入れしてくれてるおかげかもしれませんね。」

「そうだな・・・・・なぁユーノ」

「何ですか？」

「お前も・・・元・魔導師・・・それも俺と同じ結界魔導師だったんだよな」

「え・・・あ、はい・・・」

ユーノスがユーノにそう尋ね、素直に回答に応じたユーノだったが、直後ユーノスはユーノに対して申し訳なさげな顔でこう言って来た。

「本当に・・・お前やみんなには感謝している。ただ、俺の所為でお前に危険な目に遭わせてしまったとなると・・・」

「ユーノス元帥・・・」

思わず自分のそれと比較してしまうユーノ。

「それに・・・これはまだ俺の憶測にすぎないのだが、今回現れたこれまでのヤミーは以前俺達のとは全然違うんだ。何と言うか・・・あれはきっと魔法でも死神の力でも倒せないだろう。」

「え？それってどういう・・・」

「詳しくは調べない事には・・・ただ・・・現時点において、ヤミ

ーを・・・あるいはグリードを倒す力を持っているのは恐らく・・・ユーノ。お前だけだ」

「僕が・・・グリードと・・・！？」

その言葉を聞かされ、思わず目を開いてしまうユーノ。

そして、ユーノはそんな言葉を聞かされたあと、自分の掌を徐に見つめると、それを力強く握りしめ何処か決意に満ちたまなざしをユーノスに向け、ユーノすもまたそれに応えるような瞳を向け、その日はそれで話を終え床に就くのであった。

◇

〈ジャイアンＳｉｄｅ〉

さて、オトシブミヤミーを倒してから二日経った日、今回の舞台であり先ほどの時間軸でもある第９７管理外世界「地球」の東京では相も変わらずジャイアンこと、剛田武が悪さを働かせていた。

「ひひひひひ」

「う！」

「美味そうじゃん！」

「じゃ、ジャイアン！」

武はクラスメイトで自分と同じぐらいの小太りの少年からアイスキャンディーを強奪。

「ふんふん・・・・・・わあ！」

「ふふふふふ」

その後は別なクラスの子からハンバーガーを奪い取った。

そして、公園の方に行くとそこで最新型のラジコンカーで豪遊する、いつもつるんでいることが多い狐顔の少年、骨川スネ夫を目撃する。

武はゆっくりと彼の方へと近づいて行くが、スネ夫自身はまるでその事に気づかずラジコンカーに夢中であった。

「ふふ・・・はは・・・やっぱりいいよね、最新のラジコンは！」

と、その時だった。

「スネ夫君♪」

「ギク！」

背筋に寒気が走り、徐にスネ夫が振り返ってみると、ブランコに座っていた武が悪意に満ちた表情でこう言った。

「それ新しいラジコン？」

スネ夫は結局為す術もなく、無理矢理買ったばかりのラジコンを奪われてしまい、被害に遭った子供たちは自然と涙を流しながら集まってきた。

「ジャイアンにアイスクリーム盗られた！」

「僕はハンバーガー／／／」

「僕は買ったばっかりのラジコン／／／」

スネ夫たちはお互いに武からの被害を口にすると、悲しみを共有するために滝の様な涙を流すのであった。

「「「うわああんんんんんんんんんんん！！！！！！！！！！！！！」」」

◇

〈のび太Ｓｉｄｅ〉

さて、一方でここにも悲しむ少年がいる。

そう・・・自称世界一不幸な少年野比のび太である。

のび太は自宅勝ってくると、部屋に直行し、帰りを待っていたのび太の親友であり２２世紀の未来からやってきた「特定意志薄弱児童監視指導員」の肩書きを持つ全身青の耳の無いネコ型ロボット、「ドラえもん」の前で泣き始める。

「うわあああああああん！！！！！僕は、何て不幸な少年なんだあああ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

のび太は割と本気のつもりで涙を流しているが、一方のドラえもん

の方は呆れ顔と言わんばかりの表情でそんなのび太を見ながら腕組みをする。

「大袈裟だよ。毎度の事だけど、偶にはガツンと一発やれないの？一方的にやられてばっかりじゃ流石の僕も面倒見きれないね。」

「そんなこと言わずに何とかしてよドラえもん／／／僕達、親友でしょ？」

「いっくら親友だって言っても、こればっかりは聞けない！大体、あのおやつは僕と君の少ないお小遣いで買ったものだったんぞ、ううううう／／／／／／／」

ドラえもんはそう言いながらなけなしの小遣いが無残にも消え失せてしまったことの方に涙を流し、ばつの悪そうな顔でのび太は謝る。

「そ、それは悪かったよ・・・だからさ・・・」

のび太はこの期に及んでドラえもんを充てにしようとしていたが、今回のドラえもんの怒りはかなりのものだった。

「君だけの事ならいいさ！！あれは僕のおやつでもあったんだぞ！！！なのに君がジャイアンなんかに！！！」

「ドラえもん、本当にごめんよ！僕が悪かったよ！でもさ、大体よく考えてみたら悪いのはジャイアンがあまりに欲張りだからだよ！全てはジャイアンが強欲なのがいけないんだ！今に見てろジャイアン・・・そのうち天罰が下りるに決まってる！」

そう言ってのび太は全ての最悪の元凶は武の欲がいけないと罪をな

すりつけるような言い方で誤魔化したのであった。
だがそれは、あながち間違いでもなかった――――――

◇

〈ジャイアンＳｉｄｅ〉

その日の夕方、武は空き地の土管の上で、クラスメイトから奪ったおやつを頬張りながら漫画やラジコンで悠々自適に過ごしていた。

「へへへへへ！！」

武は漫画を読みつつ、ラジコンのコントローラを手に取り、最新型のラジコンを操作する。

「すげえすげえ最高じゃん！！漫画もラジコンも、食い物も、すべて俺様のもの！このジャイアン様のものだ！！」

そう言って欲望を丸出しにする武だったが、直後そんな彼の耳に奇妙な音が聞こえてきた。

「ん？何の音だ・・・・・・」

武は耳を澄ませてその音の正体を確かめようとする。

どうやらその音とはコインかメダルを数枚手に持った感じのものだった。

と、その時武の目の前に唐突にセルメダルを持ったカザリが現れ、

武は思わず声を上げて腰を抜かした。

「うわああ！！」

「ふふ」

カザリは不敵な笑みを浮かべながら武の方へと近づき、武はまるで母親を恐れる時と同じように後ずさりしていく。

「なななななな何だよお前・・・／／／／／／」

「その欲望・・・解放しろ」

カザリはそう言いながら、武のおでこにセルメダルを近づけ、その途端投入口が出現し、徐にそれを投げ入れた。

「ああああAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！」

セルメダルの投入が完了すると、カザリは何処へなりとも姿を消してしまい、代わりに武はその影響で白ヤミーに寄生されてしまい、自我を失い顔の表面や腕のあちこちに白ヤミーのとしての特徴が現れた。

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！」

白ヤミーに寄生された武は舌を舐めまわすと、空き地から姿を消し何処へなりとも去っていった。

翌日。

東京都の小学校・中学校に給食を送り届ける配送サービスセンターに止まっているトラックに乗り込もうとしていた運転手が、荷台の方から物音を聞き取り、確かめに行くと、そこには白ヤミーによって欲望のままに暴走した武が給食を貪り食い尽くしていた。

「うわっ！なんだ、君は！？おい、何やってんだ！おい！」

運転手は武の行動を止めようとするが、途端武は邪魔をしてきた運転手を普段から考えもつかないほどの力で投げ飛ばした。

「ぐあああああ！」

「のああ！」

運転手は脳震盪を起こすと、そのまま気を失ってしまい、武はその後も際限なく給食を食べ続けた。

◇

〈のび太Ｓｉｄｅ〉

さて、そんな武の身に起こっていることなど一切知る由もない少年、のび太は母親にたたき起こされるとパンを加えた状態で勢いよく家の中から飛び出した。

「行ってきまーす！遅刻遅刻！！」

彼は学校でも有名な遅刻魔であり、その都度担任の先生からキツイ御叱りを受け、廊下に立たされてしまう事がある。

しかも悪いことに今週に入ってもう四日連続で遅刻しているため、今日遅刻したら五日連続・・・もう後がないのである。

のび太は全身全霊の力を振り絞って何とか学校に到着し、駆け込むように教室の中へと入り込んだ。

「ふう～～～間に合った・・・・・・」

全身汗だくとなったのび太の耳に、ちょうど始業のベルが鳴り響く。安どのため息をつきながらのび太は鞄をおろし、自分の席に着席すると、そんな彼の横から女の子が話しかけてきた。

「あ、のび太さんお早う」

「あ！お早う、しずかちゃん！」

のび太が元気よく返事を返した相手は、のび太の好きな人であり、将来は結婚することになっている筈の美少女、源静香である。

のび太と違い、勉強もスポーツも何でもできるが、過度のお風呂好きと異常なまでにバイオリンが下手くそと言う欠点も抱えている。

まぁ・・・お風呂好きなのは別に欠点ではないのだが、取り敢えず静香は遅刻せずに済んだのび太にこう言った。

「今日は遅刻しないで済んだみたいね。」

「本当ほんとう助かったよ・・・今日遅刻したら、五日連続！先生

に怒鳴られるだけじゃ済まなかったよ・・・」

「これに懲りて少しは早起きする習慣を身に付けた方がいいわよ」

「は～い」

まるで母親のようにのび太を諫める静香の言葉に、のび太も恥ずかしながらに素直に返事をするのであった。

やがて、担任の先生が到着し、出欠の確認を始めた。

「剛田・・・剛田！」

先生はそう言っていつもなら教室にいる筈の武がその場に居ないことをめずらしがり、他のクラスメイトも同様の事を感じながら騒然とする。

「珍しいな、剛田は休みか・・・」

先生はそう呟きながら出欠表に赤で欠と記し、のび太・しずか、スネ夫の三人は小声でこう話していた。

「ジャイアンどうしたんだろう?」

「スネ夫さんは一緒じゃなかったの?」

「今朝迎えに行ったらいなかったんだよ。」

「そう言えば、武さんのところ・・・お父さんもお母さんも丁度町内の温泉旅行でいなかったのよね・・・」

「お陰で毎日毎日好き放題やらかしてこっちは困ってるよ・・・」

「どうせ風邪でも引いたんでしょ。いい気味だね！」

のび太とスネ夫はこの機会に武が休んでくれたことを大いに喜ぶが、これが大きな間違いだと気付くのはもう少し待ってからの事であった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、同じように地球の空座町にある黒崎医院に完現術が使えるようになったことを伝えに来たユーノ・スクライアと連れのユーノス・スレイアはユーノの師であり伝説の死神代行の黒崎一護にその旨を伝え、聞いていた一護や彼の妻の織姫、そして居候のぬいぐるみ、コンは大いに驚いた。

「え？完現術が使えるようになった・・・！？」

「本当なんですかユーノさん？」

「ええまぁ。どうやら、力を失くした僕にこの結界印が答えたようでして・・・運命と言うか何と言うか、神様はどうやら僕にまだ戦わなければならないって言ってるように思えるんです。」

ユーノはそう言うと、一度目の前に出された紅茶を啜る。

すると、直後一護は何処か安堵した表情を浮かべてからユーノにこ

う言った。

「・・・そうか。でも良かった」

「え?」

「・・・ユーノ。お前は隠してたつもりかもしれねぇが・・・・・・正直、俺は力を失くしたお前を見ていられなかった。」

「・・・・!」

一護の言葉に思わず絶句するユーノ。

一護はそんなユーノに彼が心の奥底で思っていたことを自分の以前の経験から踏まえて更にこう言って来た。

「お前は俺とそっくりなんだ。戦いたかったんだろ?自分の力で周りのみんなを、護れないことが辛かったんだろ?」

「一護さん・・・・・・」

「隠す必要はねェさ。そう思ってこそのお前なんだ。そうだろ、織姫?コン?」

「うん。私もずっと同じこと思ってました。私だけじゃない・・・石田君も茶渡君も、コン君も・・・・・・なのはさん達もきっと」

「織姫さんも・・・・・・・」

「まぁ。なのは姐さんの場合、それでもやっぱしおめぇには戦って

欲しくないと思ってるところもあると思うが、少なくとも――――――戦わないで不幸になるくらいのおめぇを見てることの方がよっぽど辛いはずだぜ。」

「！」

ユーノはコンの言葉を聞いた途端、本当に何も言えなくなってしまった。

確かになのはは、自分が積極的に戦おうとすることをあまり良しとせず、寧ろ戦って欲しくないという気持ちを抱いていることは知っていた。

だが、自分が戦わなくなって早一年・・・なのはは以前にも比べて自分に対して罪悪感の様なものを抱いている、そんな気にもなっていた。

それは恐らく、コンが先ほど言ったようなもので間違いはないのであろう。

すると、そんなユーノの横でクッキーを齧っていたフェレット姿のユーノスが口を挟んできた。

「ユーノ。この者たちの言ってることは正論だと俺も思うぞ」

「ユーノス元帥・・・」

「お前の過去を聞かされて、俺も似たような感覚を覚えた。偶然とは言え、お前が俺を助けようとしたことで自身の完現術に目覚め、こうして人々からグリードとヤミーからの脅威を退けている。それ

に、前にも言ったと思うが、グリードとヤミーを倒す力を持っているのは現状ではお前だけのようだからな。」

「・・・・・・・・・」

ユーノはユーノスの言葉を聞くと、手に取った紅茶を眺めながら自分の顔を覗き込む。

そんなユーノを見ながら、最後に師匠・一護は言った。

「お前はお前のやりたいようにやればいい。それで、もしもその邪魔をする奴がいたのなら、そん時は・・・遠慮なく俺達に言えよ。その為の仲間だろ？」

「・・・・はい。ありがとうございます」

ユーノは和やかな表情で一護やこの場に居るもの全員にそう伝えると、聞いていた一護も織姫達も柔らかい笑みを浮かべるのであった。

◇

〈のび太Ｓｉｄｅ〉

光陰矢のごとし。

時間はあっという間に過ぎていき、給食の時間がやって来た。

のび太達は給食係から給食を受け取ると、自分の席について食事にありつく。

そんな時、静香はふと給食時間ですらやってこない武に疑問を抱いた。

「武さん、本当にどうしたのかしら・・・」

「うん。まさかあのジャイアンが給食の時間にまで来ないなんてね・・・」

「これは今日あたり大雪でも降るんじゃないの?」

そんな事を考えながら、三人は給食を食べるのを再開する。

と、その時教室の外からかなり狼狽した様子の先生の声が聞こえてきた。

「ご、剛田!君は一体何をしてるんだ!?」

のび太達は一瞬耳を疑った。

「え?ジャイアン?」

「なんだ。やっぱり給食はしっかり食べに来てるんじゃん。全く食い意地だけは立派だよ・・・」

呆れた様子でそう口にする内心ガッカリしているスネ夫だが、静香はどうも様子がおっ貸しいことに逸早く気づく。

「あら?ねぇ、何か様子が可笑しいわ!」

静かに言葉に二人が首をかしげつつも教室の外を覗くと、目に映っ

てきたのは信じられない光景だった。

なんと、自我を失った武が隣のクラスから強奪してきた給食の籠を抱えた状態で教師たち数人に押さえつけられているという光景だった。

「ぐあああああ!!!全部食わせろ!!!」

「やめんか剛田!!それはいかん!!」

必死で止めようとするのび太達の担任と他のクラスの教師。

そして変わり果てた武の驚くばかりのび太達。

「じゃ、ジャイアン!?」

「え!何、どうなってるの!?一体何があった訳!?」

「ぐあああああああ!!」

「「「「うわあああ!!」」」」

その時、武は自分を押さえつけていた教師四人を人間離れした力で吹き飛ばし、教師たちは全員床に叩きつけられる。

「「「先生!」」」

思わずのび太達は倒れた先生の元へと駆け寄り、困惑した様子でしずかは武に訴えかける。

「武さん！どうしたの！！先生にこんなことするなんて！」

だがその時、しずかの言葉を聞いた瞬間武は瞳孔を黄色に光らせ、それを見た瞬間しずかもそしてのび太とスネ夫も純粋に恐怖を感じた。

「！」

「し、しずかちゃん・・・逃げよう・・・！」

「うん！のび太の言う通りだよ・・・あのジャイアン・・・目がいつもと全然違う！」

三人がいつもとは全く違う根源的な恐怖を抱かせる武を見つめていると、武は舌を舐め回し、三人に向かって突進してきた。

「もっと・・・もっとよこせ！！！」

「「「わあああああああああ！！！」」」

「全部・・・俺様のものだ・・・！！」

三人は教室から飛び出すと、武から只管逃げることを考え学校の外へと飛び出して行った。

◇

〈ユーノSide〉

そうして地球に異変が起き始めたことはすぐに空座町の一護の家に

いたユーノとユーノスにも感じ取られ、二人はヤミーの気配を感じると目の色を変えた。

「「！」」

「ユーノ？」

「どうした。血相変えちまってよ・・・」

状況を理解できていない一護とコンが訝しげにそう尋ねようとすると、ユーノは険しい表情で隣のユーノスに尋ねる。

「これは・・・まさか・・・」

「ああ。ユーノ。来い。」

「はい！すみません一護さん、どうやらこの近くにヤミーが現れたようです！」

「え！？」

「何だと！」

「場所は・・・・・」

ユーノはそう言いながら、ヤミーの反応が検出できた地図を表示させ、そのポイントを確認する。

「ここからそう遠くないぞ。早くしないと街の人々に危害が及ぶ」

「そう言う訳です。僕はこれで失礼します」

ユーノは一護達にお辞儀をすると、一護達も状況を理解し、真剣な眼差しとなる。

「分かった。気をつけろよ、ユーノ」

「頑張ってくださいね、ユーノさん」

「はい。紅茶、美味しかったですよ♪」

織姫にお礼の言葉を残すと、ユーノは靴を履いてユーノスと共に外へと駆け出して行った。

コンはそんな似た者同士の二人に激励の言葉を残した。

「よっしゃ！バッチし決めて来い！」

こうして、ユーノはこの後あの世界的に有名な国民的ネコ型ロボットと対面することになっていくのである。

◇

〈ドラえもんＳｉｄｅ〉

その頃、その国民的大スターの猫型ロボットドラえもんはと言うと、何も知らない状況で呑気に近著の商店街で買って来たどら焼き堂の特売御どら焼きを食べてご満悦の様子であった。

「うふふ。どら焼きの特売に間に合ってよかった♪」

と、その時どら焼きを食べるドラえもんの後ろから聞きなれた声が聞こえてきた。

「ど、ドラえもん!!」

「ん?」

ドラえもんが不思議に思いながら振り返ると、そこには息を荒立てた学校にいる筈ののび太、しずか、スネ夫の三人が走ってきたのだ。

「のび太君。しずかちゃんにスネ夫君も。学校はどうしたの?」

「そ、それどころじゃないんだよ!ジャイアンの様子が可笑しいんだ!」

「え?ジャイアンの・・・」

「と、兎に角目が凶暴って言うか何と言うか・・・自分の欲しいものなら容赦ないって感じになってるんだよ!!」

「先生がその所為で投げ飛ばされちゃって・・・!」

「ええ!!」

ドラえもんは話を聞くと、思わず口を大きく開けて驚いた。

と、その時のび太は後ろを振り返った途端自我を失った武が近づいてくることを伝える。

「あ、来た！！」

ドラえもんが前方に目を凝らすと、確かにのび太達の言う通り欲しい者の為ならば容赦ない性格となった武が近づいてくるのが分かった。

「よこせ・・・よこせ！！！」

「じゃ、ジャイアン！！」

「ね！凶悪そうでしょう！」

「ど、ドラえもん！早く何とかしてよ！！」

「な、何とかと言われてもですね・・・！！」

唐突な事にいつもながら頭が回らないでいるドラえもんは適当に四次元ポケットの中をさ漁り出す。

と、その直後凶暴な眼つきの武が四人の元へと接近してきた。

「ぐあああああああ！！」

「ひえええええええ！！と、取り敢えずタケコプター！！」

「あ、はい！！」

スネ夫の言葉を聞き、ドラえもんはポケットから第一話で一番最初に浸かった秘密道具、タケコプターを人数分取り出した。

「“タケコプター”！」

「ぐあああああああああ！！！」

四人はタケコプターを頭につけると、電源を作動させ、間一髪のところで空へと回避することに成功した。

武は空へと逃げて行った四人を仰ぎ見ながらそんな四人の跡を追いかけていく。

ドラえもんは変わり果てた武の姿に驚きながら、のび太達に尋ねる。

「一体何がどうなってるんだ？ねぇ、昨日ジャイアンを見た時はどんな感じだった？」

「どうって・・・いつもみたく僕は昨日漫画とおやつを盗られた！」

「僕は買ったばかりのラジコン！」

「いつもと変わらないようだ・・・だけど今日のジャイアンは何か恐ろしいモノに憑りつかれてる気がする・・・！」

「恐ろしいモノ！？」

「詳しくはジャイアンを調べない限り何ともならない！ここは、被害が出ないようジャイアンを裏山まで誘導しよう！」

「オッケイ」

ドラえもんの指示を聞き、四人は早速武を学校の裏の方にある裏山

と言う場所まで誘導し、武もそれにつられていった。

武は裏山に到着すると、周囲の木々を折ったりしながら唸り声をあげ、何かを欲するように暴れ出す。

そんな武の姿を木の陰に隠れて窺っていた四人。

「上手く誘導できたようだ。」

「だけどあれをどうやって止めるの?」

のび太はそう言いながら暴走状態の武の静止方法をドラえもんに持ちかける。

「ぐあああああ・・・俺によこせ・・・!!」

ドラえもんはいつにもなく真剣な眼差しを浮かべながらこう言う。

「何か邪悪なものがジャイアンの体の中に入ってるはずだ。だから、それさえ取り除ければきっと・・・」

確信にも似た様子でそう口にしたドラえもん。

と、その時しずかが何気なく辺りを見渡した時、武に近づいてくる人影を発見し声を上げる。

「あら?ねぇ、あの人誰かしら?」

「「「え?」」」

全員が注目する中、武の元に近づいてきたのは、ヤミーとグリードを唯一倒す力を秘めた元・翡翠の魔導死神で現在は完現術者であるユーノ・スクライアとその補佐を務める七大元帥ユーノス・スレイアであった。

ユーノスはユーノの肩に乗りながら、白ヤミーに寄生された武を見て言う。

「いた！ヤミーだ」

「え！？でも、この間と全然違う・・・ってか人間ですよ、しかも子供！」

「中にいるんだ。あれは“人間に寄生するタイプ”だ。」

「寄生？」

「寄生した人間の欲望を暴走させて、それをメダルにして溜めこんでいると言う訳だ」

ユーノスの話を聞き、ユーノはまじまじと白ヤミーに寄生された武を見つめる。

「あれは放っておけばまだまだ育つ可能性がある。その前にここで叩いておく必要がある。ユーノ、頼む」

「はい！」

ユーノはユーノスから結界印を受け取ると、自身の完現術を発動させる。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

完現術を発動させ、スレイヤーモードとなったユーノは、武に憑りついた白ヤミーを引きはがす為近づいて行った。

「おい！その子から出てこい！」

ユーノが変身した姿を目の当たりんした瞬間、ドラえもんたち四人は目を疑った。

「うわっ！」

「どどどドラえもん！？い、今の見た！！」

「変身しちゃったよあの人・・・それに肩に乗ってた動物が人の言葉を喋ってた！どどどどうなってるの！？」

「あ！武さんに向かって行くわ！」

しずかはそう言うと、全員にユーノに注目することを促し、そのユーノは武に向かって足早に近づいて行った。

「おい！」

白ヤミーに向かって言葉を投げかけるユーノ。

すると、それを聞いた瞬間白ヤミーは武の体を借りて、容赦なくユ

ーノに向けて負った木の幹を投げつけてきた。

「ぐおおおおおお！」

「わっ！」

ユーノが木の幹を躱すと、武は口を大きく広げて大音声と共に黄色に輝く光弾を発射し、ユーノを攻撃した。

「ぐあああああああああああああああ！！！」

「ぐっ！」

思った以上に強力な攻撃を使用する目の前の武に困惑するユーノと、あまりの光景に目を見開くのび太達。

「じゃ、ジャイアンの口から何かすんごいものが！！」

「ど、ドラえもん！」

「わ、分かってる！」

ドラえもんは大慌てでポケットの中のものを探りだし、役に立ちそうなものを取り出そうとする。

その間に、ユーノは武の攻撃をスレイヤーブレイドで回避しつつ、接近していき白ヤミーを追い出そうと奮闘するがやはり白ヤミーは出てこようとしない。

「おい！出て来いってば！戦えないだろう！」

防戦一方と化すユーノ。

ユーノスは木の上からこう言った。

「そいつは成長しないと出てこない性質がある。だがここで何としても引きずり出すんだ！」

「分かってるんですけど・・・この！」

ユーノにとってこれほどまでに戦いづらいヤミーは初めてだった。

一体どうすればこの少年を傷つけることなく中に居るヤミーだけを引きはがすことが出来るのかと思案する。

と、その時だった。

唐突に木の陰からタケコプターを頭に付けたドラえもんとのび太達三人が飛び出してきたのだ。

「「「ジャイアン！」」」

「武さん！」

ユーノは飛び出してきた子供を見た瞬間、思わず目を疑った。

「！子供！！それに・・・あれってまさか・・・！？」

また同じようにユーノスはこの場に子供がいるとは夢に思わず、危機感を感じた。

「何！」

のび太達はユーノと闘うジャイアンに向かいながら言葉を投げかける。

「止めるんだジャイアン！」

そして、徐にドラえもんは秘密道具を取り出した。

「“こけおどし手投げ弾”と“空気砲”！」

「あの、避けてください！」

しずかはそう言うと、音だけで一切の威力も持たないこけおどし手投げ弾を武の足元へと投げつけ、ユーノも思わず驚愕した。

「うわ！」

そして、こけおどし手投げ弾によって怯んだ武に向かってドラえもんが空気を砲を腕にはめて狙いを定める。

「ごめんジャイアン・・・・・ドカーン！」

ドラえもんは渾身の想いをこめて空気砲を武に向かって発射し、気絶させようと考えたが、武は直後口から光弾を発射し、空気砲をかき消した。

「ぐあああ！！！」

ドラえもんを始め、のび太達はこの光景に目を疑った。

「そ、そんな！」

「空気砲が通じない！」

「ぐあああああああ！」

武は自分に向けて攻撃を仕掛けてきたドラもんたちの方へと駆け出していく。

「危ない！」

「く！間に会え！」

声を荒げたユーノだが、その瞬間ユーノスも木の上から飛び降りドラえもんたちの方へと向かっていく。

直後、武は口を開けて光弾を発射。

「「「「うわあああああああ！！」」」」

ユーノとユーノスは四人の前に出るとユーノは体を盾にし、ユーノスは防御魔法を展開して攻撃から守ろうとした。

「「「く！！」」」

攻撃を何とか回避することに成功すると、ユーノはすぐに四人の安否を心配した。

「君たち、大丈夫!?」

「あ・・・はい・・・何とか・・・」

腰が抜けてしまい立つ事が出来なくなってはいたが、幸いにも怪我一つしていないのび太達。

すると、スネ夫は周りを見渡した時、武が居なくなっていることに気づく。

「あれ、ジャイアンは・・・」

「ハッ!まずい、逃げた!」

ユーノは武を取り逃がしてしまったことを深く後悔する。

ユーノスはユーノの肩に乗ると、冷静に対応を促す。

「ここからだとそう遠くには言って居ない筈だ・・・ユーノ」

「はい。」

ユーノはユーノスの言葉を聞くと、直ぐにミッドチルダの機動六課で待機しているなのは達に通信をつなぐ。

『こちらユーノ・スクライア。機動六課ロングアーチ、応答せよ』

ユーノからの通信を受けると、司令室で待機していたなのはは回線をつなぐ。

「こちら、機動六課ロングアーチ。スターズ1。高町なのは。ユーノ君、ヤミーは？」

「ごめん。取り逃がしちゃった。しかも相手は子供に寄生した新しいタイプなんだ」

『え！本当それ！？』

「うん。今、データを送るからそっちで広域スキャンをしてほしい。反応があり次第、連絡くれるかい？」

『了解。こっちの方は任せて。』

「ありがとう、なのは」

通信を終えると、ユーノはスレイヤーモードを解除し、結界印を元に戻すとユーノスに返し、ドラもんたちの方へと近づく。

しずかは恐る恐るユーノ達の素性を窺う。

「あ・・・あの・・・あなた方は一体・・・？」

「詳しいことは、後で話すよ。それより・・・君たちはドラえもんとのび太君たちでいいのかな？」

「え！どうして僕達の事を！」

「色々と君たちの事は有名だからね♪」

「は、はあ・・・」

ユーノの意味深な言葉に思わず言葉を漏らすドラえもんであった。

「あ！」

と、その時スネ夫はフェレット姿のユーノスの体にかすり傷が入っていることに気づく。

「大変！怪我してる！」

「ユーノス元帥・・・あなた・・・」

「すまない。無理をしてしまったらしい・・・」

申し訳なさそうな顔でユーノにそう言うユーノス。

「はぁ・・・ああ悪いけど、何処か手当てできる場所まで連れて行ってくれないかな？君たちのお友達の事について色々と話さないといけないし」

「じゃあ、僕のうちまで来てください！あ・・・えっと・・・」

のび太が名前の分からないユーノ達を見ながら困っていると、ユーノは柔かい笑みを浮かべて言う。

「ユーノだよ。ユーノ・スクライア。こっちのフェレットがユーノス・スレイア元帥」

「じゃあ、ユーノさん。ユーノスさん。僕達について来てください」

「ありがとう、ドラえもん」

ユーノはドラえもんとのび太達と一緒に一旦説明とユーノスの怪我の手当ての為にのび太の家まで運ぶこととなった。

そんな様子を、遠く離れた場所から観察者がいた。

破面魔導虚リリスである。

「ふふ・・・お呑気な坊やね・・・・・・あれでよく翡翠の魔導死神と呼ばれていたものだわ・・・だけど、これから面白くなりそうね・・・ふふ」

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

リリスの目を通して送られてくるユーノ達の動きを、アルハザードに拠点を置くスカリエッティはそれを見ながら満足げな様子で呟く。

「ふふ・・・今のところ非常にいいバランスだよ、プレシア」

スカリエッティは立ち上がると、机の方でセルメダルを積み重ねるプレシアの実の娘でありアルハザードの技術を持ってこの世に蘇ったアリシアと、それを見守るプレシアにこう口にする。

「力はあるが、新たな力に関してまだ知識と技術の乏しいユーノ・スクライアを・・・出現するヤミーとなんと、かの伝説の七大元帥のユーノス・スレイアが補完している。メダルとアンゴルモアが増えるのに、これ以上素晴らしい環境はない！」

「確かに、増え方は加速しているわね・・・」

プレシアがそう呟いた瞬間、アリシアが積み重ねていたセルメダルが崩れ落ちる。

「あ～あ～」

「気にしなくていいのよ、アリシア。」

「は～い」

プレシアは実の娘にはかなり甘い方であったようだ。

「リリスには、当分監視の方を続けてもらおう――――――さて！今日が誕生日の者は！？」

「あのね・・・えっと確か・・・総務に一人ね・・・」

プレシアは少々ケーキ作りに拘り本来の目的を忘れているのではないかと思えるスカリエッティに半分呆れているのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

「“お医者ごっこかばん”！」

ドラえもんとのび太達の計らいにより、ユーノスの怪我の手当てをするためにのび太の自宅に立ち寄ったユーノは、噂に名高い未来の

秘密道具の力で怪我が瞬く間に癒えたユーノスを見て思わず目を疑った。

「これでよし」

「へぇ～～～これが未来の道具か。流石に便利だね♪」

「ユーノさんはドラえもんの道具の事まで知ってるですか？」

「君たちの活躍は世界中で知れ渡ってる。勿論、知らない人間も多いけど・・・僕ら機動六課の人間は割と知ってるから♪」

「機動六課って・・・なんかの秘密組織みたいなものですか？」

のび太が何気ない疑問をぶつけると、ユーノはしまったとばかりの表情を浮かべ回答に戸惑ってしまう。

「あ・・・あんまり口にするのもどうかと思うけど・・・うん、そんなとこだね。言っとくけど僕らは別世界からやって来た魔法使いなんだ。」

「「「「魔法使い！？」」」」

思わず声を揃えて復唱する四人。

「正確に言えば、元・魔法使いだけど♪」

「どういう事ですか？」

スネ夫がそう尋ねると、怪我の癒えたばかりのユーノスが代わりに

答える。

「・・・この世界にはな、君たちの知らない数多くの世界が無数に存在している。俺達魔法使い、もとい魔導師はその組織である時空管理局に所属し、魔法の力を使って平和と秩序を守り抜いてきた。俺のこの姿も、変身魔法によるものだ」

「そうなんですか・・・じゃあ、空飛ぶホウキとか、魔法の絨毯とかもあるんですか!?」

実に昭和の子供が抱きそうな魔法のイメージでモノを言うのび太だが、ユーノは苦笑いを浮かべながら正直な事を言う。

「あはは・・・生憎空を飛ぶホウキも絨毯もないよ。空を飛ぶにしたって、ちゃんと魔力適正と免許ってものがいるんだ。勝手に空を飛んだりしたらそれこそ違反だからね」

「なんだか私達の思ってる魔法と違って現実的なんですね。」

「その台詞、待ち侘びてたよ♪」

しずかの言葉にユーノは飄々とした笑顔で言うのであった。

そのころ、ジャイアンこと、武は――――――

「もっと・・・俺によこせ・・・食い物・・・全部よこせ・・・!」

己の際限のない欲望に駆られ、街中を徘徊しながらそれを満たすところへと向かって居るのであった。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

さて、ユーノはドラえもんたちの事を機動六課で待機しているはやて達に逐一報告することにしたのだが、はやてはその報告を受けた瞬間子マックが破れるぐらいの大声を上げて驚いた。

「何やて！！！！！！！！！！！！！！！」

『う！は、はやて・・・鼓膜が破れるよ・・・』

「ほ、本物の・・・本物のドラえもんが！！！！！今ユーノくんのところにいるんやな！！」

「マジっすか店長！！あの青ダヌキが、あの青ダヌキが・・・！！」

鬼太郎が何回も青ダヌキと言う言葉を口にすると、聞いていたドラえもんは機嫌が悪くなりお決まりの言葉で訂正してきた。

「む！た、タヌキとは失礼ですね！！僕は２２世紀の技術が詰まったネコ型ロボットのドラえもんだ！！」

『その割にはネジが一本とれてるんじゃいの？』

「どっき！どうしてそれを！！」

浦太郎の言葉を聞いた途端、表情が青ざめる欠陥ロボット。

のび太達はすっかり唖然としてしまった。

「本当に僕達の事知ってるんだ・・・」

「て言うかこれが魔法文明の技術・・・」

常軌を逸した魔法文明技術に感心する様子ののび太とスネ夫だが、直後しずかは本題である武の事を思い出す。

「あ！そうだわ！すっかり話がずれていたようだけど、武さん・・・一体武さんに何があったのかしら？」

「ああ！そうだった・・・！そこを話さないとね。みんな、よく聞いてくれ。今回のヤミーの親はジャイアンこと、剛田武君だ」

『『『えええええええええ！！！！！！！！！！！』』』

ユーノの言葉を聞いた途端、司令室の前線メンバー一同は表情を凍りつかせる。

ユーノが説明を始めようとしている頃、そのジャイアンは今、おもちゃ屋を襲撃。

「ぐあああああああああああ！！！」

手当たり次第に自分が欲しいおもちゃを強奪しようと店内で暴れ回り、店員はそれを止めようとする。

「止めろ！！止めろと言ってるだろう！！！」

しかし、武は力圧しで店員を外へと吹き飛ばす。

「ぎゃあああ！！！」

周りにいる者は恐怖に怯える中、彼の妹であるジャイ子はそんな変わり果てた兄の姿を目の当たりにし、思わず声を上げる。

「お兄ちゃん、もう止めて！！いい加減暴れるのは止めてよ！！！」

「ぐあああああああああああああ！！！」

「きゃあ！」

しかし、武は妹の声も聞こえなくなっており、おもちゃ屋を襲撃した後、彼はそのまま本屋へと向かっていくのであった。

「お兄ちゃん！！！」

その場に膝をつき、泣き叫ぶジャイ子であった。

武が街中で大暴れをしている間、ユーノは武に起こったことをドラえもんたちに説明し、四人は口を揃えて言う。

「「「「ヤミー！？」」」」

「ああ。恐らく、あの少年の“物欲”に目を付けたグリードの一体がセルメダルを投与したんだろう。」

「そ・・・そんな・・・」

「ジャイアンが・・・・・・そんな恐ろしい奴に・・・」

「僕らはある危険な物質を回収するために機動六課を中心に異世界中を飛び回って、任務に当たってて・・・だけどその最中に、さっきのグリードって奴らが甦って・・・僕はそいつらを放っておくわけにもいかなくて・・・」

「そうだったんですか・・・・・・」

「ジャイアン・・・これからどうなるんだろう・・・」

武の身の上を本気で心配する四人。

と、その時機動六課のサーチャーにヤミーの反応が確認された。

「！ユーノ君！サーチャーに反応！」

「ヤミーが見つかったのか！」

ユーノ達は一斉に家の中から飛び出すと、反応が確認された場所へと急いだ。

武は駆けつけた警官でさえどうすることも出来ないぐらいに暴れ回っては欲しいものを強奪していると、更に欲望が暴走し目に映る人が持っている者ならば何でもいいという具合無差別に人を襲い始めた。

「うわあああああ！！助けて！！！！」

「ぐあああああああああああ！！」

ユーノ達が駆けつけた時、武は末期の症状に見舞われていた。

「「「ジャイアン！」」」

「武さん！」

「ユーノ。奴を引きつけろ」

「了解」

そう言うと、ユーノは懐から缶ジュースの形をしたメカを取り出すと、それを暴れる武の方へと転がし、武はそれを見ると缶の方へと惹かれていった。

「俺に・・・・・俺によこせ！！！！！！！」

武は缶にずるずる惹かれて移動し始め、やがて人気のない場所へとやってくると、缶は自然と動きを止め、武はそれに飛びついてプルタブを開けようとする。

と、その直後プルタブが開放されるや否や缶はジュースではなく蛸の形へと変形し、足を回転させて浮かび上がると武の顔面目掛けて墨を発射する。

「グあああああああ！！！！」

視界を奪われ大声を上げる武だが、この瞬間を窺っていたユーノとドラえもん、のび太、スネ夫の四人は四人掛かりで武を止めにかかる。

「「「ジャイアン！！」」」

「おとなしくしなって！」

ユーノ達が押さえつけている間に、しずかは前に飛び出すと武に食べ物を見せつける。

「武さん！ほら！ここよ！」

「俺に・・・！よこせ・・・！」

すると、その時武の体から成長段階にある白ヤミーが飛び出してきた。

ユーノはそれを見て、好機と判断する。

「いいぞ！このまま・・・！」

だが、そう思いかけた時だった。

四人は突然何者かによって武から強制的に身をはがされてしまった。

「「「「うわあああああ！！」」」」

そして、ユーノ達を押さった人物はしずかの持っていた食べ物を無理矢理取り上げる。

「きゃああ！」

「しずかちゃん！」

「何だ!?」

食べ物を取り上げたのは、破面魔導虚で人間態に擬態しているリリスだ。

「ほら。お食べ」

リリスは取り上げたバナナを武に放り投げ、武はそれを貪り喰らう。

ユーノスはそんなリリスに近づき、怒号を上げる。

「貴様・・・何者だ!?どういうつもりだ!」

「分からないのかしら。このヤミーはまだまだ成長するわ。」

「何!お前・・・ヤミーの事を知ってるのか!?」

「人並み以上にね。それにこれの何処に問題があるのよ?食ってるだけなら周りで誰も死なない。」

それを聞いた瞬間、ユーノ達の表情は凍りつき、スネ夫はその後こう尋ねる。

「じゃ、ジャイアンはどうなるのさ!?」

「フン。これは自業自得ね。いい?この子はヤミーの所為でこうなったんじゃないの。この子が持ってる欲望の所為よ」

「ジャイアンの・・・」

「欲望・・・！」

「欲望にまみれて死ねれば本望じゃなくて」

「そんな・・・！」

と、その時バナナを食べ終えた武の体に異変が起こった。

「うおおおおおおお！！！！！」

セルメダルが食欲によって増加し、ついに武の体が風船のように膨らみを見せ始め、それを見たユーノは目の色を変えた。

「！ダメだ・・・！ユーノス元帥！」

「ああ。」

「させないわ」

ユーノスは結界印を取出しユーノに手渡そうとするが、すぐさまリリスに妨害される。

「ぐあああ！」

「！ユーノス元帥！」

ユーノスはリリスの妨害を受け、地面に叩きつけられる。

ドラえもんを始めとする四人はユーノスの元へと駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか!?」

「しっかり!」

「ぐ・・・っ!」

すると、そんなユーノスと後ろのユーノ両方を見、リリスは不敵な笑みを浮かべながらこう言った。

「いい事。一つ覚えておくといいわ。別にあんたみたいな薄汚いネズミ、殺しても殺さなくてもどっちでもいいの。だけどネズミを殺されて困るのは寧ろあなたでしょ・・・ユーノ・スクライア」

「何?!」

「このネズミの持っている結界印がなくなれば、それこそ人間は助けられない。」

リリスはその言葉を最後に、忽然とその姿を消してしまい、スネ夫やのび太は驚きの表情を浮かべる。

「!消えた!」

「どうなってるの!?」

だが、驚いている暇などなかった。

武はバナナがなくなったのにも拘らず周囲にあるものを食べ物だと勘違いし、それを食らおうとしていた。

ユーノは慌てて武の元へと駆け寄りそれを阻止しようとする。

「やめろ！それ以上食べたら死ぬ・・・！」

ユーノが武の体を押さえつけようとすると、条件反射で武がユーノの身体を投げ飛ばす。

「ぐあああ！！」

「のあああ！」

そんなユーノの姿に何もできないでいるユーノスやドラえもんたちは歯がゆさを覚え、その場から姿を消したリリスもまた、別な場所から見下した様子でユーノを観察する。

「あらら・・・人助けの事となると馬鹿になるようね・・・」

だがそれでもユーノは傷つくことに一切の恐れも抱かず、武を止めようと躍起になっていた。

ユーノスは見ていられなくなると、ユーノに大声で叫んだ。

「ユーノ、止せ！お前の方が先に死ぬぞ！」

ユーノスがそう言った直後、ユーノは武の力に圧倒されまた投げ飛ばされてしまうが、ユーノは折れずに立ち上がろうとし、その最中脳裏に浮かんできた内戦の事を思い返し、決意の籠った瞳を宿し言う。

「それでも・・・それでも・・・何もできないよりは・・・」

そして、覚悟を決めて武のもとへ突っ込もうとした直後、またしても武の体に異変が起きた。

「うわわわわっわわあああ！」

突然武が大声を上げて苦しみだしたのだ。

「ジャイアン！？」

「どうしたんだ！？」

「あ！見て！！」

しずかはそう言いながら武の方を指さすと、武の体から寄生していた白ヤミーが飛び出し、武を捨てるとそのまま成長し、ふくよかな体系が特徴のネコヤミーへと進化を遂げた。

「あ！」

「ヤミーが・・・出て来た！」

ネコヤミーは目の前のユーノを敵だと判断し、何のためらいもなく襲い掛かっていった。

ユーノスは現れたネコヤミーの特徴を捉えると、険しい表情を浮かべる。

「チッ！厄介なタイプだな！」

そんな事を言いながらも、ユーノスは結界印を取出し、抜群のコントロールでネコヤミーと交戦しているユーノへと投げつけた。

「ユーノ！」

ユーノは生身の状態でネコヤミーに蹴りを食らわせると、その隙に投げられた結界印を受け取り、スレイヤーモードへと変身を遂げる。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

スレイヤーモードへと変身を遂げたユーノは腰の逆刃刀を抜いて、ネコヤミーへと向けて走り出す。

「は！」

そして、そのままネコヤミーの腹部を斬りつけようとしたが、あまりに弾力質な皮膚なため、まるで逆刃刀が通じない。

「おっと・・・！嘘だろ・・・」

何度斬りつけても斬りつけても全て弾力のある皮膚に阻まれ決定打を与えられないユーノ。

ユーノは仕方なく逆刃刀を納めると、今度はツインブレイドによる攻撃で当たってみた。

〈Ｔｗｉｎ　ｂｌａｄｅ〉

だがそれでも結果は先ほどと同じ。

斬撃による攻撃はほぼ不可能と言うことが判明し、ユーノは思わず愚痴を零す。

「なんだ!?この体!」

ユーノは見た目にたがわず身軽な動きを見せるネコヤミーの攻撃に翻弄されながらも距離を取り、地面のコンクリートを完現術させて跳躍力を高めると、ネコヤミーに向かって飛び蹴りを食らわせる。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｓｈｏｔ〉

「はあああ・・・・は!」

すると、これは効果的だったのかキックを受けると同時にネコヤミーの体からセルメダルが放出され、ユーノは集中的にキックによる攻撃でネコヤミーを責め続ける。

ネコヤミーも負けじと光弾を放ってユーノを攻撃するが、そこは場数の違うユーノ。

軽くその軌道を読むと、再びネコヤミーにキックを食らわせ、ネコヤミーが地面に転がった一瞬の隙を突くと、ユーノは全神経を一度足へと集中させ、先ほど同様地面のコンクリートを完現術させ、空高く飛び上がった。

「はあああ・・・・・!!!」

空中に飛び上がると、その瞬間発生したスレイヤーオーラと呼ばれる3つのリングの中へと両足蹴りの状態で潜り抜けるユーノ。

「はあああああああああ！！！！！！！！！」

だが、リングを潜り抜ける最中何処からともなく飛んで来た突風とそれに付随した建物の破片がユーノの攻撃を妨害しようとし、見ていたユーノスやドラえもん達は目を見開いた。

「「「「「！」」」」」

「はあああああああああ！！！！！！！」

だがユーノはそんな事など一切構わずネコヤミー目掛けてスレイヤーキックを叩き込もうとリングの中を潜り抜け、そしてキックが決まったと同時に爆発が起き、ドラえもん達は思わずそれに息を呑んだ。

ユーノも地面に着地し、状況を確認すると、煙の中から見えてきたのはセルメダルはそれなりに放出しているがの未だ息のあるネコヤミーであった。

「！生きてる！？」

「どういう事！？」

するとそんな疑問に険しい表情のユーノスが答える。

「ユーノを邪魔した奴がいるんだ」

「えっ？」

ユーノスは周囲から感じ取った一体のグリードに向かって言葉を発した。

「カザリ――――――お前だな？」

すると、その時。

「ふん・・・ふふふふ」

ユーノスの言葉に反応してユーノ達全員の前に現れたのは、グリードの一体にして黄色のコアメダルを司る猫系幹部、カザリであった。

「久しぶりだね、ユーノス」

「な！」

「猫！？」

「あれは――――――」

グリードと１５０年ぶりの再会を果たす七大元帥と、初めてその姿をお目にかかる元・翡翠の魔導死神、そしてネコ型ロボットにその友達。

緊迫した雰囲気の中、カザリの登場でこの後どんな展開を迎えるのであろうか！？

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ一枚

ドラえもんと進化とジャイアン（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はついにこの小説にも姿を現した世界的大スター『ドラえもん』についてだ♪」

「『ドラえもん』は、藤子・F・不二雄による日本の児童漫画・SF漫画作品。勉強もスポーツも駄目でドジばかりの小学生「野比のび太」と、未来（22世紀）から来たネコ型ロボット「ドラえもん」の日常生活を描いたものだ。舞台となる時代は、基本は現代であるが、タイムマシンで過去や未来へも行き来する。」

「1981年時点での親や教師の感想には、『ドラえもん』は他の漫画・アニメと異なり、刺激的・暴力的なシーンが少なく健全であるといった意見がある一方で、「（『鉄腕アトム』、『巨人の星』と比較して）のび太は何もせず、楽をして夢を叶えているのは問題」といった批判的な意見も存在している。だけど、それでも知名度は日本を超え、世界中で愛され続けているアニメだ♪」

と、ここで今回の話を聞いて駆け付けたサムライ・ドラが意見する。

サ「とうとう出ちまったよ・・・おいらと姿が紛らわしいからやめろって言ったのに・・・しかもヤミーの親がジャイアンとは・・・」

ユ「まぁジャイアンは見ての通りの物欲の塊ですから・・・仕方ないのでは・・・」

サ「ねぇ、まさかとは思いますけどこのコーナーを通じてオイラと

あの出来損ないネコを合わせるなんてことしないでしょうね・・・？」

ユ「ないこともないと思いますけど・・・」

不安の拭いきれない二人であった。

魔導師図鑑ハイパー！

ドラえもんの存在を聞いたクロノ・ハラオウンの機嫌はよくなかった。

クロノは机に手を叩きつけ、怒りを露わにする。

ク「そんな馬鹿げたことがあってたまるか！！！」

クロノの迫力に後ずさりするフェイトとはやて

は「せ、せやからホンマなんやって・・・」

フェ「クロノも素直に信じようよ」

ク「誰が信じるか！誰が一瞬で世界中を行き来するピンクのドアの存在や、ましてやタイムマシンなるものを信じるか！！！！！」

途方もない現実主義のお堅いクロノだったが、そんなクロノに元にユーノが現れ徐に頭にあるものをつける。

ユ「じゃあ、これでお前も信じるだろ♪」

ク「何？」

その瞬間、クロノの頭に付けられたタケコプターのモーターが動きだし、クロノは外へと飛んで行った。

ク「あああああああああああ！！！！！コラフェレットもどき！！！！ここから下せ！！！！！」

ユ「落ちたら死ぬぞ♪ははははは！！！！！」

そんなユーノを見ながら、苦笑いを浮かべるフェイト、はやての二人であった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝

カ「そんな奴捨てて、どうだろう、ユーノス・・・僕と組まない？」

リ「人間なんて、一皮むけば欲望の塊よ。」

ユ「手が届くのに、手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。」

第１４３話　疑惑と暴食と救いの手

疑惑と暴食と救いの手（前書き）

ド「障害があったらのりこえればいい！　道を選ぶという事は、必ずしも歩きやすい安全な道を選ぶって事じゃないんだぞ」

疑惑と暴食と救いの手

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事

一つ、ユーノが自身の「完現術」を前線メンバーに披露する。

二つ、物欲を抑えられない男・ジャイアンこと剛田武にヤミーが寄生。

そして、三つ。ユーノとユーノス達の前に新たな敵、グリードの一人が現れた。

ユ「はあああああああああああ！！！！！！！！！」

ユーノス「カザリ――――――――お前だな？」

カ「久しぶりだね、ユーノス」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ一枚

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

ネコヤミーと対峙していたユーノと、それを傍らで見守っていたユーノス、ドラえもんたちの前に突如として現れたグリードの一対、カザリは不敵な笑みを浮かべながらユーノ達を凝視。

見たことのない怪人の姿を目にし、途方もない恐怖を感じるドラえもん達。

「ど・・・ドラえもん・・・あれ何！？」

「わからない・・・！だけど、途方もなく・・・危険な気配を感じる・・・！」

「まさか・・・あれがユーノさん達が言ってた、グリード！」

「え！じゃあ、ジャイアンをヤミーにしたのはあいつだってこと！？」

それぞれがそのような事を口にし、真意の全くつかめないカザリの行動に目を光らせる中、カザリは次元世界を渡り歩くうちにうわさに聞いたユーノの力と、１５０年の因縁を持つ七大元帥ユーノスの方に目を向け続ける。

すると、同じようにカザリを凝視警戒していたユーノスが口を開く。

「コソコソ付き纏っているとは、お前らしいな・・・そう言えば、人間に寄生するヤミーはお前のお得意だったか。」

するとその時、ネコヤミーは隙を見ると一度セルメダルとなり、横

になって倒れていた宿主である武の体へと入り込み、武は再び規制されてしまった。

「ぐおおおおおおおおお！！！」

「あ！ジャイアンの体にまた！」

スネ夫は武の身の上を心配する。

武はネコヤミーに寄生されると、先ほどまでの物欲から一変し、彼の根本的な欲でもある食欲が暴走し始め、武は辺りを徘徊としながら食べ物を求める。

「あ・・・食い物・・・もっと、食い物を・・・！あっ・・・唐揚げ！」

意識のはっきりしない武は周囲にあるもの全てが食べ物に見えてしまっていた。

しずかはその現状を冷静に分析する。

「物欲から完全に食欲の方へ考えが変わってるみたいだわ！」

そして、そのまま武はその場から退散しようとする。

ユーノは咄嗟に武の後を追いかけようとした。

「あっ・・・待て！」

だが直後、ユーノの行動を止めたのはカザリであった。

「ふん」

カザリは右手から突風を発生されると、ユーノに大きなダメージを与える。

「ぐあああああああああ！！！」

「「「「ユーノさん！」」」」

ユーノを心配し声を上げるドラもんたち。

カザリは徐にユーノの方に目を向け、不敵な笑みを浮かべる。

ユーノスは倒れたユーノへ近づくと、ユーノの前で防御を展開しながら言う。

「く！ユーノ、気をつけろ！そいつは取り戻しに来たんだ。俺が持ってるコアメダルのうち一枚は、奴のだからな」

「コアメダル・・・じゃあ、グリードの一人！？」

ユーノはユーノスの言葉を聞き、立ち上がりカザリを警戒する。

するとカザリは警戒心剥き出しのユーノ達に意外な言葉を述べる。

「そんなに警戒しないで。戦う気はないんだから。」

「何っ！？」

「聞いてよ。なくなったコアメダルなんだけど、さすがに君が全部持ってるなんて思ってないよ。何しろ、君自身がそんななのに残り全てのコアメダルを持っているとは考えにくい。」

「それで？」

ユーノスがカザリの言葉に疑惑を感じながらそう聞き返すと、カザリはユーノスに向かってその場の全員が凍りつくような提案をしてきた。

「そんな奴捨てて、どうだろう、ユーノス・・・僕と組まない？」

「えっ！？」

「「「「！」」」」

その言葉を聞いた瞬間、ユーノもドラえもん達も表情を凍らせ、このリアルタイムでの様子を機動六課のモニターで窺っていたなのは達もまた驚き返っていた。

「な・・・なんやて・・・」

「ユーノ君・・・ユーノス元帥・・・！」

一抹の不安がなのはの思考を駆け巡り、一瞬の沈黙が辺り一帯を支配する。

そして、カザリは自分を睨み付けるように見つめるユーノスに更に続ける。

「分かってると思うけど、僕達グリードは普通の人間の力じゃ封印はおろか倒すことも出来はしないんだよ。人間なんかと協力してコアメダルを集めようってこと自体、無理があるよ」

「う・・・・・・」

「「「「・・・・・・・」」」」

確かに、カザリの言葉もあながち間違いではなかった。

現にこのユーノス・スレイアは１５０年前、結局グリードを倒すことは出来ず、止むを得ず自らの力を代償に願い時の中に彼らを封印したが、今その封印が解かれ世に出てしまったのだ。

ユーノ達が不安一色の顔でユーノスを見つめる中、カザリはフェレット姿のユーノスに言葉巧みにたぶらかす。

「ユーノス。僕は昔から七大元帥の中でも君に注目していた。僕と組んだ方がメダル集めは効率的だよ。立場は違えど、結局僕らが欲しているのはコアメダルだ。尤も、君があつめるのは力を手にするためじゃなくて、管理するためだろうけど」

ユーノスの考え、強いては管理局の根本的な考えをすっかり見透かしているカザリ。

ユーノスはしばらく口を籠らせてから、徐にこう言いかえした。

「俺としても・・・止むを得ずユーノや機動六課に世話になっているだけだ。何しろ・・・・・・魔力が回復しない以上、人間態には戻れない・・・・・・が、あまり関係のない者に世話になるのも俺

の性分ではない。いずれ封印するとしても、ユーノ達といるよりグリードでも、お前の方がマシなのかもしれない。」

「な！ユーノス元帥・・・！！」

ユーノスの信じられない言葉に思わず耳を疑うユーノや、機動六課の前線メンバー、そしてドラえもん達四人。

「決まりだ。そんな奴・・・もういらないね」

カザリはそう口にしながら、ゆっくりと要らないと勝手に判断したユーノの方へと歩み寄っていく。

と、その時ユーノスはカザリの前に出ると手を突き出し行動を止めにかかった。

「待て！」

「？」

「分かっているとは思うが・・・俺は元々人間なんだ。グリードのお前と組むのも、それはそれでデメリットはある。少し考えさせろ」

「フッ。わかった。でも、長くはダメだよ。君は油断ならない」

カザリはその事をユーノスにようく伝えると、ユーノの方へと振り向き、掌から黄色の竜巻を発生させ、至近距離からの攻撃を加えた。

「フン！」

「うわあああああああ！！！」

「「「「ユーノさん！！」」」」

「「「「ユーノ（君）（先生）！！」」」」

現地でその様子を直接目にしていたドラえもん達と、モニター画面で窺っていた機動六課前線メンバー。

ユーノスはカザリの突風を前に、体を必死に抑えていると、風に乗って自分に向けられるカザリの言葉が耳に入ってきた。

『頭のいい君なら、正しい答えを出せるはずだ』

一方のユーノは強力なカザリの攻撃を前に為す術もなく倒れ、強制的に完現術が解除されると元の格好となり、地に這いつくばった。

「う・・・これが・・・封印されてた・・・グリードの力・・・！？」

ユーノは険しい表情を浮かべながら目の前でカザリの言葉に内心動揺している真意の掴めないユーノス・スレイアの後姿を見つめる。

その一方で傍らで想像を絶する光景を目の当たりにしたドラえもん達、特にのび太などは腰が抜けてしまい、恐怖に怯えた様子で言う。

「ど・・・ど、ドラえもん・・・／／／僕達があんなの相手にしたら・・・確実に死んじゃうよ・・・／／／」

「死ぬだけなら可愛いものだよ・・・僕はもっと・・・恐ろしいも

のを想像してしまう・・・！！」

ドラえもんの言葉を聞くと、のび太達は一様に先ほどのカザリ、もといグリードと呼ばれる存在に恐れおののくのであった。

そんな彼らとは別に、恐怖は感じてなどいないがグリードとヤミーの根本的な力の差、鍛え上げられた体でさえ悲鳴を覚えることに驚きを感じていた。

「は、は、は、は、は・・・グリードって・・・ヤミーとは全然違うんですね・・・強さがって言うより、力の質が・・・」

荒い息を立てながら傍らのユーノスにそう言うと、ユーノスは真顔で答える。

「当然だ。カザリの他にあと四人。“ウヴァ”・“ガメル”・“メズール”。そして、未だその姿を見せない鳥のグリード、“アンク”。もし奴らのコアメダルが全部そろってたとしたら・・・・・・今頃どうなっていたか・・・」

「確か・・・・・・世界を食らうって・・・・・・」

「ああ・・・・・・」

ユーノスは目を瞑りながら徐にそう答えると、ユーノは眉間に皺を寄せながら網ネットの方に背を掛けその場に座り込む。

ドラえもん達はユーノへと近づき、彼の身を案じる。

「ユーノさん！」

「大丈夫ですか！？」

「ああ・・・僕は大丈夫・・・君たちの方こそ大丈夫かい？」

「僕達は平気です。でもその所為でユーノさんが・・・！」

「へへ。いつも僕はこんな感じなんだよ。」

明らかに無理しているのに平気な様子で作り笑いをするユーノ。

四人はそんなユーノを見ていると思わず心が痛んでしまい、ユーノスもまたそんなユーノを都合よく利用してしまっていることへの罪悪感と、自分の情けなさを覚える。

「ユーノ・・・」

と、その時そんなユーノ達の耳に不意に笑い声が聞こえてきた。

「ふふふふ・・・ははははは」

「「「「「「！」」」」」」

ユーノ達は聞き覚えのあるその笑い声に警戒心を強める。

「本当・・・お人好しと言うか・・・無欲と言うか・・・そんなんだから、欲望の空白？ブランク・オブ・デザイアなんて言われたりするのよ。『元・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライア』」

するとそこへ、霧散した煙が一つに集まり実体となって人の形と成

し得ると、その実体・・・破面魔導虚リリスは不敵な笑みを浮かべて歩み寄ってくる。

「あ！さっきの女の人だ！！」

「何だと・・・お前誰なんだ！？」

ユーノが強い口調でそう尋ねると、リリスは案外あっさりと自分の名を名乗る。

「私はリリス。あなた達に警句を告げるためにこの世界に来たものとでも言っておきましょうかしら」

「警句・・・だと？」

「あんた・・・普段は冷静沈着且つ、その頭脳の高さからは管理局随一なんて言われる癖して、人助けの事となると馬鹿になる。さっきも見たでしょ。人間なんて一皮むけば欲望の塊よ。いくら助けてもきりがない。」

一同はその言葉を聞くと、思わず苦い顔を浮かべてしまう。

それが先ほどの武の事なら尚の事。

しかし、ユーノはそれを聞いても尚リリスの言葉とは真逆の事を言い出す。

「そりゃあ・・・時々は欲望に負けることはあるけど・・・最後にはちゃんと・・・！」

その直後、リリスはユーノに向かって彼が思ってる事とはそれこそ逆の事を断言する。

「“欲望に負ける”」

「！」

ユーノは思わず表情を凍りつかせる。

そして、それを言ったリリスは言葉を失うユーノやユーノスにこう告げる。

「ようく考える事ね。無償の人助けってものが如何に無意味で自分を気づつけるだけの有害なものであるかどうか。その間、ユーノス・スレイア」

「！？」

「あなたの思考と行動もしっかり観察させてもらうわよ。ふふ・・・じゃあね」

リリスはまるで真意の掴めない表情を浮かべてながら後ろを振り返ると、先ほど同様煙のように霧散してその姿を消してしまった。

全員は消えて言ったリリスに一抹の不安を感じる。

「さっきの人は・・・一体何だったのかしら」

「僕にはまるで意味が分からなかったよ・・・」

「う～～ん・・・一体何が起こってるんだこの街で・・・いや、この世界と言うべきかな」

ドラえもんは腕組みをしながら眉間に皺を乗せ真剣に考えだす。

ユーノは申し訳なさそうな表情を浮かべながら逃げて行った武と意味深長な警句を告げていったリリスについて考える。

と、その時ユーノの元に映像通信が入る。

「ん？なのはからか・・・」

ユーノはモニター画面を表示させ、通信ボタンを押すと、心配そうにこちらを見つめるなのはが真っ先に映ってきた。

『ユーノ君！大丈夫？！』

「なのは・・・ああ・・・何とかね・・・」

『何とかって、顔色悪いよ・・・無理しないで！』

「あはは・・・ごめん・・・つい何時ものくせでね・・・・・・う・・・ぐ・・・！」

と、直後ユーノは通信中に体に走った異変に意識を朦朧とさせ、傍らで窺っていたユーノスやドラえもん達、そしてなのはは目を見開いた。

「あ！」

「ユーノ！！」

「ユーノさん！！」

「ユーノ君！！」

なのはは映像通信を切ると、はやてからの許諾を得、シャマルなどの数名のメンバーを引き連れて転送ポートで現地まで移動。

その間にユーノスやドラえもん達は意識を失ったユーノの体を揺すり続ける。

「ユーノ。しっかりしろ！」

「ユーノさん、大丈夫！？」

グリードの襲撃によって、体に大きな負荷を折ってしまったユーノス・スクライア。

間もなくして、転送ポートでその場に駆けつけたなのは達は一先ず一刻も早い治療と言うことで、ユーノスの時同様のび太の家までユーノを運ぶことにした。

ユーノは本当に無事なのであろうか？

だが、ユーノがそんなことになっている間に、街の方ではネコヤミーに寄生された武が食欲を暴走させ、ありとあらゆるものを貪り尽くしていた。

だがしかし、人間である以上武の体には限界容量と言うものが存在

し、既に本人が満腹を得ているのにも拘らずネコヤミーの意志が強く働き欲望が押さえきれず、武はスーパーに陳列された果物、惣菜品など食らいながら辛そうな顔で言う。

「苦しい・・・もう食いたくない・・・もう嫌だ・・・！」

武は意志に反して勝手に動く手を止めようとするが、それでも欲望の方が勝ってしまい、結局ありとあらゆるものを食べ続けるしかなく、周りいた買い物客はさぞかし驚いていたそうな。

そうして食べることによってセルメダルの枚数が増加していくことは、ユーノとユーノスの監視役でもあるリリスのもとにもしっかり伝わった。

リリスは不敵な笑みを浮かべながら、徐に言葉を発する。

「フッ。そうよ・・・もっと食べなさい。食べて溜めこむといいわ」

そんな事を呟きながら、リリスは目の前にディスプレイを表示させ、現在確認されているグリードであるカザリの動きを確認する。

一応、彼女の使命の中にはグリードの監視も含まれているのだ。

「へぇ・・・・・あのカザリってグリード。ユーノス・スレイアの言う通り、こそこそ嗅ぎ回っているようね。おまけに狡猾で一筋縄ではいかないわ・・・・・だけど・・・・・所詮欲望の塊。私達の敵じゃないわ。ふふふふふははは」

リリスは誰もない居ない場所で高笑いを浮かべる。

だがこの時彼女は気づいていなかった。

そんな彼女の存在に気づき、監視役のはずの彼女が紫と緑のオッドアイを持つ少年に監視されていることなど――――――

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

その頃、アルハザードにてリリスから得られる情報をモニターで確認しながら、すっかり定着したエプロンを付けるスカリエッティ。

スカリエッティは嬉しさ半分驚き半分な表情でプレシアに言う。

「大変だよプレシア。あのカザリと言うグリード・・・一筋縄ではいかない！彼がユーノス・スレイアと結託するか、あるいは離れるかどうかでユーノ・スクライアの進化と我々の今後の動きに大きく影響が出てくる」

「そうね。でもそれなら選択肢はかなりあると思うけど？」

すると、そんな何気ないプレシアの疑問を耳にしたスカリエッティはオーブンの中のケーキを確かめながら真顔で答える。

「１つだよ。我々が選ぶ道は・・・１つだ！ふふふはははははは！！！！！」

高笑いを上げるスカリエッティ。

そして、それと同時に無事にケーキが焼き上がりを迎えるのであっ

た。

一体スカリエッティはこそこそ裏で何を企んでいるのか、リリス同様今のままでは全く真意がつかめないのであった。

◇

〈のび太Ｓｉｄｅ〉

さて、ユーノを担いで帰ってきたなのは達数名の前線メンバーは治療所として提供し貰うことになったのび太の家に上がり込む。

のび太の母親である玉子はしずか達だけなら兎も角として、大人数で押しかけてきた容姿端麗な若い男女に思わず目を奪われてしまう。

「え・・・！？な、なんなのこの人達は・・・！？」

「ママ！ちょっと訳があって、兎に角今は急いでるんだ！この人達上がらせて！！」

のび太が誠心誠意籠った瞳でそうお願いすると、ドラえもんを始めよそ者であるなのは達も深く頭を下げて懇願する。

「「「「「「「「「お願いします！！」」」」」」」」」

「あ・・・はい・・・じゃあどうぞ・・・」

玉子は呆気にとられながらも素直に要求を受け入れ、一同は許諾を得ると安どの表情を浮かべてのび太の部屋へと直行する。

金太郎の担ぎ込まれたユーノはシャマルとどうしても着いていくと訊かなかったマリアによる魔法と鬼道によるダブルヒールを受け、瞬く間に傷が回復していった。

ドラえもん達は間近で見る魔法とそれとは違う死神の力である霊力の姿に言葉を失っていた。

「これが・・・魔法・・・！」

「細胞の再構築化が魔法が触れたところから始まってる・・・２２世紀の科学レベルでもこんなに凄いのは見たことがない！」

「兎に角凄いわ・・・」

感心するばかりのドラえもん達。

その傍らなのはとユーノスは不安一色の表情で眠った状態のユーノの顔を覗き込む。

「ユーノ君・・・・・・」

「ユーノ・・・・・・」

すると、その時二人の治療の成果が表れユーノが徐に目を開けて意識を取り戻した。

「う・・・・・」

「あ！気が付いたようね」

シャマルがユーノが目を覚ますのを確認し言葉を口にすると、その場にいた一同は安堵の表情を浮かべる。

ユーノは目を覚まし、ゆっくりと頭を押さえながら重い体を起こす。

「僕は・・・意識を失ってたようだな・・・」

「ユーノ君・・・よかった。」

と、安どのため息をなのはが撫で下ろした直後、治療をしていた筈のマリアがユーノの首に手を巻きつけた。

「ユーノ様!!!」

「ぐっほ!!!」

「「「「え!?」」」」

突然のマリアの行動に思わず顔を赤くするドラえもん達と、逆に表情が凍りつくなのは。

「ユーノ様!!ご無事でなによりですわ!!!マリア、心配になってここまで来てしまいました!!」

「ぐあああ・・・!!!たたたた小鳥遊さん・・・!!!ぐるしい!!!」

ユーノは治癒を受けたばかりの体でありながら、女のくせに考えられなほどの力を持つマリアによって逆に追い詰められてしまう。

咄嗟にシャマルはおどおどしながらも彼女の行動を止めようとする。

「あ、あの小鳥遊さん・・・ユーノ君そのままじゃ窒息しちゃいますよ／／／」

しかし、そんなシャマルの事など今のマリアには一切聞こえず一方的なユーノへの愛を何の中地心も抱かず表現し続ける。

「あ～～～ん？ユーノ様？」

「ぐえええええええええええ！！！！」

ユーノの顔が真っ青に染まっていき、限界を迎えようとしてた。

その間に、なのはは漆黒のオーラを身に纏いながらユーノに抱きつくマリアに俗に言う「ＯＨＡＮＡＳＨＩモード」と呼ばれる状態になりかけようとしていたので、これを見たシャマルや達や初対面のドラえもん達は根源的な恐怖を覚え、何とかしてなのはの暴走を止めようと奮闘するのであった。

そして、漸くユーノがマリアからの束縛から解放され、なのはに愛おしそうに心配されながら話が出来る状態に復帰すると、改めてユーノは治療をした二人とここまで自分を担ぎこんで場所を提供してくれた全員に感謝をする。

「ありがとう、みんな。何か悪いね」

「何言ってるんですかユーノさん。僕んちほど広くもないし、狭苦しいのび太の家でもないよりはましですから」

「どういう意味なのさスネ夫！」

思わずスネ夫の言葉に癇癪を起すのび太。

「やめなさいよ二人とも。喧嘩してる場合じゃないわ。それより・・・今は武さんが・・・」

心配そうな表情でヤミーに憑りつかれた武の事を考える性根の優しいしずか。

ドラえもんも何時にもなく真剣な顔で腕組みをして考え込んでいた。

「あれをどうするかが問題だ。ジャイアンはこうしている間にも、どんどん自分の欲望を暴走させて街中で暴れ回ってるはずだ！何とかして僕達の力で止めたいけど・・・」

「だけどそんなのどうやってるやるのさ?！空気砲も効かない！況してユーノさんはボロボロ！他に打つ手はないわけドラえもん！」

「ごめん。僕の秘密道具じゃ役に立たないものばっかりなんだ・・・」

申し訳なさそうに項垂れてしまうドラえもんを見て、なのは達機動六課メンバーとユーノ、ユーノスは複雑な心境に立たされる。

なのはは一度考えた後、毅然とした様子でそんな彼らにこう告げる。

「あの子は私達の手で何が何でも止める。それが私達のお仕事だから。だから大丈夫だよ。必ずみんなのお友達は助けるから。だからこれ以上この件にかかわるのは止して」

「そ、そんな！でもジャイアンは僕達の友達なんです！！」

「そうだよ！いつもは乱暴で歌は下手だし人のもの勝手に取り上げるようなゴリラでも、僕らにとっては大事な友達なんだ！放っておくわけにはいかないよ！」

「あの！僕達に出来ることがあれば何でも！」

のび太、スネ夫、そしてドラえもんの三人が必死にそう弁解するが、なのはは心を鬼にして毅然とした態度を保ちこう告げる。

「これは遊びじゃないんだよ」

「「「！」」」

「みんながこれまでどんな事に巻き込まれて、それでいて君たちなりの知恵と勇気で乗り越えて来たかはおのずから想像がつく。だけど、今回の事は一歩間違えれば命だって危うくなりえるそう言う危険な話なんだよ。私達管理局は、いいえ・・・大人は子供を守るのが責務なの。」

「なのはちゃん・・・」

訊いていたシャマルを始め、ユーノ達も思わず口ごもらせる。

「ここから先は私達機動六課が何とかする。それまで、たとえ大事な友達だとしても、絶対に近づいちゃ駄目だよ。」

これがなのはが大人して生きていくうえで身に付けた管理局員とし

ての、大人としての責務の表れなのだ。

するとその時、そんななのはの言葉に水を差すようにしずかがこう言った。

「どうやって信じればいいんですか？ユーノさんや・・・あなた達の事？」

「え・・・」

なのははその言葉を聞いた瞬間、思わず耳を疑い、ユーノはそんなしずかの顔をじっと見る。

「しずかちゃん・・・」

訝しげな様子ののび太達の後ろで、しずかは声を絞りながら一言一句はっきりした言葉で更に続ける。

「信じたいですけど・・・でも私達全然あなた達の事知りませんし、武さんの事にしたってそうです。知り合いでもない。それなのに、どうして・・・？どんなに親切な人達だとしても、どうやってそれを・・・」

「そ、それは・・・」

なのははこんな問いが小学生の口から返ってくるとは夢にも思わず、回答に苦慮してしまい、シャマルたちもまた顔を渋らせる。

するとその時、そんな全員を見ていたユーノが徐に立ち上がるとこの難解な言葉にこう返答する。

「親切じゃないよ。全然」

「え？」

「ユーノ・・・」

「ユーノ君・・・？」

ユーノの言葉はいつも意味深長なものが多いが、今回の言葉においては更に強調されていた。

全員がユーノの言動に耳を傾けながら、疑問符を浮かべているとユーノは更に続ける。

「だから信じろなんて言えないな。管理局や、この世界にある国や組織、正義のヒーローにしたって、誰もを助けられる訳じゃないしね。」

「「「「・・・・・・・」」」」

「ただ・・・手が届くのに手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。それだけ」

一同はユーノの言葉を聞くと、何も言えなくなってしまい、以前にも同じことを聞かされていたなのは達は、内戦の事件以来まるで口癖のようにそう言うことが多くなったユーノの思考に複雑な想いを抱きながらも、実に彼らしいという思いも湧いてきた。

そして、自分たち組織の人間とは決定的に違う人間らしい言葉だと

改めて感じるのであった。

と、その時に甲斐へと続く階段を大慌てで上がってくる玉子の姿を捕えたユーノ。

全員は玉子の方へと振り返ると、玉子は買い物袋片手に肩で息をしていた状態だった。

「ママ？」

「どうしたのそんなに慌てて・・・」

すると、のび太とドラえもんの問いに玉子は呂律が回らないぐらいの挙動不審な状態でこう答える。

「たたたた大変よ！武君が、レストランで大食いして・・・！」

「えっ！？」

「「「「「「「「「な！」」」」」」」」」

ユーノ達その場にいる全員はその言葉を聞いた瞬間硬直した。

その頃、その武はと言うと街中にあるレストランに入ると次々と注文を繰り返し、食べたくないとわかっているにも拘らず皿に盛られた料理を無理矢理胃の中へと押し込んでいき、その結果体は先ほどよりも膨れ上がり今にも破裂しそうな状態だった。

その様子を外の方で見ていた野次馬は携帯片手に写真を撮ったりメールで流したりなどしていた。

「ねぇ、あれヤバくない？」

「撮れた？」

「撮れた撮れた。ネットで流そう」

ユーノはその情報を玉子から聞くと、一目散に部屋を飛び出しそのまま外へと向かっていくのであった。

なのはは玄関から出たユーノに追いつくと、一度ユーノを呼び止める。

「待って！ユーノ君！」

「なのは・・・」

「まさかヤミーの所に行くの！？そんな怪我してるのに・・・！」

なのはがそう言うと、シャマルとマリアも心配そうに彼に問いかける。

「そうよユーノ君。まだ治ったばかりじゃないの・・・！」

「ユーノ様。その状態では危険すぎますわ！」

「平気平気。プロの二人に治して貰らいましたし、何より無駄に頑丈なのが取り柄なものだから僕は。」

「それでも・・・！」

なのはは声を荒げるように出しながらユーノに行かないようにと訴えかけるが、彼はもう押し分け無さそうに首を横に振り、こう言う。

「ごめん。でもいかなくちゃ。放っておくわけにはいかないでしょ。何もせずに後悔する真似、僕は嫌いなんだ！」

ユーノはそう言った直後、一目散に前に向かって走り出し、なのは達はものすごい速さで移動するユーノの跡を必死で追いかけようとした。

「待ってよユーノ君！！」

「ユーノ！！待つんだ！」

「「「「ユーノさん！」」」」

ユーノが武の元へと向かっているその頃、その武がいるレストランにやがて警察関数名が駆けつけてきた。

野次馬たちをかき分け、警察官は店の中へと入り込む。

「どちらですか？」

「あの人です！」

店員に武の事を聞いた警察官はすぐに武がいるテーブルへと駆け寄り、食べたくないでいるのに手が止まらない武の側で語りかける。

「何してるんだ、やめなさい！食べすぎだよ！」

「腹が・・・ちぎれそうだ・・・！」

苦しみながらそう言う武は、条件反射で近づいて来た警官を腕量で振り払う。

「「ぐあああああ！」」

警官を降りしきり、欲望に支配された武の体は食べることを止めようとしない。

「もうやめてくれーーー！」

半泣きの状態で武は持っていたパンを口の中へと放り込み、それによって寄生したネコヤミーの体にセルメダルが大量に蓄積される。

その様子をユーノ達の動きを監視しながらネットの掲示板でしっかり見ていたリリスは不敵な笑みを浮かべ言う。

「完熟ってところね」

リリスはディスプレイを消すと、煙の姿となって霧散し、ユーノが向かった場所へと先回りするのであった。

そして、リリスによって監視対象とされているユーノも漸く野次馬が集まる武がいると思われるレストランへと到着する。

「あれか・・・」

ユーノが現場に向かおうとすると、その時彼の前に煙が集まり姿を

現すリリス。

「！リリス・・・」

「答えは出たのかしらユーノ・スクライア？ユーノス・スレイアはまだ来ていないようだけど、きっと彼はカザリの言うことに賛同すると思うわ」

「違う！そんな訳ない！あの七大元帥、最強の結界魔導師で人望厚いユーノス元帥がそんな浅はかで信頼を裏切るようなこと、する訳ないだろ！」

「どうだか。言ったでしょ。人間なんて一皮むけば欲望の塊・・・いくらフェレットの姿になって居ようと中身は人間。私欲の為にいつかはあなた達を必ず裏切るわ」

「僕はそんなの信じない！お前やグリードの道具にもならない！」

「ふん。強情な人ね・・・じゃあ、その甘い考えでどこまでやられるか見せてもらうわよ」

リリスはそう言い残すと、そのまま煙となって霧散し何処へなりとも消えていく。

ユーノは消えていったリリスを凝視しながら、レストランに向かおうとすると、今度はなのは達が追いついてきた。

「ユーノ君！」

「ユーノ！」

「！みんな・・・」

なのは達は相当一生懸命走って来たのか、全身汗だくでかなりの荒い息を立てていた。

「は、は、は、は、は。勝手に行かないでよ・・・／／／ユーノ君にもしもの事があったら私は／／／」

涙目を浮かべるなのはの顔にユーノの顔が曇る。

と、その時だった。

ユーノ達たちの前にグリードの一人、カザリが現れたのだ。

「やぁ・・・どうやらお揃いのようだね。さて、ユーノスの答えは決まったのかな？」

「な！グリード・・・！！」

ユーノ達はカザリの姿を見ると、一度全員で一か所に固まり、ユーノスはユーノの足元に着地すると、カザリを睨み付ける。

「カザリ・・・」

「ふふ。その頭脳明晰な頭から導いた答えはこうだよねユーノス。“君はそんな奴等なんかすてて、僕と組む。同一目的のコアメダルの為に”ね」

「・・・・・」

カザリはユーノ達に一歩ずつ近づきながら鋭い鍵爪で狙いを定める。

「お前たちは・・・ここで消える」

「は！なのは！みんな！」

「「「うん（はい）（承知）！」」」

ユーノは三人にそう言うと、帯刀していた逆刃刀と洞爺湖木刀を取出し、なのは達もデバイスと斬魄刀を取出しドラもんたちを後ろに下がらせ戦闘の構えを取る。

緊迫した状態がしばらく続き、ユーノ達の息が上がる中、頭を掻いた瞬間カザリがユーノ達の元へと走り出す。

と、その瞬間ユーノの足元に居たユーノスが高く飛び上がり、魔力で強化した尻尾でカザリの顔面目掛けて打撃を食らわせる。

「ぐ！」

「「「「「「！」」」」」」

「ユーノス！お前・・・」

ユーノスの行動に思わず目を奪われる一同。

すると、ユーノはユーノの肩に乗ると不敵な笑みを浮かべてカザリに言う。

「お前は昔っから疑い深かったが、復活しても同じだな。俺やユーノ、六課の連中が示し合せるんじゃないかとウロウロ嗅ぎ回っていただろ」

「くっ・・・！」

「最近の人間社会は何処も情報化が進んでいてな、この管理外世界の地球にもインターネットと呼ばれるものが普及している。お前の行動など、全て人間に見られていたんだよ」

ユーノスはそう言いながら、魔法空間に閉まっていたこの世界の多機能携帯端末を取出し、カザリに見せつける。

カザリはそれを聞くと心底驚いた様子だった。

「まさか！人間がそんな事を・・・」

「変わったんだ。俺達が封印されている僅か１５０年と言う短い期間で人間は進化した。疑い深いグリードはその疑いから裏切る。メダルを狙う。バカでも面倒でも、人間の方がまだマシってことだ。それに・・・俺は人間としても、ユーノや六課の奴らみたいな情熱と性根の優しい人間の方が好きだ。」

「は！」

「ユーノス元帥・・・」

ユーノスの言葉を聞き、ユーノやなのは達は驚き返ると同時に信じてもいいという安どの表情を浮かべ一時的に疑っていたユーノス・スレイアを完全に信用することが出来た。

だが一方で見限られたカザリはユーノスに怒りを覚え襲掛かってくる。

「お前・・・！」

「はっ！」

ユーノスは魔法構築能力をフルに活用し、強力な結界を作り出してカザリを一次的に退かせる。」

「ぐ！」

「ユーノ！」

そしてその隙にユーノに結界印を手渡し、渡されたユーノはほくそ笑みながら蓋を開封し、完現術を発動させる。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノがスレイヤーモードに変身を遂げると、カザリは容赦なくユーノ目掛けて襲い掛かってきた。

と言うのも、ユーノスが回収したコアメダルはすべて結界印の中に内蔵されている。

その為、ユーノの防護服には回収したコアメダルも一緒に含まれているのである。

ユーノはなのは達を危険に巻き込まないために、大きく距離を取ると、カザリと壮絶な死闘を繰り広げる。

いくら場数を多く踏み、次元世界最強と言われるユーノでも、未だに不慣れな完現術と圧倒的な力を持つグリードの実力にはかなり苦戦していた。

ユーノスはなのは肩を借り、遠くから指示を出す。

「ツインブレイドにしてみろ！」

「はい！」

〈Ｔｗｉｎ　ｂｌａｄｅ〉

ユーノは指示通り、ツインブレイドに選択すると、再びカザリの懐に飛び込んでいく。

ツインブレイドである程度五分五分の状態にまで戦うことは出来るようになったユーノだが、それでもコアメダルに強い執着を抱くカザリの方に分があり、距離を取ったカザリは突風を巻きこす。

「うわああ！」

突風をその身に受け、地面に転げるユーノ。

なのははそれを見て自分も飛び出そうとするが、ユーノスや他の全員に止められてしまう。

何故なら、ユーノスが言うよりに現状ではグリード、そしてヤミーには魔法も死神の力も決定打にならないことが分かっているからだ。

「コアメダル、返してもらうよ」

カザリは徐に倒れたユーノの方へと歩み寄っていく。

ユーノスはそれを見ると、危機感丸出しの顔でユーノに大声で言う。

「ユーノ！頼む！死んでも取られるな！」

「死んでもですか・・・」

思わずその言葉を繰り返すユーノ。

ユーノは体を何とか起こすと、最後の賭けのように勢いよくカザリに向かって飛んでいき、カザリもまた同時にユーノへ飛んでいく。

そして両者の攻撃がぶつかり合った瞬間、僅かの力の差でユーノが惜敗してしまい、防護服の中から回収したカマキリのコアメダルが飛び出した。

「ぐあああああああ！！」

「「「ユーノ（君）（様）！！」」」

カザリは飛び出たカマキリコアをユーノから奪取する。

「ウヴァのコアか。」

「く！やっぱり、俺自身の手で片を付けるべきだったか・・・！」

思わず後悔の言葉を漏らすユーノスはすぐになのは達と一緒に変身が解けたユーノへと駆け寄った。

「ユーノさん！しっかり！！」

「ユーノ君！！」

「ぐ・・・！」

険しい表情を浮かべるユーノ。

カザリは振り返ると自分をコアも取り戻そうと再度ユーノへと向かっていく。

「僕のメダルも返して・・・ぐおおお！」

だがその時だった。

唐突にカザリの肩の鎧がセルメダルとなって分解され、カザリは力が急に抜けてしまいその場に膝をついた。

なのは達はこの光景に目を疑った。

「「「え！」」」

「何っ！？」

すると、そんな驚きを隠せないでいるなのは達に現在介抱されよう

としている筈のユーノが徐に掌を開けると、そこには何とカザリから咄嗟にカザリから奪い取った黄色のコアメダル、チーター二枚・トラ一枚が握られていた。

「僕の・・・僕のコアを・・・！」

「偶然かな♪」

飄々としながらも敵を完全に出し抜いたと言わんばかりの表情を浮かべるユーノ。

ユーノスはそんなユーノの肩に乗ると、頬を舐めながら功績を褒め称える。

「フフッ。流石は次元世界最強と呼ばれるだけはある。上出来」

「凄いよユーノ君！！」

「本当ですわ！！マリア益々惚れてしまいますわ！！」

他の一同もユーノの咄嗟の判断力と行動力には驚きを見せる。

カザリは弱々しい状態となった自分の体を手で抑えながら立ち上がり、去り際ユーノスにこう言い残す。

「ユーノス・・・いつか後悔するよ！」

カザリはふらふらとした足取りでユーノ達の前から姿を消して行った。

カザリを撤退させ、一度安どのため息をつくユーノ達だが、問題はまだ残っていた。

唐突にユーノの耳に窓ガラスが割れる音が聞こえる。

「!?」

音のする方へ行ってみると、瞳に映ってきたのはガラスを突き破りレストランの中から出て来た体がパンパンに膨れ上がった武であった。

「「「「ジャイアン（武さん）！」」」」

「あの子・・・あんなに大きく!!」

驚き返るなのは達。

武は膨れ上がった身体のまま制御の利かない自分に救いを求める。

「助けて・・・！」

ユーノスはユーノの肩で武のそれを凝視しながら、深刻な表情で呟く。

「そろそろ寄生しているのも限界と言うところか・・・」

「えっ!?」

思わずそう言ってしまうユーノだが、直後彼は驚きの光景を目の当たりにした。

何と、武に寄生していた筈のネコヤミーがあろうことか宿主の武を自らの体の名家へと取り込んでしまったのだ。

「あの子・・・怪人の中に・・・！」

ネコヤミーが出現すると、人々は逃げ惑い、ユーノ達は逃げていくネコヤミーの後を追って行った。

そして、ネコヤミーに追いついくと、ドラえもんは意識を完全に乗っ取られた武の事を心配しユーノスに尋ねようとする。

「どうなったんですか、ジャイアンは！？」

ユーノスはとても言いづらそうな表情を浮かべる。

と、その時またもや彼らの前にリリスが現れ彼女はその質問に端的に答える。

「“欲望に飲み込まれたと”いうところね」

「！」

なのは達は何の前触れもなく現れたリリスに驚き、ユーノとユーノスは彼女を睨み付ける。

「貴様・・・リリス！」

「あの醜さが人間の本性よ。あんなのに助ける価値があると思う訳？」

すると、聞いていたユーノは決意の籠った表情で断言する。

「・・・人の価値は僕らが決めることじゃない。」

「そう?私や管理局の上の人間は決めるけど。価値なしとみたら、すぐにどんなものでも捨てるわ。たとえそれがどんなに人望の厚くて周囲から愛される人間だとしても」

「僕らはお前の口車には乗らない。何が目的なのかは知らないけど、目の前で苦しむ人がいる限り僕はどんなことが遭っても諦めない。例え自分の身がどうにかなろうとも、手をつかみ損ねることは・・・・・もうしない!」

「ふん。やれたら褒めてあげるわ・・・」

リリスはそう言い残し、煙となって忽然と姿を消して行った。

リリスが消えた後、ユーノはユーノスより結界印を受け取り、目の前のネコヤミーを凝視しながら完現術を発動しながら走り出す。

「変身!」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身を終え、ユーノは腰元の逆刃刀に手の伸ばし、ネコヤミーに向かって刀を振りかざすが、やはり最初の時と同じで弾力のある皮膚に斬撃が阻まれてしまう。

「やっぱり斬れないか・・・!」

「また妙な具合に成長したな・・・だが、これ以上深く食い込めば中の子供にも被害が・・・」

ユーノスはなのはの肩を借りながらそう呟き、なのはは自分の力ではヤミーを倒せない今の状況を歯がゆそうに見つめながらも、やはり一番にはユーノの身を案じていた。

「ユーノ君・・・・・・」

ユーノは全員に見守られながら一人ネコヤミーと奮闘。

幾度かネコヤミーの腹部を斬りつけていくうちに、セルメダルが放出され一瞬だけ取り込まれた武の顔が浮かび上がる。

ユーノはこれを見て咄嗟に気が付く。

「!そうか!セルを押しのければ・・・」

「成程。ですが、あれだけ大量のセルをどうやって・・・」

金太郎はふと思ったことを口にすると、聞いていた全員の顔が曇っていく。

だがそれでもユーノの心は決まっていた。

何が何でも目の前で苦しむ人を助けるということ。

「（助けるんだ・・・絶対に・・・絶対に助けるんだ!!!）」

と、ユーノが強く思った直後ユーノのブーツが光り輝きだし、その瞬間ユーノはまるでチーターの様な俊敏性を身に付け、ネコヤミーの攻撃を躱した。

「！」

「あれは・・・！」

「ユーノさんの足が敏捷性に優れた動物の様に早くなったわ・・・！」

見ていたなのは達は一瞬の出来事に目を奪われ、発動した本人のユーノもかなり驚いた様子だったが、直ぐにそれを武救出のために利用できると考えた。

「おお・・・！そうかこの足なら！」

理由は定かではないが、ユーノはその状態を保つように強く念じながら、チーターのように低い姿勢から構え、最大加速によるトップスピードを展開し、そこからネコヤミーに組み付いての素早い連続蹴りで大量のセルを押しのける。

セルを高速蹴りによって押しのけていくと、ネコヤミーの体内から苦しそうな様子で助けを求める武の顔が見て来、ユーノはそれを見るなりバランスを保ちながら手を伸ばす。

「た・・・助けて・・・！」

武も手を伸ばしてきたユーノを見付けると、同じように手を伸ばし、ユーノは必死になって武を救い出そうとする。

「助ける！絶対！」

ここまでしてユーノが人を助けるのに必要な動機――――――それはひとえに彼が口癖のように言うあの言葉に凝縮されていた。

〈手が届くのに手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。〉

「うらあああああああああああ！！！！！！！！！」

ユーノは子の事を常に念頭に置きながら今必死に武の手に自分の手を伸ばし続ける。

そして、その願いが叶いユーノが伸ばした手が武の手を掴み、ユーノは手を掴んだ瞬間全身の力で以て武をネコヤミーから引きずり出し、ドラえもん達は飛んで来た武を受け止めた。

「「「「ジャイアン（武さん）／／／」」」」

「今だ、ユーノ！」

ユーノスは武を救い出し終えたユーノに止めを刺すように指示すると、ユーノはネコヤミーから離れて逆刃刀を手に取り、完現術によってブーストをかける。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｓｌａｓｈ〉

そして、ユーノは狙いを定めてネコヤミーを一閃。

「はあああああ・・・・おらあああああ！！！！」

ネコヤミーは空間ごと斬り裂かれると同時に巻き戻すようにして爆発を起こし、大量のセルメダルが周囲に散らばった。

「「ユーノ君（様）♪」」

「やったわね、ユーノ君！」

「見事でしたぞ店長！」

ユーノがネコヤミーを倒すと、なのは達は大いに喜び、ユーノ自身も完現術を解いて安どのため息をつき、無事な姿の武を一瞥するのであった。

「ふう。よかった。」

ネコヤミーを倒した後、武は食べ過ぎと言う名目の元、ユーノ達が手配した救急車に乗せられ病院に搬送されることとなった。

武は心配を掛けてしまったドラえもん達に今回の事を反省しこう言った。

「ごめんなみんな・・・もうあんまり欲張らないようにするよ・・・！ちゃんと自制するって・・・！」

「そう言うとジャイアンも偶には許してあげてもいいかなって思ったりするんだよね」

「本当本当」

「武さん。欲に負けたりしちゃだめよ」

「安静にして、ゆっくり休むんだよジャイアン」

ドラえもんを始め、友達おもいなのび太達の姿に思わず涙ぐむ金太郎とシャマル。

そして、肩に乗せたユーノスに笑顔でこう言うユーノ。

「ほら。一度欲に負けたって、人間はもう一度やり直せます。あんな目に遭ったんだし、今度は大丈夫ですよ。」

「そうだな」

と、その直後。

「あの・・・――――」

武がベッドから徐に起き上がる。

「ジャイアン？」

訝しげに彼を見つめるドラえもん達四人と救急隊員に、武はユーノの期待を裏切るような発言をしてしまう。

「できれば病院食が美味いとこがいいな！かつ丼とかラーメンとか出るところとかないの！？」

「「「「ずこ！」」」」

思わずその言葉に盛大なこけ方をするドラえもん達。

ユーノも思わずふらっとしてしまい、見ていたなのはやユーノスは心配する。

「う・・・ユーノ・・・」

「大丈夫ユーノ君?」

「何も・・・何も言わないで下さい・・・」

頭が痛くなったユーノはおぼつかない足取りで仲間たちを引き連れその場を後にしていき、そんな彼の様子をモニターで見ていたリリスは途端大笑い。

「ははははは!そう言うことよ。人間は欲望一つコントロールできない。私の言った通りだわ。この勝負・・・私の勝ちね」

そう言ったとき、不意にその言葉に言い返してきた者が現れる。

「別に勝ち負けとかでは・・・ないだろう」

「!」

聞き覚えのある声に思わず背筋が凍りつくリリス。

徐に振り返った先に立っていたのは、意外な人物・・・もとい自分と同種の存在、破面魔導の虚の一体だった。

「あなた・・・・――――」

「暫くぶりだな。リリス――――――――」

「・・・アスモデウス・・・！」

思わず目を見開きアスモデウスを見つめるリリスであった。

果たして、彼がやって来たその目的は何なのか？

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　トラ二枚　チーター二枚

疑惑と暴食と救いの手（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はジャイアンについて教えよう♪」

ユ「のび太君達のクラスのガキ大将であり、自己主張が激しく短気かつ毒舌家ゆえに粗暴で威圧感のある少年というイメージが強い。さらにクラスメイトの男子達をいじめの対象とし、彼らが自分の意に沿わないとすぐ怒鳴って暴力に訴えるため、恐れられている。」

「また、「おまえのものはおれのもの、おれのもののもおれのもの」というセリフに代表されるように、きわめて自己中心的・自分勝手であり、強引に人の漫画やゲームを取り上げて自分のものにしたり、「ムシャクシャしている」という理由でのび太君やスネ夫君などに八つ当たりしている。ただし、母ちゃんが大の苦手であり、これらの行為をしている所を見つかって母ちゃんにお仕置きを受けることもある。」

「今回はそんな彼の欲望、特に物欲と食欲にグリードの一体、カザリが目を付けたんだね」

一「いや～～～知らなかったぜ。まさかあの国民的アニメキャラクターが俺達の住む地球に実在して、その上ジャイアンまでいたとはな・・・」

ユ「ですね。世の中はまだまだ知らないことだらけだってことですよはい。そう言えば、あの後ジャイアンはどうしたんでしょうかね？」

一「取りあえず、空座総合病院の方に搬送されたよ。」

ユ「そうですか、石田さんのところに♪なら安心だな」

一「それがそうでもねぇんだよこれが・・・くくく！」

ユ「え？どういう事ですか？」

一「訊いた話じゃ、石田のとこに入院してるジャイアン、病院食じゃ足りねって言って子供の患者からおやつ取り上げたりして結構それで石田困らせてるらしいぜ」

ユ「あはは・・・折角助けたのにそれはないや・・・・・・」

思わず肩を落とすユーノであった。

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課に戻った後、ユーノは不意に思った先ほどのカザリとのやり取りでユーノスがいつの間にか所持していた多機能端末携帯について質問する。

ユ「ユーノス元帥。あの短期間のうちに一体何処であれを手にしたんですか？」

ユーノス「ああ。あれは一緒に居た狐顔の少年から拝借したものだ。ほら、ここにちゃんと名前が書いてあるだろう」

ユーノスはそう言いながら、持って帰ってきたその携帯端末を取出

し、裏にローマ字で「ＨＯＮＥＫＡＷＡ　ＳＵＮＥＯ」と彫られた箇所を指さし、ユーノはそれを見た途端度胆をぬいた。

ユ「でえええええええええええええ！！！！！！！ユーノス元帥、これ！！！！スネ夫君のじゃないですか！！！！！何勝手に持って帰ってきたりしてるんですかもう！！！！！！！」

ユーノス「すまない。つい返し忘れてしまった」

ドジをやらかしてしまったユーノスに胸が痛くなるユーノ。

一方でその端末を探すスネ夫の声が現地で響き渡った。

ス「どうしよう！！！勝ったばかりなのにまたママに叱られる！！あは～～～ん！！！ママ～～～！！！僕は何て不幸な少年なんだ～～～！！！」

哀れなスネ夫君なのであった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝

ア「実は一つドクターから頼まれごとがある」

リ「私達とグリードが結託！？」

カ「いいじゃん。似合うよその姿」

メ「よろしく。ユーノ・スクライアの坊や～～～」

ウ「返してもらうぞ、俺のコアメダル！」

第１４４話　追いかけっこと巣とセレブ

ドラえもん篇

ドラえもん

声：　大山のぶ代

２２世紀のネコ型ロボット。２１１２年９月３日生まれ。球状の頭部と胴体、短い手足をもっている。実物のネコの体毛によくあるように、体と顔面・腹部でツートンに色分けされていて、体は青色で顔面と腹部は白色になっている。鼻としっぽの先は赤色である。のび太を助けるために現代にやってきた。未来の道具がいろいろ入った四次元ポケットを持つ。好きなものはドラ焼き、大嫌いなものはネズミ。基本的には思いやりがあり穏やかな性格だが、思っていることを包み隠さずに表現する傾向があり、時として辛辣な一面を見せることもある。子守用ロボットなので世話好きだが、余計な世話を焼くことも少なくない。

登場したひみつ道具

タケコプター

竹とんぼの軸の下方に小さい半球を取り付けた形をしている。通常は頭頂部に装着して使用する。始動方法の異なる２種類、および飛行原理の異なる２種類の機種が存在する。始動方法の異なる２種類とは、体につけてボタンスイッチを押すと始動するタイプと、「飛びたい」という思念を受けると始動するタイプの機種のこと。どち

らもよく使われている。前者の場合、頭に乗せる前にスイッチを押すと、タケコプターが勝手に飛んでいってしまうおそれがある。

こけおどし手投げ弾

手投げ弾の一種で、投げつけて爆発させると、強烈な閃光と爆音で相手を威嚇する。その名のとおり効果は単なるこけおどしであり、殺傷能力は一切ない。性質は実在する閃光弾とよく似ている。

空気砲

手にはめて「ドカン」と言うと空気の衝撃波が発射される。「空気大砲」とも呼ばれ、ドラえもん映画作品で武器として使用されることでもお馴染み。威力はそこそこという設定であるが、空気の無い宇宙空間では使用できない。また、「ドカン」と言わずに衝撃波を放つ場面も多い。ヤミーに寄生された武には一切の効果を持たなかった。

お医者ごっこかばん

本来は未来の子供がお医者さんごっこをする際の道具。軽度な病気であれば、聴診器のような端子を患者に当てるだけで診断し、カバンに収められている飲み薬などで治すことができる。また、カバン本体にはレントゲンカメラや顕微鏡の機能も付属している。ファーストエイドキットが高度になったもの、もしくは災害時や野戦病院などで用いられるメディカルキットといえる。しかし作中では宇宙からきた未知のウイルスを退治したり、人間以外でも未確認の動物の病気を治せるなど、現代の医療レベルでは難しい治療まで行っている。本編ではユーノスの怪我の治癒に使用した。

野比のび太

声：　小原乃梨子

本作品の主人公。8月7日生まれ。小学4年生の少年。駄目な人間の典型として有名だが、実際は優秀な資質の持ち主。射撃の腕は天才的。

源静香（みなもと しずか）

声：　野村道子

通称「しずかちゃん」。5月生まれ。のび太が憧れるクラスメイト。成績は良く、性格は優しい。入浴が趣味。焼き芋が一番の好物であるがイメージダウンを気にして、あまり口にしない。ヴァイオリンを習っているが、その演奏技術はジャイアンの歌に匹敵するレベル。

剛田武（ごうだ たけし）

声：　たてかべ和也

通称「ジャイアン」。6月15日生まれ。のび太のクラスメイト。クラスの「ガキ大将」。一人称は「俺様」　自己中心的で乱暴だが、母ちゃんには弱い。非常に妹想いである。また、友情や愛情といった他人を思いやる行為に弱く、涙もろい一面を持つ。歌を歌うことが好きだが、ひどい音痴で聞くものに堪えがたい苦痛を与える。だが本人は、そんな歌を自慢のものとしていて何かと周りに聞かせたがっている。しばしばリサイタルを開いて、子供たちを強制参加させることが恐れられている。今回はカザリの標的となってしまい、寄生型ヤミーに取り込まれることとなったが、ユーノによって命からがら助かった。

骨川スネ夫（ほねかわ スネお）

声：　肝付兼太

2月生まれ。のび太のクラスメイト。身長が低いのをコンプレックスにしている。性格は自己顕示欲旺盛なナルシスト。毎日鏡の前に立って、自分の顔を褒めている。家は非常に裕福で、父親は会社をいくつも経営する社長。のび太たちによく自慢話をしているが、その半分は事実に脚色を施した大ぼらである。それが原因となってトラブルを呼んだりしている。

サブキャラクター

ジャイ子

声：青木和代

ジャイアンの妹。4月生まれ。ドラえもんが来ない場合の未来では、のび太の妻となるはずだった。ジャイアンとは違い、母親に叱られる事は滅多にない。漫画を描く際のペンネームはクリスチーネ剛田。『虹のビオレッタ』、『愛フォルテシモ』などの漫画を描いたが、否定的な自己評価をしていた。

先生栄一郎（せんじょうえいいちろう）

声：田中亮一

のび太のクラスの担任。いつも恐ろしい量の宿題を出したり、宿題忘れや遅刻をすると廊下に立たせるという、古風なタイプの教師である。厳しいながらも生徒のことを気にかけている常識人として描かれている。生活指導を担当しているのか、放課後はよく町内をうろつき、生徒に出会うと道端で説教をしたり褒めたりする。そのわりに、ジャイアンやスネ夫のいじめが先生の目に止まることはあまり無い。ただしのび太のママとは異なり、一度目に付けばお説教と

なる。「そんなことをする（ところにいる）暇があったら勉強を・・・」などというお決まりの台詞がある。

野比玉子

声：千々松幸子

怠けた印象があるのび太にはやや厳しい専業主婦。のび太たち家族からは基本的に「ママ」と呼ばれる。　実はバストが８５、ヒップが９２というナイスバディーの持ち主で、メガネをはずすと美人。太ったときの体重は５８ｋｇである。癖は舌で唇をなめること。また、のび太が使っていた（部屋に置いていた）ドラえもんの道具を、それが何かもわからず勝手に使ってしまった結果のび太やドラえもんたちが被害を受けたりと、作品中のトラブルメーカー的な役回りも持っている。

登場ヤミー

ネコヤミー

身長　２２２？　体重　４２０？

特色／力：超越的な身軽さと強烈な腕力、肉の塊

カザリが物欲を抑えられない剛田武（ジャイアン）にセルメダルを投入し、生まれた白ヤミーがジャイアンに寄生したまま暴食を繰り広げた結果誕生した猫系成長ヤミー。体内のセルメダルのエネルギーを増幅することでメダル状の光弾を口から発射する。この攻撃はジャイアンに寄生している状態でも可能。　また丸々と太り脂肪を蓄えた体は、ユーノのスレイヤーブレイドやツインブレイドによる斬撃を弾いてしまい、攻撃を寄せ付けないほどの弾力性がある。　ただし全くダメージを受けないというわけではなく、ある程度以上強く蹴られたり、斬られたら跳ね返せずに普通にダメージを受けてしまう。この弾力

性を利用してゴムまりのように跳ねてカウンターを食らわせることも可能。　ネコというモチーフと弾力性の恩恵なのか、肥満を絵に描いた図体に反して意外と身軽だったりする。人間に寄生するタイプであるために攻撃できず、ジャイアンを助けようと悪戦苦闘するユーノの前でジャイアンから飛び出してこの姿に成長、ユーノと戦い攻撃が通じない体で優勢に立つが、スレイヤーショットによるキックではダメージを受けてしまい逆に追い詰められてしまう。　スレイヤーキックで倒されかけるがカザリがコンクリート柱を何本も飛ばして妨害したおかげでダメージは受けたが致命傷にはならず、そのまま逃走した。その後はジャイアンの体内に戻り、本人が拒んでいるにも関わらず物欲から暴力へと欲望が変化し、ついにジャイアンを取り込んで完全体に成長した。弾力性の体と体内に人間を取り込んでいることで全力で攻撃できずユーノを悩ませるが、助けるというユーノの強い想いから急速に完現術使いこなしていき、高速移動から繰り出されるリボルスピンキックによって体内に充満したセルメダルをかき分けられジャイアンを引きずり出されてしまい、スレイヤースラッシュによる空間切断を受け爆散した。

追いかけっこと巣とセレブ（前書き）

“才能とは天から与えられた使命だ、自分に対していっさいの空間が開かれるような方向がひとつはあるものだ”

―ラルフ・ワルド・エマーソン

追いかけっこと巣とセレブ

ユーノ・スクライア外伝、ここまでのハイライト。

カ「僕たちグリードが封印されてる間に、人間たちも変わったんだよ・・・」

リ「人間は欲望一つコントロールできない。自業自得ね」

な「ここから先は私達機動六課が何とかする。それまで、絶対に近づいちゃ駄目だよ。」

し「どうして・・・？どんなに親切な人達だとしても、どうやってそれを・・・」

ユ「手が届くのに手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　トラ二枚　チーター二枚

〈リリスＳｉｄｅ〉

「あなた・・・・――――」

「暫くぶりだな。リリス――――――――」

「・・・アスモデウス・・・・！」

リリスは今非常に驚いていた。

何に驚いているのか・・・・・・それは自分と同じ破面魔導虚の一人で現在は別件の任務、即ちアンゴルモア捜索の為に異世界を飛び回っている筈のアスモデウスが自分の目の前に現れたのだから。

目を見開きまるで睨み付けるような様子のリリスに、アスモデウス

は不敵な笑みを浮かべて言う。

「どうした？俺の顔がそんなに気に入らないのか」

「べ、別にそんなんじゃないわよ。ただ、何であんたがここに居るのって聞いてるのよ！？あんた、ドクターの命でアンゴルモア捜索に精を出してたんじゃないの？」

すると、それを聞いたアスモデウスは徐に次の事を口にした。

「その件に関して報告だ。実は一つドクターから頼まれごとがある。ドクターからお前への重大な商談のためのな」

「商談？」

最後の言葉を聞き、首をかしげるリリス。

刻々と時間が時の流れによって過ぎ去ろうとしている中、一体アスモデウスはリリスに何を言おうとしたのだろうか？

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

一方、破面魔導虚とは別にグリードの一体、カザリはユーノからメダルを奪われ、ユーノスからの助言を聞くと、仲間たちと話し合い人間から騒がれないために人間の姿として現代社会に溶け込む決意をし、適当に選んだ人間の姿で街中を徘徊していた。

ちなみに彼が擬態した人間の特徴は、黄色の上着を着た銀髪の青年

の姿であった。

悠々と街中を歩きながら、カザリはその姿のままある場所へと向かう。

向かったのは、とある次元世界の片隅にある今じゃ廃れて誰も近づこうとしない酒場のような場所であった。

スケートボードを滑らせ廊下を移動するカザリは一番に到着し、他の仲間のグリードが集まってくるのを待つ。

すると、暫くして二人の男の姿に擬態したグリード二体がやってきた。

一人は緑のジャケットを着たオールバックの青年の姿をして、もう一人はグレーの服を着た長身の男性である。

カザリは到着した二体のグリードをそれぞれ見ると、カウンターテーブルの上に腰を掛けながら鼻で笑う。

「はっ。いいじゃない。似合うよその姿」

「よくはないが、いちいち人間に騒がれないですむのは面倒がなくていい」

カザリの隣に座った緑のジャケットを着た青年、ウヴァがそう答えるとカザリもまた納得した様子で帽子を脱ぎ去り言う。

「そっ。動きやすくていいよね。」

そして、そのまま元の怪人態の姿となり更に口にする。

「気に食わないけど、ユーノスが言ってたことは正しいよ。この１５０年で人間は急速に進化した。僕達も変わらないと」

「ユーノスか・・・・・・」

カザリの言葉にそう相槌を打ったウヴァも同じように怪人態となり、徐に自分の右腕をッ凝視する。

そして最後に怪人態となったガメルは未だ自分たちの前に姿を現さないでいるメズールに不安な声を上げる。

「メズールがまだ戻らない・・・なぜだ・・・」

カザリをそれを聞くと、次のように答える。

「彼女のことだし、まだ気に入った人間がいないのかも。それとも、とっくに手に入れて遊んでるか、でしょ？」

では、カザリがそう推測を立てるメズール自身は一体何処で何をしているのか？

彼女は現在、ミッドと同等の科学水準を持つとされる第１０９管理世界「プーマ」の都心部辺りに位置する高級マンションの一つであった。

今回そのマンションに住む一人の女性がメズールの欲望の標的となってしまうのだ。

その女性を乗せた一台のリムジンがマンションに到着する。

運転手がドアを開くと、中から高級ブランド服に身を包んだ女子学生が出て来た。

彼女の名は大久保麗華（おおくぼれいか）、１８歳。

服飾の専門学校に通う、裕福な家庭に育った女性だ。

麗華は運転手から街で購入した大量の高級服及びブランド品が入った袋を受け取ると、にこやかな表情を浮かべて自分の部屋へと向かった。

エレベーターのボタンを押し、到着を待ちながら身だしなみを整える麗華。

するとそんな彼女の様子をエレベーターの素材に使われたタイルに反射して、セーラー服に身を包んだ少女が覗き込み、徐にこう言って来た。

「それ、全部買ったの？」

少女が麗華の購入した大量の服を見ながらそう口にすると、聞いた麗華は徐に振り返り肯定の言葉を返す。

「そう」

「たくさん買うのが好きなの？」

「たくさん？これっぽっちで？」

少女の質問に軽くそう返答した麗華。

すると、その答えを聞いた瞬間少女の体からセルメダルが数枚放出され、麗華がタイル越しに目にしたのは今まで擬態していたグリードの一体、メズールであった。

「！」

メズールの姿に思わず目を奪われる麗華。

そんな麗華にメズールは徐に近づきセルメダルを手に取る。

「その悲しいまでに大きな欲望・・・気に入ったわ」

メズールはそう言うと、麗華の額に出現したセルメダルの投入口にセルメダルを投与。

そして、気が付いた時麗華はいつの間にか自分の部屋の中で立っていた。

「あれ？私、今何してたっけ？」

そんな事を考えながら、麗華はそのまま買って来たブランド品がぎっしり詰まった袋を机の上に置き、適当な飲み物を取りに台所へ向かう。

麗華の部屋の中には家庭用品よりも彼女の欲望を具現化した高級ブランド品や服がその大半を占めており、部屋は服で溢れかえっていた。

飲み物を取りに行った麗華はリビングに戻ると、買って来たばかりの品物を確かめるため袋を開け始める。

だがこの時そんな彼女の背後に巣を作ったメズールのヤミーの卵が密かに成長を始めようとしていた。

何か妙な気配を感じ、徐に後ろを振り返った彼女だが振り返った先には何もない。

不審に思いながら彼女は気にしないことにした。

「まいっか」

御満悦な様子でブランド服を手に取り鏡の前に立つ彼女の姿を、気づかれないように人間に擬態したメズールが不敵な笑みを浮かべていた。

◇

〈リリスＳｉｄｅ〉

メズールがヤミーを仕掛けてしばらく時間が経ったとある次元世界。

夕陽が辺りを照らし始めるころ、破面魔導虚リリスはアスモデウスより聞かされたスカリエッティからの指令に思わず耳を疑った。

「グリードにアンゴルモア集めを手伝ってもらう！？」

なんとスカリエッティはあろうことか、グリードにアンゴルモア集

めを手伝ってほしいということをリリスに要求してきたのだ。
商談の胸を端的に伝えると、アスモデウスは更に詳しい話を進める。
「ああ。ドクターは共通の目的意識を抱き、且つ欲望と言うあの方の最も根本的な興味を極限まで磨き上げ生まれ出でたグリードに非常に強い興味を抱いている。そこで、我々とグリードが手を組み、アンゴルモアとそしてメダルを確保するのだ」
「だけど・・・そんなことして大丈夫なの？」
一抹の不安をつい抱いてしまうリリス。
それを聞いたアスモデウスはこう言い返す。
「何を怖気づく。グリードと言っても、所詮は欲望の塊でしかない。我々の敵になるどころか、脅威にすらなりはしない。ただ、利用価値はそれなりにある。」
「で、それで私はどうしろと？」
「先ずあのカザリと言うグリードに接近しろ」
リリスはそれを聞くと、更に表情を一変させ復唱する。
「カザリと？」
「そうだ。奴を中心に残りの連中も上手く利用すれば効率的にこちらの事が進む。奴を丸め込んだ時こそ、勝利の方程式は完成へと近づく。」

「でもね・・・あのカザリを丸め込むのって骨が折れるわ・・・一人で出来るかしら」

この時点で何処か疲労一色の声色を発するリリスに、冷笑を浮かべながらアスモデウスは淡々と口にする。

「もしものときは、俺達がフォローする。期待しているぞ。ドクターも、俺もな」

アスモデウスはその事を伝えると、解空で空間を引き裂き、他の異世界での調査を再開するために姿を消してしまった。

彼がいなくなった後、リリスはカラスの鳴き声を耳にしながら重いため息をつくのであった。

「はぁ・・・」

やがて、夜が訪れた。

第１０９管理世界「プーマ」の住人でありヤミーの親となってしまった大久保麗華は自室のリビングで密かに彼女の欲望を食らい成長を続けるヤミーの事など一切気づかないまま、ファッション雑誌を読み漁っていた。

「あ～これ絶対ほしい！明日買いに行こう」

雑誌の中に映っている高級ブランド品や服に目を奪われ、欲望を露わにする麗華の後ろで更に卵が成長を続ける。

メズールはその様子を遠く離れた港の方で感じつつ、人間態のまま熟す機会が来るのを楽しみに待っていた。

「ゆっくり・・・じっくりとね・・・子供達・・・」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

同時刻、ミッドチルダ郊外に位置する機動六課隊舎寮にて、ユーノ・スクライアは師・一護との定期連絡を行っていた。

“こんばんわ、元・翡翠の魔導死神で巷ではすっかり淫獣扱いされてます、ユーノ・スクライア２４歳（独身）です。”

“いつもは、何の取り柄もない駄菓子屋の店主で考古学者なんですが――――――最近はこう・・・いろいろありまして・・・”

読者の方々にそう語りかけながら、ユーノは機動六課のスタッフ陣が記録していた自分が完現術者として、ヤミーと激しい戦闘を繰り広げている映像を見ながら苦笑いを浮かべる。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｓｌａｓｈ〉

『セイヤー！』

「あはは・・・・・・・・・」

“え～～と・・・――――完現術者なるものとか、やってるんですが・・・・・・”

そんな苦笑いを浮かべながら読者に語りかけるユーノに通信画面の一護は問う。

『一体誰に向けてナレーションしてんだよ、お前？』

「えっと・・・多分読者の人だと思いますけど・・・」

『そこは何で自信なさげなんだよ』

何気なくそんな事を感じた一護であった。

それから8時間後。

ユーノは自室のベッドに包まりながら、グリード及びヤミーとの立て続けの戦闘ですっかり疲労困憊した身体と魂を眠りによって癒そうとしていた。

「ん～～～～～」

まぁ実際今は朝の五時前だし、普通に誰もが眠って居たい時間帯だ。

しかしそんなユーノを叩き起こそうとするフェレットがこの部屋には居た。

そう・・・七大元帥のユーノス・スレイアである。

「ユーノ。朝だぞ。そろそろ起きなくていいのか？」

ユーノスはベッドに潜ったユーノスの傍らで、穏やかに彼を叩き起

こそうとする。

ユーノは辛そうな声色で言い返す。

「まだ五時前ですよ～～～それに今日は日曜でオフシフトですし～～もう少し睡眠とらせてください～～～あんまり寝た記憶ないんですから年間通して～～～」

“改めて、僕ユーノ・スクライアはちょっと影あるハンサムなのはバカ男。”

「ユーノ。ユーノ、起きないのか?朝陽は気持ちがいいのだぞ」

“偶然の出会いと巡り合わせで、１５０年の眠りから目覚めた伝説の七大元帥最強の結界魔導師、ユーノス・スレイア元帥と出逢って、いつもは普通の人間・１５０年前にユーノス・元帥が封印した邪悪な存在、グリードとヤミーが現れた時は完現術者として・・・ユーノス元帥が回収を試みるグリードの力の源、コアメダルを探し集める日々。”

「ユーノ。おい、ユーノ!起きろと言っているのだ!」

ユーノスも躍起になってユーノを起こそうと大声を上げる。

すると、耳元で大声を上げるユーノスの態度についに我慢が出来なくなってしまったユーノは布団を捲り上げると何時もの温和な性格を一変、ユーノスの体を鷲掴みにする。

「でああああああ!!!!!だ・か・ら!!!!!!まだ五時にもなってねェって言ってるだろうが!!!!!!」

「うわあああああああああああ！！！！」

ユーノは人格を豹変させると、ユーノスを壁の方へと投げつける。

ユーノスは勢いよく叩きつけられ、鈍い音がユーノの耳に入った途端、彼はことの重要さに気が付く。

「あ・・・・・・・」

「う・・・・・・・・」

ユーノスはずるずると激突した壁から落ちていく。

ユーノは暫くしてから自分がしてしまった暴力的行動を土下座をして謝罪する。

「す、すみませんでした・・・！」

ユーノスは顔を赤く染めながら自分もまたユーノに謝罪の言葉をかける。

「いや・・・俺にも非はある。無理に起こそうとしてすまなかった。」

「あ、いえ・・・」

「ふん。偶にはいいさ、こう言うのも」

〈Ｃｏｎｆｉｒｍａｔｉｏｎ〉

ユーノスはいまだ申し訳なさそうな顔を浮かべるユーノを鼻で笑った後、結界印を取出しその中に収められている回収したコアメダル七枚を空中に浮かべる。

“ユーノス元帥と出逢って一週間、集めたコアメダルは現在、タカ二枚・バッタ一枚・トラ二枚・チーター二枚の計七枚。”

“この間の戦いで、グリードの一体カザリにカマキリのコアを奪われてしまった。”

“僕個人として、何の因果か知らないがこの戦いに巻き込まれることになった訳だが、困ってる人の助けになれるのなら力を貸すのが人間の道理だろう。”

“さてさて、ところで僕は完現術者として様になってきているのであろうか?”

「はぁ～～～」

思わず深いため息をつく疲れの取れていない様子のユーノ。

ユーノスは彼に近寄ると、徐にこう言って来た。

「その顔、あまり気分がいいわけではなさそうだな。」

「何ていうかこう・・・歳の所為か疲れがとれづらいというか何と言うか・・・」

「いや。それは歳の所為なのではない。恐らくは完現術に不慣れな

事から生じる魂の疲労だ。今日は取り敢えずゆっくりしろ。」

「いいんですか？」

「ああ。今日は休め。なのは達と一緒に平和に過ごすといい。少しは休まないともたないぞ。もう七枚もコアメダルを集めてもらったのだからな。」

「その件なんですが、やっぱり管理局に手渡す方がいいんじゃないでしょうか？」

通常、ロストロギアと認定された古代の遺物は適切な処理を受けるという上で、例外なく管理局に明け渡すのが通例だ。

しかしユーノスは敢えてそれを行わず、こうして自分で持ち歩いている。

その理由はこうである。

「無闇にこれを管理局に渡せば、コアメダルの臭いを嗅ぎつけたグリードが必ず襲撃してくる。それに、この結界印には常時コアメダルの力を抑制する働きがある。万が一の時も考え、やはりここはこっちで持っている方が都合がいい。余計な犠牲を出さずに済む。そうだろ？」

「はい・・・・・そうですね・・・」

ユーノスの言葉に納得したユーノはそう言うと、徐にベッドから起き上がると、目の前のユーノスにこう言う。

「じゃあ、今日はなのはとヴィヴィオを連れて、買い物にでも行くとしますかな・・・」

「ああ。ゆっくり静養して来るといい」

ユーノとユーノスはそのように言葉を交わすと、朝陽を見るために閉められたカーテンを開放し、その身に太陽光をいっぱいに浴びようとしたが・・・・・時期は冬。

まるで太陽など出ておらず、世間は暗闇で支配されていたため、二人は思わず早く置きすぎたと若干後悔するのであった。

１１月１７日　午前１１時００分　日曜日

“と言う訳で、ユーノス元帥の厚い行為に甘えさせてもらい、今日はちょっと遠出して、なのはやヴィヴィオ、それにウチの従業員や恋次さん達と一緒に第１０９管理世界「プーマ」の中心に位置する巨大ショッピングモールに買い物にやってきました。”

恋次や鬼太郎、浦太郎は目の前に広がる嘗て自分たちがどの世界でも見たことのない巨大なショッピングモールの大きさに圧倒され声を漏らす。

「「「どへ～～～」」」

「広いですわね～～～」

「ああ。一日では決して回りきれぬな」

マリアとルキアも思わず同様な事を述べる。

ユーノは一緒に来たなのはとヴィヴィオの中心に立ちながら、肩に乗せたユーノスと一緒に二人のリアクションを微笑ましく見ていた。

なのはとヴィヴィオはすっかり普通の女の子の表情を浮かべながら見どころ満載のあたりを見渡していた。

「こんなショッピングモールが管理世界に出来てたなんて、全然知らなかったねヴィヴィオ♪」

「うん。あ、見て見てママ！“服飾品大バーゲン開催中”って書いてあるよ」

ヴィヴィオは暖簾に描かれた文字を見て指を差すと、なのは達は早速その暖簾が出ている店へと近づき、陳列された服飾品を手に取る。

「あ！これって一流ブランドメーカーで作られたバックだけど、定価の７０パーセントオフだって！」

「すっごおーい！！こんなに安いんだ！」

「アウトレット品でもねぇのになんでこんな安く提供できるんだろうな」

「何か秘訣があるんでしょうね♪取り敢えず適当に回ってみようか」

「うん！そうだね♪」

「それじゃあ、レッツゴー！」

ユーノ達はこの巨大なショッピングモールの中を歩き始め、適当に店の中を見物する。

ヴィヴィオとルキアはファンシーショップに立ち寄ると、棚に並べられた二人の大好きなウサギのぬいぐるみを手に取り顔を染めながら興奮した様子であった。

「ルキアさん、ほら見てくださいウサギがいっぱいですよ！！」

「おおっ！本当だな・・・！あ～～～なんて可愛いんだ？？おお！見ろ！これなどチャッピーにそっくりだぞ！！」

「あはは♪こっちもほら！クリスそっくりです！」

二人はすっかり女の子としてはしゃぎつくすのであった。

その間に、男の死神組はドラッグストアに立ち寄りミッドチルダで売られている者と同様の商品でありながら割安の価格で売られていることに驚き返り、吉良と白鳥は思わず声を漏らす。

「このボディーソープ、ミッドチルダで買うより安いであるぞ」

「本当だ。何本か買って行こうか？」

すると、二人のもとへ恋次が興奮した様子で近づいて来た。

「おいおい！いつも使ってる入浴剤、安売りしてるぜ！」

「何、本当であるか！」

「あれ？入浴剤なんか使ってたかな・・・」

そんな事を考えながら吉良と白鳥は恋次の跡について聞く。

一方でスクライア商店三人はその隣にあるスーパーマーケットへと立ち寄り、同じく割安で売られている商品に目移りをしていた。

鬼太郎は特に豊富な品揃えのプリンのコーナーにすっかり座り込み、いくつかのプリンを手に取り真剣に睨み合っていた。

側でその様子を見ていた浦太郎と金太郎は目的の品を既に購入していたため、いつまでも悩んでいる鬼太郎に些か苛立っている様子であった。

「早くしてよ先輩・・・！」

「ちょっと待て。ここは真剣に選ばせろ！」

「たかがプリンでしょ？どっちも一緒じゃないの？」

「バカヤロー！てめぇらには一生プリンの奥深さが分かってたまるか！！」

「やれやれ・・・困ったものですな・・・」

「本当・・・」

もう呆れることしかできない二人であった。

しかし、ここでもっと呆れてしまう光景がその斜向えに佇む服飾店

で広がっていた。

「いててててて！！！！痛いってば二人とも！！！！！」

そう・・・ユーノ・スクライアを巡って繰り広げられる正統派ヒロインの高町なのはと今回新たに参入した女死神、小鳥遊万梨阿の女の戦いであった。

二人は興味の湧いた服を試着すると、それをユーノに逸早く見てもらいたくユーノの寮で腕を引っ張り合いながら子供のように取り合いをする。

「ユーノ様？？私のこの格好、如何でしょうか？なにとぞ評価のほどを！」

「ユーノ君～～～！私の服も見てよ～～～綺麗なのそうじゃないの～～～！」

二人は互いに意地を張り合い、更にユーノの腕を強く引っ張る。

「いだあああああああああああ！！！！！！！止めて！！！！！！！！！！腕がちぎれる！！！！！！！！！！！！！」

傍から見れば実に不幸な境遇のユーノ。

吉良とユーノスはそんなユーノを遠くで見ながら思わず哀れみの感情を抱く。

「ユーノさんも災難ですよね・・・」

「ああ・・・これでは疲れを取るどころか逆に溜まってしまう・・・」

しばらくして、ユーノは駆けつけた恋次達によって救出されると、疲労困憊の身でありながら更に疲労を溜めた様子で肩を落としながら道を歩き、その両脇で一緒に歩くなのはとマリアは自分たちの行動を深く反省していた。

「「う・・・ごめんなさい（すみません）」」

ルキアとヴィヴィオはそれぞれ二人に向かってこう言う。

「全く。二人揃ってなんだあの様は。反省しておるのか？」

「「はい・・・・・・／／／」」

「ママ。パパを盗られたくないって気持ちは分からなくもないけど、だからって私やこんな公然の目の前で張り合うのはどうかと思うよ」

「う・・・実に鋭い指摘に何も言い返せない・・・」

「パパも腕大丈夫？」

「結構痛いかも・・・」

心配そうにのぞき込む娘の言葉に、腕を回しながらそれなりに辛そうな様子で返事を返すユーノであった。

と、そんなユーノを中心とする１１人がアーケードを歩いていると、ヴィヴィオの肩が不意に自分たちの前を通り過ぎようとする女性と

ぶつかってしまう。

「きゃあ！」

その女性、大久保麗華の手元から高級ブランドの服が落ち、ヴィヴィィオはその事とぶつかったことを直ぐに謝る。

「あっ、ごめんなさい！」

一方で麗華は不機嫌そうな表情をヴィヴィィオに浮かべる。

「ちょっと。気を付けてくれる。それ、昨日買ったばっかりなの」

痛烈な言葉を耳にし、暗い顔を浮かべるヴィヴィィオ。

なのはとヴィヴィィオはすぐに麗華に対して先ほどの事をヴィヴィィオの保護者として謝罪する。

「あ、すみません！私達の娘がとんだことをしてしまい申し訳ありません。」

「これはキチンとクリーニングに出してお返ししますので・・・」

ユーノはそう言って地面に落ちた服を拾上げる。

すると、麗華はあっさりと様子でこう言った。

「いい。もういらないし。あげるからその娘が大きくなったら着せれば」

「「「えっ？」」」

一瞬耳を疑うユーノ達三人。

麗華は去り際、ちょっと小馬鹿にした顔でヴィヴィオをみながらこう言った。

「安物だけど、少しはマシかもね」

そして呆気にとられる三人や他の面々を無視して麗華は立ち去っていく。

「ちょっと待って！貰えないよ！」

「あの！！」

なのはとヴィヴィオは彼女が置いて言った服を持ちながら大声で呼びかけるが、彼女は振り返らず悠々と歩き去って行ってしまった。

鬼太郎や恋次達はユーノ達の方へと近づくと、麗華の態度にあまりいい印象を覚えなかった。

「うわ～～～何だあの性悪女～～～感じ悪いっすね！」

「見たところ裕福な家庭に育ったということは伺えるが・・・私とは全然違うタイプの様だな」

「ああ言うのって・・・将来碌な人間にならないよねきっと」

「然様。近いうちに後悔いたいします」

各々が麗華の態度にそのような評価を下す一方、なのはの隣でヴィヴィオは残された服を持ちながら暗い顔を浮かべ、ユーノとその肩に乗ったユーノスはヴィヴィオを心配しつつ、麗華から感じ取れる奇妙な違和感に皺を寄せた。

「「・・・・・・」」

その後、粗方の見物を終えた一同は海岸線へとやってきていた。

ヴィヴィオがため息交じりに手すりに掴まっていると、それを見たなのはがジュース片手に近づいて来た。

「ヴィヴィオ。そんなに暗い顔しないで。はい、ジュース」

「ありがとう・・・だけど・・・」

ヴィヴィオはそう言いながら鞄の中に入った先ほど立ち寄ったクリーニング屋で洗ったばかりの麗華の服を一瞥する。

恋次はそんなヴィヴィオを見ながら思ったことを口にする。

「くれるって言ったもんなんだし・・・いいんじゃねぇのか貰っても」

「だけどそう言うのもちょっと・・・ユーノ君はどう思う?」

なのははそうユーノに尋ねようとしたが、その時ユーノは階段の方に腰を下ろしながら、ユーノスと共に険しい表情を浮かべていた。

「・・・・・・」

「？ユーノ君」

「パパ？」

思わず二人の様子が気になったなのは達。

吉良は徐に尋ねる。

「どうかしたんですかユーノさん？ユーノス元帥もそんな渋い顔して」

「いえ・・・なんか妙なんですよね・・・」

「妙とは、何がである？」

「ああ・・・気が散るというか・・・邪魔と言うか・・・そう・・・この気配・・・ヤミーか、あるいは―――――」

「「「「「「「「えっ！」」」」」」」」

ユーノスの言葉を聞き、思わず耳を疑う一同。

ユーノは重い腰を上げると、周囲から感じられる独特の強い気配に神経を張り巡らせながら、ユーノスの言葉を聞き入れる。

「ユーノ」

「はい」

「変身しとけ！急ぐんだ！」

ユーノスは結界印を取出し、それをユーノの掌に収める。

ユーノスを肩から下すと、ユーノはなのは達をその場から下がらせる。

「なのは達は下がって！」

「え？」

ユーノの言葉にそう言葉を漏らしたなのは。

と、その直後唐突に海の中より何かが飛び出し、驚愕する一同。

ユーノは飛び出してきたものを見ながら結界印の力を開放し、完現術を発動させた。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

スレイヤーモードとなってその場に構えると、ユーノ達の目の前にグリードの一体が現れた。

「な！」

「あれは・・・！」

「んっ？」

現れたグリードは、水棲系幹部のグリードで、シャチを模した頭部、首元にはウナギが巻きついたようになっており、タコを模したマント、タコの吸盤状の意匠がある脚部に加え、全体的に流線的なフォルムが目立つグリードの紅一点、メズールであった。

「何だ!?こやつは・・・！」

メズールの姿をその目にし、警戒するユーノ達。

現れたメズールはそんなユーノと、その傍らで自分を睨み付けるユーノスを見ながら言葉を発した。

「まったく。そんな程度の体のくせして、アンクなみのめざとさは変わらないのね、ユーノス」

「お前のジメジメした気配もな。ユーノ、気をつけろ。あいつはグリードの一人、メズールだ」

「な、グリード！」

「よろしく。ユーノ・スクライアの坊や」

メズールは次元世界を渡りながら耳にしたユーノの名前をまるで子供を手名づけるような口調でそう口にすると、聞いていたユーノは思わず声を漏らす。

「坊やって・・・」

「あんにゃろおおお！！！店長をガキ扱いしやがって！！」

ユーノに向けられたメズールの言動が気に食わなかった鬼太郎は烈火を取出し向かって行こうとするが、直ぐに金太郎に止められる。

「止めるのだ鬼太郎！ここは落ち着くのだ」

「く・・・！」

ユーノスはメズールを睨み付けながら、言い返した。

「メズール。俺たちの傍をウロウロするな。折角のユーノの静養が意味を持たなくなる」

「うっふふ。あなた達こそ目障りだよ。散歩も出来やしない。」

そう言うと、メズールはユーノの方へと走り出し、ユーノは渋い顔を浮かべてメズールと対峙することになった。

「く！」

なのは達はユーノの身を案じ、言葉を発する。

「「「ユーノ君（様）（パパ）！！」」」

全員に見守られながら、ユーノはメズールの身軽な攻撃に翻弄されつつも、逆刃刀でメズールを斬りつけようとする。

すると、唐突にメズールは戦闘を中断させ高く飛び上がると、呆気にとられるユーノに向かって別れの言葉を発した。

「ユーノ・スクライアの坊や！またね」

「あ、おい！」

メズールはユーノの言葉を聞き流し、そのまま何処へなりとも姿を消していった。

なのは達はそんなユーノの元へ駆け寄った。

「ユーノ君！」

「ユーノ様！」

「おい、大丈夫か？」

心配そうにユーノを覗く全員を見ながら、ユーノは変身を解除する。

「はい。それにしても、グリードが散歩ね。それって、ヤミーを仕掛けたってことですかね？」

そうユーノスに尋ねると、ユーノスは歩きながらこう返事をする。

「だとしても、メズールのヤミーはそう簡単に出てこない。」

「どうしてですか？」

「何処かに巣を作って、人間の欲望を喰っている可能性がある。」

「なんだそれ？どこにあるか分からねぇのか？」

「気配が小さすぎる。今の段階では全くな」

ユーノスは恋次の質問にそう答えると、海外線の向こうに見えてきた麗華が住んでいるマンションの方を眺め、そのまま口を閉ざす。

ユーノはそのユーノスの様子を見ると、ふと何かを感じとり、一度考えてから訝しげな様子のなのはに言葉を向ける。

「なのは。ちょっといい？」

「何？」

「はやてにこの事伝えてくれる。僕はユーノス元帥と寄るところがあるんだ」

「え？」

ユーノの言葉を聞き、思わず驚きの顔を浮かべるなのは達。

ユーノスはユーノの肩に飛び乗ると、感心した様子で口にする。

「ほう・・・気配は小さいのに、何か分かるのか？」

「それはこっちの台詞ですよ。ユーノス元帥、さっきあの建物見てたじゃないですか？」

「ふん・・・相変わらず大した洞察力だ」

ユーノがそう言った後、全員も二人が見つめる先にあるマンション

に目を向けた。

「あの建物に・・・ヤミーが・・・」

ユーノは眉間に皺を寄せながらその場から立ち去ろうとすると、不安な気持ちになったヴィヴィオが言葉を発する。

「パパは・・・また行っちゃうの?」

思わずその言葉に立ち止るユーノ。

ユーノは一度振り返ってヴィヴィオに申し訳なさそう笑みを見せると、ヴィヴィオにこう弁解してきた。

「ごめんねヴィヴィオ。だけど放っておくわけにもいかないからね。なに、ちゃちゃっと終わらせてくるよ。そうすれば、休暇を再開できるからさ」

「しかしユーノ殿は、立て続けの戦闘で魂魄の疲労が完全に回復していない筈では・・・」

「ここは誰か一人か二人、一緒について行った方がいいですよ」

「ありがとうございます。じゃあ、誰か僕について貰おうかな?」

彼らの行為に甘え、ユーノがそう言った直後真っ先に手を上げてきたのはなのはと、マリアの二人であった。

「「私が!!!・・・え?」」

ほぼ同時に手を挙げたなのはとマリアはお互いを見合い、恋次達は呆然とした様子で二人を見つめる。

「またお前らかよ・・・」

「よく考えが一緒になるよね」

ユーノもつくづく自分を巡って争う二人に頭を悩ませる。

なのはとマリアは向かい合うと、黒いオーラを発しながら笑っているのに笑っていない顔でこう言い合う。

「小鳥遊さん・・・ユーノ君の事は彼女であり幼馴染の私が一番よく知ってるんですから・・・譲ってくれません？」

「時間がどれだけ長いかは尺度になりませぬよ、なのはさん♪大切なのはどれだけユーノ様に対して愛を抱いているのか、ですわ」

「愛してますよ・・・あなたなんかよりもずっとずっと・・・ユーノ君の事・・・」

「でしたら私も愛していますわよユーノ様を・・・・・・この次元世界においてあの方を除いて私が愛するお方はおりませぬ」

「お互いに譲れないようですね・・・だったら、ここでユーノ君の相手にどちらがふさわしいかどうか、白黒つけましょうか？」

「望むところですわ。私の実力で、ユーノ様を戴かせてもらいますわ♪」

二人はデバイスと斬魄刀を取出し、その気になってしまう。

ヴィヴィオは恐れおののきながらユーノの陰に隠れる。

「ママ・・・小鳥遊さんも完全にその気になってる・・・／／／」

「はぁ～～～何で僕なんかの為にこんな面倒な事にならないといけないの・・・」

「ユーノもつくづく大変だよな」

「はぁ。呆れたものだ。なのは、小鳥遊！こんなところで騒ぎを起こせば、始末書書くだけでは済まないぞ。」

ルキアはそう忠告するが、二人は譲れない様子でこう言い返す。

「「構いませんよ（わ）！ユーノ君（様）をゲットするためなら、始末書だろうが何だろうが！！」」

ユーノは二人の言葉を聞くと、深いため息をつき意外な事を口にした。

「はぁ・・・しょうがない。二人には悪いけど・・・ルキアさん。代わりについて来てくれません？」

「「え！？」」

一瞬聞き違いではないかと錯覚するなのはとマリア。

一方で浦太郎と金太郎はユーノの提案に賛同する。

「それがいいですよ。こんな面倒な事になるくらいなら、その方がいいや♪」

「では、よろしく頼みますぞルキア殿」

「分かりました。では、参りましょうかユーノ殿」

「ええ♪」

ユーノはルキアを連れとして同行させることにし、ヤミーが潜伏していると思われるマンション目掛けて出発しようとする。

「「あ！待ってよ（下さい）ユーノ君（様）／／／」」

慌ててユーノの後を追おうとする二人だが、直後ユーノスの仕掛けたストロングバインドが二人の体を絡め取る。

「きゃ！」

「これは・・・バインド！」

ユーノスは二人の足元に現れると、呆れた様子でこう言った。

「頭を冷やせ。こんな姿でも、一応最強の結界魔導師の称号を持っているのだ。そのバインドはいくらエースオブエースや死神とは言え、外すことは容易ではないぞ」

「「そ、そんな～～～！！！」」

「ユーノ。この二人の事は任せておけ。先にあの建物の方へと向かえ。」

「了解です。じゃあ、なのは・小鳥遊さん♪頑張ってね♪」

飄々とした笑顔でそう言った後、ユーノは足早にルキアと共にその場から立ち去って行き、残されたなのはとマリアはユーノに助けを求めた。

「「ユーノ君（様）～～～／／／ヘルプミー～～～／／／」」

「「「「「「「「やれやれ・・・」」」」」」」」

最近のこの二人のユーノへ向ける行動に、正直馬鹿ではないかと思い始める恋次達は深いため息をつく。

と、その時なのはは辺りを見渡した時一緒に居たはずの少女、ヴィヴィオがその場に居ないことに気づいた。

「ってあれ!?ヴィヴィオは・・・ヴィヴィオ!」

ヴィヴィオはなのは達の前から忽然と姿を消してしまった。

一体彼女は何処へ行ってしまったのか？

〈グリードＳｉｄｅ〉

その頃、ユーノと戦闘を交えたメズールはそそくさと退散すると、たまり場としている廃れた酒場へと帰還し、先ほどの事を仲間のグリードに伝える。

「何っ!?ユーノスとその連れが?」

ウヴァは興奮した様子でメズールからの報告を聞き入れ、メズールは更に続ける。

「ええ。さっさと引き上げて来たけどね。折角仕掛けたヤミー・・・気づいたかもしれない。上手く育てば、あなた達にもたっぷりセルメダル分けられるのに・・・潰されたらたまらないわ」

「ううっ!俺が行く!ユーノスもその連れも、この手で叩き潰す!」

ウヴァは殺気立った様子でメズールにそう言うと、早速ユーノを探しに外へと飛び出すのであった。

メズールは思わず深いため息をつき、ガメルは少し怯えた様子であった。

「はぁ〜」

「ウヴァ、怒ってる・・・」

「メダルを取られてるからね。僕も同じだから、気持ちはよくわかるよ」

カザリがそう口にすると、聞いていたメズールは意外そうな様子で彼に詰め寄った。

「あら〜〜〜あなたがそんな同情的なことを言うなんて、珍しいわねカザリ――――――その悲しい姿の所為かしら?」

「かもね」

メズールはコアメダルが少なくなったことで弱々しい姿となっているカザリの体を見ながらそう言うと、カザリも思わずそう口にした。

一方その頃、１０６管理世界「プーマ」にある高級服飾店において、他の客に交じってあの大久保麗華は欲望に従い気に入った服や装飾品を次から次へと購入していく。

「雑誌に載ってたバックとワンピース、それとこの間止めたブーツ、やっぱり欲しくなっちゃったから持ってきて」

「ありがとうございます。すぐにお持ちします」

こうして彼女の欲望はメズールが予見した通り、悲しいまでに大きく膨らみを見せていくのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

彼女が買い物に満喫している頃、ユーノとルキアはヤミーが仕掛けられたと推測した麗華の自宅のマンションを訪れる。

「ここですね」

「はい」

と、二人が天井を貫かんとばかりに聳え立つマンションを仰ぎ見て

いると、直後隣りの方から聞きなれた少女の声が聞こえてきた。

「わ～～すごい。本当にお金持ちなんだね」

二人が驚きながら横を向くと、そこ居たのは紛れもなくヴィヴィオであった。

「え！ヴぃ、ヴィヴィオ！？なんでこんなところへ！？」

「ヴィヴィオ！ここはヤミーが潜伏しているかもしれぬだぞ！」

「ちょっとこっちへ・・・！」

ユーノはヴィヴィオを連れて一度その場から離れる。

二人に連れられ事情を問われたヴィヴィオは二人に謝りながらこう言った。

「ご、ごめんなさい二人とも！だけど私どうしてもこれを・・・！」

ヴィヴィオはバックの中から麗華が置いて行った服を取出し、ユーノとルキアは思わず顔を見合わせた。

「これって・・・さっきの服・・・」

「私やっぱり受け取れなくて・・・ちゃんと返した方がいいと思って・・・それでこっそりと二人の跡を・・・」

「ヴィヴィオ。そうか・・・お前は優しいな」

ルキアはヴィヴィオの頭を優しく撫で、少し照れながらもヴィヴィオは言う。

「えへへ・・・ママ譲りの訊かん坊ですけど」

「そうだね♪だけど安全と判るまではやっぱり危ないよ。取りあえず、ルキアさんと一緒にここで待機しといて。先に僕が様子を見てくる」

ユーノは二人をその場に残して先にマンションの方へと向かおうと歩き出すと、その時ユーノの前方に緑のジャケットに身を包んだオールバックの男が現れた。

「？」

ユーノはその男を見て、一瞬ためらいの様なものを感じる。

すると男はユーノを視認し、徐に言葉を向ける。

「ユーノス・スレイアの連れだな？」

「え？えっと・・・何処かで？」

「はじめてだ！どっちの顔も」

すると、男はセルメダルを体中に出現させ、そのまま人間態から怪人態の姿であるウヴァとなってユーノの前に立ち塞がった。

ユーノとルキアは思わず目を見開き、ヴィヴィオはウヴァの姿に悲鳴を上げる。

「「な！」」

「きゃあああああああああ！！！！」

「返してもらうぞ。俺のコアメダル」

ユーノは眉間に皺を寄せながら、ルキアに指示を出す。

「ルキアさん！ヴィヴィオ連れて逃げて下さい！その隙にユーノス元帥を！」

「はい！さ、ヴィヴィオ。行くぞ」

「でもパパが！」

ルキアは納得のいかないヴィヴィオを連れて足早にその場から立ち去る。

二人が逃げて言った直後、ウヴァはユーノに向かって突進してくる。

ユーノは突進し、飛び込んできたウヴァの攻撃から身を躱すと、次のウヴァの動きを警戒する。

ウヴァは反撃する素振りすら見せないユーノに尋ねる。

「どうした？メダルを出せ。ユーノスは何処だ？」

「さぁ。何処行ったのかな？」

「貴様・・・ふざけてるのか」

ウヴァは怒り心頭にユーノに向かっていく。

ユーノは何度もウヴァの攻撃を躱しながら、いら立ちを見せるウヴァに対処するため逆刃刀と洞爺湖木刀を取出し何度か剣をぶつかり合わせる。

お互いに距離を取った二人だが、ウヴァはユーノに鋭い鍵爪を向けながらこう言う。

「先ずお前を潰す。貴様を潰したユーノスなど、どうにでもできる」

ユーノは険しい表情を浮かべながら徐に懐から赤のラベルが貼られたジュース缶を取出し、そのプルタブを引く。

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

ユーノがウヴァによる襲撃を受けている間、なのはとマリアは相変わらずの様子で未だ抜け出せないでいるユーノスのバインドに悪戦苦闘していた。

「「ううううう・・・・抜けない・・・！！」」

「もう諦めろって・・・」

「往生際が悪いのって、よくないと思うよ」

恋次達が諦めの悪い二人にそう問いかけていると、そんな彼らのもとにユーノが送り込んだカンドロイドと呼ばれるジュース缶を変形させたタカカンと、そのタカカンが持ってきた通信端末機能を持ったバッタカンが飛んで来た。

「ん？」

「何だありゃ・・・」

「あれって確か・・・ユーノさんの作ったものじゃないかな？」

「え？ユーノ君が・・・どうしたんだろう？」

不思議に思いながら飛んで来たタカカンがバッタカンをユーノスの側へと落とし、バッタカンを通してユーノの声が聞こえてきた。

『ユーノス元帥ですか？』

「どうしたユーノ。一体何があった？」

『緊急事態発生なんです！グリードの一人と追いかけっこしてて・・・！』

「何っ！？」

『うわあ！』

その時、ユーノの悲鳴が全員の耳元に響き渡る。

「「ユーノ君（様）！！」」

二人はバインドに拘束された状態でユーノの身を案じる。

『ユーノ！俺達が行くまでとにかく逃げろ！』

ユーノスはユーノにそう言った後、通信を切り終え、なのは達のバインドを解除し、傍らで聞いていた恋次は顔を見合わせる。

「おいお前ら！今の聞いたよな！行くぞ！」

「ああ！」

「早くしないと、店長が殺されちゃうよ！」

白鳥はシフトで機動六課の方に居るスターズの面々に連絡をつける。

「こちら、白鳥礼二である。ロングアーチ、聞こえるか？」

『はい。こちらスターズ４、ティアナ・ランスター。どうかしましたか白鳥さん』

「現地でユーノ店長がグリードの一体と接触。追われているそうだ」

「ほ、本当ですかそれ！」

通信画面のティアナは思わず声を上げて驚きを見せる中、白鳥は冷静に言葉を並べる。

「はやてに指示を仰げ。それと現地での魔法の使用を許可を頼む」

『りょ、了解です！』

白鳥は連絡をつけると、なのは達と共にユーノの元へと急いで向かい、そんな彼らの様子を離れた場所から窺っていた破面魔導虚リリスはと言うと。

「どうやらこっちはこっちで大変な目に遭ってるようね・・・さて、私はどうするか・・・」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

なのは達がユーノの元へと急行しているその頃、執拗にウヴァに追い回されているユーノは走って逃げ惑いながら懐に手を伸ばし、自分のバイクを六課から取り寄せようと端末を操作。

「く！」

バイクが来るまでの間、ユーノは自分の神速を駆使して障害物を乗り越えながら追いかけてくるウヴァは必死で振り払おうとするが、ウヴァもまたユーノに負けず劣らずの速さでユーノを追いかけまわす。

そして、漸くユーノのバイクがハイパーマシンのファルコンに乗って到着し、その場に落とされると、ユーノは愛車「グリーンラベル」に跨り爆走する。

「来るなっ！」

エンジン全開で管理世界の道路を駆け抜けるユーノ。

ウヴァは車道に飛び出すと走行中の車の上を伝って行きバッタの跳躍力を駆使してユーノを追いかけていき、頭に生えた角から広範囲に雷撃を放ちユーノを攻撃する。

ユーノは苦い顔を浮かべながらそれを回避していく。

ユーノが危機に瀕している頃、恋次達を呼び行こうと移動していたルキアとヴィヴィオはその最中、意外な人物を目撃する。

「あ！ルキアさんあの人！」

ヴィヴィオが前方の人物を指さしルキアが凝視すると、見えてきたのは大量の買い物袋を手に取って歩く大久保麗華の姿であった。

「あれは・・・あの時の・・・」

ヴィヴィオは麗華を目にすると、一目散に彼女の元へと駆け出した。

麗華も思わず立ち止まり、近づいて来たヴィヴィオの顔を凝視する。

「あの！」

「何？」

すると、麗華は徐にヴィヴィオのバックから見えた服を一瞥し、冷淡な苦情で言う。

「それはいらないって言ったでしょ？」

「そうじゃなくて、今、あなたの家の・・・・！」

と、ヴィヴィオが彼女に重大な危機を報せようとするが、彼女は小ばかにした笑い方でこう言った。

「いるのよね。観光気分でマンション見に来る人・・・気持ちはわかるけどはっきり言って迷惑だから。」

ヴィヴィオの隣に立っていたルキアはそれを聞くと頭を抱え、未だ事の重大さに気づいていない彼女に叱咤する。

「貴様・・・そう言うことではなくてだな！」

と、その時麗華のバックから携帯の着信音が聞こえてきた。

「ごめん。父から。ミッドチルダからなの」

麗華は二人にそう言いながら携帯を取出し機嫌よく電話に出る。

「ハロー、パパ。どうしたの？」

そして直後、彼女の表情が一変し衝撃の事実を聞かされる。

「えっ・・・倒産？ちょなに・・・ウソ言わないでよ。パパ・・・！？じゃあうちはどうなるの？仕送りは？バイトって・・・あやられても困るわよそんなの！うちはどうすればいいのよ！！」

傍らでその事を聞いていたヴィヴィオとルキアは不安一色の様子で彼女の様子を窺うのであった。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

その頃、なのははバリアジャケットに身を包みユーノスの施したオプティックハイドで身を隠しながら、ユーノの元へと急行し、その方にはユーノスが乗っていた。

そして、全員で移動をしていると目の間にウヴァによる雷撃攻撃を必死でバイクを運転しながら躱すユーノの姿が目に映ってきた。

「ユーノ君！」

「いたぞ。急ごう！」

全員はユーノの元へと急行し、恋次達がウヴァからの攻撃をユーノから逸らしている隙になのはは走行中のユーノに近づく。

「お待たせ、ユーノ君！」

「なのは」

「ユーノ君に、御届け物だよ！」

なのははそう言うと、肩に乗っていたユーノスを手に抱え、それを見たユーノはヘルメット越しに言葉を発する。

「ユーノス元帥、結界印を！」

「ああ」

ユーノスは結界印を手渡し、ユーノは運転をしながらの変身を遂げる。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身を終えたユーノはウヴァの方へとバイクごと振り返り、恋次達に妨害されていたウヴァは彼らを振り切ると、車道のど真ん中に立ちつくし、ユーノに鍵爪を向ける。

「俺のメダルを返してもらおう」

ユーノはグリーンラベルのアクセルを捻りながら、飛び出す機会を伺い、そしてウヴァが飛び出すと同時にユーノもバイクを走らせる。

ある程度の距離にまで達すると、ユーノはバイクから飛び上がり空中にてウヴァとぶつかり合う。

衝突の末、わずかの差で攻撃を受けてしまったユーノは地面に倒れ、ウヴァは倒れたユーノの防護服の中から自分のメダルを取り出そうと躍起にやって攻撃を加える。

「俺のメダル！俺のメダルだ！返せ！」

ユーノは中のメダルを取られないように逆刃刀とスレイヤーブレイドで反撃を加え、恋次やなのは達も決定打を加えられないとわかった上で斬魄刀と魔法による攻撃をウヴァに加える。

「蛇尾丸！！」

「烈火！！」

「ダイナミックハリケーン！」

「スピアグレネード！」

「侘助！！」

「ディバイン・・・バスター！」

「破道の三十三『赤火砲』！」

「琴線斬『裂音』！」

ウヴァは彼らの攻撃を受けると、大した効果はないもののユーノから離れざるを得なくなり、ユーノスは遠くからウヴァを見ながらある事に気づいた。

「ウヴァの奴・・・もしかして知らないのか？」

ユーノスは一度考え確信した表所を浮かべると、大声を上げてウヴァに語りかける。

「ウヴァ！お前のメダル一枚は、カザリが持ってったって聞いてるか？！」

ウヴァはユーノスの言葉を聞くと、ユーノ達への攻撃を中断し、ユ

ーノスの方へと顔を向け言葉を漏らす。

「なんだと！？」

「やっぱりな。あのカザリが言うはずもないか。持ってたんだよ。俺達は一枚とられた」

〈ぐあああああああ！！〉

〈ウヴァのコアか。〉

その事を聞かされると、ウヴァは疑心暗鬼に陥りカザリへの怒りを募らせる。

「まさか・・・カザリの奴が・・・カザリの奴が！」

そうしてユーノ達の事などすっかり頭から離れてしまったウヴァを見て、ユーノスは好機だと判断し声を上げる。

「ユーノ、今だ！」

「あんまり気持ちのいいやり方じゃないけど・・・」

ユーノも同じく好機だと判断し、地面のコンクリートに宿った魂を足にかき集めると、以前のネコヤミーを倒すのに効力を発揮したチーターの如く敏捷性のある動きでウヴァへと近づいて行く。

ウヴァもそれに気づいて飛び出そうとするが、途端なのはや恋次達が仕掛けたバインドと縛道に縛り上げられ身動きが出来なくなる。

「うおおおおおおおお！！」

ユーノはその隙に先ほどのお返しとばかりに高速の蹴り技をウヴァに連発し、最後は距離とってからの最高速における飛び蹴りを浴びせた。

「セイヤー！」

「うぐあああああああああああ！！」

ウヴァは攻撃を受けると、後ろに下がりながらセルメダルを大量に放出させ、そしてその奥の方から一緒に出て来たクワガタ・カマキリのコアメダルを見た途端、ユーノスは走り出しそれを獲得する。

コアメダルの喪失により、ウヴァの上半身の鎧がセルメダルへと分解され、カザリ同様弱々しい姿へと変貌する。

ユーノ達がウヴァに警戒を見せる中、ユーノスは揃った三枚のウヴァのコアメダルを手に取りながら言葉を漏らす。

「そろったな。三枚」

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚

追いかけっこと巣とセレブ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はコアメダルの特徴についてだよ♪」

「金色の基盤に、それぞれの属性の配色（鳥系〈赤〉・昆虫系〈緑〉・猫系〈黄〉・重量系〈灰〉・水棲系〈青〉）を持つメダル。現在確認されている5種類のカテゴリーに分類され、その中には生物のパワーがより大きく封じられている。」

「それらがグリードの元となっている。グリードにとっては身体の核に当たるため、彼らは僕らの持つコアを執拗に狙うって訳」

恋「そういや、今日ユーノスの奴が三枚がどうのこうのって言ってたが、同じ色のメダルが三枚揃ったらどうなるんだよ？」

ユ「それは次回判明すると思いますが、それより気になるのは僕の完現術の方なんですって♪」

一「お前の完現術に？何かすごい事でも起こるのか？」

ユ「らしいんですよ作者曰く♪と言うことで次回は何と僕の力にある変化が！あ、ちなみにジャンプ見たかなみんな？一護さんのニュー死覇装かっこよかったね！」

一「よ、よせよ／／／照れるじゃねぇか・・・／／／」

ル「あれはもとはと言えば私のお蔭なのだがな・・・」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノはグリード及びヤミーとの戦闘を通して、コアメダルに描かれた生き物をもとにして新しいツールを開発した。

ユ「ようし出来たぞ♪さぁみんな、見て頂戴このカンドロイド！」

な「カンドロイド？このジュース缶が？」

なのは達は掌に乗せたユーノが開発したそのツール、カンドロイドなるジュース缶を訝しげな様子で見詰める。

一「こいつのどこが凄いんだ？」

ユ「見た目はただの空き缶ですが、プルタブをこうやって引けば・・・」

ユーノは徐にプルタブを引くと、直後赤と青、そして緑色のカンドロイドが形を変え、それぞれタカ・タコ・バッタの姿となって全員を驚かせる。

ス「すごーーい！これよく出来てますね！」

ティ「本当ね・・・て言うかこれどうやって動いてるの？」

鬼「おい見ろよこれ！このバッタ、通信機だけじゃなくて小型カメラまで付いてるぜ！」

恋「小型カメラ？はは～～～ん成程そう言う事か」

吉「何がそう言う事なんだい？」

恋「わからねぇかよ。こいつを使って、女どものあられもない姿を盗撮・・・」

と、面白半分にそう言おうとした瞬間、ユーノと一護からの鉄拳がお見舞いされる。

恋「ぐっほ！！」

ユ・一「んな訳あるか！！」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユーノス「ウヴァのメダルが三種類。三枚だ」

ヴィ「欲しいって思うのは悪くない」

ユ「大切なのは、その欲しいって気持ちをどうするか・・・かも？」

ユーノス「あの姿は・・・！」

第１４５話　お洋服と縋るとフルブリングコンボ

お洋服と縄るとフルブリングコンボ（前書き）

剣「剣は凶器　剣術は殺人術。どんな奇麗事やお題目を口にしてもそれが真実・・・・・けれども拙者はそんな真実よりも甘っちょろい戯れ言の方が好きでござるよ・・・・・願わくば、これからの世はその戯れ言が真実になってもらいたいでござるな」

弥「この刀はとてつもなく重い刀なんで、気軽にブンブン振り回す訳にはいかねェんだ」

お洋服と縄るとフルブリングコンボ

＞i２９１４１―７０９＜

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事

一つ、破面魔導虚アスモデウスがリリスと接触。

二つ、ヤミーの卵が密かに成長を続ける。

そして、三つ。ユーノはウヴァのコアメダルを三枚揃えた。

ウ「うおおおおおおおお！！」

ユーノス「そろったな。三枚」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚

〈ウヴァＳｉｄｅ〉

ユーノの攻撃を受け、自らのコアメダルを取り戻すことはおろか、逆にコアメダルを奪われてしまったウヴァ。

ウヴァは弱々しくなった体で息を立てながら、自分のコアを手に取るユーノスを睨み付け、声を荒げる。

「ユーノス！貴様まさか・・・・・・全部のコアメダルを手に入れようと・・・！」

ユーノ達はウヴァの言葉を聞き、徐にユーノスの方へと目を向ける。

ユーノスは不敵な笑みを浮かべながら答える。

「ああ。だがそれは欲望からくるものではない。厳然たる管理局の魔導師、七大元帥としての俺の使命だからだ。それとも、万が一俺がグリードだとして、コアメダルを欲しがらないと思うか？」

そうユーノスが逆にウヴァに問いかけると、ウヴァは思わず笑いが

込み上げてきた。

「・・・ふ・・・ははは。そうだな。俺も精々欲しがるとするか。コアメダル、必ず取り戻す！」

ウヴァはその言葉を残して、ユーノ達の前から飛び去って行った。

「あ！逃げた！」

なのはは直ぐにでも追いかけようとするが、ユーノスはそれを進めなかった。

「放っておけ。どの道あの状態では満足に戦えないさ」

「・・・・・・」

ユーノはユーノスの考えていることに思考を張り巡らせながら、徐に変身を解除し、他の面々も武装を解除しその場から立ち去った。

ユーノ達の戦闘が一先ず終息を見せたその頃、大久保麗華は父親より聞か冴えた事実を受け入れられず、脱兎のごとく家路へと走り出し、ヴィヴィオは麗華の後ろを追いかけ、その後ろを更にルキアが追いかける。

「ヴィヴィオ！待て！待てと言ってるだろう！」

「あの！待ってください！」

〈倒産？じゃあうちはどうなるの？〉

何度も何度も麗華の頭の中を巡るその言葉に、いつの間にか瞳からは涙が零れ落ちる。

麗華はマンションに到着するとエレベーターへと乗り込み、それを見かけたヴィヴィオとルキアは急いでエレベーターに乗り込もうとする。

「待ってください！」

しかし、追いついたと思った瞬間エレベーターのドアが閉まってしまい、二人はその場に立ち尽くす。

そして、エレベーターの中に居る麗華は力が抜け落ちると、弱々しい声ですすり泣き始めた。

「う・・・／／／／／／」

欲望にまみれた彼女の心を外からの圧力が追い詰める。

彼女は二つの力に挟まれ、どうなってしまうのか？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、戦いを終えたユーノ達はその場から移動し、ユーノスの真意を探るために人気のない場所へとやって来た。

全員に対して何も語らず手すりに足を掛けるユーノスの後姿に言葉を詰まらせていると、代表してここはやはりユーノが問い質した。

「ユーノス元帥。すべてのコアメダルを回収して封印するのはわかりますが・・・グリードが他のコアメダルを欲しがるって事・・・あるんですか？」

「あるさ。奴らの名はグリード。名前通り“欲望”だ。俺の調べでは、９５０年前・・・一番最初にグリードが封印されたときも同じことをしようとした奴がいたからな」

「え？それってもしかしてグリード・・・」

「そうだ。だがその正体は未だ俺も姿を見たことがない赤のコアメダルを持つ鳥のグリード・・・・・アンクだ」

「アンク？」

「詳しいことはまだはっきり掴めてはいない。ただ、とりわけグリードの中でも計算高くてメダルに関して目ざとい奴だったらしい。」

「そうですか・・・じゃあ質問変えます。さっき三枚がどうって言ってましたけど、それで何が起こるんですか？」

ユーノが核心的なことを尋ねると、ユーノスは全員の方へと振り返り、先ほど獲得したばかりのクワガタとカマキリのコアメダルと一緒にバッタのコアメダルを取出しそれを見せながら全員に言葉を発した。

「ウヴァのメダルが三種類。三枚だ。」

「ああ。カマキリにバッタにクワガタか・・・それが？」

恋次が一枚一枚に描かれた絵柄を見ながらそう口にし、ユーノスに尋ねるとユーノスは真顔を浮かべながらこう答える。

「グリードのコアメダルは、それぞれ三種類。そして、そのグリードを封印する存在だった失われし王の力『オーズ』が変身に使っていたのも三種類。」

「？」

イマイチぴんと来ない様子のなのは達。

と、その時それを聞いたユーノは逸早く何かに気づき徐に答える。

「そっか！仮にオーズの力があったとして、変身に使っていたのがバラバラだったとして、同じ種類三枚で変身できるってことですか？」

「その通りだ。これを“メダルのコンボ”と呼ぶのだが、今はあまり関係のないことだな。何しろオーズの力が消えた以上、コンボを使うどころか、オーズに変身することも出来ないのだからな」

「まぁね・・・」

浦太郎も共感した様子で言葉を漏らす。

ユーノスは結界印の中にコアメダルを収容すると、ユーノの肩の上に乗る。

すると、直後鬼太郎は気になったコンボと呼ばれるものの力がどれ

ほどのものなのかを尋ねた。

「なぁ、そのコンボって・・・実際どんなんなんだ?」

ユーノスはそれを聞くと、ユーノの肩の上に乗りながら背中越しに応える。

「そうだな・・・とんでもない力だということは聞いている・・・メダルのコンボ、その意味・・・メダルの本当の力が見られるというところか・・・」

「本当の力?」

思わず復唱するユーノであった。

そしてもうじき、メダルのコンボなどではないがユーノの身に完現術におけるとてつもない力が覚醒し様などということはこの時誰も思ってなどいなかった。

その後、機動六課で待機していたはやて達にここまでの大まかな事情を説明し終えたなのは達だったが、ユーノスが一度帰還して報告書として提出したいということもあって、ユーノス以下ルキアを除く恋次達死神組とスクライア商店三人は機動六課に戻ることとなり、マリアは相当悔しそうな表情であからさまにユーノと腕を組む幸せオーラ全開のなのはに嫉妬した。

ユーノスは帰還の際、先ほどのユーノの件も考え、ユーノにあれを渡しておくことにした。

「ユーノ!」

恋次の肩からユーノスがユーノに投げつけたのは、彼の所有物であり、ユーノが完現術を発動させるうえでは絶対不可欠な結界印だった。

「おっと！えっ」

結界印を受け取ったユーノは思わず声を漏らし、隣に居たなのはもユーノスの行動には驚きを隠せなかった。

ユーノスは呆然とするユーノに次のように言った。

「今回の事で、お前一人でも変身できなければ面倒なこともあるということがよく分かった。」

ユーノは渡された結界印をまじまじと見つめながら、納得した声を上げる。

「あっ、確かに」

「はやく行けユーノ。あのマンションに、ヤミーが確実に潜んでいる。」

「分かりました。あ、そうだ！なのはも一緒について来てくれない？実はヴィヴィオとルキアさんが一緒なんだ」

「え！そうなの。分かったよ」

ユーノはなのはにそう言うと、止めていたグリーンラベルに乗車し、なのはもその後ろへと跨りヘルメットを装着する。

恋次達残りの面々は一時帰還をする際、ユーノに向かってこう言った。

「ユーノ！分かってる思うが、兎に角無茶な事はするなよ！」

「大丈夫です。行こう、なのは」

「うん」

二人はそう答えた後、早速バイクを走らせルキアとヴィヴィオが向かったマンションへと向かうのであった。

その光景をさぞ羨ましそうにハンカチを齧るマリアが覗いていた。

「く～～～！！！ユーノ様の背中に跨りツーリング～～～羨ましすぎますわ～～～！！！」

「何バカなこと言ってんだよおめぇは。ほら、とっとと行くぜ！」

恋次は納得のいかないでいるマリアの首筋を引っ張りながら転送ポートへと向かって歩き始め、他の者はそんなマリアの姿をため息がてら一瞥するのであった。

一方でユーノのバイクでヤミーが潜んでいるマンションへと向かったなのはと言うと、それはもう幸せそうなオーラ全開にして、ユーノの背中に手を回しハートマークを浮かべてご機嫌な様子であった。

「うふふ～～～？うふふ～～～？」

「？随分機嫌がいいみたいだけど、どうしたの？」

「うんうん？何でもないよ、ユーノ君？全然何でもないの？」

「そう・・・じゃちょっと飛ばすよ。しっかり掴まってて」

「は～い？」

なのははこの時、ユーノの至って普通の言葉でさえ、自分には特別甘い言葉のように思えて仕方なかったのであった。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

一方、コアメダルを奪われたウヴァはアジトの酒場へ戻ってくると、カウンターの方で被っていた帽子をなんとなく手に取っていた人間態のカザリに近づき、カザリの胸ぐらを鷲掴みにする。

「！」

「カザリ！お前、よくも俺のコアメダルを！ユーノスから聞いたぞ！」

怪人態のまま自分の胸ぐらを掴んできたウヴァの言動に些か驚くカザリだが、その直後彼は完全にしらを切った態度でこう言った。

「なんの事か分からないな」

ウヴァはそれを聞くと、更に頭に血を昇らせカザリの首を掴み徹底

的に問い詰める。

「とぼけるな！」

そんな二人のやり取りとは別に、影の方では怪人態の姿のガメルがパイプイスを積み重ねて一人遊んでいた。

カザリは少々呆れた様子でウヴァにこう言い返す。

「ウヴァ。ユーノスがアンク並みに昔から口八丁で嘘が上手いのを忘れた？」

「う・・・」

「だまされたんだよ、君は・・・どっちを信じるかは自由だけどね」

「う・・・うおおおおおお！！」

ウヴァはカザリを強引に突き放して地面に叩きつけるように手から離すと、煮え切らない怒りを周囲にぶつけ始める。

「俺のコアは何処だ！？」

ウヴァの蹴りがガメルが積み上げていたパイプイスの城に直撃し、ガメルの城は崩壊する。

「うわ・・・俺の城が・・・」

思わず意気消沈となるガメル。

その一方で怒りのボルテージを上昇させるウヴァ。

するとそんなウヴァの様子を見ていたカウンターに腰かける怪人態のメズールが声をかける。

「落ち着きなさい。完全に復活するまで、私達に争ってる暇はないはずよ。今は私のヤミーがたくさんのメダルを作ってるから、それを仲良く分けましょう」

「ふん！」

メズールの説得に、少しは頭を冷やすことが出来たウヴァだが、それでも半分以上の怒りが体中をたぎらせる。

「大丈夫。私が選んだ人間に間違いはないわ」

メズールはそう言いながら巣を仕掛けた当人である大久保麗華の事を考えながら、不敵な笑みを浮かべる。

では、その大久保麗華はどうしているのか？

麗華はソファーに腰かけ、すすり泣きながら目の前に無造作に散らばった大量の高級服やブランド品を見ながら買えなくなることへとの恐怖、消えゆく恐怖に怯えていた。

「もう買えない・・・これも全部なくなって・・・この部屋にも住めなくなって・・・それで・・・」

そう考えた麗華の数多の中に浮かんで来る一般的に貧乏な家庭と呼ばれるような殺風景な一畳間の中に一人ポツンと体育座りをする自

分の姿。

「そんな・・・そうなったら・・・」

考えれば考えるほど、恐怖駆られ思わず目の前の高級品を手でかき集める麗華。

その直後、彼女の気づかないうちに巣を張っていたヤミーの卵が一斉に巣から放出され、床に転がり始める。

欲望が大きくなればなるほど、ヤミーのセルメダルの枚数は加速度的に増え続ける。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方、漸く目的のマンションに到着したユーノとなのはの二人は相変わらず天を貫かんとばかりの大きさのある建物を仰ぎ見ながらヤミーの巣を探し方法を考える。

「さてと・・・これだけ大きいと・・・」

「どこから調べればいいのかな？」

と、その時ユーノの頭が閃いた。

「あ、そうだ。折角これ持って来てるんだし、こいつに探させよう」

そう言いながら、ユーノは懐からカンドロイド、タカカンとバッタ

カンを取出し、プルタブを引いて起動させる。

〈ＴＡＫＡＫＡＮ〉

〈ＢＡＴＴＡＫＡＮ〉

タカカンはバッタカンを掴み、空高く飛び上がりマンションの周囲を調べ始める。

なのははユーノの作ったメカを仰ぎ見ながらこう言う。

「相変わらず用意周到だよね、ユーノ君は。尊敬しちゃうな♪」

「あはは。ま、備えあれば憂いなしって奴さ」

ユーノはそう答えると、目の前にディスプレイを表示させ、バッタカンから送られてくる映像を隈なく分析し始める。

そして、暫くしてユーノは漸くそれらしき物陰を捕えた映像をはっきりと目にし、なのはに報せた。

「見つけた。」

「本当！」

「うん。いいかい。これがこのマンションの上層階のリアルタイム映像だ。場所は２８０５号室。住民の名前は大久保麗華。」

なのははユーノの説明を聞きながら、映像を通して映ってくるヤミーの卵に思わず目を奪われ唾を飲む。

「こんなのが蔓延っていいわけないよ・・・ユーノ君！」

「うん」

二人は早速乗り込む準備を始めると、調査を終えたタカカンとバッタカンがユーノの手元に戻って来た。

「ユーノ君。止めるためにも、ここは何としてもヤミーの孵化を抑えることが先決だよ」

「そうだね」

「あんな化け物も止められないのに、世界が救えるはずないもんね。」

なのははそう言うと、ユーノよりも先にその場から飛び出しマンションの中へと投入を開始する。

ユーノは過ぎ去っていくなのはの後姿を見ながら、彼女らしいと思いつつふとこんな言葉を漏らす。

「世界か・・・・・大きく出るなぁ。流石はエースオブエースと言うか管理局の一員と言うか・・・ま・・・僕は目の前の事から・・・」

そして、ユーノもまたなのはの後に続いてその場から走り出しマンションの中へと向かった。

これが現在における、局員としてのなのはの使命感的言動と、自由

の身になったユーノの人間個人としての言動なのであった。

二人がマンションの中へ突入し、一緒にエレベーターの中へと入ろうとした時だった。

そのエレベーターの中から麗華が出て来る。

二人はその事に気づかずエレベーターの中に入ろうとするが、直後聞こえてきた訊きなれた声と名前に反応するのであった。

「ヴィヴィオ。おい、ヴィヴィオ！」

「「え？」」

二人が徐に振り返ると、麗華の目の前に現れたのはルキアとその前の方で不安げな表情で麗華を覗き込む愛娘、ヴィヴィオの姿であった。

ヴィヴィオは立ち止まった麗華に言葉を掛けようとしていた。

「あの・・・」

「「ヴィヴィオ・・・！」」

驚く二人を余所に、麗華は冷淡な言葉を突き付ける。

「まだいたの？」

「ごめんなさい。気になって・・・あの・・・大丈夫ですか？」

先ほどの倒産の話を間接的に耳にしていたヴィヴィオは心配になってそう尋ねると、口を籠らせながら麗華は言う。

「・・・大きなお世話。退いて！買い物行くの」

「「えっ！？」」

「「？」」

事情を知っていたヴィヴィオとルキアは思わず表情を一変させ、彼女の事情をよく知らないでいるユーノとなのはは疑問符を浮かべる。

すると、ヴィヴィオとルキアの言葉を聞いてそれが気に食わなかったのか、麗華は振り返りこう言う。

「何？私が買いものしちゃ行けない？」

「だって、貴様お父様が大変なのではないのか？」

「そうですよ！買い物なんてしてる場合じゃ・・・」

「ほっといてよ！部外者のくせに！」

「でも！」

「あたしの勝手でしょ！何なの急に付き纏って・・・ストーカー？それとも同情か何か？自分よりランクが下がったから？悪いけどそんなんじゃないから。お金ならまだいっぱいあるし！」

麗華は焦燥を顔に出しながらバックから財布を取出し、ぎっしりと

納められていた札束をこれ見よがしに見せつける。

「ほら！」

「・・・貴様！」

「私達そんなつもりないですよ！」

思わず声を荒げる二人。

すると、見かねたユーノとなのはが間に割って入る様に近寄ってきた。

「ちょ、ちょっと待って・・・！」

「三人とも落ち着いて」

「「パパ（ユーノ殿）！ママ（なのは）も！」」

ユーノはなのはと共に三人の間に入ると、仲介的な役割を果たし、双方が一度落ち着いてから改めて麗華の方へと目を向けこう切り出す。

「とりあえず事情は置いといて、君の部屋変なものあるよね？怪物に襲われてない？」

「はぁ？何の話？」

「えっ？２８０５号室だよね？」

麗華の態度を見て思わずそう復唱するなのは。

「だから何？もう、あんた達なんなの？あたしの事はほっといて！」

麗華は怒り心頭な様子でヴィヴィオに札束を投げつけ、エレベーターへと駆け込んだ。

「あ！待って！！」

ヴィヴィオはエレベーターに乗り込んだ麗華を追いかけようとし、閉ざされたドアを無理矢理力で開けよとした。

「ふにゅうううううう！！！！！！」

すると、ユーノ達の目の前でヴィヴィオはなんとエレベーターのドアをこじ開けて、ドアが開いた瞬間麗華は声を上げる。

「キャアっ！」

「「「あ」」」

そして、麗華は人間離れした力のヴィヴィオを恐れながらこう言った。

「怪物ってあんたなんじゃないの！」

思わずその言葉に胸が痛むヴィヴィオは押さえていたエレベーターのドアから手を放す。

そして、追いかけることもままならずヴィヴィオはその場で深いた

め息をつく。

「はぁ・・・」

ヴィヴィオがため息がてら振り返ると、目に映ってきたのは床に飛び散った札束を守銭奴のようにかき集める父・ユーノの姿であった。

また一方で事実に戻った麗華は足早に廊下を歩きながら自分のベッドに腰掛け不満げに言葉を漏らす。

「何よ！買いたいもん買って何が悪いわけ！？」

煮えたぎる思いに感情がコントロールできなくなる麗華。

そんな麗華の機嫌を察して一度外へと出たユーノ達。

ユーノは皺だらけになった札束を丁寧に一枚ずつ伸ばしながら言葉を漏らす。

「全く・・・お金をこんなにして・・・」

すると、見ていたヴィヴィオは思わず声を荒げる。

「パパ！見損なったよ！」

「？」

「助けられる人に手を伸ばすって言ったのに、お金に手を伸ばすんだね？」

見限ったような口ぶりでユーノにそう言うと、傍らで聞いていたなのははヴィヴィオの言動に叱咤する。

「コラ！ヴィヴィオ！ユーノ君に何てこと言うの！？」

「だってママ！これ見てそうとしか・・・！」

ヴィヴィオは裏切られたかのように金に手を伸ばしたユーノを指さしながらなのはにそう言うと、徐に渋い顔を浮かべながらルキアがユーノに言葉を向ける。

「・・・ユーノ殿・・・」

ユーノは札束を綺麗に束ねがら一枚一枚慣れた手つきで数えていき、徐に返事を返す。

「だってお金は大事だからね。」

「だけどパパがそんな人だとは・・・！それにあの人・・・麗華さんだってそうだよ！お金が大事なのはわかるけど、そればっかりじゃ！おうちが大変なのに、まだ買い物するなんて、そんなのダメに決まってるよ。」

ユーノの隣に座ってそう言及するヴィヴィオに対し、ユーノはあっさりと答える。

「しょうがないよ。彼女はそれが欲しいんだろうし。」

「そんな」

「誰だってそうでしょう。」

未だユーノの言葉に信じられないヴィヴィオと、札束を整えるユーノ。

傍らで見ていたなのはやルキアも今回に限り、ヴィヴィオと同じように少しユーノの人間性に関して疑ってしまいそうになってしまう。

すると、そんな疑いをもたれたユーノは札束を整え終えると、徐に立ち上がり三人に向かってこう言った。

「僕、小さいころから遺跡発掘とこかで色んなところ行ったけど、何も欲しくない人なんかいないよ。お金じゃなくても、物とかいろいろ。そう思うのが、生きるのに必要な国もあったし・・・だから、欲しいって思うのはそこはいいんじゃないって思う」

「「「・・・・・・」」」

そして、訝しげにユーノを見つめるなのは達三人にユーノはほくそ笑んでから、こう言う。

「大切なのは、その“欲しいって気持ち”をどうするか・・・かも？」

「欲しいって気持ちを・・・どうするか？」

ユーノの意味深長な言葉を復唱するヴィヴィオ。

「そ♪後で返してあげてね♪」

ユーノは笑顔でそう語りかけた後、ヴィヴィオに札束を手渡し麗華に返すことの旨を伝えるのであった。

ヴィヴィオは父からの言葉を聞き、一瞬たりとも父の事を疑ってしまったことに恥ずかしさと罪悪感を覚え、心の中でごめんなさいと謝ったそうな。

その間に、麗華の欲望はピークを迎えており、いずれ自分の手元からすべてがなくなるということが分かっていることから可能な限りの欲しいものをインターネット通販で購入しようとしていた。

「これ・・・これも・・・これも・・・」

次々と商品をカゴに入れていく麗華だが、その時ディスプレイに「ＣＡＵＴＩＯＮ」と警告がかかってしまい、麗華は止むを得ず購入を中断し、八つ当たりをするかのようにパソコンの蓋を閉じる。

彼女は肩を落としながら奇妙な物音がする後ろへと振り返る。

すると、目の前に映ってきたのは卵から孵化を迎えようと迫ってきた大量のヤミーの姿であった。

「キャー！」

麗華が悲鳴を上げた瞬間、卵から一斉にピラニアヤミーが誕生し、その群れは２８０５号室の窓ガラスを突き破り外へと飛び出して行った。

「「「「！」」」」

ユーノ達がその事に気づきマンションの方に目を向ける。

「あれは・・・！」

「ヤミーが孵化したのか？」

「ち。なのはとルキアさんはヴィヴィオを安全な場所まで。先に僕が行ってくる」

「ユーノ君・・・」

「大丈夫。無茶はしないよ」

ユーノはそう言いながら結界印を取り出す。

すると、心配した様子でヴィヴィオがユーノを見つめる。

「パパ・・・気を付けて」

ヴィヴィオの言葉を聞くと、ユーノは柔かい表情で答える。

「うん」

そして、走りながらユーノは結界印の蓋を開放し、完現術を発動させる。

「変身！

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノがマンションの方に向かって居る間、２８０５号室の麗華は次々と孵化するピラニアヤミーに怯えて部屋の外へと飛び出そうとしていた。

「きゃあああ！」

恐怖に怯え立つ事が出来ないでいると、丁度その時変身したユーノが駆けつけた。

「大丈夫？さぁ、早く」

ユーノは麗華を連れてその場から疾走する。

ユーノが既にヤミーとの戦闘を繰り広げているころ、機動六課の方で報告書をまとめていたユーノス達の元にシャーリーからの連絡が入る。

『みなさん！プーマにて、ヤミーが現れました！ユーノ先生が既に戦闘に入りました』

「何！？」

ユーノ達は手を止め、モニター画面に映し出された映像を凝視する。

「はやて！俺達に行かせろ！」

「了解！死神組、及びスクライア商店メンバー全員を現地に派遣します。ユーノス元帥は傍らでみんなに指示をお願いします」

「分かった」

ユーノスはそう言うと、恋次の肩に乗り転送ポートに乗って総勢七人を引き連れてユーノ達の元へと向かった。

現地の方で待機していたなのは達三人は、前方から麗華を連れて走ってくるユーノの姿を捕える。

「パパ」

安堵の表情を浮かべるヴィヴィオとなのは達。

ユーノはヴィヴィオに麗華を預けると、なのはとルキアに言う。

「ヴィヴィオ、悪いけどこの子お願いね。二人とも、準備は？」

「いつでも」

「参りましょう」

二人は既に戦闘準備を完了させ、ほくそ笑んで返事をする。

なのははレイジングハート片手に、ヴィヴィオに言葉を向ける。

「ヴィヴィオ。じゃ、ママ達行ってるね」

「うん。パパもママも無茶はしないでね」

「「うん」」

「よし、行こう」

ルキアの掛け声とともに、ユーノ達三人はヤミーの元へと駆け抜けていく。

そして、現場に到着したユーノはなのは達と共にマンションから有象無象と言わんばかりに出現するピラニアヤミーに思わずこう漏らす。

「どんだけいるんだよ・・・」

ヴィヴィオは息を上げ、恐怖に怯える麗華にそっと彼女が置いて行った服をかけてやった。

麗華は徐にマンションの方から際限なく飛び出すピラニアヤミーを見ながら口を開く。

「あれ何？」

ヴィヴィオはそれを聞くと徐に答える。

「よく分からないですけど、人の欲望から生まれるって」

「人の？――――――――――じゃあ・・・あれは私の？」

そう言葉を漏らしながら麗華はピラニアヤミーと一緒に飛び出す今まで自分が買い集めた高級ブランド品や服を見ながら呆気にとられる。

「私・・・あんなのに縋ってたんだ・・・」

すると、麗華は隣に座るヴィヴィオに赤裸々に自分の家庭の事を語り出す。

「うちはお金があっても・・・セレブなんてとても言えない田舎の家で・・・だから都会で自信が持てなくて・・・でも贅沢な服とか着てると大丈夫だった・・・だからもっと欲しくなって・・・もっともっとって！」

涙目を浮かべる麗華。

ヴィヴィオはそんな彼女の涙を見ると、自分もまたこう言いだす。

「一緒かもしれない・・・だから麗華さんが気になったのかな私・・・」

「えっ？でもヴィヴィオちゃんは？」

すると、ヴィヴィオ自身もまた赤裸々に自分の事を語り出す。

「私・・・元々は古代ベルカの聖王時代の人の遺伝子から作られたクローンで・・・それをなのはママが助けてくれて・・・家族になって・・・ユーノパパも一緒で・・・だけどそのパパが急にいなくなった・・・／／／」

そう語りながら、ヴィヴィオは一年前のカトゥーン事件の際、虚数空間に堕ちてしまったユーノの事を思い出す。

〈・・・・・パパが・・・・・パパ・・・・・・〉

〈あああああああああああ！！！！！！！！！！ユーノ君！

！！！！！！！！！！！！！！ああああああああああああああ！！！！〉

そして、ヴィヴィオは麗華の方に目を合わせ自分の縋っているものを口にした。

「麗華さんが服なら、私となのはママはユーノパパに縋ってた。多分今もだけど・・・・・・欲しいって思うのは悪くない。大切なのは、その気持ちをどうするか」

「・・・・・・」

「本当に強くなるためには、もう縋ってるだけじゃ駄目なんだと思います」

そう言うと、ヴィヴィオは麗華の掌をゆっくりと優しく握りしめ、年上の彼の状にしっかりとした瞳でこう言った。

「ちゃんとしなくちゃ」

「・・・うん」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、現場に到着した恋次達と共にユーノ達は群れを成して襲ってくるピラニアヤミーと壮絶な争いを繰り広げていた。

完全に魔力が戻っていないとはいえ、ユーノスは周囲に被害が及ば

ないように己の専門分野である広域結界を張り巡らせる。

「広域封時結界、展開！」

ユーノスはマンションから半径２０キロ圏内を結界で多い、時間進行をずらす。

フェレット言えども、流石は七大元帥最強の結界魔導師と言うだけはある。

結界内の中では、ユーノ達が協力してヤミーの駆除に当たっていた。

「咆えろ、蛇尾丸！ピラニアなんて食っちまえ！！！」

「行くぜ烈火！！必殺技パート２！」

「ウォーターホイッパー！」

「ダイナミッククロス！」

「面を上げろ、侘助！つらあああああ！」

「次の舞・白漣！」

「琴線斬“鼓瓜田”！」

「エクセリオンバスター！」

七人の一斉攻撃がピラニアヤミーに放たれ、大爆発が起こる。

しかし攻撃をまともに食らってもピラニアヤミーの数もさることながら、決定打となりえずなのは達は顔を渋らせる。

「ち！やっぱし俺達の力じゃ決定打になりゃしねぇ・・・」

すると、そんな恋次の言葉を聞いて徐にマリアが斬魄刀を引き抜いて飛び出した。

「諦めてはいけませんわみなさん！どんなものにも絶対に鍛えられない秘孔を衝けば、勝機は見えてきますわ！」

マリアはそう言うと、斬魄刀を構えてその名を叫ぶ。

「一切合切粉塵なさい『華奠腕（かでんかいな）』！」

解号を唱えた瞬間、マリアの死覇装に軽い鎧が装着され、両腕にはボクシンググローブ、そして両膝に鋼鉄が付与される。

「あれがマリアさんの斬魄刀！」

「ムエタイか・・・」

関心した様子でマリアの斬魄刀解放「華奠腕」を凝視する一同。

マリアは向かって来たピラニアヤミーに狙いを定めると、先ずは両腕のグローブでピラニアヤミーを叩きつける。

「鉄掌拳（てっしょうけん）！いやあああああああああ！！！！」

強烈な威力を秘めたマリアの拳がピラニアヤミー一体に仕掛けられ

ると、そのヤミーと周囲のヤミーは勢いよく飛び散った。

「「「おお！！」」」

「やるな小鳥遊。あれならば！」

マリアは更にその場から霊子を足場に飛び上がると、空中から膝を使った蹴り技を叩き込もうとする。

「うらあああああああああ！！！！」

男勝りなマリアの声が響き渡る中、ピラニアヤミーは複数集まり巨大なピラニアの姿に返るとマリア目掛けて砲撃を放つ。

「！」

「「「「「「「「「「あ！」」」」」」」」」」

思わずその光景に目を見開くなのは達。

するとその時完現術の力で飛び上がったユーノが逆刃刀の一振りでピラニアヤミーの攻撃を振り払った。

「龍巻閃・旋！」

「ユーノ様！」

ユーノはマリアを連れて一度なのは達の元に戻ると、いくら攻撃を加えても全くキリの無い現状に険しい表情を浮かべた。

「く・・・コレ、キリがなさすぎる」

「どうすりゃいいんだ・・・オイ、ユーノス！何が手はないのか！？」

恋次が大声でそう言うと、ユーノスは渋い顔を浮かべて言う。

「流石にこの数だとな・・・スレイヤーモードでも対応限界が存在する・・・これはその限界値を遥かに超えている・・・」

「じゃどうするのさ！？」

「万が一オーズの力があれば、ウヴァから奪い取ったメダル三枚でコンボが完成し、対処できるかもしれぬだが・・・」

「だけど無いモノのこと言ってもどうしようもありませんよ！」

一同はまさしくお手上げ状態であり、その光景を見ながら心の中でユーノはこんな事を呟いた。

「（く・・・・・このままじゃ・・・・・・僕も・・・・・・・みんなも・・・嫌だ・・・・・・そんなのは嫌だ・・・・・・・！）」

何もできないまま失うことに強い嫌悪感を感じるユーノは、徐に自分の手の中に握られている逆刃刀を無意識のうちに強く握りしめると、言葉に出してこう言った。

「何もできずに後悔する・・・そんなのは・・・・・・絶対に嫌なんだよ！！！！！！！！！！！！！」

と、ユーノがそう口にした時、逆刃刀が突然ユーノの言葉反応するかのように脈打ちだした。

「！？」

その事に気づいたユーノは徐に逆刃刀を近づけ凝視する。

「今のは――――――何が起こった・・・・・・」

すると、その時ユーノの頭の中に声が流れ込んできた。

『ユーノ殿』

「え」

『ユーノ殿。拙者たちで良ければ、力になるでござるよ』

ユーノの頭に流れ込んでくる自分と似た少し高めの男の声。

その声を聞いた瞬間ユーノは耳を疑ったが、直後にユーノの視界が真っ暗になるかと思えば彼の目に映ってきたのは二人の男だった。

ユーノはそのうちの一人を見た瞬間、目を奪われた。

「え・・・・・・」

ユーノの目の前に立っていたその男とは、一年前ぶつかり合いながらも心を交わし、この逆刃刀・真打を託してくれた少年剣士、明神弥彦だった。

「お前・・・・・・弥彦・・・？」

弥彦はユーノに逆刃刀を託す際、彼の命を守るために銃弾に倒れ死亡してしまった。

その死んだはずの弥彦が今、もう一人の男と共にユーノの前に現れたのだ。

その男こそ、明神弥彦が心から憧れ尊敬した逆刃刀の元々の所有者であり、伝説の人斬りとして恐れられた左頬に十字の傷を負った緋色の髪の優男、緋村剣心なのであった。

二人は驚き返るユーノの元へと近づき、徐に言葉を投げかけた。

『ユーノ。久しぶりだな。元気そうでよかった』

「弥彦・・・お前どうして・・・それにその人はもしかして・・・・！」

『ああ。緋村剣心。日本一の剣客さ』

『お初にお目にかかるでござる、ユーノ殿。弥彦からは話は聞いている。随分と世話になったでござるな』

「あ・・・いえ・・・こちらこそ・・・弥彦やあなたには随分と助けられました・・・この逆刃刀・真打は僕にとって・・・最早心の一部なんです。」

『そう言ってもらえると、拙者も弥彦も嬉しいでござる。さて、この現状をどうしたものか・・・弥彦』

『決まってるだろ。このままじゃ俺の大切な友達が後悔して悲しい想いをさせちまうことになる。力を貸してやろうぜ、剣心』

『ああ。そうでござるな』

弥彦の言葉を聞き、お互いに鼻で笑うとユーノの肩に手を当て、目を見開くユーノにこう語りかけた。

『ユーノ殿。この場を乗り切るためには、拙者たちの力を己が身に纏わせることが必要でござる』

「え・・・二人の力を・・・？」

『意味は深く考えないでいいぜ。要は俺達がお前に力を貸すってことだ。その逆刃刀を媒介にして、俺達の魂を完現術の力で引き出すんだ』

「完現術の力で・・・！」

ユーノはこの言葉にさぞかし驚いていただろう。

何しろ完現術は、物質に宿る魂を引き出し使役することは出来るが、“人”の魂を使役しましてそれを纏わせるなどとは前例のない話であった。

『やらずに後悔するより、やって後悔・・・いや、そんなことは死んでも拙者たちがさせぬよ。さぁ、早く決断を』

『ユーノ。こいつはお前にだけ使うことを許された、お前だけの完

現術なんだ。今こそ、その真の力を引き出すんだ！』

二人はそう言うと、ユーノの前から忽然と姿を消し、ユーノもまた元の現実世界へと引き戻される。

「！今のは・・・・・・」

辺りを見渡してみても、ユーノの周りには二人の姿はなく、居たのはなのは達と有象無象のピラニアヤミーだけであった。

ユーノは握られた逆刃刀を握りしめながら、決意の表情を浮かべる。

「（弥彦・・・・・・剣心さん・・・・・・・・よし！）」

ユーノは目を閉じ、心を研ぎ澄ませると、体の全神経を集中させ逆刃刀に宿る緋村剣心と明神弥彦の魂を引き出そうとする。

すると、ユーノの全身がゆっくりと光だし、それを見ていたなのは達はユーノの異変に目を疑った。

「？！ユーノ君・・・！？」

「何だ・・・何が起こっている・・・！？」

ユーノスは突然のユーノの異変に途方もないものを感じながら黙ってその様子をじっと見つめていると、ユーノの全身よりこれでもかとばかりの巨大な霊圧が放出された。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

「！？な・・・なんだ・・・」

「く！！この霊圧は・・・！！！」

恋次達は間近で感じる尋常ならないほどの強い霊圧に思わず身構え、ユーノは全身から溢れる緋色と紺色の霊圧の中に溶け込み、その途端結界印の声が聞こえた。

〈Ｕｎｋｉｌｌ　ｓａｍｕｒａｉ　ｈａｒｔ〉

なのは達は霊圧に包まれたユーノに何が起こったのか皆目見当がつかなかった。

恐る恐るゆっくりと張れていく霊圧の竜巻の中を覗きこむと、その中に映ってきたユーノの姿に一同は度胆をぬいた。

「「「「「「「な！」」」」」」」

竜巻が晴れ、中から出て来たユーノの姿は今までのスレイヤーモードの時とは姿がまるで違っていた。

その時のユーノの姿は、緋色の着物と紺色の袴を着用し、髪の毛も以前よりも伸びてそれをポニーテールの要領で髪ひもで結った目が一段と鋭くなったものであった。

そして極めつけは、ユーノの左頬に緋村剣心と同じ十字の傷が刻まれていた。

なのは達はその姿のユーノを見て、思わず言葉を漏らす。

「あれ・・・ユーノ君・・・？」

「ですが、ユーノ様のあの恰好・・・そしてあの十字の傷は一体・・・？」

突然の事態に頭がついていけていない一同だが、その直後ユーノは逆刃刀・真打を持ちながら猛烈な剣気と霊圧を放出させながら声を上げる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「「「「「「くっ！！！」」」」」」

なのは達はこれまで感じた事のない強大な力に当てられながら、ユーノを凝視し、ユーノは叫び終えた瞬間、分裂した無数のピラニアヤミー目掛けて走り出す。

「おおおおおおおおお！！！！」

走り出した途端、ユーノは剣心譲りの神速を使って実体のある分身を作り出す。

「な！店長が分身したぞ！！」

「どうなってるの！！」

目の前の光景に疑いたくなるスクライア商店一同。

分身したユーノはそのままピラニアヤミーの懐に飛び込むと、逆刃

刀を自在に操る飛天御剣流の極意で以て一瞬にして蹴散らし、それをセルメダルへと還元していく。

なのは達は圧倒的な力を発揮するこの状態のユーノに言葉すら失った。

「凄い・・・！ユーノさんの攻撃でどんどんヤミーが倒されていく・・・！」

「あの姿は・・・！」

ユーノスはただただユーノの力の姿に目を奪われる。

すると、倒していたピラニアヤミーが再び群れとなって巨大な集合体となると、口を大きく開いてユーノに砲撃を発射しようとする。

分身したユーノ達は巨大ピラニアヤミーを仰ぎ見ながら、逆刃刀を両手でしっかりと握りしめ、砲撃が撃たれると同時に一斉に飛び上がる。

「「「「「「「「「「飛天御剣流秘儀・・・！！！」」」」」」」」」」

飛び上がると同時にユーノ達は飛天御剣流突進術最強の九頭龍閃をピラニアヤミーの口の中に入り込んで仕掛け、分身した状態での技名を口にする。

「「「「「「「「「「九十九龍閃（つくもりゅうせん）！！」」」」」」」」」」

巨大ピラニアヤミーの口の中でそれを叩きこんだ瞬間、巨大ピラニ

アヤミーはその攻撃に堪えきれなくなると大爆発を起こしてすべてセルメダルへと還元され、爆風の中よりユーノが飛び出し地面に着地した。

着地すると、ユーノは元の一人の姿となっていた。

「「「「「「「「「ユーノ君（様）（店長）（さん）（殿）！！」」」」」」」」」

なのは達は直ぐにユーノの側へと駆け寄った。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

ユーノは肩で息をしながら変身を解除する。

すると、元の甚平服に羽織と帽子、そしてメガネを身に付けたいつものユーノの姿となり、結界印を手に握りしめながらユーノは心配そうに自分を見つめるなのは達にほくそ笑む。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、僕・・・もどった・・・ちゃんと・・・一人に・・・なっ――――――」

その瞬間、ユーノは力の全てを使いつくし、そのまま膝をついて倒れこんでしまった。

「！ユーノ君！」

「「「店長！」」」

なのは達は突然倒れ込んだユーノに思わず声を上げ、ユーノスは倒

れたユーノの容体を確かめ始める。

「どこか怪我でもしたんでしょうか？」

ルキアが心配そうに尋ねると、ユーノスは確信した表情で全員にこう言った。

「・・・寝てる」

「「「「「「ずっこ！」」」」」」

場違いな言葉を聞かされ実に古典的な転び方をするなのは達。

ユーノは全員の心配を余所に、鼾をかいて豪快に眠り続けていた。

「ぐが～～～～～」

このユーノの新しい力と、その直後に起こったユーノの異変をアルハザードの方で観察していたスカリエッティとプレシアは不敵な笑みを浮かべて高評価する。

「・・・やるわね。」

「ああ。魂を操る完現術・・・まさか物質だけでなく所有者の魂さえも操るとは・・・元・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアは伊達じゃなかったよ。やはり、君の才能は素晴らしい・・・ふふふふふはははははははははははは！！！！！」

スカリエッティの甲高い笑い声が研修施設全体に響き渡り、その後も彼は暫くの間笑うことを止めなかった。

一体、ユーノの身に、そして完現術に何が起こったのか！！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚

お洋服と縄るとフルブリングコンボ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はコアメダルのコンボについて教えよう♪」

「コアメダルの中で、特定の3枚を組み合わせて変身できる形態を指し、基本的に同じ属性（色）のコアメダルで成立する。」

「使えばどれもとんでもない力を発揮できるが、その分変身者への負担が大きいため容易に多用できず、大抵の場合は必殺技発動後に強制的に変身が解除される。」

一「成程な。て言うかお前のあれは結局のところ何だったんだ？なんでお前の左頬に十字傷が出来たり、実体のある分身が出来たりしたんだ？あんな能力、完現術にはなかったはずだぜ！？」

ユ「そうなんですよ・・・僕も未だによく分からなくて、あれを使った直後からものすごく眠くて眠くて・・・ふぁ～～～」

ユーノは襲って来た睡魔に堪えきれなくなり、その場に倒れ伏して熟睡を始める。

一「って！こんなところで寝るなよ！！まだコーナー続いてるだろうが！」

一護はそう語りかけながらユーノの身体を起こそうとするが、ユーノが身に纏っている重さ２０貫の肩当が入った羽織は尋常ならないほど重く、一護は引きずることもやっとであった。

一「ぬうううううううう！！！！なんでこんな重てーーもん背負ってコーナーしてんだよお前は！！！！！！」

師・一護の苦労は絶えないのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

ティアナ・ランスターには密かなコンプレックスがあった。

それは、昔から一向に直る気配のない癖のある髪の毛だった。

ティ「はぁ～～～何で私の髪っていつもこうなのかしら～～～」

ス「しょうがないよ。それが癖っ毛ってもんなんだし」

ティ「他人事みたいに言わないでよアンタは。あ～あ～なのはさんやフェイトさんが羨ましいな～～～あんなに髪の毛長いのに、全然しわになったりしないんだモン」

ギ「あら？それだったらあの二人もそうじゃないの」

ティ「え？」

ティアナはギンガの言葉を聞くと、徐に二人の側に居たユーノと恋次を見ながら表情を凍りつかせる。

ティ「が・・・！」

ス「あ！そう言えばあの二人も髪長いけど、全然皺になってないよ

ね！」

キャ「いいな～～～今度皺にならない髪のセットの仕方聞いてみようかな」

エ「良いんじゃないかな。ティアさんもどうですって・・・あれ？ティアさん」

エリオが呼びかけると、既にティアナは魂が抜け落ちた顔となっていた。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユ「完現術・・・コンボ・・・」

恋「一年ぶりのアンゴルモア反応だ！」

ユ「鳥の・・・ヤミー・・・！？」

ユーノス「だとしたらこれは間違いなく・・・・・・・」

メ「放してってば！！熱斗！！！」

熱「メイルちゃん――――っ！！！」

１４６話　恋とアンゴルモアと鳥ヤミー

登場人物

大久保（おおくぼ）　麗華（れいか）

声：大谷美貴

メズールの標的となった服飾学校の学生。大量のブランド品を買いあさり、決して満足することのないほどの重度の買い物症候群に陥っている。高飛車でプライドが高い所為か周囲からは反感を持たれ、友達は少ない。でも実際の性根は臆病で、都会に出て自信が持てなかったことから買い物に走る様になり、それがエスカレートしてしまった結果、現在の様な性格になってしまった。ヴィヴィオと言葉を交わすうち、自らの弱さを認めた上で、その後はバイトをして自分の力で生活費を稼いでいる模様。

登場ヤミー

ピラニアヤミー

身長　６０～８０？　体重　３～４？

特色／力：強靭な顎力（噛み付き）、群生化

メズールが作り出した水棲系成長ヤミー。メズールが街中を散策し

ている途中、買い物中毒の大久保麗華という少女に目をつけ彼女にセルメダルを投入。自室に大量の袋状の卵をセットして成長を待っていた。擬態能力も持ち、当初は部屋の持ち主である遥本人もその存在に気づいていなかったが、成長し卵が増殖するにあたって擬態効果も薄れてきたのか遥本人も卵に気づく。　だが、時既に遅く、卵から大量に孵化してビルの外壁を伝って街へ向かおうとした。タンカーの外壁も食い破る強力な顎の力と死角から休みなく襲いかかる戦法でユーノを苦しめるが、完現術コンボで不殺の侍魂に変身したユーノによって殲滅され続け、同族同士と合体し巨大ピラニアヤミーとなるも、九十九龍閃を受け消滅する。

恋とアンゴルモアと鳥ヤミー（前書き）

ロ「ぼくたちナビと人間は友達なんだよ！」

恋とアンゴルモアと鳥ヤミー

ユーノ・スクライア外伝、ここまでのハイライト

ユ「変身！」

ユ「メダルなんかの為に人の命が奪われてたまるか！！」

ユ「人の価値は僕らが決めることじゃない。」

ユ「手が届くのに手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。」

〈Ｕｎｋｉｌｌ　ｓａｍｕｒａｉ　ｈａｒｔ〉

ユ「大切なのは、その“欲しいって気持ち”をどうするか・・・かも？」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚
チーター二枚

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ピラニアヤミーとの戦闘が六課側の勝利に終わったその翌日。

ユーノは先の戦闘において、突然襲って来た睡魔に襲われそのまま

自室のベッドに直行させられ、翌朝になっても眠気は取れずユーノの瞳は小刻みに震えていた。

「う・・・・・・」

ユーノの身体の事が気になり、心配そうに見つめるなのは達前線メンバー全員。

「ユーノ君、大丈夫？」

なのはの声を聞き、追いあがろうとするユーノだが、眠気の所為で体に力が入らず再びベッドの上に倒れ込む。

不安げな様子で見詰めるなのは達を見て、ユーノは眠気の宿った瞳で言う。

「大丈夫・・・ちょっと眠いだけだよ・・・」

そう言葉を口にすると、またしても強烈な眠気のあまりベッドに沈み込む。

「無理はなさらないで下さいね、ユーノ様。」

マリアがそう言った後、シャマルは徐にユーノの額に手を当てる。

「熱はないんだけど・・・」

「ちょっと眠いだけだから・・・大丈夫・・・なのはも・・・みんなも・・・普通通りに仕事していいから・・・」

「パパ・・・」

「・・・・・・」

話しを聞いていたヴィヴィオはなのはの横で心配の拭えない表情を浮かべ、ユーノスは先ほどから口を閉ざしたままユーノの枕元で彼を凝視していた。

すると、躊躇いがちな全員を見たユーノは眠気と闘いながら言葉を並べる。

「本当に・・・大丈夫だから・・・ね。ほら、ヴィヴィオも早くしないと約束に遅れるよ。」

一度考え込んでから、一同は徐に頷きユーノに返事をした。

「・・・分かった。」

「うん。じゃあ、私達も仕事に戻るから。」

「うん・・・・・頑張って・・・・・・」

前線メンバーは徐に部屋の外へと出ていき、最後にもう一度ユーノを見ながらなのはは不安一色の顔で声をかけた。

「いってきます・・・」

「いってらっしゃい・・・・・・」

それを最後に、ユーノは我慢できなくなり襲って来た睡魔によって

撃沈する。

扉を閉めた後、ユーノの事が気になったヴィヴィオはなのは達に言う。

「私・・・今日はパパの事が心配だから早く帰ってくる。」

「私も、なるべく仕事片付けてユーノ君の方についてあげようと思う。」

「ま、それまではユーノスの奴が見てるから心配ねぇと思うが・・・」

「念の為ですわね。」

「グリードにヤミー・・・それに完現術・・・ユーノさんの身に何が起こっているんだろう・・・」

そんな事を考えながら、前線メンバーそれぞれの持ち場へと向かって行ったのであった。

その頃、ユーノの事をなのは達の代わりに見守っていたユーノスは全員が居なくなったことを確認すると、思わず深いため息をついた。

「はぁ・・・何とも肩身の狭い思いだな。俺自身が招いた結果だ。無理もない。なのは達にはユーノの身の上の危険が一番の不安だからな・・・」

ユーノスがそう呟く横で、ユーノは息吹をかきながら久しぶりの熟睡を堪能している。

「くかぁ～～～～～」

「なぁユーノ。お前がそんなに眠いのは――――――」

ユーノの耳元で彼が異常に眠い理由を教えようとするユーノスだが、ユーノにはまるで聞こえていない様子だ。

「ユーノ。訊いてるか・・・」

「う・・・すみません。目が開きません・・・・・・」

「やれやれ・・・」

ユーノスは半ばあきれ様子で優しくユーノの身体に布団をかぶせてあげると、一度机の上へと飛び乗り、結界印を取出し蓋を開放する。

蓋を開けると、その上に嘗てなかった自身の紋章に非常によく似たものと、その横に時計回りで日本刀の形をした紋章が刻まれていた。

ユーノスは口を閉ざしながら真剣な眼差しでそれを見つめる。

「（結界印に刻まれた今までなかったこれは・・・・・・それに、あの力は――――――）」

〈おおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！〉

ユーノスはピラニアヤミーを圧倒した時のユーノの姿、即ち剣心と弥彦の魂を己が身に纏わせたユーノの完現術に疑問を抱いた。

「（ユーノの完現術に・・・・・・一体何が・・・・・・）」

そう思っていた時、ユーノスの元に本局技術部のマリエルより通信が届いた。

『あ、どうも。本局技術部のマリエル・アテンザです』

「おう、待っていたぞ。で、どうだった例の件は？」

『はい。詳しく検査をしてみたところ、セルメダル内部から微弱ながらあるとんでもないモノの痕跡を発見しました。今送りますね』

マリエルはそう言うと、前々からユーノスに頼まれていた調査内容が書かれたデータ、即ちセルメダルの解析データを受け取り目を通すと、そこに書かれていたものの中に興味深いものを発見した。

「！これは・・・・・・そんな・・・」

ユーノスが見たその中身には一体何が書かれていたのか？

◇

〈ヴィヴィオＳｉｄｅ〉

その頃、ヴィヴィオは冬休みを利用して自身の使う格闘技、ストライクアーツの強化の為、師匠でありナンバーズの９番でもあるノーヴェ・ナカジマのもとを訪れていたが、先ほどのユーノの事を気にしてノーヴェ達に事情を説明する。

「え?ヴィヴィオのお父さんが・・・」

「うん。何だか今朝もずっと眠たそうで・・・だからノーヴェ。パパのことがどうしても気になるから今日は午後の練習休んでいい?」

「私は別にいいけど・・・でもそれってどういう状況なんだ?」

「私も詳しくは知らないんだけど、ヤミーとの戦いでパパの使ってる完現術って言うのに何らかの異変が起きたみたいなんだ・・・」

「完現術?何ですかそれは・・・」

一緒に練習に参加していたコロナが訝しげにそう尋ねると、ヴィヴィオは憶えてる限りの事で完現術のことを説明した。

「えっと・・・物質に宿っている魂を使役して、自分の力にする能力なんだって。その辺に落ちてる石とかにも魂って言うのは宿っていて、それを自由に引き出すことが出来るのが完現術。」

「ふ~ん。魔導死神として力を失くしたヴィヴィオの父ちゃんの新しい力ってのは・・・俺達の理解じゃとてもついて行ける話じゃなさそうだな。」

バウラが腕組みがてらそう口にすると、隣で聞いていたミツオは小ばかにした態度で口を挟んだ。

「バウラの頭じゃついていけないだけじゃないの?

「何だとミツオ!!それどういう意味だコラ!!」

「ぎゃああ！！！止めてよ！！ママ！！！」

ミツオはバウラの怒りを買ってしまい、泣きながら追い回されることになった。

ノーヴェはその光景にあきれ返った。

「たく、お前ら何やってんだよ！」

ノーヴェは二人に近づき拳骨を浴びせ、そのまま説教を食らうことになった。

その間に、中東部に在籍しているヴィヴィオと同じ古代ベルカの人間のＤＮＡを引き継ぐ少女、アインハルトはこう言う。

「ヴィヴィオさん。今日は私達の事は気にしないでお父様の事を優先させてくださいね。」

「アインハルトさん・・・」

アインハルトがそう言った後、コロナやリオも便乗する。

「私はヴィヴィオさんが今一番したいことをしてくることの方が、私自身も嬉しいですから。」

「そうだよ。だからヴィヴィオ、お父さんの事大事にしてあげよう。」

「ありがとうコロナ、リオ！」

ヴィヴィオはこの時、本当にいい友達を持ったなと内心感動するのであった。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

それから数時間たって昼食の時間がやってきた。

吉良はユーノの事を考えながらテーブルの上に肘をついていた。

「（ユーノさん・・・本当に大丈夫だろうか・・・）」

すると、そこへ売店から帰った恋次がやってきた。

「よう、待たせたな！」

吉良が帰ってきた恋次の方に目を向けると、その恋次の腕の中にはこの短い昼食時間に食べ切れると思えない量の食糧が抱えられていたのだ。

「な！」

「いや～～～売店が混んでてよ、買うのに時間かかっちまった」

「いつもより多くないかいそれ・・・」

「気の所為だろ。それか食べ盛りって奴だ。」

「そう・・・」

少々呆れながら恋次が買って来たパンに手を付ける吉良。
恋次は豪快に口の中へパンを放り込みながら、吉良にこう尋ねる。

「ユーノの事で、まだ考え込んでたのか？」

「まぁね。」

「心配するなよ。確かに完現術ってのは俺達もイマイチ知らないところが多いが、少なくとも一護みたいなもんだと割り切ればそこまで気に掛けることじゃねぇだろ？」

「だけどユーノさんの場合、一護君たちとは随分と勝手が違う。大体、完現術はそもそも何かしらの愛着を持った物質を媒介として発動している。ところが、ユーノさんは自分への欲がないからそう言うものに関する執着もない。と言うか、初めて完現術を使った状況だっておかしな点がある。結界印は元々ユーノスさんのものだし、ユーノさんはその時初めて結界印に触れたんだ。」

「・・・だから、愛着を持つ以前に何故あいつが完現術を発現できたのか・・・」

「謎が深まるばかりだよ・・・」

そう・・・完現術を発動するうえで必要なる要素は使いこんでいるものに愛着があるかどうかである。

ユーノは吉良が言った通り、自身への欲がないためモノに執着する素振りすらない。

逆刃刀と洞爺湖木刀がそれに反するものだと言えるかもしれないが、それでもユーノは決して物欲など持ち合わせておらず、飽く迄も他者を救うために必要だと割り切って持ち歩いているのである。

それから、愛着以外に完現術を発動するのに必要なのは使い手の誇りである。

まぁ、これならばユーノでも持ち得ているかもしれないが、問題としているのはそこではなく、何故結界印によるユーノの完現術が今回の事で、異質な変化を見出したかと言う事である。

恋次と吉良はパンをかじりながらそればかりを考えてしまう。

すると、そんな二人の耳に外から黄色い歓声が聞こえてきた。

「「？」」

徐に外へと目を向けた二人が目にしたのは、他の局員に見守られながら男性局員数人相手にバスケットをするマリアの姿であった。

マリアは軽快な動きでボールをゴールに運んでいくと、高く飛び上がる。

「ジャーーーンプ！」

マリアは綺麗なジャンプでバスケットの籠にボールを入れ、唖然とする男性局員を尻目に女性局員は歓声を上げる。

「きゃあ！マリアさんスッゴイ！！」

「カッコいい！！」

「本当に運動神経抜群だよね！」

「ユーノ先生みたい！」

マリアはゴールを決めた後、ユーノが現在いる隊舎寮の方へと目を向け、手を振りながら大声を上げる。

「ユーノ様！！見てくれましたか！！！」

二人はそんなマリアの様子を見ながらそれぞれ呟く。

「凄いね・・・小鳥遊さん・・・」

「何やってんだよあいつは・・・つうかユーノは寝てるだろうが・・・」

「あれだけユーノさん一筋なのも珍しいよね。」

「ああ。だがそれはそれで困った問題が起こるぜ。六課（ここ）にはあいつ以上のユーノ一筋な白い魔王がいるんだからな・・・」

恋次はそう口にしながら徐に後ろに振り返ると、そこには嫉妬の炎を燃やしながらレイジングハートを起動させる魔王と化したなのはが窺っていた。

「・・・みんな・・・小鳥遊さん・・・頭冷やしてもいいかな・・・」

「な、なのは。抑えて抑えて！！」

「ダメですよ！こんなところで暴れたら！！」

フェイトやスバル達は最近暴走気味のなのはに手を焼かされており、見ていた二人も思わずため息をついた。

「「はぁ・・・」」

◇

〈???Side〉

そんな彼らとは裏腹に、第６９管理外世界「ＥＸＥ（エグゼ）」と呼ばれる異世界において、人気のない廃屋ビルの上に腰を下ろしながら、アイパットに手を触れる派手な金髪の男が画面上に映し出されたコアメダルの情報を目にしていた。

「コアメダルの現状はこんなとこか。」

その謎の男、他のグリードは一線を画す存在・・・鳥のグリード「アンク」は計算高くメダルの事になると非常に強い執着を見出す。

「俺が５枚・・・ユーノスが９枚・・・そして、カザリ達が１２枚から２２枚。それ以外は・・・少なく見積もっても９枚か。これがどこにあるのか・・・」

そんな事を考えながら、アンクは頭上高くから人間社会を見おろし、

一度ほくそ笑んでからこんな事も呟いた。

「まぁ、コアメダルも大事だが・・・・・・カザリ達よりも先にあれを手に入れなくてはな。俺がより完全で強大な力を手にするための物質・・・・・・アンゴルモアをな」

アンクはそう言うと、右腕を変化させ本来の姿である怪人態の腕を出現させ、そこに握られた自身の内部から取り出したアンゴルモアを強く握りしめる。

◇

〈ユーノSide〉

午後3時。

寮の自分の部屋で熟睡していたユーノがようやく目を覚ます。

「う・・・・・ん?」

目を覚ましたユーノは、久しぶりの長い睡眠に満足した様子で大きく伸びをする。

「ふぁ〜〜〜〜〜〜〜よく寝た♪」

「それはよく寝ただろうな・・・」

「?」

ユーノスが些か呆れながらそう口にすると、聞いていたユーノは徐

に目覚ましを手に取り、そこに表示されていた時刻に目を疑った。

「ほげえええ！！！！もう三時！！！！」

思わず声を荒げるユーノ。

と、その時部屋の外からなのはの声が聞こえて来た。

「ユーノ君。起きた？」

「なのは。あ、うん。入っていいよ。」

部屋の扉が開き、なのははヴィヴィオ達を連れてユーノへのおやつを持って入ってくる。

「あ、起きてる起きてる♪お腹空いてるでしょ？おやつ作って来たんだ。」

「ありがとう。いただくよ。」

ユーノは何時もの格好に着替えると、ベッドに座りながらユーノの身体の事を気にするなのは立の方に顔を向ける。

「それでどうですか、ユーノ殿。お加減の方は？」

「ははは♪全然平気ですよ！ちょっと眠かっただけですから♪」

飄々とした様子でそう答えるユーノ。

横で聞いてユーノは鼻で笑いながら口を挟む。

「ああ。鼾で耳が痛くなるほどにな」

「ゆ、ユーノス元帥／／／／／／」

恥ずかしさで顔を真っ赤に染めるユーノ。

「何はともあれ元気そうでよかった。上手くできた自信はないけど・・・これおやつのカップケーキね。ヴィヴィオが作ったのもあるんだ♪」

「へへ♪はい、どうぞ！」

二人はそう言って愛するユーノにカップケーキを差し出す。

「ああ。ありがとう二人とも。」

ユーノは実に爽やか笑顔でそう返事を返すと、なのはとヴィヴィオは思わず顔を赤くし、興奮した状態で心の中で呟く。

「「（くぅ～～～その笑顔は反則です／／／／／／）」」

すると、その横で勝手に鬼太郎が二人が作ったモノを食し始めた。

「うんうん・・・おめぇらが作ったもんにしてはまぁまぁだな。」

「あ！先輩何勝手に食べるの！？」

「ひ、酷いですよ鬼太郎さん私たちの力作を！！！」

「毒味だよ、毒味。」

「私とヴィヴィオがユーノ君に毒なんて盛る訳ないですよ！！！」

声を荒げるなのは。

見ていたユーノは二人の間に入って宥める。

「ほら、なのはも鬼太郎も抑えて抑えて。」

「だって・・・」

不満げな様子で言葉を漏らすなのは。

するとそこへ、本局の用事を済ませて戻って来たはやてとクロノがやってくる。

「お、お目覚めやなユーノくん。」

「はやて。クロノも。」

「お目覚めのところ悪いんやけど、ちょっと司令室の方に来てくれんかな。昨日の事について詳しく話して貰う必要がありそうやし。」

「いけそうか、ユーノ？」

「ああ、大丈夫だ。二人の言う通り今日の所は一先ずそれだ。今準備する。」

ユーノはカップケーキを一口で食べ終えると、逆刃刀と洞爺湖木刀

を腰に携え、ユーノスを肩に乗せるとなのは達を連れて司令室へと向かった。

司令室に到着した全員は改めて、昨日のピラニアヤミーで起こったユーノの異変について検証することにした。

「さて、ほんなら早速始めようか。先ず昨日のヤミーとの戦いにおいて、ユーノくんが使った途轍もない力やけど・・・シャーリー。」

「はい。」

検証の為呼び出されていたシャーリーはタッチパネルを叩き、昨日撮影したユーノの未知なる力の姿とその戦闘の様子を解析しながら、こう言って来た。

「あの姿となった直後のユーノ先生の完現術の力なんですけど・・・通常時の基準と比較してその差は歴然。魔導師で言うところのＳＳランク相当の値まで力が上昇していました。」

「ＳＳって、八神部隊長と同じ・・・！？」

聞いていたティアナたちはその事をに思わず耳を疑う。

ユーノスは使ったユーノの傍らで、このように語り出す。

「スレイヤーモード時における質力は大体ＡＡＡランク魔導師相当だ。しかし、あの時の力は流石に耐えきれぬほど強大なものだった。」

腕組みをしながら考えていたクロノはユーノにも意見を聞いてみた。

「この点に関して、ユーノはどう考える？」

「そうだな・・・僕正直あの時の事はあんまり覚えていないんだけど、ただ一つ覚えているとすれば、あの時この逆刃刀・真打から鼓動の様なものを感じて、その魂を引き出そうとしたらああなってことかな・・・」

「逆刃刀の魂をですか・・・」

「だけどそれと今日の起きられないぐらいの睡魔はどう関係があるのでしょうか？」

すると、ユーノスはこれまでの事を踏まえて再び語り出す。

「生身の体で魂の力を操る完現術は使用者の体感以上に肉体に負担を強いる。力を失くし、体だけを兎に角鍛えてきたユーノの場合、スレイヤーモードを使う分にはほとんどの負荷はかからない。しかし、俺が見る限りあの力は逆刃刀に宿る元々の所有者の力が乗り移ったようにも思える。」

「元々の所有者の魂・・・まさか！」

「そうだ。弥彦・・・いや、剣心さんの方か・・・」

逆刃刀を握りしめながらそう口にするユーノ。

ユーノスはその事を前提に自分の推論を口にする。

「恐らく両方・・・これは仮説だが、魔導死神の力を失くし魂の質

量が普通の人よりも極端に減ってしまったユーノの魂の質量を世界にあるありとあらゆる魂がそれを補おうとしているのではないか・・・」

「魂の質量を・・・補う・・・？」

「あの時、ユーノの強い意志に反応した逆刃刀に宿る剣心と弥彦とか言う人物の魂がユーノに力を貸したんだ。モノとは不思議なものでな・・・長く使えば使うほどその物質に魂を宿らせる。つまりその刀には長年使いこんできた剣心の魂と弥彦の魂が宿っているのだ。」

「弥彦と・・・剣心さんが僕に・・・」

ユーノは話を聞かされたあと、逆刃刀をまじまじと見つめ、不意に脳裏に映ってきた剣心と弥彦の姿にほくそ笑んだ。

「じゃあ、眠くなったのは？」

「完現術としての力を極限まで引き出したことによる反動だろう。いくら身体的に高い能力のユーノと言えど、魂を直接扱う完現術・・・それも“人間の魂”を体に宿らせるということは肉体にも己の魂にもとてつもない負担をかける。」

「それで疲労のあまりぶっ倒れたと。力が強い分、多用は出来ないということですか・・・」

浦太郎がそう言った後、ユーノスはユーノの肩に乗り、このとてつもない力をこう名付けた。

「仮にこれを“完現術コンボ”と名付けることにしよう。」

「完現術・・・コンボ・・・」

思わずその言葉を復唱するユーノと、それを聞いて一瞬の沈黙を保つなのは達。

そして、その後ユーノスは話を変えマリエルから受け取ったセルメダルに関する調査結果を発表してきた。

「ところで、話は変わるのだが前々から気になっていた、何故グリードとヤミーの力に対抗できるのがユーノだけなのかと言う疑問についてだが・・・」

「何か分かったんですが、ユーノス元帥?」

「詳しい調査の為、セルメダルを一枚本局技術部のマリエル・アテンザに渡して、精密検査をしてもらったんだ。そしたら、彼女から返ってきた答えがこれだった」

ユーノスはそう言うと、その詳細データを中央スクリーンに映し出し、ユーノ達はそのデータに目を通す。

「セルメダルの精密データか・・・」

順にデータに目を通していくユーノ。

と、その時ユーノ達はある情報が書かれた箇所に目を奪われ、思わず表情を一変させた。

「！」

「これは！」

信じられないとばかりに目を疑うユーノ達に、ユーノスは徐にこう語り出した。

「そう・・・――――どうやら１５０年前、復活したグリードが何故俺達七大元帥の力を持ってしても、この現代においても死神の力ですら対抗できないか・・・それはひとえに、グリードの体の中に“アンゴルモア”が埋め込まれているからだ」

「じゃあ、ヤミーもその影響で・・・」

「そして、何故僕だけがユーノス元帥のようにヤミーの気配を察知でき、それに対抗できる力を持っているのか・・・それは――――――僕自身が魔導死神と目覚めるきっかけがアンゴルモアにあって、その影響を受けた人間だったからだ！」

確信した様子でそう言うと、ユーノは拳を強く握りしめる。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

その頃、アルハザードの研究施設にて先のユーノが発動した完現術コンボの恐るべき力を再生していたスカリエッティの方は――――――

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

！！！！！』

『おおおおおおおおおお！！！！！！』

『『『『『『『『『『『『飛天御剣流秘儀・・・！！！』』』』』』』』』』』』

『『『『『『『『『『『『九十九龍閃（つくもりゅうせん）！！』』』』』』』』』』』』

「ふふふ・・・コアメダルのコンボならぬ、魂のコンボ・・・しかも逆刃刀に宿る二人の侍の魂を使役し自らの肉体に纏わせるとは・・・それだけでもユーノ・スクライアの力がどれだけのものかはわかる。しかも、それを彼はいとも簡単に使った。全く以て、素晴らしい！素晴らしいよ！！」

何時もの調子でそう高らかに口にするスカリエッティはそれを祝って、新しくケーキを作り始める。

プレシアはそんなユーノの姿を見ながら徐に呟く。

「嘗て、次元世界最強と言われた男にして、私の忌まわしき記憶の一つ、ジュエルシードを発見した元・結界魔導師で翡翠の魔導死神・・・そして今は完現術者のユーノ・スクライア・・・か」

「でも、この人ってあれだよね？確か、虚数区間から抜け出すために地獄の力を使ったって・・・」

隣で同じものを見ていたアリシアがそう言うと、スカリエッティは一度手を止めて更に興奮した様子で言う。

「その通り！人間として初めて虚数空間を抜け出し、且つ地獄に見出された存在！そのことだけでも実に興味深い人材だが、それ以前にユーノ・スクライアは私と同じこの世で最も価値ある貴重な人間なのだよアリシア君！」

アリシアはスカリエッティの不気味なまでに上機嫌な態度に思わずたじろぎ、母親の陰に隠れると、見ていたプレシアは注意する。

「リアクションが大きいわよ。アリシアが驚いているじゃないの」

「おっとこれはすまない、つい興奮してしまってね。ふふふ・・・そそられるな。最早プロジェクトＦの遺産にも、戦闘機人にも何の興味もない。これから私の興味をそそるのは君なんだよ・・・ユーノ・スクライア・・・そして君はもうじき、私の理想とする最高の『欲望の器』としての役割を果たすのだよ！ふふふっはははははははは！！！！」

高らかに笑いを上げるスカリエッティ。

彼が口にした『欲望の器』と一体なんなのか？

ユーノはこの先、どんな運命と闘うことになるのであろうか？

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

それから更に一日たった異世界、６９管理外世界「ＥＸＥ」にて、その極東に位置する小さな島国の小さな町、「秋原町」に一人の少女が住んでいた。

少女の名は桜井メイル。

今回、不運にもグリードに欲望の標的されてしまう何処にでもいる普通の女の子だ。

今、メイルは自宅のベッドの中に包まりながら、夢の中に出てくる秘かに思いを寄せる幼馴染、光熱斗と腕を組む恋のライバル、中国人の少女・ジャスミンの後ろを必死に追いかけながら大声を上げた。

「熱斗！！！！！！駄目エエエエエエエエエエエエエエ！！！！！！」

大声を上げてベッドから起き上がったメイルだが、それが夢だということに気が付くと、呆気にとられた表情を浮かべる。

「って・・・・・何だ・・・・・ただの夢か・・・・・にしても何て忌々しい・・・あのジャスミン／／／／／／」

拳を強く握りしめ、最近現実の方でも熱斗と仲良くするジャスミンに嫉妬心を燃やすメイルだが、するとそんな彼女の事を窺っていた彼女の携帯端末・・・通称『ＰＥＴ（ペット）』と呼ばれるものの中で暮らす擬似人格プログラムのロールが口を開ける。

『め、メイルちゃん・・・』

「？何よロール」

『何よ、じゃなくて・・・時間時間！』

「え？」

ロールにそう言われ、目覚まし時計に目を向けたメイルが見たのは、既に朝８時を迎え学校が始まる３０分前を切った時刻であった。

「あああああああああああああ！！！！！」

メイルは大声を上げながら急いで着替えと支度を澄ませ、大急ぎで学校へと向かった。

どうにか始業ベルが鳴る前に到着することが出来たメイルは、息を荒げりながら教室の自分の席へと着席し、ほどなくして一時間目の授業が始まった。

休み時間を迎えると、彼女の幼馴染でネットセイバーと言う若くしてネット犯罪に立ち向かう勇敢な少年、光熱斗に事情を話し彼は珍しそうな様子で呟いた。

「ふ～ん。それで俺より遅かったんだ。」

『でも、一体何の夢を見たんだい、メイルちゃん？』

熱斗がそう言った後、同じく話を聞いて彼のネットナビで彼の親友、ロックマンがペットの中から夢の内容を聞いてきたが、メイルは恥ずかしそうな態度を見せ適当にお茶を濁す。

「え！それは・・・その／／／（言えない・・・熱斗の前では絶対言えない・・・）」

「まぁ何の夢かは知らないけどさ、あんまり考え過ぎるなって！も

っとさ、夢は楽しいモノじゃないとさ！」

楽天的な熱斗の態度を見たメイルは深くため息をつく。

「あのね・・・私は熱斗みたいにそこまで楽天家じゃないの。それに、元はと言えば熱斗がジャスミンなんかと・・・」

「？ジャスミンがなんだって・・・」

「べ、別に何でもないわよ／／／」

顔を赤くしながらそっぽを向けるメイルを見て、熱斗は疑問符を浮かべる。

「変なメイルちゃん」

すると、その時熱斗のペットからメールを報せる音が聞こえる。

『熱斗君。ジャスミンからメールだよ』

「え。ジャスミンから」

ジャスミンと言う単語を耳にし、思わず反応するメイル。

熱斗が画面に目を向けると、ロックマンの隣にジャスミンのネットナビであるナースの姿に酷似したメディが現れる。

『お早う、熱斗君』

「お早う、メディ。ジャスミンから伝言？」

『ええ。部屋の家具を買い替えるんだけど、ちょっと重いものが多くて一人で大変だから手伝ってくれないかって』

「うん、わかった。学校が終わったらアニマルファームに行くって伝えといて」

『はい』

言伝を熱斗に伝え終えると、メディはロックマンと向き合い楽しげに会話をする。

「ロックマン。昨日はありがとう。」

「え・・・昨日って・・・」

「大したことじゃないよロールちゃん。インターネットシティーで買い物をしていたメディが道に迷ってたから、教えたんだよ」

「そ・・・そう・・・（む～～～！！！何よ何よロックマンったら！メディにはやけに優しくして！！）」

ロックマンに恋心抱いているロールはこの妙に彼が親しく接するメディに強い嫉妬心を抱いていた。

メイルがジャスミンと仲良くする熱斗にそうあるかのように・・・・・主人とネットナビはここまで考え方が似てしまうのか。

一方の熱斗もメイルにジャスミンの職場に行くことを提案する。

「メイルちゃんもアニマルファーム一緒に行かない？同じ女の子だし、ジャスミンに買うものとかアドバイスしたりさ」

「私は別に・・・（ホントに熱斗の奴・・・／／／私の気も知らないでいけしゃあしゃあと／／／何でよりによってジャスミンなのよ！！！）」

そんな事をついつい考えてしまう恋する少女、メイル。

そしてその放課後、何故か自分の意志とは反対に行きたくもないはずのジャスミンの職場であるアニマルファームへと訪れ、彼女が生活する寮へとやってきて模様替えの手伝いをしていた。

「（で、結局ついて来てしまった私って・・・・・・／／／）」

恥ずかしげにそんな事を思っていると、その横で熱斗が重い家具を運びながらジャスミンの指示を聞いていた。

「よっと！これはこっちの部屋？」

「そうネ。それが終わったらこれをリビングに運ぶの手伝ってほしいネ」

「お安い御用！この熱斗様に任せろってな！」

「頼りになるネ！」

「へへ」

二人はメイルの傍らで親しげに会話をする。

メイルはそれを見ると、スカートを常にながらつい言葉を漏らす。

「ぶ～～～！！！何よ何よ二人して楽しそうに／／／／／／」

「？メイルちゃん、どうかした」

「何でもない！！！」

「？」

気に掛けてきた熱斗の言葉を振り払い背中を向けて作業に没頭するメイル。

熱斗は終始そんなメイルを疑問符を浮かべながら見つめていた。

その間に、ペットの中のロックマンとメディはこんな会話をしていた。

「ロックマン。先に購入する家具の下調べに行きましょう」

「え、先に？」

「いろいろ調べてた方が、買い物が楽だから♪」

積極的にアプローチをかけ、ロックマンの腕に巻きつくメディ。

ロックマンは主人同様朴念仁の為、彼女の気持ちには一切気づかずたじろぐ様子で返事をする。

「う、うん・・・それもそうだね・・・・・・わぁ！」

すつとその時、様子を窺っていたロールが同じように反対側から腕を巻いてきた。

「ろ、ロールちゃん?!」

「行きましょう、ロックマン♪」

メディはそんなロールを見ると、激しい嫉妬の炎を燃やし、ロールもまたメディに対抗意識を燃やすと、ロックマンを取り合い互いに彼の腕を引っ張った。

「「む～～～～～～！！！」」

その光景はまるでなのはとマリアに同じことをされ続けているユーノの姿にも似ていたが、ロックマンは取り敢えず全力で痛がっていた。

「うわあああああ！！！！痛い痛い痛い！！！！！！」

「あ！」

ロールは思わず彼の身を案じて手を放すと、それをメディが奪い取り、勝ち誇った表情を浮かべる。

「うふっ」

勝負に敗北したロールは名残惜しそうにロックマンを見つめた。

やがて熱斗たちはジャスミンが希望する商品が置かれた店へと訪れ、家具の選別に入っていた。

熱斗は徐に取った家具をメイルに見せる。

「これいいんじゃない？」

「私に聞かれても・・・」

「あ、そうだね。ジャスミンが気にいるかどうかだもんね・・・」

すると、カーペットが陳列された棚を見ていたジャスミンが声をかける。

「熱斗！見て見て、この壁紙でどう！」

「もっといろいろよく見た方がいいよ」

そう言いながら二人はジャスミンの方へと近づいて行く。

その間に、ペットの中のロールとメディはお互いに自分が選んだ壁紙の色で張り合っていた。

「絶対こっちの方がいいって！」

「いいえ！こっちの方がいいに決まってるわ！」

激しいいがみ合いの末、二人は傍らで呆然とするロックマンに尋ねる。

「「ロックマンはどっちがいい？！」」

「あ・・・えっと・・・」

どの様に返答すれば二人が起こらずに済むのか必死で考えるロックマンであった。

一方の熱斗は、ジャスミンに適当に手に取ったカーペットを見せながら尋ねる。

「ほら。これなんかどう？」

「悪くないネ」

「こっちは？」

「ちょっと地味ネ」

メイルは自分だけを取り残して楽しそうに会話をする二人を見ると、思わず嫉妬の炎が湧き上がり、熱斗に声を上げる。

「ね、熱斗！ちょっと！！私は・・・・・熱斗！！」

「「はははははは」」

しかし熱斗はメイルの言葉を無視してジャスミンと笑い合っていた。

「む／／」

メイルはそんな熱斗の態度に我慢の限界を迎えると、徐に熱斗に近づいて行き、強烈なビンタを叩きこんだ。

「熱斗！！！！！」

「イテェ！！！」

熱斗はメイルのビンタを食らうと、地面に倒れ込み、心配そうに駆け寄るジャスミンの側で晴れた箇所を押さえながらメイルに言う。

「てて・・・何するのさメイルちゃん！」

「あんたこそ！！！人を置いてけぼりにして何楽しそうに話してるのよ！！」

「いいだろ別に。ジャスミンは俺の仲間なんだし、これぐらい普通だろ？」

「そうネ。私と熱斗は強い絆で結ばれた仲間ネ！仲がいいのはその絆の証拠ネ！大体、あなたこそ熱斗の幼馴染だか何だか知らないけど、少し図々しいネ。幼馴染だから特別だと思ってる口あるカ？」

「な！何ですって！！」

便乗してきたジャスミンの言葉に思わず怒りを覚えるメイルだが、ジャスミンは熱斗の傍らで更にこう言って来た。

「いい。熱斗にとって、あなたは唯の幼馴染でしかないネ。幼馴染のランクなんて、あってないようなものに等しいネ。そこんところ、あなたは勘違いしてるあるヨ」

「くうううううううう！！！！！！」

拳を握りしめながら嘗てないほどの怒りを覚えるメイルと、そんな彼女を挑発するジャスミンの間に入って熱斗は二人を宥めようとする。

「あ、あの二人とも落ち着いて・・・ジャスミンもちょっと言い過ぎだって・・・メイルちゃんも機嫌直して・・・ね！」

すると、その時・・・唐突にメイルは顔を沈めた状態から言葉を漏らす。

「そう・・・・・・分かったわ熱斗・・・・・・・」

「え？分かったって・・・」

「・・・・・・私は所詮熱斗にとっては、ただの幼馴染なんでしょ！」

「！」

熱斗はそう言いながら瞳に涙を流すメイルの顔を見て、驚き返るが、メイルは後ろを振り返ると大声を上げながら全速力で二人の前から立ち去って行った。

「バカ・・・・・・熱斗の馬鹿！！！もう知らない！！！いいわよ！！！宿題忘れって言っても見せてなんてあげないんだから！！！！」

「あ！メイルちゃん！」

熱斗は突然の事にたじろいでしまい、メイルを追いかけることが出来なかった。

呆然とする熱斗にロックマンはこう言う。

『メイルちゃん・・・泣いてたね、熱斗君・・・』

「メイルちゃん・・・・・・・」

メイルの事を心配する熱斗だが、その横でジャスミンは言う。

「熱斗。気にしちゃダメネ。さぁ、買い物の続き済ませちゃうネ」

「あ、うん・・・・・・」

その頃、一方的に熱斗たちの前から飛び出してしまったメイルはと言うと、人気のない通りで、顔を沈めた状態で立ち止まっていた。

ペットの中から今のメイルの事を心配するロール。

『メイルちゃん・・・』

「く／／／／／／」

『・・・・・私は所詮熱斗にとっては、ただの幼馴染なんでしょ！』

地面に涙を零しながら、メイルは先ほど自分が熱斗に向けて行って

しまった言葉を反芻させ、後悔の念を抱いた。

「私の馬鹿・・・・・・なんであんなこと言ったんだろう／／／」

『メイルちゃん・・・』

メイルは一度その場に腰を下ろすと、ペットを手に取りロールに寂しそうな目でこう言ってきた。

「・・・・・ロール。幼馴染って・・・言葉通りに、本当に小さいころからの長い付き合いってだけなのかな・・・」

『え？』

「私さ・・・小さいころからずっと熱斗の隣に居るのが普通だと思ってたからさ、こう言う風に自覚する事って無かったんだけど・・・熱斗がネットセイバーになって、一緒に居られる機会が段々少なくなっていって・・・ジャスミンみたいな女の子が熱斗の隣に居ると、どうしてそこは私じゃないのって・・・思っちゃうんだ・・・・・・」

『・・・・・・』

そう語って居たメイルだったが、途端大粒の涙をペットの画面に落とし始め、すすり泣きながら自分の正直な気持ちを暴露する。

「・・・でもやっぱり・・・寂しいな・・・／／／私だけが置いてけぼりで・・・熱斗がどんどん変わっていって・・・／／／／／／そのうち熱斗の心から私がいなくなるんじゃないかって考えたら／／／／／」

ロールはこんなにも悲しい顔を浮かべるメイルを見て、居ても経ってもいられなくなる。

『メイルちゃん。お願いだから泣かないで。悲しい顔しないで。そんなことあるはずないわ。熱斗君だって、そんな事思ったりしてないから。ね？』

「ううううううう／／／／／／」

そう思いながらも、メイルの瞳からは涙が止まる事は無かった。

そんなメイルとは別に、この世界の方でスマートフォン片手に情報収集をしていた鳥のグリード、アンクはと言うと、掲示板に書き込まれていた「紫色の結晶」と言う言葉に目を光らせた。

「紫色の結晶・・・？まさか・・・こんなにも早くアンゴルモアが・・・？」

そう言いながら何気なく下の方を覗いてみると、彼の目に映ってきたのは――――――

「ん」

偶然にもメイルの姿であった。

アンクは不敵な笑みを浮かべると、徐にタカの絵が描かれたセルメダルを一枚取出し、右腕を変化させるとメイルの欲望に目を付けた。

「ふん。丁度いい。あの人間の欲望を使わせてもらう――――――」

アンクはメイルの後頭部に狙いを定めると、セルメダルを投げつけ、メイルはその瞬間現れた投入口にセルメダルを投与され、険しい表情を浮かべた。

「うっ」

『メイルちゃん？』

「う・・・何・・・この・・・！」

身体の異変を感じ唸り声を上げるメイルとそれを覗き込むロール。

その時、メイルの体の中から白ヤミーが誕生し、それを見たメイルとロールは声を上げた。

「『キャー！！』」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ヤミーが誕生する数十分前、機動六課の自分のオフィスで仕事をしながら何か物思いに考え込んでいたユーノ。

「・・・・・・」

ユーノスは肩に乗ると、徐に尋ねる。

「どうした？ユーノ」

「いえ。まさかグリードの体の中に未発見のアンゴルモアが埋め込まれていて、且つその所為でヤミーはアンゴルモアの余波が体に宿ってしまい、それに対抗する術が同じアンゴルモアの力が体に残った僕の完現術だけとは――――――何の因果か知らないですけど、非常に複雑です」

「ああ。だがいずれにしろグリードはまた次元世界のどこかで獲物を見付けて動き回っている。このまま野放しにするわけにはいかない」

「はい。ただ、少し心配もあります」

「心配？」

「なのはですよ。きっとなのはは僕がまた戦うことになってしまったことに不安を感じてる。グリードとの戦いで、僕が傷ついてしまう事に彼女は悲しい目を向ける。」

「お前となのはは、信頼関係と絆が強いから互いに傷つくのが嫌なのだな」

ユーノスがそう言うと、ユーノはひとえになのはの事を考えながら複雑な表情を浮かべる。

「出来れば戦わない方がいいのかもしれませんが、僕はその所為で何かを失うのは嫌なんです。手が届くのに手を伸ばさなかった・伸ばし切れなかった為に僕は何度後悔したか・・・・・・何度大切なものを取りこぼしたか・・・・・だからそうならないように、後悔しない為にも自分にその為の力があるなら使う。ヤミーとグリー

ドに対抗できる力が僕に備わっているのなら、僕は戦うまでです。なのはが何と言っても・・・」

「よく言った。それでこそ、結界印が認めた男だ。お前には辛い想いをさせてしまっているが、どうか協力を頼む」

「はい。」

ユーノは話を終えると、再び仕事に取り掛かる。

と、その時二人の耳にアンゴルモアの発見を報せる警報が鳴り響く。

「「！」」

警報を聞くと、二人は表情を凍りつかせる。

「この反応は・・・まさか！」

するとそこへ、恋次が二人を呼びに入ってきた。

「ユーノ！直ぐに集まれ！一年ぶりのアンゴルモア反応だ！」

ユーノとユーノスはそれを聞くと、一目散に司令室へと向かう。

司令室に到着すると、ユーノは反応が確認された世界のポイントを中央のモニターに映し出し、緊迫した雰囲気の前線メンバーに説明する。

「第６９管理外世界『ＥＸＥ』。サイバーネット革命によって、インターネットを始めとする情報システムの急速な発達によって、ミ

ッドほどではないが誰もが最速で知りたいことを得られるようになった。最大の特徴として、『ＰＥＴ』と呼ばれる携帯端末が一般家庭全域に広がっていて、その中には擬似人格プログラムの『ネットナビ』が完備されていて、オペレーターはそのネットナビと共に日常生活を送っているらしい。」

「へぇ。随分近未来的な世界だけど、それでも管理外なんだ」

「ユーノ。今回のアンゴルモアはその世界のどのあたりから？」

フェイトの言葉を聞くと、ユーノは更にタッチパネルを操作し、その位置を絞り出す。

「ここだ。極東中心部に位置する『秋原町』と呼ばれる市街地にある今じゃ全く稼働していない廃工場から微弱ながら反応が」

「そうか・・・よし。今回はグリード関連の話やないし、何よりユーノ君には静養が必要や。ここは、スバルとティアナ、それとフェイト隊長の三人に行ってもらおうか」

「「「了解です」」」

「そうして貰えると助かるよ。何しろまだちょっと眠くて・・・はぁ～～～」

ユーノは思わず一日たっても残っている眠気の所為で大欠伸をかき、傍らで見ていたなのはは彼に近づき言う。

「無理もないよ。ユーノ君は否応なくヤミーとの戦いで完現術を使い続けてるんだもん。疲れだって相当溜まってる。今日はフェイト

隊長達に任せて、ゆっくりとこの椅子にかけて見てて」

なのはがそう言うと、フェイト達も自信に満ちた顔でこう言う。

「大丈夫。心配はぬぐえないけど、グリードが見つける前にこっちが先に見つけ出して封印すればいい話だし」

「何が来たって、問題ありませんよユーノ先生！」

「お体の方、気を遣ってくださいね」

「ありがとう、みんな」

「では、転送ポートの座標を固定する。」

クロノは転送ポートの座標を固定すると、準備を整えた三人は全員に見送られながら目的の世界「ＥＸＥ」へと向けて出発した。

◇

〈???Ｓｉｄｅ〉

彼女たちが向かった丁度その頃、廃屋工場で微弱な反応を見せていたアンゴルモアは周囲に散らばっていたネットナビを凶暴化させ、暴走させる性質を秘めたダークチップと呼ばれるものをかき集め、一つの実体を作り出すと街へと向けて飛び出し大暴れを始めた。

「ぐおおおおおおおおおおお！！！」

「ひぃ！」

「きゃあああああ！！」

「「「わあああああああああ！！」」」

人々は真っ黒なボディが特徴のネットナビ、もといＡＭ体の力に恐怖し、逃げ惑う。

ＡＭ体が街で暴れているという情報は、買い物を終えたばかりの熱斗とジャスミンの元へと伝えられる。

「随分買ったね」

「でもこれでリフォームは完璧ネ！」

そんな会話をしている二人に、ロックマンがその事を伝える。

『熱斗君！名人さんから連絡だよ』

「名人さんから？」

ディスプレイを表示させると、熱斗の前に映ってきたのは科学省に勤務する正体不明の男、通称名人と呼ばれる人物であった。

『熱斗君』

「名人さん」

『“さん”はいらない。それより事件だ。謎のネットナビが実体化して、街で騒ぎを起こしてる。直ぐに急行してくれ』

「了解！」

すると、話を聞いていたジャスミンも一緒に行くと言いだした。

「熱斗、私も行くネ！」

「え？でも危ないよ！」

「私もこれでもクロスフィージョンメンバーの一人ネ！それに、万が一熱斗が怪我でもした時は、私が治療してあげるネ」

「よし分かった！それじゃあ行こう！」

熱斗とジャスミンは急いで現場へと向かった。

「ぐおおおおおお！！！」

現場に到着すると、辺りはいたるところＡＭ体によって破壊され、街中はパニック陥っていた。

『熱斗君。あれだよ！』

「わぁ！なんだありゃ！？見たこともない奴だ・・・・・・ホントにネットナビなのか？」

「細かいことは後でいいネ！とっと倒すアル」

熱斗は名人にもう一度連絡を入れると、次のように言った。

「名人さん！ディメンショナルエリアをお願い！」

「“さん”はいらない！ディメンショナルエリア、展開！」

名人は目標ポイントに座標を合わせると、ディメンショナルエリアと呼ばれる現実世界に出現したネットナビを倒すために使用する特殊空間を発生させ、辺り一帯はディメンショナルエリアによって包まれる。

「行くよ、ジャスミン」

「はいネ！」

二人は懐からネットナビと融合を果たすために必要な特殊チップ、シンクロチップと呼ばれるものを取出し、それをペットの中へと挿入する。

「「シンクロチップ、スロットイン！」」

挿入をすると、構築の準備が整ったという表示が現れ、ペットが強い光を発する。

「「クロスフュージョン！」」

二人はお互いのネットナビと擬似的な融合を果たすことクロスフュージョンによって、ロックマンとメディに酷似した姿となる。

クロスフュージョンが完了すると、熱斗はあらかじめ仕込んでおいたバトルチップを右腕に転送し装備する。

「バトルチップバルカン！」

熱斗は装備したバルカンでＡＭ体を攻撃し、ジャスミンはメディの基本攻撃技であるメディカプセルをぶつける。

「メディカプセル！」

二人の攻撃をまともに受けたＡＭ体が、そこはやはり大したダメージにはならなかった。

「うわ！何だこいつ・・・全然効果なし！？」

『熱斗君。ここは牽制して。このネットナビ、何か妙なんだ？』

「妙って？」

『上手く言えないけど、何か僕達の知らない何かに操られてるって言うか何と言うか・・・』

「俺達の知らない何か？」

ロックマンの言葉に首をかしげる熱斗。

と、その途端熱斗の上空にＡＭ体が出現し、ジャスミンはその事を伝える。

「！熱斗、上を！」

「な！」

熱斗はＡＭ体の攻撃を間一髪のところで回避し、ジャスミンと共にＡＭ体を牽制する。

「くそ・・・どうすれば・・・」

渋い顔を浮かべていたその時、ＡＭ体の背後からフェイトのハーケンセイバーが飛んで来た。

〈Ｈａｋｅｎ　Ｓａｂｅｒ〉

「はあああああああああ！」

ＡＭ体はその攻撃を受けると、大声を上げて苦しみだし、熱斗たちは突然の事態に驚いていた。

「え？今のって・・・」

「あ！熱斗！あの人達・・・！」

ジャスミンはそう言って熱斗に自分が指さす方へと目を向けさせると、熱斗の目に映って来方のはアンゴルモア回収の為にやって来たバリアジャケット姿のフェイト、スバル、ティアの三人だった。

ちなみにスバルはウィングロードの上に、ティアナは電柱の先に立っていた。

『宙に浮いている女性が鎌のようなものを・・・』

「それに鉢巻を巻いた女の人と銃を持った女の人が・・・」

フェイト達は唖然とする熱斗たちの方へと近づくと、彼らの安否を確かめる。

「君たち、大丈夫？」

「私達は平気アル・・・それより誰アルか？」

「時空管理局機動六課の前線部隊です。訳あってあれを」

「時空管理局・・・何だロックマンそれ？」

『僕にもわからないな・・・ひょっとしてこの人たちはここの世界の住人じゃないのかも・・・』

「え？それってまさか、ビヨンダードから来たって事？」

熱斗が言うビヨンダードとは、熱斗たちが知っている一種のパラレルワールドの事で、空間の裂け目である「フョッサアンビエンス」を通して行き来できる世界なのである。

まぁ、今はその事は置いて置くとして、フェイト達はＡＭ体の前に出ると、熱斗たちに言う。

「ここは私達に任せて、君たちは下がってて」

「いや、流石にそれは・・・俺こう見えてもネットセイバーなんだぜ」

「ネットセイバー？じゃあ、君はその若さで警察の仕事に？」

「そう！お姉さんたちが何処の誰かはまだ分からないけど、ネットセイバーの一人して、見過ごすわけにもいかない！」

「じゃあ、そこまで言うんなら手伝ってもらうわよ。スバル、クロスシフトA」

「おう！」

スバルはウィングロードの上を駆け抜けてAM体へと接近し、その間にティアナとフェイト、そして熱斗たちがAM体を牽制する。

「バトルチップ、ワイドソード！」

「カプセルボム！」

二人の攻撃を受け、後退するAM体。

その直後、背後よりフェイトのプラズマスマッシャーが飛ぶ。

「ファイア！」

熱斗たちは一際高い威力を秘めたフェイトの魔法に思わず目を奪われる。

そして、疲労困憊したAM体に止めを刺すのはスバル・ティアナのコンビだった。

「リボルバー・・・」

「クロスファイアー・・・」

タイミングを合わせると、二人は魔力弾を発射する。

「「シュート！」」

ＡＭ体はその同時攻撃を受けると、その場に倒れ込んだ。

「効いた！」

『あの人たちのあの力は一体・・・』

未知なる力を持ったフェイト達の実力に開いた口がふさがらない熱斗とロックマンだった。

ＡＭ体を倒した様子をモニターの方で眺めていたはやて達も安どのため息をついていた。

「よし。これなら・・・・・・」

だがその時、安どの表情から一変、ユーノとユーノスはヤミーの気配を感じ取ってしまった。

「「！」」

「ユーノ君？」

「どうしたフェレットもどき。そんな渋い顔・・・」

と、クロノがいつもの様子でそう言おうとすると、ユーノは血相を変えて大声を上げた。

「ヤミーだ！しかもフェイト達のすぐ近くに！」

「「「「な、何！？」」」」

ユーノはその場から立ち上がると、ユーノスを連れてフェイト達の元に急いだ。

その頃、この事を知らないでいるフェイト達はと言うと、その場に倒れるＡＭ体へと近づき、封印作業をしようとしていた。

「君たちは下がってて。私達で中のものを封印するから」

「は、はい」

熱斗たちが言われた通り後ろの方で封印処理が済むのを見守っていると、その直後ジャスミンの背後より突然白ヤミーが出現し、襲い掛かってきた。

「キャー！！」

「！ジャスミン！」

白ヤミーはジャスミンの首を絞めると、力いっぱいジャスミンの体を投げつける。

「『きゃあああああ！』」

「『ジャスミン（メディ）！』」

熱斗とロックマンは倒れたジャスミンの方へと駆け寄り、封印を行おうとしていたフェイト達は白ヤミーの出現に目を疑った。

「あれは・・・！」

「まさか、ヤミー！」

熱斗が気絶したジャスミンを起こそうとしていると、その現場にたまたま立ち寄ったメイルとロールは白ヤミーと一緒に熱斗たちを凝視する。

「あ！熱斗！」

『それにあれって・・・ジャスミンとメディ！』

と、その時丁度転送ポートからディメンショナルエリア内に侵入したユーノとユーノスが駆けつけてきた。

「フェイト！みんな！」

「ユーノ！」

「ユーノ先生！ヤミーが・・・！」

スバルがそう言うと、ユーノとユーノスは白ヤミーを見つめる。

「何と言うことだ・・・まさかこのタイミングでヤミーが現れるとはな・・・ユーノ。これ以上の被害を出す前に、一気に片を付けろ」

「はい」

ユーノスから結界印を受け取ると、ユーノはユーノスを下して完現術を発動。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

「フェイト達はアンゴルモアの封印とあの子たちの保護を！」

「了解！」

ユーノは指示を出すと、まだ成長しきっていない白ヤミーの方へと駆け出していく。

と、その瞬間白ヤミーが赤いオーラを発してその姿を成長させる。

「「「「「「『！』」」」」」」

驚く全員が徐に成長したヤミーに目を向けると、ユーノ達はその姿に思わず声を漏らした。

「え」

「あれは・・・」

ユーノ達の目に飛び込んできたのは、今まで見たヤミーとは違う背中に翼を生やした全身が青のオウムを思わせる鳥のヤミーであった。

「鳥の・・・ヤミー・・・！？それって」

「まさか・・・そんな！」

ユーノスは信じられないとばかりの表情を浮かべながら鳥ヤミーを凝視し、熱斗たちも突然姿を変えたヤミーに目を疑った。

「ろ・・・ロックマン・・・何だよあれ・・・？」

『僕にもわからない・・・ネットナビではないことは間違いなさそうだけど・・・』

ユーノスはオウムヤミーを見つめながら、このヤミーを作れる唯一のグリード、アンクの存在を疑った。

「（鳥のヤミー・・・だとしたらこれは間違いなく・・・・・・しかし何処に居るというのだ・・・鳥のグリード、アンクは！）」

と、考えていた矢先オウムヤミーが動き出す。

「来ます！」

オウムヤミーは背中の翼を広げると、ユーノ目掛けて飛び込んだ。

ユーノは初めて戦う飛翔能力を持った鳥のヤミーの能力に手を焼いていた。

すると今度はオウムヤミーの口から炎が噴射し、ユーノはその炎をまともに食らった。

「わーーー！」

「ユーノ先生！」

ユーノは咄嗟に空気を完現術させ薄い膜を体に纏わせダメージを軽減させ、オウムヤミーの動きを牽制する。

「こいつ結構手ごわいな・・・」

そう言った直後だった。

「ロックバスター！」

「！」

クロスフュージョン状態の熱斗が基本装備ロックバスターをオウムヤミーに向けて発射してきたのだ。

熱斗はジャスミンを傷つけたオウムヤミーに怒りを覚える。

「よくも俺の大切な仲間を！喰らえ！」

熱斗は脇目も振らずにロックバスターをオウムヤミーに発射するが、見ていたユーノスはフェイトの肩から声を上げる。

「止せ！素人がヤミーに手を上げるな！」

ロックバスターを受け続けたオウムヤミーだが、取り立てて効果はなく、逆に口からの火炎放射で熱斗を後退させる。

「ぐあああ！」

ユーノはオウムヤミーに向かって走りながらスレイヤーブレイドを構える。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｂｌａｄｅ〉

「は！」

ユーノはオウムヤミーの体に鋭い斬撃を叩き込み、隙を見せた瞬間「時を伝える焔」の異名をとるタイムテルズフレイムを浴びせる。

〈Ｔｉｍｅ　ｔｅｌｌｓ　ｆｌａｍｅ〉

オウムヤミーはその攻撃を受けると、爆発を伴い飛ばされる。

「これならどうだ！」

そうユーノが口にした時、事態は急変する。

オウムヤミーは戦いを止めると、ヤミーの親であった桜井メイルを探しだし、彼女を抱きかかえて空高く舞い上がった。

「きゃああ！！」

メイルの叫び声を聞いた瞬間、熱斗とロックマンは耳を疑いながらも、オウムヤミーに抱えられた彼女の姿を捕える。

『あれは！』

「メイルちゃん！！！」

「放して！！！放してってば！！熱斗！！！」

オウムヤミーは更に上昇すると、ディメンショナルエリアを破壊して更に飛翔を続ける。

フェイトとティアナは大声を上げてオウムヤミーに問いかける。

「待て！！」

「ちょ、ちょっと！待ちなさい！」

と、その時スバルがもう一つの重大事実に気が付いた。

「あ！フェイトさん！ティア！ＡＭ体が・・・！」

二人が目を向けた時、そこには先ほどまでいた筈のＡＭ体が二人がオウムヤミーに気を取られている隙に忽然と姿を消してしまったのだ。

「しまった・・・！」

「逃げられた・・・！」

大いに悔しがるフェイト達だったが、一方で熱斗はクロスフュージョンが解ける前に背中のブーストに備えられた噴射口からエンジンを噴射させ、オウムヤミーの元へと飛行し、メイルの開放を求める。

「メイルちゃんを返せ！」

すると、オウムヤミーはメイルを抱きかかえたまま口から火炎弾を発射し、飛んでいた熱斗に被弾させる。

「『わっ！ああーーー！』」

「「あ！」」

ユーノとユーノスはそれを見て思わず目を見開き、熱斗はそのまま湯気を上げて落下。

「熱斗！！」

「その程度で限界か」

オウムヤミーはそう言いながら一度地上に降り立つと、止めの火炎弾を熱斗に向けてぶつけ、熱斗は体から火花を散らして声を上げる。

「わあーーー！」

「まずい！」

ユーノはこの状況を見ると、逆刃刀を取り出し強く念じながら刀身に完現術の力で霊圧を込めていく。

「やったことはないけど・・・頼む！答えてくれ！」

〈Ｇｅｔｓｕｇａ　ｔｅｎｓｈｏ〉

ユーノは意を決すると、師・一護秘伝の斬撃をオウムヤミーに向けて飛ばした。

「月牙・・・天衝！！！」

月牙天衝が飛んでくると、オウムヤミーは火炎弾を撃ってそれを防御し、再びメイルを抱きかかえて空高く飛翔する。

「きゃあああ！！！」

悲鳴を上げるメイル。

その瞬間、メイルの目元からペットが落下し、スバルはそれをキャッチする。

やがて、ディメンショナルエリアが解け、熱斗とロックマンがそれぞれ元の姿に戻ると、熱斗は満身創痍の状態で苦い顔を浮かべており、フェイトはそんな熱斗の容体を気遣う。

「大丈夫かい君！？しっかりして！」

「ふん。やられるくらいなら最初から出てくるな」

オウムヤミーはそう言うと、悲鳴を上げるメイルを連れたままどこかへと立ち去って行く。

「熱斗！！！助けて！！！」

熱斗は朦朧とする意識の中、ユーノ達の傍らで大切な彼女の名を口にする。

「メイルちゃん・・・メイルちゃん・・・！」

「熱斗！！！」

「メイルちゃん――――っ！！！」

熱斗の叫び声がただただ空しく響き渡る――――――

一体オウムヤミーはメイルを連れてどこへと向かったのであろうか？

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚

恋とアンゴルモアと鳥ヤミー（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はロックマンエグゼについてだ♪」

「ロックマンエグゼは、２００１年３月２１日にカプコンから発売されたゲームボーイアドバンス専用のアクションＲＰＧをもとにしたアニメであり、第１シリーズ『ロックマンエグゼ』は毎週月曜日１８時３０分から１９時００分に放送され、その後半年の休止を挟んだ後、毎週土曜日８時３０分から９時００分の時間帯で第２シリーズ『ロックマンエグゼＡＸＥＳＳ』（－アクセス）、第３シリーズ『ロックマンエグゼＳｔｒｅａｍ』（－ストリーム）、第４シリーズ『ロックマンエグゼＢＥＡＳＴ』（－ビースト）が放送された。」

「高度に電子化された近未来の世界。主人公の光熱斗は、父より贈られたネットナビ「ロックマン」と共に、ウイルス退治（ウイルスバスティング）を行い、ネット犯罪集団に立ち向かっていと言う趣旨のものだ♪」

フェ「でも小学生が犯罪集団と闘ってのはちょっとな・・・怪我でもしたらどうするんだろう？」

ユ「相も変わらず心配性だねフェイトは。それを言うなら管理局も似たようなことしてるでしょうが。寧ろ積極的に」

フェ「それはそうなんだけどさ・・・でも子供やっぱり子供らしいことしてほしいって気持ちがあるし、エリオとキャロにも出来れば子供で居て欲しいって気持ちがあってだね・・・」

ユ「はぁ～～～一つ言っておこうか。子供って言うのはだね、親からしたらどんなになっても子どもなんだよ。そうだろ、エリオ。キャロ」

エ「はい。あんまりべたべたするような歳ではないですけど、僕達はいつまでもフェイトさんの子供ですから」

キャ「だから、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

フェイトはそれを聞くと感動のあまり涙ぐむ。

フェ「う～～～／／／ありがとうね、二人とも～～～／／／よし！そうと決まれば、偶には親子三人一緒にお風呂にでも入ろう！」

キャ「はい！」

エ「えええええええ／／／／／／／／いや！！！それは流石に駄目ですよ！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課のとある日の夜。

恋次達男どもはアームレスリングに熱中していた。

ス「それじゃあ両者向かい合って力を抜いて・・・レディーゴー！」

恋・吉「うおおおおおおおお！！！！」

お互いに力を入れる二人。

激闘の末、恋次が吉良に勝利する。

恋「よっしゃああ!!見たか俺様のパワー!!!」

吉「くそ・・・もう少しだったのに・・・!」

恋「ははははは!!!俺様に勝とうなんざ、千年早いんだよ!次はどいつだ俺様に挑んでくる命知らずは!?」

すると、それをたまたま通りかかったユーノが面白がって飛び入り参加する。

ユ「じゃあ僕とやりませんか?負けませんよ♪」

恋「面白い。受けて立つぜコノヤロウ」

自信に満ち溢れた恋次だったが、その直後の勝負で恋次は実力の差を思い知る。

恋「のおおおおおおおおお!!!!!!」

いくら恋次が力を入れても、ユーノの腕はピクリとも動かず、ユーノは涼しい顔を浮かべる。

ユ「本気でかかってきてますか恋次さん?」

恋「本気も本気だ!!!!なのに何でお前の腕は動かないんだよ!!!!」

な「知らなかったんですか?ユーノ君、暇なときは山籠もりして素手で崖の上を昇ったりとか、それを削って菩薩作ったりとかしてたんですよこの一年♪」

恋「お前!!!!一体何してるんだよ!!!!!」

思わず驚き呆れかえる恋次であった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

メ「もう止めてよ!!私そんなこと望んでない!!」

ヤ「お前の恋を邪魔する女は消す!」

熱「メイルちゃんは俺の大切な人だ。だけどそれは友達として・・・幼馴染だから・・・」

ユ「本当に大切な気持ちって言うのは、もうとっくに気づいてるものなんだよ。」

熱「俺が必ず、メイルちゃんを助ける!」

第１４７話　熱斗と幼馴染と友達以上

登場人物紹介

ノーヴェ・ナカジマ

声：斎藤千和

ナンバーズの９。赤い髪と少年的な容姿をした少女。クローン培養。白兵戦に優れた典型的な前線戦闘員。能動的な性格で、スカリエッティに従順なナンバーズの中で唯一自らの意思で行動しようとしており、ナンバーズの上に立つという「聖王の器」ヴィヴィオを見定めようとしていた。この頃は短気で常に不機嫌なため、敵はもちろん他の姉妹にも威圧的な態度を取る。だが何かと世話を焼いたチンクは姉として強く慕っていた。その為チンクに重傷を負わせたスバルやティアナ達に対する報復を第一に考えていた。固有武装はスバルのリボルバーナックルを模して作られた簡素な篭手「ガンナックル」と、マッハキャリバーを模して作られたナックルスピナーを備えるローラーブーツ「ジェットエッジ」で、ＩＳは黄色のウィングロード「エアライナー」も含めた格闘能力の総称で「ブレイクライナー」。これら固有武装は、『ＶｉＶｉｄ』の頃にはノーヴェ用のインテリジェントデバイス「ジェットエッジ」として、バリアジャケットのデザインに変更が加えられた形で再現されている。ゲンヤが保護責任者となって「ノーヴェ・ナカジマ」となり、チンク、ディエチ、ウェンディと共にＮ２Ｒというユニットを結成して行動する。ゲンヤが義父親になってからも、恥ずかしがっているせいかなかなか「父さん」と呼べずにいた。『ＶｉＶｉｄ』の頃には皆とすっかり打ち解けており、以前の不機嫌さも無くなって人当たりが良くなっている。また救助隊など様々なことに積極的に参加している。「ストライクアーツ」の有段者で、自身も修行中の身と言いながらもヴィヴィオ・リオ・コロナの先生をしているが、スバルやギンガ

が会得しているシューティングアーツではなく、ストライクアーツを学んでいる理由は不明。

熱斗と幼馴染と友達以上（前書き）

熱「俺達・・・ずっと仲良しだよな。おまじないなんてなくたってさ」

熱斗と幼馴染と友達以上

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事

一つ、ユーノの完現術の新たな力、完現術コンボの影響でユーノは睡魔に襲われる。

二つ、光熱斗の幼馴染、桜井メイルの欲望からヤミーが生まれる。

そして、三つ。ヤミーは桜井メイルを連れ去り姿を消してしまった。

熱「メイルちゃん――――っ！！！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚

〈ユーノＳｉｄｅ〉

「君！大丈夫！？しっかり！」

『熱斗君！ロックマン！しっかりして！』

ユーノは変身を解くと、フェイト達と一緒にヤミーの攻撃を受け重傷を負ってしまった勇敢なる少年、光熱斗とジャスミンの元へと駆け寄り、連れ去れていった熱斗の幼馴染でヤミーの親となってしまったメイルが手から落としたＰＥＴの中に居るネットナビのロールもまた、その中で熱斗のナビのロックマンの容体を気にする。

すると、ロールの言葉を聞いたロックマンが険しい表情を浮かべながら満身創痍の状態で意識を取り戻し応える。

『う・・・大丈夫ロールちゃん・・・』

ロールはその事に涙目になりながら安どの表情を浮かべる。

同じくして、ユーノの腕に抱えられていた熱斗もまた満身創痍の状態でありながら辛うじて意識を取り戻し悔しそうな声を上げる。

「くう・・・」

フェイト達はその事を確認し、同じく安どの表情を見せる。

その後、ユーノは徐にタカカンを取出し、プルタブを引いて起動させヤミーの追跡を行わせる。

「ヤミーを追え」

ユーノの命を受けたタカカンは早速消えていったオウムヤミーの足取りを追って飛び立った。

その間にフェイト達は気を失ったジャスミンを運ぼうとし、熱斗はぼろぼろの状態でありながらメイルの事を案じ続ける。

「メイルちゃんが・・・・・それと、ジャスミンも・・・」

ユーノは一度ジャスミンの方へと近づき、その状態を確かめるとすぐさま適切な処置を施しながらフェイトに言う。

「こいつは酷いな・・・フェイト。すぐに病院に運ぼう」

「うん」

すると、不安げな顔でスバルが言う。

「これもヤミーの仕業ってことですか」

スバルがそう口にすると、聞いていた熱斗は振り返り苦い顔で質問する。

「や、ヤミー？それってメイルちゃんをさらったあの鳥！？」

「そう。しかしなんだってこんな・・・！」

スバルはそう言うと、隣のティアナと共に腕組みをしながら頭を悩ませ、ユーノは肩に乗ったユーノスに尋ねる。

「ユーノス元帥。何か心当たりは？」

「さっきのヤミーは属性は“鳥”だった。」

「それがどうかしたんですか？」

ティアナがその事を聞いて不意にそう言うと、ユーノスは真剣な顔つきで更に続ける。

「ヤミーの属性はそれを作ったグリードで決まる。ウヴァなら昆虫系。カザリは猫系。メズールは水棲系。ガメルなら重力系。そして、鳥のグリードを作れるグリードは唯一人・・・」

「まさか・・・それって！」

ユーノスの言葉を聞いた直後、目を見開きながら心当たりのあるユーノ。

ユーノスはそんなユーノの顔を一瞥し、確信を持った様子でこう言った。

「この場合、考えられるグリードは、未だその姿を俺達の前に表したことのない鳥のグリード、アンクだ！」

「アンク・・・・じゃあそいつが・・・」

「だからって・・・何でメイルちゃんを・・・・・・ぐっ！？」

『『熱斗君！』』

熱斗は傷の痛みをずっと我慢していた。

そして、その我慢が限界を迎えると傷口を抑えながらその場に倒れ気を失ってしまう。

ユーノスとユーノは熱斗の顔に近づき意識を確認する。

「大丈夫か！？」

「詳しい話は熱斗君とジャスミンちゃんを病院に送り届けてからだ。」

「それが正解だね。結構性質が悪いよ、今回の。それに、ＡＭ体だって取り逃がしちゃったし・・・」

「私達の失態です・・・」

フェイトを含め、スバルとティアナは申し訳なさそうに頭を下げて項垂れる。

と、その時追跡中のタカカンが意外にも早くユーノの元へと帰還してきた。

「速いな・・・もしかして見失ったのか？」

ユーノがそう言うと、タカカンは首肯し、それを聞いたユーノの顔は些か曇る。

「そうか・・・」

「そうなると・・・・・・俺とお前のセンサーだけが頼りか」

ユーノスは渋い顔を浮かべながらユーノの肩に飛び乗り、ユーノも徐にタカカンを戻して懐に仕舞い込む。

すると、今度は熱斗のＰＥＴより科学省の名人からの緊急連絡が入る。

「？この音は・・・」

フェイトが熱斗のＰＥＴを拾い上げ、スイッチを押すと、ディスプレイが浮かび上がり名人が血相を変えた様子で声を上げてきた。

『熱斗君！無事かって・・・どちら様でしょうか？』

名人はディスプレイに登場したフェイト達の顔を見て、困惑した様子となり、聞いていたユーノ達はそれ以上に困惑しながらも取り繕った様子で答える。

「え・・・ああ・・・いや・・・僕達はその・・・通りすがりの者でして・・・／／／」

すると、ユーノ達の会話を聞いて困ってるのを見たロックマンがフォローに入った。

『名人さん。この人たちは僕達を助けてくれたんだ。』

「何？本当かそれは」

『はい。それから、熱斗君とジャスミンが怪我をして、メイルちゃんが謎の怪人にさらわれてしまいました！』

「何だと！分かった。直ぐに対応策を考える。一先ず熱斗君とジャスミンはそのまま病院に送るよう、その人達に伝えてくれ」

『了解』

ロックマンはその旨をユーノ達に伝えると、ユーノ達は直ぐに救急車を要請し、熱斗とジャスミンの二人を搬送する。

病床に横になりながら、気絶したはずの熱斗は寝言のようにメイルの名前を口にしていた。

「メイル・・・ちゃん・・・」

傍らで救護班と共にそれを聞いていたユーノは思わず心が苦しくなった。

「・・・・・・」

◇

〈病院Ｓｉｄｅ〉

ヤミーとの戦闘から数時間後。

すっかり陽も落ち、月明かりが出始める時間帯となった。

熱斗もジャスミンも早期に適切な処置を受けた結果、後遺症も残らない程度にまで回復する見込みで、現在ベッドで安静にした状態で眠っていた。

その様子をユーノは代表で見守り、安どの表情を浮かべると病室から出て来、そとのベンチで座って待っていたフェイト達は恐る恐る尋ねる。

「ユーノ。熱斗君達の様子は？」

「一先ず落ち着いたよ。ジャスミンちゃんも軽い怪我で済んだ。明日には退院できそうだよ」

「そうですか。」

最悪の結果になることを恐れていたフェイト達にとって、この上もなく嬉しい吉報であった。

ユーノスもユーノの肩の上に乗りながらユーノと一緒にほくそ笑む。

すると、そんな彼らのもとにある人物が尋ねてきた。

「御取り込み中、失礼します」

「？」

ユーノ達が声のする方向へ目を向けると、廊下に立っていたのは髭を生やした初老の男と、その傍らで真剣な表情でユーノ達を見つめるスタイリッシュな女性、そしてメガネをかけた科学者と思わしき男性だった。

「あなた達ですか。我がネット警察が誇る優秀なネットセイバーの光熱斗君を助けてくれたのは？」

「そう言うあなた方は？」

「ネット警察署総監の貴船です。こちらの方は、熱斗君の父親で科学省随一の腕を持つ光祐一朗博士です。」

「どうも、お初にお目にかかります。」

「警視の真辺です。この度は本当に何とお礼を言ったらよいか」

祐一朗や真辺、そして総監の貴船はユーノ達の剣心的な行為に対して深々と頭を下げる中、見ていたユーノ達は多少気恥ずかしそうにこう返した。

「あ、いえ。私達の方こそご迷惑をおかけいたしましたし・・・それで早速なんですが、お互い分からないことだらけだと思いますので、先ずはお話をしたいと思う次第です。」

「それが正論でしょうな。ではこちらへ。」

貴船はティアナの申し入れを受け入れると、警察病院内部にある特別会議室へとユーノ達を案内し、ユーノはユーノスを肩から下すと、熱斗たちの事を任せた。

「ユーノス元帥は、熱斗君が起きるまで側についてあげてください。こっちの事は僕らがきちんと話しておきますので」

「ああ」

ユーノスは扉を開けると、熟睡中の熱斗の傍らに近寄り顔を覗き込む。

包帯だらけの熱斗の顔をまじまじと見つめていると、熱斗が徐に苦い表情を浮かべながら彼女の名前を口にする。

「メイル・・・ちゃん・・・」

ユーノスはそんな熱斗の様子を見ると、彼が如何に普段から幼馴染とは言え、メイルの事を大切に思っているのかが読み取れた。

◇

「こやつ・・・――――」

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方、貴船たちに連れられ会議室へと入ってきたユーノ達四人は適当に腰かけると、貴船たちと向かい合い真剣な眼差しを向けて話を切り出す。

「では、僕らの事から説明しますね。」

「よろしくお願いします」

ユーノが口を切った後、フェイトは一度軽く咳払いをしてから率直に言う。

「っへん。私達は、異世界からやってきました時空管理局の魔導師です」

「異世界？時空管理局？」

聞いていた真辺は思わず疑問符を浮かべ、それとは対照的に貴船は少し驚きながらも真剣な表情で同じく横の方でそれを聞いて考え込んでいる祐一朗に尋ねる。

「光博士。もしや彼らは――――――」

「ええ。恐らく、ビヨンダードと同様のものと考えて間違いはないでしょう」

「ビヨンダード？」

訝しげにスバルがそう聞き返すと、貴船と祐一朗は嘗て起きたユー

ノ達とは違う異世界からやって来たネットナビとそれにかかわる事件の全容を掻い摘んで説明する。

「実は、我々の方でも同じように異世界、ビヨンダードと呼ばれる世界から、空間の狭間であるフォッサアンビエンスよりゾアノロイドなる凶悪なネットナビが出現した事例がありまして・・・」

「熱斗・・・私の息子は一度そのビヨンダードに行ったことがあるんです」

「そうですか・・・あの子が」

フェイトは話を聞きながら、現在ベッドで安静にしている筈であろう熱斗の事を考える。

一瞬の沈黙が流れたのち、祐一朗が言葉を開いた。

「それで話を元に戻すとして、時空管理局と言う言葉を聞く限り、あなた方は異世界の方でその守護者・・・そして、魔導師とは」

祐一朗の質問を受け、この中では最も博学、と言うか次元世界の中で最も数多くの知識を蓄えているあろう無限書庫の永久名誉司書長のユーノは答える。

「ええ。大体あなた方が考えている通りの事です。そう・・・時空管理局はこの世界を始めとする次元世界の平和と秩序を守るのがその務め。そしてその管理局の要ともういうべき存在が、魔導師。所謂魔法使いです」

「魔法使い?!」

同席していた名人が思わず机に手を叩きながらかなり驚いた様子で声を上げると、些かそれに驚いたスバルがたじろぐように答える。

「えっと・・・多分この台詞はもう決まり文句みたいなものなんでしょうが、私達の使ってる魔法は、プログラムと呼ばれる形式で、簡単に言えばこっちの世界の技術をもうちょっと発展させたようなものだと考えてください」

「超科学的に発達した魔法文明！そんなものがあるのか！？」

名人同様、科学者でありネットナビの生みの親でもある祐一朗もこれにはかなり驚いていた様子であった。

「はい。俄かには信じられない話かもしれませんが、さっきの映像を見てくれれば少しは理解できると思います」

そう言うと、ユーノは戦闘時の映像をディスプレイに表示し、祐一朗達はその中に映し出されているＡＭ体と闘うフェイト達魔導師のクローズアップ映像に目を凝らす。

「今、彼女が撃っているのが魔力弾と呼ばれるものです。」

「ほうこれが・・・」

ユーノは映像を適度に切り替えながら順に魔法体型を説明していく。

「そして、スバルの場合はベルカ式と呼ばれる直接攻撃に特化した魔法体型で、フェイトやティアナのようなミッド式とは対を為すものです。」

「型分けがあるのか」

「でも本当にびっくりだわ」

実際に映像を見ながらユーノの説明を受けた祐一朗達は感心した様子であった。

「成程。事情は大体わかりました。ではこちらから質問します。あなた方は何故我々の住むこの世界にやって来たのか、そして熱斗君達を襲ったあの鳥の怪人の正体は何なのか？」

「はい。先ず僕達がこの世界にやって来た一つ目の理由。それは先に熱斗君達が戦っていたロストロギアの異相体、その核とされているアンゴルモアを回収するためです」

『ロストロギア・・・ですか？』

先にメンテナンスを終え、会議に参加していたロックマンが立体映像として小さくその場で聞き返すと、フェイトが丁寧な説明をする。

「異世界の中には、高度に発達しすぎて文明そのものが滅んでしまう世界がいくつも存在するのですが、その中でも人間の科学水準を遥かに超えたオーバーテクノロジーがあって、それらを総称してロストロギアと呼んでいます」

『じゃあ、あれはネットナビじゃなくてそのロストロギアの・・・』

「では、あの鳥は？」

名人がそう言うと、今度は現在最もヤミーとの戦闘経験が豊富で知識もあるユーノが答える。

「あれは、欲望の怪人であるグリードが生み出した悪しき存在、ヤミー。」

「欲望？」

「人間を貪り喰らって、世界を破滅させようとしているんです。そのグリードが作り出したヤミーが今回、この世界に現れた。」

ユーノが重い表情を浮かべながらそう言った直後、思わぬ言葉が耳に入ってきた。

「そして・・・メイルちゃんをさらった・・・」

「！」

「君は！」

ユーノ達全員がその声のする方へ目を向けると、何とその場に立っていたのは先ほど安静にしていた筈の病衣姿の熱斗であった。

『熱斗君！』

「熱斗！駄目だ！まだ怪我が癒えてないんだぞ！」

息子を思うあまりいつも以上に声を上げながら熱斗に近づく祐一朗。

しかしそれでも熱斗の心はメイルをさらったオウムヤミーの事で一

杯だった。

「このまま寝ていられないよパパ！俺があの時止められたら、ジャスミンは怪我なんてしなくて済んだし、メイルちゃんだって救えたはずだ！」

「熱斗・・・」

ユーノスはそんな熱斗の様子を後ろから複雑な表情で見つめ、熱斗はかなり焦った様子で多少ふら付きながらもユーノに近づくと、切羽詰った感じに問い詰める。

「教えてください！どうしたら、どうしたらあの鳥を倒せるんですか！？メイルちゃんは一体何処に！？」

「ちょ、落ち着きなさいよ。そんなにいっぺんに聞かれてもこっちが困るわ」

「彼女の言う通りだ熱斗君。一度落ち着きたまえ」

「う・・・すみません」

ティアナの言葉を聞き、同意見に達した貴船がそう言うと、熱斗も思わず表情を一変させ、冷静さを取り戻しユーノから少し身を引いた。

ユーノは熱斗が後ろに下がった後、徐に尋ねる。

「えっと、熱斗君だったね？」

「はい・・・そう言うあなたは？」

「ユーノ・スクライア。しがない考古学者で駄菓子屋。そして、ヤミー退治専門の完現術者さ」

「フルブリンガー・・・？」

聞きなれない言葉に思わず首をかしげる熱斗。

「まぁ細かいことは気にしないでさ。取りあえず君にはちゃんと話しておく必要がありそうだ」

「話しておくことって・・・」

熱斗がそう言うと、ユーノは徐に目を瞑ってユーノスに声をかける。

「ユーノス元帥」

ユーノスはユーノの肩に飛び乗ると、一度深呼吸をしてからフェレットが喋ろうとしていることに目を凝らして驚いている最中の熱斗たちにこう告げた。

「いいか。取り乱さず聞いてほしい。ヤミーに連れ去られたメイルと言う少女、彼女は君やジャスミンを襲った鳥ヤミーを作り出した張本人なんだ」

「『え！』」

「な、何だって・・・メイルちゃんが？！」

「どういう事なんですかそれは・・・！」

ユーノスは動揺を隠し切れないでいる熱斗や祐一朗達に詳しく説明する。

「ヤミーは人の欲望より生まれる。俺が推測するに、彼女の欲望とやらは恐らく・・・・・・“嫉妬”」

「嫉妬？」

訝しげにその言葉を復唱する熱斗に、ユーノスは彼の顔を見つめながら言う。

「君を他の娘に盗られたくないという、そう願ってしまったことが、ヤミーを生んでしまったのだ」

「メイルちゃんが俺を・・・！？」

驚きのあまり目を見開く熱斗。

すると、ロックマンと共にその話を聞いていたロールはヤミーが生み出される直後のメイルの言動を思い出し手を口に翳した。

『は！メイルちゃん・・・まさかあの時のことで！』

『心当たりあるの、ロールちゃん？』

『ええ。メイルちゃん・・・ジャスミンと親しく話す熱斗君のこと、ずっと寂しそうな目で見てたし、あの後色々その事で思い悩んでいたから・・・』

熱斗はその話を聞かされると、頭が真っ白となってしまい、途端急に力が抜け落ち、要膝を床について白目を向ける。

「そんな・・・・・そんな・・・！！」

傍らで熱斗の様子を見つめていたスバルは念話でティアナに問いかけようとする。

「（ティア・・・）」

「（今はそっとしておきなさい。この子の気持ちも考えて）」

「（う、うん・・・）」

冷静にそう促すティアナの指示を聞き入れ、スバルは下手な言動を慎みその場は何も言わずに黙って見つめることにした。

やがて、会議が終わり病室へと戻った熱斗は辺りがすっかり静まり返り、街も明るさを失い漆黒の闇が夜を支配する中、ベランダへと出て手すりに触れながら星明りを頼りにずっとメイルの事を考えていた。

「メイルちゃん・・・・・」

熱斗はその時、メイルの事を考える傍ら、自分とメイルがまだいまよりもずっと小さかった頃、泣き虫で逆にメイルに守られてばかりの自分が約束したあの日の言葉を思い返す。

〈大丈夫だから・・・／／／メイルちゃん・・・ぼくが守る・・・

！〉

それを思い返した直後、熱斗は悔しそうに拳を握る。

「くそっ！俺は守れなかった！！」

思わず項垂れる熱斗。

すると、病室の外から不意にユーノの声が聞こえてきた。

「熱斗君。ユーノだけど、いいかな？」

「え！あ、はい・・・どうぞ」

熱斗からの許可をもらい、ユーノは一人で病室の中へと入ってきた。

「えへ」

「あ・・・」

ユーノは暗い顔を浮かべたままの熱斗の隣にそっと寄り添い、手すりに掴まりながら自分が最も好きな星明りを眺めつつ、沈黙を保つ。

熱斗はその沈黙を破るかのように、ユーノに何かを言いたそうに声をかける。

「ユーノさん・・・・・・俺・・・・・・・」

「言いたいことは判るよ。約束をやぶちゃった・・・だろ？」

「分かるんですか、俺の考えてること!?」

「まぁね。言っとくけど読唇術を使ってる訳じゃないからね。ただ・・・・・君とあの子が僕達のそれに似ていていたからついね」

「え・・・ユーノさんにも幼馴染の女の人が・・・?」

意外そうな顔で熱斗がそう尋ねると、ユーノはほくそ笑んで答える。

「管理局のエースオブエースと呼ばれ、老若男女問わず憧れの的、航空戦技教導官を務める幼馴染がね。いや実際、歳月を重ねるとあっという間だよ。昔はお互い背も大して違わなかったのに、大人になったら目でわかるぐらいに差が着いちゃうし、何より凄い速さで変わってしまった・・・それこそ、手が届かなくなるぐらいの距離を作って・・・」

「・・・・・」

熱斗はこうして語るユーノの心情を今の自分と比較し、同じものを感じていた。

ユーノはそんな熱斗の隣で決意に満ちた瞳でこう言う。

「それでも僕は、彼女を守るって誓ったから。出来る事なら彼女と・・・なのはと一緒に居られればいいけど、彼女が僕じゃない相手と本当と意味で幸せになれるのなら、僕は迷いなくそっちを選ぶ。」

「ユーノさん・・・だけどそれじゃユーノさんが!」

「飽く迄も仮定の話♪ま・それでも別にいいんだ。僕は自分の事は

どうでもいい。何よりなのはが幸せでないと僕自身がそれを許さない。」

その時、熱斗は朴念仁ながらもそうやってなのはの事を話すユーノの心に気づいてしまった。

「・・・・・ひょっとしてユーノさん。なのはって人の事・・・」

「ああ。好きだよ・・・ホント好きだ。世界で一番僕が好いている。でもだからこそ、彼女にはどんな形であれ幸せになって欲しいんだ。僕が隣に居なくても・・・彼女が笑顔で笑ってくれるなら、僕はどんなことだってやる覚悟だ。あらゆる苦難から、災厄からなのはを守り抜くんだ」

「！」

熱斗は同じような事をメイルに抱いていたため、その言葉は痛く突き刺さった。

「熱斗君もそんな事をメイルちゃんと約束した記憶、あるんじゃないのかい？」

「・・・・・俺は・・・・・小さい頃は泣き虫のヘタレで・・・ずっとメイルちゃんに助けられて・・・支えられて・・・だから守りたかった。俺の大切な人を守りたかった・・・だけどその約束を・・・・・／／／」

無意識のうちに拳を強く握りしめる熱斗を一瞥し、ユーノは星明りを眺めながら更に尋問する。

「・・・一応聞いておくよ。君にとってメイルちゃんはただの“幼馴染”？それともっと“別な何か”？」

一瞬その言葉に戸惑った表情を浮かべる熱斗。

そうして、今一度自分にとって桜井メイルとはどんな人物であるかを考え、こう言う。

「――――――メイルちゃんは俺の大切な人だ。だけどそれは友達として・・・幼馴染だから・・・・・・いや違う・・・・・・俺はそんな軽い目でメイルちゃんを見てなんかいない！」

「・・・・・・」

そう言った後、熱斗の心の中に抱いていたメイルへの想いと、年月を重ねるごとに自分が思ってる以上の速さで変わり始めているメイルに対し、こんな感情が芽生える。

「そうか・・・メイルちゃんは俺が変わることが怖かったんだ・・・・・だけどそれは寧ろ俺の方だった。メイルちゃんが変わっていくのが怖かった・・・／／／だって、俺の知らないところでメイルちゃんはどんどん可愛くなって・・・女の子らしくなって・・・だけどずっと遠くなって・・・・・・俺の隣にいつの間にか居なくなるじゃないかって思うと・・・・・・／／／」

「自覚したの？いや、それとも・・・――本当に大切な気持ちって言うのは、もうとっくに気づいてるものなんだよ。」

「俺の・・・・・・本当の気持ち・・・・・・」

ユーノの意味深な言葉を耳にし、自分の本当の気持ちをしっかりと自覚した熱斗は、今度はもうこんな想いをしないために、辛い想いをしないためにも必ずやメイルを救い出すという覚悟を拳に宿した。

「（メイルちゃん！必ず助ける！）」

◇

〈メイルＳｉｄｅ〉

オウムヤミー出現から一夜明けたとある公園に設置された遊具の中。

オウムヤミーの生みの親であり連れ去られてしまった桜井メイルは、夢を見ていた。

それは嘗て自分と熱斗が幼かった頃、いじめっ子にいじめられていた自分を今と違って泣き虫で弱かった熱斗が涙ながらに守ろうとし、約束したあの日の言葉――――――

〈ねっと・・・〉

〈大丈夫だから・・・／／／メイルちゃん・・・ぼくが守る・・・！〉

〈うわあああああああ！！！〉

熱斗派そう言いながらいじめっ子に向かって突っ込んでいく。

・・・――――

そして、夢から覚めた時、現実の世界へと引きずり戻される。

「う・・・・・・」

メイルは疲れ切った様子でゆっくりと目を開ける。

視界を定めて辺りを見渡してみると、それは熱斗と自分がよく遊んだ遊具でありその中には今はもうなくなってしまっているが、仲良しのおまじないが書かれていたのだ。

メイルは意外そうな表情を浮かべる。

「ここって・・・・・・」

すると、その時聞きなれない声が聞こえた。

「は。どうやら気が付いたようだな」

「？」

メイルが振り返ると、遊具の中を覗く一人の派手な髪の毛をした男を発見する。

一瞬人間の姿をしているのにこの上もない恐怖を感じ取ったメイルは無理矢理恐怖を押し殺しながらも尋ねる。

「あなたは・・・誰なの？」

「さぁな。俺はただメダルを稼ぐ為に、お前の欲望に興味を持っただけだ」

「よ、欲望・・・？！」

「ああ。お前・・・あのガキのことが好きなんだろ？」

「！」

メイルは初めて遭ったばかりでありながら熱斗の事を知っていたこの男、鳥のグリードアンクの思わず表情を凍らせ、アンクは更に続ける。

「やっぱりな。そいつに纏わりつく女が憎くて憎くてしかない。だから居なくなって欲しいと思った・・・違うか？」

「そ、それは・・・！」

「は。恋愛など欲望の典型でしかないが、裏を返せばメダルを稼ぐには御誂え向きって訳だ」

「ちょっと！あんたさっきから何訳わかんない事言ってるのよ！？メダル・・・欲望って・・・それとこの状況とどう関係があるのよ！」

すると、強い口調をアンクに向けたメイルの言葉を聞いた直後、アンクは右腕だけを怪人態に変化させると、メイルの胸ぐらを掴み言い返す。

「口答えするな！お前は欲望のままに思ってればそれでいいんだ！欲望に忠実であればメダルはがっぽりと手に入る。その後でアンゴルモアを手にすれば一石二鳥だ」

「あ、アンゴルモア！？」

アンクの腕を見て目を疑うメイルはその言葉を聞いて更に顔を歪め、アンクは強引にメイルを解放し鼻で笑う。

「ふん・・・・・・お。丁度いい。お前にいいものを見せてやる」

「え」

アンクはヤミーの気配を感じ取ると、持っていた端末を操作し、ディスプレイを表示させると、それをメイルに向ける。

メイルは画面に映ってきた人物の姿に目を奪われた。

映ってきたのは、入院中の熱斗を心配してお見舞いに参ろうとしていた熱斗の母親である光はる香であった。

「熱斗ったら、大丈夫かしら・・・・・・」

そう思いながら病院へと向かって居たはる香。

直後、はる香は唐突に襲って来たオウムヤミーが飛んで来た。

「きゃああ！！」

「熱斗のお母さん！！」

はる香はオウムヤミーに襲われその場に倒れ気を失う。

「まだだ」

アンクはそれを見ながら画面を切り替える。

次にメイルの瞳に映って来たのは、同じクラスの級友たち、大山デカオ・氷川透・綾小路やいとの三人だった。

三人は歩きながらはる香と同じく熱斗の病院へと向かって居た。

「熱斗君が怪我だなんて、心配だな」

「あいつのことだ。きっと無茶でもしたんだろうぜ」

「まったくあのバカは。ネットセイバーと言ってもまだ私達は小学生なのよ。もう少し自分の身分ってものを自覚して・・・」

と、やいとが呆れながらも熱斗の心配をしていた時だった。

はる香を襲ったばかりのオウムヤミーが高速で移動し、今度はやいとを襲撃してきた。

「うわあ!!」

「「やいとちゃん!」」

二人はやいとだけを襲撃し、その後何事も無かったように飛び去って行くオウムヤミーを仰ぎ見る。

やいとは気を失いその場に倒れ、オウムヤミーはそうして熱斗の縁のある親しい女性ならば友達を問わず見境なく襲ってメダルを増や

していき、メイルはそんな現状に心が張り裂けそうになった。

「止めて!!お願いだから止めて!!どうしてこんな・・・!」

泣き叫ぶメイルの傍らで、アンクは涼しい顔で言う。

「こいつがお前の望んだ欲望だからだ」

「私の・・・欲望!」

メイルはその言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ白と化す。

そしてその後もオウムヤミーは熱斗とかかわったありとあらゆる女性を襲い続け、被害を拡大していく。

「「「きゃあああ!!」」」

「「「いやあああ!!!」」」

メイルはこの残酷な光景を目の当たりにし、それが自分の欲望が招いたものだということに後悔を覚えながらも泣き叫ぶ。

「もう止めてよ!!私そんなこと望んでない!!これ以上みんなを傷つけないで!!!!止めて!!!!!!!!!!!」

「欲望を抑えるな!もとはと言えば、お前が嫉妬など言う欲望を抱いたのが悪い。大人しくここでヤミーが帰ってくるのを待つことだ!俺は、その間にやるべきことがある」

アンクはメイルにそう言いつけると、遊具の中から出て何処へなり

とも立ち去って行く。

「あ！待って！待ちなさいよ！！」

メイルはアンクの掴みどころのない行動に頭を悩ませながらも、アンクが残して行った端末の画面から流れ込んでくるオウムヤミーの襲撃映像に涙を流し、切にこう願った。

「誰か・・・これを止めてよ・・・助けて・・・・・・助けて、熱斗・・・！！」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

オウムヤミーが襲撃を始めたことは、病院の方で待機していたユーノ達のもとにもしっかりと伝わった。

「「！」」

仮眠をとっていたユーノとユーノスは気配を察すると、目を見開き、フェイト達はそれを見てお互いの顔を見合わせてから尋ねる。

「ヤミー？」

「ああ」

すると、ティアナのクロスミラージュからもアンゴルモア反応が検出される。

「フェイトさん。こっちにも反応が！」

「うん。ユーノ。そっちの方は任せるよ。私達は今度こそ、アンゴルモアを」

「分かった。では行きましょう、ユーノス元帥」

「ああ――――――？」

そう言った時だった。

ユーノ達が振り返ると、そこに居たのはＰＥＴを肩についたホルダーに装備し、傷の癒えたばかりの熱斗であった。

「ユーノさん！」

「熱斗君！」

熱斗の登場に誰もが驚きを隠せないでいると、熱斗は少し辛そうな表情を浮かべながらメイル救出に同行させてほしいと言って来た。

「俺も・・・・・俺も連れてってください！メイルちゃんの所へ！」

「あなた、そんな体でよく・・・」

「無茶だよ。まだ傷が・・・！」

「お願いします！メイルちゃんを助けたいんです！！」

熱斗はその場に手をついてユーノ達に土下座をしてきた。

ユーノはそんな熱斗の態度と真摯な要求を聞き入れ、覚悟の籠った瞳で言う。

「・・・分かった。一緒に行こう」

「ユーノ！」

「しかしいくら何でも危険です！取り返しのつかないことにでもなったら・・・！」

フェイト達は軽はずみとも言えるユーノの言葉にそう言い返そうとすると、ユーノは強い芯の籠った声色でフェイト達を説き伏せる。

「そんなことはさせない。僕が何が何でも取り返しのつかないことになんかさせるか！行こう、熱斗君！メイルちゃんを助けよう！」

「はい！」

フェイトはそれを見ると、一度ため息をついてからやむを得ないと妥協する。

「もうしょうがないな。じゃあユーノ。無茶はなるべくしないでね。なのはだって、そう願ってるんだよ」

「そうだね。万が一僕に何かあったら、君が一生かけてなのはとヴィヴィオを幸せにしてあげてよ♪」

「うんうん。私じゃ、なのはとヴィヴィオを本当の意味で幸せには

出来ないよ。悔しいけど、ユーノじゃないとね♪」

内心ユーノの事を本当の意味で認めている親友のフェイトの言葉を聞き、ユーノはほくそ笑む。

「そうか。じゃあ、頑張ってくるよ」

「行くぜ、ロックマン！」

『うん。熱斗君！』

ユーノはユーノスを肩に乗せ、熱斗と共にオウムヤミーの元へと急いだ。

熱斗は走りながら拳を強く握りしめこう言う。

「俺が必ず、メイルちゃんを助ける！」

今、二人の男が確かな思いを胸に宿して走り出す。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ユーノ達がオウムヤミーの気配を追って街を疾走していくと、至る所でオウムヤミーの被害を受けた女性が病院の方へと搬送されていく。

熱斗はその光景に心痛めながら、ユーノと共にオウムヤミーの元へ急ぐ。

そして、オウムヤミーの元へと追いついたユーノ達はそこでまた一人熱斗にかかわりのある女性、学校の担任である大園まり子を襲うオウムヤミーを発見する。

「まり子先生！」

「く！させるか！」

ユーノは忍び込んでいたタカカンを取出し、それを起動させるとオウムヤミーの首筋に攻撃を加え、怯んだオウムヤミーはまり子をその手から離す。

まり子を救出すると、熱斗は近づく。

「まり子先生！」

「熱斗君・・・！あれは一体何なの！？」

「説明してる暇ないよ！とにかく逃げて！」

「え、ええ」

まり子は言われるがままにまり子をその場から逃がすと、ユーノの方へと戻りオウムヤミーを睨み付け名人に連絡する。

「今度こそ逃がさねぇからな。名人さん！」

熱斗からの要請を受けると、名人はその付近目掛けてディメンションナルコンバーターからディメンションナルビールを発射。

「ディメンショナルエリア、展開！」

ディメンショナルフィールドが展開されると、熱斗はシンクロチップを取出しスロットイン。

「シンクロチップ、スロットイン！」

ＰＥＴの画面に構築準備のサインが表示され、光り輝き出すと熱斗はクロスフュージョンを行う。

「『クロスフュージョン』」

光に包まれた熱斗はロックマンとクロスフュージョンを完了させ、その後に続くようにユーノもユーノスから結界印を受け取り完現術を披露する。

「ユーノス元帥！」

「ああ！」

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

二人がそれぞれ変身を遂げると、オウムヤミーは鋭い目つきで睨みつける。

「目障りだ。ウロウロするな！」

「悪いな。これも使命なんでね」

ユーノは不敵な笑みでそう言うと、スレイヤーブレイドを生成する。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｂｌａｄｅ〉

そして、スレイヤーブレイドと完現術の力で表面をコーティングした洞爺湖木刀片手にオウムヤミーへと向かって行き、熱斗はロックバスターでユーノの援護を行う。

「ロックバスター！」

空高く舞い上がったオウムヤミーが熱斗の攻撃を受け一瞬怯み、その隙に地面の魂を完現術させたユーノが高く飛び上がり、二刀流で斬りつける。

オウムヤミーは地面に叩きつけられると、熱斗に向けて火炎弾を発射し、熱斗は険しい表情を浮かべながらその攻撃に堪えようとしていた。

ユーノは急いで熱斗の元へと向かうが、その時ユーノの頭の中にある事が浮かんできた。

「ん！？待てよ――――――そうか。（完現術は“物質”に宿る“魂”を引き出して使役する事――――――もしかしたら）」

ユーノは不確かな予想を抱きながら、苦戦するユーノの前へと飛び降り飛んでくるオウムヤミーの火炎弾に向かって右手を前に出す。

これを見ていた熱斗とユーノスは目を見開く。

「！ユーノさん！」

「ユーノ、何をする気だ！？」

ユーノは真剣な眼差しを浮かべながら飛んでくる火炎弾の前に何か作り出そうとするつもりで心の中で呟く。

「（思い出せ・・・・・・魔導師だった頃、自分が魔法を使っていた時の感覚を・・・・・・自分の前に防御を張る時の感覚を！）」

その瞬間、ユーノの目の前で爆発が起こり辺り一面煙で覆われる。

熱斗とユーノスがユーノの事を心配して徐に目を開けると、爆風の中から現れたユーノの姿に思わず目を凝らして驚いた。

「な！」

「あ、あれは！！」

〈Ｒｏｕｎｄ　Ｓｈｉｅｌｄ〉

爆風の中から現れたユーノは飛んで来た火炎弾をラウンドシールドで防いでいたのだ。

魔導死神として魔力を失ったはずのユーノが、なぜラウンドシールドを使えたのか、そんな事を考えるユーノス。

「ラウンド・・・シールド・・・だと！？」

一方でユーノは不敵な笑みを浮かべ、予想していた通りの事が起きたことに安心する。

「――――――ふう。間一髪。だけど、思った通りだ」

ユーノがそう言った直後、離れた場所で聞いていたユーノスは何かに気づいたようにはっとした表情を浮かべる。

「は！まさか――――――（大気中に存在する魔力素を完現術によって使役した“魔力素使役”！ユーノはその事に気づき、魔力の無い状態でありながら魔法の構築を行いラウンドシールドを発動させた・・・この男・・・一体どれほどの完現術の才能を持っているのだ？）」

そんなユーノの様子を同じように気づかれないよう遠くで観察していた破面魔導虚のリリスも感心した顔つきで呟く。

「へぇ・・・魔力素を完現術とは・・・・・・よく気づいたもんね・・・そうでなきゃ面白くないけど」

ユーノは攻撃を防ぎ、ラウンドシールドを解除すると熱斗に尋ねる。

「大丈夫かい、熱斗君」

「はい。ありがとうございますユーノさん。俺は何とも」

「よし。それじゃあこのまま反撃だ！」

「はい！」

「ぐ・・・邪魔をするな！」

オウムヤミーはそう言いながら二人に強力な火炎放射を行い、二人はそれを交わすと左右に分かれる。

熱斗はバトルチップとロックバスターを併用させオウムヤミーを攻撃し、隙を作ろうとし、その間にユーノは魔力素を掌に集める。

「（上手くいってくれよ・・・・・・掌に魔力素を使役させてそれを形に・・・・・・）」

ユーノはなのは並みの天賦の才で完現術を無意識のうちに急激な速さで使いこなしていくと、魔導師だった頃の感覚を思い出しながら十八番のバインドを作りだしそれをオウムヤミーに向ける。

「“チェーンバインド”！」

「！」

オウムヤミーはユーノの作った完現術チェーンバインドに絡め取られる。

「ぐ・・・この！！！」

熱斗は思わずその光景に目を奪われる。

「すげえ・・・掌から鎖が・・・！」

『熱斗君。感心する暇ないよ！今のうちに！』

「あ！そうだ！」

ロックマンに促された熱斗は、ロックバスターにエネルギーを充填させようとし、その間にユーノはオウムヤミーの体を拘束し続け、オウムヤミーは必死に抵抗する。

「このおおお！！！！」

「序でにこれも上手くいけば・・・・・・“ストラグルバインド”！」

「何！？」

オウムヤミーはチェーンバインドに続いて強力な魔法を打ち消すストラグルバインドに絡め取られ、完全に動きを封じられる。

そして、ユーノは更に鎖の数を増やすと、大気中の魔力素をあるだけ使うと、恐らく今の自分が使える最大の上位拘束封殺魔法を発動させる。

「“捕えて固めろ、封鎖の檻”！“アレスターチェーン”！」

ユーノの放ったあれスターチェーンをその身に受け、雁字搦めになりながら空中から墜落するオウムヤミー。

そして、熱斗もエネルギーの充填が終わったチャージショットをオウムヤミーに放つ。

「チャージショット！」

チャージショットがオウムヤミーにヒットし、その途端爆発が起こる。

だがそれでもしぶとく生き残り、オウムヤミーはユーノ達の前に立ち塞がる。

「く。ユーノス元帥！・・・一か八か。完現術コンボを使います！」

「な！しかし、それではお前の体が・・・！」

体への負担を考慮し、ユーノの身を案じるユーノスだが、ユーノは鼻で笑いながらこう言い返した。

「前にこの体は簡単に砕かれないように、地獄からの呪いが備わってるって言いましたよね？大丈夫です。僕が壊れてなのは達が泣くような真似はさせません！ですから！」

ユーノスも強い覚悟の籠ったユーノの言葉を聞くと、それを聞き入れることにした。

「く。分かった・・・だがあれは力が強すぎる。使うなら一気に決めろ！」

「了解。熱斗君！」

「？！」

「一瞬で決めたいから、何とか隙作ってくれるかい？」

「え・・・ユーノさんそんな簡単に・・・・・・オッケイ。奥の手

行くか！」

そう言いながらユーノの方へと振り返る熱斗。

と、その直後隙を突いたオウムヤミーが背後から襲いかかった。

『熱斗君！』

ロックマンの言葉を聞いてその事に気づいた熱斗はオウムヤミーに体を掴まれ身動きが取れなくなりながら、ロックマンと相談する。

「ぐううう・・・ロックマン！」

『うん！分かった。やってみよう』

そうして抵抗を続けた二人に、オウムヤミーは火炎弾を撃ち込み二人は後ろへと飛ばされる。

「『ぐあああああああ！』」

「「熱斗（君）！」」

その場に佇んでいた木材や鉄筋の下敷きとなってしまった熱斗たちの身を案じるユーノとユーノス。

その直後、下敷となった熱斗は猛烈なオーラを放ちながら姿を現す。

ユーノ達は現れた熱斗の姿に目を奪われた。

「あれは・・・」

熱斗はその時、ロックマンのプログラムに含まれていた獣化と呼ばれるプログラムシステムをクロスフュージョンシステムとリンクさせ、それを現実のものとして体現していたのだ。

色は白を基調にした、背中に羽を生やしたものであった。

「うらあああああああああ！」

熱斗は翼を広げると、衝撃波を伴った無数の羽をオウムヤミーに飛ばし、攻撃を受けたオウムヤミーはあまりの威力に圧倒される。

「覚悟しろオウム野郎！」

熱斗は翼を広げると、空高く舞い上がり急降下をしながらの鋭い鍵爪による一撃をオウムヤミーに食らわせる。

「『うりゃああ！』」

オウムヤミーはその攻撃を受けると、思い切り後ろへと飛ばされ湯気を上げる。

これを好機と見たユーノは逆刃刀を抜き出す。

「今だ・・・はあああああああああああああ！！！」

〈Ｕｎｋｉｌｌ　ｓａｍｕｒａｉ　ｈａｒｔ〉

ユーノは完現術コンボの力を発動させ、不殺の侍魂と呼ばれる状態へと変貌を遂げると、先のピラニアヤミーの時と同様猛烈な剣気と

霊圧を放出し、雄叫びを上げる。

「のあああああああああああああ！！！！！！」

「わああ！すげえ・・・」

間近でその余波を受けた熱斗も思わず尻もちをつく。

侍装束のユーノは分身体を作り出してから一斉に高く飛び上がると、ディレイドバインドで体を拘束した鳥ヤミー目掛けて止めの攻撃を仕掛ける。

「「「「「はあああああ！飛天御剣流・・・龍槌閃・・・！」」」」」

「！」

「「「「「惨！」」」」」

刀の切っ先を突き刺す龍槌閃・惨を複数同時にその身に受けたオウムヤミーは声を上げながら爆散し、セルメダルとなって消滅した。

「ぐあああああああああああ！」

オウムヤミーを倒したユーノは一人の姿に戻ると、肩でを息をしながら変身を解除し手をついていた。

「は、は、は、は、は、は」

ユーノスは前回とは違い、睡魔に襲われる事無く力を使いこなした

ユーノに言葉を失いがらも驚き返っている様子であった。

その後、オウムヤミーによってさらわれたメイルの居所を突き止めた二人はメイルを救いだし、メイルは涙を浮かべながら熱斗に抱きついた。

「熱斗！！」

「おお／／／」

思わず顔を赤くしながらもしっかりと抱きしめる熱斗。

「熱斗！！」

「メイルちゃん。よかった。怪我はない？」

「うん。助けに来てくれたんだ・・・／／／」

「当たり前だろ。約束したはずだぜ。メイルちゃんは俺が守るって」

「・・・うん／／／」

「てへ♪」

二人はまるで恋人のように愛おしげに互いに抱きしめ合い、そんな微笑ましい光景を離れた場所でユーノとユーノスは見つめていた。

「あっちはもう大丈夫みたいですね」

「そうだな」

しかしその時、二人のグリード・ヤミーセンサーが反応した。

「「！」」

ユーノは先ほどのヤミーとは違う、圧倒的な力を秘めていると思われるその存在に疑いながらもその方角へと目を向ける。

「なんだ・・・この感じ・・・」

「これは・・・まさかグリード！方角は――――――彼女たちの方だ」

「な！」

ユーノはユーノスの言葉を聞くと、すぐにフェイト達が向かった場所へと直行する。

◇

〈フェイトＳｉｄｅ〉

その頃、出現したＡＭ体と対峙していたフェイト達三人は追い詰めたＡＭ体に止めの攻撃を加えようとしていた。

「はあああああ！」

フェイトの放ったハーケンセイバーが決定打となり、実態を持ったＡＭ体は爆発を伴い消滅し、その核として使われていたアンゴルモアが現れた。

「やりましたね！」

「結構てこずりましたけど、なんとか」

「うん。さ、今のうちに封印しようか」

「「はい――――――」」

三人は倒したＡＭ体の中から出て来たアンゴルモアに慎重に近づいて行く。

と、その時突如として空中から火炎弾が飛んで来た。

「「きゃああ！」」

三人は突然の襲撃を受け、後方へと吹き飛ばされる。

「な、なに・・・」

スバルは重い体を起こしながら爆風の中を見つめる。

すると、煙の中から現れたその先に居たのは右腕だけが怪人態の人間、アンクだった。

「悪いが、こいつは俺が貰って行く」

「あなたは・・・・・・」

目を丸くするティアナ。

その瞬間、アンクは背中に翼を広げると無数の羽を飛ばして攻撃を仕掛ける。

「ふん！」

「「「ぐあああああああああ！」」」

三人はアンクの強烈な攻撃を受け、声を上げて苦しんだ。

ユーノ達も爆発音が鳴り響くポイントを確認すると、急いでその場所へと向けて走り出す。

「あそこだ！」

「く！フェイト！スバル！ティアナ！」

ユーノ達が現場へと向かって居ると、フェイトはバルディッシュをザンバーフォームへと切り替え、アンクと空中で激しい争いを繰り広げる。

「はあああああああああ！」

フェイトの斬撃を右腕で受け止めたアンクは不敵な笑みを浮かべ、そんなアンクにフェイトは険しい表情で問いかける。

「お前は何者だ！何故アンゴルモアを狙う！？」

「さぁな。俺は欲しいから集める。欲望にそれ以上の理由がいるか？」

「欲望・・・・・まさかお前！」

欲望と言う単語を耳にし、逸早くアンクがグリードであることに気づいたフェイト。

すると、アンクは一瞬の隙を見せたフェイトを強引に空中から投げ落とす。

「ふん！」

空中から叩きつけられたフェイトは衝撃のあまり口から血を吹き出す。

「がっは！」

「「フェイトさん！」」

スバルとティアナはフェイトの元へと駆け寄ろうとするが、フェイトはその途端声を上げる。

「駄目！」

「「！」」

「二人とも来たら・・・ダメ・・・だ・・・」

「ですが！」

フェイトはダルディッシュを地面に突き刺してふらふらになりなが

ら起き上がると、アンクを見つめながら言う。

「こいつは・・・・・・グリードだ・・・！」

「「え！」」

「ほう・・・俺達の事を知っているのか。存外有名人らしいな。だったら尚更生かしておく訳にはいかないな。まとめて消す墨にしてやる・・・は！」

アンクはそう言うと、翼を広げ、炎を纏った強力な一撃を三人に放った。

「「「！」」」

攻撃をその身に受けた三人もそうだが、戦闘が繰り広げられていた箇所で大爆発が起き、ユーノ達は走りながらその光景を目の当たりにする。

「「な！」」

三人を一瞬にして昏倒させたアンクは後ろへ振り返り、目に映ってきたアンゴルモアを回収しようとする。

「さてと・・・では物の回収と参りますか・・・」

アンクは徐に右腕を伸ばしてアンゴルモアを手に取ろうとしたが、その直後アンゴルモアは砕け散り霧散する。

そう、これはアンゴルモアもどきであったのだ。

「！ち・・・ハズレかよ。とんだ骨折り損のくたびれもうけだな」

アンクは舌打ちをしながら不機嫌そうな態度でその場から立ち去って行く。

「ま・・・て・・・」

フェイトは立ち去って行くアンクを虚ろな目で見ながら手を伸ばそうとするが、その直後自分もスバルとティアナ同様意識を失った。

闘いが終わって一分ほど経った後、漸くユーノとユーノスの二人が現場へと到着すると、そこにはアンクの攻撃を受け満身創痍となった大切な仲間の無残な姿があった。

「あ！」

「遅かったか・・・！」

「フェイト！！！」

ユーノは傷ついたフェイトの元へと近づき、安否を確認する。

ユーノスもスバルとティアナの意識を確かめると、三人はユーノの声を聞くと意識を取り戻し、険しい表情を浮かべながら目を開ける。

「「「う・・・・・」」」

「フェイト！二人とも、大丈夫か？」

「ユーノ・・・ごめん・・・私たち・・・う」

「フェイト！」

フェイトはことのほかアンクから受けた攻撃が相当応えたらしく、再び目をつぶり、スバルは地面に落ちていたアンクが残したある痕跡をユーノに手渡す。

「ユーノ先生・・・これを・・・」

「これは・・・」

ユーノが受け取ったのは、アンクの翼から落ちた一枚の赤い羽根だった。

ユーノスはそれを見ると、驚愕の表情を浮かべた。

「まさか・・・・・・アンク！」

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

その頃、アルハザードのスカリエッティはと言うと、上機嫌な様子で研究室の厨房の方でケーキ作りに精を出していた。

「ふふうふふう」

研究室へと入ってきたプレシアは誕生日の予定がないにも関わらずケーキを作るジェイルを訝しげに見つめながら徐に尋ねる。

「？ジェイル・・・今日、誕生日を祝う予定はなかったはずだけど？」

「誕生はいつも突然だよ。プレシア・・・・・・サプラーイズ！！だ」

「？」

スカリエッティの言葉を聞き、益々首をかしげるプレシア。

そんなプレシアに不敵な笑みを浮かべてから、スカリエッティは仕上げのデコレーションを始め歌を歌う。

「ハッピバースデイディア・・・・・・」

スカリエッティはＤｅａｒとチョコレートで書いた後、敢えて名前を書かずに懐から取り出したアンクのものと思われる赤い羽根をケーキに乗せ、最後甲高い声を上げる。

「素晴らしい！！」

今この世界にまた、一人のグリードが誕生し、彼によって祝福されるのであった。

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚

熱斗と幼馴染と友達以上（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はロックマンの歴史について見ていこう♪」

「ロックマンシリーズは、カプコンから１９８７年１２月１７日に発売されたファミリーコンピュータ対応のアクションゲーム『ロックマン』を第１作とする一連のゲーム作品の総称で、長期に渡り続く中で、数多くのシリーズが派生・誕生している。」

「カプコンの発表によると、２０１０年3月３１日現在の全シリーズの総作品数は１２６作、累計販売実績は2，８００万本に及ぶ」

一「ある意味任天堂の看板とも言える配管工のおっさんと同じぐらい凄いってことか・・・」

恋「あのおっさんもおっさんで何回も生き返ってるよな・・・だが基本的にあれは何をしたいんだ?冒険に始まってゴルフにパーティー?テニスとかもしたりしてるしよ・・・」

ユ「なんでもありなんじゃないですか?ようは、任天堂がてっとり早くお金を儲けたいという趣旨のもとにあのおじさんは生き返ってるんですから♪」

一「実に現実的で悲しい話だよな・・・いや・・・それを言うならそのおっさんの弟のほうか」

恋「ああ。あのコンプレックスの塊の?あれってまだ生きてたのか

？」

一・ユ「勝手に殺すな（さないで下さい）！」

魔導師図鑑ハイパー！

機動六課の食堂で夕食を戴いていた男たちの目に、『アンドウ・ロメダのラッキー星占い』なるテレビ番組が流れてきた。

ア『アンドウ・ロメダのラッキー星占い♪』

白「何であるかこの番組は？」

浦「今密かに女の子の間で人気急上昇中の番組でさ、恋占いがすっごく当たるんですよ♪芸能人大物カップルの結婚とか離婚とか、次々当ててるんだって♪」

鬼「へぇ～～～そんなによく当たるのか・・・俺も占なって欲しいぜ」

そんな事を呟きながら番組に目を向けると、司会者兼占い師のロメダが言う。

ア『今週の恋する乙女たちのラッキーアイテムは、キュートなメガネ。でもどっちかって言うと縁なし・・・』

すると、縁なし眼鏡と言う単語を聞いた瞬間、男たちは一様に同じ考えに至った。

恋「おい・・・縁なし眼鏡って言えば・・・」

金「然様。この機動六課の中で唯一の縁なし眼鏡と言えば・・・」

そう言いながら全員が目にした男。

なのはとマリアの二人によって奪い合われている悲しきもて男、ユーノ・スクライアだった。

な・マ「ユーノ君（様）は渡しません（わ）！！」

ユ「いだあああああああああ！！！いい加減にしてよもう！！！！！！！！！」

吉「つくづく苦労してるよねユーノさんも・・・」

ユーノス「恋する乙女ならぬ、迷える子羊だな・・・」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユ「また。来年の盆に来るよ・・・」

カ「コアメダルを取り戻すんだ。ユーノスを潰す」

ヨ「いい加減、目覚ましなさいよ！」

？「頑張ってね・・・お父さん」

ウ「ユーノ・スクライアのいないお前など、赤ん坊のようなものだ」

第１４８話　ダメ亭主と少年と大当たり

ロックマンエグゼ篇

登場人物

光熱斗

声　一　比嘉久美子

主人公。秋原小学校６年生。勉強は苦手だが、ウイルスバスティングの才能はピカイチ！明るい性格。ロックマンとは強い絆で結ばれている。カレーや完熟マンゴーが大好物。マハ一番〟の常連。『ＡＸＥＳＳ』にてクロスフュージョンの能力を身につけたことで、ネット社会の平和を守るネットセイバーに任命される。

ロックマン

声　一　木村亜希子

熱斗のナビ。青いボディカラーが特徴。生真面目な性格で、熱斗と同じで恋には鈍い。何故か幽霊が苦手。主な攻撃方法はロックバスターと転送されるバトルチップ。特殊なナビで、何らかのきっかけによりスタイルチェンジ、ソウルユニゾン、獣化といった様々な能力が発現する。その力の詳しい部分は解明されていない。

桜井メイル

声　一　水橋かおり

熱斗の幼馴染。優しい性格で頭もいい。が、ごくまれに暴走する事も。熱斗のことが好きだが、なかなか素直になれない。熱斗と親し

く接するジャスミンに嫉妬を抱いたことで、その欲望をアンクによって目をつけられオウムヤミーの親となってしまった。

ロール

声　一　城雅子
メイルのナビ。戦いはあまり得意ではない。ロックマンに恋をし、メディをライバル視。

ネット警察・科学省・その他の登場人物

貴船誠心（きふねせいしん）
声　一　中嶋聡彦
ネット警察の警視総監。ネット犯罪が起こったとき、熱斗達に指示を出す。

真辺鈴（まなべれい）
声　一　山口由里子
ネット警察に勤める女性。階級は警視。日夜ネット犯罪の調査を行っている。事件の説明をするだけでなく、熱斗達と共に現場に赴くことも。そしてネットバトルのセンスも抜群で熱斗が彼女をすごいと評したことも。

光祐一朗
声　一　川島得愛
熱斗の父親で科学者。ネットナビの産みの親でもあり、科学省で日夜研究を続けている。『エグゼ（無印）』では冒険家として様々な

国を探検していた。色々な事を知っているので、悪者に狙われた事も多数。

名人

声　一　藤原啓治

科学省で働いているが、科学省の人間ではないらしい（？）。最初は熱斗達が危機に陥ったときどこからともなく現れる謎の人物だった。本来「さん」をつけることは不要だが、熱斗には事あるごとに「名人さん」と呼ばれ、その度に「さんはいらない」と応えるのが定番となっている。ミニカーなどの食玩を集めている。

光はる香

声　一　城雅子

熱斗の母親。料理がとても上手。熱斗と祐一朗がいない間、光家を守っている。天然っぽい印象を受けるが、大きなトラブルが発生しても冷静に熱斗や、夫を信じてサポートするその冷静な態度をみていると、実はかなりの大物かもしれない。

大園まりこ先生

声　一　日高のり子

熱斗のクラスの美人教師。明るい性格。テニス部顧問、兼温泉部顧問。他にもＳＦ映画ファンの名誉会員（劇場版で判明）など、多彩な趣味を持つ。

大山デカオ

声　一　沼田祐介

熱斗の友達。体は大きいが気は意外と小さい。熱斗をライバル視しているが、オペレートは熱斗に比べてイマイチ。惚れっぽい性格。『ＡＸＥＳＳ』でＭａｈａ二番でのアルバイトを経て、『Ｓｔｒｅａｍ』以降はＭａｈａ一番（ダッシュ）の厨房を任されている。お尻の右側にスペースシャトル型のアザがある（らしい）。

綾小路やいと

声　ー　芳野日向子

ガブゴン社の社長令嬢。熱斗たちより年下だが、飛び級して熱斗と同じクラスに在席。『ＡＸＥＳＳ』からキングランドに留学していたが、『ＢＥＡＳＴ』では再び秋原小学校に戻ってくる。伊集院家とは江戸時代からの腐れ縁。常にオデコが眩しく光り輝いている。

氷川透

声　ー　渡辺久美子

熱斗の友達。物事を冷静に判断し、冷めた視点で何かと突っ込むことが多い。温泉部部長。

ジャスミン

声　ー　千葉紗子

チョイナ出身の少女。伝説の薬剤師の孫娘。

メディ

声　ー　かかずゆみ

ジャスミンのナビ。ヒーリング能力を有する。元々はジャスミンの亡き友人のナビだった。ロックマンに好意がある模様。

ＡＭ２７

熱斗たちの住む世界「ＥＸＥ」に存在するネットナビを凶暴化させ、暴走する力「ダークチップ」をもとにして誕生したアンゴルモアの異相体。実体化能力を持ち、ダークチップの効力をもとに行動しているため、目的そのものは限りない破壊活動であり、意識と呼べるものは存在しない。フェイト達の連係攻撃によって一度は逃走を許すが、二度目の戦闘において呆気なく倒された。

クロスフュージョン

略称はＣＦ。現実世界に出現したネットナビなどと戦闘を行なうために使われる方法である。シンクロチップという特殊なチップをＰＥＴにスロットインすることによって、オペレーターとナビが融合すること。現実世界にディメンショナルエリアという特殊な空間を展開して、電脳世界のネットナビを擬似物質化することによって融合を可能にする。誰にでも出来るわけではなく、オペレーターとナビとのシンクロ率が高くなければ、クロスフュージョン出来ない。クロスフュージョン中に獣化などをすることは、熱斗の身体に大きな負担をかけるため、父親の祐一朗から止められている。

登場ヤミー

オウムヤミー（青）

声：坪井智浩
身長　２０６？　体重　１０６？
特色／力：火炎弾による攻撃、高速飛行能力
鳥のグリード、アンクが作り出した鳥系成長ヤミー。幼馴染の熱斗

が自分以外の女の子と仲良くする姿を見た桜井メイルの“熱斗に付き纏う自分以外の女はいなくなって欲しい”と言う欲望から生み出された。アンゴルモアの反応を確認したアンクがその手先として偶然にも目にしたメイルの欲望を利用できると考え、彼女にセルメダルを投入。次々と熱斗に今まで関わってきた女性を襲うことで、メイルの嫉妬心からくる欲望を満足させ続け、セルメダルを獲得していく。強力な炎を自在に操り、スレイヤーモードのユーノが放つ完現術による月牙天衝と互角の威力を発揮し、遂にはユーノ達を撤退させるまでに至った。自室に大量の袋状の卵をセットして成長を待っていた。追って来たユーノ達と再び戦いになるが、熱斗が作った隙を乗じたユーノの完現術コンボ、不殺の侍魂の放つ龍槌閃・惨をその身に受けたことにより、セルメダルとなって四散した。

ダメ亭主と少年と大当たり（前書き）

「世俗は耳目口腹の欲をほしいままにするを楽とす」

軒

ＢＹ貝原益

ダメ亭主と少年と大当たり

＞i30686―709＜

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

９５０年前に作られ、１５０年前に封印された、人の欲望から作られたメダルの怪人・グリードが復活。

持っていたはずのそれぞれ9枚のコアメダル

そのすべてを手に入れるのは、グリードか・・・ユーノか・・・あるいは人の欲望か

その先に待つものは果たして・・・

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ユーノ達が鳥のグリード、アンクが作り出したオウムヤミーを撃退してから後日。

フェイト達は幸いにも怪我負ったものの、大事には至らなかった。

まぁ、本人たちは自分の非力さに痛感しあまり表情は浮かない様子であったが――――――

そんなことが遭っても、今は兎に角前へ前へと向かって進まなければならない。

そう考えながら、今日ユーノは午後から休暇をもらい、地球にあるとある霊園へと訪れていた。

ここは以前、パトリオット事件の時に亡くなった少年、狼谷銀太郎とその従者たるパトリオット五人の魂が眠っている場所で、ユーノは桶と手向けの鼻を持って、銀太郎の墓ではなく、もう一人の知人の墓へと向かって居た。

歩きながら、ユーノは墓の周りを見渡し、複雑な表情を浮かべる。

「一年経っても・・・ここは少しも変わらないな」

そして、漸く目的の墓・・・・・ユーノにとってはつい最近の事だが、一年前逆刃刀を託し、彼を守って命を落としたかけがえのない友人、明神弥彦が眠っている墓である。

ユーノは事件の後、弥彦の遺体を密かに日本の風習に倣って荼毘にふし、その遺骨をこの墓に埋葬した。

桶に入った水で積もっていた雪を洗いながし、周りを綺麗にすると、線香をたき持ってきた花を添え、手を合わせる。

すると、そんなユーノの後ろから足音が聞こえ、分かりきっているユーノの背中に向かって彼の師、一護は渋い顔で言う。

「それが、“明神弥彦”の墓か・・・・・・・・・」

ユーノは罪の意識に若干捕われたように腰の逆刃刀に手を添え、返事をする。

「ええ・・・」

「真冬の墓参りか・・・わざわざこんな時期にする必要はなかったんじゃないのか?もっと暖かくなってからでも良かったはずだぜ?」

そう一護が言った後、不意にユーノがこう言い返す。

「僕は欲しかった・・・」

「？」

「欲しかった・・・欲しかったはずなのに・・・・・・」

ユーノは歯がゆそうに拳を強く握りしめながら、弥彦を目の前で失った時の事を思い出す。

〈や・・・ひこ・・・――――――弥彦ォ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！〉

敢えてその記憶を掘り起こしたユーノは、震える手と声で更に続ける。

「どんなに遠くても届く僕の腕・・・『力』・・・もっともっと・・・だけど結局諦めて蓋をして、目の前の事だけに・・・・・・そして何も守れなかった・・・後悔ばかりが積もっていった・・・弥彦も、その僕の後悔の為の犠牲者の一人です」

「・・・・・・」

側でその話を聞いていた一護の心に、彼のそんな言葉が響く。

「力を失って、僕は戦いを止めた。それでも、心の奥で煮え切らない想いがずっとくすぶっていた。みんなが僕の事を守ろうとしてくれたのは嬉しいけど、それ以上に大切な人が傷つく姿を見るのが耐えられなかった。だけどその為の『力』がない以上、耐え忍ぶしかなかった。」

「そうだな・・・・・俺も嘗てそうだった・・・・・・」

一護もまた、一度死神の力を失って何もできないことの悔しさを痛く知っていた。

だから、同じ想いを味わった愛弟子の言葉が余計に共感を覚えさせる。

そして、ユーノは直後に少し柔らかい顔を浮かべた。

「けど、ユーノス元帥と出逢ってその為の『力』をもう一度手にすることが出来た。晩翠がいなくなって代わりに手にしたみんなを守るための『力』。そして僕が抱いた意志は、この逆刃刀を通して弥彦にもしっかり伝わっていた。だからそのお礼も兼ねて・・・今のうちに忘れないようにと思って。」

一護もそれを聞くと、何処か安心した様子であった。

「フッ。そうか・・・・・安心したよ、その言葉聞いて。」

「へへ」

一護はウィンドブレイカーを羽織り直すと、先に霊園の外へと向かって歩きだし、背中越しにユーノに言う。

「用事が済んだらさっさと帰れよ。またどこかでヤミーが現れるか分かったもんじゃねぇからな。だけど、くれぐれも無理はするなよ――――――」

ユーノはいつも遠く離れた場所でも自分の身をまるで本当の子供の

ように案じ続け、時として手助けをしてくれる師、一護に柔かい笑みを浮かべると、弥彦の墓へと向き直り、別れの言葉を告げる。

「・・・また。来年の盆に来るよ・・・」

そう告げると、ユーノは霊園の外へと向かって歩きだし、そのままなのは達の待つ機動六課へと帰還するのであった。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

その頃、異世界にある廃れた酒場を塒とする欲望の塊こと、メダルの怪人・・・グリード達は人間態と怪人態の姿になったり戻ったりを繰り返しながら、自分たちなりに時間を過ごす。

ウヴァはゴルフクラブを手に取り、手当たり次第に辺りに散らばったモノを殴りつけたりしてリズムを刻み、カザリは外の世界で手に入れてきた現代の人間社会のことが端的に書かれた雑誌を読み漁り、メズールはシャボン玉で遊んでいた。

すると、そんなメズールがふとあることに気づき言う。

「ガメルがいないわね」

そう・・・重量系のグリードでメズールに大層可愛がられている灰色のグリード、ガメルがどうしてかこの場に居なかった。

そんなメズールの言葉を聞くと、雑誌を読みながらカザリは答える。

「ああ。ちょっと手伝ってもらいたいことがあってね」

「手伝う？“ガメル”が？まさか・・・・・・」

メズールは訝しげな顔を浮かべながら、徐にシャボン玉を吹く。

その頃、ミッドチルダの方ではある一人の男がかなり切羽詰った様子で逃げ惑っていた。

「ああ！殺される・・・殺される・・・殺される！」

その男、コモン・タクマは駐車場の中を失踪、背後から迫ってくる脅威から逃げ惑う。

「助けて！助けて！」

タクマの行動が何を意味しているのか、この後よく分かるのだが、メズールは取り敢えずガメルの事が気がかりであった。

「あの子は自分の好きな事しかしないわ」

そう言いながら、またシャボン玉を吹くメズール。

「ある意味、一番欲望に忠実なグリードなのよ」

「うん・・・それでいいんだ。好きなことしといてくれれば・・・」

カザリは不敵な笑みを浮かべながらメズールにそう返し、それを耳に入れながらウヴァは適当に持ってきたボトルに手をかけ、豪快に飲んでいく。

その間に、ミッドではコモン・タクマが全速力で街中を駆け抜けていく。

「あーどいてーどいて！」

道行く人を追い抜き、ただ只管に恐怖から逃げ続けるタクマ。

「やばい！ちょっどいて！どいて！どいて！」

恐怖は徐々にタクマとの距離を縮め、タクマもそれに負けじと必死に逃げ続けていたが、運悪く足を躓いてしまう。

「うわーっ！あ・・・イッテ・・・あああ！！」

タクマが凍りついた表情で目の前を見た瞬間、追いかけてきた恐怖・・もとい彼の妻であるコモン・ヨウコが履いていた靴をタクマ目掛けて投げつけた。

「おらああ！」

タクマは口を阿呆のように広げながら、飛んで来た靴を避けることが出来ず、靴はタクマの額に直撃する。

「ぎゃあああ！」

タクマに直撃した靴は放物線を描くように空中へと舞い、それを偶然にもキャッチしたのは人間の姿に擬態し、駄菓子の箱を持っていたガメルであった。

「当たった・・・」

ガメルはそう呟きながら、手に取った靴を眺め、ガメルの目の前で靴を投げつけた張本人であるヨウコがタクマに近づき鬼のような形相を浮かべる。

「アイタ・・・」

「このダメ男！また私の財布から盗ったでしょ！？」

「この鬼嫁！ちょっとぐらいいいだろ！」

「何を～～～！」

「うそうそうそ！！ちょっ待っ！」

口は災いの元。

ヨウコの機嫌をさらに悪くしてしまったタクマは疾走するが、ヨウコはもう片方の靴を手に取り逃げるタクマの後頭部にぶつける。

「逃げんな！」

「痛っ！」

「タクマ――――――！」

タクマはヨウコの投げた靴に当たるとその場に倒れ、ヨウコはタクマに怒りを露わにしながら彼に近づいて行った。

そんな光景・・・靴を投げてそれが人に当たる光景を目の当たりにして、興味をそそられる。

「また当たった・・・――――面白い。すごーく」

ガメルは興味を持つと、徐にセルメダルを取出し、それを自分の額に出現した投入口に投与。

一度怪人の姿に戻った瞬間、その背中からいきなり成長を遂げた彼のヤミー、バイソンヤミーが姿を現した。

ヤミーが生まれると、ガメルはまた人間の姿に戻り、箱に入った駄菓子を手に取り口に入れる。

一連の話をカザリから聞かされたメズールは疑問符を浮かべながら更に問い詰める。

「ガメルに好きな事させてどうするの？」

「いろいろ勉強したんだけど・・・ウヴァ。そろそろ君も動いた方がいいんじゃないかな？」

カザリはそう言うと、懐からコアメダルの力を公に展開する小型端末をウヴァに投げつけ、手にしたウヴァは眉間に皺を寄せながら言う。

「いいか。この作戦が気に入っただけで、お前の命令で動いてる訳じゃねぇからな」

不機嫌そうに酒瓶を床に投げつけたウヴァは、怪人態へと変貌。

手にした端末を持ってカザリにこの言葉を残し外へと向かう。

「見とけよ」

敵意を見せるウヴァを飄々とした態度で見送ったカザリ。

メズールはやきもきした様子でカザリに言い寄る。

「カザリ、もったいぶらないで。作戦って？」

すると、カザリは雑誌片手にカウンターへと移動し、不敵な笑みで答える。

「コアメダルを取り戻すんだ。ユーノスから。そして・・・・・・ユーノスを潰す」

いま、ユーノスの元に恐ろしい魔の手が忍び寄ろうとしていた。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

では、そんなカザリが企てた恐ろしい作戦の事など全くと言うほど知る由もない七大元帥、ユーノス・スレイアはいま何をしているのかと言えば、休暇をとってその場には居ないユーノの代わりに本来彼が行うはずだった事務処理を担当していた。

勿論、フェレットの姿でだ。

だが、そんなハンデがあるにもかかわらずユーノスはものともせずにユーノ並みの事務処理力で仕事を片付けていき、はやても思わず感服した。

「いや～～ほんま凄いですねユーノス元帥！そんな小さな体で事務処理はおろか何でもこなしちゃうなんて！」

「世話になっているほんのお礼代わりだ。それより、ユーノは一体どこに行ったというのだ？行先も付けずにそそくさと出て行ってしまったのだが？」

ユーノスがそう尋ねると、書類を抱えていたなのはやフェイトが答える。

「ああ・・・ユーノ君ならちょっと外に出てますよ。知人のお墓参りだそうです」

「確か地球の方だとか・・・」

「墓参りか・・・・・・」

帰ってきた答えを耳にし、納得した様子のユーノス。

すると、はやてが不意にこんなことを尋ねてきた。

「そう言えば、私達ずっと気になってたことがあるんですけど、この際聞いてもいいでしょうか？」

「ああ。何だ？」

「えへん！単刀直入に聞きますけど・・・・・・ユーノス元帥は恋人の方はいたんですの？」

「何？」

「「ずっこ！」」

はやての質問を傍らで耳にしたなのはとフェイトは思わず足を滑らせこけ落ちる。

そして、顔を少し染めながら場違いな事を言ったはやてに二人揃って言う。

「はやてちゃん！それここで聞くこと！？主旨が違うってそれ！」

「私達が聞きたいのはそう言うのじゃなくて、もっと当時の管理局の様相とか事情とかについてであって・・・恋愛関係の話はもっと違う時にでも・・・／／／」

「分かってる分かってる。せやけどこう言う砕けた話題から聞いた方が、コミュニケーションを広げる上では大事な要素なんやで二人とも。」

「そんなものかな」

「違う気がする・・・」

疑いの目を向ける二人。

それでも、はやての考えは固まっていた。

「いいや、これで合ってる。と言う訳でユーノス元帥。宜しいですか？」

「なんだそんなことか。いたさ。俺の命よりも大事な女が・・・」

「へぇ。どんな人だったんですか？」

興味を抱いたなのはがそう尋ねると、ユーノスは目を瞑りながらその幼馴染の事を思い返しながら言葉を連ねる。

「そいつは、俺の幼馴染でな・・・――まぁよくドジをして周りから怒られていた。それで、いつも俺に泣きついてくるんだ。“どうして私ばかりが怒られるんだって”。俺はそんなあいつの頭を撫でてやるのが日課だった」

「ほう～～～幼馴染でカップルってことは、なのはちゃんとユーノくんの先輩みたいなものやな♪」

「う！は、はやてちゃん／／／／／／」

「照れなくてもええやろって♪」

なのははからかって来たはやてに顔を赤く染める。

その間にユーノスの話は続く。

「しかもな、そいつは俺と同じく七大元帥の一人なんだ。それも俺が結界魔導師であるのに対して、あいつは最強の砲撃魔導師。そう・・・今でいうユーノとなのはにそっくりなんだ。こんな偶然がある

ものなんだな」

「そうなんですか・・・ちなみにその人の名前か写真とか？」

「名前？コトハだ。コトハ・タカナシ。航空武装隊の名誉元帥にして、最強の砲撃魔導師だ」

「「「こ、コトハ・タカナシ！？」」」

名前を聞かされ、なのはのそれに非常によく似た響きであることに口を揃える三人。

「ちなみにこれが、その写真だ。どうだ、美人だろ」

ユーノスは亜空間から大事にしまっていた生きていた当時の恋人の写真、コトハ・タカナシのものを取出し、手にした三人はそこに映ったコトハの容姿に絶叫する。

「「「えええええええええええええ！！！！！」」」

なのはは自分でも驚くぐらい、自分と顔と髪型も非常に酷似したコトハの姿に驚きを隠せなかった。

強いて言えば、ポニーテールではなく普通に髪をおろし、おろした髪の上から桃色のカチューシャをしていることぐらいで、それ以外はほとんど違いが見当たらなかった。

「わわわわ私そっくりなんですけど／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！！！！！！！！！！」

「何がそっくりなの？」

すると、慌てふためくなのはの横から唐突に地球から戻って来たユーノの声が飛び込み、なのはの心拍数は急激に上昇する。

「ふぇ！ゆ、ユーノ君／／／いつからそこに！？」

「いや・・・さっき帰って来たばかりなんだけど・・・何見てるの？」

「えええっと・・・こここれは・・・その・・・・／／／」

なのはは急いで手にしたコトハの写真をしまおうとするが、ユーノスがそれを奪い取り、ユーノの肩に乗ると同じものを彼に見せる。

「俺の恋人の写真だ。お前も見るか？」

「あああ！ユーノス元帥／／／」

声を上げるなのはを余所に、ユーノスはユーノに写真を見せる。

「な！」

写真を見た瞬間、ユーノは目を見開き驚き返った。

「なのは！！！！！？？？？？」

過剰なリアクションをするユーノや先ほどのなのは達のそれを見ていたユーノスは、きょとんとした様子でフェイトとはやてに言う。

「そんなに似てるか？」

「「似てますよ！！！！！」」

ユーノスは意外と、ぬけている部分がある。

それはつまり、こう言った時を指してであろう。

と、コトハの写真に驚き返っていた四人だったが、直後彼らの耳に困惑した様子のグリフィスの声が聞こえてきた。

「あ、その・・・困りますよ／／／」

「あれ？グリフィス・・・どうしたんだろう」

「何かあったんやろうか？」

はやて達は声が聞こえてきた方に視線を合わせ、困惑するグリフィスの姿を凝視していると、グリフィスを無理に退かした形相の女性が乱入してきた。

「タクマ～！！」

そう、その女性とはコモン・タクマの妻のヨウコであった。

はやては、何の前触れもなくやってきた自宅の隣に住む彼女の姿に目を丸くする。

「あれ？ヨウコちゃん。お久しぶりやな・・・どうしたの？」

すると、ヨウコははやてに詰め寄りタクマが来ているかどうか尋ねる。

「ねぇ、はやてさん。うちの旦那来てない？」

「えっ。コモンくん？来てないけど・・・何？どうしたの？」

「ごめん、後で話す！あいつ来たら絶対逃がさないで！持ってるお金も取り上げて！お願い！」

「えっ、ちょっと！」

突然の到来と、要求を圧しつけたヨウコにたじたじのはやて。

フェイトは徐にヨウコの事を尋ねる。

「知り合いなの、はやて？」

「うん。うちの隣近所に住んでるヨウコ・コモンちゃん。私らが引っ越してきたときから仲ようしてくれてな」

ヨウコは言伝だけを伝えると、一目散に外へと飛び出していくが、その時ユーノは彼女が靴を履いていないことに気が付いた。

「・・・あ。そう言えばあの人靴履いてないよ」

「えっ。ちょ、ちょっちょっちょっと。何か履くもの・・・サンダル・・・！」

はやては慌てて履物を探し出す。

するとそこへ、外回りの時間が来たことを伝えにリィンが飛んでくる。

「はやてちゃん。外回りの時間ですよー！」

「あ、うん！分かってるよ！せやけどその前に・・・」

しかしはやてに追い打ちをかけるように今度は恋次達死神組やスクライア商店メンバー、それにヴィータなどがシフトやクリスマス会の事を聞いてきた。

「おーい！例のシフトの件、どうなったよはやて？」

「はやて。クリスマス会の事で相談なんだけどよ・・・」

「え！ああ～～～もう～～～何でこうも一遍に重なるんや～～～！」

思わず声を上げる焦燥感と怒りに満ちたはやて。

見かねたユーノははやてに言う。

「はやて。僕が持ってくよ」

「ほんま！ありがとうユーノくん！じゃ、お願い！何かあったら止めてな。ヨウコちゃん激しいから」

「ああ・・・うん」

はやてからサンダルを受け取ったユーノは飛び出して行ったヨウコを追いかけようと外に向かおうとするが、その瞬間ユーノスは不意に感じたある気配に目を見らいた。

「！」

「ユーノス元帥？」

「どうしたんですか？」

ユーノスの表情の変化に気づき、そう尋ねるなのはとフェイト。

「いや・・・・・・（この気配・・・・・・・まさかな・・・・・・）」

身に覚えのある気配に一度考えるユーノス。

そして、ユーノスは考え末外に出ようとするユーノに向かって言う。

「待て、ユーノ。」

「？」

「これを持って行け」

ユーノスは結界印を取出し、ユーノに手渡す。

「え？結界印・・・・・・急にどうしたんです？」

「ちょっとな。お前たち、俺も外に出てくる。急用があってな」

「急用ですか？」

「ああ。それで、万が一ヤミーが出た時、それがないと困るだろう。お前に預かっててもらう」

「僕はいいですけど・・・一人で大丈夫なんですか？」

「心配するな。直ぐに戻る。それに仮にも俺は七大元帥の一人なんだ。余程の事でない限り、俺はどうにかならんよ」

「そうですか」

ユーノが納得した様子を見せると、ユーノスはほくそ笑み彼の肩からおりる。

「それじゃ、俺は出てくる。お前も急いだ方がいいぞ」

「あ、はい・・・」

二人はそう言い合うと、なのは達に見送られてユーノはヨウコの元へ、ユーノスは気配を感じ取った場所へと向かい走り出した。

呆然と去りゆく二人の後ろ背中を見つめるなのはとフェイト。

「いってらっしゃい・・・」

「ユーノ君もユーノス元帥も、大丈夫かな？」

「どうだろう・・・」

と、その時部隊長はやては全員に詰め寄られながら四方八方から飛んでくる要求に遂に爆発する。

「あああああああ！！！！もううううう！！！！みんな少し黙って！！！！！！！」

なのはとフェイトはそれを聞くと、額に汗を浮かべる。

「あっちもあっちで大変そうだね・・・」

「うん・・・・・・」

そうして、お騒がせの機動六課を後にして、ヨウコから逃げ切ったダメ男のコモン・タクマは肩で息をしながら愚痴を言う。

「ったく・・・ヨウコの奴よ・・・ガミガミガミガミうるさいんだよ・・・このぐらい・・・」

タクマは財布から押収してきた数枚の札を手に取りながら、目の前に広がってきた宝くじの販売所に目を向け、いけないことを考えゆっくりと歩き出した。

「ふふ」

◇

〈？？？Ｓｉｄｅ〉

その頃、ミッドの市街地郊外にて、これまでの完現術者としてのユ

ーノ・スクライアを端末を通して観察する紫と緑のオッドアイの少年がバイクに跨っていた。

少年は映像を切り替えるたびに、ユーノが戦う映像を食い入るように見ていく。

「ふう・・・いろいろ調べてみて分かったけど、やっぱり昔から凄かったんだな。欲がないからコアメダルに取り込まれずにその力を制御できるだけでなく、失われたオーズの力とは違うが――――――所有しているコアメダルの魂を引き出してそれを自らの力に変え、一度使うだけでそれを記憶することが出来る能力。」

少年はそう言うと、映像を消し、懐に端末をしまうとバイクのエンジンをかけてヘルメットをかぶる。

「途轍もない才能だ・・・・・・いや、才能なんて言葉を軽々しく口にするのはあの人好きじゃないんだっけ。だけどいずれその欲のないことが自分にとっての“破滅”とも言うべき道へ進まないようにしないと、僕も後々困ることになるしな。早いとこ、こいつを届けることにして、機会を伺って合流しないとな――――――」

意味深長な言葉を長々と語った少年はエンジンを全開にし、バイクで疾走と駆け抜けていった。

この少年の言葉の意味と、正体は一体何なのか？

同じころ、ユーノと一緒に外へと飛び出して行ったユーノスは感じ取られた反応・・・コアメダルの反応を追って移動を続けていた。

ユーノスはその最中、結界印の中から万が一の時も考え抜いてきた

コアメダルの半分を手に取り、心の中で呟く。

「（万が一の保険もかねて、メダルの半分はユーノに渡した結界印の中に置いてきた。さて、ここからが問題だ。あの気配・・・・・・あれは間違いなくコアメダルの反応・・・・・・）」

ユーノスは一度地図を表示させ、ポイントを確認。

「地図ではこの辺りか・・・・・・確かめる必要がある。」

ユーノスは場所を確認し終えると、徐にそこへ向かっていく。

これが後に彼の明暗を分ける重要な選択肢となりうるとは――――――

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

一方で、ウヴァが出て行ったあと、メズールはカザリの隣座って一抹の不安を掲げながらこう話しかける。

「ユーノスを狙うのはいいけど・・・上手くいくかしら？彼にはユーノ・スクライアの坊やがついているのよ。しかも、彼は元・翡翠の魔導死神で、次元世界最強って言われただけの強者・・・」

「大丈夫。ガメルが上手くやればね」

自信にあふれかえるカザリ。

二人は互いに背中を合わせながら雑誌を読み漁る。

では、そのガメルはどうしているのか？

生み出したバイソンヤミーを使って、ミッドの市街地へと出没。

空気中に不意に漂って来た紫色の気体に市民は目を奪われるが、直後履いていた靴がひとりでに動きだし、持ち主の足から離れると、それが頭の上へと落ちて来た。

「あ、イッタ！」

「えっ、えっ・・・えっ？」

靴と言う靴が勝手に動き始め、人々に当たっては騒ぎを拡大させるその不可解な現象こそ、ガメルのヤミー、バイソンヤミーの固有能力。

人間に擬態しているガメルはその光景を見て、曇り気のない笑顔を浮かべて一人楽しんでいる様子だった。

「当たり～～～」

すると、そのガメルの背後からバイソンヤミーが登場し、地面に手を叩きつけ、震動を起こすと、周囲にあるありとあらゆるものを浮遊させ、容赦なく行き行く人々にぶつけていく。

傍から見れば一体何のことだと言いたくなるその光景を、ガメルだけは非常に楽しんでいる様子だった。

「また当たった～～～！もう一回！」

「当たれ！」

バイソンヤミーはガメルの欲望を忠実に叶えるため、言われた通りの事をし続け、人々はこれ以上ものが当たるのを恐れて逃げ惑う。

「当たれ！グフフ」

ガメルの欲望はどんどん膨らんでいくのであった。

◇

〈タクマＳｉｄｅ〉

このような騒ぎが密かに起きている間、同じ当たるでも宝くじを当てることに全力を投球するタクマ。

何度スクラッチを削っても、一向に数字は揃わず不満だけが積もっていく。

「もっっ！まったくなんだよ！ああ・・・最後の一枚だ・・・お願いします。お願いします。来い来い来い・・・！」

願いを込めて残り一枚となったスクラッチくじを削り出すタクマ。

「おっ！あっ！」

三つあるうちの二つが削れ、「７７〇」と数字が連なるのを見て、タクマは興奮する。

「これはもしかして・・・！」

期待に胸膨らませるタクマ。

と、その時タクマの横に勢いよく手が叩きつけられ、横を見て瞬間タクマの目に飛び込んできたのは形相を浮かべる妻・ヨウコだった。

「わあっ、ヨウコ！」

「タクマ、何やってるのよ？」

「何って・・・見れば分かるだろ！お前がうるさいから俺、自分で稼いでるんだよ・・・ほら！あと1個そろえば大当たりだよ、ね？」

「あんたねえ・・・バカ！」

ヨウコは放蕩の限りを尽くす夫の姿に我慢の限界を迎え、ついにタクマの顔にグーパンチを叩きこんだ。

「ぐあ！」

タクマは勢いよく後ろに倒れ、たまたまその光景を目撃してしまったユーノも口を大きく開ける。

「うわあ！」

ヨウコはタクマの胸ぐらを掴み、声を上げて訴えかける。

「いい加減、目覚ましなさいよ！いつまでフラフラ遊んでれば気が

済むわけ？」

「なんだ離せ！この鬼嫁！」

公然の目の前で夫婦喧嘩を始める二人。

困惑気味の人々と、見かねたユーノは二人に近づきに仲裁に入ろうとする。

「ちょっ・・・ちょっと待って！暴力反対！」

ユーノは取り敢えずヨウコをタクマから話してやり、唐突に現れたユーノの姿を見たタクマは青たんで晴れ上がった右目を浮かべながら尋ねる。

「誰あんた？」

「えっ？あの・・・はやてに頼まれて」

「せっかくだけど、夫婦の事なんでほっといてくれる？」

「えっ？でも・・・あの、とりあえずサンダルどうぞ」

ユーノはそう言いながら、渡されたサンダルをヨウコに差し出し、ヨウコもそこで初めて自分が何も履いていないことに気が付いた。

「えっ！？」

ユーノが二人の間に入って喧嘩の仲裁を続けているその頃、ガメルは益々欲望を大きくし、バイソンヤミーを使って周囲にあるもの全

てを宙に浮かべて、逃げ惑う人々へと当てにいく。

多くの人々が飛んでくるものに当たって倒れていくと、ビルの上から見ていたガメルの欲望が膨れ上がり、興奮は増していく。

「当たった～！また当たった～！」

ガメルが楽しめば楽しむほど、バイソンヤミーの力は増大し、地面に手を叩きつけて物質を宙に浮かばせ、挙句の果ては人と人とをぶつけると言ったことまで始め、ガメルはその光景に対して言う。

「大当たり～！」

さて、ヤミーの脅威が徐々に近づいていることなど未だ気づいていない・・・と言うか風喧嘩の仲裁で気づく暇さえなかったユーノはヨウコとタクマにようく言い聞かせる。

「とりあえず、落ち着いて話してくださいね。僕はこれで」

役目を終えたユーノは二人に背を向け帰ろうとしたが、彼が背中を向けた途端、ヨウコは再びタクマに向かって突っかかっていく。

「あんたねぇ！」

「ちょっとなんだよお前は！だからやめろって言ってるだろ！」

二人の喧嘩を耳にしたユーノは呆れながら振り返り大急ぎで止めに入る。

「え～～ちょっとちょっとちょっと！暴力は止めましょうって！」

暴れるヨウコを押さえつけるユーノだが、ヨウコの怒りは収まらない。

「言わないと分かんないのよこの男は！仕事もしないでフラフラフラフラして！」

ユーノは仕事もしないで、と言う言葉に反応すると思わず自分がヨウコに頭を下げて謝った。

「あ！すいません」

「何であなたが謝んのよ？」

「ああ・・・」

自分でも何を言っているのだと考えるユーノ。

どうもユーノ自身は嘗ての無限書庫に缶詰めとなって働いていたことと比べれば、今の駄菓子屋を営む傍らふらふらと世界中を飛び回る生活に正規としての勤労意識と言うものがあまりなく、ついそんな事を口にしてしまったのだ。

すると、直後にタクマがヨウコに向かって大声で言う。

「もういいよ！うんざりだ！金返せばいいんだろ？これが当たるんだよ、これが！」

「なによそれ！人のお金で買ったくじ、当たるわけないでしょ！」

「見てろよ、見てろよ見てろよ見てろよ・・・！」

暴れ出そうとするヨウコをユーノが押さえるのを尻目に、タクマは最後の数字の影を削っていく。

「当たれ・・・当たれ・・・当たれー！」

だが、その当たれと言う言葉に反応するかのようにガメルも同じことを口にする。

「当たれ・・・当たれ・・・もっと～～～！」

ガメルの言葉を聞き、ビルの下に居たバイソンヤミーは地面に足を叩きつける。

「！」

ヤミーの気配を感じ取ったユーノは思わず表情を一変させ、周りを見渡す。

その間にタクマはスクラッチを削り続ける。

「当たれ。当たれ～！」

と、そんなタクマの願い通じたのが現れた数字は「7」であり、三つの数は見事最高額の当選番号である「777」となり、タクマは声を上げた。

「あっ！おっ！来たっ！当たった～！」

「えっ？」

「１００万だ～！」

疑いと驚きの目を向けるヨウコとユーノの前で、タクマはこの上もない様子で喜びを表現する。

と、その直後ユーノ達の元にバイソンヤミーの仕掛けたあらゆるものが飛んで来、ユーノ達にぶつかり出した。

「痛いっ！」

突然の出来事に頭を押さえるユーノは、逃げ惑う人々の後ろから姿を現した、バイソンヤミーを目のあたりにし、目の色を変えた。

「ヤミー！」

「えっ！何あれ！？何っ！？」

ヨウコとタクマはバイソンヤミーの姿に恐れおののく。

「ヨウコさん。取りあえず旦那さん連れて逃げてください。」

ユーノは現れたバイソンヤミーの元へと走り出す。

バイソンヤミーはその後も調子に乗って、足を叩きつけて震動を起こし、周囲の建物の中から机などの大きなものを引っ張りだし、人に当てようとする。

ユーノは逃げ遅れた人々を完現術の力で取り戻した魔法、ラウンド

シールドで防御し、人々を逃がすと、その現状を目にして思わずつぶやく。

「ちょっとちょっと・・・これのどこが欲望と関係あるわけ？」

そう言いたくなる現状に困惑するユーノだが、バイソンヤミーはそれとはお構いなく震動を起こし、ガメルは声を上げて言う。

「当たれ～！」

すると、ユーノの元に外れた看板が二枚飛んで来、ユーノはそれを避けてバイソンヤミーに向かい合うと、戦うことを決める。

「聞いてもムダか」

懐からユーノスに渡された結界印を取出し、完現術を発動させる。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

スレイヤーモードへと変身したユーノはガメルの欲望に忠実に従い暴れるバイソンヤミーに向かって体当たりをする。

「お前！」

ユーノがバイソンヤミーと戦いを始めると、その光景を見ていたガメルは呆気にとられた声を上げる。

「あ・・・ユーノ・スクライアだ・・・」

ガメルは本来の姿に戻ると、駄菓子を手に取りながら悩んでいた。

「どうしよう・・・」

ユーノはガメルの悩みなど一切知る由もせず、完現術の力をフルに使ってバイソンヤミーに必死の覚悟でぶつかっていくのであった。

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

その頃、メダルの反応が確認されたミッドチルダのとある運打沿いに位置する工場跡を訪れていたユーノス・スレイアは。

「ここか・・・メダルの反応が確認されたのは・・・」

周囲から漂うコアメダルの反応を警戒しながら、辺りを散策するユーノス。

すると、ユーノスは何かを発見し、壁に張り付くように隠れる。

彼が目にしたのは、携帯の様な端末を手にした緑のジャケットに身を包んだオールバックの男であった。

「なんとなく妙だな・・・」

ユーノスは男の動きに警戒をしながら、ユーノから渡されたバッタカンを取出し起動させると、それをユーノの元へと向かわせる。

バッタカンがユーノの元へ向かっている間、そのユーノはバイソンヤミーとの戦闘を続け、圧倒的なパワーを秘めたバイソンヤミーの攻撃に苦戦を仕入れていた。

「アイタタタ・・・」

当たりどころが悪かったのか、腰を痛めるユーノ。

するとそこへ、ユーノスが向かわせたバッタカンがユーノの肩に乗ってきた。

『ユーノ。運河沿いの工場跡地に来て欲しい。コアメダルと思わしき反応が確認された。一応用心して・・・』

「そうしたいんですけど、今ヤミーと取り込み中でして！」

切羽詰った様子で通信を行うユーノだが、バイソンヤミーがユーノに向けて体当たりを仕掛けた。

「ぐあ！」

攻撃を受けたユーノは勢いよく階段を転げ落ち、戦闘をしながらその趣旨を伝える。

『メダルは後です！』

「く。何でこうも間が悪いというか・・・分かった。俺もすぐに行く」

ユーノにそう言った後、バッタカンを戻してユーノスは先に用事を

済ませるために、緑のジャケットに身を包んだ男の元へと近づいた。

ユーノスが近づいてくるのを気配で察したその男、擬態したウヴァは不敵な笑みを浮かべるのであった。

ユーノスの元にもう直脅威が迫り来ようとする中、バイソンヤミーと戦闘を続けていたユーノの方はと言うと――――・・・

「だあああああああ！」

これまでのヤミーと違った攻撃の仕方のバイソンヤミーにかなりの苦戦を強いられ、ユーノは幾度となくパンチをその身に受け飛ばされては階段を転げ落ちる。

「お前・・・！」

ユーノも決死の思いで向かっていくが、単純な腕力ですらユーノのはるか上を行くバイソンヤミーのパンチを逆に受け、またしても飛ばされるユーノ。

「のあああああ！」

圧倒的にユーノに分が悪い状況を駄菓子を持ちながら眺めていたガメルはバイソンヤミーを応援する。

「いいぞー、頑張れー！やっつけろー！」

「ぐあ！」

この不利な状況の中、果たしてユーノに勝利の兆しは見えるのであ

ろうか？

ユーノの方も気になる処だが、こちらの方も忘れてはならない。

ユーノスは人間に化けていることなど知る由もないグリードの一体、ウヴァの元へ徐に近づき、フェレットの姿のまま尋ねる。

「おい。ちょっと聞くが、この辺りで金縁のメダルを見なかったか？」

「メダル・・・ああ。それなら見たぞ」

「本当か？何処で見た？教えてくれ」

すると、ユーノスの反応を見た瞬間ウヴァは大笑いをする。

「ふふふ・・・はははは！」

「？」

「この姿だとお前でもわからないらしいな」

「何？」

「俺だよ」

ウヴァはそう言いながら徐に立ち上がると、本来の姿へと戻り、ユーノスはそれを見るなり表情を凍りつかせる。

「！」

ウヴァは元の姿に戻るや否や鋭い爪でユーノスに襲い掛かり、ユーノスは咄嗟にラウンドシールドを展開して辛うじて攻撃を防ぐ。

「なるほど・・・メダルの反応は、お前だったと言う訳かウヴァ・・・！そして、それは俺をおびき寄せるためのエサ！」

「フン。貴様だけがこの時代に順応していると思うな。うぬぼれて墓穴を掘ったな。ユーノ・スクライアのいないお前など、赤ん坊のようなものだ！」

ウヴァはそう言うと、ユーノスのシールドを破壊し、ユーノスを鷲掴みにすると大きく振り回してユーノスを鉄筋コンクリートに叩きつける。

「ぐあああ！」

ユーノス・スレイア、まさに絶体絶命。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

同じ様に、絶体絶命とはまだ言えないが敗色濃厚が強いユーノはと言うと、バイソンヤミーに体を使回れ鉄柱に激突してはダメージを蓄積させていき、地面に放り投げられる。

「ぐがああ！！」

満身創痍の状態になりながら、ユーノはバイソンヤミーに果敢に向

かっていく。

「この・・・！」

ユーノはバイソンヤミーだけに、首につけられていた手綱を手に取り、バイソンヤミーの動きを一次的に封じて翻弄していく。

「回れ！」

だが、その時ユーノの背中目掛けてガメルが体当たりをして来、ユーノは衝撃で大きく飛ばされる。

「のあああああ！」

ユーノが突然の事態に不審に思っていると、バイソンヤミーの目の前に完全復活をしているわけではないが紛れもなく途轍もない力を発するガメルの姿があった。

「俺のヤミー・・・いじめるな！」

「こ・・・この感じ・・・グリードか・・・」

〈Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ〉

「は！」

ユーノはグリードだと判断すると、ツインブレードを生成し、ガメルとバイソンヤミーに向かって突撃する。

だが、ユーノの仕掛けた攻撃は軽々とガメルに受け止められてしま

い、ユーノは思わず目を疑った。

「！」

ガメルはそんなユーノの身体に重量系のグリードらしく、強靭な威力を秘めたパンチを繰り出しユーノを追い詰める。

「だあああああああああ！！」

同じころ、ウヴァの罠にはまり襲撃を受けていたユーノスは満身創痍の状態でありながらウヴァに体を鷲掴みにされる。

「立て！」

ウヴァはユーノスを鷲掴みにしながら力を込めていく。

「ぐあああ・・・！」

苦しむユーノスにウヴァは尖った爪を突き立て、ユーノスは険しい表情を浮かべながらこう言う。

「く・・・手が込んでるな・・・が、お前の虫頭で考えられるわけがない・・・カザリだろ。カザリに手取り足取り教えてもらったんだろう・・・なぁ、ウヴァ？」

「きさま・・・！」

カザリに教えてもらったという言葉を聞き、それが余程気に食わなかったのか、ウヴァは更に力を入れてユーノスを握りつぶそうとする。

「がああ！」

「黙れ！」

ウヴァの攻撃を受け続け、ユーノスの意識が徐々に遠のいていく。

「（ま、マズイ・・・！）」

「ユーノス。きさまのコアメダル、全部渡して貰う」

そう言うと、ウヴァはユーノスの体に頭から電撃を叩き込み、ユーノスは声を上げる。

「がああああああああああ！！！」

ユーノス・スレイアもユーノ・スクライアも、一体どうなるの！？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、ガメルとバイソンヤミーの二人に襲われ、圧倒的に不利な状況に立たされていたユーノは豪快に高所から落下していった。

「のあああああああああああ！！！」

身体に走る激痛に険しい表情のユーノを、落とした場所からバイソンヤミーと一緒に楽しげに眺めるガメル。

「落ちた、落ちた・・・」

と、その時ガメルとバイソンヤミーの体に銃弾のようなものがぶつけられる。

「？」

「痛いな・・・」

突然の事に驚くガメルだが、そんなガメルとバイソンヤミーに容赦なく銃弾を撃ってきたのは、バイクを運転しながらユーノの元へと走ってきたあのオッドアイの少年だった。

二体の怪人を一次的に退かせた少年は呆然とするユーノの前にバイクを止めると、ヘルメッドを外しじっとユーノを見つめる。

「な・・・何だい君は？」

「ユーノ・スクライアさんだね？あなたにプレゼントがある」

「え・・・プレゼント？」

少年はそう言うと、バイクの収納スペースからケーキと思われる箱を取出しユーノに見せる。

「ん？それは・・・ケーキ？！」

この場においてシュールなものを目の当たりにし呆気にとられるユーノと、そのケーキを見つめながら躊躇いを見せる少年。

「でもな・・・せっかく作ったこのケーキ、食べない事にはもったいない気がするような・・・」

「へっ？ちょっと何を言ってるんだい君は？」

と、その時バイソンヤミーがその少年目掛けて飛んで来た。

ユーノはそれを見るな否や、少年を突き倒すように退かす。

「危ないっ！」

「うわっ！」

バイソンヤミーの攻撃を退かせ、所運の安否を気遣うユーノ。

「君、大丈夫？」

ユーノが声をかけると、その少年の顔はケーキの生クリームが付着し、顔中真っ白となっていた。

「イテテテ・・・」

ユーノもその光景に少し苦笑いを浮かべるが、直後彼は少年の顔についてあったあるものに目を奪われ徐に近づく。

「えっ？」

「大丈夫・・・だけど顔がべとべとで・・・」

少年は顔についたクリームを払おうとすると、ユーノが手を止めて

言う。

「ああ、ごめん！だけどちょっといい！失礼します・・・」

ユーノは少年の左頬についた丸いものを手に取り、丁寧にクリームを取っていくと、それは紛れもなくライオンの絵柄のコアメダルであった。

「ん・・・？プレゼントって、これ？これって・・・コアメダルじゃ！なんで君がこれを！？」

「色々と訳ありでしてね。」

意味深な言葉をユーノにぶつける少年だが、その時怒り心頭な様子でガメルとバイソンヤミーが二人に敵を向けてきた。

「うおーっ！せっかく楽しんでいたのに！二人とも、ぶっ倒してやる！」

少年は顔のクリームを取る傍ら、コアメダルを手にしたユーノにこう促した。

「とにかく、それを早く防護服の中に取り組んでイメージして。強い光を発するようなイメージを」

「コアメダルを取り込んで・・・強い光・・・？何だかよく分からないけど、やって見るか。」

ユーノは少年の言葉を素直に間に受けると、コアメダルを防護服の中へと取り込み、強い光を発するイメージを浮かべる。

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｆｌａｓｈ〉

すると、そのイメージを現実のものとして結界印が能力を発揮させ、ユーノの髪の毛が金色に輝き出すかと思えばガメルとバイソンヤミーの目を刺激し、二体は目を抑える。

「うわぁ・・・まぶしい・・・目が・・・！」

ユーノは効果抜群なこの攻撃に相当驚いていた。

「おお・・・すごい！僕の髪の毛が光った・・・！誰だか知らないけど、ありがとう！」

少年にお礼を言うと、ユーノは目をやられたバイソンヤミーに向かっていき、役目を終えた少年はバイクに跨ると、ほくそ笑んでからこう言う。

「・・・ふう。これでいいんだ。これで。そうやって、力をもっともっとつけてもらわないと、僕もみんなも困るんだよ――――――――頑張ってね・・・お父さん」

そして、何処へなりとも走り去った。

少年から新たなコアメダルを与えられ、ガメルとバイソンヤミーに思わぬ攻撃を加え、一気に形勢逆転となったユーノはバイソンヤミーに攻撃を仕掛ける。

「のらああ！」

バイソンヤミーは目をやられ、ユーノの正確な位置がつかめず本当され、ユーノは飄々とした態度でバイソンヤミーを挑発する。

「こっちだよーっと♪」

ユーノはバイソンヤミーの背後に回り込み、鍛え抜かれた拳によるパンチを叩きこむ。

攻撃を受けたバイソンヤミーは転げまわると、ガメルと共に撤退を余儀なくされ、地面を叩きつけて震動を起こし、周りに止まっていた乗用車とトラックを左右から引き寄せユーノに激突させようとする。

ユーノは洞爺湖木刀を取り出すと、周囲の魂を使役させ表面をコーティングし、寄ってきた二台の車を斬り捨てる。

「はっ！」

その瞬間起こる爆発。

ユーノが徐に目を開けると、爆発に乗じてガメルとバイソンヤミーは逃走した。

「逃げたか」

一先ず二体を撤退させることに成功し、難題を解決したユーノ。

しかしここでまた別な難題がユーノの耳に聞こえてきた。

「だからやめろって！」

「バカ男！」

ユーノが目を向けると、映ってきたのは先ほどの宝くじ売り場の前で口論となっているタクマとヨウコだった。

「なんの文句があるんだよ！１００万当たったんだぞ！１００万！」

「何よそんなの！その程度でそんなに喜んじゃって！前のタクマならもっと・・・！情けなくて涙出るわよ！」

ヨウコは悔しがりながらタクマを殴りつけ、ユーノは思わず声を漏らす。

「えぇ～～まだやってたの？」

ユーノは二人の元に近づいて行く。

その頃、ユーノスの方はウヴァの力の前に為す術もなく、一方的に追い詰められている状況であった。

「うわあああああ！」

「どうしたユーノス？来いよ！フン」

ユーノスを鉄筋コンクリートに叩きつけ、更に体力を消耗させるウヴァ。

そして、限界を迎えようとしていたユーノスに留めの一撃を加える。

「おらあああああ！」

その瞬間、ユーノスの張った防御が崩壊し、同時に亜空間からユーノスが持っていたコアメダルが飛び出した。

果たして、ユーノスの運命は！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚

チーター二枚　ライオン一枚

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はこれまで集めたコアメダルの性質を見ていこう♪」

「先ずはタコのコアメダル。オーズが変身に使うとき、複眼の色は緑となり、額のオークォーツはガーネット色の菱形。視力に優れ、グリードの体内に潜むコアメダルを認識したり、体色変化により姿を隠した敵を視認することができる。」

「次にクワガタコア。タカコアとはまた違い、背面までカバーできるほど視野に優れる。クワガタの顎を模した額の角状外骨格・クワガタホーンは広範囲に雷撃を放つことができる。」

「そして謎の少年から僕に届けられたライオンコアは、視覚外の地形を正確に把握できるほど聴力に優れ、暗所でも物体を視認できる。さらにたてがみの部分で乱反射を起こし、強力な光を放って敵の目を眩ませる特殊技がある模様。」

な「でもびっくりしちゃった。まさかユーノ君の髪の毛が光っちゃうなんて♪」

ユ「いやほんと僕も驚いたよ。しかし何だって僕の髪の毛なんだろう？そして、あの少年は何者なんだ？」

な「何か特徴みたいなものはなかったの？」

ユ「う～～～んそう言えば目の色が左右違っていたかな。右が紫で

左が緑・・・」

な「オッドアイ?!なんがヴィヴィオみたい」

ヴィ「ひょっとしてさ!パパとママが密かに作ってた二人の子どもだったりして♪」

ユ・な「な／／／そ、そんなことまだしてないって／／／／／」

思わず顔を赤くするユーノとなのはであった。

魔導師図鑑ハイパー!

今日の浦太郎はいつもよりも荒れていた。

理由は最近、ユーノがユーノスを肩に乗せ毎日行動を共にすることに不満を感じての事だった。

浦「チクショー――!!!あんなエテ公なんぞに後れを取るとは、亀井浦太郎一生の不覚!!!奴が来るまでは店長の隣は僕の指定席だったのに／／／」

鬼「お前の指定席はハーゲンダッツの蓋だろ?」

浦「あの肩の上に乗り、小鳥のように囀っていたのは僕だったのに／／／」

金「お前が乗っていたのは罵声のキャバ場のローションマッドの上であろう」

浦「今じゃ僕の居場所は、ロフトのカーテンのシャーの奴のコーナーしかない！」

すると、これに便乗したなのはが言う。

な「気持ちわかります浦太郎さん／／／私もずっと不満で仕方ないんです／／／」

浦「なのはちゃんも同じだったのか／／／やっぱり許せないよあんなエテ公！！！」

な「ユーノ君には申し訳ないですけど、本来フェレットさんの役はユーノ君なのに、そして肩に乗せていいのは私だけなのに・・・！！ユーノス元帥が来てからその位置が逆転して・・・／／／置いてけぼりにされた私達はまるで余ったカーテンのシャーと同じです／／／」

浦「そうだ！今の僕らは余ったカーテンのシャーなんだよ！！どのカーテンにもひっかけて貰えず、カーテンが動くたび右に左にシャー！！！店長とロフトの間をシャー！！！結局僕らは死ぬまでシャーし続けるシャーの奴と同じだ！！シャーなんだよ僕らは！！！！」

な「でもシャーないんですよ！！！！シャーなんですから！！！！

そして、これを聞いていた恋次とルキアが堪忍袋の緒が切れ、二人の成敗。

恋・ル「シャーシャーシャーうるせぇ（喧しい）！！！！！！」

な・浦「ぐほおおおおおおおおお！！！！」

欲求不満が溜まるなのは達であった。

つづく？

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユーノス「もうこのフェレットの状態では駄目なのか？」

ア「商談？」

ス「９５０年もの昔に、グリードを封印した凄まじい存在なんだよ」

ユ「そう簡単になくならないですよ、人の欲って」

第１４９話　サボリと無欲と休憩中

サボリと無欲と休憩中（前書き）

「宗教は間接的にも直接的にも、教義としても比喩としても、いまだかつて一つの心理を含んだことはない。というのは、どんな宗教も不安と欲求から生まれたものだからである。」

フリードリヒ・ニーチェ

サボリと無欲と休憩中

＞i29691―709＜

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事

一つ、ダメ亭主タクマが宝くじを当てる。

二つ、謎の少年よりユーノに新たなコアメダルが届けられる。

そして、三つ。ユーノスが罠にはまり、ウヴァに襲われた。

ユ「はっ！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚
チーター二枚　ライオン一枚

〈ユーノＳｉｄｅ〉

「逃げたか」

ガメルとバイソンヤミーがいなくなったことを確認するユーノ。

するとその時、彼の耳に言い争いをするタクマとヨウコの声が入ってきた。

「だからやめろって！」

「バカ男！」

「なんの文句があるんだよ！」

ユーノはその二人の喧嘩を見て、呆然としながらも近づいて行く。

「えぇ～～～まだやってたの？」

変身を解除したユーノは二人の喧嘩を宥めようと間に入る。

「あの！ちょっと落ち着いてですね！」

そう言いながら突っかかるヨウコの体をタクマから引き離すユーノ。

すると、タクマが何故か逆切れした様子でユーノに言う。

「お前どこ行ってたんだよ！お前がいないからこれが暴れんだぞ！な、しっかり押さえとけよ、な！」

タクマは唖然とするユーノにそう言いつけると、受付にくじを見せようとする。

「ねぇ、１００万！・・・・・あれーっ！どこ行ったの？ちょっと誰か１００万！」

しかしその時に既に受付もこの場に居た他の人々と一緒に逃げ出してしまっていた。

すると、ユーノから離れたヨウコはタクマが持っていた宝くじを取り上げ逃走する。

「このーっ！」

「おい！何すんだよお前！」

ヨウコが逃げていくと、理不尽にもタクマはまたユーノに逆切れを起こす。

「もう！！だからお前おさえとけって言っただろ！」

「え～～～僕の所為！？」

とんだ言いがかりをつけられながらもユーノは二人の後を追って走り出す。

やれやれ、振り回される男も大変なものだな・・・・・

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

「おらあああああ！」

「ぐあああああああ！」

その頃、グリードの一人、ウヴァの罠にはまり襲撃を受けたユーノスは止めの攻撃を受けると、展開していた防御が崩壊し、同時に持っていたコアメダルが宙へと舞う。

ウヴァは宙を舞うコアメダルに目を光らせる。

「コアメダル！」

ウヴァは落ちる方向を確認し、バッタの如く跳躍力で飛び上がり二枚のコアメダル、チーターとクワガタを奪還する。

「取ったぞ！」

一時の幸福にしたるウヴァは振り返りユーノスに更に要求しようとする。

「ユーノス！出し惜しみせず、全部はきだして・・・」

すると、そこには既にユーノスの姿はなく、ウヴァは呆気にとられた。

「何？」

ウヴァは周囲を散策するも、ユーノスの姿は影も形も見当たらない。

と、その時唐突にウヴァの耳にユーノスの声が聞こえてきた。

『ウヴァ！その目先の事だけにいっぱいになる頭をどうにかしたほうがいいぞ！』

ウヴァはその言葉を聞くと、先ほどのユーノスの意図を読み取り、声を上げる。

「貴様！わざとメダルを飛ばしたのか！」

『カザリによろしく言っておけ！じゃあな！』

「待てユーノス！」

しかしそこでユーノスの言葉は聞こえなくなった。

「・・・ふん！」

ウヴァは煮え切らない怒りを抱きながら、奪ったコアメダル二枚を握りしめ、壁を足で思い切りたたきつけて飛び上がり、その場から立ち去った。

ウヴァがいなくなると、ユーノスが仕掛けていたバッタカンが飛び出し、バッタカンはオプティックハイドで姿を消していたユーノスの元へと戻る。

ユーノスは満身創痍になりながら姿を見せると、険しい表情を浮かべながら這いずる様にその場から出て来た。

「ぐ・・・・・なんとかなったな・・・」

持っていたコアメダルのうち、二枚を奪われたユーノスだが、これも作戦のうちであり、いずれ必ず取り戻すと心に固く誓うのであった。

◇

〈ユーノSide〉

一方、ユーノスとは対照的にユーノは走り去るコモン夫妻の跡を追いかけ続けていた。

タクマは宝くじを持った全速力で走るヨウコを必死に追いかける。

「おい！ヨウコ！ちょっと待って！」

「きゃあ！」

橋の上の方でヨウコを捕まえたタクマは宝くじを奪い返そうと詰め寄る。

「俺の１００万だぞ！ちょ・・・ちょっと１００万！１００万返せ

！」

だがしかしヨウコも負けじと抵抗を続け、ついにタクマの腕を振り払い、そのまま橋の手すりの方へと向かい、タクマは思わず目を見開く。

「おい、ちょっとお前なに・・・！」

ヨウコは持っていた宝くじをそのまま川の方へと投げ捨てる。

タクマとユーノはそれを見て、思わず驚愕の表情となる。

「あーー！ちょっ・・・あーーー！ちょっとお前は何をもう・・・やって！だああ！」

タクマは急いで川の中に落ちてしまった宝くじを拾いに向かい、ユーノはヨウコにこの判断についての是非を問うた。

「ヨウコさん。いいんですか？」

「いいのよ。あいつが目覚ましてくれるならね。」

タクマは川岸にやってくると、川の中を見渡しながらその中に飛びこむ事を決意。

「もう・・・どこへ行ったの～～～しょうがないもう」

川の中に飛び込んだタクマ。

「あ～～～」

ユーノは橋の上から声を漏らしながらその光景を見守った。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

さて、ユーノスからコアメダルを取り戻したウヴァは塒に戻ってくると、怪人体となってのんびりと寛いでいたカザリにいきなり攻撃を仕掛ける。

「うわっ！」

カザリは何の前触れもなく攻撃を仕掛けてきたウヴァに困惑しているが、ウヴァはかなり機嫌の悪い様子であった。

「カザリ！」

カザリの首根っこを掴み、容赦なく攻撃的な姿勢のウヴァに必死に弁解をするカザリ。

「ちょっとウヴァ！何荒れてる？やつあたりはやめてよ！」

カザリはウヴァを渾身の力で振り払った。

その場に倒れるウヴァをじっと見つめながら、カザリは言葉をかける。

「ユーノスからメダルを取り戻せたのは、僕のお陰でしょ？」

「今度はお前から取り戻す！」

ウヴァはそう言って立ち上がると、周囲にあったものを蹴散らし、再びカザリの首根っこを掴んで奪われたコアメダルの返還を要求する。

「俺のコアメダルを出せ！」

「ぐううう！！！しつこいな君も！」

グリード同士、このような光景はそうあるものではないのだが、不完全な体で余計に欲望が肥大化したいまの状態では無理もないのかもしれない。

すると、そんな二人の言い争いを見ていた人間体のメズールが言う。

「やめさない！」

メズールは掌から高圧水流を噴射し、言い争う二人の頭にぶっかけ頭を冷やす。

高圧水流を頭に受けた二人は争いを中断し、一定の距離を取って睨み合う。

メズールは呆れかえった様子でこう言った。

「そんなくだらないことで争うなんて、悲しいことよ。カザリ。ウヴァのコアメダル、返してあげて」

「メズール！僕は・・・」

「出しなさいすぐに！」

「・・・ふう・・・」

強い口調でそう言われると、カザリもやむなくその要求を聞き入れ、隠し持っていたユーノから奪ったカマキリのコアメダルをウヴァに見せる。

「フン」

ウヴァはそれを見ると、怒りがこれでもかと湧き上がってきた。

「やっぱり持ってたんだな・・・・・・貴様！」

「ウヴァ、我慢して！あなたはカザリのメダルを」

メズールの言葉を聞き、カザリを攻撃しようとしていたウヴァは静止し、メズールの提案を煮え切らない気持ちで聞き入れる。

「くううう・・・・」

ウヴァはユーオスから奪ったチーターメダルを取出し、カザリと共に交互に自分のメダルを投げて交換し合い、メダルがあるべき場所に戻されると、二人の体は復活当初の状態へと回帰し、二人は安堵の表情を浮かべた。

「いい子ね二人とも」

素直に自分の言葉を受け入れ、調和を保つことが出来た様子を見届

け、メズールは二人の前から立ち去った。

ウヴァはそれでもまだ不満げな様子で周囲のものを蹴散らし、カザリもまた両腕を背中に回して声を上げる。

「あ～あ」

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

さて、もうじき夕方になろうというのに、一向に六課へ戻ってくる気配のないユーノとユーノスを心配するなのは達。

なのはは窓の外を眺めながら、他の前線メンバーと一緒に二人の帰りを待ち続ける。

「ユーノ君もユーノス元帥も戻ってこないね」

「ヨウコさん、見つからないんでしょうか？」

「すぐ追いかけたから大丈夫だと思いますけど・・・でもすごい剣幕でしたね」

エリオがその時のヨウコの顔を思い出しながらそう言うと、聞いていたシグナムが腕組みをしながらアギトと一緒に近づいて来た。

「ああ。あの夫婦も色々あったのだ」

「シグナム。あの二人の事、何か知ってるんですか？」

フェイトが徐に尋ねると、シグナムは少し考えてから次のように言う。

「ちょっと、みなに見せたいものがある」

シグナムはそう言うと、訝しげな顔の前線メンバー一同に自分の机の中にしまっていたはやてから貰った著者「コモン・タクマ」と書かれた風景写真を披露する。

「主はやてから頂いた風景写真集なのだが・・・これを見てくれ。これは、ヨウコ殿の旦那であるタクマ氏が撮った作品なのだ」

「へぇ～～～旦那さんカメラマンだったんですね」

タクマがカメラマン時代に撮ったどれを見ても素晴らしいの言葉が相応しいと言わんばかりの風景写真を見つめる前線メンバー。

シグナムはその写真を見せる傍らこう説明した。

「私は詳しくは知らぬだが、名のある賞を取ったらしくてな・・・・・だが、若いうちに成功するのもよしあしと言うものでな」

「？」

「仕事も金も湯水のように入って世間から注目を浴びたはいいが、それ以来タクマ氏は写真を撮らなくなってしまい、仕事も全部断るようになってしまった――――――」

シグナムはそう言いながら少し寂しそうな表情を浮かべ、なのは達

もそれを見て心からそんなシグナムの心境を感じ取って同じ様な気持ちになった。

シグナムがなのは達にタクマの事を話している頃、同じようにヨウコもまたユーノにその経緯を話してやっていた。

「で、あいつ・・・最後には商売道具売っちゃったの」

「えっ？カメラを？」

「しかもそのお金で毎日ぶらぶらするだけ」

ヨウコは話を一度そこで区切ると、橋の下でずぶぬれになりながらヨウコが投げ捨てた宝くじを守銭奴のように必死に探し出そうとするタクマを一瞥。

「あれ・・・あっ！あったあった！」

タクマは何度も水の中に手を入れ、宝くじを探し出そうとするがどれもこれも見当違いなものばかりが救われ、イライラは積もる一方だった。

ヨウコはため息をつきながら、手すりに掴まりユーノに話しをつづけた。

「あんなタクマ、前じゃ考えられなかった。いい写真撮って、賞とって名を上げて、もっともっとって貪欲でぎらぎらしてて・・・・・それが一度贅沢したとたんに・・・・・・あんなダメ男になるなんてね・・・・・・写真が大好きだったのに」

昔の事を思い返しながらため息をつくヨウコは重い腰を下ろす。

すると、聞いていたユーノは今のタクマの事を見守りながらヨウコに言う。

「なるほど。でも、わかりますよ。」

「えっ」

「夏休みのあととか、学校がいやでいやで行きたくなくなっちゃって・・・またそう言う時にかぎって親が勉強しろとか言うから余計にいやで・・・それと同じですよね」

「微妙・・・」

「あれっ」

自分ではそれなりに分かりやすい例だと思って話したつもりが、返ってきた答えが微妙と言われ、思わず拍子抜けのユーノ。

タクマはその間にも川の奥へと足を入れて懸命にくじを探し続けていた。

ヨウコはそんなタクマの状態を自分ではこう分析していた。

「いや・・・なんかもっとこう・・・欲も何もなくなったって感じかなあ」

「欲・・・ですか。あ、でも。ある人からの受けよりですが、そう簡単になくならないですよ、人の欲って」

ユーノは一年前、洞爺湖木刀を託したかけがえのない友人の坂田銀時からのその言葉をそのままヨウコにも言って上げた。

と、その時足を滑らせ溺れようとしていたタクマの助けを呼ぶ声が耳に入る。

「わー！！たす、助けて！」

「あ～あ～あ～」

見かねたユーノは急いでタクマの元へと走り出し、ヨウコはユーノが言った先ほどの言葉を頭の中で反芻させ口を閉ざす。

「・・・・・・」

そうして、物思いに何かを考えながらタクマとユーノを置いて歩きだし、ユーノは溺れるタクマに向かって声をかける。

「大丈夫ですか？」

「助けて！」

ユーノはタクマの助けを求める声を聞き、何の躊躇いもなく川の中へと飛び込み、救助へと向かった。

自分の欲を捨て去り、目の前の事だけに必死になる今のユーノにも、欲と言うものは果たして本当に残っているのと言うか？

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

「ぐっは・・・・・・」

さて、ウヴァの攻撃をまともに受け、すっかり虫の息に近い状態にまで追い詰められたユーノスは這いずるかのように移動を続けていた。

しかし、それでも体力が持たず適当な場所で横になると、傷の治りが遅いことに不安を感じ始める。

「（回復が遅いな・・・もうこのフェレットの状態では駄目なのか？）」

そんな事を考えながら険しい表情を浮かべるユーノス。

すると、そのユーノスの姿を地元の小学生が発見する。

「わっ！何あれ？」

「えっ？」

小学生三人はユーノスに近づくと、思わずこう言ってしまう。

「あっ。俺知ってる！淫獣だよ、淫獣！」

「い、淫獣？淫獣じゃ・・・」

ユーノスは聞いた瞬間頭が真っ白となってしまう。

そりゃそうだ・・・何故見ず知らずの子供にいきなりこの姿で淫獣などと呼ばれなくてはならないのか？

それは恐らく、管理外世界を問わずユーノのこれまでの行いを見て嫉妬心を覚えた過激ファン層の一部が彼の事をそう言っていたため、フェレット＝淫獣のイメージ、物神崇拝が定着してしまったのだろう。

小学生は興味津々な様子で呆然とするユーノスの体を木の枝で突っつき、ユーノスはそれに堪えてはいたが、我慢が出来ず大声を上げた。

「いん、いん・・・・・・淫獣じゃない！」

「「「うわっ！」」」

小学生はいきなり人間の言葉を話すフェレットの姿に驚き尻もちをついたが、直後彼らは地面に落ちていた石を拾うとユーノスに投げつけてきた。

「やっちゃえ！」

「このやろう！」

「イッタ！イッテ！」

ユーノスは理不尽なまでの周囲からの反応を身を以て味わうと、以前ユーノから聞かされたその当時の話を思い出しながら、自分もまた納得の様子となる。

「ユーノの気持ちがよく分かった・・・イテテテ・・・」

ただでさえボロボロな体のユーノスは更にボロボロとなってしまった。

身も心も――――――・・・

そして、時刻はすっかり夕方を迎え、夕陽が沈みかけ辺り一面が茜色に染まり出した頃、タクマを救助しようと川の中へと飛び込んだユーノも、救助されたタクマも服を濡らしてしまい、結局川岸で服を乾かす傍らキャンプする羽目となってしまった。

ちなみに季節は12月の真冬。

よく寒くないよな二人は・・・・・・

作者がそう思う中で、ユーノは川岸に落ちていたものを適当にかき集め、器用にそれを使って原始的な方法で火を起こすことに成功すると、思わず表情を明るくした・・・火だけに。

「おっ♪」

ユーノの器用な技を間近で窺っていたタクマは感心した表情を浮かべる。

「おぉ。ずいぶん器用だな」

「まぁいろいろ旅してましたからね・・・・・・それにしてもまいりましたね。明日のパンツもビチョビチョですよ」

ユーノはそう言いながら、干してあるユーノにしては割と派手な柄のトランクスを触り、タクマは苦笑いをしながらそのパンツの印象を口にする。

「派手だね。まぁ・・・どうでもいいけどさ」

ユーノは真冬の12月にも拘らず、パンツ一丁の状態で誇らしげな顔を浮かべ言う。

「えへ♪パンツだけは綺麗でいいもじゃないと。メーカーによっては同じ面でも違ったりしますしね♪」

はて、ユーノってこんなキャラだったかな?

いいや・・・四年の間でこうなったに違いない。

書いている筈の私でもよく分からない。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

夕日が沈みかけようとしているこの時間帯はカラスたちも自分の寝床に戻り始める。

しかし、そのカラスとは違い、同じ鳥でありながら自らの欲望の達成の為に世界を歩き回る男がいた。

グリードの中でもとりわけ計算高く、非常に食えない性格の鳥のグ

リード、アンク。

人間の姿に擬態したアンクは多機能端末を手に取りながら道を歩きつづけていた。

「どうやらカザリ達が、何か色々と動き出したようだな。ユーノスの奴も、あの姿じゃ思った以上に大変だろうしな。さて・・・・・・タカのコアはあいつが持っているが、一体どうすればいいか・・・・・」

アンクは一度歩みを止めると、端末の画面を切り替え、時空管理局本局にかつて所属していて、今は嘱託勤務扱いとしてアンゴルモア捜査に協力しているユーノの情報を取出し顔を渋くする。

「（奴には、確か・・・ユーノ・スクライアとかいうとんでもなく食えない男がついてるんだったな。おまけに、俺のヤミーを相手にしてほぼ無傷の状態で倒した・・・・・・メダルもアンゴルモアも、一筋縄じゃいかないか）」

するとその時、そんなアンクの耳に女性の声が入ってきた。

「鳥のグリード、アンクね？」

「あ？」

アンクが声の聞こえてきた方に目を向けると、目の前に立っていたのは不敵な笑みを浮かべた破面魔導虚の一人、リリスだった。

「ドクターから急に予定を変更してこっちに接触して欲しいと頼まれてみれば、意外と人間の姿は私の好みだったりしてね」

「何だお前？」

「破面魔導虚の一人、リリス。よろしく・・・・・・アンク」

「破面魔導虚・・・？」

聞きなれない言葉に訝しげな表情を浮かべるアンクはリリスの顔を凝視する。

そうして、暫くの沈黙が流れるのであった。

リリスがアンクと接触を始めたその頃、アルハザードのスカリエッティの研究所の方では、アリシアがケーキ作りに精を出すスカリエッティにふとこんなことを尋ねようとしていた。

「ねぇドクター。ちょっと教えて欲しいことがあるんだけど、いい？」

「ほう・・・君が私に質問をしてくるとは、なかなかに興味深いじゃないか、アリシア君。何かね？」

「うん。グリードの持つコアメダルって、元々は９５０年前に何とかって錬金術師が造ったモノだって、ママが言ってたけど・・・・・・その力を自在に使えるオーズって・・・ぶっちゃけ何なの？」

すると、スカリエッティは一度その手を止めると、不気味な笑顔を浮かべながら甲高い声で笑いを上げた。

「ふふふふはははは・・・素晴らしい。素晴らしい質問だよア

リシア君！」

「？」

「君の欲望は実に素晴らしい！流石はプレシアの一人娘だ！いいだろう是非ともその欲望に敬意を表してお答えしようではないか。」

スカリエッティは一度ケーキ作りから離れると、エプロンを着用したまま徐に部屋に置かれてあるグランドピアノの方へと歩きだし、その最中に言葉を並べた。

「現時点において、コアメダルとアンゴルモアの大半はユーノ・スクライアを始めとする機動六課の手中、そしてグリードが保管している。そして、無意識のうちにユーノ・スクライアはオーズとはまた違うが、その魂を引き出して自らの力に変えている。彼は本当に素晴らしい才能の持ち主だ。実に興味深いことだとは思わないかね？」

「まぁそれはそうだけど・・・それより質問の答えになってない気がするよ。」

「おっとすまないつい話が逸れてしまったようだ。」

「アリシア君、いいかね。コアメダルの力を自在に操るとされた伝説の存在であり強大な力を秘めし欲望の王『オーズ』とは、９５０年もの昔に、グリードを封印した凄まじい存在なんだよ。」

スカリエッティはそう言うと、グランドピアノの前に座り、慣れた手つきで適当に選曲した曲を演奏し始め言葉をつづけた。

「コアメダルの力を自在に使え、コンボで発動するとてつもないパワーを受け止め、自分のものとする。」

「ふ～ん」

「しかしそれだけの力を使う為には『器』と言うものが必要だった。当時のオーズはその『器』としては、あまりに欲望が大きすぎた。それが結果的に身を滅ぼすことに繋がってしまったのだよ。ユーノ・スクライアは今のところ、私の理想する最高の『器』としての役目を果たしていると見るがね」

「ドクターの興味と研究は兎も角、あれって中身はなんにもないただの無欲の塊だよ。そんな人がどうしてコアメダルの力を自在に操れて、尚且つアンゴルモアや地獄に見出されたのか、私にはよく分からないよ」

すると、それを聞いたスカリエッティは唐突に演奏を中断し、不敵な笑みを浮かべながら疑問符を浮かべるアリシアにこう言った。

「そう・・・欲がない・・・私とは対照的だからこそ、彼は素晴らしいのだよ。」

「へっ？」

「無限の欲望？アンリミテッド・デザイア？。私のコードネームだ。私は欲望を抑えることはおろか、グリード並みに人間以上の欲望を抱いてしまう悲しき存在なのだ。決して満ち足り事は無い。だがしかしユーノ・スクライア・・・欲望の空白？ブランク・オブ・デザイアは違う！欲がない故に中身を伴わない強大なキャパシティを秘めているのだ・・・ふふふふはははははは！！！！！」

勝手に一人で大笑いをし、勝手に一人で楽しむ様子のスカリエッティを見つめながら、アリシアは変わらず疑問符を浮かべるのであった。

「変なドクター・・・」

と、その時そんなスカリエッティの元にプレシアからの通信が入る。

『ジェイル。リリスがグリードの一体、アンクと接触したみたいよ』

「おお。分かった・・・・・アリシア君。君に面白いものを見せてあげよう」

「？面白いもの・・・」

興味を抱くアリシアは言われるがままに、スカリエッティと共に映し出された通信画面に目を向ける。

映っているのは先ほどのリリスとアンクの接触の場面であった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

やがて、辺りは暗黒の世界となった。

ひょんなことから人助けをした結果、服を濡らしてしまったユーノはタクマと一緒に火にあぶりながらこれまでの旅の記録を暇つぶしがてら話していた。

タクマは話を聞くと、ユーノに感心した態度で言う。

「若いのに、随分いろんな世界まわってるんだな」

「元々僕が遺跡発掘を生業とする漂流一族でしたし、ちょっと訳あって知人の出身世界の方でも世界中飛び回っていましたから」

「ふ～ん」

ユーノはパンツを火であぶりながら更に言う。

「それで、その旅先で出会ったとある青年と仲良くなりまして・・・僕にこう言ってくれたんです。『男はいつ死ぬか分からないから、パンツはいつも一張羅はいとけ』って」

「はは。そう聞くとパンツもカッコいいな。で、今はミッドで旅費稼ぎってとこか？」

「と言うより、友達が困っているのでその手伝いをするために」

「そうか。」

「仮に旅費稼ぎが目的でこっちいたとしても・・・・・・多分ちょっと休憩中って感じですかね」

ユーノはそう言いながら、ついアフリカの内戦に巻き込まれたときに、自分が助けられなかった少女、ユウの事を考えながら腰を下ろした。

ユーノが外でそんなことをしていることなど、知る由もないなのは達は、何時までも経っても帰って来ない愛おしい人を思って星空を眺めていた。

「ほんとにユーノ君・・・何処行っちゃったんだろう・・・」

「パパ。こんな夜遅くにどこで何してるんだろう？」

ヴィヴィオもまた、帰りの遅い父親の事を心底心配していた。

すると、そんな本気で心配している二人を余所に、鬼太郎が無神経な事を言う。

「キャバクラでも行ったんじゃないのか？偶にはそう言うところにでも行って、日頃のストレスを解消したくもなるってな！」

「ユーノ君がそんな場所に行くわけありませんよ！」

「そうですわ！ユーノ様が私を置いてそのような場所になど！」

マリアがそう口を挟むと、聞いていたなのはに嫉妬の炎が点いてしまい、マリアに殺意の籠った笑顔を向けながらゆっくりと近づく。

「“私を置いて”は余計ですよね・・・・・・マリアさん？」

「あら♪また焼きもちですか、なのはさん♪」

マリアもまた恐怖を内包した笑顔をなのはに向け、二人は一触即発状態。

そして、二人は互いのユーノへの愛とプライドを懸けた壮絶な戦いを始める。

「だあああああああ！！！！！もう勘弁ならねぇ！！！！！頭冷やしてやるてめぇ！！！！！！！」

「上等だゴラ！！！！！！今日こそはそのまがった根性へし折ってやる！！！！！！！！」

言葉づかいでさえ粗暴で凶悪なものとなった二人は巨大な魔力と霊圧を全開にして、愛機を手に取り中、傍らで窺っていたスバル達は己の身の危険を感じた。

「きゃーーー！なのはさんが本当に魔王になった！！！！」

「逃げないと明日はないわよ！！！！」

そんな騒々しい日々に慣れつつも、ただただ深いため息をつくクロノは徐に呟く。

「はぁ・・・やれやれ。どうしてここは静かにするということが出来ないのか・・・しかし、ユーノも本当に何処へ行ったのだ？まさか、こんな毎日に鬱蒼として一人旅？」

そんなクロノの言葉に便乗して、恋次も言う。

「あ、かもしれねぇな。でもあいつはある意味羨ましい男だよ。ガキの頃から色んな世界を回って、色んなこと知ってて、司書を辞めてからも地球をぶらりと旅して回ってたんだろ。」

「気の身気の向くまま世界を放浪か・・・・・・私も一度はやってみたいと思いましたよ。まぁ、気が付いたら組織の枠に嵌ってそんなことも出来へんようになってしもうたけど」

はやてが羨ましそうにそう言った時だった。

クロノは暗い顔を浮かべながらこう言った。

「ただ、その旅先であいつは“欲”と言うものを失ったことを忘れた訳じゃあるまいな」

「あ・・・」

「・・・そうだったな」

はやては、自分たちが当たり前のように持っている欲と言うものをユーノだけが持たないという事、寧ろユーノがその欲に渇いてしまったことに刺すような想いとなりながら口にした。

「欲がないって・・・辛いものや。今のユーノくんはただ、私やみんなの助けにならなきゃって言う使命感的なものに捕われて、自分がしたいことを見失ってるからな・・・どうしてやろう・・・・・・どうしてそこまでして欲を捨てないけなかったんや――――――――」

そう考えながら、はやて達はユーノの帰りを待ち続けるのであった。

一方で、ユーノもまたタクマと一緒に火にあぶりながら物思いにふけった感じでいると、タクマは唐突に口を開けて言う。

「なるほどね。休憩中・・・か。俺もそんなとこだな。なんかいろいろ疲れたって言うか、もう人生サボりたいっていうかさ・・・・・・――――目指した通りに写真で成功したのにな。」

「わかります・・・・・・・・・揚げ饅頭って知ってます？」

「へっ？」

「饅頭揚げたやつで、僕地球で初めて食べてみて、凄く美味しいって思ってそれ以来大好きなんですけど、バカやって一気に２０個食べちゃったときはもう2度と見たくなくて・・・・・・あれと同じですよね？」

「いや・・・微妙」

「あれ？あーっ」

ユーノはまたしても分りやすいと思って口にした例が微妙と言われ、拍子抜けた容姿で冬の冷たい川の中に足を入れる。

「いや・・・なんかもっとこう・・・欲も何もなくなって言うか・・・一度失くすとダメだよな」

タクマがそんな事を言ってくると、聞いていたユーノは意外そうな表情を浮かべながら、ほくそ笑み、タクマに近づき言う。

「奥さんも同じこと言ってました。」

「えっ？」

「やっぱり夫婦ですよね♪まぁ僕は、人の欲はそう簡単になくならないと思いますけどね。ある人の受けよりですが。だって僕今でも揚げ饅頭大好きですもん。あの最初に食べた時の感動が忘れられなくて！・・・・・・・・・・ああ、ヤバい！焦げる！」

「最初の感動・・・・・・」

ユーノは焦げそうになるパンツに焦りを覚え、言葉を聞いていたタクマはふと何かを思い出したかのように呟いた。

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

辺りが暗黒の世界になる数時間前の事だ。

完全に夕陽が沈み切れていない午後４時台。

鳥のグリード、アンクは破面魔導虚リリスと向かい合い、リリスは自分を睨み付け警戒心に満ちた様子のアンクを不敵な笑みで見つめていた。

「ふふ」

「お前・・・・・俺に何の用だ？俺達グリードの事を知ってるのか？」

「ええ。人並みほどにね。それで今日はあなたに紹介したい人がいるの」

リリスはそう言うと、唐突にディスプレイを表示させ、砂嵐が広がる画面が鮮明になっていくと、そこに映ってきたのはケーキ作りを再開させたスカリエッティの姿であった。

『やぁ、鳥のグリードのアンク君・・・だったね？』

「なんだ？」

『人と人との出逢いは何かが誕生する前触れでもある』

「はっ？」

『それは一体なにか。そしてその為に私が作るケーキはいったいどれほどの・・・期待で胸が膨らまないかい？』

スカリエッティの言葉を耳にし、まるでチンプンカンプンなアンクに、リリスは改めてスカリエッティの紹介を簡潔に説明した。

「では改めて。こちらは私達破面魔導虚の生みの親にして、失われた世界アルハザードに人類史上初めて足を踏み入れた異形の天才科学者“ジェイル・スカリエッティ”。」

「スカリエッティ・・・・・そうか。分かったぞ。お前か、人間のくせにメダル集めてんのは？」

『そう！実は今日は商談を持ってきた』

「商談？」

アンクは首をかしげながらスカリエッティの持ち出した商談と言う

ものに怪訝そうな様子であった。

また一方で、静まり返った夜の船場付近を歩く二体の怪人、ガメルとバイソンヤミーはライオンメダルの力を手にしてパワーアップしたユーノの攻撃を受け、目を押さえながら辺りを歩いていた。

と言うよりも、ガメルが目の痛みを堪えてバイソンヤミーを引きずっているという方が正確であったが。

「重いなぁ。自分で歩けよ・・・のろまめ！目が痛いよ・・・こんなに痛いのは、ユーノ・スクライアのせいだ！ユーノ・スクライアのやつ・・・ユーノ・スクライアの奴」

ガメルはそう言った後急に立ち止まり、我慢できなくなったのかべそをかいて愛しのメズールの待つ場所へと走っていくのであった。

「うわぁーん！メズール！」

ガメルがいなくなった後、バイソンヤミーはユーノへの怒りを顕著に言葉に発し、フラストレーションを高めていく。

「ユーノ・スクライアのせいだ・・・ユーノ・スクライアのせいだ・・・」

バイソンヤミーは明日、日が開けると同時にユーノに復讐を遂げることを誓うのであった。

そしてまた場面を切り替えて、アンクの方を見てみよう。

アンクはスカリエッティから聞かされた商談と言うものの内容を聞

かされ声に出して確認した。

「メダルの分け前をよこせだと？」

『そう。我々は、君にメダル集めとアンゴルモア集めに必要だと思われる貴重な情報や武器を提供する。その代り君は戦いで得たメダルをリリスを通じて我々に提供する。ふふ・・・単純な取引だよ』

「・・・・・・」

『全部とは言わない。回収した分の、７０パーセントだよ』

「ふざけるな！」

スカリエッティの不病な取引条件に業を煮やしたアンクは右腕を怪人体に変化させると、徐にリリスの方へと近づいて行く。

すると、リリスは不敵な笑みを浮かべて掌から虚弾を発射し、アンクの足元にヒットさせる。

「！」

アンクは足元に出来たクレーターのような跡を見ながらその威力に驚き返り、リリスはそんなアンクに警告する。

「次は外さないわよ」

「お前・・・」

緊迫した状態が続く中、スカリエッティはボウルの中のクリームを

混ぜながらアンクに言う。

『ふふふ。君達グリードは欲望の塊であるが故に、非常に疑い深い。そして君はとりわけ他のグリードよりも強い肉体と完全な存在を求めている。だから一人他のグリードとは違い独自に動いている？そうだろ』

「ち・・・」

『アンク君。どちらが効率的にメダルとアンゴルモアを集められるのか・・・分からない君だと思わないがね。それに、私の作品の実力のほども見て分かったはずだ』

「だったらこっちも聞いてやる。お前・・・スカリエッティだったな。メダルとアンゴルモア集めて、何するつもりだ？」

『ふふ・・・それは・・・・・・・・・・・・・・・秘密だ』

「貴様・・・」

『リリス。今日はここまでにしよう。アンク君。返事は後日改めて聞くよ』

スカリエッティはそう言って、通信を一方的に遮断する。

アンクとの話を終えると、リリスは煙となって周囲に霧散し、跡形もなく消えていく。

残されたアンクは自分の右腕を眺めながらスカリエッティの事を考える。

「・・・・・・」

◇

〈ヨウコＳｉｄｅ〉

そして一夜が明けた。

ユーノに諭されたヨウコはその時の言葉を思い返しながら街中を歩いた。

『そう言う時にかぎって親が勉強しろとか言うから余計にいやで』

「（私・・・ちょっとうるさすぎたな・・・また写真撮って欲しくて、あせりすぎてたし・・・）」

同じ様に、昨夜ユーノと一緒に過ごしたタクマもまた街中を歩きながらユーノの言葉を思い返していた。

『奥さんも同じこと言ってました。』

「（あいつだって、わかってて俺のケツ叩いてたんだよな・・・）」

『最初に食べた時の感動が忘れられなくて！』

「（俺は忘れてたな・・・最初の感動か・・・）」

そんな事を考えながら歩いていた二人は運命か、必然か、ばったりと鉢合わせる。

「タクマ」

「ヨウコ」

お互いに気恥ずかしそうに見つめあう二人。

「ふふ」

ヨウコは笑みを浮かべながらコミュニケーションの手段として、タクマの肩を強く叩き、タクマは思わず声を上げる。

「痛い！」

また一方、とある作業場にてフラストレーションが高まったバイソンヤミーが出現し、怒り心頭な様子で地面に腕を叩きつけ、震動を起こし、物を浮かせて人に当てようとしてきた。

「うおおおおおおおおおお！！！」

「「「うわあああああ！」」」

作業員は飛んで来たモノに当たらないようにそそくさと現場から逃走するが、バイソンヤミーの怒りは決して収まるところを知らない。

「ユーノ・スクライアの奴！」

バイソンヤミーが暴れ始めると、何とかして一夜を過ごしたボロボロ状態のユーノスも反応を確認する。

「！（ヤミーか・・・こんなこきに・・・）」

ユーノスは匍匐前進のごとく体制で移動を始めようとするが、そんなユーノスの事を見付けたユーノに突然声を掛けられた。

「随分いい格好ですね、ユーノス元帥」

「な・・・ユーノ！何しに来た？ヤミーだ。早く行け！」

「そうはいきませんよ。だって、ユーノス元帥ぼろぼろじゃないですか。探したんですよ、完現術の力で霊絡つくって、気配探して。で・・・霊圧が著しく弱まってるからきっと何かあったんじゃないかって。」

「お前・・・そこまでの力を・・・」

ユーノス自身も、ユーノの完現術者としての才能はヤミーとの戦いで知っているつもりだったが、自分が見ていない間に力を伸ばし続ける彼の才能は底と言うもの知らなかった。

「完現術使うのも、結構慣れてきましたし、何より僕は霊力扱うことの方が上手いようなんですよ、一護さん曰く♪と言う訳で治療しますね。その霊力を使って」

ユーノはそう言うと、霊圧を掌に圧縮させると、ユーノスの傷口に手を当て、ユーノスの傷を綺麗さっぱり治癒してやった。

ユーノスもこの回復の速さには心底驚いている様子であった。

「どちらにしたって、今日のパンツじゃ死ねませんからね」

「よく分からんが・・・お前が本当に優秀な完現術者であることはわかった」

「へへ♪どうも。さ、肩に乗ってください。ここはあなたの特等席ですからね」

ユーノがそう言うと、ユーノスは彼の肩に乗り、バイソンヤミーが出現したポイントに向かって空を駆け抜けていった。

「ユーノ・スクライア！」

その頃、バイソンヤミーはユーノの名を叫びながら形振り構わず暴れ続けていた。

超特急で現場へと到着したユーノはバイソンヤミーを見、真剣な表情となる。

「こんなとこにいたのか」

「当たれー！」

バイソンヤミーは地面を叩きつけ、ドラム缶を宙に浮かび上がらせユーノに激突させようとするが、それをユーノスが素早く防御する。

攻撃を回避すると、ユーノスはバイソンヤミーを見ながらそれがガメルの作り出したヤミーだと判断する。

「ガメルのヤミーか。あれは能力を発揮するために自分のメダルを消費するんだ。倒しても大してメダルは落ちないんだ」

「へえ～～グリードにも色々いるんですね」

ユーノスの説明を受けたあと、ユーノは結界印を取出し、力を発動。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身をしながら走り出すユーノ。

バイソンヤミーがすかさず地面を叩きつける。

「ユーノ・スクライア！」

「は！」

ドラム缶を始め、今度はドカンまでもが飛んで来るが、ユーノは軽身なこなしでそれらをすべて回避していく。

その後もバイソンヤミーは何度も何度も重力を操り、ユーノに物を飛ばして攻撃を仕掛けるという戦法を繰り出し、彼を翻弄する。

「相変わらず戦いづらい相手だ。重力を操るのかこいつ・・・」

「気をつけろ。重量系のヤミーは決まって外骨格が硬い。だが切れない訳じゃない。懐に忍び込めばダメージは与えられる」

「了解」

〈Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ〉

ユーノはユーノスのサポートとアドバイスを受けながら、ツインブレイドを生成し、バイソンヤミーの懐に飛び込んで攻撃を仕掛けるが、やはりユーノスの言った通りバイソンヤミーの体はかなりの硬度を秘めていた。

「ほんと・・・こいつ硬い！」

ユーノは何度も斬りかかるが、外骨格の固さがそれをなかなか受け入れず、逆にバイソンヤミーの強靭な破壊力を秘めたパンチをその身に受け飛ばされる。

「ぐあああ！」

「ユーノ！大丈夫か？」

「はい！あ、そうだユーノス元帥！昨日見知らぬ少年からこれが！」

ユーノはそう言うと、防護服の中から昨日謎の少年から貰ったカザリのメダルである、ライオンのコアメダルを見せ、ユーノスは思わず驚愕する。

「何！？」

「なんだかよく分からないですけど、これ取り込んでから僕凄いことになりまして・・・もう一度やってみます！」

そう言いながら、バイソンヤミーの攻撃をジャンプで開始したユーノは距離を取ると、昨日の事を思い出しながら髪の毛を光らせるイ

メージを浮かべる。

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｆｌａｓｈｅｒ〉

すると、ユーノの髪の毛が眩いばかりの光を発し、バイソンヤミーは強烈な光にまたしても目をやられる。

「まぶしい！！！！目が！！！！」

「やっぱり光に弱いらしいな。」

バイソンヤミーの弱点を完全に把握したユーノと、何故ライオンのコアメダルをユーノが持っているのか理解に苦しむユーノス。

「ユーノ！お前・・・そのメダルどうしたって?!」

「ですから、見知らぬ少年からのプレゼントですよ」

「プレゼント?!」

思わず怪訝そうな顔をするユーノスと、飄々した態度のユーノ。

「へへ♪さてと、そろそろ決めないとマズイでしょ」

ユーノは怯んだバイソンヤミーと向かい合うと、完現術で地面の魂を使役させ、空高くジャンプすると、髪の毛から強い光を発しながらバイソンヤミーに飛び込んでいく。

「はっ！」

バイソンヤミーは光の所為で逃げることが出来なくなっていた。

ユーノはツインブレイドを構えると、その逃げられない様子のバイソンヤミーに止めの一撃を加える。

「セイヤー！」

バイソンヤミーはユーノの攻撃を受けると爆発を起こし、爆風が晴れると出て来たのはたった一枚だけのセルメダルだった。

ユーノはセルメダルを手に取ると、ユーノに目を向けながら言う。

「確かにセルメダル一枚だけですね・・・」

「ふう」

ユーノスはひとまず安どのため息をつくのであった。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

バイソンヤミーとの戦いを終え、すっかり朝帰りとなってしまったユーノが六課に戻ると、やはりとばかりになのはとヴィヴィオに厳しい御叱りを受ける羽目となってしまい、ユーノは現在なのはに首を絞められていた。

「いたたたたた！！！！！痛いよもう！！！！」

「もうじゃない！！！出て行ったっきりどうして連絡をしないの！

！！！心配したんだから！！！大体ヤミーと闘ってるならそう言ってくればいいのにもう！！！！」

「そうだよ！もうパパったら・・・許さないんだから！！」

「擽っちゃうようヴィヴィオ♪」

なのはとヴィヴィオは悪意に満ちた笑みを浮かべながらユーノの靴を脱がせ、バインドで固定したユーノの足の裏をくすぐり始め、ユーノは涙目になりながら笑い地獄に苦しんだ。

「ははははははは！！！！！！やめて止めて！！！！！ごめんごめん！！！！あはははははははは！！！！！」

そんな哀れにも実に微笑ましい様子の三人を眺めながらほくそ笑む前線メンバー。

同席していたヨウコとタクマもはにかんだ様子だった。

「へへ。それにしても良かったやないか。タクマくんがまた写真やる気になってくれて」

「ありがとう。迷惑かけてごめんね」

ヨウコはそう言うと、はやてに昨日ユーノが渡してくれたサンダルを返還する。

「これ」

「はい。」

タクマは気恥ずかしそうにヨウコに言う。

「いやぁ・・・まずはカメラを買うところからだからさ・・・ね。先は長いけど」

すると、ヨウコは徐に鞄の中からあるものを取り出す。

タクマは取り出されたものを見て目を疑う。

なんと、それはあの日タクマが振り払ったはずの愛用のカメラだったのだから。

「あれっ？あれっ！？これ・・・これ、これ俺の？なんで？」

「タクマが質屋に持ってったとき直ぐ買い戻したの。いつかこういう日が来てほしくて。借金しちゃったけどね」

「ヨウコ・・・」

ヨウコの自分への想いに思わず胸が締め付けられるタクマと、そんな妻の愛を前にして、感動の言葉を漏らし拍手をする前線メンバー。

「わっは！ヨウコさん素敵です！！！」

「本当！タクマさん、恩返しなきゃね♪」

シャマルがタクマの肩を叩いてそう言うと、ヨウコは首を横に振りながら口にした。

「ううん。私も悪かったから。気づけたのは、ユーノさんのお陰」

「俺もだ。ありがとな」

それを聞くと、擽り地獄から解放されたユーノは呆気にとられたような顔となり、自分が何をしたのかを考える。

「あ・・・いやぁ・・・僕なんかしましたってけ?あっ、パンツと揚げ饅頭の話?揚げ饅頭?」

「アハハ。なんやねんそれ?兎に角、ユーノくんのお手柄や!」

「そうだよ。流石はユーノ君♪さっきはくすぐっちゃってごめんね。今度はちゃんと、ご褒美あげちゃおうかな・・・」

頬を染めながらユーノに近づくなのはは、徐に目を瞑りキスを求める態度をとる。

「え・・・///」

ユーノもこの突然のなのはの態度には顔を赤く染め、間近で窺っていた前線メンバー全員が食い入るように二人のキスを待ち望んでいた。

「あ!なのはさん!!」

「バカ!見るんじゃないわよ!」

「パパ!ママ!早く!」

「ユーノ君～～～？」

なのはは目を瞑りながらまだかまだかとキスをユーノに催促し、辺りをきょろきょろと見渡しながら全員に行けとばかりに目を向けられたユーノは深呼吸をして、徐に言う。

「う・・・・・／／／／／／仕方ないなもう～～～～～？」

ユーノはなのはの肩をしっかりつかむと、自分も目を瞑りなのはの唇にゆっくりと自分の口を近づけていき、見ていたヨウコはタクマに撮影を促す。

「た、タクマ！決定写真！」

「あ！そうだ！！」

復帰第一作として久しぶりにカメラを構えるタクマ。

ピントを合わせて二人のキスの瞬間をとらえようとするが、直後その写真は思わぬものによって邪魔をされてしまった。

「ユーノ様！！！」

「ぐっほ！！」

「ふぇ？」

なのはが思わずその声に反応して目を開けると、ユーノはマリアの妨害を受けてその場に倒れ込み、マリアは嫉妬に満ちた様子でユーノの首に手を掛ける。

「ユーノ様！！！！私をほっといてｋｉｓｓなどとは許しませぬわ！！！！」

「あああああああ！！！！！止めて！！！！！！！！首が折れる！！！！」

この瞬間、魔王なのはが覚醒した。

「マ・リ・ア・さ・ん！！！！！！！！！！！！」

「うわああ！！ママが噴火した！！」

「ヴィヴィオ！ここは危ないから離れて！」

フェイトはヴィヴィオを素早く避難させ、スバル達も身の危険を感じてその場から離れると、魔王なのはと死神マリアの女の争いが勃発する。

「ごらあああ小鳥遊！！！！私のユーノ君に触るんじゃねぇえええ！！！！！」

「てめぇこそ！！！！！私のユーノ様に図々しいんだよ！！！！！！」

「ひえええええええ！！！！！助けて！！！！！！！！！」

とんだとばっちりを受けることになってしまったユーノに、悪友のクロノやユーノス達は哀れみに満ちた様子でこう言って来た。

「哀れ元・フェレットもどきよ・・・僕達は遠くからお前の冥福を祈っているよ」

「短い間だったが、世話になったぞユーノ」

「こらあああああ!!!勝手に殺すな!!!!!!!!!!!」

この後ユーノは二人の争いに巻き込まれ、それはそれは実に悲しい姿となってしまったことは言うまでもないのだが、恋次はふと喧嘩に巻き込まれるユーノをどこか複雑な心境で眺めながら心の中でこう呟いた。

「（欲望・・・か。やっぱり人間には、欲望ってものが必要なんだな。だからグリード達もくいっぱぐれることはねぇが。だけどあいつにはそれが――――――）」

欲望・・・一口にそれは片付けることの出来ない生き物が必ず持っている筈の生存本能の一部。

かのイギリスの劇作家、オスカー・ワイルドはこう言いました。

“若い人たちは誠実になろうと欲するが、そうはできない。老いたる人たちは不誠実になろうとするが、そうはできない”と。

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚

サボリと無欲と休憩中（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、完現術者を紹介していくよ♪」

「完現術者は、その名の通り完現術を扱う人間の事。魂を引き出し自らの力とするこれを自在に使えるのは、現時点では僕以外に・・・師匠である一護さん。その妻の織姫さん。そして、一護さんの親友の茶渡さん。」

一「にしてもお前はホント覚えがいいというか、何と言うか・・・ヤミーとの戦いを通してあれだけの完現術を使いこなせるようになるとは。魔法もいくらかは取り戻したんだろ？」

ユ「まぁ確かに使えるようにはなりましたが、所詮は魔力素使役。リンカーコアがあるって訳じゃないですからね」

織「これぱっかりはやっぱり晩翠さんがいないとダメですかね」

コ「あいつ、今頃何してんだろうな」

ユ「そうですね・・・きっとクシャナーダの野郎に食われてギャーギャー叫んでるはずですよ。あいつら本当に容赦なく人喰いますから。僕だって何度脳髄を噛み千切られたかわかったものじゃないですから・・・あああ！！！思い出すだけで失禁しそう！！」

一「あのな・・・だったら言わなきゃいいだろ・・・て言うか聞いてるこっちも鳥肌が立つわ！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

この前の続き。

ユーノへの欲求不満が溜まり、精神崩壊が進むなのはと浦太郎。

恋次達はそんな彼らに一喝する。

恋「一体何がしたいんだよてめぇらは！！！結局ただのユーノへの不満じゃねぇか！！」

鬼「そんなに不満があるならスターライトでもクラーケントルネードでもして全て壊せばいいだろうが！その後人類史上最悪の犯罪者にでもなって店長に見放されればいい！」

ル「分かったらさっさとロフトのカーテンのシャーの奴のコーナーにでも行って頭を冷やしてくるがいい。」

シ「大体、なのはもなのはだ。ユーノス元帥殿にやきもちを焼くなど、みっともないぞ。女なら兎も角、あれは男なんだ。」

ア「それにユーノに取っても、良い傾向じゃねぇかよ。いままで淫獣淫獣って巷じゃ言われていたけど、ユーノス元帥の登場でそれがシフトすることだってあるじゃねぇか」

リ「おまけに、動物愛護でユーノさんの好感度が更にアップ！前みたいに何の理由もなく叩かれることはなくなりますです！」

すると、それを聞いた直後、浦太郎が劇画チックな表情でこう言う。

浦「ウッセーーー！！！てめぇらに何が分かるんだよ！！！！じゃあ訊くけど、てめぇら知ってるか！！！！フェレットってさ、アニメじゃさらりと可愛く描かれてるけどさ、リアルな話肛門脇に肛門腺ってのがあるから、万が一的に襲われたり興奮した時はスカンクみたいに臭い液を飛ばすんだぞ！！！すっげークッセーんだぞ！！エラいことになってるんだぞ！！！」

な「そ、そんなものが万が一服にでも着いたら・・・ユーノ君が！！！！」

絶望に満ちた表情の二人。

聞いていた恋次達は呆れかえる。

吉「一体何の話をしているんだ君たちは？」

浦「あの汚ねーくせー液を出すような体を店長の肩にスリスリスリ擦り付けてると思ったら・・・・・僕は・・・僕は・・・あああああああああ！！！！」

そう言うと、なのはと浦太郎はため息をついて言う。

な「羨ましいですよね～～～」

浦「いやホント」

恋「おいヴィータ。偶には二人でこいつボコボコにしないか？」

ヴィ「よし。いいぜ」

二人は武器を持ち、恐怖に怯える二人に蛇尾丸とグラーフアイゼンをお見舞いする。

な・浦「ぎゃあああああああああ！！！」

恋・ヴィ「てめぇらは一生そこで眠ってろ！！！！！」

終わり。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

カ「新しい展開が期待できますよ。」

ユーノス「何かを破壊したい。それも立派な欲望だ」

カ「人は、その人生を全うするまで何者でもありません」

ユ「これで銀さんの完現術コンボでしょ！」

第１５０話　爆発と悪夢と白夜叉コンボ

登場人物

タクマ・コモン

声：渋川清彦

ミッドチルダに家を構える元・プロカメラマン。はやての住居の隣に住んでいて、八神家とは親交がある模様。写真で賞を取って仕事と収入が安定した事を気に、写真を撮ることから遠ざかり毎日放蕩の生活を送る様になった。本人曰く「休憩中」とのことで、ユーノに諭されたことでもう一度写真家としての活動を始める決心をした。

ヨウコ・コモン

声：　安藤玉恵

タクマの妻で、かなりの恐妻。怒ると手が付けられなくなり、平気でその辺にあるものを投げつける癖がある。写真家として活動をしていたころのタクマに戻って欲しいという焦燥から、タクマに対してきつく当たっていたところを、ユーノの言葉で考えを改め、その後タクマと和解し、タクマが売り払ったカメラを返す。

登場ヤミー

バイソンヤミー

声：高塚正也

身長　２３５？　体重　１８７？

特色／力：怪力、周囲に激しい震動を起こす

人間が物をぶつけられる様を見て楽しみたい・・・と言う欲求に駆られたガメルによって生み出された。拳を叩き付けることで、周囲の地面や建物を激しく震動させることが出来、更に硬い外骨格で覆われた拳と爪先が怪力と合わさることで、凄まじい破壊力を生み出

す。ガメルと共に圧倒的なパワーでユーノを追い詰めた。しかし、ライオンコアを防護服に取り込み、その魂を引き出したユーノの思わぬ反撃により一時撤退を強いられてしまう。再び暴れ始めたものの、ライオンメダルを手に入れたユーノの攻撃によって撃破されてしまう。

爆弾と悪夢と白夜叉コンボ（前書き）

銀「美しく最期を飾り付ける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねぇか」

爆弾と悪夢と白夜叉コンボ

＞ｉ３００３２―７０９＜

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

９５０年前に作られ、１５０年前に封印された、人の欲望から作られたメダルの怪人・グリードが復活。

持っていたはずのそれぞれ9枚のコアメダル

そのすべてを手に入れるのは、グリードか・・・ユーノか・・・あるいは人の欲望か

その先に待つものは果たして・・・

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚

〈ユーノSide〉

みなさんは、なんでこんな季節はずれな時期なのにクリスマスの話を書くのかと、疑問に感じた事は無いだろうか？

ま、多分この小説の作者は悲観的に考えているから、「そんなこと聞いてどうなる？」と思いつつ、ちょっとは色々と気にしている節だろう。

さて、ユーノ・スクライアが完現術の力を手にし、着実に一流の完現術者としての道を歩み始める中、１２月のくれも近づいて来・・・気が付いたら冬のビックイベントの一つ、クリスマスまであと５日

となっていた。

ミッドチルダにはそう言った風習は勿論ないのだが、地球出身であるなのはやはやて達の計らいもあって、スバル達他の前線メンバーもこのクリスマスと言うイベントこころから待ち望んでおり、カレンダーを気にしながらスバルは胸躍らせ口にする。

「12月20日・・・クリスマスまであと5日ですね！」

「あ、そうか。もうそんな時期か・・・翠屋は今年も地獄の忙しさだろうね。」

ユーノがなのはの両親が経営する喫茶翠屋の例年のクリスマスの地獄の忙しさを気にしてそう言うと、なのはも笑顔で首を振る。

「だね。まぁ、バイトの人達もいつも以上に雇うし、お父さんたちもそこまで無理しないと思うけどね」

「ねぇママ。今年のクリスマスは桃子おばあちゃんの作ったクリスマスケーキにするの？それともなのはママが作ったケーキ？」

「そうだな・・・折角こんなに大勢いる訳だし、クリスマスパーティーは一護さん達も呼ぶわけだし、どっちもってことで♪」

「うん！それがいいよ！！ああ～～だったらすごい事になりそうだな！ほら、ケーキって言えばアコース査察官張り切りそうだし！」

「あはは。確かに言えてるねそれは。はやてもそう思うだろ？」

ユーノがそう言うと、コーヒーを飲む傍ら書類に目を通していたはは

やては徐に手を止め、どこか物思いにふけったような顔を浮かべる。

「そうやね。あ・・・そう言えばクリスマスって言えば、もう１５年になるわな・・・・・・銀色のサンタクロースとの出逢いから――――」

はやてがそんな事を口にすると、ヴォルケンリッター一同は思わず複雑な顔となる。

「はやて・・・」

「はやてちゃん・・・」

一方で恋次は怪訝そうな顔を浮かべルキア達に問いかける。

「何の話だ？」

「忘れか恋次。去年の冬、ユーノ殿が話してくれた闇の書事件のときの・・・」

「初代リィンフォースの・・・」

「あ。あれか」

去年の冬の事。

ユーノは毎年クリスマスが近づくたびに物思いにふけった顔を浮かべる回数が増えるはやてに疑問に思った恋次に彼女が魔導師となる切っ掛けとなった事件、闇の書事件の事を話してやり、その際彼女を残してシュベルトクロイツを残していった闇の書の管制プログラ

ム、初代リィンフォースのことも一緒に伝えた。

恋次もその話を思い出すと、この場に居た前線メンバーと一緒に何処か複雑な顔を浮かべ、はやては窓の外を眺めながらため息がてら口にする。

「ほんまに私のとこに来たサンタクロースは変わり者やったなた。せやけど、沢山ものぎょうさんもらったものや・・・・・・」

「主はやて・・・」

シグナムはそんなはやての言葉に胸が締め付けらるような感覚に陥るが、その直後はやては全員が想像していたものとは違う答えを口にした。

「・・・・・グレアムおじさん。元気にしてるやろうか」

初代リィンフォース・・・ではなくそっちかいとばかりに盛大にこけるユーノ達。

フォワードメンバーやヴォルケンリッター一同は思わず突っ込みを入れる。

「「「「「アレッ!?そっち!!?」」」」」

「「「「「確かに銀髪ですけど!!」」」」」

「雰囲気台無しだなオイ・・・」

「ホントだね・・・」

鬼太郎も浦太郎も今までの雰囲気を簡単に崩壊させたはやての発言にはあきれてものも言えないのであった。

と、その時ヴァイスとグリフィスが大きな箱を抱えてユーノの元へと運んできた。

「ユーノ先生。御届け物が届いていますよ、地球から」

「地球から？」

二人は全員が注目する中、届けられた箱をユーノの前えと置き、ユーノは早速箱の中身を確認しようとテープをはがし始める。

なのは達は届けられたユーノのそれが気になったらしく、食い入るように見つめる。

「なんだまた随分デカいな。」

「差出人は・・・・・・あ！柊沢さんだ♪」

ユーノは差出人であるイギリスに住む友人、柊沢エリオルの名前を確認し、笑顔を浮かべる。

「何送って来たんだろうね？」

「早く開けてみましょう」

全員に促されたユーノは丁寧に箱の中身を取出し、包みをゆっくりとはずしていくと、出て来たのは教科書と思われるいくつかの書物

と、少し古びた感じの木の棒のような杖であった。

「お。これはこれは！珍しいな。ホグワーツの生徒が実際に使ってる魔法の教科書と杖だ。」

「ホグワーツ？それに魔法の杖って・・・！？」

「あれ？なのは知らなかった。地球にも、魔法ってものはあるんだよ。勿論僕らが使ってるプログラムのものとは違う、自然を理とする魔法。その発祥の地が柊沢さんとグレアム提督の住んでるイギリスって訳。しかも、イギリスには今でも魔法使いが一般人に隠れて生活していて、その為の学校だってあるんだ」

ユーノの説明を受けた後、地球出身であるなのはやはやては勿論、フェイト達ミッドチルダ出身の魔導師達も意外そうな顔を浮かべた。

「そ、そうなんだ・・・」

「と言うことは、こいつはその魔法の杖で、こっちはその教科書か・・・」

「手紙が同封されている。なになに・・・『もうじきクリスマスと言うことで、私が臨時教諭を務めていますホグワーツ魔法魔術学校から頂いた品物を友人であり、よき理解者でもあるあなたに送ります。何かの助けになれば幸いです。それでは、早いですがメリークリスマス。』・・・だって♪」

「へぇ～良い人ですね、柊沢さんって！」

「何だか感動して涙出て来ちゃうわね」

すると、箱の中身を漁っていた鬼太郎がもう一つ大きな包みによって姿を隠していたあるものを取り出した。

「このマントは何だ？」

ユーノは鬼太郎が手にしたマントを見た途端、興味津々な眼差しでそれを手に取り言う。

「あ・これって確か非常に珍しい透明マントじゃないかな♪」

「透明マント？」

「へへ。着てみればその言葉の意味がよく分かるよ♪」

ユーノは透明マントを近くに立っていた愛娘のヴィヴィオにかぶせてやった。

すると、透明マントの効果でヴィヴィオの体が透明となって無くなり、思わずその光景になのは達は目を疑い、ヴィヴィオは興奮した。

「わ！すごーい！本当に透明になってる！！」

「本当だ！ヴィヴィオの体がなくなってます！」

「これがあっちの世界の魔法・・・！」

「何でもアリなんだね・・・向こうは・・・」

「地球人だけど、地球の事・・・全然知らなかった。ビックリ」

なのははここでまた一つ、自分が如何に何も知らない人間であるかと言うことを思い知り、そして新たな発見に胸躍らせるのであった。

◇

〈ヴィヴィオＳｉｄｅ〉

１２月２３日　午後１２時過ぎ。

地球で言うクリスマスまであと二日、より正確に言えば天皇誕生日の今日、シフトで休暇中の身であったユーノはエリオと、そしてヴィヴィオを連れて第７管理世界「リヴァプール」を訪れていた。

ユーノ達がこの世界を訪れたのは他でもない。

ここは確認されている世界の中でもイベントに熱い世界であると同時に、その申しモノとなる食材、商品が安く購入できるうってつけの穴場であり、ユーノも時折利用しているのである。

そして、今回はクリスマス会が近いということもあって、クリスマスパーティー用のケーキを買いにやってきたのだ。

「う～～～ん～～～」

ヴィヴィオはショーウィンドーの中に納まっている特製のケーキと睨みあいながら、どれを購入するかに関して真剣に悩んでいると、エリオはため息がてら言葉をかける。

「ねぇヴィヴィオ。早くしてね」

「ちょっと待ってよ。ここはもっと慎重に選ばないと・・・！」

「やれやれ。ずっとこの調子じゃないか・・・」

エリオ自身も男だ。

女性が買い物に関して凄く時間をかけるということは知っているし、実際にキャロと何度か買い物に行ったときもそうだったので、慣れてはいたものの、やはり男だ。

こう言う待ち時間はどうも苦手な様子であった。

そんなエリオを見かけた別の買い出しで席を外していたユーノが戻ってくる。

「あれ？まだ選んでたんだ。」

「はい。わざわざ遠出して買いに来たらこれです。何とかなりませんか？」

「まぁいいじゃないか。何にでも真剣になれるところは感心じゃないかな。でも、あまり時間もかけられないしな。ヴィヴィオ、そんなに悩むんなら両方買おうか？」

「え！でも・・・それは流石に悪いよ・・・！」

ユーノの提案を耳にしたヴィヴィオは罰の悪そうな顔で遠慮した様子を見せるが、ユーノはそんな娘に笑顔を浮かべ言う。

「いいって。ケーキは多い事に越したことはないし、何しろうちは人数が人数だし・・・ね♪」

「うん。わかった。じゃあ、両方買います！」

ユーノの言葉を快く聞き入れ、ヴィヴィオは店員に満面の笑みでその事を伝えた。

だがそんなユーノ達の知らないところで今、この世界の人々の平和を脅かし、恐怖を齎そうとする悪魔が密かに活動を始めていた。

ユーノ達が現在買い物をしているケーキ屋はとある駅の地下街に位置しているのだが、その駅のプラットフォームに人々は気づいていない様子であるが、爆弾がいくつも仕掛けられていた。

その爆弾を仕掛けたとするちょび髭の男は厚手のコートと帽子で容姿を隠しながらトイレへと駆け込むと、ノートに書かれた予定時刻を確認し、徐に時刻を確認し出した。

只今の時刻は、１２時５９分。

「・・・・・・」

そんな男の危険な行動など知る由もないユーノ達はケーキを購入し終え、今まさに六課へと戻り始めていた。

ヴィヴィオは落とさないように二つのケーキを手に抱え、御満悦の様子。

ユーノとエリオも互いに笑顔を向け、ヴィヴィオが喜んでいること

に満足する。

「さぁて、ケーキも買ったし、買い忘れは無しかな♪」

「うん！さ、早く帰って明日の準備に取り掛かろう。ママ達今からすっごく張り切ってるんだから！」

「それは楽しみだな♪なのはの作る料理はどれも舌が蕩けるぐらい美味しいからな♪」

「ユーノ先生は本当になのはさんの事べた褒めですね。」

「だって本当の事だもん♪ね、ヴィヴィオ」

「確かに、なのはママの料理はどれもおいしいからね♪」

そんな談笑をしながら駅の外へと向かうユーノ達。

しかしその間にも時間は秒単位で刻まれていき、時計の時刻が１３時００分ちょうどを表示させると、爆弾を仕掛けた男は鼻で笑い。

「・・・ふん・・・」

徐に爆弾の起爆スイッチを押した。

「「「！」」」

その瞬間、駅全体で激しい爆音と震動が発生し、ユーノ達や他の利用者たちはその事に気づき、足を止めた。

「な、何でしょう・・・」

「地震・・・？！」

エリオやキャロはそう感じていたらしいが、ユーノは何かに取りつかれたような表情を浮かべると、一目散にその場から駆け出して行った。

「く！」

「ユーノ先生！」

「パパ！どうしたの！？」

急いでユーノの後を追って走り出す二人。

そして、ユーノ達三人が階段を上った先に広がってきた光景は目を疑うような悲惨なものであった。

「これは・・・！」

「あ！」

彼らが目の当たりにしたのは、爆弾が爆発したことで全身血塗れとなってその場に倒れる人々と、無残にも破壊された駅構内の様子、立ち込める黒い煙であった。

ヴィヴィオは口の中へと入ってくる煙に思わず咽た。

「げっほ！げっほ！これって・・・事故・・・」

「ちがう。さっきの音は紛れもなく爆弾だ。理由か分からないけど、仕掛けられた爆弾が爆発したんだ！」

「え！爆弾・・・！」

その様子は駅の外の方で見ていた一般市民にも披露され、人々は突然のこの事態に騒然としながらも、黒い煙が立ち込める駅を眺める。

「ななな何だ！何の爆発だ！？」

「大変だこりゃ・・・・・・！」

「もしもし！１１９番！駅で爆発があってね！大変だよ！大ごとだよ！大惨事だよ！」

パニックに陥りながら管理局員にその旨を伝える一般市民を横切る形で、その爆弾魔は何事も無かったかのように通り過ぎて行った。

やがて、救急車が到着し、管理世界の一大事と言うことがあって管理局員も多数ミッドチルダから派遣され、ユーノの要請を受けたはやてを始めとする前線メンバー数名が事故現場へとやって来た。

なのは達は傷だらけとなって搬送されていく人々に胸が痛む中、爆発したその現場へと向かって行き、局員の一人が彼女たちの姿を発見し、敬礼。

「あ！ご苦労様です」

「状況はどうなっていますか？」

「は！爆発物が仕掛けられていたようです。死傷者数不明。現在のところ、怪我をした方々を病院へと搬送中です」

フェイトはその事を聞いた後、もう一度辺りを見渡した。

そして、なのは達と一緒に顔を歪めて口にする。

「ひどい・・・どうしてこんな・・・」

するとそのとき、なのは達の方へ待機していたエリオがヴィヴィオを連れて走ってきた。

「ママ！」

「あ。ヴィヴィオ。エリオも無事だね」

「はい」

なのはは一先ずヴィヴィオとエリオが無事であることに安堵の顔を浮かべるが、ユーノスは直ぐにユーノのことを尋ねる。

「ユーノはどうした？」

「怪我をした人の手当てをしています。」

エリオは後ろの方に目を向け、そこで治癒魔法と併用して霊力治癒も行っているユーノの姿をなのはたちに見せる。

「そうなんだ。でも救急隊も到着したし、そろそろいいと思うな。

ユーノ、もうその辺でいいよ。救急隊も来たって言うし」

フェイトは一旦そこでユーノに手を止めるようにと促すが、ユーノは手を止めることなく治療を続ける傍ら返事を返す。

「今動かせばこの患者は確実に死ぬ。それでいいんなら、力づくで僕をここから退かすことだ」

「な・・・わ、分かった！」

フェイトはその言葉を聞き、ユーノの治療を続行させ、ティアナは真剣な表情を浮かべてはやてに指示を仰いだ。

「八神部隊長、指示を」

「よし。シャマルとユーノス元帥はユーノアドバイザーと共に他の患者の手当てを。残りのメンバーも協力してな。それと鑑識を現場へ。周辺の舞台と協力して２０キロ圏内を封鎖して検問。手の空いたものから随時、聞き込みを開始。容疑者を必ず挙げるんや！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

はやての指示を受けた前線メンバーは迅速に救助活動と現場検証を開始。

シャマルや小鳥遊、ユーノスなどのバックアップ能力に長ける者達は負傷者の手当てを最優先に行動し、ユーノも自分のスペックをフルに使って治療を続けた。

「もう大丈夫よ」

「こちらにお願いします」

シャマルもいた甲斐あってか、怪我人の手当ては着実かつ迅速に行われ、神経を研ぎ澄ませて緊張の糸を張りつめていたユーノの顔に若干の安堵の表情が浮かぶ。

「ふう。これで何とか・・・・・」

だがその時、安どの顔を浮かべるユーノの耳に忌まわしき記憶を掻き雀る時限爆弾独特の音が聞こえてきた。

「！」

その音とを耳した瞬間ユーノの表情が凍りつき、近くにいたシャマルや小鳥遊は怪訝そうな顔を浮かべる。

「ユーノ君？」

「どうしましたか、顔色がお悪いようですが」

「離れた方がいい・・・」

「「え」」

「みんな！もっと離れて！早く！」

血相を変えて現場から離れることを促すユーノ。

と、その瞬間不意に爆弾が爆発し、周囲に広い範囲で水が飛んで来

た。

「「「「「うわああ！！」」」」」

ユーノはシャマルと小鳥遊を抱えた状態で床に伏せた後、体にかかった水に思わず拍子抜けた様子となる。

「水？・・・って、シャマルさん！小鳥遊さんも大丈夫！？」

「う、うん。大丈夫よ。でもなんなのあの爆発・・・最初のとはまた違う・・・」

ユーノも今回の爆発には確かな違和感を感じていた。

すると、その時ユーノが辺りを見渡していた時、肩に不気味な人形を乗せて自分を見つめる不審な男を発見した。

「！？」

ユーノがその男の事を凝視していると、男の手にはなんとタコの絵柄が書かれたセルメダルが握られており、それを見たユーノは度胆をぬく。

男は人形を乗せたまま、セルメダルを懐へとしまい、ユーノの前から姿を消しそうとする。

ユーノはその男の事が気にかかり、追いかけようとするのだが、直後ユーノスが放ったバッタカンが飛んできて、ユーノに伝える。

『ユーノ、近くにヤミーがいる。』

「えっ？」

『タカに追わせるから、お前はそっちに行け。ここは俺達でどうにかする』

ユーノスは他の患者の治療で手が離せなかったため、結界印をタカに持たせてそれをユーノに渡すと、頭上に浮かんだタカカンがヤミーの現れた場所へとユーノを誘導しようとするが、ユーノ自身は躊躇っている様子であった。

「で、ですが・・・」

すると、見かねた小鳥遊とシャマルがユーノのケツを叩く。

「ユーノ様。行ってください！」

「急いで！ヤミーはあなたでないと倒せないのよ！さぁ、早く！」

「わ、分かりました！」

ユーノは二人の言葉を聞くと、あとの処理を任せて全身水浸しになりながらタカカンの後を追って走り出した。

ユーノが駆け抜けていく様子は、しっかりとあの不気味な人形を肩に乗せている男によって観察されていた。

ユーノは結界印を握りしめながら、タカカンの飛んでいくあとを追って、橋の上へとやって来た。

と、その時ユーノの目の前からヤミーと思われる不審な背びれがサメのような動き方でユーノへと近づいて来た。

「！」

思わず身構えるユーノ。

そして唐突に地面の中からサメの容姿をしたサメヤミーが飛び出し、ユーノに襲い掛かってきた。

ユーノはサメヤミーの襲撃を回避するが、サメヤミーはその後、再び地面の中へと潜り、素早い動きで移動を続ける。

「ヤミー？」

これまで幾度となく色んなヤミーと闘ってきたユーノだが、そのすべては固有能力が属性ごとに違っており、なかなか勝手の利くようなものではなかった。

だがそれでもユーノは戦わずにはいられず、結界印を解放して力を発現させた。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

転身を完了させたユーノは地面の中を海の中を泳ぐようにすばやく移動するサメヤミーの背びれに飛びついた。

「待て！」

サメヤミーはユーノに背びれを掴まれても尚、素早い動きでユーノを引きずって行き、ユーノも負けじと背びれを掴み続ける。

「待つんだ！」

しかしサメヤミーも意地でユーノを振り払い、ユーノは素早い動きを地面の中で八期いするサメヤミーに手を焼いた。

「すばしっこいな」

するとその瞬間、サメヤミーが地面から飛び出し、爆弾と思われる丸い砲弾をユーノ目掛けて発射した。

「ぐあああああ！」

サムヤミーの放った水爆弾をまともに受けたユーノはずぶ濡れとなりながら、先ほどの二度目の爆発とこの攻撃が非常に酷似していることに驚いた。

「ぐ・・・って、これって・・・似てる」

と、隙を見せた瞬間サメヤミーが奇襲を仕掛けて地面の中より出現。

ユーノは攻撃を躱すとサメヤミーと交戦を始め、攻防の末サメヤミーはセルメダル5枚を体から落とし、脱兎のごとく勢いで地面の中へともぐりこみ素早い泳ぎで逃走。

「ああ、待てっ！」

追いかけようとするユーノだったが、その時には既にサメヤミー忽然と姿を消してしまい、ユーノは拳を強く握りしめながら悔しそうな顔を浮かべた。

「ああっ・・・逃げられた！」

ユーノは仕方なく変身を解除すると、落ちてあったセルメダル５枚を回収し、なのは立の元へと戻ることにした。

やがて一通りの事が片付き、機動六課へと戻って来たユーノは申し訳なさそうな顔でユーノスにその事を伝えると、ユーノも目を瞑ってそれを聞き入れた。

「そうか・・・取り逃がしたか」

「すみません。」

いつもながら責任感が強いユーノは自分の失敗をこれでもかと許さない性分だ。

なのははそんなユーノに近づき柔かい笑みを浮かべて彼を励ます。

「気にすることないよ、ユーノ君。元気出して」

「ありがとう・・・」

そして、ユーノスはユーノの肩に乗ると、徐に今回のヤミーの特徴から誰が作ったのかを推測した。

「で、その逃げたヤミーだが。メズールのに間違いない」

「メズールって・・・あの巣を作った？」

「ああ。巣の中で、自分を生んだ人間の欲望を食らって成長する。今度も一匹だって事は無いだろう。兎に角今は先ずの巣を探すことからだ」

「巣を潰さない限り、ヤミーはどんどん出てくるって訳か。」

「やれやれ。爆弾魔と言い、ヤミーと言い、なんか手がかりはないものか・・・」

全員が困惑した顔で腕組みをしながら唸り声を上げる。

すると直後、ユーノは同じように真剣に考えていた時、ある事を思い出した。

「あ、そうだ！」

「何か分かったの、店長？」

「いやね・・・ちょっと気になることがあった」

「なんだ？」

ユーノスがユーノの肩で気になったことに関して尋ねると、ユーノは徐に口にし始めた。

「ヤミーの起こす爆発と、二度目の駅の爆発が似てたんです。」

「そう言えば二度目は何か変でしたよね・・・水しぶきが飛んで来たっていうか・・・そんな感じで」

同じ現場にいたマリアもユーノに便乗してそう言うと、聞いていた考えた末、スバルは真剣な表情を浮かべてユーノスに尋ねた。

「ユーノス元帥。ヤミーが喰らう欲望は、物とか食べ物とか、欲しがる気持ちだけなんでしょうか？例えば・・・爆弾仕掛けるようなこととか」

その質問を受けたユーノスは、確信にも似た様子で断言する。

「ああ。“何かを破壊したい”・・・・・・それも立派な欲望だ」

「・・・・・・」

ユーノはその言葉を聞かされると、思わず険しい表情を浮かべ、何時にも況して拳を強く握りしめる。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

では、今回サメヤミーを仕掛けた張本人であるグリードの一体、メズールは何をしているのかと言えば、他の仲間たちと一緒に酒場を塒に適当に時間を過ごしていた。

具体的には、ウヴァはゴルフクラブを手に取り怪人体の状態でふらふらと歩きまわり、メズールとガメルは人間体の状態であやとりを行っていた。

するとそのとき、メズールは自分の仕掛けたヤミーがセルメダルを稼いで戻って来たことに気づき笑みを浮かべる。

「来たわ」

サメヤミーは地面だけでなく壁などのようなものでさえ何の事無く泳いでいき、その背びれを見せながらメズールの元へと近づいて行く。

「おかえり、坊や。さぁ、みんなでいただきましょう」

メズールとガメルは立ち上がり、本来の姿へと戻ると、姿を見せたサメヤミーを見つめ、サメヤミーは身体全てをセルメダルへと還元させる。

ガメルは早速還元された大量のセルメダルを鷲掴みにして、しゃがんだ状態で口の中へと放り込んだ。

「いただきまーす」

セルメダルを吸収したガメルの体は白い光のようなものを発し、満たされる欲望に大いに喜び大きく伸びをする。

「う〜ん、気持ちいい」

「そう。よかったわね」

ガメルにとっては母親のような存在であるメズールも満足した様子であったが、直後彼女はその場に居ないカザリの事が気にかかりウ

ヴァに尋ねる。

「カザリは？」

「さぁ。ふらっと出てったきりだ。あいつのコアメダル。また別のをユーノ・スクライアが持ってたからな、ショックなんだろう」

すると、それを聞いたメズールは何気ない気持ちでこう口にした。

「もう戻ってこなかったりしてね」

「なぜ？」

「ふん・・・そんな気がしただけよ」

では、そのカザリは一体何処で何をしているのか？

カザリは人間の姿に擬態すると、過ぎ行き雑踏を一切気にすることもなく、何故ユーノが持っている雰囲気さえ匂わせなかった自分のライオンメダルを持っていたかに関してただただ疑問に感じていた。

「（なんでユーノ・スクライアは急にあの僕のメダルを・・・今まで持ってることさえ匂わせなかったのに・・・）」

そんな事を考えながら、カザリは一つの仮説にたどり着く。

「（何かがおかしい・・・たぶん僕達以外にメダルに絡んでいるやつがいる・・・・・このままじゃ完全復活する前に・・・・・・終わる）」

アンク並みに、今置かれている現状を理解し始めたカザリはこの危機的な事態を何とかするために、一人行動を起こそうとしていたとは、この時他のグリード達は知る由もなかっただろう。

また、その日の夜だった。

駅爆破事件が起こって警備がいつも以上に厳重に強化されている第７管理世界「リヴァプール」において、メズールのヤミーを生み出し、爆弾に憑りつかれた男・・・ミチヒコ・スワは局員の目を掻い潜って、また別の場所へと爆弾を仕掛けていた。

「・・・へへ・・・爆破は浪漫や」

三つの爆弾を仕掛け終わると、スワは急いでその場から立ち去り、家路へと突くのであった。

こうして彼の欲望が膨れ上がれば上がるほど、巣の中で成長を続けるサメヤミーはどんどん増殖を繰り返すことになってしまうのだ。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

１２月２４日　午前１０時３０分。

いよいよ今日はクリスマスイブ。

明日のクリスマスパーティーに向けて、前線メンバーを始め局員総出で準備が進められる傍ら、鬼太郎と浦太郎はユーノの元に届けられたホグワーツ魔法魔術学校の教科書と魔法の杖を持って、自分た

ちもまた魔法の実演をしようと試みていた。

「よし！これ使ってみようぜ亀！この３９ページの・・・えっと・・・」

「あ。これだよ。守護霊の呪文・・・パトローナスを呼び出すんだ。えっとその為には使用者にとって一番楽しい思い出を引き出す必要があるって書いてあるね」

「一番楽しい思い出か・・・だったら簡単じゃねぇか！二年前に食ったジャンボプリンを喰った時の思い出！そいつを糧にすらいい・・・見とけよ！」

鬼太郎は杖を手に取り、神経を集中させると、自分にとって一番苦手なものが写った写真を眺めながらそれを追い払う気持ちで杖を構え、大声で呪文を口にした。

「エクスペクト・パトローナム！！！」

だがしかし、そう高らかに口したはいいが、杖の先からは何も起きず、きょとんと静まり返ってしまい、何人かの局員は隠れて笑っていた。

傍らで見ていた浦太郎は期待はずれな顔を浮かべ、溜息を吐いた。

「・・・何にも起きないけど先輩・・・」

「ああ！？何でだよ！！！この杖壊れてるんじゃねぇか！！」

自分の力量ではなくモノに八つ当たりをする鬼太郎だったが、直後

鬼太郎の持っていたその魔法の杖をなのはと一緒に廊下を歩いていたユーノが奪い取り、徐にこう言った。

「壊れちゃいないよ。て言うか勝手に人のを持ち去らない」

「あ！店長！」

「ねぇ店長。どうして先輩は呪文をちゃんと口にしたのに何にも起きなかったの？」

気になった浦太郎がそう尋ねると、あらかじめ本でその事を読んでいたユーノは杖を軽く回しながら返答する。

「守護霊（パトローナス）を呼び出すのはそう簡単な事じゃないんだ。術者の幸福な記憶って言っても、鬼太郎のようにプリンの様な思い出じゃ全然力が足りないんだ。もっと人間関係に絡んだ情愛と言うものでないとね」

「情愛か・・・でも、本当にそんな杖だけで魔法が使えるものかな？」

なのはも未だに地球の魔法と言う存在に疑問を抱いているが、ユーノ自身は確証を持っていた。

「本来、地球に存在する魔法の多くは異能の力を持った存在と対等に渡り合うために力の無い人間たちが作り出したものなんだ。魔力と言うのはその魔法の力をより多く、そして強く発現するためのブースターに過ぎないんだ。ちなみにこの杖は、嘗て柊沢さんがクロウ・リードとして生きた時代、ホグワーツで7年間使ったもので、その芯は不死鳥の尾羽から作られているそうだよ」

「ゆ、ユーノ君・・・よくそこまでのことを・・・・・・本当に空白の四年間で何してた訳？」

「なに。ぶらりと発掘旅行してただけさ♪」

なのはは呆れたような驚いた様なそんな顔を浮かべながら唖然とするばかりであった。

「でも店長。折角そんないい杖があるのに、魔法が使えないんじゃ宝の持ち腐れ・・・と言うかただの木の棒っすよ」

「ニワトコの杖は、強力だけど忠誠心を得ないと通常以上の威力を発揮しないんだ。だから、こうやって杖を構えて呪文を言っても、忠誠心の得られていない僕達じゃ役には立たないよ。ためしに何か呪文言ってみようかい・・・・・・“セクタムセンプラ（切り裂け）”！」

と、たまたまフェイトと一緒に歩いていたクロノに杖を向けて呪文を口にした瞬間、ユーノの言葉に反応したニワトコの杖の先から光が放たれ、防衛本能が働いたクロノはそれを回避、放たれた光は壁にぶつかると鋭く斬られたように崩壊した。

「のあああああ！」

「「「「え・・・」」」」

クロノはそえに当たるか否かと言うギリギリのところで回避できたが、一歩間違えれば間違いなく血塗れとなって絶命していた。

クロノはその場に尻もちをついて息を荒げ、フェイトは心配になって声をかける。

「だ、大丈夫クロノ？」

「あ・・・・・こ、コラ！！フェレットもどき！いきなり何するんだ！！」

当然ユーノに怒りを露わにするクロノだが、ユーノやなのは達はそれ以前に、杖の先から魔法を放てたことそのものに大いに驚いてる様子であった。

「ゆ・・・ユーノ君・・・今・・・杖から・・・」

「えっと・・・・・もしかして僕・・・・・忠誠心を得られたって事なの・・・この杖に」

そんな事を一瞬考えてしまうユーノ。

するとその時、ユーノ達の元に吉良がかなり慌てた様子で走ってきた。

「ユーノさん！大変です！」

「吉良さん。どうしたんです？」

「また例のヤミーと思われる同様の爆発が、『リヴァプール』で起こったんです！」

「え！」

ユーノ達はその話を聞くと、急いで司令室へと向かった。

詳しく現場を検証するために、はやての命を受けたエリオと連れてユーノと、そしてユーノスの三名がリヴァプールへと赴き、事後現場に群がった野次馬に混じって、爆発によって無残な姿となった建物の柱を見つめ絶句する。

司令室で同様のものを見ていたなのは達もユーノ達同様言葉を失い、入ってきた情報をもとに口を開く。

「一遍にじゃなくって、順番に爆発したとのことです・・・」

「そう言われると、昨日のと似ているな。」

ユーノは爆発現場を目の当たりにし、いつもの温和で優しいイメージとは全く違う怒りと悲しに満ちた剣幕を浮かべ拳を強く握りしめる。

「く・・・っ！」

「ユーノ・・・・・・」

ユーノスはユーノの肩に乗りながらそんな彼の事が気にかかり、エリオもまた昨日のユーノの言葉をふと思い出す。

『爆弾だ。理由か分からないけど、仕掛けられた爆弾が爆発したんだ！』

すると、ユーノスは意を決してユーノにこんなことを尋ねた。

「なぁユーノ。お前、何で昨日・・・あんなにも直ぐに爆弾だと分かったんだ？」

「えっ？」

「それでもう一度爆発すということも・・・」

「・・・・・・」

「何か、ユーノがいつもの調子と違うように思えてな・・・気になってしまったのだが、それで気に障ったら謝る」

「えっ？ああ・・・全然大丈夫ですよ。いや～～～観察力が凄いですね♪流石は七大元帥最強の男！」

飄々した笑顔で誤魔化そうとしたユーノだが、ユーノスもエリオも真剣な眼差しで彼の顔を覗いてくる。

「・・・・・・」

「ユーノ先生・・・」

すると、それを見て諦めのついたユーノは徐にユーノスにこう言った。

「・・・・・音でわかるというか。籠ってて、腹に響く感じ・・・・・それに一回目の爆発で人集めて、もう一回爆発起こすのもよく見ましたから・・・・・アフリカとで」

「！」

最後の言葉を耳にした瞬間、訝しげな表情を浮かべるユーノスとは対照的に、エリオと司令室で待機していたなのは達は目を見開き言葉を失いかけた。

「まさかユーノ君・・・それって！」

ユーノは、話すか否か迷っていた様子であったが、心を決めてユーノスにアフリカで起きた内戦の事を話してやった。

「ユーノス元帥・・・僕、地球に滞在しているときに内戦に巻き込まれたことがあるんです。」

話す傍ら、ユーノの脳裏に浮かんできたのは爆発に巻き込まれながらユーノに助けを求め、泣き叫ぶ少女・ユウの声。

〈うわあああああああん！！うわあああああん！！〉

自然と悔しさが拳に滲み出すユーノは辛い気持ちを押さえて冷静に話を続ける。

「お世話になってた村の人達と協力して、何週間か・・・・・・でも」

ユーノは何度か口を詰まらせながらも赤裸々に全部を話し、ユーノスはそれを苦い表情を浮かべながら聞き入れる。

その頃、この世界で活動を続けていたサメヤミーが地面の中を移動しながら唐突に移動中の乗用車の前へと飛び出してきた。

「うわあああ！！」

運転手はサメヤミーの登場に驚き、ハンドルを振り払って電柱へと激突。

サメヤミーは何処へなりとも姿を眩ませ移動をしていった。

サメヤミーが現れると、ユーノとユーノスのセンサーも敏感に反応する。

「「！」」

「あの・・・どうしたんですかユーノ先生？まさかひょっとして！」

「ああ、ヤミーだ・・・やっぱりあの爆発と関係が！」

そう言いながら爆発時現場を見つめるユーノだったが、その時彼の眼にあの肩に不気味な人形を乗せた謎の男の姿が目に入った。

「え・・・」

一瞬目を疑うユーノだったが、その男の方もユーノに気づき、人形に話しかける様子でこう口にした。

「気づいたようですね。新しい展開が期待できますよ」

男はそう人形に言うと、ユーノの前から姿を眩ませる。

ユーノはそんな不振感漂う男を睨むように見つめながら爆弾事件と関連した憶測を立てる。

「あの男も・・・やっぱり・・・」

ユーノは男の跡をついて行こうとしたが、すかさずユーノスに止められ、ユーノスはユーノに首を横に振ってから淡々と口にする。

「ユーノ。ヤミーの方が先だ。行くぞ」

「はい・・・！」

ユーノはエリオを引き連れてサメヤミーの元へと向かって走り出した。

司令室でその様子をモニターで見ていたなのはは、一抹の不安を掲げる。

「ユーノ君・・・・・・」

何故なら、ユーノの話したその内戦での体験談こそ、彼自身が自分の欲を枯らした決定的な出来事であったということを、死神代行・黒崎一護の口を通して聞いていたからだ。

なのは達の頭の中で、先ほどユーノスに話をするユーノの言葉が反芻する。

『でも・・・でも・・・内戦はどんどん激しくなるし・・・食料もなくなって・・・』

その間に、ユーノ達はサメヤミーが出現したポイントへと駆けつけ、ユーノが現れるとサメヤミーは地面の中から現れ爆弾を発射する。

ユーノはエリオを守る様に走りながらラウンドシールドを展開する。

「く！」

「ユーノ！」

ユーノスはユーノに結界印を手渡し、エリオ自身もストラーダを構築しようとしていた。

闘いが始まろうとしている中、やはりなのは達の頭にユーノの悔しそうな言葉が響き渡る。

『僕は魔法も使えずボロボロで・・・情けなくて・・・村で一番最初に仲良くなったあの子を・・・』

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノは変身を遂げると、猛烈な勢いで爆弾を撃ってくるサメヤミーの元へと走り出し、渾身の想いが籠った拳をサメヤミーの体へと叩きこんだ。

『ユウ・・・助けられなかった！』

「おらあああああああ！！！！」

自分の脳裏にもその言葉が反芻するなか、ユーノは只管に目の前のサメヤミーに向かって攻撃を加え続け、その様子を見ていたエリオやユーノス、そしてなのは達は呆然とする。

〈！あああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！〉

サメヤミーに重い一撃を与え、ずぶぬれになりながらも、ユーノは戦うことから決して逃げず、真正面から向かっていく。

「は、は、は、は、は、は」

いつも以上に心拍数が情するユーノの様子をモニターでずっと伺っていたなのはは徐に彼の写真が収められたペンダントを握りしめながら辛そうな顔で口にする。

「それでも・・・・・・ユーノ君はそんなことがあっても、一年前のあの時と変わらず・・・ずっと・・・ずっと・・・／／／／」

聞いていた六課メンバーが思わず苦い顔を浮かべ、クロノはその状況を察してこう口にする。

「あいつにとって、今回のヤミーは・・・悪夢を彷彿させるものだったようだな・・・」

「そうだな・・・」

なのは達はユーノのようにヤミーとグリードと渡り合う為の力が無かった。

だからこうして彼を信じて見守ったり、モニター画面のエリオのようにサポートに徹する事しか他に彼を守ることが出来なかった。

だがそれでも遣る瀬無い気持ちを抱えるなのはは、ぐっと堪えた様子で河川敷の方でサメヤミーと激しい闘争を続けるユーノの姿を見守った。

「はあああ！！」

「でらあああああ！」

連係攻撃によってサメヤミーを追い詰めるユーノとエリオだが、サメヤミーは一度地面の下に潜って素早い動きで移動すると、唐突に飛び出しエリオにダメージを負わせる。

「のああ！」

「エリオ！」

エリオの傷を心配するユーノだが、サメヤミーはその隙を突いて地面から飛び出し攻撃を加える。

「うわ！」

ユーノはダメージを受けながら、エリオと共に身を固め、素早い動きで自分たちを翻弄するサメヤミーの攻撃を警戒する。

「速すぎる！動きについていけない！」

「一体どうすれば！？」

すると、焦燥に満ちた様子の二人に向かって離れた場所からユーノスが指示を出す。

「ユーノ！落ち着け！完現術の力で高速移動だ！エリオもソニックムーブでヤミーの動きを捕えろ！」

「はい！」

「了解です！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｄａｓｈ〉

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

「「はあああああああ！！」」

的確なアドバイスを受けた二人は移動するサメヤミーを高速移動で先回りし、狙いを定めると地面に向けて逆刃刀とストラーダの先端を構える。

「「どらああ！」」

そして、ほぼ同時にサメヤミーにヒットを加えてサメヤミーを空中に放り投げる。

サメヤミーは体からセルメダルを吹きだし川の中へと叩きつけられるが、直後唐突に二人の元に高圧水流が発射され、更に今度は二人の体に強烈な殴打が叩きこまれた。

「「ぐあああ！」」

「エリオ君！！」

「ユーノ！エリオ！」

二人が腹部を押さえながら辺りを見渡す。

「何だ・・・！」

「あ！あれは・・・！！」

エリオは驚愕した表情を浮かべてユーノにそう言うと、ユーノと近づいて離れた場所で窺っていたユーノスは目を見開いた。

何とあろうことか、グリードのメズールとガメルの二体が揃ってユーノ達の前へと現れたのだ。

「うふふふ。ユーノ・スクライア。私のヤミーよ」

「そうだ。メズールのだ！」

ガメルはそう言うと、この間の仮もあるのか、エリオを無視して一方的にユーノの身体にパンチを叩き込み、ユーノはその攻撃を受け続ける。

「ぐあああ！」

「「「ユーノ君（様）（先生）！」」」

声を荒げるなのは、マリア、スバルの三人と、驚きに満ちた表情でモニター画面に映し出されたグリード二体を凝視する恋次達。

「あれは確か・・・グリードのメズールとガメル！」

「まずいな・・・あの二人か・・・」

ユーノスは急いでユーノの元へと近づいて行く。

その間にもメズールとガメルは容赦なくユーノに攻撃を仕掛ける。

「ふふふ」

不敵に笑みを浮かべるメズールと、ただムカつくという単純な理由のみでユーノを殴りつけるガメル。

「がああ・・・！」

「ふん！」

ガメルの攻撃を受けた直後、ユーノの元にメズールの高圧水流が向けられ、ユーノは満身創痍の状態へと追い込まれる。

「ぐあああああ！」

「ユーノ先生っ！」

エリオはユーノを助け出そうと彼に近づく。

するとその瞬間ガメルが飛んできて両腕を振り下そうとする。

「間に合え！」

思わず目を瞑りエリオだが、駆けつけたユーノスが広域防御を展開し、その攻撃を凌ぐ。

「ユーノス元帥！」

ユーノスはユーノの怪我の具合を確かめると、分が悪いと判断し意識があるうちにユーノに退却を命ずる。

「ユーノ！いったん退け。」

「ですが、ヤミーをほっとく訳にはいかないでしょ！」

「あの二人を相手にすることの方が、余程マズイ！」

「く・・・・・どうすれば・・・・・・」

この圧倒的に不利な状況を前にして、思わず険しい表情を浮かべ悔しさを噛みしめながら拳を強く握りしめる。

と、その時ユーノの腰に携えていた洞爺湖木刀からピラニアヤミーを倒した時同様に鼓動が感じられると、唐突にユーノの耳に声が聞こえてきた。

『何しけた面してんだよ、てめぇは』

「え」

思わずその声に耳を疑うユーノだが、直後景色が真っ暗に染まり、ユーノの目の前に現れたのは銀髪の天然パーマが特徴で、この洞爺湖木刀を自分に託してくれた異世界の友人、伝説の侍、坂田銀時であった。

『ったく。しょうがねぇ野郎だ』

銀時の姿を目にし、目を疑うユーノだが、銀時は気だるそうに髪の毛を掻き毟りながらもう片方の手を懐に突っ込みユーノに近づく。

「ぎ・・・・・銀さん・・・・・・・！」

『よ。大体一年ぶりか。少し老けたな』

「まさか・・・・・・この洞爺湖木刀に・・・・・・・」

『そういうこと。いや～～～まさかそいつに洞爺湖の仙人ならぬ俺の魂が宿ってるとはな。こりゃ魂消たぜ』

「は、はぁ・・・・・・」

『しかし、状況は最悪だな。グリードって言ったか、あの変な野郎は。たく面倒くせぇが仕方ねェ。おい、ユーノ。俺の力貸してやるからさっさと連中片つけちまえよ』

「え！まさかそれって・・・！」

『細かいことはいいんだよ。ほら、とっとやっちまいな』

銀時はそう言うと、光となってユーノの腰に差してある洞爺湖木刀

に戻っていき、気が付いた瞬間ユーノは現実世界へと戻って来た。

「は！」

ユーノの前にはもう銀時の姿はなく、メズールとガメルが映っており、ユーノスとエリオは上の空の様子のユーノに耳元で声をかける。

「おい、ユーノ！聞いてるのか！？」

「ユーノ先生・・・！」

すると、ユーノは徐にユーノスに返事を返す。

「いや。まだ手はあります」

「何？」

そう言うと、ユーノは腰に差していた洞爺湖木刀を手に取り確かに感じた銀時の魂を信じて口にした。

「これで銀さんの完現術コンボでしょ！」

「な！止せ！完現術コンボは危険だと忠告してるはずだ！」

「ダメですよユーノ先生！危険です！！」

ユーノスは完現術コンボの危険性を考えエリオと共に止めにかかるが、何も知らないでいたガメルとメズールは訝しげな顔を浮かべる。

「？何あれ・・・メズール」

「あらら。そんな汚らしい木の枝なんか持ってどうするつもりかしら。頭が冷えすぎておかしくなったようね」

しかしユーノはそんな二人の言葉を聞き流し、ユーノス達の制止を無視して洞爺湖木刀片手に立ち上がる。

「早く片付けて、ヤミーの巣見つけないと！」

「く。どうなっても知らないぞ」

ユーノスはユーノの頑固さをある程度理解していたため、止めても無駄だと判断し、その場から離れ、ユーノもまたエリオをその場から遠ざける。

「エリオ。危ないから離れてて」

「え・・・あ、はい！」

「何？一体どうする気？！」

メズールは唐突に何かをしようとするユーノを不審そうに見つめる中、ユーノは洞爺湖僕とを握りしめながらその木刀に宿っている銀時の魂に向かって言葉をかける。

「銀さん・・・僕に力を！おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

そして、完現術の力を極限まで解放して銀時の魂を引き出そうとすると、その瞬間結界印から声が聞こえた。

〈Ｗｈｉｔｅ　ｆｅｍａｌｅ　ｄｅｖｉｌ〉

ユーノは白い霊圧の嵐に包まれ姿を見せようとした途端、全身から不殺の侍魂以上の強い霊圧と剣気を超えた鋭い気、鬼気を放出させて川の水を一気に退かせた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！」

「「ううううううううう！！！」」

「きゃあああああああああ！！！」

ユーノスとエリオは、離れていても肌で感じ取れる強烈な鬼気に圧倒されながらメズールとガメルを窺うと、メズールはその鬼気に当てられてしまい大きなダメージを負っていた。

ダメージを受けた瞬間メズールの体からウナギとタコのコアメダルガそれぞれ二枚ずつ飛び出し、ユーノスは素早くそれを回収し笑みを浮かべる。

「フン。こいつはもうけたな」

「うわぁ・・・！」

メズールはコアメダルを失い、その場に倒れ込むとかなり心配した様子でガメルが声をかけてきた。

「メズール！メズール！」

そして、その直後全身から身の毛が凍るほどの凄まじい鬼気を放出させたユーノが姿を現した。

「どらあああああああああああ！！！！！は、は、は、は、は！」

その時のユーノの姿は、嘗ての攘夷戦争時代に戦っていた白夜叉の異名をとった坂田銀時の姿を彷彿とさせるもので、髪の毛もまた著しく変化を起こしており、長髪から一変、クリーム色の天然パーマへ変貌を遂げ、額には鉢巻が巻かれていた。

モニターでそれを窺っていたなのは達は思わず目を疑った。

「あ、あれは・・・！」

「ユーノ君・・・！？」

「新しい・・・完現術コンボ！？」

「あの髪型・・・もしかして銀さん・・・！」

驚き返りながらその完現術コンボが銀時の物であることを理解した前線メンバー。

その時、深手を負ったメズールの足がコアメダルの喪失に伴い実に弱々しい姿へと変貌を遂げ、メズールは弱りきった声でガメルに撤退を要求する。

「が・・・ガメル・・・連れ出して・・・ここから・・・早く・・・

！」

「わかった！」

ガメルは地面を叩いて穴を作ると、メズールを連れてその穴の中へと入って脱出をし、その瞬間引いていた川の水が戻って来た。

グリードが撤退すると、白夜叉姿のユーノは真剣に変化した剣を握りしめながら、鬼気に当てられふら付く様子のサメヤミーに向かって飛んでいく。

「おんどらあああああ！」

ユーノは粗暴な口調でふらつくサメヤミーの体を圧倒的なパワーを秘めた一振りで斬りつけていき、斬りつけるたびに銀時を彷彿とさせる口調を発する。

「おら！コノヤロウ！」

サメヤミーの体から次々とセルメダルが放出し、その光景を見ていたユーノスとエリオは呆然とした。

「凄い・・・一撃であの破壊力・・・！これが銀さんの完現術コンボ・・・！」

「ああ・・・」

「でらあああああああ！」

ユーノはサメヤミーに更にもう一振り豪快な一撃を加えて追い詰め

ると、持っていた真剣に魂を集束させて止めの一撃を加えようとする。

〈Ｓｈｉｒｏｙａｓｈａ　ｉｔｔｏ　ｒｙｏｄａｎ〉

結界印の声を耳にしたユーノは一気に走りだし、真剣に全身全霊の力を込めてふら付くサメヤミーの頭めがけて振り下す。

「はあああああああああああああああああああああああああ！！！！！セイヤーッ！」

振り下された瞬間、サメヤミーは爆発を伴いセルメダルとなった飛散し、その周囲もスターライトブレイカーを叩きこんだかのような爪痕を残し、見ていた前線メンバーはあまりに違いすぎる破壊力に目を疑った。

「は、は、は、は、は、は。や・・・やった・・・」

銀時の完現術コンボを使用したユーノは変身を解除すると、かなり魂への負荷が大きかったのか、ふらふらになりながら河川敷の方へと移動をし、ユーノスとエリオはそんなユーノを心配して駆け寄っていく。

「ユーノ！」

「ユーノ先生っ！」

「は、は、は、は、は、は、は、は」

ユーノは力尽き、その場に倒れ込むと仰向けとなって全身汗だくの

状態で息を上げる。

ユーノスはため息をつきながら叱咤する。

「全く。だから完現術コンボは危険だと言っただろう。それでもお前は・・・・・目の前で起こってる理不尽な事は見過ごせないのだな。（やれやれ・・・そう言うところは俺そっくりだ。）」

ユーノスは自分と非常によく似た性格のユーノの危険な部分を心配しながらも、そんな彼に依存してしまっている自分に恥ずかしさを覚える。

「ユーノ先生、大丈夫ですか？」

エリオが覗き込んでそう言うと、ユーノは額に汗を浮かばせ息を荒げながらも笑みを浮かべて答える。

「大丈夫・・・は、は、は、は・・・ちょっとふら付いただけ・・・」

「ふら付いたって言える状態じゃないですよこれ・・・！？」

「ははははは・・・・・・ん！」

笑ってごまかそうとしたユーノだったが、直後彼は何かを発見し、表情を一変させた。

「「？」」

二人がそんなユーノの様子の変化を確認し、ユーノが向けている目

線に合わせて振り返ると、三人の前に現れたのはあの不気味な人形を肩に乗せた男であった。

「あの男！」

「何？」

「あの人は――――――」

男は人形を落とさないようにゆっくりとユーノ達に近づいて行くと、ユーノはその男を警戒しながら二人に言う。

「多分・・・爆弾事件と関係が・・・！」

「「え（何）！？」」

エリオは男の容姿と途方もない悪寒を肌で感じながら、徐に言葉を漏らす。

「もしかしてユーノ先生。あの男が今回のヤミーを生んだ人間じゃ・・・！」

すると、ユーノスはそんなエリオの推測を否定する。

「いや。あれは違う」

「でも！」

「ヤミーの親くらい見分けられる。間違いない」

ユーノスは思わず声を荒げたユーノに冷静な態度でそう言うと、聞いていたその男も便乗して人形ん話しかける形で答える。

「そのとおりです。ヤミーも爆弾も私ではありません。ある爆弾の好きな男がいましてね、経過観察中です」

「観察中って・・・」

男の不可解な言動に警戒を強めるユーノ。

「完現術の力もじっくり観察できたのは幸運でした。では――――」

男はそれだけを口にすると、ユーノ達の前から立ち去ろうとするが、直後ユーノスは背中を向けた彼を呼び止める。

「おい、待て！いろいろ知っているらしいが・・・・・お前、何者だ？」

すると、男は振り返り人形に目線を向けながらこう答えた。

「人は、その人生を全うするまで何者でもありません。終わって初めて人として完成する。互いによき終わりが訪れんことを。」

「ああ？」

ユーノスがその意味不明な言動にそう言葉を漏らす中、男は背中を向けてユーノ達の前から忽然と姿を消してしまった。

エリオは不審そうにユーノに言葉を投げかける。

「何だったんでしょう・・・今の・・・」

「分からない・・・ただ・・・・・・・」

ユーノは必要以上にこの男のことを警戒するのであった。

その頃、ユーノ・スクライアの監視役であり、スカリエッティに使える忠実なる破面魔導虚の一人、リヴァイアサンはとある用事があってこの世界「リヴァプール」へと訪れていた。

リヴァイアサンが向かったのは、アルハザードで研究と開発と精を出すための巨額の資金を提供する、所謂パトロンとの重要なコンタクトをするための場所・・・・・・「カリ・ユガファウンデーション」であった。

リヴァイアサンが目的地に到着すると、そこで待ち構えていたのは財団に所属する大勢の人間たち。

そして、リヴァイアサンはその人間たちを見ながら徐にディスプレイを表示させ、アルハザードにいるスカリエッティに通信をつなぐ。

『ハッピーバースディ！カリ・ユガファウンデーション！』

スカリエッティは画面の向こう側から今年で設立十周年を迎えるこの財団の誕生を棄権してクラッカーを鳴らしお祝いの言葉を並べる。

『設立１０周年おめでとう！私の開発と研究のためにいつも多額の資金を提供してくれている輝かしきカリ・ユガファウンデーションの諸君！そして、その会長にして私が認めた天才・・・・・ミス

ターカリ！』

スカリエッティがそう言うと、財団の人間に見守られながら、この財団を取り仕切る男・・・左肩に不気味な人形を乗せたカリ・ユガファンデーションの会長を務めるカリ・ユガが登場し、無言のまま不敵な笑みのスカリエッティを見つめる。

「・・・・・・」

『我々が管理局の目を欺きながら、巨額資金を提供できているのは・・・君のお陰だ！』

「ありがとうございます、ドクタースカリエッティ」

カリは相変わらず人形に目線を向けながら言葉を発し、それを見ていたスカリエッティは思わず嬉しくなったのか大笑いを始めた。

「ふふふふふふはははははははははははは！！！！！！！！！！」

そして、この財団が設立したとある研究所における局員にして、今回の爆弾事件の犯人、更にはサメヤミーの生みの親であるミチヒコ・スワは自分の欲望を膨らませながら熱心に爆弾づくりに励み、そうすることによってサメヤミーの卵が着実に成長を続けるのであった。

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚　タコ二枚　ウナギ二枚

爆弾と悪夢と白夜叉コンボ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、カンドロイドの詳しい解説ね♪」

「先ずはタカカン。口の部分で物を掴む（咥える）ことができ、ヤミーの追跡やセルメダルの収集などに利用される。」

「次にタコカン。水陸両用のカンドロイド。足をジャイロ回転させて飛行し、丈夫で柔軟な性質から、互いに連結し合ってバイクが走行可能な道や衝撃を吸収するネットを形成する。威嚇用の墨を吐き出すこともあるんだ」

「そしてバッタカン。ビデオカメラと通信機としての機能を持っていて、別行動時の連絡手段や、諜報活動に利用可能。バッタ型だけど跳躍だけでなく、腹部のローラーによる走行も可能なんだ♪」

すると、そこへそのバッタカンが飛んで来た。

ユ「あれ？なんだろう」

バッタカンのスピーカーから聞こえてきたのは浦太郎の声だった。

浦『店長、店長！！いいもの見せてあげるから画面に注目して！』

ユ「いいもの？」

不思議に思いながら画面に注目するユーノ。

そこに映ってきたのは、今まさに着替えてる最中であった更衣室のなのはだった。

ユ「だああああああああああああ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ユーノは鼻血を噴出しながら後ろに倒れ、あとで発見した一護達はこの光景を見て思わず・・・

一「ここは殺人現場か！！！」

と、言ったそうな。

魔導師図鑑ハイパー！

うらスク商店

題名：春巻ｉｎクリスマス

クリスマスイブの昼。

外回りに出ていたユーノ達スクライア商店は今日も行きつけの店で仲良く昼食。

すると、浦太郎がふと気づいたように言う。

浦「そう言えば明日はクリスマスだよね？」

鬼「お、本当だ・・・ってやべぇ！！すっかり忘れてた！！プレゼ

ント買わなきゃ！」

金「ん？鬼太郎は一体誰に上げるというのだ？」

鬼「俺！！」

ユ・金・浦「う・・・・・・」

ユーノ達は思わず声を詰まらせ、箸を止める。

そして、鬼太郎は輝きが宿った瞳をユーノに向け、手を差し出し要求する。

鬼「店長買いに行くからお金ちょうだ・・・！」

ユ「いいからとっとと食べな！」

一蹴するユーノであった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ス「グリードより人間より、そして破面魔導虚より、ユーノ・スクライアを第二のオーズとしてメダルとアンゴルモアを集中させる！」

ユ「逃げてください！爆弾が仕掛けられています！」

？「それは、恋次さんの狒狒王蛇尾丸に装着することで威力を発揮します。」

第１５２話　拳と怒りと竜帝王蛇尾丸

拳と怒りと竜帝王蛇尾丸（前書き）

銀「ホントに大事なモンってのは、もってる奴より、もってねー奴の方が、しってるもんさ」

「健全な魂ってのはなァ、表にも表れるもんだ。安心しろ。お前はいい魂（もん）もってる。」

拳と怒りと竜帝王蛇尾丸

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事

一つ、爆弾にとりつかれた男の欲望から、メズールのヤミーが誕生。

二つ、ユーノはユーノスの制止を無視して、坂田銀時のコンボを発動。

そして、三つ。ユーノ達の前にカリ・ユガファウンデーション会長、カリが現れた。

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚　タコ二枚　ウナギ二枚

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

スカリエッティに密かに組にし、多額の資金を提供する謎の財団・・

・カリ・ユガファウンデーション。

その設立十周年を記念し、スカリエッティは破面魔導虚リヴァイアサンを遣いとし、この真におめでたい日を祝福するのであった。

『諸君。私が絶賛するこのカリ・ユガファンデーションも、今日で設立１０周年。誕生日おめでとう！この素晴らしいメダルシステムも、破面魔導虚も、君たちの優秀な根回しと調査、そしてもちろん・・・カリ・ユガファンデーション会長のミスターカリの援助がなければ何一つ実現しなかっただろう！感謝する。もう一度言わせてくれ。おめでとう！』

スカリエッティはこの日の為に、ファウンデーションに勤める社員全員分の誕生日ケーキを、作成しリヴァイアサンを通じて送り届けた。

ただ、それを貰った会長のカリ・ユガは喜んでいるというよりも、寧ろ迷惑がっているような表情を浮かべていた。

その彼は今、リヴァイアサンと透明のエレベーターで移動をしながら、モニター画面のスカリエッティの話を聞いていた。

「少々大げさすぎませんか？設立から１０年と言うだけで」

カリなどうあっても人と目を合わせて話すということはせず、肩に乗せた人形に向かって言葉を投げかけ、傍らで見ていたリヴァイアサンは不快な気分になっていたが、スカリエッティは全くと言うほど気にしていない様子であった。

『はっはっはっ。誕生日と言うイベントに、祝い過ぎるという事は無いよ、ミスター！それに今日は、私と同じ天才である君が私に賛

同してくれた素晴らしい日でもある。メダルとアンゴルモアを集め、無限を超えた力を実現させるという私の計画にね！ただ・・・そのとてつもない力を受け止めるもの・・・器をどうするか。その点だけは――――――まだ意見が一致していない』

そう言ったあと、エレベーターが最上階へと到着、移動をしながらスカリエッティに話を続けた。

「可能性はいろいろありますからね。たとえば、グリードも破面魔導虚も候補に挙げられますし、メダルとアンゴルモアを制御するシステムを作れば、人間であってもつかいこなすことが・・・・・・」

すると、その話をモニター越しに聞いていたスカリエッティは口元を緩めると、恐るべきことを口にしだした。

「ユーノ・スクライア・・・・・・私はユーノ・スクライアに決めたよ、ミスター！グリードより人間より、そして破面魔導虚より、ユーノ・スクライアを第二のオーズとしてメダルとアンゴルモアを集中させる！」

「・・・・・・」

カリはその言葉を耳にした瞬間、衝撃のあまり表情を凍らせ歩みを止めてしまう。

沈黙が流れると、見ていたリヴァイアサンは不機嫌そうな表情で言う。

「おい。返事はどうした？」

そう促すと、カリは間を置いたのちに人形に話しかけながら答える。

「・・・もちろん賛同します。現在、未来より彼の希望が新システムを届ける予定ですから、より強大な力を得ると思われます。」

カリは徐に別のディスプレイを表示させると、そこに映ってきた以前ユーノにライオンメダルを送り届けた謎のオッドアイの少年。

スカリエッティはどうやらその少年の存在を知っているかのような表情を浮かべると、大いにそのことを喜んだ。

『素晴らしい！今日また一つの始まりを迎えたと言える。非常に満足だ。はっはっはっ・・・・・・ではリヴァイアサン。帰ろう。』

「了解です、ドクター。ではこれで失礼する。」

リヴァイアサンはスカリエッティが映っている画面を消した後、舌打ちをしながら不愉快そうな顔でカリの前から立ち去って行く。

彼が立ち去って行ったあと、カリは真顔のまま人形に向かって言う。

「始まりに意味はありません」

カリは足早に会長室の方へと向かい、部屋中に鳴り響くスカリエッティが絶賛する「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」の選曲を切り替え、自分が最も好きな「Ｗｏｒｌｄ　Ｅｎｄ」の曲をかけ直し、部屋の真ん中に飾られた・・・表題「終末」の絵を眺めながら口にする。

「祝うとするなら、終わり・・・・・・終末ですよ。さて、観察を

続けなくては」

カリはそう言いながら自分の椅子に腰かけると、モニター画面を表示させ、サメヤミーを生んだカリ・ユガ生体研究所の研究員、ミチヒコ・スワの様子を真顔を浮かべながら観察を続ける。

カリに観察されていることなど知る由もない、と言うよりたとえ気づいていたとしてもそれを全く気にしないぐらいまで爆弾づくりに熱中するスワは、ノートに事細かくデータを書き込みながら最後の起爆試験を実施する。

「これが上手くいけば、第三の実験に――――――」

しきりに時計を気にしながら、爆破予定時刻が来るのを心拍数を上昇させながら待ち望んでいると、水底に仕掛けられた爆弾が順に爆発を起こしていき、豪快に水しぶきが上がるとスワは満足の笑みを浮かべる。

「よし！成功だ！！」

「・・・・・・――――――」

カリはそんなスワを見つめながら、広い研究室の一画に巣を張ったメズールのヤミーの卵も観察の対象とするのであった。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

一方、白夜叉コンボを発動させたユーノの鬼気に当てられ、８枚あ

るコアメダルのうちの４枚を奪われたメズールは塒に戻ると、消費エネルギーが少ない人間体の姿となって横になっていた。

メズールの容体が悪い事を気にしていたガメルが徐にサイの絵柄が書かれたコアメダルを取出し、それをメズールに与えようと考えた。

「メズール。俺のコアメダル・・・やる。だから、起きろ」

すると、そんなガメルの水を差すように横からウヴァが言葉を入れる。

「お前のコアでは駄目だ。」

「ああ？」

聞いていたガメルは一瞬ウヴァに敵意を向けるが、その時横になっていたメズールが苦い顔を浮かべながら起き上がり、ガメルに言う。

「ガメル・・・大丈夫よ。私のヤミーはもっと生まれるから――――」

「う・・・・・・」

メズールは体調がすぐれないながらもガメルの事を気に掛け、思わずその事に口ごもらせるガメル。

「ユーノス・・・・・ユーノ・スクライア・・・！」

そして、ゴルフクラブ片手にウヴァはその性格から益々ユーノとユーノスの存在が気に食わなくなっていき、そのゴルフクラブを振り

回して酒瓶を粉砕する。

同じころ、機動六課へと戻って来たユーノは白夜叉コンボを使ったことにより、極度の魂の疲労に悩まされ、使用後の副作用なのか全身が焼けるような熱を持ってしまった。

「う・・・・・・」

ソファーの上に横になりながら額に氷嚢をあてがう苦い顔のユーノ。

ちょうどその時、現世から一護が織姫とコンを引き連れて機動六課へユーノの様子見とクリスマスパーティーの件で訪れていたが、訪れるや否やこの現状を目にし、困り果てた様子であった。

なのは達は全身熱を持ってまるでインフルエンザにかかった時の様な状態となってしまったユーノを心の底から心配し、見つめていた。

「ユーノ君。大丈夫?」

「う・・・・・銀さんのコンボは、思った以上に辛い・・・・・・体中が焼ける様だ・・・・・・流石は白夜叉って言われた人だけのことはる・・・・・・」

聞いていた一護は思わず深いため息をつき、日頃から無茶ばかりしがちな愛弟子にこう忠告する。

「たく。おめぇは相変わらず無茶しすぎんだよ。まるで自分が見えちゃいねェ。完現術コンボってのも、よく分かってねぇのに体と魂への負担無視して使いやがって。」

聞いていたユーノは思わず苦笑いを浮かべるが、直後次のように言い返す。

「すみませんけど・・・こうなっちゃったら直しようがないですから・・・」

「ユーノ・・・・・・」

一護はその言葉を聞くと、何処か心境は複雑なものであり、ユーノの顔付近で覗き込むように彼を見つめていたユーノスも口を籠らせていた。

その間に、はやてやシャーリー達は先ほどの戦闘で採取したユーノの新たな完現術コンボ、白夜叉コンボの発動時における戦闘の様子を見直し呆気にとられていた。

「しかし改めてデータを見直したら、この間のコンボとはまた違って、パワーが尋常やないな。」

「測定しようとしたのですが、あまりに力が強すぎてメーターが振りきれてしまいました。ですが、あれだけの力を発するところから推測するに軽く見積もってもＳＳ・・・いえ！これは最早ＳＳＳクラスです！」

「と、ＳＳＳ！」

「本当に・・・！？」

聞いていたなのは達は愕然とした。

本来、管理局に勤める魔導師においてＳＳＳランクとは最早伝説・・・幻と言っても過言ではないランクであり、そこまでの巨大な魔力を秘めた存在は恐らくいないとされがちなのだが、今回の件でユーノがそれ相応の力を手にしたという事実を聞かされては驚かない訳にはいかなかった。

すると、戦闘の様子を見ていたクロノが腕組みをして考えながらこんな事を口にした。

「それと・・・発動と同時にグリードに傷を負わせたあれは一体なんだったんだ・・・・・・」

「あれも剣気って奴か？」

恋次がそう口にすると、同じようにモニターを見ていた一護はそれを否定しこう訂正した。

「いや。多分そいつは“鬼気”じゃねぇか」

「何だよ一護、鬼気って？」

織姫の肩の上で訝しげな様子でコンが尋ねる。

「ああ。浦原さんから聞いた話なんだが・・・――世界には気って呼ばれるものがいくつか存在していて、その質量と濃度は気ごとに違ってくる。剣気ってのもその鬼気の中の一部なんだ。何しろ鬼気は、あらゆる気の中で最も強く、そして純粋に相手を畏れ抱かせる途轍もないものだ。ま、それが銀さんだって言うなら話は納得するな」

一護も一年前におけるカトゥーン事件において、短い期間ではあったが彼の強さはユーノ達同様よく理解していた。

そしてなりより銀時もまた、攘夷戦争時代を駆け抜け、白夜叉と敵味方から言われ畏れられた凄腕の侍となればおのずと今回のコンボの力がどれほどのものなのかが理解できる。

ルキアもそんな一護の説明を聞き入れ、腕組みがてら納得の様子となる。

「成程。それであのグリードはその鬼気とやらに当てられ・・・コアメダルを放出してしまったと言う訳か」

「ですけど、ユーノもユーノで相当なダメージを負ってしまいました・・・」

フェイトは苦い顔を浮かべながら、ソファーの方で横になっている氷嚢をあてがったユーノの事を気に掛け、心配そうにのぞき込むなのはやヴィヴィオを気に一瞥した。

「魂の疲労が一気にピークに達したんだな。銀さんのコンボの発動で」

一護もそんなユーノを心配し、複雑な想いとなりながらそう口にする。

一護達がそんなやり取りをしている間もずっと、ユーノは額に氷嚢をあてがったまま苦しそうに横になりながら、籠った体の熱に苦しんだ。

「う・・・・・熱い・・・・・・」

「無理しないで、ユーノ君。もう・・・・・・」

なのははユーノの身体の調子を心配してそう言う反面、心の中で湧き上がってきた感情に胸が痛みだす。

「（やっぱり、ユーノ君には戦って欲しくないよ。だけど、ヤミーもグリードも私達の力じゃどうすることも出来ない・・・！く・・・なんて無力なんだろう、私は・・・／／／）」

自分の力でこうも傍らに居る大切な人を守れない状況が続き、なのはの心はきつく締め上げられる。

まるでそれは、嘗てのユーノが抱いていたものと同じ気持ちであった。

するとその時、司令室にタカカンからの通信が入ってきた。

「？何だ・・・」

「タカカンからの通信？」

ユーノはその報せを耳にすると、勢いよくソファーから起き上がり、驚いた様子で声を上げる。

「場所分かったのか？！」

「何？どういう事だユーノ」

「あの黒服の男の後をつけてもらったんですよ。爆弾仕掛けた奴の事、知ってるみたいでしたから」

実はユーノは六課に戻る前、密かにカリの後をタカカンに追わせており、ヤミーの巣の手がかりがつかめないかと行動を起こしていたのだ。

「く！」

ユーノはソファーから起き上がると、まだコンボの副作用で体が治りきっていないながらも歩きだし、重い足取りで転送ポートへ向かおうとしていた。

一護やシャマル、それになのは達はそんなユーノに声を荒げる。

「おいユーノ！」

「ダメよ、ユーノ君！絶対安静の状態だって言ってるでしょ！？」

「ユーノさん、ここは無理しないで・・・」

しかしそれでもユーノの意志は固かった。

「また爆発が起きたら、この前の駅の時みたく・・・いや、もっとそれ以上の犠牲者が出るかもしれない。」

ユーノはそう言うと、険しい表情を浮かべながら転送ポートへと走り出し、なのは達の制止を無視して「リヴァプール」向けて出発しようした。

「ユーノ君ッ！」

「ユーノくん！待ってな！部隊長命令や！止まるんや！！」

しかし、今のユーノにそんな命令など一切耳に入らず、ユーノはそのまま転送ポートの中へと消えていき、全員は表情を暗くした。

そして、深いため息をつきながら一護は呟く。

「ったく。過度なお人好しにも呆れちまうぜ」

「貴様が言える口かそれは？」

「ほっとけ！」

ルキアの横やりにそう返す一護。

その一方でマリアは自分の体を痛めつけながらも、組織の人間でないにもかかわらず誰かの為に行動を起こすユーノの思考に困惑してしまっていた。

「あんな体で、ユーノ様はどうして？」

吉良はそれを聞くと、複雑な心境でこう説明する。

「聞いたはずだよ。あの人はね・・・・・・大切な人を助けようとして、だけど手を伸ばし切れずに助けられなかった・・・・・・それ以来ユーノさんは自分が助けたいって感情・・・欲望を枯らして助けなきゃならないって使命感に憑りつかれしまったんだ。管理局の局員でもなければ、どの組織の人間と言う訳でもなく、人間とし

ての使命感・・・」

「人間としての使命感・・・」

「誰かを助けなければならない・・・・・・か」

「・・・・・・」

話しを聞いていた前線メンバー全員が物思いにその事の辛さと苦しみを自分たちの頭で考え理解しながらも、執拗に使命感や責任感だけに憑りつかれる今のユーノの行動がどうしても納得のいくものではなかった。

なのはは心配そうに自分を覗き込むヴィヴィオの頭に手を乗せながら、居なくなってしまったユーノのあの時の言葉を思い出し反芻させた。

『村で一番最初に仲良くなったあの子を・・・ユウを・・・助けられなかった!』

〈あああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!〉

人並みに、自分もまたそう言ったことを一度は体験していると思いがちのなのはでも、仕事以外でそのような状況に出くわしたことは全くと言うほどなく、手が届きそうで届かなかった時の辛さがどれだけのものかはやはり自分の頭では理解できないところがあり、同時にユーノの気持ちが分かると言えるものではなかった。

「ふう。仕方あるまいな」

と、その時ため息をついたかと思えば、ユーノスが唐突に転送ポートの方へと走り出し、見ていた恋次は声を上げる。

「ユーノス！」

全員がユーノスの行動に注目する中、ユーノスは立ち止まり背中越しに恋次と、そして一護に向かって言葉を向けた。

「行くしかあるまい。ただ念の為だ。阿散井。それと黒崎。お前たちも付いて来てくれ。ユーノの事が心配だ」

「分かった。」

「よし。行くか」

二人もユーノスの要求に賛同し、転送ポートへと向かう。

ユーノスは一護の足を伝って一護の肩に乗ると、目線を自分に向ける前線メンバーにこう言った。

「それに、気づいているとは思うが、あいつは天賦の完現術者としての・・・そしてメダル集めの才能を持ってるんだ」

そう言い終わると、ユーノスは一護と恋次を引き連れ転送ポートの中へとダイブし、ユーノが向かった異世界へと出発する。

三人がユーノの後を追って居なくなった後、聞いていたシグナムやザフィーラ、そしてヴィータは複雑な心境でこう呟いた。

「才能・・・・・・」

「完現術者とメダル集めの才能・・・か」

「前者はいいが、後者はあんまし喜べるものじゃねぇな・・・」

「ユーノ君・・・・・・」

なのはは、自分に生きる意味であり事故を証明するための魔法を導いてくれたユーノの事を何時も心の底から羨ましがっていた。

自分とは違い、有能で人望も厚く、しっかりと自分の将来を見据えて生きているユーノが非常に羨ましいとずっと感じていたが、その一方で自分の力では決して届きそうにないほどに大きな隔たりを生んでしまっている自分とユーノの距離にこの上もないほどの寂しさを感じていたりもした。

◇

〈???Side〉

さて、サメヤミーが出現した第9管理世界「リヴァプール」にあるカリ・ユガファウンデーションが設立した「カリ・ユガ生体研究所」において、ユーノの到着よりも早く現場に駆けつけていた一人の少年がいた。

少年はバイクを止め、ヘルメットを外しその澄んだオッドアイの瞳を建物に向けながら徐に呟く。

「ここだな。カリ・ユガ生体研究所・・・・・」

少年はバイクから降りると、オプティックハイドで姿を隠し、確かな足取りで研究所内部へと侵入を試みる。

そして、その研究所の中に置いて、今まさに完成した爆弾を破損しないように丁寧に包み、リュックの中に入れているスワがいた。

「ふふふ。第三実験の開始だ」

期待に胸ふくらませながら、作成した爆弾をいっぱいに詰めたリュックを背負い、目的達成のためにある場所へと向かって研究所を後にする。

欲望が膨れ上がったことで、研究所に巣を張っていた彼の欲望を糧とするメズールのヤミーの卵から二体目のサメヤミーが孵化し、外に飛び出す。

「これで二体目」

カリはモニター画面でその様子を捕えながら、観察を続ける。

「自分を生んだ人間の欲望が増える限り、ヤミーも生まれる訳ですね」

肩に乗せた人形に話しかけるようにそう口にするカリであった。

さて、巣を見つけるためにタカカンの後を追ってバイクで移動をしていたユーノだったが、ちょうどその時研究所内部からかなり上機嫌な様子で出て来た自転車に乗ったスワを目の辺りにし、彼から感じ取れたヤミーの気配に思わずユーノは驚愕し、バイクを止めた。

「は！」

バイクを止めたユーノは走り去っていくスワを凝視しながら、険しい表情を浮かべる。

「あれは・・・」

と、その時だった。

「おい！」

聞きなれた声が聞こえたかと思いながらユーノが振り返ると、直後何の前触れもなく強烈なグーパンチが食い込まれ、ユーノは後ろに転がり落ちた。

「いって！」

ユーノが真っ赤に腫れた顔を押さえながら目の前を見てみると、そこに居たのは同じようにバイクで自分の霊圧を辿って追いかけてきた一護と、恋次、ユーノスの三人であった。

一護は自分の拳を握りしめながら呆れたようにユーノに叱咤する。

「勝手に飛び出すんじゃねぇよ、馬鹿弟子！」

「一護さん・・・／／／恋次さんにユーノス元帥も・・・」

恋次は一護の横でため息をつくと、若干痛みで涙を浮かべるユーノに言う。

「あんまし心配させんなよ。前に約束しただろ。一人で抱え込むな。もっと俺達を頼れって」

「はい・・・すみません・・・でもやっぱり・・・」

ユーノはどうも自分でもわかってるぐらいに人に頼れない性分らしく、そんなユーノに困り果てながらも一護と恋次はこの男の事を自分たちの力で守ろうと固く決意をするのであった。

そして、徐にユーノスがユーノの肩に飛び移ると、研究所に目を向けながら言う。

「ふう。それより、どうやら本気でお前には才能が有るらしいな。さっきあの人間・・・・・ヤミーの親だ」

「えっ」

「何だって？」

その言葉を聞かされ目の色を変えるユーノ達。

「それに、この建物の中にヤミーの巣がある」

「・・・！」

「この中にだと・・・」

一護達は話を聞くと、まじまじと怪しげな雰囲気を醸し出すこの拳銃の外観を見渡し、思わず一護は呟いた。

「何なんだここは・・・」

「タカちゃん、タカちゃん！悪いけど今度はあの男おいかけて！」

ユーノは切羽詰った様子でタカカンにスワの追跡を命令し、タカカンは走り去っていったスワの後を追って空高く飛び立った。

恋次はこの状況を見、一護にこう促した。

「一護。念の為だ。こっちは俺とユーノ、ユーノスが残る。爆弾魔の方・・・任せていいか」

「よし。任せとけ。じゃあ、ユーノ。行って来るぜ」

「お願いします、一護さん」

一護はヘルメットをかぶると、借り物のバイクに跨りタカカンの飛んで行った後を追うようにエンジンを全開にして走り出した。

一護が三人の前からいなくなった後、意を決してユーノが恋次、ユーノスと共に研究所内部へと入ろうとした途端、地面の中から唐突にサメヤミーが飛び出した。

「「「！」」」

サメヤミーは義外姿の恋次に体当たりし、恋次はその衝撃で地面に叩きつけられる。

「ぐあ！」

「恋次さん！」

「大丈夫か？」

「け。早速一匹お出ましかよ・・・」

恋次はそう言いながら義魂丸を飲み込み、死神化。

ユーノスも万が一の事を考えて研究所の周囲に広域結界を展開する。

「広域結界展開！」

指を鳴らすと同時に瞬時に展開されるユーノスの広域結界でサメヤミーの逃げ場をなくしたユーノはサメヤミーと生身で闘いながら、ユーノスに言う。

「ユーノス元帥！結界印を！」

「ああ。」

ユーノスは結界印を取出し抜群のコンロールで彼の手元に投げつけた。

結界印を受け取ったユーノは蓋を開放してスレイヤーモードへ変身する。

「変身！

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身を完了させたユーノは逃げて行ったサメヤミー恋次にこう口にする。

「恋次さん。瞬歩で先においかけてください。僕が後ろからつけます」

「おう！」

恋次はユーノに言われた通り、瞬歩で逃げて行ったサメヤミーの足取りを追って行き、その後に続く形でユーノがスレイヤーダッシュを使い、高速の脚を披露する。

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｄａｓｈ〉

「はあああああああああ！」

ユーノは地面に宿る魂を使役させてスレイヤーダッシュの力を最大限まで発揮させると、背びれを見せながら移動をするサメヤミーの正面へと回り込み、スレイヤーブレイドでサメヤミーを空中へと放り投げる。

「は！」

空中へと放り投げられたサメヤミーはその直後、空中で待ち構えていた恋次の襲撃を受け、地面に叩きつけられる。

「つらあああああああああ！！！」

サメヤミーが地面に叩きつけられると、これを好きと見たユーノが

止めの攻撃を加えようとする。

「よっしゃ！」

〈Ｒｅｖｏｌ　ｓｐｉｎ　ｋｉｃｋ〉

ユーノは最大加速でサメヤミーの元へと飛び込み、もう一度空中にサメヤミーを浮かび上がらせると同時にリボルスピンキックを叩きこむ。

「はあああああああああああああ！！！！！」

サメヤミーは爆発を伴いセルメダルとなって飛散する。

ユーノスはサメヤミーを撃破したユーノに向かって言葉をかける。

「ユーノ、こっちだ！」

「はい！」

ユーノは恋次と共に、ユーノスの後に続く形で研究所の中へと侵入を開始した。

「・・・・・・・・・」

その様子を偶然なのか、分かっていたのかモニターで窺っていたカリ・ユガファウンデーション会長、カリ・ユガは徐に立ち上がると、移動を開始する。

一方で、三人は警報ベルが響き渡る研究所内部を走り続け、サメヤ

ミーの巣を見つけるために手当たり次第に探し回っていると、その瞬間音声が聞こえてきた。

「「「！」」」

〈緊急事態発生。緊急事態発生。隔壁を閉鎖します。〉

「何？！」

〈緊急事態発生。緊急事態発生。隔壁を閉鎖します。所員は速やかに退避してください〉

ユーノ達が困惑した表情を浮かべる中、途端目の前の隔壁が閉じられていき、ユーノ・恋次・ユーノスの三人はその壁によって道を阻まれてしまった。

「しまった・・・」

「くそ！どうなってるんだ！この壁！！びくともしねぇぞ！」

ユーノは何とかして破壊する方法を考えるが、何故かその時その隔壁が魔力を遮るＡＭＦの能力と霊力を遮断する殺気石のふたつのちからを併せ持っているということに気が付き、驚き返った。

「魔法も霊力も完全に遮断された・・・この隔壁・・・どうして」

と、その時そんなユーノ達の元にあの男が現れた。

「申し訳ありませんが、ヤミー退治はもう少し後にしてもらえませんか？」

「え」

三人が声を聞いて振り返ると、徐にカリ・ユガが最初に会った時と同じ格好で人形に話しかける形で近づき言葉を並べる。

「今、経過観察中でして」

「観察中って・・・あなた一体!?」

「うちの研究員のスワくんは優秀なんですが、爆弾が趣味と言う一面がありましてね」

「は!」

「そこにグリードが目を付けたらしく」

一度ここで回想シーンを挟む。

今回のヤミーの生みの親であるミチヒコ・スワは帰り際、メズールと出くわし、メズールによってセルメダルを投与されてしまった。

『よろしく~』

セルメダルを投与した瞬間、スワは何かに苦しみ様子で声を上げ、メズールはさっさとその場から退散してしまう。

『あああうううううううああ!!』

そして、そのまま家に行くかと思えばもう一度研究所へと足を運び、

そこでヤミーの卵を撃見詰めて成長を促してしまったという胸を、カリ・ユガはユーノ達に伝える。

「ヤミーの巣を生み、さらに爆弾に没頭して、欲望を叶え始めたのです・・・・・もちろん、今も」

カリがそのことを言い出した頃だった。

タカカンの後を追ってスワの足取りを追っていた一護はバイクを止め、ついた場所を見渡眉間に皺を寄せる。

「ここか。まさか・・・こんな人の多い場所で爆発なんかしねぇよな・・・！」

不安に思いながら一護はついたその場所、遊園地の中へと入っていき、その中で爆弾を仕掛けていると思われるスワを探し始める。

そして、スワ自身はノート片手に爆弾を仕掛け始め、期待に胸ふくらませながら起爆コードをとりつけ笑みを浮かべる。

「七連続爆発実験。はははははははは！」

欲望に憑りつかれた男は自分の目的の為なら人の命を全くと言うほど惜しまない悪魔へと変貌を遂げてしまい、ついに最終準備が整うと爆破３０分に設定した爆弾のスイッチを押し、カウントが始まった。

ユーノ達は緊迫した様子でスワの行動を考えながら、目の前の仮の話に耳を傾け続ける。

「中にあるヤミーの巣からどれほどのヤミーが出てくるのか・・・
またその力はどれほどのものか・・・今後のメダル研究にも大いに
――」

と、話を聞いていたユーノも真顔のまま恐ろしいことを口にし続け
るカリの言動には口を挟まざるを得なくなる。

「ちょっと待ってください！爆弾ですよ！？爆発したらどれだけの
人が犠牲になるか！」

すると、聞いていたカリは真顔のまま冷淡な一言で片づける。

「研究ですから」

「け、研究だと・・・！」

ユーノだけでなく、恋次とユーノスもその言葉に耳を疑い嫌悪を覚
える。

「それに、物語がエンドマークで完成するように、人もまた遅かれ
早かれ命を全うして人生を完成させなければ」

「そんなバカな！」

感情が混み上がったユーノはカリに詰め寄ろうとしたが、直後彼は
先ほどのカリの言葉を思い出し、踏み止まって言葉を吐く。

「『今も』ってことは・・・・・・また爆弾を？一護さんが！！」

「「な！」」

「でしょうね。かなり熱心に作っていましたから」

他人事のように淡々と言葉を並べるカリ。

ユーノは一護の身の危険を感じると、居ても経ってもいらずその場から走り出す。

「く！」

「ユーノ！」

「待て、ユーノっ！ユーノ！」

ユーノを呼び止めようとする二人だったが、ユーノ自身はその言葉に耳を傾けることはせず、変身を解除してバイクに跨ると、急いで一護のもとへと向かった。

「（一護さん・・・一護さん！）」

恋次達はユーノの後を追って一護が待つ遊園地へと向かって移動を開始し、その様子をモニター画面を見ながらカリは真顔を浮かべる。

「彼らもまた理解の出来る人間ではないですね。終わりの大切さを」

ユーノ達が遊園地の方へと向かってバイクを走らせる間にも、爆弾の爆破時刻は刻々と迫っていき、その時を安全な場所で心待ちにしている爆弾魔のスワは嬉々とした表情を浮かべる。

「ふふふ。きっと成功する。連続爆発新記録や！」

この嘗てないほどに危険な欲望を抱き、それを行動に起こそうとするヤミーの親を、果たしてユーノ達は阻止することが出来るのか！？

一方、研究所の内部へ先に潜り込んでいたあの謎のオッドアイの少年は、隔壁が完全に閉鎖されてしまった状況に驚きながらも出口を探し続け、その最中見かけた取り残された研究に事情を尋ねる。

「どういうことですか？完全に閉鎖されてる。」

「それがさっぱり。緊急モードを解除できるのは、所長かカリ会長だけなんですが・・・どちらも連絡がつかなくて！」

「本当に、一体どこへいってしまわれたのか」

困り果て、切羽詰った様子の研究員。

実はこの時、会長のカリはこの研究所の所長に臨時ボーナスを与えて、午後からの休暇を意図的に取らせ尚且つ連絡も遮断していた。

その為、研究員は全くと言うほど外部からの連絡を絶たされてしまっているのだ。

少年も思わず苦い顔を浮かべてしまう。

すると、その時奥の方から突如として研究員の叫び声が聞こえてきた。

「ぐあああああ！」

「え」

少年が声の上がった方へと目線を向けると、見えてきたのはスワの欲望から次々と吹かして数を一気に増やしたサメヤミーの大軍であった。

「ヤミー！」

少年は腰元から銃を取出しそれをヤミーに向けて構えながら研究員たちを安全な場所へと避難させようとした。

「へへへへ」

研究所でそのような騒動が起こっている間、爆弾の予定時刻まで残りわずかとなった状況を確認して不気味な笑みを浮かべるスワ。

と、その時。

「うわっ！」

スワを発見したタカカンが彼の注意をひきつけ、その間に彼の持っていた計画書ノート駆けつけた一護が取り上げ、スワは奪われた計画書を取り返そうと必死だった。

「あ！何するんだ！大事な計画書だぞ！」

「うるせぇ！てめぇは目を覚ませ！爆弾でどれだけの犠牲者が出ると思ってんだよ！！」

一護は声を荒げりながら取り上げた計画書に目を向け、中身を急い

で確認していく。

「これが爆弾仕掛けた場所か。爆破予定時刻は・・・15時！」

書かれた数字を目にし、自分がしていた腕時計を確認する一護。

「返せ！」

スワは一護から計画書を奪い返そうとしているが、一護もそうさせまいと必死でいて、且つ残り時間僅か3分の状況に緊張が走った。

「あと三分しかねぇ・・・この！！放せ！！」

「お前こそ返せ！！」

一護は爆弾を探しに行こうとするが、それを邪魔しようと一護の体を掴みに来るスワ。

一進一退のやりとりが続いていたその時、ユーノが一護の姿を発見し、駆け寄って来た。

「一護さん！」

「ユーノ！頼む！これを！」

一護は駆けつけたユーノに持っていた計画書を投げつける。

「ああ！」

その事に思わず声を上げるスワ。

「!?」

一護から受け取った計画書に怪訝そうな顔を浮かべるユーノ。

「その中に爆弾の場所が書いてる!あと三分だ!急げ!!」

「はい!!」

一護からの言葉を耳にし、意を決したユーノは計画書片手に爆弾が設置されたポイントへ向けて勢いよく駆け出して行った。

「おい返せ!私の爆弾だぞ!私の爆弾なんだ!」

スワは計画書を持って疾走していったユーノに大声を上げて訴えかける。

と、そこへ遅れて恋次とユーノスが駆けつけた。

「一護!」

「恋次!こいつ押さえるぞ!」

一護の言葉を聞き、恋次は二人掛かりでスワの体を押さえつけ、最後にユーノスがバインドで身動きを完全に封じる。

「大人しくしろ!!」

だがそれでもスワは大声を上げて走り去るユーノに必死に訴えかける。

「爆弾なんだー！爆弾なんだー！」

ユーノは計画書に書かれた場所を見ながらジェットコースターが設置されたポイントへと向かい、行列が出来たジェットコースターの客を押しのけ係の者に詰め寄る。

「逃げてください！爆弾が仕掛けられてます！」

「え！」

「すぐに止めてください！早く！」

狼狽した様子のユーノだったが、困惑した様子で係員はつい先ほど発車してしまったジェットコースターを見ながらユーノに言う。

「無理です！もう発車してしまいました！」

「く・・・逃げてください！早く！早く！」

ユーノが切羽詰った様子でこれからジェットコースターに乗ろうとしていた利用者全員にそう促すと、危険を感じた利用者たちは一斉に避難を始め、声を上げて逃げる人々にユーノはいつも以上に高い声を上げて言う。

「早く逃げて！」

ユーノは人々の避難を促す傍ら、ジェットコースターのレールの真下へと潜りこみ、そこに仕掛けられていた爆弾を見付けると、起爆コードを切断してタイマーを解除。

「あと6個！」

その後も押収した計画書に書かれた場所を確認しながら、大急ぎでユーノは爆弾を見つけ出してはタイマーを解除していき、その傍ら心の中で呟く。

「（こんなところで爆発したら・・・）」

その時、ユーノの脳裏に浮かんできたのは地球のアフリカを訪れた際に、仲良くなった黒人の少女ユウとの思い出。

ユウは笑顔を向けながら、白い小石をユーノに手渡し、ユーノもそんなユウに笑顔を振りまき感謝の言葉をかける。

『うふふふ。うふふふ』

『ありがとう。ユウ』

だが、それから間もなくして悲劇は起こった。

内戦に巻き込まれた少女ユウは恐怖に怯え、泣き叫びユーノに助けを求めた。

『うわあああああああん！！うわあああああん！！』

ユーノは必死で少女の元へと手を伸ばそうとしたのだが――――――

「うわあああああ！！！」

「あああああ！！！」

さて、ユーノ達がいなくなったカリ・ユガ生体研究所の方でも切羽詰った状況が続いていた。

研究員一同は有象無象の様に現れるサメヤミーの大軍に襲撃を受け、研究所に残ってサメヤミーと一人果敢向かっていた謎の少年はサメヤミーを迎撃する傍ら、頭にある人物の事を思い浮かべながら言う。

「まだなの・・・お父さん！」

一体少年が口にしたこのお父さんとは誰の事なのか？

それはもう少し後になればわかる事なのだが、今は伏せておくとして、少年はサメヤミーの目を掻い潜ると、研究所の管制室へと向かい、中に入るとタッチパネルを操作し閉じられた扉を開けようとする。

「どこか、一か所だけでも出口を」

アクセスコードをハッキングによって解析し、素早い動きで解除コードの解析に当たる少年。

少年が解析作業に当たる中、遊園地に仕掛けられた爆弾全てを解除するため園内を駆け巡っていたユーノは残り一つとなった爆弾の場所へと向けて疾走中だった。

「あと１つ！」

計画書に書かれたその場所を目指してユーノが向かったのはジェッ

トコースターの真下に位置する公衆トイレの中だった。

トイレの中に入り込んだユーノはそこで最後の一個となる爆弾を発見し、その表示された時刻に目を疑った。

「あっ！」

タイマーは残り１０秒を切っており、しかも悪いことに中には手を洗っている小さな子供が取り残されていた。

ユーノは計画書を放り投げると、爆弾の元へと飛び込んでいき残っていた少年に声を上げた。

「伏せろっ！」

少年はユーノの大声に目を大きく開き、ユーノはこの少年を守ろうと爆発寸前の爆弾に必死で手を伸ばした。

その時、彼の脳裏に浮かんできた戦火の中のユウを助け出そうと手を伸ばす嘗ての自分の姿。

『ぐ・・・！！ゆ・・・ユウ・・・！！』

魔法も使えず満身創痍になりながら手を優に伸ばしたユーノだが、直後降り注いだ爆弾の雨から自分を守ろうとした結果、目の前に映ってきた跡形もなくなってしまった光景を目の当たりにした瞬間、ユーノは絶望し後悔に溢れた声を上げた。

『！あああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！』

だから、そんな悔しい想いをして誰も助けられない事など絶対にしたくないと思っていたユーノは必死の思いで手を伸ばした。

そして、残り時間僅か1秒と言うところで起爆コードを解除し、ユーノはそのコードを掴んだ状態で荒い息を立てていた。

「は、は、は、は、は、は、は」

ユーノの行動に目を奪われながら、少年は呆然と固まり、洗面台からは水が溢れ返って床に零れ落ちる。

ユーノは少年の方に目を向けると、申し訳なさそうな顔を浮かべながら立ち上がり、大きな声を上げたことを謝る。

「は、は、は、は、は、は、は。あ・・・驚かせてごめん。これ、ちょっと大きいけど」

そう言うと、ユーノは甚平のポケットの中から派手な模様が刺繍されたトランクスを一枚取出し、それをハンカチ代わりに少年に手渡すのであった。

すべての爆弾の爆発を未然に防ぐことが出来たユーノは心身疲労困憊の重い足取りで入り口付近で待機していた一護達の元へと戻っていき、ユーノの無事な姿を確認した一護達は安堵の表情を浮かべた。

「ユーノ！」

「よかった！何ともねぇみたいだな」

「ええ・・・一護さん。あいつは？」

「大丈夫だ。ちゃんと局員に引き渡してきた。あとはヤミーだけだ。」

「行くぞ、ユーノ」

「はい」

ユーノスの言葉を聞き、ユーノ達はバイクに乗車し急いで研究所へと向かった。

その間にも、研究所に多数出現したサメヤミー達は恐怖に怯えながらも逃げ惑う研究員たちを見境なく襲い続け、漸く現場へと到着したユーノ達はバイクを止め、研究所の慌ただしい様子を耳に、焦りを感じる。

「急がねぇとマズイな。」

「ああ。恐らくヤミーが・・・・・・」

と、ユーノが目の前に視線を合わせた時、彼の瞳に映ってきたのは真顔を浮かべながら自分たちの方へと歩み寄るカリの姿だった。

「な！」

「スワくんの実験・・・阻止してしまったようですね。」

「てめぇ・・・・・・お？」

恋次がスカリエッティのように研究の為ならば人の命もなんとも思わない考えのカリに嫌悪感を抱きながら鋭い目つきで睨み付けていると、ユーノは徐にバイクから降り一護以上に眉間に皺を寄せながらカリの元へと歩きはじめる。

「ユーノ・・・」

「おい、ユーノ・・・」

「・・・・・・」

一護達はユーノの行動に困惑しながら、ユーノの後姿を見つめ、そんなユーノに歩み寄ってきたカリは人形に目線を向けた状態で言葉を投げかける。

「まぁ。ヤミーの仕組みもかなり観察できて有意義でした。もう片付けてもらってもいいですよ。それから、もうすぐあなた方にプレゼントが届けられるはず。」

「あ?プレゼントだ?」

「ええ。かなり有効な筈ですから。あとで感想のほどを聞かせてもらえたら、今後のメダル研究に・・・・・・」

そう言いながらユーノに一礼し、立ち去ろうとしたカリだったが、直後ユーノは早歩きでカリの肩を強く握りしめ、振り返ったカリの顔面すれすれのところで拳を振りかざした。

「つらあああああああ!」

ユーノの拳はカリの顔を横切り壁に激突すると、壁はまるで強い規模の地震に見舞われ課のように大きな輝が入り、それを見ていた一護達やカリは度胆をぬいた。

「「「！」」」

「・・・！」

そして、ユーノは肩で息をしながらこれまで見たことのないような剣幕でカリに言う。

「・・・僕は最高に機嫌が悪いんだ。これ以上僕に話しかけるな・・・ああ！」

ユーノの形相に全身が凍りつくカリ。

と、その時カリの肩に乗っていた人形が地面に落ち、人形が肩から離れた瞬間、カリは人が変わったように狼狽し始め、落ちた人形を拾い上げようと奇声と奇怪な動きを見せる。

「はあああああ！！！ああああ！！ほおおおお！！！ひえええええ！！ほおおおおおおおおお！！」

人形を拾い上げたカリは足早に扉の中へと姿を消していき、残ったユーノは煮え切らない怒りを必死に自制しながら肩で息をする。

「は、は、は、は、は、は、は、は」

一護達はそんなユーノの元へと徐に歩み寄り、恋次はユーノの力によって大きな輝が入った壁を見ながらそれぞれ口にする。

「ユーノ・・・」

「とんでもねぇバカ力だな・・・」

「そうだな。ユーノ！」

ユーノスは結界印を取出し、ユーノの手元へと投げつけた。

受け取ったユーノは決意を瞳に宿すと、完現術を発動させた。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノが完現術を発動させると、一護もまた死神代行証を取出し、恋次に言う。

「恋次。俺達も行くぜ」

「ああ」

二人はそれぞれ死神化を済ませると、閉ざされたゲートを霊力と魔法が使えない為自力の力で破壊し、サメヤミーの駆除に向かって走り出す。

三人が動きを見せ始めた丁度その時、ゲートの解除を試みていた少年も脱出口の確保に成功し、笑みを浮かべる。

「よし！解除できた。」

少年は開かれたゲートを見ながら、マイクで取り残された研究員に報せる。

「地下一階に西口ゲートが開きました。急いで脱出を」

報告を終えると、少年は管制室のモニターで確認したユーノの姿を目で捉え、首を縦に振った後急いで彼の元へとあるものを送り届けるために部屋から出て行った。

少年がユーノの元へと向かったその頃、ユーノ・一護・恋次は出没したサメヤミーの駆除の為に各々能力を発揮させて対処に当たっていた！

「は！」

ユーノはツインブレイドを使い、不規則に飛んでくるサメヤミーを斬りつけセルメダルに還元させていき、一護と恋次は隠れたサメヤミーを斬月と蛇尾丸の力で掘り起こす。

「月牙天嵐！」

「連刃蛇腹弾！」

二人の力で目の前に現れたサメヤミーを捕えたユーノは、ツインブレイドを解除し、逆刃刀に手を掛けると飛び上がり龍巻閃を数体同時に叩き込む。

「飛天御剣流、龍巻閃！」

龍巻閃が叩きこまれると、サメヤミーは爆発しセルメダルとなって消滅するが、この研究所にはまだまだサメヤミーが潜伏しており、地面に隠れて素早い泳ぎでユーノ達を多い囲むサメヤミーを前に三人は手を焼いた。

「くそ！何匹要るんだよ！ちまちま潰してたらきりねぇぞ！」

「もっと一遍に斃す方法はないのか？」

「そうしたいですげ、数も数だし、何より動きが早過ぎる！」

「く・・・どうすれば・・・」

ユーノスもユーノの肩に乗りながらこの状況を打開する方法を思案するが、完現術コンボを使わずこの場を乗り切る上手い方法が浮かび上がらず困り果てていた。

と、その時そんな四人を見かけたあの少年が声をかけてきた。

「お困りですか？」

「「「「？」」」」

少年はユーノ達を見付けると、急いで四人の元へと駆け寄り、息を上げながら安どの表情を浮かべる。

「は、は、は、は。ようやく見つけた！」

ユーノはその少年を目の当たりにした瞬間、思わず目を疑った。

「あ！君はこの間の・・・」

「何？どういう事だ」

「この子なんですよ。ライオンのコアメダルを届けてくれたのは。」

「何！」

そう・・・実はこの少年こそが先日のバイソンヤミーとの戦いで窮地に陥るユーノにライオンのコアメダルを届けたのは。

恋次は少年を睨み付けながら単刀直入に尋ねる。

「おい、お前何者だ！？」

「詳しい話はあと。それよりヤミーを倒すことが先決でしょ。それだったら、良いものがありますって♪」

「いいもの？」

少年は怪訝そうな顔を浮かべる四人を尻目に、背負っていたリュックの中から何かを取り出そうと手を突っ込み、それを見付けると徐に四人に披露する。

「じゃーん！」

少年が取り出したのは、近所のスーパーなどでもよく売っているホールトマトの缶詰ほどの大きさをした黄色のカンドロイドであった。

少年はユーノの手の中に収めると満面の笑みを浮かべ、受けとった

ユーノはリアクションに困り果て、一護は呆然としながら指を差し尋ねる。

「なんだ・・

すると、少年はその直後ユーノ達全員が驚き返る一言を口にした。

「それは、恋次さんの狒狒王蛇尾丸に装着することで威力を発揮します。」

「なあ！お前・・・恋次が見える・・・ってか、何で恋次の狒狒王蛇尾丸のこと知ってんだよ！」

「知ってて当然。だって僕はーーー」

「僕は？」

ユーノが間を置いたその少年に問いかけると、少年は悪戯っぽい笑顔で回答する。

「まだ言えない♪」

「「「「ずっこ！」」」」

四人は拍子抜けてしまい、その場に倒れた。

「まぁ兎に角今はそれを使って。ぱぱっとヤミーを片付けちゃってよ♪それじゃ！」

少年は四人に謎のカンドロイドを託すと、何事も無かったかのよう

に研究所の外へと走り出し、一護は立ち去って行く少年を呼び止めようと声を上げる。

「あ！おい待て！お前何なんだよ！」

しかし、一護が呼び止めようとした直後、少年は転移魔法によってその場から忽然と姿を消してしまい、恋次達は唖然とした。

「何だったんだあいつは・・・」

「わからねぇ。だけどなんでだ・・・俺は妙に親近感を覚えた」

「あ？どういうことだそりゃ」

恋次は一護の奇怪な発言にそう尋ねようとするが、ユーノスはユーノが手に持ったカンドロイドを見ながら一同に促す。

「気になることは山ほどだが、今は渡されたこれを使ってみよう」

「良いのかよ、見ず知らずの子供から渡された変なもの信じて？」

すると、それを聞いたユーノがこう返した。

「僕は信じてもいいと思います。僕は・・・・・・あの子を知っている気がする」

恋次は一護と顔を見合わせてから、深いため息をつき妥協することにした。

「はぁ。分かったよ。じゃあ、やってみるか」

恋次は始解状態の蛇尾丸を構えると、赤い霊圧を放出させ二つ目の解放を行う。

「卍解！」

一気に霊圧が放出され、竜巻が収まった後、恋次の斬魄刀の二段階目の状態にして最強の姿、卍解・狒狒王蛇尾丸が出現。

「狒狒王蛇尾丸！」

ユーノは恋次が卍解を発動した後、徐に渡されたカンドロイドのプルタブを引く。

「これを引けばいいんだな」

全員が注目する中、プルタブを引くとカンドロイドが起動し、東洋の竜の姿に酷似したものへと変形し、ユーノは思わず驚嘆する。

「おっ。おお。おお！」

だが、驚きはそこで終わらなかった。

変形したその竜、ドラゴンカンは狒狒王蛇丸の頭部に向けて飛び上がると、体を分離させて蛇尾丸の頭部と首の骨、更には持ち手の部分へと大きさを変えて装着し、この瞬間狒狒王蛇尾丸は奇跡のコラボレーションによって、名前を『竜帝王蛇尾丸』と進化を遂げ、龍に酷似したその姿をユーノ達の前に披露し、嘶きを上げる。

「「「「わぁーっ！！」」」」

ユーノ達もそうだが、持ち主である恋次も大いに驚いている様子だ。

そりゃそうだ・・・見ず知らずの少年から渡されたカンドロイドがいきなり自分の斬魄刀と合体して竜の姿に変貌するなどとは夢にも思わなかったのだから。

と、竜帝王蛇尾丸へと姿を変えると、竜の如き嘶きを上げながら蛇尾丸は恋次のコントロールを無視して勝手に暴走を始め、恋次はその勢いに圧倒され引きずられるように走り出した。

「ぐおおおお!!」

「恋次さん!」

「おい!ちょっと待てよ!」

恋次は蛇尾丸の制御もままならない状態でなすがままに引きずられていき、蛇尾丸は圧倒的なパワーを発揮して施設内を破壊し、一護は頭を両手に当てて声を上げる。

「わあーっ!恋次、壊すなよ!」

「俺の所為じゃねェ!」

「ちょっと、ちょっと!待ってください!ユーノス元帥!早く!早く!」

ユーノと一護は血相を変えて暴走する蛇尾丸と恋次を追って走り出し、ユーノスは呆然とした状態で変形した竜帝王蛇尾丸を見つめる

のであった。

「何だ・・・あれは一体!?」

で、肝心の恋次の方はと言うと、狒狒王蛇尾丸ならいざ知らず、この竜帝蛇尾丸には完全にお手上げ状態であり、いくら自分の霊圧を注ぎ込んでも暴れ馬のように建物中を破壊しながら暴走を起こすだけで、一向に止まる気配がなかった。

「のおおおおおおお!!!!!頼むとまれ、蛇尾丸!!!!いう事聞け!!!!」

ユーノと一護は蛇尾丸が破壊した箇所を険しい顔で見ながら、恋次を追いかける。

「恋次っ!」

「ああ、壁が・・・」

「誰か止めろ!!!!!!!!!」

恋次はもうパニック状態に陥り、自分じゃどうすることも出来ない状況にただただ声を上げるばかりであった。

「あっ、待て!」

ユーノはいても経ってもいらず竜帝王蛇尾丸の頭部へと乗り、ロデオを乗りこなす騎手のように宥めようとする。

「おとなしくしろよ!」

「ユーノ！」

ユーノスを肩に乗せユーノを心配する一護。

その直後、ユーノは恋次同様竜帝王蛇尾丸のパワーに翻弄され、振り回されながら言一護に言う。

「わあっ！一護さん。退いて、退いて！」

「だあああああ！」

一護は自分に向かってぶつかりそうになってきた蛇尾丸をギリギリのところで避けると、額に汗を浮かばせ、ユーノは振り回されながら一護に謝罪。

「ごめんなさいー！」

「あいつ」

「止めぬのか？」

「どうやってだよ！」

一護はこの情を目の前にして、簡単に言葉を言うユーノスにそうツッコミを入れた後、二人を追って走り出し、その間もずっとユーノと恋次は暴走状態の竜帝王蛇尾丸を宥めようと努力する。

「「おとなしく！」」

だが、その途端ユーノだけが振り下されてしまう。

「わあっ！」

地面に叩きつけられるユーノを見かけた一護とユーノスは駆け寄り声をかける。

「大丈夫かよ?!」

「阿散井の方も・・・くそ、どうすれば・・・」

困り果てていると、平時の落ち着きを取り戻したカリが歩み寄り、三人にこう促した。

「坂田銀時の完現術コンボをつかってみればいいですよ」

「は！」

カリの言葉を聞き、振り返ったユーノ達。

一護はカリに詰め寄り胸ぐらをつかみながら尋問する。

「てめぇはユーノに口を出すな！つうか何でお前まで恋次のあれが見えるんだ！なんでユーノのコンボの事を知ってる！いいか、銀さんのコンボはパワーが・・・！」

「あの狒狒王蛇尾丸・・・竜帝王蛇尾丸なら大丈夫です。余分な力を吸収しますから」

「何っ！?」

その言葉を聞いた瞬間、驚き返る一護と、はっとした表情のユーノ。

「そうか！よし！！」

ユーノは木刀を手に取ると、暴走する竜帝王蛇尾丸に向かって走り出し、ユーノスは焦燥に駆られながら声を上げる。

「ま、待てユーノっ！」

ユーノスの制止を無視し、ユーノは竜帝王蛇尾丸に近づき限界寸前の恋次に向かって声をかける。

「恋次さん！今助けますから！」

ユーノはそう言って頭部に向けて飛び上がり、ユーノが持っていた洞爺湖木刀を見ていた恋次は目を見開き驚愕する。

「！お前・・・まさか！」

そして、蛇尾丸の頭部に飛び乗ったユーノは完現術コンボを発動するため、霊圧を全開にする。

「おおおおおおおおおおお！！！」

〈Ｗｈｉｔｅ　ｆｅｍａｌｅ　ｄｅｖｉｌ〉

白い霊圧の嵐が立ち込め、鬼気が放出されそうになると竜帝王蛇尾丸がユーノでも制御に苦しむ強すぎるパワーを吸収し、パワーを吸収したとたん蛇尾丸は先ほどのが嘘のように大人しくなり、白夜叉

姿のユーノに従い動きを止めた。

「何!?」

本来の所有者である恋次はこの奇怪な現象に目を疑い、ユーノ本人は先で使ったときとは圧倒的に違う今回の感触に驚き返った。

「あ、ホントだ!大人しくなったし・・・僕も断然ラク」

「イテテテ・・・取りあえず、これで行けるな!」

「はい!」

二人は顔を見合わせ笑みを浮かべる。

と、直後一護が研究所に外へと逃げていったサメヤミーの大軍を見かけ、二人に言う。

「ヤミーが外に出たぞ!」

「よし。行きましょう!」

「竜帝王蛇尾丸、ゴー!!」

気を取り直して、大人しくなった自分の斬魄刀で今は竜帝王蛇尾丸と名を変えたユーノとの力の姿を操る恋次。

「つらあああああああああ!!!!!」

竜帝王蛇尾丸は白夜叉コンボのユーノを頭部に乗せた状態で外へと

出て行ったサメヤミーを追跡し、ユーノは落ちないように低い体勢で剣を持ちながら構える。

〈Ｓｈｉｒｏｙａｓｈａ　ｉｔｔｏ　ｒｙｏｄａｎ〉

そして、一斉に飛び出してきたサメヤミーを捕えると、ユーノは真剣の姿に変化した洞爺湖木刀に完現術の力でチャージさせ、豪快な一振りで飛んで来たサメヤミーをセルメダルへと還元する。

「セイヤー！」

数体のサメヤミーを切り伏せたユーノは恋次に合図をだし、前進するサメヤミーを先回りして行く手を塞ぎ、その瞬間竜帝王蛇尾丸は竜の嘶きを浴びせ、潜りこんでいたサメヤミー全てを空中へと巻き上げる。

瞬歩で追いかけていた一護はそれを見ると、ユーノスを肩乗せた状態で二人に促す。

「止めだ。ユーノ！恋次！」

二人は己の霊圧を一緒に竜帝王蛇尾丸へと流し込み、竜帝王蛇尾丸が徐に口を開き口腔内に霊圧を圧縮させエネルギーをチャージさせると、二人は声を揃えて口にした。

「「“竜帝大砲”！！」」

その瞬間、竜帝王蛇尾丸の口から発射される鋼鉄火骨大砲の威力を遥かに上回る強大な霊圧と鬼気を内包した強力な一撃。

サメヤミーは金縛りあったように動けない状態となると、竜帝大砲の直撃を浴び、大爆発と同時に全体消滅。

大量のセルメダルとなって地面へ降り注いだ。

「よしっ！よしよしよしよし♪」

ユーノはサメヤミーを撃破すると、ガッツポーズを掲げて竜帝王蛇尾丸の頭を良い子良い子と撫でてやった。

一護とユーノスは安堵の表情を浮かべて互にこう言った。

「フン。何とかなったな」

「ああ。上出来だ。いい弟子を持ったな。」

と、その時フラフラになりながらとんだ目に遭った恋次が二人に近づきその場に倒れた。

「お・・・俺はとんでもない目にあ・・・・った・・・」

「おい！しっかり恋次！」

結局最後までこんな役回りで終わってしまう恋次は、一体何なのかと一護達は内心思いながらユーノと共に恋次を連れて機動六課へと戻るのであった。

彼らが元の世界に戻った後、カリは最上階の自分の部屋に飾られた「終末」の絵画と「Ｗｏｒｌｄ　Ｅｎｄ」を鑑賞しつつ、こんな事を呟いた。

「ユーノ・スクライアを器にアンゴルモアとメダルを・・・・・・それで本当に訪れるんでしょうか。」

カリは懐からセルメダル一枚を取り出すと、「終末」の絵を見ながら真剣に考える。

「世界を・・・――――歴史を完成させるよき終末」

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

１２月２５日。

クリスマス当日。

サメヤミーを退治し、爆弾魔も無事に管理局に身柄を拘束されたことで、ようやく心置きなくクリスマスパーティーに専念できるようになったユーノ達は、急いで最終準備に取り掛かり、大勢の観客を招いてここ機動六課で盛大なクリスマスパーティーを開催した。

「「「「「「「「「「メリークリスマス！！！」」」」」」」」」」

好き好んでサンタクロースの格好をする者もいれば、無理矢理トナカイの格好をさせられる哀れな者もいるが、基本的に全員が笑顔を浮かべ楽しそうな雰囲気であった。

プレゼントもクリスマスケーキも十分すぎるほど用意され、特にヴェロッサの作ったケーキは一際巨大なものであり、見るもの全てを

圧倒させた。

そして、女性陣が作った料理も豪華絢爛なものではあったが、まずいコラボも存在した。

「「じゃじゃーん！！織姫＆シャマル先生スペシャル♪みんないかが！」」

「「「「「「「「「「絶対要りません！！！」」」」」」」」」」

この二人の作る料理は最早核兵器並みに恐ろしいモノである。

そんなやり取りを見ながらユーノは離れた場所で見守り、一人外の方へと向かった。

ミッドチルダは例年、雪があまり降らないのだが、今年の冬はどうやら異常気象らしく、クリスマスぴったりの時期に雪が降りだし、こうしても外は白銀の世界が広がっていた。

ユーノは寒さも一切に気にせず徐に手をだし掌の中に落ちて儚く溶けていく雪を握りしめ、今回の事件の事を考える。

「・・・・・・・・・」

と、その時ユーノを見かけたなのはがキュートなサンタクロースの格好で近づき、彼に話しかけてきた。

「ユーノ君♪」

「なのは。」

「へへへ。どうこの格好・・・似合う？」

「当たり前じゃないか。凄く似合ってるよ♪」

「本当！わあ・・・嬉しいな♪」

「へへ」

ユーノに褒められ方をピンクに染めるなのはは、ユーノの横に立ちながら府立守行を一緒に眺める。

「雪・・・綺麗だな」

「僕はなのはの方がずっと綺麗だと思うけど」

「／／／さ、さり気にべたなこと言わないでよ・・・／／／ユーノ君、恥ずかしくないの？」

「別に。だってなのはが綺麗だってことは僕でなくても周知の事だよ。」

「そ、それを言うならフェイトちゃんやはやてちゃん、それに織姫さんだってそうだよ／／／」

「自分にもっと自信を持っていいと思うけどね。ま、それがらしいと言えばらしいのかな。」

「う・・・・・もう。これだからユーノ君は油断ならないんだから・・・／／／」

「え？」

「何でもないよ／／／」

真顔で聞いていて実に恥ずかしい褒め言葉を口にするユーノに拗ねた様にそっぽを向け、頬を染めるなのは。

ユーノはそんななのはも可愛いと思いながら柔かい笑みを浮かべ、肩を露出した彼女に肩当と重りを外した自分の羽織を着せてやった。

「風邪ひくから、これ着なよ」

「え・・・でも悪いよ」

「なのはに風邪でも引かれることのほうが僕はもっと悪いよ」

「でも・・・・・・あっ！だったらこうしよう♪」

なのはは何かを思いつくと、ユーノがかけた羽織をユーノにも着せ、二人で包まる様な状態となって、ユーノに笑顔を向ける。

「えへへ♪どう、暖かい？」

「・・・うん。暖かいね」

一瞬驚いた表情のユーノも、直ぐに穏和な顔を浮かべてなのはに笑みをこぼすと、なのはの体を優しく包み込むように抱きしめ、二人仲良く雪景色を堪能し、クリスマスプレゼント代わりの甘いキスを誰も見ていないうちに楽しむのであった。

「メリークリスマス、ユーノ君」

「メリークリスマス、なのは」

そう言うと、二人は星空の下で本日最も暑い口づけを交わすのであった。

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚　タコ二枚　ウナギ二枚

拳と怒りと竜帝王蛇尾丸（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はこれまで出て来たコンボのおさらいだ♪」

「先ずは“不殺の侍魂（アンキル・サムライハート）”。逆刃刀に宿る剣心さんと弥彦の魂を纏うことで僕が変身するこの姿は、神速を活かして実体を持つ分身を作り出すことが出来る。必殺技は九十九龍閃」

「そして今回出て来た“白夜叉（ホワイト・フィーメイル・デビル）”。洞爺湖木刀に宿る銀さんの魂を纏い変身する。その時の姿は、白夜叉時代の銀さんを彷彿とさせるね」

恋「で、忘れちゃならねぇのが俺様の新兵器、竜帝王蛇尾丸とのコラボだ！こいつのパワーを使いこなせるのは、このコンボしかねぇからな」

一「しかしまた大仰な名前だよな。竜帝王って感じじゃねぇし」

ル「名前を付けた奴もつけた奴だ♪」

恋「二人して笑ってんじゃねェ！名前は兎も角、問題なのは戦闘力だ！」

ユ「一人で使いこなせなかったら意味ないと思いますけどね・・・」

一・ル「同感だな」

恋「何だと！！！！！」

とことん馬鹿にされる恋次なのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

またうらスク商店

題名：聖夜

鬼太郎が目を覚まし、着替え終わって隊舎に向かうと、そこで目にしたのはサンタクロースの格好をした前線メンバーだった。

前線メンバーはクリスマスパーティーのための準備に追われていた。

鬼「・・・何なんだ？」

な「あ！おはようございます鬼太郎さん！」

一「おい、寝過ぎだぜお前」

ユ「もう先に始めちゃうところだったんだよ。クリスマスパーティー♪」

気分上々のユーノ達だが、鬼太郎だけは違った。

鬼「で・・・・・・」

鬼太郎はそう言うと、自分だけトナカイの着ぐるみの格好をしていることに疑問を抱きながら尋ねる。

鬼「何で俺だけこうなんだ?」

一瞬の沈黙が流れたのち、全員は知ら切った様子で準備に精を出す。

全「ジングルベル♪ジングルベル♪ジングルベル♪」

鬼「おい・・・!」

無視される鬼太郎だった。

特報

ユーノ・スクライア

結界印と完現術

そして、“デジモン”

ユ「戦わなきゃいられないのは、僕も同じ」

一「そっか!お前は最初から七大魔王全ての力を・・・!」

ク「私の名はクダモン。デジタルワールドからやって来た」

戦いはいよいよ未知なる電脳世界「デジタルワールド」へ。

「ベルフェモンの欲望」

ス「デジタルワールドの歴史上、もっとも欲深い魔王の魂が・・・いま、甦る！」

七大魔王ベルフェモンの欲望が目覚めるとき、世界の崩壊が始まる。

ベ「我が欲しいのは、この世にある全てのもの・・・世界だ！」

新グリード登場！

ユーノス「あいつ・・・もうそこまでのことを・・・！」

ユ「僕は君を助ける・・・！」

「変身！」

七大魔王ベルフェモン、復活の真実とは！？

ク「クダモン進化。スレイプモン！」

復活、ロイヤルナイツ・スレイプモン。

ク「超えてはならない一線を越えた」

そしてユーノ・・・――新たなる完現術コンボ

恋「おいおい・・・あんなのありかよ!?」

邪悪なる七大魔王の集合体、出現!!

今、究極のデジタルバトルが始まる!

ユーノ・スクライア外伝・絆　アンゴルモア・デジモン篇　甦る七大魔王の欲望!!

次回より、更新!

登場人物

ミチヒコ・スワ

声：安原義人

カリ・ユガ生体工学研究所に勤める所員。表向きは優秀な技術者だが、その裏では爆弾の開発と研究を趣味とする危険な一面があり、それに目を付けたメズールによってセルメダルを投与され、サメヤミーの親となって欲望のままに爆弾の製造と実験を繰り返し、今回の一連の事件を引き起こす。大学時代の論文は「爆発物に関するもの」であり、若い頃から爆弾に興味を抱いていた爆弾マニアで、本人曰く「爆破は浪漫」。結果的に、最後は一護達に爆破を阻止され

管理局に護送される。

登場ヤミー

サメヤミー

身長　２１３？　体重　１１８？

特色／力：高圧液状爆弾、水・地中潜行

正体不明の爆弾魔の欲望から生み出され、破壊活動のまま「リヴァプール」の街で暴れ始めた。水中で泳ぐことは勿論、周囲の環境を一時的に液状化させ、地中へ潜行することも出来る。また、この能力を使い死角からの奇襲攻撃や身を守ることを得意とする。更に口から吐き出される水の塊は高圧で圧縮されており、破裂する際の衝撃は火薬を使用した一般的な爆弾を上回る破壊力を有している。その後、カリ・ユガが擁するカリ・ユガ生体工学研究所の所員・スワが、「ヤミーの親」であることが判明。爆弾の製造や標的を爆破する楽しみに憑りつかれた彼の欲望により、研究所内で次々と増殖していく。だが、ユーノと恋次が得た新たな戦力「竜帝王蛇尾丸」の活躍によって、撃破された。

デジモンと正月と管狐（前書き）

欲望を持つことが少なければ少ないほど幸福になるだろう、という言葉は昔から言われているが、しかし非常に間違った真理である。

ｂｙリヒテンベルク

デジモンと正月と管狐

欲望・・・欲とは何かを欲しいと思う事やそう感じている状態を指す。

一口に欲望と言ってもさまざまである。

人間や動物が、それを満たすために何らかの行動・手段を取りたいと思わせ、それが満たされたときには快を感じる感覚のことで、生理的（本能的）なレベルのものから、社会的・愛他的な高次なものまで含まれる。

欲望は心の働きや行動を決定する際に重要な役割をもつと考えられている。

だが時として欲望は、一つ間違えればその強大な力ゆえ、途轍もない歪みをもたらしてしまう事もある――――――

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

いまここに、一人の無限の欲望を持つ男がいる。

時空管理局に広域指名手配され、過去二度にわたる大規模犯罪を引き起こした大罪人にして、失われた世界「アルハザード」の技術より生まれし存在、開発コードネーム「アンリミテッド・デザイア」、ジェイル・スカリエッティ。

現在彼は研究室に閉じこもり、正月が近いということもあってか、日本に古くから伝わる着物を身に纏い、床一面に広げられた儂の上に巨大な筆で漢字を書いてゆく。

「欲望・・・欲望・・・欲望・・・！！」

そんな自分が最も称賛する言葉を口にしながらゆっくりと筆を動かすスカリエッティと、それを傍らで見守る妖艶の美女、プレシア・テスタロッサ。

すると、スカリエッティはふとこんな事を言って来た。

「プレシア。君は知っているか？人間のネットワーク技術の進歩によって偶発的に造られた世界・・・そこに伝説と言われた七大魔王と呼ばれた欲深き王たちを？」

「ああ。聞いたことが無いわけじゃないわね。」

「欲望により世界の全てを手に入れようとしたが、すんでのところで世界の意志によって封印された存在・・・――――――」

欲望の塊である彼が何故こんな事を突然口にしたのか、その背景には次の出来事が関連していた。

一週間ほど前、地球のネットワークの中に「デジタルワールド」と呼ばれる架空の電脳世界が広がっていた。

コンピューターテクノロジーの発達に伴い偶発的に誕生したこの世界には、デジタルモンスターと呼ばれる意志を持った固有の生命体が存在し、各大陸ごとに弱肉強食な生活を営むものもいれば、人間のように比較的平和な生活をおくるものもおり、多種多様な生命が取り巻いている。

そんなデジタルワールドの最下層に位置する「ダークエリア」と呼ばれる場所に一体の魔王型デジモンが徘徊していた。

「あった・・・あったぞ！！」

そのデジモンはダークエリアを歩き回り、とある場所へとたどり着

くことに成功すると、不敵な笑みを浮かべる。

「この場所こそ、我らが魔王デジモンの聖地・・・――神の眠りし場所だ。」

そのデジモンは首から下げられたペンダントをもう一度確認し、徐に近づいて行くと塞がれた玄室の入り口を破壊し、中へと侵入。

中に入って辺りを見回し、その奥でデジモンは目的のものを発見し、笑みを浮かべる。

「ふふ。あれだ！」

デジモンは見つけたそのもののへ近づき、松明を灯してから石板に刻まれていたデジタルワールド独特の文字を読み上げていく。

ここで一度スカリエッティの台詞を挟んでおこう。

「その魂・・・その魔王はあと一歩と言うところで――――――眠りついた。怠惰を司る七大魔王。その名は――――――」

スカリエッティの台詞にあのデジモンの言葉を入れよう。

デジモンは満たされ始めた欲望に嬉々とし、弾む声でこう言った。

「ははは。ついに見つけたぞ。今こそ復活させてやろう。ベルフェモン！！」

デジモンが石板の言葉を読み上げてからそう言うと、懐から徐に紫色に輝く小さな欠片を取出し、それを石板へと近づける。

すると、紫の欠片は勢いよく光を放ち出し、石板がそれに伴って亀裂が入りだし、辺り一面光によって包まれてしまった。

これが今回の大事件の切っ掛けとなる出来事であった。

スカリエッティは漢字で「欲望」と書かれた書初めを額に嵌めると、読者の我々にアピールするようにこう締めくくる。

「デジタルワールドの歴史上、もっとも欲深い魔王の魂が・・・いま、甦る！」

◇

ユーノ・スクライア外伝・絆

アンゴルモア・デジモン篇　甦る七大魔王の欲望!!

〈デジモンＳｉｄｅ〉

さて、そのデジモンの行動からちょうど一週間後の事だ。

電脳世界「デジタルワールド」はいま、嘗てないほどの重大な危機に直面していた。

それは、嘗てデジタルワールドを破滅寸前にまで追い込み、全ての

デジモンたちから恐れられ大いなるデジタルワールドの神「イグドラシル」に意志に基づき聖なる騎士団「ロイヤルナイツ」によって封印された七大魔王、怠惰を司る「ベルフェモン」が千年ぶりに復活を果たし、それと同時にベルフェモンはこれまでになかった強大な力と知恵を身に着け、多くの悪魔デジモンたちを従えこのデジタルワールドに反旗を翻し始めたのだ。

勿論これに気づいたロイヤルナイツを始めとする多くの勇敢なるデジモンたちはベルフェモンに立ち向かったが、その圧倒的なベルフェモンの力の前に為す術は無く、僅か数日の戦いでロイヤルナイツの6割が倒され、デジタルワールドはデジコードと呼ばれるものに分解され食い散らされ、穴だらけの世界となってしまった。

ベルフェモンは悪魔デジモンたちを従え、さらに勢力を拡大し、まさしく魔王としてこの世界を蹂躙し始めた。

事態を重く見たロイヤルナイツの一人、クレニアムモンは親友であり同じロイヤルナイツのスレイプモンに次のように言葉を向ける。

「スレイプモン。ベルフェモンの軍団が迫っている。君一人だけでもいい。早くデジタルワールドから脱出するんだ」

「クレニアムモン、それは出来ん。同じロイヤルナイツの一人として、このまま奴らの好きにさせる訳にはいかぬ。私も残って最後の一平まで戦い抜く！」

「それはならぬ。君は、我らロイヤルナイツの最後の希望・・・そしてこのデジタルワールドにとってなくてはならぬ存在」

「クレニアムモン、しかし！」

「ならば、腕ずくでも」

「な！何をする！？」

スレイプモンはクレニアムモンによって何かをされると、爆発があちこちで起こっているデジタルワールドから本人の意思とは無関係に脱出を強いられ、開かれたゲートの中をとおってデジタル空間を漂流するのであった。

「愛する世界・・・愛する友を残して、私は一体――――――何処へ行けばいいのだ――――――」

これが新たなる出会いの始まりなのであった――――――・・・

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

新暦００８０年　１２月３１日　１９時００分

地球・松前市　スクライア商店

そんな事件が起こっていることなど、まだ知る由もなかった嘗ての「翡翠の魔導死神」、現在「完現術者（フルブリンガー）」で次元世界最強の実力を有した男、ユーノ・スクライアは何をしているのかと言えば、年末の休暇をこうして従業員と白鳥、そして新たに七大元帥最強の男にして今はフェレットのユーノス・スレイアと共にのんびりと過ごしていた。

各々が寛いでいると、台所の方から金太郎が全員分の年越しそばを運んで登場する。

「さぁさぁ、みなさん。年越し蕎麦が出来ましたぞ！」

「お！待ってました！」

「冷めないうちに美味しく戴こう♪」

年越し蕎麦が登場し、思わず拍手を上げる鬼太郎や浦太郎。

ユーノはユーノスを肩に乗せながらほくそ笑む。

卓袱台の上に側が置かれると、ユーノスは肩から降りそばを覗き込む。

「ユーノ。これがそうか？」

「はい。地球の日本、主に本州一般の家庭ではこうして年末の夜、そばを食べて質素に過ごすのが定石となってます」

「ほう。それはまた興味深い話だな。では、早速食べるとしよう」

全員は手を徐に合わせると、全員揃って食事の挨拶を済ませる。

「「「「「「いただきます」」」」」」

鬼太郎は箸をとると、食べたいという欲望を顕著に露わにしながらお椀片手に熱々の側を啜ろうとする。

「ふ、ふ、ふ・・・・・・あっつ！」

余りの熱さに舌を火傷しそうになる鬼太郎を見て、浦太郎はため息をつく。

「先輩、そんなに慌てなくたって蕎麦は逃げたりしないよ」

「しぁなねぇだろ。そう言う性分なんだからよ！」

「やれやれ。これだから低知能な一庶民は困る」

呆れながら優雅に蕎麦を啜る白鳥に横から言葉を要られると、鬼太郎は怒り心頭な様子で箸をへし折る。

「何だと・・・！手羽先のくせに言ってくれるじゃねぇか！！！」

ユーノと一緒にその光景を見ていたユーノスは苦い表情を浮かべる。

「お前たちな・・・」

「まぁまぁ。二人とも落ち着きなさいな♪大晦日ぐらい静かに過ごさなきゃ。あ、北海道の人は別だけどね♪」

「然様。本州とは違い北海道の多くでは大晦日のこの日は、豪勢な料理が食卓に絢爛し、それはそれは盛大な祝い事のような一日を過ごすのですぞ。」

「あ！それも僕もこの間、ケン〇〇ショーで見た見た！」

「それもそれで面白いとは思うけどな。」

「県民性によって風習も文化も違う・・・実に奥ゆかしく興味深い事であるな」

「ホントですね♪」

まぁそんな話しやこれまでの一年を振り返った話で盛り上がりを見せるスクライア商店メンバーであったが、ふとその時何気なく映っていた紅白歌合戦にある女性アーティストが登場し、鬼太郎はそれを見て呟く。

「お、そう言えばまた水樹奈々が出てるぜ紅白に」

「僕は正直こんなに熱狂するファン層の思考がまるで理解出来なよ。ＡＫＢなら納得は行くんだけど」

「どっちも似たようなものだと思ってるのは僕と一護さんか、作者だけなのは気のせいかな・・・・・」

そんな事をふと思ってしまうユーノなのであった。

そして、迎えた新暦００８１年の１月１日。

ユーノは正月の目覚めは誰よりも早かった。

恋人である高町なのはのハスキーボイスを仕込んだ目覚まし時計で心地よい目覚めをしたあと、初日の出を屋根の上で見た後もう一度二度寝に、午前９時を過ぎた時点で起きてくる。

正月と言うこともあって、今日のユーノはいつもの甚平装束ではな

くれっきとした和服に身を包んでいた。

すっかり板についた着物姿で茶の間に登場したユーノは豪快な欠伸を書きながら同じく着物に身を包んだ従業員の前に現れる。

「ふあああああああああああああ～～～～～～～～・・・お早う。そして、改めてあけましておめでとう」

「「「「あけましておめでとうございます、（ユーノ）店長！」」」」

従業員一同とユーノス、白鳥がそう返事をすると、ユーノは徐に床に腰をおろし、扇子片手に飄々とした様子で呟く。

「いや～～～新章始まってまだ１０回ぐらいしか行ってないのにまた一年が過ぎちゃうとは・・・このままいけばあっと言うＦＯＲＣＥの時間軸に追いつくかもね♪」

「言えてますな。」

「それより僕は今朝いい夢見ちゃったんだ♪何だと思う？」

「ハーゲンダッツに生き埋めになるとかじゃねぇのか？」

「悪くはないけどもっといいの♪あのね、あのね！なのはちゃんが素っ裸で僕の前に出て来てさ・・・！」

と、嬉々とした顔でそう言おうとした浦太郎であったが、直後ユーノの強烈な拳をめり込むように顔面に受けてしまった。

「ぐっほ！」

「ゆ、ユーノ・・・／／／」

ユーノスは思わず冷や汗をかきながら従業員と同じく恐怖に怯え、ユーノは何事も無かったように玄関の方へと向かった。

「さ。年賀状は届いてるかな」

ユーノが年賀状を取りに向かった後、顔を真っ赤にして倒れ込む浦太郎に白鳥はため息交じりに忠告した。

「浦太郎も少しは学習したらどうなのだ？妄（みだ）りになのはを汚すような発言をユーノ店長の前であからさまにするのは」

「う・・・僕はそんなつもりはなかったんですけど・・・寧ろ店長を興奮させてなのはちゃんが来たところでベッドにお持ちかえ／／／」

「「「「それ以上の発言は禁ずる！！」」」」

顔中を赤に染める周囲から厳重注意を受ける浦太郎なのであった。

それからユーノ達は、店の前に段ボール箱いっぱいに届けられた大量の年賀状を中へと運び、一つ一つ区分けして誰から届けられているのかをチェックしていく。

まぁ、ほとんどが店を利用しているリピーターや、考古学会から管理局関連、更には世界を飛び越え護廷十三体などとさまざまであった。

ユーノスは初めて見る地球の正月行事の一つ、この年賀状と言うものに感心した様子を見せる。

「ふむ。成程。年初めにこうして新年の挨拶を書くのをこの惑星（ほし）では年賀状と言うのか・・・確かに、言われれば面白いかもな。地球は」

「でしょ♪それにしても去年よりも年賀状増えてる気がするんだけど・・・」

ユーノはそんなふとした疑問を抱えていると、聞いていた金太郎がメガネを光らせ言う。

「店長に届けられた年賀状の数、去年が１２８３通の届け出。今年は１４９１通となっております」

「何時の間に数えた訳・・・」

思わず苦笑いを浮かべるユーノと、金太郎に便乗する鬼太郎。

「店長は人気者だからな、管理局問わず色んな世界から届いてるっすよ。ほら、これ。尸魂界の白髪の隊長から」

「浮竹さんか。あ、ホントだ♪相変わらず笑顔から人情味の溢れる人だ」

鬼太郎はユーノ宛てに届けられた一通の年賀状を手渡し、ユーノが確認すると、映っていたのは笑顔の十三番隊隊長の浮竹十四郎以下、三席の小椿仙太郎と虎徹清音が張り合う写真であった。

すると、年賀状を見ていくうちに白鳥と浦太郎がふとこんな事を言い出した。

「しかし、こうして見ていくと新年の挨拶と一緒に新生活スタートしましたとか、結婚の生活様式を載せているあれは如何なものかと思うがな・・・特に後者は見ていて腹が立つ」

「ホント。それからさ・・・家族が一人増えましたとか子供の写真貼り付ける人いるけど、偶然増えたような言い方は誤解を招くからやめた方がいいと思うんだ。ちゃんと、セ○○○したら増えましたって書かないとね」

その言葉を聞いた瞬間、怒り心頭にユーノが大声を上げた。

「書ける訳ねぇだろんなこと!!!正月早々変態丸出しかてめぇは!!」

「お、落ち着きなさいませ店長!新年の初めからそのような事は縁起が悪いですぞ。」

卓袱台をヒックリ返そうな勢いの形相のユーノを必死で宥める金太郎。

そして、漸くユーノの気が落ち着いたところで金太郎は年賀状片手にこう言う。

「しかしながら、年賀状は手紙と違い、言いたいことが2・3行で書かれております。その点で言えばこれほどまでに端的な文章はありませぬぞ・・・・・お。浦原商店から来ていますぞ。」

「浦原さんから？そう言えば浦原さんで何か引っかかることがあった気がするんだけど、思い出せなくてさ・・・これ見れば思い出せるかも」

そう思いながら金太郎から渡された浦原からの年賀状に目を通し、ユーノが目にした文章は・・・――

「『去年の昨日、誕生日だったんすよね♪なのに今年も誰も覚えていなかった・・・・・・』」

そ、１２月３１日は浦原商店店長、浦原喜助の誕生日なのだ。

しかし、決まって誰も彼とその次の日が誕生日の四楓院夜一の誕生日を覚えている者はおらず、決まって二人は互いに寂しい誕生日を過ごしているのだ。

「「「「「「・・・・・・」」」」」」

ユーノ達は文章を目にした瞬間、沈黙が流れる。

そして、苦笑いを浮かべながらユーノは口を開ける。

「あはは・・・・僕もすっかり忘れてたわ・・・て言うか引っかかってたものの正体・・・あの人の誕生日の事だったんだ・・・・・・あとで年始挨拶のときにでも『お誕生日おめでとう』って言っとかないと・・・」

「そ、そっすね・・・・・・ん？こいつは確か・・・」

「誰からなのであるか、ピーチ？」

「鬼太郎だよ・・・！ほらあれだ！店長の友達で、トレジャーハンターやってる・・・」

「あ。海東さんね♪そう言えばあの人も日本人だ。どんな事書いてあるのかな・・・」

ユーノは早速、異世界を旅するトレジャーハンター、海東大樹から届けられた年賀状に目を通し、その書かれた中身を確認すると。

「『今年はフェレット君が主役だ。頑張れ、僕は応援しているよ♪』」

と、別にネズミ年と言う訳でもないのに透かした顔で銃を撃つように指を差した写真を張り付ける海東のその言葉に、ユーノは思わず血管を浮かび上がらせ年賀状を豪快に引きちぎる。

「今年はウサギじゃボケ！！！！つうか、ネズミは去年で僕はネズミじゃねェ！！！」

紙くずとなって床にばらまかれる海東の年賀状を見、肩で息するユーノを見て声を失うユーノス。

他の従業員一同も手を止め呆然とする。

「大体何を凝縮したって言うんだよ！あんたは今年も盗賊呼ばわりされてればいいんだよ！！」

と、その時白鳥が海東の年賀状の間に挟まれていたもう一人の友人

からの年賀状を発見する。

「やや。ユーノ店長。門矢士からも来ているぞよ」

白鳥はそう言って、海東と同じく異世界を旅する青年でユーノの友人でもある門矢士が書いた文章を呼び上げる。

「『破ってもムダだぜ、ユーノ。海東だぜ海東』」

「う！流石は士さん・・・よく分かってらっしゃる・・・」

海東の性格を長年の付き合いで知り尽くしている士だからこそ言える台詞なのであった。

そしてまた直ぐに、今度は金太郎が一つの年賀状を見つけ出す。

「ぬ！店長！これはこれは珍しい・・・キバの店長からの年賀状です！」

「え！もう一人の僕から！？」

ユーノは驚く訳にはいかなかった。

ユーノが口にしたもう一人のユーノとは、嘗てのレジェンドルガ事件で共闘した別世界に存在する仮面ライダーキバとしての宿命を背負ったユーノ・スクライアのことだ。

一年ぶりの彼からの近況報告に内心ドキドキしながら早速目を通すと、なのはやヴィヴィオと一緒に生まれた子供を抱えて幸せオーラ全開の家族写真が貼りつけられ、下にはこう書かれていた。

「『あけましておめでとう、もう一人の僕。君も早いところそっちのなのはと子供でも作りなよ。楽しいよ、夜の夫婦の語らいは♪』」

「おおおい！！！！！！！もう一人の僕！！！！！君だけは信じていたのに！！！！」

絶叫するユーノの傍らで、耳を押さえるユーノスと従業員一同。

そして、ユーノはため息を吐きながらまともな内容の文章が書かれた年賀状がまだ一通もないことにあきれ返っていた。

「まったく・・・どの人も的外れと言うか変な事ばかり書いてさ・・・もうちょっとマシな人はいないのか・・・お」

すると、ユーノが偶然手にした年賀状の差出人に「桂小太郎」と書かれているのを発見。

「桂小太郎？あれ・・・待てよ・・・それって確か銀さんの友達で攘夷浪士の・・・てか！そんな人がどうやってウチの住所調べた訳！？どうやって異世界からウチにこれ送った訳！？」

そんな事を考えながら裏を返すと、そこにはこう書かれていた。

「『アンゴルモア・銀魂篇、聖王教会の外でずっとスタンバッてました。』」

ユーノは読んだ瞬間床にそれを叩きつけ、天に向かって叫んだ。

「知るかっーーー！！！」

その一方で鬼太郎はアンゴルモア・銀魂篇のことを思い返しながら口にする。

「出るタイミングが無かったんだろうな。あの時は大人数だったし、ちょっと悪いことしたっすね」

「俺はそいつがどんな奴かも知らないし、その回はまだ登場していなかったから何とも言えぬが、同じ奴から他にも何通も届いているぞ・・・」

苦い顔を浮かべながらユーノスがそう言うと、ユーノ達は桂小太郎から届けられた不幸の手紙並みに迷惑なそれに目を通す。

「『やっぱり堅物キャラはクロノ殿ですか?』」

「『アンゴルモア・銀魂篇、聖王教会の外でずっとスタンバッてました。』」

「『クロノ殿がいたら俺は要りませんか?』」

「『アンゴルモア・銀魂篇、聖王教会の外でずっとスタンバッてました。』」

「『つーか、クロノ殿は銀時と声が被るから紛らわしい!』」

「被ってないって言ってるでしょう!!!つうかなんなのこの人!!一度コーナーで紹介したけどやっぱうざいんですけど!!銀さんの言った通りだよ!!」

ユーノは銀時のような粗悪な口調で桂の年賀状に突っ込みを入れると、疲れ切った様子で呟く。

「ちょっとちょっとみんなして舐めてるでしょ？こんなんだったらミッチー、ヨシリンのバカップルの結婚報告の方がまだマシだよ・・・」

すると、何気に年賀状を見ていたユーノスが苦い顔を浮かべてユーノに言って来た。

「ユーノ・・・他にも結婚報告送ってきている者がいるぞ・・・俺達の知り合いだ」

ユーノスが徐にユーノに見せた年賀状の裏に書かれていたのは、小鳥遊万梨阿とユーノの顔だけが不自然に貼り付けられた偽造写真付きの分だった。

「『結婚しました？なのはさん、ユーノ様はいただきましたわ。お先に御免なさいね♪』」

ユーノはそれを受け取りくしゃくしゃにしてからトイレの中に放り投げ水に流す。

「誰がだぁあああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

相当なまでに怒り狂うユーノ。

本人としてはなのはとの結婚が望んでいたのかもしれないが、彼には今のところ欲望が無いため、そんな事など恐らく望んでいない筈なのだが・・・少なくともマリアとの結婚は死んでも望んでいなか

ったらしい。

と、そんなユーノに鬼太郎は大量の送られてきた同様の年賀状をユーノに見せる。

「店長、無駄っす。大量に送られてきてます。」

「だあああああああ!!何勝手な真似してんのさ、あの人は!不自然過ぎるでしょこの写真!首から下別人じゃねぇかよ!誰だこいつは!!」

偽造写真を見ながらフラストレーションを高めるユーノ。

そんなユーノに金太郎が残酷なものを見せる。

「ぬ?お祝いの年賀状が届いておりますぞ。」

それは、その結婚報告を真に受けてしまい思わずこう書いてしまった木之本桜、小狼夫妻と守護獣ケルベロスの写真が張られた年賀状。

「『ユーノさん、結婚おめでとうございます!(さくら)。緑の兄ちゃん、バツつかんよう気いつけてな!(ケルベロス)。ユーノ、お前はてっきりなのはとするのかと思っていたよ(小狼)。』」

「さくらさん!!!それに小狼さんも!!!小鳥遊さん何してくれてんだ!!!」

衝撃的な言葉に表情が凍りつくユーノ。

「どうやら既にあちこちばら撒かれてるらしい・・・」

白鳥はそう言いながら同じところから送られた複数の年賀状を手に取る。

中身はすべて、八神家一同から送られたものだが内容が妙な事になっていた。

「『は‥あけまして、結婚もおめでとうなユーノくん。何やシグナムが・・・末永くお幸せに』」

「『ヴィ‥ユーノが結婚したって聞いてから、シグナムの奴・・・末永く幸せに』」

「『シャ‥シグナムったらホント変な・・・末永く幸せに!』」

「『ザ‥シグナ・・・末永く幸せに!!』」

「『シ‥去年は世話になった。女房を泣かせるなよ。末永くお幸せに!!!』」

ユーノは愕然と足し尽くしながらそれらの内容を目に映し、明らかにシグナムの手によって隠蔽されたそれぞれの文章に共通した言葉を聞いていた従業員一同は言う。

「なんかややこしいことになってるんですけど・・・これ後半明らかにシグナムさんが隠蔽工作してるよね・・・大丈夫な訳?」

「シグナムの奴・・・本当はユーノの事が好き・・・」

「そ、それは無いですよ!!!絶対!!絶対ありえません!!!」

ユーノスの言葉にユーノが首を全力全開で横に振り、否定の言葉を並べる。

と、直後金太郎はとんでもない年賀状を発見する。

「て、店長一大事ですぞ!!!なのは殿からこの偽造結婚報告に絡んで・・・!」

「え!!なのはから!!ま、まさか・・・・・・!!!」

恐る恐るおびえた目でなのはからのそれを受け取り確認するユーノ。

送られてきた三枚にはこのように書かれていた。

「『マリアさん、頭冷やすの』」

「『雌豚頭冷やす』」

「『小鳥遊、ぶっ殺す!!』」

言葉も乱暴なものとなり、後半からはほぼ怒りに満ちて殴り書きのようになっているそれを見てユーノも他の従業員も鳥肌を立てる。

「おい!!!!!なのは隠蔽しなきゃいけないところ丸出しだよ!!!殺意丸出しだよ!!」

すると、ここでそれに因んでいるのか知らないが、またしても桂からの報告が入っていた。

「店長。また桂って野郎から来てますよ」

「なんで!?何でこんな茶番にわざわざ!?まさかあの人まで結婚しましたなんてうそぶいてるんじゃ・・・!」

と、言いつつ中身を見ると、そこにはこう書かれていた。

「『式場の外でずっとスタンバってました』」

「「「「「何してんだこいつは!!!どこまでスタンバってんだよ!!つうかハガキ来てから行っても遅いだろ!!!」」」」」

六人は最早意味不明な年賀状を送りつける桂に盛大なツッコミを入れるほかなかった。

一通りのねんがを見終わったユーノ達であったが、それ表情は疲労困憊の様子であった。

「たく・・・年賀状でこんなに疲れたのは初めてかも・・・」

「そうだな。しかしあれだけの年賀状、お前は確実にあちこちから慕われているのだ。それはいいことだと思うがな」

「まぁ・・・そうですね。」

ユーノスの言葉を聞き、思わず言葉を詰まらせるユーノ。

すると、時刻はもうすぐ１１時を迎えようとしていた。

浦太郎達従業員は玄関の方へ出ると、ユーノに新年会の会場となっ

ている海鳴の実家に帰省しているなのはの家に行くことを促す。

「店長♪そろそろ行きましょうよ。なのはちゃんに会いに♪」

「ああ。そうだね。」

ユーノもユーノスを肩に乗せて準備を整えると、従業員を引き連れてなのは達の故郷、海鳴市へと向けて出発する。

今日は従業員と一緒に歩いて移動をしているユーノであったが、鬼太郎はふと神社や大型百貨店の前を通りかかると、その人の多さに言葉を漏らす。

「それにしても、流石に正月だけあって・・・人が多いっすね。」

「混沌としているのは嫌いだが、祝い事なら話は別だ。実に正月らしい」

「あとでみんな揃って初詣に行きましょうね♪」

「はは。みんな揃ってと言っても、スバル達はミッドの方で正月過ごしてるし、前線メンバー全員がいる訳じゃないからね。」

と、そんな談笑をしていたユーノだが、不意に前から歩いてきた一人の男と肩がぶつかった。

「「お！」」

肩がぶつかった後、その男の懐から財布が飛び出し、男は真っ先にユーノに向かって頭を下げる。

「あ、ごめんなさい。」

「あ、こちらこそすみません。あの・・・財布落としましたよ」

ユーノは足元に落ちていたその男の財布を拾い上げる。

「ありがとう。失くすと大変だったんだ・・・！」

「・・・・・・」

ユーノは男の顔を思わず凝視する。

男はユーノに凝視されると、困惑した様子で問いただす。

「あの・・・俺に何か？」

「え。あ、いえ！なんでもありません。それでは僕らはこの辺で」

「次からは気をつけろよな！」

ユーノとぶつかった男に向かって敵をむき出しにそう言う鬼太郎だが、直後金太郎の鉄拳が頭にヒットする。

「ふん！」

「痛いっ！」

ユーノ達が自分の前から過ぎ去っていくと、その場に取り残されたその男・・・沢田綱吉はユーノの後姿を見ながら物思いに考える。

「（なんだろう・・・さっきの人・・・何処か自分と同じ匂いを感じた・・・いや・・・何ていうか・・・前にもこんな・・・・・・）」

神妙な表情を浮かべるツナであったが、直後後ろから自分を呼ぶ声が聞こえた。

「ツっ君」

「十代目！」

「お？ああ・・・みんな」

ツナが振り返ると、やって来たのは彼の妻である京子と、その右腕であるイタリア人と日本人のハーフ、獄寺隼人にその妻を含めた古くからの仲間であった。

京子は満面の笑みを浮かべながらツナに自慢の振り袖姿を見せる。

「お待たせ。うふふ、どう似合うかな？」

「うん。凄く似合ってるよ京子ちゃん。お、流石の山本はよく似合うや」

ツナはそう言うと、中学時代からの親友で獄寺の次に信頼を置ける日本人、山本武にそう言うと聞いていた山本も軽く笑みを浮かべる。

「はは。褒めても何もでねぇぞ。さ、早いとこ行かねぇと、混んじまうぜ。」

山本の言葉に便乗し、京子の実の兄でありツナの守護者の一人でもある笹川了平は言う。

「ああ。京子、今年は何をお願いするつもりなのだ。」

「う～んと・・・やっぱりツっ君とみんなの事とか、あとは・・・・・子供が早くできますようにとかかな♪」

「きょ、京子ちゃん・・・／／／」

気恥ずかしそうに京子がそう言うと、聞いていたツナは顔を赤く染める。

獄寺とその妻のハルはそんなツナにこう言った。

「十代目。奥方と共に右腕であるこの俺が願掛けをしたいと思っています。」

「そうですよツナさん。夜の語らいは圧しで行きませんと！」

「は、ハル／／／そう言う事人前でデカデカと言うな・・・／／／」

のちに、彼らが今後のアンゴルモア事件の被害者となるとはこの時、彼らもそしてユーノ自身も夢にも思わなかっただろう。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

さて、午前１１時５０分を迎えようとしていた時間帯。

ユーノ達一行は海鳴市に到着しており、真っ直ぐなのはの実家を目指して歩いていたが、ユーノは先ほどのツナの事がどうも気にかかっている様子であった。

「さっきの人・・・何か何処か出逢ったような気がするのは気のせいかな・・・」

そんな事を考えている間に、ユーノ達はいつの間にか高町家へと到着する。

正月の飾りがしっかりと飾られたなのはの家の玄関をくぐり、ドアの前に立ったユーノは一度服を整える。

浦太郎はかなり興奮した様子でこう口にする。

「ああドキドキする。待ちに待ったなのはちゃん達の振袖姿!!」

「お前が興奮してどうすんだよ。」

「ユーノ店長。早くインターホンを」

「はいはい♪」

ユーノは白鳥に促され、徐にインターホンを押す。

すると、家の中で先に集まり料理支度をしていた女性陣・・・フェイト、はやて、桃子や美由紀、更には今回初めて招待を受けた友枝町在住の木之本桜やその友人の大道寺知世の耳にそれが聞こえる。

フェイトはそれを耳にし、はやて達と顔を合わせて言う。

「お。お待ちかねの人が来たようだね」

「なのは。行って上げて頂戴」

「は～い♪」

桃子に頼まれ、ユーノ達の方へと向かうなのは。

ユーノはなのはが出てくるのを待って心拍数を徐々に高めていきながら、こんな事を考える。

「（今年はなのは・・・どんな振袖なんだろう・・・）」

頭の中で色んな振袖を来たなのはをイメージし、頭が蕩けそうになるユーノ。

すると直後、徐に玄関の扉が開かれ中から出て来たのは、薄い桃色をベースにした花の模様が描かれた振袖に身を包んだなのはがユーノ達の前に現れた。

「いらっしゃい、ユーノ君♪それとスクライア商店の皆さん。新年あけましておめでとうございます」

「「「「「「おめでとうございます」」」」」」

懇切丁寧に頭を下げて新年のあいさつを行うユーノ達。

ユーノは自然な笑みを浮かべつつユーノに顔を向ける少し頬の染まったなのはを見ながら、自分の頭は完全に蕩けてしまっていた。

「（あ～～～やっぱりなのはの振袖はいい！！今年は桜色か・・・・・・やべぇ超綺麗だ♪）」

すると奥の方から、同じく振袖に身を包んだヴィヴィオが走ってきた。

「パパ！」

「お、ヴィヴィオ♪あけましておめでとうございます」

「おめでとうございます。それよりどうママとお揃いなのこれ！」

ヴィヴィオもまたなのはと同じ柄の振袖を着ており、それを見せつけながら一回転をすると、ユーノは自然な笑みでヴィヴィオの頭に手を乗せる。

「うん。凄く似合ってるよ。やっぱり二人が同じ物着てるとホント実の親子って感じがする。」

「にゃはは。もうユーノ君たら♪あ、それよりユーノ君にビックリな人を紹介しないと！」

「？ビックリな人・・・」

なのはの言葉に訝しげな表情を浮かべるユーノだったが、その時奥の方から現れた人物に目を疑い、その人物は着物に身を包んだ状態でこう言ってきた。

「ようユーノ。暫く見ないうちに、逞しくなったそうじゃないか」

現れたのはなのはの実の兄にして、御神真刀流の継承者でもある高町恭弥であった。

その後ろからは恭弥の恋人（未だに）である月村忍も一緒に居た。

「きょ、恭弥さん!!それに忍さんまで・・・!」

「ああ。正月はやっぱり、日本で過ごすのが一番落ち着くからな。それに、お前が何時の間にやらなのはをものにしていたと父さんから聞いて、その腕を見たくなった。あとで道場に来てもらおうか。但し、用いるのは日本刀・・・」

「ぐ!（あちゃ!!!こうなったら止めようが無いよ・・・）」

妹のなのはに対して異常なまでのコンプレックスを抱く恭弥は殺意をむき出しにしてユーノにそう言うと、ユーノは思わず目をそらしてしまいなのは達も苦笑いを浮かべる。

と、その時そんな恭弥の肩に手を乗せて来たのは正体を受けていたユーノの師、黒崎一護であった。

「まぁあんたの気持ちは分からなくはねぇけどよ、俺の弟子を甘く見てると正直怪我じゃすまねぇぞ」

「一護さん!」

「おう。あけましておめでとう、ユーノ」

一護がそう言ったあと、奥の方から織姫やコンも顔を覗かせる。

「お前たちも来ていたのか。」

ユーノスがそう言うと、一護達は顔を見合わせ言う。

「ああ。序に玄関の靴を見て分かる通り、現世組はここに集まって来てる。ルキア達も含めてな。」

すると、その言葉を聞いていた茶の間の恋次達やアリサにすずか、更にはケルベロスなどがユーノ達に顔を見せてきた。

「「「「「「「「「「あけまして、おめでとう！」」」」」」」」」」

「ほう。これはまた大勢いらっしゃいますな」

思わずその人数の多さに圧倒されるユーノ達。

ユーノが到着すると、ほろ酔い気分で一升瓶片手の士郎が近づいて来た。

「ユーノ君、待っていたよ。ささ、遠慮なく上がってくれ。ちょうどこれから酒宴を開くつもりだ。なのはや桃子たちのお節料理もふんだんに用意してあるからな。それに、恭弥も一護君、それに恋次君達もいることだ。男同士、美味い酒でも飲んで新年を盛大に祝おうじゃないか！」

「お父さん。ユーノ君に呑ませすぎないでよね」

「ははは・・・はい。では、御邪魔させていただきます」

ユーノ達が家の中に上がり、暫くしてからなのは達が作った豪勢なお節料理や士郎たちが用意した酒が大型のテーブルの上に並ぶと、全員はそれぞれ席に着きコップ片手に死神も魔導師も動物も変な生き物も入り混じった盛大な宴会が始まろうとしていた。

士郎がコップを掲げてその場に立ち上がると、全員を代表して乾杯の挨拶を言う。

「それでは、新しい一年と我々の末永い祝福を祝って・・・乾杯！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「乾杯！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

こうして始まった総勢４０人の一際騒々しくも楽しい楽しい新年会。

て言うかこの人数でも収容できる高町家って・・・ああそうか。

道場でやってるんだなきっと！

そんなことは作者の疑問も解決された上で、早速見ていこう。

なのはは早速自分の作ったお節料理を隣に座るユーノの口に入れていく。

「あ～ん♪」

「あん♪」

周囲に甘い甘いピンクのオーラを発散しながら途中で血を吐いて倒れていくものを無視して二人だけの世界を堪能するユーノとなのは。

「美味しい、ユーノ君♪」

「うん。この味付けがもう絶妙だよ♪なのはまた腕上げたね」

「にゃはは♪だってユーノ君が美味しいって言ってくれるのが嬉しくて？」

「そうか、そうか？」

こんな二人のやり取りを見ていた、アリサ・一護・恭弥の三人は怒鳴り声を上げる。

「「「正月早々いちゃついてんじゃねーバカップルが！」」」

騒々しいこの中で、木之本夫妻はたじたじの様子であった。

「ほえ～～～なんかすごいね小狼君・・・」

「流石にこれだけの人数だしな・・・それに割と人相の悪い奴もいるし・・・」

小狼がそう言うと、隣で聞いていた恋次は詰め寄り猛抗議。

「おい！それは俺とかって言うんじゃねぇだろな！」

しかしそんな恋次に意外な事を行ったのは知世であった。

「あら。私は素敵だと思いますわよ恋次さん。」

「お・・・そうか／／／」

知世の言葉を聞き、頬を染める照れた様子の恋次をルキアは厳しく叱咤する。

「何を照れているのだ貴様は！」

「ぬっほ！」

豪快なチョップを頭に喰らう恋次に、小狼たちは呆然とした。

一方で大人な女性のリンディ・ハラオウンとクロノの妻、エイミィは織姫と向かい合いながらこんな会話をしていた。

「それにしてもホント似てるわよね、織姫さんとエイミィの声って」

「ホントホント。声紋なんかほとんど一緒で、センサーも間違えちゃってたりして。」

「あはは。前にクロノさんに声かけたら『エイミィ、僕になにか用か？』なんて言われちゃって。それはもうビックリで！」

すると、それを聞いていた一護はクロノに向かって鼻で笑いながら言う。

「お前。自分の妻の声色も聞き分けられねぇのかよ。なっさけねぇなおい」

「ぼ、僕だってあの時はホントにエイミィかと／／／大体、あなただって同じようなハンデを抱えてるはずだ」

「ふん。織姫の声の方が若干声量が高いんだよ。そうだろコン？」

「おうよ！てめぇのおっさんの耳じゃ一生この違いなんざ聞き分けられねぇよ！」

「く～～～！！！」

新年早々周りから小ばかにされる３０歳を迎えたクロノ・ハラオウン。

そんな夫の背中に手を当てながら、子どもたちと一緒に親指を立てるエイミィ。

「クロノ君。ファイト♪」

「「ゴーゴー！」」

「エイミィ・・・カエル達もな・・・」

肩身の狭い想いを強いられる苦労人、クロノなのであった。

では、フェイトと共に地球のハラオウン家の方で休暇を過ごしていたフェイト、エリオ、キャロの方はどうしているのか？

キャロはリンディが擁し、フェイトに手伝ってもらった振袖に満足した様子であり、フェイトはそんなキャロに見取れながらジュース

片手に呆然としていた。

「キャロ。帯、きつくない？」

「はい。大丈夫ですよ。」

「そっか。エリオ、どう？これ見た感想は？」

「え・・・えっと・・・／／／」

気恥ずかしそうに持っていたジュースに顔を向けるエリオと、上目づかいでエリオを窺うキャロとフェイト。

「エリオ君・・・どうかな？」

エリオはそんなキャロの可愛さに沸騰しそうになりながら、正直な感想を口にする。

「よ、よく似合ってると思いますよお二人とも／／／本当に見事なまでに／／／」

「やった！嬉しいな、エリオ君に褒めてもらえると♪」

「うふふ。あれ？そう言えば気になってたんですけど、マリアさんは一緒じゃないんですか吉良さん？」

フェイトが辺りを見渡した時、この会場に居ると思っていたあのユーノぞっこんの小鳥遊万梨阿がいないことに不思議に思いながら吉良にそう尋ねると、吉良は苦い表情を浮かべて言う。

「いや・・・それがその・・・呼ぼうとしたんだけど全然連絡が取れなくて、代わりにこんなものが彼女の部屋に残されていて・・・」

フェイトは吉良があるものを手渡された。

それは年賀状と思われる一枚のハガキであったが、裏を返すと書かれていたのは実に恐ろしい内容の者であった。

「『喪中につき、新年の挨拶はご遠慮させていただきます。この度ペットの雌豚が永眠いたしました・・・・・高町なのは』」

「なのはあああああああああああ!!!!!!!!!!」

思わず声を上げて涙を流すフェイトに、全員が騒ぎを止めてフェイトを注視。

なのははユーノと顔を見合わせてから徐に尋ねる。

「?どうしたのフェイトちゃん。私がどうかした?」

「うんうんうんうんうん!!!!!!!何でもないの!!!!!!」

フェイトは悟られまいと必死で首を横に振り、その横でお節料理を口いっぱいに詰め込んでいた仮の姿のケルベロスとユーノスは顔を合わせる。

「言えんわな・・・口が裂けても今思ってることは言えんわな・・・」

「小鳥遊は・・・今頃どこかの川辺にでも浮かんでいるのではないだろうか・・・」

のちにこのユーノスの予想は見事的中することになるのであった。

また、宴会が盛り上がってくると酒に酔った士郎と恭弥が声を上げて日頃のうっぷんから何までを超えに上げて一升瓶片手に笑顔を浮かべていた。

「ははははははは!!!!!恭弥!!!!!!!お前も今年で・・・35か!すっかり更けてしまったな!!ははははは!!!!!」

「父さんこそ!!!もう52だろ!?人のこと言えるかってな!!!ははははは!!!!!」

「ようし!今日は呑むぞ!!!」

「父さんには負けないぞ!!!」

すっかり父と息子の語らいモードに入ってしまった二人を見ながら、今年で48歳を迎えようというのに15年以上も美貌を保つ桃子と恭弥の恋人のすずかは呆然とその光景を見ていた。

「あらあら。相変わらずなのね」

「ごめんなさいね。恭弥、酔うと本当に人が変わるものですから」

「いいのよ全然。あの人も、久しぶりの息子との対話が嬉しくてしかないんだから」

この時、美由紀は雑煮を食べながらふと思った。

「（お母さんって・・・本当に更けてないけど、ひょっとしたら・・・妖怪?!）」

実の母親のことをそんな風に考えてしまいがちな美由紀なのであった。

なお、今回の新年会に集まったのはフェイト達だけではなく、はやて達元・海鳴市民も一緒であった。

はやてはシグナムやシャマルなどど談笑をしながらお節料理をつまみつつ、お酒を飲む中、ヴィータは一人誰かと張り合うように豪勢な料理の中から鯛を選択し、箸をつけようとする。

「お!これ美味そうじゃん!」

箸を鯛に伸ばそうとしたその時、横から金太郎の声が入ってきた。

「ストーーーップ!」

「な、何だよいきなり!?」

突然大声を上げてきた金太郎にそう言うと、金太郎は今にも噴火しそうな雰囲気を醸し出しながら鯛に関する薀蓄を交えてこう言って来た。

「よいですか・・・ヴィータ殿。お節料理において鯛とは特別なもの。昔は『睨み鯛』と言って、三箇日には鯛には手を付けず・・・今でも元日は鯛を食べないという風習が残っていると、文献にも書

かれているのです・・・」

「え・・・そうなのか、はやて？」

ヴィータが気になってはやてにそう尋ねると、聞いていたはやても顎に手を当てながら返事を返す。

「あ、そうやね。確かにそう言う話は前に本読んでて見た記憶はあるさかい。正しいと思うよ」

はやての話を聞くと、ヴィータはため息交じりに軽く話を聞き流した様子で言う。

「ふう～～～わかったわかった」

ヴィータは金太郎の忠告を無視し、再び鯛の方へと箸を向けると見ていたリィンとアギトは思わず目を見張る。

「あ、ヴィータちゃん！」

「おい！お前！」

そして、同時に金太郎の怒りも爆発する。

「ぬ！！！ぬおおおおおおおおヴィータ殿！！！」

金太郎は聞き分けのない子供のヴィータの頭を非常に硬い拳で殴りつける。

「痛って！てめぇ金太郎！！！殴ることはねぇだろ！！」

すると金太郎を擁護する形でシグナムが呟く。

「お前が人の話を聞かぬのが悪い。」

「何だと・・・って!また殴ったな!」

そしたらこの騒ぎに便乗して鬼太郎が参加し始める。

「なんだ、喧嘩か?俺も混ぜろ!!」

「混ざってんじゃねぇよ!!」

「おい、もっと静かにしろよ!今日は正月なんだぞ!」

思わずそう一喝する一護であった。

その後、高町家からの招待を受けた浦原喜助を始めとする浦原商店の面々が集まると、庭先へ出て蒸かしたもち米を臼に投入し、一護が杵でもち米を潰し、ユーノがくっつかないように水をつけていく。

「「よいしょ!」」

二人が息の合った動きで餅を叩いて行く姿を見ながら、集まった者達は嬉々とした表情を浮かべる。

「わぁ!餅つきなんて、小学校の時以来かも!」

浦原は扇子を広げながら夜一の隣に立ってこう言う。

「やっぱり、正月はめでたい事をするのがいいかと思いましてね♪ちょっくら店から持ってきちゃいました♪」

「お主達も参加して行け。」

「はい。ありがとうございます」

二人がある程度餅を柔らかくした後、一護の代わりに杵を持つのは鉄槌の騎士ことヴォルケンリッターのヴィータと、その相手をする羽目になった三番隊隊長の恋次。

ヴィータは大きく杵を振り上げて恋次に言う。

「そんじゃいくぜ」

「って！なんで俺が！？」

未だ自分のポジションに困惑した様子の恋次だが、横からルキアやコンの声が聞こえる。

「いけ、ヴィータ！」

「ぶち抜け！」

ヴィータは不敵な笑みを浮かべると、杵を放り投げて自分の愛機グラーフアイゼンを取出し、思い切り恋次に向かってそれを叩き落とす。

「でらあああああ！！」

「ぬおおおおおおおお！！」

恋次は皮一枚のところでそれを回避し、息を荒立てる中、一護・ルキア・ユーノの三人は指を鳴らして言う。

「「「おしい！」」」

「惜しくネェよ！なに怖え～ことさらっと言ってんだよ！つうか、ヴィータ！餅つき用の杵はそっち！それグラーフアイゼンだろ！！」

「さぁ・・・私は知らねェ・・・よ！」

「あああああああああああ！！」

ヴィータは悪意に満ちた笑みを浮かべながらグラーフアイゼンを再び恋次に振りおろし、恋次は隙を突かれまともにそれを受けてしまう。

「「「よし！」」」

恋次がこっ酷い目に遭う様子を先の三人は嬉しそうに見つめる。

餅つきが終わると、今度は正月らしく羽根つきが行われる。

ペアは井上・恋次とさくら・すずかの二人であった。

「ええい！」

「それ！」

さくらの羽根つき姿をしっかりとビデオに収める知世。

「さくらちゃん素敵ですわ！」

その横で美由紀は小狼に向かってこう言った。

「へぇ。すずかちゃんもそうだけど、さくらちゃんも運動神経抜群なんだね。」

「あいつは昔からそうなんですよ。まぁこれぐらいは」

そんな会話をしながらも羽根つきの様子を見守る全員。

「ほいっと！」

すずかから飛んで来た羽を柔かい返し方をする織姫。

恋次はそんな織姫に抗議する。

「ばぁか。なに温るい返し方してんだよ！」

「恋次。上見ろ上」

「あ？」

不意に聞こえてきた鬼太郎の声を耳に入れながら恋次が上を見ると、何と頭上には飛び上がったさくらが勢いよく羽を振り下してきたのだ。

「やあああ！」

「ふぎゃあああああああ！！」

恋次は強烈な一撃を顔面に受け、思わずその場に倒れ込む。

夜一やルキアはそんな恋次を見ながら言う。

「情けないの」

「ダメだな、恋次」

「う、ウルセー！！こっちは、昨日と今日で寝不足なんだよ！」

恋次がそう口にした理由は、昨日も吉良や一護達と一緒に夜遅くまで酒を飲んで大晦日の夜を過ごしていたからなのであった。

羽根つきが終わると、今度はまた一風変わった見世物・・・いや違う。

道場の方で怒り心頭な様子の恭弥がユーノに向かって自慢の御神の二刀小太刀で迫ってきたのであった。

「ユーノ！！！」

「ひえええええええええええ！！」

「よくも俺からなのはを！！！」

ユーノは鬼神の如く恭弥の凄まじい斬撃を逆刃刀と洞爺湖木刀で受け流し、なのははそんな嫉妬心を燃やす兄の姿を見ていられず大声

を上げた。

「お、お兄ちゃん！止めてよ！！ユーノ君にイジワルしないで！」

今にも爆発しそうななのははレイジングハートを起動させようとしており、それを見たフェイトやヴィヴィオは全力で制止させ、織姫と一護は互に口にする。

「お兄ちゃんとして、やっぱり妹を取られるのは複雑なんだね」

「素直じゃないんだろうあの人も。ま、夏梨と遊子が結婚するって聞いたら、俺もなりかねないかもしねぇしな。あ・・・その前に親父がいるか」

「恭ちゃんだって、ホントはユーノの事認めてくるくせに・・・いや～ね男のヒステリーって。」

「て言うかユーノもユーノで凄いわね・・・あの恭弥さんの斬撃全部的確に捌いてるし・・・」

アリサは呆然としながらも一流の剣の腕を持つ恭弥の斬撃をまるでものともせずに受け流し、柔を制するユーノを凝視し、ユーノスや浦太郎は真顔で言う。

「伊達に、次元世界最強って言われるだけはあるからなあいつは」

「あれくらいはね」

一方で恭弥も恭弥で過去１０年の間に驚異的な強さを身に付けた今のユーノの戦闘力と剣の腕に正直驚いていた。

「く！くそ・・・いつの間にか俺以上に剣の腕を上げるとは・・・ユーノ！貴様俺のいない間に何をした！？」

「いや何って・・・一護さん達と訓練してただけでして・・・」

「何だと！？淫獣風情が、この御神の継承者たるこの俺よりも強くなろうとは・・・天地がひっくり返っても許さん！おおおおおおおおおおお！！！」

「ぎゃあああああああ！！！」

恭弥はいつにもなく殺気をむき出しにして、嫉妬心と一緒に対抗心をユーノに燃やしながら嫌がるユーノを無視して攻撃を加え続け、なのはもなのはでとうとう我慢の限界を迎えたのか、バリアジャケットに身を包み無敵の魔王スマイルを見せ始めた。

「お兄ちゃん・・・・・・ユーノ君にイジワルしちゃダメって言ってるでしょ・・・ユーノ君だって迷惑してるんだから・・・ね」

フェイトやヴィヴィオ、この場に居る面々（桃子や夜一）以外は全員恐怖に戦いた。

「あ・・・えっと・・・／／／」

「なのはママの魔王様スマイル・・・／／／」

「「「こえ～～～！！」」」

そんなやり取りがあった後、鬼太郎は羽根つきの罰ゲームによって

顔中真っ黒に染まった白鳥という苗字なのに黒鳥と言うべき姿の白鳥に大笑い。

「ぷぷぷ・・・ははははは!!!!!!おい鳥!何だよその顔は!?」

「・・・・・・／／／」

白鳥は顔中真っ黒に染まりながら羞恥心を露わにしていると、織姫とエイミィが声を揃えて今の白鳥の姿を見てこう言った。

「「ナツ&スター」」

「誰であるかそれは!と言うか、同じ声で同じこと言うのは止めてくれ!」

「あはは♪しかし、すっかりお正月を満喫しちゃったな。あとは初詣に行くくらいかな」

「さっき儂らが通った時だが、未だ人混みで溢れかえっていたぞ。」

「この調子だと、多分他の神社も同じでしょうね」

「しょうがねぇか。初詣は夜にでもするか」

「出来れば明るいうちに過ごしたかったけどね」

と、少々残念そうな様子のユーノ達だったが、その時さくらが徐に手を上げる。

「あ、あの！」

「どうしたんですか、さくらさん？」

「それなら、ちょっとした穴場があるんですけど、いいですか？」

「穴場・・・ですか？」

訝しげな表情を浮かべるユーノ達。

兎にも角にもさくらについて行くことにした一同は友枝町と海鳴市の狭間に位置するさくら一押しの穴場スポットに足を運んだ。

「ここです！」

さくらがそう言うと、全員は人の気配がまるで感じられない古びた神社の境内を見渡し、声を漏らす。

「ほぉ～～～確かに穴場だ。人が全然いない」

「今じゃすっかりさびれて、お参りする人もほとんどいなくなっちゃったんですけど、私達は時々ですが、夫婦で来たりとかしてるんです。」

「成程な。ようし、じゃあお参りしていこうぜ」

全員は早速神社の境内へと足を運び、さい銭箱の前に立った後、不意に鬼太郎がエリオとキャロ、更にはクロノの子供に向かってこう言って来た。

「いいか、エリオ。キャロ。それにガキども。神社ってのは三顧の礼が基本なんだぜ」

「「「「三顧の礼？」」」」

すると、それを聞いていた浦太郎とユーノは思わずこけそうになったが、直ぐにその間違いを訂正する。

「先輩。それを言うなら二例二拍でしょ」

「三顧の礼は目上の人が格下の者に対して三度も出向いてお願いをするって中国の故事から来た言葉だよ」

「ぐ・・・！」

自分でも途中まで気好かなかった恥ずかしい間違いに顔を赤く染める鬼太郎に、ユーノスは鼻で笑いながら言う。

「ふん。とんだ失敗だな」

「うるせー！！てめぇはスッコんでろフェレット野郎！」

まぁそんな失敗もお参りをすれば水に流せるだろう。

全員はさい銭箱に五円玉などを放り投げて、二例二拍の順にお参りの作法を守り、手を合わせると各々が自分の欲望を口にする。

「今年こそ、素敵な出会いがありますように！！」

「今年も強者との戦いをお願い申します。」

シグナムの欲望を耳にした瞬間、呆れかえりながらヴィータとアギトは深いため息をつく。

「「はぁ・・・」」

そして、なのはの方はユーノに聞こえないように心の中でかなり傲慢とも言える願いを頼み込んでいた。

「（今年は・・・ユーノ君ともっともっと仲良く、それで最終的には・・・結婚とか赤ちゃんが出来たらいいです。いや、絶対そうしたいです！だからお邪魔虫のマリアさんには絶対に負けたくありません！！）」

「（心の中で願っている事なのに、俺には手に取るようにわかるのはどうしてだ・・・）」

ユーノスはユーノの肩に乗りながらなのはの心中が何故か手に取るようにわかってしまう自分が怖くなった。

またなのはとは違い、純粋なる子供らしい願いを口にするヴィヴィオ。

「もっともっと、アインハルトさんやみんなと一緒に強くなりたいです！」

その横では、ユーノが黙したまま手を合わせている。

「・・・――」

気になった一護がユーノが願ったことを聞いてみた。

「お？ユーノはなんてお願いしたんだ？」

「僕は――――――みんなが幸せでありますようにですかね♪」

それを聞いた瞬間、一同は実にユーノらしい願いにほくそ笑み、また自分の事を一切眼中に居れていないユーノに苦笑いを浮かべながらこう言い返す。

「お前は・・・・・偶には自分のことお願いしろよ。俺達はいいから」

「僕はみんなが幸せなら自分も幸せなんです。それに、いつか近藤さんにも言われてますけど、僕は欲望の空白――ブランク・オブ・デザイアなんです。」

「ブランク・オブ・デザイア・・・――それもどうなんだろうな」

ユーノスがそう言うと、全員の表情が曇り出す。

士郎は周りを見渡し、曇った表情の全員に声を向ける。

「・・・ほ、ほら！みんな揃って正月から時化た顔をするな。運が逃げていくぞ。ささ、もっと華やかに笑おうじゃないか！」

「そうですね♪」

ユーノはそんな士郎の心遣いに笑みを浮かべると、一護達も一緒に笑みを浮かべ、そのまま神社の階段を下って行くのであった。

「よし、帰って飲み直すか」

「まだ飲む気なの恭ちゃん!?いい加減歳を考えなって!」

「おいおい、それは父さんのほうだろ。大体、お前だってもう三十を過ぎている」

「ちょ!酷いよ恭ちゃん!!レディーの前でそれは!!」

「でもお姉ちゃん綺麗だよ。全然二十代に見える見える♪」

「ありがとう、なのは?ホントいい子なんだから♪」

「にゃはは♪くすぐったいよ」

自分を擁護するなのはの心遣いに感謝しつつ、なのはの頬と自分の頬を擦りつける美由紀。

仲睦ましい姉妹の様子にユーノが柔かい笑みを浮かべるが、その直後ユーノは懐に忍ばせておいた財布がない事に気が付く。

「あ」

「いかがなさいましたか?」

「ごめん。財布落としてきたみたいだ。ちょっと神社の方に戻って拾って来るよ」

ユーノは全員にそう言うと、急いで先ほどの神社の方へと向かって

駆け出した。

「ここで待っているか？」

「大丈夫です。先帰っててください」

一護達にそう伝えたユーノは階段を上っていく。

階段を上ってからユーノは境内の中を散策し始める。

「え～と財布、財布・・・・・・お」

境内を散策していると、お目当ての財布を発見し、ユーノはそれを手に取り安どのため息をつく。

「ふう。よかった～～危うく有り金全部なくすところだった」

ユーノは懐に財布を仕舞い込むと、先に返ったなのは立の後を追う形で神社を後にしようとしたのだが、直後キツネの石造の近くで声らしき音が聞こえてきた。

「う・・・」

「？」

ユーノがその声に反応し、辺りを見渡してみるが、そこには自分以外は誰も見当たらない。

「気のせいか・・・――――」

そう思って神社を後にしようとしたが、直後今度は更にはっきりとした声でユーノの耳に声が飛び込んできた。

「ぐ・・・」

「え」

ユーノが徐に声のした方に振り返ると、キツネの石造付近に、薬莢（やっきょう）を体に巻きつけ、満身創痍の傷を受けた様子の白い管狐らしき生き物を発見する。

「え・・・ええ！」

ユーノは驚きながら傷だらけの狐の方へと近づき様子を見ると、狐は苦しそうな表情を浮かべてその場に倒れ伏していた。

「これは・・・――――」

ユーノはそっと狐を手に取り、まじまじと見つめる。

「狐なのか・・・・・・それにしては見ない種類だけど――――――酷い怪我だ。直ぐに治療しないと。」

ユーノはそう考え、急いで狐を連れて一護達の元へと戻っていくのであった。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

ユーノが狐を連れて高町家に戻ってくると、全員に事情を説明し、一護は直ぐに医者として適切な処置を施し手当てをしてあげた。

「よし。こんなところだろう。」

一護は包帯を巻きつけ、ユーノが保護した狐を桃子が擁した籠の中に入れてあげる。

ユーノは狐の様子を心配し、一護に尋ねる。

「一護さん。この狐どうです?」

「酷いもんだぜ。多分人間に悪戯されたかあるいはもっとひどい事されたんだぜきっと・・・」

「そう言えば、昔・・・野鴨事件なんてもんもあったしな。情けってものがないのかよ!」

「お前にしては正当な意見だな・・・」

「どう言う意味だ、そりゃ!?」

鬼太郎の言葉の後に恋次がそうツッコミを入れると、思わず声を荒げる鬼太郎。

すると、知世は見慣れない狐の姿形に思わずつぶやく。

「そう言えば・・・この狐・・・・・・・あんまり見ないタイプですけど・・・」

「管狐のようだが・・・こんな色白の狐だったじゃろうか？」

夜一がそう言う管狐（くだきつね）とは、日本の伝承上における憑き物の一種で名前の通りに竹筒の中に入ってしまうほどの大きさをしているのが特徴。

長野県をはじめとする中部地方に伝わっており、東海地方、関東地方南部、東北地方などの一部にも伝承がある。

なお、「管狐」の語はイタチ科の動物オコジョの別名としても用いられる。

と、その時手当てを受けた疲れ切った様子のその管狐が目を開け、コンがそれに気づく。

「お！起きたぞ。」

「ん？こっち見てるぞ・・・」

全員が管狐に注目する中、管狐の目線は何故かユーノであり、ユーノは管狐からの視線を一身に受けると思わず声を漏らす。

「え。」

管狐は弱々しい表情で自分を最初に保護してくれたユーノの顔を覗き込み、それを見ていたヴィヴィオはユーノに言う。

「・・・ユーノパパ・・・見られてる・・・」

「あ・・・ああ・・・じゃあ・・・・・・」

ユーノは何気なく手を管狐の前に出すと、管狐はユーノの手の臭いを嗅いだ後、徐に舌でなめる。

「わお♪」

今まで味わったことのない感覚に思わず感動するユーノ。

一護達は笑みを浮かべながらそんなユーノに言う。

「また変なもんに懐かれちまったな、お前・・・」

「俺のときといい、どうやらお前は小動物に縁があるそうだな」

「そ、そうですかね・・・」

照れた様子でそう返事をするユーノであったが、この時まさかこの管狐こそが今回の人権の重要なカギとなり、世界の存亡を懸けた戦いに巻き込まれるとは思いもしなかっただろう――――――

デジモンと正月と管狐（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はお正月ネタと言うことで、特別に知ってて恥じない日本のお正月の風習について教えるよ♪」

「まずは手始めに・・・みんなは元日と元旦をよく混同させていっていることが多いようだけど、意味は全然違うからね♪元日は一月一日そのものを指していて、元旦って言うのは、正月の朝・もしくは昼までをそう呼ぶんだ。旦という字はもとも地平線から上る太陽をもとにした象形文字から作られた漢字なんだ。」

「次はお年玉。今ではすっかり金銭を封にして包んで子供にあげるのが定番になっているけど、本来的にお年玉とは、正月に新年を祝うために贈答される品物のことで、別にお金でなくてもお菓子であったりもするし、目上の者が目下のものに贈る様子から年の賜物（たまもの）であるから『おとしだま』という名がついたという説がある。」

「最後は年賀状。日本にははっきりとはしないが奈良時代から新年の年始回りという年始の挨拶をする行事があり、平安時代には貴族や公家にもその風習が広まって挨拶が行えないような遠方などの人への年始回りに代わるものとして文書による年始挨拶が行われるようになった。これがいわゆる年賀状の起源だったりする。」

すると、ここでまた一つ年賀状が届けられる。

な「ユーノ君、またポストに年賀状が入ってたよ。」

ユ「どれどれ・・・――」

徐に差出人の名前をチャックする二人。

差出人は・・・――「桂小太郎」であった。

ユ・な「・・・――」

呆然としながらも裏を返す。

書かれていた内容は――――――

桂『イカダに乗ってミッドチルダへとスタンバッテたら、ロンダルギアについていました。　桂小太郎』

二人はその年賀状を空中に浮遊させ、魔力弾と霊圧弾を乱射し、年賀状を紙くずと化すまで撃ちまくり怒号を上げる。

ユ・な「知るかっ!!!!!!」

魔導師図鑑ハイパー!

謎の狐を保護したあと、黒崎家にてユーノは眉間に皺をよせ唸っていた。

ユ「う～～ん・・・」

一「どうしたよ、そんな難しい顔して?まだ何かあるのか」

ユ「それが・・・ここへ来る前に何か誰かに言うことがあったよう

な気がするんですが・・・そう！間違いなく誰かに！」

一「え？なんだよそれ。今日ってなんかあったか・・・」

一緒に腕組みをしながら考える二人。

すると、その時ルキアがお汁粉を啜りながら思い出したように言う。

ル「そう言えば、今日は夜一殿の誕生日ではなかったか？」

ユ・一「あ」

二人は目を点にしてその重大事実に気づき、もうすぐ日が暮れようとしている中夜一本人は喜助と共に隅の方にて体育図割りをして沈んでいた。

夜「結局・・・・・今年も誰も覚えていなかったようじゃな・・・・・」

喜「寂しいっスね・・・・・・」

思わず絶句するユーノ達であった。

一「悪い・・・本気で忘れてたわ・・・ホント・・・」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユ「だ、誰だ！？」

ク「私の名はクダモン。デジタルワールドからこの地球にやってきた」

一「何なんだよ・・・こいつ！」

スカサ「スレイプモンはこの手で必ず・・・消す！」

第１５３話　喋るキツネと危機と黒い影

喋るキツネと危機と黒い影（前書き）

人間は、欲望を切り離すことはできない。そして――所有していないものを切望する――――欲望という言葉そのものが、現在の幸福が完全でないことの証しである。

Ｂｙトーマス・ホップス

喋るキツネと危機と黒い影

〈ユーノSide〉

“こんばんは、ユーノ・スクライアです”。

あのキツネを保護した帰りです・・・なのはとヴィヴィオが突然僕の家に泊まりたいと言いだしてきて、一瞬困ったのですが周りの後押しやなのはとヴィヴィオのお願いとなれば無下にも出来なくなり、二人を家に招待することにしました。

勿論、士郎さんや恭弥さん、更には金髪女（フェイト）からは殺気を感じましたが、そこを気にしたら負けだと思いつつも、こうして二人を我が家に向えいれることになった訳ですが・・・・・・ここで事件発生です。

いま、非常にまずい状況です・・・／／／／

「で・・・・・・どうしてこうなった？」

「にゃはは♪」

え・・・今何をしているかって・・・・・・尋ねられたこっちが聞きたい。

「どうして・・・・・・新年早々君が僕の家で、しかも――――――／／／／／／一緒に風呂に入ってる訳！！！！！」

ユーノはそう言いながら現在彼の頭を洗う満面の笑みを浮かべた裸のなのはにそう言うが、なのは自身は全く気にもしていない様子で、ヴィヴィオと共にこの状況を楽しんでいた。

「え～だって、ユーノ君と一緒のお風呂なんて子供の時以来だし、折角ヴィヴィオと一緒の家族団らんをその・・・裸の付き合いと言

うことで深めようと思ってね・・・」

「だからって!!何でウチじゃないといけないの!!ここはムサイ男の巣窟で、君の家と違って見ての通りのあばら家!!いや!それ以前に倫理に反しているって!!」

「そんなことないって。一昔前までは混浴なんてどこでも見られた光景なわけだし、誰も見てないんだからさ」

「見てるから!!思いっきり読者が!!!」

「まぁまぁ。そう大声出さないのパパ。ささ、背中洗ってあげるからね。動かないで」

「あ!ヴィヴィオ、それは私がやろうと思って・・・そうだ。二人で一緒に洗って上げようか♪」

「うん♪」

ユーノは非常に精神的に追い詰められていた・・・前かがみになりながらもう一人の自分を気にしつつ、何とか平静を保ちつつなのはとヴィヴィオからサービスを享受しているが、いつ爆発してもおかしくはなかった。

すると、背中を流していたヴィヴィオがふとユーノの鍛え抜かれた頑丈で、且つ無駄のない筋肉をしたユーノの身体に思わず呟く。

「それにしても近くで見るとパパの体って凄く頑丈なのに綺麗～～～」

「おまけに無駄のない筋肉しちゃってさ・・・これは後々の楽しみが～～～？」

なのはは一人この後の行けない予定を頭の中でめぐらせているが、ユーノは顔から湯気を放出しつつ恐らく外でこの状況を聞いているユーノス達に向かって切なる思いを叫んだ。

「誰か！！！！この状況何とかしてくれ！！！！」

ユーノの叫び声を外の方で聞いていたユーノス以下従業員一同は耳をそばだてながらそれぞれこんな言葉を述べる。

「いいなぁ、店長・・・なのはちゃんの裸・・・／／／／」

「おめぇは女の体の事から少し離れろ！」

「苦労しているようだな、あいつも」

「店長・・・我々は温かく見守っておりますぞ」

そして、漸くある意味地獄のような苦行とも呼べる快楽から解放されたユーノは精神的に疲労困憊の様子で寝間着に着替え、自室に入ると深いため息をつく。

「はぁ～～～ようやく解放された・・・かと思いきや」

そう言いながらユーノが振り返ると、そこにはパジャマに着替えたばかりで尚且つ床に深々と頭を下げた状態のなのはがいた。

「よろしく、お願いします！」

「今度は何!!まさかなのは!!僕と一緒に寝るって言いたい訳!!」

精神崩壊寸前のユーノが大声でそう言うと、なのはは少々残念そうな表情で言い返す。

「え～～そのつもりで来たのに・・・やっぱり駄目?」

涙目でユーノの心をくすぐるなのは。

ユーノはそんななのはの上目使いでの涙を目の当たりにすると、思わず心拍数が急上昇する。

「い、いや!!駄目って訳じゃないんですけど・・・その・・・／／／ほら。僕もうフェレットの姿になれないし、ユーノス元帥だっているし・・・／／／」

「それならさっきヴィヴィオが連れてったよ。今日はユーノス元帥と一緒に寝るって♪」

「何!!!!!!!!」

ユーノがそう言いながら部屋の中とユーノスの寝床を確認すると、確かにユーノスの姿一切見受けられず、代わりに部屋の外からヴィヴィオにかどわかかされたユーノスの悲鳴が聞こえた。

「ユーノ!!!!助けてくれ!!!!!!」

ユーノはその言葉を聞いた途端、思わずベッドに腰を下ろした。

「えへへ♪と言う訳で今日は・・・えい？」

「のあっ／／／」

なのはは思い切りユーノに飛びつきそのままベッドに押し倒すと、布団の中に入り込みユーノの首に巻きつけながら大胆にも接触し言う。

「人肌でぬくぬくしたいと思います♪覚悟してね、ユーノ君？」

「う・・・／／／／／／はい・・・・・・」

本当は嬉しいのに、何処か辛い様子のユーノ・スクライア２４歳（独身）なのであった。

そうして、あっという間に夜は更けていき、完全に街中が静寂に包まれる時間帯・・・――スクライア商店の方も静寂が支配していた。

「す～～～～～」

なのははユーノにしっかりと抱きついた状態で心地よさそうに眠りにつくが、その一方でユーノ自身は興奮のあまりまったく寝つけないでいた。

「（くそ・・・！！なのはの胸が当たって・・・しかもこんな可愛い寝顔直視したら眠れやしないよ・・・／／／て言うかこんなことしたら、間違いなく士郎さんと恭弥さん・・・それにフェイトに殺される。あれ・・・そう考えたらなぜ今日に限ってマリアさんが出てこない・・・！？まさか・・・なのはが既に！！）」

昨日の朝に見た年賀状に書かれたなのはの殴り書き文章を思い返し、ふとマリアの安否を気遣うユーノの横で、なのはは夢の世界に溺れ寝言でありながらこう言った。

「えへへ～～～ユーノ君？ほら見て～～～あなたと私の子供よ～～～？」

「勝手にこっちはこっちで夢の世界でとんでもないことになってるし・・・どうすりゃいいんだよ・・・・・・／／／」

そうして、胸の鼓動が収まらないままあっという間に数時間が経過し、午前3時を迎えようとしていた時、ユーノは不意に自宅に連れて帰ってきたあの管狐の事を考えた。

「そう言えば・・・・・・あのキツネ・・・・・・大丈夫かな？」

管狐は現在、茶の間の方に用意した籠の中で眠っている。

嘗て同じ小動物・・・いや、別に動物形態になることはあってもれっきとした人間のユーノは何故だかああした動物とは心が通じ合うらしく、誰よりも管狐の事を気にしていた。

と、その時この静寂な夜を劈くような絶叫が家中に響き渡る。

「ぬおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

「「「「「「！？」」」」」」

「たたたたたたたたたた大変ですぞ！！！！！！！！！」

ユーノと寝ていたなのはは起き上がり、耳に届いた冷静を書いた様子の金太郎の声に耳を疑った。

「今の声って・・・金太郎さん!?」

「何があったって言うんだ?」

二人はベッドから出ると、金太郎の部屋へと向かった。

二人が起きてくると順に鬼太郎達も起きて来、ヴィヴィオはユーノスを手に抱えながら眠たそうに眼を擦っていた。

鬼太郎は不機嫌そうにドアを開けると、白鳥と共に抗議する。

「おい熊!てめぇ何時だと思ってんだよ!!」

「喧しいぞ、ゴールデンベアー。夜分遅くだ」

「申し訳ございません、みなさん!しかし・・・しかし!!こればかりは騒がずにはいられませぬ!!」

狼狽した金太郎がそう言って取り出したのは、恐らく夜食のおやつにととっておいたであろう喰いかけの芋羊羹であった。

「何だいこれ?芋羊羹か・・・」

「これがどうしたというのだ?」

「ネズミめが、ネズミめが私の楽しみを!!!!」

全員はそれを聞いて顔を見合わせた後、深いため息をつく。

その後、直ぐにユーノが部屋中を探し回り、ネズミがいるかどうかを確かめる。

「パパ。ネズミいた？」

「いや・・・それらしい形跡はまるでないけど」

「そんな見て下されこの獅子屋の高級芋羊羹を！こんなに齧られておりますぞ！」

「寝ぼけて自分で食べたんじゃないの？」

浦太郎がそう言うと、金太郎は全員が凍りつくようなことを述べる。

「それでしたらマヨネーズをかけるのは必須！！」

「羊羹にもマヨネーズかけるんですね・・・」

「う！想像したら吐き気が・・・！」

思わず口を押えるユーノ達だったが、その時不意に聞きなれない声が耳に入ってきた。

「言っておくが、それはネズミが食べたのではない」

「「「「「「「「「「！？」」」」」」」」」」

聞きなれない言葉を耳にした瞬間、なのはとヴィヴィオ、更に従業員一同はユーノの後ろに隠れる。

「きゃ！何！？」

「まさか・・・泥棒！？」

「だとしても、ウチの入る泥棒なんてよっぽど命知らずな人だね。」

「じゃあ、この声は・・・！？」

ユーノは後ろに居る全員と共にゆっくりと声の聞こえた茶の間の方へと足を運び、明かりをつけると誰も居ない筈の茶の間に向かって声を上げる。

「だ、誰だ！？」

ユーノ達が辺りをようく見まわしていた、直後。

その声の主こと、昨日ユーノが保護したあの管狐がユーノ達に向かって日本語で語りかけてきた。

「私だ」

なのははユーノ達と共に呆気にとられた様子で声を漏らす。

「ふぇ！？」

「あまりの空腹に、つい無断で食してしまった」

「うそ！キツネさんが喋った・・・！」

「お前も・・・俺の同類だというのか？」

ユーノスがそう語りかけると、管狐は卓袱台の上から降り、徐にユーノ達の方へと歩み寄ってきた。

「少し違うな。私は人間ではなく、意志を持った電子生命体・・・デジモンだ」

「デジモン！？」

「てめぇ、どっから来やがった！？」

「私の名はクダモン。デジタルワールドからやって来た」

「デジタルワールドだと・・・聞いたことのない異世界だな。」

「ですね」

ユーノ達は聞き覚えのない異世界の名前に困惑した様子を見せるが、クダモンは少なからず多次元世界と言うものに関しての知識を有した人間が自分の目の前に８人もいることに安堵の表情を浮かべこう言い返す。

「どうやら拾われたのが、多次元世界を理解するもので良かった。少しは話しやすくなる」

一同はもう一度顔を見合わせてからこのクダモンと名乗るデジモンに目を向け、徐に鬼太郎がクダモンに尋ねる。

「それにしても随分と日本語が上手いな。翻訳機能でもついているのか？」

「そう言う訳ではないが、デジモンの誕生の起源はこの世界・・・地球に由来する。そう・・・デジタルワールドとはこの世界のネットワークの向こう側に存在する擬似世界なのだ」

「ネットワークの擬似世界・・・！？」

疑問符を浮かべるヴィヴィオと、腕組みをしながら話を理解するユーノ。

「成程。つまりはこの間の熱斗君達の話と被っていると考えるべきだろうね。それで、君は何をしにこっちの世界にまで来たの？」

「それを聞かれると辛い――――――――――大勢の友とデジモンたちを見捨てて、私はデジタルワールドから逃げ出してきたのだ。だから私は――――――――」

クダモンは暗い表情を浮かべながらユーノ達に自分の身に起こった境遇を赤裸々に公表し、話を聞いたユーノ達は思わず胸が締め付けられるような切ない気持ちとなるのであった。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

クダモンの話を聞いたユーノは一夜明けると、三箇日の間休暇となっている一護にこの事を連絡し、一護は早速織姫達を引き連れて車

で移動をしていた。

「ホントなのかよ・・・あのキツネが日本語喋ったって?第一、デジモンって・・・・・・俄かには信じがたいぜ」

若干顔を引きつる一護と、運転する一護の隣に座るユーノは言い返す。

「魔法使いやこれまでの奇怪な出来事を目にしてきた人がそれはないですよ。本当なんですって。僕もなのはも、確かにこの目で見ました」

「だとしても、デジモンって言うのは何なんだろうね?」

「えっと・・・こっちの世界のネットワークの中に出来た擬似世界ってのがデジタルワールドって言って・・・その・・・」

と、一護がなかなか思い出せないでいるクダモンの名前に唸り声をあげていると、ユーノの肩に乗っていたユーノスが助け舟を出す。

「クダモンだ」

「そうそう!そのクダモンが逃げ出してきたってのか・・・」

「兎に角、遭ってちゃんと話を聞かないとね」

「ああ。ひょっとしたら、これもアンゴルモアやグリードに絡んだ話になるかもしれぬ。ぞんざいにせぬことだ」

「分かってるよ」

後部座席の方に乗っていた織姫やルキアにそう言われると、一護も顔つきを真剣な者へと変化させ、真っ直ぐユーノの店まで車を走らせる。

店に到着し、車から降りたユーノは徐に引き戸を開ける。

「ただいま」

ユーノが帰ってくると、なのはと共に留守番をしていたヴィヴィオがお出迎え。

「おかえり、パパ。みなさんもどうぞどうぞ！」

「邪魔するぜ」

恋次はそう言って靴を脱ぎ、店の中へと上がっていき、一護は頭を掻きながら正月でもお構いなしに入り込んでくる厄介ごとにため息をつく。

「ったく。正月なのにゆっくりしてられねぇのはどうしてだろうな」

茶の間のドアを開けると、台所で昼の用意をしていたなのはがそれに気づき、ちゃぶ台の上には浦太郎達に注視されている例のクダモンがいた。

「あ、帰ってきた♪」

「お初にお目にかかる。私はクダモン。先日は世話になったな」

「お・・・本当に喋った」

日本語を喋る狐の姿を目の当たりにし、目を疑いたくなる一護や恋次とは対照的に、織姫だけはクダモンを可愛いものとして認識する。

「わっは！ユーノスさんとはまた違って可愛い！」

すると、それを聞いたクダモンは真顔のまま織姫に言い返す。

「可愛い？赤ん坊のように言うのは止してほしい。これでも中身は、お前たちの歳と似たようなものだ」

「ごめんなさい。つい♪私は黒崎織姫と言います。で、私の旦那に朽木さんに、阿散井君。」

「黒崎一護だ。よろしくな」

「ま、気軽に名前で言ってくれよ」

「ああ。すまないな」

一同は一先ずクダモンから話を聞くために腰を下ろす。

するとここで鬼太郎が一緒に来ているはずのコンと吉良の姿が見えないことに関して疑問を抱いた。

「吉良とぼろライオンはどうした？」

「今朝から行方不明の小鳥遊の捜索中だ」

「「う・・・・・・」」

ユーノとユーノスは思わず苦い顔を浮かべ、見ていたなのはは訝しげな様子で尋ねる。

「？ユーノ君。ユーノス元帥もどうしたの？」

「「いや・・・・・・」」

なのはからの質問に、これ以上何も言えなくなる二人なのであった。

その直後、白鳥は迎えたクダモンにまるで我が家のような物言いでこう言った。

「まぁ、こんなウチでよかったらゆっくりしていくであるぞ」

「てめぇが言うなよ」

すると、それを聞いたクダモンは罰の悪そうな様子でユーノ達に言う。

「折角だが・・・そろそろお暇させてもらう」

「どうしてですか？」

「何処かに行く当てがあるの？」

なのはがそう尋ねると、クダモンは首を横に振って答える。

「いや・・・お前たちに迷惑がかかる。それに、私には敵がいるの

だ。恐るべき敵だ。やがては私を追ってこの地球に脅威が来るだろう。そうなれば、お前たちも・・・この大地に暮らす全ての生き物が巻き添えとなる。そんなことは出来ぬ」

「クダモン・・・」

ユーノは淋しそうな顔を浮かべるクダモンのその言葉と顔を見て、心が締め付けられる。

「さらばだ。怪我を直してくれたことは感謝する」

クダモンはユーノ達に別れを告げると、徐に茶の間の方から出ていこうとする。

すると、ユーノはそんなクダモンに対して次のような措置を下す。

「ふう・・・・・フープバインド」

ユーノは完現術の力を使って、クダモンの周囲にある魔力素を使役させ、なのはの得意なフープバインドで体を拘束し、クダモンは身動きが出来なくなる。

「！何！？」

「ナイス、ユーノ君♪」

ユーノの機転に親指を立てるなのは達。

ユーノは動けなくなったクダモンを掌に乗せ、クダモンはそんなユーノの顔を覗き込む。

「お前・・・」

「それを聞いたら、尚更君を行かせるわけにはいかない。」

ユーノがそう言うと、一護や浦太郎、恋次も便乗する。

「そうだぜ。ここに隠れてる方が、安全なのは確実だ」

「店長や僕達がいれば無敵だって。何たって僕達は、次元世界じゃ白き魔王とか翡翠の魔導死神なんて言われてるぐらいだし♪」

「一人で抱え込むんじゃねぇよ。ただでさえ、ここにはそう言うバカが少なくとも二人は確実に居るんだからな」

「「う・・・・・・」」

二人と言う言葉を耳にし、思わず何も言い返せなくなるユーノとなのはであった。

クダモンは一通りの話を聞くと、厚い心で自分を脅威から守ろうとするユーノ達に深く感激しこう言った。

「すまない・・・・・・お前たちはなんと心の広い人間なのだ。デジタルワールドに住まう全てのデジモンを代表し、ここに感謝の意を表する。」

「何だか大袈裟だな♪まるでユーノス元帥が二人になったみたいだ」

「俺はそこまで堅苦しくはないがな」

「まぁ、遠慮なく何でも言いなって。困ったときはお互い様って言うのを、忘れちゃだめだよ」

ユーノが柔かい笑みでそう言うと、クダモンも柔かい表情で答える。

「ありがとう・・・・・本当に感謝する。」

「へへ♪」

「じゃあ、話が一通り纏まったところで、お昼にしようか。今日は私が腕によりをかけて作ったんだから♪」

「あ、私も手伝いますねなのはさん」

「私も」

なのはの言葉を聞き、織姫とルキアが一緒に台所の方へと向かう。

「ありがとうございます、二人とも。ヴィヴィオ、お皿と人数分の料理並べるの手伝って」

「は～い！」

こうして、ユーノ達はクダモンを入れて昼食を戴くことになった。

談笑が飛び交うスクライア一家のお昼の光景は見ていて飽きるものなどなかった。

「この！！！それは俺のだボケ！！」

「てめぇこそいい加減離せ！！」

おかずを取り合い何時ものことながら喧嘩となる恋次、鬼太郎。

その横でユーノはクダモンに料理の批評を尋ねる。

「どうだい、なのはの料理の味は？」

「これは素晴らしい。もう満点だ。どうもありがとう」

「えへへ♪まだまだ“主婦”歴５年の若輩ですが」

気恥ずかしそうにそうクダモンに言った直後、真顔を浮かべたユーノは思わず先ほどのなのはの言葉に疑問を感じる。

「主婦って・・・なのははまだ結婚してないでしょ。」

「す、するんだもん！今年の六月に・・・あなたと？」

「ぐ！」

思わず食べていたものを恥ずかしさのあまり喉に詰まらせるユーノ。

するとそれを聞いていた一護は不敵な笑みを浮かべる。

「よかったな、ユーノ。これでお前も漸く所帯持ちだ」

「まだ早いですってば、一護さん！」

すると今度はヴィヴィオとユーノスが口を挟む。

「あはは。パパったら照れてる照れてる♪」

「存外、ブランク・オブ・デザイアと言う割に・・・それを欲しているのだろう」

「ユーノス元帥まで！人をからかうのも大概にしてください！」

そんな心温まる光景を目の当たりにし、自分を見の上を確保してくれているユーノ達の行為を改めて振り返りながらクダモンは安堵感を覚える。

「（本当に・・・この者たちは――――――）」

◇

〈吉良・コンＳｉｄｅ〉

一方、今朝からずっと行方不明となっている小鳥遊万梨阿の捜索の為に外に出ていた吉良とその付添いのコンはと言うと、マリアの霊圧を辿って川岸へと来ていた。

「お～～～い！浮いてたら返事ぐらいしろ！！」

「小鳥遊さん！何処へ行ったんだ？」

二人が声を上げて必死でマリアに呼びかけるが、一向に返事などと言ったものは帰って来ない。

コンは芝生に腰を下ろすと小石を川に投げつけ、吉良もまた深いため息をつく。

「ダメだ。全然見当たらない」

「おい。ちゃんと霊圧探ってんのか？」

「反応は確かにこの辺りだったんだ。きっといる筈なんだ・・・――――」

「く～～～なんで俺様がこんな煮干ばっかり食ってそうな奴と一緒に、こんなこと～～～今頃向こうじゃ姐さん達がウハウハと楽しい事してんだろうな！！」

コンはそう考えながら大声を上げて自身の欲求不満を露わにするのであった。

その頃、コンが言うようにスクライア商店の方では楽しい楽しい事が行われていた。

神妙な顔つきのユーノ達が床に広げられた人生すごろくに視線を浴びせる中、鬼太郎は徐にルーレットを回転させ、止まった数字は「５」。

「５！１、２、３、４、５！」

自分の駒を進め、そこに書かれた内容を見て嬉々として声を上げる鬼太郎。

「よっしゃあ！『人気俳優になり、収入２０００万増える』！！以

後順番が回ってくるごとに２０００万入る！！勝ったあ！！これは完全に勝ったな！勝ち組だよ！勝ち組の仲間入りだよ！ついに俺も・・・なははははは！！」

鬼太郎の言葉を耳にし、全員が悔しそうな表情を浮かべる中、我慢できずに白鳥は声を荒げる。

「く・・・黙るがいいピーチ！！勝負は最後まで分からんぞ！！」

「いいや、勝ったな。こっから君たち負け組が俺に追いつくことなんて到底不可能！だって俳優だもの！勝ち組だもの！」

と、完全に天狗と化す鬼太郎だったが、直後ユーノからの痛烈な言葉が浴びせられる。

「ボードの上ではな、いくら金持ちになろうと、現実と言う名のボードの上ではお前がほぼ一文無しと言うことを忘れるなよ。この間だって、給料また無駄遣いしてなくなったくせに！」

「そこまで言うなんて酷いっすよ店長！ゲームくらい、夢見させてもらってもいいじゃないっすか！」

そう言い返した直後、今度は一護からの言葉が飛び交う。

「黙れ鶏冠！ふりだしからまんじりとも動けぬ人生送ってるような奴が！調子に乗るんじゃねェ！」

「何だと！ゲームでも現実でも、仕事してんのかそうでないか知れねェ負け組のてめぇらに言われたかねぇんだよ！」

「おい！それは俺達も入ってるんじゃネェだろうな！」

「貴様そこまで言うか！そこに直れ！今すぐたった斬ってやる！」

恋次とルキアは斬魄刀を取出し鬼太郎に刃を向け、傍らでそれを見ていたなのはやユーノスは苦笑いを浮かべ、ヴィヴィオはこのキナ臭い様子を寧ろ楽しんでいた。

「あはは。ホントパパの友達って楽しい人が多いよね♪」

「そうだな・・・クダモンは、楽しんでいるか？」

「ああ。騒がしいぐらいにな」

「えっと・・・それは褒め言葉・・・なんですよね・・・」

思わず疑問に思ってしまうなのはなのであった。

それから暫くして、河原の方で相変わらずマリア捜索に精を出していた吉良とコンであったが、何気なく辺りを見渡していたコンがとうとう目的の人物を発見する。

「お！おい吉良。いたぞ」

コンの言葉を聞いた吉良がコンが指し示す方に目を向けると、小鳥遊万梨阿は恐らく・・・なのはにボコボコにされた思われるような傷をその身に受けながらも、幸せそうな表情で眠っていた。

「本当だ。あんなところで寝てるよ・・・あの怪我・・・まさかなのはさんに・・・」

「むにゃむにゃ～～～ユーノ様～～～ラブですわ～～～」

吉良は人の心配を余所に自分の世界に溺れるマリアに呆れるばかりであった。

「はぁ・・・やれやれ困ったものだ」

「兎に角無事見つかったみたいだし、さっさと連れて帰ろうぜ」

「そうだね」

二人は徐にマリアの元に近づいて行き、彼女を起こし始める。

だがこのとき三人の元に、不穏な影が接近し始めていた。

突如として空間が裂け目を作ったかと思いきや、その中から一体のデジモンが出現し、出現したデジモンは瞳に映ってきた三人を見おろしながら徐に言葉を発する。

「匂う・・・・・クダモンの臭い・・・・・」

と、その時コンが空を見上げたとき、そのデジモンの姿を目視する。

「お？おい吉良・・・あれなんだ・・・」

「え」

吉良もコンにそう言われて目を向けると、デジモンは二人をじっと見ながらその場から動こうとせずに静止し続け、コンは訝しげな表

情で更に言う。

「虚にしては変な霊圧じゃねぇか？」

「霊圧・・・なのかこれは？なんか違う気がするけど・・・」

「じゃああれなんだよ？」

疑問符ばかりを浮かべる二人であったが、その時不意に現れたデジモン、アスタモンは亜空間から専用のマシンガン「オーロサルモン」を取出し、何の前触れもなく二人に向けて発砲し始めた。

「ふん！」

「「だあああああ！！」」

「ふにゃ～～～」

三人は間一髪のところでアスタモンの攻撃を回避する。

「何だ！？」

「うわ！また来たぞ！」

すると、アスタモンは先ほどとは打って変わって容赦なく三人に向けてマシンガンを連発し、そのたびに二人は命の危機に襲われる。

「ふぎゃあああああああ！！」

「のおおおお！」

吉良は小鳥遊を抱きかかえながらアスタモンの攻撃を躱し続け、コンもぬいぐるみの姿でこの理不尽な行動に堪えていたが、我慢できずに怒りを露わらにする。

「止めろコラ！！いい加減にしねぇと・・・――のああ！あっちゃ！！」

コンは直後、アスタモンの銃撃を頭すれすれに受けてしまい、頭から湯気が上がる。

吉良はコンの元に近づき火を鎮火させる。

「大丈夫かい！？何なんだあの攻撃は・・・・・危ない！」

吉良はマリアと一緒にコンを抱えて再び飛んで来たアスタモンの攻撃をアクロバティックな動きで回避するが、その間にもマリアはまるで起きる気配すらなく自分の世界に溺れていた。

「うふふ～～～ユーノ様～～～」

「てめぇはいつまで寝てんだよ！！いい加減起きろ！！」

流石のコンも能天気すぎるマリアの言葉に思わず怒鳴ってしまうのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

「！」

ちょうどその時、吉良とコンの霊圧の乱れを感じ取ったユーノ達は目の色を変える。

「何だ・・・これは！？」

「この霊圧・・・コン！」

「吉良の方も何か荒れてるな・・・」

一大事だと判断した一護は徐に立ち上がり、ユーノに言う。

「ユーノ。一緒に来てくれ。ひょっとしたらかなりやばいことになってるかもしれぇ。」

「はい。」

ユーノも徐に立ち上がると、壁にかけていた逆刃刀と洞爺湖木刀を腰に差し、恋次はルキアにこう言った。

「ルキア。なのは達とそのクダモンを守ってくれ。俺達はあいつらを見てくる」

「ああ。」

「ユーノ君。みなさんも気を付けて」

「うん。行きましょう」

ユーノ、一護、恋次、ユーノスの四人はなのは達に留守を任せると、急いで二人の元へと急行する。

四人が現場へ急行している頃、吉良は死神化して一人強力な力を秘めたアスタモンと対峙し、次から次へと飛んでくるアスタモンの攻撃を防御していた。

「縛道の三十九！『円閘扇』！！！」

縛道による防御でアスタモンの銃弾を防ごうとするも、銃弾の威力は思った以上に強力で、簡単に吉良の術を打ち破る。

「くッ！！」

「吉良！」

寝ているマリアの警護を任されたコンも思わず声を上げて吉良の安否を気遣う。

「・・・・・・くそ・・・っ」

吉良は険しい表情を浮かべて無表情に近いアスタモンを凝視する。

アスタモンはオーロサルモンの銃口を綺羅に突きつけた状態で執拗にクダモンの事を質問する。

「クダモンは・・・何処だ？」

「（こいつ・・・さっきから何を言っているんだ？それにこいつはＡＭ体でも、ヤミーでも、まして虚でもない・・・だとしたら何な

んだ・・・）」

全くの未知数の攻撃力を持ち、且つ死神の戦闘力を凌駕する力を秘めたアスタモンの力に困惑する吉良だったが、その直後川辺一体にユーノスの結界が張られる。

「二十断層結界、展開」

「！」

「これは・・・ユーノスさんの・・・！？」

吉良結界が張られた上空を見上げたその時だった。

アスタモン目掛けて、死神化した一護とスレイヤーモードを発動させたユーノが斬月と逆刃刀を振り上げてほぼ同時に月牙天衝を飛ばしてきた。

「「月牙天衝！」」

アスタモンは飛んで来た月牙天衝をその身に受けると、力の大きさに圧倒され圧し負け後方へと飛ばされる。

「のおおおおお！」

アスタモンを一時的に退かせることに成功したユーノ達は吉良達の元へと近づいた。

「大丈夫か！？」

「みんな。ああ・・・一応ね」

ユーノ達は土煙の上がる方へと目を向けると、その中から出て来たそれなりに傷を負った様子の怒り募られたアスタモンを凝視し、恋次は思わず口にする。

「何なんだよ・・・こいつ！」

「ヤミーか？」

「いや・・・その気配は感じられない。」

「ユーノス元帥の言う通りです。どちらかと言えば、クダモンに近い」

「クダモン？何のことだい」

事情を知らない吉良はそう尋ねようとするが、恋次は直ぐに蛇尾丸を取出し質問を後回しにする。

「話はこいつ倒した後だ。行くぜ」

ユーノ達は一斉に飛び出し、アスタモンの周囲に散らばると、先ずユーノが魔力素使役によって大量のチェーンバインドを生み出し身体を拘束する。

「チェーンバインド、×5！」

アスタモンはその瞬間、ユーノのチェーンバインドの餌食となり、体を拘束させられ、その後に続いて一護が縛道を叩きこむ。

「縛道の三十、『嘴突三閃』」

すると、一護の目の前に巨大な3つの嘴が出現し、目の前のアスタモンの両腕と腰部分を勾配に固定させる。

そして、二重の拘束を受けて完全に身動きが出来ないのを見計らって恋次が蛇尾丸を叩き込もうとする。

「終わりだ！咆えろ、蛇尾・・・」

が、その直後。

アスタモンは自力で左腕の拘束を解くと、持っていたマシンガン「オーロサルモン」を発射し、勾配ごと吹き飛ばし拘束を解いた。

「な！」

「「何！」」

思わずその破壊力に目を疑ったユーノ達。

すると、アスタモンは恋次目掛けて必殺技の一つでありオーロサルモンの銃弾全てを撃ち尽くす「ヘルファイア」を発動。

「『ヘルファイア』！」

オーロサルモンから撃ち出される凄まじい銃弾の嵐をその身に受け、声を上げて苦しむ恋次。

「のあああああ！」

「恋次！」

「恋次さん！」

一護とユーノの声もむなしく、恋次は地面に叩きつけられ大きなダメージを受ける。

「ぐっは！な・・・なんだよこいつ・・・」

恋次は何とか体勢を立て直して立ち上がると、やはり無表情のまま銃を突きつけるアスタモンの言葉に耳を傾ける。

「クダモンは何処だ？」

その瞬間、ユーノ達は耳を疑った。

「な！クダモン・・・だって！？」

「じゃあ、まさかこいつがあいつの言ってた敵？！」

驚き返る一護達を余所に、アスタモンは敵意をむき出しにする。

「答えぬなら、消す！」

アスタモンはそう言うと、再びオーロサルモンの銃口から銃弾を乱射し、ユーノ達はその攻撃を瞬歩や完現光（ブリンガーライト）で回避しながら反撃の気を窺い、一護とユーノは隙を見るなり攻撃を行う。

「月牙天嵐！」

「飛天御剣流、龍槌閃！」

一護の月牙天嵐をその身に受けた瞬間に体に叩き込まれるビルを砕く凄まじい破壊力を秘めたユーノの斬撃に顔を歪めるアスタモン。

「ぐ！」

それでも必死に堪えていると、頭上から恋次がアスタモンを狙い撃ちする。

「やろう！よくもやりやがったな！つらあああああああ！」

恋次は蛇尾丸の刃節を伸ばしてアスタモンの体を縛り付ける。

「吉良！」

「任せて！」

吉良はそれを合図に飛び上がり、斬魄刀を解放する。

「面を上げろ、侘助！」

侘助の力を解放した吉良はアスタモンの体を斬りつける。

「くあああああああああ！」

吉良は一度の斬撃に留まらず、二度三度と回数を増していき、計四度斬りつける。

すると、それに伴いアスタモンの体が鉄のように重くなる。

「のおおお!!体が・・・重い!!!!」

アスタモンは蛇尾丸から解放された瞬間に地面へと落下し、重い体を地面に食い込ませ身動きが出来なくなった。

そんな動けないアスタモンを窺いながら恋次達は言葉を投げつける。

「どうだ?これで動けねェだろう。てめぇは何者だ?なんでクダモンの事を知ってる?」

「返答次第であれば、容赦はしないけど」

ユーノも本気の眼差しで逆刃刀を突き付けるが、その瞬間突然アスタモンが笑い出す。

「ふふふふふ・・・・・・ふふふふふ」

「何がおかしい?」

「人間風情が・・・我らに・・・ベルフェモン様に盾つこうとはな――――――」

「?ベルフェモン・・・?」

「見誤るなよ、人間。この程度で・・・私が・・・このアスタモン様が屈服するとでもおもったのか・・・!」

「「「「「！！」」」」」

すると、アスタモンは怒号と共にこれまでにないほどの邪気と放出しながらユーノ達も後ずさりしてしまうほどの強大な力を全身から引き出した。

「な・・・何だよこりゃ・・・！すげぇヤバそうだ！！」

離れたところで同じものを見ていたコンも思わず腰が抜ける。

「おおおおおおおおおおお！！！！」

そして、アスタモンは佗助の攻撃を受けているにも拘らずその影響を一切無視し立ち上がり、ユーノ達の前に現れる。

「バカな！佗助の攻撃を受けて・・・平気なのか！？」

「こいつ、どこにそんな力が・・・！？」

「よもや思い知るがいい人間。このアスタモンに逆らったことを・・・この愛機『オーロサルモン』の餌食となることを後悔するがいい。ヘルファイア！」

「避けるぞ！」

アスタモンは、オーロサルモンからの銃弾を発射し、一護達がそれを素早く回避するとアスタモンは銃口を逃げ惑うユーノ達に向けて乱発。

「逃がさん！」

暫くマシンガンを乱射していたアスタモンであったが、ユーノ達が一か所に固まった瞬間アスタモンは不敵な笑みを浮かべ、もう一つの必殺技で自身の暗黒の気を貯めて放つキック「マーヴェリック」を放った。

「『マーヴェリック』！」

マーヴェリックは地面を抉り返しながら凄まじい勢いでユーノ達に激突すると、ユーノ達はその勢いに圧倒され吹き飛ばされる。

「「「「ぐおおおおおお！！！」」」」

「ユーノ！」

「一護！！」

ユーノ達の安否を気遣い声を上げるユーノスとコン。

一護はその身に受けた凄まじい蹴り技に驚愕する。

「くそ！なんだ今のは・・・！」

「！見ろ・・・」

恋次はユーノ達にそう言うと、目の前に広がっていたマーヴェリックによって抉られた地面を目の当たりにし、思わずその光景に目を疑う四人。

「地面が抉れてる・・・」

「何なんだよ一体・・・」

「言ってる場合か！こうなったら・・・全力で行くっきゃねぇ！」

一護はそう言うと、斬月を前に突出し霊圧を爆発させる。

「卍解！」

霊圧の爆風が晴れた瞬間、天鎖斬月片手に一護が登場。

「天鎖斬月！」

一護はアスタモンに目を向けると、最高スピードでアスタモンに近づく。

「ほおおおおお！」

すると、あろうことかアスタモンは天鎖斬月の速力に負けず劣らずの速さで一護と互角の勝負を始め、恋次や吉良は目を見開いた。

「あいつ、天鎖斬月のスピードに！？」

「ただのデジモンじゃねぇ様だな・・・」

一護自身もここまでの戦術を兼ね揃えたアスタモンに相当てこずりながらも、負けられない想いを抱えて勝負に打って出る。

「この・・・月牙八式兵法！」

「！？」

すると、その瞬間アスタモンの周囲に現れる実体を持った数人の一護。

「月牙幻視」

一護は分身体と共にアスタモンの逃げ場をなくし、勢いよく突っ込んでいく。

「「「「「ほおおおおおおおお！！」」」」」

「ぐおおおお！」

複数同時攻撃によって大きな傷を負ったアスタモンは一度の場から脱出し、傷口を押さえながらもう一度一護へと接近する。

「舐めるなっ！」

「そうはさせないよ」

その時、不意に聞こえてきたユーノの声に耳を傾けた瞬間、待ち構えていたユーノの手からストラグルバインドが伸びて来、ストラグルバインドはアスタモンの首に掛けられる。

「何！」

「ストラグルバインド・縛り首！」

ユーノはそう言いながら思い切りストラグルバインドを引っ張りア

スタモンの首をへし折ろうとし、アスタモンは窒息寸前となってももがき苦しむ。

「があああああああああああああああああ！！！！！」

「今だ！」

一護がそう言うと、恋次は蛇尾丸を地面に突き刺しアスタモンに仕掛ける。

「狒牙絶咬！」

その瞬間、蛇尾丸の刀身が一斉に途切れてアスタモンへとに突き刺さり、その攻撃をもろに受けて更に声を上げるアスタモン。

「ぐああああああああああああ！！！！」

更に、これを好機と見た一護と吉良が止めの攻撃を仕掛ける。

「月牙天衝！」

「破道の六十三『雷吼炮』！！」

渾身の勢いで放たれた漆黒の月牙と特大の雷がアスタモンの体に直撃する。

「のおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

アスタモンは続けざまに受けた強烈な攻撃にとうとう力尽き、地面

に落下すると、最後の力を振り絞って自分が崇拝すべき七大魔王ベルフェモンの名前を口にする。

「べ・・・ベルフェモン様・・・・・・ベルフェモン様・・・万歳！！！！！！！！！」

そして、言い終わった直後アスタモンは分解されデジコード呼ばれるものへと変貌すると、何処へなりとも飛んでいきその後消滅していった。

戦いが終わったあと、ユーノ達は訝しげな様子で消えていったアスタモンのデータを見つめた。

「あの野郎・・・データになりやがった・・・」

「これがデジモンと言う奴なのか・・・・・・」

と、ここで吉良が改めてデジモンに関して質問する。

「あ、さっきから気になってるけどそのデジモンって言うのは？」

「実は昨日保護したあのキツネなんですが・・・それがデジモンと言う電脳世界であるデジタルワールドからやってきた生命体であるらしく、さっきのも含めてデジモンと呼称しているようです」

「成程。だとしても、何故僕らを・・・――――」

吉良がそう言うと、全員は一瞬深く考え込むが、その時恋次が後ろの方で根息を立てたままの小鳥遊を気にしてこう言う。

「つうか・・・――なんでこんな状況でもこいつは幸せそうに眠ってるんだよ!?」

「むにゃむにゃ～～～ユーノ様～～～」

「はぁ・・・もう勘弁してよ・・・」

ユーノはただただ疲れがたまる一方であった。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

アスタモンとの戦闘がちょうど終った頃、スクライア商店の方でユーノ達の安否を気にして留守番をしていたなのは達は非常にそわそわしていた。

と、その時店の扉が開かれ中に入ってきたのは店の主でもあるユーノと、その後に続いて一護達が無事な様子で帰ってきた。

「ユーノ君！みんなも大丈夫だった？」

「この通り。大事には至っていないよ。多少の傷も、直ぐに治したし」

「そう・・・それならよかったけど」

コンは一護の方から降りると真っ先にルキアの元へと飛び込んでいく。

「姐さん～～～！！俺怖ったんです～～～だからきつく抱きしめ・・・ぐっほ！」

しかし、ルキアは真顔を浮かべた状態でそんなコンの顔面にめりこみキックを叩き込み、コンは湯気を上げながら倒れ込み、その後でルキアは尋ねる。

「それで、一体何があったのだ？」

「実はその・・・よく分かんねェンだけど・・・・・・ヤミーでも虚でもない変な奴に襲われてな・・・確か、アスタモンとか言ってた気が・・・――――」

自信の無い様子でうろ覚えのデジモンの名前を口にした瞬間、茶の間の方からクダモンの去り裂けるような声が聞こえてきた。

「アスタモンだと！」

「？」

吉良は聞き覚えのない声に耳を疑い、ユーノ達は顔を見合わせてから名前を口にする。

「クダモン・・・？」

クダモンはアスタモンの名前を聞くと、徐に茶の間の襖を開け、ユーノ達の前に現れる。

「そうか・・・・・・ついに来てしまったか」

吉良は日本語を喋るクダモンを目の当たりにし、思わず目を疑った。

「な！これって・・・昨日の！？」

「なぁ。言った通りであろう」

そして、クダモンは深刻な様子でアスタモンに関して次のように説明した。

「それは――――――――私を追って来た“ベルフェモン”の差し金だ」

「ベルフェモン？」

「伝説の七大魔王の一人――――――――遥か昔、デジタルワールドを破滅寸前に追い込んだ凶悪なる存在。そして、つい数週間前――――何らかの影響で封印されていたベルフェモンが目覚めてしまい、しかも悪いことに封印される前のよりも強力な力を身に付けデジタルワールドを蹂躙し始めた」

「蹂躙って・・・！？」

「なんでそんなことに・・・」

「理由は分らぬが、ロイヤルナイツの力も跳ね返す程に恨み・辛みを増幅させ、怨念の化身と化した奴の力は底知れぬ」

「よく分かんねぇことがあるが・・・そのベルフェモンの手先がどうしてクダモンを追ってこの地球へ？」

一護がそう尋ねると、クダモンは徐に目を瞑って全てを話し出す。

「それは――――――」

◇

〈？？？Ｓｉｄｅ〉

その頃、デジタルワールドの中心大陸「ファイル島」に存在するベルフェモンの拠点、闇貴族の館において、アスタモンからの報告を待っていたベルフェモンの右腕的存在、スカルサタモンの元に部下から報告が入る。

「報告します。先兵として人間界へと降り立ったアスタモン様からの連絡が途絶えました」

「何！？アスタモンめ・・・しくりじりおったか。至急体勢を立て直す！何としてもあの子狐を根絶やしにするのだ！」

「はっ！」

スカルサタモンはいら立ちを募らせ、力いっぱい壁に拳を叩きつける。

「くそ！憎むべき人間め・・・我に逆らうとどんな報いを受けるか思い知らせてくれる！！」

「スカルサタモン様。クダモンは人間どもを味方に付けたのでしょうか？」

「決まってる！ベルフェモン様のデータの一部から作られたアスタ

モンを退けるとなれば相当な手練れを用意したのだろう！忌々しい・・・・・クダモン、いやスレイプモン！何としてもスレイプモンはこの手で必ず・・・・消す！」

スカルサタモンは必ずやクダモンの息の根を止めようと画策を巡らせ、次の作戦の為の準備に取り掛かるのであった。

◇

〈ユーノSide〉

その頃、クダモンの正体とデジタルワールドで起こっている危機の真相を耳にした瞬間、ユーノ達は声を揃えてクダモンがデジタルワールドの聖騎士団・ロイヤルナイツの一人であるということを口にする。

「「「「「「「「「「「「「「えっ！君（あなた）（てめぇ）（お主）がロイヤルナイツの一人！！」」」」」」」」」」」」」」

「私達の力が及ばずに、ベルフェモンの復活を許してしまい、その反乱を防げなかった――――――――ロイヤルナイツはベルフェモンとそれを指示する強力な悪魔デジモンたちの前に数で圧倒されほぼ全滅した・・・――――ベルフェモンは勝利を完全にするため、私を捕えて処刑する気なのだろう」

「酷い・・・・！！」

「なんでそんなことに・・・」

「くううう許せねぇー！！」

恋次は湧き上がる怒りを拳に凝縮させると、思い切り卓袱台にそれを叩きつけ、クダモンは思わず驚く。

「うおっ！」

そして、恋次やユーノ達はクダモンに向かって熱い心でこう言った。

「安心しな、クダモン。俺たちが護ってやるからな！」

「そうだとも。守り抜いて見せる」

「この地球に来てまで、俺達を前に勝手なことさせてたまるかよ！」

「フェイトちゃん達にもあとでこの事を伝える。私達も協力させて」

「俺も七大元帥の一人として、見過ごすわけにはいかぬ」

「仮にアンゴルモアが絡んでいるとしたら尚更だよ！」

クダモンはその時、見ず知らずの自分をまるで身内のようにかくまってくれるユーノ達の行為に改めて感慨する。

「すまぬ。しかし――――――――――油断しないでほしい。復活したベルフェモンの力は我々の予想をはるかに超え、その上以前にはなかった高い知能を身に付けている。右腕のスカルサタモンの方も目的の為ならば、どんな卑劣で汚い手段を使うか分かったモノではない冷酷で残忍なデジモンだからな」

◇

〈スカルサタモンＳｉｄｅ〉

「サーチアイモン、放出！」

やがて人間界が夜を迎えたのを見計らって、スカルサタモンは予め用意していた特殊デジモン「サーチアイモン」を人間界へと転送し、開かれたデジタルゲートからは無数のサーチアイモンが飛び出した。

「デジタル空間の波導を辿ってここまで来たのだ。クダモンが人間界・・・『地球』に居ることは確かだ。一日も早く捕えてデジタルワールドに連行し処刑せねばならん。そうすれば反抗的なデジモンも何処かに隠れているロイヤルナイツの生き残りもベルフェモン様に従うだろう。我々の全世界支配の総仕上げ他の為に、クダモンの捕縛を急げ！」

「はっ！」

人間界に探査デジモンがばら撒かれてから暫くして、体が鈍らないように夜のマラソンに出ていた恋次が偶然にもそれを発見する。

「お？なんだこりゃ・・・・・・こんな季節外れに蛍か？」

恋次はそう思いながらも動き回るサーチアイモンを捕えようと奮闘する。

「こんにゃろう！く～～～この！！」

サーチアイモンを通して恋次の形相を窺っていたスカルサタモンは眉間に皺を寄せながら恋次の徹底マークを決め込む。

「なんと凶暴で凄まじい力を秘めた人間・・・！アスタモンの報告にあった通りだ！こいつを徹底的にマークしろ！」

サーチアイモンに識別認識番号が記録される。

また、暫くしてからスカルサタモンの元に報告が入る。

「スカルサタモン様！こっちのモニターを見てください！」

スカルサタモンがモニターを切り替え映像を窺うと、映っていたのは庭先で斬月を素振りする鍛錬中の一護であった。

またしてもスカルサタモンの眉間の皺が深くなる。

「く～～～あの刀は紛れもなくアスタモンに一太刀浴びせたもの・・・こいつか。それをこうも容易く使いこなすとは・・・重要人物だ！こいつもマークしろ！」

「は！」

またしても、サーチアイモンに識別番号が認識され、二人は徹底的にスカルサタモン達によってマークされることになってしまった。

そしてまた暫くして、スカルサタモンの元にまた新たな報告が入る。

「スカルサタモン様。珍しい動物がおりますが」

「どれ」

画面を切り替えサーチアイモンから送られてきた映像を見てみると、映ってきたのはスクライア商店の窓越しから間の抜けた顔で窺うヴィヴィオとマリアであった。

スカルサタモンは魔の抜けた二人に思わず腰が抜けてしまうが直ぐにこう言った。

「あ・・・見るからに間の抜けた顔だ。まぁほっといてもいいだろう」

その頃、まさか目の前に映っている発光体が探査型のデジモンだとは夢にも思っていない二人は蛍だと思い込みまじまじと見つめる。

「蛍ですよ♪」

「わ～凄い。こんな季節外れに蛍なんて綺麗ですわ～～～」

と、その時箪笥の物陰からクダモンがサーチアイモンの一体に目掛けて尻尾を振って疾風を飛ばした。

「はっ！」

サーチアイモンはその疾風を受けた瞬間爆発し、思わず二人は目を瞑る。

「「きゃ！」」

二人の声を聞き、ユーノ達はクダモンの元へと集まった。

「クダモン、何があった？」

「早く窓を閉めるのだ。カーテンも！」

「え！あ、はい！」

ヴィヴィオは言われた通りに窓と一緒にカーテンを閉め、クダモンに視線を向ける。

ユーノは徐に尋ねる。

「どうしたんだい急に？」

「脅かして済まなかった。あれはベルフェモンの方の探査型デジモンに間違いない」

「「「「え！」」」」

思わずその言葉を耳に、驚き返る面々と自分の認識不足を憎むユーノ。

「くそ。気が付かなかった・・・！」

「いまので、クダモンの姿が見られたんじゃ・・・」

なのはが心配になってそう言うと、クダモンは自信のない様子で答える。

「多分大丈夫だとは思うが、今の事で怪しんでこの辺を探りに来るだろう」

「何だって・・・！？」

それを聞いたあと、浦太郎が徐にカーテンの外を覗くと外に広がっていたものに目を疑う。

「あ！」

何と、店の外には先ほどとは比べ物にならないぐらいのサーチアイモンがそこらじゅうに飛び交っていたのだ。

「本当だ。うじゃうじゃウチの周り取り撒いてるよ・・・！」

クダモンは一度考えてからあの時同様このような科白を吐く。

「やはり、お前たちには迷惑がかかりそうだ」

「そんなこと、どうだっていいよ。それよりユーノ君。クダモンをもっと安全な場所まで移そうよ」

「よし。じゃあここはやはり、機動六課で決まりっしょ！」

「機動六課・・・」

クダモンが訝しげな様子でそう言うと、ユーノの肩に乗っていたユーノスが答える。

「俺が保護を受けている時空管理局の部隊だ。時間がない。急ごう」

ユーノ達は早速ミッドの方に家を構えるはやて達と実家で休暇を過ごしているスバル達を呼び出し、一旦機動六課の方へと移動する。

クダモンの事を簡単にスバル達に説明したのち、なのはは急な呼び出しでも集まってくれたはやて達に申し訳なさそうな表情で言う。

「ごめんね、はやてちゃん。スバル達もお正月返上しちゃって・・・」

「ええよそんなの。こんなときの為の機動六課な訳やし、困ってる人・・・もといキツネのデジモンを放っておくのも出来へん」

スバルはクダモンに向かって拳を固めてから言う。

「ここに居れば、安全だから！大船に乗ったつもりでね！」

「あんたが言うとちょっと私的には心配だけど」

「ああ！酷いティア！」

思わずティアナの言葉に顔を赤くするスバルと、その後に続くギンガの言葉。

「理由はどうあれ、私達はあなたの味方です。だから、一人で抱え込まないで下さい」

「ありがとう。本当に心から感謝をする」

全員が自分たちを信頼した様子でそのような言葉を呟くクダモンに笑みを浮かべた直後、ユーノは腕組みをしながら拭いきれない不安を言葉にする。

「だけど、場所をこっちに移したからと言ってまだ安心は出来ないな・・・――あ、そうだ！」

ユーノはあることを思いつくと、全員を連れて外の方へと移動した。

ユーノ達がやってきたのは、機動六課にあるユーノが開発したハイパーマシーンが全て収納された格納庫であった。

「ここって・・・ハイパーマシーン格納庫じゃ・・・」

「中に地下に続く扉があるんだ。念の為にクダモンをそこに案内して交代で任に付こう。」

ユーノはそう言った後、格納庫のシャッターを開け、更に床下に設けていた隠し扉を開放し始める。

「よいしょ」

全員は思わず唖然としてしまうが、ユーノは気にせず中に入ることを進める。

「さ、中に入って。ちょっと暗いけど、奥に部屋がある。耐火構造だから、万が一機動六課が襲撃されてもびくともしない」

そう言いながら地下に潜り始めると、聞いていたヴィータは思わずこう返す。

「いやな譬えは止せよ。そういうのはＪＳ事件の時だけでいっぱいなんだ・・・！」

「と言うより、またこんな大層なもの部隊長の私に断りもなく・・・」

「休暇届と一緒にまとめて出したんだけどね」

「あちゃ・・・いっつもその手でやられる」

始めから解ってはいるが、はやては改めて決して頭では勝つことは出来ないであろうユーノの思考に改めて圧倒されるのであった。

しばらく地下を潜って階段を下っていくと、やがて目の前に非常事態を想定して作られた巨大なホールが広がってきた。

全員は予想以上の広さを持ったホールに思わず声を漏らした。

「うわああ！中は広いんだね！」

「ここなら、何でもできそうですね」

「明日は、一護さん達も呼んでこれからの事を相談しよう。」

「「「「「はい！」」」」」

クダモンは心の中で、ここまでのことをしてくれるユーノと、その仲間たちの思いやりに心が打たれ、思わず涙ぐむのであった。

「（ありがとう・・・ユーノ・・・機動六課のみんな。こんな私の為に――――――）」

その後、店の方へと戻って来たユーノ達はと言うと、鬼太郎と浦太

郎が不敵な笑みを浮かべながら閉められたカーテンを全開にする。

「「ひひひ」」

そして、無数に飛び交うサーチアイモンのカメラ目掛けて二人はスカルサタモン達を完全に見下した様子であかんべいを行い、スカルサタモンもこれには我慢できなくなった。

「く～～～バカにしおって！こいつらも監視を続けろ！きっとそのうち尻尾を掴んでみせるぞ！！！」

その頃、スカルサタモンを始めとするデジモン全てが生息するこのデジタルワールドに唐突に流星が落下した。

山のふもとに落下した流星の中から一体の黒いマントを羽織った異形の化け物が姿を現し、徐にこう口にした。

「ここか――――――――この世界にアンゴルモアが――――――」

化物はそう言いながら徐に山の中を歩きはじめる。

その時、マントの下から不意に地面に落ちた一枚のセルメダル。

その表面にはサソリと思わしき絵柄が刻まれていた。

この化物――――――――果たしてグリードなのか？

それとも、別な何かなのか――――――――・・・

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はデジモンについてだ♪」

「デジモンこと、デジタルモンスターはウィズが企画し、大手玩具メーカーバンダイが発売した携帯育成ゲーム、及びそれに登場するキャラクターの名称だ。『デジタルワールド』と呼ばれるコンピュータネットワーク上の擬似電脳空間に生息する人工知能を持った架空の生命体で、様々な属性や世代に分かれており、現実の世界に存在する動植物、機械、人型や突然変異等を模した多様な種族が存在する。」

「また、デジモンには進化の段階があり、基本的に誕生から順に幼年期Ⅰ、幼年期ⅠⅠ（それぞれ幼年期前期、幼年期後期ともいう）、成長期、成熟期、完全体、究極体の六段階に分類される。幼年期はⅠとⅠⅠがセットになる場合もある。また、例外的な進化段階である、アーマー体、ハイブリッド体、超究極体に分類されるものもいる。」

「そして、ある特定の軍団や勢力が存在し、今回出て来たロイヤルナイツと七大魔王に関しては次回説明しようと思う」

な「なんだかまたすごい事になって来そうだよね、今度の事件」

一「まぁな。しかし、あのアスタモンって奴の強さがあれってことは・・・ベルフェモンってのは相当ヤバいんじゃねぇのか？」

ユーノス「ここは、俺達の結束の力で立ち向かうしかあるまいな。それに、今度の事で万が一ヤミーやグリードが出るやもしれぬ。気を引き締めていこう」

ユ「と言う訳でみんな、次回は一体どんなデジモンが出るのか、楽しみしててね♪」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノの肩にユーノス、そしてその首にはクダモン。

二匹の小動物を飼い慣らすことになったユーノ。

恋「しかし、どちらも見た目とは裏腹に堅苦しい性格だよな」

ク「堅苦しくて結構だ。私はこれでもロイヤルナイツ。デジモンたちの模範となるべき存在なのだ」

ユーノス「俺もまがりなりにも七大元帥。そうならざるを得なかったのだから仕方あるまい」

な「それにしては二人してユーノ君にべったりじゃないですか・・・ぶ～～～」

思わず焼きもちを妬いてしまうなのは。

ユ「あはは・・・仕方ないってなのは。これぐらい大目に見てあげてよ」

ヴィ「でもママの気持ちよく分かるよ。ユーノパパの体って触れて

るだけですごく心地いいし、幸せな気分になるんだよね」

な「あ～あ・・・早くユーノ君が力を取り戻してもう一度フェレットになってくれれば、今頃好き放題だったのに～～～」

ユ「ちょっと！まさかなのははそんなことをするためだけに僕に力を取り戻してほしいって思ってたの！？」

耳を疑ったユーノであった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

スカサ「ついに尻尾を掴んだぞ。」

シャ「ミッドチルダ上空に空間の歪みを確認！」

ク「さようなら――――――――――」

ユ「僕は守り抜いて見せる。クダモンを。そして――――――――この世界も！」

第１５４話　急襲と決別と世界の崩壊

登場デジモン

アスタモン

声：小山力也

完全体　魔人型　ウィルス種

完全体でありながら、究極体を凌駕する力を持ち、悪魔デジモンの軍団を束ねるダークエリアの貴公子である。敵に対する残虐性と味方に対する慈愛を持ち合わせており、そのカリスマ性から従う悪魔デジモンはかなりの数に登ると見られる。自慢のマシンガン「オーロサルモン」から放たれる弾丸は意志をもっており、まさに「地獄の果て」まで敵を追尾する。必殺技は、「オーロサルモン」の弾丸を全て撃ち尽くす『ヘルファイア』と、自身の暗黒の気を貯めて放つキック『マーヴェリック』。

サーチアイモン

成長期　機械型　データ種

攻撃能力を持たない情報収集のためにだけ開発された特殊なデジモン。球体の形をした小型で量産可能なためあらゆる戦局において有効な情報を持ち帰ることが出来る。その目で見た全ての情報を特定の認識番号によって記録し、映像を味方に送りつける。

急襲と決別と世界の崩壊（前書き）

貨幣は人間の欲望を満たさない

By　アーヴィング・フィッシャー

急襲と決別と世界の崩壊

地球で正月を過ごしていたユーノ達の前に突如現れた謎のデジモン、クダモン。

その正体は、デジタルワールドを守護する聖騎士団・ロイヤルナイツの一人だった。

クダモンは、復活した七大魔王ベルフェモンの魔の手から逃れ人間界へとやってきた。

また同様に、ベルフェモンの刺客も人間界へとやってきてしまう。

ユーノ達はベルフェモンの脅威からクダモンを守るために、奮闘するのであった。

〈ユーノＳｉｄｅ〉

アスタモン襲撃から一夜明けが地球。

ユーノは一護と相談し、急遽デジタルワールドに関する調査を依頼した。

一護は浦原との協力で、世界中のインターネットサーバーで情報を検索した結果、極めて有力な情報を入手することに成功した。

現在、ユーノはその一護や織姫達を引き連れて機動六課転送ポートまで移動していた。

何気ない談笑をしていたユーノ達だったが、その時恋次が急に立ち止まり言う。

「待てっ！」

「「「「「「？！」」」」」」

ユーノ達も大体の察しはついていたのか、言われた通り立ち止まると、恋次はルキアの頭上を飛んでいたサーチアイモンを手に取り、怒り心頭な様子で口にする。

「しつけーんだよ！スパイボタルが！」

恋次はサーチアイモンを握りしめると、足元目掛けて叩きつけ、本体を破壊すると念を押して踏み潰してやった。

だがそれでも周囲には有象無象のサーチアイモンが飛び交い、ユーノ達を監視していた。

「やだね。昼も夜も付け回されるって言うのは」

「ほっとくしかないですよ。ただし、ウチの中と機動六課には入れない事」

「「「「「「「「はい（うす）（ああ）」」」」」」」」

ユーノの言葉を聞き入れ、返事をした七人は急いで転送ポートへと向かい、去り際恋次は一体のサーチアイモンに向かって怒鳴りつけた。

「俺の所に来たらな！ぐちゃぐちゃに壊してやるからな！！ったくもう！」

恋次はそう言うと、足早に移動していくユーノ達を追って走っていく。

「おう！待ってくれよ！」

だが、この時恋次もユーノ達も気づいていなかった。

まさかサーチアイモンの一体が恋次の気づかないうちに恋次の尻ポケットの中へと入り込んでいたのだということを。

ユーノ達が転送ポートとして選んだのは、今は誰も使っている気配すらない廃ビルの中であった。

周りにサーチアイモンがいないことを念入りに確かめた後、一行はビルの中へと入っていき、あらかじめ用意していた転送ポートに乗ると、急いで機動六課へと帰還した。

機動六課に到着したユーノは一護達を引き連れ、司令室へと向かった。

「みんな、お待たせ♪」

「お邪魔します」

織姫が差し入れ片手に司令室の中に入ると、なのは達も返事を返す。

そして、人数が揃ったところでユーノ達は席に着き、ユーノと一護からの説明が始まった。

「これでよしと。計画の実行だ」

「はい♪一護さんが浦原さんと協力して、世界中のインターネットサーバーからアクセスした結果、凄い発見をすることが出来た」

「凄い発見？」

「どんなですかそれは！？」

「これから詳しく説明するから、ちょっと待っててくれ。」

一護がそう言った後、ユーノは一護から手渡されたデータディスクを専用の機械と接続させ、タッチパネルをタッチしていく。

その準備の傍ら、恋次は辺りを見渡しクロノがまだ戻っていないことを確認する。

「クロノは外に出てるのか」

「はい。ちょっとエイミィさんとお子さん達を連れて。そんなに遅くならない筈ですから、もうちょっとで戻ってくると思いますけど――――――」

「ま、家族サービスじゃ仕方ねぇよな」

なのはからの話を聞き終えた直後、ユーノは準備の方を整えると、一護から受け取ったデータをミッド式のシステムと瓦解出来るプログラムへと変更すると、それを手に全員に移動を促す。

「よしじゃあ、クダモンのところへ移動しよう」

ユーノ達は司令室を出ると、ハイパーマシン格納庫へと足を運び、クダモンと交代で盤をしているフェイトの元へと向かう。

地下へと続く階段を開いたユーノは全員を先導する。

「足元に気を付けてください」

恋次達は初めて入る地下室の内部に多少の戸惑いを見せた。

「どうなってるんだよこの中？真っ暗じゃねぇか」

「下に部屋があるんですよ」

「ユーノも浦原さんも地下になんか作るの好きだな・・・」

そんな事を口にしながら、ユーノ達は地下の方へと進んでいく。

吉良は徐にかなりの深さを誇る地下内部に思わずつぶやく。

「それにしても随分深いですね」

「ここは特殊結界空間ですからね。力を失う前に秘かに作っておきました♪」

「なぁユーノ。何度も言うようだけどこれって犯罪じゃねぇのか？」

「細かいことはもうなしにしようぜ一護」

「これって結構重大だと思うけどな」

意外とそう言うところは気にする一護であったが、この時彼らは重要な事実に気づかなかった。

恋次の尻ポケットに忍び込んでいたあのサーチアイモンが何時の間

にやら抜け出し、密かに前線メンバーの後ろをつけていると事実を。

そして、地下室へとたどり着くとなのはとユーノはクダモンとその番をしていたフェイトの元に駆け寄っていく。

「フェイトちゃんー！」

「クダモンも元気かい？」

サーチアイモンは全員に姿を見られないようステルス機能を発揮し、姿を透明にしてから彼らの様子を窺う。

「なのは。みんなもお揃いだね。クロノは？」

「まだ戻って来ていないみたいです。」

「そうか。なら仕方あるまい」

クダモンはそう言うと、ユーノの脚を伝ってユーノスのようにユーノの肩に乗ってから首に巻きつき、ユーノはそんなクダモンに笑みを浮かべこう言う。

「フェイト。これから緊急会議を開きたいんだ」

「うん、わかった」

了承したフェイトは地下室の一角にあったボタンを押し、中央付近に大会議室さながらのテーブルとイスを設置させる。

「順番に奥の方から詰めていってね」

一同は奥の方から順に詰めていく形で席に着いていく。

すると、何気なくこの会議室の大きさに疑問を抱いていたキャロが徐に尋ねる。

「あの、ユーノ先生。ちなみに言うとここってどれぐらいの広さ何です？」

「そうだな・・・大体市民体育館ぐらいには作ったからな・・・」

その言葉を聞いた瞬間、はやてとなのはは苦笑いを浮かべ、構造の違い過ぎる頭を持つユーノに驚きを通り越して寧ろ怖いと感じた。

「う・・・どうやってそない大きいものを一人で作れるや・・・」

「恐るべしユーノ君・・・」

だが、その時の様子はばっちりサーチアイモンの目を通してしっかりと現世のとある森の中でキャンプを張っていたスカルサタモン達の元へと伝えられ、スカルサタモンは不敵な笑みを浮かべる。

「ついに尻尾を掴んだぞ。出動！」

スカルサタモンは部下であるデビモン数十名と、ペットのスカルバルキモンを引き連れて森の中から出現し、人間たちに悟られないように姿を透明にしてから異世界ミッドチルダへと向かって飛翔する。

「クダモン、今度こそ逃がしはせぬぞ。手向かう人間は抹殺しろ。街ごと焼き払ってもクダモンを捕まえるのだ！」

今、恐るべきベルフェモンの魔の手がミッドチルダへと向けて飛び立ってしまった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、機動六課のハイパーマシン格納庫地下室において、緊急会議を開いていた前線メンバー一同はと言うと、そんな恐るべき魔の手がもうすぐこちらに迫っているとは露知らずの様子であった。

ユーノは中央にモニター画面を出現させると、真剣な眼差しでこちらを窺うなのは達に説明を始める。

「先ずは僕からの発表。あの蛍の発信源を探っていたんだけど、今日ついに突き止めたんだ！」

嬉々として話すユーノの言葉を聞いた瞬間、全員も思わず顔を緩めて拍手を送る。

「凄い！ユーノ君流石！」

「頼りになりますわ！」

「さっそく乗り込みましょう！二度とクダモンに手を出せねぇ様にギチョンギチョンにしてやる！！」

鬼太郎は早くも先手を打つ気でいたが、それに水を差したのは浦太郎だった。

「待ってよ先輩。いくら僕らでも、不用意な攻撃は無謀だよ。第一、敵の戦力にしたってまだ解析できてない点が多い。そうでしょ？」

浦太郎がそう言うと、ユーノスも腕組みをしながら渋い顔で言う。

「ああ。河原で採取した昨日のアスタモンの攻撃だが、あれはオーバーS魔導師、強いては力をセーブされた阿散井たちの力でも互角にやれるだけのものを持っている。クダモンの話では、完全体の上には究極体と言うのがいるそうだが」

「その通りだ」

「究極体って・・・それってもしかしてグリードよりも強いのかな・・・」

「可能性は捨てきれないわね。」

スバルの不安げな言葉を聞いたティアナは冷静にそう返答し、直後にユーノが鬼太郎に向かってこう言った。

「今回はまだ攻撃するのは止めて、一先ず情報収集からにしておこう」

「・・・わかりました！」

ユーノの話を聞き入れ、素直に従うことにした鬼太郎は席に着き、それとは対照的に今度は一護が立ち上がる。

「そんじゃ、次は俺だな。浦原さんと協力して、デジタルワールド

について世界中のサーバーを経由して情報を集めてたら、極めて有力と思える情報が見つかった」

それを聞き、一同は一瞬驚いた表情を浮かべ、代表してルキアが問い質すと織姫が答える。

「それはなんだ？」

「うん。長年デジタルワールドの研究を行っている、子どもの頃は“選ばれし子供”って言われた人らしいんだけど・・・私達の今回の話の旨をメールで伝えたら、会って話がしてみたいって連絡が来てね」

すると、その話を聞いていたクダモンが眉間に皺を寄せながら何かを思い出したようにこう呟いた。

「選ばれし子供・・・そう言えば嘗てのデジタルワールドにそのような人間がやって来たと仲間たちからは聞いているが。本当に存在したとはな」

それを耳にし、ユーノはクダモンにこんな風に尋ねる。

「もしかして、何度かデジタルワールドには危機が訪れていたのかい？」

「ああ。この世のすべての生き物を憎み、消去しようとしたアポカリモンの時も、人間界をも飲み込もうとしたベリアルヴァンデモンのときにも、選ばれし子供とそのデジモンたちによってデジタルワールドは危機を脱している」

「成程な。どうやら地球ってのは、色んなことで世界が崩壊しそうになってはその都度違う形ではあるが救われているって訳やな」

「そのようですね」

はやてとシグナムは腕組みをしながらクダモンの話に耳を傾け納得した様子となる出逢った。

と、ここで再び一護の話へと戻る。

「で、俺から提案なんだが・・・これから二グループに分かれてその元・選ばれし子供だった人の家に行くのと、敵の情報収集とアジトの確認のとで行動しよう」

「よしっ。いっちょやるか」

「だけど、大丈夫なんですか?」

エリオが不安げにそう言うと、聞いていた部隊長のはやても行動を起こすつもりでこう言う。

「何もしないでいたって情報は集まらんよ。兎に角ここは行動あるのみ。それに、まさか敵さんもこっちから攻めてくるとは考えにくいやろうし、な♪」

「了解。じゃあ、今いるメンバーを二等分しようか」

「くれぐれも、敵のアジトに向かう班はいつ何が起こるか分からないから気を抜かないようにしないと」

「そうだね・・・あれ？クダモンどうしたの？」

ユーノはその時、自分の首の方で小刻みに体を震わせる少々涙ぐんだ様子のクダモンに目を向け、全員が驚き返る中クダモンはこう言った。

「・・・ありがとう・・・私の為に・・・／／／」

それを聞くと、ユーノ達は柔かい笑みを浮かべた。

前線メンバーは二等分に班を分けた結果、スカルサタモン達の捜索と情報収集班はスターズとライトニング、それにユーノとクダモン、はやてを入れた面々。

元・選ばれし子供の元に向かうのは一護を筆頭とする死神メンバーと残りのスクライア商店メンバーである。

「さて、準備はいいかいみんな？」

「いつでもオッケーです！」

「ああ。大丈夫だ」

全員が準備を完了させると、確実に手薄となってしまう機動六課を守るためにユーノスがザフィーラの背に乗りユーノ達に言う。

「警備が手薄になっても困る。念の為、俺達が残る」

「頼みますよ、ユーノス元帥。ザフィーラさんも、頼りにしています」

「ああ。お前もしっかりとな」

ザフィーラからの激励を受け、ユーノは思わずほくそ笑む。

「ほんなら、前線メンバー出動！」

「「「「「はい！」」」」」

こうして、ユーノ達は二つの班に分かれてこの場をユーノス達に任せて再び第９７管理外世界「地球」へと向けて出発をするのであった。

だが、この時彼らは思いもよらなかった。

スカルサタモン達の突然の襲撃と、その恐るべき力を――――――

◇

〈クロノＳｉｄｅ〉

ユーノ達が地球に出動して暫くして、それとは入れ違いになる様にクロノがエイミィを引き連れて六課へと戻って来た。

司令室の扉を開けると、クロノと久しぶりに現地にやって来たエイミィがおやつの材料片手に中へと入ってきた。

「みんな。元気してた？」

「すまない。用事を片付けるのに時間がかかってしまった」

クロノが到着すると、ザフィーラと共に番を守っていたユーノスがその事に気づく。

「クロノか。エイミィも来てくれたのか」

「ま、クロノ君だけじゃ色々と心配なものですから」

クロノはその時のエイミィの言葉に蟠りを覚える。

「エイミィ・・・それじゃまるで僕が一人じゃないも出来ないような言い方だな」

エイミィはそんなクロノの言動が少々可愛いと思いながら悪戯っぽく舌を出して謝る。

「冗談冗談と。それより、みんなは何処へ行ったのかな?」

「主はやてたちなら、二手に分かれてそれぞれ調査に出かけている。一足違いだったのだ」

「そうか。では待たせてもらうとするか。但し、気を抜かずに」

クロノはそう言うと、自分の席へと座り、モニターで周囲を散策しながらユーノ達が調査から戻ってくるのを待つことにし、エイミィはその間にキッチンへと向かい、料理支度を始める。

「みんなが帰ってくるころに合わせて、何か作っておこうっと。クロノ君も手伝ってね」

「お前な・・・・・はぁ、わかったよ」

クロノは用事を済ませたばかりで少々疲れが出ているのにも拘らず、妻に逆らえない自分の性分に嫌気が差していたが、それでもこんな自分を必要としてくるエイミィには特別優しいことが伺えた。

ユーノスとザフィーラもそんな二人のやり取りを見て、思わず鼻で笑うのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、地球に到着したユーノ達はサーチアイモンの発信源、もといスカルサタモン達がキャンプを張っていた森林へ近づき、より慎重な行動をとっているとところであった。

「電波発信源に、近づいたぞ！」

「よし。各自慎重に。手筈通りに頼む」

「了解」

ユーノ達はオプティックハイドで姿を消した後、なるべく物音を立てないように森の奥へと侵入を開始する。

しかし、ユーノ達の行動もむなしくスカルサタモン一行は既にミッドチルダへと向けて移動を開始しており、サーチアイモンからの情報をもとに異世界の移動を始めようとしていたスカルサタモンは次元の亀裂を見つけ出すことに成功する。

スカルサタモンは瞳に映る第1管理世界「ミッドチルダ」の風景を確かめたのち、行動に移す。

「この世界に間違いなさそうだ。よし――――――」

スカルサタモンは持っていた杖の先についた宝玉から放たれる強力な光で、デジモンのデータに異常を起こし破壊してしまう恐ろしい必殺技「ネイルボーン」を使って、その亀裂を大きくしようとした。

「『ネイルボーン』！」

亀裂にネイルボーンを叩きこんだ瞬間、元々ごく僅かと言わんばかりの小さな亀裂が一気に崩壊し、巨大な次元の穴が誕生するとその先に広がっていたのは紛れもなくミッドチルダであった。

「進め！」

スカルサタモン一行は開かれた次元の穴を通り抜けて機動六課へと向かっていくのであった。

そんな事など一切知る由もないクロノ達の方は今どうしているのかと言うと、こんな事が行われていた。

「ふんふんふふん♪」

鼻歌交じりにエイミィが全員が帰ってきたときの為のおやつを作るのに精を出しており、クロノは横の方で手伝いをしていた。

適度に火加減を見ながら味見をするエイミィ。

すっかり料理姿が板についた主婦歴９年～１０年にもなるベテランである。

「おお、いい感じに出来ましたと」

エイミィは出来たてのおやつを試食してもらうために人数分とりわけ、ユーノ達を呼び集める。

「ささ、みんな。試食お願いします」

ユーノスを始め、シャーリーやアルトにルキノ、それにグリフィス、ヴァイスなどもエイミィの傑作料理に舌鼓。

「うん。これは上手いな」

「さっすがエイミィさん！料理の腕も超一流ですね！」

「えへん。これでも二児の母親で、クロノ君の奥さんだかね」

「ふん。そうだな」

「このまま何もなければ一番いいのだが・・・――」

と、クロノが何気なくそう呟いた直後だった。

突然、六課全体に代位急警戒警報が鳴り響く。

「「「「！」」」」

思わず耳を疑うユーノ達だが、クロノは直ぐに状況確認を急いだ。

「何事だ！」

シャーリー達はすぐさまタッチパネルを高速連打していき原因を調べる。

「ミッドチルダ上空に空間の歪みを確認！エネルギー反応強くなっていきます！」

「あ、何か出てきます！」

中央のモニターに映し出されたのは、大虚の出現のように空間を引き裂くように現実の世界へと現れる異形の集団・・・そう、スカルサタモン達ベルフェモンの軍団であった。

「あれは！」

「まさか・・・奴等か！？」

スカルサタモン達の姿を捕えると、ユーノス達は思わず表情を凍りつかせる。

進路咆哮を確認していたアルトはその方角が機動六課であることに目を疑った。

「真っ直ぐこちらに向かって居ます！」

ザフィーラは真顔を浮かべたまま呟く。

「どうやら来てしまったらしいな」

エイミィ自身も管制官時代の事を思い出しながらサポートに徹すると、夫でありパートナーでもあるクロノの命令を待った。

「クロノ君」

「分かってる。防御システム全開！何が何でも一歩たりとも六課へは近づかせん！」

クロノはバリアジャケットに身を包み、ＳＵ２とデュランダルを装備し、外へ向かって走り出す。

ユーノスも今回の事態を前に、自らも前に出る決意しザフィーラに進言する。

「ザフィーラ。俺達も迎撃に出るぞ。」

「承知しました」

二匹はシャマルを呼び出し、クロノ同様外へと飛び出して行き、その間にエイミィとシャーリー達は敵の情報を分析。

「完全体と思わしき生体反応２！それに続いて残り数十体ものデジモンが急速接近！」

スカルサタモンは機動六課に接近する傍ら、不敵な笑みを浮かべ呟く。

「クダモンめ・・・逃がしわせぬぞ」

クロノ達の運命は・・・――――！

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

スカルサタモン達が機動六課へと向かって侵攻を開始しようとしているその頃、ユーノ達とは別にもう一か所の元へと向かって居た一護達はと言うと、東京都のとある一角に佇むマンションへとたどり着き、徐に車を降りる。

「ここだ。」

「この建物に選ばれし子供が――――――」

ルキアはそう言うと、恋次達と共に徐に目の前に聳え立つマンションを仰ぎ見る。

「ああ。無理言って頼んだんだからな。大人しく話聞いてろよ」

「分かっておる。さぁ、行こう」

一護の後に続いて、恋次達は足を進めるが、この状況の中でもユーノと一緒に行動することが叶わなかったマリアの欲求不満は顕著に表れており、涙を流しながら吉良に引っ張られるという状況だった。

「う～～～何故私がユーノ様と一緒じゃないのですか～～～！！」

「はいはい・・・文句があるならはやてさんに言いなよ」

スクライア商店メンバーは最早ツッコムのも億劫になっていた。

建物の中に入った一行は9階にあるその人物の元へと移動し、部屋の前にたどり着くと徐に一護がインターホンを押す。

「ごめんください」

『はい。』

マイクのスピーカーから吉良と声紋がよく似た男の声が聞こえてくると、一護は徐にこう口にして尋ねる。

「あの、昨日メールで連絡した黒崎ってものなんですけど」

『あ、はい。黒崎さんですね。お待ちしていました。どうぞ、上がってください』

話しを終えると、その人物はドアの鍵を開き、快く一護達を中へと招待する。

一護はその人物から本人であるかどうか名前を窺った後、何も知らないでいる恋次達に説明し始める。

「みんな、こちらデジタルワールドに関して研究を行っている泉光子郎(いずみこうしろう)さんだ」

「はじめまして。泉です。奥の方へどうぞ」

一護達は早速、光子郎の好意に甘えさせてもらい中へと上がらせて

もらった。

中に入った一行は光子郎の寝室兼、研究室となっている部屋の中で光子郎の話を伺うことにした。

光子郎は先ず、デジモンが地球にやって来たという事に関して再度確認を取る。

「それで、本当なんですか・・・デジモンがこの地球にやって来たというのは」

「ああ。クダモンって言ってな、なんでもロイヤルナイツの一員らしい」

「ロイヤルナイツですか。それはまた凄いのが・・・・・・」

思わずあいた口が塞がらなくなる光子郎。

すると、金太郎は一度咳払いをしてから徐にこう尋ねる。

「光子郎殿は、デジタルワールドについて何処までの事を御存じで？」

「はい。僕自身、まだまだ知らないことが多いのですが・・・少なくとも今分っているのはあなた方の言う通り、いまデジタルワールドに途方もない危機が迫っているということは確かな事です。これを見て下さい」

光子郎はそう言いながら、机の上のパソコンを操作して、デジタルワールドとそのデータ容量に関する機密データを公開する。

「これは？」

「デジタルワールドは、本来は人間のネットワークが進化する過程の中で生まれた言わば偶発的な擬似世界。地理的にはファイル島を中心に、七つの大陸に別れています。これらの大陸・・・もといデジタルワールドを構成するもの全てがデータです。しかし、このデータが最近異常なバグを起こし始めるようになってきました」

「バグ・・・ですか？」

「正確には、巨大なバグによる超加速度的なプログラムの膨張現象。これは予測しうる最悪の事態の前兆とみなされます」

「最悪の事態だと？」

「どういう事だよ？」

話を聞いていた恋次達が思わず耳を疑ってしまう中、光子郎は冷静な様子で順に説明をしていく。

「いいですか・・・この現実世界とデジタルワールドは言わば表裏一体。どちらかのバランスが崩れてもよくない。そして、今まさにデジタルワールド全体のバランスが崩れ始めようとしている。このままでは膨張したデータが無限大に増え続けてしまい、バランスを失ったデジタルワールドそのものが次元の枠を超え、この現実世界に流れ込んでしまう可能性があると」

「「「「「な！」」」」」

「「「「「え！」」」」」

思わず絶句する一同。

光子郎は目を瞑って暫くの間を置いたのち、残酷とも言える一言を口にした。

「データと言うデータが溢れ返り、このままでは僕達の世界は・・・――――崩壊します」

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

そんな残酷な話を一護達が聞かされているその頃、機動六課の方ではもっと残酷な光景が広がっているのであった。

「「「「は、は、は、は、は、は、は、は」」」」

前線メンバー屈指の実力を有するクロノやユーノスを始めとする隊長陣四人が息を立てて炎上する機動六課の周囲を必死にスカルサタモン達の攻撃から防衛していたのだ。

スカルサタモンは杖を持ち、デビモン達数名と共に赤子の手を捻るかのようにクロノ達をあしらい続け鼻で笑っていた。

「ふん」

「く・・・・・・こいつら・・・・・・」

ユーノスは思わず苦い顔を浮かべながら頭上のスカルサタモン達を見上げる。

すると、唐突にスカルサタモンが口を開きこう言って来た。

「ふふふ。たった四人で、よく守ったと褒めてやる。だが、いい加減お前たちにかかずらっている暇はない。そろそろ・・・・・・終わらせてもらうぞ！」

スカルサタモンが杖を掲げると、一斉にデビモン達が横一列に並び、瞳から光線を発射する。

「は！クラールヴィント防いで！」

〈Ｙｅａｈ〉

シャマルは機動六課に被害が及ばないよう障壁を展開し、デビモンの攻撃を防ごうとする。

ユーノスも傷ついた体ではあるが、魔力を振り絞り結界を施し防御をより強固なものへとする。

「ユーノ達が帰るまで、何が何でも守り通す！」

クロノは杖を握りしめると、ザフィーラと共に空へと上がりスカルサタモンの方へと向かっていく。

「いつまでも、あいつやフェイト達ばかりに負担をかける訳に行かない！」

「ぜおおおおおおおおお！！！」

二人がスカルサタモンの方へと向かった瞬間、スカルサタモンは不敵な笑みを浮かべこう口にする。

「ふふ。スカルバルキモン」

すると、スカルサタモンの前に現れた全身骨でありながらデジコアの力によって生命機能を果たしている完全体デジモン、スカルバルキモン。

「！」

「『グレイブボーン』」

スカルバルキモンはザフィーラ目掛けて、巨大な足で敵を踏み潰し、地中に埋没させる必殺技「グレイブボーン」を発動し、ザフィーラは真正面からそれを受けるとシャマルの前に落下する。

「ぬあああああああ！！！」

「きゃああ！」

「ザフィーラ！」

ユーノスは直ぐに落下したザフィーラの元へと近づき、手当てを始める。

「く！」

クロノは自分の目の前で仲間を傷つけたスカルサタモン達に怒りを覚え、ＳＵ２とデュランダルを交互に使い分けながら肉薄し、追い詰めていく。

だが、その時スカルサタモンは不敵な笑みを浮かべながらクロノの杖を握りしめ、一切の魔法の発動を停止させる。

「何！？」

「ははははは！ネイルボーン！！！」

「のあああああああああ！」

スカルサタモンは至近距離からのネイルボーンをクロノにぶつけると、クロノは血を吹き出した状態で墜落し、地面に叩きつけられる。

「「クロノ（提督）！」」

「包囲しろ！このまま一気に突撃だ！」

スカルサタモンがそう言うと、機動六課の周囲を包囲し、一気に攻め入ろうとする。

「く・・・・・行かせぬ・・・・・・！」

ユーノスは魔力を全開にしてデビモンを退かせる衝撃反動が伴った結界を張り巡らせる。

しかし、スカルサタモンだけはユーノスの方へと向かって行き、ユーノス目掛けて鋭い攻撃を施す。

「子ネズミが。身の程を知れ！」

スカルサタモンはそう言うと、ユーノスとその近くにいたシャマル目掛けてネイルボーンを叩きこんだ。

「「！」」

その時、地球の方でスカルサタモン達のキャンプ跡を発見し、辺りを散策していたユーノとはやては表情を凍りつかせ、不思議に思ったなのはとシグナムが尋ねる。

「ユーノ君？はやてちゃん・・・？」

「いかがなさいましたか？」

ユーノは額に汗を浮かばせながら信じられないとばかりの表情で口にする。

「ま・・・まさか・・・ユーノス元帥！？」

「シャマル・・・ザフィーラ・・・！」

二人の言葉を聞くと、なのは達の表情も凍りつく。

その頃、四人を圧倒したスカルサタモンはデビモンとスカルバルキモンを引き連れて炎上する機動六課の内部へと侵入していく。

ヴァイスは先頭になってストームレイダー片手に応戦しようとする。

「くそが！」

〈Ｓｈｏｔ〉

しかし、ヴァイスの放った魔力弾はまるでおもちゃの弾丸のように簡単に弾かれてしまい、ヴァイスはその見た目も然ることながら恐るべき力を秘めたスカルサタモン達に思わず言葉を漏らす。

「なんだよこいつら・・・悪魔か・・・！？」

「邪魔だ」

すると、スカルサタモンは杖の宝石からエネルギー弾を発射し、ヴァイスを吹き飛ばす。

「のあああああ！」

ヴァイスは壁に激突し、気を失ってしまう。

「ヴァイス先輩！」

後輩のアルトは倒れたヴァイスの元へと駆け寄り、エイミィたちは他の局員に守られながら身を小さくしていた。

「ヴァイス先輩！！しっかりしてください！」

涙目を浮かべてそう言うと、スカルサタモンは答える。

「安心しろ。加減はした。それよりも早くクダモンを探し出せ！」

デビモン達は命令を受けると、機動六課中を飛び回り、邪魔する局員達を負傷させては施設内を破壊し、クダモンの捜索を続けるがそこには当然クダモンの姿はなく、代わりにデビモン達は非力な女性陣を人質にとった。

「「「きゃあああ!!」」」

デビモンに捕まったエイミィたちは必死に抵抗する。

「放して!!放してってば!」

「報告!建物の中に、クダモンの姿は見当たりませんでした!」

スカルサタモンは舌打ちをしながら未だ抵抗の姿勢を見せるエイミィたちに問い質す。

「クダモンをどこに隠した!?」

「知らないわ!」

「大方勘付いて素早く逃げたか。だが、その人間の女どもも捨てたものじゃないぞ。クダモンを呼び寄せる餌に使える」

スカルサタモンは狡猾な知恵を働かせると、人質としてエイミィたちを拉致していき、クダモンに分かる様に証拠を残して機動六課を立ち去った。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方、ユーノ達は一護達と合流すると急いで機動六課の方へと向かって居た。

一護は死覇装姿で眉間に皺を寄せながらこう口にした。

「世界の崩壊の次は六課の危機か！？」

「なんでいっつもこうなんだよ！！シャマル！ザフィーラ！クロノ！！」

「みんな、無事でいてくれ！」

切にそれだけを思いながら機動六課へと帰還したユーノ達だったが、時すでに遅し。

到着した瞬間、彼らの目の前に広がってきたのは信じられない光景だった。

「「「あ！」」」

「これは！？」

どうやら火災の方は鎮火していたようだが、機動六課ロングアーチの至る箇所が破壊され、そんな六課を守ろうと奮戦したクロノ達四人が血塗れとなって倒れていた。

ユーノは思わず歯を食いしばり、拳を強く握る。

「くそ！ユーノス元帥！クロノ！！」

ユーノ達は倒れていたクロノ達の元へ近づき、傷の具合を確認する。

「クロノ！しっかり！クロノ！！」

フェイトが耳元で彼の名前を呼ぶと、クロノは何とか意識を取り戻し、弱々しい声で誤ってきた。

「う・・・フェイト・・・すまない・・・僕らは・・・」

「クロノの所為じゃないよ。それよりどうしてこんな・・・！？」

フェイトは凄まじい戦闘があったと推測される無残に破壊された六課を周囲を見て思わず悔しい想いに立たされる。

ユーノの方も、傷だらけのユーノスを手に抱えてクダモンと一緒に応答を待った。

「ユーノス元帥っ！しっかりしてください！」

「ユーノス。分かるか？私達だ」

すると、ユーノスもユーノの言葉を耳にし、ゆっくりと瞼を開く。

「く・・・・・あいつらが・・・・・・あいつらが・・・エイミィたちを・・・」

「え！？エイミィさんを！」

と、その時唐突にユーノ達の耳に建物の中から一護の声が聞こえる。

「おーい！みんなちょっと来てくれ！」

「あなた！何か見つけたの？」

織姫がそう言ってから全員がクロノ達を担いで中へと向かうと、一護はやって来た全員にあるものを見せる。

「これを見ろ」

一護が皆に見せたのは、スカルサタモンが残したと思われるデジタルワールドで使われている特有の文字であった。

「なんだこれは・・・――――」

奇怪な文字に眼を疑う一同を前に、クダモンは険しい顔を浮かべながら全員に言う。

「これは、デジタルワールドの文字だ」

クダモンは早速自分に向けて書かれたその中身を黙読し始める。

〈クダモンに告ぐ。今夜１２時にブラックフォーゼの墓場に一人で来い。来なければ人質の女どもの命はないぞ。ベルフェモン特攻隊長官　スカルサタモン〉

クダモンは読み終えると、スカルサタモンへの怒りが混み上がってくる。

「お・・・のれ・・・・・・！」

一人で納得した様子のクダモンを見ていた鬼太郎は声を上げて尋ねる。

「おい！何て書いてあんだよ！？」

「早く読んでよ！」

「クロノの妻とシャーリー達は・・・スカルサタモンに捕まったらしい」

「「「「「えええ！！」」」」」

一同はその言葉を耳にした途端、驚愕のあまり口が塞がらなくなる。

「マジかよ！？」

クダモンは自分を責め立て、らしくない声を上げる。

「すべて、私の責任だ！！」

「責任がどうこう言ってる暇はない！直ぐに救出に向かわないと！」

「こういう時は理屈なし！行動あるのみだてめぇら！！」

恋次達はそう言うと、斬魄刀を腰に携え外の方へと向かい、ユーノは織姫に重傷を負ったクロノ達の治療を一任する。

「織姫さん。みんなの怪我の手当てをお願いします。僕らはエイミィさん達を」

「はい。あなた、朽木さんもお願いね」

「「ああ」」

「救出に向かうのはいいとして、これからどうすべきかが問題や」

全員が外に向かった後、クダモンはユーノ達に悟られないように入り口の方へと向かい、エントランスホールの前で話し合うはやて達を一瞥し、こう呟いた。

「遥か異世界に住まう勇敢なる人間の友人よ。私はお前たちと共に過ごした時間、友情を決して忘れないだろう。さようなら――――――」

クダモンは別れを済ませると、誰にも気づかれないように一人待ち合わせの墓場へと向かって走り出して行った。

その間にユーノ達はスカルサタモンに拉致されたエイミィたちの救出方法を思案し続けていた。

「霊圧であいつらの事追えないのか？」

「大丈夫だとは思いますが、万が一奴らが待ち伏せしていたとしたら・・・――――」

「そんときは！宣告通りぶちのめしてやりますよ！」

「だが甘く見ないことだ。あのクロノ提督やユーノス元帥たちの防衛網を容易く破るとなると、並み一通りではない」

「最初から奥の手を出さないといけないかもしれないってことですね」

「ある意味グリードよりも難儀な相手やな・・・デジモンちゅうのは」

全員の表情が思案をするうちにどんどん険しくなっていく。

しかしそれでも一護はそんな全員を激励し救出を促す。

「迷ってても仕方ねェ。霊圧を辿って追うぞ！」

一護の激励を受け、ユーノ達は首肯し早速さらわられたエイミィたちの救出の為に行動を開始した。

◇

〈クダモンＳｉｄｅ〉

その頃、一足先にスカルサタモン達の元へと向かったクダモンは道中、恐るべき敵を前にしていた。

「うお・・・！く・・・」

それは、自分よりも一回りも二回りも大きい野良猫であった。

野良猫はクダモンを獲物として判別し、威嚇をしながらゆっくりと近づいて行く。

クダモンはこんなところで捕まる訳にはいかず、止むを得ず指先を野良猫の脳天に向けると、そこから念力を送り込む。

「ぬ！」

クダモンが念力を送り込むと、驚くべきことに野良猫は態度を一変させ、まるでクダモンを本当の主人のように服従してしまったのだ。

クダモンは念力で服従させた野良猫の鼻を撫でてやると、その背中に乗り込み猫の脚を借りて約束の場所まで移動する。

そして、午後１１時５９分。

待ち合わせ時刻一分前となった状況で、クダモンは本体を茂みに隠して猫の姿を借りてスカルサタモンが現れるのを待っていた。

やがて、待ち合わせ時刻の午前０時に達すると、クダモンは猫の生体を借りてスカルサタモン達に向かって声を上げる。

「スカルサタャモン！私は来たぞ！約束通りエイミィたちを解放しろ！」

若干猫の喋り方が残るが、声は紛れもなくクダモンそのものである。

するとその時、月明かりしかない墓場の頭上からデジタルゲートが開放され、そこからスカルサタモン達が現れる。

「な！」

思わず目を見開くクダモンと、クダモンの声と確かめつつ姿かたち

がまるで別人のクダモンに疑問を抱くスカルサタモン。

「声はまさしくクダモンだが、猫の姿とはどういうことだ?」

「猫の生体を借りて話にゃしているのだ。本人は離にゃれた場所に居る。約束通り、エイミィたちをはにゃしたら現れよう」

「先ず姿を見せろ。女どもはその後に放してやる」

「スカルサタモンよ。ダークエリアに落とされたお前ら悪魔どもが、一度でも約束を守ったことはあるか?」

「ふふふはははは!成程な。言われてみればその通り。しかし人質を放したらお前も一緒に逃げないという保証はあるか?」

「にゃい!しかし、私が一度でも嘘をついたことがあるか?」

それを言われると、スカルサタモンの方も返答に難しい顔を浮かべるばかりであった。

「う・・・よかろう。女どもを返してやろう」

スカルサタモンはクダモンの言葉を聞き入れると、用済みとなったエイミィたちをデビモンから解放させ、恐怖に帯びながらシャーリーはアルトやルキノ達の膝元で泣き喚き、エイミィ自身も緊張が解けたのか膝をついてため息をつく。

するとその時、猫の姿であったがクダモンが話しかけてきた。

「大丈夫か?」

「「「「きゃ！」」」」

「この先にユーノ達がいる。まっすぐ走って逃げるのだ」

「あ、あなたは一体・・・」

「早くしろ。急げ！」

何もわからないまま野良猫の言う通りに墓場から走り出したエイミィたち。

クダモンは野良猫にかけた催眠を解いてやると、茂みの中から姿を現し、足し去って行ったエイミィたちを一瞥してからこう呟いた。

「ユーノ。それに機動六課の仲間たちよ。ご武運を」

クダモンはそのままスカルサタモン達の元へと歩み寄り、連行されることとなってしまった。

クダモンが自己犠牲を払ってエイミィたちを救出した後、そのエイミィたちは走る傍ら先ほどの声の主がクダモンなのではないかと推測していた。

「まさか・・・さっきの声って・・・！？」

「あ！エイミィさん！シャーリーさん！」

と、その時前方の方からエイミィたちを救出するために霊圧を辿っていたユーノ達前線メンバーと合流を果たした。

エイミィたちはなのは達と合流すると、急いで先ほどの事を伝えた。

「みんな！大変よ！クダモンが・・・クダモンが！」

「え！」

「クダモンが！？」

ユーノはその話を聞くと、居ても経ってもいられず一目散に走り出す。

「く！クダモン！！」

脱兎のごとく疾走でクダモンを追いかけていくユーノ。

と、ユーノの後を追っていたなのは達が頭上に広がってきたスカルサタモン達の軍勢を目視する。

「あ！スカルサタモンと悪魔デジモンの軍勢が引き上げていく！？」

「と言うことはまさかクダモンの野郎・・・！」

「クダモンっ！！！」

ユーノは走りながらスカルサタモンに捕まったクダモンに向かって声を上げるが、スカルサタモンによって周りの音を聞こえ失くされており、当然のことながらユーノの声は届かない。

「クダモン！クダモン！！クダモンっ！！！」

何度も何度もクダモンの名前を叫び続けるユーノ。

すると、スカルサタモンは空間にデジタルゲートを出現させ、その中に向かって姿を眩ませ、クダモンはスカルサタモン達によってデジタルワールドへと連行されてしまったのであった。

ユーノはその事を理解すると、膝をついて倒れ込み、悔しい想いを抱きながら声高にこう叫んだ。

「馬鹿野郎おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」

墓場全体に響き渡るユーノの叫び声が寝ている幽霊たちをも起こす程の声量であった。

ユーノは地面の土を蒸し返しながら悔し涙を流す。

「く・・・・・！！！」

後から追いついた一護やなのは達はそんなユーノの後姿を見ながら胸が切なくなった。

「ユーノ・・・」

「ユーノ君・・・」

全員が切ない想いとなりながら辺りを何気なく見ていたとき、スバルは唐突に呆気にとられたような声を漏らす。

「・・・え・・・」

「スバル？」

「どうかしたの？」

ティアナとギンガが不思議に思い尋ねると、スバルは頭上を仰ぎ見ながら指を向ける。

「ねぇ・・・何だろう・・・あれ・・・・――――」

スバルに言われて全員が空を見上げると、瞳に映ってきたのは驚くべき光景であった。

「なんだ・・・・・・あれは」

なんと、空に浮かんでいたのはデジタルワールドを構成するのに要と言うべき０と１の二進法で現れたデータの羅列であった。

「データの・・・羅列・・・！？」

あまりに奇怪な現象に思わず目を開いてしまうユーノ達だが、直後そのデータが眩いばかりの光を発したかと思えば大爆発を起こす。

「うわあああああああああ！！」

「きゃあああああ！」

「「「ぐあああああ！」」」

全員は目をやられないように本能的に目をつぶり、その突然の事態に驚き倒れ込んでしまった。

「てて・・・一体何が起こった・・・」

と、そんな事を考えながらもう一度空を見上げてみると、ユーノ達は更に信じられない光景を目の当たりにした。

「な！」

ユーノ達の前に広がってきたのは、クダモンの故郷にして全てのデジモンたちが住まう未知なる電脳世界・・・デジタルワールドであった。

全員は天を多い尽くす程にまで広がっていたデジタルワールドを仰ぎ見ながら、あいた口が広がらずにいた。

「まさか・・・・・・ひょっとして・・・！？」

「あれが・・・・・・――――デジタルワールド！！」

「そ、そんな・・・！何故ミッドに！？だとしたらあのデータの羅列が次元の歪みとでもいうのか！？」

すると、今度はユーノの元に別の警戒アラーとが鳴り響き、モニター画面を表示させるとそこには更に驚くべき事実が映し出されていた。

「！これは！？」

全員がユーノの元へと近づき中身を見てみると、何とたった今ミッドチルダで起こってい現象が同様に地球やあちこちの異世界でも観測されていたのだ。

「何！地球やそれ以外の世界でも同様の現象が！？」

「「「え！」」」

全員は正直なところ、既にどう反応していいかすら分からなくなっており、地球の方でこの現象を目の当たりにしたデジタルワールド研究科、泉光子郎も深刻な顔を浮かべる。

「これは・・・デジタルワールドが・・・・・・！恐れていたことが起こってしまいましたか・・・」

ユーノもまた、光子郎と同じ結論に達すると険しい顔を浮かべながら全員にこう言う。

「く！！マズイな・・・このままじゃ世界のバランスが崩れて、混沌としたカオス・・・世界の崩壊を招きかねない！」

「世界の崩壊！？」

「そんな・・・！」

「どうするんだよユーノ！」

「決まってます・・・！クダモンを助けて、最悪の元凶たるベルフェモンを潰すほかこの現象を止めることは出来ません！」

「それしかねぇみてぇだな。」

「一先ずここから離れよう。まずは六課に戻って現状の確認とこれからの事を相談しよう」

「はい！」

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

一同は体勢を立て直すために、一度エイミィたちを連れて六課へと帰還する。

幸いにも織姫の的確な処置が功を奏し、重傷を負ったクロノ達の傷も癒え、峠を越すことは出来たようだ。

しかし、だからと言って問題がすべて解決したわけではない。

今まさに、デジタルワールドと現実世界全てのバランスが崩れ始め、こうしていつ崩壊してもおかしくはない状況に立たされているのだから。

司令室に戻ったユーノ達は今の現状を詳しく分析しつつ、時空管理局の総力と死神の世界、尸魂界を守護する護廷十三隊と連携してこの事態に対処していた。

「スカルサタモンの能力によってたデジタルワールドとこの世界を始めとする次元の壁に歪みが生じてしまい、結果膨張したデジタルワールドの構成データが漏れだし、人間界に溢れかえった・・・そ

の結果がこれと。」

「現在、時空管理局及び護廷十三体の力で以て、流れ出たデータの氾濫は収まりを見せていますが、このままデジタルワールド方のデータ容量が更に増え続ければ、遅かれ早かれすべての異世界、そして尸魂界側も崩壊を招きかねない状況です」

管制官として手腕を振るうエイミィがデータをまとめ上げて渋い顔でそう言うと、聞いていたなのは達の顔が曇り出す。

「おいおい・・・ウソだろ」

「だが、事実だ」

「光子郎さんが言った通りになっちまったな」

一護が壁に寄しかかりながらそう言った後、狼狽した様子のコンが詰め寄る。

「どうすんだよ一護!?新年開けて直ぐに世界の滅亡かよ!」

「俺だってんな事は望んでねェよ。ただ、事を急げば取り返しのつかないことになりかねェ。先ずは慌てないことが重要だ。そうだろ？」

そうユーノに視線を送ると、ユーノも重々その事を分かった上で冷静に対処する。

「はい。大丈夫ですよ。クダモンはそう簡単に殺されないと思いますし、僕が断じてそんなこと許しませんから」

「・・・・・」

なのはや、ヴィヴィオ、それにここにるメンバー全員がいつものことながら真剣な瞳を浮かべるユーノに緊張する。

「いつになく真剣な目してるよね、ユーノ先生」

「あの人は何時も真剣そのものだけど、今回はまた特別ね」

と、その時不意に司令室に地球からの通信が届けられる。

「？通信・・・地球から」

画面を切り替え中央の画面に映ってきたのは浦原喜助であった。

『どうも、みなさん♪』

「浦原さん。それに・・・そちらの方は？！」

ユーノが驚きながら浦原の隣に座るもう一人の男に目を向けると、一護達は目を見開いた。

「あれ？光子郎さん。なんで浦原さんチに！？」

『僕も黙って見過ごすわけにはいかなくなりましたので、浦原さんに頼んでこちらの方へ。それで、一つみなさんに報告があります』

「報告？何ですか」

「デジタルワールドのデータ容量が膨張した結果、溢れ出てしまった今回の現象にしてもそうですが、ベルフェモンがこのまま欲望のままに世界を食らってしまうとなれば最早一刻の猶予もありません。ベルフェモンの破壊活動を止めること以外、この現象を・・・世界の崩壊を防ぐ手立てはありません！」

「んなこと言われてもよ・・・まるで向こうの事情がよく分かんねエンじゃ・・・な」

恋次が戸惑いを顕著に表した顔で周りの反応を窺いながらそう言うと、浦原が意外なことを言って来た。

『その心配はありません。先ほど、泉サンが向こうのデジモンたちとのコンタクトに成功したようです。嘗ての泉さんのパートナーデジモンさんがデジタルワールドでの現状を教えてくれました』

「本当ですかそれ！？」

『ええ。ちょっと待ってくださいね。今、僕のパートナーを呼び出しますから、彼から直接話を聞いてください』

光子郎はそう言うと、嘗てのパートナーデジモンを呼び出し、ある程度の事を伝えた後画面を切り替え、早速デジタルワールドの事情を説明してもらうためにユーノ達に顔を合わせる。

画面に映ってきたのは光子郎のパートナーデジモンで、ナナホシテントウをモデルにした昆虫型デジモン、テントモンであった。

テントモンはマシンガンのような口数でデジタルワールドの現状を赤裸々に口外した。

『ベルフェモンの大軍団による急襲にロイヤルナイツのほとんどが倒され、残ったメンバーも散り散りに。クレニアムモンの計らいによりスレイプモンは地球に逃れ、全ては終わったかに見えたのですが、デジタルワールドに住まうデジモンの中には密かにベルフェモンの独裁に反対するものも多く、同志が集まって秘密基地を作り、クレニアムモンもそこに出向きベルフェモンに決戦を挑むことになったのです。こんな感じですかね光子郎はん？』

「うん。ありがとう」

『あ、申し遅れました。ワテ、光子郎はんのパートナーデジモンでデジモン自由同盟の・・・テントモンです！よろしくどうぞ』

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・」」」」」」」」」」

『あれ？どうしたんですみなさん？？ん？すっかり黙り込んじゃって』

唖然とする前線メンバーにそう尋ね返すと、一護と織姫は徐に口を開いてテントモンにこう言った。

「いやぁ・・・よくもペラペラしゃべるテントウムシだと思って・・・」

「おまけに、関西弁っていうのも・・・ね・・・」

『ほう！するとテントウムシが関西弁喋っちゃならねぇ決まりでもあるんですか、ええ？』

「別にそう言う訳じゃないけど・・・」

『テントモン。話がずれてるよ』

『おっと。すみません光子郎はんつい』

光子郎自身も、以前にもまして口数が多くなったテントモンに少々困惑気味であったが、そん時ユーノは険しい顔を浮かべながらふとこう言った。

「クダモンは・・・一人責任を背負ってベルフェモンと決着をつけるために、デジタルワールドへ帰還した・・・あいつ、なんて無謀な事を！」

「言えた口じゃねぇだろ。お前だって散々無茶してるくせに」

「だが事は深刻だ。このままではいずれ世界はデジタルワールドの膨張の度合いにもよるが、必ず崩壊するのは間違いない」

「そうなったら・・・私達は・・・」

なのは達は世界の崩壊と言う言葉に思わず身の毛が凍りそうになる。

一緒に話を聞いていたヴィヴィオはテントモンに事態を解決する方法を問いただす。

「・・・ねぇテントモン！なんとかならないの！？この世界や他の世界の人達を救う方法！？」

『端的な事を言えば、ここに居るメンバー全員でデジタルワールド

に乗り込み、ベルフェモンを倒すほかありませんですね！』

「「「え！！」」」

テントモンの話を聞いた瞬間、全員を声を揃え、同時に耳を疑った。

「本気で言ってんのかよ！」

「管理局でさえ聞いたこともない世界に行って、チートな戦闘力を持ったそこかしこの軍隊相手に勝てる気でいる訳！？」

「そうだよ！第一、向こうでは多分この世界以上に奴らは力を増すはず！危険すぎるよ！」

すると、ここで口を挟んできたのは傷が癒えたばかりのユーノスだった。

「危険か。確かにそうかもしれないが、俺達は約束したはずだ。“必ずクダモンを守り抜く”と」

「あ」

なのははその言葉を聞き、我に返ったような表情を浮かべ、その後でユーノがこう言ってきた。

「ユーノス元帥の言う通りさ。どんな形であれ境遇であれ、助けを求めているのに無視するなんてことが出来る訳ない。手が届くのに手を伸ばさなかったらどれだけ後悔するか・・・・・・」

「ユーノ」

「パパ」

話を聞いていたフェイトやヴィヴィオは思わず胸の奥が締め付けられるような感覚に陥り、ユーノは全員に背を向けてから拳を強く握りしめ決意を込めて言う。

「僕は守り抜いて見せる。クダモンを。そして――――――この世界も！」

ユーノの言葉が全員の胸にしっかりと届き、暫くの沈黙が流れる。

すると、一度冷静に考えていた恋次がふとこんな事を言って来た。

「意気込みはいいとしても、勝てる要素はあるのか？前に斃したアスタモン・・・一護や俺達の力相手に完全体でありながら互角に対抗できた。ベルフェモンの力は恐らく奴の比じゃねぇぜ」

「第一、どうやって向こうに乗り込むのである？」

「そうですわね・・・・・・あら？」

と、その時何気なく辺りを見ていたマリアが床に落ちていたあるものを発見した。

「如何なさいましたか、小鳥遊殿？」

「これは・・・クダモンの・・・」

マリアが拾ったのは、クダモンが最初から所持していたデジタルワ

ールドの言語で書かれた謎の薬莢であった。

「本当だ。クダモンの薬莢・・・」

ユーノはマリアからその薬莢を受け取り詳しく見ようとした直後だった。

突然、薬莢がユーノの手元で眩い光を放ち始めた。

「！」

「何！？」

「これは――――！」

ユーノが掌の光に目をやられないようにと一時的に目を塞いでいると、薬莢はその姿を変化させてあるものへと生まれ変わった。

眼を開けると、ユーノの掌に乗っていたのは嘗ての選ばれし子供が使用したもの同じくデジモンの進化において絶対必要なデジヴァイス（デジヴァイス・ｉＣ）と呼ばれるものであった。

ユーノは思わずそのデジヴァイスを手に目を疑った。

「なんだこりゃ・・・なんで薬莢がこんなものに！？」

そう思っていた矢先だ。

突然デジヴァイスの画面が光だし、ユーノは何かに導かれるように体が引っ張られる感覚に陥る。

「？何だ・・・この感じ・・・」

すると、ユーノは唐突に外へと向かって走り出す。

「ユーノ君？」

「おい、どうした？」

ユーノの後を追いかけるなのは達は。

ユーノは外に出ると、デジヴァイスを天に向ける。

すると、デジヴァイスの画面から光が現れたかと思えば、それは細長い一本の道となって頭上に浮かぶデジタルワールドに向かって伸びていく。

「あ！」

ユーノ達はそれを見て確信した。

「道だ・・・・・もしかしてこれがデジタルワード・・・クダモンの所への道しるべ！」

「あいつ・・・最後にこんなものを残しったってことは・・・――俺達に思いを託すためか」

「ふん。やってくれるじゃねぇか。」

クダモンの気持ちと切なる想いと汲み取ると、一護が前に出て来全

員に向かってこう促した。

「行くぜみんな！クダモンを助けよう！」

「はい！」

「勿論です」

「ほんまもうしょうがないですね・・・歳上には勝てませんわ。前線メンバー全員に命令！只今より、次元世界崩壊の元凶であるデジタルワールドに蹂躙する七大魔王、ベルフェモンの殲滅とそこに捕われしデジモン、クダモンの捜索及び救出に向かう！」

「「「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」」」

全員が潔い返事をすると、デジヴァイスを手にしたユーノの肩にユーノスが乗っかる。

「ユーノ。俺も行く。念の為、結界印は常に持ち歩いて置け」

「はい」

ユーノはユーノスから結界印を受け取ると、デジヴァイスと一緒に強く握りしめる。

同じ様に、頭上に浮かぶデジタルワールドを仰ぎ見ながらついさっき起きたばかりのクロノがエイミィに抱えられながらリィンの話を聞いていた。

「今回の作戦、上手くいくでしょうか？」

「はっきり言って、楽観できるものではないな。だが逃げる訳にもいかない。これは全ての世界の明暗がかかっている・・・」

すると、そんなクロノの言葉に口を挟むのは一護だった。

「世界の崩壊か・・・・・そんな大層なものは俺にはイマイチぴんと来ないな。ただ、これだけは言える。何が何でもクダモンは助ける！それだけだ！！」

一護の話を聞くと、ルキアも白烏もそしてマリアも潔い返事をする。

「ああ」

「その通りである」

「やりますわ！」

そして、最後にユーノ自身も胸中クダモンの事を想いながら決意を固める。

「（クダモン、どんなことがあっても必ず君を助けるからね。待ってろ！）」

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はデジタルワールドの勢力組織の一つ、ロイヤルナイツについてだ♪」

「ロイヤルナイツは、ネットワークセキュリティの最高位、或いは守護神と呼ばれている１３種類の聖騎士型デジモンたちを指す。予言書の中に登場する存在で、デジタルワールドに重大な災厄が起こった時に予言に導かれ集うと言う。」

「ただし、絶対的な『善』では無く、彼等がデジタルワールドの秩序維持の為に必要と判断すれば、時には大量破壊や大量殺戮などの非情な手段も行使する。しかもそれぞれの思想も微妙に異なっており、おのおのが信じる『正義』に従って行動しているため、それを巡って内紛が起こる事もある。」

「ちなみに、彼らのモチーフはアーサー王物語に登場する円卓の騎士。ただし、それぞれのメンバーがガウェインやランスロットといった特定の人物をモチーフにしているわけではない♪」

と、ここでふと気になったユーノはクダモンに問う。

ユ「ん？待てよ。じゃあクダモンにとっての正義って・・・なんなの？」

ク「私か？私にとっての正義・・・――――それは」

全「それは？」

全員が目を開けてクダモンの第一声を待つ。

クダモンは目を瞑りながら徐に背中を向け、その言葉を言おうとした途端。

ク「ぷっす」

全「？」

不意に聞こえた何かの破裂音。

すると、クダモンが振り返り顔を赤くしながら言う。

ク「すまぬ・・・私の放屁だ」

全「だあーー！！」

拍子抜けた言葉に豪快に倒れるユーノ達であった。

魔導師図鑑ハイパー！

去年のクリスマスのプレゼントで、ユーノはなのはから特製のマフラーを貰った。

ユ「ふふふ♪」

愛するなのはから貰ったマフラーを首に巻き、すっかり気に入った様子のユーノ。

一「なかなか似合ってるぞそれ。そう言えば、お前はなのはに何送ったんだよ？」

ユ「僕ですか♪僕はなのはと違って大したものはあげれませんでしたけど、結果的には喜んでいましたよ♪」

ユーノス「ほう・・・となると、ひょっとして体で払うものだったか？」

ユ「ち！違いますよ！！！いくらなんでも僕みたいな元・淫獣がそんなこと／／／」

ク「元・淫獣ではなく永遠に淫獣の間違いだろう」

と、クロノの長髪を耳に、ユーノは巻いていたなのは特製マフラーを伸ばし、推定2メートルを超すそれを徐にクロノの首に巻きつけ、縛り上げる。

ユ「ふん！」

ク「ぐあああああああああああああ！！！！」

窒息寸前となってどんどん顔が青ざめるクロノ。

恋「おいおい！そりゃ流石にまずいだろ！？」

ユ「これもコミュニケーションの一環ですから、あしからず♪」

後日聞いたところ、クリスマスにユーノははなのはが前から欲しが

っていたアクセサリーを多額の資産の中からあっさりと購入しあげたそうな。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユ「それじゃ、出発しよう。」

テ「来ました！」

ク「処刑は恐らく明後日。」

ベ「ようし。直ちに小衛星を攻撃しろ！」

第１５５話　接触と潜入と黒のメダル

登場デジモン

スカルサタモン

声：屋良有作

完全体　アンデッド型　ウイルス種

強さと破壊を追い求め、ダークエリアに堕ちた堕天使型デジモンの

成れの果ての姿。しかし、より悪として洗練されており、その暗黒パワーは計り知れないものがある。強大な暗黒パワーが凝縮されたデジコアは悪魔系デジモン特有の「ダークコア」と呼ばれている。必殺技の「ネイルボーン」は杖の先についた宝玉から放たれる強力な光で、デジモンのデータに異常を起こし破壊してしまう恐ろしい技だ。

スカルバルキモン

声：磯部勉
完全体　アンデッド型　データ種
陸上最大の哺乳類とされる化石のデータに、幾つかの化石のデータが偽造されて再製された巨大なアンデッド型デジモン。感情や知性は無く、体内に張り巡らされた神経のデータだけで反射的に体を動かしているため、容赦も加減も無い攻撃を自らが動けなくなるまで繰り返す。屍のデータから無理やりに蘇生させられた呪いか、デジコア（電脳核）より止め処なく溢れ出す黒い冷気は、どんなデジモンをも死の恐怖に陥れるという。必殺技は巨大な足で敵を踏み潰し、地中に埋没させる『グレイブボーン』と、黒い冷気の空間の中に敵を閉じ込め、死ぬまで果てしなく追いつめる『デッドリーフィアー』。

デビモン

声：塩沢兼人
成熟期　堕天使型　ウイルス種
漆黒の衣に身を包んだ堕天使型デジモン。元々は光り輝くエンジェモン系デジモンだったが、デジタルワールドの空間の歪に存在するダークエリアに堕ちたことにより堕天使となった。その証である悪のマークが胸に大きく浮かんでいる。狡猾で凶悪な性格だが、非常

に優れた知性の持ち主でもある。深紅に輝く両眼に見つめられたものはマインドコントロールされ、デビモンに支配されてしまうと言われている。必殺技の『デスクロウ』は伸縮自在の両腕を伸ばし、相手の体を貫き通す。

接触と潜入と黒のメダル（前書き）

人間は、時として、充たされるか充たされないか、わからない欲望のために、一生を捧げてしまう。その愚をわらう者は、畢竟（ひっきょう）、人生に対する路傍の人に過ぎない。

Ｂｙ芥川龍之介（芋粥）

接触と潜入と黒のメダル

スカルサタモンの襲撃を受け、クロノ達は重傷を負ってしまい、エイミィたちは人質として連れ去れてしまう。

事態を知ったクダモンは一人責任を負ってユーノ達の前から姿を消してしまい、同時にデジタルワールドと次元世界のバランスが崩れ始めた。

そのとき、クダモンの残した薬莢がデジヴァイスへと変化し、ユーノ達は記された道しるべを辿りデジタルワールドに乗りこむ事を決意する。

〈ユーノＳｉｄｅ〉

襲撃から一夜明け、準備を整えたユーノはデジタルワールドに乗り込むメンバーの方へと振り返り、真剣な眼差しで尋ねる。

「それじゃ、出発しよう。クダモンの世界――――――デジタルワールドへ」

「ああ」

「うん」

今回選抜されたのは、スターズ・ライトニング・恋次とルキア、織姫とコン、はやてを含めた面々。

金太郎と鬼太郎、白鳥に吉良はクロノと残りの六課メンバーを守るために留守を預かる。

ユーノは留守を預かる四人の方に顔を向けると、柔かい表情で言葉を並べる。

「金太郎。鬼太郎。ここに残るみんな。クロノ達の事、お願いするね。」

「承知いたしました」

「俺も本当は戦いたかったっすけど、店長の命令じゃ仕方ねぇか。任せてください！大船に乗ったつもりで腹黒は守りますんで！」

「ピーチだけでは些か心配がぬぐえないがな」

「んだと！！」

「まぁまぁ二人とも」

何時もながら口喧嘩の堪えない二人を宥める慣れた様子の吉良であった。

「あんまし時間がない。取りあえずこのメンバーでデジタルワールドに乗り込む。万が一の時も考えて、現世でのことは浦原さんと泉さんに任せてある。織姫、本当にいいのか？」

若干心配の拭えない顔で一護が再度尋ねると、織姫とコンは決意の籠った眼差しで答える。

「うん。シャマルさんがこっちに残るんなら、ここは私が行くべきだと思うの。それに・・・あなたばかりが戦う姿を見るのは正直嫌だから」

「一護！俺に何ができるかは知らねェって、前にも言ったよな。けどな！お前の心の一部になることぐらいのことは出来んだよ。な！」

「コン・・・ああ。ありがとよ」

「ほんなら機動六課、出動！」

「「「「「はい」」」」」

はやてがそう言うと、ユーノは持っていたデジヴァイスiCを天に掲げてデジタルワールドへの道を作り出すと、それを伝ってユーノ達一行はデジタルワールドへと向かって行った。

ヴィヴィオは金太郎たちと共にただ切に、無事に全員が帰ってくることを祈るのであった。

◇

〈デジタルワールドＳｉｄｅ〉

数分後、一行はついに未知なる電脳世界「デジタルワールド」の東端にたどり着き、初めて体験するデータ世界に内心ドキドキしていた。

「よし着いたぞ」

「ここがデジタルワールド・・・・・・」

前線メンバー全員が辺りを見渡してみると、デジタルワールドに存

在する山や川、海などと言った自然が何者かに食い散らされたように抉り取られた、抉られた箇所はすべてデジコードと呼ばれるデータと化してしまっていた。

荒んだ現状を目の当たりにした瞬間、全員の表情が曇り出す。

「あちこち食い荒らされたようにデータが氾濫してやがる・・・」

「これもベルフェモンの仕業って訳ですか」

「その通りです！」

「「？」」

と、その時ユーノ達の耳に聞き覚えの為る声が聞こえてきた。

全員が声の聞こえてきた方に目を向けると、空中から飛んできたのは泉光子郎のパートナーデジモンでユーノ達の案内役を仕られたテントモンだった。

「ようこそ、お待ちしておりました」

「お前は・・・お喋りテントウムシ！」

一護がそう言うと、テントモンは呆気にとられてしまう。

「ぐっ！テントモンですわな！テントモン！」

「どっちでもいいじゃないそんなの」

ティアナもわりとぞんざいな事を言うと、テントモンは更に抗議する。

「よくないですがな！あんさん見た目よりドライですね！それより――――――どうですかこの有様――――――」

テントモンは先ほどの軽い態度から一変、真剣な様子で辺りを見渡しつつ全員に現在のデジタルワールドの現状を説明する。

「すべて、ベルフェモン達によって彼方此方データ化が進んだ結果がこれです。これが現在のデジタルワールド・・・そして・・・最も危険な状態なんですわ」

「どうしてこんなことを・・・」

「命を・・・命を何だと思ってるんだ・・・！」

フェイトは全ての命を喰い漁り、己の欲望の為だけに周りを顧みないベルフェモンのやり方にスカリエッティ並みの怒りを覚える。

「おい、ベルフェモンの野郎は何処に居る！クダモンもそいつに捕まってるんだろ？！」

「その件に関して一つ言っておくことがあるんですが・・・」

「何だ？」

「ベルフェモンはここから更に2万キロ離れた場所にある大陸、『ファイル島』の中心に位置する場所に居るのです。ですから、先ずあなた方にはこちらで用意した乗り物を使って移動してもらわなけ

ればなりません」

「移動って・・・何に乗っていく気なのよ私達？」

すると、ティアナがそう尋ねた後テントモンは移動を開始し、全員がテントモンの方について行くとそこで彼らは驚くべきものを目の当たりにする。

テントモンが言っていた乗り物とは、万が一の時も考えて泉光子郎が用意していた人間の運搬機能が備わった巨大ロケットであった。

「このロケットを使ってファイル島まで移動します。さ、早く乗ってくださされ」

「ほお～～～」

「なんか感じ出てくる！」

「・・・――――」

それぞれ様々な感想を抱く中、ユーノは黙して何も語らず真剣な表情を浮かべる。

全員の搭乗が完了すると、テントモンはロケットのエンジンを全開にしてここから約2万キロの距離に位置するデジタルワールドの中心大陸、ファイル島を目指して発進させる。

「ターボエンジン、始動！」

ロケットが軌道に乗ると、テントモンは手慣れた手つきでロケット

の操作を行い、それを傍らでユーノとユーノスが覗いていた。

「オートに切り替えましょう」

「テントウムシが、ロケットの操縦とはな」

ユーノスが些か驚いた様子でそう言うと、テントモンは声を上げてユーノスの発言に仰天した。

「え！そっちの世界のテントウムシはしないんですか！？デジタルワールドのテントウムシが最初に覚えるのは、飛ぶ・お回り・おしっこ。それにロケットの操縦。ゆくゆくは、全てのデータを駆使し、あらゆる事で世の中の役に立つことが、デジタルワールドのテントウムシの役目なのです！そして、私達が与えられた使命を持ってデジタルワールドの発展も促し・・・――」

話しがだらだらと長くなりそうなので、ユーノとユーノスは操縦席を後にし、他のメンバーの様子を窺いにエレベーターを降りる。

エレベーターを降りると、恋次が早速体力づくりの為に周囲を走り回っていた。

「ファイト！ファイト！ファイト！」

二人の姿を見ると、恋次は足を動かしながら言う。

「おう！ファイル島に着いたら戦いが待ってるぞ。今のうちに体を鍛えておけよ！ファイト！ファイト！ファイト！」

「相変わらずファイトがありますね」

そう言いながら、二人はなのはの元へと向かった。

なのはの部屋に入ったユーノは今の心境を尋ねる。

「狭いし、ヴィヴィオも向こうに置いて来ちゃったけど、これも管理局員としての使命だから。ユーノ君もあんまり無理しないように気を付けてね。あなたに何かあったら、私達はどうすることもできないんだから・・・」

「うん。大丈夫。そうならないようにするよ」

なのはの言葉を胸にしっかりととどめたユーノはなのはの部屋を後にすると、今度は浦太郎の部屋へと向かった。

「浦太郎はどうしてるかな。」

そんな事を呟きながらユーノ達が部屋の扉を開くと、そこに広がっていたのはあまりに場違いな光景だった。

「やったあああ!!!」

「「!?」」

浦太郎が突然大声を上げたかと思えば二人の目の前に映ってきたのは3D仕様の恋愛シミュレーションゲームのヒロイン「サオリ」の姿と声だった。

『いいわよ、浦ちゃん。今度一緒にデートしましょう。うふ?』

ユーノとユーノスは呆然としながらゲームに熱中する浦太郎と、その傍らで別のゲームソフトを持ったマリアの姿を確認する。

「やったよ！攻略まであと一歩！」

「浦太郎さん、早く順番変わってくださいよ。私は『ゾンビクラッシャー』がやりたいのですから」

「もうちょっとでセーブが出来るからさ、それまで待ちなって♪」

ユーノは徐にユーノスと顔を見合わせてから、咳払いをし尋ねる。

「・・・ねぇ・・・二人して何やってる訳？」

「あ！ユーノ様？」

「店長このロケット、いいもの積んでますよ。引き出しを開けたら３Ｄの『ドキドキメモリアル』が出て来たんですよ♪この三次元のサオリがたまらなくかわいくて！！」

「私も、大のバイオハザード好きなものですから、こう言う気持ち悪いゾンビとか血塗れにして撃つのが楽しくて楽しくて！！」

すると、使命感も何もかも関係なく己の欲望に忠実となっている二人にユーノとユーノスが喝を入れた。

「「僕（俺）たちはこれから戦いにいくんだよ！！ゲームするなら戦いが終わってからにしろ！！！！！」」

それから暫く時間が経ったロケットの中でのやり取りは以下の通り

だった。

自動操縦に切り替え暇を持て余していたテントモンは少し元気のなかったキャロの部屋へと訪れキャロでさえ喧しいと感じてしまうほどのマシンガントークを始める。

「光子郎はんがある時、『テントモン。君はいいデジモンだけど少し口数が多い』。ワテははっと反省しました！それからと言うもの、無口になりました。今ではワンともスンとも必要以外に喋らないようにしているんです。だからね、とっても無口でしょ？」

「どこが・・・・・？！」

その隣では、スバルとギンガが窓越しに広がるデータが溢れかえった現在のデジタルワールドの風景を見ながらそれぞれ呟く。

「本当なら、この世界も私達の世界のように緑あふれる綺麗な平和な世界だったのかな、ギン姉」

「そうね。私達に何が出来るか分からないけど、必ず成し遂げて見せるわ。」

そして、同じように窓の外を見ながら廊下の方では一護とルキアの二人がこんな会話をしていた。

「一護。本当に井上やコンまで連れて来てよかったのか？」

「いつも待たせてばっかで、あいつらに心配かけるのもどうかと思ってな。それに、万が一のときは織姫の力が絶対に必要になる。コンもコンで居れば周りが温かくなれる。」

「そうだな。さて、気掛かりなのは・・・――ユーノ殿だ。」

ルキアが険しい表情でそう呟くと、聞いていた一護の顔も渋くなる。

「ああ。俺達の中じゃ、人を助けることに関しては一番危なっかしいからな。欲望ではなく使命感的なもの抱いて、これまであいつは戦い続けてきた。今回も相当ヤバい奴を相手にすると思うから、また無茶すんじゃねぇかって思ったりしてる」

すると、それを聞いたルキアがふとこんな事を言って来た。

「貴様は・・・――ユーノ殿に戦いを止めろとは言わないのだな」

一護は思わず驚いた表情を浮かべるが、直ぐに真顔でこう返した。

「・・・――俺はあいつのやりたいようにさせてやりたいんだ。考えてもみろ。ユーノは１０年以上もの間、ずっと無力に耐え続けて来たんだ。そして、漸くそのための力を手にして、一度の喪失も味わってるんだ。これ以上、あいつに惨めな思いはさせたくないんだよ」

ルキアは嘗ての一護もユーノと同じことを味わっている故に、強く言い返すことは出来ず、寧ろそれでもいいと割り切った様子で間を置いてから返事を返した。

「そうか――――――」

そして、このメンバーの中で最も強くクダモンを助けることに強い使命感を抱く完現術者こと、ユーノ・スクライアの方はと言えば、

結界印と薬莢が変化したデジヴァイスを握りしめながら窓越しにこう呟いた。

「クダモン。どんなことがあっても、必ず助けるからね」

こうして、ロケットは約１２時間を有してデジタルワールドの中心、ファイル島を目指して航行を続けるのであった。

◇

〈テントモンＳｉｄｅ〉

それから１２時間後。

ついに目的地「ファイル島」の上空へと到達した一向。

操縦席に出向いたユーノ達は下に広がってくる広大な大陸にを目を凝らし、テントモンが説明をする。

「ご紹介します。ここが、デジタルワールドの中心大陸・・・――ファイル島です」

「あれが」

「綺麗な大陸でしょ？」

「本当にあそこに着陸するの？」

すると、エリオの言葉を聞いた瞬間テントモンの回答は意外なものだった。

「とんでもありません。そんなことをすれば、態々捕まりに行くようなものです。」

「じゃあどうするんだよ?」

一護がそう尋ねると、テントモンは少し期待を上昇させて成層圏に近い位置にまで浮かび上がらせると、成層圏付近に群がる小さな惑星を指さしながらこう言った。

「上空に雲と並ぶように無数の岩が飛び交っているでしょ?あれは、デジタルワールドの引力に引き寄せられた小惑星がああして群れをつくることがあるんです。この星屑の中に、ワテらの秘密基地があるんです」

全員にそう説明をすると、テントモンは無数の小衛星帯の中へと入り込んでいき、まさしく無数とも言うべき小惑星を見ながら一同は納得した様子となる。

「成程ね・・・――これだけの数の中から基地を探し出すなんてことは、流石のベルフェモンも難しいってことね」

「下手に動き回れば岩に激突してしまいますからね」

しかし、テントモンはそんな言葉に水を差すように口を挟む。

「ところがそれが探しているのです。ベルフェモンはしつこいですからね、しょっちゅう巡視役のデジモンがうろついていますから、気を付けないといけません」

と、その時ロケットのレーダーに飛行物体の反応を確認された。

「！何か接近してくる。取りあえず、手近な岩の陰に」

テントモンはロケットを手近な岩場の陰に移動させ、姿を隠すとレーダーの反応を見ながら固唾を飲んで見守る。

「来ました！」

全員が息を呑んで外の方に目を配ると、映ってきたのはテントモンの仲間で赤い体と翼を生やしたイカロスを彷彿とさせる完全体デジモン、ガルダモンだった。

「あれはワテらの仲間で、ガルダモンです！」

だがそれと同時にガルダモンが襲撃を受けていることを察する。

「あ！追われているんだ！」

「あれは！」

全員がガルダモンの方に注目していると、背後からガルダモンを攻撃していたのはベルフェモンのところの巡視型デジモンでスカルサタモンによって改造された完全体、ネオデビモンの軍勢であった。

「ベルフェモン軍団のネオデビモンたちです！改造されているため感情を一切持たないまさしく悪魔型デジモン切っての殺戮兵器です！」

テントモンがそう説明をしている間に、ガルダモンはネオデビモン

による攻撃を受け、体にダメージを追ってしまいテントモンは思わず目を瞑る。

「ああ！やられる！！」

一護達はその光景を見るなりテントモンに強く言う。

「このまま見殺しにするのかよ！？」

「助けたいですけど、ワテはベルフェモンの力の影響で進化が出来ないんです。それにこのロケットは戦闘用ではないんです・・・！」

「でも！みすみす目の前で！」

「く・・・！一体どうすれば！？」

全員が険しい表情を浮かべていると、ユーノは拳を強く握りしめこう言った。

「こうなったらやるしかない！僕らで戦おう！」

「何！？正気か！」

「だけどこっちに来たらデジモンたちの強さも増してる可能性だって・・・」

フェイトが不安の拭えない様子でそう言うと、ユーノはそれでも闘う意志を貫きこう言い返す。

「何も出来ないまま、手を伸ばせるのにそれをしないで後悔するぐ

らいなら死んだ方がましだ！僕は行く。ユーノス元帥、ちょっとくら行ってきます」

「ああ。気をつけろよ」

ユーノはユーノスを肩から下すと、ハッチへと向かい、結界印を取り出してスレイヤーモードへと変身を行う。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身が完了すると、ユーノは大声で操縦席のテントモンに要求する。

「テントモン。ハッチを開けてくれ！」

「わかりました！」

テントモンはタッチパネルを高速で操作すると、ユーノの近くのメインハッチを開放し、ハッチが開いた瞬間ユーノは飛行魔法を使って大空へと飛び立った。

なのは達はそんなユーノの様子を窺い、それでも戸惑った様子でいた。

「ユーノ君・・・」

すると、ここで一護も決断したのか溜息を吐きつつ死神化し、こう口にする。

「あいつの言う通りだ。俺も行くぜ」

一護はユーノを追いかけるようにハッチの下の空へと飛び降りる。

「一護！」

呼び止めて一護は絶対に返ってくる事は無いとわかり切っていた恋次達は彼が行ってしまってから思わずほくそ笑み、フェイトもユーノと同じ気持ちになったのかバリアジャケットを纏った状態でなのはに尋ねる。

「なのは。」

「うん。行こう、フェイトちゃん。ユーノ君の言ってること、凄く正しいもん！」

なのはも心を決めると、レイジングハートを起動させ、戦う覚悟を決め込んだ。

「レイジングハート、行くよ」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

二人は飛びなれた戦場へと降りていき、ユーノ・一護と共にガルダモン救出とネオデビモンの殲滅の為に空を駆け抜ける。

ユーノ達四人がガルダモンの元へと向かうと、目の前に映ってきた襲撃者ネオデビモンの姿を視認する。

「あそこだ！」

「みんな、別れるぞ！」

「「「はい！」」」

一護の指示を聞き、それぞれに別れたユーノ達はお互いの持てる力の全てをネオデビモン達にぶつける。

「月牙天衝！！」

霊圧を極限まで圧縮させた一護の月牙天衝の一人振りで、ネオデビモンの半分が消滅する。

「トライデント・・・スマッシャー！」

「ディバイン・・・バスター！！」

同じ様に、なのはとフェイトの長距離砲撃が合わさり合い威力を増すと、それを受けたネオデビモンは灰燼となって消滅し、最後ユーノの方も逆刃刀に魂を圧縮させていき必殺技の発動を待った。

「はあああああああああ！！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｓｌａｓｈ〉

そして、十分に魂が集まるや否や、ユーノは残り全てのネオデビモンをスレイヤースラッシュによって斬り捨てる。

「ほおおおお・・・セイヤー！」

爆発して消滅を果たしたネオデビモンを見ると、ロケットの中の前線メンバーとテントモンは歓喜の声を上げた。

「やったあ！！」

「フェイトさん達の勝利です！」

「あなた！ユーノさん！」

「おうし！やったぜ！！」

テントモン自身もこれほどまでに強い力を秘めた人間は一度も見た事は無く、正直な感想この四人の強さは化け物かと思ったりもした。

四人を拐取した後、テントモンはガルダモンの後ろについて行くように移動を再開し、ついに目的の場所へとたどり着く。

「ここが、本部のある小惑星（ほし）です」

ガルダモンは他に敵がいないかどうかを確かめた後、徐に岩に向かって突進して行き、その直後突如としてガルダモンが姿を消した。

「見ろ、消えたぞ！？」

「カモフラージュシステムを使っていますから、外からは普通の岩にしか見えませんがそれを潜るとこのような基地となっています。」

テントモンはそう説明しながらガルダモン同様岩に突っ込むようにカモフラージュバリアを通り抜けていき、無事デジモン自由同盟本部の前線基地へと到着する。

ロケットを着陸させると、テントモンは真っ先にガルダモンの元へと走り出す。

「ガルダモン！ガルダモン～～～！」

ガルダモンも久しぶりの戦友の再開に思わず声が高鳴る。

「テントモンじゃないか！？」

「久しぶりや！」

ガルダモンは手のひらサイズ並みに小さいテントモンを抱きかかえ、助けてくれたことに感謝の意を表した。

「誰が助けてくれたか、不思議だったよ」

「ワテやない。あそこにいる光子郎はんと同じ人間の方々や」

テントモンはそう言うと、後ろの方で待機しているユーノ達機動六課一行を指さし、ユーノは思わず被っていた帽子を脱いで軽く会釈する。

「あ、どうも」

「初めまして」

なのはも続けてそう言うと、ガルダモンはテントモンを放してユーノ達の元へと走っていく。

「ありがとう！本当にありがとう！」

テントモンが呆気にとられていると、奥の方からこの本部を塒としているデジモン自由同盟のメンバーたるデジモンたちもユーノ達の元へ駆け寄ってきた。

「「「「「「「「「「ありがとう！！！」」」」」」」」」」

「みんな！！」

テントモンはガルダモンのように仲間との久しぶりの再会を祝ってもらおうと走り出したが、仲間たちはテントモンには目をくれず、機動六課のメンバーのもとへと直進し、感謝の言葉を口にする。

「「「「「「「「「「ありがとう！！！」」」」」」」」」」

「何だ・・・？」

テントモンは無下に扱われることに思わず呆然とし、一方でユーノ達はデジモンたちに歓迎され、仲間を助けてくれたことに感謝して胴上げをしていた。

「「「「「わっしょい！わっしょい！わっしょい！」」」」」

「デジモン自由同盟本部へようこそ！人間の皆さん！そして、勇敢なる戦士たち！」

六課メンバーは思わず顔を赤くしてしまうが、満更悪くはないと重いこんな言葉を呟いた。

「あはははは！こいつはすげーぜ！」

「お、おい！あんまり上げるなよ！うわああ！」

「こう言うのも、悪くないね♪」

「うん」

始めの印象は文句なしに好印象と言う形でデジモンたちに温かい歓迎を受けたユーノ達一行は、テントモンとガルダモンに連れられこの本部のリーダーがいる部屋へと案内される。

「失礼します」

「「「お！」」」

ガルダモンがノックをして部屋の扉を開けると、六課メンバーの目の前に広がってきたそのリーダーたるデジモンの容姿に一瞬驚かされた。

中でユーノ達を待ち構えていたそのデジモンは、クダモンと同じくロイヤルナイツの一体にして、その強面な人相とは裏腹に完璧主義者で正義の心が人一倍熱い魔槍クラウ・ソラスの使い手、クレニアムモンであった。

少々仰天して体を硬直させるユーノ達の方へとクレニアムモンはゆっくりと近づきその大きな右手を目の前に出した。

「ようこそ。人間諸君。テントモンを通じて話は伺わせてもらった。態々遠い人間界から御足労だった。クダモンの救出に君たちのよう

なものに来ていただいて、我がデジモン自由同盟は百万の味方を得た想いだ。」

「お、おう・・・」

一護はみなを代表してクレニアムモンの手を握り返し、それが終わった後横で織姫に囁かれる。

「ちょっと怖いね・・・」

「まぁな。」

するとここでテントモンの無駄に長いクレニアムモンの紹介が始まった。

「申し遅れました。このいかつい顔のデジモンはかのロイヤルナイツの一員にしてこのデジモン自由同盟本部のリーダーのクレニアムモン。逃亡中スカルサタモン達に捕まってしまったんですが、そこはロイヤルナイツ。隙を見て牢獄から脱獄し・・・」

「テントモン」

「秘かに同志を集めてデジモン自由同盟を結成しました。これでも気が凄―く若くって、だけどそのくせ顔が怖いから周囲からは好印象を持たれない。趣味は槍磨きと昼寝。で、昼寝の時のイビキがもう五月蠅くてうるさくて！」

「これテントモン――――――テントモン、少し黙ってくれないか？！」

「どうせほっといたって誰かが起こさない限りぐ～ぐ～と！もうたまったモノじゃない！！」

クレニアムモンが幾ら制止を求めてテントモンはいつまでも喋り続け、そんなマシンガントークを見ながら一同は呆れかえってしまい、しまいにはやてがこう呟く。

「ほんま・・・よくしゃべるわな・・・おばさんみたいや」

そして、ついにクレニアムモンも業を煮やしてテントモンを黙らせるための最終手段を使用する。

「テントモン！」

「はい？」

「お前の為にスペシャルディナーが用意してある」

「ほんまでっか！？じゃあ後で♪」

テントモンはその言葉を耳にした瞬間、人が変わったように喋るのを止めて足早に部屋を後にし、その直後疲れ切った様子でユーノ達がため息をつく。

「「「「はぁ～～～」」」」

その後、ユーノが核心的な事をクレニアムモンに尋ねた。

「それで、クダモンは何処に？」

「今、デジタルワードの中心――ファイル島『闇貴族の館』のベルフェモンのアジトに捕われている」

「ええ！それじゃ早く手を打たないと大変だ！」

「処刑は恐らく明後日。ベルフェモンがデジタルワールド、そして次元世界全ての帝王となる戴冠式の日だろう――・・・」

「明後日で世界が・・・ベルフェモンの手に！！」

「そ、そんな！もう時間がないですよ！！」

「すぐにも、行動をおこさなければ！」

一同がかなり切羽詰った様子でそう口にすると、横で待機していたガルダモンが次のように説明した。

「クダモン救出の手筈は、整えてあります。そしてファイル島には、密かにデジモン自由同盟の同志が地下組織を作っているんです。彼らと連絡を取り、戴冠式の当日一斉攻撃を開始する予定ではありますが、しかし――――――」

「しかし、どうなんです？」

「地下組織と、最終連絡を取りに行った私も・・・基地を飛び立った途端あの有様です。ベルフェモンの警戒網を突破するのはなかなか容易ではありません」

「確かに、奴らの力は底しれねぇしな」

「クダモン――――――」

ユーノは意図通りの話を聞き終えると、クダモンがこの間にどんな目に遭っているのかを考え、不安を募らせる一方であった。

◇

〈クダモンＳｉｄｅ〉

その頃、スカルサタモン達に連行されたロイヤルナイツの一人、クダモンは進化封じの鎖を両腕に繋がれた状態で軍事裁判に掛けられていた。

裁判長を務めるのはベルフェモンの分身体であった。

「判決を言い渡す。被告は起立せよ」

「・・・――」

クダモンは言われた通り無法と判って居ながらもベルフェモンの言葉に応答し、口を黙らせ判決の中身を聞き入れる。

「元・ロイヤルナイツ『スレイプモン』こと『クダモン』に対しデジタル大法廷は死刑を宣告する。」

「・・・！」

その言葉を耳にした瞬間、クダモンの表情が凍りつく。

「処刑は明後日。ベルフェモン広場で執行される。被告人、何か申

し立てたいことは？」

「一つだけ言っておこう。こんな無法と圧政が許されることは長くはないぞ。私を処刑しても、やがてはこのデジタルワールドに住まう全てのデジモンたちの怒りが空へと燃え上がり、悪しき魔王を――・・・焼き尽くすことになるであろう」

「ぐ」

クダモンの言葉を聞いたベルフェモンの分身体は悔しそうな顔を浮かべると、そのまま明後日までクダモンを地下牢へと監禁するのであった。

不当な裁判が閉廷したちょうどその頃、自由同盟本部のモニター画面を食い入る様に見つめるクレニアムモンは人間でありながら凄まじい戦闘力を誇る一護達の先ほどの戦いの場面をチェックしていた。

『月牙天衝！！』

『ディバイン・・・バスター！！』

『セイヤー！』

「成程。あれがネオデビモンの軍勢とやり合い見事に撃墜した魔法、そして霊力と呼ばれる力か。見るからに頼もしそうだな」

「そこまで言われると照れるな。つうか、どうしてあんたらはみんな死神の姿が見えるんだ・・・今更だけど。」

そう・・・実はこの世界来てから恋次達死神の姿が何故かテントモ

ンを始めとする全てのデジモンたちが確認することが出来ていた。
疑問に思っていた一護がそう口にすると、ユーノはある推測を立て、徐にこう説明した。

「それは恐らく、このデジタルワールド全体がデータで出来ているからだと思います。データに変換された僕らの体と一緒に、魂魄の姿をもデータ化し、視認できるようになったと思われます。現に、この世界に存在する幽霊デジモンと呼べる存在も視認できますから」

「てことは、霊圧を常に潜めていないと直ぐに見つかっちまうことになるって訳か」

「ああ。ここは気を付けよう」

「一先ず、私達の力であればベルフェモンの警戒網を潜り抜けて、ファイル島まで行けると思います」

「地下組織との連絡は俺達に任せてほしい」

「しかし、君たちをそんな危険な目に曝す訳には・・・」

クレニアムモンは躊躇いの表情を浮かべて声を唸らせる。
するとここで強くユーノ達を推薦してきたのはテントモンであったが、相変わらず話が無駄に長くなるのは目に見えていた。

「危険と言っても、この人たちは頼りにしていいです。何しろ機動六課のみなさんと死神さん達の戦闘力は普通の人間の範疇を超えておりますし、何しろ特質すべきは完現術と言う未知なる力を秘めた

ユーノさんのそれは未だ発展途上で留まる事を知らない！でどんなところが未知なのかと言うと、これは長い長い話になるのですが――――――」

「これ、テントモン。ほれ」

クレニアムモンは持っていたメイプルシロップつきのテントモンの大好物を放り投げ、強制的にテントモンの話を終わらせ、テントモンは大好物に夢中でしゃぶりつく。

「あぶ！あぶ！あぶ！！」

すると、ここでマリアがクレニアムモンに尋ねる。

「通信機で連絡は出来ないのですか？」

「暗号を解読された上に、発信地まで突き止められてしまう」

「念話や天挺空羅はどうなんだ？」

「鬼道は先ほどのユーノ店長の推測からすれば危険だ。念話だからと言って、安心できるようなものじゃない」

「ですが、誰かが行かなければどうにもなりませぬわ。」

「その通りだ」

クレニアムモンもそう断言すると、ユーノは真剣な表情を浮かべて自分たちに連絡員役を任せるようにと要求する。

「だったら、僕らに任せてください。それとも、他に何か妙案があるならば話は別ですが」

「・・・残念ながら――――――――――よろしくお願い申す」

ユーノの言葉を聞くと、クレニアムモンは徐に振り返り、頭を下げてその申し入れを了承する。

全員はそれを聞くと、嬉々とした表情を浮かべる。

「よし！決まりだ！」

「早速明日の朝実行だ。あんまり大勢は見つかりやすい。僕とユーノス元帥と一護さんの三人で乗り込もう」

「ああ」

「分かった。行こうぜ」

すると、それを聞いた瞬間なのは達は呆気にとられこう尋ねる。

「え？私達は・・・」

「僕らはどうするの、店長？」

自分たちがユーノやクダモンの役に立てないということに関して些か不安を抱いてしまうなのは達が、ユーノスが冷静にこう言い返した。

「落ち着け。留守を守ることも大事な役目の一つだ。何も前線に出

ることが全てじゃない」

「う・・・」

なのはやフェイト、はやてなどの隊長陣は焦りのあまりそう言ったことをすっかり忘れてしまっていたことを反省し、ユーノは柔かい表情でなのはの肩に手を乗せ口にする。

「大丈夫だって。君を泣かせるようなことにはならないよ」

「ユーノ君・・・わかった。じゃあ、気を付けて。絶対絶対無理なんてしないで」

「うん。頑張る」

ユーノがなのはにそう言った後、ルキア達も一やユーノスに言葉を贈る。

「一護。井上を泣かせるなよ」

「あなた、怪我はなるべくしないでね」

「ああ。わかってるさ」

「ユーノス元帥も、その身体で無理は控えてくださいね」

「そうだな」

話しが一通り済んだ後、クレニアムモンは彼らの寝床をテントモンに案内させる。

「では、今夜はここでゆっくり休息を取って欲しい。テントモン、案内してくれないか？」

「はい。どうぞみなさんこちらへ。ちょっと汚れていますけど、寝るには十分。快適な夜にはなると思います。しかしワテはどうもあのクッションの事を考えると・・・」

しかし、この時一同はまだ何も気づいていなかった。

ネオデビモンとの戦闘の際に、爆発したネオデビモンの体から目では確認できないほどの大きさをした発信機がユーノ達四人の衣服に付着していたという事など――――――

◇

〈スカルサタモンＳｉｄｅ〉

その日の晩、ファイル島の中心に位置する闇貴族の館を目指して一体のデジモンが向かって居た。

闇貴族の館に到着すると、番兵のデビモン達がそのデジモンの元に駆け寄って来た。

そのデジモンとは、ベルフェモン特攻隊の長官スカルサタモンであった。

「あ。スカルサタモン長官でしたか」

「急用だ。ベルフェモン様にお会いしたい」

「は！」

デビモンはスカルサタモンを建物の中への入場を許可し、スカルサタモンは現在建物の奥で睡眠をとって居ると思われるベルフェモンの元へと急いだ。

スカルサタモンが到着したという報せは、案の定眠っていたベルフェモンの元へと届けられ、不機嫌総表情を浮かべたベルフェモンレイジモードはその巨体に見合った特注の椅子に腰を下ろすと、待機していたスカルサタモンに言葉を投げかける。

「こんな時間に我を叩き起こしおって。本来なら死刑ものだぞ！ま、それなりの手土産を持ってきたんだろうな、スカルサタモン」

「勿論ですとも、ベルフェモン様」

スカルサタモンはそう言うと、懐からとある音声データを取り出す。

「先ず、こちらの音声データをお聞きください」

音声データを専用の機械に接続させ、再生ボタンを押すや否や流れ込んできたのは自由同盟本部内の一護達とクレニアムモンの会話であった。

『どうしてあんたらはみんな死神の姿が見えるんだ』

『しかし、君たちをそんな危険な目に曝す訳には・・・』

「ん？クレニアムモンの声ではないか・・・！？」

ベルフェモンも直ぐにクレニアムモンの声を聞き分けると、表情を一変させ、スカルサタモンは一時停止ボタンを押してから不敵な笑みを浮かべてこう語り出す。

「そうです。間違いなく本人です。昨日、ネオデビモンが成層圏に群がる小衛星帯で何者かに破壊されました。しかし、ネオデビモンの体内には直径０．００１ミリ単位と言うごく僅かな大きさの無数の発信機が仕込んであり、それが手近の物体に吸着することになっておったのです。その一つがクレニアムモン達・自由同盟の基地に」

そう言うと、スカルサタモンは再び音声を再生する。

『通信機で連絡は出来ないのですか？』

『暗号を解読された上に、発信地まで突き止められてしまう』

「その通り！これで発信源も基地のある衛星も突き止めました」

スカルサタモンがそう言うと、ベルフェモンは黙って残りの音声の会話を聞き入れる。

『だったら、僕らに任せてください。』

『よし！決まりだ！』

『早速明日の朝実行だ。あんまり大勢は――――・・・』

「それに、明朝連絡員がフォルダ島にやってきます」

すると、話を聞き終えたベルフェモンは徐に立ち上がり、悪意に満ちた笑顔でスカルサタモンの功績を称える。

「流石だな、スカルサタモン。大軍を差し向けて叩き潰せ！」

しかし、スカルサタモンは手玉に取った態度でこう言い返す。

「いや～～～泳がせておきましょう」

「何故だ？」

「連絡員の動きを辿り、地下組織のアジトを突き止め、その後小衛星の本部とファイル島の自由同盟を・・・・・一気に総攻撃をかけた方が」

それを聞くと、ますますベルフェモンの悪意に満ちた笑みが不気味なものに化していく。

「ふふ・・・ふふふ素晴らしい！よい手土産だったよスカルサタモン。」

「ありがとうございます！」

「あとは我の戴冠式の日。憎きロイヤルナイツ、クダモンを処刑しとクレニアムモンを抹殺するのみ。我が欲しいのは、この世にある全てのもの・・・世界だ！ふふふふふふふ」

アンゴルモアの効力を受け、以前にはなかった知恵を身に付けたベルフェモンの欲望・・・野望は誰にも止めることは出来ない。

果たして、この止められないベルフェモンの野望をユーノ達は阻止することが出来るのか？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

クダモンの処刑までとうとう一日を切ってしまった早朝。

デジモン自由同盟本部をロケットで飛び立ったユーノ、一護、ユーノスと、案内役を務めるテントモンが小衛星帯を慎重に移動していた。

「「「「・・・・・・」」」」

全員の額に汗が浮かび、ロケットを操縦するテントモンの手にも汗が浮かび上がっていた。

「そろそろ、小衛星帯を出るぞ」

ユーノスがそう言うと、テントモンは緊張の糸を張り巡らせながら小衛星帯を抜け出し、ファイル島上空１０００メートル付近へと浮遊していた。

ここで、テントモンはユーノに操縦の交代を要求し、昨日徹夜でマニュアルを見て操縦の仕方を覚えていたユーノが操縦席に着くと、徐にこう言って来た。

「この先、フォルダ島まで何にもない空間を横切ることとなる。そうすれば、間違いなく奴らのレーダーに引っかかります。１００パー

セント引っかかります」

「さて、どうするかな」

「早く考えてください！時間がありませんよ！」

テントモンが焦燥感に満ちた声色でユーノをせかすが、一護とユーノスがそれを耳にし注意する。

「あのな、焦ってもいい考えが浮かぶかよ！」

「その通りだ。どんな時でも平静を忘れては行かぬ」

と、その時突然ロケットの内部が激しく揺れ動いた。

「のあああ！？」

「な、何だ！」

「まさか敵の攻撃か！」

「違います。この星の引力にひかれた衛星のうち、小さいものがあして流星となって落ちていくのです。」

その瞬間、テントモンの話を耳にしたユーノの脳みそが冴えわたる。

「それだ！流星になって落ちていけばいい♪」

「だけどんなことしてこれ大丈夫なのかよ？」

「あらかじめこういう事も踏まえて、徹夜でこのロケットを改造しときました。行くぞ！！」

ユーノはそう言うと、流星が落下していくようにロケットをほぼ垂直に傾けスピードをつけて落下していった。

「「「ぐおおおおおおおお！！！」」」

一護達は予想以上に衝撃の激しいこの状況に思わず声を上げる。

「「「あああああああああ！！！！」」」

慣れない急降下体験に絶叫する一護達と、その状況でもロケットの操縦を行うユーノ。

重力加速度を増し熱エネルギーを伴う機体を操りながら、ユーノは頃合いだと判断し、操縦レバーを体の方へと引き始める。

「地上すれすれで反転する！」

「ぶつかるぞ、ユーノ！」

ユーノスが何時にもなく絶叫した声色でそう言うと、ユーノは上手く機体を反転させることに成功し、同時に流星が落下したと見せかける単にダミーの爆弾を落下させた。

この事は当然地上のベルフェモンの支配下となっている観測所でも確認される。

「北部山岳地帯に、流星落下！」

上手く誤魔化せたと内心思いながら心配の拭えないユーノであったが、低空飛行で移動しながらテントモンに尋ねる。

「テントモン。ファイル島の首都は？」

「このまま南東に２００キロ。首都セントラル・サーバーに着きます」

その頃、観測所の方も先ほどの流星に関して算出されたデータが不自然であることに気づき、スカルサタモンに報告する。

「おかしなことに、落下したはずの流星の大きさを考えても、この地震計の数値は異常です。どういうことでしょう！？」

「来たな。落下の瞬間に別の物体を落下させて我々を誤魔化したつもりだろうが――――――へへへへ」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

スカルサタモンの魔の手が伸びようとしていた丁度その時、ファイル島の首都の全貌を遠くから眺めていたユーノ達。

テントモンが三人に首都セントラル・サーバーについて説明していた。

「あれが首都のセントラル・サーバーです」

首都セントラル・サーバーはクラナガンほどの近未来都市ではないものの、デジタルワールド一のデジモン人口を誇り、商業活動の中心でありながら歴史ある数多くの文化遺産が残された由緒ある地でもある。

「クダモンは、この先の闇貴族の館に捕われている筈です」

「おうし！出発だ。直ぐに乗り込もうぜ」

一護は早速首都を目指そうと意気込むが、ユーノは軽はずみな一護の行動を止めようとする。

「あ、ちょっと待ってください一護さん。一旦手順を確認してからでないと危険ですよ」

「おお、そうだったな。悪りー悪りー」

ユーノスは冷静に戻った一護をテントモンと一緒に一か所に集めると、手順を確認していく。

「一先ず、俺達は丸見えの状態だ。そこで俺とユーノがオプティックハイドを使って姿を消す。そうすれば気づかれずに移動することが出来る。」

「けどよ、お互い見えないとなると・・・」

「それならご心配なく。ワテは光子郎はんのデジモン！ちょっと変装するだけど、誰にもわかりませんがな」

テントモンはそう言うと、地面に体を擦りたて土煙を周囲にまき散

らしながら体を汚していき、その時の土煙に三人は大層迷惑がった。

「「「うわ・・・」」」

「げっほ！げっほ！いかがです・・・ぶっほ！あの美しいテントモンの面影は少しは消えましたでしょ？」

すっかり全身を真っ黒に染め上げるテントモン。

ユーノ達は顔を見合わせほくそ笑む。

「消えたよ。それじゃ一護さん。オプティックハイドを施しますね」

「ああ」

ユーノは完現術の能力を使って魔力素を一護の全身に纏わせ、そのまま姿が見えなくなるように加工し、オプティックハイドが完成する。

「おお。相変わらずスゲーなおい！」

「それでも完全なものではないですけどね♪」

ユーノはそう言いながら、自分もまたオプティックハイドで姿を多い隠し、ユーノス自身も姿を消してから始め乗ってきたロケットにも施しを入れる。

「おお！」

テントモンも未知なる魔法の能力に眼を見開いた。

「ロケットは俺の結界魔法で地下に沈めておく。」

そう言ったユーノスが指を軽く鳴らすと、姿を消していたロケットがユーノスの結界魔法によって圧縮結界に閉じ込められると同時に地下へと沈められる。

「これでよし」

「それでは、地下組織のアジトへご案内します」

「「「ああ」」」

「では出発します」

テントモンは三人にそう言うと、背中の羽を広げて首都セントラル・サーバーを目指して飛び立ち、ユーノ達もその後に続いて空を駆け抜ける。

同じころ、ユーノ達の足取りを監視していたスカルサタモン達であったが、突然姿を消してしまった不測の事態の対応に苦慮していた。

「スカルサタモン様！不思議な事にその後の人間たちの足取りが消えました！」

「何！！」

「流星の落下現場、セントラル・サーバーに続く全ての道路で監視していたんですが、何の手がかりもつかめません」

「く・・・死神とか魔導師と言っても人間だろう。煙のように消える訳がない！待つのだ。そのうちきっとぼろを出すのに違いない。いや、出させて見せる。おい！」

「は！」

「奴に連絡を入れろ。いよいよ働いてもらう時が来たようだからな」

スカルサタモンはユーノ達を見つけ出すためにある作戦を実行することを決め込み、その重要人物を首都セントラル・サーバーに向かわせるのであった。

一体、彼が首都に向かわせる人物とは何者なのか！？

◇

〈衛星Ｓｉｄｅ〉

さて、ユーノ達が作戦の最中にある中小衛星帯にあるデジモン自由同盟の秘密基地の方で留守を預かっているなのは達は何をしているのかと思えば、同志のデジモンたちと一緒に模擬戦を通じて訓練を兼ねた交流を行っていた。

〈Ｔｈｕｎｄｅｒ　ｓｍａｓｈｅｒ〉

「ファイア！」

「シャドーウィング！」

フェイトとガルダモンは訓練室でガルダモンと一騎打ちを行い、白

熱したバトルを繰り広げている。

「やりますね、フェイトさん」

「ガルダモンも。流石です」

二人はよき関係を気づきあいながら、切磋琢磨し合い力を磨いていく。

また、自由同盟のリーダでありロイヤルナイツの一体でもあるクレニアムモンの方はと言えば、魔槍クラウ・ソラスを使い同じく槍使いである浦太郎やエリオと勝負を行っていた。

「はあああああ！！」

「ストラーダ！」

〈Ｓｅｃｏｎｄ　ｍｏｄｅ〉

ストラーダをセカンドモードに切り替え、推進力を増した一撃を食らわせようとするエリオと、クレニアムモンの背後からフィッシャーマンを突き立てる浦太郎。

「これで終わりだよ！」

「ふん。甘いな。」

しかしクレニアムモンは余裕の口ぶりで魔槍クラウ・ソラスを振り回すと、目にも止まらぬ槍撃をその身に受け、二人は地面に叩きつけられる。

「「ぐあああああ！」」

この圧倒的な力を秘めたロイヤルナイツの戦闘力を目の当たりにし、見物していたなのは達は愕然とした。

「凄い・・・これがロイヤルナイツの実力・・・！」

「エリオと浦太郎の実力を以てしてもこの戦力差・・・伊達にデジタルワールドの守護騎士と名乗るだけはあるようだな」

「これは、のちの私との勝負が楽しみだ。ははははは！！」

「う・・・シグナムさん・・・今年もそれなんですね・・・」

なのははついついバトルオタク丸出しとなるシグナムに渋い顔を浮かべるのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

本部が模擬戦で盛り上がりを見せているその頃、首都セントラル・サーバーの上空を姿を隠して移動するユーノ達はどうかと言えば、テントモンの後ろに着いて行きながら目の前に広がるセントラル・サーバーの街並みに目を凝らしていた。

「流石はデジタルワールドの首都、クラナガンに比べるとなんだけど少なくとも大都会だね」

「いやにシーンとしてるな」

一護がそう口にする様に、現在このセントラル・サーバーには全くと言っていいほど人の気配、デジモンの気配と言うものが感じられなかった。

その原因をテントモンはこう説明する。

「ベルフェモンの復活の前は、もっと活気があったのですが、今では寂しい街になってしまいました。ワテも日曜日には友達と一緒にショッピングをするのが楽しみでした。今では、のさばっているのはスカルサタモン達と悪魔デジモンだけです」

テントモンがそう言うと、ユーノ達は街を見下ろしている内に目に映ってきたデビモンを始めとする悪魔、堕天使型デジモンが街中を巡回している様子を窺った。

するとここでテントモンが更にこんな事を言って来た。

「街のあちこちにあるベルフェモンの肖像には気を付けてください。いいですか、見ててください」

テントモンは三人にそう言ってから街中に設置されたベルフェモンの肖像の前を魔座と通り過ぎるように滑空すると、ベルフェモンの肖像の目が動き合わせて動き出した。

ユーノ達はそれを見て目を見開き、テントモンは説明を終えると何事も無かったかのように戻ってくる。

「ご覧の通り目が、監視装置になっているのです。ワテらデジモン

はいつ・どこへ行ってもベルフェモンに見張られているのです。デジタルワールドを、以前の様な明るく楽しい世界にするためには力を合わせてベルフェモンを倒さねばなりません。その為には、一秒も早くクダモンを救出せねばなりません！その為にも、自由同盟の地下組織と・・・」

「その地下組織のアジトだが、一体何処にあるというのだ？」

ユーノスが気になってテントモンに尋ねると、彼もすっかり忘れていたのか気恥ずかしそうな表情でこう言った。

「？あ・・・演説の途中だったもので通り過ぎました♪」

「「「あらら～～～」」」

三人は思わず力が抜けてしまった。

「すみません！戻ります」

「「「はぁ～～～」」」

先が思いやられる三人はため息を吐きながら引き返していくテントモンの後を追って行く。

「この公園の先の破壊されたビルの中に、入り口があるんです」

と、この時姿を消していたユーノ達の様子を黒いマントを羽織った謎の人物がじっと伺っており、男の手にはサソリ・カニ・エビの絵柄が刻まれた黒のコアメダルが握られていた。

「・・・――――」

男はその三枚のコアメダルを握りしめると、徐に天に翳すように腕を振り上げ、コアメダルの力を周囲に散布し始める。

するとどうだろう。

周囲を飛んでいたユーノ達に施されたオプティックハイドが何の前触れもなく突然効力を失ってしまい、ユーノ達は姿が見えるようになってしまったこの出来事に目を疑った。

「・・・？な！」

「ああ！」

「何！？何故このタイミングでオプティックハイドが切れた！」

動揺を隠し切れなくなるユーノ達と、姿が見えるようになったことでベルフェモンの肖像の目が動く。

「おい！どうするんだよ！？」

「兎も角、公園の森へ隠れましょう！」

テントモンの言葉を聞き入れ、ユーノ達は真下に広がる公園の中へ向けて飛び込むように降下する。

ユーノ達がはっきりと姿をさらすと、観測所で動きを監視していたスカルサタモン達も動きを見せる。

「スカルサタモン様！８１３５のモニターを！」

「こいつらだ間違いない！ＤＤ地区３０３ブロックに急行。公演を包囲せよ！・・・・・いや待て！奴らが動きやすいように見張るだけで良い」

スカルサタモンは何を考えているのかはいまだ見当がつかないが、兎も角ユーノ達に危機が訪れようとして言うことは確かであった。

では、そのユーノ達はどうしているだろうか。

公演の中へと隠れたユーノ達は突然効力を失った自分たちの魔法に未だ納得のいかない様子であった。

「くそ！何がどうなっている！？何故オプティックハイドが・・・！」

「ＡＭＦが働いているわけでもない・・・ましてこの世界の現象とも考えにくい・・・と言うことはまさか・・・」

「グリードかヤミーの仕業が高いって言いてぇのか？」

「しかし、だとしても何も感じなかったぞ」

「もしかして、新種のグリードが・・・！」

グリードの可能性を示唆し、徐々に表情を険しくしていく三人だが、直後テントモンが自分の事を責め立て始める。

「待ってください。これはワテの責任です！ワテがお喋りなばっか

りに・・・！！」

ユーノとユーノスはあながち間違いでもないがそれでも自分を責めたてるテントモンを見ると、胸が苦しくなった。

と、その時一護が公園の外を見た時意外な事に気づいた。

「ん？おい。そう悲観することもなさそうだぞ」

「え？」

「見てみろ。奴らはうろうろするばかりで近づいてこないだろ」

一護にそう言われ、公園の外を覗くと確かにスカルサタモンの部下たちは公園には近づかず、周囲から見張っているだけであった。

「あ、本当ですね」

「見つかったと思ったのはこっちの考え過ぎじゃねぇか」

「スカルサタモンの事です。僕らが動きやすいように敢えてこう言ったことを」

「その可能性は大きいな」

スカルサタモンの狡猾な思考を考えながら一先ずその場から動きを見せないユーノ達と、そのユーノ達の動きを監視しつつベルフェモンと通信を行うスカルサタモン。

「ベルフェモン様。人間たちを見付け、監視体制を完了しました」

『ようし。アジトを突き止めたらただちに小衛星の総攻撃に移れ。ネオデビモンを束にしてぶちこめ！』

「ネオデビモンをですか？空軍の主力を差し向けた方が・・・」

『デジモンは信用できん！』

直情的且つ粗暴な言い方で一方的に通信を切ったベルフェモン。

スカルサタモンはそれを聞いた後腕組みをし、不敵な笑みを浮かべてこんな風に呟いた。

「成程・・・万が一の叛乱を恐れているのか。自分の人気の無いのをようくご存じだ。まぁ、どちらにしても・・・・・貴様の天下はもうじき終わるさ。ベルフェモン。ふふふふ」

このスカルサタモンの言動はのちに、最終決戦において大きな意味を持つことになってくるのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

監視委体制を敷かれ、見張られること数十分。

一護はこの状況に些か焦りを感じたのか、ユーノに意を決して行動を促す。

「ユーノ。いつまでもここに至って始まらねェよ。思い切って行動

に移そう！」

「俺もそうした方がいいだろう。ユーノ」

ユーノスも一護に便乗してそう言うと、ユーノは一度考えてから肯定の返事をする。

「分かりました。じゃあ、こっちも行動を起こしてみますか」

ユーノはそう言うと、一護達は集めて周りの様子を警戒しながら小声でこう言い始めた。

「いいですか？警戒網が厳重に敷かれたこの状況を打破するには、何と言っても一護さんの瞬歩と、僕の完現光・スレイヤーダッシュを使うのが得策です。ただ、さっきみたいなことが考えられますから誰かが妨害をしてくることもありうるということをお忘れなく」

「ああ。分かってる」

「テントモン。アジトまではどれくらいだ？」

「約1キロ」

「う～ん・・・それまでに何もなければいいけど。時間がない。兎に角行動開始です！」

ユーノがそう言うと、ユーノスはユーノの肩に乗り、テントモンは一護の腕の中に抱えられる。

テントモンを抱えた後、一護はふとこんな事を口にした。

「おっ。ユーノスはユーノの肩から振り落とされないように気をつけろよ」

「うるさい！」

思わず癇癪を起したユーノスであった。

そして、準備が整うと全員は茂みの中から顔を出し飛び出すタイミングを見計らう。

「いいか。飛び出したら全力疾走だぞ。」

「オッケイ」

「では行きます！！」

そう言った瞬間、ユーノと一護は完現術と瞬歩を最大限に発揮させて1キロ離れた先にある地下アジトを目指して全力疾走。

デビモン達の警戒網を目にも止まらぬ速さで潜り抜け、街中を疾走する二人。

ユーノスとテントモンは振り落とされないように必死で二人の体にしがみつく。

「あと一ブロックです！」

「そろそろ何かあるかもしれない・・・！」

ユーノがそう呟いたその時、案の定先ほどの黒マントの男が移動するユーノ達を見ながら遠く離れた場所から黒のコアメダルを手に取り力を発揮し、ユーノ達の能力を打ち消す。

すると、ユーノの完現術と一護の瞬歩が効力を失い急激にスピードが落ち始める。

「あ！やっぱり！スピードが落ち始めた・・・」

だが幸運な事に、テントモンが目の前に広がってきた廃ビルが地下組織の入り口だと発見し、声を上げる。

「ここです早く！」

ユーノ達は滑り込むようにビルの中へとダイブする。

「やった！」

「セーフ！」

息を荒げ作戦の成功に安堵するユーノだが、その直後自分の方に乗っていた筈のユーノスがそこに居ないことに気づいた。

「あ、あれ！？ユーノス元帥は・・・！？」

「え？」

不思議に思った二人が外を見ると、そこには足を挫いて動けなくなっていたユーノスを発見した。

「「ああ！」」

「ぐ・・・」

ユーノスは負傷した足を押さえながら這いつくばる様に前へと進んでいた。

「しまった！振り落としちゃった！」

「くそ！ユーノス！！」

一護は外に出ると、ユーノスを抱きかかえ急いで移動する。

「ユーノス！見つかるぞほら！」

一護はスカルサタモン達に見つからないようにと疲れ切った身体に鞭打ちながら急いで移動するが、この時後ろのビルに掲げられたベルフェモンの肖像を通して彼らの動きはしっかりとスカルサタモン達に監視されていた。

「ついに尻尾を掴んだぞ。」

スカルサタモンは早速この事をベルフェモンに報告する。

「ベルフェモン様。アジトを突き止めました」

『ようし。直ちに小衛星を攻撃せよ！』

「三時間後には・・・ネオデビモンも小衛星に到着。同時にアジトも一網打尽と言う訳で」

今、自由同盟本部とユーノ達に最大の危機が訪れようとしていた。

◇

〈小衛星Ｓｉｄｅ〉

その頃、成層圏上にある小衛星帯デジモン自由同盟本部の方では、警戒アラートが鳴り響き、なのは達前線メンバーは急いで移動を開始していた。

『総員、配置に着け！総員、配置に着け！』

不安一色の表情でなのは達は慌ただしく動き始めるデジモンたちを見ながら、クレニアムモンへ事情を問いただす。

「クレニアムモン！」

「何かあったんでしょうか！？」

「不覚だった！この基地の場所を探知された」

「「「ええ！」」」

「何百と言うネオデビモンの大軍がファイル島から発射されたらしい！」

クレニアムモンはそう言うと、モニター画面に成層圏を目指してファイル島から発射されたネオデビモン達の大軍勢を映し出す。

「え！すると、こっちに向かってるんですか！？」

「真っ直ぐこの成層圏の小衛星を目指している・・・！」

すると、その時スピーカーからこの基地に居る全てのものに報告が入る。

『緊急！緊急！ネオデビモンは三時間後に到着する！ネオデビモンは三時間後到着する！』

全員の表情が思わず凍り始め、なのはは首に掛けられたレイジングハートとユーノの写真が入ったペンダントを握りしめ、思わず口に出す。

「三時間後に・・・ユーノ君・・・一護さん・・・！」

果たして、ユーノ達の運命は！！

接触と潜入と黒のメダル（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は七大魔王だ♪」

「デジタルワールドの歴史上、こいつらの存在はロイヤルナイツと対を為す程に重要なものだ。悪魔・暗黒系デジモンの頂点に君臨する七体の魔王型デジモン達のことで、モチーフはキリスト教で定められた七つの大罪。」

「それぞれ、憤怒のデーモン・暴食のベルゼブモン・色欲のリリスモン・傲慢のルーチェモン　フォールダウンモード・強欲のバルバモン・嫉妬のリヴァイアモン・怠惰のベルフェモンからなっていて、伝説ではこれらが集合すると間違いなくデジタルワールドは破滅するらしい」

一「でもよ、俺的には七大魔王なんかよりも白き魔王の方が怖いと思うぜ」

と、鼻で笑いながら陰でこっそりと訊いていたなのはは飛び出し顔を真っ赤にする。

な「あああ！！またそのネタひっぱるつもりですか！！！」

恋「ネタじゃなくて決定事項だろ。」

な「恋次さんまで酷い！！！私こう見えても管理局のエースオブエースって言うもう一つの呼び名だってあるんですからね！！」

と、飽く迄自分の存在を魔王と認めようとしないなのはにユーノは言う。

ユ「自分の事を良くも悪くも素直に認めようとしない人に、エースオブエースの称号は無いと思うけどね。はっきり言うけど」

な「ガーン！！！！！」

痛烈な一言を耳にした瞬間、なのはの魂は抜け落ち尸魂界へと向かう。

一「あ～あ。逝っちまったよ」

ル「殺人的な一言でしたな今のは」

ユーノス「ある意味、ユーノの方が魔王なのではないか？」

魔導師図鑑ハイパー！

正月休みの間、前線メンバーがどんな過ごし方をしたのか談笑していた。

な「スバルとギンガはお正月どうだった？」

ス「父さんやナンバーズのみんなと一緒に、楽しい休みでした！」

ギ「だけどスバルが騒ぎの最中にお餅をのどに詰まらせて大変だったんです」

回想シーン

ス「うごごおお！！！」

間違ってのどに詰まらせたお餅に苦戦するスバルを、ナンバーズ９のノーヴェが一喝。

ノ「何やってんだバカ！大丈夫か！」

ス「お・・・お餅もっと・・・」

ノ「何でだよ！！何でそこはもっとなんだよ！！」

その後スバルとノーヴェの漫才のようなやり取りが続いていたが、そんなスバルの命にかかわる重大事を呆気なく終了させたのはこの人だった。

ティ「・・・まったく。新年早々何バカな事やってんのよ！」

ス「あたっ！？」

ティアナがスバルの首元に手刀を入れた瞬間、のどに詰まっていたお餅がすっぽりとれる。

話を聞いていたなのはは思った。

な「（すごい・・・詰まったお餅を一発で・・・流石はティアナ・・・）」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

パ「テントモンじゃないか！」

ユ「必ず、クダモンと一緒に助けに戻りますからね！」

バ「デジソウルとは何ぞや！？」

ク「クダモン進化」

第１５６話　総攻撃とデジソウルと復活の聖騎士

登場デジモン

ガルダモン

声：重松花鳥

完全体　鳥獣型　ワクチン種

大地と風の守護神と呼ばれる鳥人型デジモン。名前の由来はインド神話の神鳥ガルダだが、羽飾りや装飾品はネイティブ・アメリカンをイメージしているように見える。必殺技は真空の刃で敵を切り裂く『シャドーウィング』。

ネオデビモン

完全体　堕天使型　ウイルス種

ベルフェモンによって、強化されたデビモンの進化形態。人為的に強化されており、個体の意思までも完全に制御された人造デジモンでもある。顔面を覆うマスクはネオデビモン自体のパワーを制御し、意思をコントロールするために付けられていると言われている。必殺技はデスクロウの強化版『ギルティクロウ』。

総攻撃とデジソウルと復活の聖騎士（前書き）

理性は羅針であり、欲望は嵐である。

Ｂｙアレキサンダー・ポープ（人間論）

総攻撃とデジソウルと復活の聖騎士

ついに、クダモン処刑を前日に迫ったユーノ達は地下組織との連絡をとるために、ファイル島の首都セントラル・サーバーへと潜入した。

待ち受けるスカルサタモンの警戒網を掻い潜り、ついに地下組織の入口へとたどり着いたユーノ達だったが、不幸にもスカルサタモンに足取りを掴まれてしまった。

ネオデビモンの大軍が小衛星帯に発射され、今まさに総攻撃が始まろうとしていた。

〈ユーノＳｉｄｅ〉

スカルサタモン達に気づかれたこととは露知らずのユーノ達は全員がいることを確認し、廃ビルの床下にある下水道を通り地下組織を目指そうとしていた。

「ここが入り口です。」

テントモンが蓋を開けると、三人は徐に覗き込む。

「昔の下水道です」

「ようし。出発だ」

一護を先頭に、ユーノ達はゆっくりと梯子を伝って下へと降りていく。

薄暗い下水道の中を慎重に降りていきながら、徐にユーノが呟く。

「随分深いんだね」

「昔の人が掘ったんです。まだ使用してるところもあるんです」

テントモンに案内され、地下下水道の中を移動するユーノ達。

ユーノスはユーノの肩に乗っかりながら薄暗い周りを見渡し、何気なく呟く。

「こういう場所には大抵ネズミがいるのだがな」

「ネズミなら可愛いモノですよ。これで万が一猫とかが出てきたら僕魂消ちゃいますよ」

「ユーノは大の猫嫌いだからな」

「ネズミで良かったなユーノ」

と、一護とユーノスがそう言った直後だった。

唐突に目の前の穴の中から野良猫に似たデジモンが大量に飛び出し、それを見た瞬間ユーノは根源的な恐怖に支配され大声を上げた。

「ぎゃあああああああああ！！！」

そして、あまりの恐怖に自分で口にした通り魂消てしまい目を回しながら後ろに倒れ込んだ。

「ゆ、ユーノ！？」

「大丈夫か！」

二人は直ぐに倒れたユーノの状態を確認すると、ユーノはずっと眼を回したまま完全に気を失っていた。

「う・・・・！！」

テントモンはユーノの事を心配しつつ、猫がこの場所に住み着いているとは夢に思わず一度考えてみた。

「なんでこんなところにネコがいるんやろうか。まぁ気にせず進みましょうや」

「って！少しは気にしろよ。おい！しっかりしろユーノ！」

ユーノの一大事に師匠一護は焦燥を滲み出すのであった。

やがて、目を覚ましたユーノだったがすっかり気分を害してしまい、念の為と一護はユーノを背中に背負いテントモンの後に続き歩いていると、テントモンが地下アジトの入り口を発見する。

「ここがアジトの入り口です」

一護は慎重な足取りで移動しつつ、背中のユーノに語りかける。

「ユーノ。大丈夫か？」

「大丈夫じゃないですよ・・・」

「ここは千年も前に作られた下水道・・・ちょうどベルフェモンが封印された時と同じです。今は使っていません。したがってネズミ・・・あるいは猫はいません。もうすぐです」

「信用していいの？」

思わず総監がせざるを得なくなるユーノスであった。

「ここです」

テントモンがそう言うと、三人の目に映ってきた鋼鉄の扉。

ユーノ達が息を呑む中、テントモンは徐に扉を叩くと、中から同志たちの声が聞こえた。

「合言葉は？」

「“自由は我らに”」

テントモンの正しい合言葉を聞いた同志たちは徐に扉を開放する。

ユーノ達の前に映ってきたのは、テントモンの友人で成長期デジモンのパタモンとテリアモンを始めとする馴染みある面々であった。

パタモンはテントモンの姿に思わず声を上げる。

「テントモンじゃないか！」

「おお！テントモン！待っていたぞ！」

「パタモン！他のみんなも！」

テントモンは気分が高揚し、早速と言わんばかりにパタモン達の方へと駆け寄り、久しぶりの再会を懐かし、直ぐに事情を説明しユーノ達を歓迎する。

中に入ると、ユーノ達は地下組織のリーダー的存在である究極体ジジモンと対談する。

「ほう・・・クレニアムモン氏の特命を受けて。」

「ようく、ここまで無事に辿りつけましたね」

ジジモンや他のデジモンたちはユーノ達と固い握手を交わす。

「みなさんの勇気に敬意を表します。実は衛星基地と連絡が取れなくて困っていたところです。こっちだけで勝手な行動をとる訳にもいかないし」

今ここに、最終作戦実行のために地下組織との会談が行われようとしていた。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

さて、成層圏上に基地を構えるデジモン自由同盟本部の方は敵の襲撃に乗じて慌ただしさを見せていた。

『緊急発進！緊急発進！総力を挙げて迎撃せよ。総力を挙げて迎撃せよ。』

クレニアムモンはアラートが鳴り響く中、難しい顔を浮かべ呟く。

「と言っても僅か１５０の精鋭たちで一体どれだけ防げるだろう・・・」

飛行可能なデジモンたちが次々と基地を飛び交う中、なのは達も協力して戦うことを決め込み、体制を整えていた。

「ほんなら、改めて確認や。なのは隊長とフェイト隊長を、それに恋次さんとシグナム副隊長は最前線に立ってネオデビモン達を退きつけ、その後ろからスターズＦとライトニングＦ、ヴィータ副隊長がガルダモンと一緒に四人を援護、外周の方は私とリィン、アギトとルキアさん、それに浦太郎とマリアさんで固める。」

「「「「「はい！」」」」」

「それとこれは何時にも況して難儀なものになりそうや。気合引き締めてな。なのは体調も、最初から全力全開でぶちのめして行ってな」

「了解」

はやてからその言葉を貰うと、なのはは徐にＡＲカートリッジを取出しレイジングハートと一緒に握りしめると、ユーノへの想いを抱きながら心の中で呟く。

「（ユーノ君が下の方で頑張っているなら、私は空の上で頑張らな

いと。大丈夫。絶対勝って見せる。その為の力が、私にはある！）」

そして、準備が整った機動六課前線メンバーは飛行できるデジモンと共にネオデビモン達を迎えるため今、戦場に飛び立つのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

なのは達が迎撃に出向いたその頃、地下アジトの方で会議を開いていたユーノ達はそこで聞かされたある驚くべき事実に耳を疑った。

「何だって！紫色の宝石！？」

この中で最もその話に驚いているのは間違いなくユーノだ。

もう知っての通り、彼はその紫色の宝石であるロストロギア「アンゴルモア」によって人生を狂わされた人間なのだ。

デジモンは渋い顔を浮かべながら三人に更に説明する。

「間違いありません。その宝石を手にしたときです。悪魔系デジモンたちが反乱を起こし、眠っていたベルフェモンが覚醒をしたのは。お蔭で、今ですっかりこの有様。おまけにロイヤルナイツでさえ圧倒する強大なパワーを」

聞いていた一護は険しい表情を浮かべながら隣のユーノに敢えて尋ねる。

「ユーノ。それってひょっとして」

「間違いなくアンゴルモアですよ。そうか・・・だとしたらこの事態も納得がいく。待てよ。と言うことはまさかこの世界にグリードが！」

「く。今はまだ何も感じないが、いずれその時を待って・・・」

三人はこの逼迫した状況に置いて、さらに追い詰められたかのような気持ちになりがちであったが、そんな三人を勇気づけたのはテントモンだった。

「大丈夫ですがな！あんさん達の力は、そんな逆境や絶望を乗り越え、断ち切るための力！自信を持ってさえいればいいですがな！」

「テントモン・・・」

「お前・・・・・そうだな。言われてみればそうだったぜ。」

一護はそう言うと、一度席から立ち上がり自分を注視するデジモンたちを見ながら、いつもの自信に満ちた表情でこう口にした。

「大丈夫だ！必ず俺達がこの世界もお前たちの事も救ってみせる。俺達の魂に誓って――――――」

全員はその言葉を聞いた瞬間、感銘を受け思わず拍手が飛び交う。

「頼もしい限りです！」

「この方たちがいれば百人力だ！」

「クダモン救出とベルフェモン打倒も訳ない！」

「我々の勝利間違いなしだ！」

「いよいよ明日決行だ！」

デジモンたちは互いに手を取り合い、意気揚々としながら作戦の成功を確信した。

「ようしやるぞ！きっと救出してみせる。そしてこのデジタルワールドを取り戻すんだ！」

「ユーノさん！みなさん！協力をお願いします！」

「「「はい（ああ）」」」

すると、その時不意に和やかな音楽が流れ始め、同志のデジモンの一人が歌い始めた。

全員がその歌と音楽に心路を和ませ、ユーノ達も思わず柔らかな表情を浮かべる。

明日の作戦決行に備え、早めの睡眠をとることにした一同。

ユーノは机の上に突っ伏した状態で疲れ切った様子で熟睡し、一護とユーノスはそんなユーノを傍らで見守った。

「ふん。疲れたんだろうな。」

「ユーノはいっつも全力だからな」

と、その直後寝ているユーノが寝言を呟く。

「なのは・・・」

「「ふふ」」

思わずほくそ笑む一護達であった。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

さて、ガルダモンと共に戦場の空へと飛びだったなのは達はと言うと、連携を崩さぬようにネオデビモン達の方へと向かって行き、徐に広がってきたのは激しい戦いを繰り広げる自由同盟のデジモンとネオデビモンの大軍だった。

「見えた！」

「よし。ほんなら、作戦開始や！」

はやてがそう言うと、手筈通り先ずはなのはとフェイト、シグナムと恋次が前に出てその後ろにスバル達が続き、はやてが後方で指示を仰ぐ。

「なのは隊長は正面から。フェイト隊長と恋次さんは右中間、左中間を。シグナム副隊長は外周を見つつ中央を攻める！」

『『『『了解！』』』』

的確な部隊長からの指示を聞着れた四人はそれぞれの持ち場へと向かい、最初から全力全開による攻撃を行う。

「鋼鉄狒骨大砲！！」

「ザンバースマッシャー！！」

「飛竜・・・一閃っ！」

「エクセリオンバスター！！」

四人の圧倒的な攻撃がネオデビモンへと直撃すると、ネオデビモン達は無残にも細かなデータとなって消去されていき、自由同盟のデジモンたちはそれに触発される。

「魔導師と死神さんの力は凄まじいな。ようし我々も！」

ガルダモンはそう言うと、ネオデビモンの懐へと飛び込みシャドーウィングを放つ。

シャドーウィングを受けたネオデビモンの一体が爆発すると、それに伴い周りのネオデビモンも誘爆する。

その後、スバル達の猛攻が始まった。

「リボルバー・・・デストロイヤー！！」

「ヴォルテール、ギオ・エルガ！」

「ギガトンクラッシャー！！」

「華奠腕！！雷王拳っ！！！！！いやあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

空の上で繰り広げられるその様子は、ゆりかご戦での激闘さながらの光景であった。

◇

〈地下組織Ｓｉｄｅ〉

なのは達がネオデビモンと戦闘を開始し始めてしばらくして、地下組織の方では明日の作戦の準備の為に慌ただしい動きを見せ始めていた。

ジジモンが寝ているユーノを起こさないように一護達に次の旨を伝える。

「では、早速各支部に連絡を取りましょう。いいか・・・急がないかんが慎重に行動をとれ」

「はい。じゃあ」

ジジモンの言葉を聞き入れると、代表のデジモン二人が各所にある支部を目指して移動を始めた。

「それじゃあ、第６支部から回ろう」

「あそこは過激だからな」

意気揚々としながら笑い合う二体のデジモン。

「「ははははは」」

だがこの笑いも長くは続かなかった。

突然、一体のデジモンの口元を長い手首を伸ばしたデビモンに塞がれる。

「！」

辺りを見回してみると、そこにはスカルサタモンの差し向けたデビモンを始めとする悪魔デジモンが集まっており、完全にアジトの場所を特定されてしまっていたのだ。

その事に未だ気づいていない他のデジモンたちは何も知らないまま他の支部を周りに出かけようとしていた。

「じゃあ、行ってきます」

先ほどの二体のデジモンと同じく外へと向かって歩き出した一体のデジモンだったが、その直後そのデジモンは引き返し前方には敵をむき出しにしたデビモン達が待ち構えていた。

「おお！！」

「アジトは包囲された！」

「無駄な抵抗は止めろ！」

デビモン達の声を聞くと、寝ていたユーノもその事に勘付き、目を見開き振り返り一護達の側で焦燥がにじみ出た表情を浮かべる。

「しまった！」

「く！テントモン、ユーノさん達だけでも！」

咄嗟にジジモンがそうテントモンに指示を出すと、テントモンは入り口の天井目掛けて必殺技のプチサンダーをお見舞いする。

「『プチサンダー』！」

すると、プチサンダーによって天井が崩落しデビモン達はその被害を見事に受ける。

「「「うわあああ！」」」

デビモン達が怯んでいるのを見て、パタモン達がユーノ達を別ルートから外へと移動させようと躍起になる。

「さ！早く！」

「だけど・・・！」

「いいから！早く！！」

デジモンたちの真剣な眼差しをその目に焼き付けたユーノ達三人はテントモンを引き連れ、足早にアジトから逃走。

「逃がすな！一人残らず捕えろ！」

デビモン達は他のデジモンたちを捕縛したのち、ユーノ達を追って動き出す。

ユーノ・一護・ユーノスの最大の危機が訪れてしまうのであった。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

その頃、空の上の戦いも苛烈さを極めていた。

なのははＡＲカートリッジの力を解放すると、一年ぶりに使用するエクストリームカノンを利き腕に装着すると、標準を定めてネオデビモン目掛けて特大砲撃を叩きこむ。

〈Ｅｘｔｒｅｍｅ　ｂｕｓｔｅｒ〉

砲門から発射される凄まじい威力を秘めた桃色の砲弾。

ネオデビモンの軍勢はその攻撃を受けると一気に消滅を果たし、なのはは次から次へと数で勝負に出るネオデビモンを圧倒していく。

「第７密集地点撃破！次！！」

『は、はい！』

思わず聞いていた自由同盟のデジモンたちもその気迫に圧倒される。

勿論なのはだけが頑張っているわけではない。

恋次やスバル達フォワード陣、そして部隊長のはやてもリィンとのユニゾンによって久しぶりに使用する超遠距離魔法によってネオデビモン達を圧倒していく。

「いくで！みんな、ちょっと下がって！」

はやての声を聞くと、近くにいた六課メンバーやデジモンたちは緊急回避し、はやては息を整えてから会場の水を一気に巻き上げネオデビモンの大軍に向けると瞬間凍結を行う。

「ヘイムダル！」

すると、ネオデビモンの軍勢は推定８０メートルに達するとも言ってもいい巨大な氷塊へと変貌し、それを近くで目の当たりにした一同は目を疑った。

「す・・・すげえ〜〜〜！」

「流石ははやて！六課随一のＳＳランク魔導師！」

ヴィータが褒め称えると、聞いていたはやては気恥ずかしそうに笑みを浮かべる。

「へへ。まぁそれでもユーノ君の完現術コンボには劣るけど。さぁ、ガンガン行くよ。みんな！」

「「「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」」」

前線メンバーと自由同盟のデジモンたちによる総力戦はいよいよ終局の時を迎えるのであった。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

なのは達が空の上でネオデビモン達の軍勢を相手にしているその頃、地下アジトから脱出を果たして一護は逃げる途中、ユーノ達とはぐれてしまい現在一人となってデビモン達の追ってから逃げ回っていた。

「は、は、は、は、は、は」

荒い息を立てながら家の柱の陰などに隠れ、自分を追って街中を飛び回るデビモン達を警戒する一護。

「く・・・ぶっ！？」

と、その時突然何者かの手が自分の口元を塞ぎ、抵抗しようとする一護であったがすぐにその手が愛弟子のユーノの物であることが判明し、更に運のいいことにユーノスやテントモンも一緒であった。

「ゆ、ユーノ・・・！ユーノスも無事か！？」

「ああ。この通りだ」

その言葉を聞き安堵の表情を浮かべる一護だが、横で不服そうにテントモンが言う。

「一護はん！ワテのことも心配してな！」

「おう、悪りい悪りい。それより・・・この状況最悪だぜ」

一護はそう言いながら再び家の物陰に隠れながら気づかれないようにデビモン達の動きを警戒する。

「お前は北の方を探せ！何としても捕まえるのだ！」

「は！」

躍起になって自分たちの事を探しているデビモン達に一護達は困り果ててしまう。

「参ったぜ・・・これじゃここに長くはいられねぇな。一先ずここを離れようぜ」

「ああ。オプティックハイドを施しておく。それぞれ全速力で逃げるぞ」

ユーノスが状況を理解して止むを得ずそう判断すると、聞いていたテントモンは思わず高い声を上げてしまう。

「バラバラになってしまいますよ！？」

「仕方ないさ。落ち合う場所は、闇貴族の館がある茂みの中。夜になるのを待って、オプティックハイドを解くこと。いいか、では幸運を祈る」

ユーノスは地図で場所を確認してから全員にオプティックハイドを

施すと、ユーノ達はそれぞれ四つに分かれて散開した。

そんなユーノ達を追っていたデビモン達はユーノ達の考えを読んで、予め鼻がよく利くスカルバルキモンを重用し、逃げていった彼らのごく僅かな臭いを追っていた。

「奴らはきっと姿を消しているぞ。臭いを辿れ。そう遠くへ行くはずが無い。」

スカルバルキモンはデビモンの指示を聞くと、徐に周囲の地面に鼻を当ててユーノ達の残した臭いをかぎ分けていく。

スカルバルキモンが念入りに臭いを辿っていくと、ついにそれらしい臭いを見つけ出し、目を光らせその方向へと走っていく。

「よし！匂いを嗅ぎつけたか！？」

デビモンも後ろについてスカルバルキモンの後を追って行く。

暫く街中を走っていくと、スカルバルキモンは唐突に動きを止めて再び臭いをかぎ始めると、デビモンは不敵な笑みを浮かべる。

「近いな」

デビモンはスカルバルキモンの鼻を頼りに周囲に目を光らせ臭いと一緒に気配を感じ取ると、その箇所目掛けて攻撃を行う。

「そこだ！」

デビモンの指先から放たれる熱線を浴びると、オプティックハイド

で姿を隠していたテントモンが実体をあらわし、お尻に発火した炎に思わず飛び跳ねる。

「あちゃあちゃ！！熱いやろう！！」

テントモンがデビモンに見つかった瞬間、別ルートで逃げていたユーノはその事に勘付き後ろを振り返った。

「！まさか・・・テントモンか？」

ユーノが暫く後ろの方を気にして辺りを眺めていると、その直後追っ手のデビモンとスカルバルキモンがユーノの元へと走ってきたのだ。

「！追ってか・・・くそ！」

ユーノは全力疾走をする傍ら、オプティックハイドで姿が見えないにも関わらず追跡をしているデビモン達の行動を見るなり頭を働かせる。

「そうか・・・いくら姿を隠しても、臭いでバレバレって事か・・・詰めが甘かった・・・！」

それでも、ユーノはただ只管に走り続けた。

脱兎のごとく、兎に角逃げる事だけに全身全霊を注ぐのみ。

やがて、ユーノは首都から大分離れた場所にあるさびれた街並みの一角にやってくると、建物の陰に隠れながら敵の動きを監視する。

「は、は、は、は、は・・・うわあ！？」

と、その瞬間突然ユーノは首根っこを掴まれる。

敵の吸収かと思いつつ後ろを振り返ると、そこに居たのは一護であった。

「一護さん！ユーノス元帥はいるんですか？」

「いや。分からない。お前の霊圧だけしか感じなかった。恐らく・・・ユーノスも奴らに」

「そんな・・・」

思わず愕然とするユーノと、口を籠らせる一護。

二人は一先ず廃墟の中へと隠れ込み、ユーノを追って来たデビモン達の動きを窺いながら小声で話し合う。

「あいつら・・・鼻の利くデジモンを使って俺達の臭いを辿ってるんだな」

「ええ・・・来た！」

ユーノは窓越しに見えてきたデビモン達に気づかれないよう、一護と共に体制を低くして隠れ込む。

デビモンは二人を見つけ出そうと数を増して街中を徘徊する。

ユーノはそんな状況を見て、下手な考えをするより正面から突破す

るのが妥当だと判断し、一人その場から出ようとする。

「こうなったら正面突破するしか――――――」

するとその時、一護がユーノの腕を掴み、真剣な表情で驚愕の一言を向ける。

「いや待て。それは俺が引き受ける」

「一護さん!?」

「ここは俺が奴らの注意を惹きつけるから、お前はその間に元の場所まで走っていけ。基地に戻ったらルキア達にこの事を話せ。」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!いくら僕でも、かけがえのない師で恩人でもある一護さん一人を置いて行けませんよ!」

納得など絶対に出来ないと言わんばかりの焦燥感丸出しのユーノだが、一護はそんなユーノの顔を見てからため息をつき、低い声で語りかける。

「・・・・・お前は、今一番しなきゃいけないことは何だと思ってる!?」

「!」

そして、驚くユーノの胸ぐらを思い切り掴み一護は大声を上げてこう言った。

「今しなきゃいけないのは、俺と一緒に戦う事じゃなくて、生き延

びることだ！ここで二人とも捕まったら誰が、クダモンを・・・世界を守るんだよ！！」

「それは・・・」

ユーノはそれを聞くと、何も言い返せなくなってしまい思わず項垂れる。

一護は些か申し訳ないと言わんばかりに顔の皺を緩めると、ユーノの肩に手を置き優しい眼差しで語りかける。

「・・・怒鳴ったりして悪かったな。だけど俺は信じてる。お前を・・・・・俺の人生における最初で最後の最高の馬鹿弟子をな」

一護はそう言いきると、背中の斬月を手に取り一人外へと向かおうとする。

「一護さん！」

ユーノはそんな一護の背中に向かって大声を上げる。

一護は一旦立ち止まり、顔を向け彼の名前を呼びかける。

「――ユーノ。」

一護が顔を向けると、ユーノは思わず涙を浮かべ人生で最も尊敬する師に向かってすすり泣くように約束する。

「僕・・・――必ず戻ってきますから。だから、待ってください・・・／／／」

「ああ。お前に逢えてよかったよ。まだ子供がいる訳じゃねぇけど・・・俺はお前の事本当の息子のようなものだとも思ってたからよ！」

「一護さん・・・／／／」

「じゃ。頼んだぞ」

一護はユーノを信じ、一人外へと飛び出すとデビモン達の元へと向かって行った。

「一護さんッ！」

「卍解！」

一護はユーノに逃げ道を作るために卍解・天鎖斬月を発動させ、得意の月牙八式兵法の四式、城郭月牙を周囲のデビモンとスカルバルキモンに叩き込む。

「城郭月牙ッ！」

城郭月牙をその身に受けた数体のデビモンとスカルバルキモンは一瞬のうちに消去されデータと化して霧散すると、一護は注意を自分に向けるために素早く逃げていく。

「待て！！」

残りのデビモン達は逃げていった一護を追って移動し始める。

ユーノは外に出ると、走り去っていった一護の後姿を見ながら声を

上げる。

「一護さん！！」

「追えっ！」

一護の後姿は次第に見えなくなっていく。

ユーノは最愛の師、一護の行為に深い感謝をしつつ言葉では表現できそうにないほどの罪悪感にさえなまれながらも言いつけを守り、その場から全力疾走。

「一護さん！一護さん・・・一護さん、すみません！」

全速力で走るユーノはその最中涙を流し、その涙が滴となって飛散する。

「必ず、クダモンと一緒に助けに戻りますからね！きっと、きっとですから／／／！！！」

ユーノはそのように固く決意をすると、後ろを振り返らず涙を振り切り全力全開でロケットのある山の麓まで戻ろうとした。

だが、麓に戻って来たその時だった。

そんなユーノを待ち構えていたのは意外な人物だった。

「は！」

目の前に現れたのは、謎の黒いコアメダルを所持し全身を黒マント

で覆い隠した素顔が全く分からない無言の人物だった。

「――――――・・・」

「なんだ・・・この感じ・・・」

ユーノは黒マントの人物から感じられる途方もない気配に戸惑いを見せ、若干後ずさり気味に警戒をしていると、その直後黒マントの人物は左手を前に出すや否や、掌から黒い衝撃波を放ってきた。

「！」

ユーノは咄嗟に上手い事それを交わし、衝撃波の威力を目の当たりにすると、険しい顔を浮かべ戦うことを決意する。

「どうしても戻らせるつもりはないって事か！」

ユーノは懐に手を伸ばし、ユーノスから渡された結界印を取り出すとスレイヤーモードを発動させ変身する。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身をしたユーノはスレイヤーブレイドを右手に生成し、勢いよく黒マントのもとへと駆け寄っていった。

「はああ！」

ユーノと黒マントは肉薄し、激しい火花を散らしながら戦いを繰り

広げる。

ユーノは一度距離とってから、先ほど別れたばかりの師・一護譲りの魂の斬撃「月牙天衝」を容赦なく黒マントの元へと叩きこむ。

「月牙天衝ッ！！」

ユーノの放った月牙天衝が黒マントの男に向かっていくと、黒マントの男は右手を前に翳して逃げるどころかそれをあえて受け止めてしまう。

「何！？」

思わずその光景に目を疑うユーノだったが、霊圧による衝撃光が晴れると、そこに居たのは傷一つ負った様子すら伺えない無言のまま立ち尽くす黒マントであった。

「――――・・・」

「（月牙天衝を・・・無力化した・・・！？）」

目の前の出来事に疑問を感じたくもなるユーノだったが、その直後彼は黒マントの右手に握られていたその種と呼ぶべき黒のコアメダルを見付けると、目の色を変えた。

「！それは・・・コアメダル！」

ユーノは未だ嘗て自分が見たことのない黒のコアメダルを所持する黒マントの男に著しい疑問を抱いていると、不意を衝かれコアメダルの力を最大限に解放した黒マントの攻撃がユーノの身体にクリー

ンヒットする。

「ぐあああああ！！」

ユーノは数メートル先へまで飛ばされ強制的に変身を解除させられると、その圧倒的な力を秘めた黒のコアメダルの力とそれを操る黒マントの存在に根源的な恐怖を覚える。

「なんだ・・・・・・この・・・・・・・力は・・・・・・・」

ユーノはまるで金縛りにあったかのように体に力が入らず、立つ事が出来ないでいた。

黒マントはそんなユーノに徐に近づいて行く。

「く・・・・・・（なのは・・・一護さん・・・ユーノス元帥・・・みんな・・・・・・クダモン／／／）」

ユーノは徐々に薄れゆく意識の中で悔恨に満ちた表情を浮かべ、自分の死期を悟ったように心の中でそう呟いた・・・――――直後だった。

突然ユーノの背後より謎の影が出現し、黒マント目掛けて攻撃を仕掛けて来たのだ。

「『獅子羅王漸（ししらおうざん）』！！」

「！」

「どりゃあああああああああああああああああ！！！！」

激しい闘気を放ちながら黒マントに攻撃を加える一瞬、人の姿をしているような影を持つ謎のデジモンをユーノは虚ろな目で見つめ、そこで気を失った。

果たして、このデジモンは何者なのか?!

◇

〈ベルフェモンＳｉｄｅ〉

やがて、夜を迎えクダモンの処刑まで残り１０時間を切ろうとしていた時間帯、闇貴族の館のベルフェモンの元にスカルサタモンが罰の悪そうな顔を浮かべて出向いて来ると、ベルフェモンは信じがたい報告を耳にする。

「何!全滅だと!?」

それは、小衛星帯に差し向けたネオデビモン達の軍勢がなのは達の加勢もあってか、僅か数時間足らずで全滅したという報せであった。

スカルサタモンが深々と頭をさげながらベルフェモンの前で申し訳なさそうな様子で震える声で弁解する。

「残念ながら・・・／／／／し、しかし!ファイル島の自由同盟・並び人間一名とネズミは捕縛いたしました・・・!それでもあと一人の消息は不明でして・・・」

「そんなことはどうでもいい!あれだけのネオデビモンを一体残らずか!?」

「はぁ・・・あの恐るべき戦闘力は最早人間の範疇を超えています！奴らは化け物です！」

スカルサタモンは今回の件でなのは達の戦闘力が予測しうるデータを遥かに超えていることに内心驚愕しっぱなしでいたが、だからと言ってベルフェモンの機嫌がよくなる訳ではなかった。

「言い訳はするな！我に歯向かうものを根絶やしにするのが貴様らの役目だぞ！失敗は許さん！！」

「無論、手は打ってあります！三日前にこちら側が捕縛した謎の黒いメダルを持つものの力・・・あれは実に素晴らしいモノです。我々の脅威になるとも取れるあの対象物の力を無力化させる力を使えば奴らを一網打尽に出来ます。明朝、再び仕掛けてきたところを今度こそ！」

スカルサタモンはそう言いながら不敵な笑みを浮かべると、足早にベルフェモンの元を離れ自らが利用できると判断し保護した黒のコアメダルを持つなどのフードの人物の元を目指し直進した。

一体スカルサタモンは陰で何を企んでおり、そしてその黒のコアメダルの正体は果たして何なのか・・・真相は謎に包まれたままであった。

◇

〈自由同盟Ｓｉｄｅ〉

スカルサタモン達が今回の圧倒的な大敗に悔しい顔を浮かべている

ころ、なのは達自由同盟本部は今回の戦いの功労者であり大勝利を導いたなのは達に心から感謝をしつつ、連絡が早朝以来途絶えたままのユーノ達の事が気になった。

「お陰でネオデビモンとの戦闘は大勝利に終わったが、セントラル・サーバーに潜入した三人からは何の連絡もない。果たして、成功したのか、失敗したものか？」

クレニアムモンが険しい顔を浮かべて腕組みをしていると、クダモンの処刑が明日に迫っていることに気づいたなのは達は声を上げる。

「明日はクダモンが処刑される日ですよ！」

「私らがひとっ走りして見てこようか？」

すると、それを聞いた瞬間クレニアムモンは目の色を変えて断固反対の姿勢を見せる。

「いかん！これ以上の犠牲を出すことは絶対に避けたい！」

しかし機動六課の方も引くに引けず、クレニアムモンの言い分に反論して見せた。

「だって、時間がないんだろ！？一か八かやってみようぜ！」

「はやて・・・」

フェイトがはやての方に顔を向けてそう口にすると、はやては難しい顔を浮かべながら腕組みをし、徐に口にした。

「・・・――――部隊長として、こないな危険な賭けを奨励する訳にもいかないんやけど、確かにこのままじゃ手詰まり状態や。よし・・・やるしかない！」

「よっしゃ！相当決まればファイル島に行こうぜ！安心しろ。俺達は恐らく・・・次元世界最強の戦闘集団なんだからな！」

クレニアムモンはそれを聞くと、これ以上自分が何を言ったところで聞く耳を持たないであろうということを自ずと理解すると、非公式ではあるが彼らの賭けのような提案を受け入れることにし、全てを託すのであった。

全員は準備を万全に整えると、飛行魔法が使える者はそれを使って移動をし、そうでないものはそれぞれ飛行魔法が使える者に抱きかかえられて同行する。

なのははスバルを抱え、大空を駆け抜けながらもうじき朝日が昇ろうとしているデジタルワールドの転機を一瞥し、ファイル島の何処かに居るユーノの事を気に掛ける。

「ユーノ君。待ってて。直ぐに行くからね――――――」

そんななのは達を待ち望んで、スカルサタモンは闇貴族の館の頂部分に足を懸けながら黒マントの人物と共に上りゆく朝陽を見ながら不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふ。怪物どもめ・・・次に会った時がお前たちの最期だ！」

◇

〈クダモンＳｉｄｅ〉

なのは達が飛び立つ数時間前。

闇貴族の館の地下牢に監禁されているクダモンは一方的な仕打ちを悪魔デジモンたちに受けた後、進化封じの鎖をつけられこうして薄暗い牢の中で身動き一つできないでいた。

「・・・う・・・」

体中に残った拷問を受けた際の痛々しい痣と赤く腫れ上がった白い毛。

クダモンは惨めな自分を酷く呪いながら、頭の中ではこんな自分を躊躇いなく保護し、且つ暖かい居場所を作ってくれたユーノや機動六課の仲間の事を考えた。

「（ユーノ・・・・・・みんな・・・・・・今頃どうしているだろうか）」

と、その時。

クダモンの耳に驚くべき声が聞こえてきた。

「こら！放せっ！！」

「もうちょっと丁寧に扱ってください！ワテを誰のデジモンだと思ってます！？天才研究科、泉光子郎はんのパートナーなんですよ！！」

クダモンは思わずその聞き覚えのある声に正直耳を疑いたくなった。

「この声は・・・まさか！」

その直後、突然目の前の扉が開かれ監視役のデビモンによって無理矢理中へと放り込ま和れる手足を拘束された一護とユーノス、そしてテントモンが目の前に現れた。

「「「ぐあ！」」」

「うるさい！大人しくしろ！」

デビモンはそう言うと、扉を閉じて厳重に鍵をかける。

一護は辺りどころか悪かったのか、険しい顔を浮かべて当たった箇所を気に掛ける。

「てて・・・あの野郎・・・ふざけやがって・・・！」

するとここでユーノスが鎖で繋がれたクダモンを発見する。

「！あれは・・・クダモンか？」

ユーノスがそう口にしてからテントモンも確認の為に前を向く。

「お！本当です！あれは間違いなくクダモンです！！」

三人はクダモンの姿をしっかりと確認すると、徐に近づいて行き、クダモンの方はと言えば予想外の招かざる客の姿に目を見開いた。

「お前たち・・・どうして？」

「決まってるだろ。助けに来たんだよ。つっても、見ての通り俺達もこの様だ。それに、お前を助けに来たってのもあるが、このままじゃ遅かれ早かれ世界は崩壊するらしいからな」

「そうか・・・――――ん！？そう言えば、あいつは・・・ユーノはどうした？」

クダモンは一護達と一緒に行動することが多いユーノがこの場に居ないことに関して疑問を抱きそう尋ねると、聞いていた一護は些か顔を渋らせた様子で正直に話す。

「それが――――――俺が戦っているとき、途中であいつの霊圧が途切れちまった」

「！」

クダモンはその言葉を聞くと、思わず表情を一変させる。

「死んじゃいないとは思うが、どうしちまったんだよ・・・！」

「ユーノ・・・」

「・・・――――――」

一護達はもうじき夜が明けようとする地下牢の中で、自分たちの事よりもただ一人の男、ユーノ・スクライアの身の上を心の底から心配するのであった。

◇

〈ユーノSide〉

一方、そんな一護に心配をされているユーノ・スクライアはと言うと、気を失ったところを謎のデジモンの手により救われ、ある場所へと運ばれていた。

デジタルワールドの中心にある首都セントラル・サーバーからおよそ2キロ先に離れた場所に位置する“流れ者の岬”と呼ばれる場所に運ばれていた。

そして、その岬にポツンと佇む一軒の道場・・・――――そここそがユーノを運んだデジモンが塒とするデジソウルの伝道の聖地『デジソウル道場』なのである。

暫くして、ユーノはその道場の中で徐に目を覚ます。

「う・・・・・ここは・・・――――」

瞳を開けた瞬間広がってくる見知らぬ光景と道場独特の雰囲気を醸し出す一室。

と、その時怪訝そうな顔を浮かべるユーノの耳に彼を救ったデジモンの声が聞こえてきた。

「ようこそ、デジソウル道場へ」

「？」

ユーノが声のする方へと目を向けると、目の前から現れたのは学ランを着た番長のような姿をし、口に草笛を加えた究極体デジモン・バンチョーレオモンであった。

「だ、誰です・・・一体？」

「私はバンチョーレオモン。デジソウルの心を伝える者」

「デジソウルを伝えるって・・・何の事ですかそれ？」

「意味はこの後の修行で理解するがいい。それよりも、お前にとって・・・デジソウルとはなんだ？」

ユーノは自分の質問を軽く一蹴された直後、逆にバンチョーレオモンから質問をされたことに大きく戸惑いを見せる。

「え・・・いやだからデジソウルってものをよく知らないんですけど・・・話聞いてました？！」

しかし、バンチョーレオモンはそれを無視して更に気を入れて再度尋ねる。

「今一度問う。デジソウルとは何ぞや！？」

「だから・・・僕はそれが知らないから質問をしたのに。て言うか僕はここに居る場合じゃ・・！」

ユーノはそう言いながら秘かに抜け出す機会を伺っていると、バンチョーレオモンはそんなユーノに詰め寄り真顔のままやはり同じことを繰り返し尋ねる。

「何度も言わせるな。デジソウルとは何か、お前は理解しているのかと聞いている。ユーノ・スクライア」

「！どうして僕の名を・・・！？」

ユーノは自分の名前を当たり前のように口にしたバンチョーレオモンの口ぶりに激しく動揺を表す。

「そんなものはどうでもいい。先に言っておく。このままではクダモンもお前の大事な仲間もみな奴らによって抹殺されるだろう」

「！」

その瞬間、ユーノの頭の中が真っ白と化す。

バンチョーレオモンは絶望に似た感情を覚えるユーノに真正面から向き合い、次のように語り出す。

「クダモン達を救う方法は唯一つ。ユーノ・スクライア。お前自身が持つデジソウルを発現させ、その懐のデジヴァイスにデジソウルを叩きこむしかない」

話を聞いた直後、ユーノは懐に仕舞い込んでいた自分の色に合った黄緑と深緑を基調とするデジヴァイスiCを取出し真剣な様子で見詰める。

「デジヴァイスに・・・デジソウルを・・・どうやってそれを！？」

「着いてくるがいい。さすればお前と仲間たちとの未来は開かれよ

う」

バンチョーレオモンはそう口にすると、徐に奥の方にある特別道場へと向かって歩きだし、そんな彼の後姿を見ながらユーノは一瞬考える。

「・・・何故僕の事を知っているのか・・・何故こんな場所に僕を連れて来たか・・・その真意は兎も角として、一刻も早くクダモンやみんなを助けるためにはバンチョーレオモンの言う修行とやらに付き合う以外道は無いという事か。ならば、行くしかない！」

ユーノは覚悟を決めると、デジヴァイスを元の場所にしまいバンチョーレオモンの後を追って奥へと目出した。

そして、奥にある特別道場に入ると、ユーノはバンチョーレオモンと向かい合い口を開く。

「さぁ。話して貰おう。あなたは何を知っている?何のために僕を」

「その前にひとつ教えておく。デジソウルを自在に使いこなせない限り、お前たちに未来はない！」

「な！」

いきなりの一言にまたしてもユーノの表情が凍りつくが、バンチョーレオモンはあっさりと次のような事を口にした。

「未来を、仲間の命を守りたいのならば、これから行う修行をクリアする必要がある。」

すると、バンチョーレオモンは徐に指を鳴らし、何かを施すと唐突に後ろに遭った無骨な木人三体が命を吹きかけられたかのように動き始め、ユーノの方へと近づいて来た。

「な、何だ・・・！」

「お前が修行をクリアする条件は、彼ら木人の完全なる破壊。それが出来れば新たなる世界は開かれるだろう。但し、完現術の使用は禁ずる」

「な！あなた・・・どうして完現術の事を・・・と。聞いたところで答えないんでしょうね多分。ただ、これだけは言わせてほしい。どうして僕にそこまでの事を？」

「さぁな。ただ、お前がこの試練を乗り越えなければ、何をしようとも結果は明白。決してあのベルフェモンには勝てはしない。」

「く」

「この修行が完成せぬ限り、お前をここから出すわけにはいかぬ。」

バンチョーレオモンはユーノにそう言うと、ユーノにも感じ取れるように道場全体に結界を施し、ユーノは思わず目を見開く。

「これは・・・結界！？」

「分かったのなら、さっさと始めろ。いや、既に修行は始まっている。クリアせぬ限り、出ることは出来ぬぞ。」

すると、木人の一体がユーノ目掛けて攻撃を加え始め、ユーノは木

人の攻撃を見切り回避すると、鍛え抜かれた剛腕による拳を木人に叩き込む。

「おおおおおおおおおお！！！」

木人はユーノの鉄拳を受けると、大きく後ろに吹き飛び床に倒れる。

それを一瞥し、それなりに感心した様子のバンチョーレオモン。

「なかなかのパンチだ。だが、拳ばかりが力ではないぞ。力とは、強き心と不屈の勇気に宿るもの！」

そう言った途端、先ほど倒れた木人は息を吹き返したように起き上がり、ユーノはそれを見て目を見開いた。

「な！」

そして、三体の木人が攻撃態勢を取ってユーノと向かい合うと、バンチョーレオモンは呟く。

「さぁ、始めろ！究極のデジソウルを手に入れるために！」

ユーノは否応なくデジソウルを会得するための修行に付き合う羽目になるのであった。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

ユーノがバンチョーレオモンの元でデジソウルの真髄を身に付ける

ための修業を始めてからおよそ5時間後。

ついに処刑の日を迎えると、クダモン以下一護達全員は地下牢から出され、処刑場となっているベルフェモン広場へと連れて行かれ、磔の状態となってその時を待った。

そして、処刑執行の時刻がやってくると執行人の悪魔デジモンたちが登場し、立会人のスカルサタモンとモニター画面のベルフェモンの前に静止する。

スカルサタモンは非常に悔しそうな顔で自分を見つめるクダモンや一護達を窺いながら不敵な笑みを浮かべる。

「死刑執行の前に言うことがあれば聞いておこう。先ず、クダモンから発言を許す」

「私はデジモンたちを、我が恩人ユーノ・スクライアを信じている。きっと私の志を継いでくれるだろう。」

「ふふ」

クダモンの言葉に相変わらず不敵な笑みを浮かべるスカルサタモン。

そのクダモンの後に続く形で一護、ユーノスは言葉を並べる。

「俺は一遍てめぇをぶん殴ってやりたかったぜ！」

「望みを捨ててはいないさ。まだ俺達にはユーノやなのは達が残っているのだからな」

「無駄な事を。よし。それでは処刑を始める」

と、スカルサタモンが言った直後、それを聞いていた最後の一人、テントモンが口を挟み時間稼ぎのための長話を始める。

「待ちなさいって！ワテにも一言話させてくれまへんか？ワテの生まれたのはファイル島の５００キロに位置するはじまりの街。光子郎はんと出逢ってから今日までそれは色々とありました――――――」

テントモンが長話で時間を大幅に稼いでいる頃、海上方面を飛行していたなのは達機動六課前線メンバー一同は嫌に静まり返った地上の様子に違和感を覚える。

「すっかり夜が明けてしまいましたね」

「もうすぐセントラル・サーバーだと思う。しかし、ここまで敵の影が無いのは不気味だ」

「あんまり強いんで、怖がってんじゃないの？」

浦太郎がそう言うと、全員もそう信じたくなってしまうが、実際は違っていた。

海上方面を飛行していたなのは達の姿をスカルサタモンの部下であるダゴモンは密かに監視を続けており、目標を補足すると徐に海の底より顔を覗かせる。

「目標補足。Ｄ作戦開始――――――」

ダゴモンはそう言うと、海の中から一本足を覗かせ、そこからスカルサタモンが用意した人が丁度入るぐらいの箱を取出し蓋を開ける。

するとその中にはあの黒のコアメダルを持つ謎の黒マントの外套を着た人物が収納されており、黒マントの男は外に出るや否や例のコアメダルを三枚取出し、周囲に効力が広くいきわたる様にエネルギーを放出する。

するとどうだろう。

飛行していたなのは達の飛行魔法・及び霊子による足場固定が突然制御不能と化してしまい、なのはの両足からは翼が消える。

「「「え！」」」

「な！」

「飛行魔法が・・・！」

「どうなってるの！？」

全員は突然の事態に対処することが出来ず、飛行魔法も足場固定も出来ぬまま足元に広がる広大なネットの海へと墜落していくのであった。

「「「「「「「「「「「うわあああああああああああ！！！」」」」」」」」」」」

全員が海の中へと墜落し、その中でなのはは息の出来ない状況で首に掛けられたユーノのペンダントを握りしめ、彼の名前を口にする。

「ゆ・・・ユーノ・・・君・・・／／／」

息の出来なくなったなのは達は海の底へと沈んでいき、それを待ち構えていたダゴモンに回収され一護達と同じくベルフェモン広場へと連行されることになってしまった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、処刑執行の朝を迎えた事も忘れてバンチョーレオモンの元でデジソウルの会得の為の修行に明け暮れるユーノはと言うと。

「おらあああああああああ！！！」

幾度倒しても復活する謎の木人三体を相手に、完現術の発動を禁じられた状態、拳だけの力で修行に明け暮れていたが、バンチョーレオモンは中央に鎮座しながらユーノに言葉を投げかける。

「“デジソウルとは、単なる腕力に非ず。心の叫びを意志の力で操るべし”！これが、究極のデジソウルへの近道である！」

「く・・・相も変わらずデジソウルの意味がまるで伝わって来そうにないけど・・・この状況じゃ長丁場になりそうだ・・・！」

そんな事を呟きながら、ユーノはフットワークを利かせて目の前の木人目掛けて拳を叩きこむ。

「おおおおおおおおおおお！！」

強烈なユーノの拳をその身に受けた木人は倒れるのだがそれでも無限に復活を続け、その都度ユーノに襲い掛かるという無限ループを繰り返す。

流石のユーノ自身もいい加減体力が削られ息を切らし始める。

「は、は、は」

「デジソウルを垂れ流すだけでは駄目だ！精錬し、凝縮して、一箇所に集中させるのだ！ユーノ・スクライア！」

「ぐ・・・ぐおおおおおおおおおお！！！」

ユーノはその言葉を聞き、イメージを膨らませながら拳に想いを乗せて目の前の木人に叩き込む。

徐々にユーノの拳を中心にデジソウルらしきものが宿り始めてはいたが、それでも木人の完全なる破壊とは言わず、木人は再び起き上がる。

「くそ・・・！」

「まだまだ！」

終わりの見えない途方もない修行に、ユーノは本当にデジソウルを身に付けることが出来るのであろうか。

◇

〈テントモンＳｉｄｅ〉

その頃、ユーノが必死でデジソウルの真髄を会得しようとしている中、ベルフェモン広場の方ではテントモンの未だに尽きることのない長話が続いていた。

「さらに思い出は遡り、思い返せば十年前の今日やったな。光子郎はんが・・・」

あまりに長すぎる一言に業を煮やしたベルフェモンはスカルサタモンに一喝する。

『スカルサタモン！一言がきりがないな！』

「ああ！全くよくしゃべるテントウムシだ！」

スカルサタモンもそう思いながらテントモンに近づいて行くと、用意したロープをテントモンの口元に持っていく。

「ワテは・・・！」

「黙れ！」

「ぶ！」

これ以上何もしゃべれないようテントモンの口を完全に塞ぐスカルサタモンだった。

そして、テントモンの口を黙らせてから漸く気を落ち着かせて処刑執行の合図を執行人に贈るスカルサタモン。

「位置につけ！」

執行人は徐に揃った脚の動きでクダモンと一護達の前に歩いてくると、定位置についてからスカルサタモンの声に合わせて攻撃の構えを取った。

「狙え！」

一護達はこの逃げ場のない絶体絶命の状況に険しい顔を浮かべてしまう。

「くそ・・・！！」

と、その時。

「スカルサタモン様！」

処刑の寸前にスカルサタモンの元に一体のデビモンが駆け寄って来た。

「何事だ？」

「は！たった今、ダゴモンから残りの人間どもの捕縛を完了したとの報告がありました！」

「何？そうかそうかようし・・・・・・一人残らず連れて来い！」

スカルサタモンはデビモンにそう伝えると、一護達の処刑を一先ず中断し、捕えられたなのは達の到着を待った。

そして、数分後護送車に乗ったユーノを除く機動六課前線メンバー全員がデバイス、斬魄刀を没収され両手を拘束された状態でベルフェモン広場へと連行されてきた。

「あなた・・・！」

「織姫！おまえらも！」

一護は自分と同じ目に遭っている妻と仲間の姿に胸が痛くなる。

「すまぬ一護・・・しくじった！」

全員が申し訳なさそうな表情を浮かべながら一か所に固められると、モニターで様子を窺っていたベルフェモンが唐突にこんな事を言い出した。

『ふふふこれは面白い見ものだ。スカルサタモン。ただ殺すというのも面白くない。順に甚振って徐々に弱らせてから殺すとはどうだ？』

「成程それは名案ですな。よし、先ずはそこの三人からだ！」

スカルサタモンもその案に乗り、デビモンにそう言うとデビモンが手に取ったのはなのは、一護、クダモンの三人であった。

フェイト達は思わず目を見開き声を荒げる。

「なのは！」

「なのはさんっ！」

すると、なのはは不安を顕著に顔に出すフェイト達の方へと振り返り、いつもの凛とした表情で答える。

「大丈夫だよ。きっと・・・大丈夫！」

そう自分で言うなのはだが、本当は今にも泣き出したいぐらいの恐怖に怯えている。

しかしそれを正直に表してはいけないという不屈のエースオブエースらしい感情に支配された彼女のそれを、解き放てるものなどそうざらにいる訳でない。

いるとすれば己が真に心を許す事が出来るたった一人の男、ユーノだけである。

そして、一護・なのは・クダモンの三人がスカルサタモンの前に並ぶと、スカルサタモンは不敵な笑みを浮かべながら後ろに待機していた三体のデジモンを呼びつける。

「ふふふ。マミーモン。ヴァンデモン。メフィスモン。」

「「「了解」」」

言われて前に出て来たのは、完全体デジモンの中でも屈指の強者、ミイラ男のマミーモンと吸血鬼姿のヴァンデモン、不気味な羊の様な容姿を醸し出すメフィスモン。

三人の表情が険しさを増していく。

◇

〈ユーノSide〉

そんなベルフェモン広場でのやり取りは修行に明け暮れていたユーノの元にも伝えられることになり、唐突に道場全体にあらーとのようなサイレンが鳴り響き、ユーノとバンチョーレオモンはそれを聞くと動きを止める。

「!?」

「何だ・・・」

ユーノがそう思っていると、道場に設置されていたモニター画面にベルフェモン広場の様子が映し出され、瞳に映って来たのは一護達に攻撃を仕掛けるヴァンデモン、マミーモン、メフィスモンの三体の姿だった。

『“ナイトレイド”!』

『でははははは!!!』

『喰らえ!』

「「「うあああああああ!!」」」

標的となった一護、なのは、クダモンの三人は動けないことを良いことにその攻撃を受け続け、満身創痍の状態化し、フェイト達はその光景を涙ながらに見ることしかできなかった。

「ふふふ。まだまだ堪えられそうだな。ところで、あの優男はどうした？お前たちならば場所ぐらい知っているだろう」

スカルサタモンが満身創痍の三人にそう尋ねると、険しい表情を浮かべながら一護となのはは強い口調で答える。

「誰が・・・教えるものかってんだ！」

「本当のこと言うと居場所なんて知らないけど・・・たとえ知っていてもあなた方にユーノ君は傷つけさせない！」

「そうか。ならばそいつが出てこやすいよう・・・徹底的に炒めつけてやる！」

「く・・・おい。お前ら、分かってるな？」

一護がそう言うと、聞いていたなのはとクダモンは頷きこう言う。

「ああ。ユーノはどんなときでも仲間を裏切るような男ではない。ユーノは必ず戻ってくる。私はユーノを信じる！」

「力は封じられていますが、ユーノ君が戻るまで、何とか踏みとどまりましょう！」

「世迷言を。『デスクラウド！』」

三人に言い分にあきれ返りながら、メフィスモンは必殺のデスクラウドを発動させ、態と加減した状態で目の前の三人に叩き込む。

「「「ぎゃあああああああ！」」」

その光景をモニターでじっと見ていたユーノは思わず声を上げる。

「クダモン！なのは！一護さん！！ぐ・・・バンチョーレオモン！今すぐ結界を解除してくれ！」

焦燥を顔に出しながらバンチョーレオモンに頼み込むユーノだが、帰ってきたのは否定の言葉。

「それは出来ん。」

「僕にクダモンを・・・大事な仲間を見捨てろって言うんですか！！」

「外に出たければ、さっさと修行を終わらせろ！」

「く・・・クダモン！なのは！！」

ユーノはモニター画面を覗き込みながら傷つく三人に声を上げる。

すると、そのモニター画面の向こうの三人は弱々しい動きではあるが立ち上がろうとし、一護、クダモンがこう口にした。

「まだまだ・・・！」

「きっとユーノは、更に強くなって戻ってくる・・・！」

「！」

ユーノはそれを耳にした瞬間、脳に衝撃が走る。

三人は力を振り絞り立ち上がると、ユーノを信頼し強い口調で宣言する。

「俺達はあいつを・・・！」

「私の先生で、一番大切な・・・！」

「見ず知らずの私を救ってくれた・・・！」

三人は気持ちを一つに声をそろえる。

「「「ユーノ（君）を信じてる！！」」」

「みんな・・・・・」

ユーノは三人の言葉を真摯に聞き入れると、呆然とその場に立ち尽くす。

「ほざくな！雑魚ども！」

一方で目の前でその言葉を聞いていたマミーモン達は容赦なく三人に攻撃を続けていく。

「「「ぐあああああああああああ！！！」」」

「「「なのは（さん）（ちゃん）！！」」」

「「「一護（さん（あなた）！」」」

「「「クダモン！！」」」

目の前でそのあまりに残酷で見るに堪えられない光景に声を荒げる捕まった残りのメンバー。

ユーノも思わず胸が苦しくなり、モニター画面だとわかっていながらも声に出す。

「みんな！！」

『ははは！！ユーノ・スクライアだったか！？聞こえているか！お前の大事なお仲間はこの通りだ！いつまで隠れてないで出てきたらどうだ！？じゃないとこいつを殺すぞ。』

そう言うと、ヴァンデモンはその手にクダモンを握りしめる。

「あ！」

「ぐ・・・」

「クダモン！！」

クダモンの絶体絶命の危機を目の当たりにした時・・・ユーノの身体の奥底から何かが湧き出し始め、ユーノは秘められた力を一気に解放するのであった。

「！」

バンチョーレオモンはユーノの全身から漲る翡翠に輝くデジソウルに目を凝らす。

「でやあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

ユーノの身体から溢れるデジソウルは叫び声を上げるや否や、その強さを爆発的に高めていき、道場から飛び出すほどの勢いで氾濫し、ユーノは己が発するデジソウルに目を奪われた。

「これは・・・・・・！！」

するとその時、バンチョーレオモンからの指摘が飛び交う。

「そのままでは駄目だ。感情に任せるのではなく、意志の力でデジソウルを制するのだ！」

「意志の力で・・・・！？」

「お前の望み・・・嫌、お前の場合は“使命”と言った方がいいのか、ユーノ・スクライア。お前の使命は何だ？」

「！」

「お前の使命は何だ！？」

「僕の使命・・・・・・僕は・・・・僕は・・・・――――」

バンチョーレオモンに諭されたユーノは自分の涸れた欲望に代わる己に化された使命を思い返し、それは既に分かり切っていたことだが今一度確認すると強い決意を瞳に宿し断言する。

「クダモンを・・・・・・みんなを助けるんだ！！！！！！！！！」

するとどうだろうか。

今迄全身から溢れ出ていた膨大なデジソウルがユーノの強い意志に反応すると、一期に集約されユーノの身体に吸収され、ユーノは翡翠の輝くデジソウルを制御された状態で身に纏うことに成功し、バンチョーレオモンも首を縦に振る。

「うん。ようやく理解したようだな」

「バンチョーレオモン・・・これは？」

自分でも驚いているユーノがそう尋ねると、バンチョーレオモンはデジソウルと言うものを次のように説明した。

「“デジソウル”とは“人の想いの力”。そしてデジモンは、人の想いに応える」

「人の想い？」

「そうだ。これまでお前が戦って来たアンゴルモアやそれに絡んだグリード、ヤミーとの戦いにおいてその諸悪の根源は人間の欲望。人間の欲望は七つに分類されると。しかし、誰かを守りたいという純粋なる想いもまた・・・欲望の一つ。ユーノ・スクライア・・・欲望の渇いてる今のお前にとって、それは使命と言う言葉で置き換えられる！」

「欲望が・・・使命・・・」

「枯れたお前の欲望だが、逆に言えばお前は欲望の塊であるアンゴルモア、コアメダル、そしてこの世に存在するありとあらゆる欲望を暴走させる事無く、自分の意志で制御し受け止めることが出来る！」

「！」

「現に、お前は今の今までコアメダルの力を・・・魂を引き出し使役した戦い方をしてきた。そして、自分の意志によって欲望を制御できた時、究極のデジソウルは誕生するのだ！」

「だったら・・・僕は遠慮なくその想いを、使命を燃やすまでだ！！！おおおおおおおおおおお！！！！！！」

ユーノはそう言うと、その確固たる想いを力に変え、今まで自分が対峙していた木人全てを究極のデジソウルの力を以て完全に破壊することに成功した。

「よしっ！」

「では、そのお前の想いのデジソウルをクダモンに叩きこんで来い！」

「はい！ありがとう、バンチョーレオモン！」

ユーノはバンチョーレオモンからも認められ、究極のデジソウルを体現すると、純粋なる思いを胸に抱き、仲間の元を目指して走り出す。

走り去っていくユーノの後姿を見ながら、バンチョーレオモンはほくそ笑みこう呟く。

「武運を祈るぞ。次元世界最強の男にして、絆を紡ぐ完現術者・・・『絆の完現術士ユーノ・スクライア』！究極の力、存分に叩き込むがいい」

◇

〈クダモンＳｉｄｅ〉

ユーノはデジソウル道場を出てから暫くして、クダモンは絶体絶命の危機に瀕していた。

「ぐあああああああああああ！」

「「「クダモン！」」」

「がっは・・・！」

クダモンの傷つく姿を見ていたベルフェモンは悪意に満ちた笑みを浮かべてスカルサタモンに止めを促す。

『ふふふははは。ようし、そろそろ止めだ』

「了解しました。では最後は私めが――――――」

「く・・・くそ・・・ここまでかよ・・・――――」

「ユーノ君・・・／／／」

一護達は到着の兆しが見えないユーノの事を考えながら、目の前に倒れるクダモンが今まさにスカルサタモンによって止めを刺されようとしている光景に目を向ける。

スカルサタモンは自分の杖を振り上げ、クダモンに向けると強い口調を放つ。

「年貢の納め時だな。死ね、クダモン！！！」

だが、その直後だった。

突然スカルサタモン達の元に凄まじい爆音が聞こえてきた。

「！」

「なんだ・・・今の爆発・・・」

全員がその爆音に耳を疑っていると、スカルサタモンの元に部下のデジモンがかなり慌てた様子で走ってきた。

「スカルサタモン様！！大変です！！」

「何だ騒々しい！今からクダモンに止めを刺そうと・・・！」

「は！何者かが、ものすごい勢いで我々の防衛網を突破し、急速に近づいています！」

「何！？そんなバカな・・・！」

スカルサタモン達は思わず表情を一変させ、一護達もまた驚愕の様子となり顔を見合わせた。

「誰だろう・・・！」

「分からない！」

「早く、手を打たないと・・・！」

『どういうことだ、スカルサタモン？』

ベルフェモンは不機嫌そうな様子でスカルサタモンに尋ねるが、スカルサタモンはこの不可解な状況を信じられずにいた。

「あり得ない・・・！闇貴族の館と我々の防衛網を突破出来る者など・・・！！」

と、その時だった。

「ほおおおおおおおおお！！！」

「！」

『何だ！』

唐突にベルフェモン広場の方に向かって男の声が聞こえてきた。

「この声は・・・――――」

「来ます！！」

スカルサタモン達は身構えて近づいてくる謎の敵の正体を見定めようとすると、その瞬間閉じられていた門がいとも簡単に粉砕され、全身に身に纏った翡翠に輝くデジソウルを無尽蔵に放出するスレイヤーモードのユーノが飛び込んできた。

「でらあああああああああ！！！」

「！」

「ぬらあああああああああああ！！」

ユーノはデジソウルを纏った強烈な拳でスカルサタモンの顔面にそれを叩き込む。

「ぐおおおおおお！」

「「「スカルサタモン様！」」」

ユーノがその場に現れると、ずっと彼の事を信じていたなのは達全員が嬉々とした表情を浮かべ、ユーノ本人もスカルサタモンに攻撃を加えるとすぐに仲間の元へと駆け寄った。

「クダモン！みんな！！」

「ゆ、ユーノ・・・」

「はっ。やっぱしいいタイミングだぜ・・・」

「みんな、遅くなってごめん！」

ユーノはそう言いながら全員の縄を解き、最愛の女性であるなのはの体をゆっくりと起こすと、なのはは弱々しくもあるが信頼した眼差しでユーノを見つめる。

「うんうん。私達は信じてたもん。ユーノ君が絶対に逃げたりしないってこと・・・私達を裏切らないって事・・・」

「なのは・・・ありがとう。そして、ごめんね。君をこんなになるまで待たせて」

「ユーノ君・・・来てくれてありがとう」

なのはは一度ユーノにその身を預け、ユーノ自身は愛おしそうになのはを抱きしめる。

そんな光景に全員が微笑ましい表情を浮かべる中、ユーノスが話しかける。

「ユーノ、クダモンも」

「お！クダモン！！」

ユーノはなのはを解放すると、後ろの方へと振り返り満身創痍ではあるが何とか持ち堪えていたクダモンを掌に乗せる。

「ユーノ。どうやら私の思った通り、お前は戻って来たようだな」

「当たり前だよ。必ず君を助けるって約束したじゃないか。兎に角、生きててよかった」

すると、そんな二人の会話に口を挟んできたのは恋次だった。

「ユーノ。再会を懐かしむのは後回しにしようぜ。」

恋次の言葉を聞き目の前に目を向けると、スカルサタモンが顔を押さえながらマミーモン達と一緒に武器を構えていた。

「お・・・のれ・・・！よくもよくも！！」

ユーノはそれを見た後、クダモンに目を向けデジヴァイスを取出し拳に己のデジソウルを宿らせる。

「クダモン！今までの惨めな想いも何もかも、まとめて返してやろう！」

「！お前・・・それは・・・デジソウル！？なぜそれを・・・！」

「変な番長に叩きあげられてね。これでクダモンも本来の姿に戻って戦える。行くよ、クダモン、進化だ！」

「・・・ようし。やってくれ！」

クダモンが了承すると、ユーノはデジヴァイスを手に取り画面上に究極進化の表示がされると、己のデジソウルを叩きこむ。

〈ＵＬＴＩＭＡＴＥ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ〉

「デジソウルチャージ！オーバードライブ！！」

デジソウルが渦を巻いてクダモンに流れ込むと、クダモンの手に巻きつけられていた進化封じの鎖が破壊され、クダモンは究極進化を行う。

「クダモン進化」

クダモンの体がデータ容量を大きくし、本来の姿の形に近づいて行きくと、クダモンは力を取り戻しデジタルワールドを守護するロイヤルナイツの一体、スレイプモンへと究極進化を遂げる。

「スレイプモン！」

では簡単に紹介をしておこう。

“スレイプモン”

“レッドデジゾイドの鎧を全身に纏った、究極体デジモン”

“必殺技は、超低温のブリザードを発生させる『オーディンズブレス』だ。

「な！」

スカルサタモンを始め、機動六課前線メンバー一同も目を見張る大きさを誇る巨大なスレイプモンの姿に驚愕する。

「で、デカ！」

「これが・・・」

「バカな・・・！クダモンが・・・スレイプモンに・・・進化しただと！？」

「あれが・・・クダモンの本当の姿・・・！」

「格好いい！」

スバルは思わず頬を染めてスレイプモンの姿に見とれ、一方でユーノスや一護、なのははスレイプモンの方に乗った凛々しい表情のユーノを見上げながらこう口にする。

「ユーノが・・・クダモンを進化させたのか」

「ああ。紛れもなく、俺の愛弟子がな」

「凄い・・・やっぱり凄すぎるよユーノ君。流石は私の先生！！」

ユーノはそんななのは達の言葉を耳に入れながら、究極体へと進化したスレイプモンに掴まりながら、狼狽するスカルサタモン達に口にする。

「さぁこっからが大どんでん返しだ！僕たちの絆の力、目に物見せてやる！！」

総攻撃とデジソウルと復活の聖騎士（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はデジヴァイスについて見ていこう♪」

「第一期から登場するこのアイテムは、人間の心の特質の力をデジモンに伝え、進化させることができるアイテムだ。」

「また、デジタルワールドへの道を作り導いたり、闇の力を祓う聖なる力を持っている。無印からセイバーズまでのそれを見ていくと、用途も時代に合わせて違っており、今回の僕が使ったデジソウルは四期『デジモンセイバーズ』で出て来たものだ♪」

ス「ありがとうユーノ。おかけで私も元の姿に戻ることが出来た。」

ユ「いやいや、お礼を言われるまでもないって♪それにしても・・・進化するとホントでかいよな君・・・――」

ユーノは改めてビルほどの大きさをしたスレイプモンに目を見張る。

一「こんだけデカイと、歩き回るのも大変だろうな」

ル「歩くだけで地震が起きるのではないか？」

ス「お前たち・・・――私を怪獣を見るかのような目で見るのは止めてくれ」

困惑するスレイプモンであった。

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノがクダモンをまるで自分のパートナーデジモンのような接し方をするのを見て、一護達は密かに話していた。

一「なぁ。もしも俺達にもデジモンがいたらさ、どんなのがいい？」

織「う～～んとそうだな・・・私はやっぱり可愛いのがいいかな」

テン「それでしたら、プロットモンなどがいいと思いますね。子犬の姿をした可愛らしいデジモンです」

ヴィ「じゃあさ、ウサギはいないのか？」

テン「それに近いのでしたら、ロップモンがいいのではないでしょうか？」

浦「じゃあ！僕は僕は！」

恋「カメモンあたりが妥当じゃねぇのか？」

浦「誰がカメモンだ！！！」

テン「あなたでしたら、ガーベモンがいいのではないでしょうか？」

フェ「それってどんななの？」

すると、テントモンはにこやかな顔で言った。

テン「はい！ゴミバケツに入ったデジモン・・・ぐおおお！！」

その途端、怒りの浦太郎に踏みつけられフィッシャーマンの先端を突き付けられる。

浦「ディバインバスターを至近距離から食らわせたろうか・・・ああ！！」

テン「す、すみませんでした！！」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝

な「自由同盟のデジモンたち・・・それにクロノ君も！」

べ「我は魔王・・・ベルフェモン・・・！」

ユ「デジソウル・・・バースト！！」

ス「スレイプモンバーストモード！」

第１５７話　最強騎士団と魔王とバーストモード

登場デジモン

パタモン

声：松本美和
成長期　哺乳類型　データ種
古代種の遺伝子を継ぎ、デジメンタルによる進化が可能な哺乳類型デジモン。特徴的な大きな耳は羽の役割を果たしており飛行が可能だが、歩いた方が早い程度の速度（時速１ｋｍ）しか出ない。進化すると暗黒系デジモンに対して有効な聖なる力を持っているため、１段階上の暗黒系デジモンとも互角以上に渡り合える程の強さを持つ。他のデジモンに比べると非常に素直で、教えられたことはちゃんと守る健気な性格をしている。必殺技は吸い込んだ空気を圧縮して吐き出す『エアショット』。

テリアモン

声：多田葵
成長期　獣型　ワクチン種
先端が手のように器用に動く大きな耳をプロペラのように動かしたり、グライダーのようにして飛行する獣型デジモン。炎の力を持つ。口癖は「無問題（モーマンタイ）」でその言動は至ってマイペース。緩い性格のように思われがちだが、デジモンとしてそれなりに闘争本能を持ち合わせているようで、戦闘にはあくまで真剣な姿勢で臨んでいる。それでもやはり、如何に追い詰められても激しく動揺するなどといった態度は一切見せていない。必殺技は『ブレイジングファイア』。

ジジモン

声：木村雅史
究極体　エンシェント型　ワクチン種

原始人のような風貌のエンシェント型デジモン。創世記から生きていると言われており非常に博識。地下組織のリーダー的存在。必殺技は『ハングオンデス』。

ダゴモン

声：八名信夫
完全体　ウイルス種　水棲獣人型
船の方向を狂わせるコンピュータウィルスから誕生した海底の破戒僧の異名を持つ邪神型デジモン。モデルはクトゥルフ神話の父なるダゴン。手足のように見えるのは無数の触手を束ねたもので解き放った真の姿を見たものは生きて帰れないと言われている。必殺技は『フォービトゥントライデント』。

マミーモン

声：森川智之
完全体　アンデッド型　ウイルス種
エジプトのミイラの様な全身包帯巻きのアンデッド型デジモン。志半ばで消滅したデジモンの霊（残留データ）を召喚し操るところから別名「死霊使い（ネクロマンサー）」と呼ばれている。無口で表情が見えないところから何を考えているか分かりづらいが、攻撃されると武器を振り回し徹底的に敵を叩きのめし、追い詰められると愛用の銃「オベリスク」を乱射するす危険な存在である。得意技は両腕の包帯が蛇のように伸びて敵を締め付ける『スネークバンデージ』。必殺技は死霊を呼び出し敵を狂死させる『ネクロフォビア』。

ヴァンデモン

声：大友龍三郎

完全体　アンデッド型　ウイルス種
吸血鬼をモデルにしたアンデッド型デジモン。大きな襟を立てたマントや礼装などデザインは、ドラキュラをイメージしている。　データを吸収・破壊し悪質なウィルスとして復活させる能力を持つ。アンデッドの王と呼ばれるほどの力を持つが昼間は力が弱まると言われる。必殺技は、コウモリの群れを発射する『ナイトレイド』。

メフィスモン

声：小杉十郎太
完全体　堕天使型　ウイルス種
嘗て、光子郎ら選ばれし子供とそのデジモンたちによって倒されたアポカリモンのデータの残骸から誕生した山羊のような魔人のデジモン。アポカリモンも最終目的であったデジタルワールドのあらゆる生命の消滅を目論んでいるとされ、暗黒系黒魔術と狡猾な策略を駆使する。必殺技は『デスクラウド』。

最強騎士団と魔王とバーストモード（前書き）

意欲と愛は偉大な行為にみちびく両翼である。

Ｂｙヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（タウリスのイフィゲニア）

最強騎士団と魔王とバーストモード

地下組織へと潜入したユーノ達だったが、スカルサタモン達の襲撃を受け、ユーノ達はバラバラとなってしまった。

ユーノは道中謎の黒いコアメダルを持つものと対峙するも、能力を打ち消す攻撃に手も足も出ず絶体絶命のピンチだった。

だがそこでユーノは命からがら救出され、バンチョーレオモンと出逢った。

そこで、デジソウルの神髄に触れたユーノはデジヴァイスに眠っていた新たな力を呼び覚まし、クダモンを本来の姿である究極体・スレイプモンへと進化させるのであった。

〈ユーノＳｉｄｅ〉

「さぁこっからが大どんでん返しだ！僕たちの絆の力、目に物見せてやる！！」

スレイプモンの左肩に乗りながら声高にそう口にするユーノと、そんな彼とスレイプモンを悔しそうな表情で仰ぎ見るスカルサタモン達。

「くうう！！何をしている早くやれ！攻撃しろ！！」

スカルサタモンがそう言うと、ヴァンデモン・マミーモン・メフィスモンの三体は一斉に必殺技を発動した。

「『ナイトレイド』！」

「『スネークバンテージ』！」

「『デスクラウド』！」

三人の必殺技が直撃し、辺り一面に爆炎が発生するが、爆炎が晴れた先に見えてきたのは聖盾『ニフルヘイム』によって防御したスレイプモンの姿であった。

「「「何?!」」」

「その程度の攻撃など、我が『ニフルヘイム』の前では無意味。受けてみるがいい。ロイヤルナイツの力を」

スレイプモンはそう言うと、左手に持った聖弩『ムスペルヘイム』を三体に構えると、そこから放たれる無数の矢で攻撃する。

“タクティクスメア”!」

それは宛ら滅却師・石田雨竜の使うリ一・レーゲンと酷似していたが威力がまるで桁違いであった。

「「「ぐあああああああああ!!!!」」」

三体はその攻撃を受けると、絶叫を上げながらスレイプモンによって消去され、デジコードを放出しデジタマの姿へと戻ってしまった。

間近でスレイプモンの強さを目の当たりにしていた六課前線メンバーは思わず口を開け、呆然と立ち尽くしていた。

「すげえ!」

「究極体・・・もといロイヤルナイツの力がここまでとは・・・!」

「そしてそれを操るユーノのデジソウル・・・！」

一護達はそう言いながらスレイプモンに掴まる実に凛々しい姿となって舞い戻ってきた我らがユーノ・スクライアの姿を目視し、またそんなユーノを離れた場所から見守っていたデジソウルの伝道者、バンチョーレオモン。

「よくもあの短期間で究極のデジソウルを身に付けた。その純粋なる意志の力、忘れるな」

究極のデジソウルを身に付けたユーノにすっかりご満悦の様子のバンチョーレオモン。

すると、後ろの方からバンチョーレオモンの元へと近づいてくる足音を耳にし、その人物が誰であるかを理解した上でこう語る。

「これでよいのだな？」

「ええ。本当に、ありがとうございました」

バンチョーレオモンにお礼を言って徐に近づいてきたのは、以前ユーノ達にドラゴンカンドロイドを手渡し、これまで幾度とユーノ達の危機を陰ながら救って来た謎のオッドアイの少年だった。

少年はバンチョーレオモンの隣に立ち、笑顔を向けるとバンチョーレオモンもそれにつられて鼻で笑い返す。

「ふん。礼には及ばん。切っ掛けは何であれ、全てはあいつの・・・ユーノ・スクライアの力だ」

「そう。これこそがあの人の強みにして最強の力。純粋なる守護の心からくる力は一護さん以上に強いものを持っている。そして、絆を紡げば紡ぐだけ、どこまでも進化し続ける！」

少年は確信したようにユーノの力を高く評価すると、バンチョーレオモンと一緒に戦いの行く末を見物するのであった。

そして、そんな二人から御墨付けを貰うユーノの方はどうかと言えば、スレイプモンの力に少々驚きながらもスレイプモンと自分の絆を確かめ合っていた。

「スレイプモン。」

「ユーノ。ありがとう」

「え」

いきなりのスレイプモンの言葉に思わず呆気にとられた顔を浮かべるユーノと、官舎に満ち満ちた表情で次のように返すスレイプモン。

「あの時、見ず知らずの私を助けてくれただけでなく、私に本来の力を取り戻してくれた。そして、全てのデジモンと仲間の命を救うというお前の強い意志にそのデジソウルは答えた。お前とここに居る仲間たちとなら、必ずやベルフェモンを倒し、デジタルワールドと次元世界を救うことが出来るだろう」

「スレイプモン・・・」

スレイプモンの言葉に心打たれるユーノと、そんな二人のやり取りを仰ぎ見ながら柔かい笑みを浮かべる前線メンバー。

と、その直後スレイプモンに向かって頭上からあのデジモンの声が聞こえてきた。

「お前の言う通りだ。スレイプモン」

「！」

聞き覚えのある声に耳を疑ったスレイプモンだったが、直後目に映ってきたそのデジモン・・・同じロイヤルナイツの一員にしてデジモン自由同盟のリーダー、クレニアムモンがガルダモンの脚に掴まりながらスカルサタモン達の方へと降りて来たのだ。

「はあああああああああ！！」

魔槍クラウ・ソラスを手に取り、スカルサタモン達へと攻撃を加えようとするクレニアムモン。

スカルサタモン達は咄嗟に飛び上がってその場から退避すると、足早にベルフェモン広場から飛んで行ってしまった。

「クレニアムモン！」

スレイプモンを始めユーノ達もクレニアムモンの登場には思わず目を疑ったが、クレニアムモンその人は親友の再会を噛みしめながら徐にこう告げる。

「どうやら力を取り戻したらしいな。その人間のお陰で。スレイプモン、我らロイヤルナイツの使命はこのデジタルワールドの平和を守る事。だがそれ以前に、生きとし生ける全ての命を守る事もまた

我らに課せられた使命。何としてもベルフェモンを倒し、平和を取り戻すのだ！」

「ああ！」

すると、その時一護が飛んで逃げていくスカルサタモン達の向こう側から飛んでくる見覚えのある人影を発見し指を差した。

「おい、見ろ！あれを・・・！」

「あれって・・・まさか・・・！？」

なのは達も驚きを隠し切れないでいた。

何とこの場に飛んできたのは機動六課の方で留守を任されていた筈の鬼太郎達と、怪我が治ったばかりのクロノ・シャマル・ザフィーラ、そしてデジモン自由同盟の勇姿たちであった。

クロノはスカルサタモン達を発見すると、デュランダルを取出し凍結魔法を発動。

「凍てつけ！」

〈Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ〉

エターナルコフィンが発動すると、スカルサタモン以外のデビモン達は全員氷漬けとなり、文字通りアイスデビモンと化して氷解するのであった。

金太郎たちはクロノの攻撃に続いて地上の方で待機していた他の悪

魔型デジモン目掛けて各々の技を仕掛ける。

「ダイナミックハリケーン！！」

「行くぜ烈火！！」

「“重柳（じゅうかせ）”！」

四人の攻撃が悪魔型デジモンに深刻なダメージを与えると、その機を逃さまいと自由同盟のデジモンたちが援護に加わり、一気に状況が好転し始める。

「自由同盟のデジモンたち・・・それにクロノ君も！」

嬉々とした声を上げるなのは達。

クロノ達は前線メンバーの元へと集まり、武器片手に笑みを浮かべる。

「おう！待たせたてめぇら！」

「行きますぞみなさん！」

「へへ。役者がそろったようだ。俺達もやるぜ！」

「「「「はい（おう）！」」」」

全員は速攻で織姫の治癒を受けて完全回復を果たすと、各自相棒を手に取りデジモンたちと協力をしながらベルフェモンが差し向けた有象無象のネオデビモンや悪魔型デジモンと激しい戦いを繰り広げ

るのであった。

「初の舞・月白！」

「バリアブルシュート！」

「『エンド・ワルツ』！」

ルキア・ティアナ・クレニアムモンの技が同時に仕掛けられると、ネオデビモンの大軍は一気に消去されていき、数を三分の一へと減らす。

「「風切月牙！！」」

「エクストリーム・・・バスター！」

「『オーディンズブレス』！」

その後に続くように、残り少なくなった悪魔型デジモンたちをユーノ・一護の月牙天衝とエクストリームカノンを使うなのはの砲撃、そして聖盾ニフルヘイムから発生する猛烈なブリザードで凍らせるスレイプモンの攻撃。

その後も機動六課と自由同盟のデジモンたちによる怒涛の連係攻撃を受けたベルフェモンの差し向けた悪魔型デジモンは僅か数分でほぼ全てが倒されてしまい、全員は勝利を確信した笑みを浮かべる。

「へへ。どんなもんだって・・・ぬお！」

しかし、気を抜いていた直後、突然空からの襲撃を受ける。

「何だ・・・！」

全員が空を見上げると、彼方より見えたのはスカルサタモンを中心とする空を覆うばかりに結集したベルフェモンの大軍勢だった。

「あれは・・・スカルサタモン・・・・・・・！」

「何て数の軍勢だ・・・！」

「しかも中には究極体も混ざっている・・・難儀な事だ」

全員が思わず険しい顔を浮かべのを見て、スカルサタモンは不敵な笑みを浮かべる。

「攻撃開始！」

スカルサタモンが合図を出すと、一斉に悪魔デジモンはユーノ達に攻撃を始める。

「来るぞ！」

全員は攻撃が当たる直前で回避すると、距離を取りながら悪魔型デジモンやスカルサタモン達と熾烈を極めた争いを始めるのであった。

その戦闘の最中、自由同盟のデジモンの何体かは返り討ちを受けてデジタマに戻ってしまい、その無念の思いを抱いたロイヤルナイツスレイプモンを中心にユーノ達が反撃を行う。

そんな中、クロノはＳＵ２とデュランダルを交互に操り以前自らと

仲間たちを圧倒したスカルサタモンにもう一度挑んでいた。

「ははははは！！！！」

スカルサタモンはクロノの攻撃を警戒に受け流していき、翻弄されるクロノは杖で振り払って距離を置くと再び懐に突っ込んでいく。

「舐めるな！」

クロノの杖とスカルサタモンの杖が火花を散らしてぶつかり合っていると、クロノはスカルサタモンに気づかれないように合図を送る。

すると、合図を受けた恋次がスカルサタモンの頭上より蛇尾丸を伸ばして奇襲を仕掛ける。

「つらあああああああ！！」

攻撃が通った瞬間、凄まじい轟音と共に土煙が舞い上がる。

一方、地上の方ではスカルバルキモンとの決着をつけようとザフィーラが奮闘していた。

「ぜおやあああああああああ！！」

咆哮を上げたながら勢いよく突進するザフィーラ、そしてスカルバルキモン。

お互いは鋭いにらみを利かせながら牽制をし合う。

「この間の仮はきっちりと・・・返させてもらう！」

ザフィーラはそう口にして足元にベルカの魔法陣を浮かべると、スカルバルキモン目掛けて鋼の軛を叩きこむ。

「鋼の軛！でえあああああああああああ！！！」

鋼の軛がスカルバルキモンの足元より出現し、それに絡め取られたスカルバルキモンは体を押しつぶされていき、やがて圧潰しデジタマとなった。

しかし、ザフィーラが勝利を収めているのとは裏腹にスレイプモンとクレニアムモンは渋い顔を浮かべながら頭上に佇むベルフェモンの力を受けてパワーアップした究極体デジモン、『ゴクモン』に手を焼いていた。

「ははは！！この数を相手にまだ我々に歯向かうというのか？スレイプモン！クレニアムモン！ははははは！！！」

ゴクモンは機械と融合を果たした自らの手を顔に乗せながら大笑いを浮かべ、スレイプモンとクレニアムモンは多少傷ついた体で膝をつきゴクモンを見上げる。

「く・・・」

「おのれ・・・ベルフェモンの手先が・・・」

だが、そんな三人の耳に思わぬところから声が聞こえてきた。

「犯罪者風情が、つけあがるでないぞ」

その声を聞き、スレイプモンとクレニアムモンは耳を疑ったが、直後天彼方よりゴクモンへと降り注がれた光弾を目の当たりにすると状況は一変する。

「ぐあああああ！」

ゴクモンはその光弾に直撃すると、呆気なくデータとなって消滅しデジタマへと還元され、戦いに集中していたユーノ達も一旦その光景に目を向ける。

「何？」

「どうした！？」

すると、ゴクモンがデジタマとなった途端スレイプモンの元に現れる光から聞こえる老練された物言いをするデジモンの声。

「情けないぞ、スレイプモン。クレニアムモン。お前たちがこの程度の事で翻弄されるとはな」

「お前は・・・」

スレイプモンが光の向こうに目を向けると、クロノと恋次と対峙していたスカルサタモンは信じられないと言わんばかりの表情を浮かべその光の中を凝視する。

「バカな・・・貴様は・・・！」

光が晴れた先に現れたそのデジモン・・・――ベルフェモンによって倒されたとばかり思っていたロイヤルナイツの一体、デューク

モンであったのだから。

「デュークモン！」

スカルサタモンがそう言った直後、今度はまた違った声が全員の耳に入ってきた。

「デュークモンだけではない」

すると、デュークモンの後に続く形で七つの光が降ってくる。

「あの光は・・・」

ユーノ達が降り注がれた光の先を覗き込むと、現れたのは残りのロイヤルナイツに所属するデジタルワールドの守護神だった。

スレイプモンとクレニアムモンはその光景に目を疑いながらも、生きて戻って来た同志たちの名を順に口にしていく。

「マグナモン！デュナスモン！ロードナイトモン！」

「アルフォースブイドラモン！ドゥフトモン！エグザモン！そして・・・――――オメガモン！」

唖然とするスレイプモンや前線メンバー、そしてスカルサタモン達。

では簡単に彼らロイヤルナイツの紹介をもう一度確認してみよう。

“ロイヤルナイツ”

デジタルワールドにおけるネットワークセキュリティの最高位であり、守護神と呼ばれるデジモンたちだ。各々が自ら考える「正義」の為に戦うぞ。

紹介が済んだところで、スバルが興奮した様子で１０体の聖騎士デジモンたちに目を奪われ声を上げる。

「凄い！ロイヤルナイツがこんなに！！」

「バカな・・・貴様たちはベルフェモン様に斃された筈じゃ・・・！」

スカルサタモンは信じられない様子でベルフェモンによって倒されたと思い込んでいた健在のロイヤルナイツの姿を目の辺りにし、それを見たデュークモンがこう答える。

「甘く見るでないぞ、スカルサタモン。確かに寸でのところまで追い詰められた我々だが、その直前一人の人間によって命からがら救われたのだ。」

「え！僕ら以外の人間が！？」

その一言に驚き返るユーノ達。

デュークモンはため息がてらこんな風に呟く。

「不名誉な事だ。だが、恥を承知で今は共に戦うべきだというイグドラシルの判断となれば話は別。我々の力を結集させ、ベルフェモンをこのデジタルワールドから排除する！」

「デュークモン・・・お前」

「ふん。どうやらイグドラシルは我々を見捨てなかったようだな」

スレイプモンとクレニアムモンはその言葉を聞くと、徐に立ち上がり武器を手に取りスカルサタモン達の方へと向き直し、ユーノ達もまた心を一つに結集させる。

「よし・・・――そうと決まれば、みんな行くよ！！」

「「「「「「「「「「はい（おお）（うん）（ああ）（了解）！」」」」」」」」」」

全員は今、ロイヤルナイツと共同戦線を張ってこの未曾有の悪魔デジモンの大軍を前にして、果敢に立ち向かっていくのであった。

「『ロイヤルセーバー』！」

デュークモンは右手の武器聖槍グラムを天に掲げるように振りかざすと、エネルギーを充填してそれを地面に流し込んでいき、スカルバルキモン達地上を這い回る魔獣デジモンを一掃し、デジタマへと戻していく。

デュークモンが動き出すと、他のロイヤルナイツも各々の得意とするやり方でせん滅作戦を開始し、触発された機動六課前線メンバーも協力し事態に対処する。

「ライオットブレイド！はあああああああ！！」

「ブレイズキャノン！フルバースト！」

クロノとフェイトによる攻撃でスカルサタモンの引き連れた悪魔型デジモンが数を減らすと、ここで一気に畳み掛けるロイヤルナイツのデュナスモン。

「『ブレス・オブ・ワイバーン』！」

デュナスモンは全身に漲るエネルギーを巨大な竜の姿へと変貌させ、その竜による一撃で悪魔型デジモンたちを飲み込みデジタマへと還元させる。

フェイト達はロイヤルナイツの底知れぬ驚異的な戦闘力に冷や汗をかいてしまう。

一方でそんなロイヤルナイツの戦闘力に負けず劣らずの規格外男、ユーノ・スクライアの方はと言うと戦いを通してものにした完現術コンボの一つ、アンキル・サムライハートを発動する。

「不殺の侍魂！」

〈Ｕｎｋｉｌｌ　ｓａｍｕｒａｉ　ｈａｒｔ〉

逆刃刀に宿る二人の侍の魂を引き出し、姿を変貌させたユーノ。

「ほおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

全身から湧き出る凄まじい霊圧に驚愕し、畏怖さえ覚える悪魔デジモンの前でユーノは数十人へと分身し、一気に畳み掛ける。

「「「「「ほおおおおおおおおおお！！！！」」」」」

一対多数を得意とする飛天御剣流を自在に操るユーノが複数集まったとき、その戦闘力は計り知れないほど膨れ上がり、悪魔型デジモンは一瞬のうちに倒されていき最後の一体となったところを本体であるユーノが切り裂く。

「セイヤー！！」

最後の一体を切り伏せた瞬間、スカルサタモンを除くデジモンたちはみなデジタマの姿となり、スカルサタモンただ一人だけは全員の目を盗んで足早に逃亡を果たしてしまう。

隠れた場所でその様子を見ていたテントモンは目の前の大勝利に目を輝かせる。

「凄い・・・人間とデジモンが今心を一つに・・・これならば、きっと。きっと」

だが、そう思い込んでいた矢先。

突然事態は一変するのであった。

「『ランプランツス』！」

「！」

スレイプモンがその言葉を耳にし、振り返った瞬間彼方より発射された漆黒の炎。

漆黒の炎は悪魔型デジモンのデジタマを飲み込みながらロイヤルナ

イツ、そして機動六課前線メンバーを襲撃する。

「「「「のあああああああああ！！！」」」」

ユーノ、一護、なのはにユーノスがその凄まじい黒い炎に堪えきれず誰よりも遠くに飛ばされると、咄嗟にスレイプモン達が受け止めてくれた。

「これは・・・」

誰かがそう口にした時、突然辺りが曇り始め訝しげな顔を浮かべる全員が目の前からやってくる黒い影に注目すると、その黒い影から声が聞こえてきた。

「ロイヤルナイツ・・・そして忌まわしき人間どもが！」

黒い影は背中に生えた翼を大きく広げながらゆっくりとユーノ達の元へと飛来し、やがて明確にその姿を確認できるようになると、スレイプモンは悪しき七大魔王の一人、ベルフェモンに向かって声を上げる。

「ベルフェモン！」

「とうとう出てきやがった・・・！」

全員は噂のベルフェモンの姿をこの目で確認すると、鋭い表情を浮かべて武器と構えロイヤルナイツと共に巨大な魔王を仰ぎ見る。

では、ベルフェモンに関して簡単に説明を加えておこう。

“ベルフェモンレイジモード”

長き眠りから目を覚ました、究極体。

ベルフェモンの本当の姿だ。

必殺技は『ランプランツス』――体に巻きついた鎖から黒い炎を放つぞ。

ベルフェモンはその禍々しい巨体から凄まじい邪気と殺気を放ち、ユーノ達を圧倒しながら徐に地に降り立つと、不敵は笑みを浮かべながら自分の前に現れたロイヤルナイツ達に口にする。

「ロイヤルナイツども。性懲りもなく、また我にやられに来たのか？」

「ほざくな！二度も貴様如きに敗れると思おうな！」

デュークモンはそう言うと、一人ベルフェモンへと近づき左手の聖盾『イージス』を向けて巨大なエネルギーを凝縮させて放つ必殺技『ファイナルエリシオン』を発動。

「『ファイナルエリシオン』！」

イージスから放たれる凄まじいエネルギーは地面を抉りながらベルフェモンへと直撃すると、その瞬間凄まじい爆風と共に砂埃が舞い上がり、離れた場所で見ていたユーノ達も思わず身構えた。

「くううう！！」

デュークモンはグラムとイージスを構えながら徐々に晴れていく土煙の中を覗きこむ。

するとその時、煙が晴れた先に映ってきたのはファイナルエリシオンをその身に受けているにも拘らず、傷一つ付いていない様子の不敵な笑みのベルフェモンだった。

「ふん」

「何!?」

「その程度の力で、我に勝てるなどはよく咆えたもの!愚かなる騎士が!魔王の洗礼を受けるがいい!」

ベルフェモンはそう言うと、口を広げて猛烈な息吹に乗せた永遠の悪夢と言う名の技をデュークモンへと叩きこむ。

「『エターナルナイトメア』!」

デュークモンは咄嗟にイージスで防御するが、そのあまりに違いすぎる規格外な威力に圧倒され、建物と一緒に吹き飛ばされる。

「ぐあああああああああ!」

「デュークモン!」

デュークモンは満身創痍となって地面に叩きつけられ、勝ち誇った笑みを浮かべるベルフェモンを睨み付ける。

「ぐ・・・!」

「素直に主権を放棄し、この新世界王である我に無条件降伏をすれば痛い想いをしなくてもよかったはずだ。今一度言おう！我に無条件降伏をするのだ！！要求に応じない世界は、我の穂の腕全てを焼き尽くしてくれる！！国土も、文化も、生きとし生ける全てを！！はははははは！！！」

ベルフェモンは大地を轟かせるほどの甲高い笑い声をあげ、一連の話を聞いていたユーノ達はロイヤルナイツと同じく険しい表情を浮かべ、拳に力を込める。

「く・・・狂った魔王が・・・！」

「これ以上、好き勝手させるか！！」

そう言うと、ユーノは不殺の侍魂を解除し、懐から先日のヤミーとの戦闘で謎の少年より入手したドラゴンカンを取出し、卍解した恋次に向かって合図を送る。

「恋次さん！」

「おお！」

ユーノは徐に走り出すと洞爺湖木刀を取出し、第二の完現術コンボを発動させた。

「白夜叉！！」

〈Ｗｈｉｔｅ　ｆｅｍａｌｅ　ｄｅｖｉｌ〉

ユーノは城の羽織と白い鉢巻を身に纏った姿へと変貌を遂げると、猛烈な鬼気と塩井霊圧を放出しながらベルフェモンへと向かっていく。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

なのは達は短期間の間に完現術コンボを使いこなすユーノの成長ぶりには目を疑った。

「ユーノ君・・・！完現術コンボを完璧にものにしている！」

「あいつ・・・もうそこまでのことを・・・！」

ユーノはベルフェモンに向かいながら恋次の狒狒王蛇尾丸へと飛び移り、ドラゴンカンを起動させ蛇尾丸へと装備する。

「こうなったらやるしかないでしょ！」

ユーノがドラゴンカンを装備すると、蛇尾丸は竜を模した姿であり白夜叉コンボによって初めてその制御を可能とする竜帝王蛇尾丸へと姿を変える。

「「竜帝王蛇尾丸！」」

竜帝王蛇尾丸はユーノを頭に乗せると、真っ直ぐベルフェモンへと向かって行き、それに触発されたスレイプモンや一護達も覚悟を決め込む。

「ふん。面白い。」

「俺達も行くぞ！」

一護は鬼太郎、ユニゾン状態のシグナムを引き連れユーノの援護に回り込むと、天鎖斬月の刀身に極限の霊圧を溜めこみ一気にベルフェモンへと叩きこむ。

「月牙・・・天衝！！」

「俺の必殺技・・・パート３！」

「〈火竜一閃〉！！」

三人の攻撃がベルフェモンに直撃すると、続けざまに今度は部隊長八神はやてとユニゾンしたリィンによる怒涛の砲撃がお見舞いされる。

「〈フレース・・・ヴェルグ〉！」

「「竜帝大砲！！」」

シュベルトクロイツの先より放たれる凄まじい白き直射砲撃と、ユーノ・恋次の霊圧が合わさった龍の嘶きの如く光線。

そんな大威力を秘めた攻撃をその身に受けておきながら、相変わらずベルフェモンには目立った外傷は見られず、逆にベルフェモンがエターナルナイトメアを仕掛ける。

「のらあああああああああああ！！！」

エターナルナイトメアが仕掛けられると、ユーノ達は直撃の寸前で

回避するが、それでもその余波は伝わり体を身構える。

「ぐううう！！！」

「みんな、気をつけろ！」

「これぐらいでやられるものか・・・！」

ロイヤルナイツの一体にしてプライドの高い聖騎士、ロードナイトモンがそう言うとオメガモン、マグナモン、アルフォースブイドラモンの三体がベルフェモンへと向かって行き一斉攻撃を加える。

「『オメガブラスト』！」

「『エクストリーム・ジハード』！」

「『アルフォースセイバー』！」

三体の攻撃が一斉に仕掛けられると、ベルフェモンは余裕の表情を浮かべて全身から見えない力を発揮し、三体の攻撃をあろうことか全て打ち消してしまう。

「「「何！？」」」

驚き返るオメガモン達だったが、その直後今度はデュナスモンを筆頭にこのメンバーが攻撃を仕掛ける。

「エグザモン、ロードナイトモン！」

デュナスモンの呼びかけを受けた竜帝の異名を持つエグザモンと、

全ての騎士型デジモンを従えるロードナイトモンが続けざまに攻撃を加える。

「『ペンドラゴンズグローリー』！」

「『アージェントフィアー』！」

「『ドラゴンズロア』！」

三体の攻撃が先ほど同様ベルフェモンへと向けられるが、ベルフェモンはその攻撃を受けても尚傷一つ付かない様子であり、それを見たエグザモンはあることに勘付いた。

「！攻撃が届かない・・・！」

そう、彼らの攻撃は当たる直前でベルフェモンの力によって届く前に消滅をしてしまっていたのだ。

ベルフェモンは表学の表情を浮かべるロイヤルナイツを笑いながらこう口にした。

「ふふふははは。貴様らロイヤルナイツの力はそう程度だったか？デジタルワールドを守護する聖騎士どもが聞いて呆れる。最早貴様らに勝ち目はない！『エターナルナイトメア』！」

ベルフェモンは口を広げて悪夢の咆哮をオメガモンに叩き込むと、オメガモン達はその直撃を受けて勢いよく吹き飛んだ。

「「「「「「のあああああああ！」」」」」」

スレイプモンとクレニアムモンは無残にも返り討ちを受けてしまった仲間の姿に張り裂けそうな想いとなった。

「オメガモン！ロードナイトモン！」

「エグザモン！デュナスモン！」

その一方でユーノ達は桁違いな力を持ってしまったベルフェモンの脅威に頭を悩ませる。

「こいつ・・・何てパワーだ・・・！」

「ふふははは！デジモンも人間も何もかもを力で支配する！我はそれを証明した。我の勝ちだ！はははははは！！！！」

高笑いを浮かべて自らの力に奮り高ぶるベルフェモン。

すると、それを聞いていた白夜叉姿のユーノは拳を強く握りしめながら怒り心頭な様子で声を上げる。

「ふざっけんな！！！！！」

ユーノは全身から誰もが恐れおののくほどの鬼気と莫大な霊圧を放出させると、勢いよくベルフェモンへと走り出し刀身に全霊圧を圧縮させ地面を蹴って飛び上がる。

〈Ｓｈｉｒｏｙａｓｙａ　ｉｔｔｏｒｙｏｄａｎ〉

「ほおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

なのはとユーノスはそれを見て、思わず声を上げる。

「ユーノ君っ！！」

「止すんだ、ユーノ！！」

「ベルフェモン！！！！！！！！！！」

しかしユーノは二人の言葉を受け流して構わずベルフェモンへと斬撃を叩き込もうとすると、ベルフェモンは真顔を浮かべユーノに目を向ける。

「要求は拒否と言う訳か。ならば望み通り・・・焼き尽くしてやろうユーノ・スクライア！！！」

ベルフェモンは体に巻きついた鎖から黒い炎を放つ必殺技「ランプランツス」をユーノに向けて、スレイプモンはその光景を目の当たりにし大声でユーノの名を叫ぶ。

「ユーノ！！！」

ユーノはランプランツスの黒い炎を斬撃で受け止めると、限界ギリギリとも言えるほどの霊圧を放出させると同時に、全身から湧き出る翡翠のデジソウルを纏いランプランツスに堪えていた。

「ぐ・・・ぐおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「何！？」

ベルフェモンは目の前の人間が自身の必殺技を受けているにも拘らず焼き尽くされる事無くその炎を抉って直進していく様に眼を疑い、ロイヤルナイツの面々も驚愕を隠し切れなかった。

「なんと・・・人間がベルフェモンの攻撃を受けて、それに耐えているだと！」

「あり得ぬ。そんなこと断じて・・・！」

すると、その時一護がようやくユーノの身体を取り巻くデジソウルに気が付き声を上げる。

「おい見ろ！ユーノの身体を何かが取り巻いてる！」

ユーノスはそれを目の辺りにすると、研ぎ澄まされた慧眼（けいがん）から直ぐにデジソウルであることを見に抜いた。

「あれはデジソウル・・・そうか。ユーノはデジソウルを全身に身と纏い使役させることで、完現術における最大の力を引き出しているのか！？」

「だけど身体に凄い負担のかかる完現術コンボでそんなことをしたら・・・ユーノ君が！」

なのはは見た目以上に体に負荷のかかるユーノの完現術コンボの事を考えながらユーノの事を自分のこと以上に心配する。

そんな仲間からの心配を重々承知の上でユーノは果敢にベルフェモンの黒い炎を抉っていき、圧しかえそうとしていた。

「ぬおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

「この！！！！！！！！」

ベルフェモンは目の前の状況に悔しさを覚えながらユーノの進行を阻止すべく口を広げてエターナルナイトメアによる追加攻撃を加えようとするが、咄嗟にスレイプモンがベルフェモンの動きを封じにかかる。

「そんなことはさせぬ！『オーディンズブレス』！」

スレイプモンは右手のニフルヘイムよりベルフェモン目掛けてブリザードを発生させ、ベルフェモンの体を瞬間的に氷漬けにして動けなくさせる。

「何！？」

驚き溢れるベルフェモンだったが、それが逆に命取りとなってしまい隙を見せた瞬間ベルフェモンのランプランツスがユーノによって破られ、ユーノは夜叉と呼ぶに相応しい気迫でベルフェモンへと斬撃を叩きこんできた。

「セイヤー！！」

「ぐあああああああああ！」

ベルフェモンはユーノの斬撃を受けると、勢いよく後ろへと倒れていった。

「ユーノ！」

ユーノはベルフェモンから離れると、一護達の元へと戻り、そこで白夜叉コンボの変身が解かれ元のスレイヤーモードとなって膝をつき荒い息を立てる。

「く・・・は、は、は、は」

すると、ユーノの攻撃を受けたベルフェモンが凍りついた体を体の熱を以て溶かしていくと、怒り心頭に憎しみの咆哮を上げる。

「よくも・・・よくもやってくれたな。人間がああああああああ！！！！」

その方向はこれまでにないぐらいの威力を誇り、その方向だけで首都セントラル・サーバーの建物と言う建物に亀裂が入り、ユーノ達も体制を保つのが精いっぱいだった。

「もう容赦はしないぞ！！すべて焼き尽くしてくれる！！」

ベルフェモンはそう言うと、口を開けて紫色に輝く砲撃をユーノ達へと放ち、咄嗟に回避することが出来た彼らだったが、その威力を目の当たりにした時は唖然とした。

「「「「な！」」」」

空中から見た時、その砲撃によって街の大部分が焼失を果たし、地面は無残にも抉り返されてしまっていたのだ。

「おいおい・・・ウソだろ・・・」

「なのはの砲撃なんて、これに比べればゴミみたいなもんに見えて来たぜ・・・」

苦笑いを浮かべながら恋次がそう言うと、なのは自身も思わずそう感じてしまった。

ベルフェモンは自分に一太刀を浴びせたユーノの名を叫びながら彼への憎悪をむき出しにする。

「ユーノ・スクライアあああああ！！！！！！！」

クロノはこの状況を確認し、スレイプモンの方に掴まった疲労困憊のユーノを見ると、この場に全員に向かって声を上げる。

「みんな！ユーノを援護する！」

「「「「「「「「はい！」」」」」」」」

クロノの指示を受けると、先ず動きを見せたのはフォワードチームだ。

ギンガはトライアルカートリッジを取出しブリッツキャリバーにコネクトさせる。

「トライアルカートリッジ、セットアップ！」

〈Ｔｒｉａｌ〉

トライアルカートリッジの効果によりバリアジャケットに多少の変

化が加えられたギンガ・ナカジマは目に止まらぬ速さでベルフェモンの周囲を取り囲み結界のようなものを作り出すと、ベルフェモンの背後からＩＰカートリッジによって力を解放したスバル達が攻撃を仕掛ける。

「ボルティックサンダー！」

「スターライトブレイカー・ファランクスシフト！」

エリオとティアナの砲撃がベルフェモンの体に直撃した直後、リボルバーデストロイヤーを叩き込もうとするスバル。

「ぬおりゃあああああ！！」

ベルフェモンはスバルの渾身の一撃を軽々と掌で受け止めスバルを弾き返すと、スバルは待機していたギンガに合図を送る。

「ギン姉！」

すると、今度はスバルの代わってギンガが飛び出し高速の乱打を仕掛ける。

「はあああああああああ！！」

ギンガはこれまでに出したことのない高速の乱打を仕掛けていくが、ベルフェモンはそれらを悉く受け止めてしまう。

「ははは！貴様の動きは全て手に取るように見えるぞ」

だが、その時頭上から浦太郎の声が聞こえてきた。

「隙だらけって気づかないの？」

ベルフェモンが頭の上を仰ぎ見ると、そこには甲冑モードとなった浦太郎を始め同じく甲冑モードの金太郎と鬼太郎が立っていた。

「受けてみるがいい。我々の結束を！」

三人は自分たちの武器を合わせ、巨大なエネルギーを作り出すとベルフェモンの頭上からそれを叩きこんだ。

「「「スクライアスーパーノヴァ！」」」

三色に輝く巨大なエネルギー弾がベルフェモンの体にヒットするも、ベルフェモンの体には傷一つ付かない。

「ははは。痒い。痒いぞ！」

「く。（パワーは明らかにあちらの方が上・・・長引けば不利だ）」

ユーノスは険しい顔を浮かべてこの分の悪い状況に苦慮していると、クレニアムモンが魔槍クラウ・ソラス片手にベルフェモンに向かっていく。

「クラウ・ソラス！」

クレニアムモンの渾身の一撃がベルフェモンへと仕掛けられるが、ベルフェモンは軽々とそれを受け流す。

「！」

「そんな攻撃では我に傷一つつけられはせぬ。攻撃とは・・・こうするのだ！」

ベルフェモンはそう言いながらクレニアムモンに地味ではあるが足蹴りを食らわせ、右手の鍵爪でクレニアムモンに更なるダメージを与える。

「ぐああ！」

「ははは。どうした？このまま潰れてしまうつもりか？」

すると、それを聞いた一護が口を挟む。

「潰れるのはてめぇの方だ！」

「何？」

ビルの上からベルフェモンを窺っていた一護、ルキア、なのは、フェイトの四人はそれぞれに別れると各々大技を仕掛ける。

「破道の七十三『双蓮蒼火墜』！」

「エクストリーム・・・バスター！」

ルキアとなのはが放った砲撃技はベルフェモンに直撃するどことか、ベルフェモンの足元付近へとぶつかり土煙を上げた。

「ははは。何処を狙っているのだ？」

すると、その土煙に紛れて一護とフェイトが接近してきた。

「月牙・・・天衝！！」

「ザンバー・・・スラッシュ！」

ベルフェモンは向かって来た二人に右手の爪で反撃し、二人は攻撃を受ける直前高速でい回避すると、ベルフェモンは背中から感じた複数の気配を察知する。

「ふん。後ろか？」

すると、二人の陽動によって背後に回り込むことに成功したデュークモンがグラムにエネルギーを蓄え、白鳥・マリアと共に至近距離からのロイヤルセイバーを流し込む。

「遅い！ロイヤルセーバー！」

「琴線斬！」

「破裂撃滅拳！！」

三人の攻撃がベルフェモンへと叩きこまれようとするが、ベルフェモンはいとも容易くそれを砲撃一つで掻き消してしまう。

「「「何（ですと）！？」」」

そして、その砲撃の威力に圧倒された三人は周囲の建物と一緒に大きく吹き飛ばされ、同時に広範囲にわたって凄まじい閃光が拡大した。

◇

〈地球Ｓｉｄｅ〉

一方、この世界の危機に乗じて世界はどこもかしこも慌ただしい様相を見せており、人々は新年そっちのけで訪れるかもしれない週末に恐怖しながらそれでも助かろうと逃げ惑い道路は大渋滞を起こしていた。

そんな大渋滞に巻き込まれていたユーノの友人である木之本夫妻と大道寺知世は不意に地面から伝わってきた大きな揺れに驚いた。

「きゃ！」

「大丈夫か?!」

「う、うん！」

運転をしていた小狼はさくらの身を案じつつ、かけがえのない友人でもありこの未曾有の危機に瀕した世界を守るために戦うユーノの事を気に掛けた。

「（ユーノ・・・）」

◇

〈ベルフェモンＳｉｄｅ〉

「ぐあああ！」

そんな地球でのやり取りは裏腹に、デジタルワールドの方では深刻な事態に直面していた。

ベルフェモンの猛攻によって、機動六課前線メンバーを始めかのロイヤルナイツも完全に手も足も出ないと言った状況に立たされ、正に絶体絶命のピンチを迎えていた。

ベルフェモンはスレイプモンを踏みつけながら悪意に満ちた笑みを浮かべる呟く。

「弱いとは悲しいことだな。遊び相手にすらならないのだからな。さぁ、人想いに消滅させて、楽にしてやろう！」

ベルフェモンは動けないスレイプモンに向かって鋭い爪を振りかざすが、その直後頭上から長く伸びたユーノのホイップバインドが巻きついた。

「！？」

ユーノは完現術コンボの使用で疲労困憊であるにもかかわらず、それでもベルフェモンへと立ち向かっていく。

「まだだ・・・まだ終わってなんかいない！」

ユーノはそう言うと、メズールから奪い取ったウナギのコアメダルの魂を引き出し、ホイップバインドを媒介に電流を流し込むとそれを高速で振るう技『ボルタームウィップ』で攻撃を加える。

そんなユーノに後に続く形で立ち上がった前線メンバーが同じよう

に力を振り絞ってベルフェモンへと攻撃を仕掛けるが、ベルフェモンはこの状況に哀れみさえ感じていた。

「やれやれ・・・何体で来ようと結果は同じだということが何故わからぬのだ?」

「ごちゃごちゃてめぇはウルセーンだよ!狒牙絶鉄!」

恋次は補助デバイスによって強化した蛇尾丸で攻撃を仕掛け、オメガモンも右腕から氷の力を凝縮した大砲を放つ必殺技「ガルルキャノン」を発射する。

「『ガルルキャノン』!」

両者の攻撃が飛んでくると、ベルフェモンは両手から黒い竜巻を発生させる。

「ふん!」

黒い竜巻によって恋次とオメガモンの攻撃は打ち消され、逆にベルフェモンの攻撃が向けられると咄嗟にユーノスと織姫が防御を張る。

「三天結盾!」

「キャッスルウォール!」

二人の絶対防御とも呼べるこの技であるが、ベルフェモンの攻撃はそんな二人の力すら容易く破ってしまう。

「「うわあああ!」」

「我は魔王・・・ベルフェモン・・・！はははははは！！！！！！！！！」

自分の力を遺憾なく発揮し、これ以上にないぐらいの喜びを表現するベルフェモン。

一護は織姫を抱きかかえながら、ユーノ達と共にこの最悪の状況に四苦八苦。

「くそ・・・！」

「ははは。素晴らしい・・・この力・・・この能力！我は全ての生命を超越した究極の存在なのだ。貴様ら如きが敵う訳がないのだ！」

すると、そんなベルフェモンの高笑いを聞いていたユーノは満身創痍なった身体を起こして立ち上がると、震える体でありながら揺るがぬ決意を胸に抱きこう口にする。

「敵うか・・・敵わないなんてものはどうでもいい・・・・・・僕らは諦める訳にはいかないんだ。どんなことがあったって諦めればそこで試合終了なんだ・・・！チームである限り個人では不可能な事でも・・・・全員の力で今まで僕らはこうした危機を乗り越えてきた・・・！」

そんなユーノの言葉に触発されると、一護やなのは達も体を起こし笑みを浮かべながらがんとした眼差しをベルフェモンに向ける。

「みんなと一緒なら・・・身体と心に無限の力が湧いてくる！」

「どんな最悪なときでも、俺達は何とかやってきた。そして今・・・バラバラだったピースが一つになったんだ！」

「まだ・・・体は動く・・・！」

「そうだ。拳だって、握れる！」

クレニアムモンはそう自分で言うと、強く拳を握りしめる。

「はやて、クロノ、指示を！」

フェイトが二人に言葉を向けると、二人は同時に笑みを浮かべる。

「はは。そんな言われなくても――」

「分かっているだろう」

すると、全員はその言葉を待ち侘びたとばかりに威勢のいい返事を上げる。

「「「「「「はい！」」」」」」

その瞬間、一同は一斉に動き始めロイヤルナイツも人間もこの際関係なしの怒涛の連続攻撃がベルフェモンへと注ぎ込まれる。

「『ファイナルエリシオン』！」

「ハイペリオンバスターＳ．Ａ！」

「〈ブラッディ―ダガー〉！」

「『スパイラルマスカレード』！」

「ぐおおおおお！」

ベルフェモンはこれまで自分の体に傷をつけることもままならなかった筈の彼らの戦闘力がこの短時間の間に急激な変化したことに相当驚いていると、その途端頭上からユーノが拳にデジソウルを宿して殴り掛かってきたのだ。

「！」

「ほおおおおおおおおおおお！！！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｆｉｓｔ〉

「喰らえ！！！！！」

ユーノは渾身の力をデジソウルに乗せてベルフェモンの鼻へと叩き込み、ベルフェモンはその拳を受けると勢いよく後ろへと倒れ込む。

「ぐあああああああああああああ！」

ユーノはスレイプモンの方の飛び移ると、スレイプモンにこう言う。

「スレイプモン！こんな野蛮な奴と一緒に居て、気分はどうだい？」

「ああ。存外悪くはないぞ！」

「そうか。なら行こう！」

ユーノがスレイプモンを促すと、スレイプモンは機敏な動きでベルフェモンの方へと駆け出して行き、無数の槍を間髪入れずに発射する。

「『タクティクスメア』！」

「ぐおおお！」

ベルフェモンは次から次へと仕掛けられる嵐のような攻撃に今まで上げた事のないような絶叫とダメージを体に蓄積させていく。

果たして、ユーノ達は結束の力でベルフェモンを倒すことが出来るのであろうか！？

◇

〈地球Ｓｉｄｅ〉

その頃、そんなデジタルワールドでの激しい戦闘の様子は様々な世界に住まう人間たちの目に目撃されており、地球でも同じ光景を目の当たりにしていたさくら、小狼、知世、ケルベロスの四人は滞るなく光を発する戦いの様子に目を見張る。

「あの光は――――――」

「緑の兄ちゃんか。」

「本当に大丈夫なんでしょうか？」

すると、そんな三人の不安を耳にした小狼が運転席で言う。

「心配するな。あいつは――――ユーノは一人じゃないさ。」

「小狼君」

「あいつらはチーム。機動六課は次元世界最強のチームだ。それに、どんなに離れていても俺達とあいつの絆は繋がっている。大丈夫だ。きっと大丈夫だ」

小狼は何度も同じ言葉を連呼し、ユーノ達の勝利を祈るばかりであった。

同じ絆を紡ぐ友の一人して――――――――。

◇

〈ベルフェモンＳｉｄｅ〉

さて、激しい攻防が繰り広げられるデジタルワールドの方はどうか。

幸運な事に少しずつではあったが機動六課の方に勝利の女神が微笑み始めていたのだ。

ベルフェモンは絆の力を武器とする機動六課とロイヤルナイツ達の攻撃に徐々に追い詰められていき、それとは反比例するかのようにユーノ達は更に力を増していく。

多量の土煙が上がり、ベルフェモンを迎え撃つ限界を通り越した先にある境地にたどり着いていると推測されるユーノ達。

ベルフェモンは煙の中より姿を現すと、傷ついた体を一瞥すると人間のへの憎悪、デジモンへとの憎悪、そして世界に生きる全ての生き物への像を膨らませていく。

「憎い・・・憎い・・・憎い！！！よくもよくもよくも・・・！！！悉く我の野望を阻み！あと一歩と言うところまで来た全次元世界の支配も妨げ！挙句この我に楯突き立ち塞がるとは・・・何とも不遜な！！！！ユーノ・スクライア！！そしてロイヤルナイツ・・・スレイプモン！貴様も貴様で何故人間などと言う下等な存在に与し、それほどの力を出せる！！何故この我の前に立ちつづけるのだ！貴様たちさえいなければ・・・！貴様たちさえいなければ・・・！我は楽に世界のトップに立つことが出来たのに！！！！！！！！！！！！！」

怒り狂い、自我を失いかけるベルフェモンは背中の翼を広げて飛び立つと、体中に巻きつかれた鎖と言う鎖をデジタルワールド全体へと広げていく。

全員は怪訝そうな表情でその鎖の咆哮に目を向けると、ベルフェモンはデータがむき出しとなったデジタルワールドにある山や川と言ったもののデジコードを鎖を通して吸収し始めたのだ。

「許さぬ・・・！許さぬぞ下等種が！！」

「これは・・・？」

「何これ？」

なのは達はその時、ベルフェモンによって吸収されていく膨大な数

のデジコードを目の辺りにし、驚愕の表情を浮かべる。

「デジコードを・・・？」

「吸収している・・・」

「奴は・・・このデジタルワールドのデジコードと言うデジコードを吸収してパワーアップしている！」

ベルフェモンは急激な勢いでデジタルワールドを構成する膨大なデジコードを自らの体の中へと急襲していき、誰にも真似できない芸当をやってのけると自らの体をさらに巨大化させていく。

「何！？」

「ベルフェモンが・・・」

「また大きくなっちゃった・・・！」

「ベルフェモン・・・！」

巨大化したベルフェモンは不敵な笑みを浮かべながら、口元に漆黒の光線を生成し、大虚の虚閃のようにそれを前方へと向けて発射する。

発射されるだけでユーノ達の鼓膜が破れるほどに震動し、それに伴って基盤の緩くなったデジタルワールドも大きく震動する。

「「「「ぐ！！」」」」

「きゃ！」

「・・・何やこれは！」

スレイプモンはあまりに段違いなベルフェモンの攻撃を目の当たりにし、唖然とした表情を浮かべながら一言つぶやく。

「超えてはならない一線を越えた・・・！」

ベルフェモンは憎しみに捕われ、自我を失うこともいとわずその憎悪から沸き立つ怒りのエネルギーを力に変えていく。

「憎い・・・憎い！！！」

ベルフェモンは無差別に手当たり次第に攻撃を始めていき、その影響でデジタルワールドと次元世界をつなぐ壁の崩壊が顕著に進行を始め、全員はこの嘗てないほどの鬼気に渋い顔を浮かべる。

「く・・・ベルフェモンめ・・・まさかここまでやるとは・・・！」

「一体何がどうなってる！？」

「デジコードを吸収した影響ですな」

「何？」

「デジコードを・・・？」

訝しげな顔を浮かべるなのは達がそう言うと、冷静にクロノはベルフェモンの力を分析し、こう語り始める。

「・・・奴にはエネルギーを吸収する能力があるのは間違いない。デジタルワールドのデジコードを吸収し、巨大化！そして・・・自らの隊何にあるアンゴルモアの力と掛け合わせることで時空を自在に切り裂く力まで手に入れた・・・！」

「クロノくん！早く指示を出して！」

はやての言葉を聞くと、クロノは徐に目を閉じその場にいる者すべてが驚愕する信じられない指示を口にする。

「全員ベルフェモンと距離を取り、回避に専念！」

「了か・・・・・・え！」

「何！？」

思わず耳を疑ってしまう一同。

金太郎や鬼太郎はクロノに詰め寄りその理由を問いただす。

「どういうことですか、クロノ殿！？」

「そうだぜ！てめぇ何考えてやがる！」

「分からないんですか！？ただでさえ、膨大な量にまで増えたデジコードの影響で世界のバランスは崩れ始めている中、更にベルフェモンの力で時空の裂け目が広がっている。ただでこのデジタルワールドは、度重なる戦闘とデジタルゲートの接続で時空を隔てる壁が脆くなっているんだ！」

「な！それって・・・！」

何かに気が付いたように顔をフェイトが浮かべると、クロノは拳を握りしめながら震える声で言う。

「そう・・・これ以上ベルフェモンの攻撃を許してはいけない。このままでは、全ての次元世界とデジタルワールドがぶつかり合い、崩壊し・・・何もない“無”と言う状態になってしまうかもしれないんだ！」

「「え！」」

「「な！」」

「そ、そんな・・・」

絶望にも似た驚愕の表情を浮かべる機動六課前線一同。

だがそんな言葉を聞いても一切動じない様子で一護は口を挟んだ。

「ようするに・・・とっとあいつをぶっ倒せばいいんだろ？」

「一護さん！？」

一護は全員の視線を受けながら天鎖斬月を肩に乗せ語り出す。

「面倒だってことは、最初から分かってたんだ。俺達のやることは・・・何も変わらねェ！」

一護のそんな単純明快であるが力強い人頃に全員の表情が綻ぶと、ルキアと恋次は顔を見合わせ返事を返す。

「ま、それもそうだな」

「ああ。一護の言う通りだ！」

「それでこそ私の旦那♪」

すると、その直後スレイプモンの肩に乗っていたユーノも一旦その場に着地し、一護に笑みを浮かべながら拳を握りしめ口にする。

「流石は一護さん。僕の師匠だけはある。僕らのすべきこと・・・何も変わらない！」

「よっしゃあ！」

全員の士気がここで一気に上昇する。

「クロノくん。今の話聞いたな？」

「分かってるさ。ユーノ！お前の指揮で動く。命令を頼む！」

「聞かせてユーノ君。私達が一番って認めた最高に分かりやすい指揮！」

「よし。体勢を立て直す！ダメージの一番少ないスレイプモンを中心に、これ以上被害が広がらないよう一気に決める！」

「「「「「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」

全員の心が一つにまとまり、ロイヤルナイツと協力して一気に総攻撃を始めようとする機動六課。

ベルフェモンは怒り狂った様子で全身の鎖を解放しランプランツスを仕掛ける。

「そんな事は・・・させるか！！」

スレイプモンはユーノを肩の乗せベルフェモンに近づこうとするも、ランプランツスによって阻まれるが、直後クレニアムモンのクラウ・ソラスが鎖を引き千切る。

「く！！」

「「クレニアムモン！」」

「露払いは任せてくれ。君とユーノ・スクライアはベルフェモンを！」

クレニアムモンがそう言うと、虚化した一護となのは達魔導師組、そしてロイヤルナイツの一員はベルフェモンに目を向けながら言う。

「俺達が隙を作る。ユーノと一緒に後は頼むぞ！」

「ユーノ君！頑張ろう！」

「よし・・・スレイプモン！」

「わかった。行くぞ、ユーノ」

二人は信頼できる仲間の絆を信じ、ベルフェモンの陽動を任せると、離れた場所で準備に取り掛かる。

「ぐおおおおおお！！」

「行くぜ！」

一護達は飛んでくる鎖を前にし、それぞれの持てる力の全てをベルフェモンへとぶつける。

「風切月牙・大乱！」

「『エンド・ワルツ』！」

「『ロイヤルセイバー』！」

「エクストリーム・・・バスター！」

「ブリザードショット！」

怒涛の攻撃により鎖が全て破壊されると、ベルフェモンも負けじと次から次へと鎖を出していくが、それを阻止せんとスバル達フォワード陣営やスクライア商店、残りのロイヤルナイツ達が奮闘する。

「全力で阻止するぜ！！」

「『グレイソード』！」

「『ブレス・オブ・ワイバーン』！」

「『エクストリーム・ジハード』！」

「おのれ小癪な・・・・・ぬ！」

と、その直後。

自らの体に巻きつかれた鎖を手に取った恋次とユニゾン状態のシグナムが目に映った。

「行けるか、阿散井！？」

「おお！フルパワーだ！」

「な・・・何・・・！」

「「おおおおおおおお！！！！」」

二人はベルフェモンの鎖をフルパワーで後ろへと引いて行き、離れた場所で待機するユーノとスレイプモンに狙いを定めると、二人に合図を送る。

「ユーノ！スレイプモン！今のうちに早く！」

「「よし（ああ）」」

〈Ｗｈｉｔｅ　ｆｅｍａｌｅ　ｄｅｖｉｌ〉

「“白夜叉”！！」

ユーノは再びパワーに優れる白夜叉コンボを発動させ霊圧を一気に上昇させると、すべての霊圧をスレイプモンへと流し込み始める。

「ほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

スレイプモンはその力を全身に吸収していくと、左手の聖弩ムスペルヘイムに力を溜めていき、ユーノの合図を待ってベルフェモンに狙いを定める。

「行けぇ！スレイプモン！」

それを聞くと、スレイプモンはムスベルヘイムより放たれる灼熱の炎を纏った必殺の矢、ビフロストをベルフェモン目掛けて射る。

「『ビフロスト』！」

宛ら太陽球の如く煌々と燃え上がる巨大な炎を矢を目の当たりにし、ベルフェモンは思わず大声を上げた。

「な・・・なんだあの大きさは！」

そして、スレイプモンの放った特大のブフトストがベルフェモンへと直撃し、その瞬間大爆発が巻き起こり、全員は思わずガッツポーズを浮かべる。

「やった！」

「よっしゃあ！」

「やったか？」

確認の為に一同が土煙の中を覗きこむと、その中に映ってきた物陰に思わず目を疑った。

「な！」

「ふふふふはははははは！！！」

黒い土煙の中より現れたのは紛れもなく未だ健在のベルフェモンの姿であった。

「な・・・！」

「バカな！」

「あの攻撃を受けて、倒れるどころか無傷だと！？」

「我が野望は・・・・・！誰にも止めさせはせぬ！！！！」

ベルフェモンは怒り狂いながら自らの欲望に従い、ランプランツスを発動させると、それに飲み込まれたなのはやロイヤルナイツの面々は虚しくも倒れ伏して行ってしまった。

「「「「「のあああ！！」」」」」

「「がああああ！」」

「「きゃあああ！」」

「「「ぐおおおおお！！」」」

自分の目の前で無残にも倒れていくかけがえのない仲間たち。

ユーノは傷ついた最愛の女性の姿やかけがえのない師、そして絆を紡いだ仲間の変わり果てた姿を見ると、心の中で何かが破裂する音が響き渡った。

「く・・・！！」

そして、この絶望的な状況を前にユーノは天を仰ぐように欲望にも似た、張り裂ける想いを叫んだ。

「誰か！！何でもいいから！！！僕に・・・！僕に・・・！仲間たちを、このデジタルワールドと全ての世界を守る力を、僕に貸してくれ！！！！」

と、その時頭の中に意外な声が聞こえて来た。

「（ユーノ。それは違うぞ）」

「（！）」

ユーノの意識が向けられた先に居たのは、紛れもなくスレイプモンの姿だった。

スレイプモンは驚愕の表情を浮かべるユーノに徐にこう告げてたのだ。

「（短いながらも、お前と一緒に戦って来たから分ったことがある。“力は借りたり、与えたりするものじゃない”。）

「（あ！）」

ユーノは焦りの想いからつい忘れがちになっていた大切な事をスレイプモンのその一言で思い出すと、鼻で笑ってからスレイプモンにこう返す。

「（・・・――そうだったね。力は借りたり、与えたりするものじゃない。力は――――――“合わせるもの”だ。そうだね、スレイプモン？）」

「（ああ。）」

今、二人の心が一つになろうとしていた。

すると、そんな二人の心を理解したのか、ユーノの懐に収まっていたデジヴァイスが光り輝き始め、ユーノとスレイプモンは目を疑った。

「「（！？）」」

そして、この異変を遠く離れた場所で少年と共に傍観していたバンチョーレオモンも大いに驚愕し、その隣に立つ少年は不敵な笑みを浮かべる。

「！これは・・・まさか・・・！」

「来たんだね。あれが――――――」

そんな二人を余所に、ユーノ・スクライアとそのパートナーデジモ

ン、スレイプモンは心を一つにし共通の想いを胸に抱く。

「（必ず、ベルフェモンを倒す。）

「（世界を、みんなを守るんだ）」

そう固く誓った想いは大きな光となって肥大化していき、デジヴァイスは真のデジソウルを発現したユーノの力に反応し、形状も変化。

デジヴァイスバーストと名を変え、更に光を強くしていく。

ベルフェモンは突然目の前で光り始めたユーノとスレイプモンを包み込むばかりの巨大なデジヴァイスの光に後ずさる。

「こ、この光は・・・！」

一方で一護は直感から、ユーノに次のような言葉を投げかける。

「その光に手を翳せ、ユーノ！」

ユーノはそれを聞き、光の中でスレイプモンと心を一つに目を合わせる。

「行こう、スレイプモン」

「ああ」

直後、デジヴァイスバーストの画面にバースト進化の表示が出され、ユーノは自身の究極のデジソウルを徐に叩きこむ。

〈ＢＵＲＳＴ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ〉

「チャージ！デジソウル・・・バースト！！」

ユーノはチャージしたバーストデジソウルをスレイプモンへと送り込む。

スレイプモンはそれを受け取ると、全身に身に纏ったレッドデジゾイドの鎧を幻のジェイドデジゾイドの鎧へと変化させると同時に、今まで馬のような姿に近かったそれを人型へと変貌させ、背中からは翡翠に輝く金属の翼が生えてきた。

遠方からそれを見守っていたバンチョーレオモンは、あまりの嬉しさに腹の底から歓喜の笑い声を発した。

「ふふふはははは！！！！！見事だ！！よくぞ極めたりユーノ・スクライア！そして、ロイヤルナイツ・スレイプモンよ！二人の気持ちを一つにし、最強のデジソウルを激しく燃焼させ、究極体をも上回る最大の力を発揮させる。」

バンチョーレオモンが声高にそう言うと、隣で聞いていた少年も便乗して今起きている奇跡に現象をこう宣言するのであった。

「それこそが・・・――――究極を超えた許された者のみが使うことが出来る！」

「真の『バーストモード』だ！！」

そして、二人を覆っていた光が徐々に晴れていくと、現れたのは姿も形もそして色すらも大きく変わったバースト進化によって強化さ

れたスレイプモンであった。

「スレイプモン！バーストモード！」

光の中より現れた大きな変貌を遂げたスレイプモンの輝き、未知なる魅力、神々しい姿を目の当たりにしたなのは達とロイヤルナイツは目を見開き凝視する。

「スレイプモンが・・・」

「バースト進化した・・・だと・・・！」

「あれが・・・」

「バーストモード・・・」

そして、ベルフェモンそのものもそんなスレイプモンの姿に魔王と名乗りながらも、畢竟は恐怖心を覚え自らの欲望の闇をも飲み込むばかりのスレイプモンの光に体が焼かるような感覚に陥る。

「ふん！」

その時、スレイプモンは背中の翼を広げると目にも止まらぬ速さでベルフェモンへと突撃していき、ベルフェモンは向かって来るスレイプモンと一時的にその身体に融合されているユーノに言葉をぶつける。

「スレイプモン！！ユーノ・スクライアっ！！」

ベルフェモンの両腕から放たれる黒い炎を纏った鎖。

「ぬん！」

スレイプモンはそれを聖盾ニフルヘイムで受け止め、粉砕し、更にベルフェモンの鋭い鍵爪による攻撃をも受け止め、逆に翡翠に輝く自らの翼を研ぎ澄ませ凄まじい威力を持ったそれでベルフェモンの体を切り裂く。

「ぬりゃあああああ！」

「ぐあああああああ！」

ベルフェモンはその攻撃を受けると大地が揺れ動くほどの絶叫を上げ、更に怒りを増幅させる。

「こんなこと許してなるものか！！！」

ベルフェモンは咆哮を上げながら強烈な砲弾を放つ。

しかし、スレイプモンは敢えて受けて立つとニフルヘイムをデジソウルの力で巨大化させ、ベルフェモンの攻撃をかき消してしまう。

攻撃を打ち消すと、ユーノのデジソウルをもとに作り出した翡翠の炎をベルフェモンに注ぎ込んでいくと、その炎と目の前に佇む只ならぬオーラを発するスレイプモンに畏怖を覚える。

「来るな・・・！」

ベルフェモンは畏怖の念を抱きながら徐に近づいてくるスレイプモンとは対照的に後ずさりをし、再度拒絶の言葉をぶつける。

「来るな！！」

「これで終わりだ、ベルフェモン！！」

接近してきたスレプ門がそう言うと、左手に持っていた翡翠の炎で出来た武器を一旦打ち消すと、その左手の中にもう一度炎を生み出す。

「ぬ！！」

ベルフェモンが目を凝らして炎を覗き込むと、その炎より現れたのはスレイプモンのパートナーでありながら、あらゆる欲望を自在に操る完現術者、スレイヤーモードユーノ・スクライアであった。

ユーノが姿を現すと、一護やなのは、そしてこの場に居る全員は彼の名を叫びながらベルフェモンに止めを促す。

「行け！ユーノ！」

「犠牲になってきた、デジモンたちの為に！ユーノ君！」

「ベルフェモンに苦しめられた、みんなの為に！ユーノっ！」

「「ユーノ！！」」

「「「「ユーノ先生！！」」」」

「「「店長！！」」」」

全員の心が一つとなり、ユーノに希望が託されるとベルフェモンは今まで感じた事のない未曾有の恐怖に心が支配されていく。

「ゆ・・・ゆ・・・ユーノ・スクライア！！！」

そんなベルフェモンとは裏腹に、仲間の想いと絆を確かに受け取ったユーノはその拳に翡翠に輝くデジソウルを灯らせ、決意に満ちた瞳を浮かべ言う。

「ベルフェモン！！！」

ユーノは想いの全てを拳に乗せると、スレイプモンの手の中から飛び上がり究極のデジソウルをスレイプモンと共にベルフェモンへと叩きこむ。

「「はあああああああああああ！！」」

二人の絆のデジソウルがベルフェモンに注ぎ込まれた瞬間、ベルフェモンの体が眩いばかりの光を放ち始め、空気を切り裂くような魔王の絶叫が鳴り響く。

「ぐあああああああああああああ！！！！！！！！！」

ベルフェモンは大きく吹き飛びデジタルワールドと全次元世界を飲み込もうとした魔王の体が徐々にデータ化していき、全員はそれを見て勝利を確信した。

「やったああ！！」

「ついに・・・やった！」

嬉々とした顔を浮かべる全員だったが、なのはの方は嬉しさと半分ユーノへの想い半分といった感じの表情を浮かべ、その瞳からは嬉し涙が零れていた。

「ユーノ君・・・／／／」

そして、その隣ではユーノスを肩に乗せた一護が鼻で笑いながら弟子の成長ぶりをたたえる。

「また一段と成長しやがって・・・ホント。あいつはとことん進化するぜ。これからも――――――」

ベルフェモンを倒したと確信するユーノとスレイプモンは徐に背中を向けて全員の元に戻ろうとすると、直後そんな二人の耳に聞こえてきたのはデータが進むベルフェモンの声であった。

「ま・・・まだだ・・・・・・」

「「！？」」

「我の野望は・・・まだ終わらぬ！！！」

ベルフェモンはそう言いながら最後の力を振り絞ってユーノ達に攻撃を加えようとしたが、その時唐突に頭上から降り注がれた奇襲を脳天へと喰らったベルフェモン。

「ぐ！」

「え」

「何!?」

全員があまりに唐突なこの度の事に眼を疑い、ベルフェモン自身も起こってしまった出来事に頭がついて行かなかった。

「な・・・んだ・・・と・・・・――――」

と、その時だった。

そんなベルフェモンの頭上から不敵に笑う聞きなれた声が聞こえてきたのは。

「ふふふふふ。」

一瞬驚いた様子でベルフェモンが頭上を見上げると、空に浮かんでいたのはベルフェモンの忠臣であった筈のスカルサタモンであった。

「スカル・・・サタモン・・・!?」

この時、ユーノ達はまさかこの度の事件が一人のデジモンによって緻密に仕組まれた計画的なものだったとは思いもしなかったのだ。

次回、アンゴルモア・デジモン篇最終決戦!!

最強騎士団と魔王とバーストモード（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はバーストモードについてだ♪」

「バーストモードとは、バースト進化によって一時的に限界能力を突破したデジモンの姿であり、その場合普通の進化とは違い正式な進化の位置づけにはされないが途轍もない力を解放することが出来る」

「アニメでは主にパートナーとそのデジモンたちの心が一つになったときのデジソウルバーストによって発動を許される訳だが、どうやら僕とスレイプモンにも同じことが出来たようだね♪」

バ「うむ！よくぞこの究極の境地にたどり着けたな。デジソウル道場の修業は伊達ではなかっただろう？」

ユ「はい。本当にあの時は何とお礼を言ったらよいか。ありがとうございます、バンチョーレオモン」

バ「ふん。礼には及ばぬぞ。全てはお前たちの力だ。さて、私はそろそろ戻るぞ。さらば！」

バンチョーレオモンは颯爽と後ろに振り返ると、草笛を吹きながら何処からともなく現れた夕陽を前にユーノの前から立ち去って行った。

ス「あの夕陽は何処から現れたのだ、一体？」

ユ「えっと・・・雰囲気と言うか何と言うか・・・・・・案外『かきわり』とかじゃないかな・・・」

ユーノがそう思っていると、案の定それはバンチョーレオモンに頼まれ用意していたオッドアイの少年が用意したものであった。

オ「はぁ・・・なんで僕がこんなもの作らないといけない訳・・・」

溜息をつきながらかきわりを裏で押さえる少年だった。

魔導師図鑑ハイパー！

“狂乱の貴公子”。

または、“逃げの小太郎”と呼ばれるその男の名は「桂小太郎」。

神出鬼没現れてはその堅物さから周りより反発を受けてしまう体質の彼がなんと、このデジタルワールドへと来ていたのだ。

桂「時は・・・――――来た！」

徐に目の前の荒んだ光景を目の当たりにした桂はデジヴァイスを取出し、パートナーデジモンと共に世界を駆け抜ける。

桂「ははははは！ついに俺達の出番だ！アンゴルモア・銀魂篇では出番さえもらえなかったが作者もとうとう観念したようだな！さぁ、俺と一緒に世界を救おうではないか！！」

桂はそう言いながら、パートナーデジモンの白い生き物を使ってハ

ングライダーの要領で空を飛んでいき、ベルフェモンの姿を確認するや否やデジソウルをチャージする。

桂「デジソウルチャージ！オーバードライブ！！」

しかし、デジソウルをチャージしたというのにデジモンは一向に進化の兆しを見せない。

桂「何故だ！何故お前は進化しないのだ！？一体何がいけないというのだ！！答えてくれ・・・！エリザベス！！！！！！」

嘆く桂が目の当たりにするそのデジモンと手書きで書かれたカンペを手に持つペンギンのような足と全身真っ白な体を持つ謎の生き物、エリザベス。

そんなやり取りを見ていたユーノ達は全員戦いを中断すると、壮大なツッコミを入れる。

全「進化するかボケ！！！！！」

桂「ぐっほ！！」

異世界に来てでも碌な目に遭わない狂乱の貴公子であった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ス「ご苦労だったな、ベルフェモン。お前の役目は終わった」

ス「貴様、何ものだ！？」

オ「我が名は、オグドモン！」

ユ「僕は勝つ！！何故なら僕には仲間がいるから！」

第１５８話　七大罪と絆と聖騎士コンボ

登場デジモン紹介

ゴクモン

声：山口健

究極体　サイボーグ型　ウイルス種

指名手配犯リストのデータから生まれた逃亡者デジモン。実は自分が賞金首なのだが、”賞金稼ぎ（バウンティーハンター）”だと信じて疑わず、犯罪者狩りをしている不思議な悪人だ。必殺技は、左手の「ギルティーチェーン」で敵をつかまえ、右手の「ジャッジメントシックル」で首をかる『髑髏乱舞』

七大罪と絆と聖騎士コンボ（前書き）

人間である限り、欲望を持たぬ者はいない。しかし、その欲望は小さな私欲ではなく、国家や社会に利福をもたらす大きな欲望でなければならない。

By三島海雲

七大罪と絆と聖騎士コンボ

真のバーストモードを発動させたスレイプモンと、ユーノの活躍によってベルフェモンは倒された。

しかし、ベルフェモンが最後の力を発動させようとした直後、思わぬことが起こった。

なんと、ベルフェモンに攻撃をしたのはスカルサタモンだった。

果たして、世界の運命は――――――

〈スカルサタモンＳｉｄｅ〉

七大魔王こと、ベルフェモンは目の前の出来事に驚きを隠せなかった。

自らに忠誠を誓い、今まで散々目にかけ世話をしてきたはずの部下であるスカルサタモンがこの直前で自らを裏切るとは夢にも思っていなかったのだから。

「スカル・・・サタモン・・・何故だ！？」

全身のデータが進む中で信じられない表情を浮かべそう言うと、頭上に浮かぶスカルサタモンは不敵な笑みを浮かべる。

「ご苦労だったな、ベルフェモン。だが、お前の役目は終わった――――――」

「何！？」

すると、スカルサタモンは杖の先にエネルギーを蓄えると、完全体のそれとは思えぬほどの強大な力を秘めた地獄の業火をベルフェモンへと降り注ぐ。

「『ゲヘナ・フレイム』！」

ベルフェモンはその炎の直撃を浴びると、天地を揺るがすほどの絶叫を浴び公開に満ちた言葉を残して消えていった。

「ぐあああああああああああああ！！！！！ば、バカな！！！！！！！！！！」

ベルフェモンが消滅すると、それを見ていたユーノ達やロイヤルナイツは目を疑った。

「何だと・・・！？」

「スカルサタモンがベルフェモンを裏切った・・・！？」

「そして、あの技は明らかにスカルサタモンの技ではない！」

「え！」

クレニアムモンの一言に一瞬耳を疑ったなのは。

スレイプモンはベルフェモンに止めを刺したスカルサタモンに強い口調でその正体を尋ねる。

「貴様、何ものだ！？」

「ふふふははは！ロイヤルナイツとあろうものが、俺の存在に気づかないとはな！」

「何？」

「ならば教えてやろう。俺の名は――――――」

スカルサタモンはそう言いながら、自らの体を本来の姿に戻していく。

驚愕の表情を浮かべるユーノやスレイプモン達。

そして、彼らの目の前に正体をあらわにしたのは、グリフォモンを連想させる意匠を身に纏い、深紅に色づく悪魔の翼を生やした究極体デジモンだった。

その究極体デジモンは自らをこう名乗った。

「ムルムクスモン！」

「バカな・・・！ムルムクスモンだと！？」

「どういう事だよ！？何なんだあいつは・・・！」

一護が怪訝そうに尋ねると、ムルムクスモンを凝視しながらロイヤルナイツ、デュークモンは次のように答える。

「ムルムクスモン。嘗て、デジタルワールドで悪行の限りをつくし我らがデジタルワールドの神にして象徴たるイグドラシルの怒りを

買い、追放された忌まわしきデジモン。魔力で様々なデジモンに化けることが出来ると訊いてはいたが・・・・・まさかスカルサタモンが奴だったとは・・・！」

「貴様！何故今頃になって！？」

「ははは！一月ほど前の事だ。追放され各地を放浪としていた俺は、偶然にもこの紫色の欠片を見付けた」

ムルムクスモンはそう言うと、徐に亜空間から不気味な紫色に輝く３１個ある欠片の一つでありユーノ達が探し求めるロストロギア、アンゴルモアを取り出した。

「アンゴルモア！！」

眼を見開きそれを凝視する六課メンバー。

ムルムクスモンは消滅したベルフェモンの中より現れた莫大な量のデジコードをアンゴルモアの中に全て封印すると、更に独白を続ける。

「それと一緒に七大魔王すべてに関する碑文を発見し、俺はデジタルワールドに封印されているベルフェモンと同じ七大魔王、ベルゼブモン・リリスモン・デーモン・バルバモン・ルーチェモン・リヴァイアモンのデジタマからデジコードを採取し、この欠片に封印。そして・・・ベルフェモンのデジコードを今この中へと封印した。」

「そっか！お前は最初から七大魔王全ての力を・・・！」

「その通り！七大魔王の力を一つに集め、俺こそが全次元世界の神

として君臨し、この穢れきった世界を全てを抹消させ、その上で新しい世界を築く！ふふはははははは！！！」

高笑いを浮かべるムルムクスモン。

オメガモンは険しい顔を浮かべながら思わず口にする。

「なんとも愚かな・・・！」

「その俺の真意に気づかなかった貴様らの愚かではないかロイヤルナイツ？見せてやろう！これこそが七大魔王全ての力を集め、一つに結集させた究極の力・・・・・おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

ムルムクスモンは持っていたアンゴルモアを自らの体内に取り込むと、その瞬間途方もないほどに強大な力を発動させ、一同は桁違いなその力の前に身構えする。

「こ、これは・・・！！」

「う・・・！！」

だが、これだけではなかった。

スカルサタモンによって操られ、ユーノ達を苦しめてきたあの黒のコアメダルを持つ謎の黒マントもそんなアンゴルモアの力に惹かれる。

「アンゴルモア・・・・・欲しい・・・」

黒マントは伊達だったそれを脱ぎ捨てるとその正体を露わにする。
マントを脱ぎ捨てると、姿を現したのは全身黒を基調とする体に顔はサソリを意匠させ、上腕部はカニをモチーフとし、下半身はエビの骨格を象った紛れもなくそれは欲望の怪人、グリードの一体であった。
仮にサソリグリードと名付けたそれは自らの体を七枚のコアメダルへと還元すると、力を解放しようとするムルムクスモンへと向かって飛んでいく。
コアメダルが飛んでくると、ユーノ達は思わず目を疑った。
「あ！あれは・・・！」
「コアメダル！？」
七枚のコアメダルは不気味な色のオーラを発するムルムクスモンの体内へと吸収されていき、ユーノ達は更に険しい表情を浮かべる。
「奴の中に吸収されたぞ！？」
コアメダルが吸収されると、ムルムクスモンの力は強さをまし、全員が後ずさるような状態になりかけると遂にムルムクスモンはその真の力を解放する。
「見るがいい！これが俺の、力の姿だ！！！！！おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」
ムルムクスモンは不気味な色の光に飲み込まれると、その姿を異形

のものへと変貌させていく。

それは最早悪魔も魔王も超越した姿であり、一言で例えるなら化物と呼ぶにふさわしい姿をしたそのムルムクスモンの姿を確認した瞬間、一同はそれぞれこんなリアクションをとった。

「何なんだありゃ・・・！？」

「デジモン・・・？」

一同の前に姿を現したのは、ベルフェモンの大きさを遥かに上回るほどに巨大で、化け物と呼ぶにふさわしい七つの眼と七つの脚、そして第八の眼をもつ異形の化身。

その化身は自らの事を仰ぎ見る一同にこう名乗り始めた。

「我は、暗い闇の心を糧とする超魔王！七大魔王全ての罪を引き継ぎ、七つの欲望より生まれし存在！異形となった憎しみを、破壊を以て更なる憎しみに昇華する。我が名は、オグドモン！」

「オグドモン・・・！？」

それでは、オグドモンに関して簡単な説明を加えよう。

“オグドモン”

タコのような体を持ち、七つの眼と七つの脚、そして第八の眼を有する異形の超魔王。

七大魔王全ての欲望と罪を秘めたその力は計り知れない。

必殺技は、欲望のままに暴走する『オーラーティオ・グランディオロクア』。

恋次や鬼太郎は唖然とした表情で目の前のオグドモンを仰ぎ見ながら、顔を引きつり思わずこう口にしてしまった。

「おいおい・・・あんなのありかよ!?」

「俺達は・・・まんまとこいつの策に嵌められたって訳かよ!?」

オグドモンは絶望にも似た表情を浮かべる一同を前に、甲高い笑いを浮かべる。

「はははははははは!!!!!!ぬらあああああああああ!!!!」

そして、途方もない大きさの手足を振るい目の前に佇む蟻のような大きさのユーノ達に攻撃を仕掛ける。

「「「「ぐあああああああ!」」」」

その攻撃のすさまじさはベルフェモンのそれを遥かに超えており、一撃であるにもかかわらず街は粉塵と化して消えていき、ユーノ達は風当りだけでも大きなダメージを負った。

「ぬあああああああああああ!!!!」

オグドモンはなりふり構わず欲望のままに暴れ、ユーノ達を攻撃しようとすると、咄嗟に守りの要であるシャマル・ザフィーラ・ユー

ノス、そして織姫の四人が前に出る。

「クラールヴィント！」

「ぜおおおおおおおおおおお！！」

「キャッスルウォールエクステンド！」

「三天結盾！」

四人の鉄壁の防御が目の前に敷かれ、オグドモンの攻撃を受け止めようとするが、オグドモンの攻撃力は四人の防御力を遥かに超えており、一瞬にして突き破ると四人を吹き飛ばした。

「「「「ぐあああああ！」」」」

「織姫！！」

「シャマル！ザフィーラ！」

一護達はすぐさま飛ばされた四人を皮一枚のところで受け止めるが、四人は全身満身創痍となって険しい表情を浮かべており、スバル達はあまりに規格外な強さを誇るオグドモンのそれに純粋な恐怖を覚える。

「な、何なの・・・この力・・・」

「先ほどのベルフェモンとは比較にならないほどに・・・強力だ・・・これが・・・七つの大罪を受け継ぐ化身の力か・・・！」

すると、そんなオグドモンに果敢に向かっていったのはロイヤルナイツ、オメガモンとデュークモンの二体だった。

「図に乗るな、化け物が！」

オメガモンは左腕のウォーグレイモンを象った手からグレイソードを取出し、デュークモンも右手のグラムを突き立て同時に斬撃を叩きこむ。

「『グレイソード』！」

「『ロイヤルセーバー』！」

だがしかし、二体が攻撃を仕掛けるとオグドモンは七つの眼でその動きを的確に捕え、七つの脚を器用に動かし二体のそれを軽々と受け止める。

「「何！」」

「脆弱な騎士ども・・・裁きの一撃を受けるがいい！」

オグドモンは巨大な口から大地をもひっくり返す程の威力を秘めた砲撃を二体へと叩きこむ、まともに受けたオメガモンとデュークモンは絶叫し吹き飛ばされる。

「「ぐあああああああああ！」」

「オメガモン！デュークモン！」

二体は全身から莫大な量のデータを放出し、無残にも敗北を喫して

しまう。

同胞の哀れなる姿を見て、拳を強く握ったデュナスモンは翼を広げオグドモンへと向かっていく。

「やろう！！ブレス・オブ・ワイ・・・！」

だが、その直後オグドモンの脚が攻撃を仕掛けようとするデュナスモンの体へと巻きついてきた。

「！？」

オグドモンは身動きの取れなくなったデュナスモンを放り投げる。

「ぬらあああああああああああ！」

「があああああああああああ！」

デュナスモンは二体に引き続き地面に叩きつけられると、全身から自らを構成するデータを放出し、気を失った。

三体がオグドモンに敗北すると、今度はエグザモン・アルフォースブイドラモン・ドュフトモンの三体が同時に必殺技を叩きこんできた。

「『ドラゴニックインパクト』！」

「『シャイニングVフォース』！！」

「『エルンストウェル』！」

オグドモンに直撃した瞬間爆炎が立ち上るが、爆炎が晴れた先に映ってきたのはまるで攻撃が効いていない様子のオグドモンの体であった。

三体は目を見開き己の力を疑った。

「バカな・・・！」

「こんなことが・・・」

「ふふふふ。この程度がロイヤルナイツだと?笑わせるな！！」

すると、オグドモンは口部より奏でられる衝撃波動『カテドラール』を三体目掛けてお見舞いするのであった。

「『カテドラール』！」

カラドラールをその身に受けたエグザモン達は為す術もなく絶叫し、吹き飛ばされていく。

「「「ぐあああああああああ！！！！」」」

すると、カテドラールの余波が周囲に飛散し、その一部がなのは達の方に向けられるのを確認したマグナモンは表情を一変させる。

「いかん！」

「マグナモン！」

ロイヤルナイツの守りの要たるマグナモンが飛び出すと、彼の思考を読んでスレイプモンが驚愕の顔を浮かべながら止めようとする。

だがそう言おうとした瞬間にカラドラールの余波が何かに衝突し、凄まじい爆音と閃光を上げる。

なのは達が徐に目を開けた時、目の前に映ってきたのは衝撃的な光景だった。

「あ！」

なのは達の目の前には、金色に輝くクロノデジゾイドの鎧をも打ち砕く破壊力のカラドラールから自分たちの身を守ってくれたマグナモンであった。

「マグナモン！？」

「ぐっは・・・」

マグナモンは力尽きると、その場に倒れ込み動かなくなった。

六課メンバーは倒れたマグナモンに駆け寄った。

「おい！マグナモン！！」

「こいつ、私らを守ってくれたのか・・・！？」

「そんな・・・／／／」

思わず涙ぐんでしまうキャロやマリア。

そして、この絶望的な光景を遠く離れた場所にて目の当たりにしていたテントモンは力の抜けた声で無残にもやられていった聖騎士たちに眼を疑った。

「ロイヤルナイツが・・・・・・」

テントモンがそう呟くと同時に、現場に居合わせているユーノ達は険しい表情を浮かべながら一か所に集まり、残ったメンバーを確認しながら武器を構える。

「オグドモン・・・・・・このものの力・・・・・・我々の理解を超えている!!」

「我々には・・・勝ち目はないのか!」

すると、そんな声を上げてしまうスレイプモンとクレニアムモンの言葉を聞き、一護が口を挟んだ。

「だったら何だよ。このまま逃げるつもりか?」

「「!?」」

「理解出来ねぇもくそも関係ねェ。勝たなきゃならねぇならぶっ倒す。どんな手を使ってでも、俺たち全員の力でな!」

一護がそう言うと、聞いていたユーノもほくそ笑みユーノやなのは、恋次は二体に向かってこう言う。

「そう言う事♪兎に角!戦わなきゃいられないのは、僕も同じ。あ

いつを止めないと」

「うん。」

「ま、何とかしてみせるさ」

その言葉を聞くと、二体は顔を見合わせ鼻で笑うと納得した表情となった。

「・・・ああ。そうだったな」

「何としても、我々は勝ってみせる！」

スレイプモンとクレニアムモンは各々の武器を強く握りユーノ達を守る様に先頭に立つと、ユーノ達も臨戦態勢となってそれぞれのポジションに着く。

オグドモンはそんなユーノ達を上からものを覗き込むようにこう呟く。

「愚かな。力の差を思い知るがいい！」

「行くぜ！」

「「「「はい（おお！）」」」」

一護の掛け声とともに、前線メンバー全員は一斉に動き始め、ヴォルテールをその場にシィ往還したキャロ、補助デバイスとＩＰカートリッジの力で強化した卍解とグラーフアイゼンを発動させた恋次、ヴィータの三人はオグドモンに攻撃する。

「ギオ・エルガ！」

「鋼鉄狒骨大砲！！」

「クラッシャーシュラーク！」

三人の攻撃がオグドモンに仕掛けられると、オグドモンは七本の脚を器用に使い、飛んでくる砲撃を弾き飛ばし、グラーフアイゼンの打撃を受け止めてしまう。

「な！足で・・・！？」

「ヴォルテールの砲撃もまるで効いていません・・・！」

衝撃を受ける三人に、オグドモンは声高に叫ぶ。

「これがオグドモンの悍ましき力だ！」

オグドモンは腹部の口を広げると、衝撃波導『カラドラール』を発射し、三人はそれを受けると数十メートル先へと飛ばされる。

「「「ぐあああああああ！」」」

「キャロ！ヴィータ！」

「何だよこのパワー・・・手が付けられないぞ！」

ユーノはスレイプモンの肩に掴まりながら常軌を逸しすぎているオグドモンの力に愕然としていると、オグドモンは一同にこう言って

来た。

「欲望こそが全て・・・欲望こそが生きる意味!!喰らうがいい・・・これが我が欲望の全て!!『オーラーティオ・グランディオロクア』!!」

オグドモンはその瞬間、自らの欲望に従って破壊の限りを尽くし暴れ回る必殺技『オーラーティオ・グランディオロクア』を発動し、ユーノ達は一旦回避する。

「くそっ!!」

欲望のままにオクドモンが暴れ回ると、街は一瞬にして廃墟と化していき、デジタルワールドが激しく揺れ動く。

スレイプモンは究極体の力を遥かに超えているオグドモンの暴走を何とか食い止めようとし、オグドモンの脚にブリザードを叩きこむ。

「『オーディンズブレス』!」

スレイプモンが必殺技を発動させると、それに便乗してはやての方もまた凍結魔法を上乗せし発動。

「来よ、氷結の息吹?アーテム・デス・アイセス一!」

二人の凍結攻撃によってオグドモンの脚が凍りつくと、オグドモンは余裕の笑みを浮かべる。

「はははははは!!!!欲望の力、この程度の薄皮一つで止められはせぬ!!!!!」

その瞬間、オグドモンはいとも容易く足の氷を破壊し、その足を伸ばして二人を攻撃した。

「ぐあああああああああ！」

「きゃあああああああ！！」

「「はやて（ちゃん）！！」」

「「スレイプモン！」」

スレイプモンは何とか体制を整えることが出来たが、はやては気を失いリィンとのユニゾンが強制的に解除されてしまった。

アギトはシグナムと融合した状態で全身から湧き出るオグドモンへの怒りの炎を燃やす。

〈この！！いい気になりやがって！！〉

シグナムはレヴァンティンの刀身に怒りと悲しみ両方が含まれた炎を灯すと、勢いよくオグドモンの頭上へと叩きこんでいった。

「紫電・・・一閃！！」

渾身の一振りをオグドモンへと振り下すシグナムであったが、オグドモンは不敵な笑みを浮かべると敢えて何もせずに立ち尽くす。

そして、シグナムが剣先を振り下した思いつつ目の前を凝視すると、なんとあろうことが剣先が寸でのところでオグドモンに届いていな

かったのだ。

「な・・・！刃が通らない！？」

オグドモンは驚愕に満ちた様子のシグナムの体を鷲掴みにすると、廃墟と化した街の彼方へ向けてシグナムを投げ飛ばす。

「ぬりゃあああああああああああ！」

「ぐあああああ！」

「シグナム！」

「シグナム副隊長！」

シグナムは地面に叩きつけられ、アギトのユニゾンが解除されるとアギトともに気を失い戦闘不能と化した。

オグドモンは圧倒的な強さを誇り、唖然とするユーノ達に向けて言う。

「負ける訳がない。七大魔王全ての記憶と力、欲望を受け継ぐこの我がこんな害虫どもに負ける訳がない！」

そう言った途端、背後より魔槍クラウ・ソラスを手に取ったクレニアムモンが向かって来た。

「エンド・ワルツ・・・！」

エンド・ワルツをその身に受け、オグドモンはやはり無傷の状態を

保つとクレニアムモンに反撃を喰える。

「無駄な足掻きをするでない！」

「ぐあああああああ！！」

クレニアムモンは至近距離からの凄まじい攻撃をその身に受け、吹き飛ばされる。

「クレニアムモン！！」

近しい友が吹き飛ばされる光景には流石のスレイプモンも張り裂けるような声を上げ、クレニアムモンは持っていたクラウ・ソラスを大破させ思う通りに動けなくなってしまう。

「ぐ・・・・・・！」

「ははは。いい加減諦めろ。こんな穢れきった世界はもうじき破滅の未来を迎える。そして！その腐りきった世界を再生し、理想の世界を築き上げるのがこの我！七大魔王も超越した究極の神！オグドモンなのだ！！」

「く・・・」

思わず歯を食いしばるユーノ。

すると、そんなオグドモンに反抗的な口調で臨んできたのはなのはであった。

「神様なんだと良い気になんかならないで！」

なのははエクストリームカノンの砲門からエクセリオンバスターをお見舞いし、それを受けたオグドモンはゆっくりとなのはの方へと顔を合わせ、ユーノは思わず声を上げる。

「なのは！」

なのははオグドモンの姿、力に根源的な恐怖を感じながら震える手を必死に抑え、自分の思ったことを真っ直ぐと伝え始める。

「神様だったら、何をしてもいいって言うの？神様だったら無暗に命を奪っていいことが許されるの！？そんなの・・・そんなの絶対間違ってる！私はそんな神様も、世界も絶対に認めないんだから！！！」

〈Ｓｔａｒｒｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

なのはは意を決し、周囲の魔力素を集束し始め桜色に輝く巨大な砲撃を作り出していくと、フェイトは思わず目を疑った。

「なのは・・・まさか！」

「止せ！！そいつには通じねぇ！！なのは・・・！！」

一護もそう言ってなのはの行動を止めようとするが、なのははまるで止める様相を見せず、オグドモンは哀れみの表情を浮かべる。

「何とも愚かな・・・これだけの力の差を見せつけられ、何故歯向かう？何故屈しない！？」

「私は希望を捨てたわけじゃない。それは他のみんなも一緒。誰かが支えてくれるから、大切な人達がいるから、私は曲がらず真っ直ぐ生きていける。みんながいるから・・・・・・不屈のエースオブエース『高町なのは』はそういられる！！」

凛とした瞳を浮かべてそう言い終えたなのはは魔力を極限まで集めた自身の代名詞であり最強の威力を誇る必殺技、スターライトブレイカーをオグドモンへと向ける。

「全力・・・全開！！スターライト・・・ブレイカー！！！！！！！！！」

その瞬間、なのはの頭上から降り注がれるこれまで一度も見たことのないほどに巨大でそれこそ全てを飲み込んでしまいかねない規格外なスターライト。

しかし、オグドモンは怯える様子も見せず寧ろ楽しんでいるかのような顔を浮かべていた。

「ふん。曲がることも出来ないような奴に、貴様は一生我に勝つ事も、生き抜くことすら出来はしない！何故なら、この穢れきった世界は既に曲がることによって成り立っているのだからな！！」

すると、オグドモンは口を大きく広げて飛んでくるなのはのスターライトブレイカーを根こそぎ吸い込んでいく。

「な！」

思わずその光景に目を疑うなのはやユーノ達。

オグドモンはスターライト全てを飲み干すと、自らのエネルギーとして還元してしまい、口からはほんの少しの桜色の魔力素が漏れ出した。

「スターライトを・・・！！」

「飲み込んだ！」

「そんな・・・・スターライトを飲み込むなんて・・・／／／」

自身の必殺技ですらまるで意味を持たないオグドモンの力になのははただただ絶望し、全身は凍えるような恐怖を感じ始める。

オグドモンはそんな様子のなのはを見ながら悪意に満ちた笑みを浮かべ言い返す。

「何が不屈だ？何がエースだ？脆弱な人間如きが大層な口を抜かす。所詮貴様ら人間は、弱き自分を認められぬが故に、脆弱な者同士群れを為すだけの害虫に過ぎぬ。自己証明の為に他を利用し、都合の悪い欲望の前では平気でそれを斬り捨てる。貴様ら人間はそう言う人種なのだ！」

オグドモンはすっかり人間を見限った口ぶりでそう言うと、巨大な脚で相手を粉砕する必殺技『グラドゥス』をなのは目掛けてお見舞いする。

「『グラドゥス』！」

「は！」

〈Ｍａｓｔｅｒ！　Ｒｕｎ　ａｗａｙ！！（マスター！回避を！！）〉

レイジングハートは主人に向けて回避を促すが、当のなのはは恐怖のあまり体が硬直し、まるで動くことが出来ないでいた。

「（駄目だ・・・身体が・・・・・・動かない・・・！）」

なのはが動かない様子を仰ぎ見ながら、フェイトとスバルが張り裂ける声で叫ぶ。

「なのは！！」

「なのはさんっ！！！」

そして、直後オグドモンの攻撃が直撃凄まじい轟音と共に土煙が上がった。

思わずその光景に膝をつくフェイト達だったが、直後目の前に映って来たんは信じられない光景であった。

何と、攻撃を受けたはずのなのはは至って平気であったのだ。

その理由はそのなのはの目の前に居る人物が代わりに攻撃を受けたからである。

「・・・え・・・・・・・・・」

なのはは思わず目の前に居る人物を疑いたくなった。

「がっ・・・・・・・・・・」

「え・・・え・・・・・・・・・・・・・・」

そこに居たのは、グラドゥスをなのはの代わりに受け、体にオグドモンの脚が貫通し血塗れとなった様子の最愛の人物、ユーノ・スクライアであったのだから。

ユーノは咄嗟になのはを守ろうと前に出て結果このような事になってしまい、なのはは12年前のかつての自分の怪我の事を思い出しながら、今まさにユーノがそれと同じ目に遭っている光景に衝撃を受け、同時にこの世の終わりとばかりの絶叫を発した。

「いやああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

なのはは直ぐに力なく墜落して行ったユーノの元へと飛んでいき、全身に血に染まったユーノの身体を抱き上げ涙を流し反応を待った。

「ユーノ君っ！！！！！！！」

一護たちも急いでユーノの元に駆け寄り、意識を確かめようとする。

「ユーノ！！おい！！！ユーノ！！！！！」

「・・・・・・・・」

しかし、いくら一護達が強く呼びかけても、ユーノは血塗れとなったまま息も吹き返さず冷たい体を保つばかり。

「バカな・・・・・そんな・・・ユーノ・・・／／／」

「く！！ユーノ・・・／／／」

一護やスレイプモン達が悔し涙を浮かべると、なのはもその事に絶望し、頭が真っ白と化していきながら自分の白いバリアジャケットに真っ赤に染まったユーノを抱き寄せ無力な自分と愛おしい人物の死に涙を流す。

「そんな・・・！！そんなの・・・／／／こんなのって・・・どうして・・・どうして私なんかの為に・・・／／／」

最愛の人を目の前で失いただただ涙を流すなのはであったが、そんななのはの耳に飛び込んできた次の言葉で一同は耳を疑うことになる。

「・・・私・・・なんかの為になんて・・・言わないでよ・・・」

「！」

なのはがその聞きなれた声に衝撃を覚えながら徐にユーノに顔を向けると、なんとなのはの胸の中でユーノは血塗れになりながらも柔らか表情を浮かべて息を吹き返したのだ。

「ユーノ君っ！！」

「ユーノ！」

「何だと？あれだけの攻撃を受けながら何故死なぬ？！」

オグドモン自身もこれには心底驚いた様子であったが、するとユーノは徐になのはの体から離れると、貫通した身体の傷を押さえながら苦い顔で答える。

「――答えは単純明快だ・・・僕が地獄に見出された元・咎人で・・・現世にその身を留めることで死ぬまで呪い背負い続けることを代償に余程の事がない限り死ねなくなった人間だからさ・・・・・・」

ユーノがそう言うと、背中に刻まれた地獄の呪いがユーノの生命の危機に瀕して自動的に発動すると、致命傷とも呼べるユーノの傷口を超速再生させていく。

「傷が・・・！」

「塞がっていく・・・・！？」

なのは達はこの衝撃の光景に思わず目を疑い、同時に一護はこの事の意味と後の危険性を考え目を見開いていた。

ユーノは傷口をふさぐと、その直後地面に膝をつき今にも倒れそうな様子で荒い息を立て始めた。

「は、は、は、は、は、は、は」

「おいユーノ！そんなことしたらお前・・・！」

一護がユーノに駆け寄り声を掛けようとすると、ユーノはそんな一護の肩に手を乗せる。

「え・・・？」

思わずそんな声を漏らす一護に、ユーノは何時もの笑みで答える。

「大丈夫ですよ・・・・・・まだこれくらいは・・・・・・うっ！！」

その時、ユーノの様子が急変する。

「どうした！？」

「みんな・・・・・・離れるんだ・・・！！早く！！」

ユーノは苦しそうにそう言うと、唐突に彼の全身から禍々しい漆黒に染まった霊圧が放出され始め、一同は思わず身の危険を感じ緊急回避する。

「ユーノ君！」

「がああああああああああああああ！！！！」

なのはは突然苦しみ始めたユーノを心配しながら彼の様子を窺うと、その直後彼の瞳がいつもの翡翠色から赤に染まり始め、胸元からは白いものが溢れ出て来たのだ。

「これは・・・・！」

「何だ！？」

事情を知らないユーノスやスレイプモンがユーノに注目すると、ユーノはこの上もないほどの苦しみを味わいながらその身体を徐々に忌まわしき存在へと変化させ喚き声を上げる。

「く・・・・!!!!!があああああああああああ!!!!!ウオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!」

ユーノの全身を覆い隠すように白い肌とそれに見合わぬ巨大な腕、そして細長い頭蓋骨が構築され始め、一護達は思わずそれに目を疑った。

「あ!」

「あれは・・・・!」

「クシャナーダ化か!?」

「まさか・・・あれがユーノの言っていた地獄の呪い!」

「そうだ。あいつのクシャナーダ化は、破滅の力・・・一度飲み込まれればすべての世界を破壊し、地獄と化すまで暴れ続ける・・・!」

一護がそう説明すると、聞いていたなのはは嘗て暴走しとめられなくなったユーノのそれを思い出し、涙ぐんだ様子で暴走寸前の状態のユーノに言葉を投げかける。

「ダメ、ユーノ君ッ!!!暴走だけはしちゃダメ!!!元に戻って!!!!!お願いだから!!!!」

「グアアアアアアアアアアア！！！！！！！！うう・・・・！！！！！！」

ユーノはなのはの言葉さえ聞き取れないほどにまで追い詰められ、急速に自分の魂と身体がクシャナーダ一緒に染まっていく中で、それでも必死に抵抗を続けるが一護はここでこんな言葉を呟いた。

「晩翠の喪失で、ただでさえあいつの負荷は想像以上に増えてやがる・・・このままじゃ本当に！！」

と、その時暴走を免れないほどにまでクシャナーダ化が進行するユーノは何とか意識を保ちながら変声機で加工したような声で答える。

「マダ・・・ダ・・・コレグライデ・・・ナントカナルワケ・・・！！！！！」

オグドモンは意識も碌に保つ声危うい今のユーノに思わずつぶやく。

「ふん。何とも哀れなものだな。一度は人間を捨て化け物と化して尚、人間であることを止めぬとは――――――」

すると、一護は愛弟子であるユーノは平然と化物呼ばわりしたオグドモンに憤りを覚える。

「てめぇ・・・・・・ユーノをてめぇと同じ化物呼ばわりするんじゃ・・・ねぇ！！！！！！！！」

一護は虚化してオグドモンへと飛び出して行く。

「一護！！！」

「あなた！！！」

ルキアと織姫が止めようとするも、一護は制止を聞かずにオグドモンへと向かって行き、全身全霊の霊圧を込めた月牙をお見舞いする。

「月牙・・・・・・天衝ッ！！！！！！！！！！！！！！！」

「諄いわ！！！！」

オグドモンは一護の月牙を足で掻き消し、虚化した一護にグラドゥスをお見舞いし、一護を地面へと叩きつける。

「がああああああああああああ！！！！」

「「「「一護（あなた）！！」」」」

一護は地面に叩きつけられると、満身創痍となって虚化が解けてしまう。

スレイプモンは横で精神を保つことも限界に達しているユーノを一瞥し、意を決してオグドモンへと向かっていく。

「負けるか！！」

「スレイプモン！」

ユーノスが咄嗟に呼びかけて止めようとするが、時すでに遅し。

スレイプモンは天を翔るか如く飛翔し、オグドモンへと向かって行

った。

「ぬおおおおおおおおおお！！！」

「無駄だと言っているのが分からぬのか！！」

オグドモンは向かって来たスレイプモンの体を鷲掴みにし、それをクシャナーダ化が進む中でユーノは思わず目を疑う。

「！」

そして、オグドモンはスレイプモンを押しつぶすように握りしめると、ユーノ達の元へとスレイプモンを投げ飛ばした。

「ガアアアアアアアアアア！！！！！！」

スレイプモンはオグドモンの反撃を受けると、ついに力尽き究極体の姿から成長期の姿であるクダモンの姿へと戻ってしまった。

「クダモン！」

「く・・・クダ・・・モン・・・！」

ユーノ達が目の前で満身創痍となった倒れるクダモンを心配する。

「う・・・・・・」

思うように動かない体でクダモンは何もできなかった。

「ははは！害虫の分際で、我に向かって来るからそうなるのだ！」

「ク・・・・・・！」

ユーノは倒れたクダモンと、オグドモンの傍若無人な振る舞いにとうとう我慢の限界に達すると、進みゆくクシャナーダ化を凄まじい意志の力で抑え込もうとし始める。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

一同は思わずその様子に驚愕するが、その直後今迄ユーノを蝕んでいたクシャナーダ化が突如後退し始め、ユーノは人間らしい容姿を取り戻し始めたのだ。

「クシャナーダ化が！？」

「ユーノが・・・自力で制御したのか！？」

なのは達は恐るべき意志の力で地獄の番人であり呪いの姿でもあるクシャナーダを抑え込むことに成功し、元の自分へと戻ったユーノに驚愕を覚える中、ユーノは息を立てながら徐に立ち上がりふら付く体でオグドモンに言葉を投げかける。

「は、は、は、は、は、は、は、は、は・・・これ以上・・・・・・仲間を・・・クダモンを傷つけるな！」

「ユーノ・・・」

「デジモンが仲間だと？ははは・・・害虫を仲間などとは。何とバカバカしいことを！」

「「「く！」」」

思わず歯を食いしばる一同。

オグドモンと化したムルムクスモンは不敵な笑みを浮かべながらユーノ達に目を向け次のように言い始めた。

「知っての通り、我がベルフェモンを復活させ殺してきた多くのデジモンはすべて・・・このオグドモンを蘇らせるためのエネルギー。即ち、七大魔王でさえも我の野望を叶えるための糧となったのだ。」

「野郎・・・」

「存在することに何の価値もない連中に、我が役目を与えてあげたのだ。感謝されこそすれ憎まれる理由などありはせぬ！」

「なんて勝手な事を・・・！」

なのはも思わずそう口にすると、その横でユーノは張り裂けるような思いで化身であり子心を持たないオグドモンにこう言った。

「お前は・・・！何もわかっていない！」

「？」

「デジモンだって中身はデータの塊かもしれないが、それでもちゃんと足使って立って歩くことが出来る普通の生き物なんだ！人間と同じ生きている！」

「何を世迷言を」

「お前は知らないだろう。生き物にあってお前には無いもの・・・・・・それは“心”だ。僕は知っているよ。高町なのは――――――大きな、誰よりも大きくて優しい暖かい心を持っていた。」

「！ユーノ君・・・」

なのはは思わず驚きの表情を浮かべ、そんななのはを一瞥してユーノは嘗ての事を思い返しながら語り始める。

「無茶して大怪我した僕を助けてくれて、一緒にジュエルシードを探してくれた。孤独だった僕に温かい居場所をくれた。笑いかけて優しくしてくれた。とてもとても、暖かかった！」

「ユーノ・・・」

「なのはだけじゃない！クダモンと過ごしている内に、確かに僕は感じた。クダモンの心を。親しみを感じていたあの顔を・・・――お前は何も知らない！なのはの事も、デジモンの事も！僕から言わせれば・・・――――お前は本当にかわいそうな奴だよ」

そう言った時のユーノの顔は怒りの表情から一変、寂しげなものとなっていた。

しかしオグドモンはまるで聞き耳を持たない。

「愚かな事を・・・デジモンに心？そんな戯言に拘っているから貴様らは弱いのだ！」

「く・・・」

「見るがいい我の強さを。アンゴルモアの力で手に入れたこの完全なる究極の力を！貪欲な欲望を自ら達成できる存在こそ一番素晴らしいのだ！欲望も何もない貴様など、羽虫と同じだ！！」

「欲望があろうがなかろうが、人間もデジモンも価値ある存在！両方尊い一つの命だ！仲間！！」

「ユーノ・・・！」

クダモンはその言葉を耳にし、ユーノの方をじっと見つめる。

ユーノは拳を強く握りしめながらオグドモンに魂の想いをぶつける。

「人間が一番？違う――デジモンが一番？違う――！暖かさと居場所を教えてくれたなのは。厳しさと守ることの意味を教えてくれた一護さん。どんな時も絆を分かち合えた大切な仲間たち！そして・・・――このデジタルワード全てのデジモンたち。みんな大切な・・・大切な――――僕の仲間だあ！！！！！！！！！！！！！」

すると、その時ユーノの全身から翡翠に輝く膨大なデジソウルが発生し、クダモンやなのは達は思わず目を疑った。

「な！」

「お前には、誰もいない。誰一人仲間がいない！僕は勝つ！！何故なら僕には仲間がいるから！おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

ユーノは全身から湧き出るデジソウルを爆発的に放出していくと、それを周囲に拡散させ気を失いデータが進んでいたロイヤルナイツや仲間たちに分け与える。

「こ・・・これは・・・！」

「何が起こってやがる！！」

「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

すると、ユーノのデジソウルをその身に受けた瞬間、デュークモン達のデータ化が停止し、傷を癒して回復を果たし、デジソウルを纏って立ち上がってきた。

「！これは・・・」

オグドモンは目の前の出来事が信じられないでいた。

勿論それは周りのなのは達もそうであったが・・・――――

ユーノはデジソウルの力で仲間たちを復活させると、傷だらけのクダモンを抱きかかえ纏っていたデジソウルで回復させると、そのクダモンを下してこう言った。

「クダモン！見せてあげよう。人間と・・・デジモンの力って奴を！僕と君、そしてみんなの力で！」

「ユーノ・・・・・・ああ！」

ユーノは懐から結界印を取り出すと、蓋を開封してスレイヤーモー

ドへと変身する。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身を遂げると、ユーノはクダモンと一緒にオグドモンに目を向け全速力で走り出す。

「行くぞ！おおおおおおおおおお！！！！」

ユーノがオグドモンに向かっていくと、クダモンも覚悟を決め唸り声を上げながらユーノと一緒に走り出す。

「ほおおおおおおおおお！！」

「「ユーノ！」」

「「ユーノ君（さん）！」」

オグドモンは向かって来る二人に容赦なく攻撃を仕掛けるが、二人は走りながらその攻撃を的確に躱していき、一護達もそんな二人を援護するために動き出す。

「俺達も行くぞ！」

「おっし！ぬいぐるみの俺様も行くぜ！」

「こうなったら徹底的に暴れてやるよ！」

一護達は人種も性別も、そして姿・形も関係なしにただ二人の後に続いて目の前のオグドモンを足すために一斉に向かっていく。

「リボルバーシュート！」

「クロスファイアーシュート！」

「弧天斬盾！私は拒絶する！」

スバル、ティアナ、織姫の三人がユーノとクダモンに攻撃を仕掛けようとするオグドモンの脚にそれらの技を仕掛けると、二人は隙を見てオグドモンの脚を伝って登り始める。

「く！おおおおお！」

「『弾丸旋風』！」

クダモンは必殺技の弾丸旋風をユーノに攻撃を向けるオグドモンの脚に放つと、成長期の攻撃でありながらオグドモンの脚は傷ついた。

だがその直後その事に怒りを覚えたオグドモンが七本ある脚の一本でクダモンを攻撃し弾き飛ばした。

「ぬあああああ！」

「クダモン！」

ユーノは足に掴まりながらクダモンに手を伸ばす。

「ユーノ！」

クダモンも空中に放り出された状態でユーノに向け小さな手を伸ばす。

そして、二人は手を取り合いユーノはクダモンの手を引っ張りオグドモンの脚に乗せる。

「よし！行くぞ！！」

ユーノとクダモンはビルほどに巨大なベルフェモンの頂を目指して足を昇り始める。

なのは達も二人を目指して追いかけていくが、直後オグドモンがなのは達目掛けて衝撃波導を放った。

「しまった！」

ユーノはそれに気づいた瞬間、後ろの方で大爆発が起きる。

「！一護さん！なのは！！みんな！！」

だが、爆炎が晴れた瞬間ユーノの目に映ってきたのはユーノのデジソウルを受けた事で先ほどとは比べ物にならないほどの力を手に入れたシャマル、ザフィーラ、ユーノスと織姫の四人の防御結界だった。

「おっと。俺達がいるのを忘れる出ないぞユーノ」

「あ！」

「後方支援と防御は、私達に任せて」

「お前たちは早くあの化身を」

「はい。」

ユーノはその言葉を受けると、再びクダモンと一緒に上り始め、なのは達もまたオグドモンの注意をひくために攻撃を続行する。

「ロイヤルナイツの力を以てしても倒せなかった我を相手になぜそこまで抵抗するのだ？つくづく、貴様らの思考は理解の枠を超えている」

オグドモンはそう言いながら向かって来る六課メンバーに攻撃をしかると、デジソウルの力を受けたギンガ、ザフィーラ、そしてフェイトがそれに立ち向かった。

「ウィンニングブラスト！」

「鋼の軛！」

「プラズマスマッシャー！」

オグドモンはその攻撃をその身に受けると、思わず険しい顔を浮かべる。

「く・・・ぬお！？」

だがその直後、頭上からグラムを構えたロイヤルナイツのデュークモンとマグナモン、そしてクラウ・ソラスを復活させたクレニアム

モンがいた。

「人間だけが貴様の相手ではない！『ロイヤルセーバー』！」

「『エクストリーム・ジハード』！」

「『エンド・ワルツ』！」

三体のこれまでにないほどに威力を持った攻撃をその身に受けると、オグドモンは思わず声を上げた。

「ぬあああああああ！馬鹿な・・・！何故貴様らまでもが！？」

そんなオグドモンをさらに追い詰めるのが桃色に輝く鎧を身に纏った騎士デジモンの王たるロードナイトモン。

「『スパイラルマスカレード』！」

スパイラルマスカレードがお見舞いされると、オグドモンは体勢を崩しそうになり、その間にユーノとクダモンが体を伝って頂を目指して登って行く。

「「おおおおおおおおお！！！！」」

なのは達は援護をする傍ら二人に呼びかける。

「「「店長！」」」

「「「「ユーノ先生！」」」」

「「ユーノさん！」」

「「「ユーノ（くん）！」」」

「ユーノ君！」

「お、おのれ・・・！！」

怒りに燃え、オグドモンは進行を阻止すべくユーノとクダモン目掛けて頭上からアンゴルモアの力で作り出した発射口から砲撃を仕掛ける。

身体を昇りながらそれを交わしていく二人。

そんな二人を援護すべくスクライア商店三人が最強モードで立ち向かう。

「鳳仙烈火！」

「ドルフィンドライブ！」

「ダイナミックストーム！」

三人の攻撃を受けたオグドモンの攻撃は見事粉砕。

オグドモンは究極の力を手にした自分の力をも上回る彼らの戦闘力に跳ね上がり方に最早こう言わざるを得なかった。

「理解出来ぬ・・・理解出来ぬ！！」

オグドモンはそう言いながら攻撃を続行すると、更にスクライア商店三人に続けて白鳥とマリア、そして一護達が力を発動させる。

「琴線斬！」

「華奠腕！」

「エクストリームバスター！」

「火龍一閃！」

「次の舞・白漣！」

「面を上げろ、侘助！」

「咆えろ、蛇尾丸！」

「月牙天嵐！！」

怒涛の連続攻撃をその身に受け、オグドモンが後退する。

そして、漸く頂付近にたどり着こうとしていたユーノとクダモンは思い切り飛び上がると、オグドモンの顔目掛けて拳をぶつけようと接近してきた。

「「うおおおおおおおお！！」」

「笑止！」

だがその瞬間、オグドモンの足元から無数の蔓が伸びてくる。

蔓は殴りかかろうとしてきた二人の体を絡め取り、二人は身動きを封じられ、その蔓を通して七大魔王の力が注がれる。

「「ぐおおおおおおおおおお！！！！」」

「ユーノ！」

「ユーノ君！」

「ユーノ！クダモン！」

二人の悲鳴を耳に入れた六課メンバー。

ユーノ、そしてクダモンはどうなってしまうのか！

◇

〈地球Ｓｉｄｅ〉

その頃、今にも世界の崩壊が訪れようとしている次元世界の一つ、地球の方では人々は頭上に浮かんで来るデジタルワールドの激しい戦いの様子を一様に仰ぎ見ており、高台の方に避難していたユーノの親友、木之本小狼夫婦と友人大道寺知世はオグドモンと必死に闘うユーノ達の姿を見ていた。

「ユーノ・・・」

「ユーノさん・・・」

「みなさん・・・」

勿論、この光景が映し出されているのは地球だけではない。

ミッドチルダの機動六課の方で留守をしていたなのはとユーノの娘であるヴィヴィオにもしっかりと伝わっている。

「ママ・・・パパ・・・頑張って・・・」

人々の願いは唯一つ。

彼らに世界の崩壊を防ぐために、何としてもオグドモンに勝利をしてもらうことだった。

一様に世界の人々はそれを強く祈り、手を合わせるのであった。

◇

〈デジタルワールドＳｉｄｅ〉

人々が強い祈りをささげている頃、デジタルワールドの方で世界の滅案を分ける熾烈な戦いに身を投じているユーノ達の敗色気味な様子を傍観するバンチョーレオモンは苦い顔を浮かべる。

「ここまでか・・・」

だがその言葉を耳にし、その横に立っていた謎のオッドアイの少年は周りを前方を指さしながら呟く。

「諦めないでよ。見て」

バンチョーレオモンが前方を見つめると、瞳に映ってきたのは決して諦める様子を見せずに果敢に立ち向かうユーノ達と、そんな彼らを種族にかかわらず応援する世界の人々の様子であった。

「デジタルワールドと次元世界の崩壊を防ごうと、人間もデジモンも死神も種族に関係なしに一丸となって協力しているんだ。だから、僕らは決して最後の最後まで希望を捨てちゃいけないんだよ。」

少年はそう言い終わると、真剣な眼差しでその瞳に映ってくる蔓に絡まれオグドモンに苦しめられるユーノとクダモンを見つめる。

「ぐ・・・・！」

「くそっ・・・！」

二人は蔓に体を絡め取られ全く身動きが出来ないとともにオグドモンの力の所為で体力が徐々に削られていく。

なのははそんな二人を助けようと砲撃を発射するが、まるで効果がない様子を見せる。

なのはは歯がゆい気持ちを拳に込めながら、二人に向けてこう叫んだ。

「ユーノ君っ！クダモンっ！く・・・・・・ユーノ君ッ！！！！！！！！！！！！！！！頑張って！！！！！！！！！！！！！！！」

なのはがそう叫んだ瞬間、なのはの体から湧き出てくる桜色に輝く膨大なデジソウル。

「ぬ！これは・・・この輝きは・・・・・・！？」

バンチョーレオモンはなのはから天に向かって放出されるデジソウルの輝きを見過ごさなかった。

しかも驚くことにデジソウルを放出するのはなのはだけではない。

一護達全員もそれぞれの個に合わせた色のデジソウルが天に向かって放出されていき、それに便乗して次元世界各地でデジソウルが大量放出され始めたのだ。

浦原商店の方でデジタルワールドのバランスと次元世界のバランスを見積もっていた泉光子郎も外の景色を仰ぎ見ながらデジソウルを放出する。

「デジモンたちと、機動六課の皆さんが頑張ってくれている。僕達の為に諦めずに戦っている。そうですよね、浦原さん」

「はい。私達は、まだ諦めてはいけません」

浦原もまたそんな光子郎の横で紅色のデジソウルを放出。

ミッドチルダの方でもヴィヴィオや他の局員スタッフが祈りを捧げながらもその想いを具現化させたデジソウルを放出させる。

「パパ・・・ママ・・・お願い勝って・・・！」

同じころ、高台の小狼たちも同じ体験をしていた。

「！ケロちゃん！？知世ちゃん・・・小狼君も！」

「何やねんこれは・・・？」

「分からない・・・だけど感じるよ。あいつの・・・ユーノと同じ気持ちが」

「はい。何だか、力が湧き上がってくるようなこの心地よさ」

「絶対絶対、大丈夫！だよね？」

さくらが無敵の呪文を層となえると、それに呼応するかのように別の場所に避難していたなのはの親友であるアリサとすずかは頭上に浮かぶユーノ達に叫んだ。

「頑張って！ユーノ。なのは。みんな！」

「みんなの世界を守って」

全次元世界から放出される膨大なデジソウルはデジタルワールドに向かっていくと、全てそれがユーノとクダモンに注がれる。

オグドモンはその奇怪な光景に思わず目を疑った。

「何だ・・・この膨大なデジソウルは！？」

その一方でオッドアイの少年は不敵な笑みを浮かべ呟く。

「へぇ。これも全部あの人を想うみんなの力か・・・・・・やっぱ凄いや――――――お父さんは」

そして、一護達自身も自らのデジソウルと周りからユーノ達に向けて降り注がれる無数のデジソウルに目を奪われる。

「この輝きは・・・」

「デジソウル・・・？」

「感じます・・・みんなの想いを・・・」

「聞こえます。ユーノ先生とクダモン、それに私たちを励ますみんなの声が・・・！」

前線メンバーは全世界の人々とこのデジタルワールドに住まうデジモンたちの祈りの声を心の中に反響させ、ユーノとクダモンもそれをしっかりと受け取っていた。

オグドモンはそんな無限の力を発する人間とデジモンの力に驚愕し、理解出来ぬと言わんばかりの表情で尋ねる。

「何故我の邪魔をする？お前たちの生存確率など、ゼロに等しいというのに！？」

「それ、間違ってるよ！」

すると、それを聞いて真っ先になのはが反論し、続けて一護やユーノスがこう口にした。

「一人一人の力は小さいかもしれないけど・・・」

「友を、仲間を想う力は無限大だ！！」

三人の言葉を聞くと、便乗したスバル達が更に述べる。

「私達はずっと・・・ずっと一緒にいたいから！」

「僕も店長やみんなと、一緒に生きたい！」

その時、一護達から放出されるデジソウルの輝きが一段と強さを増していき、コンと一緒に居たテントモンもデジソウルを放出しながらこう言った。

「俺様だって同じだ！！」

「光子郎はんと、みんなの想いを今・・・届けます！」

二人がそう答えると、ロイヤルナイツ達も心を一つに合わせオグドモンに言う。

「必ずすべての世界を・・・守り抜いて見せる！！」

「誇り高きロイヤルナイツの名に懸けて！」

ロイヤルナイツは全身からこれでもかとばかりのデジソウルを放出すると、間もなく接近しぶつかろうとしている世界を猛烈な勢いで押し戻そうとし始める。

「「「「「「「「「「ぬおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

オグドモンはまるでその事が理解できず、ただただ口にするばかり。

「理解出来ぬ・・・！理解出来ぬ！！理解出来ぬ！！！」

ユーノとクダモンはオグドモンの言葉を耳にし、無限大のデジソウルをその身に受けながらこう答える。

「お前には・・・決して分りはしない。」

「理解出来ぬ！！」

「確かに僕達は、欲望に呑まれて平気で人を裏切ったり憎しみで人を傷つけることもあったりする。絶対神のお前から言わせれば、間違った進化とも言えるほどにね。だがな・・・！」

「人の想いは・・・私達デジモンを強くする・・・！」

「デジモンは・・・僕達に夢と勇気を与えてくれる・・・！」

ユーノとクダモンは互いにそう言いながら蔓の中より腕を抜きだし、その手で絆を確かめ合うように強く握りしめると、口を揃えて断言する。

「「僕（私）たちは、もっともっと進化することが出来るんだ！！」」

すると、無限のデジソウルの力を存分に受けた二人の絆が最高潮に達すると、黄金に輝くデジソウルをその身に纏い光に包まれていく。

「これは・・・！」

「ユーノと、クダモンが・・・！？」

「これって・・・一体！？」

全員が目の前の光景に驚きながら光の中に目を向けると、その光の中でユーノとクダモンが新たな進化を起こし始める。

〈ＦＵＬＬＢＲＩＮＧ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ〉

「「フルブリングエボリューション！」」

クダモンは究極進化でスレイプモンへと進化すると、そこで更に自らの体をユーノの身体にフィットする鎧へと変換し、ユーノはその鎧を身に纏い第三の完現術コンボである姿を完成させた。

「「“深紅の聖騎士ー スカーレッド・スレイプー”！」」

光が晴れていき、紅色に輝く霊圧が放出されると、その中より出現したのはスレイプモンと同じレッドデジゾイドの鎧を身に纏い兜をかぶった聖騎士ユーノの第三の完現術コンボであった。

なのは達は思わずその光り輝く神々しい聖騎士の姿に目を奪われる。

「あ、あれは・・・！」

「ユーノ君とクダモンが・・・」

「融合した・・・！？」

「ただの融合ではない。あれは紛れもなく完現術による融合・・・！」

「と言うことはあれがあいつの・・・ユーノの第三の完現術コンボ！」

オグドモンは突如として現れた新たな力に覚醒したユーノとクダモンに思わず尋ねる。

「何だ・・・その姿は？そんな力、何処に隠し持っていた？」

「・・・――――」

二人は敢えて何も答えずじっとオグドモンを睨み付けるだけ。

「いくら見てくれが変わったところで、今の我に適うはずはない！！『グラドゥス』！」

オグドモンは七本の巨大な足でユーノに攻撃を加えようとするが、その攻撃が当たる寸前ユーノは冷静な口調で呟く。

「見てくれだけじゃないさ」

そう言うと、ユーノはオグドモンの攻撃を容易く受け止める。

オグドモンも傍らで見ていたなのは達も絶句する。

「な・・・！」

「あ！オグドモンの攻撃を！？」

「受け止めた・・・！」

「ふん！」

そして、ユーノはオグドモンの力を受け止めるだけにとどまらず凄まじい怪力でオグドモンの脚を掴んで投げ飛ばしたのだ。

オグドモンはこの状況に頭がついて行かないでいた。

「な、何なのだこの力は・・・！」

すると、ユーノは無限のデジソウルを聖弩ムスペルヘイムの矢に乗せ、オグドモンに狙いを定めるとクダモンと一緒に心を一つにこう言った。

「思い知るがいい、オグドモン！これが人間と・・・！」

〈デジモンの・・・！〉

「〈力だ！！〉」

〈Ｆｉｍｂｕｌｖｅｔ〉

「〈フィンブルヴェト！〉」

全ての想いを力に変えて、今ユーノとスレイプモンは矢を放つ。

矢が放たれると、それはスレイプモンを模したエネルギー体が変化し、オグドモン目掛けて突進する。

オグドモンは前方にバリアを展開し、攻撃を防ごうとするが、二人の想いの籠った猛烈な攻撃は勢いを衰える事は無かった。

「〈ほおおおおおおおおおおお！！！！！〉」

オグドモンの防御に亀裂が入り、二人の想いがそれを打ち破るとオグドモンの体にフィンブルヴェトの一撃が貫通する。

「ば、バカな！！こ・・・こんな・・・・こんな！！！！ぐあああああああああああああああ！！！！！！！！！」

オグドモンは絶叫を上げて苦しみだす。

「こ、こんな・・・こんな筈が！！！！グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

オグドモンはそう嘆きながら大爆発を起こす。

爆発の後、爆炎の中より姿を現す咄嗟にオグドモンの意志と分離したムルムクスモンがアンゴルモアの結晶を手に持って逃亡を図る。

「く！」

「逃がさない！！！！！！！！」

ユーノはムルムクスモンを捕えると、背中に生えた翼で飛び上がりムルムクスモンを追いかける。

「何！」

ムルムクスモンは追いかけてきたユーノに目を疑うと、ユーノはその拳に渾身の想いをこめてムルムクスモンに叩き込んだ。

「ムルムクスモン！！！！！！！！！！」

ユーノの拳がムルムクスモンにダイレクトにヒットすると、ムルムクスモンは全身から光を放つと同時にその姿を消滅させていく。

「ぐあああああああああああああああ！！！！！！！！！」

消滅した瞬間、ユーノはクダモンと共に光の中へと吸い込まれていき、なのはは思わず声を上げた。

「ユーノ君！！クダモン！！」

眩いばかりの光が辺りを包み込む中、その光の中に取り込まれたユーノとクダモンは変身を解除した状態でその中を浮遊していた。

暫くの間意識を失っていたユーノ達だったが、徐に目を覚ました。

「う・・・・・・なんだ・・・ここは？」

「天国・・・んな訳ないか・・・僕は地獄行き決定だし・・・だとしたらここは・・・」

そんな事を考えていると、不意に二人の耳に声が聞こえてきた。

〈気が付いたか？〉

「「？」」

二人が声のする方に目を合わせると、二人の目の前に現れたのは半透明上に輝く意志を持ったクリスタル体・・・そう、これこそがデジタルワールドの神とあがめられる存在、イグドラシルの本体なのである。

〈見せてもらったぞ。お前たちの力〉

「あなたは・・・」

「イグドラシル・・・！」

「え・・・これが・・・」

クダモンの驚きに満ちた言葉を聞き、改めてイグドラシルを見つめるユーノ。

イグドラシルは次のように独白する。

〈お前たちの絆とやらの力は、ベルフェモンやムルムクスモン、そしてこの私の予想を上回る強大な力だ。お蔭で、このデジタルワールドの未来は救われた。しかし分からない・・・何故お前たちは国土も文化も、まして種族も異なる者同士が共に暮らせる世界を望む？種族の違う世界が交われば、必ず争いが起こるというのに・・・〉

クダモンとユーノはそんなイグドラシルの言葉を聞いた後、直ぐにこう答えた。

「イグドラシルよ。傷つくことを恐れていたら、解り合うことなど永劫無理な話だ。」

「クダモン・・・僕は、クダモンもそうだし、色んな人と出逢って分かったことが沢山ある。その中でも、僕が一番すっきりと理解できたのはひとつ。“拳と拳、心と心で語り合えばどんな奴とでも解り合える”。それがやがて絆と言う名の頑丈なものへと変わって行くって」

〈成程。ならば私は確かめさせてもらうぞ。お前たちの絆を〉

「イグドラシル・・・」

〈いずれこのデジタルワールドのデジモンが、人間と共に暮らせる世界が来るのもそう遅くはないだろう。種族も性別も越えた無限の絆・・・――実現するかどうか、お前達の力次第――――――〉

イグドラシルはそれだけを二人に伝えると、光の彼方へと姿を消していく。

「イグドラシル！ちょっと待ってくれ――――――！」

ユーノは彼方へと消えゆくデジタルワールドの神に向かって言葉を投げかけるが、それは届く事は無く、気が付いた時に聞こえてきたのは聞きなれた女性の声だった。

「・・・君。ユーノ君ってば！お願いだから起きてよ、ユーノ君！」

「う・・・」

ユーノはなのはの声を聞くと、クダモンと一緒に意識を取り戻した。
なのは達は安堵の顔を浮かべる。
「ユーノ君・・・よかった・・・／／／」
「ユーノ！」
「ユーノ様！」
ユーノは自分を心底心配した様子で見詰めるかけがえのない仲間の顔を見つめる。
「なのは・・・一護さん・・・みんな・・・」
ユーノが意識を取り戻すと同時に目を覚ましたクダモンは直ぐにユーノス達に声を掛けられた。
「う・・・」
「大丈夫か、クダモン？」
「気が付いたか？」
「全く。お前らと言う奴は」
「もう。心配させないでよね」
若干呆れているかのような様子のなのは達。

と、ここでユーノは重大な事に気が付き直ぐに声を上げた。

「！アンゴルモアは！？デジタルワールドはどうなったの！？」

「それなら大丈夫ですよ。ムルムクスモンは消滅し、データはすべて元の基準値に戻りに次元の壁は復活しました。」

「無事に人間界から分離することが出来たようです。それと――――」

ティアナはそう言いながら、徐に持っていたユーノスが厳重に封印した本物のアンゴルモアを取り出した。

「あ！」

「アンゴルモアも本物でしたしね」

「俺が厳重に封印をしておいたから心配するな。序に、コアメダルの方も」

ユーノスはティアナの肩でそう言うと、偶然にもアンゴルモアと一緒に残っていた三枚の黒のコアメダル、サソリ・カニ・エビの三枚を取り出した。

ユーノもそれを見て思わず安どのため息をつく。

するとその時、頭上からデュークモン達ロイヤルナイツの声が聞こえてきた。

「お前たちのお陰だ」

「ロイヤルナイツ」

「お前たちのデジソウルと絆が、奇跡を呼び起こしたのだ。」

「見事だったぞ。ユーノ・スクライア。そして、クダモン。お前達こそ真の救世主だ」

「クレニアムモン」

クダモンはユーノの肩に乗り親友からの言葉を耳に入れると、そんなクダモンを見おろしながらクレニアムモンはこう言う。

「先に戻るぞ。今のうちに最後の別れを告げることだ、クダモン」

「ああ。ありがとう、みんな」

「ではさらばだ」

そう言うと、クレニアムモン達ロイヤルナイツは光となってデジタルワールドの復興と再建のためにその場を後にした。

彼らがいなくなった後、ユーノ達は今回の事で協力をしてくれた騎士たちに感謝の意を表した。

「ロイヤルナイツのみんな、ありがとう」

「ユーノ君・・・よかった!」

なのはは改めてユーノの方に顔を向けると、人目を憚らず彼の胸に

飛びついた。

「うわ／／／」

思わず顔を赤く染めるユーノはなのはを抱き寄せ、胸元で嬉し涙を流す彼女の言葉を耳に入れる。

「ぐっす・・・本当に・・・よかった」

「うん・・・ありがとう。なのは・・・――そして、ただいま」

ユーノはそう言うと、なのはの髪を撫ではじめその光景に嫉妬する者もいれば、微笑ましく見つめるものもいたそうな。

そして、夕陽が茜色に染まる頃を、隠れていたデジモンたちが世界の崩壊を救った英雄たちをたたえようと一斉に出てきたのだ。

胴上げを食らうユーノ達と、デジタルワールドの危機を回避したことに涙を流すテントモン。

「よかった！本当に良かったですね！」

「何であんたがここにいるのよ？」

ティアナが真顔でそんな事を呟くと、テントモンは思わず衝撃を受ける。

「そんな！そんな言い方はあんまりです！！ワテだって頑張ったじゃないですか！？」

一同はそれを聞くと、思わずほくそ笑むのであった。

胴上げが終わり、漸く落ち着きを見せ始めるとユーノはどっと疲れが出たのか、腰を下ろして深いため息をつくのであった。

「ふう・・・」

すると、そんな彼の首に巻きついてきたのはクダモンだった。

「疲れが出たか？」

「クダモン・・・」

「別れの前に、ここで寝かせて貰えぬか？ここが一番落ち着くのでな」

「ああ。いいとも。昔は肩に乗ってた僕が、今では肩に乗せる方になったか。」

「ふふふはははは」

それを聞くと、クダモンは心の底から笑い声をあげ、ユーノもまた純粋な笑いを上げるのであった。

「はははははは」

一方で、テントモンの方も通信画面を通して人間界にいるパートナーの光子郎にこの事を伝え、光子郎も安どの表情を浮かべる。

「そうか。それは良かったよ」

「光子郎はん。ワテは何だか昔を思い出す感じで、ちょっと楽しかった気もします」

『はは。テントモンもそう感じたんだ。実は僕もだよ』

「光子郎はんもですか？」

『直接戦いに参加したわけじゃないけど、心を一つにするってところは子供の頃と何も変わっちゃいなかったよ。たとえ離れていても、僕と君はずっと相棒さ』

「う・・・／／／／／／光子郎はん／／／／／／／ワテもずっと光子郎はんと同じですわ／／／／」

テントモンは光子郎の言葉に深い感激を受けると、涙が止まらなくなった。

◇

〈デジタルワールドＳｉｄｅ〉

そして、戦いが終わり一日が開けると、クダモンを含め多くのデジモンたちが元の世界へと帰還しようとするユーノ達六課メンバーの見送りに参上した。

些か照れくさそうな顔を浮かべる六課メンバーを代表してユーノがクダモンの前に立つ。

クダモンは壇に上がると、徐に語り出す。

「改めて、このデジタルワールドは平和を取り戻すことが出来た。デジモンはお前たちの友情と絆を絶対に忘れる事は無いだろう」

「ふふふ。そう言ってもらえると、嬉しいな」

「しかし、新年早々疲れちまったぜオイ」

「これは当分仕事はお預けだね」

「さてと、六課に帰ろうかみんな」

「ヴィヴィオにも心配かけちゃってるしね」

なのは達は始めに乗ってきたロケットに登場していき、最後にユーノがユーノスを肩乗せクダモンに別れのあいさつを済ませるとその手を強く握る。

「さようなら、クダモン」

「お前も元気でな、ユーノ」

テントモンはその横で大げな涙を流していた。

「ウうう！！！別れが辛いのはどの世界でも一緒です！！！無口なテントウムシがいたことを忘れないで下さい！！！ワテももう少し喋ることが出来たら、今の気持ちをもう少し素直に言葉に変えられるんやけど！！」

「もう十分言葉にしてるよ、ったく」

一護は思わずそう感じるのであった。

そして、いよいよその時が来るとユーノ達はデジモンたちに正真正銘の別れの挨拶を告げ、デジタルワールドを後にするのであった。

「じゃ、みなさんお元気で」

「ありがとう。是非また遊びに来てくれ。デジタルワールドへのゲートは、何時まで開かれる」

「即ち！さよなら！さよなら！！さようなら・・・／／／」

「じゃあね、クダモン。そして、デジタルワールドのデジモンたち！」

ユーノはそう言うと、ロケットのエンジンを始動させクダモン達多くのデジモンたちに惜しまれる形でデジタルワールドを後にするのであった。

ゲートを潜り、元の世界へと目指しているユーノだったが、直後なのはや他の面々がこんな事を言って来た。

「ねぇ、ユーノ君。今度のお休み、ヴィヴィオを連れてデジタルワールドに遊びに行かない？ねぇいいでしょ？」

「なのは。デジタルワールドは再建で忙しんだよ。もう少し時間を置いた方が」

「いいじゃねぇかよ。お前だってクダモンと会える訳だしよ」

「俺様もテントモンとは仲良くなったんだぜ！いいだろユーノ」

「部隊長からもお願いや。ユーノアドバイザー、ねぇねぇ？」

「どうするユーノ？四面楚歌だぞ」

ユーノスがそう言うと、ユーノは観念した様子でため息をつき了承する。

「全くみんなして我儘だな・・・ようし！今度のお休みはみんなでデジタルワールドに遊びに行こう！」

「やった！！」

「そうなればさっそくクレニアムモン氏に申し込みを入れておかなければいかんな」

「結局お前はそればっかりじゃねぇかよ！」

最後のシグナムの言葉には一同あきれ返るしかなかった。

この度の『オクドモン事件』を切っ掛けに、次元世界最強の男、元・翡翠の魔導死神ユーノ・スクライアに新たな呼称が付けられることとなった。

“絆”と“魂”を力に変え、無限に進化し続けるその様から記されたその名は――――――『絆の完現術士（フルブリンガー）ユーノ・スクライア』。

そして、彼が名づけた自身の完現術の名は――――――『無敵の絆』（インビンシブル・ボンド）。

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚　タコ二枚　ウナギ二枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

七大罪と絆と聖騎士コンボ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はデジソウルについて教えよう♪」

「デジソウルとは人の想いに応えて発現する未知なる力の事で、言ってみれば人の欲望を糧としているのかな。しかし、純粋に誰かを守りたいという想いであればデジソウルは正しき力を発揮し、究極のデジソウルを発現させることが出来る。」

「さらに、デジモンと心を一つにすればバーストモードへの進化だって可能となる」

恋「つー訳で、今日は俺様の取って置きのデジソウルを披露したいと思う！いくぜ！！」

恋次はそう言うと、ゲームセンターに設けられているパンチアタックゲームの前に立ちつくし、渾身の勢いで殴りにかかる。

恋「つらあああああああああああ！！！」

恋次の拳は点数を出す前に、煙を上げて破損し、やがて大爆発を起こす。

恋「ぎゃあああああああああああ！！！」

黒焦げとなってしまう恋次。

恋「けっぽ・・・」

一「何やってんだよお前は・・・」

ル「あきれてものも言えぬな。」

な「えっと・・・どうするの？」

ユ「取りあえずシャマルさんに渡しておこう・・・次回からはまたグリードとヤミーとの戦いが始まるから♪応援よろしく」

魔導師図鑑ハイパー！

ユーノ達は奇妙な光景を目撃していた。

それは、盾の守護獣ことザフィーラと最強の結界魔導師ユーノス・スレイアが毛づくろいをしているというものだった。

ユーノス「どうだ？まだ痒いか」

ザ「いえ。背中の痒みはすっかりとれました。お蔭でだいぶ楽になりました」

ユーノス「それは何よりだ。お前も俺もいつもこの格好じゃ流石にダニが住み着きやすいからな」

ザ「全く。我々の苦労も少しは分かっているのでしょうか、ここの者達は」

ユーノス「少なくとも、ユーノぐらいだろうな。俺達の気持ちを分

かってくれるのは」

ザ「全く。その通りでしょうな」

ユーノ達はそんな二人のやり取りを見ていて、実に複雑な想いで一杯となる。

は「知らんかった・・・ザフィーラがあんなこと思ってるなんて・・・／／／」

シ「それならば人間体となれば話は簡単だと思うのだが・・・」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

大「マイペンライだよ、ユーノ！」

ガ「メダル、取り返す！」

ア「致命的だ。」

ウ「邪魔する奴は、消す」

カ「彼にもよき終わりが訪れんことを」

第１５９話　旅人とアゲハ蝶と有名人

アンゴルモア・デジモン篇

登場デジモン

クダモン

声：葛城七穂

デジタルワールドを守護するロイヤルナイツの一員で、事実上のユーノのパートナーデジモン。成長期。ユーノスと同じく作中ユーノの肩に乗っている白い狐のような姿をした小型のデジモン。性格はクールで大人びており、その見た目に似合わず冷静で責任感が強い性格。ベルフェモンの反乱に合い、本人は徹底抗戦を望むが、同じロイヤルナイツのクレニアムモンの強引な手引きで成長期の姿に退化させられ人間界に亡命。かなり高度な超能力・催眠術なども使いこなすことができる。短期間ではあったが、ユーノと闘ううちに深い絆を紡ぎ、最終的にはバーストモード、更には完現術コンボをも発動させるほどにまで劇的な進化を遂げる。モデルは名前の通り管狐。

種族としてのクダモン

成長期　聖獣型　ワクチン種

聖なる薬莢を常に巻きつけて離さない聖獣型デジモン。左耳のイヤリングに聖なる力を日々溜めていると言われ、蓄えた力が大きいほど次の進化に影響があるという。冷静沈着な性格をしており、戦いにおいても的確に状況判断を行って、戦いを優勢に進める。逆に劣勢になった場合は薬莢の中に入り、身を固める防御技も持っている。

必殺技は身体を回転しつつ薬莢ごとぶつける『弾丸旋風（だんがんせんぷう）』と、ピアスから発する大きな輝きで目を眩ます『絶光衝（ぜっこうしょう）』。

スレイプモン

デジソウルチャージオーバードライブにより究極体に進化した姿。ロイヤルナイツの一体。初登場は第１５７話。スカルサタモンに止めを刺される直前にユーノが乱入し、その最中ユーノのデジソウルをその身に受け、進化封じの鎖が解かれ元の姿へと戻る。

種族としてのスレイプモン

究極体　聖騎士型　ワクチン種

デジタルワールドの守護者「ロイヤルナイツ」の一員である聖騎士型デジモン。人型デジモンが多い「ロイヤルナイツ」において、異形とも言える獣型のシルエットを持っている。大きな防御力を誇る「レッドデジゾイド」の鎧を全身にまとっており、究極体デジモンといえどもスレイプモンにダメージを与えるのは容易ではないだろう。６本の脚は優れた機動力を持ち、大柄な体格から想像もつかないほどの瞬間高速移動を行うことが可能である。スレイプモンはデジタルワールドの北極付近の分厚い氷の下に眠る超古代遺跡の警護を行っており、この遺跡にはデジモンの創生にかかわる重要なプログラムデータが封印されていると言われている。必殺技は、左手の聖弩（せいど）「ムスペルヘイム」から放たれる灼熱の光矢『ビフロスト』と、右手の聖盾（せいじゅん）「ニフルヘイム」を使って気候を操り極低温のブリザードを発生させる『オーディンズブレス』。

スレイプモンバーストモード

エアシグナル機能によるデジソウルバーストにより一時的に限界能

力を開放した姿。デジタルワールドにおける幻の翡翠に輝く鎧「ジェイドデジゾイド」を身に纏い、姿も獣型から人型へと変貌する。背中に生えた翡翠の金属翼で舞い上がり、敵を切り裂く。第１５８話で進化した。

デジモン自由同盟

クレニアムモン

声：神谷浩史

１５５話で初登場。ロイヤルナイツの一体にして、スレイプモンとは気心知れた友人同士。スレイプモンをクダモンへと退化させ、デジタルワールドから脱出させる。ベルフェモン打倒の為にデジモン自由同盟を組織し、ベルフェモンへの反撃の機会を狙っている。テントモンによると、趣味は槍磨きと昼寝（いびきが非常に五月蠅い）。テントモン曰く「気が若いが顔が怖いために周囲からは好印象を持たれない」。

種族としてのクレニアムモン

究極体　聖騎士型　ワクチン種

イグドラシルにコード操作された「ブラックデジゾイド」の鎧に身を包む、ロイヤルナイツの一体。誰もが最初にその姿を見た時にはウイルス種のデジモンだと思いそうな外見をしており、実際、暗黒騎士型デジモンであるカオスデュークモンの如く魔槍と魔楯を装備する。しかし、れっきとしたワクチン種の聖騎士型デジモンであり、ロイヤルナイツの中で最も礼節をわきまえたデジモンでもある。完璧主義者であるため、イグドラシルから与えられた任務の達成率はロイヤルナイツの中でもトップクラス。戦いにおいては一騎打ちで敵を打ち破ることを信条としている。魔槍クラウ・ソラス、魔楯ア

ヴァロンはブラックデジゾイドから生み出すことができる。必殺技は『エンド・ワルツ』。

テントモン

声：櫻井孝宏
成長期　昆虫型　ワクチン種
１５４話で初登場。ナナホシテントウの姿をした昆虫型デジモン。基本的に闘争本能のままに行動する他の昆虫型デジモンと違い自然を愛する心を持っており、のんびり屋である。泉光子郎のパートナーデジモンでもある。関西弁で喋り一人称は「ワテ」。光子郎のパートナーであることから物知りだが、割と表面的な事しか知らない事もあり、物事を深く考えるような事は基本的にしないようだ。自称「無口」だが、一旦話し出すと止まらない。その饒舌が原因で話中では危機を招いたり、結果的に皆を救ったりした。ロケットの操縦も行うことができる。相手を「はん」付けで呼ぶ。必殺技は『プチサンダー』。

ロイヤルナイツ

ネットワークセキュリティの最高位、或いは守護神と呼ばれている１３種類の聖騎士型デジモンたちを指す。予言書の中に登場する存在で、デジタルワールドに重大な災厄が起こった時に予言に導かれ集うと言う。ただし、絶対的な「善」では無く、彼等がデジタルワールドの秩序維持の為に必要と判断すれば、時には大量破壊や大量殺戮などの非情な手段も行使する。しかもそれぞれの思想も微妙に異なっており、おのおのが信じる「正義」に従って行動しているため、それを巡って内紛が起こる事もある。全員で、“空白の席”の主とも呼ばれる抑止力的な存在も含めて１３種類存在しているが未だ１３種類揃った事は無い。

オメガモン

声：坂本千夏、山口眞弓
究極体　聖騎士型　ワクチン種
１５７話に初登場。遥か昔のデジタルクライシス時、ウィルスバスターズであるウォーグレイモンとメタルガルルモンが、善と平和を望む人々の強い意志と思いと願いによって融合し誕生したロイヤルナイツの一員である究極体の聖騎士型デジモン。左腕にはウォーグレイモンの形をした盾と剣が、右腕にはメタルガルルモンの形をした大砲とミサイルが装備され、その意匠を強く残している。背中のマントは、敵の攻撃を避ける時や飛行の際に自動的に装備される。二体のデジモンの特徴を合わせ持ち、優れたトータルバランスを誇る、如何なる状況でも遺憾なくその力を発揮できるハイレベルのオールラウンダーである。闇との戦いに終止符を打つ“最後”の聖騎士でもある。必殺技は、炎のエネルギーを集中させて敵を両断する『グレイソード』と、冷気のエネルギーを砲弾のように発射する『ガルルキャノン』。

デュークモン

声：野沢雅子
究極体　聖騎士型　ウイルス種
１５７話に初登場。ウィルス種でありながらも聖騎士軍団ロイヤルナイツに所属する究極体デジモン。ウィルス種の持つ破壊の力を、秩序の維持へと使用する異端な存在である。ただしバランスが崩れれば、一転して世界をも揺るがす混沌の存在へと変貌する危険性を併せ持ち、鎧には危険の象徴『デジタルハザード』のマークが刻まれている。必殺技は、聖盾イージスから巨大なエネルギーを発射する『ファイナル・エリシオン』。

マグナモン

声：野田順子
アーマー体　聖騎士型　フリー
１５７話に初登場。ブイモンが『奇跡のデジメンタル』で進化したアーマー体デジモン。いかなる困難な状況に陥ろうとも奇跡の力で切り抜けることができると言われ、一般に成熟期と同程度の力しか持たないアーマー体であるにも関わらず、究極体に匹敵する戦闘力を持っている。またロイヤルナイツの一人でもあり、身に纏ったクロンデジゾイドの鎧の防御力もあって、ロイヤルナイツの守りの要とも言われる。必殺技は、クロンデジゾイドの鎧から放射状に放つ光線『エクストリーム・ジハード』。

デュナスモン

声：三宅健太
究極体　聖騎士型　データ種
１５７話に初登場。飛竜の力を持つロイヤルナイツの一員でクロンデジゾイドの鎧を身にまとう。武士道騎士道精神が強く、己の忠義を貫く。必殺技は『ドラゴンズロア』と『ブレス・オブ・ワイバーン』。

ロードナイトモン

声：置鮎龍太郎
究極体　聖騎士型　ウイルス種
１５７話に初登場。ロイヤルナイツの一体で、全てのナイトモンを従えるデジモン。腕のパイルバンカーは攻防一体の盾。余り話題にはならないが、デュークモン同様ロイヤルナイツとしては異端の存

在（ウィルス種）である。そのためか、冷酷で悪には容赦しない性格とは裏腹に、正義のためならその悪の味方にもなる等の矛盾に満ちた所業にも平然と手を染める。必殺技は『アージェントフィアー』、『スパイラルマスカレード』。

アルフォースブイドラモン

声：谷山紀章
究極体　聖騎士型　ワクチン種
１５７話に初登場。クロンデジゾイドの中でも希少で軽く機動力に優れたブルーデジゾイドの鎧に身を包み、神速のスピードを持つ。アルフォースとは英語表記で「ＵＬＦＯＲＣＥ」となり、究極の力「Ｕｌｔｉｍａｔｅ　Ｆｏｒｃｅ」を縮めた造語と見られる。必殺技は『シャイニングＶフォース』と『アルフォースセイバー』。

ドュフトモン

声：室園丈裕
究極体　聖騎士型　データ種
１５７話に初登場。獣の鎧をまとう聖騎士型デジモン。ロイヤルナイツの一員であり戦士であると同時に策士の一面もあるとされている。屈指の戦略家として他のロイヤルナイツも一目置かれており、各々の信じる正義の道を持つ故に対立の多いロイヤルナイツを統率する類まれなる能力を持つといわれている。戦士と策士、人と獣の二面性を合わせ持ち、基本状態が人型、レオパルドモードと呼ばれる獣型の姿を有し自ら戦闘に赴き戦場を駆け抜ける。戦士と策士、知性と野生、人と獣、相反する二面性を合わせ持つその存在は、どちらにも偏らないと言うある種の中庸の意味合いを込められ、また世界を救うために、善にも悪にもなるロイヤルナイツのニュアンスそのものを表している。必殺技は『エルンストウェル』。

エグザモン

声：乃村健次
究極体　聖騎士型　データ種
１５７話に初登場。ロイヤルナイツに所属しているが、同時にすべての竜型デジモンの頂点に立つ存在でもあり、そのことから「竜帝」の異名を持つ。構成するデータ質量が極めて膨大だったため、従来のデジタル機器ではその姿を描画する事ができず、最新のデジタルシステムによってようやくその存在が明らかになったとされている。全てクロンデジゾイドで構成された四枚の巨大な翼「カレドヴールフ」は独自の意思を持っており、時には飛翔のための翼に、時にはエグザモンの身を守る楯となる。そして手に持った巨大ランス「アンブロジウス」にはさまざまな効果を持つウイルスの仕込まれた特殊弾が装填され、中距離や遠距離からの攻撃だけでなく、これを敵に突き立ててゼロ距離からウィルス弾を撃ちこむ等多彩な攻撃パターンを確立することが出来る。必殺技は『アヴァロンズゲート』、『ペンドラゴンズグローリー』、『ドラゴニックインパクト』。

クレニアムモン

詳しくはクレニアムモンの節参照。

スレイプモン

詳しくはクダモンの節参照。

敵デジモン・黒幕

ベルフェモン

声：安元洋貴

かつて１０００年前に当時のデジモンたちによって封印されたが、ムルムクスモンの手によって復活した七大魔王の一体。アンゴルモアの力を一部受け、封印されたときにはなかった知恵と巨大な能力を獲得し、悪魔デジモンたちを率いてデジタルワールドと次元世界を支配しようとした。直情的で癇癪持ちであり、その為自らに従わないデジモンは感情に任せて抹殺したりする一面もある。都市の各所に監視装置を兼ねた自分の肖像を多数設置するも、自分の不人気さはよく承知しており、反乱を恐れてデジモンを信用していない。ユーノ達との決戦では高い戦闘力を見せつけロイヤルナイツ共々窮地に追い込んでいったが、究極体を越える力・バーストモードを得たスレイプモンには攻撃が一切通じず、最後はスレイプモンバーストモードとユーノの拳を叩き込まれた後、データが進み倒される。しかし最後の力を振り絞り最後の抵抗に出ようとした直後、ムルムクスモンに用済みと見なされ、『ゲヘナ・フレイム』をその身に受けデジコードとなったところをアンゴルモアに吸収されという、あっけない結末を迎えた。

種族としてのベルフェモン

究極体　魔王型　ウイルス種

怠惰を司る七大魔王の1体。レイジモードと呼ばれ、スリープモード状態から覚醒したベルフェモン本来の姿で、１０００年に一度目覚める山羊のような姿の魔王型デジモン。その力は圧倒的で、眠りから覚めたベルフェモンはその名の通り“怒りの権化”と化し、目に映る全てのものを徹底的に破壊すると言われている。咆哮だけでも完全体以下のデジモンは即死すると言われ、葬られたデジモンは転生する事なくダークエリアに送られて魔王デジモンの餌にされてしまう。アンゴルモアの力をその身に受け、更なる力を増しただけ

でなく高い思考能力も確保している。直情的で癇癪持ちであり、都市の各所に監視装置を兼ねた自分の肖像を多数設置するも、自分の不人気さはよく承知しており、反乱を恐れて自分以外のデジモンを信用していない。なお、レイジとは怠惰を意味する「ｌａｚｙ」と激怒を意味する「ｒａｇｅ」の二つの意味を持っている。必殺技は『ギフトオブダークネス』と『ランプランツス』。

スカルサタモン→ムルムクスモン

声：屋良有作

ベルフェモンの付き従う悪魔型デジモンの一体にして今回の真の黒幕。知的な策略家であり、さまざまな罠を張り巡らせてユーノたちを窮地に追い込む。サーチアイモンを使いクダモンの場所を突き止めたり、なのは達の戦闘力を解析した上で黒のコアメダルを持つ謎の人物（グリードと思われる）の力を使い、なのは達を撃ち落とすなど、相手の先手を取ってことごとく出足を挫き窮地に追い込んだ。「目的のためならどんな手でも使う、冷酷で残忍な男」とクダモンに評されており、今まで一度も約束を守ったことがないと認識されているほどに平然と裏切り行為を行っている模様。その正体はかつて、デジタルワールドで悪行の限りを尽くしイグドラシルによって追放されたムルムクスモンであった。ユーノ達にベルフェモンを弱らせた後、自らがベルフェモンに止めを刺しデジコードを奪い取った後、あらかじめ採取していた七大魔王のデジコードとアンゴルモア、更にそれに便乗した黒メダルグリードと融合を果たし欲望の化身、オグドモンへと変貌。その力を使って次元世界の全てを破壊した後、自らの手で新世界を構築し、その神になる事を目論む。しかし、最終的には第三の完現術コンボを発現したユーノの力と人間とデジモンの絆に敗れる。消滅の寸前オクドモンと自らの体を離脱しアンゴルモアを持って逃亡を図るも追ってきたユーノの渾身の拳を受けて撃破され、自身は消滅しアンゴルモアはユーノ達が回収した。

種族としてのムルムクスモン

究極体　魔王型　ウイルス種

元は大天使型デジモンだったが堕天し、現在では３０もの魔軍団を率いていると言う魔王型デジモン。伯爵と言う肩書きを持っており、グリフォモンを下僕として使役している。必殺技は『ゲヘナ・フレイム』。魔力で色々な姿へと変えることのできるデジモン。

オグドモン／ＡＭ２８

声：立木文彦

ムルムクスモンが持っていたアンゴルモアの力と、回収した七大魔王全てのデジコード、そしてアンゴルモアに惹かれた甲殻類グリードのコアメダルを取り込みムルムクスモンが変貌した姿で邪悪な欲望エネルギーの集合体。「七大魔王の欲望」の全てをエネルギー源としており、そこから無尽蔵に力を引き出しているため、絶大な力を誇る。巨大な体その全身が異形の怪物であり、歩くだけで周囲を粉砕し、口から発射する衝撃波導で大地そのものを斬るように街を焼き尽くし灰燼と帰す。下半身は七つの脚と七つの目が備わっている。ユーノと前線メンバー、ロイヤルナイツを遥かに上回る圧倒的な力を持って追い詰めるが、無限のデジソウルを受け第三の完現術コンボを発動させたユーノ達の絆の力「フィンブルベッド」を受けて倒され、誕生の原因を生んだアンゴルモアと黒のコアメダル三枚「サソリ・カニ・エビ」は六課メンバーによって回収された。

種族としてのオグドモン

究極体　化身型　ウイルス種

オグドモンとは、七つの眼と七つの脚、そして第八の眼をもつ異形

の超魔王である。デジタルワールドの全て罪を内包し、さらに全ての罪を贖罪する力もつ謎の化身体であり、故に、少しでも悪意のあるデジモンでは力を相殺され、倒すすべはない。必殺技は、欲望のままに暴走する『オーラーティオ・グランディオロクア』と、口部より奏でられる衝撃波動『カテドラール』。また、巨大な脚で相手を粉砕する『グラドゥス』をもつ。

その他の登場デジモン・人物など

泉光子郎

声：櫻井孝宏
デジタルワールド研究科であると同時に、嘗ての選ばれし子供の一人。テントモンのパートナー。デジタルワールドに関して研究熱心で、自分一人ではゲートを開けないにもかかわらず、逸早くデジタルワールドの危機を察知し、一護達に世界の崩壊を示唆した。パイナップルマークのノートパソコンを使用している。また、デジタルワールドにいるパートナーデジモンやエージェント、世界中のパートナーデジモンを持つ子供達と連絡を取り合っている模様。

バンチョーレオモン

声：竹本英史
１５６話で初登場。究極体。学ランを着た番長のような姿をしており、草笛を吹きながら現れるなど、独自の古風な美学がある。黒のコアメダルを持つ人物の力を退けるほどの戦闘力と途轍もない威圧感を持つ。ユーノを助けたのち、オッドアイの少年と結託して自分の道場で鍛えるという名目でユーノを一時的に仲間たちから引き離し軟禁し、デジソウルとは何かをユーノに伝え、究極体進化への助言をする。最終決戦では、自らはオッドアイノ少年と共にユーノ達

の戦いを傍観し、ユーノとスレイプモンの進化を見届けた。

種族としてのバンチョーレオモン

究極体　獣人型　ワクチン種

自分の信じる「正義」にのみ忠実に生きる獣人型デジモン。熾烈な強豪との戦いに心を「折られる」ことなく勝利しつづけたデジモンのみ「バンチョー」の称号を獲得できると言われており、デジタルワールド観測史上、この称号を持つデジモンは5体しか確認されていない。自身の「正義」のみが仕える主であり、その「正義」の障害となるものであれば、ロイヤルナイツや3大天使といった存在ですら「悪」として認識し、排除すべき敵となる。肩から羽織っている「ＧＡＫＵ－ＲＡＮ（ガクーラン）」は、敵の物理攻撃を８９．９％無効化する防御機能が備わっている。必殺技は、自慢の短刀「男魂」から繰り出す『獅子羅王漸（ししらおうざん）』と、極限まで研ぎ澄ました気合を拳にのせて放つ『フラッシュバンチョーパンチ』。

イグドラシル

声：深見梨加

デジタルワールドでは神とも呼ばれる絶対的な存在。ベルフェモン及びムルムクスモンの破壊活動に危惧を覚え、ロイヤルナイツを手足とデジタルワールドを救おうと画策し、のちに人間と共闘することをデュークモン達に命じた。神であるため、その威厳を侵害されることを嫌う。最終決戦でユーノがムルムクスモンを倒した後、ユーノとクダモンの前に現れ人間とデジモンの絆の本質を見定める決意をし、その後姿を消した。

旅人とアゲハ蝶と有名人（前書き）

旅を思い出すことは、人生を二度楽しむ事。

Ｂｙフェリックス・メンデルスゾーン

人気投票を始めます。

期間は今日の投票から一週間です。もしかしたらもっと伸ばすかもしれません。

好きなキャラクター及び、台詞などを書いてコメント、及び感想などに書き込んでください。

せめて一票ぐらいないとこれを呼びかけた意味がありません。

そう言って一度も貰ったことのない今日この頃・・・協力お願いします。

旅人とアゲハ蝶と有名人

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

９５０年前に作られ、１５０年前に封印された、人の欲望から作られたメダルの怪人・グリードが復活。

持っていたはずのそれぞれ9枚のコアメダル

そのすべてを手に入れるのは、グリードか・・・ユーノか・・・あるいは人の欲望か

その先に待つものは果たして・・・

〈Ｆｉｍｂｕｌｖｅｔ〉

ユ・ク「〈ほおおおおおおおおおおお！！！！！〉」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚　タコ二枚　ウナギ二枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

オグドモン事件が解決し、早くも二週間が経過した。

人類史上初めて虚数空間を抜け出すことに成功し、絆の完現術士と呼ばれるようになった次元世界最強の男ユーノ・スクライアは先日休暇で訪れたデジタルワールドでの出来事を思い返しながら、絆を紡いだデジモンであるクダモンと一緒に撮った写真をオフィスに飾りながら今日も職務を全うしていた。

他の者達も午後7時を回っているにも拘らず仕事熱心なものは時間外労働を行い、普段サボっていてやるべきことをしていないものは残務整理に追われていた。

そうして、各々が貴重な時間を自分なりに過ごしていたその時、突如として機動六課隊舎・及び量全体のブレーカーが落ちてしまう。

前線メンバーは思わず声を上げた。

「うわ！停電だ！」

「おいおい何にも見えねェぞ・・・・！」

「先輩ちょっと押さないでよ・・・！てかそれ僕の頭になに乗せてるの！？」

「静かにしろよ！いいとした大人が停電ぐらいで騒いでんじゃねぇよ」

暗闇の中で騒然とする一同にそう言うと、途端マリアがきょとんした様子で言って来た。

「え？ヴィータさんは子供ではなかったんですか？」

「な！小鳥遊！！てめぇぶっ殺されて一のか！！！」

思わず憤慨を起こしたヴィータが暗闇の中グラーフアイゼンを取り出す。

危機を察したスバルは暗がりの中、慣れてきた眼でヴィータの姿を捕え止めようとする。

「ヴィータ副隊長止めてください！暗闇でグラーフアイゼン振り回すのは・・・痛っ！」

しかし、スバルは止める前に足元に落ちていた書類に滑られされ、後頭部を強打。

ティアナたちはスバルの元に駆け寄る。

「す、スバル!?あんたちょっと・・・大丈夫なの!?」

その間にヴィータはマリアと激しい闘争を繰り広げ、混沌とした状態が続く中ついにはやては我慢の限界を迎え大声を上げて一喝。

「ヴィータ!いい加減やめんか!!」

そう声を上げた瞬間、事態は一変する。

「ルーモス・マキシマム」

突然暗闇一色で染まっていた空間が眩いばかりの光に包まれ、中にいた局員全員は思わず目を手で塞ぎその光を遮った。

「う!何!?」

なのはがそんな事を想いながら光の先に目を向けると、光の彼方より現れたのはニワトコの杖より光を発し、いつもと変わらぬ様子のユーノスを肩に乗せたユーノだった。

「何を騒いでるのさみんなして」

「「「ユーノ君〈パパ〉（先生）!」」」

一同はユーノ達の姿を確認すると、内心かなりほっとしたのか思わ

ずため息をつき気恥ずかしそうにはやてはこう口にする。

「あはは・・・まぁ恥ずかしいことに停電ぐらいで騒いでいましたと・・・それよりその杖の光、それも魔法なん？」

「まぁね♪ルーモスの一声で光を発生させ、ノックスで暗くする。」

ユーノはそう言いながら、実際にノックスで杖に灯っていた光を消す。

しばらくすると、突然の停電も無事に復興し機動六課は再び以前の明るさを取り戻した。

と、その時安どの表情を浮かべていた前線メンバーを見ていた恋次はふと何かを思いつき、ユーノに提案してきた。

「お。なぁ、ユーノ。ちょっとそれ使っていいこと考え付いたんだけどよ」

「？いいこと・・・」

恋次はそっとユーノに耳打ちし、多少面倒臭さそうな顔を浮かべたユーノを説得すると、恋次は復旧したばかりの明かりを消し、前線メンバー全員を一か所に集めて真冬の怪談話を始めるのであった。

「これは・・・昔、九番隊の檜佐木さんの同期の人から聞いた話なんだが・・・流魂街から離れたある場所に、人肉でしゅうまい作ってるって噂のあるしゅうまい屋があったんだと・・・まぁその人は、地元でも相当気合いの入った人だったんで、“関係ねー”とかって買って買える事にしたらしいんだ・・・・・ところが！」

妙に気合いの入った恋次がそう言い終えた瞬間、ユーノは面倒臭そうに無言でルーモスを発動させ、恋次の顔に光を当てる。

ここから先は読者の想像力に任せて実際に思い浮かべながら話を聞いていた下さい。

「その帰り道・・・何故か胸騒ぎがして、振り返ってみると――――・・・誰もいない。無性に気になって、しゅうまいの蓋を開けると・・・・・・」

「あ、開けると・・・・・・！」

吉良が冷や汗を浮かべながら恐る恐る尋ねると、恋次は不気味な笑みを浮かべ口にする。

「一つ、しゅうまいが減ってたんだよ・・・・・・」

「「「「「・・・！」」」」」

それを聞いた瞬間、前線メンバーの背筋が凍りつく。

「その人は、ゾーっとしながらも自分に言い聞かせたんだ。“きっと、きっと最初っから一個足りなかったんだろう”って。でも・・・！やっぱり気になって、次の角でまた蓋を開けた。すると・・・・・・――――――またしゅうまいが一個減ってるじゃねぇか！いよいよ怖くなったその人は、急いで家に帰った。そして・・・！ようやく気を落ち着けてふたを開けたんだ。そしたら――――――・・・なんと、今度は三個も一遍に消えてやがった！！うわあああああああああ！！！！！！！！！！！！」

「「「「「うわあああああああああああ！！！！！」」」」」
恋次がリアクションオーバーな感じではあるが臨場感を出すために大声を上げると、聞いていた一同は本気で恐ろしくなり同じく絶叫する。

「その人！！怖くなって大声を上げた！！！そして一遍蓋を閉めて！もう一度・・・ゆっくりと蓋を開けた・・・・・・・・・！“ない！！！一個もねぇ！！！しゅうまいが一個もなくなってるじゃねぇか！！！どうなってるんだ！！！”恐ろしくなって、もう一度ようく覗き込んだ！すると！！！」

全員が息を呑んでその言葉を待っていると、恋次から返ってきたのは唖然とするオチだった。

「蓋の裏に全部くっついてたんだってよ♪」

「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

全員はあまりに下らない話の為に呆気にとられるを通り越し、逆に魂を宙に浮かび上がらせそのまま意識を失ってしまった。

傍らで聞いていたユーノはユーノスと共に苦笑いを浮かべ思わずつぶやいた。

「あ・・・ははは・・・何だよこれ・・・」

確かに、そう言いたくなるのも分る騒動なのであった。

◇

〈ユーノSide〉

一夜が明け、冬の寒さが厳しいはずの一月の中旬である今日この頃、珍しくミッドの気温は冬の平均気温を大きく上回る暖かい日を迎えていた。

この絶好の機会を伺い、ユーノはお気に入りのトランクスを天日干しにかけることにした。

「うん！やっぱパンツは天日干しに限るな♪」

そう言いながら、嬉しそうな様子でユーノは竿にパンツを干していく。

その光景を偶然にも見かけた寮母のアイナは思わず声をかける。

「あら珍しい。ユーノ先生が自分のパンツ干す姿、私初めてです」

「あはは♪あんまり見せるようなものじゃないですけどね。あ、よかったら手伝いますよアイナさん」

「まぁ。ははは。じゃあお願いしましょうかね。」

アイナはユーノの好意に甘えさせてもらい、大量の洗濯物を分け与え一緒に洗濯物を干し始める。

二人が洗濯物を干していると、早朝訓練の後片付けが終わったなのはがユーノの元にやってくる。

「ユーノ君」

「やぁなのは。今日は天気もいいし、絶好の洗濯日和だ」

「そうだね。って・・・それもしかしてユーノ君のパンツ？」

「そうだけど。何かある？」

なのはは六課の洗濯物と一緒に干してあるユーノにしてはかなり派手な柄のパンツを見ると、少々言葉を詰まらせた。

「いや・・・えっと・・・随分と派手なんだねェ・・・」

「あはは。やっぱりそれ言われたか。前にユーノス元帥や一護さん達も同じこと言われたからもう慣れっこだよ♪ただし、クロノは半殺しにしたけど・・・」

「「あはは・・・」」

聞いていたなのはとアイナは最後の言葉を聞くと、思わず苦い笑みを浮かべた。

洗濯物が一通り干し終わると、ユーノは自分のパンツが綺麗に干されていることに満足げな顔を浮かべた。

「これでよし。」

「気合入ってますね」

「ホント凄いこだわり。」

「こうやって太陽からもらったエネルギーが、明日のパンツの活力になるんだ」

ある意味自慢げな顔でそう言った途端、突然冬の冷たい風が吹き荒れる。

「あ、風が・・・」

すると、その風にさらわれユーノのパンツが彼方へと飛んでいき、ユーノは思わず目の色を変える。

「わぁっ！僕の・・・明日が！」

ユーノは飛んで行ったパンツを追いかける。

と、その時そのパンツがあろうことが人の頭に降り注ぎ、ユーノは思わず立ち止まりその人物を確認すると意外そうな顔を浮かべ、なのはとアイナは互に疑問符を浮かべた。

「？！」

「「え」」

そして、ユーノのパンツを頭に乗せていた人物がそのパンツを頭からとると、ユーノに笑みを浮かべこう言って来た。

「ははっ。マイペンライだよ、ユーノ！」

「トキオ君！」

「トキオ・・・」

「君？」

一人驚き返るユーノと、事情を知らないなのはとアイナ。

ユーノはそのトキオと言う名の青年と久しぶりの再会を果たすと、固く握手を取り合い早速機動六課へと案内し前線メンバーにトキオの事を紹介した。

「こちら、旅の途中のバンコクで知り合った大和トキオ君」

「どうも」

トキオは少々緊張した様子でなのは達六課メンバーに頭を下げ、それにつられて一同も懇切丁寧にあいさつをする。

「はじめまして」

「「「「よろしくおねがいします」」」」

と、その時トキオの姿を見ていた金太郎があることに気づきこんな事を言った。

「ぬ！もしや御仁・・・世界放浪旅ブログのあの大和殿では！？」

「お！読んでくれてますか？」

トキオは自分が旅先での記録をブログとして書き留めているという事を同じ日本人である金太郎が異世界においてもそれを読んでいると事実を聞かされ、胸を躍らせる。

金太郎は興奮した様子のトキオに更に言う。

「勿論ですとも！ちゃんとマイナーなのも押さえております故」

「ぐ・・・やっぱまだマイナーか・・・」

トキオは期待していた答えとは大きくかけ離れたその言葉に肩を落とし、自分でも薄々気づいていたその事実を聞かされ自嘲した笑みを浮かべる。

ユーノはそんな時を見ると、苦い顔を浮かべながら席に座ることを進める。

「あ・・・と、兎に角久しぶりの再会を祝って色々と聞こうじゃないの♪ささ！こちらへってね♪」

「あ、うん」

「私、コーヒー出しますね！」

スバルは気を利かせて自ら率先し、コーヒーを淹れに行く。

するとここで、ふと疑問に思っていたフェイトがトキオに尋ねる。

「あのところで、さっきのマイペンライって？」

「ああ。タイ語の中で僕が一番好きな言葉なんです。」

そう答えると、隣に立っていたユーノがその意味を代わりに口にする。

「“大丈夫。どうにかなる”って意味だよ」

「大丈夫・・・どうにかなるか。」

「前向きでいい言葉ですね！」

なのはやキャロも思わず笑みを浮かべそう言うと、トキオも指を立てる。

「でしょう～。あ、そうだユーノ。次はお前どこ旅するんだ？」

ユーノは思わず口を籠らせ、間を置いてからお茶を濁したように答える。

「えっと・・・ちょっと休憩中かな・・・あ、トキオ君こそ世界放浪の旅は？」

「ひひ。終わったよ」

「おお！凄い♪」

「だから今度は、次の夢を実現させる。俺の旅を一冊の本にするんだ」

はやては大きな夢を抱き、着実に実現へと向けてその道を歩んでい

るトキオの言葉を聞かされ、素直に評価する。

「まぁ素敵やわ～！これつまらないモノやけど」

「どうも」

トキオははやてから出されたお茶請けとコーヒーを口にしながら、ユーノ達に呟く。

「でもさ。久しぶりにミッドに来てみたらさ、なんかミッドも変わっちゃってて、出版社の場所がわかんなくなっちゃってさ」

「ああ。それなら僕らが案内するよ。」

「ホントか？」

「丁度僕も原稿を届けに行こうと思ってたし」

ユーノはそう言いながら、懐から茶封筒に入った週刊フライデーの原稿を取出し、なのは達はそれを見ると思わずこう言葉を漏らした。

「出た・・・週刊フライデー・・・つうか多忙な仕事の合間にいつ書いたんだよ・・・」

「今月号のテーマは『パンスペルミア説から来る生命起源の発端とグレゴリウス文明の生誕』だそうですよ・・・」

「全く俺達にはわからんな・・・」

ユーノスも、つくづくユーノの頭の構造はどうなっているのかとさ

え感じてしまうそんな一瞬のやり取りであった。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

その頃、このミッドチルダにたびたび出没している人間の欲望を食らう存在、グリードの一体ガメルは人間の姿となって真剣な様子で自販機の下を覗いていた。

すると、そんなガメルに不意に女性の言葉が飛んで来た。

「何をしているの？」

「メダル、落ちてないか探してる」

「なんのために？」

「メズール、元気ない。だから、メダルやる」

ガメルが誰に向かって話しているか分かっていない中、自販機の下に手を伸ばそうとするとそれを聞いていたメズール本人が呆れながらガメルの頭を鷲掴みにする。

「おやめなさい。」

ガメルは突然頭を鷲掴みにされ、怪人の姿に戻ってしまう。

「あ！イテテ！痛いよ、もう・・・・・ああっ！メズール」

ガメルは今更とばかりに隣に立っていた人間体のメズールに驚いた。

「拾ったメダルなんていらないわ。メダルなら、ユーノ・スクライアから奪い返しなさい」

「わかった。メズールのため、がんばる！」

「ガメル。やさしいのね」

メズールはガメルの頭をいい子いい子と撫ではじめると、ガメルも満更でもないかとばかりに笑みを浮かべる。

「んん～へいへいへいへいへい～」

そんなガメルの様子を窺っていた怪人体のウヴァは思わずつぶやく。

「ガメルのバカが」

ウヴァは二人のグリードに気づかれないように足早にその場から移動すると、ミッドの街中を高所から見おろし、次なる欲望の標的を探し始める。

「さてと。メダルを生み出す欲望にまみれた人間は・・・――」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、ユーノに案内されミッドの出版社を訪れていたトキオはと言うと、その中で編集者に衝撃的な一言を聞かされ、浮かない足取

りで原稿を届け終え先に門の所で待っていたユーノとユーノスに近づいて行く。

「どうだった？」

ユーノが期待を胸にそう尋ねと、トキオは伏せていた顔を上げあっさりと答える。

「ダメだってさ。」

「えっ？どうして？」

「うん・・・文章力が無いって。旅ブログでアクセスランキング一位のフォーゼ・プリウスってのがいるんだけど、彼ぐらい面白い文章が書けないと本にするのは無理だって」

「そうなのか・・・」

聞いていたユーノスも現実の厳しさと言うものを改めて理解する。

「でも、マイペンライ！」

トキオは前向きにそう口にすると、ユーノから荷物を受け取り歩きながら更に言葉を連ねる。

「これしきのことで、夢を諦めたりしないよ。人生は山あり谷あり。それまさに、旅そのものだからね」

「人生は旅そのものかぁ」

「うんうん。実に深い言葉だ♪」

ユーノも思わずそう口にするような意味深な言葉であったが、口にした本人のトキオは内心焦りを感じ始めるのであった。

「・・・――」

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

一方その頃、メダルの現状を端末で確認しながら異世界を飛び回っていた鳥のグリード、アンクの方はと言うと、以前モニター越しで言われたスカリエッティとの商談のやり取りを思い返していた。

『全部とは言わない。回収した分の、７０パーセントだよ』

自分を出し抜くと言わんばかりのあの時のスカリエッティの顔を思い出すと、アンクは面白くなさそうに舌打ちをし、こう呟く。

「ちっ。メダル７０パーセントも持っていかれてたまるか！」

アンクはそう言いながら、スカリエッティとの商談に敢えて乗ることにし、翼を広げて何処へなりとも飛び立っていった。

そんなアンクの事を気づかれないように監視をしていた謎のオッドアイの少年は、バイクに跨りにながら双眼鏡片手に呟く。

「鳥のグリードアンク・・・あいつは他のグリードと違って相当食えない奴だからな。あいつには特に用心をしておかないと。そして・

・・――――破面魔導虚も」

少年はそう言うと、ディスプレイに映し出されたアンクの到着を今かとばかりに待ち望んでいる破面魔導虚、リリスの姿を凝視する。

一体、この少年は何処までの事を知り、何故ユーノ達をたびたび助けたりしているのであろうか？

◇

〈トキオＳｉｄｅ〉

また、徐々にグリードや破面魔導虚が行動を起こそうとしている中、ユーノ達と別れて臨海公園で一人パソコンの画面を睨み付けるトキオは面白くなさそうに呟いていた。

「くっそ！あの編集者！なんで俺の文章のよさがわかんねえんだよ。何がプリウスみたいな面白い文章だよ！」

トキオは実際に人気旅ブロガーであるプリウス・フォーゼのブログサイトを開き、嫉妬していると掲示板に書かれていた言葉に目を奪われる。

「なんだよ？こいつまた本出すのかよ？しかもラジオ生出演――――」

トキオはあまりに自分とは違いすぎる人気を誇るプリウスに嫉妬を通り過ぎ、怒りを覚え始めた。

「なんだよクッソー！・・・・・・俺の方が絶対いけてんのにな」

トキオは焦りと不安、嫉妬が胸の奥から止めども無く湧き上がってくると、思わず深いため息を漏らす。

「俺だってそのうち・・・――」

そう呟きながら、トキオは頭の中にイメージを膨らませ有名人となって今見ているブログに映るプリウスのようにラジオに出演し、本も出版している自分の姿を思い浮かべ決意した眼差しで口にする。

「絶対有名になってやる」

そんな強い欲望に目をつけると、背後から徐にウヴァがセルメダルを取出し近づいてくる。

「その欲望、解放してやる」

ウヴァは気づかれないようにトキオの背後へと近づき、現れたセルメダルの投入口にメダルを投与すると、トキオの背中から白ヤミーが誕生し、白ヤミーはそのまま何処かへと向かって行った。

その時、トキオは後ろから人の気配を感じ一気に振り返ると、そこには誰もいなかった。

「・・・気のせいか」

だがそう思った矢先、突如耳元から男の声が聞こえてきた。

「どうすればいい？」

トキオが声のする方へ顔を向けると、そこ居たのは緑色のジャケットを身に纏いオールバックの髪の青年、人間体のウヴァの姿であった。

訝しげな表情を浮かべながら月並みにトキオは尋ねる。

「なんすか？あんた」

ウヴァは不敵な笑みを浮かべながら再度同じことを尋ねる。

「どうすれば有名になれる？」

「えっ？」

思わず耳を疑いそうになったトキオだが、ウヴァは不敵な笑みを浮かべたまま答えを待ち望んで沈黙を続ける。

すると、考えた挙句トキオはウヴァにこう返した。

「そうだな。まぁこのプリウスって奴ぐらい文章力がついて、ラジオにでも出たらそりゃ・・・――」

と、トキオがウヴァに顔を向けた途端、その肝心のウヴァが忽然と姿を消しており、トキオは辺りを見渡したがウヴァの姿は確認できなかった。

「・・・なんだったんだ」

この一瞬のやり取りが、トキオ青年の運命を大きく左右されることになる。

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

さて、スカリエッティの元へと向かっていたアンクはある人物を発見すると、徐に地面へ通りその人物・・・ユーノ達の監視役である破面魔導虚リリスに近づき、警戒心を抱きながら言葉を向ける。

「約束通り来てやったぞ。が、メダル７０パーセントもやるつもりはない。スカリエッティとやらに直接話しつけさせろ！」

「あらあら・・・これだからグリードって言うのは欲が強すぎていけないわ。そんなにドクターと話がしたいんならさせてあげるわ。ただ、下手な言葉は自分の身を滅ぼすことになるから十分に注意しなさいね」

「上等だ。早く案内しろ」

アンクがそう頼み込むと、不敵な笑みを浮かべてリリスは『解空』の能力で空間を引き裂き穴を作り出すと、アンクをその中へと案内し忘れられた禁断の都、失われた世界？アルハザード？へと導いた。

いよいよ、スカリエッティとアンクの直接交渉が幕を開けようとしていた。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

一方、ミッドチルダのとある喫茶店の中では、トキオが嫉妬する人気旅ブロガーであるプリウス・フォーゼが担当編集者と一緒に次回作の本の打ち合わせを行っていた。

「よろしくお願いします。どうぞ、座ってください」

落ち着いた物腰で先へと座るプリウス。

「早速ですが、プリウス先生。次の本の企画の事なんですが――――」

「はーい」

プリウスは渡された企画書を手に取り徐に目を通し始める。

と、その直後プリウスの背後より現れる白ヤミー。

女性記者は思わず目を疑い、声を上げた。

「キャー！」

プリウスは記者が叫びだし、何事かと思い後ろを振り返ると白ヤミーが覆いかぶさる様にプリウスを襲おうとしていた。

「うわあー！」

プリウスは白ヤミーに掴まれ、体より何かを奪い取られるとそのまま気を失い、汽車を始め店内にいた者達は足早に逃げ出して行った。

すると、白ヤミーの体に変化を怒り始め、脱皮を完了させると白ヤ

ミーは色鮮やかな全身に背中に羽を生やしたアゲハヤミーへと成長を遂げる。

「お前の欲していたものだ。うけとれ！」

アゲハヤミーはプリウスから奪い取った文才を鱗粉に乗せると、トキオの方へと向けて鱗粉を飛ばして行った。

その事は直ぐに六課で仕事をしていたユーノスにも判断できた。

「ヤミーか。場所はまたミッドだな」

ユーノスはユーノの机の上に置かれていたタカカンを一個取出し、起動させる。

「ユーノに知らせろ」

タカカンは外の方で別の用事を足しているユーノの方へと向けて飛んでいく。

その間に、何も知らないでいるアゲハヤミーの親であるトキオは何処からともなく飛んで来たアゲハヤミーが奪った能力を与えられると、人が変わったかのように面白い文章が書けるようになり次々とアイディアが浮かびタッチパネルを操作する。

「おおっ！おおっ！おおっ！なんかすっげえ書けるぞ！よし！これならあの編集者も絶対気に入るぞ！」

今迄の自分では考えられないような文章が書けることに大満足のトキオ。

そんなトキオの欲望が満たされるごとにセルメダルは確実に枚数を増やしていく。

「ははは」

そして、アゲハヤミーはトキオの欲望を叶えるべく更に活動範囲を広げようとしていると、ちょうどその時タカカンの後を追って来たユーノと出くわした。

「早く逃げて！早く」

ユーノは記者に担ぎ込まれながら逃げようとするプリウスを誘導すると、果敢にアゲハヤミーに向かっていくが、その直後アゲハヤミーが飛行能力を使っていきなり襲い掛かってくる。

不意を衝かれ、アゲハヤミーに体を掴まれたユーノは高所から容赦なく落とされる。

「うわあああ！」

と、その時落下地点に駆けつけてきたユーノスが設置したフロータがユーノの身を守り、衝撃を和らげる。

「ふ～～」

安どのため息をつくユーノ。

そんなユーノの元に急いで駆け寄るユーノス。

「すまぬ。遅れてしまった」

「いえ。それより今度は蝶ですよ」

「蝶と言うことは、ウヴァだな。ユーノ」

「はい」

ユーノスは早速ユーノに結界印を手渡し、ユーノはそれを使って自身の完現術「無敵の絆」の能力の一端であるスレイヤーモードへと変身する。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

「はあああああ！」

ユーノは空から襲ってくるアゲハヤミーの攻撃を回避し、その俊敏な身のこなしとそれに反比例するかのような強靭な身体能力でアゲハヤミーを突き落す。

「おあああ！」

アゲハヤミーは先ほどは逆にユーノから突き落とされる。

「はっ！」

ユーノは突き落としたアゲハヤミーの元へと飛んでいくと、一気にラストスパートをかけようと奮戦する。

「く！」

アゲハヤミーはこの状況に危機感を感じると、素早い動きで空へと駆け上がり、鱗粉を使った攻撃でユーノを出し抜き、そのまま彼方へと飛んでいく。

「待てっ！」

急いで追いかけようとしたユーノだったが、アゲハヤミーはもう既にどこかへと飛んで行ってしまった。

ユーノスはユーノの肩に乗ると、姿の見えなくなったアゲハヤミーに関してこう呟く。

「意外な素早いな」

「ええ・・・――――お？」

と、ユーノが不意に後ろから気配を感じ振り返ってみると、唐突に霧状のものが現れそれが集合すると現れたのは破面魔導虚リリスであった。

「は～い。お久しぶり」

「お前は・・・」

「リリス！」

リリスの姿を目の当たりにし、警戒心を強めるユーノ達。

リリスは不敵な笑みを浮かべながら距離を保ちユーノに言葉を向ける。

「逃がすなんてらしくないわね。空飛べる能力はあなたにだってあるでしょ？」

「確かに、完現術である程度の魔法は取り戻したけど、それでもまだ完全なものではない。それより、何しに来た!?」

「ふふ。相変わらずの様ね。なんであなたみたいな欲望の空白が第二のオーズの器なのかしら」

「えっ？」

「何だと・・・」

聞き違えではないかと思いながら二人が顔を見合わせると、リリスは更にこう問いかける。

「あなたは何の為に戦うの？友達を助けたいから？誰も悲しませたくないから？」

そう聞かれると、ユーノは決まりきったようにはっきりと宣言する。

「・・・僕は目の前で困ってる人がいたら助ける。それだけ」

「小さいわね。私達が見ているのは――――――世界よ」

「「――――――」」

ユーノとユーノスは益々このリリスの言動一つ一つに警戒心を強めると同時に、先ほど彼女が口にしたユーノが第二のオーズであるということに疑問を抱くのであった。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

その頃、アルハザードのスカリエッティの研究所へと足を踏み入れることに成功した鳥のグリードアンクは、奥の方で待っているスカリエッティを目指して黙々と歩きつづける。

そして、アンクが到着するとプレシアがその事を伝える。

「ジェイル。来たわよ・・・」

「おお、そうか。待ち望んでいたよ」

スカリエッティはこの日の為に特別に作ったケーキに蓋をかぶせると、殺気を漂わせながらスカリエッティの元へと現れるアンクと対談する。

「ようこそアンク君。ここは非公開とは言え、秘密ではない。遅かれ早かれリリスを通じてやって来るとは思っていたよ。ふふ・・・」

「・・・・・」

「で、今日はいい返事を持ってきてくれたんだね？」

「そう見えるか？」

すると、アンクは唐突に右腕だけを怪人体へと変化させ、スカリエッティに敵を向ける。

スカリエッティはそんなアンクの考えを分かりきった上で不敵な笑みを浮かべこう言う。

「ふふ・・・いいかねアンク君。私も君も欲しいのはメダルだ。その為のギブアンドテイク！！はは、どこに問題がある？」

「致命的だ。俺はテイクは好きだが、ギブは嫌いだからな。」

「成程・・・」

二人は互いに一歩も引かない様子で駆け引きを続け、傍らで見守っていたプレシアは妙に重苦しい雰囲気に汗を浮かべるのであった。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

ユーノがアゲハヤミーを逃がして間もなくし、機動六課の方で通常勤務に従事していた鬼太郎は休憩がてら、自販機でコーヒーを買おうとしていた。

「あ～～～コーヒー飲みてー」

小銭を淹れ、どのコーヒーを飲もうかと悩んでいたその時、唐突に流れてきたラジオから思わぬ名前が飛び込んできた。

『本日の“あの人に会いたい”のコーナーは、予定していたプリウスさんが体調不良と言うことでやはり人気の旅ブロガー、大和トキオさんにお越しいただきました』

「？」

鬼太郎を始め、事務仕事に従事していたなのは達全員が一様にラジオに耳をそばだてると、緊張した様子のトキオのインタビィーが聞こえてきた。

『あ、はじめまして。大和トキオです』

「あっ、トキオ君だ！」

「え、本当！」

全員は思わずその事に驚き返る。

『今日は急に来ていただきありがとうございます』

『あ、いえいえ。とんでもないです。光栄です』

気恥ずかしそうにインタビューにトキオが答えていると、丁度その時戦闘を終えたユーノがユーノスと共に帰ってきた。

フェイトはユーノが帰ってくるとすぐにこの事を伝える。

「あっ。ユーノ。トキオがラジオに出てるよ」

「えっ？」

ユーノはなのは達の元へと歩み寄り、同じように耳をそばだててトキオの声を聞き始める。

そのトキオの方はどうかと言えば、窓越しにギャラリーの熱い視線を一身に受けながら、為れない様子ではあるもののラジオトークを進めていく。

『はい。なんか自分でも信じられないんですけど、突然火がついたって言うか・・・』

「大和さん。旅で一番楽しい時は？」

「楽しい・・・あ。あのそうですね・・・国境を超えることですね。あの・・・初めての国に入る時のドキドキ感が好きです」

金太郎はその一言を聞くと、腕組みがてら首を縦に振る。

「それあは分かりますな！」

「すごいね、トキオ君」

「うん」

ユーノもこの事には相当驚きを抱いていたが、同時に妙な不安を覚え始めた。

◇

〈リリスＳｉｄｅ〉

その頃、ユーノの前から再び忽然と姿を消したリリスはと言うと、未だ自分の中でユーノが何故スカリエッティの言う第二のオーズの器としての人間であるかどうか、頭を悩ませていた。

「分からない・・・どうしてユーノ・スクライアが第二のオーズ？聖王の器であったオリジナルのクローンであったヴィヴィオならまだしも、元は何の変哲もない筈の人間がどうしてオーズに・・・――」

すると、そんな事を呟いていたリリスの前に肩に不気味な人形を乗せたスカリエッティの出資者、カリ・ユガが現れる。

「面白い観察対象が出来ましたね」

カリの声を聞くと、リリスは意外そうな顔を浮かべる。

「あら。ミスターカリ。何か用？」

そう言うと、問われたカリは人形に目を向けながら淡々とこう語り出す。

「私はあなた達こそが世界を再構築するものだと思っています。でもその崇高なる目的を実現するためにはそれ相応の結果が必要です」

「結果ですって？」

「物事はすべて終わり。結果で決まるのです」

リリスはその言葉を聞くと、一応納得した様子でカリに頭を下げその場を後にし、カリは無表情のまま何処へなりとも歩いて行くのであった。

さて、トキオがラジオに生出演した日から一夜明けると、トキオの開設する旅ブログは大きな変動を起こしていた。

「あっ！アクセスランキング2位になってる！よ～し！」

急激に人気が上昇したことでトキオ自身も胸の躍動が鳴り響く。

そして、その自分よりも上位に位置する現在アクセスランキング一位のブログに目を向ける。

「1位はこいつらか？」

トキオは徐にその一位のブロガーの開設するブログの中身を確認し、掲示板に書かれていた情報に目を疑った。

「『旅エッセーがベルトセラーになった漫才コンビ・カジキマグロ。』・・・――トークライブだと！？」

トキオはその事にまた嫉妬してしまい、ふとこんな事を言ってしまう。

「チッ！ちょっとしゃべりがおもしれーくらいで有名になりやがってよ！俺だってそのうち・・・・・」

そう言いながら、トキオの頭の中に浮かんで来る人気者となり、テレビや雑誌に引っ張りだことなりサイン会の会場に足を運びファン

にサインを促される自分の姿を想像する。

『お願いします！』

『ありがとうございます！』

トキオの欲望が更なるものへと発展しようとしていると、その時また耳元に最初の時と名時シチュエーションで声が聞こえてきた。

「どうすればいい？」

「！？」

トキオが聞き覚えのある声に耳を傾け顔を横に振ると、そこ居たのは人間体のウヴァであった。

「またあんたかよ・・・なんなんだよいったい？」

「どうすればもっと有名になれる？」

「そうだなぁ・・・まぁ俺もカジキマグロぐらいしゃべりがおもしろければね」

そう答えた直後、ウヴァは再びトキオの前から姿を消してしまい、トキオは二度の出来事に若干恐怖を感じ始めていた。

その頃、トキオが嫉妬する現在アクセスランキング一位のお笑いコンビ、カジキマグロの二人はどうしているのかと言えば、本日の午後1時より開催されるトークライブショーに参加するためにマネージャーの車に乗って移動していた。

「じゃ、これ着いたらすぐリハーサルって感じ？」

「うん。そうそう」

「じゃ弁当は？」

「なんの心配しとんねん？」

二人がそんな他愛もない会話をしていると、マネージャーは二人に伝える。

「カジキさん。マグロさん。もうすぐイベント会場です」

「ああ、はい。わかります。はい・・・じゅあ一旦弁当挟んで・・・」

「いや弁当ちゃう。コントの練習を・・・」

と、そんな時事態は急変する。

突然空から降ってきたアゲハヤミーが車のフロントガラスに張り付き、マネージャーとカジキマグロの二人は声を上げた。

「うわあああ！」

「「ぎゃあああ！！」」

車は走行不能となり、壁に激突するとマネージャーは気を失ってしまう。

カジキマグロの二人は恐ろしくなって、急いで車の中より脱出する。

「「ひえええ！！」」

アゲハヤミーは逃げていく二人を追って執拗に付け狙うのであった。

カジキマグロにトラブルが発生したことは、直ぐにイベント会場の方にも伝えられ、担当者は思わず耳を疑った。

「えっ？事故？なんだよ・・・弱ったな」

険しい顔を浮かべてしまう担当者であったが、その直後イベント会場にやって来た時トキオが話しかけてきた。

「あの、すみません」

「？」

「こちらのイベントに出てくれってメール貰ったんですけど」

トキオが担当者と話を始めたその間にも、カジキマグロの二人はアゲハヤミーに追われ必死で逃げ回っていた。

「「うわあああああ！」」

あらゆる思考を排除し逃げる事だけに精を出していた二人だったが、あい方の一人であるマグロが足を躓いてしまう。

「あああああ！！」

アゲハヤミーはマグロの体を掴むと、抵抗する暇もなくマグロから漫才の才能を吸収し、マグロは能力を奪われると気を失った。

「お前の欲していたものだ。受け取れ！」

アゲハヤミーは奪った能力を前回同様鱗粉に乗せてトキオの方へと飛ばしていく。

そうして自身のセルメダルが着実に枚数を増やしていく。

鱗粉が風に舞って空を飛んでいくと、それを見ていたアイナと共に洗濯物を取り込んでいたユーノは目を奪われる。

「！あれは・・・」

ユーノはすぐにその事をユーノスに伝えるべく、走り出した。

そして、鱗粉に乗った能力を付与されたイベント会場のトキオは口調までもが変化し、性格も少々大阪人に似たようなものとなった。

「あ・・・なんかしゃべれるような気してきた」

トキオはそう感じると、直ぐにカジキマグロの担当者に自分の事をアピールする。

「カジキマグロの代わり、俺に任せてくれへんか？絶対損はさせへんで！」

トキオが行動を起こそうとしている中、ユーノもまた行動を起こそ

うとユーノスにこのことを伝える。

「ユーノス元帥。ヤミーが動き出しました。直ぐに行きましょう」

「ああ。」

ユーノスはユーノの肩に乗り、早速出発しようとするのだが、直後はやてがトキオより届いたメールを皆に伝える。

「トキオ君からメールやで」

ユーノも一度その報せに足を止め、一旦はやての方に近づくと、はやては近寄ってきた全員にメールの内容を掻い摘んで説明する。

「旅のトークショーに出るらしいんよ」

すると、それを聞いたヴィヴィオは残りわずかの冬休みを過ごしているヴィヴィオに提案をしてきた。

「ねぇヴィヴィオ。もしよかったらだけど、お友達と一緒に行ってみたらどう？面白い話聞けると思うし」

「そうだね。じゃあ、アインハルさん達に都合聞いてみるね！」

ヴィヴィオはなのはの提案を聞き入れると、アインハルトたちの都合を聞くために一度その場を後にし、ユーノとユーノスは顔を見合わせ決意を固める。

「僕達はヤミーを追いましょう」

「ああ。奴は飛行能力を備えている。十分に気をつけろ」

ユーノはなのは達に見守られながら、アゲハヤミーの現れた場所を目指して愛車「グリーンラベル」に乗り込み爆走を開始。

ユーノがユーノスを振り落さないようにバイクを走らせていると、その時前方にいきなり待ち伏せをしていたガメルが現れる。

「うわ！」

急ブレーキをかけた瞬間、ガメルはバイクを受け止めその衝撃でユーノは豪快に吹き飛んだ。

「わあっ！」

身体を強打し、腰を押さえるユーノを心配しながらユーノスはガメルに言葉を投げかける。

「ガメル。お前に付き合ってる暇はないんだがな」

ガメルはユーノ達が奪って行ったメズールのコアメダルを奪い返す気満々であった。

「メダル、取り返す！」

「ユーノ。逆に奪ってやれ」

ユーノスは結界印を取出し、ユーノに手渡す。

受け取ったユーノはガメルと向き合い、スレイヤーモードへと変身。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身を完了させ、ユーノはガメルと戦闘を開始。

ガメルは気合いとメズールへの期待を一身に背負っているせいか、いつも以上のパワーを発揮し、ユーノを容易く吹き飛ばしてしまう。

「だああ！」

ユーノは近くに遭ったトレーラーに激突し、強打した箇所を押さえる。

「いて～～」

ユーノスはユーノに近づき冷静なアドバイスを送る。

「ユーノ！パワーで真面に遣り合うのは無理だ。速さで翻弄しろ」

「了解」

ユーノはそれを聞くと、防護服の中に取り込まれているコアメダルのうち、チーターコアの魂をいつもよりも強く引き出し高速の戦闘でガメルを翻弄する。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｄａｓｈ〉

俊敏性のある動きで鈍いガメルの攻撃を受け流し、隙を見てはスレ

イヤーブレイドで攻撃するユーノ。

そして、更にユーノはガメルの周囲を高速で回り始め逃げ場をなくす。

「おおおおおおおおお！！！！！」

「目が・・・目が回るよ～～～」

あまりの速さに目がついて行けず頭が混乱した状態のガメル。

これを好機と見たユーノは勢いをつけて、ガメルの体にリボルスピンキックを叩きこむ。

「てぇあああ！」

ガメルはその攻撃を受けると後ろに飛ばされるが、それが仇となったのか待機していたユーノスの体に当たってしまい、ユーノが所持していたコアメダルの半分が宙へ泊った。

「うわ！」

「ユーノス元帥！」

「しまった！」

ユーノスは吹き飛んだコアの半分を回収にかかるが、メズールのコアであるタコのコアメダル二枚は運悪くガメルの手の中に納まってしまった。

「おお！メズールのコアメダルだ」

「ユーノ！頼むメダルを取り返せ」

「はい！」

ユーノはガメルからメダルを取り返そうとしたのだが、直後ユーノとユーノスはアゲハヤミーに襲われるカジキマグロの一人、カジキの悲鳴を感じ取ってしまう。

「「！」」

ユーノは攻撃を止めると、ユーノスに言う。

「この感じ・・・」

「くそ。またしても間が悪い・・・メダルは諦めよう。ヤミーを倒すぞ」

「はい」

ユーノはユーノスを肩に乗せると、スレイヤーダッシュを使いガメルの事はほっといて足早にアゲハヤミーの元へと向かって行った。

◇

〈ヤミーＳｉｄｅ〉

その頃、アゲハヤミーの方は残っていたカジキマグロのカジキから漫才の才能を奪おうと執拗に追い回していた。

「うわああ！」

階段を駆け上がろうとしていたカジキよりも先回りして、目の前に降り立つアゲハヤミー。

「足りない。お前のもよこせ」

まさに絶体絶命かと思っていたその時、思わぬ助っ人がバイクに乗って登場する。

それは、あのオッドアイの少年だった。

少年はヘルメットを取ると、持っていたヤミーにそれなりに効果のある銃を取出し何のためらいもなくアゲハヤミーを攻撃する。

「いたいた。それ！」

「うわっ！」

アゲハヤミーは思わぬ急襲を受け、その場に倒れ込んだ。

少年はこの間に腰の抜けたカジキの元へと近づきこの場を離れるよう促す。

「逃げて下さい！」

「はい！」

少年の言葉を聞き、カジキは足早にその場を立ち去った。

「ははははは！」

アゲハヤミーは空を飛びながら鱗粉で攻撃を加えていき、少年はその攻撃を軽快にリズムをつけながら躱していき、反撃を繰り返す。

そんな両者のやり取りを陰で観察していたカリ・ユガは特に少年の方に注目し、ふとこんな事を呟いた。

「竜神の寵児――――――まさかこの現代にその姿を現す時が来るとは。これもユーノ・スクライアの魅力の一つなんでしょうか。だが所詮人間の力ではヤミーを倒すことは敵いません。彼にもよき終わりが訪れることを」

果たして、この言葉が意味する事とは何なのか――――――

アゲハヤミーがオッドアイの少年と戦闘を繰り広げているその頃、そのアゲハヤミーの親である大和トキオは現在トークライブの為のリハーサルを行っていた。

「旅って、めっちゃ孤独になんねんけど、ブログやってると誰かと繋がってる気して、さびしないねん！」

「はい。では本番もその調子でお願いしますね」

「よろしくお願いします」

このリハーサルの光景は、ヴィヴィオとそのヴィヴィオの誘いを受けたアインハルトを含む仲良し五人組で見守っていた。

ミツオとバウラは間近で見る人気ブロガーとなったトキオの姿に目を光らせる。

「へぇ。あれが噂の旅ブロガーの大和トキオか。」

「やっぱし違げーよな。人気者ってのは」

だがそのときヴィヴィオだけはトキオに違和感を感じていた。

「あれ？」

「あのヴィヴィオさん。どうなさったんですか？」

「あ・・・いえ。何でもないですよ」

心配するアインハルトに申し訳なそうに敢えてそう言うヴィヴィオであったが、この時心の中ではトキオの口調の変化に疑問を抱いていた。

「（トキオさん・・・いつから大阪弁に？）」

そんな疑問を抱くヴィヴィオを余所に、リハーサルの終わったトキオは心の中で聞こえてくるウヴァの声に反応し後ろを振り向く。

「（欲望を解放しろ）」

トキオが後ろを振り返ると、人間体のウヴァは強いまなざしを向けながら更にトキオの欲望を仰ぎたてる。

「（もっと欲望を解放しろ）」

トキオもそれを聞くと黙ってうなずく。

ヴィヴィオが不審に思いながらトキオの目線の方へと顔を向け、腕組みをしながら立ち尽くすウヴァに目を丸くする。

「？」

「ヴィヴィオ・・・」

「どうしたの」

コロナとリオがそう尋ねると、ヴィヴィオは記憶を辿って行き以前にも見たことのあるウヴァの人間体の事を思い返していた。

「（あの人・・・どこかで）」

必死で思い出そうと記憶を辿って行くヴィヴィオ。

するとその時、脳裏に浮かんできた人間体から怪人体へと姿を変えるウヴァの事を完全に思いだし、思わず声を上げた。

「あの時の、変な虫のグリード！？」

ウヴァはヴィヴィオの言葉を聞くと、彼女たちの存在に気づき人間体から怪人体の姿となって近づいてくる。

「「きゃあああ！！」」

「あああああ！！！ママ！！！」

思わず背筋を凍らせ恐怖に怯えるコロナたち。

「邪魔する奴は消す」

「に、逃げよう！」

ヴィヴィオ達は一目散に逃げ出す会場準備に追われていた人達のようにはいかず、恐怖で自然と足がすくんでしまっていたのだ。

徐にイベント会場へと近づいてくるウヴァの姿を目撃すると、トキオも目を丸くした。

「なんやあのバケモノ？」

ヴィヴィオ達六人は抵抗することも出来ないぐらい怯えきった様子で徐々に距離を血締めてくるウヴァから遠ざかろうとする。

「フッ」

ウヴァに目をつけられてしまったヴィヴィオ達の運命は如何に・・・！！

◇

〈ヤミーＳｉｄｅ〉

さて、一方のアゲハヤミーの方はと言うと、相変わらずオッドアイの少年と交戦状態を保っており、予想外の動きで自らの攻撃を受け流し躱していく少年に苛立ちを覚えていた。

「ちょこまこと動くな！」

少年は華麗なステップで鱗粉攻撃を回避していくと、子どものようにいたずらっぽい笑みを浮かべて銃を発射。

「へへ～ん♪それっ」

「う！」

アゲハヤミーは銃弾を受けると、後ずさりし、頭に完全に血を上がらせると少年の息の根を止めようとする。

「生意気な。とどめをさして・・・」

と、その時だった。

彼方よりスレイヤーダッシュを使って高速で移動してきたユーノが現れたのだ。

「ほおおおおおおおお！！！」

「？！」

ユーノは勢いをつけるとその状態からアゲハヤミーに強烈なキックを食らわせる。

「セイヤー！」

「ぐおお！」

アゲハヤミーはまともにその一撃を受けると、大きく後ろへと吹き飛ばされる。

ユーノはスレイヤーダッシュを解除すると、直ぐに長い間戦っていた少年の元へと近づいた。

「君、大丈夫って・・・え！」

だがその時ユーノ達は以前にも自分たちを助けた事のあるオッドアイの少年の姿に目を疑い、少年はそんな彼らに笑みを浮かべる。

「やぁどうも♪また遭いましたね」

「君は・・・ホント何者なんだい？最近よく見かけるけど」

「へへ。まだそれは言えないんだよね。もうちょっとしてからでないと」

「え？」

その言葉に疑問を感じるユーノだったが、直ぐにユーノスの言葉で状況を思い出す。

「ユーノ！ぼさっとするな。奴が飛び立つ前に羽を切り裂け！」

「あ、わかりました！インビンシブル・ボンド！ツインブレイド！」

〈Ｔｗｉｎ　ｂｌａｄｅ〉

ユーノはカマキリコアの魂を強く引き出すと、両腕に一つながりの二本の刀を作りだし、向かって来るアゲハヤミーの体を切り裂いていく。

「は！」

アゲハヤミーはその一撃を受けると、火花を散らして倒れ込む。

ユーノは一気に形勢を逆転させると、得意の剣術を駆使してアゲハヤミーを畳み掛ける。

「おら！そら！おんどらああ！」

「ぐああ！」

アゲハヤミーはユーノが繰り出す激しい剣戟を受けると、為す術もなく火花を散らして倒れ込む。

ユーノは止めを刺すために、タカコアの魂を引き出す。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｅｙｅｓ〉

その力でユーノは視力を強化し、ヤミーの急所を的確に見極めると一気にスレイヤーダッシュで駆け出して行きアゲハヤミーに止めを仕掛けようとする。

「はあああああ！！」

だがその時、このタイミングで現れたリリスが攻撃を行おうとするユーノを妨害してきたのだ。

「させないわ」

リリスは掌から虚弾を発射し、ユーノに向けるとそれに気づいた少年が声を荒げる。

「！危ない！！」

「セイヤー！」

何も知らないでいるユーノは一体どうなってしまうのだ！！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚　ウナギ二枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

旅人とアゲハ蝶と有名人（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は西洋の魔術事情について♪」

「近代西洋儀式魔術と呼ばれるものは19世紀から20世紀にかけて主に黄金の夜明け団によって確立した西欧の儀式魔術　であり、隠秘学ないし秘教の体系である。」

「カバラ、占星術、タロット、ギリシア・ローマ・エジプトの神話などを総合したシンボリズムと形而上学を枠組みとして、位階制とイニシエーション儀礼、および儀式と瞑想の技法を用いた霊的修練の体系を構築している。」

「その歴史はルネサンス期、儀式魔術という言葉は霊と交渉する魔術の類を指し、キリスト教的な通念では異端的な忌まわしいものとされていた。つまりは魔術、もとい魔法は当時の人達から言わせれば呪術的で怖いものと考えれていたんだね♪」

と、そんな話をしていると唐突にユーノの友人でありイギリスの名のある魔術師の一人、柊沢エリオルが現れる。

エ「どうもみなさん。ご無沙汰しております」

ユ「これはこれは柊沢さん。よくおいで下さいました」

再会を祝い、二人は固い握手をする。

ユ「この間のクリスマスにはどうも。すっかり重宝させてもらっていますよこの杖には♪」

エ「気に入って貰えてなりによりです。それと、もう一つその杖には私の魂が込められていますので、困ったときはそれを使って乗り越えてください」

ユ「ん？魂を・・・・・待てよと言うことはまさか・・・」

エ「次回は、私のコンボが登場です。私の力がどのようなものかは本作よりも前に漫画『カードキャプターさくら』をご覧ください」

笑顔で読者にそう言うエリオルであった。

魔導師図鑑ハイパー！

1月7日。

地球で言うこの日は七草の日だ。

そんな訳でルキア、恋次は一護と共に大根畑に来ていた。

何かやる気に満ち溢れた様子の恋次とルキアに対し、疲労感に溢れた一護。

一「あのさ・・・七草集めるのになんでこんな場所に来なきゃならねぇんだよ？」

ル「知らんのか貴様は。七草はセリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロと言うのがそれなのだ」

恋「で、そのうちのスズナ・スズシロは大根とカブの葉の別名なんだぜ」

一「じゃあ、普通に八百屋かスーパーで買えばいいだろが。何で態々ここに来る必要があんだよ！？」

ル「いや～～～うっかりして財布を忘れて来てしまったのだ♪ははは」

恋「俺に至っては金欠で節約しないとならねェンだ」

一「おめぇらの事情なんかしるかよ！つうかやっぱマズイって！流石に人んちの土地から失敬しようなんて考えは・・・！」

ル「七草粥の為だ。この際手段は選ばん！」

恋「行くぜ一護！大根とカブごと貫って行くぜ！」

恋次とルキアは堂々と人の敷地に出来た畑に潜入し、一護はかなり慌てた様子で止めにかかるが・・・

地「おい！そこで何してるてめぇら！」

一・恋・ル「な！」

持ち主に見つかってしまう。

果たしてどうなるの！

続く。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユ「僕が第二のオーズって、どういうことだ？」

ス「私達の契約」

ユ「有名になるためでもなんでもいい。争いがどれほど人苦しめるか、伝えられるなら」

エ「では、私の力を使ってください」

第１６０話　ウナギと世界と黒魔術コンボ

ウナギと世界と黒魔術コンボ（前書き）

エ「生まれる前に、会っているのかもしれませんね」

ウナギと世界と黒魔術コンボ

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、有名になりたいという旅人トキオの欲望からヤミーが誕生。

二つ、アンクがスカリエッティと接触。

そして、三つ。リリスがアゲハヤミーを倒そうとするユーノを妨害する。

カウント・ザ・メザルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　トラ二枚　チーター一枚
ライオン一枚　ウナギ二枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

〈ユーノＳｉｄｅ〉

リリスの放った虚弾が今まさにアゲハヤミーに止めを差そうとするユーノの身体に被弾する。

「セイヤー・・・！ああ！！」

虚弾を食らった瞬間、ユーノとアゲハヤミーの周囲に爆発が発生し、それを見ていたユーノス、オッドアイの少年は目を見開いた。

「「あ！」」

「ふん」

リリスは妨害に成功すると、鼻で笑いながら爆発の中より吹き飛んできた全身ボロボロのユーノの姿を確認する

ユーノは当たり所が悪かったのか、険しい表情を浮かべ立つ事もままならない状況だった。

「ぐ・・・う。」

それを好機と見たアゲハヤミーは先ほどの仕返しとばかりにユーノに攻撃を仕掛ける。

「ははははは。ははははは！」

ユーノはアゲハヤミーの攻撃を受けながら、それでも必死に痛みを堪えて懸命に立ち向かっていく。

「ち」

一方、ウヴァに目をつけられ絶体絶命の状況に立たされていたイベント会場のヴィヴィオ達の方はと言うと、鋭い爪を研ぎ澄ませ徐に近づくウヴァを牽制しつつこの事をユーノに伝えようと模索していた。

「ど、どうするんだオイ！？」

「みなさんは下がっててください。私が時間を稼ぎます」

年長であるアインハルトはヴィヴィオ達を後ろに後退させると、バリアジャケットを身に纏い利き手に魔力を集めていきイベント会場に遭ったもの目掛けて覇王断空拳を放つ。

「覇王流・・・！」

「？」

「断・空・拳っ！！！！！」

アイハルトが覇王断空拳を発動した瞬間、イベント会場の飾りが大きく吹き飛ぶと同時に猛烈な風を纏ってウヴァへと飛んでいく。

「ふん！」

ウヴァは飛んで来たカザリを容易く切り裂いたが、直後怒った風爆に眼をくらませてしまい、気が付いた時には既にヴィヴィオ達の姿が何処に見当たらなかった。

「ちっ」

イラついた様子でウヴァは会場内に置いてあった椅子に八つ当たりをし、その場から立ち去っていくと、ステージの下の方で息を潜めていたヴィヴィオ達は安堵のため息をつき、直ぐにこの事をユーノに伝えようと意気込む。

「早く・・・パパに知らせなきゃ！」

ヴィヴィオ達がそう決め込んでいたその頃、ユーノは防戦一方の状態に陥っていた。

「ぐああ！」

リリスの虚弾を受けた所為で、普段なら難なくこなせる筈の飛行魔法が上手く使えず、同時に蓄積ダメージも溜まっていたため千鳥足を余儀なくさせ、空中から容赦なく降り注ぐアゲハヤミーの攻撃にフラフラとなっていた。

ユーノスはそんなユーノの元へと近づき気を確かめる。

「ユーノ、大丈夫か?!」

「う・・・結構効きましたよさっきのは」

「飛べそうか?」

「足をちょっと・・・ジャンプするのでいっぱいです」

「なら、バッタコアで何とか飛んでみろ。」

「わかりました」

ユーノはユーノスにそう言うと、ふらふらの体を何とか起こして頭上のアゲハヤミーに目を向けると、バッタコアの魂を引き出し高く飛び上がる。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｊｕｍｐ〉

ユーノは飛び上がると同時に、アゲハヤミーの触角を掴み引きずり下そうとするのだが、アゲハヤミーはユーノの抵抗を振り払い素早い滑空でその場を後にしてしまった。

「く!」

ユーノはアゲハヤミーを逃がしたことを相当後悔し、苦い顔を浮かべながら変身を解除。

ユーノスはその場に居合わせたオッドアイの少年と共にユーノの元へと近づき、オッドアイの少年はため息がてら言葉を呟く。

「逃がしちゃったか・・・おい！」

少年は怒気を孕んだ声で不敵な笑みを浮かべながら立ち尽くすリリスの方へと目を向ける。

「ふふ」

「貴様・・・リリス・・・！」

ユーノスも思わずユーノの肩に乗ってからリリスを睨み付け、ユーノ自身も先ほどのリリスの行動にはかなりご立腹の様子であった。

少年は我慢が出来なくなると、リリスに歩み寄り胸ぐらを掴む。

「答えろ！何故この人を撃った？」

「あら。ユーノ・スクライアこそ私達の邪魔をしたわ。」

「！」

リリスの言葉に、思わず目を見開くユーノ。

「それに、世界を統べるのはオーズじゃない。私達よ」

「オーズ・・・リリス。そう言えば前に言っていたな。僕が第二のオーズだって」

「「！？」」

ユーノスと少年はユーノから直接口にされた思わぬ一言に互い顔を

見合わせ、ユーノは真剣な表情を浮かべながらリリスと向き合いさらに問い詰める。

「僕が第二のオーズって、どういうことだ？」

「ふふ。」

要求には答えず不敵な笑みを浮かべるリリスに、少年は声を荒げる。

「答えろ！」

すると、リリスはユーノ達に背を向けると徐に歩きはじめ背中越しにこう返答する。

「いずれ分かるわ。それまでようく考える事ね・・・――ユーノ・スクライア。いや、ブランク・オブ・デザイア」

それだけを言い残すと、リリスは霧状に霧散していきユーノ達の前から立ち去った。

ユーノはもう何度同じ言葉を聞かされただろう・・・自分が欲望の空白？ブランク・オブ・デザイア？であるということを。

「く。またそれかよ・・・」

自分自身も好きでこうなった訳ではないということは分っているのだが、いざそれを素性も目的も知らない者から何度も言われれば気分も悪くなるはずだ。

ユーノスはそんなユーノの心の曇りを晴らす為、横で声をかける。

「気にするな。ただの戯言だろう」

「そうでしょうか――――――」

一抹の不安が彼の頭をよぎろうとしたその時、唐突にユーノ達の耳にヴィヴィオとアインハルトたちの声が聞こえてきた。

「パパ！」

「ヴィヴィオさんのお父様！」

向日の方から大急ぎで走ってくるヴィヴィオ達の姿を確認すると、少年は血相を変えてその場から逃げ出していき、訝しげな様子でユーノは走ってくるヴィヴィオを見る。

「ヴィヴィオ？それにアインハルさん達も・・・」

すると、ヴィヴィオはユーノに向かって慌ててしまっているその旨を伝える。

「トキオさんが、たいへん！」

「えっ！？」

ユーノは思わず表情を一変させてしまう。

詳しい話をヴィヴィオ達から聞いたのち、ユーノはユーノスと共にヴィヴィオ達に案内されウヴァが現れたイベント会場へとやって来た。

イベント会場では、破損したカザリの撤去作業と並行してスタッフたちが大急ぎで開催時間に間に合わせようと準備追われていた。

ユーノはヴィヴィオ達と共に離れた場所からその様子を窺いこう尋ねる。

「ここに昆虫グリードのウヴァと、トキオ君が？」

「そう」

ヴィヴィオはユーノの隣に立ってそう答えた後、ほんの数分前のトキオの様子と彼が見ていた人間体のウヴァの事を気にしながらユーノに更に言う。

「トキオさん・・・何かに憑りつかれたような顔になってた」

「まさか・・・トキオ君からヤミーを・・・！」

ユーノは頭のどこかで考えていたその予感が当たってしまったことに若干の後悔を覚えながら、この深刻な事態をどう対処するかユーノスと共に考えるのであった。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

さて、ユーノとユーノスからメズールのコアメダルであるタコのコアメダル二枚を奪い返すことに結果的に成功したガメルは早速塒へと戻り、それをメズールに手渡す。

「ユーノ・スクライアから、奪い返した！」

「私のコアメダル・・・」

メズールはガメルから受け取ったものが本物であることを確かめると、人間体を通して自分のコアを体内に入れていき、怪人体となって満たされる快感に声を漏らす。

「ああ！」

ガメルもこのメズールを見ると自分も同じぐらいの満足度を得られる、そんな錯覚に陥る。

メズールは早速ガメルの行動を褒め称える。

「偉いわよ、ガメル」

メズールがガメルの顔を手で触ると、思わずガメルは怪人体となって喜びを隠すことなく表現しにやけた表情を浮かべる。

「デヘヘヘヘ」

「いい子ね」

すると、その時もう一人ここを塒とする昆虫男こと、ウヴァが帰還しガメルの功績を称える。

「ガメル。流石だな」

「ウヴァ・・・何してた？」

ガメルが帰ってきたウヴァにそう尋ねると、徐にメズールが椅子に座りカウンターの方で不敵な笑みを浮かべるウヴァにこう言った。

「ヤミーでメダルを稼いでいたんでしょ？ひとりじめ？」

「いや。ユーノ・スクライアに邪魔された」

それを聞いた途端、ガメルは先ほどの事で自信をつけたのかこんな風に呟く。

「ユーノ・スクライア・・・倒すの、俺！」

「じゃあ、私も行くわ」

ガメルの事が少々気にかかったのか、メズールも同行しようとするのだが、それをすかさずガメルが止めにかかる。

「メズールは、休んでろ」

「そうだな。まだ身体が万全じゃない。ユーノ・スクライアは俺とガメルで倒す！（もっとも、メダルは俺が一人占めさせてもらうが。フッ）」

考えている事は結局、メダルのひとり占めしかない低能な昆虫男なのであった。

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

さて、同じグリードでもカザリ以上に高い知能を秘め、メダルの事となると誰よりもがめついことで有名な鳥のグリード、アンクは現在スカリエッティのアジトであるアルハザードの研究施設にて、スカリエッティと駆け引きの真っ最中だ。

両者一歩も引かずに鋭い眼光を向け続け、いつ緊張の糸が切れてもおかしくない状況であった。

傍らで見守るプレシアの額にも汗がにじみ始める。

そして、緊迫した様子のスカリエッティとアンクのうちに、最初に口を開いたのはスカリエッティだった。

「ふふ・・・つまり君は私を消して、自分にとって有利な情報とこの研究施設の全てを奪う――――――テイクだけしたいというのだね？」

「それが一番手っ取り早い」

「ん～～～分かってないな、君は。そうだろプレシア？」

「ええ。それはムリな相談ね」

「張ったりなら無駄だぞ！」

飽く迄もアンクはテイクだけの姿勢でこの場にいる二人や現在開発途中の破面魔導虚を敵に回しても完全な存在になるために強気の姿勢を見せるが、ここでスカリエッティが不敵な笑みを浮かべて次の

ように言う。

「やれやれ・・・仕方ないアンク君。そう言うのであればこちらにも考えがある。分らずらの君には、体に教え込んだ方がいいだろ」

「何？」

「ふふ」

すると、スカリエッティは徐に立ち上がって指を鳴らす。

「！」

その瞬間、アンクの体に異変が生じ、アンクは胸の方を押さえながらアンゴルモアの異常な反応に体がついていけず悶え苦しみだす。

「ぐ・・・があああああ・・・！！！！」

スカリエッティとプレシアはその場で苦しみだしたアンクを凝視し、アンクは苦しみに耐えながら多量を汗を流し、スカリエッティに鋭い目線を向け尋ねる。

「な・・・何をした・・・！？」

「――――――私の意志だ。」

「何！？」

「私の意志ひとつで、君達グリードの中のアンゴルモアは作動しなくなる。つまり、人間で言う心臓の役割を果たす君の体内のアンゴ

ルモアは、私が死ねばその途端に弾け飛び、君はメダル諸共消滅する」

「！」

スカリエッティから語られた信じられない一言に思わず耳を疑うアンク。

そう・・・すべて自分も含めたグリードは今目の前にいる男、ジェイル・スカリエッティの手の中で踊らされていたのだ。

「ふふふ・・・さぁ、道はひとつだ。今後手に入れた７０パーセントを渡すこと。そうすれば君の生き物らしい命もアンゴルモア集めもやりたい放題だ！！ふふふふ」

アンクはその言葉を聞くと、口を籠らせ胸の痛みを押さえながらスカリエッティに言う。

「・・・・・・４０だ」

「７０」

「そんなに渡せるかっ！」

しかし、スカリエッティは首を横に振り依然として主張する。

「ふふふ・・・７０」

「く・・・・・・」

「君にとってのアンゴルモア集めが有利になれば、得をするのは君だ」

アンクは口を籠らせ、気は進まない様子で半分の値で了承し様を得ようとする。

「・・・・・・５０！」

だが、スカリエッティは飄々した口調で背を向け７０パーセントを要求。

「７０～♪」

アンクは右の拳を強く握りしめ、自分のアンゴルモアの暴走に堪えながら己の許容値の限界である数値を超えに出す。

「６０だ！これ以上は無い！！」

「ハッピバースデー！！」

「くっ・・・」

スカリエッティはその言葉を待っていたとばかりに声を上げると、アンクの方へと振り返り目の前に置かれていたケーキの箱に手をかけ、リボンを解く。

「私達の契約」

リボンを解き、箱を開けた瞬間目に映ってきたのは、スカリエッティが予めこうなることを予感してブルーベリーで「６０％」と書か

れたショートケーキであった。

アンクはこれを目にした瞬間、自分が人間如きに出し抜かれたと言わんばかりの表情でスカリエッティを睨み付ける。

「貴様・・・最初から・・・・！」

「では手付及び前払いとして、セルメダル１００枚」

「持ってけ！！」

アンクはそう言うと、怪人体の右手から他のグリードとは違い隠れて秘かにため込んでいたセルメダルを枚数分放出し、それを見た瞬間スカリエッティは指を鳴らしてアンクの呪縛を解く。

「ふふふははは！！！素晴らしい！素晴らしいよ！！これからも友好的に頼むよ、アンク君」

こうして、両者の契約は無事に完了しアンクは集めた６０パーセントを代償に、スカリエッティと手を組むこととなったのだ。

◇

〈トキオＳｉｄｅ〉

グリードがそれぞれに次なる行動に出ようとしているその頃、ミッドチルダで瞬く間に活躍の場を広げ、注目度を上げていた大和トキオ本人は現在雑誌記者からの取材を受けているところであった。

「すごいですねえ～。雑誌、ネットコラムの連載が５つ。テレビ、

ラジオの出演が3つ。そして、我が社からは本も出版。まさに時の人って感じです」

感服の女性記者の言葉であったが、聞いていたトキオはコーヒーを啜る傍ら物足りない表情を浮かべる。

「いや。まだたりへん」

「えっ？まだですか？」

「まだまだや。もっと有名にならんと」

トキオはそう言いながら、自分の頭に浮かんで来る今以上に有名となり、世界中に自分の名が売れていく状況を想像する。

「もっと」

そんな想像を掻き立てる傍ら、脳裏によぎるウヴァの自分をそそのかす一言。

〈もっと欲望を解放しろ〉

「せや。もっと。もっとや」

欲望に憑りつかれ、完全に記者そっちのけで妄想を膨らませるトキオの姿に、思わず貴社の女性は声をかける。

「大和さん？」

しかし、トキオはその言葉などまるで耳に入らない様子で際限なく

欲望を掻き立て膨らませていく。

その結果、アゲハヤミーに蓄積されるセルメダルの枚数は増加傾向を続けるのであった。

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

その頃、ユーノと共に機動六課へと戻って来たユーノスはユーノのオフィスに置かれていた今の自分の寝床である籠の中で今回のアゲハヤミーの撃退方法を考えていた。

「ふう～～～あのヤミーを早急に倒さないとな。だがどうやって倒す？飛行魔法は今のユーノでは当分使えそうにない・・・だとしたら」

その時、ユーノスの頭に先のヤミーとの戦闘の情景が浮かんで来、その中でもユーノスが注目したのは一度だけ会い見えた事のあるガメルの作り出したバイソンヤミーとの戦闘であった。

『ユーノ・スクライア！』

『は！』

ユーノスはその事を思い出すと、確信にも似た表情を浮かべてひとり言のように呟く。

「あの能力・・・それにはガメルのコアメダルを奪い取って魂を引き出す必要がありそうだ」

ユーノスが妙案を思いついているその間、ユーノ達は新聞のコラムに大々的に掲載された『新進気鋭の旅エッセイスト大和トキオ』と書かれた見出しと写真を見、どこか複雑な心境となっていた。

「なんか・・・すっかり有名人になっちゃいましたね」

「今朝もラジオに出てたよ。ヴィヴィオの言った通り大阪弁になってた。」

「トキオさん・・・大丈夫かな・・・」

一抹の不安が全員の頭によぎる中、唐突にその不安の種であるトキオがユーノ達の元へと現れたのだ。

「ユーノ」

「トキオ君！」

ユーノはトキオの姿をこの目で捉えると、足早にトキオに近づき心底心配した様子で話しかける。

「何度も電話やメールしたのに何で連絡くれなかったのさ！？僕達心配してたんだよ！」

「悪りぃ。実は頼みがあるんだ。あのエピソード俺にくれ。ほら、お前が内戦に巻き込まれた話あったやろ」

「えっ！？」

ユーノは思わず耳を疑うような一言を口にするトキオを唖然とした表情で見つめると、トキオは手を横に振りながら大阪弁でこう話し出す。

「ちゃうねん。ネタ切れやねん。おもろい話も、人を感動させる話ももっと欲しいねん！」

すると、話を聞いていたなのはは徐に呟く。

「それって、ユーノ君の体験を自分の話にするってこと？！」

「ええやろ。俺有名になりたいやし、なっ？」

飽く迄自分が有名になるためにはこの際手段を選ばずと言った今のトキオの様子に、ついには鬼太郎やはやてまでもが憤る。

「てめぇふざけんじゃねぇぞガキ！！！」

「恥を知らんか！ユーノくんのあの体験を有名になるための手段に使おうなんて！！」

「わわあわ！！」

自分に敵意を見せる周りの反応に思わずたじたじのトキオだったが、直後ユーノは神妙な顔を浮かべながらトキオがそこまでして有名になりたい本当の理由を尋ねる。

「トキオ君・・・有名になってどうするつもりだい？」

「・・・ふん。見返してやんねん」

「？」

一瞬疑問符を浮かべてしまうユーノ達。

トキオはそんな彼らから顔を少し逸らすと、心の裡でくすぶっていた過去の記憶を思い出し拳を強く握りしめながら真実を語り出す。

「俺の事、バンコクで籠ってるだけのなんもでけへんやつってバカにした奴を見返したんねん！」

それを聞いた瞬間、ユーノは理解した様子で再び問うた。

「・・・もしかして、そのために世界放浪の旅に？」

「おう。せやけど、世界放浪してる奴なんかごまんとおったんや。
もっともっと
有名にならんと、あいつらのこと見返されへんねん！」

それを聞くと、ユーノの中に何処かもやもやとした感情がこみ上げて来、声を詰まらせる。

と、その時血相を変えた様子でユーノスがユーノ達の元へと歩み寄って気、目の前に立ち尽くすトキオの姿に目を疑った。

「トキオ・・・もとい、ヤミーの親が何故ここにいる？」

「じゃあ、やっぱり・・・トキオ君。君はグリードに利用されてるんだよ。目を覚ましてくれ！」

トキオの肩を掴み、真剣な眼差しで訴えかけるユーノと、何も事情を知らないキョトンした様子のトキオ。

「えっ。なんや？グリードって？」

ユーノスはそれを見た後、ユーノの肩に乗ってトキオから距離を離すと、時雄には聞こえないように耳元で言葉を漏らす。

「ユーノ。さっさと倒して来い。ただ、自分の体の事も考えろ。俺達もすぐに行く」

ユーノスはそれだけを言うと、ユーノの掌に結界印を乗せ、ユーノスが肩から降りるとユーノは結界印を握りしめ決意の籠った表情を浮かべる。

「分かりました」

ユーノは結界印を握りしめると、落とさないように外へと向けて走り出し、バイクに跨りアゲハヤミーの気配を辿って走り出す。

なのは達が心配の拭えない表情で出ていったユーノを見送り、トキオ自身もきょとんとした顔を浮かべていると、スバルとティアナは顔を見合わせトキオに近づく。

「トキオ君も一緒について来て」

「えっ？」

「見てもらいたいものがあるのよ。さ、来て」

「おっ。おお、なんやなんや！？」

スバルとティアナに強引に手を引かれてユーノが目指した場所へ向けて出発するトキオ。

ユーノ達が移動を開始し始めたその頃、アゲハヤミーは空中を飛び回りながら真下に広がる建物を見おろしながら、テレビ俳優やタレントが多く集まる撮影上に目をつける。

「ここには有名人とやらが沢山いる。ちょうどいい」

アゲハヤミーは適当なタレントに眼をつけると、急降下。

そんなアゲハヤミーの存在など知る由もない一人の女性タレントは、撮影を終えるとマネージャーやメイクと共にスタジオから出て来た。

「お疲れ様でした」

「「お疲れ様でした」」

だが、そこへすかさずアゲハヤミーが飛んで来、それを見た一同は足を止め眼を見開いた。

アゲハヤミーは怯える女性タレントに目を向けながら言葉を吐く。

「よこせ。その輝きをよこせ！」

「きゃあああ！」

アゲハヤミーに恐怖したタレントやマネージャーたちは一目散にそ

の場から退散しようとし全速力で走り出すと、アゲハヤミーもその後を追って執拗にタレントを付け狙う。

ヒールがとれてしまい、足を躓いた女性タレントは絶体絶命の危機に陥る。

だがその時駆けつけてきたユーノが目撃し、ユーノは猛ダッシュでアゲハヤミーに近づくと女性タレントからアゲハヤミーを遠ざける。

「てい！」

アゲハヤミーを遠ざけることが出来たユーノは結界印を取出し、スレイヤーモードとなる。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

スレイヤーモードとなったユーノはアゲハヤミーと向かい合い、戦闘を開始。

戦闘が始まって暫くして、スバルとティアナがトキオを連れて現場に追いつき、トキオはユーノと闘うアゲハヤミーの姿に思わず口を漏らす。

「なんやねん、あれ！？」

「たぶん。トキオ君の怪物から生まれたヤミーだよ」

「俺の欲望から・・・」

神妙な表情のスバルからの一言に、思わず口を籠らせるトキオ。

この場に居合わせた三人、並びに機動六課のモニターで戦闘の様子を窺うなのは達は先のリリスによるダメージのお陰で本調子ではないにも関わらずヤミーを倒すために懸命に戦うユーノの姿を見ていた。

「ぐあああ！」

女性タレントを守ろうとするユーノはアゲハヤミーに対して防戦一方と化している。

そんなユーノの戦う姿を間近で窺っていたトキオは、急に込み上げてくる罪悪感に苛まれ思わずつぶやいてしまう。

「ほんなら、俺が有名になりたいって思ったせいで・・・」

アゲハヤミーはこの期に及んで執拗にタレントから輝きを奪おうとするが、それを透かさずユーノが止めにかかり、隙を見て反撃し泣き喚くタレントを逃がそうとする。

「早く、逃げて！」

タレントを逃がした後、心置きなく戦うことが出来るようになったユーノであったが、それでもアゲハヤミーの方に分があり、アゲハヤミーの攻撃をまともに受けて吹き飛んだ。

「ぐあああ！」

「ユーノ！」

「「ユーノ先生！」」

「ユーノ君！」

トキオ達は吹き飛んできたユーノの事を心配し声をあげると、その現場に現れる謎のオッドアイの少年。

そして、少年から現れるとユーノは体を起こしトキオの方へと近づき、あの時のトキオの頼みをあっさりと許可してしまったのだ。

「僕が内戦に巻き込まれた話、トキオ君の話にしていいよ」

「えっ！？」

トキオは思わずその言葉に耳を疑い、傍らで聞いていたスバルやティアナも口を出す。

「ちょ、ユーノ先生・・・！？」

「何言ってるんですか？！だってあれは・・・！」

しかし、ユーノの意志は固かった。

「有名になるためでもなんでもいい。争いがどれほど人苦しめるか、伝えられるなら」

「「「・・・・・・」」」

「大事なのは、何をしたかだと思うし」

そのユーノの言葉を聞いた瞬間、オッドアイの少年は驚き返り、そして同時に感心した表情を浮かべた。

「！（ほう・・・流石言うことが違うね）」

ユーノはそれだけを伝えると、再びアゲハヤミーの元へと向かい、戦闘を始めた。

「うらああ！」

すると、先ほどのユーノの言葉を聞き入れた瞬間、トキオは愕然とした様子で次のような言葉を漏らした。

「あかん・・・俺・・・なんもしてへん・・・」

「えっ？どういうことなの？」

「世界放浪の旅かて、ほんまは行ってないねん・・・いっとる気になってブログ書いてただけやねん・・・」

トキオが本当の事を語り出すと、それを後ろの方で聞いていた少年は心の中で次のように語り出す。

「（そう・・・お父さんは昔僕に言ってくれた。大欲を成し遂げたいのなら、先ずは目の前でなすべきことをちゃんとしろと。僕は世界の人を助けるために、お父さんの言いつけを守って目の前のすべきことをしてきた。そうして、何かをした気にならないように――――）」

少年の心の独白が終わると、トキオは段々と情けなくなってきた感じで、弱々しい声で真実を口にする。

「俺・・・実力も実績もないのに成功した奴のこと妬んで、背伸びしとっただけやねん・・・！」

少年の心にも、嘗ての遠い記憶に蘇る父の言葉が反芻される。

「（先ずは目の前・・・それから先を。だからあの人はずっと――――――）」

〈僕は今やられることをやるだけ〉

改めてそのことを確認すると、少年は追い詰められているユーノを助けるため、行動に出る。

「僕も今やれることをやるのみ。それがやがて、世界の人を助けることに繋がると信じて！」

少年は前に出てくると、背中に担いでいた対ヤミー用のバズーカを取出し、狙いを定めてヤミーに攻撃を加える。

攻撃を受けた瞬間、アゲハヤミーは火花を散らしてユーノの側に倒れ込み、戦っていたユーノとスバル達は目を丸くして何の前触れもなく現れた少年の姿に驚いた。

「！謎の少年君・・・！？」

「あれ・・・ティア、あの子は！？」

「君、どうしてこんなところに！？」

すると、驚き返る三人の言葉を軽く聞き流して少年はリュックから蒼いカンドロイドを取出しそれをユーノ目掛けて投げつける。

「今はそれどころじゃないでしょ！それよりユーノさん！これ、新しいカンドロイド！」

「え！？カンドロイド・・・！？」

少年が投げつけた青色のカンドロイド三体は変形し、本当はウナギのはずなのだがそれを勘違いしたスバルが思わず絶叫。

「きゃああ！ヘビ！！私ヘビは苦手なんですけど！！！」

少年はそれを聞いた途端、思わず肩の力を落としてしまう。

「ぐ！あのですね、それはウナギですよ！」

「え・・・ウナギ？ああそうなんだ・・・」

「あんたはもう・・・」

横でそれを聞いていたティアナは呆れかえってしまう。

そして、渡されたユーノ自身も思わず苦笑い。

「ははは・・・うわ！」

だがその直後アゲハヤミーがユーノに攻撃を仕掛け、それを素早く躱したユーノは地面を這うように動く電気ウナギのカンドロイドを手に取り少年に言う。

「ホントに謎の多い子だけど、ありがとう！」

ユーノはウナギカンを構えると、それを頭上に浮かぶアゲハヤミー目掛け投げつける。

すると、アゲハヤミーはウナギカンに体を巻きつかれ、電気ショックを与えられると苦しみだし地上に墜落する。

この事にユーノは意外そうな顔を浮かべる。

「お！結構使える」

ユーノはその隙にアゲハヤミーを攻撃し、スバルとティアナもそのサポートに回って形勢は一気に好転する。

その戦闘の様子を、バッタカンを通じて拝見しているのがカリ・ユガファンデーション会長のカリ・ユガであった。

ディスプレイを通じて、カリはユーノを毎度の事ながら手助けをするオッドアイの少年に警戒心を抱くと同時に興味と言うものも湧いてきた。

「竜神の寵児がまたしても彼を助けるとは・・・・・人間は意外な行動をとる。これだから観察は止められないのです」

すると、そんなカリ・ユガの言葉を隠れて聞いた今まで行方不明だ

と思われていたグリードの一人、カザリが人間体の姿で現れ言葉を発する。

「たしかに人って・・・面白い」

カリはカザリが現れたことになんら焦りも抱かず、いつも通りの様子で人形に話しかける。

「私がグリードを観察したいように、グリードも人間を観察したいんですね」

「まぁそうかも。」

「私は観察されたくありませんが」

カリが本音を口にすると、カザリは部屋に飾られた終末の絵を見ながら自分も同じ事を考える。

「グリードだって同じだよ。」

そして、その絵を爪でなぞる様に凝視しながらカザリは怪人体となり、目線を合わせないカリの肩に手を乗せる。

「ふふ」

この二人の接触により、今後のヤミー・グリードとの戦いが大きく一変しようとしていたのだ。

◇

〈ユーノSide〉

さて、アゲハヤミーと対峙していたユーノと、スバル、ティアナ、謎の少年の方もいよいよ追い込みを見せていた。

スバルとティアナが長年のコンビネーションでウナギカンで体を縛られたアゲハヤミーを翻弄するすきに、ユーノがスレイヤーブレイドで切り裂く。

「は！は！」

そして、アゲハヤミーが体勢を崩した瞬間、ユーノは止めを差そうと飛び出すが、その直後想わぬ妨害を食らってしまう。

「ぐあ！」

「！」

「え！」

「ユーノ先生！」

スバル達が目の当たりにしたのは、アゲハヤミーに止めを差そうとするユーノを急襲してきたグリードのウヴァであった。

ウヴァはアゲハヤミーにとりついていたウナギカンを鋭い爪で取っ払い、ユーノ目掛けて攻撃を回避する。

「ぐああ！がっ！」

「ユーノ先生っ！」

「いま、助けます！」

スバルとティアナは位置に着くと、容赦ない攻撃でユーノを苦しめるウヴァへと立ち向かっていき、オッドアイの少年もまた狙いを定めてバズーカを構える。

「ロックオン・・・うわ！」

だがそのとき、少年の攻撃を差し止めて来たのはウヴァに連れられてユーノを倒しに来たガメルであった。

ガメルは少年を投げ飛ばすと、今度はスバルとティアナに攻撃を加え、圧倒的なグリードの力に二人は吹き飛んだ。

「「きゃあ！」」

ユーノはそれに気づくと、ウヴァの攻撃を辛うじて振り切り傷を負ってしまった三人の元へと駆け寄った。

「スバル！ティアナ！謎の少年君！大丈夫かい！？」

意識を失いかけている三人に呼びかけるユーノ。

そんな隙だらけのユーノに狙いを定めるガメル。

「ユーノ・スクライア、倒す！」

ガメルはユーノ目掛けて突進し、その直後意識をはっきりさせた少

年が焦燥に満ちた表情を浮かべる。

「いてて・・・あ！前です！」

「な！」

ユーノが気づいたその瞬間、ガメルが勢いよく体当たりをしてきた。

「おおお！！！」

もう駄目かと思われたその時、ユーノ達の目の前に見慣れた魔法陣が展開され、ガメルはその魔法陣によって攻撃を阻まれると同時に爆発の影響で吹き飛んだ。

「うわあ！」

ユーノ達が目を見開いてその魔法陣を張ったものを確認すると、それは紛れもなく最強の結界魔導師ユーノス・スレイアであった。

「ぼけっとするな、お前達」

「ユーノス元帥！すみません」

「ユーノ。ガメルからコアメダルを奪い取るんだ。」

「ガメルから！？」

「ああ。重力操作ができるのはガメルの力だけだ。」

「そう簡単に言いますけど・・・」

ユーノはそう言いながら不安一色の顔で徐に起き上がるガメルを見つめ、ガメルはユーノ達を見ながら気合を入れ直し言う。

「俺、一度勝った。俺の方が・・・強い！」

ガメルはスバル達には目もくれず、ユーノだけに狙いを定めると勢いをつけて突進をし、ユーノを力圧しで吹き飛ばす。

「ぐああ」

その後はウヴァとガメルのダブルパンチを食らってしまい、ユーノは満身創痍となって追いつめられる。

「くそ・・・いい気になるなよ・・・！」

ユーノは何とか立ち上がると、逆刃刀を抜刀し二体のグリード目掛けて走り出し、そこで激しい攻防を繰り広げる。

スバル達も協力してグリード二体相手に奮戦するが、その時忘れられていたアゲハヤミーも加わりユーノ達を襲ってきたのだ。

「ぐあああ！」

「「「きゃあああ（うわああ）！」」」

「ユーノ！お前達！」

ユーノスは離れた場所で彼らが傷つく様子に胸が痛み、ウヴァはその後もアゲハヤミーと共闘して容赦なくユーノに攻撃を加え、頃合

いと判断すると爪を尖らせ狙いを定める。

「とどめだ」

ウヴァが目の前で倒れているユーノに留めの一撃を加えようとしたその瞬間、ガメルが血相を変えてウヴァの行動を止めに来た。

「ダメっ！」

突然のガメルの行動にウヴァは反論する。

「ガメル、何をする！？」

「ユーノ・スクライア、倒すの・・・俺！」

「どっちでもいいだろが！」

基本思考が子供であるガメルが意地でも自分がユーノを倒すつもりでいたため、そのままユーノに向かって走り出す。

「おおおお！」

「く！」

ユーノは逆刃刀を杖代わりにして立ち上がると、ガメルの隙だらけの腹にようく狙いを定めるとスレイヤーブレイドを使ってガメルの腹部にそれを差し込んだ。

「ぐ・・・！」

ガメルはスレイヤーブレイドの一撃を受けた途端、セルメダルが大量に放出し、同時に動けなくなってしまう。

そして、ユーノは徐に体の中から探り出したコアメダルを抜き取るとガメルを解放し、ガメルは尻もちをつくとその途端足の鎧がセルメダルへと分解されてしまう。

「俺の・・・コアメダルが・・・」

ユーノは掌に握られていたガメルから奪い取った三枚のコアメダル、サイ・ゴリラ・ゾウの三種類を確認する。

「は、は、は。しかも・・・三枚」

ユーノス達はユーノの元へと駆け寄りこの事を絶賛する。

「上出来。いや、それ以上だ」

「凄いです!!流石です!」

「早く、今のうちにこの力で・・・」

と、ティアナがそう促そうとした瞬間、オッドアイの少年が大声を上げる。

「危ない!!早く避けて!!」

「「「「え?」」」」

四人が一様に顔を振り向いたその瞬間、アゲハヤミーが空中から襲

撃を仕掛け、四人は回避する間もなく大きく飛ばされた。

「「「「ぐあああああ！」」」」

ユーノはその所為で折角奪ったコアメダルを飛ばしてしまい、急いで回収しようとするのだが力が体に入らない。

「くそ・・・力が・・・入らない・・・どうすれば・・・」

今ユーノの目の前には大切な仲間三人が無残な姿となって倒れている。

ユーノとしては、何としてもこの状況を打破し彼らを助けるつもりなのだが、どうしても体に力が行き届かず八方塞がりの状態。

だがその時、そんな追い詰められたユーノの懐から唐突に何かが光はじめ、不審に思ったユーノがその光るものを取り出すと、それはクリスマスの時に柊沢エリオルから貰ったニワトコの杖であった。

「ニワトコの杖が・・・どうして・・・」

すると、その直後ユーノの耳に元々の杖の所有でありこれを託した柊沢エリオルの声が聞こえてきたのだ。

『お困りの様ですね。』

「！」

ユーノがその声に反応し目の前を見てみると、そこにいたのは紛れもなくエリオル本人であり彼以外の人物の姿が見当たらなかった。

「柊沢さん・・・じゃあもしかして・・・」

『ええ。以前にもお話しましたが、困っているときはお互い様ですよ、ユーノさん。大切な方々を助けるのであれば、是非私の力を使ってください』

「柊沢さんの力を・・・もしかして完現術コンボを?!」

『あなたならきっと使いこなせますよ。だから頑張ってください。クロウ・リードは、いつでもあたなのことを見守っていますから――――』

エリオルはその事を伝えると、光の彼方へと消えていき意識を現実に引き戻された瞬間、ユーノは意を決してニワトコの杖を手に取りグリード達と向かい合う。

ガメルはユーノから奪われたメダルを取り返そうと、ウヴァと共に向かって来る。

「メダル・・・返せ!」

ユーノはガメルのメダルを拾い上げると、ユーノス達を起こし、自分から距離を取る様にと促す。

「下がってて。今からクロウ・リードの魂を完現術させるから――――」

「え!ちょ、ユーノ先生!?」

「危険ですユーノ先生！その身体では！」

「早まるなユーノ！コンボはやばい」

三人は必死でユーノを説得しようとするが、ユーノの決意の方がずっと固かった。

「だけど、ここはやるしかないです！」

ユーノは三人の制止を無視すると、ウヴァ達の方へと向かっていく。

「「「ユーノ（先生）！」」」

ユーノは三体のグリードとヤミーと向かい合うと、ニワトコの杖を天に掲げるように取出し完現術コンボを発動させる。

「柊沢さんの魂、僕に力を！」

〈Ｂｌａｃｋ　Ｍａｇｉｃｉａｎ〉

結界印の機械音が超えると、それと同時にユーノは紫色の霊圧に包み込まれ、その凄まじさにウヴァやユーノス達は圧倒される。

「ぐ！！な、なんだ・・・！？」

「これは・・・！」

機動六課のモニターで同じ光景を見ていたなのは達も新たな完現術コンボをたった今発動させたユーノに一抹の不安と奇妙な機体を抱く。

「ユーノくんが・・・また完現術コンボを・・・！」

「今度は一体どうなるの！？」

機体と不安を両方抱きながら、紫の霊圧が収まるのを待った一同。

そして、霊圧の向こう側から現れたユーノの姿は今までの戦うイメージのものから一変、非常に威厳のありそうな格好だった。

「！」

一同が目の当たりにしたのは、濃い紫を基調とする地球における不世出の魔導師としてその名を轟かせた魔術師クロウ・リードを彷彿とさせるものであり、スレイヤーモード時には掛けていなかった眼鏡を再びつけ、利き手にはクロウ・リードが愛用した闇の力を秘めし杖が握られていた。

これまでの完現術コンボとは一味もふた味も違うユーノの姿にスバル達は唖然とする。

「あれは・・・！」

「第四の完現術コンボ・・・？！」

「クロウ・リードの魂を・・・使役したのか・・・」

すると、その直後ユーノは大声を上げながらこれまで確認された中で最も強い魔力を全身から放出し、ウヴァ達を威嚇してきた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

ウヴァとガメルは一瞬その勢いに後ずさったが、直ぐに気合いを入れ直してアゲハヤミーと共に反撃に出ようとしたが、直後ユーノは杖を掲げて魔法を発動させる。

〈Ｇｒａｖｉｔｙ Ｄｒｉｖｅ〉

その瞬間、ウヴァ達の足元が急激に揺れ始める。

「「「!?」」」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！」

ユーノは声を唸らせながらウヴァ達の周囲の重力場を任意に操作すると、三体を浮かび上がらせお互いに体当たりをさせる。

「「うわあ！」」

ウヴァはガメルと勢いよくぶつかると、思わず体の中よりクワガタのコアメダルを放出させてしまい、それを見たスバルがマッハキャリバーで近づき方に乗せたユーノスが掻っさらう。

「やった！」

「こいつはもうけたな、フン」

相当なダメージを受け、且つコアメダルを奪われてしまったウヴァを捨て台詞を残して退散する。

「おぼえてろ！」

「あっ、待って！」

ウヴァがそそくさと退散すると、その後に続いてガメルも引き上げる。

「ぐっは！」

こうして残ったのはアゲハヤミー一体だけとなってしまい、重力場から解放されたアゲハヤミーに狙いを定めるとユーノは必殺技を発動させる。

〈Ｓｃｈｗａｒｚｅｒ　Ｖｅｒｎｉｃｈｔｕｎｇ〉

すると、ユーノは宙へと浮かび上がり足元に展開されるクロウ・リードが生み出した魔法陣。

魔法陣が展開されると同時に掲げた杖の先端へとかき集められる紫色に輝く無数の魔力素。

それを見ていたスバルやティアナ、更には機動六課のなのは達は目を疑った。

「この感じ・・・・・・まさか・・・！」

「ユーノ君が・・・集束砲！？」

そう、砲撃魔導師であるなのはにとっての十八番であり、彼女を彼女たらしめた最強の魔法・・・スターライトブレイカーと同じ集束

砲撃を今ユーノはしようとしていたのだ。
とは言っても、元々ユーノは魔力素を集めると言ったことは得意とせず、結界魔導師としてバインドや補助魔法などに特化してきた。
だが、今のユーノはあらゆる物質の魂を引き出し使役することに長けた絆の完現術士。
魔力素に宿る魂を使役させ、魔力を集束させせることなど造作もないのだ。
紫色に輝く魔力素はやがて巨大な砲弾へとその姿を変えていき、逃げようとしたアゲハヤミーであったがユーノの魔力によって体の自由を奪われ身動きが取れなくなる。
そして、最高質力に達したその瞬間、ユーノはその巨大な集束砲を目の前のアゲハヤミー目掛けて発射する。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！セイヤー！！！！！！！！！！！！」
発射された漆黒の殲滅？シュヴァルツェ・ヴァーニクタントーは猛烈な勢いでアゲハヤミーと周囲のもの全てを飲み込み、咄嗟に広域結界を施したユーノスの力を持ってさえ、その威力はあまりに桁違いで、思わず大声を上げる。
「「「うあああああああああああ（きゃあああああああああああああああああ）！！！！！！！！」」」
モニターで同じ光景を目の当たりにしていたなのは達も眩い魔力の

光に目をやられないようにと画面から目を遠ざけ、同時に尋常じゃない集束砲撃に危惧を抱く。

「な！なんつうバカ魔力だ・・・！」

「これはもう・・・白い魔王の私の比じゃないって・・・！！」

「認めるのかお前！！」

そして、ようやく砲撃が収まり画面の中を覗きこんだなのは達が目の当たりにしたのは、アゲハヤミー以外一切の被害を出さずに静けさを保っていたあたりの風景であった。

「あ・・・あれだけの威力を誇って、器物破損一切ゼロ！」

「うそ・・・あんなに凄かったのに・・・！？」

と、その時先ほどの集束砲の威力を解析していたアルトが出されたデータを目の当たりにし信じられないとばかりに甲高い声を上げた。

「えええええ！！」

「どないしたん！？」

「今の威力・・・・・・なのはさんのスターライト、それに八神部隊長のデアボリック・エミッションを掛け合わせた値に等しいです！」

「何！！！！」

「ま、マジ・・・！」

聞いていた一同は耳を疑いたくなったが、それは自分の目で確認した先のユーノの砲撃を見れば認めざるを得なくなり、クロノは一人唖然とした様子で呟く。

「ヤミーだけを狙って撃ち抜いたという事か・・・・・・（ユーノ。お前は・・・・・どこまで上を目指すつもりなんだ・・・）」

アゲハヤミーはすべてセルメダルへと還元されたことを確認すると、ユーノは完現術コンボを解き、クロウ・リードの魂を扱ったことからくる大量の魔力消耗と魂の疲労、更には慣れない集束砲のトリプルパンチの影響で、全身から滝のような汗をかき膝をついた。

「は、は、は、は、は、は、は」

そんなユーノの事を心配しながらも、ユーノスはスバルの方に乗りながら回収したガメルとウヴァのコアメダルを握りしめ徐に呟く。

「白夜叉、スレイプモンに続き、クロウ・リードの魂にも耐えられる器とはな――――――やっぱり、お前には完現術者・・・そしてメダル集めの才能がある」

ユーノスがそう呟くと、聞いていたスバルとティアナも顔を見合わせる。

「ティア・・・ユーノ先生って・・・」

「そうね。確かに絆の数だけ、あの人は進化し続けるわ。それこそ、次元世界全てにその名を轟かせる最強って言われる以上に――――

――」

そんな事を各々が口にしている間に、ユーノは荒い息を立てながら何とか立ち上がろうとする。

「は、は、は、は、は、は」

すると、辛そうにしているユーノに手を差し伸べて来たのはオッドアイの少年だった。

「ユーノさん」

「？」

「手を貸しましょうか」

少年が手を差し伸べてくると、ユーノはその好意に甘えさせてもらい少年の手を握りしめる。

「ありがとう・・・・・僕、君の事色々と分からないことだらけだけど、少なくとも嫌いじゃないから。なんとなくだけど♪」

「はい♪」

少年は笑顔でユーノにそう答えると、スバル達から事情聴取を受ける前に颯爽とバイクで走り去っていき、それを追いかけようとしたティアナたちをユーノは敢えて止めにかかった。

こうしてユーノは、第四の完現術コンボを会得しまた一段と絆の糸を強く結ぶことになったのであった。

◇

〈トキオＳｉｄｅ〉

アゲハヤミーを倒したその一日後。

トキオはすっかり元の性格へと戻り、口調も標準語に直るとお世話になった機動六課の面々に挨拶し、ユーノも彼を安心させるためにこう言う。

「ヤミーの被害者も、みんな元に戻ったんで安心して」

「そっか。よかった～～～でも俺のせいでみんなに迷惑かけちゃって・・・ホントなんてお詫びしたらいいか・・・」

すると、そんなトキオにユーノは彼が一番気に入っているあの言葉を口にする。

「ふふ。マイペンライ！」

それを聞くと、トキオも柔かい笑みを浮かべる。

「ありがとう。俺、今の自分に出来ることからコツコツとやっていくよ。とりあえずは、魔法千都で有名な『マラケシュ』まで自転車旅行だ！！」

「期待しておりますぞ。新しい旅ブログ、欠かさずチェックいたしますので」

「はい」

トキオは名残惜しくリュックを背負い、自転車に跨り出発しようとするが、その直前にユーノが差し止めあるものを手渡す。

「あっ！これ、僕からの餞別ね♪」

トキオがユーノから渡されたものを広げると、それは非常に派手な柄をしたトランクスパンツであった。

「！？」

「明日のパンツね♪」

トキオは目を丸くしたが、直ぐににこやかな表情を浮かべユーノにお礼を言う。

「へッ。へへ。ありがとう」

トキオはパンツを受け取ると、しっかりとした自分の第一歩を踏みしめ、自転車を走らせ機動六課を後にし、ユーノ達はそんなトキオの後ろ背中を見守りながら旅の成功を祈るのであった。

「頑張れ、トキオ君」

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚
チーター一枚　ライオン一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゾウ一枚　ゴリラ一枚　サイ一枚　ウナギ二枚

ウナギと世界と黒魔術コンボ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は黒魔術コンボについてだ♪」

「第四の完現術コンボのこれは、柊沢さんから頂いたニワトコの杖に宿る彼の魂を引き出して発動する西洋魔術師系のコンボで、魔力値がバカみたいに高くなるんだ」

「それもその筈。柊沢さんは不世出の魔術師であるクロウ・リードの生まれ変わり。その魔力の大きすぎるせいで昔は未来予知が出来てしまって結構困っていたそうなんだ」

「能力としては、重力を操作できると同時に僕の大の苦手分野である砲撃魔法やなのは縁の集束砲だって撃てちゃうんだ♪」

な「凄い！凄い！！ねぇねぇ、だったら今度私のスターライトとどっちが強いか一度勝負してみようよ！」

ユ「え！いやいやそれはマズイでしょ！大体、そんな広い空間スペースが何処にあるの？僕らの集束砲なんて互いに全力で打ち合えば、間違いなく機動六課は壊滅しちゃうだろうし」

な「そっか・・・でもやっぱり気になるな。同じ砲撃魔導師として」

ユ「なのは・・・僕は砲撃魔導師じゃないからね。真逆の結界魔導師だからね言っとくけど・・・」

な「あ・・・ごめん。つい」

ユーノが結界魔導師であったことを忘れかけたなのはであった。

魔導師図鑑ハイパー！

前回のあらすじ。

七草粥の材料である七草を取りに近所の畑までやってきた一護達だが、運悪く土地の所有者に見つかってしまい絶体絶命のピンチだった。

地「おめぇら・・・人の畑で何してやがる？」

鋭い剣幕で睨み付けると、一護達は顔を硬直させる。

一「いえ・・・俺達はその・・・／／／」

恋「ちょっと落し物を・・・／／／」

地「じゃあ、その手に握った大根とカブは何だ！？」

地主は恋次が手に取っている大根とカブを指さし、慌てて恋次は後ろに隠す。

恋「こ、これはえっと・・・！！」

地「てめぇら・・・いい歳扱いて畑荒しか・・・ああ？」

一「（まじいよ・・・マジで殺す気満々だよ・・・）」

恋「（どうするよオイ・・・）」

困り果てながらも後ずさり気味の二人。

するとその時突然ルキアが沈黙を破り臭い芝居を始める。

ル「ぐっす・・・／／／本当にごめんなさい・・・実は私達七草粥が食べたくて・・・」

ルキアの涙を見ると、地主も一旦話を聞くことにした。

地「なんだ・・・おめぇら七草粥が食べたいのか・・・」

ル「はい・・・ですがうちは貧乏でお金が無くて、だからこんなことをしてしまって・・・／／／本当に申し訳ありません！！」

ルキアが泣きついてくると、地主も困惑し始める。

地「おお・・・悪かったよ。だからもう泣くなって」

ル「おじさん・・・お願いがありますの・・・少しだけでいいですから、大根とカブの葉っぱ・・・御譲りしてくれませんか！！」

ルキアは目を輝かせて地主に訴えかけると、地主も遂に心打たれ涙を流す。

地「おお！何という目の輝きなんだ・・・くうう～～～！！」

地主は畑に入ると、大根とカブを抜き始める。

地「チクショー持ってきやがれ持ってきやがれ！葉っぱと言わず何ぼでも！」

ルキアは成功したと二人に親指を立てる。

二人はそれを見て顔を見合わせこう言った。

一・恋「親指立てんな、親指を」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ム「もっと可愛い子はいねぇのか？俺を満足させるほどの女はよ」

カ「あんたと組めばなくなったコアメダルもきっと見つかる」

メ「時代遅れのグリードに先は無い・・・」

浦「あの子を死に至らしめたのは、ムラナカ。てめぇだ！！」

第１６１話　ハイエナと追憶と劣悪強姦魔

登場人物

大和トキオ

声：森田千明

ユーノが旅先で知り合った旅行家で、その旅先での出来事をブログに書き留めているブロガー。ミッドチルダを訪れ、ユーノと再会を果たし自身の旅の記録を書籍化しようとするも上手くいかず、人気ブロガーのブログに嫉妬しているところをウヴァに目をつけられ、セルメダルを投入された。アゲハヤミーによって有名ブロガーや漫才師から文才、話術などの才能を付与され有名になりたいという欲望を叶え始めるも、欲望が膨らんだ結果ネタに詰まり出し挙句ユーノの内戦の話を自分の話にしたいと持ちかけてきた。トキオが世界放浪の旅をしていたのは、籠り気味となっていた自分を馬鹿にした者達を見返す事だった。だが、ユーノのとある一言が切っ掛けで自分がまだ何もしていないにも関わらずその気になってブログを書いていただけであることを思い出す。ヤミーとの戦いが終わった後、自分自らの力で成し遂げるために、自転車での旅行を決行し、ユーノ達と別れる。

登場ヤミー

アゲハヤミー

声：細谷佳正

身長　２６０？　体重　１１４？

特色／力：能力の吸収と付与、鱗粉による攻撃

旅ブログを書籍化し、有名になりたいという大和トキオの欲望から生み出された。ある人物が持つ能力や才能を吸い取り、別の人間へと与える力を持っており、有名ブロガーからは文才を、漫才師からは話術を奪い、トキオへと与えることで“有名になりたい”という欲望を加速させる。飛行能力と鱗粉による攻撃で、反撃手段を持っ

ているユーノでさえ手こずらせ苦しめる。新進気鋭のエッセイストとなったトキオの欲望を更に加速させるべく有名人やタレント達を襲い始めたところで、それを止めようとするユーノと戦闘に突入。戦いに加わったガメル、ウヴァと共にユーノを追い詰めるも、黒魔術コンボを発動させたユーノによって撃破される。

ハイエナと追憶と劣悪強姦魔（前書き）

肉体的快楽は、刺激の強きものゆえ、他の快楽を楽しむ能力なき人々によりて追求さる

アリストテレス

人気投票まだまだ受けつけています。

どんどん募集ください。

ハイエナと追憶と劣悪強姦魔

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

９５０年前に作られ、１５０年前に封印された、人の欲望から作ら

れたメダルの怪人・グリードが復活。

持っていたはずのそれぞれ9枚のコアメダル

そのすべてを手に入れるのは、グリードか・・・ユーノか・・・あるいは人の欲望か

その先に待つものは果たして・・・

ユ「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！セイヤー！！！！！！！！！！！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚
チーター一枚　ライオン一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゾウ一枚　ゴリラ一枚　サイ一枚　ウナギ二枚

亀井浦太郎、２６歳。

出身世界、第９７管理外世界『地球』の東京都練馬区のとある町。

銀行の頭取である父親と弁護士である母親との間に一人息子として生まれる。

９歳の頃、とある事件を元に魔導師としての力に目覚め、その後は嘱託魔導師を通じて地上本部首都防衛隊の若手ナンバーワンの陸戦教導官としてその才覚を発揮。

鉄壁と謳われる優れた防御性能と、そのしたたかな攻撃方法などから敵方からは「狡猾の亀」、一方で「地上部隊のエースオブエース」と評されるほどであったが、新暦００７５年の冬、ある悲しき事件を気に自らその職を降り管理局を退職。

その後、異世界を放浪し生きる意味を見失いかけていたところをユーノに救われ、以後ユーノに絶対の忠誠を誓い現在はスクライア商店の従業員兼機動六課の特別嘱託魔導師としてフォワード達の教導に携わっている。

この度のヤミー騒動は、今まで彼自身の口からは決して明かされることのなかった真実の記録が解き明かされるものとなる――――――

〈鬼太郎Ｓｉｄｅ〉

２月４日　午前７時：００分　機動六課隊舎

こんな真冬でもいついかなる出動があってもいいように、なのは達前線メンバーは今日も訓練をかかさない。

外の方では冬の寒さも負けぬほどの熱気に溢れかえるフォワード陣の威勢と、そんな彼らに情熱をもって接する教導官高町なのはや隊長陣の姿。

そんな早朝訓練が終わりを迎えようとしていた時、嘱託局員であり「スクライア商店」きってのフロントアタッカー、桃谷鬼太郎は同じ従業員である亀井浦太郎の名前を連呼していた。

「亀！おい、亀！！いないのか！？」

鬼太郎は、朝から何処へ行っても姿を見せない浦太郎をあちこち捜し歩いていたが、結局どこを探しても浦太郎は姿を現さない。

「何だよ・・・何所にもいねじゃねぇか・・・！？何所行きやがった！？」

困り果てる鬼太郎。

ちょうどその時早朝訓練を終えたなのはや恋次達が鬼太郎を見かけた。

「あ、おはようございます鬼太郎さん。」

「御機嫌ようぞよ、ピーチ。」

相変わらずの白鳥の杓子定規な言葉にこちらも相変わらずなツッコミを入れる鬼太郎。

「鬼太郎だよ!!あ、それよりお前ら・・・亀の奴見なかったか?」

「浦太郎教官ですか・・・いいえ。」

「朝練には参加してませんでした。」

それを聞くと、鬼太郎は益々頭を悩ませる。

「朝練にも参加してないとなると・・・あの野郎ほんと何所いったんだ?」

「何か用事でもあったのですか?」

「な~に、借りてた金を返そうと思っただけだよ。ま、いないからそのまま俺が貰っとくか。」

それを聞くと、金太郎もそうだが珍しく恋次も正当な意見を述べる。

「おい・・・それはちゃんと返せよ。」

「そうですぞ、鬼太郎。着服はいけません!」

「冗談だよ、たく!」

すると、何かを思い出したかのようにマリアがこんな事を呟く。

「そう言えば、私が訓練場に行くときに浦太郎さんを見かけたんですけど・・・何だかいつもと様子が変だったような・・・」

「どこが変だったんだい？」

「何ていうか・・・ちょっとピリピリしてたと言うか・・・」

鬼太郎は浦太郎の性格を考え、ピリピリするなどと言うことは余程の事だと考え、尚更浦太郎の事を心配し、その話を偶然にもロビーのソファーで寝ていたユーノも効いてしまったのだ。

「・・・――――――――――」

新聞を顔で覆い隠し、大切な従業員である浦太郎の事を我が子同然のように考える店長ユーノ・スクライアなのであった。

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

一方、噂の人物である亀井浦太郎本人は何処にいるのかと言えば――――――ミッドチルダの共同墓地の一つであり、スバルの母のクイント・ナカジマ、更にはティアナの兄であるティーダ・ランスター他両親が埋葬されているエルセアへと足を運んでいた。

浦太郎の足取りはいつにもなく重いモノであった。

と言うのもこれには五年前に起こったとある事件が彼の運命を大きく変えてしまったことがあり、同時に自分が管理局を辞めるきっかけとなった忌まわしき出来事でもあったのだ。

浦太郎は両手に花束と線香を握りしめ、周りに広がる墓標を適当に見渡す。

「（ちょうど5年ぶりだろうか・・・ここに足を運ぶのは・・・・・・）」

そんな事を想いながら浦太郎は目的の墓の前に到着すると、その墓標に書かれていた「ヒカリ・ガーレイド　享年１６歳　新暦００５９～００７５」の文字を見つめた後、線香に火をつけ花束を供え静かに手を合わせる。

そして、徐にその墓標に刻まれた名前を遣る瀬無い表情で口にする。

「・・・・・・ヒカリ・・・・・・」

いつからだったか――――――――亀井浦太郎と言う男が、嘘で自分を繕うようになったのは――――――――

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

さて、その翌日の昼下がりの事。

ミッドチルダの自動車整備工場に勤める一人の男が、友人からの電話を受けているのだが、これがこの度のヤミー騒動、そして隠された亀井浦太郎の過去を知ることになる重要な場面となるのであった。

男は友人と電話をする傍ら、一人の男の名前を口にする。

「ああ？ムラナカ？来る訳ねぇだろ奴は鑑別に・・・――――え！出て来た！？」

『昨日、管理世界にそれらしい男がまた一人襲ったらしいぞ！他の場所でも次々にやられてるんだよ！！』

「何！？おいホラキ・・・マジかよ・・・！？」

『奴は・・・ムラナカは今までの溜まりに溜まった欲求を晴らすつもりだ！』

男は、その話を聞かされた瞬間身の毛が凍るような恐怖を覚え、同時にその恐怖を抱いた人間、アツシ・ムラナカと言う名の男のことを危惧する。

「オイオイ・・・あいつの異常なまでの性への欲求は見境なしに降りかかるぜ・・・俺達でも手が付けられねェぞ。」

『どうするぜオイ！？』

「どうするって言われてもよ・・・俺だって仕事があるし今更あいつと関わりたくもねぇよ・・・！」

では、そのアツシ・ムラナカとは一体どんな人物なのか？

これは二日前の事だ。

ミッドチルダ南拘置所から一人の男が刑期を終え仮出所された。

アツシ・ムラナカ　２７歳

５年前、『マレスター』と言う名の組織を結成し、管理世界各地で強姦・ならびに拉致・監禁などの行為を働いた上、マレスター同士で勃発した抗争『マレスター危機』の際に抗争相手を焼き殺そうとしたことで、懲役５年の刑を受け本日それを全うしてきたのだ。

ムラナカは刑期を全うすると、今まで積もりに積もった性欲求を爆発させ、知人のコネを使って管理世界を飛び回り、気に入った女性（幼女も可）を見境なく襲い、執拗に性的虐待・暴力を行い欲求を満たそうとしていた。

「フフフ・・・ハハハ。もっとだ・・・もっとよこせよ・・・・・・・足りねぇよこんなんじゃ・・・もっと可愛い子はいねぇのか？俺を満足させるほどの女はよ・・・ふふふはっは・・・」

完全に狂人となってしまっているムラナカはその後も真っ暗な路地裏を歩きながら夜の街に身を潜め、気に入った女性（えもの）を捜し歩く。

そんな彼に今回目を付けたのは、今まで身を潜めていたグリードのひとり、カザリであった。

カザリは人間体となってその手にセルメダルを持ち、貪欲なまでに制への執着が強いムラナカに興味を持った。

「フフ」

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

２月７日　午前１１時：２０分　機動六課

この季節、地球で言うところのバレンタインデーまでもうじき一週間を控えていた。

最近のバレンタインデーの傾向としては、世の女性たちは男の為に作るチョコよりも寧ろ、友達同士で上げる友チョコに熱心であったため、もはやバレンタインデーと言う風習はその概念を大きく翻し、好きな男にチョコを上げる日ではなく好きな女友達にチョコを上げる日となっていたのだ。

そう言ってしまうと、一部の百合市場では爆発的な盛り上がりを見せるが、あえて言わせてもらおう。

この小説は根っから純情異性愛路線であると！

だからそのようなバレンタインデーの傾向など一切無視して、べたなやり取りを書いて行こうと思う。

「ふんふんふん♪」

今ここに、一人の愛する男の為にチョコレートではないが、お菓子を作る女性がいる。

高町なのは・・・これ以上の説明はいらないから適当に省略させてもらうが、なのはは彼氏であるユーノの事を思い浮かべながら彼がリラックスできる愛情のこもったお菓子を作り上げると、お盆に乗せて彼が仕事場とするアドバイザー室へ軽い足取りで向かった。

「今日のは自信作だぞ♪来週はいよいよ運命のバレンタインデーだし・・・今年は雌豚がいるから何が何でも美味しいの作ってユーノ君のハートをゲットしないと！その為の好感度獲得の為に・・・」

なのはの言う雌豚とは、言わずと知れた小鳥遊万梨阿の事であるが、実を言うとそのマリアの方もなのはと同じことを考え手作りショートケーキを作ってユーノの元へと向かって居たのだ。

「バレンタインデーの前にユーノ様の好感度のアップが必要不可欠ですわ♪なんとしてもなのはさんのそれよりも美味しいと言わせてみせますわ♪」

両者、考えは同じであるはずなのに水と油な関係。

そうして、二人がアドバイザー室の前まで来ると上機嫌な様子でドアの向こう側にいるユーノに声をかける。

「「ユーノ君（様）？」」

だが、お互いに声を聞いた瞬間二人は顔を見合わせ驚き返った様子で大声を上げる。

「「え・・・――――――――ああああ！！！」」

二人はこんな事態を想定していなかったのか、一旦背を向けよく考えてからもう一度ゆっくりと顔を見合わせ今にも爆発しそうな雰囲気を醸し出す。

「マリアさん・・・何の用ですか?ユーノ君なら今仕事中なんですけど・・・」

「それ言うならあなたも同じではありませんかなのはさん。私はお疲れのユーノ様にほんのささやかな差し入れを持って仕事に精を出して貰おうと思って」

「あ~無理無理。無理ですよ。ユーノ君今はコーヒー派じゃなくて緑茶派なんで。」

「ではなのはさんの手に抱えたそのモンブランは何ですの?緑茶にモンブランは合わないと思いかねますが?」

互に殴勲無礼に罵り合うと、ついに二人の導火線に火が付き二人のどうしようもない抗争が勃発する。

「ユーノ君には私が届けますんで!!邪魔しないで下さい!!」

「そちらこそ!!私がユーノ様に愛の籠ったおやつを届けすのでお控えください!!」

女の意地とプライドをかけ、白き魔王とバカ力死神は歯を食いしばり、一歩も引かない様子でいがみ合う。

「「ぐ~~~!!!」」

と、そんな火花を散らす二人を見ながらあきれ返った様子で恋次が資料片手に声をかけて来た。

「何バカやってんだよテメーら。ユーノならいねぇぞ」

「「ふぇ!?な、なんですと!!」」

ユーノがいないという報せを聞かされ、血相を変えた二人は慌てて恋次に尋ねる。

「それではどちらにいかれたのですかユーノ様は!?」

「ま、まさか私を置いて一人放浪の旅に／／／」

思わず涙を浮かべ被害妄想的なものを膨らませるなのは。

恋次は深いため息をついてしまう。

「おめぇはそう言う発想しか出来ねぇのかよ。あいつら多分――――」

恋次はそう言いながら、なのはとマリの二人を機動六課の中に設けられている局員用の総合運動施設へと案内し、その施設内にあるスカッシュをするための空間に集まる人だかりを見付け、その人だかりが注目する四方を壁に囲まれた狭いコートで今まさに打ち合いをする男、ユーノ・スクライアと亀井浦太郎の二人を発見する。

基本的に、ユーノも浦太郎も世間一般からしたらイケメンと呼ばれる部類に入っており、中でもユーノは司書長時代から性格的な面、金銭面などのことから高く評価を受けており、クロノと並び結婚し

たい男性局員ランキングのトップ3に入っていたのだ。

そんなユーノは傍から見れば女にも見えてしまうその容姿とは裏腹に、男らしい逞しい一面が備わっている。

特にこの五年の間にユーノは一護達に叩きあげられたお蔭で、その男らしさに磨きをかけ、こうしてスポーツなどもするようになった。

ユーノはスカッシュのボールを浦太郎と共に打ち合い、額からいい汗を流すさまは白い気魔王とバカ力死神の心を鷲掴みにする。

「「ぽかーん・・・・・・」」

なのはとマリアは何時もとはまた違った輝きを見せるユーノにくぎ付けとなっており、前線メンバーはそんな二人の試合を見守り、ユーノの放った一撃が決め手となり浦太郎はボールを取り損ねてしまった。

「のあ！」

浦太郎に勝利すると、ユーノはラケットを肩に乗せ笑みを浮かべる。

「ふん♪」

ゲームが終了すると、両者はいい汗をかきながら握手を交わす。

「ナイスゲーム」

「あ～あ。負けちゃった。やっぱ強いや店長」

ユーノは全身から流れ出る有酸素運動の象徴である汗をぬぐいながら、かけていた専用のメガネを外し、元の縁なし眼鏡を取出し外へと出て来た。

「ふ～～～」

「いい汗をかいたな。ほら」

ユーノスは出て来たユーノの肩に飛び乗ると、持っていたタオルを手渡す。

「ありがとうございます」

ユーノは適当な場所に座ると、汗を拭き始める。

そんなユーノの姿を傍らで目を点にして見つめるなのはとマリア。

「「・・・・・・」」

すると、漸くユーノも二人の存在に気づく。

「あれ？なのはに小鳥遊さん。二人とも見てたのかい？」

ユーノがそう尋ねると、二人は目を点にした状態で沈黙を続け、訝しげな表情を浮かべながらユーノは首をかしげると、さり気にエリオが話しかけてくる。

「ユーノ先生、スカッシュお丈夫ですね」

「へへ。スカッシュのコートは5面。つまり、三次元空間を使って

ボールの反射軌道を計算しながらプレーする。相手がショットした瞬間ラケット面を見て、即座にボールを・・・」

「理屈はいいって！私そういう難しい話は苦手だ！」

側で聞いていたアギトは理屈をすらすらと口にするユーノの話に耳を押さえてしまう。

「はいはい♪さ、いい汗かいたところだし・・・仕事に戻りますかな」

気分転換が出来たユーノは徐に立ち上がり、その最中鬼太郎は言う。

「あれで気分転換になったんすか、店長？」

「十分十分♪脳を活性化させるためには、やっぱ運動もしないとね。」

そんな爽やかな笑顔と汗を流すユーノの姿に乙女フィルターのかかったなのはとマリアの二人は頬を染めうっとりとした顔を浮かべる。

「「（ユーノ君（様）がいつもよりも輝いて見える～～～うっとり～～～？）」」

そんな二人の桜色のオーラを確認した吉良はふと恋次に尋ねる。

「ねぇ・・・なんなのこの二人」

「俺が知るかよ」

キャロはその後またしてもつまらぬ争いを始めたなのはとマリアの喧嘩を見る傍ら、隣に立つパートナーのエリオを気にし心の中でこんな事を呟く。

「（なのはさんもマリアさんもライバル意識激しいな。その点私はよかった。エリオ君を盗られるようなライバルはここには居ないから～～～？）」

キャロにとって、エリオは誰よりも特別で大切なパートナーであると同時に、この世界で自分が最も好きな男だ。

その為、たまたまこの場にはエリオのライバルとなりうる人物がいないために安堵の表情を浮かべていたのだが、そう思った直後に聞こえてきた声を聞いた瞬間、キャロのエリオ安全神話は崩壊を果たす。

「あら～～～いないと思ったらこんなところにいたの。チビッ子のキャロは♪」

「え」

「！こ、この声は・・・」

意外そうな顔を浮かべるエリオとは違い、キャロは何処か警戒を覚えたような顔を浮かべ、他の一同は目の前に現れたエリオ達と同い年の女の子の姿に目を丸くした。

「お？君は・・・――――」

「は～い、みなさん。御機嫌ようしばらく」

「ルーちゃん！」

「ルー！」

その女の子、ルーテシア・アルピーノが社交的な態度で挨拶を交わすと、エリオとキャロは相当に驚いた様子だった。

「あ？誰だこいつ？」

一方で素性を知らない恋次は当然のことながらそう口に出すと、側に居たフェイトが説明をする。

「ルーテシア・アルピーノ。ＪＳ事件の時にスカリエッティに嵌められてレリック集めを手伝わされていた子で、エリオとキャロが保護したんです。今は辺境の世界で同じく保護した母親のメガーヌ氏と静かに暮らしていると聞いていましたが・・・」

「遊びに来たって訳か」

「ルールー！！なんだよ来てるなら来てるって言えよな！！」

アギトは久しぶりのルーテシアとの再会を大いに喜び、ルーテシアも満面の笑みでアギトを抱きしめると他愛もない談笑を始めるが、その一方でキャロは焦燥に捕われた顔つきでルーテシアに尋ねる。

「ちょ、ルーちゃん／／／いきなりなんで！？」

「ふふ。最近はメールばっかりでほとんど顔合わせてなかったでしょ？アギトやここのみなさんにも会いたかったし、ちょっとしたサ

プライズよ、サプライズ。それに、どこぞのオチビさんが惚気ていないかどうかこの目で確かめに来たってのもあるし♪」

「の、惚気って／／／私とエリオ君は別にそんなんじゃないから／／／」

「きゃ、キャロ／／／」

エリオはいくつになっても周りを気にせず恥ずかしいことを口にするなのは二号・・・キャロの発言に顔を赤くする。

一方でそんなキャロをからかうルーテシアは悪戯っぽく笑いを浮かべる。

「ふふふ。何顔赤くしてるのかしら。ちょっとした冗談よ、冗談♪」

「く～～～／／／」

悔しい表情となって拳を握りしめるキャロ。

スバルとティアナはルーテシアの小悪魔的な現在のいたずらっぽい性格と、当初の根暗でネガティブなことしか言わなかった頃のそれをつい比較し、苦笑いを浮かべｒ。

「ティア。相変わらず昔の性格嘘みたいだよね」

「ホント。どこをどうしたらああも真逆になるのかしらね」

「昔はどうだったんですか？」

聞いていた吉良は気になったのか、ユーノに尋ねる。

「言っちゃ悪いですけど、凄く根暗で笑う事さえままならなかった気難しい子だったんです」

「歳月は人を変えるってよく言いますが、変わり過ぎではないか・・・」

ふとそう思ってしまったルキアなのであった。

◇

〈???Side〉

それから数時間が経過したとある管理世界。

貪欲なまでに性への欲望を解放した性犯罪者、アツシ・ムラナカは静まり返った夜の世界に出没しては、一人暮らしの女性の家へと侵入し、欲望に任せて嫌がる女性に構わず性的行為を迫る。

「オラアアア！」

「きゃあああああ！！やめてよ！！！！！」

女性の服を脱がし、下着の姿となった女性をレイプにかけるムラナカ。

こうなった以上ムラナカの欲望は止めることは出来ない。

「ははははは！！！そうだ！もっと喚け・・・もっと声を上げろ！

俺の脳髄がその言葉を聞くたびに蕩けちまいそうなんだ・・・！さぁて、そろそろこっちも蕩けてもらおうか？」

「い、いや・・・！放して・・・お願いだから・・・！」

「ふふふ・・・安心しろよ。一瞬で絶頂させてやるからよ・・・」

そう言うと、ムラナカは不気味な笑みを浮かべながら女性に性行為を働き、女性は恐怖のあまり夜長を劈くかのごとく悲鳴を上げる。

「いやあああああああああああああ！！！」

ムラナカがレイプに走っている同じ時間帯、女好きではあっても決して女性の嫌がることなどしない自称紳士の浦太郎はたまたま管理世界のキャバクラへと足を運んでおり、飲み終わると女性スタッフに見送られながらかなり酔っぱらった様子で別れを惜しむ。

「それじゃ、またねカワイ子ちゃん♪今度は夜明けの海で二人っきりの時間を♪」

「もう浦太郎さんったら♪口が上手過ぎだぞ♪」

「ははは♪またね・・・うっぱ？」

浦太郎は女性スタッフに投げキッスをすると、おぼつかない足取りで帰路へと向かうのであった。

「へへへへ～～～やっぱ女の子ってのはいつの時代でも男の心を潤わす存在なんだよね～～～ああ～～～できれば僕も店長みたくなのはちゃんとウハウハしたい！！」

未だなのはの事を諦めきれていない浦太郎。

だがその時、浦太郎の正面からレイプを終えたばかりでありながら決して満足に達していない様子のムラナカが歩いてきたのだ。

「けっ。まだだ！全然タリネェよ！！もっとだ・・・もっと俺に女を！！！」

同じ女好きでありながらその考え方はまるで真逆なこの二人が偶然にも同じ世界で、そして同じ時間にばったりと出くわし、千鳥足の浦太郎が向こう側から歩いてくるムラナカのかとぶつかる。

「「痛っ！」」

酔っていたために視界と足取りがおぼつかなった浦太郎と、肩を押さえながら不機嫌そうに浦太郎に注意するムラナカ。

「おい、てめぇ気をつけろよ」

「ああ、ごめんわるかっ・・・」

と、浦太郎がムラナカの方を振り向いた瞬間、彼の酔いが一気に醒める。

その理由は、振り向いた瞬間目に映ってきた浦太郎が首筋に施した般若の刺青が原因だった。

「な！（あの般若の刺青・・・・・・！！）」

浦太郎は血相を変え、その場を立ち去って行くムラナカの背中を凝視し、額に汗を浮かばせながら心の中で呟く。

「（あの刺青・・・・・忘れる訳がない・・・あれは紛れもなく・・・ムラナカ・・・次元世界最低最悪の性犯罪集団『マレスター』創設者、アツシ・ムラナカの・・・！！まさか。だけどそんな筈はない。奴はマレスター危機で鑑別送りになった筈じゃ・・・なんであんなもんが今頃・・・？）」

浦太郎はこの時、先ほど自分がぶつかった男は自分の酔いの所為で見た幻覚だと思いたかったが、とてもそう言う気にはなれないでいた。

そして、浦太郎が因縁を抱くムラナカ本人はと言うと、彼と別れてからも人知れず闇夜に姿を眩ませ、老女を除く女性と言う女性を無差別にレイプに掛け、渇きを癒そうとするがそれでも五年分の欲望の渇きはそう簡単に潤う事は無く、彼の不満は爆発寸前だった。

「ふふふ・・・いねぇのか。何処かに血色のいい女はよ・・・犯してやるよ・・・身も心も俺一色にな・・・！！！ふふふふ」

すると、その欲望に目をつけていたグリードのひとり、カザリは人間体の姿で彼の前に現れセルメダルを手に言う。

「その欲望、解放しろ」

カザリは持っていたセルメダルをムラナカに投げつけ、額に現れた投入口に投与すると、その効果によりムラナカの体内にヤミーが寄生する。

「フフ・・・」

怪人体に戻ったカザリは不敵な笑みを浮かべて、その後のムラナカがどんな行動に出るのかを観察しながらセルメダルが溜まるのを待つ。

セルメダルが投与され、ヤミーに寄生されたムラナカは今まで以上の欲望を爆発させ、昼夜を問わず女性にレイプを仕掛けるほどの劣悪な性格へと変貌していた。

「きゃあああああああああ！！」

「オラ！静かにしろってんだ！！」

「止めて！お願いだから止めて！！」

「ウっせんだよ！！」

ムラナカは言うことを聞かない女性にビンタを入れる。

「きゃ！」

「へへ・・・」

そして、血に飢えた獣如く女性の体を貪り始める。

「きゃあああ！助けて！！誰か・・・ううう！！！誰かーーー！！」

ムラナカの欲望が膨れ上がれば膨れ上がるほど、体内に寄生したヤ

ミーはセルメダルを増加させていき、カザリにとっては言い餌として活用されるのであった。

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

２月８日　１０時１０分　機動六課ロビー

ムラナカによる一連の連続レイプ事件はミッドチルダの新聞の一面に大きく取り上げられ、はやてはその内容に思わず身を奮い立たせる。

「怖いわ～～～最近多発している謎の連続レイプ事件・・・！管理局員も多数被害に！」

この内容には、流石の女性陣もご立腹の様子だった。

「最低ですね！許せませんね、そう言う奴。どういう神経してるんでしょうか！」

「犯人はどうやら若い女性を中心に幼女にまで手を上げるほどのど変態らしいな」

すると、その単語を聞いた途端あのまま六課に泊まり込んだルーテシアがキャロに向かって性質の悪い事を言って来た。

「幼女・・・あ、だったらキャロ。気を付けた方がいいわよ。」

「な！私は幼女じゃないから！これでも１５歳！！」

「あら♪その割には背は私達とは雲泥の差じゃない。ねぇ、エリオ♪」

ルーテシアはキャロの嫉妬をまるで煽るかのように、エリオの腕に絡み付き、エリオは突然のルーテシアの行動に顔を赤くする。

「え!?る、ルー・・・／／／」

すると、予想した通りキャロの嫉妬の炎が燃え上がる。

「ああ!!エリオ君にくっつきすぎないでよルーちゃん!!」

キャロは反対側のエリオの腕を引っ張りルーテシアから突き放そうとすると、それに負けじとルーテシアもエリオの腕を引っ張り、当のエリオは相当痛がっていた。

「いだだだ!!!!キャ、キャロ!!!ルーも痛いから!!!」

ユーノはユーノスを肩に乗せながら、自分と同じ道を歩んでしまっているエリオに哀れみを抱きながら深いため息をつき、そんなユーノにユーノスは言う。

「ユーノ・・・ここにもお前の意志を継ぐ者がいたそうだな・・・」

「そんな意志は次いで欲しくは無いんですけどね・・・」

と、そう言った直後なのはとマリアが二人一遍に顔を覗かせて来た。

「「ユーノ君（様）？」」

「あああああああ！！！」

思わず絶叫し、逃げ惑うユーノ。

なのはとマリアは顔を見るなり逃げ出してしまったユーノを必死に追いかける。

そんな彼らの事は無視して、新聞に書かれているレイプ事件の記事を見、ふと呟く白鳥。

「レイプ事件とは・・・下劣な性犯罪が多い昨今、実に胸が痛くなる記事であるな」

すると、その時横で同じ内容の記事を見ていた浦太郎の眼がいつも以上に見開いており、同時に額には汗が浮かんでいた。

「・・・・・・」

そして、この時浦太郎の脳裏に蘇ってくる嘗ての忌まわしき記憶の断片。

『浦太郎さん！私、いつか浦太郎さんみたいな魔導師になりたいです！！』

『君ならきっとなれるさ、ヒカリちゃん』

『あたしはダークネス。アツシ・ムラナカの女さ！』

『ハハハハハハハ！！』

『何故あの男が死刑ではないんだ!!おい!裁判所!!答えろ!!ヒカリを返せ!!!!』

浦太郎がいつもとは違い、黙り込んだまま険しい表情を浮かべているのを不審に思った鬼太郎やスバル達は浦太郎に尋ねる。

「あ?どうした亀。なに浮かない顔浮かべるんだよ」

「え・・・あ。うん。そうだね・・・」

「どうしたのだ?お前らしくもない」

「なんか浦太郎さん、いつもと雰囲気が違うというか何と言うか・・・辛そうにも見えますけど」

「べ、別に何でもないよ。ホント!ははは!!さて!ハーゲンダッツを食べないと♪」

浦太郎は適当に誤魔化すと、足早にその場を後にし一人何処かへと飛び出した。

浦太郎がいなくなった後、一同は顔を見合わせこの頃様子のおかしい浦太郎に疑問を感じ始めた。

「あいつ・・・どうしちまったんだ?」

「まるで人が違った感じだよね」

心底今の浦太郎の様子を心配する前線メンバーを余所に、一人何処

かへと歩き出した浦太郎は深刻な顔を浮かべ、昨夜の男の事と今日の新聞記事の内容を照らし合わせ真剣に考える。

「（連続レイプ・・・・・そして昨日の般若の刺青をした男・・・・・もしかしてあいつが・・・・・・ムラナカが外に出て来たったことなのか・・・！？）」

浦太郎はそう考えると、悔しそうな表情で歯を食いしばり壁を叩きつける。

その様子を偶然にもなのはとマリアを出し抜いたユーノが目撃をしていたのだ。

「・・・――」

神妙な顔を浮かべながらユーノはいつもとは全く違う雰囲気を醸し出す浦太郎の事を気に掛け、一日中目を離さずに観察を続けていた。

そして、その日の夜。

自室に戻ったユーノはパジャマに着替え、ベッドの上に横になると昼間の浦太郎の事を考えながら目を開け天井を凝視する。

「――――」

すると、そんなユーノの事が気になったのか籠の中で寝ていたユーノスも目を覚まし、ユーノに近づく。

「どうした？」

「いえ。ちょっと浦太郎の事が気になりまして」

「ああ。今朝から妙に様子がおかしかったな。」

「あいつ・・・――――何かあったんだろうか。」

「ここには、何かと一人で悩みを抱える者が多いな。」

「そうですね」

二人は似た性格同士なのか、同じ結界魔導師思考が似通っているのは定かではないが、周りの人間が悩んだり、不安であるとつい放っておけなくなる。

その為いずれは浦太郎に事情を話して貰い、解決策を模索しようとも考えていた。

と、その時二人の耳にセルメダルの音が聞こえてくる

「！」

「ヤミーだ！ユーノ、来い！」

「はい！」

ユーノは急いで甚平服に着替えると、ユーノスと共に転送ポートへと向かった。

その様子を偶然にもトイレから戻ろうと廊下を歩いていた浦太郎が目撃する。

「あれ・・・店長？」

血相を変えて飛び出して行くユーノの後姿を見ると、浦太郎も直感で察する。

「まさか・・・ヤミーが！」

すると、浦太郎はユーノの後を追って急いで駆け出した。

この時、彼の心に一抹の不安が燻っていた。

「（どうしてだろう・・・ヤミーだけなら店長に任せてもいいはずだけど、僕の魂はそれだけじゃ駄目だって言ってる・・・よく分からないけど、ここは行ってみるしかない！）」

自分の魂に素直に従い、ユーノの後を追って行く浦太郎。

果たして、彼をそこまで奮い立たせる不安とは何なのか？

真夜中にヤミーの気配を感じとり、異世界へと出動したユーノ達は、第４０管理世界「エリミ」を訪れ、朝日が昇ろうとしている市街地を駆け抜ける。

「ユーノス元帥、待ってください！」

ヤミーの事になると、ユーノスの素早さはいつも以上に増す。

その為ユーノでさえも追いつくのは至難の業であったが、そんな彼ら二人の様子をバッタカンを通じて観察していたのはカリ・ユガと

彼と結託したカザリだった。

カリは自分の分身とも言える人形に顔を向けながら後ろの方で週末の絵を覗いているカリに話しかける。

「ヤミーを仕掛けたんですか？カザリ君」

「セルメダルも必要だからね。もうかなり成長してる」

それを聞くと、カリは人形を適当に動かしながら危惧したように呟く。

「ユーノ・スクライアが倒してしまうかもしれませんよ」

「ヤミーを倒しても、ユーノス達が集めてるのはコアメダルだけだよ。セルメダルにはほとんど手を付けてない。サンプル程度にしか持ち帰らないんだ。で、それは約束通り僕のものになる。何の損もないよ。」

カリはカザリの話を聞き終えると、人形を自分の肩に乗せる。

「私のほうの約束も忘れないで下さい。」

決してカザリには目を合わせず淡々と次のように語りかけるカリ。

「ドクタースカリエッティが言うメダルを集中させる器・・・――――それを第二のオーズ、ユーノ・スクライアにするか、グリードにするのか。あるいは――――――――破面魔導虚か」

そう言うと、カリはディスプレイを表示させ現在スカリエッティが

開発に着手している新たな破面魔導虚のデータを見直し更に呟く。

「そのために、君を観察させてもらいます」

「わかってるよ。僕も興味あるからね。メダルを集中させるなんてことが出来るのかどうか・・・・・それに、あんたと組めばなくなったコアメダルもきっと見つかる」

「そう願います」

スカリエッティとアンクの契約と同じく、この二人もまたそれぞれの欲望の為に契約関係を結び、密かに活動を始めるのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

やがて、完全に朝を迎えた午前7時過ぎ。

ユーノは移動性のある今回のヤミーの気配を追って只管にユーノスと共に管理世界「エリミ」を走り続けていた。

「ヤミーの気配っ！このまま真っ直ぐで！？」

「ああ。こっちだ！」

そうして二人がエリミの街中を走っていたその時、二人は予期せぬ事態に直面し、一旦足を止めざるを得なくなった。

突然ビルの上から外見は白ヤミーと酷似しているが、包帯の巻かれ

ている面積が狭く、顔の中心に黒丸がある見覚えのないヤミーが数体現れた。

二人はこの予期せぬヤミーの登場に目を丸くした。

「うわっ！」

「なんだ？こんな奴らの気配なかったが」

「なんなんですか一体？」

顔を引きつりながら自分たちの周囲を覆い隠す鈍重な動きのヤミー。

ユーノスはこのヤミーを次のように説明した。

「こいつら、ヤミーよりもさらに下の“屑ヤミー”だ。なんで出て来たか知らないが、さっさと片付けろ」

ユーノスはそう言うと、ユーノに結界印を渡してその場から離れる。

「屑ヤミーですか。確かに弱そうですね」

ユーノもそう思いながら、インビンシブル・ボンド、スレイヤーモードを発動させる。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

「よっしゃ！」

ユーノは変身を遂げると、洞爺湖木刀を取出し屑ヤミーに向かって物理攻撃を仕掛ける。

すると、屑ヤミーは屑と名のつく割りには物理攻撃に対してはそれなりのタフさを見せ、幾度ユーノが斬りつけてもその度にしぶとく起き上がり、ユーノを翻弄させユーノも苦戦を強いられる。

「嘘！どうなってんの？」

すると、見ていたユーノスは即座にこう助言する。

「クワガタのコアを使ってみろ。雑魚掃除にはぴったりだ」

「わかりました！」

ユーノは助言を受けると、防護服に収納されている食合がアコアの魂を引き出し、使役させると髪の毛に電気エネルギーを溜めていく。

〈Ｅｌｅｃｔｒｏｎｉｃ　ｖａｎｉｓｈ〉

「はあああああ！」

ユーノは電気ネルギーを充填させると、空中で一回転しながらそれを全ての屑ヤミー目掛けて放出し、その力で屑ヤミーは見事消滅したが、ユーノはその代償に全身の鋭い痺れを貰ってしまった。

「あおおおお！！おおおおお！！！」

刺すような体の痺れに苦しみながら、ユーノは起き上がり頭から煙

を上げた状態でばつの悪そうな顔を浮かべるユーノスに言う。

「ちょ！ユーノス元帥！頭が・・・！頭が・・・！！」

「す、すまぬ。そんなつもりじゃなかったんだが」

「何処までが本当で何処までが冗談ですか！？時々わかんないんですけど！！」

ユーノ自身、ユーノスの事は非常に尊敬しているのだが、時々知ったかぶりをしたような事を言うユーノスには少々困り果てていた。

「と、兎に角落ち着け・・・――」

ユーノスは何とかユーノを宥めさせると、現場に残っていた半分に割れたセルメダルの欠片を拾い上げ呟く。

「誰だか知らないが・・・こんな屑使うほど落魄れたか」

ユーノスは思わず舌打ちをすると、欠片を放り投げ未だに痺れの抜けないでいるユーノに促す。

「行くぞ。本命のヤミーはこっちだ」

「へ、へはい・・・！」

ユーノは先を進むユーノスの後に続く形で、ふらふらの足取りで移動を開始する。

二人が立ち去っていくと、その屑ヤミーを仕掛けた本人である緑の

ジャケットにオールバックの男、人間体のウヴァがセルメダルの欠片を拾い上げ不敵な笑みを浮かべる。

そして、徐にその場を後にすると塒へと戻る。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

ウヴァが屑ヤミーを仕掛けている間に、塒の方で留守を預かっていた怪人体のメズールと、そのメズールのひざまくらで駄菓子を頬張る人間体のガメルは悠々と時間を過ごしていた。

「へへへ。ふふふ」

メズールは我が子の様に甘えてくるガメルの口に駄菓子を手に取り口に運ぶ。

「はい、アーン」

「フフフ」

ガメルはメズールからの愛を一身に受けると、興奮のあまり足をバタバタとさせる。

と、その時丁度外の世界より帰還したウヴァがゴルフクラブ片手に二人に近づき、メズールはウヴァが戻ると真っ先に尋ねる。

「ウヴァ。どこへ行ってたの？」

「ちょっと試したいことがあってな。」

「どんな？」

そう言うと、ウヴァは怪人体の姿となりメズールに次のような事を言い出す。

「なぁ、俺達の状況が変わらないのは俺たち自身が変わらないせいだとは思わないか？どこぞに隠れてるアンクやカザリみたいに、新しい人間の世界にもっと馴染むべきだ。」

「つまり、時代遅れのグリードに先はない」

「ああ。ムカつくがな。まずは力を蓄える。頭を使って」

ウヴァが真剣に自分たちの未来を考えメズールにそう言う傍ら、何も考えていないガメルは無邪気にお菓子を頬張る。

「フフフ」

「ユーノス達が、カザリのヤミーに気を取られてるうちにな」

ウヴァの言葉を聞き入れると、メズールも思わず口を籠らせ真剣に考える。

すると、またしてもガメルが呑気な台詞を口にした。

「ん！これ、うまい！」

二人は思わず顔を見合わせあきれ返ってしまった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、漸くヤミーが出現したと思われる現場へと到着したユーノ達だったが、辺りの様子がやけに騒然としているの見ると、何か事件が起こったのかと思い近づいてみると、そこには管理局地上部隊の関連部署と報道陣が多く集まり、あちこちには人だかりができていた。

報道記者はカメラに向かって今の状況をリポートする。

「こちらは、連続レイプ事件の次なる被害者が襲われた現場です！管理局側の発表によれば、昨夜１２時近く、突如部屋の窓から侵入した何者かがこの建物に住むララ・ヨーテスさん、２３歳に性的な暴行を迫ったとのことです！」

その報道の傍ら、野次馬となっていた初老の女性陣は呟く。

「いや～ね。また出たらしいわね。連続強姦魔」

「可愛そうにね。私の所には来ないでほしいわ」

「年寄りの体なんて狙われないから大丈夫よ！」

「そうだわね！ははははは！！！」

ユーノとユーノスはこの騒然とする中、困惑した表情を浮かべる。

「うそだろ・・・まさかこんなところにヤミーがいるのか？」

「だとしても変だ。さっきまで感じていたヤミーの気配が急に消えた。どういうことだ？」

「まさか、気配を潜める能力を備えてるんじゃ・・・」

と、ユーノがそう呟いた途端遠くの方から聞き覚えのある男の声が聞こえてくる。

「おーい」

「「？」」

二人が振り向くと、瞳に映ってきたのはスバルとギンガの父で、１０８部隊の部隊長を務めるゲンヤ・ナカジマであった。

ゲンヤは久しぶりに顔を合わせるユーノと初対面のユーノスに笑みを浮かべた。

「おう。やっぱりな。暫くだな、スクライアの司書長さんよ」

「ゲンヤさん。どうしてここに？」

「いやな・・・出張でこっちに用事があってよ、さっきまで店で飲んでたんだ。で、宿に帰ろうとしたら急に呼び出し喰らって、来て見らたらこれだ。」

「そうですか。しかし何があったんです？」

「実はよ――――――お」

詳しく話をしようとした途端、ゲンヤとユーノ達の元に女性局員に毛布をかけられ連れて行かれる被害を受けた涙目の女性を見かける。

「ぐっす・・・・・」

「もう大丈夫よ。怖くないわ」

女性が立ち去っていくと、ユーノはゲンヤに尋ねる。

「あれは」

「事件の被害者だ。」

「ただならぬ状況のようだな」

肩に乗っていたユーノスも思わずそう呟くと、ゲンヤは渋い顔を浮かべて更に言う。

「たしかにただならねえ状況だよなァ・・・・しかし、俺もお前さん達もまたとんでもねぇ事件に出くわしちまったものだなオイ」

「「・・・・・？」」

「今の女――――――昨日の夜にいきなり強姦されたってよ！」

二人はその言葉を耳にした瞬間、表情を一変させる。

「強姦！？」

「おい。それってひょっとして・・・」

「ああ。察しがついているとは思うが、今世間を騒がしてる連続強姦魔の仕業と断定してもいい。それと、これはついさっき分かったことなんだが・・・数日前からの凶行の折り現場に残されていた頭髪と指紋を分析した結果、一人の容疑者が浮かんできた」

「誰なんですか？」

「・・・――お前さんなら聞いたことあるだろう。嘗て、管理世界各地で神出鬼没に現れては、見境なく女どもを襲い恐怖のどん底に陥れた最悪の集団・・・『マレスター』のヘッド、アツシ・ムラナカを」

すると、そのゲンヤの話をユーノ達に見つからないように隠れて聞いてしまった浦太郎は、表情を凍りつかせる。

「え！」

浦太郎が血の気の無くなった顔を浮かべる傍ら、ユーノは複雑な表情を浮かべながら容疑者の名前を連呼する。

「アツシ・ムラナカ――――――」

と、その時急に力の抜けてしまった浦太郎は愕然としてしまい、手を小刻みに振るわせながら過去に封印した忌まわしき記憶を遡り頭を押さえる。

「そ・・・そんな・・・・・・まさか・・・・・・・あいつが・・・

！」

言った浦太郎とムラナカの間に何が起こったというのだ！

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

その頃、ユーノ達と同じように恋次達死神組を始めとする面々は執務官を務めるフェイトとティアナからアツシ・ムラナカの素性を聞かされていた。

「あっ？アツシ・ムラナカ・・・？そいつが今世間を騒がす連続レイプ事件の犯人だってか？」

「まだ断定は出来ませんが、発見された頭髪と指紋からその容疑者の名前が浮かんできたんです」

「一体どういう奴なんだよ？」

鬼太郎が核心的なことを尋ねると、フェイトは険しい顔を浮かべて自分が最も口にしたくない人物の名前を口にしながらはっきりと述べる。

「ある意味・・・スカリエッティ以上の最悪な人間です。」

「スカリエッティよりも最悪？」

訝しげな表情を浮かべる恋次達。

ティアナは何も知らない彼らに次のような説明を始める。

「事の発端は１０年程前に遡ります。ミッド市街地で一件の強姦事件が起こりました。最初に襲われたのは商社に勤める１９歳のＯＬでしたが、その後次第に事件はエスカレートしていき、昼夜問わず管理世界で連続的に見境なく女性が襲われ始めたんです。時には発育途中の女の子まで拉致してかなり酷い性的暴行を・・・」

「聞いてるだけで虫唾が走るな」

「そして、捜査を進めていくうちにそれが一つの集団による犯行であることが分かったんです。『マレスター』・・・神出鬼没に現れては女性に性的暴力を働く犯罪集団です。当初は１０人ほどの小さな組織だったんですが、あっという間に人を集めて・・・結果的には構成人数４００人も超す途轍もない組織に膨れ上がったんです。」

「そ、それは凄い話ね・・・！」

「その『マレスター』を率いていたのが、最恐最悪の性犯罪者『アツシ・ムラナカ』だったんですよ。『マレスター』の凶行は管理世界に住まう女性たちを恐怖のどん底に叩き落とし、重く見た管理局も各国政府と協力して壊滅に乗り出したんですが、あまりに神出鬼没で証拠をほとんど残さないことから捜査は難航を極め、正に八方ふさがりでした。」

「そ、そんなに酷かったのか？！」

「しかしながら、大きくなり過ぎた組織はそのうち二つに分裂を始め抗争が起こったんです。それが後に言われる『マレスター危機』という事件です。一方の頭角は組織を立ち上げ牽引してきた『アツ

シ・ムラナカ』。もう一方の頭角は北東支部の『ジョン・スミス』。強い性への欲望を持った二人がぶつかり合い、抗争は熾烈を極め三年も続きました。」

「三年も・・・！」

「結果的に・・・・・ムラナカがスミス氏を焼き殺そうとして監獄送り。九死に一生を得たスミス氏は、命は助かったものの後遺症が残り車いす生活を余儀なくされたそうです」

話を聞き終えると、あまりの凄惨な内容に思わず唾を飲み込む鬼太郎。

「ドックン・・・／／／」

「ムラナカが逮捕されたことで、マレスターは壊滅。ようやく世間を騒がす強姦事件は幕を閉じ、世界は平穏を取り戻していったと・・・こんな感じですかね」

「成程ね・・・つうか。また亀の野郎がいなくなってやがる?!」

鬼太郎がそう言うと、スバル達も真剣にここ最近の浦太郎の様子が気にかかり自分の事のように心配を抱く。

「本当に、ここのところ浦太郎教官はどうしたんでしょうか?」

「私達の知らないところで何か事件に巻き込まれていなければいいのだが・・・」

「（亀・・・・・一体どうしちまったんだよ・・・）」

同い年で浦太郎とはコンビのような付き合い方をしている鬼太郎は、心の底から浦太郎の事を気に掛け、同時に遣る瀬無い気持ちが込み上がり拳を強く握りしめる。

◇

〈ムラナカＳｉｄｅ〉

さて、ヤミーに寄生され欲望のままに女性を襲い続けるムラナカはと言うと、ティアナの話に合った通り神出鬼没に異世界に現れては欲望を満たしていき、最早数えるのもままならないほどの女性を襲っているにも関わらず彼は未だ満足に達していない様子だった。

「ふふふははは・・・最高だ。最高だ!!いやまだだ。まだまだこんなもんじゃねぇよな・・・・・!!」

ムラナカはそう言いながらその場に倒れている女性の胸ぐらを掴み、不気味な笑みを浮かべながら涙の女性に言葉を吐く。

「俺の精子を・・・!俺の遺伝子を!!!全ての女どもの腹の中に孕ませて・・・!!あははははははははあは!!!!!!!」

狂気に支配された性犯罪者の欲望は誰にも止めることは出来ず、欲望が大きくなるごとにヤミーの中にセルメダルが蓄えられていく。

そんなムラナカの気配を追っていたのは何もユーノ達だけではない。

毎度ユーノ達のピンチなどに現れては貴重なカンドロイドや道具を提供するあのオッドアイの少年もそうであった。

少年はバイクに跨りながら調査から戻って来たタカカンからの報告を耳に、ディスプレイを表示させると、映っていたのは気配の消えてしまったヤミーを追って街中のとある場所に目をつけたユーノ達の姿であった。

「ヤミーはここか。ユーノさん達を見張っていたのは正解だったな。って・・・やっぱりこの言い方はあんまり馴染まないな」

少年は何故かユーノの事をさん付けで呼ぶことに違和感を覚えていたが、この段階では何故そう思っているのかはわからない。

そんな少年の事を見えないところから監視をするリリスは、難しい顔を浮かべふとこんな風に呟く。

「竜神の寵児・・・・・一体彼は何を考えているのかしら。そして、彼とユーノ・スクライアの関係って・・・――」

謎が謎を呼ぶ第二のオーズと呼ばれるユーノとそれを助けるオッドアイの少年。

実はユーノと少年の関係は意外なものであるということは、まだ話さないで置くことにしよう。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

その頃、アルハザード研究施設において、いつも以上にケーキを作ってしまったスカリエッティはそれこそ普通の店で売ってもいいほ

どの出来栄えのケーキをアリシアに食べさせ、その傍らまた新たなケーキ作りに専念する。

「アンゴルモアにコアメダル・・・破面魔導虚とグリード。そして・・・・・・ユーノ・スクライアに竜神の寵児。いよいよ役者が揃い始めて来ているよ。ふふふふはははは」

すると、高笑いを浮かべるスカリエッティに向かって口生クリームを付けたアリシアが要望を言って来た。

「ねぇドクター。私、偶にはケーキじゃなくてババロアが食べたいな～」

「結構！素晴らしいよアリシア君。自分の欲望を素直に出すことだ。すべてはそこから始まる。ふふふはは」

「う、うん・・・そうだね」

アリシアは欲望となると異様にテンションの上がる最近のスカリエッティの性格に若干後ずさるが、それも徐々に慣れつつあり再びケーキを食べ始め、スカリエッティもケーキ作りを再開する。

「はっはははは！！！！」

と、その時スカリエッティの元に異世界からの通信が届く。

画面を表示させると、映って来たのは先日セルメダルの６０パーセントを渡す代わりに有力な情報や貴重な設備などを提供することを約束された鳥のグリード、アンクだった。

『スカリエッティ。セルメダル稼いできたぞ』

「おお、これはアンク君。君か？いや～仕事熱心な事でなりよりだ」

『ふん。約束通りセルメダルの６０パーセントはくれてやる。だが勘違いするなよ。お前との契約は仲間になったって事じゃないからな！それだけは忘れるな！』

「勿論。心得ておるよ。君がセルメダルを提供する代わりに、私は君にアンゴルモアと不足のコアメダルの情報を与える。あとは、何かと役立ちそうなツールも色々と」

『はっ。どこまで信用できるかわかったものじゃないが、騙されたと思ってやってもいい。じゃあな！』

そう言って通信を切り終えると、スカリエッティの元にアンクが密かに作り出した鳥のヤミーがセルメダルへと還元され、その６０パーセントが送られてきた。

スカリエッティはそれを見ると更に気分が高揚し、甲高い声を上げる。

「ふふふはははは！！！本当に素晴らしいよ！！！ははははは！！！！」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

２月８日　午後１１時４５分　エリミ某住宅地。

ヤミーの残存粒子を辿ることに成功したユーノ達は次なる標的を求めて必ずやって来ると思われるヤミーを待伏せるためにとある住宅街へと足を運んでいた。

オプティックハイドで姿を隠し、誰にも気づかれずにその時を待つ二人。

そんな中、ユーノは何気なく昼間に聞いたマレスターとその頭角、アツシ・ムラナカの事を口にする。

「マレスターか・・・――――確かに名前ぐらいは聞いたことありますが、まさかそんな劣悪な集団の頭であるアツシ・ムラナカが仮出所していたなんて――――――」

「ユーノ。今回のヤミー、恐らくそのムラナカと呼ばれる男の性欲が元となっているのでは？」

「でしょうね。その考えが妥当ですよ。しかし性欲とは・・・・・・よりにもよって最も人間の根本たる欲望が出て来たものですね。」

「人間の欲望は、何も物欲や社会的なものだけではないからな。性行為を行い、快楽を得たい・子孫を残したいという種の起源とも言うべきものも欲望の一つだ。ま、度を過ぎれば性質の悪いモノであることに変わりはないがな」

「つまるところ、ヤミーをこれ以上の被害を出させないよう人混みの中で暴れさせず、すみやか～に発見して、すみやか～に連れ出し倒すに限ります」

「ああ」

と、その時二人の元にユーノがあらかじめ放っていた電気ウナギカンがヤミーを見つけ出し、報告しに来たのだ。

「おっ。さすがウナちゃん！もう発見か」

ユーノは先日の戦いで少年より渡されたウナギカンを友好的に活用し、ユーノスもそれなりに役に立っているウナギカンに言葉を漏らす。

「意外と役に立つな、このカンドロイドも。」

すると、それを聞いた途端ユーノはある意外な事実を口に出した。

「だけど妙なんですよね・・・このカンドロイドもそうですし、この前貰ったドラゴンカン、いずれも僕が設計図を書いていたんですがまだ制作すら出来ていない筈のものなのに・・・」

「・・・何だって・・・？」

「それなのにどうしてあの少年が完成したカンドロイドを・・・う～ん。謎だ・・・」

ユーノはオーギュスト・ロダン作、「考える人」のようなポーズをとり、ユーノスは神妙な顔を浮かべながらある考えが浮かんできた。

「・・・――――（まさか・・・そんなことが）」

「ユーノス元帥。どうしました？」

「いや。何でもない。ここで少し待った方がいい。ヤミーを生んだ強姦魔の欲望だからな、ギリギリのところで捕まえて連れ出すんだ」

「了解。じゃ、それじゃ待たせてもらいますか♪」

だがこの時ユーノ達は気づいていなかった。

自分たちの後ろの方で浦太郎もまた彼らと同じようにムラナカを待っていることなど。

「――――――・・・」

浦太郎は時計をしきりに気にしながら、ムラナカが現場に現れるのを待ち続ける。

そして、それからおよそ１０分後。

遂に目的の人物であるアツシ・ムラナカ、もといヤミーの親が姿を現した。

「ふふふ・・・今宵の月はよく光るな・・・・・・俺好みの色だ。そして――――――――――こんな夜は性欲がビンビンに働くんだよ・・・ふふふはははは」

ムラナカは不気味に笑いを浮かべながら防犯装置も何も施されて様子の無い住宅へと侵入し、それを見ていたユーノとユーノスは互に言葉を交わす。

「いたぞ。僅かだが、ヤミーの気配を感じた」

「はい。行きましょう」

二人はムラナカに物音などで気づかれないように慎重にその場から移動を開始し、その後に続いて浦太郎も歩いて行く。

「店長ごめん。後をつけさせてもらうよ」

ムラナカは三人の尾行など知る由もなく、二階の窓から侵入を果たし、その鋭い鼻で探り当てた小学生ぐらいの少女の寝顔を凝視すると、涎を垂らし始める。

「ふふふふ・・・良い顔してるぜ。どれ・・・・・・今夜の楽しい宴の時間はどんなんだ？」

ムラナカが少女の布団を捲ろうとしたその瞬間、突然ムラナカの手が何者かに握られる。

「！」

不審に思ったムラナカが後ろを振り返った瞬間、ムラナカは誰も居ない筈なのに顔面を強く殴られる。

「ふぐっ！」

「ごおおお！」

ムラナカは顔面を殴られた後、強制的に外へと連れ出され、地面に叩きつけられると、ユーノとユーノスが姿を見せる。

「アツシ・ムラナカ、だな？」

「てて・・・ああ？なんだてめぇ？女にしては筋肉質過ぎるか・・・」

「こう見えても体も中身も男なんだよ僕は。アツシ・ムラナカ。不法侵入及び性的行為未遂の現行犯で、お前を拘束する。」

「悪いが今晩のディナーはお預けと言うところだ」

二人が毅然とした態度でそう口にすると、聞いていたムラナカは唐突に笑い始める。

「ふふふふふはははは・・・犯すさ・・・いや・・・犯したいんだ・・・」

「「！」」

「犯されてもらおうか・・・・・・お前を！！」

そう言った瞬間、ムラナカの体内に寄生したヤミーがムラナカの精神を乗っ取り、ムラナカの右手は鋭い鍵爪へと変化し、ユーノに襲い掛かってきた。

「やめろ！」

と、その時庭の茂みの中に隠れていた浦太郎が飛び出し、ユーノに襲い掛かってきたムラナカをとめにかかったのだ。

「うおおおおおおおおおおお！！！」

浦太郎が咄嗟に現れたおかげで、ユーノは怪我を負う事無く助かったが、それ以前に卯太郎がこの場にいたことに驚きを隠せなくなった。

「う、浦太郎!?なんで・・・!」

「僕の事はいいから!早くこいつを人のいない場所に!」

「おおおおおおおおお!!」

自我を失いかけているムラナカはその後も容赦なく浦太郎を襲いにかかる。

ユーノはそれを見ると、浦太郎の言葉を聞き入れ返事を返す。

「あ、ああ!ありがとう、浦太郎!」

ユーノは浦太郎からムラナカを遠ざけると、そのままムラナカを人気のない場所へと誘導し、浦太郎は拳を握りしめながら一連の犯行がムラナカの物だと判明すると怒気を孕んだ声を上げる。

「く・・・やっぱり・・・そうかよ。結局はお前の仕業だったのかよ・・・ムラナカッ!!!」

この浦太郎の言葉の意味は後にわかるが、今先ずヤミーに寄生されたムラナカと対峙するユーノ達の方から見ていこう。

ムラナカは右手の鍵爪を研ぎながらゆっくりとユーノへと近寄っていく。

「ふふふ。俺の遺伝子を受け取ってくれよ・・・！」

「結構だよ。性犯罪者の遺伝子なんて！」

自分の事を女と勘違いしているムラナカに思わずそう言うユーノだが、その直後ムラナカが再び襲い始める。

「おおおおおおおおおお！！」

ユーノはその攻撃を回避すると、高所から飛び降り更にムラナカを人気のない場所へと誘導する。

「こっちだ！」

ユーノはユーノスを肩に乗せると、夜の世界を疾走し、ムラナカもそんなユーノの後を追って行く。

そして、両者は人気の全くない真冬の海辺へやってくると、心置きなく信念と欲望をぶつけあい、ユーノは一瞬の隙を突いてムラナカの両腕を封じるとユーノスがすかさずチェーンバインドで拘束する。

「チェーンバインド！」

抵抗するムラナカだが、ユーノは必死で抑えつける。

「おとなしくしろ！」

ユーノが必死でムラナカを押さえつけていたその時だった。

二人は突如としてムラナカの体から出て来た寄生型の白ヤミーに目を奪われる。

「「！」」

そして、二人が注目する中白ヤミーはムラナカの欲望をたっぷりとセルメダルへと溜め込み体を成長させると、鋭い爪による攻撃を得意とする俊敏な動きが特徴のハイエナヤミーとなった。

「成長した！」

「このヤミー・・・カザリのか！？」

そう口にすると、ハイエナヤミーは鋭い爪を尖らせユーノ達に襲い掛かってきた。

ユーノは気を失ったムラナカを一旦その場に寝かせると、ハイエナヤミーと戦闘を始め、隙を見てユーノスから結界印を受け取る。

「ユーノス元帥！」

「受け取れ、ユーノ！」

ユーノスは抜群の投擲能力でユーノの手の中に結界印を納めると、ユーノはスレイヤーモードへと心身する。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノは変身した瞬間、ツインブレイドを生成し、ハイエナヤミーへと向かって走り出す。

ハイエナヤミーは素早い動きでユーノの攻撃を躱しては、姿を闇に溶け込ませてユーノを翻弄し、剥き身をついてくる戦法でユーノを苦しめる。

ユーノはステルス能力を備えたハイエナヤミーに苦戦し、ユーノスにこう言った。

「こいつ・・・！ユーノス元帥！すみませんが、あの・・・柊沢さんの完現術コンボ使っても！？」

「お前・・・簡単に。身体は大丈夫なのか？」

「大丈夫です。身体かなり慣れてきましたから」

ユーノはそう言いながら、ハイエナヤミーの攻撃を受け流す。

ユーノスは一度考え、デジタルワールドでの戦いでユーノが完現術コンボを使いこなしていたこと踏まえこう言い返す。

「確かに、デジタルワールドの戦いでは侍コンボは使いこなしていたか・・・いいだろう。やってみろ！」

「はい！行きますよ。黒魔術コンボ！黒魔術師！！」

ユーノは懐からニワトコの杖を取り出すと、早速と言うばかりに完現術コンボを発動させる。

〈Ｂｌａｃｋ　ｍａｇｉｃｉａｎ〉

ユーノは紫の霊圧に包まれ、現れたのはクロウ・リードの魔導服に酷似したユーノ。

ユーノは膨大な魔力を全身から放出させ杖を掲げる。

「わあああああああああああっ！！！！！！！！！！」

〈Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｄｒｉｖｅ〉

ユーノは重力を操ると同時にステルス機能を備え付けたハイエナヤミーの姿を暴露させると、そのままハイエナヤミーを引っ張り込んでいき、杖の先端から魔導砲を発射する。

「ふん！」

〈Ｂｌａｃｋ　Ｂｕｒｎｉｎｇ〉

ハイエナヤミーはその攻撃を受けると、地面に転げまわり追い詰められるが、その時爆音を耳にしたムラナカが意識を取り戻し目を瞑りながらハイエナヤミーの方へと近づいて行く。

そんな事に一切気づいていないユーノは止めを差そうとする。

「よし。もらった！」

〈Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｂｌａｓｔ〉

ユーノは闇の力が存分に発揮されるこの空間における必殺技、悪夢

の投射?ナイトメア・ブラスト?を発動させようとし、月のエネルギーを吸収しハイエナヤミーの動きを重力を味方につけて捕え狙いを定める。

「おおおおおおおおおおおおお!!!!」

だがその時、ムラナカが動けないでいるハイエナヤミーへと近づいて行き、ユーノが砲撃を傍等とした瞬間。

「セイや・・・!」

なんと、ムラナカの体にハイエナヤミーが一瞬にして乗り移ったのだ。

「「何!?」」

ユーノとユーノスは思わず目を疑ったが、意識をはっきりさせたムラナカは再び何処へなりとも走り去っていく。

「ふふふははは・・・犯してえ・・・犯してえ!!!!」

「な!待っ・・・ぐ!」

追いかけようとしたユーノだったが、強力な力を秘めたエリオルの完現術コンボに堪えられず、強制的に変身が解除されてしまい膝をつく。

「は、は、は、は、は、は、は・・・しまった!」

「ユーノ!大丈夫か!?」

「直ぐに追いましょう！」

ユーノはフラフラの体を引きづり、ユーノスと共に逃げていったムラナカを追って行く。

さて、逃げていったムラナカは海岸線を抜けると真っ直ぐに臨海公園の方へと向かった。

「ふふふふはははは・・・ははは！」

どうやらそこが待ち合わせ場所であったらしく、ムラナカは高笑いを上げながら真夜中の公園に君臨する。

と、その時そんなムラナカに近づいてくる一人の男がいた。

「ムラナカ。随分と精が出るな」

「あ？」

ムラナカが暗がりの中徐々に見えてくる人影に目を向けると、そこに現れたのは鋭い目つきで自分を睨み付けるまるで人の違った様子の浦太郎だった。

「――――――お前が仮出所したって知ったときは、本気で憎しみに呑まれて自分がどうにかなるかと思ったけど、そんなことになれば店長やみんなに迷惑がかかるからね。だけど、ヒカリ・ガーレイド・・・・・あの子を死に至らしめたのは、ムラナカ。てめぇだ！！」

ムラナカは最初何の事かと思い訝しげな表情を浮かべていたが、ヒカリ・ガーレイドと言う名前を耳にした瞬間、昔の事を思い出し浦太郎に向かって不敵な笑みを浮かべて言って来た。

「ヒカリ・ガーレイド・・・？ああそうか・・・そう言う事かよ。誰かと思ったらお前・・・・・あいつの先生だったな。元・時空管理局地上部隊首都防衛隊陸戦教導官で“狡猾の亀”と言われた、亀井浦太郎って馬鹿な先生は・・・」

「――――――・・・」

両者は互に睨み合い、緊迫した雰囲気を醸し出す。

果たして、この二人にどんな秘密が隠されているのか！？

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゾウ一枚　ゴリラ一枚　サイ一枚　ウナギ二枚

ハイエナと追憶と劣悪強姦魔（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はルーテシアについてだ♪」

「ＳｔｒｉｋｅｒＳで登場したルーテシア・アルピーノは、幼少時にスカリエッティ一味によって拉致・洗脳教育を受け当初はものすごく暗い性格の女の子だったが、エリオ達に保護され友達となったことでそれまでとは一変明るい性格となった」

「強力なベルカ式ベースの召喚魔法を使い、キョロ以上の魔力値と強力な召喚術を始め、多彩な能力を発揮する。えっとちなみにキャロは最近ルーテシアがエリオがらみの事で自分の茶々を入れるのが悩みの種らしいね・・・」

そう言うと、キャロが現れ愚痴り始める。

キャ「そうなんですよ。聞いてくださいユーノ先生！ルーちゃん、私の背が低いことをいっつもバカにして、おまけに胸が小さいのもまで見下して・・・／／／私だって毎日お風呂上りに牛乳飲んで、時々腕立て伏せもしてるんです！なのに・・・全然背も胸も大きくならないんです／／／」

ユ「まぁ・・・成長には個人差があるからね。なんとも言えないかな」

キャ「だけど私ルーちゃんに負ける気絶対ありませんから！今度のバレンタインデーは絶対美味しいの作ってエリオ君のハートをゲッ

トするんだから！」

ユ「そ、そうか・・・まぁ頑張ってちょうだいな・・・ん？そう言えばもうそんな時期か・・・（なんだか今年のバレンタインデーは波乱の予感がする・・・／／／）」

頭の中によぎる今年のバレンタインデーの様子に恐怖を抱くユーノであった。

魔導師図鑑ハイパー！

バレンタインデーも近づいた２月１２日。

なのは達女性陣は翠屋へと集まり、今年のバレンタインデーのチョコを制作していた。

ア「今年はいつにもまして賑やかね。織姫さんにさくらと、マリアさんもか・・・」

アリサは新しく知り合った人たちも交えてのチョコレート作りに少々唖然としていたが、直ぐにチョコづくりを再開。

ア「ま・賑やかなのは嫌いじゃないし寧ろ大歓迎ってね。さて、みんなはどんなの作ってるのかしら？」

アリサが適当に見ていくと、それぞれは自分の作成するチョコレートを披露する。

織「じゃじゃーん！ウチの旦那は昔からチョコレートが大好きだから、形うんぬんより量で勝負に出ました！と言う訳で特大チョコレ

ート！！」

さ「しゃ、小狼君もチョコ大好きだからその・・・上手く出来たかどうかわからないけど、大好きな小狼君の顔に似せたチョコを作りました／／／」

は「私は日頃からお世話になってロッサに似せてピラミッドケーキを作ってみたで！」

アリサはリアクションを考えながら苦笑いを浮かべる。

ア「み、みんな個性的よね・・・・・と、ところでなのははユーノにどんなの送るの？」

と、アリサがそう尋ねながら後ろを振り返るとなのはは買って来た大量のチョコを湯煎で溶かしている最中であった。

な「ふぇ？」

思わず硬直アリサや一同だったが、アリサはなのはに詰め寄り問い質す。

ア「・・・・・あんたそのチョコ全部使う気？」

な「ユーノ君へのあふれる想いを込めようと思って・・・あ、ちなみに当日はこのチョコ全部溶かした後に、待ち伏せしたところで私が全裸になってラッピングされたところをこう言うの。『ユーノ君～～～私を食べて～～～？』って♪ねぇ、バッチリでしょ♪」

ア「アウトだ！！！！！！！！！！」

アリサは我慢できずに親友であるはずのなのはの顔面をぶん殴る。

な「痛い！！！！」

白き魔王のなのはの怖いモノ・・・それは怒ったときのユーノ・桃子・そしてアリサであった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

浦「待てやコラッ！！」

ス「君が今一つ吹っ切れない原因はその“プライド”だ！」

ル「誰か・・・・・・・たすけて・・・／／／」

ユ「翠の虎狼・・・グリーン・パンサー！参る！！」

第１６２話　泥沼と性欲と中国コンボ

泥沼と性欲と中国コンボ（前書き）

小狼「・・・・勝つ　。だから・・・・そこにいろ」

「やると決めた事をやるだけだ」

まだまだ人気投票募集中！

泥沼と性欲と中国コンボ

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、浦太郎の脳裏に蘇る忌まわしき過去。

二つ、劣悪強姦魔にヤミーが寄生。

そして、三つ。浦太郎が、ヤミーの親と因縁の接触を果たす。

〈Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ｂｌａｓｔ〉

ユ「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

「セイや・・・！」

ユ・ユーノス「「何！？」」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ二枚
チーター一枚　ライオン一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゾウ一枚　ゴリラ一枚　サイ一枚　ウナギ二枚

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

亀井浦太郎は現在、過去に封印した因縁の男であり劣悪強姦魔でありながらヤミーの親となっているアツシ・ムラナカと相対し、その癖胸の奥からは今にも爆発してしまうかもしれないぐらいの怒りが込み上がってきた。

緊迫した状態が続く中、ムラナカは不敵な笑みを浮かべながら浦太郎に語り出す。

「ふふふ・・・どうしたよ?何だよその目は。もう昔の事じゃねぇか。ネチネチいつまでも拘るなんざ・・・姑のすることだぜ、オイ」

「そうだな。もう随分と昔の話だ――――――が、だからってお前の懲りない無差別レイプは絶対に見過ごしちゃいけねぇ。悪いがお縄についてくれねぇか？一体何が楽しくて女性を犯す？言ってみろ！」

「へっ。男なら分かるだろ？自分の遺伝子を後世にまでずっと引き継ぎたいという生まれながらの欲望・・・そして、女を弄繰り回したいって気も狂いそうになるぐらいの快楽を得たいってのがよ！」

「ふざけんなっ！そんなにしたいもんがしたいなら、てめぇに惚れた女一人とだけやればいいだろうが！無差別に女性犯して心に傷を作ったところで、テメェ以外に救われる奴はいねぇんだよ！」

浦太郎は常識では考え付かないような狂った思考のムラナカに怒り心頭な様子であったが、とうのムラナカは全く懲りていない様子だ。

「別にいいだろ・・・俺が楽しければそれで・・・俺はよぉ。こんなんじゃ全然足りねぇんだよ。何分三年も鑑別に入れられてちゃ、こっちのセンサーも感覚も麻痺しちまってな。渇いちまってんだよ・・・女の臭いと身体によぉ・・・」

そう言いながらムラナカが指を鳴らした瞬間、いままで暗闇で何もなかった公園に突如として複数のバイクの大軍が現れ、爆音を鳴り響かせながら浦太郎にライトを当てて来た。

「！」

思わず目をそらす浦太郎。

ムラナカは集まってきた仲間の中心に立って、不気味な笑い方で浦

太郎を挑発する。

「ふふふふはははは」

「なんだてめぇら！」

「はははははははは！！！おおおおおおおおお！」

ムラナカは甲高い声で笑いながら、右腕を鍵爪へと変化させるとその鍵爪で浦太郎の体を引き裂いてきた。

「ぐあ！」

皮一枚のところで急所を外すことが出来た浦太郎だが、それでも切り裂かれた服の下から血がにじみだす。

ムラナカは浦太郎の血が付いた鍵爪を不気味な表情で嘗めながら言う。

「ふふふ。馬鹿な男だよ。昔の事忘れてノウノウと暮らしてさえいれば、こんなことにはならずにすんだのによぉ」

「てめぇ・・・！」

「ふふふふふ。さぁて・・・始めようか。てめぇにはこの記念すべき瞬間の生き証人になってもらうぜ。元・時空管理局地上本部のエース級魔導師。亀井浦太郎・・・・・・てめぇの体にこの金曜の夜の出来事を刻み込んでやる。」

ムラナカはそう言いながら、部下が持ってきたジャケットを身に纏

い、そのジャケットとは嘗てムラナカが率いていた性犯罪者集団『マレスター』の頭角を現すものであった。

ジャケットを身に纏い、浦太郎を見据えたムラナカはこう言った。

「ムラナカ新生『マレスター』の結成式をよ・・・」

「な、何!?」

「ふふふ・・・女には手優しい俺だが、男には容赦はしねぇ。五年前のあの時みたく・・・てめぇの脳髄に思い出させてやるさ!ヒカリ・ガーレイドの時の様にな!!」

浦太郎はその言葉を聞いた瞬間、一気に怒りが頂点に達し、普段なら絶対に考えられないほどの怒号をムラナカに浴びせる。

「!て、てめぇえええええええ!!!!!!!」

今ここに、因縁の二人の大激突が幕を開けようとしていた。

浦太郎とムラナカ率いるマレスターによる乱闘は、その後激しさを増していき、エリミにおいて出張勤務に出ていたゲンヤ・ナカジマの元にも連絡が入ってきた。

『8号車より本部へ。臨界公園付近でマルソー同士の乱闘を発見。応援頼む!』

「本当かそれは!?」

「はっ!しかし妙なんです。8号車からの連絡によると、マルソー

は間違いなくチーム名を『マレスター』だと言っているそうなんです！」

「そんなバカな・・・！あの最悪集団が形を変えて復活したってのか？まさか――――――ムラナカの奴・・・！」

ゲンヤは渋い顔を浮かべながらこの予測のつかない事態に対処していくしかなかった。

管理局側が動きを見せ始めた頃、浦太郎Ｖｓマレスターの乱闘は一掃苛烈さを極め、暗い夜道の中、国道には浦太郎によって殲滅されたマレスター幹部数名が血まみれで倒れており、浦太郎はそのうちの一人からバイクを奪い、アクセルを全開にし、先頭を走っているムラナカを追いかける。

「待てやコラッ！！逃がすかっ！！」

すると、走行中の浦太郎に妨害を企てようとするムラナカの部下が左右から挟みにかかると、浦太郎は片足を使いその二人を転倒させる。

「「ぐあ！」」

「この俺様を！！」

浦太郎は最早普段の冷静さを換算に欠いてただムラナカを追いかける事しか頭にはなかった。

「ふん」

ムラナカはそんな浦太郎を一瞥すると、鼻で笑い分かれ道うち右側へとバイクを傾け、浦太郎もその後を追って行く。

と、その直後ムラナカの正面から対向車、しかもトラックが走ってくる。

ムラナカはそれを見ると不敵な笑みを浮かべ、あろうことかそのトラックの正面から突っ込んでいく。

「何っ！？」

思わず目を見開き驚愕する浦太郎。

そして、ムラナカがぶつかるか否かのところまで接近してくると、トラックを運転した運転手も慌ててハンドルを振ろうとする。

「うわあああああ！」

ムラナカはトラックがハンドルを振りきり、横に傾いた瞬間バイクを地面すれすれのところまで傾かせ、火花を散らしながらトラックの真下を驚異的なテクニックで走り抜ける。

「だっ！」

愕然とする浦太郎だが、その瞬間電柱にトラックが激突道が極端に狭められると、浦太郎はそのトラックを上手く回避し、道幅の狭くなったところを通り抜けムラナカを追って行く。

「くそったれ！かっ・・・！」

「しつこい男だな。そんなに俺が欲しいのか？」

「野郎っ！！！！！！！！」

「ふふふははは」

浦太郎を挑発しながら人気のない場所へとバイクを走らせるムラナカ。

やがて予め部下と打ち合わせしていた場所へとやって来ると、待ち構えていた部下と目を合わせ、唐突にバイクを止めてしまった。

「な！」

一瞬驚き返る浦太郎。

ムラナカは不敵な笑みを浮かべながら浦太郎にこう言った。

「あばよ。あの世で可愛がった生徒抱く夢でも見るんだな」

「ざけんなよ！！！この・・・！！」

浦太郎は怒りに我を忘れ、ムラナカ達が仕掛けた罠に気づかなかった。

時速１２０キロと言うスピードでムラナカに迫っていく浦太郎。

と、その瞬間唐突にバイクが宙に反り返り何事かと思って浦太郎が目を向けると、前方にはこの時の為にムラナカの部下が仕掛けていた闇夜で姿を隠していたピアノ線が張られていたのだ。

「な！」

浦太郎はバイクと共に一回転すると勢いよく地面に叩きつけられ、全身から多量の血を流した状態となって意識を失った。

ムラナカはそれを確認すると、唾を吐き捨て甲高い笑い声をあげる。

「ふふふふふ・・・ふふふふふふふふ。はははははははは！！！！！」

そして、そのまま部下と共に何処へなりともバイクを走らせ姿を消していくのであった。

浦太郎が無残にもムラナカの策に嵌り、重傷を負ってしまってから数分後、ムラナカの、もといヤミーの気配を追って周辺まで来ていたユーノとユーノスが現場に到着する。

「ヤミーの反応は・・・確かこの辺で」

「だが何だ・・・この虫の知らせは・・・・・・」

ユーノスの言葉に一瞬訝しげな表情を浮かべたユーノだったが、その直後彼は目の前で倒れるあまりに衝撃的な光景を目の当たりにする。

「え」

「な！？」

二人が見たのは、ムラナカを追いかけようとしたミイラ取りが逆にミイラとなり、瀕死の重傷を負ってしまっている浦太郎だった。

「浦太郎・・・浦太郎・・・・・・」

ユーノは変わり果てた姿の浦太郎の元に近づき呼びかけるが、浦太郎からの返事はない。

「・・・――――」

ユーノは目を見開き、張り裂けそうな想いで彼の名前を夜を劈くかの如く大声で叫ぶ。

「浦太郎ッ!!!!!!!!!!!!!!」

ユーノが浦太郎を発見した丁度その頃、ムラナカ率いるマレスターは次元世界を駆け巡り、見境なく女子供を拉致・監禁・集団レイプを繰り返し文字通り恐怖のどん底に突き落としていた。

「きゃあああああああああ!!」

「やめて!!!!!!!!!!!!」

女性の喚き声・脱がされていく服・さらしものとなった肌をムラナカは涎を垂らしながら見ていき、自分の欲望をこれまでとは比べ物にならないぐらいに膨らましていく。

「ははははは!!はははははは!!!俺に・・・もっと・・・女・・・女を犯させろ!!!!」

次元世界に再び、マレスターの恐怖が舞い降りようとしていた。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

その頃、アルハザードのスカリエッティの方はと言うと、破面魔導虚リリスからの報告を受けながら窓の外に広がる破面魔導虚たちの住居を眺めていた。

「リリス。どうだった・・・あの竜神の寵児とやらの様子は？」

「はい。現在調査中ですが、未だに不明確な部分が多い故、神出鬼没なもので・・・ご期待に応えられず・・・――」

そう言っても仕訳無さそうに顔を伏せた瞬間、そんなリリスの言葉を遮るかのようにスカリエッティは振り返りこう言って来た。

「謝ってはダメだ！君はしたいことをしたそれでいい！」

「！？」

「私の期待に応えるよりも前に、君がしたいと思ったことを忠実に従ってくれさえすればいいのだよ。リリス」

「はぁ・・・・・・・！？」

スカリエッティの言葉に呆然としてしまうリリスであったが、ふと横を見た瞬間リリスは呆然とした表情を一変愕然としたものへと変わった。

その理由は、目の前に広がってきた自分と同じ破面魔導虚の一人で幹部クラスの実力者であるリヴァイアサンがスカリエッティの作ったケーキの上に顔を乗せ唸り声をあげていたのだ。

「もう・・・食べられな・・・い・・・」

「リヴァイアサン！？」

スカリエッティはリリスがいない間にこの部屋で何があったのかを掻い摘んで説明する。

「アリシア君も頑張ったのだが、途中でプレシアのドクターストップがかかってしまってね・・・彼に代理として頑張ってもらったのだよ」

「はぁ～。情けない顔してもう・・・」

リリスは深いため息をつきながら、ケーキの食べ過ぎで気を失ってしまったリヴァイアサンの髪の毛を握りしめながら、強引にソファーに寝かせる。

スカリエッティはそんなリヴァイアサンの姿、と言うより欲望に忠実な事に笑みを浮かべる。

「フッフフフ」

すると、リリスは同族の醜態をスカリエッティに見せたことを謝罪する。

「見苦しいところを、申し訳ありません！」

「ほう・・・君には見苦しく見えるのか？彼は死に物狂いだったんだよ！この私に気に入られようとして。プレシアレベルになれば、食べろと言われる限り食べ続けるがね。」

では、スカリエッティがそう言うプレシアは今何をしているのか？

ちょうど今はアリシアと共に食事の時間を過ごしていた。

愛する一人娘の為に作った自慢の料理をふるまい、アリシアは母の作った料理に舌鼓をし、満面の笑顔を浮かべる。

「ふふふふ♪やっぱママの作った料理が一番おいしいや♪」

「そう。喜んでもらえてよかったわ。どんどん食べていいのよ」

「うん！」

久しぶりにプレシアの顔に笑顔が浮かぶ中、アリシアはふとこんな事を言って来た。

「それにしてもママもママで大変だよね。ドクターのケーキいっつも食べさせられて。あれはあれでキツイでしょ」

「確かにそう見えるかもしれないわね。まぁでも、ジェイルのケーキって意外と食べやすいのよね」

「ふ～ん」

プレシアのそれこそ意外な発言を聞いたアリシアは、それを軽く受け止め母の作った料理に箸を進めていく。

そんな親子の食事と違い、スカリエッティとリリスは向かい合い真剣な話を続けていた。

「リリス。君はアスモデウスや彼らと同じことが出来るかい？」

「するつもりはありません。それこそ見苦しいかと・・・」

すると、それを聞いた瞬間スカリエッティが口にした言葉はこうだ。

「リリス。君が今一つ吹っ切れない原因はその“プライド”だ！」

「！？」

「欲望をプライドで抑え込んでいる・・・――――非常につまらんよ」

スカリエッティはそう言うと、ため息をつきながらリリスに背を向け、リリスは無言のまま言われたその言葉の意味を考える。

「・・・――――――」

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

そんなやり取りがアルハザードで起こっていた頃、欲望の塊であるグリードの塒ではどんなやり取りが行われているかと言えば、人間体となったメズールがちょうど外の世界から戻って来たところであ

った。

ガメルはメズールが戻ってくると自分のこと以上に心配してきた。

「どこ行ってたんだ?メズール。俺、セルメダルが足りない・・・」

「だいじょうぶ。もうすぐあげるわ。たっぷりと・・・」

「俺の方は、こいつを使って時間稼ぎだ」

ウヴァはそう言うと、持っていたセルメダル一枚を手の中に入れ、それを強く握りしめるとセルメダルを半分に折って地面に投げつける。

すると、折れたセルメダルの断面から灰色の包帯のような者が実体化し、あっという間にそれは屑ヤミー二体となった。

果たして、ウヴァ達は陰で何を企てているのだろうか?

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

２月９日　午後２時２０分　時空管理局本局

昨夜の襲撃で瀕死の重傷を負った浦太郎はユーノ達に連れられ、直ちに本局の医療施設で治療を受け、一命を取り留めることに成功。

早速食べ物を持ってお見舞いに出向いた六課メンバーだったが、当の浦太郎は落ち込んでいるどころかいつも以上の元気な姿を披露し、

お見舞いのバナナや食べ物を手当たり次第に胃の中に入れていく。

「あっ、うぐっ！うん、美味しい♪」

「「「「「「「「「・・・・・・・・・」」」」」」」」」

なのは達一同はあれだけの怪我を負いながらまるで何ともないかのような振る舞いでバナナを食べる浦太郎に唖然としてしまい、浦太郎本人もそんな全員にこう語りかける。

「悪いね～僕の為にこんないっぱいお見舞い～～うっぐ！」

鬼太郎は信じられない眼つきで浦太郎を見つめ、徐に昨夜の状況を語り出す。

「お前な・・・バイクのレーター１２０キロで止まってたんだぜ！？なんでそんなに元気なんだ！？大体あのバイクどっからパクって来たんだよ！」

「細かいことは気にしない気にしない♪それに元気ってほどでもないって。ほら、突き指」

浦太郎は包帯が巻かれた右手の人差し指と中指の突き指を皆に見せるが、それを見た瞬間一同は呆然としてしまい、鬼太郎は大声を上げる。

「そう言う問題じゃねぇだろうが！！」

「ったく！心配して損したぜ！」

恋次も思わずそう言わざるを得なくなってしまい、浦太郎は飄々とした様子で謝る。

「ごめん♪ごめん♪」

するとここで、アギトが昨夜の襲撃者の事と復活したマレスターに関してこう語り出した。

「それにしても、あの最悪の性犯罪集団マレスターの頭だったムラナカが野に放たれた途端、またマレスターを復活させて浦太郎をこんな目に遭わせるなんて・・・！」

「そいつ！マジでぶっ殺してやらねぇと気がすまねぇよ俺！！」

「早まったことはするでないぞ鬼太郎。それこそお前はあやつと同じになってしまう」

「けどよ！！」

自分にとっての大切な仲間であり、同じ従業員である浦太郎を傷つけたムラナカに殺意を抱く鬼太郎と、冷静に対処しようとする金太郎の相反する思考と言葉。

「こんにちは。」

「？」

その時、唐突に扉が開いたかと思えば中に入ってきたのは浦太郎へのお見舞いを持ってやって来たルーテシアだった。

「どうもどうも♪ルーテシアで～す。これ、母と一緒に作ったものなんですがよかったらどうぞ」

「おお！気が利くね！ありがとうルーテシア♪僕ちゃんなんて幸運な男なんだろう♪」

「現金な奴だな・・・」

浦太郎にお見舞いの代物を渡した後、ルーテシアはキャロに不敵な笑みを浮かべてから敢えてキャロを刺激するような行為に出る。

「エリオ、隣座ってもいい？」

「え？いいけど・・・わぁ！」

ルーテシアの言葉に承諾をしようとした途端、エリオの腕をいきなりキャロが頬を赤く染めながら言って来た。

「エ～リ～オく～ん・・・・・・私の隣に座ってくれない～～～」

「は・・・はい・・・／／／」

エリオは恥ずかしさとキャロへの恐怖を同時に抱くと、言われた通りキャロの隣へと座り、ギンガやスバルはそんな微笑ましい光景に笑みを浮かべる。

「あらあら。何だかキャロも随分女性らしい片鱗を見せるようになってきたわね」

「へへ。健全だ」

と、その直後辺りを見渡していたなのはが少々不満げな様子で呟いた。

「それにしてもユーノ君は何処行ったんですか～～～浦太郎さんがこんな目に遭ったって言うのに～～～」

「そうですわね。早く戻ってこないでしょうか～～～私寂しくて心が張り裂けそうですわ～～～」

なのはは隣に座っていたマリアの何気ない一言を耳にした瞬間、それが火種となったのかまたしてもマリアと向き合いユーノを懸けた熾烈な争いを始める。

「「ぬうううううう！！！」」

二人の周囲に広がる激しい嫉妬の炎に、恋次達が身の危険を感じて退避するのを見て、浦太郎は呆然としながら素直な気持ちを口にする。

「ねぇ二人とも・・・病室の中で喧嘩なんかしないでくれる・・・」

そんな浦太郎を一瞥した後、病室の中にいたユーノスは先ほどから姿の見えないでいるユーノの事を考えた。

「（ユーノは、何を考えているのだ・・・――――）」

では、そのユーノは何処で何をしているのかと言うと。

ユーノは浦太郎とムラナカとの関係が他人事のようには思えなくな

り、更には浦太郎が自分にも言えないようなことを隠しているではないかと言う推測から、彼が五年前前で勤務していたミッドチルダ中央に位置する管理局地上部隊中央本部、その中でもトップエリートが集まる職場、首都防衛隊第１６班にアポを取って参上していた。

ユーノはそこで、浦太郎と一緒に入局した職員コジマの元を訪れ、些か複雑な心境ではあったが徐に浦太郎の過去に関する革新的な質問をしたのであった。

「え？浦太郎のことですか？」

「はい。同期のコジマさんなら何か心当たりあるんじゃないかと思いまして。過去に浦太郎に遭ったムラナカと浦太郎の繋がり・・・あいつが管理局を止めることになった原因を」

コジマはそれを聞くと、言葉を詰まらせ深刻な表情を浮かべ、机に置かれたお茶を一気飲みしてから意を決してユーノに真実を語ることにした。

「・・・――わかりました。ではお話します。ただ、これは相当酷い内容となっております。気分を悪くなさらないようにしてくださいね」

「はい。」

コジマは一度深呼吸をしてから、隠された浦太郎の真実を赤裸々にユーノに語り出した。

ユーノはあまりに衝撃的なその内容に、思わず顔を歪めたが最後までそれを真摯に受け止めるのであった。

一体、その内容とはどんなものだったのか？

詳細はこの後彼の口から判明する。

一方で、管理世界のあちこちに神出鬼没に現れては女性たちに性的暴行を始めとする卑劣な行為を繰り返すマレスター頭角、ムラナカはと言うとバイクに跨り夕日が沈む光景を凝視しながら部下たちを率いていた。

そして、夕陽が完全に沈んだのを確認すると、吸っていた煙草を投げ捨て不気味な笑みを浮かべた。

「ふふふはははは・・・・さぁて。そろそろショータイムの時間だ。いくぜ・・・新生『マレスター』の歴史に新たなページを刻んでやるぜ！」

ムラナカはそう言うと、バイクのエンジンを入れて爆音を鳴り響かせると、部下たち全員を引き連れて市街地へと向けて走り出す。

ついに、復活したマレスターによる恐慌が始まろうとしていた！！

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

ムラナカ達マレスターが危険な動きを見せ始めたその頃、未だ本局の医務施設の自分の部屋で静養をとっていた浦太郎はと言えば、深刻そうな表情を浮かべながら次元航行船が見える窓の外を窺っていた。

「――――――・・・」

病室の外で、そんな浦太郎の事を心底心配した様子で見ていたなのは達は思わずため息をついてしまい、各々言葉を吐いた。

「なんか浦太郎さん・・・ずっーとぼんやりしてるけど、一体どうしたんだろう」

「いつもはもっと底ぬけてて女には目がないはずなのに、今日のあいつの目は笑ってるようで笑ってなかった」

「あんな笑い、亀らしくなかった」

「・・・浦太郎さん・・・絶対変ですよ」

「これは、私達が知らないところで何かありそうやな・・・例えば、昨日のアツシ・ムラナカとかと・・・――――――」

「ま、まさか・・・」

一同がはやての言葉を耳にし、誰しもが疑いの気持ちを持ってしまう中、唐突にあの男がはやての立てた推測を肯定してきたのは。

「いや。全く以てその通りだよ、はやて」

全員が聞きなれた声に耳をそばだて、振り返った瞬間現れたのはユーノだった。

「ユーノ君！」

「ユーノ！お前今までどこに行ってたんだよ！？」

「ちょっとばかり、調べ物をしにね」

「調べ物って・・・無限書庫に？」

フェイトがそう言うと、ユーノは静かに目を瞑り首を横に振る。

「いや。地上本部首都防衛隊第１６班・・・浦太郎が嘗て所属していた部隊さ」

「え？浦太郎さんの・・・」

「何の為に？」

「・・・分かったのさ。浦太郎があんなに取り乱すその理由と今まで隠してきた浦太郎自身が管理局を辞めるきっかけとなった事件を」

「え・・・」

「何だって・・・！？」

全員はその言葉を聞いた途端、思わず耳を疑い驚愕の表情を浮かべたが、直ぐにユーノスがユーノの肩に飛び乗りこう言って来た。

「話してくれないか、ユーノ。埋もれていた真実を」

ユーノはその言葉を聞くと、浦太郎に聞かれないために一旦全員をロビーの方へと案内し、全員がいることを確認したのちにユーノは

徐に埋もれていた浦太郎とムラナカとの過去、そしてその時の悲しき事件の詳細を語り出した。

「――――――五年前。レリック事件解決の為に、機動六課が正式に立ち上がる前の１月１０日・・・浦太郎の人生を一変させる事件が起こったんだ。それ以降、浦太郎はこの管理局を・・・――――いや、法によって秩序を統制する世界そのものを信じられなくなった。」

「え・・・世界を・・・」

「それに法って・・・」

訝しげな表情を浮かべるフェイトやティアナ。

ユーノはそんな二人やそれぞれの反応を一瞥してから浦太郎の過去を語り始める。

「亀井浦太郎。陸戦主体の戦技教導官としてその手腕を発揮し、敵味方でさえ恐れおののかせた超一流のエース級魔導師だった。当然、そんな浦太郎に憧れる魔導師はエースオブエースのなのはと同じで陸戦魔導師の中には沢山いたさ。で、その中に一人の女性がいた。女性の名はヒカリ・ガーレイド。浦太郎の嘗ての教え子だった人さ」

「だったって・・・・・どうして過去形・・・！？」

なのはがそう言うと、ユーノは眉間に皺を寄せながら気は進まないと言った感じで衝撃的な事を内容を口にしだした。

「――――――その女性は、浦太郎と同期だった局員の話によれば、

バカみたいに浦太郎に可愛がられてさ、世間からも凄い眼差しで注目された別嬪だった。地上部隊の魔導師と言う魔導師、更には局員たちの注目の的だった。アイドルだった。だけど、とんでもない奴もその子を狙ってたんだよ――――――」

「とんでもない奴？」

「ええ。そいつがあろうことか、今回のハイエナヤミーの親で浦太郎を絶望へと追い込んだ張本人、『マレスター』頭角、アツシ・ムラナカだったんですよ・・・！」

「「「え！」」」

「む、ムラナカって・・・あの『女喰（めすぐい）』って言われたあの・・・！？」

はやてが口を押えながらムラナカの異名を口にすると、ユーノは暗い表情を浮かべ続きを語り出す。

「浦太郎は、ヒカリ女子が行方不明になってから人が違ったように探し回ったそうなんだ。でもその時には、ムラナカが自分のアジトに監禁していたんだよ。」

「！」

「ムラナカを始め幹部たちに普通じゃ考えられないような事をされたらしい。二カ月もの間・・・・・・！」

「二カ月も！！」

「もう逃げる気力もないぐらいボロボロにされたその子は、何度も手首切って死のうとしたけど、その都度ムラナカに滅茶苦茶殴られたんだと。その事を知った浦太郎は、やっとのことで居場所を見つけて、救いに行ったときはもう・・・・・遅かった」

〈回想〉

当時の浦太郎はムラナカのアジトを突き止めると、一目散にヒカリ・ガーレイドを救い出そうと単身でアジトに乗り込んだ。

『ヒカリちゃん・・・・・あ！』

だがそこで浦太郎が見たのは、まるで人が違ったかのように渇いた表情を浮かべて体育図割りをしていたヒカリの姿だった。

『・・・――』

浦太郎は自分にさえ渇いた表情を向けて来たヒカリに一瞬戸惑いを見せたが、直ぐに言葉を投げかけた。

『か、帰ろう！ヒカリちゃん。助けに来たんだ！』

『助け・・・あたしを・・・？』

『そ、そうだよ・・・！』

『ふふ。ふふふ』

『ひ、ヒカリちゃん？』

ヒカリは突然笑い出したかと思えば、徐に立ち上がり衝撃的な事を口にする。

『ははははは。ヒカリはもう死んだよ。』

『え！？』

『あたしは“ダークネス”。アツシ・ムラナカの女さ！』

〈回想シーン終了〉

ユーノはヒカリが口にしたダークネスと呼ばれるもう一人の人格をこのように語った。

「ダークネス・・・それはその子が自分自身を守るために自分で生み出したもう一人の人格だった。見も心もボロボロになって、救われる道はムラナカを受け入れる事しかなかったんだろう。」

「酷い！酷過ぎるよ・・・！！」

聞いていたなのは達女性陣もそうだが、男性人もまたあまりに酷な話に胸が張り裂けそうになる。

「その後、度重なる性行為を否応なく繰り返すしかなかった彼女はＳＴＤ（性行為感染症）に発症し、適切な処置も施す間もなく命を落とした・・・浦太郎はすぐにムラナカを告訴した。だが、レイプ事件は認められなかった」

「どうして！？」

執務官であり法務関連の職に携わっているフェイトやティアナは納得のいかないといった顔をユーノに向けると、帰ってきた回答はこうだった。

「裁判記録を調べたら次のような事が書かれていた。ダークネス・・・ヒカリさんは事件の後も、ムラナカに頻繁に接触していたことから・・・・・・それを裁判所は相手に対して好意があったと判断したんだ。プライベートを通じて親密になり、相手を受け入れる意思があった、と・・・・・・・」

「そ・・・そんな・・・！」

「それが、あやつが管理局を去った本当の理由・・・――」

「ユーノくんのと言い、浦太郎さんのといい・・・・・・どうしてこんなにも胸が痛むようなことばかりが・・・・・・！」

すると、そう言って胸を押さえるはやての言葉にユーノは自分の事に関してあっさりとこう返した。

「別に僕が辞めたのなんて浦太郎のそれと比較することもないでしょ。あれは僕自身の力不足を痛感した結果さ。だけど浦太郎は自分の所為で彼女を死なせてしまったことを自分の罪と思い抱え込んでしまった。彼女を失くしてから、浦太郎は生きる理由を失い絶望し・・・世界を放浪としていた・・・」

「く・・・！」

ユーノから聞かされた話を耳に、拳を強く握りしめながら鬼太郎は唐突に浦太郎の病室へと走り出そうとする。

「鬼太郎!?」

「どこへ行く!?」

「亀に一発ぶん殴らねェと気がすまねぇ!!なんだって亀の野郎、俺や店長にも内緒にして一人でんなもの背負ってんだよ!?水臭せーんだよ!!!勝手すぎるだろうが!!」

鬼太郎の甲高い声がロビーにも廊下に鳴り響く中、一同は一旦沈黙を保ち、直後白鳥は腕組みをしながら口にした。

「ピーチの気持ちは分からなくもない。しかし、浦太郎にもプライドと言うのがあったのだ。下手な事を言ってそれこそ傷を掘り下げる様な事にでもなったら・・・――」

「るっせー!!俺はそれが気にいらねーって言ってんだ!!俺達・・・亀や俺は互に隠し事の無い生活をずっと送って来たんだ!!なのにあの野郎・・・俺達に隠してそんなこと・・・・・・ゼッテー認めねーぞ!!」

鬼太郎はそう言うと、全員に背を向けて一目散に浦太郎の病室へと走って行った。

「鬼太郎!」

「待つんだ、鬼太郎!」

「おおおおおおおお!!!!!」

鬼太郎な唸り声を上げながら浦太郎の病室のドアを勢いよく開ける。

「!?」

いきなりの事に非常に驚いた様子の浦太郎だったが、その瞬間部屋に入ってきた鬼太郎が自分の顔面目掛けて拳を突き立てて来た。

「このクソ亀!!!!!!!」

「ぐっほ!」

浦太郎は鬼太郎に全身全霊の力で殴られると、ベッドの下へと倒れ込み、全員が駆けつけた時にはもう鬼太郎の行為を止めることが出来なくなっていた。

鬼太郎は無抵抗な浦太郎の顔を血で真っ赤に染まることなどお構いなしに殴りつける。

「よくも俺に隠し事しやがったな!!言えよ!言いやがれ!!なんでムラナカの事ずっと隠してたんだよ!!なんで素直に俺や店長に話してくれなかった!!答えろ!!亀!!!!!」

すると、その事を聞いた浦太郎は目線を合わせず壁の方に向かってこう言って来た。

「・・・・・ごめん先輩・・・だけどこればっかりは自分で片を付けたくてさ・・・でも、無理だった・・・・・・今のムラナカはヤミーに憑りつかれて、おまけにマレスターまで復活させて、お蔭で僕はこの有様。笑うしかないでしょ・・・はは。ははははは」

自嘲した浦太郎を目の当たりすると、鬼太郎は血管を浮かび上がらせ拳を振り上げる。

「く～～～！！いい加減にしろっ！！！！！！！」

女性陣が思わず目をつぶってしまったその直後、そんな鬼太郎の拳を止めたのは最年長の金太郎であった。

「！」

「く、熊！？」

「ふん！」

「のあ！」

金太郎は頭に血の上った鬼太郎の頭に強烈な拳骨を食らわせる。

鬼太郎は頭が割れそうになるぐらいの痛みを受け、浦太郎から離れると金太郎は浦太郎の手を掴みベッドに座らせる。

「頭を冷やせ。お前が憤ったところで何も変わらぬ。浦太郎、大丈夫か？」

「う、うん・・・」

「浦太郎――――――」

店長でもあるユーノは従業員であり、家族と言っても過言ではない大切な存在である浦太郎の事を心底心配し、何とか救ってやりたい

と感じていた。

◇

〈ルーテシアＳｉｄｅ〉

第３４無人世界の「マークラン」。

ルーテシア・アルピーノはこの辺境の自然豊かな草原の世界で母親と、召喚獣らと共に静かな生活を送っている。

今日は母親のメガーヌと共に夕食のカレー作りを手伝っているところだった。

「母さん。今晩のカレーはいつもよりも辛いのがいいな」

「あら。珍しいわね～あなたが辛いモノ好きだったなんて」

「なんかねぇ～今日はそんな気分なんだ。」

「そう。じゃあカレー粉うんと足して、うんと辛くしてあげるわね」

「ありがとう。でも辛すぎたら流石に食べれないからほどほどにね♪」

「はいはい♪」

仲睦ましい親子の会話に心温まる中、夕餉の時刻唐突にインターホンが鳴り響く。

「あら？お客様かしら。ルーテシア、ちょっと見て来てくれる？」

「は～い♪」

ルーテシアは玄関の方へと向かって来賓を迎えようとしていたが、その時玄関の外に居たのは召喚獣たちを相手にたった一人で圧倒し、ルーテシアをさらいに来たアツシ・ムラナカが待ち構えていたのだ。

そんな事とは露知らずのルーテシアは玄関を開けると笑顔で来賓を迎えようとする。

「はいはい。どちらさまですか～～～・・・・・・！」

だがその直後、彼女は自分の事をハイエナのような眼つきで見詰めてくる危険なにおいが漂うムラナカの姿に表情が青ざめる。

「へへ。これはまた可愛い子だぜ。どうだ？俺と一発してみようぜ」

「な・・・・・・！」

「どうしたの、ルーテシア？」

ルーテシアの事が気にかかり、一旦火を止めたメガーヌが玄関に向かうと、その瞬間メガーヌはムラナカに腹部を殴られる。

「がっ！」

メガーヌはそのまま気を失い倒れ込むと、ルーテシアは母親の元へと駆け寄る。

「か、母さん！！」

「ふふふ・・・」

ムラナカは土足で家の中へと入り込むと、獰猛な獣のように獲物であるルーテシアに迫り、ルーテシアは根源的な恐怖を抱きながら後ずさる。

「こ、来ないで・・・！が、ガリュー！ガリュー早く出てきて！！」

「ああ。あの羽虫ならとっくにぶっ潰しておいたぜ」

ムラナカはそう言うと、玄関の外に倒れる血塗れとなり羽が切り裂かれた変わり果てたガリューの姿をルーテシアに見せ、それを見た瞬間ルーテシアの表情が凍りつく。

「が、ガリュー・・・！」

「若い女とやるのもいいが、こう言うロリータとやるのもたまんないんだよな～～なぁおい。お前やったことあるか？この世で最も幸せな行為って奴を・・・」

ムラナカはそんな事を呟きながら一歩一歩ルーテシアの元へと歩み寄り、ルーテシアはその場に膝をつくと涙を流し、助けを求める。

「助けて・・・・・・／／／誰か・・・・・・・・・たすけて・・・／／／」

◇

〈ユーノSide〉

ルーテシアがムラナカと接触したことは、ヤミーと同化していたために直ぐにユーノとユーノスのセンサーにも反応が見受けられた。

「！ヤミーだ！」

「え！？じゃあ、ムラナカが・・・！」

「場所は何処や！？」

ユーノが反応があった場所を確認すると、そこで彼は愕然とした表情を浮かべた。

「え・・・おい嘘だろ・・・・・・ムラナカのいる世界って・・・・・・ルーテシアの？」

「！」

その言葉を耳にした途端、浦太郎は一目散にベッドから飛び降り病室の外へと抜け出そうとする。

「浦太郎！」

「浦太郎教官！」

鬼太郎は直ぐにそんな浦太郎の腕を掴んだ。

「亀っ、行くな！」

「見殺しにしろって言うの!?ムラナカ、ルーテシア拉致してやりたい放題するに決まってる!!ほっとけないよ!!」

「ルーちゃん!」

「そんな・・・!」

思わずエリオとキャロの脳裏に最悪の光景が浮かんでしまい、鬼太郎はだからこそ尚更浦太郎を放っておくわけにはいかなった。

「バカヤロー!!わかってんだろうがてめぇも!!泥沼だぜ!いいのかよ!?」

「うるせー!!」

浦太郎は人が違ったように、普段なら絶対に鬼太郎に言わない粗暴で口調で叫び声をあげると、聞いていたユーノは複雑な顔を浮かべる。

「浦太郎――――――」

そして、徐にユーノは浦太郎の方へと近づいて行く。

「ユーノ様?」

「ユーノ、一体何を・・・――」

全員がユーノの行動に注目するなか、ユーノは徐に浦太郎の肩に手を乗せ、眉間に皺を寄せた表情で語り出す。

「浦太郎。一つ言っておくよ。過去の記憶を清算したいのも、ルーテシアを見殺しに出来ないのもわかる。けどね・・・“過去を清算する”ってことは、“ムラナカを殺す”って事だぞ？」

「「な！」」

思わずその言葉に凍りつくなのは達。

浦太郎はそれを聞くと、込み上げてくる想いを必死で拳に乗せて気持ちを抑えると、店長であり自分を救ってくれたユーノに徐に謝りながらこう言う。

「・・・ごめん店長・・・僕はあの時のヒカリの顔・・・忘れることが出来ないんだ・・・・・・！だからあんな野郎・・・・・・ムラナカだけには負けたくないんだ！！」

「くっ！」

それを聞いた直後、鬼太郎は浦太郎の胸ぐらを掴み入って来た時と同じように、全身全霊の力を込めて顔面を殴りつける。

「ぐっほ！」

「鬼太郎さん！」

鬼太郎は浦太郎を殴り終えると、次の言葉を捨て台詞にして部屋から出ていった。

「どうしようもねぇバカだぜてめぇ！！勝手にしろ！！」

鬼太郎がいなくなった後、ユーノスはユーノに促す。

「ユーノ。」

「ええ」

ユーノは出発の前、浦太郎の気持ちを酌んで一緒に浦太郎と、ルーテシア保護の為に同い年のエリオとキャロを同行させるとすぐさま病室を抜け出しムラナカの元へと直行する。

ユーノ達が動き始めたその頃、管理世界の方では浦太郎の予測通りルーテシアを拉致し、自分のバイクに乗せて暴走行為を行うムラナカ率いる新生マレスターが次々と道行く女性に凶行を働いていた。

「きゃあああ！」

「あああああ！！」

騒ぎを聞きつけた管理局側はこの最悪の状況に騒然とした。

「なんてこった！」

「マレスター！本当に復活したんだ！？」

マレスターは違いに現れると、女性と言う女性を拐し（かどわか）、更には暴走行為に乗じて金品・照明などを破壊していくと言った大騒ぎを起こすと、流石の管理局側も見過ごせなくなり地上部隊の局員が出動する。

『こらぁ！そこの暴走族！？直ちに解散しなさい！』

「ははははは!!テツモチ!」

「イエッサー!」

先頭を走る頭角のムラナカがそう言うと、幹部の一人がバイクを止め、向かって来る地上部隊の車と一緒に真横から来る複数の車と衝突させる。

「うわああ!!」

ハンドルをさばききれず、思惑通り車同士で衝突を起こし爆発を起こしたその光景に、ムラナカは不敵な笑みを浮かべ、隣を走る幹部の一人に今夜の感想を尋ねられる。

「どうっすかリーダー!?新生『マレスター』は?」

「ああ・・・最高だよ!!だがまだだ!伝説は死んじゃいねえってこと、世界中の奴等に教えてやる。今夜が新しい伝説の一ページ目だ。もう誰も止められねぇよ。俺の性への欲望が・・・満たされるその時まではな!」

そう言うムラナカの背中には、気を失ったままのルーテシアが涙を浮かべていた。

果たして、ユーノ達はムラナカを、そしてルーテシアを救い出すことが出来るのであろうか?

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

一方、ムラナカの気配を追って再び異世界「エリミ」へと先回りしていたユーノ達はと言うと、サウスゲートの駐車場の中でムラナカが現れるのを信じて待機していた。

ユーノやエリオ達が茂みの中で待ち伏せをしているのに対して、浦太郎一人だけは敢えて目立つような格好で木刀片手にムラナカの名前を叫ぶ続ける。

「ムラナカ！何処にいる出て来いオラッ！！ルーテシア拉致するたぁとことん見下げた野郎だ！！ぶちのめしてやるぜコノヤロウ！！」

茂みの中で自分たちの知っている浦太郎とはかけ離れた口調と正確になってしまっている光景に、キャロやエリオは思わずこう呟く。

「浦太郎さん・・・完全に人格変わっちゃってる・・・！」

「それだけ、ムラナカへの怨恨が深いんだ」

ユーノスはそんな浦太郎の事を見ながれ、ユーノの耳元で言う。

「ユーノ。分かってるな？」

「はい。ヤミーは僕らが片付けます。ムラナカは浦太郎自らの手で」

と、その時エリオが浦太郎の方へと接近してくる人影を捕える。

「あ！誰か来ました！？」」

「！」

浦太郎もその事に気づき、思わず身構えると暗闇の中より現れたのはバイクを走行させながらルーテシアを担ぐムラナカだった。

「へへへ・・・よう。命拾いしたみてぇだな・・・反面教師の亀井さんよ？」

「ルーちゃん！」

「ルー！」

ムラナカは半ヤミー化した状態で、右手の鋭い鍵爪を舌で嘗める。

浦太郎はムラナカの姿を目で捉えた直後、怨恨に溢れた甲高い声を上げる。

「ムラナカっ！！」

浦太郎はフィッシャーマン片手にルーテシアを奪還すべくムラナカの元へと走り出すと、その直後浦太郎の腹部にムラナカの左ストレートがヒットする。

「ぐっほ！」

「どうした？そんなもんじゃねぇだろ？」

「く・・・」

浦太郎は唇が裂け、噴き出て来た血を拭うとムラナカと距離を置く。

すると、ムラナカはルーテシアを地面に下すと同時に高笑いを上げる。

「ふふふふふはははははは。ははははははは！！！！」

そして、高笑いを上げながらムラナカは完全に中に寄生していたハイエナヤミーに飲み込まれ、それを見た瞬間ユーノとユーノスは外へと出る。

「のみこまれた！？」

「ユーノ！」

ユーノはユーノスから結界印を受け取ると、ハイエナヤミーの元へと走り出しスレイヤーモードへと変身する。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノは浦太郎以下四人に次のように言う。

「エリオ達は今のうちにルーテシアを！浦太郎はそこで待ってろ！」

「店長・・・」

浦太郎はユーノの言いつけを守り、その場で待つことにし、エリオとキャロは直ぐに倒れたルーテシアの元へと駆け寄った。

「ルーちゃん、しっかり！」

「大丈夫、ルー？！」

二人が必死に体を揺すって呼びかけると、ルーテシアは徐に目を開ける。

「う・・・キャロ・・・エリオ・・・」

「よかった。」

安どのため息をつく二人は、直ぐにルーテシアをユーノスと浦太郎のいる安全な場所へと下がられ、その間にユーノはハイエナヤミーの中にいるムラナカを引っ張り出そうと戦っていた。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｄａｓｈ〉

「はあああああああああ！」

ユーノはスレイヤーダッシュを使い、敏捷性に優れた走りでハイエナヤミーへと近づくと、ハイエナヤミーの体にリボルスピンキックを食らわれセルメダルを押しのける。

そして、体の中より見えて来たムラナカの本体を掴みとり、勢いよく浦太郎の元へと投げつけた。

「うらあああ！！」

「のあっ！」

ヤミーから分離したムラナカは浦太郎の元へと転げ落ちる。

一瞬驚きに満ちた表情の浦太郎に、ユーノはこう叫ぶ。

「浦太郎！あとは好きにしろ。ユーノス元帥！」

「？」

「最後まで、浦太郎の事・・・・・・見ててください」

「・・・分かった」

ユーノはユーノスにその場を任せると、飛散したセルメダルを集めるハイエナヤミーを別の場所へと誘導し浦太郎達から遠ざける。

そして、残された浦太郎はと言うと意識を取り戻したムラナカと正面から向かい合う。

「ててって・・・！？」

ムラナカが頭を押さえながら前を向くと、そこには鬼のような形相を浮かべた浦太郎が立ち尽くしていた。

浦太郎はフィッシャーマンを待機状態に戻すと、拳を鳴らして次のように宣言する。

「ムラナカ・・・この落とし前・・・高くつくぜ。本当はおめぇの事殺したいぐらいさ・・・けどな・・・そんなことすれば僕もお前と一緒になっちまうんでよ。テメーに成り下がるぐらいなら死んだ方がましだ！！さぁ来いよムラナカ！！このスクライア商店従業員、

亀井浦太郎がてめーを成敗してやる！」

「てめぇ・・・・・はっ！オモしれー！だがよ！！忘れてたんじゃねぇぞ。てめーの相手は俺だけじゃねぇってことをよ！」

ムラナカはそう言うと、指を鳴らして待機していたマレスター全員を呼び集める。

「な！」

「これは・・・！」

全員は暗闇の中から合われた複数のバイクに跨る構成人数数百名のマレスターの人間に思わず目を見開き、その中心に立つムラナカは浦太郎に目を向ける。

「今のマレスターはあの頃とは比較にもならねェぐらい凶悪化してるんだぜ。テメー一人で、この人数相手に分があると思うか？」

「てめー・・・どこまで汚ねー真似を・・・！」

見かねたエリオは直ぐに浦太郎の援護に入ろうとユーノに言おうとする。

「ユーノス元帥！」

「わかってる。だがお前たちはここで待ってろ。」

「どうして！？」

「私達にだって手伝わせてください！」

キャロやルーテシアもそうユーノスに言うが、ユーノスは首を横に振り、次のように言った。

「お前たちの手を、こんな奴等の為に汚させるわけにはいかぬ」

三人は思わずその言葉に声を詰まらせた。

と、その時そんなユーノスの言葉に便乗して何処からともなく聞こえてきたバイク音と共にあの男の声が聞こえてきた。

「その通りだ！」

「何？」

浦太郎が一瞬聞き違いかと思い、後ろを振り向いた瞬間、暗闇の中より現れたのはバイクを走らせ木刀片手に暴走族のような纏いを羽織ったスクライア商店従業員、桃谷鬼太郎だった。

「つらあああああ！」

鬼太郎は木刀を振り回しながらマレスターの患部数百名を一気に圧倒していき、この光景には思わずムラナカも目を疑った。

そして、愕然とする浦太郎の横にバイクを止めた鬼太郎は鼻で笑いながら浦太郎の元へと歩み寄る。

「せ、先輩！」

「「「「鬼太郎〈さん〉！」」」」

「囲みなんて随分汚ねー真似してくれるじゃねぇのかテメーら。そんな糞ヤローは、この俺！桃谷鬼太郎様が成敗してくれるぜ！」

「先輩・・・」

「へっ！来ちまったぜ。やっぱ、オメーの事放っておける訳ねぇからな」

すると、突如現れた鬼太郎に怒り心頭な幹部の一人が言う。

「ふざけやがって！いきがんじゃねぇ！！」

「その言葉、そっくり返してやるよテメーら！！」

鬼太郎は浦太郎と顔を見合わせてからタイミングを計ると、一斉に飛び出し残った幹部たちと雑魚新兵たちを次々と片付けていく。

「ぐっは！」

「のあ！」

エリオ達はこの時の鬼太郎と浦太郎の強さにただただ呆然としてしまい、ユーノスはそんな二人の姿を見て、安心した表情を浮かべるとすぐさまユーノの元へと駆け出して行った。

こうして、数分もしないうちに残ったのはムラナカ一人となってしまい、鬼太郎はそれを見るとあとの始末を浦太郎一人に任せ、浦太

郎は拳を構える。

一方のムラナカは険しい表情を浮かべながらサバイバルナイフを取り出す。

「くそ・・・調子乗りやがって。血見なきゃ分かんねェようだな」

「亀。」

「うん。」

「ぶっ殺してやんぜ。かかってこいや！」

その言葉を聞くと、浦太郎はムラナカの元へと走り出し、１５歳と言ってもまだまだ子供で未成年のエリオ達に言う。

「エリオ！キャロ！ルーテシア！目をつぶってろ！！」

浦太郎が向かって来ると、ムラナカもサバイバルナイフ片手に走り出し二人は正真正銘の最期の戦いを始めるのであった。

「「おおおおおおお！！！」」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

二人の戦いがいよいよ始まったその頃、海琳付近でハイエナヤミーと戦闘を繰り広げていたユーノは徐々に捨てる能力を備えたハイエナヤミーの動きを気配と音でわかる様になっていき、形勢は一気に

ユーノの方へと傾き追い詰められるハイエナヤミー。

「はっ！」

ユーノのスレイヤーブレイドとタイム・テルズ・フレイムのコンボが仕掛けられ、ハイエナヤミーがもうじき倒されそうになったその直後だ。

暗闇の中より突然、ユーノに新たな襲撃者が襲い掛かってきた。

「ぐあああああ！」

ユーノは攻撃を受けると、地面を転げまわり顔を上げた瞬間目にしたのは、ハイエナヤミーを作り出したグリード、カザリだった。

「どうやらセルだけじゃなくて、コアメダルも手に入りそうだね」

「お前・・・確かカザリ！」

「覚えがいいね。流石はユーノ・スクライアか」

そう言うと、カザリはハイエナヤミーと共闘して、ユーノに攻撃を加え始める。

ユーノは思わぬ加勢に加え、相手がグリードであったことから先ほどは状況が逆転してしまい、あっと言う間に追い詰められていく。

ユーノは果たしてこの状況をどう切り抜けるのか?!

一方、因縁の戦いを繰り広げる亀井浦太郎とアツシ・ムラナカの方

はと言うと、互いに一歩も引かない交戦状態が続いていたが、ここで一気に浦太郎が勝負に出て来た。

「うらあああああ！」

浦太郎は渾身の一発をムラナカの顔面に食らわせ、ムラナカは強烈な拳に倒れ込み、直ぐに反撃に出てくる。

「やろう！！！！！」

しかし浦太郎はムラナカの拳を交わすと、すぐさまカウンターパンチを入れる。

「ぶっは！」

ムラナカはここに来て急激に強さを増した浦太郎に一方的に追い詰められる。

「どうしたムラナカ！さっきから一発も当たんねぇぞ！？そろそろ決着（ケリ）つけようか？」

「く・・・ケリはこっちでつけてやるよ・・・！」

「へへ。やってみな」

すると、ムラナカは血を拭ったその手で目の前に落ちていた鉄パイプを拾い上げ、見ていた鬼太郎やエリオ達は声を上げる。

「てめぇ！！タイマンは素手の筈だろ！！」

「鉄パイプを使うとは卑怯だぞ！」

「知ったことかああ！！」

自棄になったムラナカは鉄パイプを振り上げ浦太郎に殴りかかるが、その直後それを跳ね返すように浦太郎の足蹴りを食らう。

「ぐあ！」

浦太郎とムラナカによる因縁の対決は、いよいよクライマックスを迎える。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

浦太郎がもうじきムラナカと決着を迎えようとしていたその頃、ユーノは非常にまずい事態に陥っていた。

「ぐあああ！」

加勢に入ったカザリとハイエナヤミーによる猛攻で、体力は削られ最早戦う事すら危うい状況に立たされていた。

ユーノが膝をつき荒い息をしていると、不敵な笑みを浮かべたカザリが呟く。

「そろそろもらうよ・・・コアメダル」

「は、は、は、は、は」

「フフ・・・フフフ」

カザリは徐にユーノに近づくと、ユーノの身体に鋭い鍵爪を使った連続攻撃を加え、まともに受けてしまったユーノは勢いに押されついには防護服の中のコアメダルが吹き飛んでしまった。

「ぐあああああ！」

そして、そのままスレイヤーモードが強制解除されるとカザリの手に握られていたトラとチーターのコアメダル二枚を目にし愕然とした。

「！」

「これで僕のコアは七枚。あと二枚で完全復活・・・なんだけど、君は見ることが出来ないね。残念だけど」

「く・・・」

カザリはそう言って、変身の解けたユーノに止めを差そうと前に飛び出したが、直後発生したミッド式の魔法陣を前にし足を止めた。

「「！」」

魔法陣から現れたのは、転移魔法でユーノの後を追って来たユーノスだった。

「ユーノス元帥！浦太郎は？」

「大丈夫だ。勝負の行く末はもう見えている。それより・・・・・・カザリ。最近見かけなかったが、随分と景気がよさそうだな」

「おかげさまでね」

「こっちはもう一つだ。お前ら潰して、すっきりさせてもらうぞ」

「フン」

「ユーノ。まだだ。こんなものじゃお前も俺も諦めきれないだろ？」

「へへ。当然♪」

「なら、とっとと取り返すぞ」

「はい！」

ユーノスの激励を受けると、ユーノは結界印を取出しスレイヤーモードに変身。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

ユーノはもう一度スレイヤーモードとなると、手ごわい相手と分かっていながらもコアメダルを奪還すべくカザリとハイエナヤミーの元へと向かっていく。

ユーノが手ごわい二体を相手に果敢立ち向かっている様を見守るユーノス。

と、その時ユーノ周囲にまたしても屑ヤミーが現れる。

「屑ヤミー・・・なんでまたこいつらが」

ユーノスはそう言うと、尻尾に魔力を圧縮させると軽い身のこなしで器用に尻尾を操り屑ヤミー相手に小さな体ながら奮戦する。

そして、戦いながら彼は徐に呟く。

「久しぶりにスカッとするな」

ユーノ達の熾烈を極めた戦いにも、もうじき終局が迎えようとしていた。

そして、先に終局を迎えようとしていた浦太郎対ムラナカの戦いはと言えば、顔が変形するほどにまで殴られ血塗れとなったムラナカに鋭い目つきで睨み付け、ムラナカは尻もちをしながら手を前に出す。

「おいおい・・・何マジになってんだよ・・・たかが喧嘩で殺す気か？」

だがそんなムラナカの言葉など訊く耳もまたない浦太郎は容赦なくムラナカの顔を殴りつける。

「ぐ！」

「立てよ。立てってんだよ！」

浦太郎はムラナカの胸ぐらを鷲掴みにし、途端ムラナカは怯えた声で命乞いをする。

「なぁ・・・もう勘弁してくれ・・・悪かったよ・・・俺が！」

「ざけんじゃネー！！」

浦太郎はそう言うと、ムラナカの顔面に右ストレートを食らわせる。

いよいよ、決着の時が点こうとしていた。

対するユーノ、ユーノスの二人組はと言うと、グリードとヤミー相手に奮戦を強いられていたが、その時ユーノスは屑ヤミーの背後から接近してきたバイクを走らせる例のオッドアイの少年を目にし驚いた。

「！おい！お前は確かあの時の・・・！？」

「怪我したくなかったら退いててください！」

「お前・・・」

ユーノスは言われた通り素直に屑ヤミーから退き、その様子を気の上の方で観察していたリリスは無言のまま、昼間スカリエッティに言われた言葉を思い返し心の中で呟く。

『リリス。君が今一つ吹っ切れない原因はその“プライド”だ！欲望をプライドで抑え込んでいる・・・――非常につまらんよ』

「（だからと言って、プライドを捨てたら終わりじゃない・・・！）

」

少々その事だけが気に入らない様子のリリス。

そんなリリスの存在に気づいているのか、少年は木の上を気にしながら屑ヤミー目掛けて銃弾を発射する。

「喰らえ！」

屑ヤミーはその攻撃を受けると跡形もなく飛散し、その直後少年はカザリとハイエナヤミーに圧されているユーノを援護し、銃弾を受けたハイエナヤミーとカザリは思わず退き、ユーノは目を丸くした。

「！君は・・・謎の少年君？」

すると、少年は援護の後直ぐにリュックからあるものを取出しユーノとユーノスが衝撃を受ける言葉を口にする。

「ユーノさん！受け取って！第五の完現術コンボのアイテム！」

「え！」

「第五の完現術コンボ！？」

二人が耳を疑う中、少年がユーノに投げつけたアイテム・・・――――それは「中国四大玉石」の中でも最高の玉とされる中国の「国石」でヒスイと呼ばれる宝石、和田玉（ほーたんぎょく）であった。

「これは――――――」

思わずその宝石の美しさに目を凝らすユーノだったが、直後ユーノの耳元に男の声が聞こえてきた。

『ユーノ』

ユーノがその声に反応し、目を向けるとまたしても辺りは完現術コンボの最初の発動の時と同じく真っ暗に染まり、そこに突如として現れるもう一人の人物。

それこそがこの宝玉に宿っているユーノの友人の魂であり、元々の所有者だった木之本桜の夫、李小狼だった。

「小狼さん!?それじゃこれは・・・――」

『ああ。俺も柊沢と同じなんだ。お前の役に立ちたい。お前の力でいたいんだ。俺の力をユーノに――――――』

「小狼さん――――――はい。ではありがたく使わせていただきます!」

ユーノがそう言うと、小狼は柔かい笑みを浮かべて和田玉の中へと戻っていき、現実に引き戻された瞬間ユーノの目の前には再びカザリ達が写って来たが、カザリは状況の一変したユーノの笑みを浮かべて思わずつぶやく。

「?何のつもり」

「ふふ。こうするのさ。おおおおおおおおおおおおお!!!」

ユーノはその瞬間、和田玉に宿る小狼の魂を引き出し第五の完現術

コンボを発動させ、結界印の機械音がその名を口にする。

〈Ｇｒｅｅｎ　ｐａｎｔｈｅｒ〉

ユーノは全身から噴き出る緑の霊圧の渦に包みこまれ、カザリとハイエナヤミーはその尋常ない雰囲気に驚き返る。

「「！」」

「これは・・・！」

ユーノスが渦の中に移るユーノの姿に目を向けると、唐突に渦が収まり渦を切り裂いて出て来たのは、緑を基調とする中国服に身を包み背中には宝剣を背負った李小狼の魂を完現術させたユーノの姿だった。

「は！」

カザリは今まで見たことのないユーノの完現術コンボの姿に思わず尋ねる。

「何だと・・・お前、なんだその姿は？」

「第五の完現術コンボ・・・翠の虎狼・・・グリーン・パンサー！参る！！」

「フン！」

カザリは鼻で笑うと、掌から得意の竜巻を発生させユーノにぶつけようとするが、その直後ユーノは背中の宝剣を取出し袖口に入って

いた「風華」と書かれた札を取出し刀身に当てる。

「風華招来！」

すると、その瞬間札より発生するカザリの竜巻を相殺させるほどの竜巻。

「何！？」

思わず目を疑うカザリだったが、ユーノは不敵な笑みを浮かべると中国拳法の構えを取ってこう言った。

「中国四千の歴史を舐めるな。はあああああ！」

ユーノは密林の虎の如く素早い動きでカザリとハイエナヤミーに接近すると、拳を突き立ててカザリの左肩に決まって拳型で打撃を入れる。

「鶴嘴（カクシ）！！」

カザリはその攻撃を受けると、後ずさりし、その直後にハイエナヤミーが割り込んでくるとユーノは怒涛の連続攻撃を叩きこむ。

「貫手（カンシュ）！小拳（ショウケン）！盃指（ハイシ）！平拳（ヒョウケン）！」

ハイエナヤミーは予想もつかないほどに的確で、且つ激しい攻撃に大きなダメージを負い、ユーノの戦う様を見ていたユーノはこのコンボの特徴を鋭い洞察眼で理解する。

「そうか。あのコンボの特徴は中国魔法と武術による組み合わせ。

しなやかな動きを駆使し、攻撃する部位に最も適した拳型（けんけい）をとる事で、密林の覇者たる虎が如く、一切の無駄なく獲物を狩る！！」

「オラオラオラオラ！！！！！」

ユーノはしなやかな動きでカザリの動きを翻弄すると、中国武術を駆使して蹴りと拳を交互に体に叩き込んでいく。

「ぐっは・・・」

だがユーノの攻撃がこれだけでは終わらない。

密林の覇者となったユーノの中国コンボは更に激しさを増していく。

「裏拳（リケン）！骨打（コツダ）！双掌（ソウショウ）！猫手（ビョウショウ）！背指（ハイシ）！応経（オウケイ）！右輪至（グワシ）！左破羅（サバラ）！」

カザリはあまりに激しすぎる攻撃に完璧に圧されてしまい、ハイエナヤミーも為す術もなく翠の虎狼のユーノに防戦一方の状態となって追いつめられる。

ユーノスは二人が後退していく姿を見て、止めを促す。

「今だユーノ！」

〈Ｋｏｇｅｔｕｋｅｎｂｕ〉

ユーノは全身の気を一気に爆発させると、両手を虎の如く構えると、一気に駆け出して行き声を上げて二体に突進する。

「はあああああああああ！！」

そして、気で出来た鋭い爪の連撃を拳と全身から放出する必殺技を発動させた。

「必殺！！“弧月拳舞（こげつけんぶ）”！！」

その攻撃を咄嗟にカザリはハイエナヤミーに擦り付けてその場を離れ、ハイエナヤミーはユーノの身体から放出された鋭い気に体を切り裂かれ、爆散しセルメダルとなって消滅した。

「フン。まぁいいか。セルメダルはあげるよ。次に会ったときは覚悟しな」

カザリはセルメダルを諦めると、ユーノ達にその事を言い残し姿を消してしまった。

変身を解いたユーノは直ぐに完現術コンボのアイテムを届けた少年の元に駆け寄ると、少年はバイクに跨り飄々とした様子で言う。

「任務完了♪僕は先に帰りま～す」

「おい、待て！」

ユーノスが止めようとしたが、少年は制止を聞かずにバイクでさっそうと駆け抜けていき、ユーノは益々少年に謎を抱くのであった。

「謎の少年君・・・」

その一方で、リリスはこの事をスカリエッティに報せようとしながら徐に呟く。

「ユーノ・スクライアが・・・また新たな完現術コンボを・・・・―
――竜神の寵児・・・彼は本当に何者なの!?」

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

ユーノが無事にヤミーとの決着を済ませたその頃、こちらもいよいよ大詰めを迎えていた。

亀井浦太郎が土壇場に発揮した凄まじい強さで性犯罪者ムラナカに怒涛のパンチを食らわせていたのだ。

「ぐあああ!」

ムラナカは反撃をする前に浦太郎に殴り倒され、それを見ていた鬼太郎やエリオ達は次のような反応をする。

「いいぞ!亀!!」

「強い・・・これが浦太郎さんの・・・!

そして、晴れ上がった顔のムラナカは尻もちをつき恐怖に怯えた様子で目の前の浦太郎を見つめる。

「ひ・・・!」

「ムラナカ・・・てめぇだけは死んでも許せねー!昔のケリつけようか。いい加減・・・過去の淀みを清算したいんだよ・・・!」

「ま、待ってくれ！謝るよ！」

ムラナカはそう言って立ち上がり許しを請うとするが、その瞬間浦太郎のアッパーがムラナカの顎にヒットする。

「どらああ！」

「ぐあ！」

ムラナカがこれが決め手となり、力尽き気を失った。

鬼太郎達は浦太郎の勝利に嬉々とした声を上げる。

「「「やったあ！」」」

「やったな、亀！」

「へへ。どんなもんだい♪」

浦太郎は満身創痍となった状態で鬼太郎に近づき、鬼太郎はそんな浦太郎と向き合いながら最後にこう言った。

「もう二度と、俺達の前で隠し事は無しだぜ。」

「分かってるよ。ありがとうね、先輩――――――」

「へ！」

二人は互いに握手を取り合い、無事に仲直りを迎える。

すると、丁度その時ユーノ達も駆けつけ状況見て事が解決したことを確認すると、ユーノはエリオ達に笑顔を向ける。

「終わったようですね、ユーノ先生。」

「うん。さて、ムラナカ達を連行するかな」

「たった今、１０８部隊の方に応援を頼みました」

「うん。結構結構♪」

アツシ・ムラナカ、及びマレスター幹部たちは駆けつけた管理局員によって一人残らず逮捕され、こうして長きにわたる浦太郎の過去の淀みは無事に清算され組織は今度こそ間違いなく壊滅を迎えたのであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

だが、ユーノ達の知らない場所ではまた違う事件が起こっていた。

一人の男が警察に連行され屋敷の中より出て来た。

「ほらっ！」

集まったギャラリーはパトカーに乗せられる男を見ながら口を開く。

「何？詐欺だって？」

「はなせ、バカヤロー！」

「めちゃくちゃ騙し取ってたらしいよ金」

男はパトカーに乗せられると、そのまま警察に連行され御用となったが、その時屋敷の周囲にあったのは、メズールのヤミーが孵化したと思われる卵の後であった。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

そう、先ほどの男はメズールが仕掛けたヤミーの親であり、人をだまして儲けたいという男の欲望を膨らませ大量のセルメダルを作り出していたのだ。

男の欲望から孵化した大量の水棲ヤミーがメズールの元へと戻ってくると、待ち望んでいたメズールはヤミーを迎えこの度の成功を噛みしめる。

「おかえり子供たち――――――成功よ。」

「ん？わーい、メダルだ！いっぱいある。」

ガメルは戻って来た大量のヤミーが悉くメダルに戻っていく様を見て、大はしゃぎし、不敵な笑みを浮かべるウヴァにメズールは言う。

「屑ヤミーがユーノ・スクライアとユーノスの気を引いてくれたおかげね。ゆっくりヤミーを育てられたわ。」

「フン。ここからだ。俺達ももっとコアメダルを集めないとな。」

「わーい。やった～～～！ありがと、メズール」

「いいのよ～～～」

「はい、あげるー」

「ありがとう」

こうして、まんまとユーノ達の裏をかいてメダル獲得に成功したグリード三体。

果たして、メダルとアンゴルモア争奪戦の行方はどうのような結果となりうるのか？

そんな事を考えながら、今日はここまでとしておこう。

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚　ゾウ一枚　ゴリラ一枚　サイ一枚　ウナギ二枚

泥沼と性欲と中国コンボ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今回は特別バージョン♪なんと、久しぶりにケロちゃんことケルベロスさんがゲストに来てくれました。では、ケルベロスさん～あとはお願いします～♪」

ユーノがそう言うと、気合十分のケルベロスが登場。

ケ「とう！こにゃにゃちわ～～～！！！再び舞い戻ってきた伝説のコーナー、ケロちゃんにおまかせの時間や！！！今回は緑の兄ちゃんの了承を得た上でのこのコーナーさかい、気合十分や！ほんなら、早速いってみよう！！」

ユ「わーい、わーい♪」

拍手喝采が飛び交う中、ケルベロスはコーナーを始める。

ケ「今回は緑の兄ちゃんの完現術コンボで小僧の力を借りたグリーン・パンサーの能力と衣装についてや。特色は緑を基調とした小僧と同じ中国服。背中の剣でいろんなもん切り裂くは勿論、風・雷・水・炎を自在に召喚させる能力を備えとる。」

「おまけに、しなやかな身のこなしで相手を翻弄させ巧みな中国武術を使いこなすんや」

「でここでケロちゃん～～～チェック！！！！！」

ケルベロスの目がその言葉だけで光り輝く。

ケ「必殺技の弧月拳舞は、心技体のうちの体を司るもので、全身から三日月の気が放たれて敵を葬り去るんや。いや～～～それにしてもほんまに凄かったなあれは。」

ユ「あはは♪そんなことないですよ。これもみんな小狼さんのお陰ですから」

ケ「小僧のくせになんやごっつムカつくわ～～よし！帰ったらムカつくさかい一発小僧の鼻をぶん殴ったる！」

そう意気込むケルベロスだったが、直後修羅の如く形相を浮かべたさくらが現れる。

さ「け～ろちゃ～ん・・・お話聞かせてもらおうかな・・・？」

ケ「ひ！あああああああああああああ！！！！！！！！」

なのは顔負けの魔王様スマイルに、ケルベロスは為す術もなかった。

これには思わずユーノもなのはも恐怖する。

ユ・な「さくらさん～～～怖い～～～！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

そして迎えた2月14日。

バレンタインデー当日。

なのはは激闘の末、マリアに勝利し、あちこちボロボロになりながらも無事にユーノの元へとチョコを届けることに成功した。

な「はいっ、ユーノ君。バレンタインデーチョコレート？」

満面の笑みでなのははチョコレートを渡す。

ちなみにこの間の案は直ぐにアリサに却下されたため、仕方なく詰め合わせのチョコを作成。

ユ「ありがとうなのは。へぇ～今年は詰め合わせなんだ。」

な「それぞれ味を変えてみたんだ。どれから食べる？あ、ちなみにね・・・」

なのははそう言いながらハートのチョコを手に取り、気恥ずかしそうにこう言う。

な「ハートは『私』味だからその・・・・・ちょっと大胆な事するかもしれないけど、嫌だったら嫌って言ってね・・・／／／」

すると、ちょっとしたいらずら心からユーノは不敵な笑みを浮かべ、なのはの頬を触り甘い言葉を吐く。

ユ「じゃあ、その『私』味を早速食べてみようかな～～～」

な「ユーノ君～～～うん・・・わかった？」

なのはは了承し、満面の笑みを浮かべながらハート型のチョコを自

分の口に入れ、ユーノの口元にゆっくりと運び二人は甘い甘いひと時を過ごす。

この状況を外の方で見ていた恋次達は次々とぶっ倒れていき、一護は湧き上がる怒りに堪えながらユーノスに言う。

一「ゆ、ユーノス・・・この雰囲気いつまでつづくんだよ・・・！」

ユーノス「・・・我慢だ」

ユーノスも回答に苦慮するのであった。

ユ「なのは～？」

な「ユーノ君～？」

どこまでもバカップルな二人でもあった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

シャ「自分は咎人？絶対絶対そんなことはない！！」

ヴィ「パパのバカ！」

ユ「絆の完現術士のユーノ・スクライアはみんなが思ってる以上に化物だから」

ヴィ「絶対パパに伝えるんだ！」

第１６３話　想いと模擬戦と無敵の強さ

登場人物紹介

ルーテシア・アルピーノ

声：桑谷夏子

ＪＳ事件でスカリエッティやナンバーズによって拉致され、洗脳されていたベルカ式ベースの召喚魔法を操る魔導師。スカリエッティからゼストと共に「レリックウェポンの実験体」と呼ばれ、ゼストと共に「ＸＩ（１１）番のコア」を探し求めていた。アギトからは「ルールー」、ナンバーズからは「お嬢様」「お嬢」と呼ばれる。また後にキャロからは「ルーちゃん」、エリオからは「ルー」と呼ばれる。強力な召喚魔導師で、ブーストデバイス「アスクレピオス」を使用している。事件後、ナンバーズとともに海上隔離施設で更生プログラムを受け、出所後は魔力を大幅封印され無人の次元世界「マウクラン」で管理局の保護観察を受けることに。その次元世界で、意識を取り戻したメガーヌやガリュー達召喚獣と共に穏やかな生活を送っており、明るい表情を浮かべるようになった。キャロやヴィヴィオとの交友を通して勉学にも励み、殊に古代ベルカ語の翻訳読解は聖王教会からも絶賛されており、現在は根暗な性格から一変し、当時の面影を窺うことが困難なほど明るく社交的でいたずら好きな性格になっている。

マレスター

アツシ・ムラナカが結成した性犯罪者集団。管理世界に神出鬼没に出現しては無差別に女性に強姦行為を始め、様々な悪行を重ねていたが後に巨大化し過ぎ、マレスター危機と言う構想が勃発。この事件を切っ掛けにムラナカが逮捕され一時組織は崩壊したが、刑期を終えたムラナカが新たにマレスターを結成し、再び管理世界を恐怖のどん底に突き落とそうとした。

アツシ・ムラナカ

声：子安武人

マレスター創設者兼頭角。そしてハイエナヤミーの生みの親。首筋に般若の刺青を刻んでいる。『女喰』と言われるほどの性欲求の強い醜悪な人物で、マレスター危機の頃、ヒカリを誘拐・監禁・集団でレイプし、ムラナカの女となる二つ目の人格「ダークネス」を誕生させた張本人。抗争の末、対立していたジョン・スミスを焼き殺そうとし刑務所に入れられた。その5年後、刑期を終え刑務所から出て、再びマレスターを結成し、カザリの手によってセルメダルを入れられ、欲望のままに世の女性たちを見境なく襲い始めた。ヤミーと分離したのち、浦太郎や加勢に加わった鬼太郎、エリオ達の手によってチームを壊滅させられ、キレた浦太郎によって顔の形が変わるほどボコボコにされ、刑務所に戻る事になった。

ヒカリ・ガーレイド

声：林原めぐみ

浦太郎の嘗ての教え子。浦太郎に憧れを抱き、魔導師としての道を志していたが、ムラナカに拉致・レイプされた後、精神的ショック

で二重人格者となってしまい、その末ＳＴＤに発症し命を落とす。彼女の死後、浦太郎は直ぐにムラナカを告訴したが、裁判所はプライベートを通して親密となったヒカリ（ダークネスの人格）がムラナカに行為があったと判断し、レイプは認められずに終わった。そのことが切っ掛けで浦太郎は心に傷を残し、管理局を止め世界を見限り放浪とする原因となってしまった。彼女の墓標はエルセアの共同墓地にある。

メガーヌ・アルピーノ

声：中原麻衣

ルーテシアの母親。元ゼストの部下で、スバルの母親、クイントとはよく行動を共にしていた仲の良い同僚だった。魔法術式・近代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦ＡＡ。戦闘機人プラントへの突入捜査の際にナンバーズらと交戦し部隊は敗北。人造魔導師素体としての適応度が高かったため、ゼストらと共にスカリエッティの実験素材として回収され、アジトにあるＸＩ番の生体ポッドに入れられ保管されていた。死んだと思われていたが実際はまだ生きており、救出された後は療養の甲斐あって意識を取り戻しルーテシアと共に暮らしている。当初は車椅子が必要だったが、時間と共に健康体に回復し歩けるようにもなった。

登場ヤミー

ハイエナヤミー

声：高木渉

身長　１８０？　体重　１１０？

特色／力：鋭い爪を使った切断攻撃、気配と姿を消す能力

アツシ・ムラナカの“女性と性行為を行いたい”と言う欲望から生

み出された。素早い動きと、鋭い刃を持った爪で指先から繰り出すことで相手を切り裂く。また、姿を闇夜に溶け込ませ気配を消すことで相手の隙を突くと言った攻撃も可能としている。ムラナカの体内に潜み、女性と性行為をしたいという欲望を加速させセルメダルを増殖させていたが、ヤミーの所在を探りやって来たユーノ達と遭遇し、戦闘となる。その後、ムラナカの欲望によって見境なく女性を襲い始めるが、ムラナカの体から引きずり出された後第五の完現術コンボを発動させたユーノによって倒され、セルメダルとなった四散した。

想いと模擬戦と無敵の強さ（前書き）

自分を愛せる人間が他人をも愛せる。

五木寛之（小説家・エッセイスト・評論家、１９３２～）

人気投票残りわずかです！

想いと模擬戦と無敵の強さ

みなさんは、自分のことを、愛していますか？

唐突なことを尋ねてしまって大変あれなのですが、今回の話のキーワードはまさしくこれなのです。

ここに一人の青年がいます。

青年の名はユーノ・スクライア。

分け隔てなく誰にも優しさを振りまき、全てを包み込む力を持った非常に献身的な性格をしています。

目の前で困っている人、助けを求める者がいれば迷いなくその人に手を差し伸べます。

これを彼は隣人愛だと“錯覚”しています。

しかし、本当の隣人愛とは一方的な他人への無償な愛ではないのです。

大前提となるのは先ず「自分を愛すること」なのです。

しかし、彼はある事故と過去の経験から自分自身の事を愛せなくなってしまいました。

その癖、困っている人を放っておけない、理不尽な事柄や自分の後悔の所為で大切な人を失いたくないという気持ちだけが大きくなってしまい、いつしか彼は自分自身を枠外に置いて放置するようにな

ってしまいました。

結果、彼は純粋なる自分の笑顔を失い、作り笑いばかりを浮かべて無理をするようになってしまいました。

そんな彼の閉ざされた心を、今回一人の少女がこじ開けようとするのであった――――――

〈ユーノSide〉

機動六課医務室。

前線メンバーはここで定期的に健康の管理を行っているが、特にブラックリストと呼べる二人組がいることは察しが付くだろう。

一人は、スターズ分隊隊長で航空戦技教導隊所属のエースオブエース、高町なのは。

彼女の日頃の無茶な戦いは、局勤めから今日に至るまで周囲から心配の種となっている。

そんな彼女も今年で２４歳。

いい加減そろそろ自分でも自覚・・・いや恐らくはとっくに自覚はしていたのであろうが、それでもやらずに後悔するのが嫌いな彼女でも、周りに諭され最近では嘗てのようなオーバーワークは控えるようになってきた。

勿論それには色々と理由はあるが、一番の理由は自分にとっての愛娘であるヴィヴィオの為と、彼女自身の最愛のパートナーであり彼女の世界を変えた張本人、ユーノ・スクライアの為を想っての事だった。

が、そんな彼女の心を知っておきながら、そのユーノ自身は相変わらず無茶と危険な戦いを続け、自分ではなく他人のエゴばかりを気にして生きている。

お分かりだろうとは思うが、ユーノ・スクライアこそが第二のブラックリストであり、最もシャマルや、なのは達から健康面で危惧されている男なのだ。

そのユーノが今、鍛えられた無駄のない筋肉がついた体をシャマルの前に曝け出し、シャマルは入念に検査した情報をカルテに撃ち込んでいく中、ユーノは肌寒くなってきたのか徐に口を開く。

「シャマルさん。まだですか？いい加減肌寒いんですけど・・・」

「もうちょっと待ってね。あなたの体は普通とはかなり勝手が違うんだから、念入りに検査しないと」

そう言ってシャマルは再びユーノの身体を触り始めるが、ユーノはシャマルの行動を静かに見ながらため息をつきこう呟く。

「はぁ～。健康を気遣ってくれるのはありがたいのですが、さっきからどうもあなたの行動が変なように見えなくもないんですが・・・」

「あら♪なんのことかしら♪」

シャマルは笑ってごまかそうとした。

そ・シャマルが今の今までしていたのは検診ではなく、単にユーノの綺麗な筋肉を触ってみたくなっただけの所謂アタッチメントプレー・・・と、そんなプレーなど訊いたことのない、もとい自分で作ってしまった作者なのだが、ユーノは検診そっちのけで体の至る箇所を触ってくるシャマルにお仕置きがてら、胸ぐらを掴み形相を浮かべてシャマルを威嚇する。

「とぼけんじぇねぇぞおい・・・もうとっくに診断なんて終わってるだろうが・・・！何人の肌じろじろ涎出して触ったり眺めたりし

てるんだよこの野郎・・・！！」

「は、はい／／／ごめんなさい！！もうしませんから殺さないで／／／／／／」

シャマルは最近のユーノの二重人格な側面もまた悩みの種の一つであった。

何故なら、ほんの冗談のつもりでもユーノは真面目であるが故に直ぐに間に受けてしまう性格で、昔は笑えて終わったものでも今となっては一護達の色濃い影響の所為かこのように粗悪なものとなってしまう事も多く、その都度シャマルは恐怖に怯え、心の底で一護の事を憎んだりもした。

シャマルをいびり散らせたユーノは、脱いでいた甚平を気直して羽織を羽織りながら呆れた様子で口を開く。

「たく。呆れてものも言えませんよ。六課の医者で僕となのはの主治医のあなたがそんなことじゃ困りますね。」

「だ、だって・・・！あなたの筋肉って本当に無駄のない付き方だし正直綺麗って思っちゃってもっとよく見たくなったというか何と言うか・・・／／／／／／その顔でこのギャップは反則過ぎるわよユーノ君／／／／／／」

「ギャップって・・・・・・シャマルさん。」

「わ、分かってるわ！ちゃんと医者としての仕事もしています／／／」

「（本当かな・・・）」

一瞬疑いを持ってしまったユーノだが、その時シャマルは椅子に重い腰を掛けると、何やら暗い感じの表情で年始に起きたオクドモン事件で受けた傷に関してこう言った。

「・・・――取り敢えず、オグドモン事件での傷は完全に塞がっているようね。」

「・・・？」

ユーノはその時のシャマルの言葉に何故か違和感を覚えた。

それは恐らく、怪我が完治しているのにも拘らずシャマルの顔が浮かなかったからだろう。

するとその時、シャマルは顔を沈めた状態で予想外な言葉を口にする。

「ユーノ君・・・――ごめんなさいね」

「え」

「ほら、前に言ったでしょ。どんな怪我でも必ず治してみせるって。だけど・・・――結局私の力じゃ地獄の呪いも、オグドモンに貫かれた傷も癒すことが出来なかった。どう足掻いても、地獄の呪いはあなたの体を取り巻いて外界からの力を拒絶してしまう――――！」

「シャマルさん・・・」

思わず複雑な顔を浮かべてしまうユーノ。

シャマルは立ち上がり、ユーノの後ろに回り込むとユーノの背に刻ま和れた地獄の呪いの事を考えながら、自分の顔を背中に着けすすり泣くように言う。

「こんな痛々しい呪いをその身に受けて、私達じゃ到底理解できないような苦しみに人間のあなたが受けて来たなんて・・・・・・ホント・・・神様も間違ってるわ。どうして苦しい想いを受けるのはいつもあなたなのかしら・・・・／／／」

すると、その時ユーノは彼女の言葉を聞いてから徐に低い声で言う。

「僕は・・・――――咎人ですから」

「！」

シャマルは一瞬耳を疑わざるを得なかった。

ユーノはこの期に及んで、自分の事を咎人だと言い張るのだから。

「地獄の呪いは、いわば咎の証。たとえこの現世で死んでも僕は今までに犯した大きな罪がありますから、ほぼ間違いなく地獄行き決定です。」

「そ、そんな・・・ユーノ君っ！どうしてそんな・・・！」

声を上げてユーノの主張することを否定するシャマルと、それを聞き流して淡々と言葉を並べる自称咎人のユーノ・スクライア。

「何かを守るために、何かの人生を台無しにして奪い盗っていったのは紛れもなく僕なんです。別に死ぬことは怖くありません。『死』なら、地獄で何ども味わっていますし何より死んでも終わることのない苦痛の方がよほど酷ですから・・・いや・・・酷なのは・・・・・みんなの記憶から僕自身が忘れ去られるときか」

「ユーノ君・・・」

シャマルは、いたたまれなくなると思わずユーノの身体を力いっぱい抱きしめた。

「！」

シャマルの意外な行動に思わず驚きに満ちた表情を浮かべるユーノ。

「あ・・・あの・・・シャマルさん・・・」

ユーノはきつく自分を抱きしめるシャマルのすすり泣く様子を一瞥してから気恥ずかしそうに尋ねる。

するとシャマルはその状態から込み上げる想いを言葉にし、彼に伝えた。

「忘れないから・・・／／／そんなこと絶対ないから・・・／／／だからそんな事言わないで。そんな顔しないで。もっと昔みたいに笑いなさいよ・・・／／／あの太陽な曇り気のない笑顔でなのはちゃんや私達に・・・・・・／／／」

「・・・・・・」

「いいこと。あなたの独りよがりはもう耳にタコができるほど聞いてきたわ。だけどそれも度を過ぎれば私達も黙ってられないんだから。地獄に堕ちる？自分は咎人？絶対絶対そんなことはない！！あなたはそれ以上にどれだけの人を救って来たと思ってるの！？どれだけの命を掴んできたと思ってるの！？」

「・・・・・それでも掴めなかったときもあります」

物寂しげにユーノがそう口にした後、シャマルはユーノの身体から離れ、零れ落ちる涙を拭い去った後彼と向かい合い、面と向かってこう言った。

「全部を掴めるなんて思ってないでしょうけど、あなたが今までやってきたことはすべて寧ろ評価されるべきことなのよ。別に好きで命を奪ったりなんかしてないでしょ・・・・・だったら、もうちょっと自分を守るようなことしなさいよ。じゃないと・・・・・あなたは――――――自分でいられなくなるわ」

ユーノ・スクライアにとっての最大の課題にして弱点。

それは――――――自分を愛せないが故に、自分の事を守ろうとしないことだった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その日の夕方、ユーノはアドバイザー室の自分の机に肘を乗せ、昼間シャマルに言われた言葉を反芻させ、ぼんやりと茜色から黒へと

染まっていく世界を覗いていた。

「自分でいられなくなるか・・・――僕はその前に自分の事がよく分からないや」

ユーノ自身も、周りからの願いは重々承知の上だった。

しかし困ったことにユーノは自分が思っている以上に自分の事が分からないでいた。

まぁ、自分の事を分かっている人間などほとんどと言うか絶対いないとは思うのだが、彼の場合は深刻なレベルに達していた。

自分への欲望と執着を失った結果、自分と言う存在を置き去りにしてただ只管に他人のエゴを叶えるため、憑りつかれた使命感と一人背負い込んだ罪悪感が執拗に彼を追い詰めていっている。

これは想定しうる人間の許容限度を遥かに超えた、異常とも呼べる状態なのだ。

自然、彼は自分を追い詰めて言った結果仲間が大好きだったという太陽のような笑顔をしなくなってしまい、笑っているのに何故か寂しさを含んだそんな顔ばかりを向けるようになってしまった。

と、そんな今のユーノの後ろから彼を慕う娘からの一声が聞こえてきた。

「おっほん！そこのイケてるお父さん。何かお悩みがありそうですな」

「？」

ユーノが思わずその声に振り返ると、そこには学校の制服に伊達眼鏡と棒を手にしたヴィヴィオが経っていた。

「悩みでしたらこの私、カウンセラー高町ヴィヴィオが解決して差し上げましょう」

「ヴぃ、ヴィヴィオ？どうしたの一体・・・」

「へへ。ちょっと雰囲気を出そうかとこんなものを♪何か悩んでることがあるのパパ？また顔が浮かないでいるとなると、放ってはおけないしさ。私なんかでよかったらお話聞こうか？」

「ヴィヴィオ・・・」

「あ。別に嫌ならいいんだよ／／／こっちも無理にとは言わないしさ／／／」

すると、ユーノは鼻で笑った後今の娘の姿をなのはのそれと重ねた。

「・・・・・ふん。本当に似てるよ。ヴィヴィオはなのはに」

「え」

意外な言葉に思わず呆気にとられるヴィヴィオだが、そんなヴィヴィオの頭に手を乗せ慣れた様子で頭をなでるユーノ。

「ありがとう。ちょっと自分のことを見つめ直していたんだよ。」

「自分の事を？」

「うん・・・どうも僕は自分と言うものがイマイチ分かっていないならしい。いや、人間って生き物は自分と言う存在ほどよく分かっていないものなんだけど、少なくとも僕は周りから言わせれば自己認識に関して相当鈍くさいんだ。」

「そうなんだ。確かに、パパの言ってる通り私も時々自分って何だろうって考えることあるな。だけど今こうして生活している中で周りにいる大切な人や時間がそれを自然と悟らせてくれる・・・そんな気がするんだ」

「成程。随分と聡明な見解だね」

「パパの爪を煎じてちょっと齧ったようなものだけどね。でもどうしてはパパはそんなに自分の事が分からないって思っちゃうの？」

何気ない娘からの質問を受けると、ユーノは頭を悩ませ出したことが娘の心に深く食い込む結果となってしまった。

「う～～～ん。多分・・・自分の事が相当嫌いだからじゃないかな」

「！」

返って来た言葉にヴィヴィオはショックを隠し切れなくなり、ユーノはそんなヴィヴィオを一旦無視して淡々と語り出す。

「僕はなのはやヴィヴィオ、周りの人は好きになったり愛せたりはするんだけど、自分の事は性根から嫌いなんだ。だからかもしれないね。嫌いなものって、正直なところ見る事すら嫌でしょ？」

その時、堪えきれなくなったヴィヴィオの瞳に涙が浮かぶ。

「・・・・・・ぐ・・・」

「ヴィヴィオ？」

様子の変わったヴィヴィオの事を気に掛けユーノが声をかけた瞬間、ヴィヴィオは張り裂けそうな大声でユーノの事を罵倒した。

「パパのバカ！バカバカバカ！！！！」

「え・・・ヴィヴィオ・・・！？」

ヴィヴィオはそれだけを言うと、ユーノの前から走り去り零れ落ちる涙を床に落とした。

「ぐ／／／（なんで・・・どうして・・・どうしてそんな事言うの！？私やなのはママはパパの事大好きなのに、どうしてパパは・・・パパは・・・／／／）」

娘の想いへとは裏腹に、頑なに自分の事を閉ざしてしまっているユーノ。

ヴィヴィオはこの時、このままではいけない、放っておけないという気持ちがこみ上げ真っ直ぐある場所へと向かった。

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

「そっか・・・・・・それで珍しく泣いてたんだ」

ヴィヴィオが向かった場所・・・――それは自分の部屋の隣にあるなのはとフェイトの寝室であり、最近は涙を流す機会の少なくなった娘の事をなのはは優しく受け止め、隣にはフェイトが座っていた。

「ぐっす・・・／／／／パパは・・・どうしてあんなこと言うんだろう・・・／／／どうしてあんなに周りから愛されているのに、自分が一番愛せないんだろう・・・／／／／／／」

それを聞くと、なのははフェイトと顔を見わせ思わずため息をつく。

「はぁ・・・そうだね。私も何度も言ってるんだけど、ユーノ君自身は自分の事これっぽっちも愛してくれそうにない。自分の事を咎人以外の何ものでもないと思ってるって感じ・・・」

そう言うなのはの心がユーノの事で一杯になる。

彼女自身、これまで何度彼の凍りついた心を溶かそうと努力はしてきたが、その原因を作ってしまったのがほかならぬ自分にあることは分り切っていたがために、ユーノの心は自分の力では溶かすことが出来ない八方ふさがりの状態に来ていた。

「だけどパパはそれ以上に・・・！！それ以上の人を数えきれないほど救って来た・・・！！守って来たんだよ・・・！！魔導虚事件も、カトゥーン事件も、そしてオグドモン事件！全部全部・・・パパのお陰でこの世界は救われたようなものなんだよ！！」

「ヴィヴィオ・・・・・・」

二人は張り裂ける想いを声に出してユーノの事を弁護する娘の発言に、思わず胸が締め上げられる。

なのはにしても、フェイトにしてもユーノがどれだけ他人おもいな、悪く言えばお人好し過ぎるユーノの事を救ってあげたいと思っているが、現実は言葉で言うほど簡単でない。

と言うのも、最近になってなのははユーノに傷ついてほしくないという欲望と並行して、彼のやりたいようにさせたあげたいという欲望が生まれて来、がんとして言葉に言えなくなっていたのだ。

でもだからと言って彼女は嘗てフェイトにしたように戦いを通じて、彼に想いを伝えるような真似はしない。

それは一重に今までの信頼関係が築き上げてきた強固な絆ゆえの事なのだ。

だがヴィヴィオの想いを聞いては、流石にらちが明かないとも思い出す。

そして、考えた末なのはは実に彼女らしい解決策を思いついた。

「・・・ねぇヴィヴィオ。ひとつ私から提案があるんだけど」

「え」

「私たち以上の頑固者のユーノ君に私達の一途な気持ちを伝えるのは、言葉だけじゃ難しいと思うんだ。だから・・・――――ここは私

やヴィヴィオの得意な方法、全力全開で。ね♪」

「・・・そっか！その手があった！」

ヴィヴィオは母親の考えに気づくと、先ほどまでの暗い顔を一変させ嬉々とした表情を浮かべ、なのはも一様安どの顔を浮かべる。

と、その時横で聞いていたフェイトは冷静に考え青ざめた表情で言ってはいけないことを言ってしまう。

「え！？で、でもなのは。幾らなんでもヴィヴィオとユーノをやらせるなんて・・・！？第一、ユーノは私達が束になっても勝てないんだよ！？」

「う・・・それは確かにそうだ（今までの私とユーノ君との通算成績５５敗０勝・・・エースオブエースの私としてはこの成績は酷過ぎるというか、ユーノ君が無敵と言うか・・・／／／）。だ、だけどここで悩んでてもしょうがないよ。第一、ヴィヴィオも一人の力で勝てるなんて思ってる訳じゃないでしょ？」

「うん。だってパパって素手で太刀筋受け止めたり、岩とか鉄板とか砕いちゃうんでしょ・・・魔法も何もなしで・・・そんな規格外な人に一人では絶対勝てないよ。だからこそ、みんなで・・・私達の力でパパに挑もうと思う！」

「みんなって・・・まさか・・・」

フェイトがそう言うと、ヴィヴィオは笑顔を浮かべ言う。

「うん。アイハルトさんやコロナたちにも協力してもらうの！多分、

面白がって乗ってくると思うんだ！」

「面白がるって・・・何か話がずれてる気がするけど・・・」

「本当に・・・大丈夫なのかな・・・」

些か不安が募るなのはとフェイト。

そんな二人を余所に、ヴィヴィオは早速アインハルトを含む仲良し五人組に連絡を入れ始めた。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

午後７時００分　アイハルト邸庭先

ヴィヴィオの親しい友人にして中等部に在籍している覇王インクヴァルトの末裔、アインハルト・ストラトスは今日も日課の正拳突きに励んでいた。

汗がしたたり落ちて練習に精を出していると、彼女のデバイスから外部通信を報せる音が鳴り響く。

「あれ？外部通信・・・・・ヴィヴィオさんから」

ヴィヴィオからの通信に意外そうな顔を浮かべるアインハルトだったが、特に気にせずディスプレイを表示する。

『もしもし、アインハルトさん？高町ヴィヴィオです』

「はい。こんばんはヴィヴィオさん。どうなさったんですか。こんな時間に？」

『はい。実はちょっと頼みがありまして』

「ヴィヴィオさんが頼み？私で良ければ是非お聞かせください！」

『ありがとうございます。実は、かくかく云々でして・・・・・・』

ヴィヴィオは事の成り行きを簡潔にアイハルトに伝えると、アインハルトは事情を聞き入れ快く了承する。

「そうなんですか。ヴィヴィオさんのお父様が・・・・・・分かりました。不肖アインハルト・ストラトス。お役にたてるかどうかはわかりませんが、全力にて承ります！」

『ありがとうございます！じゃあ、他の所にも連絡してみますね！今日は本当にありがとうございます！』

「いえいえ。私も楽しみですよ。ヴィヴィオさんのお父様と一戦交えるその時を」

本当のことを言うと、単にユーノと闘いたいという気もあったということはヴィヴィオには内緒にするアインハルトであった。

その後ヴィヴィオはリオ、コロナ、ミツオ、バウラの順に連絡をしていき、話を聞いた四人はいずれもアインハルト同様首を縦に振った。

「うんうん。な～るへそ！よし！そう言う事なら私もやるやる！前にヴィヴィオのお父さんには助けられたことあるし、何より一度でいいから次元世界最強の男の強さを見て見たかったんだ！」

「珍しくあなたが相談してくると思えば、そんな簡単な事でしたか。私は構いませんわ。ただ、個人的には私はスドウ君と一緒なのがなんですが・・・」

「僕なんかで良かったら遠慮なく言ってくれたまえ！ちょうど最新式の武装で逸早く戦いたいと思っていたところさ！」

「おお！俺もすっげー燃えて来た！やろうぜみんなで！分からず屋のヴィヴィオの父ちゃんの鼻、へし折ってやろうぜ！」

通信が終わると、ヴィヴィオはにこやかな表情でそのことをなのは達に話し、二人は思わず驚きの表情となった。

「え！みんな誘っちゃったの！？」

「うん♪戦力的には申し分なし！ＤＳＡＡ主要メンバーで構成されたこの六人でなら何となるよ。それでも私達の実力とパパのそれを比較したらまさしく天と地ほどだけど・・・・・・」

「う・・・やる前からその調子で・・・大丈夫なの？」

「だって・・・ママ達でさえボコボコにしちゃうぐらいで、あの一護さんですら敵に回したくないって言うだけの強さなんでしょ。今のパパって・・・・・・」

「そうだね・・・・・・私、最近『魔王』とか『泣きべそ女』って

レッテル張られてるせいで、この小説の世間じゃ全然『エースオブエース』なんて言われなくなったし・・・私自身元々運動全般が苦手だから・・・トレーニングしたってユーノ君には敵わないし・・・」

二人はベッドの片隅で体を縮こまらせると、思わずネガティブトークションを開催し根暗な気持ちとなってしまうと、見ていたフェイトは慌てて励ましの言葉をかける。

「な、なのは・・・ヴィヴィオもネガティブトークは止めようよ。取りあえず今日は寝よう。明日の模擬戦に備えて」

本当にこんな事で明日の運命の模擬戦は上手くいくのであろうか？

心配になってきた作者です――――――

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

翌日。

今日は土曜日の為、ヴィヴィオ達はお昼で帰ってきている。

予めヴィヴィオは集まったメンバーと打ち合わせをした後、ユーノを呼び寄せる旨をフェイトに伝えると、フェイトは何も知らないユーノを連れ出し訓練場へと向かわせた。

万が一の事も考えて、フェイトはユーノに気づかれないよう目隠しをさせて歩かせ、その後ろからは話を聞いていたユーノスを始めと

する前線メンバー一同が一緒に歩いていた。

「ねぇフェイトもみんなも、いきなりどうしたって言うの？人に目隠しなんてして・・・」

「ちょっとユーノに見てもらいたいものがあってね。ささ、こっちだよ」

「見てもらいたいもの・・・？」

ユーノは言われるがままに目隠しをされた状態で歩きつづけ、その後ろでなのはは恋次や他の面々に念話で手順を確認する。

「（分かってますね）」

「（ああ。手筈通りこっちは何も手出しはしねぇ。じっくり父と娘のやりとりを見させてもらうことにするぜ）」

「（果たして、ユーノの心は少しは変わるのだろうか？）」

「（どうだろうね。店長も店長でかなり難しいから。だけど、変わる切っ掛けがあるとすればこれぐらいしかないんじゃないの？）」

「（そうだな。）」

全員もまた少しでもいいからユーノの力になりたいという気持ちは同じだった。

長い時間を過ごすうちに芽生えていたユーノへの想いは、言わずと知れて固く強いモノへと変わっていたのだ。

そして、今今回のやり取りを通してユーノが善い方に変わるかもしれないと聞かされれば、全員は快くそれに協力するのが筋だろう。

暫く歩いていると、唐突に全員の足が止まり目隠しをされていたユーノは漸く視界を遮るものを外す許可が下りる。

「はい。ご到着と♪もうとっていいよ」

「ん？」

ユーノが目隠しを外した直後、目の前に広がっていたのはユーノと模擬戦を行うために大人モードとなったヴィヴィオやリオ、アインハルトにバウラ、ミツオ、コロナの六人組だった。

ヴィヴィオは笑顔でユーノを迎えると、全員で挨拶をする。

「へへ。待ってたよパパ」

「あの、どうも。こんにちはヴィヴィオさんのお父様！」

「「「「今日はよろしくお願いします！」」」」

ユーノは何も知らされていない為、思わずキョトンとした顔を浮かべて、頭の上にはカラスが飛び交う。

「へ・・・・・・何・・・・・・どういうことかなこれは？」

と、その時後ろの方で待機していたなのはが神妙な顔でユーノに話しかける。

「ユーノ君。ちょっとヴィヴィオの話、聞いてくれるかな？」

「え」

すると、今度はヴィヴィオが改まった表情で語り出す。

「パパ。余計なお節介かもしれないけど、これだけは言わせて。パパは・・・・・パパは自分の事まるで見ていないよ！」

「！」

「私やママ達が幾ら言っても、全部右から左に受け流して聞く耳すら持ってくれない・・・／／／自分一人で何でも背負い込もうとして、それで無茶して無理もして・・・まるでこっちの気持ちを理解しようとも、況して自分の事を理解しようなんてこれっぽちも思ってない！！」

「・・・・・・」

「どうせこんな事言葉で言っても、パパはまた右から左に受け流すことは分かりきってる。だったら、言葉じゃなくて心でそれを分かって貰いたい！」

「え・・・」

そう言うと、呆然とするユーノの前でヴィヴィオは戦う構えを取って真剣な眼差しの五人と共に臨戦態勢となる。

「高町なのは、そしてユーノ・スクライアが娘、高町ヴィヴィオは

ここに宣言します！たった今より、私達六人はあなたに決闘を申し込みます！」

「へ・・・・・・？」

「全力全開の力で、私はパパのその固く閉ざされた自らの心をこじ開けてみせます！」

娘から発せられたあまりに予想外なその言葉を聞いたユーノは、長い間を置いてから六課中に響き渡るほどの大声を上げる。

「えええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」

そして、一旦頭を整理してから動揺を隠し切れない表情を浮かべ言う。

「ちょっと！！何！？何言ってるのさいきなり！？僕とヴィヴィオが・・・いや！みんなが僕と闘う！？ちょっと藪から棒になんで・・・！？」

すると、ここで口を挟んできたのは部隊長のはやてだ。

「ユーノくん。これはもう決定事項なんや。大人しくこの申し入れを受け入れない限り、今後一切グリードとヤミー退治は禁止や」

「な！何を言ってるんだ君は！？そんな無茶苦茶な！」

ユーノははやての無理難題な要求に言葉を挟むが、はやての言葉に便乗してきたのはあのユーノスだった。

「ユーノ。俺達からも頼む。戦ってやってくれないか、ヴィヴィオと？」

「ユーノス元帥まで・・・どうして！？」

「お前の事を思って、ヴィヴィオは今自分なりに想いを伝える方法を模索し、たどり着いた答えがそれなんだ。父として、娘の想いに応えるのが務めじゃないのか？それとも、お前はそれすら出来ぬぐらいの生半可な気持ちの男だったか」

「・・・！」

ユーノスの言葉に衝撃を受けるユーノ。

後ろの方で見ていた他の面々もそんな躊躇いを見せるユーノの背中を押してくる。

「ユーノ様。ヴィヴィオちゃんのお気持ち、真正面からぶつかってくださいな。全ては、あなたの為なのですわ」

「ユーノさん。」

「店長」

「ユーノ君・・・お願い」

「・・・・・・――――――」

ユーノは仲間の促しを聞いた後、険しい表情を浮かべて暫く黙りこんだ。

緊迫した空気が張り詰める中、心の中で不安を感じ始めるヴィヴィオ達六人。

「（パパ・・・――）」

「（やっぱり駄目なんでしょうか・・・――）」

と、その時長い沈黙を破って遂にユーノが口を開く。

「――――――――もしも、ヴィヴィオ達が僕に勝てたなら、僕はもう少し自分の事をちゃんと見れる努力もするし、無茶も控えるようにしよう。」

「あ！それじゃ・・・」

「いいよ。受けて立つ。ただし、やるからには僕を殺すつもりで来ない駄目だよ」

「！」

「言っておくけど、元・翡翠の魔導死神・・・現・絆の完現術士のユーノ・スクライアはみんなが思ってる以上に化物だから」

殺すという単語、そして身を心も凍りつくような鋭い表情のユーノに根源的な恐怖を覚えるヴィヴィオ達。

それでもヴィヴィオは父に想いを伝えるという一念から恐怖を断ち切り、拳を強く握りしめて返事をする。

「・・・わかった。頑張るよ」

そんなヴィヴィオとは裏腹に、純粋に恐怖で涙が止まらなくなっていたのほあミツオだった。

「こ・・・怖いよバウラ～～～！！」

「やる前から何泣いてんだよ！こうなったらやるっきゃねぇ！」

では、決闘のルールに関して戦技教官高町なのはより説明をお願いします。

「じゃあ、今回の模擬戦のルールを説明するね。ヴィヴィオ達子供チーム六人は時間無制限で目の前にいるユーノ君をどんな方法でもいいから、決まった方法で撃墜させることが出来れば勝利。ユーノ君はヴィヴィオ達全員を戦闘不能に出来れば勝利。ただし、それでも戦力の差は火を見るより明らかだから、ユーノ君には少しハンデをつけさせてもらうよ」

「ハンデ？」

「うん。先ずはその逆刃刀と木刀は没収。序にコンボの使用も禁止ね」

「はは。それはしないから大丈夫だよ。オッケー。と言うことは使っていいのは徒手空拳と普通の完現術ってとこかな？」

「そうだね。でもあんまりヴィヴィオ達のこと甘く見ない方がいいよ。これでもヴィヴィオ、私やユーノ君が思ってる以上に強いんだよ。勿論、他のみんなも」

「うん！毎日ノーヴェと一緒に鍛えたストライクアーツと魔法で、必ずユーノパパに勝つ！」

「「「「「「おう（はい）！」」」」」」

子どもらしい純粋な眼差しでユーノを見つめる六人に、思わず笑みを浮かべるユーノ。

「はは。じゃあ、是非とも僕を倒して貰おうかな」

ユーノはそう言うと、腰に差していた逆刃刀と木刀をなのは達預けると、最初の立ち位置となるポイントまで移動し、バトルフィールが形成されるのを待った。

今回シャーリー達が設置するバトルフィールドは、市街地と森林地帯が一体化した混合フィールドである。

他の前線メンバーが観覧席へと移動すると、バトル開始のその時を待った。

「バトルフィールド設置完了。結界も念入りに施しておきました」

「さぁて、あの子たちはどこまでユーノ先生とやれるのかしら」

「なんかドキドキするね」

「ヴィヴィオも何だかんだ言ってずうっと頑張ってますからね」

「僕はいいところまで行くと思いますけど」

「どうだかな。大体ハンデがあるようで全然ねぇぜあれじゃ。ユーノが完現術を使えるってだけでもう既に勝てる見込みは無しに等しいじゃねぇか？」

「そう言えばユーノって完現術を会得してからそんなに日が経ってませんよね」

「言っただろ。あいつは天性の完現術者の才能を秘めている。戦いを通して、その力を完璧にものにしているんだ。それこそ、完現術コンボを受け止めきれるほどにな」

「完現術もそうだが、スクライアの場合には先んじて読みの速さと思考の瞬発力、そして何よりも鍛え抜かれ精錬された肉体と言う武器がある。ハンデなど、あってもなくても相手にしづらい事には変わりない」

「う・・・もしかして教導隊のトップエリートさんでもユーノ様には勝てないのでは・・・」

「世界を超えて勝てる人がいるとすれば、山本総隊長ぐらいか？」

「更木隊長もいると思うけど・・・」

恋次と吉良はそんな事を考えながら、ビルの真下の方で軽い運動をするユーノの事を見つめ、次元世界最強と言われる彼が今回どの様な戦いを見せるのかをじっくり見守ることにした。

「ほんなら、準備はいいかみんな？」

「ああ」

「いつでもオーケーです！」

ユーノと子供たちの言葉がなのは達の耳に届く。

「それでは時間無制限一本勝負。全力全開でその想いをぶつけられるのは果たして・・・・・・レディー・・・」

なのはがそう言うと、ユーノとヴィヴィオ達は真剣そのものと言った表情を浮かべ、バトル開始を緊迫した雰囲気の中待ち、ついにそれが知らされる。

「ゴー！」

「みんな、行くよ！」

「「「「「はい（ええ）（おお）！」」」」」

ヴィヴィオは先頭に立って後ろの五人にそう言うと、真っ先にユーノの元へと飛び出し戦線攻撃を加え始める。

「先手必勝！」

ヴィヴィオは虹色の魔法陣を展開し、右腕に魔力を圧縮させ始めると、標的となったユーノは一切動かず鋭い眼で攻撃を窺う。

「・・・――――」

「一閃必中！ディバイン・・・・・・！！」

ヴィヴィオは狙いをユーノの中心に定めると、圧縮された魔力をスバルのように放出し、ノックダウンを狙った。

「バスター！」

虹色に輝くディバインバスターがユーノの正面から向けられ、なのは達がそれを目を鱗にして窺っていると、ユーノは表情を崩さず徐に指を鳴らす。

するとその途端、ユーノの完現術によって周囲の風の魂が使役されディバインバスターを遮る立派な障壁となった。

「！」

ヴィヴィオを始め、前線メンバーは目の色を変えて驚いた。

「な・・・！風が・・・障壁に！？」

「完現術によって、周囲の風の魂を使役し障壁としたのか。どうやらユーノは俺達の予測も何もかもを大きく飛び越えた完現術者のようだな」

「やわや恐れ入ったぜ・・・」

「だけどちょっとだけ・・・私的には淋しいかも・・・・・・――――」

なのははあまりに突出したユーノの才能、高すぎる能力、そしてその性格から自分が彼に必要とされていないのではと言う錯覚をよく

起こしてしまうが、最近では特にそう感じやすくなってしまっている。

それはユーノが自分たちとはあまりに違いすぎる高みへと上り詰めているからだ。

そんな事を感じているのは勿論ヴィヴィオも同じだった。

ヴィヴィオはユーノと距離を置いて掻き消されていく自分のディバインバスターを見ながら心の中で言葉を吐く。

「（ディバインバスターを風の障壁で受け止めるなんて・・・・・・それだけじゃない。パパの場合もっと恐ろしいのはこの後・・・！）」

そう考えていた次の瞬間、ヴィヴィオの肩に柔かい手が触れる。

紛れもなく、ユーノの手だった。

「いい打撃だったよ。流石に若いだけあって成長が半端ない」

身を毛も凍るほど一瞬の出来事にヴィヴィオが振り返ったその瞬間、ユーノの凄まじい威力を秘めた蹴りがヴぃヴぃおの体に叩き込まれる。

「ぐあああ！」

ヴィヴィオは高所から地面へと叩きつけられ、地面に食い込み多量の土煙が発生し、なのは達は目を見開き唖然とした。

「ヴィヴィオ！」

「な、なんて蹴りだよ・・・！あれで本当に人間か！？」

目の前であっさりとヴィヴィオが強烈な一撃を受けた光景を見ると、待機していた残りの五人も青ざめた表情を浮かべ、ミツオに至っては完全に絶叫してしまっていた。

「いやだあああ！！僕やっぱりやめる！！！」

「まだまだこんなことで挫けてはいけません。この程度の事、想定の範囲内です。一か所に固まっていてはヴィヴィオさんのお父様の思う壺です。散開して体制を窺ってください！」

年長者であるアインハルトは冷静に四人にそう言うと、土煙の中のヴィヴィオの元と急ぎ、地面に食い込み既にボロボロ状態のヴィヴィオは思わず言う。

「いた～い・・・！想像はしてたけど、これほどまでとは・・・」

「ヴィヴィオさん！」

「アインハルトさん・・・！」

「大丈夫ですか？」

「はい・・・なんとか・・・」

無理に笑顔を作って痛みを堪えるヴィヴィオはアインハルトの手を借り立ち上がり、アインハルトは頭上に浮かぶユーノを仰ぎ見額に

汗をかく。

「流石ですね。ヴィヴィオさんに一撃でこれだけの深手を負わせるとは・・・」

「見て分かった通り、これがユーノパパの実力なんです。前になのはママとやったことのあるアインハルトさんなら予測はついていると思いますけど、あれでもパパは力の半分すら出していません。」

「はい。覚悟は出来ています。私が参ります」

「気を付けて・・・私もすぐに」

ヴィヴィオはアインハルトに一先ず任せると、コロナたちの元へと戻り、アインハルトは深呼吸をしてからユーノの元へと飛んでいき言葉を投げかける。

「ヴィヴィオさんのお父様」

「アインハルトさん」

「よろしければ、私とお手合わせ願いませんか？」

「不肖の身ではありますが、喜んで」

前になのはと模擬戦をしたことのあるアインハルトは同じようにそう要求すると、ユーノもまたその時のなのはのように言葉を返し、観覧していたなのは達は手に汗握る。

「アインハルトさんとユーノ君が」

「さぁて、覇王の末裔と最強の完現術者がどうでるか楽しみだな」

アインハルトは空中に浮遊したまま、構えを崩さずユーノを見つめるが全身からはいつも以上に発汗が目立ち始め、息もかなり荒くなっていた。

このことからアインハルトは純粋にユーノに対して、強者としての貫録と同時に純粋なる恐怖を感じていたのだ。

「（恐らく、下手な小技は一切効かない。だったら、ここは私の持つ全力を今目の前にいるヴィヴィオさんのお父様にぶつけるしか勝てる見込みはまずない。それ以上に勝てるなどとは思ってませんが、せめて手傷ぐらいは）」

そう考えると、アインハルトは意を決してユーノに向かっていく。

「行きます。覇王流！」

アインハルトは古代ベルカの魔法陣を展開し、己の得意とする魔法を発動するために魔力を練り上げていくとなのは達も思わず息を呑んだ。

「来る！」

「覇王流！断空拳！」

アインハルトは一気に駆け抜けていくと、ユーノの懐目掛けて自身の十八番でありあのなのはでさ恐れおののかせた覇王断空拳をユーノに叩きもうとする。

「覇王！断・空・拳！！！」

「（どうでる？受け止めるか。それとも）」

誰もがそう思いながらユーノの対応とアインハルトの攻撃の行く末を見守る。

「はあああああああああ！！」

アインハルトの強烈な拳がユーノに叩き込まれようとした直後、唐突にユーノが呟く。

「ごめんよ。その技は随分前に――――――」

そう言いながら、ユーノは一瞬にしてアインハルトの断空拳の威力を同質・同量の力で相殺させ、威力をかき消しその手を握りしめアインハルトは思わず言葉を失った。

「！」

「なのはとの模擬戦データを見て解析済みなんだ」

これにはなのは達を始め、子供チーム側も度胆をぬいてしまった。

「な！！」

「ま、マジ！」

「私でさえ受け止めることも出来なかったあれを！一瞬で・・・相

殺させた！？」

相当な驚きを見せる一同に対して、技を仕掛けた本人のアインハルトはそのリアクションすらも出来ぬほどに目の前の出来事が信じられずにいた。

「（え・・・相殺・・・断空拳は足先から練り上げた力を拳足に乗せて撃ち出すもの・・・それを一度見て解析済み・・・？しかし実際に一戦交えたのは今日が初めての筈・・・そんな一局の中で同質・同量の逆回転の力をぶつけて消滅させた・・・これだけの拳速・これだけの魔力圧に対してそれを瞬時に・・・容易く・・・！）」

あまりに突出し過ぎたユーノの力を目の前で体験したアインハルトは体を硬直させてしまう。

すると、そんなアインハルトの手を掴みながらユーノは彼女の懐に左手の指先を突き出す。

「ほら。戦いの最中のボーっとしないんだよ」

「！」

そう言うと、ユーノはデコピンの構えを取ってから徐に呟きデコピンを放つ。

「“鬼デコピン”」

その瞬間、指先に収束されたユーノの霊圧が、強力なデコピンとなったアインハルトの体に叩き込まれ、アインハルトは防御する暇もなくその一撃を受けてしまい、後ろに飛びえたつビルを次々となぎ

倒し吹き飛ばされた。

その光景を目の当たりにした一同は、愕然としてしまう。

「う・・・うそ・・・」

「デコピンだけで・・・あの威力・・・」

「無茶苦茶すぎるだろ・・・あれ・・・」

多くの物が場違いな攻撃力を持つユーノに恐怖を覚える中、一人妙に興奮した様子でリオが声を上げてきた。

「やっほーい！そうこなくちゃ！今度は私達がいくよ！コロナ！」

「は、はい」

少々不安でいっぱいのコロナはリオと共にユーノへと向かって行き、リオはユーノの正面に立つと春光拳独特の構えをとった。

「ヴィヴィオのお父さん。受けてみて。我が秘伝の春光拳の力！」

「うん。見せてくれないかな」

リオはユーノと向き合うと、それまでのにこやかな表情を一変、戦士の眼差しを浮かべると電気変換資質によって利き足と纏った雷を蹴りに乗せてユーノに仕掛ける。

「轟雷砲！！」

ユーノは瞬く間に向けられたその攻撃を研ぎ澄まされた反射神経と動体視力で回避する。

リオの放った轟雷を受けたビル群には威力のすさまじさを物語る陥没が出現し、ユーノ自身も相当驚いているとその瞬間頭上よりリオが再び蹴りの体制でユーノに攻撃を仕掛ける。

「！」

「続けて、絶招火雷砲（ぜっしょうからいほう）！！」

リオの放つこの魔法は、相手に対して放つ蹴りによって、変換資質による炎と電撃を与える攻撃で中国武術で言う八極拳に似ている。

ユーノも回避が間に合わずこのひとたまりもない一撃を直に浴びると、猛烈な勢いで爆風と爆音が発生し、なのは達は息を呑みバウラはガッツポーズをとる。

「おお！リオの奴、見せてくれたぜ！これが決まれば一撃必殺！」

だが、その直後縛う風の中より現れた完現術の力によって己のダメージをほぼゼロに保つことが出来たユーノ。

リオはこれを見ると、思わず舌打ちをしもう一度春光拳を駆使した激しい攻撃を仕掛けるが、そのすべてがユーノの持ち前の動体視力と反射神経で見切られてしまい、ヴィヴィオ達はその光景に愕然とする。

「この・・・！一発ぐらい当たって・・・！」

自棄になってしまったリオの攻撃はユーノにとって、回避することは勿論隙を見て反撃を加えることも可能だった。

思わずそんなリオの攻撃に笑みを浮かべると、リオの放った拳を見極め自分の手足をかけて攻撃の軸にする戦闘手段、白打の師・四楓院夜一の生み出した技をこの場で披露する。

「!?」

「“吊柿”」

リオはユーノの吊柿を受けると、地面に向かって墜落していくが、ギリギリのところで踏み止まることに成功。

「ぐっ」

実力差を重々わかった上でそれでも果敢に向かっていくリオはまさしく虎の如く。

だが、そんな子虎を諸共しない天を翔る龍と化しているユーノは向かって来たリオの腕を掴み、そのまま投げ回転を加えてリオを地面へ落下させる。

「“竹蜻蛉”」

「ぐあああああ!」

リオは悉く自分の力を逆に利用されてしまい、為す術もなく地面に落下していくと、ヴィヴィオは声を上げる。

「リオ！」

「フローター！」

その時、待機していたコロナが咄嗟に落ちてくるポイント目掛けてフローターを設置し、リオの窮地を救った。

「わっと！助かった」

リオはコロナの元へと駆け寄り彼女に感謝の意を表する。

そして、その後コロナは相変わらず点の上に君臨するユーノを見上げる。

「強敵ですわね。ならば」

〈Ｃｒｅａｔｉｏｎ〉

コロナはインテリジェントデバイス、ブラウゼルの補助を受け、足元にミッド式の魔法陣を展開し詠唱を口にする。

「“創主コロナと魔導器ブランゼルの名のもとに！”叩いて砕け『ゴライアス』！！」

すると、その瞬間召喚魔方陣より現れるコロナが得意とする魔力を込めた物質によりゴーレム・ゴライアスを創生する特殊魔法。

予想だに付かなかった魔法を前に、魔法に関してかなり慣れていた恋次達もそれなりに驚いていた。

「何だ・・・！あの巨人は！？」

「コロナちゃんは非常に珍しいゴーレム生成に長けた魔導師なんですよ。自分の魔力を練り合わせて形にし、それをゴーレムとして具現化させる」

「随分と高度なものだな」

「私じゃ絶対無理ですけど」

「ま。出来そうなのは店長ぐらいじゃねぇか」

そんな事を各々が呟く中で、召喚されたゴーレムはコロナの指示の元、両腕を突きだし攻撃を始める。

「ロケット・パンチ！」

その瞬間、ゴーレム・ゴライアスの両腕が飛び出しユーノに向けられる。

ユーノはパンチの機動を読み、軽々と回避するがコロナもこの程度の事は想定済み。

指を鳴らしてユーノを徹底的に追い回す。

「逃がしはしませんわ！」

すると、一直線に飛んでいたゴライアスの腕が軌道を変えて、ユーノの背後より襲い掛かってきた。

「！」

ユーノは徐々に速度を上げて自分を付け狙ってくるゴライアスのパンチを縦横無尽と動き回って回避していくが、一瞬を隙を突いたコロナがここで一発逆転のバインドを仕掛ける。

「ロックバインド！」

ユーノの身体は突如として現れたコロナのバインドにより頑丈に固定され、ユーノは思わず表情を一変させ動けなくなる。

「よし！いける！」

「これまでです！」

ミツオとコロナは動けなくなったユーノに勝利を確信するが、直後険しい顔つきでバウラは呟く。

「いや、甘いな」

バウラの言葉を危惧した一同はユーノの背後より飛んでくるゴライアスのパンチを見つめる。

ユーノはゴライアスのパンチがクリーンヒットすると、想像以上の威力に体中が悲鳴を上げ身体は大きく反り返る。

「ぶっ・・・！」

「やっ・・・！」

ヴィヴィオはいけると思い拳に力を込めるが、直後ユーノの身体が風船のように破裂し、跡形もなくなった。

「「「「「「「「な！」」」」」」」」

あまりの光景に信じられない表情を浮かべる子供チームに対して、観覧席の方で見物していたなのは達の反応はそれよりはだいぶ落ち着いていた。

「あれって・・・！」

「ケータイ用義骸!?」

すると、暫くしてビルの中より現れるユーノ・スクライアの本体。唖然とする一同を前にユーノは懐からいくつかの携帯用義外を取出し、呟く。

「なのはも不注意だね。僕からこれを取り上げないなんて」

「そ、そんな・・・」

コロナは自分の仕掛けた技と作戦がこうも容易く破られてしまったことにショックを隠し切れないでいると同時に、自分の頭の構造を遥かに凌ぐそれはまさしく神にも等しいユーノの行動の瞬発力に恐れおののく。

「悪いけどそのゴーレム。潰させてもらうよ」

ユーノはそう言うと、利き手に完現術で作り出した霊圧の剣を装備

し、その剣を軽く振り回して背後に佇むビル群を一太刀で薙ぎ払い、倒壊させる様を見させてヴィヴィオ達を脅すと、ゴライアスへと近づき目にも止まらぬ早さで一刀両断。

「顎割」

その瞬間、ゴライアスの体が真っ二つに別れ、コロナ自慢のゴーレムはものの見事に消滅し、コロナはあまりの衝撃に絶句する。

「・・・え・・・」

「ゴーレムが・・・」

「一撃で・・・・・・潰された・・・・・・！」

ヴィヴィオ達女性陣は自分たちが考えている以上に強い、先刻ユーノが言っていたようにバケモノと言える実力に徐々に繊維を削がれていくが、ここで動きを見せるのは男の子であるバウラと恐怖に怯え今にも失禁寸前のミツオだった。

「まだだっ！！ミツオ！！」

「ええ！！やっぱりやるの！！！」

バウラに半ば強要されたミツオは涙ながらにその場から飛び出し、地上に佇むユーノに向かって二人の攻撃が炸裂する。

「トリケラバンカー！」

「ゴブリンストライク／／／」

パワーに特化したバウラのトリケラバンカーと、最新技術を駆使したミドルレンジに長けたミツオのゴブリンストライクが向けられた瞬間、ユーノは手を目の前に翳し笑みを浮かべる。

「おっと♪」

その瞬間、魔力素が使役されユーノ自慢の鉄壁の防御が展開される。

バウラはあまりに固すぎるユーノの防御力にまるで手も足も出なかった。

「く・・・!!固てぇ・・・!!」

「攻撃が通らないよ・・・!!」

ユーノはそんな二人の腕を掴むと、勢いよくビルの方へと投げつけた。

「ふん!」

「「うわあああああ!」」

二人が飛ばされると、既にボロボロの状態であるにも関わらずアインハルトとヴィヴィオは一緒に向かっていき攻撃を仕掛ける。

「覇王流!覇王空破断!!」

「アクセルスマッシュ!」

アインハルトが仕掛けた衝撃波を飛ばして相手を吹き飛ばす覇王空破断と、ヴィヴィオが彼女との陸戦試合の最後に放ったフィニッシュブロー、アクセルスマッシュが同時に向けられる。

ユーノは素早く二人の攻撃を見極め、衝突を免れるとアインハルトは踵を返してユーノの頭上から回り込んで蹴り技を仕掛ける。

「はあああああ！」

と、その時ユーノはアインハルトの蹴り技を手と足で受け止め、一気に体勢を崩させ反撃を繰り出す。

「“滝鯉（たきごい）”」

「ぐっは！」

ユーノの反撃をものの見事に食らった瞬間、アインハルトは凄まじい勢いで地面に叩きつけられ、その衝撃は防護服に身を包んでいなければ１００キロ近くに及ぶものだった。

「アインハルトさん！」

アインハルトの元へと急ぐヴィヴィオだが、直後ユーノが隙を見せたヴィヴィオの体にチェーンバインドを放つ。

「チェーンバインド」

「！」

ヴィヴィオの体がなのはにその技を教えたユーノの鎖にしっかりと

絡みとられ、必死に抵抗しても体から鎖は離れずずるずると引きずり込まれていくと、ユーノは動けないヴィヴィオの背中に近づき人差し指と中指を相手の背中に付けり。

「“撞指（つきゆび）”」

撞指を喰らった瞬間、ヴィヴィオは軽く突いたものとは思えないぐらいの勢いで遠くへ弾き飛ばされる。

「うわあああああ！」

ヴィヴィオがビルの中へと吹き飛ばされると、漸く復活を遂げた満身創痍のバウラとミツオが再び動きだす。

「まだまだ！！」

「怖いよ！！！パパ！！！！」

既に戦意喪失のミツオと、諦めるということを知らないバウラの燃える闘志。

ユーノは二人が向かって来るに乗じて、完現術の力をふんだん発動させ、周囲の魔力素の魂を掻き集め使役すると、対ゼムナス戦で使用したハンドカフバインドを大量に投げつける。

「ハンドカフバインド・フルコース」

無数とも言えるほどに飛んでくるハンドカフバインドの嵐に、バウラ達は戸惑い、そして体中を大小さまざまな手錠に嵌められる。

「な、なんだこりゃ！？」

「動けない！」

すると、これを見たリオがすかさず救援へと向かう。

「バウラ！待ってなさい！」

リオは魔力を全身から絞り出すと、ユーノの目の前に強力な攻撃力を誇る炎と電気の二頭の龍（炎龍・雷龍）を召喚する。

「双龍円舞（そうりゅうえんぶ）！」

召喚に成功したリオは飛んでくるハンドカフバインドを二体の龍の力で悉く破壊していき、一直線にユーノ目掛けて向かっていく。

「どらあああああああ！！！」

ユーノはこれを見ると冷静に印を結び始め、完現術の力と己が魔導死神だった頃の経験を活かして、嘗て自分が使用していた死神の高等呪術・鬼道を完現術の力で代用し発動。

「――――完現術式・破道の八十二」

「！」

「『爆水弾』」

ユーノはそう言った瞬間、地面に手を叩きつける。

すると、その途端空気に充満する水素と言う水素が酸素と結合し巨大な大津波と化していくと、迫りくるリオの二体の龍を飲み込み消滅させる。

恋次やなのは達は鬼道でさえも完現術で代用させる彼の咄嗟の行動力と研ぎ澄まされた完現術における才能に目を奪われる。

「あ、あいつ！完現術で鬼道を！？」

「なんて奴だ・・・」

その後も、事態は一向に好転せず子供ちーちの方に敗色が濃い状況が続き、コロナが召喚した新たなゴーレムの放つ拳がユーノに向けられるも。

「ギガントナックル！」

ユーノはそれを軽々と掌で受け止め、左手を突き立て強烈な拳を叩きこむ。

「一骨」

一年間のブランクで山籠もりと素手のままでの崖の岩削りによってなしえた強靭な破壊力を秘めたその拳は魔導死神だった当初のユーノのそれと大差はなく、コロナの召喚したゴーレムは呆気なく粉砕されてしまった。

「な・・・！」

コロナを始め、限界ギリギリに状態にまで陥っていたヴィヴィオ達

子供チームは対抗する術を失くしてしまっていた。

これを見て、ユーノも決着をつけるつもりだったのか、再び印を結んで取って置きのものを召喚させる。

「完現術式・チェーンディストラクションドラゴン！」

すると、その瞬間地面が大きく揺れ始め、何事かと思えばユーノの周囲より現れる完現術の力によって形成されたチェーンバインドで出来上がった五体の竜。

「こ、これは・・・！」

「あああああ！！！！！殺される！！！！！」

眼を見開く子供たちに、チェーンドラゴンたちは一斉に襲い掛かり、ヴィヴィオ以外の子どもたちはその餌食となってしまい体を拘束されるが、ヴィヴィオ一人だけは向かって来た竜の一撃を見極め回避することに成功する。

「そうは・・・いかない！！」

回避に成功したヴィヴィオは、その場から飛び出し竜を操るユーノの懐へと飛び込んでいく。

「ヴィヴィオ！」

「何をする気ですか！？」

「はあああああああああああ！！！！」

驚き返る一同とは裏腹に、ヴィヴィオは真っ直ぐユーノの元へと飛び込んでいき、チェーンドラゴンの攻撃を諸共せずに只管に突っ込んでいくと、その様を見ていたなのはやユーノスはヴィヴィオの行動の真意に勘付いた。

「（敢えて懐に飛び込んでいった・・・・・そうか。そう言うことだね）」

「正解だな。ああすれば、下手に怪我をすることもない。寧ろユーノに接近できる最大のチャンスだ」

ヴィヴィオの頭にはこの時、何としても自分の想いをユーノに伝えるという明確な意思があり、心の中で何度も何度も自分に言い聞かせるようにこう言った。

「（絶対パパに伝えるんだ！固く閉ざされたパパ自身を見つめるための心を！他人ばかり目を向ける優しくて、暖かい、だけどいつも寂しそうな笑みを浮かべるパパに、私とみんなの想いを！！）」

そんな直向きな、だけど濁り気のない純粋な瞳を宿す娘の姿にユーノは黙して何も駆らずその場に立ち尽くす。

「・・・――――」

ユーノの行動を警戒するヴィヴィオだったが、最早後手に回ることなどありえなかった。

「クリス！全力全開で行くよ！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

ヴィヴィオは加速をつけると、チェーンドラゴンたちの攻撃を躱しながら無数の打撃を打ち込んでから砲撃でフィニッシュする大技、セイクリッドブレイザーを渾身の思いで目の前のユーノに叩き込む。

「受けてみて！これが私の全力全開！一閃必中・・・！セイクリッド・・・・・ブレイザー！！！！！！！！！！」

娘の父への想いが籠ったユーノに叩き込まれる直前、ユーノは閉ざしていた口を徐に開くかと思えば、あまりに予想外な言葉が聞こえてきた。

「――――――ありがとう。ヴィヴィオ」

「え」

一瞬耳を疑ったヴィヴィオ。

ユーノは拳が懐に飛び込む直前で護符を取出し、凄まじい雷を発生させる。

「雷帝招来。」

言霊を口にした瞬間巻き起こる六課中に響き渡る雷鳴とまばゆい光。

観覧席のなのは達はあまりの光景に目を逸らさざるを得なくなる。

「ぐ！！！どうなってんだ！？」

「眩しくて目が開けられない！！」

雷鳴は暫くの間続き、見方を変えればそれはまるで龍の嘶き如く凄まじいものであったことは間違いない。

雷鳴が収まり、爆風が徐々に回復していくとなのは達は目の前に映ってきた光景に唖然とした。

「あ！」

爆風が晴れた先に現れたのは、魔力も体力も何もかもを使い果たし、全身ボロボロの状態となって仰向けに倒れる大人モードのヴィヴィオと、アインハルトたち残りの五人、そしてそれを圧倒する無傷で佇むユーノでであった。

「う・・・・・・」

「「「「「ぐ・・・・・・」」」」」

前線メンバー一同は予想はしていたものの、実際にこの目で御目にかかったときは息を呑んでしまった。

「ぜ・・・全滅・・・・・・」

「ユーノは！？――――――む・・・無傷・・・・・・！」

「これは・・・・・誰が見ても完全勝利やな」

「は・・・ははは・・・藍染みたいな戦いだったぜ・・・」

恋次が思わずそう口にすると、吉良もルキアもそして白鳥や小鳥遊も思わず苦い顔を浮かべ、そう思わざるを得なくなったそうな。

そして、戦いに敗れ去ったヴィヴィオはボロボロの体を徐に起こすと、無言のまま近づいてくるユーノを見つめる。

「う・・・・・・ぱ・・・パパ・・・・・・」

アインハルトたちも何とか体を起こすと、自分たちの想像をはるかに超えた先に佇む次元世界最強の男の強さに最早勝てないと悟ってしまった。

「つ・・・強いとか・・・そんなレベルじゃ・・・ありませんよ・・・これは・・・」

「次元が・・・違う・・・」

「もう・・・動けない・・・・・・」

ヴィヴィオは想いを通すことの出来なかった自分の非力さを心底呪いながら、涙目を浮かべて拳を強く握りしめる。

「（やっぱり・・・私の力じゃパパの心は・・・・・・／／／）」

と、その時不意にユーノの手が伸びて来たかと思えばヴィヴィオはユーノの柔かい笑みを見つめこの言葉を聞いた。

「立てる、ヴィヴィオ？」

「え・・・」

思わず呆気にとられるヴィヴィオだが、その後すぐにユーノは何時もの表情で意外な事を口にしてきた。

「みんなやヴィヴィオの気持ち、ちゃんと伝わってるよ。ありがとう。そんなに僕の事想ってくれて」

「！」

「実を言うとさ、薄々こうなるじゃないかってあの後一護さんとの通信で話してたんだよ。僕は他人に迷惑をかけるのは一番嫌いなんだけど、却ってそれが周りを悲しませているんだって、一護さんに言われたときはショックだったよ」

「パパ・・・」

ユーノは驚き返るヴィヴィオの手を握りしめ、ゆっくりと体を起こすと背中を向け、ため息をつきながら更に言う。

「全く・・・大切な人を守るどころか、逆に傷つけてしまっているとは・・・何とも嘆かわしいよ。手が届くのに伸ばさなかったら後悔するって・・・一番手が届く距離にいたのは他ならぬここいるヴィヴィオの方だった」

「！」

思わず目を見開き涙を浮かべるヴィヴィオ。

ユーノは振り返ると、ヴィヴィオの申し訳なさそうな顔でこう言った。

「ごめんよ、辛い想いをさせて。口先だけで全然根拠のない言葉にも聞こえるかもしれないけど、これだけは言わせて欲しい。少しずつだけど・・・少しずつ、自分の事を顧みる努力もする。一人で抱え込むのもなるべく少なくする。だから、僕の前でもうあんな涙を流したりしないでくれないかな」

「パパ／／／うん・・・／／／」

ヴィヴィオは思わぬ形で自分の想いが父の心に届いたことに涙すると、そのままユーノの胸の中へと飛び込み嬉し涙を流し、ユーノはそんなヴィヴィオの事を優しく抱擁した。

一同は問題が完結したことに安堵の表情を浮かべ、なのはは感動のあまり涙が止まらなくなる。

「ヴィヴィオ・・・／／／ユーノ君・・・／／／」

「どうやら、やってみて損はなかったようだな」

「ああ。これで少しはユーノも変わってくれるでしょうね」

「まだ安心はできねぇが、着実に少しずつ変わり始めてる気がする」

「あいつにも、漸く父親としての面影が見え始めたな」

「ふん。何を言っている。最初からそうだったぞ」

意外にもこの台詞はザフィーラが口にした。

兎に角、何はともあれ一つの問題が解決したことで親子の絆は確かに固く結ばれることとなった。

アインハルトたちはボロボロとなった我が身を引きずりながら二人の元へと近づく。

「ヴィヴィオさん、良かったですね」

「はい！」

「ヴィヴィオの父ちゃんマジ強えっすね！今度俺にもその戦い方教えてくださいよ！」

「い、いやいや！！ダメダメ！僕のは殺戮中心で人に教えるようなものじゃないから！！」

ユーノはそう言って不満げな声を上げるバウラにそう言うと、思わず聞いていた一同は心の底から笑みを浮かべ、そんな何気ない会話の中でもユーノスは確かに発見できた。

何の罪悪感や責任感にもとらわれず、取り繕わず巣の笑顔を浮かべるユーノの姿を。

ユーノスはそんなユーノを見付けることが出来ると、自分もまた安堵の笑みを浮かべひとり言のように呟いた。

「――――――人の笑顔は、何よりも強いな」

みなさんは、自分を愛するということは何だと思いますか？

それは恐らくこういう事なのではないでしょうか。

「自分を愛する」ということは、その人がその人自身で受けとれる「愛」を、あたりまえに「受けとる」ということなのかもしれませんね。

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はＤＳＡＡに関して教えましょう♪」

「『Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ　Ｓｐｏｒｔｓ　Ａｃｔｉｖｉｔｙ　Ａｓｓｏｃｉａｔｉｏｎ』の略で、日本語表記では『公式魔法戦競技会』となる。全管理世界で１０歳から１９歳まで出場資格がある魔法戦競技だ」

「魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄではヴィヴィオ達が出場し、白熱した魔法バトルを繰り広げているね。これからも目が離せないぞ♪」

と、そこへ全身筋肉痛のヴィヴィオが現れる。

ヴィ「う～～それよりパパ！もうちょっと手加減してよ！お陰で背中も足も全身ひりひりするんだけど～～」

ユ「ああ・・・ごめんごめん。つい本気出し過ぎたかな」

ヴィ「本気って・・・パパの本気はビルとか壊すぐらいでしょ！？それこそ死神さんで言う藍染レベルのスッゴイ戦い」

ユ「まぁ確かに本気でやればそれぐらいの被害は出るかな・・・でも僕なんてまだましな方だと思うよ。山本総隊長なんか、刀の一振りでまるまる街全てを灰にしちゃう恐ろしいおじいさんなんだから」

ヴィ「ええ！そ、そうなの！？」

ユ「他にも、狛村隊長の卍解は山みたいに大きいし、朽木隊長の千本桜景厳は目に映るもの全て切り刻んじゃう・・・魔導師あいてじゃあの人達には敵わないって」

ヴィ「そ、そんな人とお友達なんでしょ・・・パパは・・・」

ユ「ま、まぁね・・・・・・」

内心色々と複雑なユーノであった。

魔導師図鑑ハイパー！

ある日、ミッド市街地へ向けて車を走らせるユーノと、助手席に搭乗したなのは。

な「ごめんねユーノ君。車出して貰っちゃって。」

ユ「なにいいって。こうして二人でドライブなんてそうあるものじゃないし。僕は新鮮だよ」

な「そうだね♪それにしてもユーノ君って随分と色んな乗り物動かしてるよね。私はほとんどそう言うのには縁がないから」

ユ「なのはだって車ぐらい運転できるでしょ？」

な「そりゃ航空基地に行くときには使うけど、それでもごく一般的な普通免許だよ。ユーノ君はそれ以外にもバイクとか大型自動車免許とかあるでしょ。もしかして、ヘリパイロットの免許とかも持っ

てたりして♪」

冗談気味にそう言った瞬間、ユーノは平然と答える。

ユ「持ってるよ。車両系建設機械運転者の資格とか、危険物取扱処理、あとは剣道四段とか使えそうなものは色々ね♪ははははは♪」

それを聞いた途端、なのはは遠すぎるユーノとの距離に涙が零れる。

な「（駄目だ～～～全然追いつきそうにない～～～／／／）」

次回予告

次～回、第１６４話・・・・・・

暁「ちょっとした冒険だな。」

ユ「“サージェス”のことかい？」

ヴィ「お前の言う冒険ってのも意味ねぇな」

轟轟と冒険者と躍る心

ヴィ「見せてやるぜ。私らの流儀をな！」

轟轟と冒険者と躍る心（前書き）

暁「無いものを嘆いても仕方ない。今あるものを最大限に活かす事を考えろ。」

轟轟と冒険者と躍る心

いつの時代も、未知の世界を求めて旅立つ者がいる。

人は彼らを“冒険者”と呼んだ！

サージェス財団は、世界各地で失われかけている貴重な宝を集める民間団体だ。

宝とは、“古代文明の遺物”。

沈没船や秘境に残された財宝、そして絶滅寸前の動物までさまざまである。

中でも、現代の科学水準を遥かに超えた危険な力を持つ秘法を「プレシャス」と呼ぶ。

サージェスは、プレシャスを見つけ出し守り抜く秘密チームを組織した。

そして今、全く異なる二つの遺失物管理のプロフェッショナルが、相対する！

〈聖王教会Ｓｉｄｅ〉

ミッドチルダ北部

ベルカ自治領「聖王教会」大聖堂

午前１０時：００分

徐々に冬の寒さも退きつつある季節の変わり目、今日も聖王教会には多くの参拝者が立ち寄り、聖王の御加護を信じている。

「いや～～～今日もいい天気ですね」

「え～え。巡礼日和ですね～これも、聖王の御加護ですね」

「いや～全くですな～」

比較的平和なここ聖王教会は、多くの教会騎士団が所属し、時空管理局本局の一機関としての機能を全うしている。

そんな聖王教会に所属する騎士の中に、嘗てのＪＳ事件でシスター、シャッハ・ヌエラに保護され彼女のもとで精進の日々を過ごすのが、彼女である。

「ふぁ～～～」

ナンバーズの６番目、インフィーレントスキル「ディープダイバー」を保有する戦闘機人、現在シスター見習いの、セインである。

セインは周囲からはシスターセインと呼ばれているが、その割には全く以てシスターっぽい振る舞いは見られず、こうして人目を憚らず欠伸をすることも多い。

そんなセインに呆れつつも、お目付け役であり保護者的な存在のシャッハは毅然とした態度で臨む。

「セイン。お止めなさい。まだ昼間だというのに。」

「だって眠いもんは眠いんだもん～～～」

子どものような言動でそのように返すセイン。

シャッハの悩みの種は尽きる事は無く、彼女が寝不足な理由をこう推理する。

「やれやれ。どうせ夜遅くまで、シェンテと模擬戦でもしていたのでしょう」

「え！ど、どうしてわかるの！？」

彼女の鋭い推理に思わず顔を引きつるセイン。

ちなみに、シャンテとはシャッハの愛弟子で、セインとは同期で聖王教会本部に入った修道騎士、シェンテ・アピニオンのことで、セイン同様シャッハ曰く礼節面に問題があるシスターである。

「あなた方の考えなど、分からない訳もありません。ほら、シャキッとしなさい。これでもあなたは聖王教会に勤める由緒あるシスターなのですから」

「あはは・・・分かってますって。全く・・・イチイチネチネチ細かいんだから・・・」

「何か言いましたか？」

「い、いえ！なんでもありません／／／」

「そう。」

「（やっぱシャッハって地獄耳・・・／／／）」

シャッハの恐るべき地獄耳に、思わず身震いするセインなのであっ

た。

二人は廊下を暫く歩き、目的のカリムの部屋へとやって来ると扉をノックし中へと入る。

「失礼します」

シャッハとセインが中に入って来ると、カリムは作業を中断して顔を合わせる。

「ああ、シャッハ。セインも一緒だったのね」

「ご休憩の時間ですよね。お茶をお持ちいたしました」

「今日のリーフはオットーが選んでくれたんですよ。」

「そう。それは楽しみだわ。ありがとう、セイン」

「どういたしましてと♪」

セインは満足げな様子でカリムに紅茶の差し入れを出すと、カリムも微笑み出された紅茶を啜り始める。

シャッハはそんなカリムに次のように尋ねる。

「先ほどの緊急連絡は、何か荒事でしょうか？」

「ひょっとして事件とか？」

「ああ・・・そう言う事じゃないんだけど――――――」

カリムはカップをコースターに置くと、連絡を受けたその時の内容を画面に表示し、それを見たシャッハとセインは納得の表情を浮かべる。

「ああ・・・」

「そう言うこと」

「うん。“ロストロギア”発見の報告。」

「しかも異世界、それも管理外の発見で・・・――」

「本局の方から回ってきた依頼なんだけどね・・・遺失物管理下の機動課も、相変わらず人手が足りないみたいで――――――」

「それで機動六課に依頼と？六課って基本アンゴルモア専任じゃなかったっけ？」

「本当はそうなんだけど、慢性的な人手不足の向かい風に煽られちゃ、断るわけにもいかなくてね・・・はぁ～～～正直、六課はあんまりアンゴルモア以外で動かしたくないんだけど。騎士団もすぐに動ける隊がなくって。」

「私もシャンテも同じく、トレーニング中だし」

セインがそう言った直後、カリムはもう一つの危惧を口にする。

「それに、スクライア司書長の事もあるし」

「ああ、成程」

セインはその単語を耳にすると、徐に尋ねる。

「ん？スクライアって・・・ひょっとしてヴィヴィオのお父さんの？」

「そ。一年前のカトゥーン事件と、この間のオグドモン事件他、次元世界の危機と言う危機を救って来た英雄――翡翠の魔導死神の、現在は絆の完現術士ユーノ・スクライア司書長ね」

「うんうん。ヴィヴィオからもよく聞いてる。この間ちょっとしたトラブルがあって本気で闘ったらしいけど、傷一つ負わせられないままボコボコにされたって言ってた。」

「そう言えば、管理局本局の武装隊・・・教導隊の方でも一度だけスクライア司書長と闘ったことがあるらしいけど、結果はスクライア司書長の圧勝だったらしいわ」

カリムの話を聞いた途端、シャッハとセインは顔を見合わせ度胆をぬいた。

「え！あの教導隊の魔導師たちを相手にですか・・・しかも一人で？」

「それって冗談抜きで・・・？」

二人がそう言うのにはわけがあった。

時空管理局本局の戦力の要、それが教導隊と言われる場所である。

彼らの実力は、一説によれば次元航行隊とまともにやり合えると言われるほど、ハイスペックな魔導師達が集められた、所謂トップガン部隊。

なのはもそこに所属する魔導師で、御存じエースオブエースと言われる訳だが、そんな彼らの戦闘遥かに凌ぐ力を持っているのが、次元世界最強の男ユーノ・スクライアなのだ。

カリムは紅茶を啜りながら驚き返る二人にその事を赤裸々に述べる。

「本当の事よ。但し、これは飽く迄、非公開事項だから知ってるのは関係者か、私とクロノ提督、それにリンディ統括官他数名だけよ。だからくれぐれも他言はしない事」

「は、はい・・・」

セインはこの時、改めてヴィヴィオの周り・・・特に両親のなのはとその彼女の恋人で次元世界最強の男、ユーノ・スクライアに純粋なる恐怖を感じた。

隣に立つシャッハもセイン程ではないが、改めてユーノの戦闘力の高さに混乱しそうになりかけるが、直ぐに頭を切り替えシャッハに派遣先の事を尋ねる。

「それで、話を戻すとして派遣先はどちらに？遠くの世界ですか？」

「えっと・・・・・・――――」

カリムは画面を操作し、今回の派遣先となる異世界の情報を表示さ

せる。

果たして、発見されたロストロギアはどの世界にあるのであろうか？

◇

〈機動六課Ｓｉｄｅ〉

同時刻。

聖王教会からの連絡がまだ届いていない機動六課の方では、比較的平穏な一日が送られており、ちょうど今はデスクワークなどで時間を費やすそんな時間帯だった。

そして、休憩時間の合間を縫って嘱託死神部隊・隊長補佐で護廷十三隊六番隊副隊長、朽木ルキアははやてから借りた小説を夢中で読み上げていた。

無駄に変な抑揚をつけて――――――

「・・・わかっているのよお姉様・・・全てはその匣（はこ）にかくされているのでしょう・・・？お母様から託されたその翡翠の小匣に・・・その匣をわたして！マリアンヌお姉様！さあ！！だめよ！その匣をあけてはだめ！フランソワ！！ああっ・・・！！」

と、そんな朗読に夢中なルキアに背後から大声を上げたのはヴィータだった。

「やめんか！なに訳わかんねぇこと一人で言ってんだよ！！」

「きゃあっ！！」

ルキアは思わず涙目を浮かべて恐怖に背筋を凍らせ、後ろに佇むヴィータに抗議する。

「たたたたわけ！おどかすな！！はやてから貸してもらった本を朗読して負ったのだぞ！！」

「あのな・・・態々口に出さなくても黙読ってのがあるだろ。つうかそれ絶対はやてのじゃねぇから・・・一体どこで拾って来たんだよそんな恐怖小説・・・」

「ふふ。元々は現世の人気ホラー漫画『翡翠のエルミタージュ』から来たノベライズでな、まぁ簡単に内容を要約すればだな・・・主人公の兄弟ソフトマゾのマリアンヌ（姉）とハードゲイのフランソワ（弟）が母（５２歳レスラー）にもらったヒスイの小匣をめぐってアレコレする話で、非常に恐ろしい物語なのだ」

「何処がだよ！！絶対それ三流ミステリーだろ！！」

「何だと！？ヴィータ貴様読みもせずにこの本の恐ろしさと面白さが分かる訳もないだろ！騙されたと思って読んでみろ！身の毛も凍るぞ！」

ルキアはそう言ってヴィータに読みかけの小説を手渡し、ヴィータはそれを受け取ると余裕の表情を浮かべて本の中身を見ていく。

「おお！上等だ！私は別に怖いもんなんかないって事証明してやるぜ！たかが本ぐらいでビビるかよ！！」

そう言って読み始める事5分。

あまりの恐ろしさにヴィータは図らず涙を流し、絶叫する。

「ウううう〜〜〜〜！！！超コエ〜〜〜〜！！！！！！！！！！！！！！！！」

「なぁ。言った通りだろ」

「ぐっす・・・／／／チクショー・・・この作者凄すぎだろ・・・／／／私をここまで恐怖で震え上がらせるなんて・・・／／／マジ半端ねェ！」

ヴィータはすっかり完敗した様子で、ルキアの読んでいた小説を止めどなく次々と読み漁っていく。

と、そんなヴィータを見かけたシャマルが話しかける。

「?ヴィータちゃん。それ何の本？」

「シャマルか・・・お前も読んでみろよこれ。マジ半端なく怖えから！」

ヴィータから本を渡されると、シャマルは思わず微笑み口にする。

「あらあら。なんだ・・・ヴィータちゃんにも怖いものがあったんだ♪」

「わ、悪いかよ！！でもマジそれはヤバいって！！ヤバ過ぎるって！」

「もう。たかが本ぐらいで、そんなに大声あげちゃって・・・」

軽く笑いながらヴィータから受け取った本を読み始めるシャマル。

そんなシャマルの事など気にもしていないなのはの方はと言えば、明日の第2航空基地で行う教導プログラムの内容について、ユーノと相談を行っていた。

「でね。最初に考えたプラントと次に考えたのとじゃどっちがいいと思う？」

「そうだな。僕的には先ず――――――」

二人は仲良く教導プログラムの話し合いをし、その傍らユーノスは日頃の疲れをいやすために部屋から持ってきた籠の中で睡眠をとっていた。

と、その時機動六課全体にシャマルの叫び声が響き渡る。

「きゃあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

「「「！」」」

思わずその叫び声に、ユーノやなのは、更には眠っていたユーノスまでもが反応し、他の前線メンバーも気掛かりとなってシャマルの元へと向かった。

「な、なんだこの声は？」

「今のって・・・シャマル先生!?」

「ただ事ではないな」

「どうしたシャマル・・・って!?」

「何してんだよお前・・・!」

シャマルの元にたどり着いた瞬間、前線メンバーが目の当たりにしたのは床に横に為って赤塚不二夫の漫画に出てくるキャラクターがする俗に言う、「シェー」のポーズで涙を流すシャマルだった。

この状況を見て、どのようにツッコミをいれればいいか迷う一同に、シャマルは立ち上がり恋次に泣きついた。

「こここここここ怖かったの〜〜〜!!!本当に怖かったんだから〜〜〜!!!」

「ああ?何だよこいつ」

と、その時騒ぎを聞きつけたはやてが駆けつけシャマルを抱擁する。

「ああ。シャマル、大丈夫か?」

「うわあああ〜〜〜ん!!はやてちゃん〜〜〜!!」

「よしよし。きっと怖いもんでも見たんやな。大丈夫や。ウチにはもっと怖いもんが仰山おるから安心してな。なのはちゃんにユーノくんがそうやろ」

さらっとした表情で恐ろしいことを口にするはやてに、吉良は思わず顔を引きつる。

「あのスミマセン・・・慰めの仕方間違ってる思うんですけど・・・あと二人に聞こえたら死刑確実ですけど・・・」

「へへへ♪まぁこれは冗談として・・・それよりみんなに重要な連絡や。聖王教会から六課宛てに依頼が来た。なんでも発見されたばかりのロストロギアの回収に数名ほど派遣して欲しいそうや」

「そうなんだ。でもアンゴルモアとかじゃないよね？」

「今のところそれはないそうや。取りあえず、一旦司令室に集まって話し合おうか」

はやてからの連絡を受けた前線メンバーは、司令室に集まると早速発見されたロストロギアの情報を見ながら、アドバイザーユーノの話を真摯に聞く。

「発見されたロストロギアの名前は『黄泉の心臓』。」

「黄泉の心臓？」

「送られてきたデータによれば、なんでも“死者の魂を蘇らせる”という危険なロストロギアだよ・・・」

「死者の魂を蘇らせる・・・！」

聞いた内容に耳を疑う一同だが、それを冷静に否定したのはオカル

ト嫌いで、ロストロギア「闇の書」の輸送中に父を亡くしたクロノだった。

「まぁ。それも恐らくは当時の人間の幻想から出て来たほら話だ。信憑性は低い。」

「相変わらずこの手の話は好きじゃねぇんだなお前は」

「死んだ人間は蘇られない。それは生き物である以上不変の法則です。死んだら生き物は土に返って食物連鎖の輪に入り、その魂は尸魂界へと導かれるのでしょう」

クロノの破綻の無い論理を耳にすると、なのはの隣で聞いていたユーノは呟く。

「実に論理的で破綻の無い説明だ。僕のゼミの学生なら、A判定をくれてやるよ」

「ふふ。そうか。お前に褒められるとは意外だったが、存外悪くない」

「別に褒めたつもりはないけどね・・・」

「あはは・・・もうユーノ君も素直じゃないんだから♪」

なのはと違い、クロノの事になると不貞腐れた態度をとるユーノだった。

なのははそんなユーノでも、クロノとは仲良しだとは分かり切っていた様子だった。

「で、結局誰が行くよ？」

「そうやな・・・・・・まぁ今回の所はアンゴルモアもコアメダルも関わってくるような話やないし、副隊長一人とフォワード陣だけでもいけるやろ」

すると、話を聞いていたヴィータが珍しく積極的に乗り出した。

「じゃあさ、はやて。私が行ってやるよ。偶には私も出張って仕事をしたいからな」

それを聞くと、ギンガとルキアが便乗する。

「でしたら、同行は私が」

「私も参加しよう」

「よし。ほんなら、スターズ2とスターズ5、それにルキアさん。あと二人ぐらい・・・吉良さんとマリアさんも一緒に着いて行ってくれます？五人編成が一番安定だと思うし」

「ああ。分かったよ」

「一度でいいから、私も異世界の様子を見てみたいと思っていましたわ！是非とも」

「安心しろよ、はやて。私らにかかれば、こんな任務朝飯前だ」

そう思いながら、今回の任務に向かうヴィータ達だったが、その先

に待ち受けていたのは思いもよらぬ出会いとロストロギアであった。

◇

〈ヴィータＳｉｄｅ〉

今回、ヴィータを筆頭とする五人が向かう世界は、第５０管理外世界「プレディクト」。

全体の七割が海で、残り三割が森林におおわれた辺境の世界。

地球の自然環境と非常に似通ったこの世界において、今回発見されたロストロギアこそ、「黄泉の心臓」である。

ヴィータ達はバリアジャケットに身を包み、いつでも戦闘が出来る気構えで任務に臨み、現在は山の頂上付近から出る反応を目指して邁進していた。

「黄泉の心臓か・・・――もしも本当に死者を蘇らせることができたら、欲しがる人は山ほどいるだろうね」

「ええ。まぁでも死んじゃった人を蘇らせるという発想は、何処の世界にもあるのですね」

「ああ。でも誰しもがそう思うから怖いんだ。私だって、一度でもいいからそれが可能だって言われたら、初代リインフォースとはやてももう一度会わせてやりたい」

「私も母さんに会いたいです」

ギンガがそう呟くと、傍らで聞いていたルキアは渋い顔を浮かべる。

「そっか。ギンガの母親は戦闘機人事件で・・・」

「はい。ちょうど私達二人が物心ついた時でしたから、多少なりとも寂しい想いはしました。」

「あのクロノだって、物心ついたばっかりの頃に親父さんを事故で亡くしちまってるんだ。皮肉にも同じ闇の書事件でな」

「ヴィータ・・・――」

それを聞くと、他人事にはとても負えなくなるルキア達一同だったが、それでもヴィータじゃ過去の想いを抱きながら、前へと進み続ける。

「兎に角、どんな危険なロストロギアか分かったものじゃねぇから、気を引き締めていくぞ」

「「「「ああ（はい）」」」」

吉良は今一度、センサーの反応を確認しつつ、山の上へと昇り続けていき、やがて次第に反応が強くなっていくと全員に報告する。

「ここから先、エネルギー反応が強くなってる」

「てことは、こっちの方角で合ってるってことだな――――――」

「急ぎましょうか」

全員は気を引き締めると、反応を頼りに前進を続けていたが、その時不意に自分たちを呼び止める声が聞こえてきた。

「お待ちなさい」

「「「「「？」」」」」

五人がその声に反応し、顔を振り向くと目の前に現れたのは桃色を貴重とするジャケットに身を包んだ一人の女性であった。

女性は五人（吉良とルキア、マリアの三人は特別な義骸を着用）に近づくと、毅然とした態度で話しかける。

「あなた達、何をしているのですか？ここは立ち入り禁止区域のはずでが」

「え・・・あ・・・私達はその・・・」

回答に苦慮し顔を歪めるマリアと、そんな状況でも表情を崩さす鋭い目つきでその女性を見つめるヴィータ。

「そういうアンタこそなんだよ？私達はここに黄泉の心臓ってのがあるから回収しに・・・」

と、その時女性は「黄泉の心臓」と言う単語を聞いた瞬間目の色を変えた。

「（黄泉の心臓！？）そうですか・・・――あなた達でしたか。プレシャスを狙っているというのは」

「プレシャス？」

聞き覚えのない単語に顔を見合わせる五人。

「残念ながらあなた方をここから通す訳には参りません。お引き取り下さい」

そう言うと、女性は左腕（上腕部）のホルダーに装着されていた携帯電話型の変身アイテム、ゴーゴーチャンジャーを取出し、一番上の列の星のマークのボタンを入力後、ゴーゴータービンを回転させる掛け声をあげる。

「（レディ！　ボウケンジャー、）スタートアップ！」

タービンが回転し、女性の体が光に包まれていくと、ゴーゴーチェンジャーによって女性は特殊なスーツに包まれていき、メットが装着され変身が完了する。

「「「「「な！」」」」」

思わずヴィータ達は目を凝らして、先ほどの女性の変貌ぶりに驚くと、女性はポーズをとって自分の事をこう名乗る。

「深き冒険者、ボウケンピンク！」

「ぼ、ボウケンピンク？！」

若干引きつった顔でそう言うヴィータだったが、その直後ボウケンピンクは標準装備であり万能武器であるサバイバスターを取出し、迷う事無く五人に攻撃をしてきた。

「サバイバスター！」

「うわっ！」

五人は容赦なく攻撃を仕掛けてきたボウケンピンクの攻撃を躱すと、直ぐにヴィータは怒り心頭に抗議する。

「いきなり何すんだよ！」

「は！」

しかしボウケンピンクはお構いなしにプレシャスを狙う敵と判断したヴィータ達に攻撃を加え続け、挙句ヴィータ達はそれに武力行使で答える決断を下す。

「たく。聞き分けのねぇ大人だ。アイゼン！」

〈Ｙｅａｈ．　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

ヴィータは前に出ると、グラーフアイゼンを取出しらラテーケンハンマーへと切り替えると、真っ直ぐボウケンピンク目掛けて飛んでいく。

「！」

「つらあああ！」

ボウケンピンクは形状を変化させ、加速をつけて来たヴィータの攻撃をどうにか受け止めることが出来たものの、ヘルメットの下の表

情は険しいものとなっていた。

「くっ！」

「よくもやってくれたな。私はこれでも中身は大人なんだが、見た目はいつまでたっても子供のままでよ・・・第一印象がこれで攻撃するとは見下げた大人だぜ！おばさん！！」

「お、おばさん！！」

おばさんと言う単語に反応し、いつもの冷静沈着な性格が揺らぎ始めるボウケンピンク。

「なんだ？違うのかよ。え？おばさん」

「くうう～～～！！！よくも言ってくれましたね・・・許しません！」

ボウケンピンクは主旨を間違えた様子で、ヴィータの攻撃を受け流して距離を取ると、持っていたサバイバスターのハンドル部分を回転させ真っ直ぐにし、刀身を出すサバイブレードへと変化させる。

「サバイブレード」

「！？（剣になりやがった）」

「はああ！」

驚く暇もなく向かって来るボウケンピンクの攻撃に、歴戦の騎士であるはずのヴィータが少々苦戦組の様子であった。

「く。こいつ結構やりやがる」

ボウケンピンクの実力に険しい表情を浮かべるヴィータ。

それを見ていた基本が剣で戦うことを主流とする吉良とマリアの死神二人が前に出てくる。

「ヴィータ。ここは僕達がやるよ」

「いきますわ！」

二人は斬魄刀を抜いてボウケンピンクに向かおうとしたその時、唐突に森の中から低い男の声が聞こえ来た。

「二人掛かりとは卑怯じゃないのか？」

「「？」」

すると、直後森の中より現れたボウケンピンクと同種の赤い特殊スーツに身を纏った男が吉良とマリア目掛けて同じ万能ツールを使って攻撃をしてきた。

「スコープショット」

「「うわ（きゃ）！」」

二人は予期せぬ襲撃に思わず後ずさりし、ルキアとギンガは険しい顔で飛んで来たボウケンピンクの仲間に目を向ける。

「新手か！」

五人が前を見ると、いつの間にか特殊スーツに身を包んだ者が四人に増えており、それぞれ赤・黒・青・黄色の四人が一様にボウケンピンクの周りに集まり彼女を気に掛ける。

「大丈夫か。」

「さくら姉さん。怪我は？」

「大丈夫です。それよりチーフ、彼らは――」

「ああ。どうやら黄泉の心臓を狙っているネオシンジケートのようだが、いつから子供がメンバーに入った？」

赤いスーツに身を積んだその男が平然とした様子で口にすると、ヴィータのアドレナリンが体内から分泌されていく。

「！てめぇ・・・やっぱそれを言うかよ・・・私は大人だ！！」

乗り出そうとするヴィータを、苦笑いを浮かべながら押さえるマリアと吉良。

そんな中、ギンガは毅然とした態度で目の前のスーツ姿の五人に尋ねる。

「あなた方は何ものですか？私達は時空管理局機動六課のものです」

「時空管理局・・・聞いた事は無いな。」

「明石。悠長に構えてる暇ないだろ。こいつらがネオシンジケートなら、プレシャスを渡す訳にはいかねぇ」

「やれやれ。喧嘩っ早い奴だ。取りあえず向こうが名乗ったんだ。俺達も名乗るべきだろう」

「そうだよ。プレシャス回収するのはそれから♪」

「たく・・・相変わらず悠長な」

黒の特殊スーツを身に纏ったその男が呆れながらも赤と黄色のスーツの人物の言葉に耳を傾ける中、ヴィータは甲高い声を上げて言う。

「おい！何だよお前らは！？」

すると、五人はそれぞれの立ち位置に着くと自分たちの素性を名乗り始める。

「熱き冒険者、ボウケンレッド！」

「迅き冒険者、ボウケンブラック！」

「高き冒険者、ボウケンブルー！」

「強き冒険者、ボウケンイエロー！」

「私は先ほど言いましたので省略いたします」

一人一人の紹介が終わると、リーダーであるボウケンレッドは最後の決め台詞を口にする。

「果てなき冒険スピリット！轟轟戦隊！」

ボウケンレッドがそう言うと、全員は声を揃えて宣言する。

「「「「「ボウケンジャー！」」」」」

「ぼ、ボウケンジャー？」

聞いていたヴィータ達五人は呆気にとられながら顔を見合わせると、直後ボウケンレッドが左指を鳴らして攻撃を宣言する。

「アタック」

五人はそれぞれ戦いやすい相手の方へと向かっていくと、ヴィータ達もまたそれぞれの相手に向かって走り出し、戦闘を始める。

「ラジアルハンマー！」

その中の一人、ボウケンブラックは専用武器であるラジアルハンマーを取出し、同じハンマー使いのヴィータに迷う事無く攻撃をする。

鍔迫り合いをする中、険しい表情のヴィータにブラックは言う。

「お前の相手は俺だ、ガキンチョ」

「だ、誰がガキだよ！てめぇ！！」

〈Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〉

ヴィータは怒り心頭な様子で、カートリッジをロードすると、ボウケンブラックと距離を取ってから一気に駆け抜ける。

「ぶち抜け！！」

森林の中で衝突が起こる中、ギンガ・ナカジマの方もボウケンジャーのボウケンブルーと対決を行っていた。

「ブリッツキャリバー」

〈Ｓｔｏｒｍ　ｓｈｏｏｔ〉

カートリッジをロードし、高速回転させたスピナーから発生する風を纏った拳を繰り出すギンガ。

「はあああああ！」

ブルーはそんなギンガに向かって、グローブ型の武器であるブロウナックルを使い、同じく旋風を引き起こしてギンガに対抗する。

「ブロウナックル」

二つの旋風が互いに衝突しあうと、ギンガは一度距離を取って体勢を立て直す。

「くう・・・！」

ブルーは後退したギンガ目掛けてサバイバスターを向けて来た。

「サバイバスター！」

〈Ｔｒｉ　Ｓｈｉｅｌｄ〉

ギンガはトライシールドでその攻撃を防ぐと、ヴィータとブラック同様激しい戦闘を繰り広げる。

魔導師組がそれぞれ苦戦を強いられる中、残りの死神組三人もそれなりに実力派ぞろいなボウケンジャー相手に険しい顔を浮かべながらも戦っていた。

「一切合切粉塵なさい『華奠腕』」

マリアはムエタイ姿の己の斬魄刀の芯の力を解放すると、ステップを利かせてボウケンイエローへと接近し地面を殴りつける。

「いきますわ！！」

地面が叩きつけられた瞬間、ボウケンイエローの足元が膨れ上がり、思わず腰が抜けたイエロー。

「きゃあ！やったな。バケットスクーパー！」

イエローは油圧ショベル等を模した武器、バスケットクーパーを両手に装着し、周囲の岩壁を叩いて落ちてきた岩を持ち前の怪力でマリア目掛けて弾き飛ばす。

「はああ！」

複数の岩が目の前から飛んでくると、マリアは構えを取ってその岩を素早い動きで見切って破壊していく。

「華桜拳（かおうけん）！」

怪力女同士の熾烈な争いが行われている中、少し離れた場所では袖白雪を解放したルキアがボウケンピンクと対峙していた。

「次の舞・白漣」

氷結系の技で彼女の足を止めようとするルキア。

「ハイドロシューター」

ボウケンピンクは攻撃が繰り出されるや否や、ボウケンピンク専用の水圧銃「ハイドロシューター」を取出し、強烈な水圧砲を放ちルキアの攻撃を打ち砕く。

それを見ると、ルキアは若干悔しそうな顔を浮かべながら飛び上がり今度は鬼道を撃って対抗する。

「破道の三十三　蒼火墜！」

そして、最後に残ったボウケンレッドと吉良イヅルの方も苛烈を増していた。

「ボウケンボー」

ボウケンレッドは冷静に対処しながらボウケンレッド専用のスティック型武器「ボウケンボー」を取出し、先端のマジックハンドで吉良を挟みつけようとしてくる。

「侘助！」

吉良は飛んでくるボウケンレッドの攻撃を躱しながら、ボウケン棒に対して侘助の斬撃を三度斬りつけ、ボウケンレッドはその直後急に重さを増したボウケンボーに驚きながら、前かがみの体制となる。

「！？成程・・・面白い。だが」

そう言うと、なんとボウケンレッドは重さ数百キロにも達していた今のボウケンボーを自力で持ち上げてしまい、吉良は信じられない表情を浮かべる。

「！」

「ボウケンジャベリン！」

そして、ボウケンレッドはボウケンボーの先端から刀身を出して槍型の武器・ボウケンジャベリンとしてから吉良を攻撃してきた。

「ジェベリンクラッシュ！」

レッドのその攻撃を受けた吉良は、重さを増して図らずも破壊力をつけてしまったボウケンジャベリンに吹き飛ばされる。

「ぐあ！」

「吉良！」

「大丈夫か！？」

ヴィータ達は一旦大きなダメージを負った吉良の元へと集まり、ボウケンジャーもまた一か所に集中する。

「なんだ今のは・・・彼らは本当に何者なんだ?」

「言ったはずだ。俺達はボウケンジャー。冒険スピリットを忘れないものだと」

「冒険スピリット・・・」

「みんな、行くぞ」

「「「「「はい（ああ）」」」」」

レッドが合図を出すと、五人はそれぞれゴーゴービークルのエネルギーを受けて起動する必殺武器「デュアルクラッシャー」の準備をし、ドリルヘッドとミキサーヘッドの２つのモードに変形するうちのドリルヘッドで五人に止めを促そうとする。

「「「「「デュアルクラッシャー」」」」」

ヴィータ達はこの展開を目の当たりにすると、表情を青ざめる。

「ギク！」

「これは・・・流石にまずいですわね・・・」

そして、ボウケンレッドは合図を出してサバイバスターの１０倍の威力を誇るデュアルクラッシャーを発射する。

「アタック！」

デュアルクラッシャーが発射された直後、ヴィータ達は自分の命の為に一旦戦線から離脱することを決意する。

「い、一旦退くぞ！！」

ヴィータ達は皮一枚のところでこれを交わすと、転送ポート目掛けて全速力で山を降下していき、ボウケンジャー一同はそんな彼らを見下ろした。

「逃がしたか」

「にしても随分変わったネオシンジケートでしたね」

「そうだな。さぁ、今のうちにプレシャスの回収を急ぐぞ」

「「「「ラジャー（ああ）」」」」

ボウケンジャーはいなくなったヴィータ達を余所に、自分たちもまた任務の為に山の頂上付近へと昇って行き、そして・・・ハザード８０パーセントを超える危険な反応が出ている洞窟を発見すると、水滴が零れ落ちるその洞窟に顔を覗かせる。

「この中で間違いなさそうだな」

「嫌な予感がムズムズとする」

「ふん。ちょっとした冒険だな。アタック」

ボウケンレッドはそう言うと、五人を引き連れ洞窟の中へと侵入する。

この時彼は予想だにしていなかっただろう。

自分たちを待ち受ける敵があまりに意外な者であったことを――――

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

さて、ボウケンジャーとは対照的に一度機動六課へと戻って来たヴィータ達は、なのは達に事情を話し、傷の手当てをしながら深いため息をついてしまう。

特にヴィータはご立腹の様子でなのはの隣に座っていた。

「な～るほど。それで一時引き上げて来たと」

「ああ。全くとんだ目にあった！」

「何しろいきなり攻撃してきましたからね」

「ヴィータちゃんも随分とやられたものだね」

「悔しいがな・・・！たく何なんだよ連中は・・・」

「“サージェス”のことかい？」

すると、その話を聞いていたユーノがユーノスを肩に乗せて皆の前に現れる。

「ユーノ君。」

「なんだ。あいつらの事知ってるのかよ?」

「まぁそれなりにね。」

「一体何なのだそれは?」

全員がユーノに注目する中、ユーノは自分の席に座るとタッチパネルを操作し、サージェスと呼ばれる民間の遺失物管理団体の情報を公開し説明をする。

「世界各地で失われかけている貴重な宝を集める民間団体だよ。中でも、現代の科学水準を遥かに超えた危険な力を持つ秘法を「プレシャス」と呼んで、あるべき場所に保管する・・・つまり民間版ロストロギア保守管理組織ってところ」

「民間でロストロギアを!?」

「そんなことが許されるんですか?」

「管理外の世界だからね。時空管理局側としても、あんまり積極的な干渉は出来ないし、何よりサージェスもそのための精鋭組織を作ってるからね」

「ひょっとしてあいつらの事か?」

「そ。あれこそがサージェスが組織したプレシャス回収の精鋭たち・・・『轟轟戦隊ボウケンジャー』さ。中でも、リーダーの明石暁（あかしさとる）は嘗て“不滅の牙”と呼ばれた伝説のトレジャーハンターで、かなりの危険な冒険を乗り越えて来ているらしい」

そう言うと、ユーノはボウケンレッドこと、チーフ・明石暁の写真と経歴を表示し、ヴィータ達はそれをマジマジと凝視する。

「不滅の牙か・・・」

「ふん。不滅の牙だかなんだか知らねぇが、このまま引き下がれるかってんだ！」

ヴィータはそう言うと、制服を着直してグラーフアイゼンを手に取ると、そのまま転送ポートへと足を運ぶ。

「ヴィータ副隊長！？まさか行くつもりですか？」

「あんだけ虚仮にされて連中に好き勝手やらせるかよ！第一、ロストロギアの回収は私らの仕事だ。いくら民間のロストロギア回収部隊だろうが、今回のは私らの仕事だ。いくぞお前ら！」

ヴィータはかなりむしゃくしゃした様子で転送ポートへと歩き出すと、それを見ていた前線メンバー一同は顔を見合わせ複雑な心境を抱える。

「殺気立ってますね、ヴィータさん」

「そりゃ、見た目から子ども扱いされちゃね・・・」

「早くしろお前ら！！」

「「「「はぁ～～～」」」」

ルキアを始め、この任務に同行していた四人は先行きの分からないこの事態に思わずため息をつくと、ユーノとなのはは微笑みを浮かべて元気づける。

「ま。安心しなよ。何かあったらすぐに駆けつけるから。」

「そうだよ。きっと大丈夫。」

「だといいのだがな――――――」

今度の事ばかりは、ユーノスの方もグリードやコアメダル並みに心配の拭いきれるものではなかったようだ。

◇

〈ヴィータＳｉｄｅ〉

数分後。

再び黄泉の心臓の回収の為に、「プレディクト」へと訪れたヴィータ達五人は、ボウケンジャーのことを警戒しながら山の中を歩きつづけていた。

「連中はもういないようだな・・・」

「よし。行くぞ」

五人は山の中を駆け抜け、黄泉の心臓の反応を追ってボウケンジャーが入って行った洞窟の中を前進していると、その直後吉良は予想外なものを発見する。

「！待って。あれを」

「？」

全員が吉良の言葉で足を止め、目の前の光景に目を向けるとそこには何と、変身が解除され満身創痍となって気を失うボウケンジャー、明石暁を除く四人・・・伊能真墨（いのうまするみ）・最上蒼太（もがみそうた）・間宮菜月（まみやはづき）・西堀さくらが倒れていた。

ヴィータ達は思わずその光景にを目を奪われた。

「なんだこれは・・・！」

「ボウケンジャー！？」

「なんでこんなことに！？」

そう思いながらも、五人は倒れている四人の元へと駆け寄った。

「おい！しっかりしろ！」

「う・・・」

ボウケンジャーの四人は相当手酷くやられているようで、直ぐにでも治療が必要と判断された。

「こいつは酷でー・・・小鳥遊。吉良。ちょっとこいつらの怪我治してくれねぇか。私とルキアで奥に行く。ギンガは敵が来たときの為に、一緒に残っててくれ」

「了解です」

「それじゃ、後は任せるよ」

「ああ。」

ヴィータとルキアは、三人にボウケンジャー四人の事を任せると、先に奥の方へと進んでいき、明石暁と一緒に黄泉の心臓を探索する。

洞窟内は奥へ行けばいくほど迷路と化しており、非常に複雑に入り組んだ内部はまさしく未知の世界であった。

「一体どうなってるんだこの中は?」

「まるで迷路だ」

そんな感想を呟きながらヴィータが前に出ようとすると、その途端誰かに後ろから突き倒されてしまった。

「待て」

「うおお!」

ヴィータは思わぬ事態に驚きながらも、目の前から飛んでくる炎の矢に目を見張り、度胆をぬいた後、後ろに立っていた特殊スーツを

脱いだボウケンレッド、明石暁と予期せぬ合流を果たす。

「気をつけろ。どんなトラップが仕掛けられるか分からない」

「お前は・・・」

「ボウケンレッドの・・・」

「明石暁だ。やはりお前達も来たようだな。」

「ああ。言っとくが私らはネオシンジケートなんてもんじゃねぇからな。れっきとした任務でやって来た時空管理局の魔導師！私は騎士だけど。」

すると、魔導師と言う単語を聞いた途端明石の顔が変化する。

「魔導師・・・――――そうか。そう言う事か」

「？どういう事だ」

「あの時はよく分からずネオシンジケートだと思い込んで攻撃をしてしまったが、お前たちは魔導師だったのか」

「貴様、魔導師の存在を知っているのか？」

「ああ。前に一度だけ、プレシャスの回収に一人で行ったときに助けたことがある。二年ぐらい前の事だ」

明石暁は二年前、雪山に隠されたプレシャスの回収に向かっていると、その途中で行き倒れとなっていた機動課の魔導師を発見し、保

護したことがあったのだ。

その事を聞かされると、ヴィータとルキアは納得の表情を浮かべる。

「そうだったのか。だがこの状況はどういう事なんだ？向こうにはお前の仲間が倒れたぞ」

「何！？くそ・・・となれば、俺達以外にも黄泉の心臓を狙っている者がいるという事か」

「だったらなんだ。盗られる前に、さっさと見つければいい話だろうが」

「気が合うな。俺もそう思っていたところだ。」

ヴィータと明石は共通の認識を抱くと、顔を見合わせほくそ笑みこう言い合う。

「へ。じゃ、仲間の為にも急いで行くとするか」

「それが得策だな。」

二人のやり取りを見ていたルキアは、ふと心の中で呟く。

「（この二人・・・意外と仲が良いようだな・・・）」

◇

〈吉良Ｓｉｄｅ〉

その頃、ボウケンジャー四人の治癒を任された吉良とマリア、護衛にあたるギンガの方はと言うと、奥に進んだ二人の事を心配しつつ順調に治療を続けていた。

「朽木さん達、大丈夫だろうか」

「あの二人のことですし、仲良くやっていると思いますよ。それに、この霊圧・・・多分一緒に居るのはボウケンレッドの明石チーフだと思います」

「しかし、ボウケンジャーの方々に何があったんでしょうか。」

「う～ん・・・・・・！」

と、その時だった。

吉良は不意に周囲から現れた未確認の生命体、赤を基本とする複数の怪人たちの姿を発見し、ギンガは直ぐに臨戦態勢となった。

「これは!?」

「何なのですか一体?」

吉良達は未確認体にすっかり囲まれてしまうと、その中の一体が武器と肩に乗せて言う。

「なんだ・・・まだ生き残りがいたのか。黄泉の心臓は我々の物だと言ったはずだがな」

「なんだお前たちは?何故黄泉の心臓を?」

「知れたこと。悪いが貴様らも排除させてもらう」

「吉良さん、マリアさん。二人はボウケンジャーの治療に専念してください。私が食い止めます」

「頼むよ、ギンガ」

二人にそう言った後、ギンガは懐からトライアルカートリッジを取り出す。

「トライアルカートリッジ」

〈Ｔｒｉａｌ〉

トライアルカートリッジを装填したギンガが、軽く腕を鳴らすと低い体勢から一気に加速して周囲の敵に向かっていくのであった。

「行くわよ。」

今まさに、黄泉の心臓を求めて三つ巴の交戦が始まってしまうのだった。

ギンガ達が未確認体と戦闘を繰り広げる中、彼らを信じ黄泉の心臓を求めて奥へと進み続けるヴィータ、ルキア、そして明石の三人。

ヴィータは歩いても歩いても一向にたどり着かない事に少々の焦りを感じ始め愚痴を零した。

「まだか。ロストロギア・・・そっちで言うプレシャスは？」

子どもっぽく愚痴を呟くと、先頭を歩いていた明石が冷静な口調で言う。

「慌てるな。急ぐのと慌てるのは違うぞ」

「んな悠長なこと言ってられるかよ」

ヴィータは焦りの気持ちが勝って一人明石の前を歩こうとすると、明石はそんなヴィータの脚を引っ掛けて前へと突き倒す。

「わあ！何すんだよ！」

明石の行動に怒ろうとするヴィータだったが、直後ヴィータの目の前を毒針が通り過ぎ、思わず目を疑った。

「言ったろ。こう言う冒険にはこの手のトラップがよく仕掛けてあるからな」

ヴィータの目線に合わせて明石がそう言うと、危険を感じ取ったルキアが明石の背中を引っ張り飛んでくる毒針から彼を守った。

「そのようだな、不滅の牙？」

「やるじゃないか」

「ヴィータも、あまり焦りすぎても仕方ない。急がば回れと言うだろ」

「そう言うことだ」

「・・・ああ。分かったよ」

ヴィータは二人にそう言われると、冷静に考え直して落ち着きを取り戻し、奥へと進んでいくが、その最中彼女の脳裏に蘇ってくる数年前の出来事。

それは、局に勤め始めたなのはと初めて一緒に行ったロストロギアの回収任務での一コマ。

何故急にそんな事を思い出したのか、自分でもよく分かっていないヴィータだが、兎に角忘れてはならないということだけは割り切っていたようで、大事に頭の中に仕舞い込むと前を向いて前進する。

そして、三人は複雑に入り組んだ内部を待ちゆくトラップを回避しながら順調に進んでいき、ついにゴールまであとわずかと言うところまで辿り着く。

三人は一度立ち止まると、薄暗い前方の先から聞こえる物音に耳を澄ましながら、緊張の糸を張り巡らせる。

「この先だな。何が待ってるか知らねぇが、行くっきゃねぇだろ」

「ああ。ちょっとした冒険だな」

明石も思わずその台詞を口にし、ルキアは先ほどとは違い楽しむ余裕を持ってきたヴィータに顔を向ける。

「ヴィータも随分と乗って来たようだな」

「誰がだよ！」

「ふん・・・――――？」

と、鼻で笑った明石だったが直後彼はその時、物音と一緒に僅かばかり見えてきた小さな光に目を向けた。

「どうした」

「何かいるな」

明石はそう言って奥へと進み始め、ヴィータとルキアも後ろにくっつき歩いて行くと、三人はそこで意外な光景を目撃する。

なんと、目の前に映って来たのは紛れもなく自分たちが今の今まで探し求めていた黄泉の心臓であり、その黄泉の心臓をギンガ達が対峙している未確認の生物が手にし、声を上げていたのだ。

「黄泉の国の神よ、我が主を今ここに蘇らせたまえ！！」

その未確認生物、竜人兵ジェリュウは石化し動けなくなった自分の主の体に黄泉の心臓を移植していくと、黄泉の心臓は高エネルギーを発生させ、閃光を浴びると消滅を果たす。

驚き返る三人だったが、その時・・・更に驚くべき光景が広がってきた。

それは、今まで石化し死んでいた筈のジャリュウの長、創造王リュウオーンがこの瞬間、黄泉の心臓の力を受けて蘇ってしまったのだ。

蘇ったリュウオーンは徐に立ち上がると、目の前にいる三人に向かって笑みを浮かべ言う。

「ははははは。蘇った・・・蘇ったぞ！！」

「お前は・・・」

すると、蘇ったリュウオーンを見た明石は険しい顔を浮かべてこう言った。

「やはりお前達だったのか。リュウオーン・・・そしてジャリュウ一族」

「おお・・・久しぶりだなボウケンレッド。いや、明石暁」

ヴィータはリュウオーンと睨み合う明石に近づき端的に尋ねる。

「何なんだあいつは？」

「奴はジャリュウ一族の長、リュウオーン。爆発に巻き込まれ死んだはずだった――――――」

ジャリュウ一族

恐竜や伝説の動物のクローンを使いプレシャスを強奪する集団で、約２００年前に誕生した。

恐竜遺伝子と掛け合わされた自分たちこそ世界を支配するに相応しいと考えており、力押しの戦法を好む。

ボウケンジャーとプレシャスを狙って戦い、その結果ボウケンジャーに敗北した。

「ああ、死んださ・・・一度な。しかし、今ここで虚無の底から舞い戻ったのだ。これの力でな――――――」

リュウオーンは徐に胸部に埋め込まれた黄泉の心臓に手を翳すと、黄泉の心臓は反応し眩いばかりの光を発し、三人は思わず目をそらす。

「あれは・・・」

「黄泉の心臓。俺達が回収しようとしていたプレシャス、ロストロギアだ。死者を蘇らせ、無限の力を与えるという。」

「ちょうどよい。蘇った我が力、試させてもらおう。ふん！」

リュウオーンは目にも止まらぬ速さで三人の前を通り過ぎると、三人は攻撃もする間もなく吹き飛ばされる。

「「「う！」」」

「さらばだ明石暁。どこぞの馬の骨と共に死すがいい！」

そう言うと、リュウオーンは無限に供給される力から生み出した火炎弾を、三人のいる天井へと発射し、その瞬間天井は崩れ落ち三人はそれに巻き込まれてしまった。

「「「うわああ！」」」

三人の運命は如何に！？

◇

〈ギンガＳｉｄｅ〉

三人が不測の事態に陥ってるその頃、ジャリュウ一族と戦闘を繰り広げるギンガだったが、漸く吉良達もボウケンジャー四人の治癒が完了し、真摯に事情を離して休戦協定を結ぶと、ボウケンジャーと協力して隊舎に当たっていた。

「破道の五十四『廃炎』！」

吉良は指先から廃炎を放ち、ジャリュウ一族を吹き飛ばし、ボウケンジャーも先ほどのような失敗はしないとばかりに負けず劣らずの戦いを繰り広げていたその時、事態は急変。

唐突に彼らの元に火炎弾が飛んで来た。

「「「うわああ！」」」

「「「「何！？」」」」

全員が飛んできた方に目を向けると、現れたのは黄泉の心臓の力で復活したリュウオーンだった。

「おお・・・なんと素晴らしい力」

「あれは・・・！」

「まさか、リュウオーン！」

「どうしてあれがここに？」

「見てください。黄泉の心臓を急襲されています・・・！」

予期せぬ事態に動揺を隠し切れないボウケンジャーと、何も知らないが途方もないものを感じ武器を構える吉良達。

リュウオーンはそんな彼らに目を合わせ、容赦ない攻撃を仕掛ける。

「ふん。我の前に立つものは、このプレシャスの力ですべて排除してやろう」

リュウオーンは黄泉の心臓の力を無限大に発揮させると、前方に佇む六課メンバーとボウケンジャー四人に凄まじいパワーを伴った気を発し、それを受けた七人は後ろへと吹き飛んでいく。

「「「「「「「うわあああああああ！」」」」」」」

七人は圧倒的な力の前に、為す術もなく倒れ伏し、リュウオーンは剣を取り出すと更に言う。

「ボウケンジャーだろうと誰であろうと、我の邪魔はさせぬ！」

復活したリュウオーンの復讐劇が、ついに始まりを迎えてしまった。

◇

〈ヴィータＳｉｄｅ〉

リュウオーンがボウケンジャーたちを襲い始めた丁度その時、岩の下敷きとなっていたヴィータ達が奇跡的に助かった様子で、ボロボロになりながらもゆっくりと目を開ける。

「う・・・」

起き上がった明石は、ヴィータとルキアの二人に安否を尋ねる。

「大丈夫か？」

「魔導師を・・・騎士を舐めんな」

「死神も同じだ。そっちはどうだ？」

「ふん。冒険者を舐めるな」

三人はそれぞれ笑ってお互いの無事を確認し合うが、事態は非常に深刻だ。

ヴィータはため息がてら呟く。

「しかしロストロギアは奪われた上に、ここに足止めじゃ、お前の言う冒険ってのも意味ねぇな」

すると、それを聞いた明石はヴィータに顔を合わせ意味深長な口ぶりで言って来た。

「意味がない？本当にそう思うのか？」

「何が言いたい？」

「お前たちは今まで数々の冒険をしてきたんだろう。その冒険は宝から以外に、大事な何かを齎してきたはずだ。お前たち自身にな」

「私達自身に・・・」

「冒険者は目の前に困難が立ちはだかったときこそ、心が奮い立つ。冒険をする喜びこそ、かけがえのない宝なんだ。お前もそうじゃないのか？」

「冒険する・・・喜び・・・」

ヴィータはそれを聞かされると、再び脳裏になのはと行った初めてのロストロギア任務の時の事を思い出す。

『やった！ヴィータちゃん、見つけたよ！』

『おう！やったぜ！さ、さっさと戻って任務完了だ！』

『うん！』

精神的にも今よりもずっと幼かったヴィータもなのはも、ロストロギアでありながら宝を見付けだした時の喜びは計り知れないものだった。

ヴィータはその事を明石に思い出させられると、鼻で笑いながら呟く。

「・・・たく。説教臭せー奴だ」

ルキアも妙に嬉しそうな様子のヴィータを横で見ると、自分もまた鼻で笑う。

「ふん。それで、あの黄泉の心臓とやらはどうするのだ？」

「リュウオーンの体に吸収された以上、回収は不可能だ。破壊するしかない」

と、ここでその言葉に口を挟んだのはヴィータだった。

「いや。まだ終わってねぇ。」

「何？」

「見せてやるぜ。私らの・・・機動六課の流儀をな！」

「そうだな」

ヴィータの言葉に応えてルキアも立ち上がると、二人は閉ざされた岩を破壊するために武器を手に取る。

「行くぜ、アイゼン！」

「舞え、袖白雪！」

二人は力を解放すると、岩壁の破壊を始め脱出を試みる。

「「「ぐあああああ！！」」」

「「「「のあああああ！！」」」」

三人が脱出を試みている間、リュウオーンと対峙していた六課メンバーとボウケンジャー四人はあまりの強さに圧倒され、強制的に変身が解除され完全に圧倒されてしまっていた。

「ははは！無残だな！」

「く・・・！」

「強い・・・」

険しい表情を浮かべながらその場から立ち上がろうとする七人。

リュウオーンは止めを差そうと剣を振りかざす。

「散れ。蘇えりし我が力の前に」

だが、その直後リュウオーンの剣に向かって鬼道が飛んで来た。

「破道の一『衝』！」

「！」

リュウオーンは剣を落として飛んできた方に目を向けると、現れたのは脱出を果たしたヴィータ、ルキア、そして明石の三人の姿だった。

七人は三人の姿を見た途端、声を上げる。

「「「ルキア（朽木）さん！ヴィータ（副隊長）！」」」

「「「「チーフ（明石）！」」」」

「生きていたのか。大人しく死んでいればいいものを」

「ふん」

鼻で笑いながら、三人は七人の元へと歩み寄り、リュウオーンは剣を拾い直して彼らに切っ先を突き付ける。

「我に勝つことがいかに困難であることか、教えてやる必要があるそうだな」

すると、それを聞いた途端ヴィータは鼻で笑いながらこう言う。

「目の前に困難が立ちはだかったときこそ、心が奮い立つらしいぜ！」

「その通りだ。行くぞ、みんな」

明石は四人にそう促すと、ゴーゴーチェンジャー取出しボウケンジャーの姿へと変身する。

「「「「「スタートアップ！」」」」」

ボウケンジャーが変身を遂げると、機動六課前線メンバーも加わり計１０人態勢による戦いが始まろうとしていた。

「ぶっ潰してやる！」

ヴィータはグラーフアイゼン片手に明石と共に走りだし、他の者達も二人の援護を中心にリュウオーンに攻撃を仕掛けていく。

「行くぜ！」

ヴィータが声を上げてそう促すと、ルキア・吉良・マリア・ギンガ、そしてボウケンジャーの五人が一斉攻撃を仕掛ける。

「次の舞・白漣！」

「破道の五十八『？嵐』！」

「華桜拳・飛翔！」

「ストームシュート！」

「「「「「サバイバスター！」」」」」

だが、その一斉攻撃でさえも黄泉の心臓の力を得たリュウオーンにとっては造作もなく、軽々と剣で受け止めてしまうとそのまま攻撃を彼らに跳ね返してしまったのだ。

「「「「「「「「「「ぐああ！」」」」」」」」」」

「黄泉の心臓を得た我に敵うものなどおらぬ！」

「やっぱ並の強さじゃないよ」

「面白い。ちょっとした冒険だな」

「ああ。行くぜ、アイゼン。久しぶりに派手にいくぜ」

ヴィータはそう言うと、アイゼンを第三形態へと移行する。

〈Ｇｉｇａｔ　ｆｏｒｍ〉

そして、ボウケンジャーのブルー、ピンクが専用武器より攻撃を仕掛ける。

「ナックルキャノン！」

「シューターハリケーン！」

飛んで来た攻撃を軽々と剣で切り裂くリュウオーンだが、そんなリュウオーンに突進するブラックとイエロー。

「ハンマーブレイク！」

「スクーパーファントム！」

リュウオーンは刀身で二人の攻撃を受け止め、二人を退かせるが、その後ろから絶妙のタイミングでレッドがボウケンジャベリンを突き立てる。

「レッドゾーンクラッシュ！」

「うわ！」

リュウオーンは寸でのところでレッドの攻撃を受け止めると、彼の

考えを読み取り黄泉の心臓の一歩手前のところで言う。

「お前の狙いは分っている。黄泉の心臓を破壊させると思うか！終わりだ。おおおおおお！」

リュウオーンはボウケンジャベリンの矛先を掴んだまま強引にレッドを放り投げようとするが、これを狙っていたレッドは鼻で笑いボウケンジャベリンの矛先を収める。

「今だ！」

ボウケンボーとなったそれでリュウオーンの手首を固定し、リュウオーンは驚愕の表情を浮かべる。

「ぬお！何！？」

「まだ終わりじゃないさ。ヴィータ！」

「おおよ！」

そう言うと、明石の言葉を聞いたヴィータがギガトンハンマーをリュウオーン目掛けて振り下す。

「ギガトンシュラーク！！」

ヴィータが繰り出す強烈なハンマーをその身に受けると、リュウオーンは吹き飛びふらふらとなって立ち上がる。

「おのれ、冒険者ども目・・・！」

ヴィータはアイゼンを肩に乗せる傍らリュウオーンの目の前に立ち、こう言った。

「悪いな。私らは時空管理局の魔導師・・・もとい鉄槌の騎士ヴィータとここにいる連中は唯の冒険者じゃねェ。その心臓貰った！」

ヴィータは自分でも無鉄砲と分かっていながらも、リュウオーンの胸部に埋め込まれた黄泉の心臓を握りしめると、発生する凄まじい反発力に堪えながら見事心臓を抉り抜くことに成功する。

「うらあああああ！」

「ぐおおお！」

読みの心臓を抜き取られたリュウオーンは急に力が抜けてしまい、その場に倒れる。

「やったぜ！」

ヴィータは勝ち取った黄泉の心臓を掲げるように全員に見せると、全員は笑みを浮かべ明石はそんなヴィータに親指を立てる。

「グッジョブだ！」

だが、その時倒れていたリュウオーンが再び起き上がり、彼ら十人に目を向けて来た。

「く・・・おのれ・・・・」

「な！」

明石はこれを見ると、直ぐにこう呟く。

「奴の体にはまだ、黄泉の心臓の再生能力が残っている。今のうちに倒すぞ」

「はい。私が行きます。」

ギンガはそう言うと、トライアルカートリッジを作動させ、マキシマムモードに変形させてスイッチを押し、それを空中に投げ捨てた瞬間勢いよくリュウオーンの懐に飛び込み「T」の字を描くように連続で横蹴りを叩き込み、宙に舞っていたトライアルカートリッジを収めスイッチを押すと、そのタイムを読み上げる。

〈Ｔｒｉａｌ　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ〉

「9．7秒、それがあなたの絶望までのタイムよ。」

「ぐ・・・ぐあああああ!!!」

リュウオーンはギンガの攻撃を受けると、黄泉の心臓のエネルギーが暴走を起こしてしまい、誤って巨大化を促してしまった。

「マズイ!再生能力が暴走している」

「マジかよ・・・これ!」

一同は巨大化を果たし、理性を失った暴走状態のリュウオーンを見上げるが、直ぐにボウケンジャーは動き出す。

「ダイボウケンで対抗する。行くぞ！」

ボウケンジャーはゴーゴーチェンジャーで待機させていたゴーゴービークルＮｏ．１からＮｏ．５までを呼び出し、搭乗するや否や合体シフトへと移行する。

「「「「「轟轟合体！」」」」」

全員は声を合わせると、ゴーゴーチェンジャーのコマンドを入力、ゴーゴータービンを回転させ、合体シフトを作動させる。

〈合体シフトオン！ＤＵＭＰ・ＦＯＲＭＵＬＡ・ＧＹＲＯ・ＤＯＳＥＲ・ＭＡＲＩＮＥ　ボウケンフォーメーション〉

五体のゴーゴービークル達はそれぞれの部位に合わせて形を変えていき、全高４７メートルを誇る巨大ロボ、ダイボウケンへと姿を変える。

「「「「「ダイボウケン。合体完了！」」」」」

傍らそれを見ていたヴィータ達はこの間のカクレンジャー同様、その迫力に圧倒される。

「すげえ・・・！」

「やっぱり巨大ロボってのは格好いいよね」

そんな事を呟きながら二体の勝負を見守るヴィータ達。

黄泉の心臓を失い暴走状態となったリュウオーンは咆哮を上げてエ

ネルギーの余波を放出する。

「ウオオオオオオオオオオオ！！！！」

ダイボウケンはその余波に後ずさり気味になりながら、果敢に立ち向かう。

「ファーストギア・イン！」

ダイボウケンは基本装備のピッケル上の武器、ゴーピッカーで地面を叩き、震動攻撃を行うが、リュウオーンはそれをものともせず、黄泉の心臓の暴走によって悪戯に攻撃を仕掛け、ダイボウケンを苦しめる。

「「「「「おわあああああ！」」」」」

操縦をしていたボウケンジャーは険しい表情を浮かべて衝撃に耐える。

「野郎・・・ふざけやがって！」

「どうするのですか、チーフ？」

「・・・」

明石はいつになく顔を仕掛けこの事態にどう対処するかを考えていると、そんな明石にヴィータが声をかけて来た。

「明石！」

「？」

ヴィータはダイボウケンの近くに飛んでくると、ＩＰカートリッジを使用し、ダイボウケンサイズにまで巨大化したグラーフアイゼンを手渡し、明石達は一瞬と戻った。

「これは？」

「使ってみろよ。ちょっとした冒険って奴だ！」

「ヴィータ。・・・・・そうだな。行くぞ」

「「「「はい」」」」

ボウケンジャーはヴィータより渡されたグラーフアイゼンを握りしめると、暴走するリュウオーンの懐に飛び込み豪快にハンマーを振り回す。

「ぐあああああ！」

リュウオーンはその攻撃を受けると、かなり効果があったらしく後ろに倒れ込み、この一瞬の隙を見たボウケンジャーは一気に畳み掛ける。

「グラーフアイゼン！ゴーゴークラッシャーシュラーク！」

ダイボウケンは振りかざしたグラーフアイゼンを渾身の力を込めてリュウオーンの頭上から叩きこむと、リュウオーンは絶叫しながらその体を光子へと変換していく。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！」

リュウオーンが敗れ去ると、ヴィータ達もガッツポーズを掲げた。

「「「やった！」」」

「今回は、お前のお蔭だな。ヴィータ」

「ふん。どんなもんだい！」

戦いが終わり、ボウケンジャーは回収したプレシャスを厳重に封印すると、それをチーフである明石が手に取り、ヴィータの手の中に収める。

「世話になった。黄泉の心臓は、お前たちが持って行け」

「え・・・いいのかよ？」

「お前たちになら、任せても安心だからな」

「――――ああ。分かった。」

ヴィータと明石は互いに笑みを浮かべると、固い握手を交わし、その後ろの方で見ていたボウケンジャー四人は昼間の事を謝罪してきた。

「ご無礼を働き、申し訳ありませんでした」

「いいよ。気にしてないから」

「明石。ありがとな、色々と」

「ふん。忘れるな。その冒険する喜びを」

「分かってるよ」

ヴィータはそう言って黄泉の心臓を手に運ぶと、ルキア達四人を引き連れ夕餉の道を歩いて行き、機動六課へと戻るのであった。

ヴィータ達がその場から立ち去った後、真墨は清々しい顔の証に徐に尋ねる。

「本当に良かったのかよ、明石？」

「お前も心配性だな。大丈夫だ。俺の勘に狂いはない」

「って、勘でプレシャス渡しちゃったのかよ！？」

「ふん。ははははは！」

不滅の牙の明石暁と鉄槌の騎士のヴィータの間に冒険をする中に生まれた確かな絆。

またどこかで冒険する心が彼らをめぐり合わせるかもしれない――

――――

轟轟と冒険者と躍る心（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はボウケンジャーについて教えるね♪」

「『轟轟戦隊ボウケンジャー』は、２００６年（平成１８年）２月１９日から２００７年（平成１９年）２月１１日までテレビ朝日系列で毎週日曜７時３０分から８時００分（ＪＳＴ）に全４９話が放送された、東映制作の特撮テレビドラマ、および劇中で主人公たちが変身するヒーローの名称で『スーパー戦隊シリーズ』の第３０作にあたる。」

「モチーフは『冒険』『トレジャーハンティング』であり、地球に眠る宝『プレシャス』を巡る、正義と悪の争奪戦を描く。大きな特徴が、戦隊の目標が『敵組織の打倒』ではなく、敵との戦いは『プレシャスを悪事のために狙う者の排除』として展開されている。」

一「そう言えばかなり久しぶりじゃねぇか。ヴィータを中心にした話を書いたのって。」

な「『小さな破壊神』からあんまり書かれなかったもんね」

ユ「ま。ヴィータの話って結構考えずらいんじゃないのかな。何しろ背丈もあるけど、精神的なものもあるし」

ヴィ「おい！どういう意味だよ！お前までまだ私がガキだっていうのかよ！」

暁「なんだ?その顔で大人だと言うつもりじゃないだろうな。」

ヴィ「てめぇも真顔で私のバカにしてんじゃねぇぞ!!」

ヴィータはそう言うと、思い切り力を込めて明石の向う脛を蹴った。

明石は顔を真っ青にして絶叫する。

暁「ぐあああああああああああああ!!!!!!」

心配するユーノ達を余所に、いつまでも癇癪を抱くヴィータだった。

ヴィ「ふん!ざまぁみやがれ!」

魔導師図鑑ハイパー!

ス「マリアさん、マリアさん!マリアさんって凄い力持ちじゃないですか。どうすればそんなに鍛えられるんですか?」

マ「え~そうですわね。私はこれと言って特別な事はしてないのですが、強いて言えばユーノ様への愛の力がなしえたモノでしょうか~~~?」

すると、それを聞いた瞬間なのはが魔王モードで現れる。

な「小鳥遊・・・またユーノ君のことを・・・!!排除!!」

ユーノへの嫉妬心が人一倍強いなのはにとって、マリアは排除すべき存在だった。

レイジングハートを構え、砲撃を放とうとしたその直後だった。

マリアが何気なく辺りを見渡すと、なのはの足元にゴキブリが徘徊していた。

マ「きゃああ！ゴーキブリ！！！！！！」

マリアはその場に遭った重さ5キロほどのオブジェをなのは目掛けて投げつけ、なのはは目を点にして飛んできたそれに驚いた。

な「えええええええええええええ！！！！ちょ！！！こないで！！！！！！！！」

なのはは素に戻るや否や、飛んで来たオブジェに激突し気を失った。

だが、壁を貫通するほどの破壊力を持ったマリアの馬鹿力に流石のスバルも目を疑った。

ス「か、壁が抜けた・・・！」

マ「あちゃ～～～やってしまいましたわ・・・」

あとでマリアは壁代の弁償をするのだが、それ以前になのはは全治一週間と言う大怪我を負ってしまった。

な「何で私が・・・・・・／／／／／／」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

プ「輸送するセルメダルは五千枚」

ア「見つけた。俺のコアだ！」

カ「小鳥遊万梨阿。、彼女、輸送車に閉じ込められるよ」

ユ「なんでこんなに集合してんの！？」

ア「コアメダルのためなら、俺は同族だろうが消す！」

第１６５話　メダル争奪と輸送車と器

ボウケンジャー篇

サージェス財団

正式名称は“ＳＧＳ－ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ”。世界各地で失われかけている貴重な宝を集める民間団体。通称サージェス。ＳＧＳは、Ｓｅａｒｃｈ（探す）、Ｇｕａｒｄ（守る）、Ｓｕｃｃｅｓｓｏｒ（受け継ぐ）の略語。「サージェスミュージアム」という博物館を所有し、収集した宝物を展示しているが、危険度の高さゆえに「プレシャス」の存在は一般人には明かされておらず、展示もない。博物館の内部にはボウケンジャーの基地もあり、メンバーが待機するサロンの他に、机やベッド付きのメンバー用個室も備える。

轟轟戦隊ボウケンジャー

プレシャスを保護・管理するためにサージェスが組織した精鋭部隊。その基本任務はプレシャスの回収だが、プレシャスが暴走して周囲に危害が及ぶ恐れがある場合などにはその破壊も任務に含まれる。また、「任務中はコードネームを使用する」との基本規則があり、変身前でも任務中であればコードネームで呼び合うことになっている。任務中か否かに関わらず明石は蒼太・菜月・さくらからは「チーフ」と呼ばれる。平時メンバーは、表向きは博物館の学芸員として働いていることになっている。

登場人物

明石　暁／　ボウケンレッド

声：高橋光臣

２４歳。「熱き冒険者」の異名を持つボウケンジャーのチーフ。「不滅の牙」と呼ばれる程の凄腕のトレジャーハンターだったが、ボウケンジャーの結成に伴いトレジャーハンターを引退している。ミッション開始時に指を鳴らして「アタック」、メンバーが手柄を立てた時は「グッジョブ」と言う。冒険を愛する心を大切にしており、ことある毎に「冒険（「こいつは、ちょっとした冒険だな」）」という言葉を口にする。大きなピンチにも動じず冷静に対処する大人の落ち着きを見せる反面、時折子供のように無邪気な様子を見せたり、さくらが自分に恋心を抱いていることに全く気付かないという鈍感な面もある。

伊能　真墨／　ボウケンブラック

声：齋藤ヤスカ

２１歳。「迅き冒険者」の異名を持つ。少年時代からトレジャーハンターとして活動しており、若くして伝説のトレジャーハンターとなった暁に対してライバル心を燃やしている。ボウケンジャーへの加入も暁と勝負するためで、当初は勝負に勝った後は抜けるつもりだったが、暁の言葉を受けボウケンジャーに残る。「任務中はコードネームで呼び合う」というルールに従わなかったりと他のメンバーとやや距離を置くことが多いが、オカルトやグリーンピースが苦手という幼い面もあるが、正義感が強い一面もある。暁をライバル視する一方で、他のメンバーが暁の言動に疑問を抱いた際には逆に擁護するなど、根底では暁を信頼している。

最上　蒼太／　ボウケンブルー

声：三上真史

２３歳。「高き冒険者」の異名を持つ。元はフリーのスパイで、当時は命懸けの危険を冒すスリルを味わうために何の罪悪感も持たずに幾つもの企業や国家を崩壊させた。しかし、ある事件をきっかけに自身が知らぬ間に多くの人々を傷つけていたことや、自分が酔いしれていたスリルには何の価値もないことに気付き、大きなトラウマとなったことで廃業。その後、「前に進む」ためサージェスに身を投じボウケンジャーとなる。趣味はギター演奏。女性には優しいが、敵味方問わずであるため、プレシャスを簡単に奪われたりするなどピンチを招くことが多い。普段は気さくなムードメーカーに徹しているが、元スパイならではの常人離れした強い精神力を持つ（しかし前述のトラウマを突かれると動揺する。敵にそのトラウマを利用されたこともある）。スパイ時代のノウハウを生かした情報収集はプレシャス探索に大きく貢献する一方で、仲間の情報も収集せずにいられない悪い癖を持つが、後に克服する。一人称は「僕」。

間宮　菜月／　ボウケンイエロー

声：中村知世

１９歳。「強き冒険者」の異名を持つ。２年前にある遺跡で気を失っていたところを真墨に助けられて以降、彼とともに行動していた。真墨と出会う以前の記憶がなく、唯一の手がかりである腕輪を調べ、過去を取り戻すためにボウケンジャーに加入する。過去を知らない不安を抱えているが、心は純粋な少女のまま身体だけ大きくなったが如く、普段は明るく天真爛漫な性格でそのことを感じさせず、むしろ自分そっちのけで仲間を励ます優しさを持つ。一般常識に疎く、冒険者としての基本である地図を見て目的地を目指すことも苦手であり、真墨からも「一人じゃ電車にも乗れない」と評されている。お人好しで、ドジを踏むことも多いトラブルメーカーだが、それがプレシャスの手掛りに繋がることも。「ミッション中はコードネーム」というルールをあまり守っていないためさくらによく注意されるが、他のメンバーがそのルールを忘れると「ミッション中はコードネームです！」とツッコミを入れる調子の良い一面もある。外見とは裏腹にメンバーで１番の怪力・強靭な体力や予知能力のような力をも持つなど、謎めいた面も持つ。

西堀　さくら／　ボウケンピンク

声：末永遥

２２歳。「深き冒険者」の異名を持つボウケンジャーのサブチーフ。世界有数の資産家である西堀財閥の一人娘だが、「やりたいことを見つけるため」に陸上自衛隊に入隊し、特殊部隊を経て射撃のオリンピック候補にまで登り詰める。その後、明石にスカウトされてボウケンジャーに加入する。主に分析や作戦を担当し、緊急時の冷静な判断力は自分を凌ぐと明石からも評されるが、やや生真面目すぎる面もある。そのため仲間にも丁寧語で話したりしていたが、後に菜月や真墨を呼び捨てで呼ぶようになり、自然に笑えるようになる。

明石不在時には代わりに指揮を執るが、その真面目さゆえ全責任は自らにあると思いつめる。その判断力や真面目さは指揮する側に立つよりも、指示を受け自らの持つ技能全てをもって任務を遂行する側にまわる際に真価を発揮すると、さくら自身自覚している。また、柔軟性と身体能力が高いため水泳と新体操が得意。　自分に的確な指示を与えてくれる明石には信頼と深い尊敬の念を持ち、常にチーフとして自分に命令して欲しいと願っているが、それ以上に恋愛感情に近いものを匂わせる描写もある。さくら本人にもその自覚は有るようだが、真面目な性格ゆえかそれを表に出さずに抑え込もうと努めており、それに気付いている他のメンバーからネタにされイジられることも多く、普段から冷静なさくらもこれにはタジタジになってしまう。

ジャリュウ一族

恐竜や伝説の動物のクローンを使いプレシャスを強奪する集団で、約２００年前に誕生した。恐竜遺伝子と掛け合わされた自分たちこそ世界を支配するに相応しいと考えており、力押しの戦法を好む。組織のシンボルカラーは赤で、顔出し幹部は存在しない。

創造王リュウオーン

声：森田順平
ジャリュウ一族の長。プレシャスを手に入れるためなら手段を選ばず、部下を平然と捨て石にする冷酷な性格。戦闘時には主に二振りの剣を使用し、額部や手腕部から光線を撃つこともできる。手にしている拳銃は単なる武器としてだけでなく、生命エネルギーを注入し邪悪竜を巨大化させることもできる（それ以外の方法で巨大化した邪悪竜もいる）。元々は人間で、２００年程前まではレムリア文明を調べる学者であったが、財宝に目が眩んだ仲間により裏切られ

無人島に置き去りにされる。このことがきっかけで人類を憎み、滅ぼそうと決意。自身が集めたレムリア文明の文献を調べる過程で、レムリアの秘宝である幻獣の製造方法とプレシャスである「レムリアの兜」を発見し、その技術を利用して現在の姿になる（レムリアの兜は外観を改造されて、後に「リュウオーンの兜」と改名されている）。嘗ての戦いで一度は死を迎えたが、死者を蘇らせ、無限の力を与えるとされるプレシャス「黄泉の心臓」をジャリュウが見つけ出したことで復活を果たす。この時、胸部に黄泉の心臓が埋め込まれており、左半身の角や腕などが不完全という外見上の違いがある。黄泉の心臓が生み出すエネルギーを吸収することであらゆる身体能力が強化。必殺技である「」を跳ね返すなど機動六課とボウケンジャーを圧倒する強さを発揮するが、ヴィータに黄泉の心臓を奪われてしまう。直後、残ったエネルギーを振り絞りながら立ち向かうもギンガ・ナカジマのトライアルモードの「」を受けたショックで黄泉の心臓の再生機能が暴走し、理性を失った化け物として巨大化。ダイボウケンらを追い詰めるが、ボウケンジャーの大いなる力により呼び出されたダイボウケンの幻影による攻撃を受け、さらに続けざまに放たれた「ボウケンクラッシャーシュラーク」を受けたことで再び倒された。

竜人兵ジャリュウ

声：西脇保

リュウオーンが自らの血から造り出したジャリュウ一族の民にして兵士。リュウオーン製幻獣においてベースとなる存在。言葉を喋るなど知能が高く、兵器の操縦や大邪竜の製造なども行う。武器は赤い剣。体から大量の毒トカゲを生み出すこともできる。主であるリュウオーンをプレシャス「黄泉の心臓」で蘇生しようと暗躍。見つけ出した心臓を使い、リュウオーンの復活に成功するが、その時の閃光を浴びて消滅した。

巨大メカ

ダイボウケン

全高：４７ｍ　全幅：３５．７ｍ　胸厚：２１．９ｍ　重量：３００ｔ　出力：１２００万ｈｐ／ｔ

Ｎｏ．１　－　Ｎｏ．５の５台のゴーゴービークルがボウケンフォーメーションで轟轟合体した巨大ロボット。身体の各箇所に動力源（パラレルエンジン・ネオパラレルエンジン）が分散されている。また、胸部のパネルからプレシャスの力を取り出し、ダイボウケンの能力に変換することも可能。エンジンはＭＴ（マニュアル式）のようで、エンストを起こすこともあるらしい。

装備

ゴースコッパー

スコップの形状をした武器。敵への攻撃やゴーゴーミキサーに土砂を入れることにも使うが、本来は発掘用の道具。しかし、威力は相手をその周りの地面ごとひっくり返してしまう程で、これを使って掘り返した土砂は敵に当たるとなぜか爆発する。

ゴーピッカー

ピッケル（つるはし）の形状をした武器。ゴースコッパーと同じく、敵への攻撃用にも使うが本来は発掘用の道具。地面に突き立てることで敵に衝撃波をぶつけることもできる。

轟轟剣

ゴースコッパーとゴーピッカーが合体して生まれる巨大な剣。

必殺技

アドベンチャードライブ

５基のパラレルエンジン（ネオパラレルエンジン）のパワーを全開にして放つ必殺技。全身から発生したエネルギーを轟轟剣に集めて敵を切り裂く。

その他の登場人物

セイン（Ｓｅｉｎ）

声：水橋かおり

ナンバーズの６。水色の髪に愛嬌のある幼気な風貌の少女。純粋培養ではあるが突然変異。潜入と秘密工作に特化したＩＳ故に仲間内では非常に重宝されている。ナンバーズとして稀に見る明るくポジティブな性格で、言動もかなり子供っぽい。ナンバリング・誕生次期共にナンバーズの中間にあたり、その性格も相まって姉達と妹達の緩衝役をこなす。だがマイペースな所があるためか妹達から姉扱いされていないことを気にしている。ウェンディとは性格的に気が合うとの事。固有武装は指先に付いた極小のカメラ「ペリスコープ・アイ」で、ＩＳは無機物に潜行する「ディープダイバー」。ＪＳ事件ではシャッハと一対一で戦闘、後に逃走を図るもののシャッハに先回りされ撃破・保護された。その後海上隔離施設で更生プログラムを受け出所した後は、聖王教会の一員となり、シャッハの側で勤めている。聖王教会を訪れている人達からは「シスターセイン」と呼ばれていて、修道騎士見習い。ちなみに、シスター服は本人の意見で半そでになっている。

メダル争奪と輸送車と器（前書き）

より強いものは支配すべきであり、より弱いものと結合して、そのために自分のすぐれた点を犠牲にしてはならない。ただ、生まれつきの弱虫だけが、このことを残酷だと感じるにすぎない。

Ｂｙアドルフ・ヒトラー

メダル争奪と輸送車と器

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

９５０年前に作られ、１５０年前に封印された、人の欲望から作ら

れたメダルの怪人・グリードが復活。

持っていたはずのそれぞれ9枚のコアメダル

そのすべてを手に入れるのは、グリードか・・・ユーノか・・・あるいは人の欲望か

その先に待つものは果たして・・・

〈Ｋｏｇｅｔｕｋｅｎｂｕ〉

ユ「必殺！！“弧月拳舞（こげつけんぶ）”！！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚　ゾウ一枚　ゴリラ一枚　サイ一枚　ウナギ二枚

〈カリ・ユガＳｉｄｅ〉

第７管理世界「リヴァプール」。

ここを拠点とし、複数の管理世界に提携組織を立ち上げる有数の巨大財団「カリ・ユガファウンデーション」。

この財団を組織し、広域次元犯罪者「ジェイル・スカリエッティ」と結託、巨額の資金提供をしているのがこの男。

預言者でありながら、類まれなる頭脳で世界にその名を轟かせる財団をまとめ上げる会長、その崇高な使命に「世界の終末」を掲げるのがカリ・ユガである。

カリは、会長室に掲げられた週末の絵を見る傍ら、手の中に握られた今回グリードが目覚めるのと切っ掛けに頭に刻まれた予言を書きつづったものを見ながら、徐に口にする。

「予言はやはり覆りそうにありませんね。まぁ仕方ないでしょう――――」

カリはそう言うと、机の上に座っていた人形を手に取り方に乗せると一人更に呟く。

「さて、予言の前にどうしても一度確かめたいものです。メダルの本当の力・・・――メダルをすべて一つの器に集中させたそのとき、その片鱗だけでも！」

終末の絵を見ながら自らの欲望とそれに準ずる使命に心ふるわせていると、話を聞いていたグリードの一人で、カリと結託した人間体のカザリが現れ返事をする。

「やってみようよ。」

カザリはカリの視線を浴びると、軽い身のこなしで机の上へと乗っかり、更に言う。

「試すぐらいならできるんじゃない？」

「・・・・・・」

カリは黙して語らず頭の中でこの後の実験のプロセスを組み立てていく。

一体カリの言うメダルの器とは、どういったものなだろうか？」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

そんなカリとは対照的に、機動六課の司令室の方では現在ユーノを始めとする前線メンバーに加え、午後からの休暇を利用して六課を訪問していた一護と織姫達を加えた総勢２５名はこれまでユーノが獲得してきた完現術コンボを改めて見直しながら、ユーノの話に耳を傾けていた。

「これまで手にした完現術コンボは、現在５つ。最初に手にしたのはピラニアヤミー戦で使った剣心さんと弥彦の『不殺の侍魂』。次に銀さんの『白夜叉』。クダモンの『深紅の聖騎士』。そして柊沢さん、小狼さんの『黒魔術師』に『翠の虎狼』。」

ユーノは一通りの説明を終えると、結界印を手に取り蓋の裏に刻まれた完現術コンボの特徴を示す五つの紋章を凝視し、その傍らに立っていた一護も思わず声を漏らす。

「ったく。どれもこれも規格外な能力で、こっちは呆れかえっちまうな」

「でもユーノ君。本当に体の方は大丈夫なの？」

心配そうになのはが尋ねると、ユーノは飄々とした顔で呟く。

「心配ないって♪最近は大分疲れも出にくくなってきたからさ。この前みたいな事は多分ないと思うよ」

そう言うユーノに対して、肩の上で聞いていたユーノスは心配の拭えない顔だった。

「果たしてどうだがな・・・」

「心配性ですね、ユーノス元帥も」

「用心に越した事はないさ。ただ、これだけは憶えておいてくれ。いくら天賦の才能と軽すぎる魂の質量を有利に働かせ、コアメダルや絆の力を味方にしたとしても、一歩間違えればそれこそ・・・――お前が最も危惧する事態になりかねん。」

ユーノは真剣な眼差しで自分にそう言って来たユーノスの話を聞くと、口を籠らせ渋い顔で呟く。

「クシャナーダ化ですか・・・」

「！」

なのはを始め、この場にいる一同は目を見開き愕然とする。

ユーノ・スクライアの体に封じられている凶悪な力であり、彼自身の魂を蝕み続ける地獄の呪い、力の姿であるクシャナーダ化は六課メンバーにとって最も厄介な代物である。

万が一暴走が起こった場合、自分たちの力ではそれを止めることが出来ないのだから。

一護も織姫やコンに顔を合わせて険しい表情を浮かべると、ユーノ

の事を心配する。

「ユーノ・・・」

ユーノは自分の口からクシャナーダ化の事を口にすると、帽子を深々と被って顔を伏せるように前かがみとなって口を閉じる。

ユーノスはそんなユーノの耳元で渋い顔で口にする。

「あれになっては、グリードに食い尽くすされる前に・・・――この世界が終わってしまうぞ。十分気を付けることだ」

「ええ・・・――分かってます。」

ユーノも真摯にその言葉を受け入れ、返事を返す。

その瞬間司令室全体が重い空気に包まれ、全員の気持ちがブルーになりかけると、慌てた様子でスバルがこう言って来た。

「う・・・こ、こんな辛気臭い話はもうくらいにしましょうよ！それよりお腹空いちゃったからお昼にしません？今日は私達が作ろうかと思います！」

スバルがそう言うと、聞いていたティアナ達フォワード四人も便乗し言って来た。

「あの、よろしかったら食べてみてください」

「味の保障は出来ないですが、頑張ります」

ユーノは気を遣ってそのような事を言って来た四人の言葉に嬉しくなると、柔かい笑みを浮かべて返事をする。

「分かった。じゃあ、楽しみにしているよ♪」

ユーノが笑みを浮かべると、自然と周りの物の顔も綻びスバル達も一安心。

「よーし！そうと決まったら早速調理始めよう！」

スバル達はエプロンに身を包んで食堂の厨房を借りると、用意した具材をもとに五人掛かりで昼食を作り始める。

スバルは材料を切り分ける中、小皿に入っている複数の透明な液体に顔を動かし困惑した。

「えっと・・・これなんだっけ・・・」

一個を手に取ったスバルは真剣に掌の上で液体と睨みを続けていると、見かねたギンガが微笑みながら助言する。

「スバル。そう言う時はちょんと手先につけて嘗めてみると良いわよ」

「あ、成程。」

ギンガがそう言うと、自分の指先をスバルの持っている液体の表面に言って着付け、それを舌で味わう。

「いいこうしてね・・・・・うん。これは卵の白身だわ」

自信に満ちた様子でそう言うギンガだが、直後エリオは意気消沈とした様子で水を差す。

「ギンガさん・・・それお酢です」

「え！じょ、冗談だから・・・あはははは／／／／／／」

「本当に冗談なんですかね・・・」

ギンガは笑ってごまかそうとするが、聞いていたティアナたちは少々疑問を感じてしまった。

と、その時キャロがフランベを行ない香り付けをしようとするティアナの手元を見た瞬間、思わずその後の事態を危惧する。

「あ！ティアナさん、お酒が多いいんじゃ・・・！」

「え」

ティアナはギンガの事で気を取られてしまい、誤ってアルコール濃度の高い酒を入れ過ぎてしまい、その結果炎は予想以上に大きく燃え上がり、ティアナの顔に炎が横切り彼女は大声を上げた。

「ぎゃあああああああああ！！！！」

「てぃ、ティア！！！」

「大変！直ぐに消火器を・・・痛っ！」

キャロは慌てていたせいで、床に転がっていたリンゴの芯に足を取られてしまい、盛大に転がり込んだ。

「キャロ、大丈夫!?」

エリオは心配になってキャロに駆け寄り、その間にスバルとギンガの二人は顔中黒こげにしてその場にのた打ち回るティアナの状態を何とかしようとしていた。

「あちゃちゃちゃちゃちゃ!!!!誰か水を!!!」

「ティア!落ち着いて!!そんなに暴れたんじゃどうしようもないって・・・!」

「もう~~~執務官のあなたがこんなんじゃ誰がこの状況ツッコムのよ!?」

そんなフォワード陣のやり取りを、食堂の方で心配そうに窺うなのは達隊長陣と、その場の状況を見ていてギンガの言葉を聞き代わりにツッコミを入れる一護と白鳥。

「なんだこのぐだぐだな展開は・・・これじゃまるで日常コメディアニメじゃねぇかよ!」

「ティアナも何をしているのだか・・・今年で22のはずだがな」

聞いていたなのはとユーノは苦笑いを浮かべながらティアナの失敗フォローを入れたつもりでさり気に彼女の心を傷つけた。

「だ、大丈夫ですよ・・・偶に私もああいうおバカさん過ぎる失敗

しますから・・・」

「でもこれは流石にティアナとしては酷過ぎると思うよ・・・」

「スバル！！！早く水をわたしなさい！！ついでになのはとユーノ先生にはリボルバーシュートを！」

上司であり尊敬する二人であっても、この時ばかりは本気で許せなくなったティアナであった。

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

ぐだぐだなやり取りが行われている機動六課や、密かに秘密の計画を推し進めるカザリ、そしてもう一人スカリエッティと結託し独自にコアメダルとアンゴルモア収拾をしているのが、鳥のグリードアンクだった。

彼は多機能系端末を片手に、この世に蘇って初めて口にした中でも特に気に入ったアイスキャンディーを口にしながらある映像を見ていた。

「・・・・・」

真剣な眼差しで彼が見つめるもの・・・――それはアルハザードに向かわせたタカカンとバッタカンから送られてくるスカリエッティ達のやり取りだった。

スカリエッティはプレシアと共にリリスと向かい合い、彼女に次の

ような要請をしていた。

『メダルの輸送ですか？』

「ええ。輸送するセルメダルは５０００枚。リリスを含めた破面魔導虚隊は、車両にて護衛にあたって頂戴ね」

「ミスターカリからの要請でね、どうしても確かめたい実験があるためセルメダルを貸して欲しいとのことだ。持って行きたまえ」

そう言うと、スカリエッティは椅子から立ち上がり机の床下に隠していた５０００枚相当のセルメダルを取出し、リリスは思わず呟く。

「５０００枚・・・――――それだけのメダルを使っての実験となると、まさか・・・例のメダルの器にかかわるものじゃ・・・」

「リリス。いい機会だ。ミスターカリの御機嫌を取りたまえ。君の欲望のために」

「・・・・・・」

リリスはそれを聞くと口を籠らせ、自身の欲望とそれに反発しようとするプライドの間で板挟みな心境となる。

すると、ここでプレシアが送られてきた追加要件を見ると、ソファーから立ち上がり一枚の重要なコアメダルが入った小箱を手に取る。

「ジェイル。輸送要請に一件追加があったわ。コアメダルのレッドを一枚」

スカリエッティはプレシアから小箱をわたされると、意気揚々とした様子で声を上げる。

「けっこう！研究のためのメダルは惜しむべきじゃない。思うがままに欲望を曝け出すことは実に素晴らしい！ははははは！！」

スカリエッティはそう言いながら小箱の蓋を開ける。

そこに収められていたコアメダルの色と種類を見た瞬間、アンクは目の色を変え食べかけのアイスを放り投げる。

「見つけた。」

アンクはタッチパネルを操作し、画面を拡大するとそのコアメダルガ紛れもなく自分が探し求める自分自身のコアであることを確認する。

「俺のコアだ！」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

アンクが念願のコアメダルの発見に成功し、何かしらの行動を起こす数分前、機動六課のどたばた騒動はなんとか沈静化し、ティアナは結局あの後シャマルの元へと送られ顔中を包帯で巻かれると不機嫌そうにチャーハンを口に入れ、そんなティアナを見ながら前線メンバーは苦笑いを浮かべる。

ここまでは至って何も変わらず普通に昼食を食べていた一同だった

が、ふとここで、なのはがこの場に居ないマリアの事が気にかかり、思わず呟く。

「そう言えば、雌豚・・・いや！マリアさん・・・いないね」

雌豚と言う言葉に一瞬耳を疑うユーノだったが、確かに辺りを見渡してもマリアの姿は何処にも見当たらなかった。

「あれ？そう言えば全然見かけないね」

「そうだよね。いつもなら否が応でもユーノ君に飛びついて、私ともめてるはずなのにね。ひょっとして、今日は風邪でも引いたのかな～♪」

嬉々とした話すなのはを見ると、一護は苦い表情を浮かべる。

「その妙に嬉しそうな態度はまさしく悪魔か魔王だな・・・」

「なのは、駄目だよ。人の不幸を喜んだりしちゃ。」

「う・・・ごめんなさい」

ユーノに諌められ、若干意気消沈するなのはだが、直後先ほどのユーノの話意を聞いていたクロノは彼に詰め寄り嫌悪感に溢れた表情で言って来た。

「ほう・・・言うじゃないか。じゃあ僕の不幸を散々笑うのはどうしてだ・・・ああ！」

「え？だってお前って人間じゃないだろ。」

「人間だ！！お前こそフェレットもどきだろうが！！」

二人はなのはとマリアに負けず劣らずに性懲りもなく口論を始めると、それが段々エスカレートしていき武器を交えた本格的なものへと変わって行く。

慌てて局員たちが止めようとする中、吉良と恋次はそれぞれ呟く。

「この二人も、なのはさん達と似たようなものだよね。」

「ほんとおめぇらのそれはガキの喧嘩だな。」

「「「ガキ言うな／／／」」」

ガキと呼ばれることに、素早く反応してしまうユーノ・なのは・クロノの三人だった。

しかし、そんなやり取り以前にマリアは一向に姿を現そうとはしなかった。

「でも本当に連絡付かないんですか？」

「さっき伝令神機に掛けたのだが、繋がらなくてな。用事があるとは聞いていたのだが」

すると、その時ユーノス・スレイアの表情が一変し、ユーノスはユーノの肩に乗ると、そのままユーノの髪を引っ張りながら彼を誘導しようとした。

「えっ？どうしたんですか？」

ユーノはユーノスに引っ張られてその場を後にするが、食事を食べることに夢中になっていたはやて達は彼がその場からいなくなることに気づかず何時ものように話を続けた。

「どうしたって・・・私らに聞かないでよ。ユーノくん、おかわりい・・・・・・あれっ？」

「ユーノ君！？」

「あれ。今度はユーノまで消えちまった。」

「ユーノス元帥もですね～」

ユーノスがユーノを連れ出し何かを伝えようとしている中、スカリエッティの持っている己のクジャクのコアメダルを奪い返す為、早速行動に移そうとするアンクはと言うと。

「コアメダル！俺のだ！」

アンクは端末の情報を見ながら輸送車のルートを確認し、その途中で輸送車を待伏せるつもりで移動をしようとしていたが、その時不意に声が聞こえてきた。

「何処へ行く？」

「あ？」

アンクが徐に足を止めて振り返ると、瞳に映ってきたのは破面魔導

虚でありながらアンゴルモア捜索専任を任されているアスモデウスだった。

「お前は――――――」

「・・・――」

アスモデウスは無表情のままアンクを凝視し、アンクは舌打ちをしながら口を開く。

「ち。アスモデウスだったか。何の用だ？俺は忙しいんだ」

「だろうな。コアメダルの強奪・・・そのつもりなんだろう」

「だったらなんだ。俺の邪魔をする気なら、お前でも容赦しないぞ」

「勝てると思うのか？完全復活を果たしていない状態の貴様が俺に」

アンクは右手部分を怪人体へと変化させ、アスモデウスと暫く睨み合いを行うが、しばらくするとアンクは一度冷静になり、アスモデウスから伝わる強大な圧に今の自分が勝てる見込みはないと判断すると、戦う意志を放棄する。

「ち。お前との相手はまた今度にしてやる。命拾いしたな」

「お前がな。」

「言っとくが止めても無駄だぞ。俺はコアメダルのためなら、同族だろうが何だろうが消す！」

「ほう。俺はお前の欲望になど興味はないが、敢えて聞いてやる。何故コアメダルの全てを手に入れようとしている？何が狙いだ？」

すると、アンクは背を向けながら鼻で笑うと思いきやこう語り出す。

「ふん。所詮グリードなんてコアがないだけでボロボロ崩れる、やわな存在だ。」

「――――――」

「俺はもっと完全で、強い体を手に入れる。二度とバラバラにされてたまるか」

アンクはそう言うと、背中から翼を出現させ空へと羽ばたいていくと、アスモデウスの前から立ち去りアスモデウスもまた鼻で笑ってからその場を後にした。

「ふん」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方その頃ユーノはユーノスに連れられ、六課から少し晴れた市街地の一角で衝撃的な話を聞かされていた。

「えっ？大量のコアメダルが輸送車に？」

「ああ。正体不明の集団が、何処からともなくセルメダルの輸送を始めようとしている。行先はここ。お前にとってはあまりいい思い

出の無い場所だが――――――」

ユーノスはそう言うと、輸送車の行先を画面に表示させ、ユーノはそれを見た瞬間目の色を変えた。

「ここって！」

「管理世界の7番『リヴァプール』。ここで間違いないだろう。多分、あの男と何らかの関係があると俺は見立てているが」

「カリ・ユガ・・・――――」

その名を口にした途端、ユーノの顔が自然と歪む。

ユーノスはそんなユーノを一瞥しながら、肩の上で言う。

「ひょっとしたら今回の事で、セルメダルを集める黒幕の正体が分かるかもしれない」

「そうですね。じゃあ、試しに行ってみましょうか」

「よし。ちょうど奴らの輸送車が9番ポートからメダルを運び出す。下手に気づかれないよう、慎重に行動するぞ」

二人は輸送車の事を確かめるために、全員には黙って行動を起こし始める。

と、しばらく歩いている内にユーノがふとこんな事を呟いた。

「しかしメダルの輸送とは・・・何が目的なんでしょう？」

「さぁな。ただ、あからさまにそんな事をすれば、向こうもグリードにとっての標的となるのは自明の理だ。そうなったらお終いだ」

「ですが、本当にやるつもりですか？」

「今更怖気づいたか？お前らしくもない」

「そうじゃないですけど、何か一歩間違えれば強盗みたいになるって言うか・・・」

「それでもやるしかないんだ。覚悟を決めろ」

ユーノスがそう言った直後だった。

不意に二人の耳に聞きなれない男の声が聞こえてきた。

「そうだよ。やってあげなよ」

「「？」」

二人がその声に耳を傾けると、ちょうど目の前の柱の陰から帽子を被った金髪の青年が現れる。

ユーノスはその青年を警戒しながら渋い顔で尋ねる。

「なんだお前？」

「そっか。こっちの格好で会うの初めてだっけ」

青年がそう言うと、ユーノとユーノスはその声と喋り方、そして一瞬見えてきた怪人体のグリードの姿に驚きの表情を見せる。

「まさか・・・！」

「・・・カザリか。白昼堂々何の用だ？」

「メダルの輸送車を襲う理由・・・まぁ君たちの場合は止める理由かな。それならユーノ・スクライアにもあるって教えてあげようと思って」

「何？」

カザリは不敵な笑みを浮かべながらその場に腰を下ろすと、ユーノにとってあまりに衝撃的な内容の話を口にした。

「小鳥遊万梨阿・・・だったっけ？彼女、輸送車に閉じ込められてるよ」

「えっ！？」

思わず耳を疑ってしまうユーノ。

そんなユーノ達のやり取りの間に、アルハザードから出て来たリリスは人間に扮した破面魔導虚隊と共にセルメダル輸送のための準備に取り掛かっていた。

「オーラーイ！はい、ストップ」

輸送車を止め終えた破面魔導虚たちは、リリスに見守られながらト

ランクいっぱいに詰め込んだ計５０００枚のセルメダルの積み荷を開始する。

そしてこの時既に輸送車の誰も気づかれないような場所に、カザリに掴まり眠らされたマリアが居たのだ。

ユーノはその話を聞かされると、信じられないと言わん表情でカザリに尋ねる。

「まさか・・・嘘だろ！？」

「・・・――」

血相を変えたユーノに口を籠らせるユーノス。

カザリは徐に返事を返す。

「そう思うなら探してみれば。今日、彼女見た？」

「く！」

居ても経ってもいられなくなったユーノは急いでその場から走り出し、マリアの捜索を開始しなのは達にも連絡を入れ事態に当たる。

ユーノが走り出した後、残されたユーノスは不敵な笑みを浮かべたままのカザリにこう言ってきた。

「カザリ。俺達に何か仕掛けるつもりか？」

「そうだとしても関係ある？何聞いても君はやるしかない。大事な

コアメダルを然るべき場所に戻すのが七大元帥である君の責務だもんね。でしょ？」

「ち」

カザリはそう言うと、平然とした様子でユーノスの前から立ち去って行き、ユーノスは舌打ちをしながらユーノの後を追いかけていく。

それから暫くして、なのは達数名と合流を果たしたユーノは市街地を手分けして探し始め、彼女が日頃休日に買い物に来そうな店を手当たり次第に当たりだし、その都度写真を見せて聞き込みを続けた。

「この女性、見覚えありませんか？」

「ああこの人ね。それなら見ましたよ。ついさっきまでウチで買い物していましたから」

「そうですか。分かりました。どうも」

ユーノは頭を下げて俺を言うと、急いでその店から飛び出しこの事をなのは達に伝え、一同は一度待ち合わせ場所で合流を果たす。

「ユーノ！」

「ユーノ君、居た？」

「駄目だ。あちこち聞き込みもしたし、霊圧を辿ってるけどまるで反応なし」

「こっちも同じ。今、六課の方で広域スキャンをして探してるとこ

ろ」

「小鳥遊の野郎・・・まさかそんなことに」

「兎に角、僕とユーノス元帥で先に輸送車の方に向うから、みんなはこのまま引き続き捜索を」

「わかった。でも気を付けて。グリードが来る可能性だってあるんだから」

「うん」

と、その時輸送車の動きを監視していたユーノスが目の色を変えると、冷静な様子でユーノに伝える。

「ユーノ。輸送車が動き始めた。このまま市街地を出て、南東の転送射出ゲートに向かっている。急いだ方がいい」

「分かりました。じゃあ、行ってくる」

ユーノはそう言うと、なのは達が持ってきた自分の愛車「グリーンラベル」に搭乗すると、エンジンを全開にしてユーノスと共に輸送車の追跡を始めた。

二人がいなくなった後、残されたなのはや一護、恋次やルキアの四人は渋い顔を浮かべ、一抹の不安を掲げた。

「無茶はしないでね、ユーノ君・・・」

◇

〈リリスＳｉｄｅ〉

さて、その頃ミッドチルダの港を出発し、第7管理世界へと目指して輸送車の前後で声に当たるリリス達破面魔導虚隊の方はと言えば、順調に山道を走り続けていた。

助手席の方で周囲を警戒するリリスだったが、その時サイドミラー越しに映ってきた一台のバイクに目を奪われる。

「あら？」

リリスが目を見張ってそのバイクを確認すれば、それは紛れもなくユーノが運転するグリーンラベルであった。

リリスはユーノ達が追跡してきたことを確認すると、思わず不敵な笑みを浮かべる。

「（ふふ。来たわね。ブランク・オブ・デザイア。それにユーノス・スレイア。それにしても――――――）」

リリスはユーノ達の事を気にする傍ら、今回のメダルの輸送を要請してきたスカリエッティの出資者、カリの事に関して些かの不信を抱いていた。

「（ドクターのお気に入りとは言え、カリ・ユガファウンデーション会長ミスターカリ・・・彼の考えていることはやはり分らない。ユーノ・スクライアが第二のオーズである以上に、或いは――――――）」

リリスはそんな事を考えながら、順調に車を走らせて行き、その後ろの腕はバイクを操縦するユーノとユーノスの二人が各々頭の中で言葉を巡らせる。

「（必ず突き止めてやる。メダルを集めている黒幕の正体を――）」

「（絶対助け出すんだ。小鳥遊さんを）」

そうして追跡を続けること数分後。

陸橋付近に差しかかろうとした途端、前方を走っていたリリスの車は突然急停車し、リリスは目の前に映ってきた待ち伏せをしていた二体のグリード、ウヴァとメズールを発見する。

「！」

「渡してもらうぞ。そのたっぷりのセルメダル」

リリスは車から降りると訝しげな様子で呟く。

「どうしてあいつらが知ってるのよ？」

リリス達が車を止めると、ユーノもまたバイクを停車しヘルメットを取ってから目の前に映ってきたグリードの姿に目を奪われる。

「グリード！」

「あいつらが何故・・・」

そんな二人の疑問を差し置き、リリスは二体に向かい合うと破面魔導虚数名に攻撃を促す。

「撃て！」

掌から撃たれる人間や他の生き物ならば即死は免れない破面魔導虚の技、虚弾。

しかしウヴァとメズールはその攻撃を受けてもものともせず、すべて受け流してしまうと、ウヴァは頭の角の先から雷を放出する。

「ふん！」

「「「ぐあああ！」」」

破面魔導虚たちはその攻撃を受けると、悉く倒されてしまい残ったのはリリス一人となった。

「仕方ないわね。こうなったら、私が・・・――――のお！」

そう思い立ってリリスが戦闘態勢に入ろうとした直後、リリスは突然何者かに引っ張られるように異空間へと姿を消してしまい、メズールとウヴァは思わず顔を見わせた。

「何だ？」

「急に消えたわ？」

疑問を抱く二人を余所に、異空間へと引っ張られたリリスはそこで自分を引っ張り込んだ表本人である破面魔導虚、アスモデウスと会

い見える。

「てて・・・え！アスモデウス！？何の冗談よ！」

すると、怒り心頭なリリスに向かってアスモデウスは無表情にこう告げる。

「ここは何もするな。これは大切な実験の一つだ」

「実験ですって？グリードに態々セルメダル渡すことの何が実験よ！？」

「これはドクターからのご命令だ。俺達の役目はここまで。引き上げるぞ」

アスモデウスは端的にそれだけを告げると、解腔でアルハザードへと続く道を作りだし帰還しようとすると、リリスは納得がいかず声を上げる。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！私は納得いかないわ！ドクターもミスターカリも、それにあんたも！何がしたいって言うの！？」

「俺達の事など二の次だ。お前は、自分の欲の為に生きていればいい」

「何よ、偉そうに。言っとくけど、私もアンタもグリードと一緒じゃない。欲望の塊であるグリードがその欲望を満たせないのと同じで、胸に穴の開いた私達虚はその魂の渇きを永遠に満たす事は無い。そうでしょ？」

アスモデウスは皮肉を込めた表情でそう自分に向けて言って来たリリスの言葉に耳を傾けると、暫くしてから自分もまた皮肉を込めた様子で返事を返す。

「ああ。そうだったな――――――」

「いい事。今回は取り敢えずは見逃してあげるけど、次からはこうはいかないから。あなたが私の上でも下でもないってことは忘れないでよね。元々は一人の存在なんだから」

「・・・――――――ふん」

鼻で笑ったアスモデウスは背中を向けたまま前進し始め、リリスはそのアスモデウスの後ろにくっついてアルハザードへと帰還する。

果たして、リリスの口にした言葉の意味とは何なのか？

さて、その頃思わぬ介入でリリスがいなくなったことですっかりもぬけの殻となった輸送車を見つめながらウヴァとガメルは不敵な笑みを浮かべる。

「邪魔者はいなくなったわ」

「全部いただきだ」

二人はゆっくりと輸送車へと近づいて行き、その様子を見ていたユーノは目を見張る。

「ユーノス元帥。あいつら」

「ああ。横取りする気だな――――――ユーノ」

ユーノスは取り出した結界印をユーノに手渡し肩から降りると、ユーノはスレイヤーモードへと変身。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

「はっ」

ユーノはその場から飛び出すと、輸送車を飛び越えウヴァとメズールの前に立ち戦闘を始めた。

「ユーノ・スクライアの坊や！邪魔しないでくれるかしら？」

「そう言う訳にはいかないでしょ！」

「そうか。じゃあ死ね！」

ウヴァとメズールは共闘してユーノと激しい戦いを繰り広げ始める。

ユーノ達の戦闘の様子を見ながら、輸送車の中から感じるマリアの霊圧を感じ取ったユーノスはその小さな体を前にどうやってトランクを開けようと模索していると、その時後ろから勢いをつけてガメルがこちらに向かって来た。

「ガメル」

「おおおおお！！！」

ユーノスは咄嗟にラウンドシールドを展開し、自身のみを守ろうとするが、ガメルはそれを突き破って勢い余ってガメルはトランクに頭をぶつける。

「痛い～！」

すると、その衝撃でトランクが開放され、更には中の方で眠っていたマリアも目を覚まし自分の今の状況を確かめる。

「えっ！？ここって・・・」

マリアは頭の中で、こうなる前の自分の行動を確かめる。

輸送車に閉じ込められる前、マリアは市街地の方で買い物を済ませて六課に返ろうとしていたが、その最中建物の陰から出て来た人間体のカザリに不意を突かれてしまったのだ。

『う・・・！！』

マリアは催眠薬入りの布を口に当てられそのまま気を失ってしまい、その後カザリがマリアを輸送車の中へと閉じ込めたのだ。

「（そうでしたわ。変な人に捕まって・・・――逃げませんと！）」

マリアは意を決して、自分を縛り付ける頑丈な鉄の鎖を持ち前のバカ力で粉砕する。

「ふにゅうううううう！！！！」

鎖は見事に千切れ落ち、マリアはこうして自由の身となった。

マリアが意識を取り戻したその頃、外の方では相変わらずユーノとグリードによる激しい攻防が橋の上で行われていた。

ウヴァとメズールと言う二体のグリードを一人で相手にするユーノと、フェレットの姿でガメルからメダルを守ろうとするユーノス。

そのうち、ユーノを前にウヴァとメズールは雷撃と水圧攻撃を仕掛け、ユーノはこの攻撃を受けると相当なダメージを蓄積させる。

「くっ」

一方でガメルは輸送車の中のメダルを奪おうとする。

「メダル」

ユーノスは小さな体に似合わず魔力の全てを全身に纏わせた体当たりでガメルを突き倒すと、二体のグリード相手に奮戦するユーノに助言する。

「ユーノ！クワガタで足止めしろ！」

「わかりました！」

そう言った瞬間、メズールがユーノの首を強く握りしめてくるが、ユーノは何とか防護服に収納しているクワガタコアの力を引き出し、髪の毛から凄まじい雷撃を放つことに成功する。

〈Ｅｌｅｃｔｒｏｎｉｃ　ｖａｎｉｓｈ〉

「はっ！」

ユーノの雷撃を受けるや否や、属性的に対を為すメズールは相当なダメージを与えるとともに、ウヴァにもまたかなりの傷を負わせる。

「うわあああああああ！！！」

「ぐあああああ！！」

ユーノスは雷撃の被害に遭わぬようその場から素早く離れ、鈍感なガメルはその鈍感な空で雷撃を浴び倒れ込む。

「ふにゅううう！！！うっわ・・・！」

そんな周囲の戦いの様子など知る由もないマリアは怪力で塞がれていた隠し扉を開け、外の世界へと出てくると思わず外の光景に眼を疑う。

「えっ？どこですか？」

すると、マリアの瞳にユーノの雷を浴びて後ろに倒れるガメルが映って来た。

「あっ！」

驚きながら更に周りを見渡すと、ユーノスやユーノと言った面々が次々に瞳の中に映って来ると、マリアは頭を押さえ混乱する。

「えっ・・・えっ・・・うそー！」

「！小鳥遊さん！」

「ユーノ様！」

マリアの姿を発見したユーノは直ぐに近寄ろうとしたが、直ぐに復活したウヴァとメズールが妨害してきた。

険しい表情を浮かべながら二体を相手にするユーノだったが、その時・・・不意に天より降り注ぐ無数の赤い羽根にユーノやグリードも目を奪われる。

「？」

「何だ・・・」

ユーノは降ってきた一枚の赤い羽根を手に取り凝視する。

その一方でウヴァとメズールは目の色を変えて表情を一変させる。

「これは・・・・・・まさか！」

「あいつが・・・あいつだって言うのかよ！？」

突然取り乱し始めた二人に疑問を感じるユーノ達だったが、その直後、天より舞い降りてきた炎を纏った背中に赤い翼を生やした男の姿を見た途端、一同は愕然とした。

「「「「「な！」」」」」

そう・・・この男こそが、長きに渡りその姿を見せなかった鳥のグリード・・・アンクであった。

アンクはユーノ達の前に姿を現すと、背中の翼を収め愕然とする一同を鼻で笑いながら徐に言葉を漏らす。

「はっ。随分長い間顔を合せなかったが、相変わらずの様子だな。ウヴァ。メズール。」

「あなた・・・アンク！」

「アンク！貴様が何故ここにいる！？」

ユーノとユーノスはアンクと顔を合わせた瞬間、取り乱し始めた二人の言葉を聞いた瞬間、目を見開きアンクを見つめる。

「アンク・・・じゃあこいつが鳥のグリード！」

「く。こんなタイミングでお目にかかるとはな・・・」

すると、アンクは不敵な笑みを浮かべながらユーノとユーノスにも顔を合わせる。

「ユーノス・スレイア。お前と顔を合わせるのはこれが初めてだったな？何しろ１５０年前の戦いじゃ、俺はこいつらと違って参加してなかったんでな。で・・・ユーノ・スクライアって言う切れ者は・・・お前か？」

「だったら何だよ？」

「ふん。お前の持ってるコアメダル・・・根こそぎ貰うぞ」

そう言うと、アンクは右腕を怪人体へと変化させるや否や、ユーノ目掛けて火炎弾を発射してきた。

ユーノは唐突なアンクの攻撃を躱すと、アンクに向かって逆刃刀片手に走り出す。

「はあああ！」

ユーノはアンクと一戦交えながら、先日のオウムヤミーの話を引っ張りだし、こう尋ねた。

「アンクだったか！一つ聞いておく。僕の仲間を・・・フェイト達を傷つけたのはおまえか！？」

「だったらどうした！所詮人間がグリードに盾つこうとするのが悪い！身の程を弁えろって伝えとけ！」

「貴様・・・許さん！」

ユーノは目的の為ならば残酷な手段も平気で行使する性格のアンクに激しい憤りを覚えると、只管にアンクに目を向け激闘を繰り返すが、その直後ウヴァとメズールも戦いに介入し三つ巴の交戦となる。

「く・・・グリードが一気に三体も・・・なんて分が悪い・・・！」

「ユーノ・スクライア！俺のコアを返してもらうぞ！」

「私のも返してちょうだいね！」

「ふざけるな！コアメダルは全部俺のだ！」

「やれるもんならやってみろ！強欲商人どもが！！」

ユーノが大声を上げてそのように挑発すると、三体のグリードはそれぞれ雷・水・炎と言う己に備わった能力を使ってユーノに一斉攻撃をしかけると、ユーノは魂の力で刀身をコーティングした逆刃刀で必死にその攻撃に耐え続ける。

「くっ・・・・・！！！！！！」

「ユーノ！」

「ユーノ様！」

ユーノスとマリアがグリード三体に追い詰められるユーノに声を上げる。

と、その時漸く意識を取り戻したガメルがマリアの乗っている輸送車にゆっくりと近づいて来た。

「メダル・・・」

マリアはガメルが近づいてくると、思わず喚き声を上げながらガメルの頭を馬鹿力が宿った手で連打する。

「キャー！」

「痛い・・・痛い！」

ガメルはマリアの乱れ拳を頭に受けると、その頭を押さえながらマリアの額に渾身の頭突きを食らわせる。

「あっ！」

マリアは頭突きによって脳震盪を起こすと、そのまま気を失い倒れ込んだ。

「メダル・・・メダル」

ガメルは嬉々とした様子で輸送車に近づいて行こうとすると、三人の攻撃を凌ぎ切ったユーノが急いで近づきガメルを押さえつける。

「やめろ！その人には手を出すな！メダルなんか全部持っていていいから！」

「えっ？ヤッター！」

ユーノの予期せぬ言葉に大喜びのガメル。

が、その直後ガメルを退かしてアンクが乱入。

「ガメル退け！おい、ふざけるな！こいつは俺んだ！」

アンクはメダルの事となるととりわけ他のグリードの中でもいかつくなる性格の持ち主だ。

アンクは輸送車の中を争うとするが、すぐさまユーノスの魔法に阻

まれる。

「貴様の思う通りになどいかせん！」

「アンク！大人しくしろ！」

「離せフェレットもどきども！」

「「誰がフェレットもどきだゴラ！」」

二人は口を揃えて自分の事をそう言って来たアンクに怒りを覚え、必死で体を押さえるが、その隙にガメルが輸送車に近づき積み荷のトランクを漁り始める。

「これかな」

と、そんな言い争いが続いていると今度はメズールがユーノ達の方へと飛びかかってくる。

「はああ！」

メズールが飛んでくると、アンクとユーノスは一旦離れ、ユーノとメズールによる攻防が始まってしまう。

メズールは勝負を仕掛けるために、高圧水流を至近距離から発生させユーノにダメージを与えると、ユーノはその攻撃を受け防護服の中のコアメダル、タカ・クワガタ・カマキリ・バッタ・ウナギ・ウナギの六枚が飛散し、ユーノ自身は橋の下の川へと落ちていく。

「うわあああああああああああ！！！」

「ユーノ！」

ユーノスはメダルそっちのけで、ユーノの事を心配する。

その一方でアンクは飛び散ったメダルを奪おうと右腕だけを分離させる。

「メダルが！」

ユーノスはそれを見た瞬間、目の色を変えて自分もまた宙に浮かぶメダルへと手を伸ばす。

「くそ！」

だが二人が手を伸ばしたその時、突然もう一人の手が伸びて来、アンクとユーノスはそのもう一人の手により手を阻まれた。

「「うわあああああ！！」」

アンクは分離した人間の体に戻り、ユーノスと共に訝しげな表情を浮かべてその手の正体を目の辺りにした瞬間、二人は目を疑った。

「！？」

「お前は・・・！」

二人の目の前に立っていたのは、セルメダルの情報をメズール達に漏らし、カリと結託していたグリード、カザリだった。

「悪いねユーノス。それと久しぶりだね、アンク。もらったよ」

カザリの手の中には、奪い去ったクワガタ・カマキリ・ウナギのコアメダルの計四枚が握られていた。

カザリの乱入を受けると、思わずユーノスとアンクは眉間に皺を寄せる。

「く・・・カザリ」

「ち」

すると、これを好機と判断したメズールはウヴァに促す。

「ウヴァ、今よ！」

「おう！」

ウヴァは人間体に戻ると、運転席へと乗り込みガメルを荷台に乗せたまま輸送車を走らせる。

「うわ、落ちる！」

振り落とされそうになるガメル、そして気を失ったマリアを乗せた輸送車は橋の上を走り去っていき、ユーノスとアンクは目を見開く。

「しまった！」

「待て！そいつは俺んだ！！」

アンクは血相を変えると、背中の翼を広げてウヴァが運転する輸送車を追って飛び去った。

残されたユーノスはメズールとカザリに注視されながら手すりに足を乗せ徐に口にする。

「これが狙いか。それにしては、仕掛けが妙だな」

「どうでもいいじゃない。君はここで終わる」

「く」

ユーノスはカザリが自分に向けて来た竜巻攻撃を寸でのところで回避すると、何のためらいもなくユーノを助けるために川の中へと飛び込んだ。

その頃、輸送車を爆走させるウヴァの方はと言えば、サイドミラー越しに見えてきた血眼になって空を飛行するアンクを見るなり、アクセルを全開にし、アンクは掌から火炎弾を発射。

苛烈を極めたメダル争奪戦を繰り広げる中、ウヴァは怪人体の姿になると、角の先から雷撃を発生させ、飛行中のアンクに放出。

雷撃攻撃を受けたアンクはその場に墜落し、ウヴァはこれを見るなり全速力で離れていった。

アンクは相当悔しそうな表情を浮かべると、額から流れる血を拭い去り大声を上げる。

「くそ！！」

さて、ユーノスが川へと飛び込むと、カザリは両手を頭の後ろで組んでメズールに移動を促す。

「さーてと、行こうか」

すると、メズールが今まで何の連絡も取れなかったカザリが突然自分たちにメダルの情報を持ってきたことに疑心し、徐に尋ねる。

「カザリ。私も気になってたのよ。突然セルメダルの情報を持って帰ってきたりして・・・あなたなら独り占めするのがホントでしょう？」

「ひどいなあ。そんな風に思われてたんだ」

「あなた、私たちと離れて何をしてたの？」

そう聞かれると、カザリは徐に振り返りメズールへと接近。

「別に。大したことじゃないけど・・・！」

その瞬間、カザリは右腕をメズールの体の中へと突き刺す。

「ぐっは」

唐突な事に思わず何も言えなくなるメズールと、そのメズールの体内にあるコアメダル五枚を何のためらいもなく抜き取ったカザリ。

「ふん」

「う・・・！」

メズールは怪人体の姿を保てなくなると、一度人間の姿へと戻るが、コアメダルほとんどを奪われたことにより体のいたるところからセルメダルが零れ落ちる。

「は、は、は、は、か、カザリ・・・」

カザリは奪い盗ったメズールのコアを確かめると、涼しい顔で言う。

「うん。今回が目的の一つ。ごめんね」

そう言うと、カザリはメズールをその場に残して悠々とした足取りで立ち去って行き、メズールは力を奪われ気を失った。

さて、そんなメズールの危機を知らないでいるウヴァとガメルは待ち合わせ場所の倉庫跡に到着すると、カザリ達の到着を待った。

「ついたのか？」

「ここでメダルの山分けだ。」

ガメルとウヴァは人間体の姿に戻って二人の到着を待ち、その間にも輸送車の中のマリアは気を失ったままだった。

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

その頃、川の流れに流されてしまったユーノを必死で捜索している

七大元帥で今はフェレットのユーノス・スレイアは全身を水浸しにしながら流れに沿ってユーノの前を呼び続ける。

「ユーノっ！ユーノ！無事なら返事をしてくれ！ユーノ！！」

ユーノスが幾ら呼びかけても、返ってくるのは彼の木霊のみ。

しかしそれでもユーノスは諦めを見せずに必死でユーノの捜索を続け、傍ら心の中でこのように呟いた。

「（くそ。俺の所為だ・・・俺がユーノをグリード達の戦いに巻き込んだから・・・あいつはあんなことになったんだ・・・全部俺の所為なんだ・・・！く・・・俺は肝心なときいつもこうだ・・・何が七大元帥だ！？何が最強の結界魔導師だ！？俺は結局・・・何も守れてなんかいない・・・！）」

ユーノのように自分を罵倒し、責め立てるユーノス。

水の抵抗に逆らい必死で歩きつづけるユーノスはそんな罵倒と並行して、昔の事も思いだしていた。

「（ユーノがここで死んでしまったら・・・間違いなくなのはは絶望し、涙を流す・・・そんなことは断じてあってはならない！似ているんだ・・・なのはは・・・コトハと同じなんだ・・・――――――）」

〈回想シーン〉

今から１６８年前の出来ごと。

当時、7歳だった少年のユーノス・スレイアは基本物静かな性格で、友達と遊ぶことも多かったがそれ以外は専ら家で本を読むことが多かった。

今日は生憎の悪天候の為外で遊ぶことは控え、静かに家で読書にふけっていると、唐突に女の子の泣き声が聞こえてきた。

「うわあ～～～ん!!ユーノス君～～～!!」

「?」

ユーノスが声の方に顔を向けると、やって来たのは幼馴染で後の七大元帥の一人、コトハ・タカナシ（7歳）であった。

「コトハか。どうした?何を泣いている」

「う・・・これ・・・」

コトハは泣きながら左手に持っていた空の鳥かごを見せると、ユーノスは状況を直ぐに理解する。

「鳥さんが・・・・・・大好きだったのに・・・おば様から頂いたのに・・・・・・逃げちゃって・・・／／／」

泣きじゃくりながらユーノスにそう訴えるコトハ。

すると、ユーノスはそんな泣いているコトハに徐に近づき、そっとハンカチを差し出した。

「え・・・」

コトハは意外そうな顔を浮かべながら、真顔のままのユーノスを見つめる。

「泣くな。」

コトハはユーノスからハンカチを受け取り、その直後ユーノスは躊躇の無い様子でコトハに背を向け全速力で走り出す。

「ユーノス君！何処行くの！？」

「探してくる！」

悪天候である中、ユーノスは彼女が逃がした鳥を探しに外へと向かった。

それから間もなくして、予想通り雨が降ってきた。

雨は本ぶりとなって激しさを増していく中、ユーノスはなかなか戻ってこないユーノスをコトハはかなり心配し、浮かな顔で外の方を見つめた。

「ユーノス君・・・・・・」

最早鳥の事より、ユーノスの方を気に掛けるコトハ。

と、その時降りしきる雨の中をずぶ濡れとなった身体で走ってくるユーノスの姿を発見した。

「あ！」

コトハはユーノスを見付けると、外へと飛び出しユーノスと向き合う。

「ユーノス君・・・」

「は、は、は、は、は、は」

泥と土にまみれたずぶ濡れの体のユーノスは、徐に両手の中に入れていたあるものの姿をコトハの前に曝け出すと、コトハは思わず涙を浮かべた。

「！」

掌の中に収められていたのは、紛れもなく自分が逃がした小鳥だった。

「この、鳥だろ？」

「う・・・・・うわあああああん／／／／／／」

コトハは鳥を見付けて来てくれたことと、ユーノスが無事であったこと両方の嬉しさがこみ上げてくると、泣きながらユーノスに抱きつく。

ユーノスはコトハの行動に頬を染めながら思わず言う。

「お、おい。どうした！？どっか痛いのか？」

「うわあああああん！！ああああはん！！！！」

これが、ユーノス・スレイアとコトハ・タカナシとの間で起こった出来事の一つだった。

〈回想シーン終了〉

そんな昔の事をふと思い返しながら、必死でユーノを捜索するユーノス。

と、その時ついにユーノスは探し人であるユーノを発見する。

「！ユーノ！！」

ユーノは気を失ったまま岩の陰に張り付いていた。

ユーノスはずぶ濡れの体で近づいて行くと、意識の無いユーノの耳元で大声を上げる。

「おい！おい、ユーノ！ユーノ！」

ユーノスが必死で呼びかけると、その直後ユーノが意識を取り戻す。

「う・・・ユーノス元帥・・・」

「気が付いたか。よかった・・・大丈夫か？」

「はい・・・それよりコアメダルが・・・すみません！僕の力不足で！」

「お前の所為なんかじゃない。元はと言えば俺がこんな事に巻き込

んだのが悪い。その所為で、ユーノやみんなに迷惑ばかりかけて・・・俺は何と情けない・・・！」

ユーノスは自分を責め立て意気消沈とする一方、ユーノはこんなユーノスを見たことがなく、同時に自分がなのはをジュエルシード集めに関わらせたときの姿と重ね合わせ、複雑な表情を浮かべながらもこう言い返した。

「・・・僕は自分の意志でこの闘いに身を投じたんです。だからそんなに自分を責めないで下さい。まるで僕が二人になったみたいだ。」

「ユーノ・・・」

「大丈夫です。小鳥遊さんも、コアメダルも必ず取り戻します！僕もいい加減覚悟決めます」

ユーノはそう言うと、ユーノスを肩に乗せてふらふらの状態であるにもかかわらず川の上流に向かって歩きだし、グリードの気配を辿り始めた。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

その頃、待ち合わせ場所でカザリ達の到着を待っていたウヴァとガメルは、一向に現れる気配のない二人に疑問を抱いており、ガメルに至っては待ちくたびれた様子だった。

「メズール、まだかな・・・」

と、その時漸く二人の元にカザリが現れたが、そのカザリは見え見えの小芝居をしながらふらふらの足取りで二人に近づいて来た。

「う・・・う、ウヴァ」

「カザリ。どうした？」

「やられた」

「何？」

カザリはウヴァの元にしゃがみ込むと、自分で倒したメズールの事を口にする。

「メズールも・・・」

「メズールが！？メズール！メズール！」

ガメルは血相を変えてその場から飛び出して行った。

「もうそこにユーノ・スクライアが・・・！」

「くっそーーー！」

煮えたぎるユーノへの怨恨と怒りを覚えるウヴァはカザリに背を向けその場から歩き出そうとする。

「フフフ」

すると、カザリは小芝居を止めて鋭い爪を突き立てるとウヴァの背後へと近づいて行き、その直後身の危険を感じ取ったウヴァは怪人体となって後ろを振り返る。

「！」

「は！」

「ぐうう！」

ウヴァはカザリの不意打ちを受けると、コアメダルは放出しなかったもののセルメダルが飛散し、その衝撃音を聞いたマリアが意識を取り戻し、驚愕の表情を浮かべ二人のやり取りを見つめる。

「く。カザリ、貴様！」

「あーあ。失敗か」

「まさか、メズールも・・・！」

「ねぇ、ウヴァ。ただメダルを集めて完全復活して、それで世界を食べるだけじゃつまらないと思わない？」

「何っ！？」

「もっと進化すべきだよ。」

「きさま・・・！」

ウヴァはカザリの話を聞くと、一度その場から離れることを選択し、

ふらふらの足取りでカザリの前から立ち去って行く。

「さーてと、あとはガメルをつれて帰って――――――」

カザリはそう言いながら荷台の中のマリアの方へと顔を向け、マリアは顔を硬直させる。

「は！」

「ああ・・・まだいたんだっけ。お前の役目は終わり。もう消えていいよ」

マリアは消えるという単語に危惧を覚えながら、慎重にカザリの前から立ち去ろうと動きだし、荷台から降りるや否や全速力で駆け出していく。

その瞬間、カザリは振り返ってマリア目掛けて竜巻攻撃を仕掛ける。

「バイバイ」

「キャー！！」

マリアは喚き声を上げながらこの絶体絶命の事態にどうすることも出来なくなった。

と、その時カザリの竜巻攻撃からマリアの身を守ったのは、ラウンドシールドを展開したユーノ・スクライアとユーノス・スレイアだった。

二人がその場に現れると、カザリは訝しげな表情で呟く。

「あれ？とっくに死んでいたと思ってたのに？」

「ふん。誰が貴様如きに殺されるか」

「小鳥遊さん。もう大丈夫です」

「ユーノ様？」

マリアはこの時のユーノの姿が自分のビジョンでは、昔の少女マンガに出て来そうな王子様の格好となって映っていたらしい。

「ユーノ。その体だ。ダメージも相当溜まってることを忘れるな」

「分かってます。二人はここから離れててください」

ユーノスを肩からおろし、マリアと一緒にその場から退かせると、ユーノは懐からデジヴァイスを取出し完現術コンボを発動させた。

「変身！」

〈Scarred　sleip〉

デジヴァイスに己のデジソウルをチャージした瞬間、紅い霊圧の嵐に包まれるや否や、スレイプモンノレッドデジゾイドの鎧に身を包んだユーノが現れる。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

「く・・・」

カザリは凄まじい霊圧に圧されながら、ユーノの方へと接近。

ユーノは深紅の聖騎士を発動させると、高い防御力と機動力を駆使してカザリに戦いを挑んでいった。

二人が戦い始めて間もなくして、メズールを探しに行ったはずのガメルが戻って来た。

「メズール、いな・・・・・・あ！ユーノ・スクライアだ」

カザリはガメルが帰って来ると、すぐさまこう言った。

「ガメル！ユーノ・スクライアを倒したらメズールが喜ぶ！」

「そうか・・・じゃあ、やる！」

ガメルはそれを聞くと乗り気になり、セルメダル一枚を取出し自分の額に現れた投入口にメダルを投与し怪人体となる。

すると、その背中から現れる巨躯とそれ見合った甲羅が特徴的なリクガメヤミー。

ガメルはリクガメヤミーと共にユーノへと向かって行った。

「いくぞ！」

リクガメヤミーは付属の鉄球を投げてユーノに攻撃する。

「ぐあ！」

一気に数を増やして畳み掛けようとするカザリ達の猛攻に、完現術コンボを使用したユーノも悪戦苦闘。

「三体一か。こっちはスピードで行かなきゃ」

そう言うと、ユーノは懐を漁って中国コンボに必要な和田玉を取り出そうとするが、その直後受けたカザリの攻撃でユーノはサイとゴリラのコアメダルを放出。

「ぐああ！」

「ユーノ様！」

「くそ」

カザリは爪を研ぎ澄ましてユーノに振り返る。

「終わり」

ユーノは向かって来るカザリの攻撃を防ごうと、ギリギリのところで和田玉に宿る小狼の魂を引き出し翠の虎狼を発動する。

〈Ｇｒｅｅｎ　ｐａｎｔｈｅｒ〉

その瞬間、ユーノの身体は緑色の霊圧に包まれ中国服の姿となってその場から現れる。

「はあああああああああ！！」

ユーノは飛んで来たカザリの攻撃を受けてしまい、もう一枚ゾウのコアメダルを放出するが、咄嗟にカザリに反撃を加えてカザリからチーターのコアメダルを奪い取る。

そして、完現術コンボを使っている身でありながらライオンのコアメダルの力を引き出し鬣を光らせ、ガメルはその事によって目を眩ませる。

「うう！まぶしいの嫌いだ～！」

カザリは奪い盗ったゾウと、落ちていたサイ・ゴリラのメダルを拾い上げると、ガメルへと近づく。

「ガメル・・・まぁいいか。目的はユーノ・スクライアじゃないし」

カザリはそう言うと、輸送車にガメルを乗せてその場から離脱する。

ユーノスはすぐさまユーノに言う。

「ユーノ、追え！」

「了解！」

ユーノは脚力に優れた翠の虎狼の力で俊敏な動きを発揮し、輸送車を追いかけていくが、その直後リクガメヤミーは手足を甲羅の内側に収納し、回転しながらユーノを襲撃してきた。

「おっと！」

ユーノは咄嗟にその場に伏せると、Uターンして戻ってくるリクガ

メヤミーを見ながら後ろの二人に声を上げる。

「伏せて下さい！」

リクガメヤミーはその直後上空から破壊弾を投下し、三人を襲う。

「「「うわああ！！」」」

ユーノスは咄嗟にフィールドバリアを展開し、マリアの身を守る。

ユーノは空中を移動しながら破壊弾を投下してくるリクガメヤミーの攻撃を躱しながら、背中の宝剣を取出し雷と書かれた札を用意する。

「雷帝招来！！」

その瞬間、札の中より飛び出す凄まじい雷撃がリクガメヤミーにヒットし、リクガメヤミーの軌道が大幅にずれると、ユーノは高く飛び上がりリクガメヤミーを地面へと突き下した。

だが、突き下すことに成功したユーノだったが、その直後彼は突然体がふら付き始め、視界が朦朧とし始めた。

「あっ、あっれ・・・なんか、身体が・・・」

ユーノは片膝をついて体の異常を訴えると、ユーノスとマリアはそれを見て確信した。

「く。コンボのやり過ぎか」

「あんな体で、無理をして完現術コンボを二つも発動させては、ユーノ様の体が！」

ユーノはたまりにたまった蓄積ダメージと、日頃からの無茶の所為かこの土壇場に来て身体が異常を訴え始めたのだ。

息を荒げて立つ事もままならないユーノ。

するとその時、ユーノに突き下されたリクガメヤミーが起き上がり、ユーノに向かって来る。

絶体絶命のピンチの中、ユーノは覚悟を決め込もうとしたが、直後リクガメヤミー目掛けて何処からともなくバズーカ砲が発射された。

ユーノ達が不思議に思って飛んできた方に顔を向けると、なんとそこに居たのはユーノを何時も助けてくれるオッドアイの少年だった。

「！あ、謎の少年君」

すると、少年は驚き返るユーノ達にメダル争奪戦の最中にカザリに全部取られる前に誰にも気づかれないようオプティックハイドを施し掴んでいたコアメダル、タカとバッタを取り出した。

「あのときどさくさまぎれに掴んでました。受け取ってください！」

少年から二枚のコアメダルを受け取ったユーノは安堵のため息をつく。

「良かった～～～！ありがとう謎の少年君♪よし、行くぞ。」

ユーノはコアメダルを仕舞い込むと、少年の思わぬ攻撃を受けて甲羅をひっくり返し身動きが出来なくなっているリクガメヤミーに止めを促そうと宝剣を構える。

〈Ｄｏｔｏｚａｎｋｏｎｋｅｎ〉

「必殺！！！“怒涛斬魂剣”！」

ユーノは技の必殺技であり、対象物全てを一刀両断に切り裂く怒涛斬魂剣を発動させ、リクガメヤミーへと仕掛けた。

「はあああああああ！セイヤー！」

リクガメヤミーはその攻撃を受けると、爆散し一枚のセルメダルとなって消滅。

ユーノはセルメダルを受け取ると、疲労困憊の様子で息を上げる。

「は、は、は、は、は、は」

少年は戦いが終わると、何事も無かったかのようにその場から立ち去りユーノスとマリアも一安心だった。

「よかった～～～」

ユーノは変身を解くと、直ぐにマリアの元へ近づく。

「小鳥遊さん・・・大丈夫でしたか・・・ぐ！」

が、その直後ユーノは体力の限界に達してしまい、バランスを崩し

かける。

マリアとユーノスは血相を変えてユーノに近づく。

「ユーノ様！大丈夫ですか！？」

「大丈夫、大丈夫」

「私の所為で、ごめんなさい！」

「は、は、は、は、小鳥遊さんの所為じゃないって。は、は、は、は、無事でよかった・・・・・・」

だが、そう言った直後・・・悲劇は起こった。

「！がああああああああああ！」

「「！」」

ユーノは突然悲鳴を上げるかと思いきや、今までの無理がたたって魂の疲労がピークを越えてしまい、その途端意識を失った。

「ユーノ様！ユーノ様！」

「おい、ユーノ！」

果たしてユーノはどうなってしまうのか？

◇

〈カザリＳｉｄｅ〉

その頃、第７管理世界「リヴァプール」のカリ・ユガファウンデーションへとガメルを連れて戻って来たカザリは集めたコアメダル計１３枚の中からメズールのコア七枚が乗った小皿を手に取り、訝しげな表情を浮かべるガメルに言う。

「これを入れるんだ。メズールがそうして欲しいって」

「メズールが？」

カザリからコアを受け取ると、それをメズールの意志だと勘違いしたガメルは素直に要求に従う。

「じゃあ、やる！」

ガメルは早速、メズールのコアメダルを自分の体の中へと投与していき、それを見ながらカザリは不敵な笑みを浮かべ、カリもまた人形に話しかけながらこう言う。

「見られますよ。メダルを全て一つの器に集中させたそのときが」

カリの目的、世界の終末の為にメダルを一つの器に集中させることが何を意味するのか？

次回を待て！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　トラ一枚　ライオン一枚　チーター一枚
サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

メダル争奪と輸送車と器（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、久しぶりに七大元帥のことをもう少し深く見ていこうと思うよ♪と言う訳で七大元帥最強の男、ユーノス・スレイア元帥に解説を行ってもらいます」

ユーノス「まぁ、お前ほど上手く説明できる自信はないが、全力を尽くそう。俺達七大元帥はそれぞれが得意とする魔法分野における最強の称号を与えられた者達だ。それぞれ七つの魔法体型、『結界・砲撃・炎熱・雷撃・氷結・剣戟・幻影』を司る並みの魔力量を遥かに上回る魔導師七人を、七大元帥と呼称している」

ユ「成程。で、ユーノス元帥はその中でも最強って言われる結界魔導師で、七大元帥をまとめ上げる頭だったという訳ですね」

ユーノス「頭と言っても、名目上仕方なくだ。俺はあいつらのことを自分よりも下だとは思っていない。全員がそれぞれに特化した同志であり大切な仲間だ。特に、１５０年の月日が経っても俺は今でもコトハの事を忘れた覚えはない」

な「コトハって・・・あの私似の七大元帥の事ですよね・・・／／／」

なのはは気恥ずかしそうに言いながら、ユーノと共にコトハ・タカナシ元帥の写真を見る。

すると続々とギャラリーが集まってきた。

一「おお！マジでだ！こんなことってあるんだな」

ル「私的には、コトハ元帥殿の方がなのはよりも美人に見えるがな」

フェ「え？私はなのはの方が綺麗だと・・・／／／」

恋「どっちも目くそ鼻くそだろうが・・・ぐっほ！」

その言葉を聞いた途端、ユーノとユーノスは形相を浮かべ恋次に怒りの鉄拳を入れる。

なのは達は身の毛が凍りそうな表情を浮かべると、静かにその場から後ずさっていく。

な「私想うんだけど・・・今のユーノ君なら第８の最強の元帥になれる気がする・・・」

ス「ど、同感ですね・・・／／／」

全員は一様に首を縦に振るった。

魔導師図鑑ハイパー！

スバル・ナカジマ防災士長は知っていた。

ティアナ・ランスター執務官の意外な秘密を。

キャ「ティアさんの隠れた趣味ですか？」

エ「一体何なんですかそれ」

ス「ひひひ♪ここだけの話なんだけど・・・ティアってああ見えて一人カラオケが好きでね、しかも選曲がどれもこれも可愛い系な曲なんだ～♪」

ギ「へ～そうなの。まぁ確かにティアナの声って結構可愛いもんね」

ス「でしょ～！で、今日はそんなティアの可愛い声が録音された証拠の音声を入手することに成功してきました！！」

スバルは懐から音声データファイルを取出し、期待に胸いっぱいの三人は拍手する。

キャ「わはあ！早く聞きましょう！！」

エ「僕も楽しみです！」

ス「では、再生開始」

スバルはそう言って音声データを再生すると、そこから聞こえてくるティアナの実に可愛らしい歌声。

ティ『出会いは（著作権に関わるのでここまで）～～～♪』

だが、スバルはそこで重大な事実に気づいた。

なんと、この音声が六課中に流れてしまったのだ。

それを聞く者の中に当然ティアナも含まれており、自分の声だとわ

かってしまうと彼女は赤面し、全員の注目の的になりながら即行で逃げだした。

ティ「ちょっと!!何で私の声が／／／スバル!!!アンタ覚えてなさいよ!!」

ちなみに、この歌の元ネタは中原麻衣の代表作『△△△で○○』でありました。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

カ「これで彼の中にあるコアメダルは１４枚」

ス「欲望は、世界を救う」

メ「あなたが全部欲しいのよ!」

カ「運命の日のその時が・・・・・・」

ユ「竜神の寵児・・・？」

第１６６話　終末とグリードと新戦士

登場ヤミー

リクガメヤミー

身長　２５７？　体重　１９８？

特色／力：甲羅を使用した回転攻撃、上空からの破壊弾投下

小鳥遊万梨阿救出に現れたユーノを倒す為に、ガメルが生み出した。スピードはやや劣るが、強力なパワーを活かした格闘戦を得意とする。手足を甲羅の内側に収納し、回転しながら繰り出す体当たりが最大の武器。ガメルやカザリと連携してユーノを苦しめたり、竜帝王蛇尾丸と真っ向からぶつかり合う等激しい戦いを繰り広げるが、ユーノの反撃によって倒される。

終末とグリードと新戦士（前書き）

過去も未来も存在せず、あるのは現在と言う瞬間だけだ。

Ｂｙレフ・トルストイ

終末とグリードと新戦士

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、メダル争奪戦に、ユーノとユーノス、そしてマリアが巻きこまれる。

二つ、仕掛けたのは、カリ・ユガファウンデーション会長カリと、グリードであるカザリだった。

そして、三つ。ガメルを使って、ある実験が開始された。

カ「メズールがそうして欲しいって」

ガ「メズールが？」

「じゃあ、やる！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　トラ一枚　ライオン一枚　チーター一枚
サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

〈カリＳｉｄｅ〉

ガメルは何の疑いもなくカザリに勧められた通り、メズールのコアメダル七枚すべてを体の中へと入れていき、全てが入れ終わると怪人体となって全身へと流れる異常な力にガメルは首をかしげ、カリはそんなガメルを観察しながら人形に話しかける。

「見られますよ。メダルを全て一つの器に集中させたそのときが」

「素直な君ならきっといい器になる」

カザリはそう言うと、机の上に乗っていたガメルのコアメダル三枚が乗った小皿を手に取り、徐にコアをガメルの体へと投げつける。

ガメルは自分のコアを受け取ると、それによって失くしていた鎧が復活を果たし、自分のコアが9枚揃っていないにもかかわらず全身の鎧が構築され完全復活状態と同じ姿となって咆哮を上げる。

「うおー！」

カリは咆哮を上げるガメルを見ながら、ガメルの体の中にあるコアメダル、メズールのコア7枚と自らのコアメダル7枚があることを確認し、残りのコアが乗った皿を持って立ち上がる。

「これで彼の中にあるコアメダルは１４枚。まだまだ少ないですが、一つの器に集中させる実験にはなるでしょう。本当なら、君のもあわせてみたいところです」

「・・・――」

カザリはそれを聞くと、無言のままカリの方へと振り返り、カリが大事にしている肩に乗った人形を振り払い、人形が落ちた瞬間カリは人が変わったかのように狼狽する。

「あっ！どうして！！もうしゃべれない！」

カザリは背を向け、方向を上げるガメルを一瞥してからこう言う。

「僕たちにとってコアは存在そのものなんだから。気軽に言わないでほしいな。」

そして、徐に皿の上に乗っていたアンクが探し求めていたクジャクのコアを一枚取出し、不敵な笑みを浮かべる。

「これは貰っておくね。今回のギャラ」

カザリは勝ち誇った様子でクジャクのコアを握りしめ、その場から立ち去って行った。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、グリードとのメダル争奪戦の末、魂の疲労が限界に達してしまったユーノは深刻な事態に陥っていた。

これまでのツケと無理がたたったこともあったせいか、彼は生命維持装置を付けた状態で緊急治療室へと運び込まれ、その傍らシャマルやマリア、そしてなのはと一護がストレッチャーを運びながらユーノに呼びかける。

「大丈夫、ユーノ君！しっかりして！」

「おい、ユーノ！聞こえるか！？」

「急激なストレスで、血圧がかなり低下しています！」

「それだけじゃありませぬわ。完現術コンボの連続使用で、魄動が著しく弱まってます！早く手を打たなければいけませぬわ！」

医療スペシャリストのシャマルとマリアがそう言った後、生命維持掃除に繋がれほぼ植物状態と化していたユーノは虚ろな表情を浮かべて譫言のように呟く。

「あの少年は・・・・・・」

ユーノはヤミーやグリードとの戦闘において、常に自分を陰で支えてくれるオッドアイの少年の事を考えながら、今までの戦いを思い浮かべる。

『ユーノさん！これ、新しいカンドロイド！』

『あのときどさくさまぎれに掴んでました。』

一護は譫言のようにつぶやくユーノの瞳を見た瞬間、更に険しい表情を浮かべる。

「マズイな。瞳孔反応が鈍い！急ぐぞ！」

「ユーノ君！しっかり！」

四人は限界寸前に達しているユーノを急いで緊急治療室へと運んでいき、すぐさま医療スペシャリスト二人による緊急措置が始まった。

その間に、司令室の方に集まっていた前線メンバー一同は送られてきたユーノのカルテを見るなり険しい顔を浮かべ、思わずコンは呟いた。

「う～～～酷いもんだぜこれは・・・！全身無茶苦茶じゃねぇかよ・・・」

「こんなになるまで、ユーノはグリード五体を相手に戦っていたって言うの？」

フェイトが信じられないと言わんばかりの表情でそう呟くと、ユーノスは拳を強く握りしめて全員に頭を下げて来た。

「すまぬ！俺が・・・・・俺の不始末でユーノをこんな目に・・・！！」

声を震わせただただ謝ることしかできないユーノスに、全員の顔が曇り始める。

だが、それでも誰もユーノスを攻めることなどなく、織姫はそんなユーノスに近づき優しくこう話しかけた。

「誰もユーノスさんを攻めたりはしません。ユーノさんも、危険は十分覚悟していたんです。ただちょっと頑張りすぎて・・・それでああなっちゃって・・・」

「織姫・・・」

ユーノスは織姫の言葉を聞くと、少しだけ沈んでいた気が晴れてくる、そんなことを感じていると、ここで徐にスバルが深刻そうな顔でこんな事を言って来た。

「あのさ・・・・・私達ってユーノ先生に何か一つでも守れてきたのかな・・・」

「スバル・・・？」

思わぬ一言にティアナは耳を疑うが、スバルは浮かない顔のまま更に続けた。

「あの時からそうだよ・・・魔導虚事件のころから、私達は何一つユーノ先生の事、守れてなんかいないよ・・・！ずっとずっと・・・守られてばっかりだ！」

「スバル・・・」

「ユーノ先生は、何でもかんでも自分の背中に背負い込んで、でもそれを誰かに預けるなんてした覚えあった！？ないよ！苦しい時も辛い時も・・・あの人は全部全部背負い込んだまま誰かを守ろうとしている！ただでさ、地獄の呪いって普通じゃ考えられないものを受けて、いつあのクシャナーダってバケモノになるかもわからない・・・そう言う状況なんだよ！それなのに私達は・・・・・・何もしてあげられてない・・・／／／」

心底悔しがった様子でスバルの拳が強く握られ、他のメンバーもまた同様の気持ちとなって歯がゆい思いのまま、ユーノの安否を気遣うのであった。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

ユーノが生命の危機に瀕している頃、アンクはアスモデウスの導きによりスカリエッティの待つアルハザードへと乗り込み、そこで面と向かい合って対談。

スカリエッティは今回のメダル争奪戦の結果に関してため息をついてからこう語り出す。

「非常に残念だ。メダルの輸送車が襲われたのは――――――カザリというグリードらしいね。君に違わずかなり狡猾だ。狙いは君たちの潰しあい、そしておそらくコアメダルの総取りだろう」

そう言うと、聞いていたアンクは近づき睨み付けながら尋ねる。

「おまえが裏で手を貸したんじゃないだろうな？」

スカリエッティはそんなアンクに睨まれながら徐に立ち上がると、背中に腕を利見ながら更にこう語り出す。

「そもそも、メダルの輸送を要請してきたのはミスターカリだよ。」

「カリ・・・ああ。あの意味不明の人形男か」

アンクは以前スカリエッティからある程度の事は聞かされており、当然のことながら出資者であるカリの事も聞かされていたため直ぐに納得する。

「彼なら可能だ。が、彼であるなら責める気はない」

「なんだと？」

スカリエッティの意外な一言に耳を疑うアンクを余所に、プレシアは帰り支度をはじめ、その傍らスカリエッティは窓の外を見ながらこう言った。

「ミスターカリの目的は純粋にしてひとつ！欲望を叶えるための実験だ。いいかね。欲望を止めてはいけない。」

「・・・・・・」

アンクはその言葉に足を止め、スカリエッティに向き合うとスカリエッティは振り返ってきっぱりと断言した。

「欲望は・・・――――世界を救う。はっはっはっ！！」

このスカリエッティの言葉の意味とは、一体何なのであろうか？

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

アンクとスカリエッティがそんな話をしている間、機動六課で無事に緊急措置手術を終えたユーノ・スクライアは、生命維持装置を付けたまま深い眠りを続けていた。

無機質な機械音が聞こえる物静かな部屋の中で、なのはは隣で眠るヴィヴィオの事を気に掛けつつ、目の前のユーノの事を心配する。

「・・・・・ユーノ君・・・・・・」

この時、なのはの脳裏に蘇ってくる１３年前の自らが招いた悲劇。

過労と日頃の無茶がたたって起こした人生を大きく左右しかねた挫折。

彼女の心に今も忘れる事無く刻まれたそれだったが、あろうことが自分が最もそうなって欲しくない筈のユーノが、同じではないがほぼそれに等しい事態に陥ってしまっていることに胸が締め付けられ

る。

月日が経ち、ユーノがハイスペックになるにつれ自分を頼らなくなっている現状にこの上もない寂しさを抱くなのはの瞳に涙が浮かんで来る。

すると、そんな時徐に部屋のドアが開き入ってきたのはユーノの師である一護だった。

「どうだ、なのは。ユーノの調子は？」

「一護さん。はい・・・眠っているとはいえ、生命維持グラフがずっとレッドゾーンで魄動値が安定しなくて・・・マリアさんもシャマル先生も、かなり心配していました。」

なのははそう言うと浮かない顔を浮かべて顔を下に向ける。

それに対して一護はユーノに近づき彼の様子を窺うと、こう口にした。

「成程な。まぁ直に回復するだろうぜ。こいつの生命力は俺以上だからな！ははははは！！！！」

一護が大笑いをしだして耳を疑ったなのは。

なのははは無神経ともとれる一護の方へと振り返り、涙を浮かべながら真摯に訴えかける。

「一護さんはどうして笑ってられるんですか！？いつもいつもこんなになるまで戦わせるから、ユーノ君が倒れるんですよ！！一護さ

んは・・・一護さんはユーノ君が心配じゃないんですか！！」

だが、それを聞いた途端一護は強い眼差しを向けながら断言した。

「弟子を心配しねぇ師が何処にいるんだよ、ボケ！！」

「！」

なのははその言葉を聞くと先ほど自分が口にした言葉に憤りを覚え、一護の言葉に眼を見開いた。

そして、ユーノはなのはを一瞥しながらユーノの方へと顔を向け、複雑な表情で語り出す。

「・・・ユーノはな、１０年前にお前やみんなと一緒に戦うことをとっくに諦めてたんだ。なのは・・・ユーノが今こうして魔導死神や完現術者としてやりたかったことをやれてるだけでも俺は嬉しいんだよ・・・だから、師としてこいつのやりたいようにやらせてやりたい。敵との戦いもユーノが自ら望んだことだ。ま、今のこいつにとっては何らかの使命感の元だろうけど。いずれにしても、師として弟子のそれを手伝い、見守るしかねぇだろう」

なのははユーノの事を自分かそれ以上に理解し、彼の事を想っている一護の言葉を耳にすると、両手で顔を押さえて涙ながらに返事をする。

「う・・・ごめんなさい・・・私・・・私・・・・／／／」

悔しさと切なさが籠った涙を流すなのは。

一護は徐になのはの肩に手を当てる。

「？」

「いいんだよ。なのはがいるお蔭で、ユーノも安心して戦えるんだからな」

「一護さん・・・」

「それとも、お前はやっぱりこいつには戦って欲しくないのか？」

一護はユーノを一瞥しながらそう尋ねると、なのはは胸のうちの心境を徐に語り出す。

「・・・私は・・・・・・今も昔も、ユーノ君の力になりたいんです・・・だけどそれ以前にユーノ君が何でも一人で背負い込んじゃって・・・私に甘えない・・・／／／一番大切な人が、誰かを守るために自分を蔑にして死に物狂いで戦う様を、何もできずに見守るのはもう嫌なんです・・・／／／私の魔法はその為の撃ち抜く力のはずだった・・・・・・それなのに神様は、一方的にユーノ君だけに何かを押しつけて、私達の介入を許さない・・・・・・こんなの・・・・・・こんなのって理不尽ですよ！」

ぼろぼろと瞳から涙を零す悔しさがこみ上げるエースオブエース。

一護はその話を聞くと、ため息をついてこう言う。

「・・・確かにな。クロノもよく口癖で言うしな。世界はこんな筈じゃないことばかりだって。俺もそれで随分情けねぇ想いをしてきたものか――――――・・・」

「ユーノ君には、出来れば戦って欲しくありません・・・――でも、それでまたユーノ君の顔が曇るのを見ると、胸がぐっと締め付けられて・・・／／／私はただ笑って欲しいだけなのに、昔大好きだったあの笑顔でまた笑って欲しいだけなのに・・・本当に・・・私はどこまで我儘なんだろう・・・／／／」

「なのは・・・」

すると、なのはは涙目で眠りにつくユーノの顔に近づくと、彼の手を包み込むように握りしめると、眠るユーノに語りかける。

「ユーノ君・・・・・疲れたよね。ずっと頑張ってるもんね・・・だからはいいんだよ。ゆっくり休んでて。またその時が来たら戦いに行くんだろうけど、今はいいからね。私に出来ることがあるなら何でも言ってね。私はユーノ君の支えなんだから・・・・・ずっと私を支えてくれたユーノ君の支えに今度は私がなるから・・・・・だから・・・・・全部一人で背負うなんて、言わないで・・・・・じゃないと、寂しいんだからね」

「・・・――」

一護は無言のまま眠るユーノとそんな彼に語りかけるなのはのやり取りを見ながら、自分一人で背負い込むことの弱さと周りの反応を今一度思い返していた。

と、その時二人の元にはやてからの連絡が入った。

「？はやてちゃんから・・・――」

なのははユーノから離れると、画面を開く。

『なのはちゃん。一護さんも。ちょっと司令室に戻ってきてくれへんか？ユーノス元帥が大事な話があるそうなんや』

「大事な話？」

「う、うん。分かった。直ぐに行く」

なのはは眠るユーノを気に掛けながら、同じく眠っているヴィヴィオを背中に背負うと、一護と共に措置室を後にした。

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

さて、再び場面はアンクとスカリエッティの方へと戻すことにしよう。

アンクはスカリエッティの話を聞いた後、右腕を怪人体へと変化させると、徐に言う。

「欲望をとめるなだと？だったら俺のも叶えてもらおうか。」

そう言うと、アンクはスカリエッティに歩み寄り、服を掴んで要求する。

「持ってるコアメダル全部出せ。おまえ何枚持ってる？」

スカリエッティは毅然とした表情でアンクとにらみ合いを交わす。

と、その時偶然にも現れたのは破面魔導虚のリヴァイアサンだった。
二人のただならぬ雰囲気を見た瞬間、リヴァイアサンは駆け寄っていく。
「！ドクター！アンク、何をしている貴様！」
リヴァイアサンはスカリエッティからアンクを放すと、アンクはそれに抵抗する。
「やめぬか貴様！」
「部外者は引っ込んでろ！その手を離せ！」
「誰が離すか、落ち着けっ！」
すると、その直後場の空気を全く気にしない様子で帰り支度を済ませたプレシアがスカリエッティに言ってくる。
「ジェイル。アリシアのご飯の時間なの。帰っていいかしら？」
「いつも言ってるだろう。したいようにしたまえ」
「そ。じゃあ帰るわ」
プレシアは許諾を受けると、足早に自宅へと帰って行き、リヴァイアサンも立場上そこはしっかり挨拶をする。
「お疲れ様でした」

と、ここで漸くスカリエッティが先ほどのアンクの言葉に対して、部屋に設けられたカウンターからワインを取出しグラスに注ぎながら返事をしてきた。

「アンク君。ミスターカリの実験なら、見ていて損はないよ。コアメダルの力は、ただグリードを完全復活させるためのものじゃない。すべてのコアメダルを手に入れようとしている君なら、非常に興味深いはずだよ」

「・・・――」

スカリエッティのその言葉を聞くと、アンクは急に大人しくなって口を閉ざすと、何事も無かったかのような顔でスカリエッティの前から立ち去って行く。

リヴぁアさんは呆気にとられてしまう。

「えっ、帰るのか？」

「流石はアンク君。理解が早い」

スカリエッティはアンクの事を褒め称えながら、グラスに注がれたワインを口にし、甲高い声でこう言った。

「すばらしい！」

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

一方、召集を受けたなのはと一護は司令室へと集まると、そこで前線メンバー全員に対してユーノが今日のメダル争奪戦での戦闘で現れた鳥のグリード、アンクの映像を公開する。

「これが今日の戦闘で目撃された、今まで人前に姿を現さなかった鳥のグリードの姿だ」

映像が映し出されると、見ていたスバルとティアナ、そしてフェイトの三人は目の色を変えて言って来た。

「こいつです！ＡＭ２７との戦闘の時に乱入してきたのは！」

「間違いない。私達が見たのと全く同じ・・・！」

「じゃあ、こいつが鳥のグリードのアンクか」

全員は今一度、他のグリードとはまた違う雰囲気を醸し出すアンクの姿を凝視し、ユーノスは結界印からタカのコアを一枚取出し目を瞑ってこう言った。

「アンクもまた、完全復活が出来ていない。俺がこうしてタカのコアを持っているしな。」

「それでも・・・不完全体であるにもかかわらず、私達はまるで手も足も出なかった・・・！」

「フェイトさん・・・」

フェイトが悔しそうに手を握りしめると、エリオとキャロは心配そ

うに顔を覗かせ、ルキアは腕組みがてら深刻な様子で口にする。

「それだけ、こやつの実力は並みのものではないという事か。」

全員が渋い顔を浮かべて新たなグリードの脅威に頭を悩ませる中、ユーノスはアンクの事から話を変えて来た。

「ところで、話は変わるのだが・・・先日のアゲハヤミーでユーノに妨害をしてきたリリスの事でちょっと」

「何ですか？」

「妙な事をユーノに口にしていた。ユーノが“第二のオーズの器”であると」

それを聞いた瞬間、なのは達は思わず耳を疑う。

「え・・・」

「ユーノが・・・オーズの器？」

「どういう事だよそれ！？」

「俺にもよく分からぬ。だが、少なからずユーノには何か特別なスキルがあるからこそ、そう言うのではないだろうか。しかし俺としても、オーズの事は前々から調べているのだが、何故か無限書庫からも有力な手がかりが見つからない」

「無限書庫でも見つからないって・・・そんな事が・・・」

聞いていた前線メンバーはその話に疑問を抱いたが、ユーノスが離していることろから見てそれが事実であるということは直ぐに納得できた。

だがだからと言って問題が解決されたわけではない。

「けど、オーズの事を何も知らないままユーノを変に利用されちゃたまったもんじゃねぇよ。それこそ、前のヴィヴィオや新八のときみたく、暴走するかもしれねぇ」

「そんな・・・！」

なのはとギンガが思わずＪＳ事件とカトゥーン事件の時に自我を忘れて、聖王とカトゥーンゼウスへと変貌を遂げた時の二人の事を思い浮かべ、表情を凍りつかせる中、恋次は更にコアメダルの事に関しても言及してきた。

「オーズもそうだが、もっとわからねぇのはコアメダルだ。ロストロギアとしての力は十分含んでいるが、これが一体どんなことを齎すって言うんだ？」

「前にユーノス元帥はメダルの元は欲望と言っていましたよね。どういうものなんですか？確か・・・・・・」

吉良はそう言いながら、恥じめてユーノスと対談した時に彼が話していたことを思い出す。

『９５０年ほど前につくられたグリードと呼ばれるメダルの怪人が永い眠りから目覚め、人々を襲い始めたんだ。』

つくられたという言葉を重要なキーワードと判断した吉良は、神妙な顔つきで問いただす。

「“つくられた”ってことは・・・・・“人間”にですか？」

「恐らくな――――――」

「オーズとコアメダルの事を調べる必要はありそうだな。だがどうすれば――――――」

と、白鳥がそう口にした直後、思いもよらぬ声が聞こえてきた。

「知りたいのなら、僕が教えてあげるよ」

「え」

「この声は――――――」

全員は一瞬耳を疑った。

何故ならその声とはたった今、措置室で眠っている筈のユーノの声だったのだから。

だがしかし正確に言えばその声は「絆の完現術士ユーノ・スクライア」の声ではなく、この世界とは並行して存在する「キバの世界のユーノ・スクライア」の声だった。

不意に現れた灰色のオーロラカーテン。

その中より現れる青年の姿に一同は思わず目を凝らした。

「あ！」

現れたのは、緑色を貴重とする司書長時代のユーノと全く同じ格好をしたキバの世界のユーノ・スクライアだった。

キバユーノはその場に現れると、柔かい笑みを浮かべて言葉を向ける。

「やぁ、機動六課のみんな。大体一年とちょっとぶりかな？」

「何？ユーノだと・・・！」

何も知らないユーノスは当然のことながら驚いたが、なのはの方は直ぐに理解する。

「ひょっとして、もう一人のユーノ君！？」

「何？じゃあ、こいつが・・・！」

一護は話に聞いていたもう一人のユーノを凝視すると、キバユーノは一護に近づき挨拶を交わす。

「お初にお目にかかります。もう一人の僕のお師匠様、黒崎一護さん。キバの世界のユーノ・スクライアです」

懇切丁寧な挨拶を交わした後、ユーノの後ろからキバットバット三世が飛び出した。

「俺様もいるぜ～」

「蝙蝠もどきまで!?お前ら、急にどうしたんだよ?」

「いや・・・変に胸騒ぎを感じてね、ちょっと久しぶりに会ってみようかなと思って来てみたんだけど、これ持ってきておいて良かった。向こうのなのはが作ったお見舞い用のお菓子。もう一人の僕にどうぞって」

「あ、うん。ありがとう」

キバユーノはなのはに彼の妻のなのはが作ったお見舞いを手渡し、その後すぐにはやてからの問答を受ける。

「で、もう一人のユーノくん。ひょっとしてオーズの事を知ってるんじゃ?」

「まぁね。士さんとも定期的にやり取りはしてるんだけど、実はオーズって言うのも僕ら仮面ライダーの同種の存在なんだ。」

「え?オーズが仮面ライダーなんですか?」

あまりに意外な答えに驚くキャロ。

キバットは翼を腕組みの要領で組みながらユーノの肩に乗っかりこう言う。

「話せば実に深い深い話になるんだが、ここはやっぱり知っておかねぇとマズイだろ。だから、俺とユーノで説明しようと思って態々来たんだよ」

「そうだったのか。では教えてくれないか、キバのユーノ。オーズと言う存在・・・更に言えば、グリードの事も」

ユーノスがそう言うと、ユーノは快く了承する。

「分かりました。ただ、一つだけ気になることが」

「何だ？」

キバユーノは浮かない顔を浮かべながら、窓の外に映る夜の街並みを見ながら完現術者のユーノの事を語り出す。

「もう一人の僕は・・・――自分がオーズの器と聞かされ、どんな想いなんだろうかって。それに、初めて遭ったときから何となく気づいていたけど、もう一人の僕には僕以上の欲がない。それこそまさしくブランク・オブ・デザイアだ。」

それに便乗して、キバットもまたこう言う。

「あれだけ絆の完現術士として、人やコアメダルの魂を使って戦いながら、まるで他人事のように知らんぷりだぜ、あいつは。あ、いや・・・自分にさえ興味がないのかとさえ思うぐらいにな」

「それを言われると、ちょっと胸が痛むぜ。」

一護は二人の言葉を聞くと、思わず胸を押さえ、神妙な眼差しで答える。

「今のあいつは、自分の事なんかこれっぽっちも見ちゃいねぇよ。ただ使命感と責任感のもと、人のエゴを引き受けるだけの奴隷と化

してる。」

「やっぱりそうですか・・・――」

キバユーノは話を聞くと、深いため息をつき、なのはとヴィヴィオは意気消沈とした様子で言う。

「私達も色々努力はしてるんだけど、肝心のユーノ君があれじゃ・・・」

「パパ・・・本当に欲望が無いのかな・・・」

それを聞くと、キバユーノは二人に近づきながら返事をする。

「彼もれっきとした人間だよ。今は無くしていても、そのうちきっと取り戻すさ。きっとね――――――」

「そうだな。では、頃合いがついたところで話して貰うぞ。オーズとグリードの事を――――――」

シグナムはそう言ってキバユーノに話を進めると、キバユーノはキバットと共にこれまで謎だったオーズと、更にはグリードの秘密を語り出す。

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

さて、秘密を語り出そうとするキバユーノ達の知らない場所で、グリードの一体であるメズールが奪われたコアメダルの影響で体中か

らセルをまき散らし、夜の街を徘徊していた。

「は、は、は、は、は、は」

そのメズールとは違い、コアは奪われなかったものの堪えがたい怒りにただ暴れることしかできないでいたウヴァは、人間体の姿でアジトにあるものを片っ端から蹴り飛ばし投げつけていた。

「カザリの野郎!!!」

カザリへの怒りを露わにしながら、ウヴァはカウンターへと座ってウィスキーを一気飲みし、昼間カザリが言った言葉を思い出す。

『ただメダルを集めて完全復活して、それで世界を食べるだけじゃつまらないと思わない？もっと進化すべきだよ。』

「ぶっは!進化・・・か。俺も・・・」

そんな事を口にしていたその時、メズールがウヴァの元へと戻って気、疲労困憊の様子でその場に倒れ込んだ。

メズールが戻って来ると、察しがついていたウヴァは確認のために尋ねる。

「カザリにやられたんだな？」

「なんとか・・・コア一枚だけは守れたわ・・・・でも・・・この姿でいるのがやっと・・・」

「アンクのようにはできないのか？」

ウヴァはメダル争奪戦の最中でアンクが見せた、片腕だけを離すというやり方に眼を疑っていた。

話を聞いたメズールは断言した。

「・・・こうなって分かったけど、あんな一部だけの分離や復活なんて無理・・・どうやってやったのか、わからない・・・ユーノス・スレイアの方も同じよ・・・あの体でどうして私達に対抗できるのかしら・・・」

すると、話を聞いていたウヴァは不敵な笑みを浮かべながら徐に呟く。

「“自分以外のコアメダル”を持ってたら、アンクやユーノスのようにいくのかもな」

「自分以外の？」

「ああ」

ウヴァはそう言うと、唐突に怪人体へと姿を変え、それに疑問を抱いたメズールが後ずさり気味に言う。

「ウヴァ？」

ウヴァは鋭い爪を向けながら、メズールに狙いを定め口にする。

「お前のコアメダル・・・もらってもいいか？」

「！」

「ぐおおおお！」

ウヴァは瀕死に近かったメズールの最後のコアを奪おうと襲い掛かって来ると、メズールは力を振り絞って水を放出し、ウヴァを吹き飛ばした。

そして、そのままウヴァの脅威から逃れるためにアジトから逃亡する。

ウヴァは重い足取りのメズールの後をゆっくりと追いかけていく。

「ふん」

グリード達がそれぞれの欲望の為に、今ここに分裂を果たし始めた。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

グリードの分裂が起こり始めたその頃、機動六課の方ではキバユーノ達によるグリードとコアメダルの説明会が始まっていた。

全員が注目する中、キバユーノは徐に語り出す。

「９５０年前、当時の古代ベルカの科学者たちが人口の命を作ろうとした。さまざまな生き物の力を、メダルに凝縮して」

「人口の命・・・」

「はじめにつくられたそれは、なんの意志も持たなかった。だが、それぞれ持っていた１０枚のメダルから、一つずつ抜き取り“９”という欠けた数字にした途端、それを満たそうとする欲望が生まれた。その欲望がすさまじい進化を生み、意志を持たせた。」

「その生命体の名、それがグリード！」

「それが・・・グリード・・・」

キバットの後に続いて、浦太郎が呟く。

キバユーノは更に補足の説明を加えた。

「そして、そのグリードを止めるために彼らから抜き取ったコアメダルの力で戦い、封印したもの。それがオーズ。『仮面ライダーオーズ』」

「オーズ・・・・・・」

話を聞き終えたあと、一同は渋い顔を浮かべながら口を籠らせ、キバユーノはそんな全員を一瞥し、次のような推測を立てる。

「――これは僕なりの推測だけど、多分もう一人の僕は欲望が全くない故に、コアメダルの力に唯一翻弄されず力を制御できる存在だから、第二のオーズの器なんて言われるんじゃないのかな」

「オーズの器、か・・・――」

ユーノスは神妙な顔つきでその言葉を繰り返し、その横でなのはは

無言のまま、ユーノがまた自分の知らない所に一人で行ってしまう、そんな錯覚に陥る。

「・・・・・・（どうしてだろう。ユーノ君が・・・・・・・どんどん遠くに行っちゃう気がする・・・――）」

◇

〈グリードＳｉｄｅ〉

一方、ウヴァに追われていたメズールは夜の街をおぼつかない足取りで逃げ回り続けていた。

「は、は、は、は、は・・・！」

ウヴァはメズールの後姿を捕えると、セルメダルを取出し半分に割ると、地面に投げつけ次々と屑ヤミー生み出していく。

「メズールを探せ」

作り出した複数の屑ヤミーに指示を出すと、屑ヤミーたちはゾンビのような足取りでめずーの気配を追って行き、やがてメズールは彼らに見つかってしまう。

メズールはそれでも必死で逃げ続けるが、一枚しかないコアメダルでは満足逃げることもままならず、とうとう屑ヤミーの一体に捕まってしまう。

その時、気の上で街の風景を眺めていた鳥のグリード、アンクは偶然にも屑ヤミーの気配を察知し、メズールの人間体が襲われている

のを発見し、彼らに接近した。

アンクは逃げ惑うメズールに向かっていく屑ヤミーの肩を掴むと、一体を思い切りなぐりつける。

「お前ら何やってんだ！」

アンクは憂さ晴らしの為に屑ヤミーと戦闘を開始する。

その戦闘の傍ら、少し離れた場所でしきりに時計を気にする者がいた。

その者こそ、ユーノが謎の少年君と呼称している右目が青、左目が翡翠のオッドアイの少年であった。

「もうすぐ運命の日まで8時間ちょっと・・・・・・そうすればこの窮屈な状況ともおさらば出来る。」

意味深長な口調でそう言う少年だったが、直後少年はメズールの悲鳴を耳にする。

「うわあああ！」

「！？」

少年が振り返ると、メズールが複数の屑ヤミーに襲撃を受けているところだった。

「ヤミー！」

少年は急いで襲われているメズールを助けに駆けだすと、屑ヤミーからメズールを解放し逃げることを促す。

「早く逃げて！」

メズールは思わぬ助けのお陰で、何とか屑ヤミーから逃れることに成功する。

そして、少年の方はと言えば懐からマシンガンを取出し屑ヤミーの脳天目掛けて発射する。

「くたばれ！」

少年は屑ヤミー全てを撃破すると、銃を収めて安どのため息をつく。

と、その直後彼の周囲から炎が立ち込め、振り返ったその先に居たのは屑ヤミーを火炎弾で燃やし尽くすアンクの姿だった。

「あれは・・・・・・」

少年は炎の中より現れるアンクの姿を凝視し、アンクもまたその少年の姿を見つめる。

その二人とはまた別に、ウヴァは自分の手を握りしめながら欲望を膨らませていく。

「もっと・・・コアメダルを・・・」

また、ウヴァと同じように木の陰に隠れて欲する気持ちを抑えきれないでいるメズール。

「そう・・・もっと・・・もっと・・・」

二人の言葉と並行して、アンクと対面した謎の少年は不敵な笑みを浮かべ、その場から立ち去って行こうとすると、アンクは咄嗟に声をかけた。

「お前！何者だ！？何がおかしいんだ？」

すると、少年は立ち止まり振り返るや否やこう返事を返す。

「別に。ただ、あんまし欲望が強すぎると碌な目に遭わないなって思って。悪いけどコアメダルは誰のものでもないんだ。それだけは覚えてときなよ」

「何？」

「ふふ。じゃあね♪」

少年はそう言うと、紫のミッド式魔法陣を展開し、一瞬にしてアンクの前から姿を消してしまった。

取り残されたアンクは怪人体の右腕を見ながら拳を強く握りしめ、自分もまたその場から高く飛び上がり立ち去って行った。

グリード達が独立独歩でコアメダルの争奪に乗り出したことを知ったカリ・ユガファウンデーション会長、カリ・ユガは自室の部屋の終末の絵を見ながら徐に人形に呟く。

「無限を超えたさらなる力・・・メダルを器に集めたとき、実験が

成功すれば良し・・・しなければ、メダルを集中させる器は・・・」

と、その時カリの机のディスプレイに警告と表示され、アラーとが鳴り響く。

カリは動揺せずに徐に近づき、画面の映像を切り替えると、そこに映っていたのは先ほどアンクと奇妙なやり取りをしていた筈のオッドアイの少年だった。

少年は自分のズボンのバックルに手を当てながら不敵な笑みを浮かべ、カリはこれを見ると人形に向かって呟く。

「とうとうこの日が来てしまいしましたか・・・――運命の日のその時が・・・・・――竜神の寵児がとうとう動きますか。だとしたら実に厄介ですね。彼はユーノ・スクライアと同等か、それ以上の力を持っているあの子供は危険極まりありません。」

カリはそう言うと、画面に表示されている少年を観察しながら、人形に向かって更に呟いた。

「何としてもあの厄介な子供をユーノ・スクライアから遠ざけなければ・・・――私の描く終末が訪れることは難しいでしょうね」

一体カリはオッドアイの少年の何を危惧し、警戒しているのであろうか？

さて、グリードの中でただひとりコアメダルへの執着をほとんど持っていないガメルはと言えば、何も知らずにアジトに戻って来るが、そこには既にウヴァも大好きなメズールの姿さえなかった。

「あれ？メズール・・・メズール！！」

ガメルはメズールが恋しくなると、思わず叫ばざるを得なくなった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

メダル争奪戦から一夜明け、ユーノは措置室の中で生命維持装置を付けた状態で深い眠りについたまま、ベッドで横になっていた。

一護はそんなユーノの様子を険しい表情を見つめていると、不意にドアが開きユーノスを肩に乗せた恋次とルキアが入ってきた。

「一護。ユーノの具合はどうだ？」

「恋次。ルキアとユーノスも。見ての通り、昨日の今日だ。当分は起きる気配はないな。」

一護がそう言うと、三人も渋い顔で眠るユーノを見つめ、ルキアが徐に呟く。

「あんなボロボロになっても尚、ユーノ殿はグリードとヤミーの脅威から、戦い続けている。一人一倍、何かを失うことを恐れるあまり、自らの魂を削ってもでも・・・・・・」

「ユーノ・・・・・」

ユーノスはユーノのベッドの上へと降りると、自らの不始末の為に巻き込んでしまったユーノの事を心配し、意気消沈とした気持ちと

なるが、そんなユーノスに一護はこう口を挟む。

「心配するな。俺の愛弟子は、こんなもんじゃどうにかならねぇよ。カトゥーン事件で見せたあの驚異の復活に始まり、普通じゃ考えられない生命力、そして何よりこいつを想う気持ちこそがユーノの最大の武器であり強みだ。」

ユーノスはその言葉を聞くと、一護に柔かい表情を浮かべて返事をする。

「そうだな・・・――――」

するとここで、ルキアがふとこんな事を聞いてきた。

「そう言えば一護。井上はどうした?」

「ああ。それならなのは達と一緒にちょっと買い出しに出てる。もうすぐ昼ごろだから、どっかで飯でも食ってるんじゃねぇのか。」

一護がそのように予測を立てていると、案の定織姫はオフで市内に買い出しに出ていたなのは、フェイト、はやての三人と共にランチタイムをとっていた。

ちなみに、今日のランチは今流行のイタリアンバイキングの店であった。

賑わいを見せる店内の中で、なのはは一人ユーノの事を考えながら申し訳なさそうな表情を浮かべてしまっていた。

フェイトはそんな彼女に優しく微笑みかけ、励ました。

「なのは。元気出して。ユーノなら大丈夫だから」

「うん・・・でもやっぱりユーノ君があの状態なのに呑気に私だけ・・・」

これを聞くと、織姫はこう便乗してきた。

「気持ちはみんな一緒ですよ。でもそうやって大事な場面で食事抜いたり、自分を痛めつけるような真似なんかしたら、却ってユーノさんを傷つける行為になりかねませんよ」

「織姫さん・・・はい。そうですね。私、どうしてもユーノ君の事になると、最近自分が許せなくなるって言うか・・・歯がゆいというか・・・」

「せやな。まぁ兎に角今はお昼何や。ここはしっかり食べて、しっかり備えとかあかんよ。エースオブエースの称号に恥じぬよう、体調も万全の状態に保たなあかん」

「うん。ありがとう」

「じゃ、早速取りに行こうか。お皿、お皿～と♪」

織姫は徐に立ち上がると、なのは達と一緒に料理を取りに行き始める。

なのは達が食事を堪能している間、外の方ではアンクが一人、木の枝に腰を掛けながら端末に映し出された現状のコアメダルを確認しながら、スカリエッティとカリが共通して口にしていたメダルの集

中の事を考える。

「（コアメダルの集中・・・――それで生まれる力がどの程度か、確かに見たくはあるな）」

そんなアンクとは違い、人間体のガメルはと言うといなくなったメズールを探して、異世界中を探し回り、結果的にミッドチルダ市街地にまで出没していた。

「メズール・・・・・・どこだ？」

メズールの名を口にしながら街を歩いていたガメルだったが、その時不意にガメルの視界に偶然にもなのは達が食事をとっているレストランを発見する。

「メズール・・・・・ん？」

ガメルは賑わいを見せる店内へと誘い込まれるように入っていくと、ドアを開けた瞬間店員の一人が写真を撮ってきた。

「いらっしゃいませ～！ご来店記念に、はい一枚♪」

店員がカメラのシャッターを切ると、フラッシュの光に思わず険しい顔を浮かべるガメル。

「んっ、まぶしい！」

「本日は特別バイキングコース、タリアテッレコーストになってます。はい、どうぞ」

店員は訝しげな様子のガメルに皿を手渡し、おすすめのピザ一枚をガメルの口に持っていく。

「これおいしいですよ。おすすめです。はい」

ガメルは口に運ばれたピザを一口食べると、嬉々とした表情で味の感想を述べる。

「ふふ。うまい！」

すると、その時なのはは料理を小皿に盛りつけている途中、ガメルの姿を確認し、思わず首をかしげて呟いた。

「あれ？あの人・・・・・どこかであったかな・・・？」

なのはが訝しげな様子で首をかしげていると、フェイトは気になって声をかける。

「どうかしたの、なのは？」

「うんうん。何でもないよ。多分私の気のせいだよ」

「そう」

気のせいだということにして食事を盛り付けることを再開するなのは。

その一方でガメルは適当に店内を徘徊すると、その時彼の瞳にメズールの後姿を思わせる長い髪の女性の姿が写ってきた。

ガメルはこれをメズールと錯覚し、嬉々とした声を上げて近づく。

「メズール！」

ガメルがそう言いながら肩に手を触れると、振り返った瞬間映ってきたのは、メズールなどではなく織姫であった。

「はい？なんでしょう？」

ガメルは愕然とした織姫に背を向けると、急に感情が不安定になり始め、しきりにメズールの名を口にしながら店内を見て回る。

「メズール・・・どこだ、メズール！」

しかし、ガメルの瞳に映って来るのはメズールとは似ても似つかぬ女性の姿や店員スタッフのみ。

ガメルの不安が徐々に大きくなり始める。

「メズール・・・どこだ？メズール・・・どこだ、メズール・・・メズール。どこだ・・・メズール！」

そして、不安がついにピークに達すると、ガメルがその気持ちを抑えきることが出来ずに凄まじい咆哮を上げた。

「うあああーーー！！」

ガメルの感情が爆発すると、体内のコアメダルガそれに反応し、その咆哮によって店内の照明器具やグラスが次々と破壊され、客たちは思わず絶叫し、なのは達も驚いた。

「「「「きゃあ！」」」」

そして、ガメルは全身からコアメダルの余波を出しながら店の外へと飛び出して行く。

「メズール！」

なのははその言葉を聞いた途端、耳を疑った。

「えっ？メズールって・・・！」

「何、今の？」

予期せぬ事態に思わず腰が抜けてしまったはやてやフェイトと、なのはと顔を見合わせる織姫。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

ガメルが市内で騒動を起こし、暴走を始めようとしていたことは、すぐさま六課のユーノスのセンサーにも反応が見受けられ、ユーノスは目を見開いた。

「！」

「どうしたユーノス？」

「グリードの気配だ・・・それもかなり近くだぞ！」

「何!?」

「シャマル!小鳥遊!ユーノは?」

恋次が焦燥に溢れた表情でそう尋ねると、シャマルとマリアは険しい表情で言う。

「今は起こせませんよ!新しく投与した薬の免疫反応と異物反応の中和に、最低でも12時間はかかります!」

「魂魄そのもののダメージがかなり酷いこともあります。残念ながら、これが私達死神と現代魔法医療の限界なんです」

一護達はそれを聞くと、悔しさのあまり拳を叩きつける。

「くそ・・・っ!」

しかし、この絶望とも言える状況を救い出す一人の人物が誰も知らないところでこの機動六課に接近していた。

その人物はオプティックハイドで姿を隠して六課内部へと侵入すると、真っ直ぐユーノのいる措置室へと向かい、部屋のドアを開けてからその姿を露わにする。

「・・・ふう。やれやれ。やっぱり来てみてよかったかな。」

オプティックハイドで姿を隠していたのは、あのオッドアイの少年。

少年は眠るユーノの元へと近づくと、彼の顔を柔かい表情で見詰め

ながら徐に呟く。

「今、起こしてあげるからね――――――」

すると、少年はバックルの方へと手を当て、そのバックルの中心部分の紫色の宝石、インテリジェントデバイス「ライジングハート」に指示を仰ぐ。

「ライジングハート。頼むよ」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　Ｈｙｐｅｒ　ｈｅａｌ〉

ライジングハートはユーノを包み込むように紫色の結界を展開し、ユーノはその中で医療スペシャリストのシャマルとマリアも驚愕する驚異の治癒能力によって、ゆっくりと目を覚ます。

「う・・・」

「よし」

少年はユーノが意識を取り戻すと、気づかれないようにオプティックハイドを発動し、六課の外へと出ていった。

ユーノの体調が突然平常値へと戻ったことは、すぐさま司令室の前線メンバーにも伝えられ、スバルは画面に映し出されたユーノの状態に思わず声を上げる。

「え・・・えええええ！！うそ！！！」

「どうした？」

「奇跡です!!ユーノ先生の霊圧・魔力反応・身体機能が全て正常値に戻りました!」

「何だって!!」

驚き返る一護達。

特にシャマルとマリアの二人は現代の医療治癒能力の限界を超えた驚愕の現象に思わず顔をそろえた。

「こんなことが・・・一体どういう事なんでしょうか!?私達の知る演算能力の限界を超えています!」

と、その時司令室の扉が開き、中に入ってきたのは回復したばかりのユーノだった。

「お待たせ、みんな♪」

「「「「「「「「「ユーノ（さん）（殿）（先生）!」」」」」」」」」」

「「「「ユーノ様〈スクライア〉!」」」」

全員は自分たちに微笑みかけるいつもの調子に戻ったユーノの方へと歩み寄る。

クロノは心配をする傍ら、何時もの冗談ぽく尋ねる。

「体はもういいのか、フェレットもどき?」

「クロノ。後で殺すからな」

ユーノはそう言った後、クロノに親指を突き立て飄々とした笑顔でこう言った。

「♪グリードぶっ倒した後、縛り首決定♪」

「ああ。そうしてもらおう！」

クロノも敢えてここは彼の口調に乗ると、同じように親指を立てる。

そして、ユーノは状況を確認してからスクライア商店三人に顔を向ける。

「スクライア商店一同で迎撃に出る。準備をしろ！」

「「「了解！」」」

金太郎、浦太郎、鬼太郎の三人は元気になったユーノに潔い返事をすると、劇劇の準備を始め、その間にユーノがユーノスを肩に乗せる。

「ユーノス元帥」

「ああ。兎に角無事でよかった。ここからが本当の始まりだ」

こうして、回復をしたユーノは家族同然とも言えるスクライア商店従業員の三名と、七大元帥ユーノスを引き連れ、市内に出現したガメルの反応を追って飛び出して行った。

その頃、ガメルの方はと言えば、大量のコアメダルの余波を体に受けながら、メズールを見付けられない事への不安から情緒がおかしくなっていた。

「全然いない・・・！どうして・・・」

ガメルは当てもなく辺りを歩きつづける。

そんなガメルを漸く見つけ出すことに成功したユーノ達は、すぐさまガメルに近づこうとするが、咄嗟にユーノスが止めにかかる。

「待て！」

「どうしたのですか一体？」

「あいつはガメルだ」

「「「「えっ（何ですと）！？」」」」

ユーノスの思わぬ言葉に耳を疑う四人。

と、その時ユーノスはガメルから感じ取れる異様な気配に眉をひそめると、直ぐに表情を一変しこう言った。

「！そうか・・・それでカザリの奴、メダルを・・・」

「え？」

「どういう事だよそりゃ！？」

「カザリはコアメダルを掻き集めて、それを一つの器に集中させようとしたんだ。で、その為にガメルを器にしたらしい」

「器って・・・じゃあ！」

「ああ。結構な数のコアがあいつに集められてるはずだ」

ユーノスが真顔でそう言った直後、ガメルは怪人体の姿になるや否や、常識では考えられないほどの力を伴った咆哮を上げた。

「ぬああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！」

「「「「う！！！！！！！！！！」」」」

あまりの余波の大きさに体制を保てなくなったユーノ達。

ガメルはその間にも咆哮を上げ続ける。

「があああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

やがて、咆哮が収まり余波による影響がなくなると、ユーノスは期待外れと言わんばかりにこう言った。

「フン。なんだ、この程度か？」

「これで？相当でしょ！」

浦太郎は冗談にも聞こえるユーノスにそう言うと、ユーノスは次のように返す。

「いや。たぶんガメルは自分のコア9枚が揃っていない。完全復活しなきゃ、器になってもこの程度ってことだ」

その話を聞き終えると、ユーノ達四人は全員愕然とした表情となる。

すると、そんなユーノ達の瞳に人間体のメズールの姿が映ってき、彼女はふらふらになりながらガメルの元へと近づく。

「う・・・・」

「メズール！」

ガメルは漸く探し求めていたメズールを発見し、声を上げるとメズールはガメルと顔を合わせて言う。

「あるのね・・・そこに。私のコア」

「メズール・・・どこに行ってた?俺・・・探してたのに！」

「いい子ね。いらっしゃい。あなたが全部欲しいのよ！」

「うん！」

ガメルはメズールの言葉を聞くと、手を広げて自らを求めるメズールの元へとメダルの姿となって近づいて行き、メズールと融合する。

ガメルと融合を果たしたメズールは怪人体となって擬似的な完全復

活を遂げると、急激に増えた大量のコアメダルの余波に当てられながらもこんな風に口にした。

「おバカさん・・・グリードのくせに欲がないなんて・・・でも、だからあなただけは裏切らない・・・好きよ。ガメル・・・」

ユーノ達はこの光景を見た後、言葉を失い目を見開いた。

同じ光景を遠くから観察していたカリ・ユガはメズールの様子を見ると、肩に乗せた人形に分かり切っていたばかりに呟く。

「足りませんね、やはり。」

そう判断すると、カリは運転してきたセルメダル５０００枚が収容された輸送車の荷台を開ける、メズールに向かって５０００枚のセルメダルを飛ばしていき、そのセルメダルの流れに乗せて、残りのクワガタとカマキリのコアを投げつける。

セルメダルの波は真っ直ぐにメズールの元へと向かっていくと、メズールを取り込みその姿を変えていく。

「うわあああああああああ！！！！！！！！」

悲鳴を上げるメズールの意識を完全に乗っ取り、そこに生まれたのは大量のセルメダルによって出来上がった体長３５メートルに達する首長竜に似た姿のバケモノであった。

ユーノ達は思わずその化け物の姿に絶句しかけ、本能的に恐怖を感じた。

「なんだあれ？」

「メズールも力をコントロールできてない。あれはただのメダルのバケモノだ」

ユーノスがそう言うと、暴走態の融合グリードは理性もなく只管に暴れ始め、その影響で地面が大きく陥没し、見ていたユーノ達は目を疑った。

「ただのってレベルじゃないだろ・・・ほんとに世界を喰らい気だ！」

「ユーノス元帥！」

「あれを倒せば大漁だ。が、その前に世界を喰らうのを止めることだ」

ユーノスはそう言うと、ユーノに結界印を手渡し、その場から離れる。

ユーノは早速スレイヤーモードとなった。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身を終えたユーノは腰に差していた逆刃刀と洞爺湖木刀を取出し、二刀流となって立ち向かっていく。

「はっ！」

ユーノが暴走グリードに向かっていくと、それに続いてスクライア商店メンバー三人もユーノのサポートへと回る。

「熊、亀！俺達も行くぞ！店長を助けるんだ！」

「「承知〈うん〉！」」

鬼太郎は変身ベルトを取出し腰に巻きつけ、浦太郎と金太郎はデバイスに組み込まれた甲冑モードを作動させる。

「変身！」

〈Ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ〉

「変身♪」

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ〉

「変身！！」

〈Ａｘｅ　ｆｏｒｍ〉

三人はそれぞれの個性に合わせて作られた甲冑に身を包むと、武器を手に取りユーノの後に続く形で走り去っていく。

四人が暴走グリードに向かっていく様子を見ながら、ユーノスは徐に呟く。

「問題は、倒せるかどうかだがな・・・」

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

この光景は、アルハザードのスカリエッティの元にも届けられており、タカカンの目を通して画面に映って来るコアメダルの集中によって誕生した暴走グリードの姿にスカリエッティは呟く。

「見給え、プレシア。アリシア君。コアメダルが全部集まった訳ではないのにこの力だよ！欲望の力だ！」

二人はあまりに常軌を逸した暴走グリードの力を見るなり顔を見わせ、苦笑しながらそれぞれ言う。

「やりすぎじゃないかしら」

「うんうん。私もちょっと引きま～す」

すると、二人の言葉聞いた直後、スカリエッティはついに自らがコアメダルを集めるその理由を発表する。

「安心したまえ！これは“失敗”だ。やはり器がグリードでは力のコントロールが出来ない。私が目指すのは飽く迄も・・・――欲望による世界の“破壊と再生”だ！ただ壊すだけでは意味がない！」

そのように断言するスカリエッティに対して、全く逆の考えに至るカリ・ユガは、目の前に映る暴走グリードの姿にこう言った。

「成功です。もっとコアメダルが集まればさらに・・・ようやく私

の目指す世界の終末が――――――」

カリはそう言いながら横を振り向くと、車の陰から見えてきた見慣れない甲冑に身を包んだ男の姿に目を凝らす。

その間にも、ユーノ達四人は暴走グリードを必死で食い止めようと激しい戦闘を繰り広げるが、ユーノ達の攻撃が全く以て暴走グリードの皮膚には歯が立たない状況だった。

「歯が立たない！」

「何とかせねば！！」

「くそ！！このこの！！切れろボケ！！」

「なんなのこいつ！？可愛げのない奴だよもう！！」

思わずそう言ってしまう四人。

するとその時、暴走グリードが突如として暴れ始め、四人の体を巨大な口で飲み込むように齧りついてくると、容赦なく彼らを振り回す。

「「「「うあああああああああ！！」」」」

ユーノスは血相を変えて四人の元まで近づくと、大声で言う。

「ユーノ！お前達、何とか離れろ！」

「「「「無理だ（ですよ）（ですぞ）！」」」」

四人は為す術もなくただただ暴走グリードの為すがままにされ、抵抗することもままならい・・・そんな時、突如として状況は一変する。

何処からともなく飛んで来た銃弾が、暴走グリードの体へと被弾し、ユーノ達はその衝撃で振り下された。

「「「「うわあああ!!」」」」

何事かと思い前を向くと、ユーノ達四人とユーノスの目に映ってきたのは見たこともない姿の戦士であった。

「「「「!」」」」

「え?」

「なんだ、あいつは?」

五人が見たその戦士とは、甲冑と思われる重厚な鎧の基本カラーが紫で、龍の顔を象った仮面をつけた鎧の上部が展開した形の姿をしたものだった。

その手には、武器である銃が握られていた。

「・・・――――」

銃を握りしめたまま、無言で暴走グリードを凝視する謎の紫の戦士。

カリはその戦士の姿を見届けた後、無表情のまま車へと戻り、その

場を後にする。

そして、カリがいなくなった後直ぐに紫の戦士が行動を起こし、腰に装着されたベルトに軽く手を触れる。

〈Ｗｉｌｄ　ｓｈｏｔ〉

「行くよ。」

そう言うと、紫の戦士は更に付属のカードを軽く翳してエネルギーを充填する。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

紫の戦士はフルチャージにより、シングルアクションで構えた銃の砲門に両肩のドラゴンジェムからのエネルギーを集束し、それを光弾として発射した。

「うらああ！！」

紫に輝く巨大な光弾が発射されると、それは真っ直ぐ暴走グリードへと直撃し、暴走グリードは大きなダメージを負って咆哮を上げ、ユーノ達も思わず唖然とする。

「すごい・・・！」

と、その時爆炎を上げる暴走グリードの体から弾かれたクワガタとカマキリのメダルが飛び出し、ユーノスはすぐさまユーノに言う。

「ユーノ！メダルだ！」

「あ、はい！」

ユーノは高く飛び上がり、飛散した二枚のメダルをキャッチする。

「よし。カマキリとクワガタは取り戻した！」

「店長、今ですぞ！」

「よっしゃ。それじゃ久しぶりに行きますか。」

そう言うと、ユーノは三人を少し下がらせ逆刃刀に宿る魂を引き出して、完現術コンボを発動する。

「“不殺の侍魂”！！」

〈Ｕｎｋｉｌｌ　ｓａｍｕｒａｉ　ｈａｒｔ〉

全身より溢れ出る緋色と紺の二つの霊圧色。

その瞬間、左頬に十字の傷を宿した不殺の侍が降臨する。

「おおおおおおおおおお！！！」

咆哮を上げるとともに、ユーノは神速分身によって数十人もの自分を作りだし、一気に止めを差そうとする。

〈ｔｓｕｋｕｍｏｒｒｙｕｓｅｎ〉

「「「「「「「「「「飛天御剣流、九十九龍閃！！セイヤーッ！」」」」」」」」」」

」」」」」」

一斉に暴走グリードへと飛び出したユーノ達。

九十九龍閃がクリーンヒットする寸前、従業員の三人が更に便乗する。

「序でにこいつも喰らいやがれ！俺の必殺技パート３！」

「ドルフィンドライブ！」

「ハデスの一振り！」

スクライア商店の絆が合わさり合った驚異的な攻撃をその身に受けると、暴走グリードは大爆発を起こして、１５枚のセルメダルとなって飛散し、ユーノスはすぐさま飛び散ったメダルへと向かって手を伸ばす。

「メダル・・・！」

だがその時、このタイミングを見計らって隠れて待機していたアンク、カザリ、ウヴァの三人が飛んでくる。

「「「は！」」」

「何！？」

ユーノスは三人によってメダル獲得を阻まれてしまい、三人はそれぞれ手に入れたコアメダルを見ながらそれぞれ呟く。

「ち。カザリ、ウヴァも」

「まぁ、こんなもんか」

「う～ん。フッ」

ユーノは完現術コンボの影響で多少息を上げた状態で、現れたグリード達を見る。

「グリードが三人も・・・」

そして、コアメダルを獲得したカザリ達は涼しい顔で立ち去って行く。

「またね、アンク。それにユーノス。ふふ」

「ふん」

「ユーノス・スレイア。いずれ返してもらうぞ。俺のコアメダル」

「・・・――」

ユーノスは、特にアンクの言葉に警戒心を抱く傍ら、見事なまでに奪われてしまったコアメダルに、思わず拳を握りしめる。

ユーノ達は変身を解くと、ユーノスに近づき言う。

「かなり持っていかれましたね」

「なに。また取り返すだけさ」

と、その時不意に浦太郎がこんな事を言って来た。

「あのさ、ユーノス元帥。グリード達はコアメダルを集めて、みんなあんな怪物みたいになるわけ？」

「さぁな。が、そんなこと死んでもさせないさ。何の為に俺が１５０年前に起こした後始末をつけるために現代に蘇ったと思ってる？それに、メダルの集中と言う話なら、ユーノにだって起こりうる危険はあるんだ。」

「え・・・僕が・・・？」

「そう言えば店長は眠ってたから聞いてないっすよね。キバ店長が話してたグリードとコアメダルの起源について」

「もう一人の僕が！？」

意外な人物の名が口にされたことで、ユーノは驚愕の表情を浮かべる。

金太郎はそんなユーノに更に言う。

「いずれにせよ、コアメダルの器として何者かが店長を狙っているということは確かなようです。そうなれば、店長も最悪な場合・・・――――グリードとなってしまうかもしれませぬ」

「僕がグリードか・・・――――なりたくもないね。だって、グリードって・・・」

そう呟きながら、ユーノはガメルやメズールの時の事例を思い出す。

『メズール・・・！』

『あなたが全部欲しいのよ！』

『うん！』

二人の事例を考えてから、ユーノは暴走グリードによって無残にも陥没した大地を従業員三人と見、複雑な顔を浮かべる。

「グリードって・・・ちょっと・・・なんだか・・・」

「ですね」

「いずれにせよ、こんなふうになるのは絶対に止めないとっすね」

固くそう誓ったユーノ達は、この先も否応なくアンゴルモアと並行して、コアメダル争奪戦に身を投じるのであった。

戦いが終わり、六課へと帰るその途中、鬼太郎はあの時自分たちを助けてくれた紫の戦士の事について話題を上げる。

「しっかし何だったんだあの野郎は・・・？」

「変わった人だったよね。」

「それよりも、あいつは魔導師だったのか？そして、何故俺達を助けた・・・お？」

と、その時ユーノスを始めユーノ達は不意に前方に現れた、先ほど自分たちを窮地から助けてくれた謎の紫の戦士と会い見える。

紫の戦士はユーノ達に向かい合うと、軽い口調で挨拶を交わす。

「やっほ♪」

「もしかして・・・さっきの？」

「おいてめぇ！何なんだ！？」

鬼太郎が強い口調でそう言うと、紫の戦士は呆れた様子でこう返す。

「やれやれ、昔から相も変わらず怒りんぼうなんだから・・・モモタロスは。」

「はぁ！？おい、てめぇ！！誰がモモタロスだと！！！！！」

鬼太郎は初対面の自分に対して一方的にそのような渾名をつけて呼んで来た紫の戦士に向かって乗り出そうとするが、すぐにユーノ達が止めにかかりユーノスが口を挟む。

「落ち着け。お前、何者だ？」

「僕？僕は・・・・・ああ・・・」

紫の戦士は一瞬返答に困ってしまったが、すぐさま解決策を見つけ出し、ディスプレイ上にミッド文字で書かれたある名前を表示させる。

「これ」

そこれに書かれていた文字を見ると、ユーノは徐に呟く。

「竜神の寵児・・・？」

「そう。それね♪」

〈Ｍｏｄｅ　ｒｅｌｅａｓｅ〉

紫の戦士は直後、身に纏っていた重厚な鎧を解除して、本来の姿を曝け出すと、その装着者の姿を目の当たりにしたユーノは度胆をぬいた。

「な！」

なんと、鎧を身に纏っていたのはいつもユーノを助けてくれていたあのオッドアイの少年だったのだから。

「よろしく」

オッドアイの少年は驚愕のユーノや唖然とするユーノス達に多少気障っぽくポーズをとってそう言った。

次回、衝撃展開が待ち受ける！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

終末とグリードと新戦士（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「さぁみんなお待ちかね・・・今日は人気投票の結果発表だ♪」

全「わあああああい！！！」

全員が拍手喝采でこの日を待ち望んでいたとばかりに騒然とする。

一「いよいよ来たか・・・やべ！なんかドキドキしてきた！」

な「私は何位ぐらいかな～～～楽しみだな♪」

フェ「ねぇユーノ。早く早く、結果を」

ユ「ようし。それでは発表します。投票数は少ないけど、貴重な一票には変わりない。先ずは第一位からの発表。」

全員が注目する中、効果音が収まると同時にユーノが発表する。

ユ「第一位。投票数2票で・・・・・・・――僕です♪」

全「おおおお！！！」

全員が一位となったユーノに温かい拍手を送る。

な「おめでとう、ユーノ君♪」

ユーノス「よくやったな」

ユ「あはは♪どうもどうも。続きまして第二の発表です。」

再び全員が沈黙し、その時を待つ。

ユ「第二位は二人います。投票数1票ずつで・・・・・・――ルキアさんと一護さん♪」

一「よっしゃあ！見たかＢＬＥＡＣＨ主人公の実力を！！」

ル「やはり我々の上位は当然だな。ははははは！」

は「いいな三人とも～～～で、ユーノくん。私らは何位なんや？」

そう尋ねると、ユーノはあっさりと言う。

ユ「ランキング外と言うことで、投票はここまでだったよ♪」

全「えええええええええええ！！！！！！！！！！！」

魔導師図鑑ハイパー！

自分たちがランキング外と聞かされた途端、全員がユーノに詰め寄る。

恋「どういうことだよそりゃ！！なんでお前らだけが順位獲得して、俺達はランキング外なんだよ！！」

な「そうだよ！なんでリリカルなのはの主人公の私が！投票さえさ

れてないの！この間の雑誌の人気投票には、お嫁にしたいアニメキャラ一位だったのに！！」

フェ「私だって納得できないよ！どうしてなのはと一緒に上位に入ってないの？」

ユ「落ち着きなさいな。いいかい、これは飽く迄も僕がメインの小説なんだよ。大体、考えてみなって。この小説を読んでいるってことは少なからず百合系が嫌いなか、あるいはそれに飽きた人なんだと思うよ。あとは純粋に物語を楽しんでいるのか。どちらにしても、なのフェの時代は終わったんだよ」

な・フェ「そ、そんな・・・」

それを聞かされ意気消沈とする二人。

恋「じゃあ！一護とルキアだけが投票得てるその理由はなんだ！？」

一「そりゃ主役の力って奴だろう。俺こう見えてもやるときはやる男だし、なによりこの小説の俺ってまた違ったカッコ良さがあるしな～！」

鼻で笑う一護に、この上もない怒りを覚える恋次であった。

恋「くそ！いつか挽回してみせるからな！！」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

オ少「僕は謎の少年君」

ヴィ「じゃ――――――ん！！」

ヤ「ここに入られては欲望が果たせないのでな」

ア「奴らに思い知らせてやれ。欲望の力を」

ユ「謎の少年君・・・！」

オ少「変身♪僕も飛んでいい？」

第１６７話　進級とオオワシと謎の少年

登場グリード

巨大グリード暴走態（メズール・ガメル融合）

身長　３５ｍ　体重　２００ｔ

特色／力：大量のオーメダルにより形成された巨躯、周囲に存在するあらゆる物体を喰らい尽くす

オーメダルの集中によって暴走したガメルを、メズールが吸収し融合した姿。ガメルを取り込む際、カリが用意した大量のオーメダルをも吸収したことで通常のグリードを遥かに超えるサイズに巨大化

した。力を制御できない暴走状態であり、周囲の物を喰らうだけの存在となる。攻撃が通じない程の巨大さと、凄まじいパワーでユーノを苦しめるも、突如現れた謎の戦士とユーノによる連係攻撃で消滅した。

進級とオオワシと謎の少年（前書き）

新しい始まりはすべて、何か他の終りからやって来る。

進級とオオワシと謎の少年

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

欲望からつくられた、未知なる力・コアメダル。

それを狙うのは、メダルの怪人・グリード、破面魔導虚を遣い暗躍する天才科学者スカリエッティ、財団を組織するカリ・ユガファンデーション会長カリ。

そして、第二のオーズとして戦う絆の完現術士ユーノ・スクライアと、１５０年の眠りから現代に蘇った七大元帥、ユーノス・スレイア。

彼らの争奪戦が１つのピークに達したそのとき、竜神の寵児と名乗る男が現れた。

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚

〈竜神の寵児Ｓｉｄｅ〉

ユーノ達の前に姿を現した、これまで幾度となくユーノを助け、貴重なコアメダルや未完成のはずのカンドロイドを提供してきた竜神の寵児、もといオッドアイの謎の少年は唖然とするユーノやスクライア商店メンバーに指を頭に翳して挨拶をする。

「よろしく」

ユーノとユーノスは、その少年の姿を目の当たりにした瞬間目の色を変えた。

「ああ！謎の少年君！！」

「そうか。あの時の・・・！」

驚き返る二人の隣で、きょとんとした表情を浮かべるスクライア商店従業員。

少年はそんな彼らにほくそ笑んだ後、小走りで近づき先ほどの挨拶の仕方に関してこう言って来た。

「んーーーちょっとキザっぽかったかな。やっぱこう言うキャラは似合わないや。御免なさい～！」

「全然♪助かったよ。毎度の事だけど・・・ありがとう」

意外にも素直な態度を見せてきたユーノの顔を見た少年は、肩の力を落とす。

「う！素直ですね～相変わらずあなたは・・・あっ、そうだそうだ。」

少年は何かを思い出した様子で懐から一冊の本を取出し、中身を捲っていく。

「え～～～っと、えっと・・・・・・ん～～～あーあった、あった」

少年が開いたページには、スクライア商店メンバー三人の細かい経歴などが書かれれおり、それを見ながら少年は三人に顔を向ける。

「元・時空管理局陸のエースオブエースの亀井浦太郎さん。そっちが武装隊名誉元帥だった熊谷金太郎さん。ってことは、こっちはあれだ。頭空っぽなモモタロスか！」

「あ！？」

鬼太郎は名も知れない少年から唐突にそう罵倒された途端、額に血管を浮かび上がらせ、その傍ら浦太郎が笑いを堪えた様子で口を押える。

「ぷふふ」

「笑うな！！」

「はは。桃谷鬼太郎だよ。僕の店の従業員。」

ユーノが微笑んでそう言うと、少年もまたユーノと似た笑みを浮かべて言葉を返す。

「へへへ♪そうでしたそうでした。態と間違えてみました。それで、ユーノさんの肩に乗ってるのが七大元帥最強の男、ユーノス・スレイア元帥」

「その通りだ。良く調べ上げているな」

と、ここで鬼太郎が浦太郎に一発拳骨を叩きこんだ後で、少年に詰

め寄りその素性を問いただす。

「おい！さっきから聞いてりゃ、お前なんなんだ？」

「僕？僕は謎の少年君。で、またの名をこれ」

少年はそう言うと、再びディスプレイ上に表示された竜神の寵児の文字を見せるが、鬼太郎は納得などしていなかった。

「本名を言えって言ってるんだよ！大体、その竜神の寵児って訳わかんねぇんだよ！なんなだよそれ！？」

鬼太郎が爆発寸前の状態で少年に問い質すと、少年は頭上に浮かぶ雲を見ながらあっさりと口にした。

「ふふ。まだ教えな～い♪」

「「「「ぐ！」」」」

呆気にとられ体勢を崩しそうになったユーノ達四人と、ついに我慢の限界を超え爆発する鬼太郎。

「ざけんじゃねぇ！」

鬼太郎は少年に突っかかろうと前に出ようとするが、即座にユーノと金太郎、浦太郎の三人が止めにかかる。

「ちょっと待てって、待てって！」

「先輩、抑えて抑えて！」

鬼太郎を宥めさせたユーノは、少年と向き合い真摯に言う。

「あのさ、謎の少年君。ここはお互いの為にも普通に説明してもらえないかな?」

「あ～無理無理。ユーノさんと違ってマニュアルとか活字読むの嫌いだし。」

「そんな」

少年はユーノ達と一旦距離を置くと、再び振り返ってこう返事をする。

「まあ目的と言うか・・・使命ってことならこれなんですけど」

そう言いながら少年は亜空間より大量のセルメダルやマニュアルなどを収納したメダルタンクを取出し手を叩いたが、その衝撃でタンクが倒れセルメダルが数枚散らばった。

「わー!やっちゃったよ!」

少年は急いで散らばったセルメダルを掻き集め、タンクの中に収納していくが、その光景を目の当たりにしていたユーノ達は唖然とした。

「え・・・セルメダル・・・?」

「何であの子が・・・」

疑問に思いながら少年の姿を凝視するユーノ達。

と、ここで漸くセルメダルをタンクに戻し終えた少年がポケットの中に入れていたあるものを取出しそれを握りしめながらユーノの元へと近づきユーノの手の中にそれを収める。

「はい！これ挨拶代わりにプレゼントです♪」

「え・・・！これは・・・！！」

ユーノが手の中に収められたものを見た瞬間、度胆をぬいた。

なんと、少年が手渡してくれたのは紛れもなく先ほどの戦闘でグリードに奪われた筈の、ゴリラとウナギの計二枚のコアメダルだったのだ。

「コアメダル！？」

「そ♪アンクの奴から失敬してきました。結構それ使えるから、持ってて損はないですよ。それじゃ！」

少年はユーノ達に別れの挨拶を交わすと、メダルタンクを亜空間へと収納し、ヘッドホンを付けると軽い足取りでその場から立ち去って行った。

少年が立ち去って行く光景を目の当たりにしながら、浦太郎はふと疑問に感じてしまう。

「まさかあの子もグリードと絡んでるんじゃ・・・！？」

しかし、そんな浦太郎の言葉に口を挟むのはユーノだった。

「いや・・・それは無いと思う。」

「どうしてそう言えるんですか？」

「何となくだけど・・・――それにあの子の目。あれはヴィヴィオと同じオッドアイ。そして、それ以上の純粋無垢な心を持った子どもの目だった」

「成程。お前は人を見る目があるようだな」

「ユーノス元帥ほどじゃ♪まぁ、これはしっかり儲けときましょうか」

「そうだな」

ユーノは結界印にコアメダルを収納すると、竜神の寵児と自称する青と緑のオッドアイを持つ謎の少年の後姿をまじまじと見つめるのであった。

「竜神の寵児――――――謎の少年君・・・か」

この少年こそ、今後のユーノの運命を大きく左右する重要なキーパーソンとなるのである。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

新暦００８１年　４月５日　午前７時１０分

謎の少年からコアメダルを受け取ったユーノ達は、あれからグリード達の動きがぷっつりと無くなったことに不信感を抱きながら、比較的平和な日常を過ごしていた。

３月が過ぎ、ヴィヴィオは五年のカリキュラムがある初等部を無事に卒業し、エスカレーター方式で今日から中等部へと進学する事になっていた。

そんなヴィヴィオの父親であるユーノは、その入学式の朝を迎えていながらも、日課のランニングは欠かさず行い、ジャージ姿でフルマラソンと同じ距離を走り終えて、ここ機動六課へと戻って来た。

「ふう～～～やっぱ春の早朝ランニングンは気持ちがいいね～～～」

ユーノは適度な汗をかいたので、寮に戻ってシャワーを浴び、その後着替えて隊舎の方へと足を運んだ。

「ただいま」

すると、その声を聞いたヴィヴィオが待ち望んだ様子で駆け寄って来た。

「パパ！パパ見て見て！」

「ん？」

「じゃ――――――――ん！！」

ヴィヴィオは早速と言わん様子で、中等部の制服に身を包んだその姿を年頃の娘らしく父の前に見せると、ユーノも柔かい表情となった。

「おう、ヴィヴィオ。そうか今日は中等部の入学式だったね。」

「へへ。私もとうとう中学生～～～♪長いようで身近かった小学生もこの間で終わり、今日からはアインハルトさんと同じ学区に入りまーす！」

「そっか。良かったよかった」

「ねぇ、パパも今日の入学式は来てくれるんでしょ？」

「え？なのはだけじゃないの？」

自分の事を指さしながら少し驚いた様子のユーノだったが、それを聞いた途端、先に着替え終えていたなのはは少々ため息をつきながらユーノに近づき言って来た。

「もう～何言ってるのユーノ君。親として、子どもの晴れ舞台には父母の参加は絶対条件だよ。ささ、早くこのスーツに着替えて着替えて♪一緒に写真撮ろう！」

「パパ、お願い～♪」

二人にせがまれると、ユーノも断るわけにもいかなくなり少し笑みを見せながら観念した様子でスーツを受け取る。

「はは・・・やれやれ。分かったよ。ちょっと待ってて」

ユーノはなのはから貰ったスーツを受け取って更衣室に向かうと、早速自分のパーソナルカラーである緑を基調としたスーツに身を通し、鏡の前でネクタイを結ぶユーノを見ながらユーノスを始め男性局員は微笑ましい姿で見詰める。

「すっかり父親姿が板についてきたな」

「羨ましいっすね。おい、グリフィス。お前もそろそろ作ったらどうだ？」

「な！ヴァイス先輩止めてくださいよそう言うのは／／／」

「しかし早いものですよ。ヴィヴィオがもう中学生なんて・・・」

「僕達も正直そんな実感はないですけどね。」

ユーノはそう言いながら、中学の制服にすっかり酔いしれあちこちに評価を聞いていたヴィヴィオの姿を見つめる。

「どうですかこれ？」

「うん。いい感じ♪」

「お、ファスナー開いてるぞ」

「きゃあ！！鬼太郎さんのエッチ！」

「ぐっほ！」

ヴィヴィオはスカートを押さえながら赤面した状態で力いっぱい彼の顔面に拳を叩きこんだ。

ユーノは自分やなのはの知らないところで凄まじい速さで成長を遂げるヴィヴィオの事を、物寂しそうな表情で見詰めていると、フェイトは徐に言葉を挟んだ。

「ユーノ。朝からなに切ない感じでいるのさ。もっと笑わないとね」

「うん。そうだね・・・・・だけど、どうしてだろう。本当の親も知らない筈の僕がこうして父親として振る舞っているのは今でもぴんと来ないや」

それを聞いた恋次はルキアの隣でこう言って来た。

「尸魂界の連中なんかみんなそんな奴等ばっかだぜ。生きた時代も場所も関係なしに、ここみたく共同体を作って家族同然で生活してるんだ」

「安心してください、ユーノ殿。あなたは立派な父親ですぞ」

「・・・――ありがとうございます」

「よし。ほんなら、なのはちゃんとユーノくんはヴィヴィオを間に挟んで後ろに立ってな。いくで・・・はい、チーズ」

はやてはカメラのファインダーを見ながら、ヴィヴィオを間に挟んで後ろに立つなのはとユーノをしっかりと家族写真として収め、また新しい子供の旅立ちを全員で祝福した。

が、この時誰も思っていなかった――――――その子供にもう一人加わる事などと言う事など――――――

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

入学式から数日が経過したとある次元世界。

鳥のグリードであるアンクは人気のない場所で朝から相当機嫌を損ねて大暴れをしていた。

「くそがっ！！」

アンクは木の幹をへし折りながら、無差別に森の中を破壊していくが、その苛立ちの原因は次のような事だった。

「コアメダルはあの時確かに掴んだ筈だった！なのに何だこれは！！」

アンクはそう言いながら手の中に握られた、コアメダルに似せて作られたまがい物の姿に苛立ちを覚えながら、そのまがいものを砕いた時に出て来た手紙の中身に怒髪天を衝いていた。

〈コアメダルは頂くよ♪悔しかったら取り返してみろ、チキン南蛮。竜神の寵児より〉

「竜神の寵児だと・・・・・ふざけやがって！！」

アンクは手紙をくしゃくしゃに丸めて、それを炎で燃やすと握っていたまがい物のコアメダルを粉砕し、怒りのボルテージを上げ続けた。

「カザリもウヴァも、どいつもこいつも・・・・・おまけにタカのメダルはユーノスが持ってるんだ。いや、それだけじゃない。カザリの奴・・・俺のメダルを」

アンクの言う通り、彼が争奪戦の時に手に入れようとしていたクジャクのコアは、メダル争奪戦を仕掛けたカザリによって奪い盗られてしまっていた。

「くっ。今に見てろ。まとめてこの屈辱は晴らしてやる。」

胸に抱いたコアメダルの執念と復讐心、そして自らの欲望を糧とし、鳥のグリードアンクは今日も次元世界を飛び回り、欲望にまみれた人間とアンゴルモア捜索に乗り出していくのであった。

◇

〈ユーノスＳｉｄｅ〉

同時刻、ユーノス・スレイアは深いため息をつきながら、ユーノの机の絵うに置かれた網籠の中で物思いに考え込んでいた。

「ふう～～～」

「どうしたんですか、溜息なんかついて?」

気になったユーノが尋ねると、ユーノスはメダル争奪戦以降めっき

り行方を暗ました竜神の寵児のことを言って来た。

「いやな。あの竜神の寵児と言う少年の情報が全く集まらん。オッドアイと言うことで様々な方面からアプローチをしているのだが、まるでヒットしない。何故コアメダルを持っていたり、ユーノが開発しようとしている筈のカンドロイドの完成品を持っていたりなどと、不明確な点が多すぎる。あれから姿も見せないしな」

「確かに・・・まぁ気長に待ってればそのうち出てきますって。多分ヤミーが現れた時とかに」

「ヤミーか・・・・・それにしてはここ最近静かすぎる。春休みで何処かでバカンスなどしていないだろうな・・・まさかカザリやウヴァもって言うんじゃないだろな・・・」

「そういえばホントに最近グリードもヤミーも出ませんね。あっ！あのアンクもこの機に乗じて長期休暇中とか？」

「ふん。アンクがメダルの事以外でそんなことをするとは思えぬが・・・つかの間の平和を満喫するのも存外悪くない。いや、これこそが本来あるべき世界の姿か――――――」

ユーノスが意味深長な物言いでそう言うと、聞いていたユーノも思わず笑みを浮かべる。

「そうですね。まぁ、また会えると思いますよ。竜神の寵児の謎の少年君には。メダルに絡んでいるのは間違いないし。そのうち、どう言う人かも分るでしょ」

「そのうち・・・か」

気ばかりがどうしても焦ってしまいがちなユーノスとは裏腹に、こう言ったことに関しては時間の制約を一切気にする様子の無いユーノ。

ユーノスはそんなユーノの放った言葉を真摯に聞き入れると、今一度自分自身を見つめ直しながら気長にという言葉通り、焦らず時間をかけてその時が来るを待つのであった。

◇

〈スバルＳｉｄｅ〉

またその頃、首都クラナガン方面に外回りに出かけていたスバルと吉良の二名は、用事を済ませると帰路に立ち寄ったスバル行きつけのケーキ屋に立ち寄り、ヴィヴィオの進級祝いのためのお菓子を選んでいた。

「う～～ん・・・・・どれにしようかな？」

ヴィヴィオの進級祝いをシュークリームにと考えながらショーウィンドーと向き合うスバルを見ながら、吉良は時計を一瞥し彼女に言う。

「早く決めてくれないかな、スバル。じゃないと、またティアナに怒られるよ。選ぶのが遅いって」

「もうちょっと待ってくださいね、吉良さん。こう言うのは見た目の判断が凄くムズかしいんですよ。」

「そんなものかな・・・・・・」

と、ここで吉良がふと何やら神妙な顔つきとなると、魔導虚事件以降全くと言うほど人前に姿を現さない処か、アンゴルモアを狙ってくる気配すらない広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの事が気になると、頭の中で考え始める。

「（それにしても妙だ・・・・・・グリード達の事ですっかり忘れがちになってしまっているが、ＡＭ０４の出現でアンゴルモアを奪われ、更には研究室からも三つのアンゴルモアが盗まれたというのに・・・あれきり一年以上もスカリエッティ達の動きはないままだ。もしかして、僕達が全てを集め終えた後に根こそぎ奪いに来る為の戦力を準備しているのか？それともまた別の何か・・・）」

知っての通り、彼ら機動六課はスカリエッティがコアメダルに深くかかわっているなどと言う情報を一切掴んでいない。

その為、彼の目的である欲望による破壊と再生の為に、オーズの器であるユーノに強い興味と執念を抱いていることなど知る由もなかった。

スカリエッティの事を真剣に考え難しい顔を浮かべる吉良だったが、直後彼の様子が気になったスバルが声をかけて来た。

「吉良さん。どうかしたんですか？」

「え！？あ、いや・・・何でもない。ちょっとした考えごとだよ。」

「そうですか・・・それじゃあ、これとこれとこれにしますから！お会計済ましてきますね！」

「分かった。」

吉良はスバルの言葉を聞くと、取り敢えず先ほどの自分の憶測は胸の奥へとしまい込み、会計が済むまで店の外で待つことにした。

スバル達が立ち寄ったケーキ屋からそう遠くない路地裏に店を構える屋台のラーメン屋。

いま、垢ぬけたところなど一つもない小さなラーメン屋に立ち寄る男が一人。

青と緑のオッドアイに、なのはと同じ茶色の髪の毛が特徴の軽快なリズムとステップを刻んで歩み寄る竜神の寵児こと、謎の少年。

少年はヘッドホンから流れる音楽を聞きながらリズムカルな動きで近づいて行き、暖簾を潜ってオカルト雑誌に目を通す店主の前にその姿を現した。

「いらっしゃい」

少年はヘッドホンを取り外すと、パイプイスへと座って注文をする。

「おじさん、醤油ラーメン頂戴♪」

◇

〈???Ｓｉｄｅ〉

では、ここで今回のアンクの標的となるヤミーの親を紹介しよう。

第４１１管理外世界『オウル』に住まう、一人の老人がいた。

ヒロシ・ウチヤマダは６２歳。

定年退職と同時に妻とは離婚。

少ない年金での生活をする傍ら、彼の心のオアシスは動物が数多く集まる公園に立ち寄っては、その動物たちに餌付けをする事だった。

ヒロシはゆりかごめに向かって今日も日課の餌まきを行う傍ら、それ以外の動物の世話を行っていた。

「かわいいね、キミは。え？」

肩に留まったヒバリにそう言うヒロシは、また別な場所に移動すると集まってきた子猫や子犬を集めて持ってきた缶詰を皿に装う。

「さぁ、しっかり食べろ。美味いぞ」

子猫が夢中でツナ缶に被りつくる姿にヒロシは笑みを浮かべる。

「美味いか？へへへ」

ヒロシにとっての残り少ない人生において貴重であり今最も生き甲斐を感じているこの瞬間こそ、彼にとってのユートピア。

「ほーれ！そら！」

さまざまな動物たちと触れ合う中で生まれてくる働き盛りの自分に

は全くなかった他の生き物に対する愛護。

ヒロシは傍から見れば落魄れた老人の末路などと揶揄されるそれを、満足した様子で従事していた。

「はははは。ほら、食べないのか？ははは」

こんな至福の時間が出来るだけ長く続けばいいのにと、心の底で思っていたヒロシだったが、直後ユートピアは公園に鳴り響く軽快な音楽によって崩壊する。

「！？」

ヒロシは自分では五月蠅いと思えるようなその物音を耳にすると、動物たちも過敏に反応し鳥も、猫も犬が一様にその場から離れていった。

ヒロシが不意に後ろを振り返れば、そこにはブレイクダンスの練習をする数名の若い男たちが練習を行っていた。

他の人の事も考慮に入れ、ヒロシは彼らに近づき注意を促す。

「君たち！公園で暴れんのは禁止だぞ！」

そう言うと、ヒロシの言い分に練習をしていた若者の一人が身勝手なまでに言い張る。

「俺達練習してるだけだし～」

「公園はな、みんなのものなんだ！」

「だったら俺らのもんでもあるって訳でしょ?音だってデッカくしてねぇしさ～」

「だけどな・・・だけどな・・・!他はどうでもいい・・・」

「ああもううっさい!だったら公園で踊んなってルール作ってから来て!ほら、邪魔。邪魔!邪魔邪魔邪魔!」

若者は強気な態度でヒロシをその場から立ち退かせると、蚊帳の外のヒロシを無視して踊りの練習を続ける。

「おお、踊るぜ!」

ヒロシは物寂しそうな顔を浮かべながら、茂みの方に隠れている動物たちを見、空の皿を片付け始める。

「・・・また後でな・・・」

ヒロシはこの時、どうにかしてこの公園の現状を解決する方法はないかどうかを考えたが、結局ところそれを考え付いたところで今の自分に出来る訳もないという諦めを抱いて、一先ず敷地内から出ていくことにした。

これがのちにアンクの格好の欲望の餌となることなど知らずに――

――――

◇

〈竜神の寵児Ｓｉｄｅ〉

一方、竜神の寵児・・・謎の少年は醤油ラーメンに夢中でかぶりつきながら、次から次へと注文をしていきどんぶりの数を増やしていた。

箸が一向に止まらない少年に呆然としながら、店主は少年から聞いた話に対して徐に返事を返す。

「へぇ～ずっと外国にね・・・・・・なんで戻って来たの？」

「ちょっとね。使命で」

「使命か・・・まぁ頑張りなよ。それよりさ、最近世の中おかしいのよ。年明けからかなりやばい事件は起こるしさ。おまけにさ、これ見て」

店主はそう言うと、読んでいたオカルト雑誌を少年に手渡し、少年はそこに書かれていた記事に目を向けると、そこにはグリードとヤミーに絡んだ写真と一緒にこれまで破壊されたビルなどが映っていた。

「あっちこっちでビルが壊れたとか怪物がいたとかさ・・・――――原因もね、グリードっていう怪物が復活したんだとか。あああーっ！！！」

「ふ～ん」

グリードを知らない店主の出鱈目な物真似を一蹴し、少年は雑誌の記事を読みながらラーメンに箸を進めていく。

店主は自分でも気恥ずかしそうな様子で物真似を止めると、更にこう言う。

「・・・まぁ・・・テレビとか新聞じゃ大々的にやってないし、ただの噂だけど。世の中不安だっていう証拠だよ。タイミング悪かったね。」

「いいや。タイミングぴったりだよ・・・・・ピッタリ！」

少年は目を輝かせながら店主にそう断言する。

一体、その根拠とは何処にあるのだろうか？

そんな少年の物言いを気にしつつ、一度ここでスバルと吉良の視点に戻すことにしよう。

スバルと吉良は大量に買い込んだ特製のシュークリームやその他ケーキ類計３０種類を匣いっぱいに詰めてもらうと、スバルは意気揚々とした足取りで、吉良の方は唖然とした様子で歩いていた。

「いや～～～結構買っちゃいましたね♪」

「そうだね・・・・・・（これは流石に買いすぎなような気がするけど・・・）」

「早いところ、六課に戻ってみんなで頂きましょう。」

「ああ。阿散井君もお待ちかねのはずだと・・・ん！？」

と、その時吉良は不意に見えてきた光景に目を見張り、スバルも気

になって目の前を見つめる。

「え・・・あ、あれは！」

二人の瞳に映って来たのは、まだ年端もいかない子供が不良に絡まれ、周囲の前でいいものにされているという光景だった。

「うわあああああん！！！！！ごめんなさ～い！！！！！」

「ピーピーうっせんだよ！！！！！！一体どこに目つけて歩いてんだよ、ああ！！！！何じろじろ見てんだてめぇら！！！！」

傍若無人な男の態度に周囲がたじろいでいると、それを偶然にも見かけていたオッドアイの少年がそれに気づき、一旦ラーメンの箸を止める。

「・・・・・おじさん、ちょっと待ってて」

「え？ちょ、ちょっと。あんた？」

少年は店主の言葉を無視すると、真っ直ぐ男の方へと向かって行き、その間にスバルと吉良が男と向き合い説得に応じていた。

「そんな小さな子供になんてことするのよ！今すぐ放してあげなさい！！」

「じゃかしい！ぶつかって来たのはこのガキなんだよ！俺は躾をしてるまでだ！」

「それは躾とは言わない。ただの薄汚い暴力だ。スバル、少し痛い

目を見せないといけないようだね」

「はい！」

二人は男と向き合い臨戦態勢となるが、その直後男は突然後ろから何者かに突き倒され、盛大に倒れる。

「のあああ！！！！」

「「え！？」」

一瞬驚きを隠し切れないでいた二人だったが、その時泣き喚いていた子供を助け出し、男を突き倒した人物の姿に唖然とした。

少年は男に向かってこう言った。

「この子泣かせたのは、お前？」

「痛～～～いきなり飛び出してくるんじゃ、ガキ！！！！！殺すぞ！！！！！」

男が振り返ったとき、目の前に映って来たのは竜神の寵児、オッドアイの少年だった。

少年は男の言葉の威圧に一切動じず、逆に不敵な笑みを浮かべるとこう言い返す。

「・・・殺す？はっ、誰に向って言ってるのさ。お前なんかに僕が殺せるはずもないでしょ。いや、殺す度胸もないくせにと言った方がいいのか？」

「てめぇ・・・もう頭にきた!!!!!」

癇癪を起した男はアーミーナイフを取出し、少年に突きつけるが、少年はナイフを目の当たりにしてもまるで臆することなくこう言う。

「ふん。そんなものでどうする気?まさか、そいつで僕の腹を一突き・・・とでも?」

「分かってんなら大人しく死んでもらうぞ!!」

男は怒髪天を衝くと、ナイフを少年に向けて勢いよく突っ込んでいき、スバルと吉良、周りにいる誰もが少年に目を向ける。

「あ!!危ない!!」

が、その時。

少年は不敵な笑みを浮かべながら指を鳴らすと、何処からともなく聞こえてきたヒップホップに体を反応させながら、軽快なリズムで男のそれを回避し、男はそのまま腕を掴まれる

「何!?」

「お前・・・倒すけどいいよね?答えは聞かないけど。」

少年は一方的な物言いでそう言うと、男の手を掴んだままブレイクダンスを始め、音楽に合わせて男の体を引きずり回し、徹底的な制裁を下し始めた。

なお、この時掛かっている音楽は著作権上の都合上、歌詞を掲載することは出来ないが、ヒントを言えば「仮面ライダーシーリズ」で先ほどの少年の物言いをする客たーのバックグランドミュージックと言えば大方見当がつく人もいるのではないだろうか。

まぁ、そんなことはともあれ少年はブレイクダンスをする傍ら、自分をノリノリの状態で楽しみみ、同時に理不尽な暴力を子供にしていた男には手酷い仕打ちを施す。

「どあああ!!!!」

少年が最後の決めポーズの際、男の顔面に右足をめり込むように蹴り込むと、男は頭上にひよこを回しながら鼻血を出して気を失った。

「ハラホレハラホレ・・・・ピヨピヨ??」

周囲のものは光景に唖然とし騒然となると、スバルや吉良も思わず目を疑った。

「凄い!!ブレイクダンスで倒しちゃった!!」

「しかし、彼は一体何者なんだ?何所か、見たことのあるようそうでないような顔をしているのだが・・・」

吉良はそう思いながら、オッドアイを持つ少年の方を見据えると、少年は今まで怯えていた子供の元へと近づき、優しく包み込むような笑顔で語りかけていた。

「大丈夫かい、君?」

「うん！ありがとう、お兄ちゃん！！助けてくれて！！」

「お礼を言われることはなにも。僕はただ・・・あの手の人間が嫌いなだけさ♪それじゃあ、僕はこの辺でね♪」

少年は去り際、子どもに飴玉を手渡すと、スバル達を背にしてその場を後にし、子どもは笑顔で少年に手を振った。

「バイバイ、お兄ちゃん！！」

「君もああいう大人には気をつけるんだよ♪」

少年はまたラーメン屋の方へと戻っていくが、その時吉良は漸く少年の特徴から、彼がまぎれもなくユーノが常々口にしていた竜神の寵児であるということを思い出す。

「（！あの瞳は・・・・・・まさか！）」

◇

〈アンクＳｉｄｅ〉

少年がミッドチルダに置いて人助けに精を出すのに対して、異世界に現れたメダルの怪人、アンクは破面魔導虚アスモデウスからの情報提供を受け、管理外世界４１１番である「オウル」へ足を運んでいた。

「アスモデウスからの情報によればこの世界の筈だが・・・カザリ達はまだ場所が分かってないようだな。さて、アンゴルモアの前に一つやるべきことがある。どうせユーノ・スクライアたちも来るこ

とはわかってるんだ。序の俺のコアメダルを取り戻す！」

アンクは心にそう誓うと、ユーノ達をおびき寄せるためにうってつけの欲望を抱いた人間を探しに街へと足を運ぶ。

そんな中、アンクはその途中の公園で見かけた一人の老人に目を向ける。

その老人こそ、あのヒロシ・ウチヤマダであった。

ヒロシは深いため息をつきながら公園の水道で動物達が食べた餌のトレーを洗っている最中だった。

「はぁ～～～」

物寂しそうな様子でヒロシは先ほどのことを考え、ひとり言のようにつぶやく。

「なんてこったい・・・公園はみんなのものだって言うのに・・・・・」

そんな事をぼやきながら、ヒロシは心の底から思った内なる欲望を口に出す。

「せめて・・・動物たちが安心してくらせるようになればな・・・・・だけど私にはその為の力もない・・・・・・・・・諦めるしかないのかね――――――」

アンクはその言葉を聞くと、ほくそ笑み心の中で呟く。

「（こいつ、使える）」

早速アンクはヒロシの欲望を自らの作戦の為の手段として利用しようと、彼に接近。

セルメダルを一枚取出し皿洗いをするヒロシに語りかける。

「その欲望、俺が叶えてやろう」

「ん？」

ヒロシが振り向いた瞬間、アンクは持っていたセルメダルをヒロシの元へと投げつけ、額に出来た投入口にセルメダルが投与される。

「ぐ」

体の中に侵入してきた異物に違和感を覚えるヒロシ。

アンクはそんなヒロシにさらに語りかけた。

「奴らに思い知らせてやれ。欲望の力を」

すると、その直後ヒロシの体から白ヤミーが誕生し、ヒロシは体から出て来た異形の怪物の姿に腰を抜けした。

「う・・・わあああああ！」

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

アンクが行動に移し始める少し前、オッドアイの少年が市街地に出没した事をユーノに伝えたスバルと吉良。

ユーノは二人が買ってきたシュークリームを食しながら、その話に耳を疑った。

「え？オッドアイの少年が？」

「はい。私達もビックリしました。でも間違いないなかったです」

「じゃあ、その子がユーノ君の事を何時も助けてくれる謎の少年君・・・はい、あ～～～ん♪」

「あ～～～ん♪」

なのははユーノの口の中にシュークリームを入れていき、その甘い雰囲気を見て癇癪を抱くマリアの全身から嫉妬の炎が燃え上がり、なのはは心の中で勝ち誇った笑みを浮かべてガッツポーズをとっていたそうな。

他のメンバーも各々シュークリームを始め、多種多様なケーキをつつきながらその少年の話で盛り上がった。

「オッドアイもそうですけど、あとは何所となく、ユーノさんと雰囲気が似ていましたかね。」

「僕と、謎の少年君がですか？」

「世の中には他人の空似という言葉があるしな、いても不思議じゃ

ねえだろ。」

「でもブレイクダンスとはね・・・ちょっと見てみたい気もするわ。」

「エリオ君も、ダンス結構得意だよね♪」

「そりゃ・・・一応ワルツとかタンゴとかなら出来ないことはないけど・・・ブレイクダンスみたいなのはちょっと。」

「貴様、何所でそんなものを覚えたんだ・・・」

ふと気になったルキアがそう尋ねると、横に座っていたフェイトが答える。

「ああ、前に私がちょっと嗜み程度にって。」

「結局お前の差し金か・・・テスタロッサ・・・」

シグナムは些か彼女の過保護と不必要な母親としての気遣いに諦めを感じつつ、皿の上のケーキを口の中へと入れていく。

そのシグナムの隣では、はやてとリィンが夢中でシュークリームにかぶりついていた。

「しかし、ここのシュークリームほんま美味しいわ～～～！！！」

「本当です！！いくらでもお腹に入っちゃいますね！！」

「ミッドでも超がつくほどの有名なお菓子屋さんのシュークリーム

ですからね。ここで食べとかないと後悔しますよ・・・クロノ提督♪」

スバルはニコニコと笑いながらクロノに顔を向けると、クロノは片意地を張って敢えてコーヒーばかりに手を付け頑なに甘いものを否定する。

「だ・か・ら・・・僕は甘いものは苦手だと・・・」

「そんなに甘くないですよ、これ？」

「意地張ってねえで、喰っちまえよ。じゃねーとてめーの分も俺が食うぞ。」

恋次はクロノの目の前に置かれたシュークリームに手を伸ばし、クロノはそれを見るなり血相を変えて止めにかかる。

「なっ！そ、それは・・・・・ああ！！」

「へへ！！いただきま～～～す！！」

恋次はクロノの制止を振り払い、豪快に口を開くとシュークリームを頬張った。

クロノはこれを見た瞬間、冷静沈着スイッチが切れてしまい、ギャグスイッチが入ってしまった。

「だあああああ！！！僕のまで！！！！！！恋次さん！！！！！貴方という人は何所まで！！！！！」

クロノのここ最近の豹変ぶり、特にアホなキャラへの転換ははやて達にも少々違和感を感じてしまうものだった。

「・・・クロノくんって・・・こんなキャラやったっけ？」

「すっかりギャグ路線にも対応できるようになっちゃったね。」

「恋次さん。クロノは別にいいとして、あんまり食べ過ぎないで下さいよ。これはもともと僕ら六課メンバー全員がお金を出し合って、ヴィヴィオの進級祝いに買ったものなんですからね」

「分かってるって」

そう言って恋次が、また性懲りもなくクロノのケーキに手を伸ばして、狼狽するクロノを尻目に口に入れようとした瞬間、前線メンバーの耳にアンゴルモアの反応を報せる警戒アラーとが鳴り響く。

「「「！」」」

「これは・・・！」

「まさか・・・アンゴルモアか！？」

全員はただちに司令室へと向かうと、早速反応が確認された異世界のデータを呼び出し、作戦会議を始めた。

「ここだな。反応があったのは」

「ああ。管理外世界４１１番の『オウル』で、微弱だけど反応が。」

「まだ暴走はしていないようだな」

「でも、アンゴルモアが出て来たってことはまたこの間みたいにグリードが出てくることもありうるって事ですよね？」

なのはが不安げな表情でそう言うと、それを聞いていたユーノスはユーノ共々渋い顔を浮かべ呟く。

「ああ。特に、アンクは警戒した方がいい。あれはかなり頭が切れるからな。ヤミーを使って俺達を陽動し、その隙に見つけると言った戦法を取ってくるはずだ」

「ま、そうなったら否が応でも僕らがでないといけない訳だが・・・どうする、部隊長殿？」

「せやな・・・前回の件も考慮すると、ここは慎重にならざるを得ないかな・・・仕方ない。ユーノアドバイザーとユーノス元帥は万が一の時に備えて、現場で待機。アンゴルモアの捜索は鬼太郎さんとティアナの二人に任せるかな」

「了解です」

「おっしゃ！店長のことは俺が必ず守ってやるぜ！」

「はは。ありがとう。ユーノス元帥も、良いですか？」

「ああ。お前達なら心配することもなかろう。」

「とか何とか言って、鬼太郎にほんの少しの不安が？」

「まぁな・・・って！何を言わせる・・・／／／」

「おいてめぇ！俺様を信用してねぇのかよ！！」

ユーノスの本音を耳にし、思わず形相を浮かべる鬼太郎を冷静に宥めるティアナは次のように言う。

「まぁまぁ落ち着いてください。アンクや他のグリードが見つける前に、今度こそ私達の手でアンゴルモアは回収します。あんな失態はもう二度とするわけにはいきませんから――――――」

ティアナは、前回の屈辱を晴らす為、二度の失敗は絶対に繰り返さないということを念頭に置くと、ユーノ・ユーノス・鬼太郎と共に転送ポートへと乗り込み、「オウル」へと向かって転送する。

六課メンバーが動き始めたその時、相変わらず屋台のラーメン屋でラーメンを食べ続けるオッドアイの少年。

底知れぬ少年の胃袋に驚愕しながら店主は諦めた様子で呟く。

「おにいさんも好きだね～」

「ラーメンはやっぱり何処に行っても美味しいから♪」

そう言いながら飽きずにラーメンを啜り続ける少年だったが、直後懐から聞こえてきたヤミーの出現を報せる音を聞いた途端、箸の動きを止めた。

「！」

そして、懐から聞こえてきた音の正体である黒のカンドロイドを取り出すと、ゴリラモードへと変形させる。

〈Ｇｏｒｉｒａ〉

ゴリラカンは両腕を振り回しながらしきりにヤミー反応を少年に伝え、店主が物珍しそうに目を見張る中、少年はほくそ笑み呟く。

「へへ。出てきたか――――――」

そう呟くと、少年は残りわずかとなったラーメンの残りを大急ぎ啜り出す。

◇

〈ヤミーＳｉｄｅ〉

六課メンバーと少年がそれぞれアンゴルモアと、ヤミーの気配を感じ行動に出ようとしていたその頃、ヒロシの欲望から生み出されたヤミーは真っ先に先ほどヒロシが注意したダンスに没頭する若者たちの方へと近づいて行き、気づかれないように背後から近づくとヒロシを下がらせた男の服を掴んで思い切りなぐりつけて来た。

「ぶっ！」

男が倒れると、一旦周りの物は練習を中断し男に近づき目の前を見ると、彼らはこの世の物とも思えない姿をした白ヤミーに全員腰が抜け、白ヤミーは若者たちにこう言った。

「公園から・・・出ていけ・・・」

「うあああああああああ！！！」

白ヤミーに恐怖した若者たちは足早にその場から逃げ出していく。

若者たちを公園から追い出すことによって、白ヤミーの体にセルメダルが蓄えられていく。

ちょうどヤミーがヒロシの欲望を叶えるために動き始めた頃、ユーノ達派遣メンバーもまた現地へと到着し、公園の周囲を歩き回っていた。

「この辺でいいはずですけが・・・――」

微弱ながらも反応が確認された周囲を散策する四人。

と、その直後ユーノとユーノスはセルメダルの音を感じ取った。

「「！ヤミーだ！」」

「何だと！？場所は！」

「直ぐ近くだ。こっちだ！」

「はい！」

ユーノ達はヤミーの反応が見受けられた場所へと向けて一様に走り出す。

その間にもヤミーは次なる標的を求めて移動を開始し、二人組の女

子大生が公園に立ち寄ろうとしているのを発見すると、彼女たちの元へと近づいて行く。

「ちょっと公園寄ってこうか」

「そうだね」

何も知らない彼女たちが公園に足を踏み入れた瞬間、茂みの中から白ヤミーが襲い掛かってきた。

「「キャー！」」

二人は軽い怪我を追ってその場に膝をつくと、偶然にもそれを見かけたヒロシは慌てて彼女たちの元へと近づき声をかける。

「おい！大丈夫か?!大丈夫か?」

「はい・・・」

「怪物が！」

「怪物!?」

ヒロシは怪物と言う単語を耳にした瞬間、自分の体の中から生まれてきたヤミーの事を思い出し、思わず絶句する。

「まさか・・・」

と、その時ヒロシの耳にまたしても白ヤミーに襲われる公園に立ち寄った被害者の悲鳴が届いてきた。

「あああ！！あっ！！」

ヒロシは大急ぎでその声のする方へと走っていくと、ちょうど白ヤミーはその姿を成長させオオワシヤミーへと姿を変えると、目の前にいる人間を締め出そうとゆっくりと歩み寄っていた。

腰が抜けてしまい開いた口が塞がらないでいる被害者を見付けると、ヒロシはオオワシヤミーの前に現れ制止を試みる。

「待ってくれ！」

「何をしている？大人しく待っていろと言ったはずだ」

「私は・・・そんなことを望んだ覚えはない・・・ただここが・・・動物たちが、安心して暮らせる場所にと・・・！」

「ふん。だからお前の願いを叶えてやってる。“ここに誰一人立ち入らない”ようにな」

「そんな・・・」

自分の望んだ欲望とは解釈を異にするオオワシヤミーの言い分に絶句するヒロシ。

オオワシヤミーはヒロシの胸ぐらを掴むと親でありながら容赦なく彼を投げ飛ばした。

「退いてろ」

投げ飛ばされたヒロシは後頭部を強打すると、頭を押さえて気を失ってしまう。

「うわ！痛った～～～」

現地でオオワシヤミーが本格的に暴れ始めた丁度その時、合計３０杯ものラーメンを食べ終えた竜神の寵児の少年は代金を台に置くと、早々に準備を始める。

「はいこれ」

「まいど。頑張りなよ」

「頑張りますよ～～～めっちゃくちゃ♪」

親指を突き立てて店主にそう言うと、少年は店を出て、誰にも気づかれない場所で紫の魔力光が特徴のミッド式魔法陣を展開すると、オオワシヤミーが現れた公園に向かって転移する。

少年が公園に転移を始めたその頃、先に現場へと到着していたユーノ達四人は公園の前で倒れる人の多さに目を奪われ、足を止めた。

「うわ！」

「なんだこりゃ・・・何でこんなことに！？」

「大丈夫ですか！？しっかり！何があったんですか？」

ティアナが倒れていた者の一人に尋ねると、虚ろな表情を浮かべてその者は答える。

「鳥の・・・怪物が・・・襲ってきて・・・・！」

「鳥の・・・・く。アンクか」

ユーノスはアンクの作り出したヤミーの仕業と言うことを聞くと、ユーノやティアナ共々険しい表情を浮かべる。

「相変わらず行動が早いですね」

「アンクか・・・だとしたら早いとこヤミーを見付けて、アンゴルモアを探し出さないと」

「そうだな・・・・・・！」

と、その直後ユーノスの表情がまた一変する。

「どうした？」

「待て！ヤミーだ！」

「え？」

全員がユーノスの言葉に背筋を凍らせる中、直後ユーノは頭上から飛んで来たオオワシヤミーの姿を発見する。

「あ！」

オオワシヤミーは真っ直ぐに四人目掛けて飛んでくると、咄嗟に鬼太郎が前に出て止めようとしてきた。

「俺が相手だ・・・ぐっほ！」

「鬼太郎！」

「大丈夫ですか！？」

鬼太郎はオオワシヤミーに盛大に踏み倒されると、顔面を赤くし渋い顔を浮かべた。

オオワシヤミーは自分の目の前に映るユーノとユーノスを見ながら徐に話しかけてきた。

「ユーノ・スクライアだな。ユーノス・スレイアも一緒ということは、タカのメダルを持っているという事か」

「ち。アンゴルモアと一緒に、メダルまで奪い返すつもりか」

「ユーノス元帥。結界印を」

「ああ」

ユーノスはユーノに結界印を手渡すと、ユーノはインビンシブル・ボンドを発動し、スレイヤーモードへ変身する。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身を終えると、ユーノはスレイヤーブレイドを生成し、オオワシ

ヤミーへと向かっていく。

「は！」

「俺達も行くぜ！」

ユーノが戦闘を始めると、起き上がった鬼太郎も烈火を取出し、バリアジャケットを身に纏ったティアナに促し、ティアナはオオワシヤミーの背後からシュートバレットを発射する。

「シュート！」

ティアナの攻撃を受けてもなお、オオワシヤミーは当たり前の事だがユーノ以外の攻撃にほとんどダメージを負う事は無く、鬼太郎の攻撃でさえも持っていた剣で受け流す。

「おらああ！」

鬼太郎の烈火の斬撃、ユーノのスレイヤーブレイドを捌き切ったオオワシヤミーはその背中の翼を広げると空中へと回避する。

「くそ！空飛ぶなんか反則だろ！」

「鳥なんだから仕方ないよ。まぁオオワシだけど」

「どっちでもいいですよ。兎に角、撃ち落としてやります」

ティアナは照準を定めると、オオワシヤミー目掛けてカートリッジを三発使い、クロスファイアーシュートを叩きこむ。

「クロスファイアー・・・シュート！」

これまで以上にキレのある正確無比なコントロールを有した現在のティアナの魔力弾を回避しようとするオオワシヤミーだが、そのすべてを捌き切ることは出来ず彼女の思惑通り翼をやられ撃ち落とされてしまった。

「ぐお！」

「よっしゃ！」

地面に落下してきたオオワシヤミーを見ると、ユーノと鬼太郎は走り出して一気にたたみ込もうとするが、オオワシヤミーにも意地があった。

「舐めるな」

オオワシヤミーは立ち上がると、翼を広げて無数の羽を飛ばしてユーノ達を攻撃する。

「「く」」

そして、オオワシヤミーは再び空中へと飛翔すると、高空より急降下をしつつ、勢いをつけてユーノ達へと突っ込んでいく。

「は！」

「「「だああ！」」」

「ユーノ！ティアナ！鬼太郎！」

傍でその光景を見ながら声を上げるユーノスと、オオワシヤミーの突進をその身に受けそれなりのダメージを負うユーノ達三人。

「く・・・こいつ・・・・！」

「この前のといい・・・強い・・・・！」

オオワシヤミーは手負いの三人を前にしながら徐に近づきこう言う。

「ここに入られては欲望が果たせないのでな・・・・・・貴様らまとめてたたき出してやる。」

ユーノスはこう状況を見ながら、オオワシヤミーに対抗できる方法を考える。

「あいつに対抗できるとしたら・・・」

と、その時だった。

不意にユーノ達はオオワシヤミーの耳に、軽快なヒップホップダンスミュージックが聞こえてきた。

「「「「「！？」」」」」

「何だ？」

四人が音のする方に目を向けると、唐突に現れた先ほどオオワシヤミーが追い出したと思っていた若者が後ろにいる人物、竜神の寵児と共にブレイクダンスをしながらオオワシヤミーの元へと近づいて

きたのだ。

ユーノ達は現れた竜神の寵児の少年を見るなり目を疑った。

「おい、あれ！」

「竜神の寵児・・・！」

少年はバックダンサーの若者たちをその場から退場させると、リズミカルのある動きでブレイクダンスを披露し、最後にポーズをとってオオワシヤミーやユーノ達の前に立ち尽くす。

「謎の少年君・・・！」

驚き返るユーノの隣で、ティアナはその少年が先日のアゲハヤミーの戦いでユーノにカンドロイドを提供してくれたものであるという事実を思い出し、更に唖然としていた。

「あれって・・・この間カンドロイドを届けてくれた・・・でもなんであの子が？！」

そんな事を考えながら少年を見据えていると、少年は無表情でオオワシヤミーにこう尋ねてきた。

「・・・その人達に乱暴するの・・・お前？」

「何だ貴様は？」

「お前なんだ・・・じゃあ、僕怒るよ・・・いい？」

「ガキの遊びに付き合ってる暇はない。」

「いいんだ。」

少年はそれを聞くと不敵な笑みを浮かべ、待機状態だった紫色に輝く宝石が印象的なインテリジェントデバイス「ライジングハート」をバックル上にして、回転しながら腰に巻きつけると、全員が注目する中軽快な待機音を出しながらパスを取り出し、それをベルトに翳した。

「変身♪」

〈Ｇｕｎ　Ｆｏｒｍ〉

その直後、少年の体はフリーエネルギーによって構築された特殊な甲冑に身を包まれ、姿を現したのは先日の暴走グリードとの戦いでユーノ達に助太刀をしてきた竜神の寵児の戦闘モードであった。

変身を遂げた竜神の寵児は軽く足踏みをすると、ゆっくりと一回転しオオワシヤミーにポーズを決め込み、ユーノ達はその姿に目を丸くした。

「おい！何なんだよ、ありゃ！？」

「ウソでしょう・・・！？」

「あれは・・・！？」

「魔導師・・・なのか・・・？」

愕然とするユーノ達を余所に、竜神の寵児はステップを踏んで一回転をすると、凝視するオオワシヤミーに尋ねる。

「ちょっと倒してもいい？答えは聞かないけど。」

「何だと・・・・・貴様何者だ？随分と見かけない姿をしているが・・・・・・」

オオワシヤミーは剣を肩に担ぎながらそう言うと、聞いていた竜神の寵児は一方的な態度でこう言った。

「じゃあ、倒すね」

オオワシヤミーはそれを聞くと、無言のまま竜神の寵児へと向かって行き、竜神の寵児もまたオオワシヤミーへと近づき戦闘を開始する。

オオワシヤミーの大雑把な攻撃に対して、竜神の寵児は戦闘中でありながら自分のペースを崩さずリズミカルな動きでオオワシヤミーの太刀筋を躱していき、腰に備えてあった四つのパーツを取り外すと、それを軽い身のこなしで頭上を放り投げ、オオワシヤミーを先の読めないダンスで翻弄しながら容易にパーツを組み立てていくと、それはクロスミラージュとはまた違う銃の形へと姿を変える。

「変形銃！？」

一瞬目を凝らすユーノ達一同。

パーツを組み合わせ銃へと変形させた竜神の寵児はオオワシヤミーへと振り返り、紫色に輝く銃弾を発射する。

「ふん！」

「がっは！があ！」

すると、これを受けたオオワシヤミーの体に止めどなく傷がついて行き、いままでユーノ以外の攻撃で傷を負ったことのないヤミーが竜神の寵児の攻撃に対して初めてその定説を打ち破ったのだ。

「よし、おりゃあ！」

竜神の寵児はモチベーションを上げながら、更にオオワシヤミーに銃弾を連射し、そのすべてにおいて正確無比なコントロールを有した銃撃にオオワシヤミーはことのほかセルメダルを放出していく。

「もういっちょ！」

「ぐおおお！」

足をとめながらも体を器用に動かし、変幻自在な角度からオオワシヤミーを狙い撃ちダメージを与え続ける竜神の寵児の姿に、ユーノ達は空いた口が塞がらないでいた。

「ヤミーにダメージを与えている！」

「凄い・・・何て命中精度・・・私よりもあるかも・・・！」

「つうか、何でリズム感に合わせて撃ってるんだ？」

「だけど、何でだろう・・・・・・あの謎の少年君・・・・・・ど

っかで・・・」

ユーノが何気なく竜神の寵児に奇妙な親近感を感じ始めていると、竜神の寵児によって予想外なダメージを負ってセルメダルをばらまいたオオワシヤミーは肩で息をしながら竜神の寵児を睨み付け、竜神の寵児はそんな状況に置いてこう呟いた。

「ふう～やっぱマニュアル読むより実戦かな。だけど不思議とこう言うところはお父さんには似なかったんだよな～～～」

「くそ！」

と、その瞬間オオワシヤミーはこの状況から抜け出すために翼を広げて空中へと回避し、そのまま逃走を画策する。

「野郎、飛んで逃げる気か！？」

「そうはさせないよ。僕も飛んでいい？」

竜神の寵児は徐に指を鳴らした。

すると、それにつられて何処からともなく竜神の寵児の元に、彼の愛車でありこの世界で重用する漆黒のバイク、「ライドベンダー」が現れた。

四人は突如現れたバイクを見た途端、目を見開いた。

「バイクが！？」

少年はバイクに乗り込むと、逃げて行ったオオワシヤミーの追跡を

始め、ユーノ達もその後に続いて全速力で走り出す。

オオワシヤミーは空中を滑空しながら、猛スピードで追いかけてくる竜神の寵児を見るなり飛行速度を速めるが、竜神の寵児はバイクをまるで竜が飛ぶが如く動きで操作し、急速に接近してくる。

「何て奴だ・・・！」

ユーノ達は二人の後を追いかける傍ら、直ぐにこの事をロングアーチへと報告する。

通信を受けた司令室のなのは達は訝しげな表情を浮かべる。

「？ティアナから外部通信・・・」

「どうしたんでしょうか？」

画面を開くと、中央のモニターにティアナが映し出され状況説明が始まった。

『こちらスターズ４！ヤミーとの交戦中に突如、ユーノ先生の言っていた、スバルと吉良さんが遭遇したと言う謎のオッドアイの少年が戦闘に乱入して、逃走するヤミーを追跡中です！』

「何だって！？」

「ティアナ。もう少し詳しく教えてくれる？」

「はい。その少年は私と同じ射撃型で、バリアジャケットは浦太郎さん達の甲冑モードのそれとデザインが酷似しています。現場の映

像を送ります。」

ティアナは先ほどの戦闘の様子を写し取った画像をクロスミラージュを媒介に機動六課へと転送すると、映し出された竜神の寵児の姿を見た瞬間、なのはとフェイトは信じられないと言った表情を浮かべた。

「！あれは・・・！」

「そんな・・・まさか！」

「フェイト。なのはもあれを見たことがあるのか？」

「うん・・・カトゥーン事件の時に、駆動路の封印時私達を助けてくれた・・・！」

「だけどあの後行方が全く分からなくなって・・・」

そう・・・一年前のカトゥーン事件においても、竜神の寵児は彼女たちの前に現れており、一年と言う歳月を経て今再びその姿を露わにしたのだ。

「じゃあ、あれが・・・！」

「一体どういうことだよ！？」

不審に思う傍ら一同は現場のユーノ達と共に、モニター画面に映って来る竜神の寵児の戦闘の様子を観察する。

「ぐっは！！」

「ほらほら。逃げない逃げない」

竜神の寵児は陽気な態度をとりながら全くすきのない正確無比な銃撃でオオワシヤミーを苦しめていき、オオワシヤミーは翼を大きく広げると一斉に無数の羽を飛ばしてきた。

「は！」

ユーノ達はこの光景に目を見張る。

「危ない！」

「謎の少年君！」

「ライジングハート」

〈Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

そのとき、竜神の寵児はマガジンに装填された特殊カートリッジを一発ロードする。

カートリッジをロードした瞬間足元に現れる紫の魔力光を有したミッド式の魔法陣。

そして、周囲に現れる無数の魔力弾。

ティアナは最も見慣れたその技を目の当たりにした瞬間絶句し目を見開き、ユーノ達もまた愕然とした表情を浮かべる。

「！え！！」

「「何？！」」」

竜神の寵児は周囲の反応を一切気にもせず、目の前から飛んでくる無数の矢羽目掛けてその技、クロスファイアーシュートを叩きこむ。

「クロスファイアー・・・・・・シュト！」

トリガーを引いた瞬間発射される正確無比、だけどティアナのそれとは比べ物にならないぐらい恐ろしく速く無数とも言えるだけの数を有した魔力弾が、オオワシヤミーの矢羽と言う矢羽を撃ち落としていき、現場の映像を六課で窺っていたなのは達もまた目の色を変えた。

「クロスファイアーシュト！？」

「まさか・・・そんな！？」

オオワシヤミーは険しい顔を浮かべながら自分の技を容易に撃ち落とした竜神の寵児に目を向けると、竜神の寵児は銃口を向けて言って来た。

「終わりだよ」

「く。ここで終わる訳にはいかん！」

そう言うと、オオワシヤミーは矢羽を地面に向けて放つと、巻き起こった多量の土煙の中に姿を眩ませその場から退避する。

ユーノ達は姿を忽然と消してしまったオオワシヤミーに悔しい顔を浮かべる。

「あ、くそ！」

「あ～あ～・・・逃げられちゃった・・・」

竜神の寵児もそう言うと、腰に装着されたベルトの中央に手を触れ、変身を解除する。

〈Ｍｏｄｅ　ｒｅｌｅａｓｅ〉

変身が解除され、元の姿に戻った少年は愛機に対して労いの言葉をかける。

「ご苦労さん、ライジングハート。一先ずお疲れさん」

〈Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｍｙ　ｌｏａｄ〉

「はは。その言い方は止めって言ったんだけど・・・もう慣れたよ」

〈Ｄｏｎ’ｔ　ｗｏｒｒｙ〉

と、そんな少年の方へと徐に歩み寄ってくる同じく変身を解いたユーノ達。

「謎の少年君・・・」

ユーノが神妙な顔で話しかけてくると、少年もその事に気づき笑みを浮かべる

「ん？ああ・・・どうもどうも。暫くですね♪」

「あなた。一体何なの？」

「何って？」

「ああ・・・ほら。前に使命って言ってたけど、ひょっとして・・・」

ユーノが暴走グリードとの戦いの直後で彼が言っていたことを口にすると、少年は柔かい表情を浮かべて断言する。

「そ。ヤミーとグリード退治。あとは機動六課への貢献ってとこかな♪」

「何？」

「機動六課に？」

意外な台詞を耳にし、顔を見合わせる一同に対して、少年は更にこう言って来た。

「へへ。僕の事、知りたいですか？知りたいんなら、僕をこのまま重要参考人として、機動六課まで連れて行ってください。そうすれば、洗いざらい隠してきたこと全部話しますよ」

それを聞くと、戸惑いの表情を見せながら相談を始める四人。

「・・・どうしますか？」

「う～～ん・・・他に何も手がかりがないし、確かにこの少年の事も知らないといけない気がするし・・・・・・ちょっと待って」

ユーノはこの事を早速六課のはやてに伝える。

「はやて。ちょっと相談があるんだけど」

『事情は読めてるよ。ええで、私は。構わないよ。』

あっさりとそう言ってしまったはやての言葉を聞くと、鬼太郎は少年に警戒心を抱きながら再度聞き直す。

「本当にいいのかよこんな訳のわからねぇガキをよ・・・」

すると、それを聞いたユーノスが横から口を挟む。

「何度も助けてもらってきた上に、自分の事を素直に話してくれるんだ。こんな千載一遇の機会はないぞ」

「それもそうですね・・・分かったわ。私達と一緒に機動六課までご同行願おうかしら。謎の少年君。または、竜神の寵児・・・でいいのかしら」

「はい♪じゃ、よろしくお願いします！」

こうして、竜神の寵児の異名をとる謎の少年はユーノ達四人に連れられ、機動六課へと向かうこととなったのだ。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

転送ポートで機動六課へと帰還したユーノ達一行は少年を連れて司令室へと向かっていた。

少年は物珍しそうに初めて見る機動六課の隊舎の様子にそれなりに興味を抱いていると、そうこうしているうちに目的に部屋まで辿り着き、鬼太郎は待っていた前線メンバーに期間を報告する。

「戻ったぜ。」

「ご苦労さんな。で、その子が例の・・・」

「はい。ほら、こっちよ。」

ティアナにそう言われると、少年は徐に司令室の中へと入ってくる。

「へぇ～～～結構デカいんだ・・・」

少年の姿を始めてこの目で確認するなのは達はマジマジと少年の事を観察していると、直後今度は後ろから帰宅してきたヴィヴィオが入ってきた。

「おかえり、パパ。」

「！」

少年はヴィヴィオの姿を目にした瞬間、目の色を変えて食い入るように見つめた。

「ああ、ヴィヴィオ。今帰りかい？」

「うん。ちょうど練習帰り。その序に無限書庫に寄って本を探してたんだ。」

と、その時・・・少年は今まで我慢していた興奮を抑えきることが出来なくなると、ヴィヴィオの方目掛けて駆け出し大声を上げてこう言った。

「あ！！！！お姉ちゃん！！！！」

「「「「！？」」」」

「え！？」

「あああああ！！！！！やっぱりそうだ！！！！！間違いない！！！！ヴィヴィオ姉ちゃんだ！！！！！うわあ可愛いな！！！！！！昔はこんなに可愛かったんだ！よしよし？？？」

少年は困惑した様子のヴィヴィオの顔に自分の顔を擦りつけながら愛おしそうな雰囲気を醸し出し始める。

「は・・・はい？」

思わず自分よりも年上の少年から何のためらいもなくそのような事をされてしまっては、流石のヴィヴィオもアカを真っ赤に染め上げてしまい、先ほどの少年の言葉を聞いていたなのはやユーノは顔を見わせ少年に尋ねる。

「え!?ちょ、ちょ・・・君・・・今なんて!?ヴィヴィオが・・・お姉ちゃん!?」

「おい、小僧!てめぇいきなり何馴れ馴れしいことしてんだよ!?」

すると、少年は鬼太郎の方に振り返ると冷めた表情で言って来た。

「五月蠅いな。モモタロスは黙っててくれない。」

「ああ!!誰がモモタロス・・・だと・・・!!」

鬼太郎は三度にもわたって何の面識もないはずの少年からそのような事を口にされると、黙っていられなくなり乗り出そうとするが、慌てて他のメンバーが止めにかかる。

「ちょちょちょ鬼太郎さん!!抑えて下さい!!」

「そうであるぞ。子供の戯言だ!」

「うるせー!!一発ぶんなぐらせろ!!!」

そんな鬼太郎を余所に、少年はヴィヴィオの方に顔を向け、やはり変わらずお姉ちゃんと下につけてからこう言って来た。

「ヴィヴィオお姉ちゃんは昔は可憐な美少女だったけど、大人になるとそりゃもう絶世の美女になってさ、管理局でも注目の的なんだよ♪そう言えば、その制服はもしや中等部の?あああ!!しまった!!どうせなら初等部の方も見たかったのに!!!」

「ふぇ／／／何／／／私が・・・何なんですか／／／」

ヴィヴィオはもう何が何だか分からなくなってしまい、赤面すると同時に顔から湯気を放出し、フォワード陣は唖然とした。

「あ、ヴィヴィオ。大丈夫？顔真っ赤だ・・・」

ユーノとなのははこの理解に苦慮することを平気で口にする少年に関して詳しく言及を求めた。

「あのさ・・・さっきから皆目見当がつかないことばかりを話すけど・・・君は何者なんだい？どうしてヴィヴィオが君のお姉ちゃんなんだい？大体君はヴィヴィオの事どうして知ってるの？僕らの事もそうだけど――――――」

「そこのところ詳しく教えてもらわないと・・・ねぇ・・・」

「あ、ごめんごめん！感傷に浸っててすっかり言うの忘れてた。じゃ、先ずは名前から教えるよ。」

少年はユーノ達全員の注目を一身に受けると、自分の本名を徐に語り出す。

「僕の名前はナーノ。ナーノ・T（たかまち）・スクライア。」

「え？」

「ナーノ！？」

「ナーノ・T（たかまち）・スクライア！？」

一瞬聞き違えではないかとさえ思ったユーノ達全員だったが、その少年・・・ナーノはあっさりとした様子でこの場にいる誰もが凍りつくようなことを口にした。

「そ。僕は、アンゴルモアの影響で歪められた時空を超えて未来からやって来た・・・“絆の完現術士ユーノ・スクライアと高町なのは”の息子さ♪」

ナーノは最後親指を突き立ててそう言うと、聞いていたユーノ達は全員目を点にして沈黙を保った。

「「え？」」

「「「「え！？」」」」

「「「え？」」」

暫くの沈黙が流れた瞬間、一同は一様に声を揃えて六課中に・・・いやミッド中に響き渡るような壮大な叫び声を上げるのであった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「ええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

ななななななんと・・・ユーノの息子が出てくるなんて！！！！！！！！！！！！！！！

誰が予測したんだああああああああああ！！！！！！！！！！！！

!!!!

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

進級とオオワシと謎の少年（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「みなさん、大変な事が起こりました／／／なんと、なんと・・・・・僕となのはの息子と名乗る少年が現れたのです／／／」

な「ふぇえええええ／／／どういう事これ！？私達はまだ恋人同士で・・・夜の行為も一回もやったことがない超晩生同士なはずなのに・・・いきなり息子／／／」

一「いやそれを言うならヴィヴィオのときだって似たようなもんだろうが。しかし、まさかこんな展開になるとは思ってもいなかったな。」

恋「ナーノ・T・スクライアって言ってたが、随分と安直な名前をつけやがる。お前達らしいかもな・・・♪」

ユ・な「れ、恋次さん／／／止めてくださいからかうのは！！」

と、その時最も驚いているナーノの義理の姉・ヴィヴィオが登場。

ヴィ「ママ！パパ！どうしよう！私、まだ１２なのに歳の離れた弟が出て来ちゃったよ！私お姉ちゃんとしてどうやって振る舞ったらいいのかな！？教えてよ！！」

な「そ、そうは言っても私だって狼狽してるし・・・何よりナーノが私の本当の息子で、ユーノ君の愛の結晶だってことはその／／／ああああ！！どうしたらいいんだろう！！！」

ユ「と、兎に角次回の対応を待とう！」

本当に大丈夫なのか？

魔導師図鑑ハイパー！

初登場のナーノは読者の方々に自己紹介を始める。

ナ「僕の名前はナーノ・Ｔ・スクライア。１６歳。好きな食べ物はラーメン。嫌いな食べ物はありません。趣味はブレイクダンスと空をボーっと眺めながらの昼寝です♪」

ナーノは簡単な自己紹介を終えると、部ライクダンスを踊りながら更に細かい経歴を話し出す。

ナ「新暦８２年、７月９日生まれ。髪の色ブラウン。瞳の色青と緑のオッドアイ。魔力光は紫。そして職業は魔導師♪なんだけどただの魔導師じゃありません♪」

ナーノは踊り終えると、カメラ目線でこう言った。

ナ「僕の本職は飽く迄も世界の人を助けるために善意で活動をしているボランティア団体。なので、僕はボランティア魔導師って言う特殊なジャンルに含まれています。ま、僕の事は今後の話で詳しく話していくから、そのときにまた話すね。じゃ、来週は僕が大活躍するから、バイバイ♪」

次回予告

鬼：ユーノ・スクライア外伝

ナ「僕はグルマディアの団長として、ボランティアに勤しんでいたんです」

浦「ナーノが入らなかったこと、相当後悔とかしてない？」

ユ「ナーノ！ティアナたちと一緒に、その人を！」

ナ「倒すけどいいよね？答えは聞かないけど。」

第１６８話　息子とダンスと竜の一撃

息子とダンスと竜の一撃（前書き）

ナ「僕のしたいことは、僕だけが知っている。」

「だから、誰が何と言っても僕の欲望は僕だけのものだ！」

ナーノ君のプロフィールは、スクライア商店紹介に乗せておきます。
あと、挿絵に乗っている子供がナーノ君です。

息子とダンスと竜の一撃

1949

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、ヴィヴィオが中等部に進級する。

二つ、動物が安心して公園に住めるようにという男の欲望からヤミーが生まれる。

そして、三つ。未来から、ユーノとなのはの息子であるナーノが現れた！

ナ「僕の名前はナーノ。ナーノ・T（たかまち）・スクライア。」

「僕は、アンゴルモアの影響で歪められた時空を超えて未来からやって来た・・・“絆の完現術士ユーノ・スクライアと高町なのは”の息子さ♪」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈六課Side〉

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「ええええ
ええええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！
！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」」

六課中に響き渡る前線メンバー全員の口から外に出される驚愕の悲

鳴。
そんな悲鳴を聞きながら、その悲鳴の元凶たる少年・・・ナーノ・T・スクライアは平然と笑顔で立ち尽くす。
そして、赤面したなのはとユーノ、更にはヴィヴィオの三人はナーノに指を差しながら狼狽した様子で声を発した。
「わわわわわわわわわ私と・・・ゆゆゆゆうゆゆゆゆゆゆゆユーノ君のこここここここここここ子供!!!!!!!!!!!!!!!??????????????????」
「ままままままままままままままままマジ!!!!!!!!!!!!!!!????????????」
「じゃあ!!!!!ほほほほほほほほホントに私の・・・おおおおおおお弟!!!!!!!!!!!!!!???????????????」
ナーノは目の前の三人の動揺ぶりにため息をつくと、冷静な様子で答える。
「狼狽し過ぎだよ。さっきからそう言ってるじゃんか。信じられない?」
「当たり前だろ!!!んな簡単に信じられるかよ!!!大体、それを証明するものもないだろうが!!」
ユーノ達と同じぐらい平静を保てないでいた恋次が横からそう言うと、ナーノはこう返事を返す。

「それは心配ないですよ。ちゃんと個人証明が出来るように、これ持ってきてますから。」

懐からナーノが取り出したのは、未来の自分の事が書かれた書類だった。

受け取ったユーノはその中身を確認する。

「？これは戸籍票・・・あ！」

ユーノはその戸籍票を見た瞬間、そこに書かれていたナーノのこと、更にはその親であるユーノとなのは、姉のヴィヴィオのことが記載された個人情報が細かく載っていた。

「ね？ちゃんと書いてあるでしょ。ユーノ・スクライアと高町なのはの息子だって。あ、あとはヴィヴィオ姉ちゃんの弟って事も♪」

笑顔で最後ヴィヴィオにそう言ったナーノ。

ユーノ達は完全に唖然とした様子で顔を見合わせる。

「・・・う・・・うそ・・・／／／」

「マジかよ・・・！？」

「じゃあ・・・本当に・・・！？」

「これで判ってくれた。それでもまだ信じられないって言うなら、こんなのも持ってきた。はいこれ。家族写真が何枚かと、当時のお

父さんとお母さんの結婚式の写真。」

「け、結婚式の写真だと／／／」

一同はその言葉に機敏の反応し、ナーノが取り出す数枚の写真の中から真っ先に結婚式の写真を探しだし、ユーノが手に取った瞬間恋次が強引に取り上げる。

「見せろ！！」

恋次がその写真を取り上げると、なのは達も一斉に写真に群がり、先に見て硬直した様子のユーノを余所に、一同は顔を赤らめなのははは思わず絶叫する。

「え！えええええええええ！！！！！！」

無理もなかった。

なのははその写真に写っている、今と同じぐらいの年頃の未来の自分がウェディングドレスに身を包み、更にはその横で白のタキシードを着こなすユーノが仲良く写っていたのだから。

「ふぇえええええ！！！！私が・・・・・！！！！ユーノ君と結婚してる～～～～～？？？」

なのははは大興奮と感激のあまり、鼻血を盛大に拭きだし後ろに倒れ、また一方でマリアはショックのあまり鎖結を射抜かれる錯覚に陥り吐血を吐いた。

「ぐっさ！」

「あ！なのは！？マリアさん！」

地面に倒れた二人の姿は、傍から見れば殺人現場で発見された亡骸の様であり、そんな二人を見ながら冷静にヴィータは呟く。

「両方色んなショックでぶっ倒れたな。一人は精神的に大きなダメージを負い、もう一方は嬉しさのあまり昇天だ」

倒れた母親の姿を一瞥し、ナーノは更にその後の成長が垣間見れる写真を何枚か手渡した。

「で、これが僕の成長の記録。自分でこんなこと言うのもあれだけど、結構可愛いでしょ。特にこのくりんっとした髪の毛がさ」

順番に彼の成長が伺える家族写真を回していた前線メンバーは食い入るように見、その写真を見ながらはやてやスバルは思わずつぶやく。

「うわ～～～ほんまにこれ未来のなのはちゃんとユーノくんらしいな～～～」

「こんなことって・・・」

すると、ここで作者重要から百合疑惑がかけられていることで有名ななのはぞっこん女、フェイト・T・ハラオウンが怒り心頭にユーノを怒鳴りつける。

「ユーノ！！！よくも・・・よくもなのはを傷物に！！！！」

「何それ!?どうしてフェイトが怒る訳!?」

清廉潔白な青年のユーノは彼女の横暴な言葉に困惑する。

ナーノはそんなユーノの事を気遣いつつ、二人が結婚するまでの険しい道筋をダイジェストに語り出す。

「へへ。二人が結婚するって聞いたときは相当面倒くさかったらしいよ。士郎さんはずっと不幸の手紙ならぬ殺意のメールをお父さんに出しまくっていたらしいし、フェイトさんもフェイトさんで百合万歳って書かれた鉢巻してずっとお父さん殺したがってたし」

「結局そこは今も昔も変わんねぇのかよ!!つうかいつまで百合言ってるんだよ!」

見た目はあれだが中身は意外にも純愛純情主義の恋次がフェイトを怒鳴りつけると、フェイトは顔を染めながらこう返す。

「だ、だって・・・／／／なのはラブなものですから・・・／／／」

「フェイト・・・頼むからもっと異性に目を向けてくれ・・・お兄さんのお願い」

クロノの切実な願いは、果たしてこの女には届くのだろうか?

そして数分後。

漸く戦線離脱をしていたユーノとなのはが復活を果たし、それなりに落ち着きを見せた後ナーノと正面から向き合い、話を進めた。

「まぁ、形はどうあれナーノは本当に・・・なのはさんとユーノ先生の・・・子供らしいわね。」

「あはは・・・う・・・嬉しいような・・・びっくりしたような・・・どっちつかずの気持ちなんだけど・・・」

「そ、そうだね・・・はは・・・」

ユーノとなのはは互に嬉しさと動揺を孕んだ表情で照れ笑いを浮かべると、ここではやてが純粋な気持ちでお祝いの言葉を言って来た。

「とりあえず、おめでとさん二人とも♪これで確実に結婚は決まったやないの。取りあえずこれ。私からお祝い♪」

はやては懐から何故か理由は知らないが、普通なら常備されている筈もない結婚届を二人に差出、二人は困惑しながら微笑むはやてに顔を向ける。

「あのはやて・・・これなに?どうして婚姻届なんかを懐に忍ばせているの?」

「まさかこのタイミングをずっと見計らってたんじゃ・・・／／／」

すると、ここでクロノ・ハラオウン提督がユーノの肩に手を触れると、軽い気持ちで次のように茶化してきた。

「ユーノ。一つ言っておくぞ」

「なんだよ」

「結婚初夜に淫獣フェレットにはなるなよ・・・ぐっほ!!」

ユーノはその言葉を聞くや否や、クロノの顔面に逆刃刀の柄頭をめり込ませ、クロノをノックダウンさせると、唖然とする全員の前で声を上げる。

「お前は少し黙ってろ、薄らトンカチ!」

ナーノはそんな二人のやり取りを見ていると、さほど驚く様子もなくこう呟く。

「相変わらず昔から仲悪いんだね、お父さんと腹黒さん。」

と、その時「腹黒」と言う言葉に機敏に反応したクロノは鼻血を出しながら起き上がり、ナーノに詰め寄る。

「おーい!!!“腹黒”って言うのは僕の事か!?」

「だって、クロノって名前なんだから腹黒いんでしょ?」

「違うわ!!!誰だそんな出鱈目吹き込んだの!?未来のユーノか!?」

「ぷぷ!やりやがったな、未来の僕♪」

「お前はそこで笑うな!自分が吹き込んだんだぞ!」

目の前ではナーノに平然と罵倒され、更に傍らではユーノに馬鹿にされるクロノは正に哀れみの対象であった。

恋次と吉良は慣れた様子で少しでもクロノの機嫌を直してもらうために、怒りのボルテージがマックスに達しようとしているクロノを押さえつける。

「まぁまぁ、クロノ提督も落ち着きましょうよ。」

「腹黒いのは元からだろうが。」

「吉良さんも恋次さんもやめてくれ！段々自分が悲しくなる！」

クロノはここ最近の、いやずっとこうしたことで作者にネタにされることに自虐的になって来ると、自然とその目からは涙が零れる。

すると、ここでナーノがとんでもないことをさり気に口にする。

「あ・ちなみに言うと、お父さんとお母さん・・・結婚初夜で作ったらしいよ♪」

ユーノとなのはそれを聞いた途端、蛇口から飛び出す水流の如く勢いで鼻血を吹き出す。

「なああああああああああ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ナーノ／／／／／／／／／／／／／／／／そう言うことをさらっと言わないで！！！」

そして同じく怒りの炎で燃えあがったフェイトもまたバルディッシュを起動させると、魔力を全開にしてユーノに刃を向けてくる。

「ユーノ！！！！！！あんた殺す！！！！！！！」

「君もいい加減にしろ！！！！！！！」

そんな騒然すると六課ないにおいて、ただ一人ナーノだけは平静を保ちつつ、未だ顔を赤くして自分を見つめるヴィヴィオの方を輝く眼で見つめ合い、別の話で盛り上がった。

やがて、何とかバカ騒ぎが収まり既に精神的にも体力的にも疲労が見え始めえていた前線メンバーがナーノに向かい合うと、ユーノは咳払いをしてから真剣な眼差しを浮かべる。

「取りあえず、アンゴルモアの影響で未来からやって来たというのは・・・その目から判断して本当らしいけど、未来では何があったの？」

「それに、何故ヤミーとグリードを？ナーノはどうしてヤミーに傷を負わすことが出来るのだ？あれはアンゴルモアの影響を受けた、ユーノしか出来ぬはずだが・・・」

ユーノスも先ほどの戦闘の事が気になってナーノに尋ねると、ナーノはその理由を次のように語り出す。

「ああ。それはですね・・・僕がその“アンゴルモアの影響を受けたお父さんの息子”だからですよ。」

「何？」

「どういう事？」

訝しげな表情の前線メンバーに対して、ナーノはユーノ並みの落ち着きで詳細を説明をしだす。

「アンゴルモアの余波って言うのは、魂に深く刻み込まれていて、それは遺伝子を分けることによって乗り移ったりするんです。つまり、お父さんとお母さんが夜の行為で遺伝子を分けた際、アンゴルモアの余波も一緒に分けられて、こうして僕が生まれて来たってことです」

「そうなんだ・・・しかし夜の行為ってのをイチイチ間に挟む言い方は止めてくれないか・・・／／／」

「同じく・・・／／／」

仮にも未来では正式な夫婦として、二児の父親と母親となっているユーノとなのはが赤面した状態でナーノにそう言うと、息子であるナーノは平然と言う。

「それもそうだね。この時の二人はまだお互い童貞と処女だしね」

「「な、ナーノ／／／」」

完全に出し抜かれてしまっている絆の完現術士ユーノ・スクライアと、不屈のエースオブエースの高町なのはの姿に、誰もが呆然とする中、ティアナは更に問い詰める。

「じゃあ、あんたはどうしてこっちの世界でヤミーを？」

「事の起こりは新暦９４年9月・・・僕はグルマディアの団長として、異世界各地を回りながらボランティアに勤しんでいたんですが、

その旅先にいきなり空間に発生した歪みから仲間を守ろうとして、時空の渦に僕が吸い込まれて・・・気が付いたらこっちにと。」

「そうなんだ。それより、グルマディアって・・・？」

「僕が作り上げた世界の人々を助けるためのボランティア団体。ＮＧＯの一部です。」

「ＮＧＯ・・・ん？え・・・ということはナーノは管理局員じゃないの？」

フェイトはナーノが管理局の魔導師でないということを聞いた瞬間、意外そうな顔を浮かべ、他もまた同様の反応を見せるとナーノはこう答える。

「ええ。僕、小さいころから絶対管理局に入らないって決めてたものですから。だって、あそこには僕のやりたいことなんか何もないし、ただ心を殺すだけの場所なんでしょ？」

スバルはナーノの持つ管理局のイメージを聞いた途端、思わずつぶやく。

「うわ・・・酷い顰蹙の買い方・・・どういう風に刷り込んだわけ・・・」

「で、こっちの時代に来てから早一年とちょっと。謎の声を聞いたあの日からこの時代でやるべき使命を確認し、その為の道具を謎の声のものから託されたんです。」

「それが・・・僕が作成しようとしていたカンドロイドやコアメダ

ル、それに完現術コンボのアイテムだったと？」

ユーノが真摯な眼差しでそう尋ねると、ナーノはほくそ笑み、ソファーに腰かけながら徐にこう言う。

「お父さんは話が直ぐに分かるから楽でいいわ。他の管理局員じゃこうはいかないよね～♪まぁ。実際ミッドやウチに居ても僕のやりたいことなんか見つからなかったし、いっそのこと世界に目を向けるのも悪くないかと思ってさ。」

「そ、そうなんだ・・・凄いね・・・流石はユーノ君の子供・・・」

「ママの息子でもあるけどね・・・／／／」

なのはとヴィヴィオは互に顔を見合わせ気恥ずかしそうにそう言うと、ナーノはヴィヴィオのその顔に興奮を覚え、彼女の顔面すれすれまで接近し言う。

「ああ～～～ヴィヴィオお姉ちゃんその顔可愛い～～～ねぇねぇ♪もっとやってやって！」

「かかか・・・顔近いよ～～～／／／」

今の自分よりも四つ歳の差のある年上の弟の行動に心臓の鼓動が高まり続けるヴィヴィオ。

ナーノは姐の言葉を聞き入れると、直ぐに自分の行動を反省する。

「おっと！ごめんなさい！僕としたことが・・・あ！すいません、コーヒーひとつ♪」

と、その時・・・ついにナーノの態度に我慢の出来なくなったモモタロス・・・じゃなかった鬼太郎はナーノの胸ぐらを掴みながら血管を浮かばせる。

「おいてめぇ！何が“コーヒーひとつ♪”・・・だあ！！舐めてかかると殺すぞ！！」

すると、ナーノはそんな鬼太郎のあいつにも一切同時にヴィヴィオの時とは打って変わって、非常にドライな態度で鬼太郎の手を振り払う。

「ちょっと。その汚らわしい手を放してよ。コーヒー飲みたいんだから」

「汚らわしいとはなんだ！！ちゃんと帰ってきたら手ぐらい洗ってるわ！！」

益々怒りを募らせナーノを壁に叩きつける鬼太郎。

と、ここであろうことか先ほどの鬼太郎の言葉を聞いていた浦太郎がこんな事を呟いた。

「よく言うよそれ。この前トイレから出るとき、そのままだったの僕見たよ」

ナーノはそれを聞いた瞬間まるで目の前の鬼太郎を害虫を見るかのような忌み嫌った顔で大仰な反応をする。

「だあああ！！止めて止めて！！モモタロスの菌が体中に蔓延す

る！！うえええええ！！！」

「だあああああ！！！だからモモタロスって何だよ！！！それならまだ鳥のピーチの方がいいわ！！！」

鬼太郎のその言葉を聞き、白鳥は不敵な笑みを浮かべる。

「そうか。ならばこれからは遠慮なくそう呼ばせてもらうぞ」

「てめぇは最初からそう呼んでるだろうが！！」

「へへ。お、来た来た」

ナーノは鬼太郎を軽くあしらいアルトたちが入れて来たコーヒーを受け取ると、満面の笑みを浮かべる。

「いただきます♪」

ナーノはご機嫌な様子でコーヒーを啜り始め、見ていたものは誰もがこの陽気且つ飄々としながらも食えない少年、ナーノの存在を疑い、ユーノとなのはもまた顔を見合わせながらシグナムの言葉に耳を傾ける。

「本当に・・・お前たちの息子なのか？」

「全然そうは見えないですよね・・・」

そして、そんな全員の反応を全く以て気にしない様子でナーノはコーヒーを飲んだ感想を述べるのであった。

「うん！これ美味しい！」

◇

〈ヒロシＳｉｄｅ〉

その頃、第４１１管理外世界「」に出没したオオワシヤミーはナーノとの戦闘の後、忽然と姿を消してしまい、ユーノ達のセンサーを掻い潜り暗躍を続けていた。

そして、十分に傷が癒えた頃合いを見計らってオオワシヤミーは再び動き始める。

オオワシヤミーは公園に入ってくる人を見付けては無差別に襲いだし、何も知らずに公園に近づいて来た母と子供の二人を見付けると、高空から襲いにかかる。

「キャー！！」

母親は悲鳴を上げると、子どもを本能的に護ろうとし、子ども共々気を失った。

その悲鳴は公園の近くに立地する総合病院に搬送された現在ベッドに横になっているオオワシヤミーの生みの親、ヒロシ・ウチヤマダにもはっきりと聞こえ、彼はその悲鳴とひっきりなしに響き渡る救急車のサイレンに反応するかのようにゆっくりと目を覚まし起き上がった。

「う・・・・・・」

起き上がるや否や、外のあちこちから部屋に届くほどの悲鳴を上げる人々の声と救急車のサイレンを聞いた瞬間、ヒロシは一瞬の怪訝を見せた後すぐにその事を理解し、表情を青ざめる。

「え・・・・・は！まさか・・・！」

ヒロシは血相を変えながら、病院を抜け出し公園へと向かった。

その一方で、ヒロシの欲望からオオワシヤミーを作り出した鳥のグリードであるアンクはと言うと、重要報告を報告しにやって来たアスモデウスの話に耳を傾け、その報告・・・竜神の寵児がユーノの息子のナーノであることに驚愕の反応を見せる。

「何！？ユーノ・スクライアの息子だと！」

アスモデウスは驚愕するアンクとは対照的に、飽く迄も平静を保ちつつ、予言者カリから承ったその内容を掻い摘んで説明した。

「ああ。ミスターカリからの情報によれば、あの竜神と寵児と名乗る男は、１６年後の未来からアンゴルモアの影響で現代にやって来た翡翠の魔導死神、もとい第二のオーズのユーノ・スクライアの息子であることは間違いないそうだ。」

「そうか・・・あいつが俺からコアメダルを！」

アンクは怪人体の右手を強く握りしめながら、湧き上がる憎悪と怒りを露わにする。

アスモデウスはディスプレイを開き、ナーノの顔写真を公開する。

「これがその顔写真だ。左右のオッドアイから判断して、ほぼ確定だ。」

アンクは早速確認の為、顔写真を覗き込むと何時っていた意外な人物の姿に目を疑った。

「何!?こいつは・・・」

アンクが目の当たりにしたのは、暴走グリードが現れる直前の夜の出来事・・・ウヴァの放った屑ヤミーとの戦闘中に遭遇したときの少年で、それこそがナーノ本人であることを示す端的な証拠であった。

アンクは再度その時の会話を思い出す。

『お前!何者だ!?』

『あんまし欲望が強すぎると碌な目に遭わないなって思って。悪いけどコアメダルは誰のものでもないんだ。それだけは覚えてときなよ』

その事を思い出すと、アンクは舌打ちをしながらこう言う。

「ち。そう言うことか・・・・・だったら話は早い。」

アンクは何か作戦を考え付くと、足早にアスモデウスに背を向けその場から立ち去ろうとすると、アスモデウスは徐に尋ねる。

「どうするのだ?」

「は。決まってる――――――――――ユーノ・スクライアもそいつも、まとめて消しさるまでだ。その後でコアメダルを手に入れる」

コアメダルに強い執着を抱くアンクは直にユーノ達が来るのを見計らい、オオワシヤミーが拠点とする公園に向かって翼を広げて飛び立った。

アンクが飛び去っていくと、アスモデウスは一抹の不安も感じながら徐に呟く。

「果たして・・・・・上手くいくだろうか」

それから暫くして、公園に入ろうとする者が一通りいなくなったことを目の当たりにしたオオワシヤミーは、それを徹底するため周りに止まっていた車を見付けると、地面に降り立ち車を持ち上げようとする。

「ふん！」

車を持ち上げたオオワシヤミーはそれを抱えて飛び上がると、公園の入場口付近に車を落としてバリケードを作り始める。

「こうするのがてっとり早くで済む」

オオワシヤミーはそう判断すると、あちこちから拾い集めて来た車を始めとする比較的形の大きなものを積み立てていくと、それによって公園の中に人が入れなくなるので体内のセルメダルが加速度的に増していく。

「どらああ！」

オオワシヤミーの中のセルメダルは、このまま際限なく増え続けてしまうのか？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方で、まだこの事に気づいていない・・・と言うよりもセンサーに反応が見受けられないでいたユーノ達は引き続きナーノからの事情聴取を行っていた。

ナーノはコーヒーと一緒に出されたお茶請けのお菓子に手を伸ばす中、ユーノは神妙な顔つきでナーノを見つめる一同の気持ちを代弁し、咳払いをしてからこう尋ねる。

「ねぇナーノ。この時代でお前がならなきゃならいことって・・・未来の僕があらかじめ予期していたことなの？」

「どうだろう。お父さんならその可能性は考えられるけど、少なからず今の僕は頭の中に入ってくる謎の声に従ってるまでかな。」

「そうか・・・――」

と、ここでティアナが先ほどナーノが口にした管理局員としての魔導師ではなく、無償の愛で魔法を行使し人々を助けるボランティア魔導師と言うものに関してふと呟いた。

「しかし、ボランティア魔導師とは・・・・・・かなり異色なタイプね」

「未来の管理局はナーノが入らなかったこと、相当後悔とかしてない？」

浦太郎が横でそう尋ねると、ナーノはクッキーながらこう答える。

「そりゃ相当昔から・・・あん！リンディさんなんか、僕が陸士訓練校に入る前から何度も何度も『入ってくれないからしら♪』って頼んでたし・・・だけど・・・あん！僕そう言う周りの大人の圧力とか組織の歯車にされるのは絶対嫌だったから、無視してやったよ。それに、お父さんからも言われてたしね。」

「え・・・僕が？」

「うん。ナーノはナーノなんだから、周りの事なんて気にしなくていいから、自分が本当にしたいと思うことをする人間になれって、ね♪いや～～～その言葉信じて生きて来てもう１６年。多少の後悔も旅先ではあったけど、それでも僕はこうして自分のしたいことをしているんだから、人生謳歌してるって感じかな♪」

「はは。成程ね。まぁ、それなら別にいいけど」

ナーノの話にほくそ笑む将来のナーノの父親たるユーノ。

しかし、鬼太郎自身はその後ろの方で腕組みをする傍らナーノの事を睨み付ける。

「たく。店長もこんなガキの言う事間に受けていいんすか？ひょっとしたら、俺達のこと付け狙ってるだけの性悪かもしれませんぜ・・・！」

鬼太郎がそう言った直後、ナーノは先ほど同様のドライな態度でこう返す。

「バァカ。僕がそんなことするかってね。アホモモ」

「ああ？おい小僧！今度はアホモモって言ったな・・・！！てめぇふざけやがって！いい加減我慢の限界だゴラ！！」

鬼太郎がナーノに詰め寄って来ると、ナーノは平静を保ちながら呟く。

「ん？じゃなに。僕と勝負する？」

「ああ上等だ！この鬼太郎様が、ガキに世の中ってもんを教えてやるぜ！！」

一触即発状態の二人を目の当たりにしたユーノ達は唖然とし、慌ててなのはが止めにかかる。

「ちょ！鬼太郎さんも何言ってるんですか！？」

「止めてくれるなよ！こいつは大人としての責務だ。こんなガキ相手にいつまでも舐められてたまるかよ！」

「ふふ。じゃあ、倒してみなよ？多分無理だから」

「言ってくれるじゃねぇかよ！！」

鬼太郎はそう言うと、一度ナーノから距離を置いた後、勢いよくナ

ーノに向かって拳を突き立て接近するが、その直後ナーノは純真無垢な笑顔でこう言った。

「ミュージックスタート♪」

指を鳴らした瞬間、彼の選曲した彼のテーマソングが六課中に響き渡り、鬼太郎やユーノ達一同は思わずその音楽に耳を傾ける。

「!?」

「なんだ!?」

訝しげな表情を浮かべるユーノ達を余所に、音楽が始まるとナーノはノリに乗りまくった態度で柔軟性のあるリズムカルな動きでブレイクダンスを踊り始めると、笑顔でこう言って来た。

「はは。踊るけどいいよね?答えは聞かないけど♪」

「こんにゃろう!ちょこまか動くんじゃねぇ!!」

鬼太郎は勝手に踊り始めたナーノに向かって突進するが、ナーノは研ぎ澄まされた反射神経とブレイクダンスによる先の読めない動きで鬼太郎を翻弄する。

「へへ。ほらこっちこっち♪」

ナーノは鬼太郎から笑顔を振りまきながら隊舎内を逃げ回り、隊舎の中にあるものを乗り越えその都度ダンスを披露し、ユーノ達を唖然とさせる中、執拗に彼を追いかけてくる鬼太郎目掛けてフットワークからのシックスステップで鬼太郎の足をけたぐった。

「それ♪」

「ぶっほ！」

鬼太郎はナーノのけた繰りを受け、盛大に正面から床に倒れ、顔面を強打する。

ナーノはそれを見て悪戯っぽい笑顔を浮かべてまた逃げ出すと、鬼太郎もムキになって彼の後を追いまわし続けるが、その度に彼が仕掛けるアクロバティックな動きに翻弄され、容赦ない攻撃を受ける。

「ほらほら♪」

「ぐおおお！」

全身を使ったパワームーブによる止めの一撃を受けた鬼太郎は、勢いよく後ろへと倒れ込み、目を回しながら傍らに立っていた浦太郎やエリオ達を驚愕させる中、指を鳴らして音楽を終了させ、倒れる鬼太郎に対してこう言った。

「ねぇ、言ったでしょ？モモタロスじゃ倒せないって。だって、僕はユーノ・スクライアの子供だよ♪」

完全に鬼太郎を色々な面から圧倒するナーノの精錬されたダンス感覚とそれを可能とする柔軟でバネのある体の動き。

そして何よりも、状況を気にせず自らの個を貫き通すその心意気。

ユーノを始め、六課前線メンバーは今までにないほどに陽気で、だ

が決して食える相手ではないナーノの存在にかける言葉を失いかける一方、なのはは徐にユーノとヴィヴィオにを顔を向けると、二人に顔を近づけ小声で言う。

「ねぇ・・・本当にナーノって・・・私達の子どもかな・・・」

「やっぱりそうは見えないよね・・・」

「うん・・・なんか違う気がする・・・」

三人はどうしても、ナーノを自分たちの息子・または弟かどうか非常に判断に困り果てた様子で、この先の事を考えるとついため息をついてしまう。

と、その時シャーリーがナーノがバックルとして着用していた彼のデバイスに目をつけこう言った。

「あ、そうだ。ナーノ。そのバックルってひょっとしてナーノのデバイス？」

「はい。僕のインテリジェントデバイスで、ライジングハート」

「ライジングハート？」

訝しげな顔を浮かべてなのはがレイジングハートと酷似したその名を口にすると、ナーノは率直に答える。

「お父さんが、ああ・・・勿論未来のね。お母さんのレイジングハートを雛形にして、僕の為に作ってくれたデバイス。これはその待機状態」

〈Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ〉

ライジングハートがなのは達に挨拶を交わす。

一様に納得の表情を浮かべたユーノ達だったが、フェイトはもう一つの疑問が残っておりその事も序でに尋ねる。

「じゃあ、あの紫の戦士の姿は？」

「僕らの甲冑モードに似てたけど・・・あれも店長の？」

「ええ。あれは対ヤミー用にお父さんが改良したものでしてね、装甲制度は並みじゃないですよ」

「では、何故今まで助けてくれた時にあれを使わなかったのだ？そうすれば、もっと早くにヤミーを」

すると、ルキアの言葉を聞いたナーノはソファーに腰を掛け、こう言い返す。

「それはムリですね。だって僕は、謎の声が言っていた運命の日まではライジングハートの全機能を封じられてたんですから」

「運命の日？」

「僕がこの時代にやって来たのは、ちょうど今から１年とちょっと前。大体カトゥーン事件の前後ぐらいかな？謎の声は僕にこの時代のお父さんがまだ作ってもいないカンドロイドを始め、バイクや完現術アイテムをその都度僕に渡して、忠実に使命を全うさせようと

しているんだ。このカンドロイドもその一つ」

ナーノは懐からゴリラ感を取出し、それを起動させると、ゴリラカンは飛び跳ねユーノ達に近づいてくると、ユーノの手の中に収まった。

「ゴリラのカンドロイド・・・か」

「ゴリラ君には、ヤミーの反応をキャッチすることが出来るんだよ。だから、お父さんが行くとこ僕と遭遇していたのはその所為」

「へぇ〜〜あれ？じゃあカトゥーンの事件で私達を助けたのもナーノってことだよね？」

気が付いたようにフェイトがなのはと顔を見わせそう言うと、ナーノはほくそ笑む。

「ええ。ああ・・・そう言えばあの時は甲冑モードでしたけど・・・あれは僕が持っていたコピーロボットで、僕本人じゃなかったんですよ。序に、その時にスクライア商店の傷を治したのも僕だし、オグドモン事件でバンチョーレオモンにお父さんのデジソウルを鍛えることを頼んだのも僕」

「あ、あれはナーノの差し金だったのか！？」

「どうやら俺達は、まんまとお前の掌の上で踊らされていたと言う訳か」

ユーノスがユーノの肩に乗りながら若干渋い顔でそう言うと、ナーノは飄々とした笑顔を浮かべながら返事を返す。

「違いますよ。これはすべて、僕をこの世界に飛ばしたって言う謎の声の導きであって、僕が考えたわけじゃありません。ただ僕は、この時代でやるべきことを全うしている・・・それだけ♪」

「やるべきこと・・・？」

「一体何なのだそれは？」

「ま。いずれ分ります。さて――――――」

ナーノは神妙な顔つきとなると、ユーノの掌の上で両腕を回転させるヤミーの反応を捕えたゴリラカンを見るなり、ユーノに言う。

「そろそろ行かなくていいの、お父さん？」

「ん」

「ヤミーだよ。もうそろそろ溜まってる頃だろうし」

「「な！」」

ユーノとユーノスはナーノの登場と彼からの話でヤミーの事をすっかり忘却しており、今になって彼ら二人のセンサーにも反応が確認され、はやて達も表情を一変させた。

「せや・・・ヤミー！すっかり忘れてたわ・・・ユーノくん！」

「ああ！行くよ、みんな！」

「「は、はい！」」

ユーノはほったらかしにしていたヤミーの討伐の為、急いでティアナたちを引き連れ転送ポートへと目指し、現地へと飛んでいく。

ナーノは時々起りかねないユーノの鈍さに意外そうな顔を浮かべる。

「あれれ？意外と鈍いんだな。まぁそれもいいかな。」

そう言うと、ナーノはゴリラカンを手元に納めてから同じく転送ポーへと向かい、見ていたなのははは思わず呼び止める。

「あ！ナーノ、ちょっとどこ行くの！？」

すると、ナーノは背を向けたままその問いに対してこう答える。

「お父さんを助けにだよ。あのヤミー、結構めんどくさいからね。僕が行ってお父さんを助けなきゃ。それが僕に与えられた使命の一つだし」

ナーノはその言葉を聞き、呆然と立ち尽くす六課メンバーを余所に、転送ポートの中へと入り、ほくそ笑んでから現地へ飛んでいき、なのはや他の面々は先ほどのナーノの言葉を耳にし、思わずつぶやく。

「ユーノ君を・・・助ける・・・」

「それが・・・ナーノの使命・・・」

ヤミーとグリードに対抗できる人間は、ナーノが来る以前ではユーノ以外に考えられず、自ずとなのはを始めとする六課メンバーはグ

リードとの戦いにおいて正直自分たちが彼の役に立てているのかと甚だ疑問を感じていた。

しかし、今ここにそんなユーノを助けられる人間・・・即ち未来からやって来たユーノの実の息子が登場し、状況に変化が齎されようとしていた。

◇

〈ヒロシＳｉｄｅ〉

一方、ユーノ達が来る直前、病院を抜け出したヒロシ・ウチヤマダは公園の事が気にかかり急いで現場へ向かうと、目の前の光景を目の当たりにした途端唖然とした。

「こりゃ酷い・・・！」

ヒロシが目の当たりにしたのは、オオワシヤミーがあちこちから集めて来た車や自転車、その他兎に角見境なしに数多くの物が積み立てられ、公園の入り口は完全に塞がれてしまっていた。

「こんな・・・」

あまりの光景に呆然と立ち尽くすヒロシと、そのヒロシの後ろから走ってくる現場へと到着したばかりのユーノ達四人。

四人はヒロシ同様目の前の光景に目を見開く。

「うわ！なんだ！？」

「どういう事ですかこれは？」

「公園に立ち入れないようにする・・・それが今回の欲望か・・・」

ユーノはそのように推測を立てると、抱いていた欲望の形とは全く違うものとなった公園の姿に愕然とするヒロシを一瞥し、ユーノスに言う。

「あの人が、ヤミーの親で・・・」

「ああ」

と、その直後。

四人の耳元にまたしても聞き覚えのあるヒップホップミュージックが聞こえてきた。

「あ？この音楽は・・・」

既に耳触りの域に達していた鬼太郎が徐に後ろを振り返ると、案の定その場にやって来たのはユーノの息子のナーノで、ナーノはバックダンサーを引き連れて目の前の現状を目の当たりにすると、思わず声を漏らす。

「ああ・・・入れないよこれ。て言うか乱暴なやり方だな。流石はアンクのヤミーって感じ・・・」

「てめぇ小僧！何しにきやがった！？大人しく待って・・・！！」

鬼太郎はナーノを見るなり血管を浮き上がらせ強制的に退場させよ

うとしたが、その途端突然ナーノが声を上げて目の前に走り出した。

「ああ！」

ナーノは鬼太郎を突き飛ばすように全速力で走って行き、鬼太郎は足元をふら付かせながら崩しかけた体制を持ち直す。

「っと・・・！お、おい！てめぇ！」

「ナーノ？」

ユーノ達も気になってナーノの事を窺うと、ナーノは塞がれたバリケードの抜け穴から出てくる子犬や子猫を見付けると、その場にしゃがみ込んで根招きする。

「へへ。おいで」

ナーノは子犬を持ち上げ、子猫に手招きをすると子猫はそっぽを向いてしまうが、ナーノは気にせず慣れた手つきで子犬の頭を撫でていき、天真爛漫なその姿に不思議とユーノ達の心が和んでしまい、ティアナは思わずつぶやく。

「あの子・・・結構可愛いですね」

「そうだね」

「こんな時に緊張感が無いというか・・・・・！」

と、その時ユーノスは不意に感じたヤミーの気配に表情を一変し、ユーノもまた同様の物を感じ取って上を見上げると、高空より例の

オオワシヤミーが飛んで来た。

「あれは！」

「ヤミー！」

オオワシヤミーは真っ直ぐに親であるヒロシへと向かって行き、身体が固まって動くことの出来ないでいたヒロシを見た瞬間、ナーノは血相を変えて飛び出した。

「危ない！」

ナーノは咄嗟にヒロシの体ごと身を低くして高空からのオオワシヤミーの襲撃を回避すると、驚くヒロシの前に立って向かって来るオオワシヤミーと向き合うが、その直後オオワシヤミーはナーノの体を翼で叩く。

「退け」

「が！」

ナーノは翼で叩かれると、地面に叩きつけられユーノ達は声を上げる。

「「「ナーノ！」」」

「小僧・・・！」

「てて・・・何するんだよ！？」

怒鳴り声をあげてオオワシヤミーを見据えるナーノに対して、オオワシヤミーは言う。

「さっきはよくも邪魔してくれたな。ここには誰も入らせるわけにはいかぬ。悪いが消えてもらうぞ。」

オオワシヤミーはナーノの方へとゆっくりと歩み寄っていき、彼を始末しようとするのを見、ユーノはユーノスから結界印を要求する。

「ユーノス元帥！」

「ああ！」

ユーノスは結界印を手渡し、ユーノの肩から降りるとユーノはスレイヤーモードへと変身。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

スレイヤーモードとなったユーノはジャンプしてオオワシヤミーの頭上を飛び越えると、ナーノの目の前に立って彼に言う。

「ナーノ！ティアナたちと一緒に、その人を！」

ユーノがその場に尻もちをつくヒロシを一瞥しナーノにそう言うと、ナーノは首を縦に振る。

「わかった。さ、早くここから離れて」

ナーノはヒロシの体を起こすと、ティアナ達と共に公園から後にし、オオワシヤミーとユーノが向かい合う。

「邪魔はさせぬぞ。」

「そっちこそ。これ以上好き勝手させるか」

ユーノは腰の逆刃刀を抜くと、オオワシヤミーと激しい衝突を繰り広げる。

そして、彼らの戦いが暫くして、ヒロシを連れて公園から離れていたティアナたちは、ふとヒロシに抱いた欲望のことに関して質問する。

「あの、一つ聞いてもいいでしょうか？」

「なんだね？」

「どうして、あの公園を・・・」

すると、ティアナのその問いに対してヒロシは物寂しそうな顔を浮かべながら次のように答えた。

「私は見ての通り、こんな老いぼれだ・・・仕事も家庭も失い、もう何をしたらいいか分からなくなってた・・・・・・そんな時、あの公園で暮らす動物たちを見て・・・・・・」

少し話を前に戻すと、ヒロシは定年を過ぎてから直後に妻とは熟年離婚を果たし、人生における生き甲斐も何もかもを失くし途方に暮れていたのだが、とある日の公園のベンチで偶然にも彼はそこで暮

らす小さな動物の姿に心動かされたのだ。

『へへ。可愛いな。お前、一人か？』

公園に暮らす動物のほとんどが両親に早くに死なれたものや、人間に手放された身寄りのない動物が多かった。

そんな現状に胸を打たれたヒロシは一大決心し、残りの人生をこの公園に住まう動物の為に費やそうと考え、今に至ったのだ。

「私は、残りの人生をあの公園の動物たちの為に費やそうと思った・・・・だから、動物たちが安心して暮らしていける場所・・・それが私の欲望だった。だがこんなこと・・・こんなことは・・・私が望んだことじゃ・・・・・・！」

「おじいさん・・・・・・」

ヒロシは涙ぐんだ様子で手を押さえると、見ていたティアナ達も心が締め付けれる。

そんな時、彼らの前にあの男が姿を現しこう言って来た。

「は。同じ欲望のくせして、贅沢な奴だ」

「「「！」」」

声を聞いた瞬間ティアナを始め、ナーノや鬼太郎も一様に耳を傾け魔の前を覗くと、現れたのは鳥のグリードのアンクだった。

「て、てめぇは！？」

「鳥のグリード、アンク！」

ティアナは一度任務の途中でアンクに惨敗しているせいか、若干声量にも怒りの感情が籠っていた。

アンクはティアナの事を覚えていたのか、徐にこう言う。

「ああ。あの時の女か。身の程ってのがまだ分かっていないようだな。それと――――――」

すると、アンクは顔の向きをナーノの方に向けると、怪人体の右腕を向けながら鋭い目つきでこう言い放つ。

「竜神の寵児。いや、ナーノ・T・スクライア。よくもこの俺を虚仮にしてくれたな。この礼はたっぷり返させてやる」

「ふん。言ってくれるじゃん。盗れるもんなら盗ってみなよ。逆に奪い盗ってやるから」

「ふざけるな！」

ナーノの挑発に乗ったアンクは腕から火炎弾を発射する。

ナーノは前に出ると、ユーノ譲りの鉄壁の防御力を秘めた紫のミッド式魔法陣が特徴のラウンドシールドを展開する。

「ラウンドシールド！」

ナーノがアンクの攻撃をいとも容易く受け止めたことに目を疑う二

人だったが、直後ナーノは攻撃を受け止めながらティアナと鬼太郎に言う。

「二人は先にその人を安全な場所まで！僕がこいつを食い止める！」

「はあ！？お前、何言って・・・！」

鬼太郎はナーノの言葉に耳を疑いそう言おうとしたが、ナーノは振り返りほくそ笑むと自信に満ちた様子で言う。

「大丈夫。僕を誰だと思ってるの？竜神の寵児・・・次元世界最強の男『ユーノ・スクライア』の息子で、ナーノ・Ｔ・スクライア。ライジングハート。行くよ」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

ナーノはバックルの機能を作動させると、専用のパスを取出し軽快な待機音を奏でながらパスを翳して変身する。

「変身♪」

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

紫を基調とする重厚な鎧に身を包んだナーノは軽く手を叩いて、こう言った。

「さぁ～て・・・お仕事開始だ！」

ナーノはアンクの方へと向かっていくと、アンクは容赦なく目の前のナーノに火球をぶつけようとし、それをナーノはリズム感抜群の

動きで躱していく。
あの間に、言われた通りティアナと鬼太郎はヒロシを連れてその場を離れていった。
◇
〈ユーノＳｉｄｅ〉
さて、ナーノがアンクと戦闘を始めたその頃、オオワシヤミーと対峙していたユーノは飛行魔法を使ってオオワシヤミーと空中戦を繰り広げていた。
「はあああ！」
ユーノは空中からの蹴り技をオオワシヤミーに叩き込み、オオワシヤミーはそれを受け流すと翼を広げて鼻を飛ばして攻撃しようとする。
飛んで来た羽を交わし、一度ユーノの元へと降り立つユーノ。
「と！」
「ユーノ、懐に飛び込んで切り裂け」
「了解」
〈Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ〉
ユーノはカマキリコアの力で両腕に二刀流を携えると、飛行魔法に

よってその場から飛び出しオオワシヤミーの体を切り裂いていく。

「はあああ！」

オオワシヤミーはユーノのツインブレイドを受けると、翼の一部を切り裂かれ飛行が困難となり始める。

ユーノは一気に畳み掛けるためにオオワシヤミーへの懐へ飛び込んでいった。

オオワシヤミーとの戦いが激しさを増す中で、鳥のグリードであるアンクとほぼ同等の力で向かって居たのは竜神の寵児、ナーノ。

ナーノはダンスを駆使した動きでアンクの攻撃を翻弄しつつ、自分の射程を計算し、あらゆる覚悟から魔力弾をアンクにぶつけていき、アンクは攻撃をその身に受けると思わず声を上げる。

「ぐおお！」

「もいっちょ！」

ナーノは素早い動きでアンクの懐に入り込むと、銃口を向けてアンクを狙い撃ちし、アンクは口元に血を流すと、湯気の上がる右腕を掲げながら両翼を広げる。

「こんなもの・・・こんなもの！」

アンクは翼を広げると、高空へと舞い上がりナーノ目掛けて突進し、ナーノはそれを皮一枚のところで躱すと銃を構えと降りて来たアンクと向き合う。

「ち。調子こきやがって。こっちはアンゴルモアも見つけないといけないんでな。さっさとくたばれ！」

「生憎、こっちだって同じだよ。早くお父さんを助けに行かないと」

〈Ｖｉｏｌｅｔ　Ｂａｒｒｅｌ〉

ナーノは銃口に紫の魔力弾を形成すると、引き金を引いてアンクを狙い撃ち。

「ふん！」

アンクは再び翼を広げて空を高速で移動しながらそれを回避していくが、ナーノもナーノで銃弾の数を増やして正確無比且つ高速の射撃でアンクを追い詰めていく。

「ぐ！！」

「まだまだ行くよ」

〈Ｄｏｕｂｌｅ　ｇｕｎ〉

すると、アンクを見据えながらナーノは持っていた銃を二個に増やすと、両利きの手から撃ち出される怒涛の連続攻撃をアンクに仕掛ける。

「ひひ。調子に乗って撃ちまくるぜバンバン！！」

アンクは目の前から飛んでくる無数の弾丸をその身に受けると、体

勢を崩したまま地面へと墜落する。

「ぐあああああ！！」

ナーノは落ちて来たアンクに止めを差そうと銃を構えるが、アンクは鋭い目つきでナーノを睨み付けながら戦線を離脱し、空高く舞い上がってその場を後にした。

ナーノは無事にアンクを撃退すると、ティアナ達と合流を果たしてユーノの元へと急いで向かうのであった。

アンクガ退散してからしばらくして、オオワシヤミーと闘い続けていたユーノは、ここで新技を披露する。

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｇａｕｎｔｌｅｔ〉

ユーノは、ナーノから受け取ったゴリラのコアメダルの魂を引き出し、両前腕部にパワー・パンチ力・腕力・強靭さに優れるガントレット状武器・ゴリバゴーンが付随し、オオワシヤミーに急接近し、勢いよく殴りつける。

「オラオラオラオラオラ！！！！」

「ぐおおおお！！」

強烈なゴリラメダルの力に圧倒されるオオワシヤミー。

ユーノは一度ビルの上に降り立ち距離を置くと、疲労困憊のオオワシヤミーにバゴーンを構えて腕からロケットのように射出する特殊技「バゴーンプレッシャー」をお見舞いする。

「喰らえ！」

繰り出されるロケットパンチをその身に受け、オオワシヤミーはその威力によって吹き飛ばされ地面へと墜落する。

「ぐあああ！」

ユーノはユーノスを乗せて地面に降り立ちオオワシヤミーを見据えると、そのタイミングで甲冑モードに身を包んだ鬼太郎が何処からか拾って来たバイクに乗って颯爽と登場する。

「店長！お待たせました！」

「鬼太郎。よし、一緒に行くぞ」

「了解！」

鬼太郎はバイクのレーターを上げると、真っ直ぐにオオワシヤミーへと突っ込んでいき、オオワシヤミーは走ってきた鬼太郎のバイクに振り切られる。

「ぐおおお！」

オオワシヤミーにダメージを負わせた鬼太郎はバイクを止めると、斬魄刀「烈火」を取出し徐に言う。

「さぁて・・・久々にクライマックスと行くか」

「どこまでも邪魔するつもりらしいな」

オオワシヤミーも剣を取出し、一緒に並ぶユーノと鬼太郎を見据えると、鬼太郎は烈火に炎を灯してから鼻で笑う。

「悪いな・・・趣味なんだよ！」

鬼太郎はそう言うと再びバイクを走らせオオワシヤミーに向かっていくと、オオワシヤミーの懐に烈火の剣閃を叩きこむ。

「つらあ！」

「ぐ」

それなりに負荷のかかった攻撃を受けたオオワシヤミーだが、鬼太郎の攻撃はそれだけでは終わらずバイクから降りた途端次なる攻撃が叩きこまれる。

「行くぜ行くぜ行くぜ！」

鬼太郎は大立ち回りで愛刀を操りオオワシヤミーを斬りつけていくと、その鬼太郎の攻撃に気を取られていたオオワシヤミーの背後からユーノが洞爺湖木刀を振りかざす。

「ボーっとするな。僕のも受けてみろ！」

木刀ではあってもそれは岩をも切り裂く力を有したユーノの一戦をその身に受け、思わず声を上げるオオワシヤミー。

「がああ」

そして、ユーノと鬼太郎は互に笑みを浮かべながら抜群のコンビネーションで交互にオオワシヤミーを斬りつけていき、オオワシヤミーは追い詰められる。

「き・・・貴様ら・・・！」

と、そんなオオワシヤミーに向かってユーノ達の背後から走ってきたティアナとナーノが同時にクロスファイアーを発射してきた。

「「ダブルクロスファイアーシュート！」」

二人の攻撃が通ると、オオワシヤミーは発生した爆発によって吹き飛ばされる。

「のおお！」

ナーノとティアナは直ぐにユーノ達の元に駆け寄り安否を確認する。

「お父さん！」

「ユーノ先生！鬼太郎さんも無事で？」

「へ。いいタイミングだぜ」

「アンクはどうした？」

気になったユーノスがそう尋ねると、ナーノは仮面の下で笑みを浮かべる。

「へへ。追っ払ってやった」

「ほう・・・大したものだね」

聞いていたユーノもナーノの高い実力には素直に感心する。

「さ～て・・・じゃ。集団リンチと参ろう・・・か！」

鬼太郎はそう言うと、烈火の刀身から火炎弾を飛ばしてオオワシヤミーを翻弄すると、発生した爆発に乗じてティアナとユーノが連続攻撃を加える。

「バリアブルバレット！」

「スレイヤーウィップ！」

二人の隙を見せることなく叩き込まれる攻撃に何とか持ち堪えたオオワシヤミーは高空へと舞い上がり、ユーノ達と距離を置く。

「てめぇ！降りて来いコノ！」

鬼太郎が高空に浮かぶオオワシヤミーにそう言うと、オオワシヤミーはその瞬間無数の羽を飛ばしてきた。

「ふん！」

「「「「「のおお！」」」」」

「とお！」

ユーノ達は地面に刺さった瞬間爆発を起こすオオワシヤミーの攻撃

を躱しながら反撃の機会を伺っていると、オオワシヤミーは急降下し鬼太郎に体当たりを仕掛ける。

「ぬああ！」

鬼太郎は大したダメージは負わなかったものの、まるで自分を小馬鹿にした様子で高空より見下ろすオオワシヤミーに向かってこう言った。

「ち。どうしても俺の必殺技を見たいらしいな」

オオワシヤミーは首を叩いて彼を挑発すると、鬼太郎は専用のパスをベルトに近づけて、エネルギーをチャージする。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

が、この時ナーノは瓦礫の中よりあるものを発見し、思わず表情を凍りつかせる。

「あ！」

「ふん。行くぜ・・・必殺俺の・・・！」

何も知らない鬼太郎は刀を構えて烈火の炎を最大にするが、必殺技の瞬間ナーノが血相を変えて鬼太郎を突き飛ばした。

「バカモモタロス待って！！」

「ぬおお！？」

「ちょ、ナーノ！？」

「どうしたのよ？」

ユーノ達も突然のナーノの変容ぶりに驚きを隠し切れなくなるが、途端ナーノは瓦礫の方に指を差してこう言った。

「そんな技使ったりしたら、あの子犬が巻き添えだよ！」

「え」

ナーノの言葉を聞き、ユーノ達が目を向けると、映って来たのは瓦礫の下で身を縮こまらせ怯えた様子の子犬の姿だった。

鬼太郎もそれを見ると思わず舌打ちをしてしまう。

「ち・・・じゃあどうするんだよ！」

「モモタロスは引っ込んでて。僕がやる。お父さんはあの子犬に結界を」

「え・・・ああうん。分かった」

ナーノに頼まれたユーノは完現術による結界を子犬の周囲に施し、ユーノスも念には念を置いて半径２０キロ圏内における強壮結界を展開し、周囲の時間軸をずらす。

ナーノは持っていた銃のカートリッジを新しく装填しながらオオワシヤミーに目を向けると、オオワシヤミーはナーノを見下ろす。

「ふん。また貴様か・・・」

ナーノはカートリッジの補充が終わると、ステップを踏んで一回転し銃を構える。

「倒すけどいいよね？」

オオワシヤミーはその問いに対して無言のまま彼を見下ろすが、それに対するナーノの対応も一方的だった。

「答えは聞かないけど！」

ナーノは容赦なくオオワシヤミーに向かって銃弾を発射し、オオワシヤミーは周囲の建物には一切被害を出さずに自分だけを狙い撃ちをすることの出来るナーノの高等技術に思わずつぶやいてしまう。

「こいつおかしいんじゃないのか！？」

傍でその光景を見ていたユーノ達は既に彼の銃の腕前を認めていた様子であった。

「うわ～～～相変わらず命中精度高っ」

「だけど何で踊りながら？なのはさんが見たらなんて言うかしら・・・射撃型の真髄もお構いなしって感じ・・・」

「それでも、効果はあるようだが」

「け。カッコつけやがって」

ナーノの撃ち方は、非常に独特であった。

常にリズム感に乗りながらその場その場に合わせて踊りを取り入れた銃撃戦を披露し、静止した状態での射撃はほとんど行わず、なのはから言わせればＮＧ行為ではあるのだが、ナーノはそれを一切気にせず自分なりのスタイルを確立し今に至る。

オオワシヤミーはいよいよ追い詰められていき、地面を転がりながら器用に自分に銃弾を発射するナーノの攻撃を受けた瞬間後ろへと吹き飛び全身から煙が上がる。

「ぐ・・・」

満身創痍の状態でオオワシヤミーが立ち上がると、ナーノは徐に尋ねる。

「最後いくよ。いい？」

「駄目だ・・・」

しかし、オオワシヤミーの言葉は無視されナーノはパスを取り出しあっさり言う。

「答えは聞いてない」

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

パスをライジングハートの中央に翳してエネルギーをチャージしたナーノは、銃口に紫色に輝く己の膨大な魔力を集めていき、それをオオワシヤミーに向けながら言う。

「受けてみな。これが白き魔王の十八番・・・神聖なる光の砲撃・・・！！」

ユーノ達は集められていく魔力の光、もとい純粋なる砲撃魔法の諜報を目の当たりにした途端、目の色を変えた。

「あれは・・・！」

「ひょっとして・・・！」

そして、十分に魔力が蓄えられるとライジングハートの機械がその魔法名を口にする。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

「ディバイン・・・・・・バスター！！」

ナーノは銃口を向けると、トリガーを引き、オオワシヤミー目掛けて強烈なディバインバスターを発射する。

「う！うわあああああ！！」

真っ直ぐに向けられたナーノのディバインバスターを受けた瞬間、オオワシヤミーは大爆発を伴い悲鳴を上げながら消滅を果たし、ユーノ達はその余波に堪えながら安どの笑みを浮かべる。

「やっ・・・」

だが、その直後ユーノは何かの気配を感じて表情を一変させる。

「！いや、待て！」

「え」

ティアナと鬼太郎は顔を見合わせユーノの方に目を向けると、そのユーノの頭上に浮かぶ空の彼方より何かに吸い寄せられるかのごとく、青紫色に輝く結晶・・・アンゴルモアが飛んで来た。

「！あれは・・・！」

「まさかがアンゴルモアが・・・！」

飛来したアンゴルモアは爆散したオオワシヤミーの元へと近づいて行き、一か所に集中したセルメダルに憑りついた。

「な！倒した奴のセルメダルに憑りつきやがった・・・！」

すると、その時・・・セルメダルに憑りついたアンゴルモアが欲望のエネルギーによって暴走を起こし、それが形として現れるとユーノ達は思わず目を疑った。

現れたのは、全長２１８ートルを超える大きさの巨大な海洋生物を模したＡＭ体と、それと一緒に誕生した翼長１８メートルに及ぶ蝙蝠のそれにも似た翼をもつＡＭ体だった。

当目からこの光景を目撃していたアンクと、ユーノ達の動きを監視していた破面魔導虚のリリスも目を見開いた。

「何だと？」

「へぇ・・・面白いじゃないの。アンゴルモアが直接ヤミーに憑りつくなんて」

その一方で、ユーノ達は盛大に目の前に現れた二体のＡＭ体の姿に驚かされた。

「ぎょえええええ！！」

「何よこれ・・・！？」

「ちょっとちょっと！こんなの反則でしょ！」

「そうも言ってられん」

ユーノスがそう言うと、海洋生物に似た姿のＡＭ体・・・ギガンデスハデスは口腔内より高熱火炎を吐きだしユーノ達を攻撃する。

「「「「ぐあああああ！！」」」」

ユーノ達はハデスの攻撃を受けると、勢いよく吹き飛ばされ、その様子をモニターでチャックしていたなのはの声が上がる。

「ユーノ君！」

「マズイな・・・ヤミーが直接ＡＭ体になるなんて・・・前代未聞や」

「つくづくアンゴルモア・・・崩玉はあらゆるものの運命を狂わせやがる・・・！」

恋次はそう呟くと、突如現れた二体のＡＭ体に険しい表情を浮かべながらどうにかして対処しようとするユーノ達を見据える。

ユーノ達は爆発に巻き込まれないように瓦礫の陰に隠れながら、巨大なＡＭ体を窺う。

「こんなの相手に・・・どうすれば？」

「店長なら楽勝でしょ、こんな奴！？」

「あのね・・・街の被害も考えて戦わないといけないんだよ。毎回毎回僕がフルパワーで戦ったら、それこそ世界は壊滅だ。」

「う・・・確かに・・・」

鬼太郎はヴィヴィオとの模擬戦の時に、ユーノの規格外な強さはしっかりと目に焼き付けており、確かに彼が言う通りビルをもなぎ倒してしまう実力のユーノがヤミーとの戦いでまいどフルパワーで戦えば、どうなるかぐらいはわからない筈もなかった。

「でも弱りましたね・・・このままじゃ本当に・・・」

すると、この現状を目の当たりにしたナーノがため息がてら決断を下す。

「はぁ～あ。面倒くさいやつだな。仕方がない」

「え？ナーノ」

ナーノはハデスと、もう一体のギガンデスヘブンの攻撃の隙を突いて目の前に飛び出して行くと、あるものを探し始める。

「えっと確か・・・お。あったあった」

ユーノ達が後ろからついて行くと、ナーノが発見したのは黒を基調とする一見すると普通の自動販売機であり、思わず鬼太郎はナーノに怒鳴りつける。

「って！こんな時にジュース飲んでる場合か！？」

「違うよ。まぁ見ててよ♪」

すると、ナーノは徐に一枚のセルメダルを取出し、ユーノスは目を見張る。

「！セルメダル！？」

ナーノは驚くユーノ達を余所に、セルメダルを投入口に入れ、真ん中のボタンを押す。

直後、目の前の自動販売機は形を変形させナーノがいつも乗り回しているこの世界における移動手段の一つであるバイク、ライドベンダーと形を変える。

「！それって・・・」

「バイクじゃないの！」

「この時代に着いたときに、謎の声がいつでも使えるようにってプ

レゼントしてくれたんだよ。もしもの時の為にって・・・――異世界のあちこちに置いてるらしいよ。」

「そ・・・そうなんだ・・・」

「たく。何なんだよその謎の声って・・・もう訳わかんねぇよ・・・」

只でさえ今も十分混乱しているユーノ達にとって、不可思議な事が多い今回の事態はどのように反応をしたらよいかさえ難儀してしまう。

「あとこれも序でに」

ナーノはもう一枚のセルメダルを取り出すと、近くに置いてあった自販機形態のライドベンダーに投入し、タコカンのボタンを選択しカンドロイドを射出する。

〈Ｔａｋｏｋａｎ〉

大量のタコカンを射出したナーノは直ちにすべてを起動させると、起動したタコカンは一斉に宙へと舞い始め、その数に目を奪われたユーノは興奮する。

「タコだ！ねぇ、タコタコ！ほら見て、凄いよ！」

「す・・・すげええ・・・！」

興奮するユーノに対して唖然とする他の三人だったが、その途端一体のタコカンがユーノスの頭に激突。

「痛っ！」

「そんで仕上げ」

〈Ｄｒａｇｏｎｋａｎ〉

ナーノは最後に懐から数か月前にユーノに手渡したドラゴンカンを取出し、起動させるとライドベンダーと合体させる。

先ずドラゴンカンドロイドが巨大化し、ライドベンダーの前輪が左右に展開、後輪と一体化することで３輪で後輪部を構成、スペースの空いたフロント部にドラゴンカンが合体し前輪となり、左右に分割したフロントカウルの間にカンドロイドの前足部分がはめ込まれ、竜の顔を模した形状となりライドベンダーはドラゴンベンダーとなって完成し、龍にも似た嘶きを上げる。

「「「「うおおおお！！」」」」

ユーノ達は思わず共通のリアクションを取り、ナーノはそれを見た後ドラゴンベンダーに乗り込み、夫で柔軟な性質から、互いに連結し合ったタコカンが作り出した道に向かってナーノが勢いよくバイクを走らせる。

「行くよ！」

「ちょ！ナーノ！！」

「あいつ・・・一人で！？」

タコカンが作り出した道を伝って空を駆け抜けるナーノの姿にユーノ達が驚愕の表情で見つめる中、襲い掛かるハデスとヘブンの攻撃を躱しながら銃を取出し、ドラゴンベンダーと連動させてワイルドショットを放つ。

〈Ｗｉｌｄ　ｓｈｏｔ〉

ナーノが放った銃撃は、そのうちの一体であるヘブンへと衝突し、ヘブンは爆発を伴い消滅した。

ユーノ達は圧倒的なパワーを秘めたナーノの力の姿に目を丸くした。

「すげえ・・・！」

「これが・・・ナーノの力・・・」

ナーノはドラゴンベンダーをその名の通り、竜の如く呻りを見せながら縦横無尽に道を渡っていき、本体であるヘブンと激しい激突を繰り広げる。

「一気に勝負をつけるよ。ライジングハート、いけるね？」

〈Ｈｅｒｅ　ｗｅ　ｇｏ〉

すると、ナーノは全神経を集中させると、周囲に散在する魔力素を広範囲にわたって自分の元へと集束させていく。

「超広域魔力素集束・・・開始！」

〈Ｓｔａｒｔ〉

ナーノが魔力素集束を始めると、その頭上とドラゴンカンの口腔内に集められる嘗てユーノやなのは達が見たこともないほどに巨大な紫に輝く魔力の球体。

六課のモニターで同じものを見ていたなのは達はその集束砲撃の象徴たる魔力の球体を見た瞬間、表情を一変させ愕然とした。

「な・・・あれは・・・！」

「集束砲・・・！？」

「ただの集束砲じゃない・・・あんな巨大な魔力球は見たことがない・・・！」

「な、何をする気だ！？」

「ナーノ・・・！？」

誰にも予想がつかないなのはのそれを遥かに上回る超巨大集束砲の姿に目を凝らしていると、魔力素集束が完了した

「充填完了。よし。止めだ！」

〈Ｃｏｓｍｏｒｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

「全・力・否・定！！」

ナーノはドラゴンベンダーの口腔内に蓄えられた集束砲撃と共に、頭上に浮かぶ太陽の如く超巨大な魔力球をハデスに向けると、シン

グルアクションでナーノ最強最大の集束砲・・・スターライト改め、宇宙の光の異名をとる大技を仕掛ける。

「コスモライト・・・・・・！！」

掛け声とともに、ナーノはゆっくりと手の中のトリガーを引いた。

「ブレイカー！！！」

その瞬間、ドラゴンベンダーの口腔内の魔力とナーノの頭上に浮かんでいた巨大魔力球が同時にハデスに向けて放出されると、空気をも歪ませてしまうのかさえ思ってしまうほどの衝撃と爆風が周囲に広がり、ハデスは蒸発しながら内部に取り込んだアンゴルモアもどきごと消滅。

地上でナーノの放った凄まじい技の余波を受けていたユーノ達は体制を崩さないようにするので精いっぱいだった。

「「「「う！！」」」」

その一方で、モニター画面でさえ白黒の砂と化してしまった先ほどのコスモライトブレイカーの威力を見ていたなのは達は、正に開いた口が塞がらないでいた。

「な・・・何だよ今の・・・！」

「コスモライト・・・！？」

「ブレイカー・・・だって！？」

「うそ・・・でしょう！！」

「こんなん・・・・・・ありかいな・・・！」

なのはでさえ、恐れおののく尋常ならない破壊力を秘めたナーノの集束砲撃を前にし、フェイトは恐る恐るなのはに顔を向けるとこう言った。

「ナーノは・・・・・間違いなくなのはの子供だよ・・・・・・・だって・・・あんな大きな魔力を撃てるのは・・・・・・・なのはぐらいだって・・・！」

「だがコスモライトとは・・・・・全く以て末恐ろしい子供だ・・・管理局が喉から手が出るほど欲しい逸材だ・・・！」

クロノは冷静にそのような事を呟くと、自分たちが敵に回したくない者のリストにユーノに加え、新たにナーノ・Ｔ・スクライアを書き加えた。

そして、ハデスを倒したナーノは地上に降りてくるとバイクを降り、徐に変身を解く。

〈Ｍｉｓｓｉｏｎ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ〉

「僕の勝ちだね♪」

と、ここでユーノ達が徐にナーノに近づいて来た。

「ナーノ――――――」

「へへ。やったよ。それより、アンゴルモアは？」

「あの調子じゃ、もどきだってことは目に見えてるじゃない」

「仕方ないか。それにしてもナーノ。あんなもの隠してたんだ。流石は、エースオブエースの息子かな？」

すると、それを聞いたナーノはユーノのそのコメントに対してこのように訂正する。

「ひひ。ノンノン♪ユーノ・スクライアの息子だって」

「？」

ユーノはこの時、ナーノがなのはの事となると意図的にそれを避けているような、そんな気に陥ってしまうが、現時点でははっきりとしたことは何もわからないでいた。

「さぁて・・・任務も終わったし、帰ろっと」

ナーノはまるで疲れなど一切見せていない様子でその場から徐に歩き出すと、鬼太郎はナーノに自分の見せ場を持っていかれたことにご立腹の様子だった。

「おい小僧！てめぇ一人だけカッコつけやがって！よくも俺の見せ場潰したなチクチョー！！」

「まぁまぁ。鬼太郎さんもそんなに怒らない方がいいですよ・・・あれでもなのはさんの息子さんなんですから。」

「俺はゼッテー認めねーぞ!!」

ティアナの言葉を聞いて、声高に叫ぶ鬼太郎だったが、ユーノは唯一人ナーノの後姿を見ながら奇妙な違和感を覚えていた。

ユーノスは不思議に思い、彼に問いかける。

「ユーノ。どうした?」

「いえ・・・何でも・・・」

ユーノは交代部隊の局員に事後処理を任せると、機動六課へと帰還していくが、この時ナーノの父親としてのユーノが息子の言動から垣間見れる小さな疑問にこう思っていた。

「(どうしてだろう・・・なんかナーノって・・・・・・なのはの話になると――――――)」

◇

今回のオオワシヤミーの親となったヒロシ・ウチヤマダはこの事件の後、無事に元の生活に戻ることが出来、今も毎日公園に住む動物の世話をする傍ら、自分なりの努力で講演を守ろうとしている。

「そ~ら!ははは。よしよしいい子だ」

ヒロシが子犬の頭を撫でていると、通りかかった親子がそれを発見し、その子犬の元へと近づいて来た。

「わああ!可愛い!触ってもいいですか?」

「おお、いいよ。ほらほら」

ヒロシは声をかけてきた子供にそう言うと、子犬を子供の手の中に収め、子どもは親と共に手の中の子犬を可愛がったそうな。

「カワイイね」

「ははははは」

ヒロシの笑顔は、底抜けとして活き活きとしていたのであった。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

事件が解決し六課に戻って来たユーノは、隊舎に姿を見せないでいるナーノの事が気にかかり、近くにいたなのはに尋ねた。

「なのは。ナーノは？」

「それが――――――戻ってきてから急に姿が見えなくて」

「――・・・」

ユーノはなのはの言葉を聞くと、訝しげな表情を浮かべながらナーノの事を探し始める。

では、その間にナーノが一体何処で何をしているのかと思えば、一人夜空に浮かぶ無数の星空を眺めながら仰向けになって寝っころが

っていた。

「ふう～～～」

ナーノは溢れるばかりの星空を眺めながら、愛機ライジングハートにこんな事を呟いた。

「昔も未来も、こんないい星明りが見れるってのはいいものだよな～～～そう思わない、ライジングハート」

〈Ｉ　ｓｅｅ〉

「これから忙しくなるぞ～～～ヤミーにグリードがなんだ！僕とお父さんたちにかかれば、ど～んなもんだい！（それに・・・――――この時代で僕は何か変わることが出来るかもしれない。そうなれば、僕ももっと・・・――――――お母さんと）」

意味深長な事を心の中で呟くナーノ。

と、そこへ父親たるユーノがナーノの元へ歩み寄ってきた。

「こんなところにいたのか？」

「あ、お父さん」

ナーノは父であるユーノの方へと振り返ると、ユーノはほくそ笑みながらナーノの隣座り話しかけてきた。

「急にいなくなったと思って探してみたら・・・星空を眺めるのが好きなのかい？」

「まぁね。だって、星って・・・人間が生まれるずっと前から世界の闇を払いのけて来て、人間や生き物全ての光だったわけじゃない。」

「そうだね。」

「ほら、あの星見てよ。あれが人の目で見ることが出来る一番暗い星、六等星だよ。で、その隣が一等星だ」

「へ～よく知ってるね。ということは人間で言うなら、一等星はなのはで、僕は六等星だね」

「何言ってるのさ？お父さんだって十分一等星じゃない。少なくとも僕はそう思ってるよ。昔も今も――――――」

ナーノからの言葉を直に耳にし、思わず気恥ずかしくなるユーノだが、満更悪くは無かったらしい。

「はは。なんだかお前に言われると、ちょっと照れくさいけど、素直に喜べるのはどうしてかな」

「そんなの決まってるよ――――――僕がお父さんの息子だからさ」

「ナーノ・・・――――」

ユーノはナーノに微笑むと、ナーノもまた純真無垢な微笑みをユーノに浮かべ、その後すぐに手を出してきた。

「一緒に頑張ろうよ。お父さん」

「・・・――――うん。ありがとう」

ユーノは手を出してきたナーノ左手に対して、自分の右手を差し出し固く握手を交わし、ナーノはその事に笑みを浮かべる。

「へへ」

しかしその直後、二人の耳に六課の隊舎から聞こえてきた部隊長のはやての絶叫が唐突に飛び込んできた。

「な、なんやねんこれ!!!!!!」

「?はやて」

気になったユーノとナーノは隊舎に戻ってその真相を確かめようとする。

一方のはやてや、なのは達一同は隊舎に送られてきた大量の段ボール箱の山に目を疑い、混乱をしていたのだ。

「どうなってるんやこれは!?こないぎょうさんな荷物・・・!」

「一体誰が・・・」

と、そこへユーノとナーノがやって来、ナーノは目の前に置かれていた大量の荷物を見た瞬間、安どの表情を浮かべた。

「ああ。来た来た。僕の荷物」

「な、何!?」

思わず耳を疑うユーノだったが、ナーノは前に出てくるとなのは達に面と向かって衝撃的なことを口にしてきた。

「僕、今日からここにお世話になるから。ちゃーんとこの日の為に前々から用意していた、ここの制服とＩＤカードもあるし・・・不束者ですが、よろしくお願いします♪」

ナーノがさも当たり前のように頭を下げてくると、なのは達は仰天した。

「「「ええーーー!!」」」

「なっ、何ィ・・・!?」

「て、てめぇ小僧!誰も雇うなんて言ってねぇぞ、こらー!!」

「あ、心配しなくても代金はちゃんと僕が払うから」

「そう言う問題じゃなくて!!もう・・・!本当に私とユーノ君の息子なの!!」

なのはは声を荒げてナーノを叱咤しようとするが、ナーノはそれを無視してヴィヴィオの方へと近づき、目を輝かせながら姉の手を握りしめ言う。

「ヴィヴィオお姉ちゃん。今日からよろしくね♪」

「え・・・う、うん・・・」

どう返したらよいか分らないでいる今はナーノよりも年下の姉であるヴィヴィオ。

ユーノはユーノスを肩に乗せ、互いに顔を見わせると、それぞれこう言った。

「やれやれ――――――また面倒なのが増えたが」

「存外悪くないですかね」

こうして、メダル争奪戦から始まった今回の重大出来事、ナーノ・T・スクライアの登場はその後のユーノ達の運命を大きく変えていくことになるのは間違いないだろう。

今後のナーノの活躍に目が離せないぞ！！

2020

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚

2021

ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

2022

息子とダンスと竜の一撃（後書き）

教えて、ナーノ君！

ナ「どうも、ナーノ・T・スクライアです♪今日は、お父さんに変わって僕がこのコーナーを仕切らせてもらうよ♪今日のテーマは、僕のデバイス『ライジングハート』について」

「『ライジングハート』は、未来のお父さんがお母さんのレイジングハートを雛形に改良し、独自に作り上げた僕のデバイスで、待機状態はこうしてバックルの姿となっているんだ」

「二種類に使い分けることが出来、ヤミーとの戦いで発揮した中・長距離用のガンモードと、近接戦闘用のブレイドモードがあるんだ。次回は、このブレイドモードを使うつもりだから」

すると、その時不機嫌な鬼太郎が現れる。

鬼「って！おい、小僧！何処行ったかと思えば勝手にこんなことしやがって・・・！」

鬼太郎は手鏡に映っているナーノによって落書きされた顔を近づけ、剣幕を浮かべる。

鬼「しかも油性マジックで書きやがるから全然おちねぇじゃねぇかよ！！どうしてくれるんだ！」

ナ「大丈夫だって。もっと力入れてやれば落ちるから。と言う訳でこれで♪」

2023

ナーノは懐からタワシを取り出すと、洗剤をつけて鬼太郎をバインドで押さえつけてから飄々とした笑みで擦り始めた。

鬼「のおおお！！！いててって止めろ！！！いだあああああ！！！」

ナ「うわ！こんなに垢が出て来た！モモタロスちゃんと顔洗ってないでしょ」

鬼「洗ってるわ！！お前の言う垢はそっちの垢じゃなくて血の赤だろうが！！」

いいように遊ばれる鬼太郎なのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

浦「まったく・・・なんであんな子が店長となのはちゃんの子供なのかな。」

白「だが、実力は本物だ。しかしあれはなんだ・・・？」

白鳥は目の前に映って来る、今は年下のヴィヴィオに対してまるで忠誠を誓うような態度をとるナーノを指さす。

ナ「陛下。困ったことがありましたら、いつでもこの私目に言いつけ下さい。陛下に危害を及ぼすような害虫はこの竜神の寵児こと、ナーノ・T・スクライアが抹消いたします」

ヴィ「いや・・・／／／別に陛下とかじゃないから・・・そりゃ私

は聖王のクローンなわけだけど・・・弟にそう呼ばれるのはちょっと・・・／／／」

困惑するヴィヴィオは顔を赤く染め、それを見ていたナーノは目を輝かせる。

ナ「（あ～～～ヴィヴィオ姉ちゃんが顔を染めている～～～くう～～ヤバい！！カワイすぎ！！！大人の魅力とはまた違うヴィヴィオ姉ちゃんの魅力～～～！！！萌える！！！！！）」

勝手に興奮する弟のナーノ。

一応の両親であるユーノとなのはは複雑な心境なその光景を目撃していた。

な「ねぇ・・・私達の子供って普通と違う定めなのかな・・・？」

ユ「定めって言うか・・・僕は未だに君とあれしたことの方が信じられない・・・／／／」

な「う！それは私もだけど・・・／／／」

別の意味で困惑する二人だった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ナ「僕、訓練には参加しないからそのつもりで」

ミ「強くなる。もっと」

ヤ「強くなる・・・もっと」

ユーノス「なんで分離したんだ？」

ウ「これがお前の欲望だ」

ナ「お前邪魔。消してもいい？」

第１６９話　剣術小町とナーノと分離ヤミー

登場人物紹介

ヒロシ・ウチヤマダ

声：チョー

６２歳。オオワシヤミーの生みの親。動物が多く住み着く公園に長年立ち寄り、餌付けを始めとする世話を丹念に行って来た。定年退職後に妻とは熟年離婚。希望の見えない暗く塞ぎ込んでいた当時の自分を公園の動物たちと触れ合う中で第二の人生としての生き甲斐を見付け、以後ボランティアを続けていたが、公園のルールを無視する若者の態度に手を焼いており、その傍ら心の底で願って「動物たちが安心して暮らせる公園になってほしい」と言う欲望に目をつ

けられてしまう。ユーノ達の活躍により、公園も平和を取り戻し再び動物たちに囲まれた以前の様な生活を送っている。

登場ヤミー

オオワシヤミー

声：　黒田崇矢
身長　１８０？　体重　１１０？
特色／力：鉤爪を使った上空からの襲撃、爆発性を持った矢羽
動物の餌付けをする男、ヒロシ・ウチヤマダが抱いた、“公園を動物が安心して暮らせるような環境になって欲しい”という欲望から生み出され、公園にいる人・または入ろうとする人を見境なく襲うことで成長を遂げる。高空より舞い降り、鋭い右腕の鉤爪で獲物に襲い掛かる攻撃を得意としている。また地上においても剣を手にして接近戦を挑み、遠方の敵に対しては爆発性のある矢羽を放ち撃破して戦うことを好む。ユーノ達と初めて戦闘をした際、ナーノの反撃に合い撤退。二度目の戦いではナーノの銃撃を受け続け、最後に放ったディバインバスターによって撃破された。

オオワシヤミーアンゴルモア化／ＡＭ２９

・ギガンデスハデス

全長　２１８ｍ　体重　１６０５？
ナーノによって倒されたオオワシヤミーがアンゴルモアの力により、セルメダルの状態から復活・暴走した結果、元の形とは別の姿で水中を泳ぐ者や大地を這う者を象徴として巨大化した姿。一泳ぎで大津波を巻き起こして災いを与え、口腔から邪魔者を焼き払う高熱火炎を吐き散らして突き進む。地上においては長い胴体でビルなどに

巻きついて粉砕する事を得意としている。

・ギガンデスヘブン

翼長全開　１８ｍ　体重　８６０？

ナーノによって倒されたオオワシヤミーがアンゴルモアの力により、セルメダルの状態から復活・暴走した結果、元の形とは別の姿で空を飛翔する者を象徴して巨大化した姿。羽ばたきひとつで５０ｍ／ｓの暴風を巻き起こし鉄塔を曲げ、車などを吹き飛ばす事が可能。また尾部の先端からエネルギーの弾丸針を連続発射して高空より敵を狙い撃つ。

剣術小町とナーノと分離ヤミー（前書き）

危機を克服し、いかなる奈落からも自分を救い出すもの。それは人間が内に秘める信念の力である。信念は剣よりも優れ、槍よりも堅固なる武器となる。

Ｂｙホセ・エルナンデス（１９世紀アルゼンチン　の詩人・ジャーナリスト・政治家、１８３４～１８８６）

剣術小町とナーノと分離ヤミー

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

メダルの怪人グリードと、そのグリードを封印した七大元帥と手を

組むユーノ。

アンゴルモアとメダルを巡る戦いに、未来からやって来たユーノとなのはの息子、竜神の寵児・・・――ナーノ・T・スクライアが参入した。

欲望のメダルと欠片をめぐる戦いの渦は、果たしてどこへ行きつくのか？

〈Ｃｏｓｍｏｒｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

ナ「コスモライト・・・・・・！！ブレイカー！！！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈ナーノＳｉｄｅ〉

機動六課に居座ることとなったナーノは、持ってきた大量の荷物を隊舎寮へと運び込み、その手伝いとしてユーノとユーノスが同行していたのだが、ユーノ達は心の中で上手いことナーノに嵌められた気がしてならなかった。

そして、漸くすべての荷物の搬入が完了する。

「よいしょっと♪これで全部かな？」

一息をつくナーノと、周りにある大量の段ボール箱を見ながら呟くユーノ。

「随分持って来たけど・・・何が入ってる訳？」

「まぁ色々♪他人の個人情報は妄りに公開しないものだよ」

「個人情報って・・・」

ユーノは苦い表情を浮かべながら、ナーノと一緒にはやてが早急に用意してくれた彼の部屋に家具や必要なものを置いて行き、荷物を手分けして取り出している内に、ユーノはふとこんな疑問が浮かんできた。

「そう言えば気になったんだけど、僕らと合流するまでは一体どこで寝泊まりしてたんだい？まさか野宿とかって言うことは・・・？」

「そう言う日もあったけど、ちゃんと市内のアパートを借りてたから安心して。コピーロボットに変装させて、こっちに合流するまでの間食べていけるだけの費用をバイトとかで稼いでもらっている間に、僕は情報集めで世界中を飛び回ってたんだ。」

「ほう。歳に見合わずしっかりしているな。」

「こう見えてもお父さんの息子だし、サバイバルスピリットが備わってるのかも♪」

「逞しい事は嬉しい限りだけど、些か色んなことに強引すぎるんじゃないの？特に鬼太郎とかに」

「モモタロスはいいんだって。僕が今よりもずっとちっちゃかった頃からずっと遊び相手になってもらってたし、何より僕が気兼ねなく接することが出来る人だしね♪」

「ははは・・・昔も今も鬼太郎がナーノにとってのおもちゃか遊び

相手とは・・・哀れだな・・・――」

ユーノは自分の店の従業員でありながら、実の息子にそのように認識されていることに関しては苦笑いをするしかなく、ユーノスの方はナーノが鬼太郎の事をモモタロスと呼称するかについて徐に尋ねる。

「しかし、何故”モモタロス”なんだ？」

「昔お父さんの店で見たヒーロー番組の再放送の中に、真っ赤な鬼が出て来ましてね♪そいつがみんなからモモタロスって呼ばれてて、物心ついたころには僕もあの人の事モモタロスって言ってたものですから」

「そのヒーロー番組って・・・まさか・・・――『〇王』！？」

「本当に哀れだな・・・――鬼太郎よ」

主旨が変わっていることは取り敢えず気にすることはないが、取り敢えずこの小説始まって以来のいじられキャラは、クロノともう一人は鬼太郎であったりするのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

翌日。

ナーノはユーノの計らいもあって、嘱託前線部隊「スクライア商店」のセンターガードとしてこの機動六課に勤務することになった。

今日は、シャーリー達メンテナンススタッフを交えたナーノの詳しい戦力分析と言うことで、朝からそれなりに堅苦しい事が行われている中、ユーノはナーノのリンカーコアとそこから発せられる魔力量を計測した。

詳しくデータごとに分類し、その測定データとナーノが持っていたライセンスを比較したところ、驚愕の事実が判明しユーノを含め前線メンバー一同は唖然とした。

「どへ～～ぶっ魂消たこりゃ。お前なんて魔力量なんだよ・・・ナーノ」

「へへ♪」

「間違いない。これは幻のＳＳＳランクだ・・・！」

ユーノが確信した様子でそう口にすると、フォワード陣もそうだがナーノの母親であるなのはやＳＳランクのはやてでさえ身の毛が凍りつく。

「と・・・ＳＳＳ!?」

「ほんまかいな・・・！」

「流石はなのはの息子だよね。こんな魔力量を持ってる子どもなんて、ユーノとなのは以外に作れないよ」

「う・・・その作るっていうのはちょっと恥ずかしいからやめてくれない／／／」

フェイトの言葉を側で聞いていたなのはは湯気を上げながら赤面。
その隣でティアナは先日の戦闘でナーノが披露したコスモライトブレイカーの映像を再確認しながら怪訝そうに尋ねる。

「だけどナーノ。あんな大きな集束砲を撃ってるのに、なんであの時は全然疲れてなかったのよ？」

「そりゃ、鍛え方が違うからじゃないですね。」

「そう言えばナーノは誰に鍛えられた・・・って言わなくても大体想像はつくけど。やっぱり、なのはさんとユーノ先生でしょ？」

すると、スバルの質問を耳にしたナーノは神妙な顔つきで次のように答える。

「・・・〝お母さん〟は入ってないですよ。〟僕はお父さんにだけ教わった〟んです」

「え・・・そうなの？」

「どうしてママからは教わらなかったの？」

不思議そうに一緒に立ち会っていたヴィヴィオが尋ねると、ヴィヴィオの声を聞いて顔をほころばせるナーノはこう答えた。

「ヴィヴィオ姉ちゃんも知ってるでしょ♪お父さんはお母さんの魔法の先生・・・つまりはお父さんから直接教わった方が魔法をより効率よく学べるって訳♪実際、教え方も細かいし丁寧だったから、

基本活字読むのが嫌いな僕でも理解できたんだ♪」

「あれ？店長の子供なのに、活字嫌いなんだ」

「まぁ全てが似る訳ではありませんし」

「似てないと言えばあのブレイクダンス。あれは流石にどうコメントすればいいんだろう？」

「まぁそこはテキトウにということで♪」

ユーノの質問を軽く受け流すナーノだったが、直後今度はなのはから砲撃魔導師として、長年の教導官キャリアからくるナーノの出鱈目な戦闘方に関して厳しい指摘が入る。

「それよりも・・・ナーノのあの射撃の仕方はなんなのかな？私だったらあんな危ないやり方での射撃は認めないよ。踊りながらどうして敵が撃てるの？イチイチそんなことしてたら仕事にならないし、後が続かなくなるでしょ？」

すると、なのはの厳しい指摘をも一切恐れずナーノは素っ気ない態度で答える。

「いいじゃんか別に。撃てればどれも変わりないから」

「変わります！兎に角、明日からはちゃんとした射撃訓練をしてもらうからそのつもりでね」

なのははナーノの戦い方を直そうと考え、そのように言うのだが、当のナーノはそんななのはの言葉を一蹴し耳を疑いかねない言葉を

吐いた。

「やだよ。僕、訓練には参加しないからそのつもりで」

「え？訓練参加しない訳！？」

スバルはなのはの実の息子がなのはの訓練を受けないと聞いた途端、耳を疑ってしまい、他の一同もそれぞれ動揺を見せ始めるとナーノはドアの方へと振り返り外に向かって歩きなあら背中越しに言う。

「お母さんの訓練に参加するなんて、死んでもごめんですよ。疲れるし、面倒くさいし、僕みたいに強くなりたいって熱意も向上心の欠片もない息子相手にする暇があるなら、もっと熱意のある人と向き合うべきです。じゃ、僕は眠いからこの辺で」

ナーノがそう言って部屋から出ようとすると、なのはは慌てて彼を呼び止めようとする。

「ちょ、ちょっと！ナーノ！待ちなさいって！私は一応あなたの母親として、一教導官としてナーノの為を想って・・・！」

「余計なお世話。僕は僕のやり方でやらせてもらうから。引っ込んでてくれない。」

「う・・・・・」

なのははあまりに余所余所しく冷徹な一言を耳にし、何も言い返せなくなってしまった。

と、そんなナーノの言葉を聞いていたシグナムは不敵な笑みを浮か

べながらナーノを模擬戦に付き合わせようと考える。

「では、そんなになのはの訓練が嫌なら明日は私と・・・」

しかし、そう言おうとした直後ナーノは即答する。

「それはもっと御免です。バトルマニアとの戦闘は甘ったるい訓練の次に嫌いですから」

「な！貴様！！それはどういう意味だ！」

「そのままの意味だろ」

顔を赤くして柄にもなく甲高い声を上げるシグナムに冷たい笑みで横から突っ込みを入れる鉄槌の騎士ヴィータ。

ナーノは一同の反応を気にせず部屋の外へと出て行ってしまうと、彼がいなくなってから各々は彼の持つ印象に関してコメントする。

「ナーノ・・・なんか、パパや私には目を向けるに・・・なのはママには――――――」

「一体何なんですかね」

「反抗期って奴か？」

「私はそれとは違う気もするのだが・・・・・・謎だ」

「・・・――――」

ユーノは無言のまま、隣のなのはと顔を合わせナーノの事を考える。

なのはは、ヴィヴィオとは違い実の息子から一方的に突き放されているような寂しい感覚に陥ると、その顔は曇り始めユーノとヴィヴィオはそれを心配した。

その日の夜。

ユーノが事実で週刊フライデーに載せる次回の古代史論文の原稿を書いていると、ユーノスは籠の中で徐にこう言って来た。

「随分と違っていたな」

「何がです？」

「ナーノだ。父親であるお前や姉のヴィヴィオに対しては親しく接するのに、母親のなのはの前では先ほどのような素っ気ない態度をとる。いや・・・余所余所しいという感じもする。」

ユーノはそれを聞くと、論文を切りのいいところで書き終えると、ユーノスと顔を見合わせナーノの事を考える。

「未来でなのはと何かあったんですかね？それが今にも至っているとか」

「可能性はあるな。まぁ、まだ来たばかりだからな。分からない事でいっぱいなのはお互い様と言うのもあるし、日を置いて徐々に理解していくことにしよう」

「そうですね。じゃ、そろそろ寝ましょう。明日の為に」

「ああ。おやすみ」

ユーノは机の電気を消すと、ベッドに潜りこみ、明日に備えて睡眠をとることにした。

機動六課に新しく加わった奇想天外なユーノの息子、ナーノはどうして母親のなのはに対しては素っ気ない、余所余所しい態度でしか臨まないのだろうか？

その隠された秘密は当分先にならないとわからないのである。

◇

〈ナーノＳｉｄｅ〉

４月１１日　午前６時：００分。

機動六課隊舎寮裏。

ちょうど地球では桜が見ごろを迎えようとしている今日この頃、機動六課に居候することになったナーノ・Ｔ・スクライアは朝早くからあることに精神を集中させていた。

「・・・――――」

ナーノの目の前にあるのは無骨な形の障害物が七つ。

それがナーノの周りを囲んでいる形だ。

ナーノは精神を集中させるために目を瞑っており、その手には日本刀の形となった彼の愛機、ライジングハートが握られている。

横薙ぎの風がナーノの髪を撫でた瞬間、ナーノは眼光を放つかの如く勢いで目を開くと、それと同時に手の中の刀を鞘から抜いた。

「は！」

ユーノに負けず劣らずの神速の抜刀術を披露した瞬間、ナーノの目の前の障害物がすべて綺麗に切断され、ナーノは徐に刀を元の鞘へと納めていく。

と、ちょうどそこへランニングを終えて帰ってきた恋次が目撃した。

「自主練とは、結構だな。」

「お？」

「よう。」

ナーノは恋次の存在に気づいて目を向けると、恋次は軽く手を上げてお早うの代わりにようと投げかけると、ナーノは恋次を見てからこう言った。

「赤パインさん。」

「〝恋次〟だ！てめぇ、態と言ってるだろう！？」

「冗談ですよ♪悪意がこもってますけど。」

ナーノがからかった様子でそう言った途端、恋次は瞬く間にナーノの顔面目掛けてめり込みパンチを炸裂し、ナーノは顔を押さえながら悶え苦しみ涙目で謝る。

「すみません・・・本当にすみません・・・／／／」

「次言ったら蛇尾丸の錆にしてやるからなコラ！」

「もう錆にされてる気もするんですけどね・・・僕的には・・・／／／」

ナーノは口は災いの元だということを改めて理解すると、晴れた顔にハンカチを当てながら恋次を向かい合い、恋次は徐に言う。

「それにしても、ナーノ。お前はいっつもこんな事やってるのか？昔の剣豪みたいな真似しやがって。て言うかお前は射撃型じゃなかったのか？」

「僕の真髄は寧ろこっちですよ。あれは専らヤミーと闘うときに都合がいいと言うだけですから。実際、ヤミーに白兵戦で向かうよりも、遠距離攻撃が可能な銃の方が自分のリーチを合わせやすいですしね」

「合理的な見解だな。ユーノの息子だなまさしく・・・」

「選り好みして大事な勝負で取り返しのつかないことになってもたまりませんし、流儀とかに酔って勝ちを逃すこともしません。そんなのは三下のやる事ですから。」

「お前・・・本当に１６か？歳誤魔化してんじゃねぇのかそれ・・・

」

歳不相応に合理的で途方もないぐらいの現実主観を耳にし、恋次は益々このナーノと言う男が一筋縄ではいかないということを理解した。

「あ、そうそう。言い忘れてましたけど、さっき僕がやってたのはお父さんと昔からずっとやってる稽古なんですよ。」

「ユーノとか？」

意外な事を聞かされ、表情を一変させる恋次の姿にナーノは言う。

「何ですかその目は？信じられないって顔してますけど・・・」

「いや・・・やっぱし、未だに実感わかないものだからよつい・・・」

「そのうち慣れてきますって。僕は毎朝これをしないと、腕の感覚が変になっちゃうんですよ。ライジングハートもそうです。」

〈Ｙｅｓ〉

彼の手の中握られた刀剣状態のライジングハートも肯定の言葉を並べる。

恋次はそれを聞くと、具体的に稽古を始めた時期を問いただす。

「何時からやってんだ？」

「初めて刀・・・というか木刀を持ったのは3歳の頃ですから、ちょうどこの13年間ずっとですね。」

「子供が刃物を持っていいのかよ?なのはが怒るぜ。」

「無論、お母さんとヴィヴィオお姉ちゃんには内緒でやってたんですけど。それ以外にも、魔法を使わない戦闘の手段や効果的なダメージの与え方とか、役立ちそうな武術はみんなお父さんから教わりました。」

「するってーと、未来のユーノはお前の父親でありながら実の師匠って訳か。」

「あんまし師匠って言うと実感ないんですけど・・・・・・少なくとも、”僕が唯一超えられない大きすぎる背中”だってことは確かですね。」

「言うじゃねぇか。それ、ユーノに言ったらどんな顔するだろうな。」

「言いふらさないでくださいよ。恥ずかしいですから。」

「へいへい。て言うか、お前ホントになのはの訓練受けないのか?結構あれでいい鍛錬にはなると思うぜ」

恋次もまた、アンゴルモア捜査に協力することになってからルキア達と共になのはの訓練には参加しているが、死神の視点から見てもなのはの訓練は下手な死神のやる訓練よりもずっと為になることは熟知していた。

しかし、それでもナーノは頑なに自分の主張を曲げなかった。

「昨日も言ったじゃないですか。お母さんの訓練を受けるなんて死んでも御免だと。僕はお母さんみたいな甘ったるい訓練を受けるのは、どうも抵抗があるというか・・・長い間実戦ばかりを経験していたものですから――――――アホらしくて」

それを聞いた恋次は、思わずため息をついてから言い返す。

「ガキがナマ言いやがって。俺だって生死を分ける実戦ってのは何百年と経験してるが、それでも戦闘訓練って言うは必要なんじゃないのか？特に俺達みたいなチームはよ」

「確かにそうなのかもしれませんが・・・――」

ナーノは恋次に背中を向けながら、周りに落ちている木材を片付け始める。

すると、少し前を置いてから恋次はナーノに躊躇いがちにこう言って来た。

「ああ・・・こんなこと言って気分悪くするなよ。ひょっとして、自分の才能に自惚れてるんじゃないのだろうな？」

それを耳にした途端、ナーノは即答する。

「それはないです。僕、周りから”才能がある”とかって”天才”って言われると虫唾が走ります。」

「そ・・・そうか・・・」

恋次は帰ってきたナーノの答えを耳にし、それが途方もなく自分のよく知るユーノ・スクライアの思考に似通っていることに言葉を詰まらせる。

そんな恋次に対して、ナーノは更にこう言って来た。

「僕が強さを求めない理由は、一重に人間と言う生き物そのものがこの世で最も弱いものだと認識しているからです。人間は弱いから必死に強さと言ものを得ようともがき苦しむ。だけど僕は弱いことが大前提なら、無理に強くなろうとしなくも弱いままでいいと思っています。ただ、少なくとも目の前で誰か困っていたりとか、自分にとって大切な人を守れるぐらいの力があればそれでいいと」

「・・・――」

話しを終えると、ナーノは木材を全て片付け終えジャージに着替えると、恋次とは入れ替わりに早朝ランニングへと出かける。

「じゃあ、僕はちょっくら走りに行ってきます。」

「あ、ああ」

恋次は走り去っていくナーノの後姿と、上りゆく朝陽を目の辺りにしながら、ナーノと言う人物に関する評価をこう下した。

「ふう～～～全く。なのはとは大違い・・・というか、完全にユーノ似だな。あれは――――――」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

さて、ナーノの出現は今後のヤミーとグリードにどのような影響を与えるのかは、まだ何とも言えないでいるが、一先ず今回のヤミーの生みの親となる人物に関して紹介をしておこう。

ミッドチルダ南部にある抜刀術天瞳流（てんどうりゅう）第４道場。

ここにヤミーの親となってしまう強い欲望を内に秘める者がいた。

「はあああああああ！」

道場内で行われるその親である師範代のミカヤ・シェベル（女性）２０歳。

自分に向かって投擲された大型バスを、居合い抜きだけで真っ二つに切断できるほどの腕前を誇る彼女は現在、門下生を相手に模擬試合を行っていた。

「はっ！」

「ぐあ！」

ミカヤの放つ切れある面を受け、生徒の一人が倒される。

「“水月”！」

「のあ！」

また次の生徒の方も、鳩尾に喰らった彼女の攻撃によって呆気なく

敗れ去る。

「“月輪（つきのわ）”！」

「ぐ！」

そしてまた一人と、彼女の繰り出す天瞳流居合いの前に倒れ伏し、審判が試合の終了を宣言する。

「一本！それまで！」

試合終了の宣言が出されると、師範代ミカヤはアームドデバイス「晴嵐（せいらん）」を鞘に納め、心地よい顔で息を吐く。

「ふう～」

そして、そんな彼女に向き合い首を垂れる敗れた生徒たち。

「「「恐れ入りました、ミカヤ師範代。」」」

「そうか。タシロの今の突きは悪くなかったぞ。攻める際のその呼吸を忘れるな」

「はい！」

「他のものも、あまり行き急ぎ過ぎぬことだ。今度の大会は過去最高数の者がエントリーしてくる。その時も状況に応じて冷静に対処することを念頭にな。」

「「「「「はい！」」」」」

と、そんなミカヤや生徒たちの前にこの道場を任されている天瞳流第４道場師範・マモル・テンドウが現れる。

「おう。やってるようだな」

「テンドウ師範」

「「「お疲れ様です、師範！」」」

生徒たち全員が師範であるテンドウに頭を下げる。

「うむ。みな元気があって何よりだ。ミカヤも済まぬな。」

「いえ。これくらいのことは」

「師範。今度の大会、絶対優勝して見せます！」

「おお。期待しているぞ。」

「ご安心ください、師範。非才のみではありますが、この天瞳流師範代ミカヤ・シェベルにかかれば、全国大会も夢ではありません。大船に乗ったつもりでいてくだされば」

ミカヤは自信に満ちた表情を浮かべてテンドウにそう言うと、そのテンドウの方は複雑な顔を浮かべながらミカヤに次のように言った。

「そのことなんだが・・・ミカヤ。少し話がある。ちょっと、いいか？」

「？」

ミカヤは訝しげな顔を浮かべながらテンドウの後へと着いて行く。

そして、奥の方で聞かされたテンドウからの一言に、思わず耳を疑い声を荒げる。

「次の大会に私を出せない！？どういう事ですか！！」

「・・・・・・」

テンドウは口を閉ざしたまま、ミカヤから顔を逸らすがミカヤはテンドウに詰め寄り動揺を隠し切れない様子で彼に問い質す。

「お答え願います、師範！何故なのです！今度の大会は、過去最大にして最多の者が出場し、その中にはこの次元世界始まって以来の天才、ムサシ・ササキベを筆頭とする地竜館の者が出場するのですぞ！私の参加なくして、天瞳流の勝利はあり得ません！」

すると、テンドウは徐に彼女の手を払いながら次のように言う。

「ミカヤよ。これは非常に悩んだ末に出した結論なのだ。今のお前では、ムサシ・ササキベにも・・・いや詰まる話が剣士として、誰一人に勝つことは不可能だろう。」

「何ですって？」

「ミカヤ。お前は確かに強い。この天瞳流の師範代として門下の者と練磨絶やさず稽古に励み、よくぞここまで成長してくれた。それは実に嬉しい限りだ。が、その成長の中でお前は剣士にとって大事

なものを落としてきてしまった。」

「大事なもの？」

「その大事なものとは何だと思う？剣士にとって大事なもの――――」

テンドウは至って真剣な眼差しを浮かべながらミカヤと向かい合う。

ミカヤはその問いに対して、暫く考えたから徐に口にする。

「それは・・・――――それはやはり、戦いにおける覚悟と何ものを恐れぬ屈強な精神力ではないかと」

「成程――――――その答えでは、やはりお前を出場させるわけにはいかぬよ」

「！」

「暫く考えてみろ。その答えが分からぬ以上、当分の間稽古への参加も禁ずる」

テンドウは痛烈にミカヤにそう斬り捨てると、道場の方へと戻り始め、ミカヤは呆然とした状態から一変声を上げる。

「なっ・・・師範！待ってください！」

ミカヤの声を聞くと、テンドウは一度足を止め背を向けたまま彼女に言う。

「今一度、曇りなき眼で己の剣を見つめよ。欠けている何かが見えてくるはずだ」

それだけを言うと、テンドウはその場から立ち去って行き、残されたミカヤは刀を強く握りしめながら悔しそうな表情を浮かべた。

「・・・く」

稽古が終わったミカヤは師範から向けられた言葉の意味を考えながら、女子トイレの洗面所で顔を洗っていた。

「（何故だ・・・何故師範は私を・・・！？）」

『お前は剣士にとって大事なものを落としてきてしまった。』

「（剣士にとって大事なものだと・・・私に何が足りぬというのだ？私はこれまで、幾千幾万という敵と戦い、この手で勝利を掴みとってきた。怖いものなどありはしない。なのに何故だ・・・何故あの方は・・・！）」

そう考えると、益々ミカヤはテンドウの言葉の意味が分からなくなって気、挙句彼女の辿り着いた答え、もとい欲望は至ってシンプルなものだった。

「（絶対に負けたくない・・・もっと強くなりたい。強くなれば、私は・・・――――）」

と、そう思った直後目の前の鏡の後ろに不意に映って来た緑のジャケットに身を包んだオールバックの男。

「ふん」

「！」

ミカヤはその男の姿を目の当たりにし、慌てて後ろへと振り返った。

が、後ろには男の姿はおろか誰一人いない様子で、ミカヤはそのことを不思議に思いながら訝しげな表情を浮かべる。

「気のせいか・・・」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

静かにグリードの一体、ウヴァがミッドチルダを主軸に欲望の渦を広げようと画策しているその頃、機動六課でデスクワークに勤しんでいたユーノは恋次から朝のナーノの様子を聞かされていた。

「で、結局ナーノは訓練には出ずに一人で？」

「ああ・・・あれは今までとは違うタイプだな。まるで世の中を達観してると言うか、考え方がお前そっくりと言うか・・・ま、息子なんだから無理もないか」

「はは。まだ慣れませんけど・・・どうやらナーノはリセットの利く戦いとかはお気に召さないようなんです。他のみんなみたいに、強くないたいと言う意志も欲望もない。ヴィヴィオがなのはに影響されているのに対して、ナーノはそう言うことに関しては冷めてるんですね」

「それにしては冷めすぎだったけどな」

恋次は、朝のナーノとの会話を今一度振り返りながら、ナーノがいかに現実主観に基づいたリアリストでありながら、途方もないぐらいの大人びた性格が垣間見れる箇所に戸惑いを覚えた。

ユーノはそんな恋次の様子を見ながら、ユーノスと共に苦笑いを浮かべる。

すると、そんな三人・・・というよりユーノ目当てにアドバイザー室の中へと入ってきたのはマリアであった。

「ユーノ様？」

「あれ？小鳥遊さん。どうしたんです？」

「うふふ♪ユーノ様、これをどうぞ♪」

「？」

マリアは笑顔を浮かべながらユーノに茶色の小包を手渡し、それを見た瞬間冗談ぽくこう言ってみた。

「何だ？ひょっとして爆弾か！」

「ち、違いますわ！恋次隊長も人が悪いですわよ！」

「へへ冗談だって」

恋次の冗談とは言え、マリアは機嫌を損ねて頬を膨らます。

ユーノは徐に小包の中を開けてみると、そこから出て来たのは意外なものだった。

「お・これって」

「ほう・・・どういう風の吹き回しだ？」

恋次も思わずその中身の代物、マリアが作成した特製の写真立てを見ながら彼女に目を向けると、マリアは微笑みながらユーノに言う。

「大変遅くなってしまいましたが、この間のお礼です」

「え？」

「お礼だと？」

「ほら、この間助けてもらった時のですわ♪」

マリアがそう言うと、ユーノとユーノスは彼女がグリードの一人であるカザリに拉致され息の根を止められそうになったところの場面を思い出す。

『バイバイ』

『キャー！！』

カザリが起こした竜巻にマリアが巻き込まれそうになった直後、颯爽と飛んできて彼女を守ったユーノとユーノスの二人。

『小鳥遊さん。もう大丈夫です』

ユーノはそれを思い出すと、態々お礼をするほどのものでもないとばかりに言う。

「あんの気にしなくていいんですよ。でも、ありがとうございます。」

「大したものではありませんから♪あと・・・これはユーノスさんにも」

「俺にもか？」

「助けてくれたのはあなたもですわ。どうぞ♪」

マリアは笑顔を振りまきながら、ユーノスの寝床である網籠に合うぐらいの大きさをしたクッションをプレゼントする。

ユーノスはそれに一瞬驚いた顔を浮かべるが、直ぐに柔らかい笑みを浮かべマリアにお礼の言葉を言う。

「・・・ああ。ありがとうな」

「うふふ」

マリアは、短い期間ながらもこの機動六課で紡いだユーノとその仲間との絆を確かに実感することが出来たのであった。

やがて昼食の時間がやって来た。

局員の多くが食堂で賑わいを見せながら胃の中に食料を入れていく中で、スクライア商店の三人と白鳥はひとつのテーブルに固まって食事をとって居た。

「あん！」

ただ、その食事の最中でもこの男・・・桃谷鬼太郎だけは不機嫌そうにホットドックを口に入れこんな風に呟いた。

「たく・・・あの小僧め。全く以て気に入らねー！」

そう。

鬼太郎はナーノがこの機動六課に居候することになってから朝昼晩と彼に舐められている様子で、些細な事で起こるナーノとのトラブルは確実に鬼太郎のストレスの原因となっていた。

「先輩大分舐められてるからね、ナーノに」

「いやはや。これは随分と滑稽であるな」

「じゃかしい！くそ・・・何とかしてガツンと一発懲らしめる方法はないか・・・」

そう思いながら、鬼太郎は一度振り返ると、ヴァイスらと共に昼食のラーメンにありつこうとしているナーノを一瞥する。

「いただきま～す♪」

ナーノは割り箸を割ってから、唐辛子を加えてから勢いよくラーメンを啜り出す。

そんなナーノの食事の様子を見ながら、鬼太郎の頭に悪魔の囁きが聞こえてきた。

「・・・へへ。おい、亀。熊。俺すんごくいい事思いついたんだけどよ」

「何だそれは？」

「ちょっと耳貸せ」

鬼太郎が三人の耳元に考え付いたことを話してやると、聞いていた浦太郎達三人は一様に大声を上げた。

「「「えーーー！！」」」

「小僧・・・たっぷりと楽しませてもらうぜ」

鬼太郎は悪意に満ちた表情で徐に立ち上がると、ナーノの方へと歩きだし懐から「下剤」と書かれた瓶をばれないように取り出した。

◇

〈ミカヤＳｉｄｅ〉

ナーノに鬼太郎の恐怖が襲い掛かろうとしている同時刻、天瞳流道場のミカヤは一人自主練習に精を出し、全身から汗を拭き出しながら素振りを続け、心の中で言い聞かせるようにつぶやく。

「（強くなる・・・もっと。そうすれば・・・――――――）」

そう思った時だ。

不意に背後から感じ取った気配に彼女が振り返ると、唐突に現れた先ほどミカヤが目撃した緑のジャケットにオールバックの男。

「？」

「・・・――」

男は・・・人間体のウヴァは自分のイメージカラーの緑色の布を垂れ下げながらミカヤの顔を凝視し、ミカヤも不審に思いウヴァに尋ねる。

「何だ・・・私に何の用だ？」

そう聞かれると、ウヴァは徐にセルメダルを取り出しお決まりの台詞を吐いた。

「その欲望・・・解放しろ」

ウヴァはその言葉の直後に本来の姿へと戻り、ミカヤは異形の姿となったウヴァの姿に思わず絶句した。

「なっ！」

「ほら」

そして、ウヴァは彼女の額に現れた投入口にセルメダルを投下し、ミカヤは体の違和感に険しい表情を浮かべる。

「うっ」

すると、ミカヤの体から現れる彼女の欲望を具現化した権化、白ヤミー。

ユーノスとユーノは遠く離れた六課の隊舎からそれを感じとり、仕事をしながら摘まんでいたサンドイッチに手を伸ばそうとした時点で表情を一変させる。

「！ヤミーだ」

「ですね。行きましょう」

ユーノはユーノスを肩に乗せると、残りのサンドイッチを一気に詰め込み、のどに詰まらせた様子で自分の胸を叩きながら現地へと急行する。

「ぐあ」

ユーノ達が道場へと向かってから暫くして、ミカヤの欲望から誕生した白ヤミーは道場の中へと侵入し、門下生を無差別に襲い始めた。

白ヤミーに立ち向かおうとし倒れる生徒の姿に胸が痛む中、師範であるテンドウは白ヤミーに怯える生徒を外へと逃がそうとする。

「みんな早く逃げて！」

生徒たちはテンドウの言葉を耳にし、一目散に逃げていく。

逃げて行った生徒たちと入れ違いに為る様に、その場に駆けつけてきたミカヤ。

「！師範！」

ミカヤは白ヤミーに木刀を構え、険しい表情を浮かべるテンドウの姿を目の辺りにすると、ちょうど道場に到着したユーノが白ヤミーの姿を発見し、血相を変えた。

「あ！」

ユーノは襲い掛かろうとする白ヤミーからテンドウたちを守ろうとし、果敢に立ち向かっていった。

「やめろ！」

ユーノは白ヤミーの力に圧されながらも、どうにか外へと誘導することに成功し、また一方でミカヤは初めて目の当たりにした次元世界最強の男、ユーノ・スクライアの姿に目を丸くした。

「あれは・・・まさか・・・ユーノ・スクライア殿？」

そんな事を言っている間に、外に向かったユーノは白ヤミーと交戦を続けていた。

ユーノスは瓦の上に乗りながら成長途中の白ヤミーの姿に多少の安堵を覚える。

「ふう。まだ成長途中で良かった。」

「ユーノス元帥。結界印！」

「成長しないうちにとっと倒せ。それが一番いい」

ユーノスは早速結界印を取り出すと、絶妙な投擲能力でユーノの手中に収めると、ユーノはスレイヤーモードへと変身。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

変身したユーノは鈍重な動きの白ヤミーの体に拳を叩きこむ。

が、その白ヤミーの体は思っていた以上に強固なものであったため、思わず手を押さえる。

「あ、イタタ・・・」

気を取り直して今度は蹴り技と一緒に白ヤミーに叩き込むが、白ヤミーの体の硬さは並みのものではなかった。

「あ、イッター！あいつの体、めちゃくちゃ硬い！」

ユーノ自身もここまで体の硬い体のヤミーはバイソンヤミー以来であったため、なかなかに難儀していると、徐に目の前で倒れていた白ヤミーが譫言の様に言い始める。

「もっと・・」

「？」

「もっと強くなる・・・そうすれば！」

ミカヤの望んだ欲望を口にしながらヤミーが起き上がり、ユーノは構えを取る。

「はっ」

と、そこへ予想外の人物が乱入してきた。

「止めろっ！」

ユーノと白ヤミーの戦闘に乱入してきたのは、そのヤミーを作り出した張本人であるミカヤ・シェベルであり、ミカヤは晴嵐を取り出すと白ヤミー目掛けて水月を叩きこむ。

「水月！」

だが白ヤミーは、彼女の攻撃を容易に受け止めてしまった。

「！？」

驚愕するミカヤとユーノを前に、白ヤミーは邪魔なミカヤを勢いよく放り投げる。

「ふん！」

「うわああ！」

「あっ！」

ミカヤは白ヤミーに力負けしてしまうと、そのまま気を失ってしまい、ユーノは慌てて彼女の元へと近づいて行った。

「君！大丈夫？大丈夫！？」

いくら体を揺すっても起きる気配のない脳震盪を起こし完全に気を失った様子のミカヤ。

「う・・・おおお！」

白ヤミーはその間に、唸り声を上げながら道場から逃亡すると、ユーノスは素早くユーノが作成したタカカンドロイドを取り出し追跡を命じる。

「ヤミーを追え」

タカカンは逃げて行ったヤミーを追って飛び去って行く。

ユーノスはユーノ達の方を気に掛けながら、もう一人とっくにこの場に来ていそうな竜神の寵児こと、ユーノの息子のナーノがその場に姿を見せていないことに訝しげな表情を浮かべる。

「こんな時に、ナーノはどうしたのだ？」

では、その肝心のナーノは今どうしていのかと言えば・・・

「うおおおお／／／／／／」

昼に食べたラーメンに、鬼太郎がこっそりと下剤を仕込んでいたことに気づいていなかったことが敗因となってしまい、ヤミーが出現しているにもかかわらず彼はこうして一人トイレの中で別の戦いを繰り広げていた。

「モモタロスの奴・・・ラーメンに変な物入れやがって!!!」

子を産む苦しみにも似た激しい腹痛と戦いながら鬼太郎の事を激しく憎むナーノ。

そんなナーノの事は取り敢えず頭に入れていないユーノは防護服を解除すると、気を失ったままのミカヤに声をかけ続けた。

「ちょっと。大丈夫?しっかり!」

ユーノスは徐に近づきユーノに告げる。

「彼女がヤミーの親だ」

「えっ?」

ユーノはそれを聞かされると、まじまじと意識の無いミカヤを見つめ、その後すぐに彼女の近くの病院へと運び手当てを受けさせた。

「僕はこれで」

病院スタッフにあとの事を任せたユーノは逃げて行ったヤミーの事考えながら外へ出ようとすると、そんなユーノを足止めしてきたのは意識が戻ったばかりのミカヤだった。

「あの・・・！」

「？」

ミカヤはユーノが自分に顔を向けてくると、徐に近づき恐る恐る尋ねた。

「もしかして、ユーノ・スクライア殿ですか？次元最強と言われる」

「え・・・ああ・・・別に次元世界最強はどうでもいいけど、確かに僕がユーノ・スクライア」

「やはりそうでしたか。私は天瞳流道場の師範代を務めるミカヤ・シェベルと言うものです」

「ミカヤ・・・もしかしてオットーたちが言ってた『廃車斬り』の？」

ユーノも思い出したように知り合いのナンバーズから聞いたミカヤの事を思い出しそう言うと、ミカヤは気恥ずかしそうに返事をする。

「ご存知でしたか。あなたに比べれば、あんなものは大したことではないですよ」

「ははは・・・十分大したことだと思うけどね」

「この度は、助けて頂きありがとうございました」

「わざわざいいのに。そっちこそ大丈夫なのかい？」

「はい。あの・・・・・・」

「ん」

「さっきの怪物・・・私の欲望から生まれたと・・・」

ミカヤが神妙な顔つきでユーノに尋ねると、ユーノは真剣な顔つきで正直に首を振る。

「うん」

「それは、もっと強くなりたいって思ったからですよね？私がそう思ったから・・・そうですよね？」

「もとはそうだけど、道場の人を襲ったのはもう君の所為じゃないよ。怪物は欲望を暴走させるんだから」

「暴走・・・」

「そ。いくらインターミドルに何度も出場していて、車を真っ二つにすることが出来たとしても、ヤミーに致命傷を与えることが出来るのは僕と僕の息子だけなんだ。だから、もうあんな無茶しないでね？」

「はい・・・本当にすみませんでした」

ユーノと別れたミカヤは、深刻な表情を浮かべながら長椅子の上へと腰をおろし、白ヤミーが誕生した際のウヴァとの会話を思い出す。

『これがお前の欲望だ。お前が心から欲しいものを手に入れる』

『なっ・・・・！』

『もっと・・・強くなる・・・そうすれば・・・・！』

自分の欲望が生んでしまった白ヤミーと、その欲望の為に無関係な大事な道場の生徒たちを傷つけてしまったことに自責の念を感じるミカヤは顔を手で覆い隠す。

「何故だ・・・・・・何故私は・・・！剣士に恐怖はいらぬ・・・・・・必要なのは立ち向かう度胸と何ものをも恐れぬ力・・・・・・それなのに何故・・・・！」

ミカヤは己の弱さと脆さを酷く痛感しながらそう口にするが、それを隠れてこっそりと盗み聞きをしていたのはナーノであった。

ナーノは壁に腰かけながら彼女の心境を考えながら深いため息をつく。

「ふう～～～何にもわかってないんだよな。あの人も・・・お父さん以外の他のみんなも・・・――――」

意味深長な言葉を呟くナーノ。

だが、そんな時にまたしても例の腹痛がナーノを襲う。

「うおおおおおおおお！！！またお腹が！！！」

少年ナーノの苦悩は始まったばかりなのかもしれない――――――

◇

〈リリスＳｉｄｅ〉

その頃、ヤミー出現に乗じてミッドチルダに出て来た破面魔導虚のリリスはと言うと、カリ・ユガから渡されたナーノのデータを参照しながら徐に呟いた。

「竜神の寵児――――――」

そう呟くリリスは、このデータを受け取る直後のカリとの会話を思い返す。

『ユーノ・スクライアの息子！』

『ええ。』

人形に話しかけるようにそう答えるカリ。

リリスは拳を強く握りしめながら愕然とした表情を浮かべる。

『そんな・・・まさか・・・！』

『私の予言が信用できませんかリリス君？』

『いえ・・・そう言う訳じゃ・・・ただ、どうして未来から実の息子が？』

『彼を助けるためですよ。それが、竜神の寵児がこの時代にやって

来、彼が請け負った使命なのですから。いずれにしても早急に対応を取る必要が出てきました。彼をユーノ・スクライアから遠ざけない事には、我々の目的は達成できないでしょう』

『そんな・・・――』

リリスはその事を念頭に置いた上で、今回ユーノ達の監視の傍らナーノの調査に乗り出すのであったが、内心非常に不安で一杯であった。

「（竜神の寵児こと、ユーノ・スクライアの息子。ナーノ・T・スクライア・・・・・確かに、あんなブランク・オブ・デザイアでも、食えない相手であることに変わりない。それが二人にも増えるってのはちょっと厄介かも。私が何とかするしかないのかしらね――――）」

リリスはそう考えると、身体を霧状にして霧散するとナーノの調査の為に市街地へと乗り出していくのであった。

一方その頃、道場から逃げ出して行った白ヤミーは市街地へと出没すると、別の剣道場に通う生徒を発見すると、見境なく襲い掛かる。

「「「キャー！！」」」

「強く・・・なる・・・！！」

ミカヤの欲望を言いながら立て続けに何人もの相手を襲撃する白ヤミー。

「げっほげっほ！」

「ぐ・・・」

「強く・・・もっと！！」

「ぐあああ！」

白ヤミーは強くなりたいという欲望のもと、セルメダルの枚数を加速度的に増やしていくと、いよいよその姿を変えて白ヤミーは硬い外骨格が特徴のカブトヤミーへと成長を遂げる。

カブトヤミーが成長を遂げたところを発見したタカカンは、この事をユーノスに伝え、ユーノスはバッタカンをユーノの元へと向かわせこの事を伝えた。

『ユーノ！ユーノ！ヤミーがいたぞ！』

「えっ？りょ、了解！」

ユーノは急いでカブトヤミーの出現したポイントへと急行。

カブトヤミーはその後場所を転々と移動すると、立体駐車場の方へと出没し、何も知らずに目の前から走ってくる車の前に飛び出した。

「うわー！」

思わず急ブレーキを踏む運転手だが、カブトヤミーは仁王立ちしたまま動こうとしなかった。

と、そこへグリーンラベルに乗って急行してきたユーノがカブトヤ

ミー目掛けて体当たりを仕掛け、カブトヤミーはその勢いに圧されて吹っ飛んだ。

ユーノはメットを外すと、運転手に促す。

「そのまま走って！早く！」

「はっ・・・はい！」

運転手はユーノに言われた通りに、アクセル全開で走り出す。「

カブトヤミーはユーノの方に向かい合うと、そんなユーノの事をある人物が口にする様にこの名前で言って来た。

「・・・オーズ・・・」

それを聞いたユーノは苦い顔を浮かべ、間違えた名前を訂正する。

「違う。僕はユーノ・スクライアだ！」

するとその時、タイミングよくタカカンに乗って飛んで来たユーノスがその状態からユーノに向かって結界印を投げつける。

「ユーノ！ゴリラコアの力を使え！」

ユーノスから結界印を受け取ったユーノはほくそ笑み、納得の顔を浮かべる。

「成程ね。はい！」

カブトヤミーと向き合ったユーノは結界印の力と一緒にゴリラコアの力を解放。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ　Ｓｌａｙｅｒ　ｇａｕｎｔｌｅｔ〉

スレイヤーモードに変身すると同時に両腕部に装着されるガントレット上の武器、ゴリバゴーン。

「はっ！」

ユーノはゴリバゴーンを付随した状態でバイクを直進させ、カブトヤミーに体当たりを仕掛ける。

「ぐお！」

カブトヤミーが後ろに吹き飛び徐に起き上がると、ユーノはバイクから降りてゴリバゴーンを使った攻撃でカブトヤミーの硬い外骨格を攻撃する。

「はっ！はあ！」

カブトヤミーはそれなりにダメージを受けると、ユーノもまたその確かな攻撃性能に確信を持った。

「お前の硬さには、これが効くかも！」

ユーノはカブトヤミーに狙いを定めると、怒涛の高速スパイクを叩き込み、容赦のないスパークリングを叩きこんでいく。

で、ユーノがこうしてカブトヤミーと戦闘を繰り広げている間、彼の息子のナーノは何をしているのかと言えば、今だ終息を見せない激しい腹痛に悩まされトイレで格闘を続けていた。

「うおおおおおおおお!!!!」

男子トイレから聞こえてくるナーノの唸り声を聞きながら、焦燥感でいっぱいの前線メンバーは傍らで両腕を回すゴリラカンを一瞥してからナーノに言う。

「ナーノ!早くしなさいよ!」

「ユーノが戦ってるんだよ・・・!」

「そうは言っても・・・うおおおおおおおお!!!!誰かさんが便秘薬（一週間の便秘も忽ち吹っ飛ぶ、しかも十倍の量）をラーメンに入れるから!!!!!!!!!!!!」

それを聞くと、なのははレイジングハートを起動させ、殺意に溢れた笑顔を鬼太郎に振りまきながらこう言って来た。

「鬼太郎さん・・・ナーノが行けなくてユーノ君にもしものことがあったらどうするんですか。頭冷やしましょうか?」

「止めろ!!!俺は悪くネェ!!」

必死に弁解を求める鬼太郎であったが、なのはがこうなった以上もう誰にも止めることは出来ないことは分り切っていたのか、全員は一目散にその場から回避していき、鬼太郎はあとでなのはの砲撃の

餌食となってしまうのであった。

六課でのそのようなやり取りが行われている間、ユーノは引き続きカブトヤミーと交戦を続けており、ゴリラコアの力を使った効果的な攻撃でカブトヤミーを追い詰めていたのだが、不意にカブトヤミーの胸元が光はじめ呻り声を上げるカブトヤミー。

「ぐ・・・ぐううう！」

「？」

カブトヤミーの様子に気づいたユーノスは眉間に皺を寄せる。

「は！」

ユーノはその事に気づかないまま一気に畳み掛けようとするが、ユーノスはカブトヤミーの事が気にかかり、一旦ユーノを呼び止める。

「ユーノ！」

「？！」

「気をつけろ。様子がおかしい」

「え」

ユーノはそう言われると、カブトヤミーの方へと振り返る。

カブトヤミーは胸の光を強くしていくと、譫言の様にミカヤの欲望を口にする。

「もっと・・・強く！そうすれば・・・！」

だがこの時、病院の方に残っていたミカヤはある重大な事に気づいていた。

そう・・・あの時”自分が望んだ欲望は強さではなかった”ということに。

「違う・・・私が心の底で思っていたのは・・・本当は・・・」

ミカヤは凍りついた表情で自分が望んだ真の欲望を思い浮かべると、それに乗じてユーノと戦闘を繰り広げていたカブトヤミーの様子が急変し、カブトヤミーの身体が光り出す。

「「！」」

目を凝らしてその様子を窺うユーノとユーノス。

「ぐうう・・・おおおお！」

カブトヤミーは呻り声を上げながら自分の体より出てくるもう一つの実体と分離すると、その分離して出現したもう一種のヤミー、クワガタヤミーはミカヤの芯の欲望を端的に表す言葉を口にする。

「壊す！――――――全部めちゃくちゃに！」

ユーノとユーノスは想定外の出来事に開いた口が塞がらなかった。

「おおっ！」

「まさか！」

驚愕する二人を見ながら、カブトヤミーと出現したクワガタヤミーは二体掛かりで襲撃を掛ける。

「壊す」

二体がユーノに向かって来ると、ユーノは戸惑いを見せながらクワガタヤミーと交戦を始め、ユーノスは自分でも予想だにしていなかった出来事にどう対処をしたらよいか分からなくなっていた。

そして、状況が著しい変化を迎えた丁度その時、六課のトイレで戦いを続けていたナーノが漸くその戦いに勝利し、トイレの中から汗だくの状態で現れた。

「は、は、は、は、は、は・・・やっと収まった・・・！」

「だ、大丈夫なの？汗びっしょりじゃない！？」

「これぐらいどうってこと・・・さて・・・行かないと！」

ナーノはフラフラの足取りのまま、ユーノ達を助けに外へと向かう。

前線メンバーはそんなナーノの事を心配しながら呆然と立ち尽くす。

「い、行ってらっしゃい・・・」

「大丈夫でしょうか？」

「ピーチに比べればどうってことないであろう」

白鳥がそう言うと、その場にいた前線メンバーはなのはの砲撃で真っ黒になった消す済みのような鬼太郎の姿に哀れみを抱く。

「う・・・・・」

さて、ナーノが現場へと急行している間、不意に出現したもう一体のクワガタヤミーと戦闘を繰り広げていたユーノは先ほどとは立場が逆転してしまい、二体のヤミーの力に圧倒されていた。

「ぐああ！」

壁を破壊するクワガタヤミーの力に圧されながら、ユーノはゴリバゴーンで対抗する。

その後ろからカブトヤミーが徐に近づいて来、クワガタヤミーと協力してユーノを畳み掛け、ユーノスは柱の陰からこの不可解な現象に頭を悩ませる。

「なんで分離したんだ？こんなの今まで・・・・・！」

と、その時ユーノスの元にカブトヤミーが近づき彼に狙いを定めた。

「ぐおお！」

「ち」

ユーノスは咄嗟に防御を展開してクワガタヤミーの攻撃を逸らし、

小さなその姿でありながら体格差のあるクワガタヤミーと戦闘を繰り広げる。

その横ではユーノがカブトヤミーと交戦中。

彼ら二人が必死で戦っていることを察していたナーノは、ライドベンダーをアクセル全開で走らせユーノの事を気に掛ける。

「（待ってて、お父さん。今助けるから）」

ナーノがライドベンダーを急加速させ、道路を走り抜けていく様子を偶然にもすれ違いざまに目撃した破面魔導虚リリスはナーノの姿を見るなり目の色を変えた。

「あれは・・・！」

リリスは踵を返すと、急いでナーノの事を追いかけていく。

「「ぐあああ！」」

その間に、ユーノとユーノスは共に二体のヤミーの力の前に圧倒されていた。

カブトヤミーとクワガタヤミーは徐に二人に近づいてくると、ユーノは傷ついた体を起こすと果敢に立ち向かっていく。

「うらあああああ！」

傷つきながらも決して諦めようとはしないユーノの勇姿を見ながら、ユーノスは未だ到着する気配のないナーノの事を気に掛ける。

「この状況・・・ナーノは一体何をしている!?」

そう考えた次の瞬間・・・軽快なヒップホップダンスが二人の耳に飛び込んできた。

ユーノとユーノスがそのダンスに耳を傾け、目の前を振り向くと、自分たちに向かって近づいてくるバックダンサーに交じって、竜神の寵児の異名をとるユーノの息子、ナーノがいつもの調子を取り戻して二人の前に現れた。

「ナーノ・・・」

ナーノは最後に綺麗な一回転ジャンプを披露し、ほくそ笑んでユーノ達を見つめると、二体のヤミーと交戦中だったユーノは少々ご立腹な様子でナーノに言葉をぶつける。

「ナーノ!一体何やってたんだよ!?」

「ごめんごめん♪ちょっとお腹壊してて♪大丈夫。今までの分はちゃんと取り返すから」

「それならいいけど。それよりこの状況分かる?」

「うん。分離ヤミーとは珍しいね。でも、二人でやればどうにかなるよ」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ〉

ナーノはバックル上のライジングハートを腰に巻きつけると、目の

前のカブトヤミーとクワガタヤミーを見据えて呟く。

「ちょうど刈入れ時って感じか。よし・・・ライジングハート」

〈Ｇｅｔ　ｓｅｔ〉

ナーノは準備を整えると、軽快な待機音を鳴らしてからパスを翳して変身する。

「変身♪」

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

ナーノのフリーエネルギーが細かな粒子状のものとなって体に装着されていくと、ナーノは紫を基調とする重厚な鎧へと身を包み、最後に龍を模した仮面を装着し変身完了となる。

「よし！」

カブトヤミーが変身を終えたナーノの方に振り返ると、ナーノは得意のステップを利かせながら徐に言う。

「お前邪魔。消してもいい？」

そう言うとナーノはカブトヤミーに接近し、無駄のない予想のつかない動きでカブトヤミーの攻撃を躱して一方的な格闘戦へと持ち込みながら、銃を組み立てていき、装備が鑑賞すると銃を構えてお決まりの台詞を吐いた。

「答えは聞かないけど！」

〈Ｂａｒｒｅｌ　ｓｈｏｔ〉

ナーノは至近距離からカブトヤミーに銃口を向けると、紫色に輝く弾丸を叩きこむ。

「オラっ！」

「ぐあああ！」

カブトヤミーはナーノの銃弾を受けると盛大に吹っ飛んだ。

そして、その後もナーノは陽気に踊りながら、なのはの言う射撃型の理念を無視した自己流の戦い方でカブトヤミーを翻弄する。

「へへ♪ホラホラ！」

「がああ！」

全く予想のつかない彼の攻撃に防戦一方のカブトヤミー。

ナーノは変幻自在な動きとそれを可能にする驚異の身体能力と研ぎ澄まされたリズム感覚でカブトヤミーを追いこんでいくと、クワガタヤミーと交戦中のユーノとユーノスは唖然とする。

「末恐ろしいな・・・この状況で何ひとつ動揺していない・・・！」

「寧ろ楽しむぐらいの心意気が、ナーノの強さの秘訣かもしれませんね」

そんな二人の言葉を聞くと、ナーノはカブトヤミーと距離を取りながら言う。

「でも実戦であることは変わらないよ。生きるか死ぬか・・・だから模擬戦なんて嫌いなんだ」

「はは。僕と同じ考え方だ・・・」

自分の思考と非常に似通った未来の息子の言葉に苦笑いを浮かべるユーノ。

疲労困憊のカブトヤミーの姿を一瞥し、今度はクワガタヤミーが攻撃を仕掛ける。

「めちゃくちゃに！」

ナーノはステップを利かせた動きでクワガタヤミーを翻弄すると、ユーノとユーノスに対して言葉を投げかける。

「お父さん、ユーノス元帥！」

「「？！」」

「危ないからちょっと退いてて！」

そう言うと、ナーノは訝しげな顔を浮かべる二人を余所に特殊カートリッジを装填し、マガジンから送られる魔力エネルギーをライジングハートに供給させると、銃口を二体のヤミーに向けてから驚異の魔法砲撃を発動する。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｍｅｔｒａ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

「『無限装弾神聖砲（ディバイン・メトラバスター）』」

ナーノはライジングハートからその莫大な魔力量から可能とする母親のなのはのそれを遥かに上回る超高位技能、無数のディバインバスターを瞬く間に連射し、カブトヤミーとクワガタヤミーを打ち抜いて行く。

「「うわあああああ！」」

近くにいたユーノとユーノスはあまりに場違いな砲撃の嵐に驚愕しながらその場から離れ、ナーノはその間に容赦のない無数のディバインバスターを連射し続ける。

「オラオラオラオラオラ！！」

「「があああああ！」」

絶大なナーノの攻撃に圧倒される二体のヤミー。

そんなナーノの末恐ろしい技を前にし、ユーノとユーノスは冷や汗をかく。

「なんなのだあの技は・・・！？」

「ディバインスターを際限なく飛ばすなんてこと・・・なのはでも無理ですよ！」

ユーノがそう言った直後、丁度カートリッジの弾丸が切れると、ナ

ーノは更に替えのマガジンを取出しライジングハートへと装填。

「まだまだ行くよ！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｌｏａｄ〉

ナーノはそう言うと、再び無数のディバインバスターの砲撃をヤミーに対して連射する。

「それそれそれそれ！」

二体のヤミーは圧倒的な力の前に防戦一方だったが、ユーノもまたこのナーノの魔力砲撃に嵐を前に思うように動けず、そのとっばちりを受けていた。

「ちょっと、ナーノ！激しすぎ！」

「大丈夫！これでも威力は2割で留めてるから！」

それを耳にすると、ユーノは表情を凍りつかせる。

「これで2割・・・・・全く以て末恐ろしい・・・／／／」

なのはをも超える魔力量と唯我独尊に突き進む息子の脅威の実力に絶句するユーノだったが、ユーノスはそんな彼に言葉を投げかける。

「ユーノ！今のうちに畳み掛けるんだ！」

「はい。ナーノ、今ならヤミーを！」

「オッケー♪止め行くよ！」

ナーノはユーノとタイミングを合わせると、カブトヤミーとクワガタヤミーに狙いを定めるが、途中でクワガタヤミーだけが戦線を離脱するがチェーンバインドでユーノがカブトヤミーを足止めすると、ユーノは防護服の中のタカ・トラ・バッタの三種のコアの力を引き出し上空へと飛び上がる。

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｋｉｃｋ〉

「はあああああ・・・・は！」

ナーノもまた、パスを取出し魔力エネルギーをチャージする。

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

「はあああああああ！！」

ドラゴンジャムから供給されるエネルギーと共に魔力弾を銃口に形成するナーノは、動けない様子のカブトヤミーに狙いを定める。

〈Ｌｏｃｋ　ｏｎ〉

そして、ユーノが空中に発生したスレイヤーオーラのリングを潜り抜けて両足蹴りをカブトヤミーに叩き込み、それとほぼ同時にナーノがワイルドショットを撃ち込んだ。

「はーーーっ！セイヤー！！」

「ワイルドショット！」

カブトヤミーは二人の攻撃を受けると、爆発を起こしてセルメダルとなった飛散した。

ユーノスは無事にカブトヤミーを倒すことに成功し、安どのため息をつく。

「ふう。やったか」

と、その時ナーノが飛散したメダルを見ると、何かを思い出したようにこう言った。

「あ、メダルだ。拾わなきゃ」

「え？」

訝しげな顔を浮かべるユーノだったが、直後ナーノは亜空間よりメダルタンクを取り出した。

「よっと・・・」

そして、そのメダルタンクを傾けると、その瞬間飛散したセルメダルが一様にメダルタンクの中へと吸い込まれていき、ユーノとユーノスはその光景に目を丸くした。

「「！」」

全てのセルメダルがメダルタンクに収容されると、ナーノは仮面の下で笑みを浮かべる。

「はい。収拾完了♪」

「お前・・・」

ユーノスは奇妙な行動をとるナーノを見つめると、ナーノは徐に変身を解除し安どのため息をつく。

「ふう」

ユーノも変身を解くと、そんなナーノの行動に関して質問する。

「ナーノ。なんでまたセルメダルを？まさかこれも・・・！？」

「うん。僕の使命の一つ。”セルメダル集め”。この間はセルメダルごとＡＭ体になったから拾えなかったけど」

「何故セルメダルを？」

「うんと・・・まぁ・・・正直、こんなのに僕も興味はないんだけどさ。お父さんを助けるのにはどうしても必要らしいんだよね。これが・・・――」

「僕を？」

「頭の中に相変わらずやることが入って来るんだけど、そう言う事らしいんだ。」

「そうか」

一先ずナーノの話に納得する様子のユーノ達であったが、そんなユ

ーノ達の事を、もといナーノの戦闘の様子を窺っていた破面魔導虚のリリスは、警戒心をあらわにしながら拳を強く握りしめ、ナーノの姿を確認する。

「ナーノ・T・スクライア・・・・・・！」

またしてもナーノの規格外な能力が発揮された今回の戦闘だったが、次回は更に驚くべきナーノの戦闘力が明らかになる！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は読者からの質問に答えようと思うよ。投稿者：　武田軍兵士　清坂　剣麻さんからです。『死神陣営に質問・・・貴殿達はシャモジで斬鉄もしくは相手の武器と服だけ斬れますか。』そこのところを、お答えいただきましょう♪」

と、それを聞いた恋次は割烹着姿で現れその手にはしゃもじが握られていた。

恋「とう！へへへ。俺様の実力をもってすれば、しゃもじだろうが何だろうが切って見せるぜ。じゃ、実際にその腕前を見せてやる。ここに用意した大根を試しに切ってやる。おらああ！」

恋次は大根を放り投げると、目を鋭く光らせしゃもじを動かし、見事なまでに三つに輪切りにし皿に乗せる。

一同は拍手喝さいを送る。

一「意外とやるじゃねぇか」

ル「しかし、輪切りしか出来ぬのか？」

恋「まだだ。手首の使い方次第で、いちょう・たんざく・賽の目・・・どんな斬り方だってオッケイだ。千六本でこの通りだ」

恋次は手首を自在に使い分け、しゃもじを使い大根を斬りたい形に

スライスしていくと、改めて一同からの拍手が送られる。

恋「ははは！これぐらいの事、俺様にかかれば屁でもねぇってことだ。朽木隊長でもんな真似は出来ねェさ！」

が、それを聞いた瞬間プライドに火がついたのか白哉が現れる。

白「誰が真似できぬと？」

恋「のおお！！！朽木隊長！何時の間に！？」

白「その程度の事で図に乗るなと言ったはずだ。見せてやろう。貴様と私の格の違いを」

白哉は懐から手に収められるだけのしゃもじを取り出すと、用意した大根をこのように口にしてから切り刻む。

白「散れ。“千本しゃもじ”」

白哉の目にも止まらぬしゃもじの操作によって、大根は恋次のそれを遥かに上回る粉塵へと変わり果て、恋次たちはそれを見て愕然とした。

恋「な・・・！」

白「これが貴様と私の格の差だ」

ル「流石兄様！見事なまでのしゃもじさばきで！」

ユ「これは流石に白哉さんの方が上手ですね♪」

恋「チクチョー・・・まだこの人を超えるのは遠いってか・・・」

恋次は色んな意味で上を行く白哉に項垂れてしまうのであった。

魔導師図鑑ハイパー！

ナーノの声優ネタに関連して、こんなネタを一つ。

ユ「そうそう。ナーノの声優さん、結婚したんだってね？」

ナ「そうだよ。坂本真綾さんと♪」

一「声優同士で結婚してるのって、こっちの業界じゃ確か・・・ドラゴンボールで悟空を務めた野沢さんとＢＬＥＡＣＨの山本じいさんやってる塚田正昭さんが有名だな」

な「漫画さんと結婚した人もいますしね。名探偵コナンの高山みなみさんは、その作者さんと♪」

ユーノス「まぁ兎に角一重におめでとうだ。祝ってやらんとな」

一同は声優の鈴村健一さんと坂本真綾さんの末永い幸せを願って心からお祝いを申し上げると同時に、温かい拍手を送る。

ナ「あ、そうだ。もう一つ言うことがあったんだけど♪」

ユ「なんだい？」

ナ「スクライア商店の三人と鳥さん、それに僕って・・・みんなイ

マジンの声と被ってるよね♪」

それを聞いた途端、金太郎一人だけは涙を流し壁の隅にしゃがみ込む。

ナ「あ、あれ？どうしたの熊さん・・・？」

鬼「バカヤロー！熊一人だけは違うんだよ！」

浦「駄目だよ安易にそんなこと言ったら！」

ナ「え・・・あ・・・ごめんなさい！悪気はなかったんですよ・・・！」

金「いいのですぞ・・・私は全く気にしておりませぬ・・・／／／」

とか言ってるが、実際はかなり気にしているデリケートな金太郎であった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ウ「お前が望んだ、本当の欲望だ」

リ「ユーノ・スクライアの息子が、どんな人間かと思えば」

ユ「君が壊したかったものが、もうすぐ始まる」

クヤ「壊す・・・メチャクチャに・・・」

ナ「“自分の握る剣に怯えぬ者に剣を握る資格は無い”」

第１７０話　破壊と恐れとカニバサミ

登場ヤミー

カブトヤミー

声：三宅健太
身長　２１３？　体重　１１１？
特色／力：硬い外骨格
剣道道場に通うミカヤ・シェベルの「強くなりたい」という欲望から生み出された。道場の練習生や師範を襲い、成長を遂げる。身体の表面は硬い外骨格で覆われており、高い防御力を誇る。ヤミー出現を察知したユーノとの戦闘中、突如もう一体のヤミーと分離するも、ユーノとナーノによる同時攻撃によって倒される。

破壊と恐れとカニバサミ（前書き）

剣は一人の敵、学ぶに足らず。

ＢＹ司馬遷［しばせん］（中国前漢時代の歴史家、前１４５～８６）、「史記」

破壊と恐れとカニバサミ

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、ナーノ・T・スクライアが、機動六課に加わる。

二つ、剣道場に通うミカヤの強くなりたいという欲望からヤミーが生まれる。

そして、三つ。ヤミーは二体に分離した。

〈Ｓｌａｙｅｒ　Ｋｉｃｋ〉

〈Ｆｕｌｌ　ｃｈａｒｇｅ〉

ナ「はあああああ！！」

ユ「はーーーっ！セイヤー！！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈リリスＳｉｄｅ〉

カブトヤミーとの戦闘が終わり、ユーノ達と向かい合って話をするナーノの姿を隠れて窺う破面魔導虚のリリスは、警戒心を抱きながらこう呟く。

「竜神の寵児・・・ナーノ・Ｔ・スクライア・・・・・・！あれが、ブランク・オブ・デザイアの息子ですって・・・！！」

リリスはユーノに負けず劣らず、顔に似合わず簡単に出し抜くことの出来ない思考と、ヤミーをも恐れぬ屈強な精神力、更には強力な戦闘力を秘めたその存在に悔しが湧き上がる。

「忌々しい・・・・・・何なのよあれは・・・！」

〈Ｄｉｖｉｎｅ　Ｍｅｔｒａ　Ｂｕｓｔｅｒ〉

『『無限装弾神聖砲（ディバイン・メトラバスター）』』

リリスは戦闘中に発揮したナーノの使った離れ業、無数のディバインバスターを連射するディバイン・メトラバスターを思い出すと、歯を食いしばって拳を強く握る。

「あんなの・・・イカサマじゃない！」

そんなリリスの抱く感情と、彼女の存在に勘付いていながらユーノの前では怪しまれないように振る舞うナーノは床に置いていたメダルタンクを担ぎ上げる。

「よっこいしょっと」

ユーノ達はナーノに近づき、メダルタンクの中を覗きこむ。

「これ、どういう構造になってる訳？」

「う～んと・・・クラインの壺って言えば分かる？」

それを聞くと、ユーノは持ち前の頭脳から直ぐにその答えを導き出す。

「ああ。境界も表裏の区別も持たない（2次元）曲面の一種で、主に位相幾何学で扱われるあれだろ？」

「流石♪何でも知ってるね。このメダルタンクは端的に言えばそれと全く一緒。吸収したセルメダルはすべてこの中に収容され、僕達

の知らないところへ勝手に送られる・・・って、謎の声が言ってたんだ」

ユーノスは謎の声と言う単語を聞くと、渋い顔を浮かべる。

「また謎の声か・・・なんなのだろうな、それは」

「さぁ。何とも言えませんね。大体、セルメダルなんて集めてもお金には替えられないよ」

「うん。知ってる。だけどそうしろって・・・」

「何でそこまでして」

「謎が深まるばかりだ。」

ユーノとユーノスはお互いに腕を組んで謎の声がナーノに課した使命であるセルメダル集めの事に関して深く考え込み、暫くの間沈黙が保たれる。

ナーノはそんな似たり寄ったりな二人の事をほくそ笑むと、徐にこう言って来た。

「兎に角、今は逃げちゃったもう一匹の奴を探すことから始めないとね。で、倒したら倒したで、また集めないと」

「集めるのはどっちでもいいけど、確かにその通りだ。手分けして探そうか」

「即断即決。その判断は正しいよね～～～了解♪」

「では、三人別々に分かれて捜索開始だ」

「はい」

ユーノスはユーノの肩から降りると、一旦二人と別れて逃げて行ったクワガタヤミーの捜索を始め、ユーノも直ぐに捜索をしようと動き出すが、その直前にナーノが彼を呼び止めた。

「あ、そうだお父さん」

「ん」

「僕らが仮に敵同士だったとして、メダルを取り合う仲だったら・・・正直どんな感じだった？」

「え・・・急に何を？」

息子からの唐突な質問に戸惑いを見せるユーノと、そんなユーノの方を見つめながら一枚のセルメダルを取り出すナーノ。

「僕ははっきり言ってバカバカしいと思うよ。こんなメダルなんかの為にさ。でも・・・逆に言うと、今のお父さんみたいに“何にもないのに戦っている”ことの方が、僕的には不気味で危険な気もする。多分みんなも同じだと思う」

「ナーノ・・・」

ユーノは今の自分を刺した息子からの鋭い指摘に神妙な顔つきとなる。

そんなユーノの事を気にしながらナーノはすぐさま彼に謝った。

「あ！気に障ったらごめんなさい！僕の勝手なイメージだから！さ
さ、捜索開始♪」

そう言うと、ナーノはメダルタンクを亜空間に収納し、ヘッドフォンを耳に当てるとヒップホップを聞きながらいつもの調子で彼の前から立ち去る。

ナーノがいなくなった後、ユーノは口を閉ざしたまま心の中で呟く。

「（とにかく、ヤミーをなんとかするのが先か・・・）」

そう考えると、ユーノは一目散にクワガタヤミーの残した気配を追って走り出す。

三人がその場から一様にいなくなった後、無言のまま隠れてユーノ達の事を窺っていたリリスは個人的に今はユーノよりも、ナーノの方が気にかかり、彼の後を追跡する。

「――――――・・・」

リリスの気配に戦闘中からとっくに気づいていたナーノは、敢えてここは彼女の餌になることを選ぶと、一人ある場所へと向かって行った。

カブトヤミーとの戦闘が無事に終わって数時間後。

太陽が茜色に輝く夕暮れの時刻を迎えると、病院から戻って来た二

体のヤミーの生みの親であるミカヤは重い足取りで一人道場へと向かって居た。

そして、歩きながら彼女は自分の望んだ欲望を今一度考える。

「私が望んだもの・・・――――――」

この時彼女の脳裏に浮かんで来るウヴァと白ヤミーの言葉。

『これがお前の欲望だ。お前が心から欲しいものを手に入れる』

『もっと・・・！』

そう考えると、ミカヤは今一度自分が心から望んでいたものが“強さ”ではなかったことを確信する。

「（違う。私が心の底で思っていたのは、本当は・・・・・本当は・・・・・・！）」

ミカヤは暗い顔を浮かべながら道場の中へと入っていくと、奥の方から聞きなれた声が聞こえてきた。

顔を覗かせると、道場の方では師範であるテンドウが明日の大会に出場するちぢんの者と連絡を取り合っていた。

「怪我はしていないから、私の事は心配するな・・・――ミカヤの調子？ああ・・・相変わらず苦悩している。あやつはまだ気づいておらんようだ。剣士にとって、何が大事であるかを――――――それに気づかぬ限り、あやつは真の剣士にはなれぬ。残念な話だが、大会にも出すことは出来んよ・・・・・・」

師範の声を渋らせて口にするその言葉に、ミカヤの胸が締め付けられ、彼女は思わずテンドウの前へと出て来た。

「師範・・・・・・」

「ん・・・ああ。ごめん。またかけなおすから。うん。」

一度話を中断したテンドウは、白ヤミーに襲われ病院に搬送されたと思っていたミカヤの姿に驚きながらも彼女の事を心配し近づいて来た。

「ミカヤ！大丈夫か？」

「ええ。もう平気です。」

「ひとりか？私が車で送っていくが・・・」

「いえ。自宅までは歩けばすぐですし、御心配なく」

「・・・でもな・・・」

「本当に大丈夫ですから」

「じゃあ・・・気を付けるのだぞ」

テンドウはミカヤの言葉を信じて、彼女の肩に手を乗せてから道場を後にすると、ミカヤは出ていくテンドウの方へと振り返り、先ほどの言葉を思い出して悔しそうな表情を浮かべる。

「・・・く」

そんなミカヤの心の動きに機敏に反応し、道場の辺りをうろついていた逃亡中のクワガタヤミーが口にする。

「壊す・・・メチャクチャに・・・」

色々と思い悩んで考えたミカヤだったが、やはり大会に自分が出れないということに納得がいかず、今一度テンドウの口からその理由を聞こうとする。

「・・・師範、明日は！」

と、そう思った直後。

彼女の目の前に人間体の姿でグリードの一人、ウヴァが現れた。

「ふん」

「な！」

唐突に前触れもなく現れたウヴァに鳥肌が立つミカヤ。

ウヴァは不敵な笑みを浮かべながら彼女に向かってこう言った。

「お前の欲望を止めるな。そのまま待っていろ。お前が望んだ、お前の・・・本当の欲望だ」

それを聞かされると、ミカヤは力が抜けたように両膝を付き、心の中で呟いた。

「（私の・・・欲望・・・）」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

午後８時４７分　機動六課　隊舎寮。

クワガタミーの捜索を続けていたユーノ達だったが、あの後何の情報も掴めずじまいとなってしまい、結局のところユーノとユーノスは止むを得ず自分の部屋に戻ることになった。

部屋に戻ったユーノはベッドに腰を下ろすと、ヤミーが見つからないことに関して具に言う。

「見つかんないですね、ヤミー」

ユーノスはその呟きに対して、自分の寝床に戻ると自分の考えを口にする。

「よっぽど遠くに行ったか・・・メダルが増えてないか・・・」

「増えてないって・・・・・つまり、欲望を叶えてないってことですか。強くなりたいって言ってたけど、何でヤミーが分離したんでしょう・・・――――」

ユーノは昼間の戦闘を思い返し、そう言うとユーノスも今回の不測の事態に関して予備知識を持ち合わせておらず、素直に分からないと言うしかなかった。

「さあな。俺も初めて見た」

すると、ここでユーノが一つの仮説にたどり着いた。

「もしかして、欲望がもう一つあったとか」

ユーノはそう言った後、戦闘中のカブトヤミーと、後から出現したクワガタヤミーの言動を思い返しながら自分の考えを述べる。

『もっと・・・強く！そうすれば・・・！』

「彼女が欲しかったのは、強さだと思っていたけど・・・」

『壊す。全部メチャクチャに』

「その強くなりたい理由があったとすれば、そっちがもとになってる本当の欲望かもしれません」

「欲望の二重構造か。あり得るな・・・」

「だとしたらそれは何なのか・・・――」

二人はミカヤが望んだ真の欲望というものを自分たちなりに分析をし始め、その日はその分析に時間を費やしたのであった。

さて、一方のミカヤはと言えば、一人道場の方へと残っており、畏まった様子で床に正座をしていたかと思えば、竹刀片手に立ち上がり、気合の入った様子で素振りを始めた。

「は！は！は！」

そんなミカヤの様子を気にしながら、外の方で音楽をずっと聞いていたユーノの息子、ナーノはと言うと、思わず深いため息をついてしまう。

「やれやれ。とんだ困ったさんだな。あの廃車斬りの女性（ひと）は――――」

そう言いながら、ナーノは徐にヘッドホンを外すと、背中越しに誰かに向かって話しかけた。

「さて。そろそろ何の用か聞きたいなあ。破面魔導虚さん」

「！」

ナーノが自分の存在に気づいたことに非常に驚きを見せるリリスだったが、素直にここは前に出てくると、ナーノはリリスに向かって笑みを浮かべる。

「ふふ」

一方のリリスは、そんなナーノの笑みに不快感を覚えながら徐に尋ねる。

「いつから気づいて？」

「はじめてヤミーが現れた時からずっとね」

「あらそ。じゃ、名前は言わなくても知ってるってことでいいのか

しら？」

「リリス・ジャックスターン。ジェイル・スカリエッティが創り出した破面魔導虚の一人で、アスモデウスとは表裏一体の存在。で、主な役目は第二のオーズである僕のお父さんの監視と調査・・・だろ？」

リリスは今までの事はおろか、自分の事までかなり深いところまで熟知していたナーノの了見に驚愕しながら、平静を装い話を続ける。

「おや・・・そんなことまで知っているなんて、歳の割に全く食えない相手ね。だとしたら、何故それをユーノ・スクライアに教えないでいる訳？」

「今はその時期じゃない・・・って、謎の声が僕にそう言ってて」

「謎の声・・・？」

リリスもまた、ナーノが言う謎の声に首をかしげる中、今度はナーノの方からリリスに質問をしてきた。

「ふふ。で、何しに来たの？冗談で聞くけど、まさか僕の命か・・・あるいはセルメダルの方が狙いなの？」

「そう言いたいところだけど、何分あなたに関する情報が知らな過ぎるものでね。私は今日のところは何もする気はない。だけど・・・ユーノ・スクライアの息子が、どんな人間かと思えば」

リリスは些か期待外れ、というか自分の常識の外に位置するナーノ・T・スクライアと言う存在に関してそう呟くと、聞いていたナーノ

は自分の姿を今一度見直しながら答える。

「いや。どういう人間って・・・・・・・・・・・こういう人間です♪」

「はぁ・・・・・なんかちょっとあれだわ・・・」

溜息をつきながらそう言うと、リリスはナーノの前から立ち去ろうとするが、その前にナーノが彼女の事を引き留めようとする。

「あれ?帰っちゃうの?どうせ帰ってもすることないでしょ。それとも、僕が来たってことを伝えてくれたあの変な人形男の所にでも行くのかい?」

「・・・・・」

リリスは眉間に皺を寄せながらナーノの言葉に耳を傾けると、ナーノはその人形男であるカリの持つ不気味な人形の特徴を体で表現しながら話を続ける。

「あの男ってなんであんな人形乗せてるのかな。ほら、こんなの♪あ、違うな。こっちだったっけ。あ・どっちだ。こっち・・・違う?」

リリスは頭がいいのか、単に子供染みているのか、或いはそのどちらでもないのか、いずれにしてもナーノの性格が全く読めず途方にくれながら彼の前から立ち去って行く。

「まるで分らない」

彼女がその場からいなくなってから、その事に気づかず人形のポーズについて悩んでいたナーノがリリスに尋ねようと声をかけた。

「ねえどっちだったっけ？・・・・・・あれ？」

しかし、ナーノが声をかけた時には既にリリスの姿はなくなっていた。

ナーノは神妙な顔つきを浮かべながら、自分の腕を伝って登ってくるゴリラカンを一瞥しこう言った。

「・・・なんだか知らないけど、破面魔導虚の中にもいたんだな。ああいう人間臭い奴が。なっ！」

〈Ｇｏｒｉｒａ！〉

ゴリラカンはナーノの言葉を聞くと、飛び跳ねて腕を大きく回す。

その後、ミッドチルダは突然のスコールに見舞われた。

リリスはそのスコールの中をただ只管に走り続け、失くしたはずの心と言うものが、相手いる筈の自分の胸から込み上げる奇妙な感情に大いに戸惑いを見せていた。

「は、は、は、は、は！」

『君が今一つ吹っ切れない原因はその“プライド”だ！』

『（だからと言って、プライドを捨てたら終わりじゃない・・・！）』

奇妙な感情に頭がおかしくなりそうになるリリスは、その途端足をつまずかせ、目の前に倒れ込んだ。

「ああ！（こんなに訳の分からない感情がこみ上げてくるなんて・・・一体どうしたのよ私は！？プライドって・・・こんな私の・・・何処にそのなものがあるって言うの！）」

そう心の中で思いながら、リリスは降りしきる雨の中、一人こんな事を呟いた。

「もう・・・・・破面魔導虚なのに・・・なんで・・・！」

破面魔導虚としての使命を全うするためだけに作られた筈の存在が、奇妙な事に人間のような感情を抱いてしまう事に混乱するリリスと、そんなリリスの事を陰で窺うナーノ曰く表裏一体の存在である破面魔導虚アスモデウス。

アスモデウスは雨に当たりながら瞳に映るリリスの姿を鼻で笑う。

「・・・――ふん」

果てさて、これからこの二人に何かが待ち受けるのであろうか？

◇

〈ミカヤＳｉｄｅ〉

カブトヤミーを倒した翌日。

この日は、ミカヤの通う道場の門下生が全員出場する地区大会の日だった。

ミカヤは師範であるテンドウに答えが出るまでの間、大会の参加を禁じられていたために、一人今日はその答えを見つけるために道場の方で素振りをする傍ら考え込んでいた。

「は、は、は、は！」

しかしいくら考えても考えても、彼女は一向にその答えを導き出すことはおろか、逆に焦りばかりがこみ上げてくる始末。

すると、そんな同情の方へと足を運んできたのはユーノとユーノスの二人であった。

ユーノスは中に入ると、道場の中を見渡しユーノに問いかける。

「ここでいいのか？」

「ヴィヴィオやはやてのところのミウラ君から聞いてきたので・・・・・あ、いた♪」

ユーノは道場の中にミカヤの姿を発見し声を上げると、ミカヤもその声に気づいてユーノ達の方へと振り返る。

「！あなたは・・・」

「やぁ。また会ったね。ちょっと、いいかな」

「はい。何でしょうか？」

「君に聞きたいことがあってね。」

「私に？」

ユーノがミカヤに彼女の欲望の事に関して聞こうとしたその頃、彼女の真の欲望を形にしたクワガタヤミーは一人、森の中を歩いてある場所へと向かっていた。

「壊す・・・」

クワガタヤミーが何処へ向かって居るのかはこの後分かるのだが、取り敢えず今はミカヤの視点に戻って話を進めることにしよう。

「強くなりたかった・・・理由・・・？」

ミカヤはユーノに尋ねられたその言葉を復唱すると、ユーノは更にこう言って来た。

「うん。最初は剣術道場の師範代なんだから、強くなりたいのは当たり前だとは思ってたけど、あとから出て来た怪物が言ってたのは――――――」

『壊す。全部メチャクチャに』

「！」

ミカヤは思わず表情を凍りつかせる。

そんな彼女にユーノは真摯に問い質す。

「もしかして、何か壊したいものがあったとか？」

「・・・・・・・・・」

端的なユーノの質問にミカヤはただただ黙り込んでしまう。

「ごめんね。自分の欲望なんて、人に言いたくないだろうけど、それがわかれば怪物を見付けて止められると思う」

すると、ユーノの言葉を聞いていたミカヤは戸惑った様子で自分の抱いた欲望を話そうとはせず、嘘をついてしまう。

「私は・・・何も」

すると、それを聞いた瞬間、ユーノスはユーノの肩から降りて必死に頭を下げる。

「頼む。こっちは急いでいるんだ。この通りだ！」

「僕からも、お願い！」

ユーノも真摯になって頭を下げる中、ミカヤは黙り込んだままその場に立ち尽くす。

「・・・・・・」

と、そんな三人の元にまた一人と、招かれざる客がやって来た。

それは、ナーノ・T・スクライアであった。

「あ・いたいた。やっぱりここに居たんだね、お父さん」

ユーノはナーノの声を聞くと、後ろに振り返り目を丸くした。

「ナーノ！」

「その顔・・・何か言いたそうだな？」

「鋭いですね。流石は七大元帥♪いえね・・・ちょっと・・・このミカヤさんに一言」

「え」

「私に？」

ナーノの言葉に三人が顔を見合わせると、ナーノはミカヤの方に目を向けて驚くべきことを口にする。

「ちょっと、彼女の欲望の先を調べて来たんだけどね」

「「！」」

「何だって！？」

表情を一変させるミカヤの顔を凝視しながら、ナーノ・T・スクライアは真顔を浮かべ、徐に語り出す。

「ミカヤ・シェベルさん。僕はお父さんみたいにそこまで優しくないからはっきり言いますけど・・・ごめんなさい」

「・・・・・」

ミカヤがナーノが話すことに些か不安を抱くと、ナーノはそんなミカヤにほくそ笑み、徐に話を始める。

「先ず根本のところ。あなたが強くなりたいと思ったのは、“認めて欲しかったから”・・・でしょ？」

「！」

「「？」」

訝しげな表情を浮かべるユーノとユーノスとは対照的に、顔を合わせるのも今が初めての筈の少年に核心的な事を言われ、顔を凍りつかせるミカヤ。

ナーノはミカヤの顔を窺いながら、更にこう食い込んだ。

「だけどいくら強さを欲しても、鍛錬を積んでも、師範は自分を認めようとはしなかった。寧ろ、自分を突き放して稽古や大会に出ることからあなたを遠ざけた。」

「・・・・・」

「一生懸命考えたけど、師範がどうして自分にそんなことをするのかが分からなかった。だけど・・・僕は分ります。師範が何故そんな態度に出てか」

「何！？」

ナーノの言葉に耳を疑うミカヤ。

すると、ナーノはミカヤに向かってこう言って来た。

「それが知りたいのなら、いっちょ僕と戦ってみません？」

「「な！」」

その言葉を聞いた途端、ユーノとユーノスは耳を疑い、ミカヤもまたこの意味深の言動で自分に接触してくるナーノと言う少年に疑念を抱く。

「戦う・・・だと？」

「そ♪模擬戦は正直言うと嫌いだけど、目の前で困ってたり悩んでたりする人がいるのなら話は別。お父さんも、シグナムさんと嘗てそうだったんでしょ？」

「ナーノ・・・お前どうして・・・」

一年前のシグナムとの模擬戦の事を当たり前のように知っていたナーノの言葉に驚くユーノだったが、ナーノはそんな父に柔かい笑みを浮かべてから徐に言う。

「お父さんと同じだよ。手が届くのに手を伸ばさなかったら、絶対後悔する。それが嫌だから手を伸ばす・・・違う？」

ユーノはその言葉を聞かされると、意外そうな顔を浮かべたのち、自分もまたほくそ笑む。

「・・・そうだね」

一方でミカヤ自身も、奇妙な感情を裡に抱きながらナーノの方へと目を向ける。

「お前と戦えば、私は理由が分かるのか？師範が私を突き放したその理由が！？」

「勿論。あなたみたいなタイプは考えるよりも行動で移した方が早い。そんな訳ですから・・・ここに来てください。勝負はそこでつけましょう。」

ナーノはそう言うと、一枚の紙をミカヤに手渡し、先に道場から出ようとするが、出る直前で彼女に向かってこう言った。

「始めに言っておきますよ。勝つつもりなら、僕を殺す気で来てください」

「！？」

「そんじゃ♪」

飄々とした笑顔で最後にそう言うと、ナーノは道場の外へと向かい、その後に続いてユーノ達が追いかける。

「あ！ちょっとナーノ、待ってよ！」

三人が出て行ったあと、ミカヤは渡された紙に書かれた指定された場所の地図を見ながら、先ほどのナーノの言葉に惹かれ、自分が知

りたいと思っている答えを知るために、ナーノの誘いを受けることを決意する。

「・・・・・私は知りたい・・・理由を知りたい！」

そう決意すると、ミカヤは手短に準備を済ませると、所定された場所へと向かって足を運ぶのであった。

彼女が出る前、先にその場所へと向かって歩いていたナーノとユーノ達はと言うと、ナーノはヘッドホンを耳に当てながら飄々とした様子で口笛を吹き、その隣ではユーノとユーノスが訝しげな顔を浮かべる。

ユーノスは徐にナーノにこう言って来た。

「いいのか?あんなこと言って」

「てっとり早いことに越した事は無いですし、あのままウジウジ考えてても一生解決できないなら、こっちが発破掛けるしかないでしょう。」

「ホント・・・僕以上に食えないかもな、ナーノは」

「へへ。まだまだお父さんに比べれば♪」

ナーノは笑顔を振りまき隣のユーノにそう言うが、ユーノは少なくともナーノが自分に匹敵か、或いはそれ以上に食えない人間だと認識している様子であった。

そして、所定された場所に三人が到着すると、ちょうどその時彼ら

の耳に聞きなれた声が聞こえてきた。

「ユーノ君。」

「パパ」

「え？」

ユーノが振り返ると、なんと集まってきたのはなのはを始めとする主要前線メンバー全員と、学校が休みのヴィヴィオであった。

「なのは。みんなもどうして？」

「それが、ナーノがちょっと集まって欲しいって」

「ナーノが・・・て言うか仕事は？」

ユーノは土曜日であるにかかわらず仕事があるはずのなのは達にそう尋ねると、全員は何故か気恥ずかしそうな表情を浮かべると、みなを代表してはやてが衝撃的な事を言って来た。

「いやな・・・はは・・・それがナーノがいつの間にか今日の仕事・・・全部片付けてしもうたんや・・・／／／」

「何！！」

「ま、マジ！？」

ユーノとユーノスは柄にもないようなぶっ飛んだ顔を浮かべてしまい、ナーノは傍らで涼しい顔を浮かべていた。

ヴィータはそんなナーノに指を差しながら二人に更にこう言った。

「このガキ。見かけによらずとんでもねェ切れ者だ。たった数時間で今日一日分の仕事全部一人でこなしちまうとは・・・１６歳とは思えねー演算能力だよ」

「にゃはは・・・やっぱりユーノ君の子供だよ。あんなことできるのは」

「う・・・そうかい・・・」

ユーノ自身、機動六課では群を抜いて、いや・・・次元世界でもトップクラスに入るほどの知識量と高度な演算能力を秘めてはいるが、まさかここにもう一人高度な演算能力を持つもの、それも自分の息子だということを聞かされると、唖然としてしまうばかりであった。

と、そんな時ヴィヴィオは自分たちを呼びつけたナーノに面と向かって尋ねる。

「でも、ナーノは何の為にミカヤさんを？」

「へへ♪ちょっと、バトルを♪」

「模擬戦するの？だってアンタ・・・」

「積極的な模擬戦は嫌いですよ。人を救う模擬戦なら話は別です♪」

「？」

「どういう事だ？」

「まるで分らぬ」

一同はそれぞれ腕組みをしたり、首を傾げたりしてナーノの行動の真意を考えるが、その考えていた矢先、エリオはナーノの対戦相手となる人物の姿を発見する。

「あ、来ましたよ！」

全員が注目する中、ナーノの前に現れたミカヤは和服に色濃い姿の防護服「嵐鎧」を身に纏った状態で、腰にはアームドデバイスである「晴嵐」が携えられていた。

ナーノは到着したミカヤを見ると、今までの飄々とした表情を一変し、鋭い眼光で彼女を凝視する。

緊迫した雰囲気が辺り一帯に立ち込める中、ミカヤは徐に尋ねる。

「本当に――――――お前と戦うことで、私が知りたかった答えにたどり着くというのだな？」

「ええ。この戦いの中で、それを知ることが出来ると思いますよ」

「そうか――――――ならば始めよう」

「はい。ライジングハート。ブレイドフォーム」

〈Ｂｌａｄｅ　ｓｅｔ〉

ナーノはライジングハートのもう一つの形態にして、真の力の姿であるブレイドフォームを選択すると、ナーノの体は紫を基調とする専用のバリアジャケットが身に纏われ、腰には日本刀の形に変化したライジングハートが携えられ、ユーノ達は初めて伺うその姿に目を丸くした。

「あれは・・・！」

「あいつ・・・射撃が本当じゃなかったのかよ!?」

「聞いた話じゃ、あいつの真髄は寧ろ剣の方らしいぜ」

「ナーノが・・・――――」

「・・・――――」

ユーノはナーノの真意と身に纏った防護服と剣に注目しながら、この模擬戦の行方を見定めることを決意し、全員もまたユーノ同様二人の勝利の行く末を窺うのであった。

ミカヤは同種の武器を使うナーノの姿を目の辺りにしても、一切動じる気配すら感じさせず、ナーノに向かってこう言った。

「一応私はこう見えても、インターミドルでの最高成績は都市本戦の3位だ。生半可な攻撃は一切通じぬことは忠告しておこう」

「これはこれは。態々どうも」

二人は互いに一歩も譲らぬ覚悟で鋭い眼差しを向けると、全員が注目する中、先に動いたのはミカヤの方であった。

「行くぞ。晴嵐！」

〈Ｙｅｓ〉

ミカヤは晴嵐の柄を握ると、足元に近代ベルカ式の魔法陣を展開し、その攻撃の様子をはやてやザフィーラは緊張した心境で窺う。

「来るで。うちのミウラをボコボコにした天瞳流抜刀居合い！」

「果たして、ナーノはどんな手で防ぐのでしょうか」

ミカヤが剣を構える中、ナーノは何もしないままただ立ち尽くすのみ。

不審に思ったミカヤが構えを崩さず徐に尋ねる。

「どうした？来ないのか？」

「女性相手にこっちから手は出せませんよ。レディーファースト。そちらからどうぞ」

「飽く迄も紳士でいる訳か。だが、それが命取りにならぬことを祈るぞ」

そう言った瞬間、ミカヤは抜刀術ではあるが敢えてナーノの誘いに乗って、勢いよくその場から飛び出しナーノを切り伏せようとする。

「先手必勝！」

ミカヤは機動六課の前線メンバーも目を見張るほどの速さで移動すると、目の前に佇むナーノ目掛けて晴嵐を構えて瞬く間に剣を抜くが、ナーノはものの見事に第一刀を回避する。

ミカヤは体を捻って頭上から声をかける。

「いい反応だ。だが、詰めが甘い！」

そう言うと、ミカヤはその状態から一度刀を鞘に戻して天瞳流抜刀居合いの一つである月輪を叩きこむ。

「月輪！」

ミカヤの放った月輪がナーノの左腕に向けられると、ナーノは咄嗟に攻撃が当たる直前にフィールド系防御を展開し、強烈な威力を秘めた抜刀居合いに後ずさり、観覧していたユーノ達もミカヤの高い実力には目を凝らした。

ミカヤはナーノから離れると、ほくそ笑み自分の技の手応えを感じていた。

「（入った。流石に月輪をあの距離で受ければ、立っている事もままならん）」

そう思いながら目の前の土煙の方へ目を向けると、晴れていく土煙の中から、左腕に着いた埃を払いながら何事も無かったかのようにナーノが出て来た。

「よっこいしょと」

「！」

一瞬観間違えじゃないかと思ったミカヤだったが、ナーノは平然とした様子で徐にこう言って来た。

「・・・成程。“もう分りました”。次も受け止めますから。どうぞ」

ナーノがミカヤの攻撃を誘うと、ミカヤ自身は笑みを浮かべてから再び刀に手を触れ、魔力を練り上げる。

「ふん。面白い・・・ならばこの一撃を受けても、無事でいられるか！！！」

ミカヤはそう言って例の如く目を見張る速度で駆け出すと、ナーノに向かって先ほど以上の威力を秘めた天瞳流抜刀居合の構えから斬り払って相手の水月を狙い、　さらに上から相手の水月に斬りつける技、「水月・二連」を叩き込もうとする。

「水月・二連！」

だがその瞬間、ナーノは撃ち込まれた最初の一撃をあろうことか掌で受け止めてしまい、それを見た瞬間ミカヤと、ユーノ達全員は目を疑った。

「な！」

「「「「え！！」」」」

そして、ナーノは完全に動きを封じたミカヤの鳩尾目掛けて、徐に

腰に差していたライジングハートの柄頭をぶつけて、ミカヤを吹き飛ばした。

「が・・・」

あり得ないほどの威力で吹き飛んでいくミカヤの姿を、ユーノ達全員は唖然とした様子で見詰め、それと同時にそんな規格外な強さを誇るナーノを一瞥し、ナーノは悶え苦しむミカヤに向かってこう言った。

「僕はこの１６年間、“お父さんと戦えるように”鍛錬したんだ。エースだろうが天瞳流だろうが、こんなもんじゃ足りないんですよ」

まさしく開いた口が塞がらないとはこの事だ。

隊長陣を始め、六課の前線メンバーはあまりに立を逸した強さを持つナーノの強さに言葉を失いかける。

「な・・・・・・マジ・・・・・・？！」

「これって・・・ウソですよね・・・！？」

「ナーノが・・・あのミカヤさんの抜刀居合いを素手で簡単に受け止めて・・・柄頭だけで吹き飛ばすなんて・・・・・・！」

「どうやら・・・・・・俺達はとんでもないガキを迎え入れた事は間違いなさそうだ・・・」

「下手したらユーノさん以上の脅威かもしれない・・・！」

「はは・・・僕以上って・・・・」

吉良の言葉を聞いたユーノは、冷や汗をかきながら自分が敵に回したくない者のランキングに、一護・浦原・夜一の次に息子の名前を書き加えた。

一方でミカヤの方は、見かけに違わず途轍もない力と規格外な強さを秘めた目の前の少年に畏怖の念を抱いた。

「（な・・・何だこの力は・・・あれが人間の力か？あり得ない・・・こんな規格外は始めてだ・・・事実、抜刀居合いを初見でありながら二度目の攻撃時に既に見切ってしまうなど・・・況してあの子は私よりも年下・・・・・それが・・・・・・これか！？）」

疑心暗鬼な顔でナーノの様子を窺うミカヤだったが、直後ナーノは自分の剣に手を触れると、徐に尋ねる。

「あの～御取り込み中大変申し訳ありませんが、そろそろこっちも攻撃してもよろしいでしょうか？」

ナーノがそう言って剣を抜こうとした瞬間、忽然と彼の姿が見えなくなった。

「な！消えた！？」

そう思ってしまったミカヤだったが、直後ナーノの存在に気づいたヴィヴィオが声を上げる。

「違います！後ろです！」

「！」

ミカヤがそう言われて後ろに振り返ろうとした瞬間、唐突に体に叩き込まれたナーノの重い斬撃、峰打ちが彼女の体を押しつぶす。

「ぐあああ！」

ミカヤは途轍もない力を受けると為すがままに後ろに吹き飛んでいき、壁に叩きつけられると、壁は大きく陥没しその驚異的な威力を物語る。

ミカヤは満身創痍になりながらどうにか持ち直すと、それを見たナーノは真顔のままライジングハートに指示を出す。

「ライジングハート」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｓｔｅｐ〉

すると、ナーノの体は瞬く間に数人の姿へと分裂、もとい分身体を作り出してミカヤを包囲する。

目の前でそれを窺うミカヤと観覧中のユーノ達は目を丸くした。

「！これは・・・！」

「幻影！？」

「違う・・・高速移動による残像です！」

高速移動によって残像を作り出したナーノは刀を構えると、その残

像と共に一斉にミカヤへと切り込んでいった。

「「「はあああ！」」」

「く！ほおおおお！」

ミカヤは呻り声を上げながら、魔力を練り上げると、月輪の一振りで向かって来た複数のナーノ達を切り伏せる。

「月輪！」

一瞬にして繰り出される怒涛の一撃が、複数のナーノ達を切り伏せ土煙が上がる。

だが、その直後ミカヤの頭上より本体のナーノの声が聞こえる。

「残念。こっちです」

「なっ・・・！」

ナーノはミカヤを相手にしていながら、全く動じる様子さえなく、寧ろ落ち着いた様子でカートリッジを読み込むと、刃先に魔力を集中させる。

〈Ｖｉｏｌｅｔ　ｓｃｒａｔｃｈ〉

そして、集中させた魔力を一護の月牙天衝、あるいはユーノの翡翠斬の要領で紫に輝く斬撃を目の前のミカヤへと飛ばす。

「ふん！」

ミカヤはそれを見た瞬間、目の色を変え、同時に地面に叩きこまれる凄まじい威力を秘めた紫の斬撃。

多量の土煙が上がる中、ミカヤがその姿を現すと、既に満身創痍な上にかなり肩で息をした状態で立つ事さえままならないでいた。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

そんなミカヤとは対照的に、ナーノは息を荒げることはおろか、傷一つ付いていない様子で平然と彼女の前に立ち尽くす。

「ちぃ・・・ッ」

舌打ちをするミカヤと、真顔のまま口を閉ざすナーノ。

対極を為す二人の戦いを見ながら、なのは達は一様にナーノの強さに感嘆していた。

「凄い・・・！ナーノ、ミカヤさん相手に圧倒してる！」

「成程。剣の方が真髄と言うのは、あながち間違いではないな。あの動き・・・長年の厳しい鍛練と研ぎ澄まされた実戦における戦闘勘が無ければ、養えるものではない」

「シグナムがそう言うってことは・・・ナーノは本当にユーノに？」

「戦闘に関しては、教えないって豪語してなかったか？」

恋次が隣に立つユーノに尋ねると、ユーノも苦い表情を浮かべるば

かり。

「いや・・・未来の事情までは流石に・・・だけど、それでもしナーノが本当に僕に鍛え上げられたってことはですよ――――――一護廷隊の隊長さんや一護さんクラスでない限り、ナーノの相手にはならないってことです」

ユーノがそのように断言すると、一様に魔導師組のなのは達や歴戦の騎士たるヴォルケンリッター、更には死神組やスクライア商店の面々までもが、この末恐ろしい強さを秘めたナーノ・T・スクライアと言う存在に畏怖の念を抱いた。

「ぐ・・・」

既に晴嵐を杖代わりにしてしまっているそれほどまでに追い詰められているミカヤと、そんなミカヤに真顔を浮かべながら右手に持った刀を慣れた手つきで振り回すナーノ。

「・・・読めないでしょ?僕の動きが」

「う・・・・・・」

まるで自分を見下しているかのような物言いで話しかけるナーノに、険しい顔を浮かべるミカヤだったが、直後ナーノはそんなミカヤに次のような単語を口にする。

「・・・怖いですか?」

「誰が!!!」

「そうですか。僕は怖い」

「怖い！？自分の力が巨大過ぎて怖いか！？安い陶酔だ！自惚れも甚だしい！剣士としては目覚めが悪くなるぞ！私がその傲りを、天瞳流の奥義で覚まさせてやろう。今すぐに！！」

声を荒げながらナーノにそう言ったミカヤは、晴嵐を鞘に納めると全神経を集中させて魔力供給をフル稼働させると、２年前のインターミドルに置いてなのは達を唖然とさせた八神家が経営する道場の所為と、ミウラ・リナルディに使用した最大技を発動させようとする。

それを見た瞬間、はやてを始めとする面々も目を凝らす。

「あれって・・・！」

「せや！ミウラの時に使った！！」

「来るのか・・・天瞳流の奥義・・・！」

全員がミカヤに注目する中、ミカヤ自身は目の前に佇む規格外な戦闘力を持つ竜神の寵児、ナーノを見据えながら抜刀居合いの構えを取り、心の中で自らを叱咤激励する。

「（天瞳流の前に立ち塞がる障害は、何であろうと斬り捨てるのみ！恐れるな！怖いものなど、ありはしない！）」

そんなミカヤの眼光を受けながら、ナーノは真顔を浮かべたまま剣を鞘に納める。

そして、準備が整った瞬間、ミカヤは天瞳流の奥義にして自身の最強技である抜刀居合いを叩き込もうと走り出す。

「天瞳流奥義！！」

ナーノに急速接近するミカヤは、一点にだけ見据えるとナーノ目掛けてその技・・・大型バスでさえも斬り捨てる廃車切りの異名をとった鋭く重い斬撃、「天月・霞」を発動。

「“天月・霞”！！」

その技が自分に向けられた瞬間、ナーノは徐に刀の柄に手を掛けると、低い声でこう言った。

「・・・――――“羽衣（はごろも）”」

「！！」

ミカヤはその一瞬のやり取りの内に、何時の間にやら体が宙に浮かんでおり、ユーノ達が愕然とする中、身体を地面に叩きつけられる。

自分でも何が起こったのかさえ分からないでいるミカヤと、見えたもには見えていた先ほどのナーノの居合いに驚く者達。

「な・・・！」

「まさか・・・あれを・・・！」

「同じ居合いで・・・！」

「切り伏せた・・・！」

各々の口が文字通り、開いたまま塞がらないでいる中、ナーノはノックダウンしたミカヤの方へと歩み寄り、愕然とするミカヤに目を向ける。

「な・・・そんな・・・」

「・・・あなたは自分の力が怖くは無いんですね・・・敵の力も――――――――底が知れる。」

痛烈な言葉をミカヤにぶつけたのち、ナーノは未来の父であるユーノより教授された剣に対する心構えを徐にぶつけた。

「“自分の握る剣に怯えぬ者に、剣を握る資格は無い”。僕はそう教わった。」

「な・・・！」

ミカヤはその言葉を聞いた瞬間、脳髄に鋭い電撃が走る。

「何故、師範があなたを試合に出さないと思います？その“恐れ”ですよ。あなたに足りなかったのは」

「恐れ・・・・・・」

「剣士にとって必要なのは、技術だけじゃない。大切なのは、その手に握った剣に恐怖を抱くこと。剣とは、殺戮の道具。故に、命を刈り取るもの。天瞳流の師範代として、世間からも注目され持て囃される中、あなたは最も大事なことを見落としていた。憶測ですが、

師範はきっとそれに気づいて、あなたを技術だけの剣士にはしたくはなかったのでしょう」

ミカヤはナーノの言葉を耳にすると、目を見開き剣を握りしめていた状態から一変、愕然とした様子で剣を放し、両手を床に着いた。

「私は・・・・・・なんて・・・・・・・！」

ミカヤはナーノの言葉で、漸くその事に気づかされると、何も言えなくなってしまい、ユーノはそんなミカヤを窺いながら彼女の元へと近づきこう言って来た。

「強くなりたいのも、何かを壊したいのも、その恐れと言うものが見えない故に、焦りばかりが募って、只管に自分を認めて欲しいっていうその気持ちから来てたんだよね？で。君が壊したかったものが、今日・・・もうすぐ始まる」

「・・・・・・」

ミカヤはその言葉に黙り込んだ様子でいると、ナーノは分っていた様子で時計の時刻を気にする。

そう・・・もうすぐ午後2時から市内の体育館で行われるのが、ミカヤが出場を禁じられていた地区大会であった。

師範であるテンドウはミカヤには出場を認めないと言ってはいたが、本当はちゃんとエントリーをさせており、性根が真面目な彼女の事を信じてその時を待つことにしていた。

しかし、時間も時間で差し迫った様子であったため、ミカヤが来て

いないことに門下の者達は焦りを募らせる。

「師範！ミカヤ師範代がまだ到着していません！試合まで３０分を切ってるのに！？」

「師範・・・」

「慌てるな。出場手当は出しているんだ。必ず来る。私はそう信じてる」

そう言って、テンドウはミカヤを信じて彼女の到着を待ち続ける。

そんなテンドウの気持ちを全く知らず、大事な事を見失っていたミカヤは悔し涙を零すと、認めて欲しいという気持ちから抱いてしまった“自分が出場できない大会をメチャクチャにしたい”という欲望に羞恥心を覚えた。

「私は最低だ！大会を・・・私以外の門下全員が出場する大会をメチャクチャにって！自分を認めてくれぬものなど、みんなみんな・・・／／／／」

「ミカヤさん・・・――」

ヴィヴィオが彼女の言葉を聞いて神妙な顔を浮かべると、聞いていたナーノは周りの者が耳を疑うかのような一言を口にする。

「――いいんじゃない？壊したければ壊せば」

「！」

「な、ナーノ！？」

「ちょっとナーノ、あんた何を言っ・・・！」

と、ティアナが声を荒げようとした直後、ナーノは直ぐにこう付け足した。

「ただし！“直接自分の手で”。」

「何？」

一瞬耳を疑うミカヤ。

すると、そんな時に限ってユーノ達の元に唐突にウヴァが放った複数の屑ヤミーが出現し、全員を覆い囲んだ。

「「「！」」」

「キャー！」

ユーノ達は現れた屑ヤミーに戸惑いながら戦闘を始めると、彼らの頭にウヴァの声が飛び込んできた。

「（邪魔をするな。お前たちはそいつらと遊んでろ）」

何処からともなく聞こえてくるウヴァの声を聞いて、屑ヤミーを相手にユーノスは声を上げる。

「ウヴァ！お前か！」

一方のナーノは、満身創痍のミカヤを庇いながら屑ヤミーを相手にしていると、徐に自分の抱く欲望に関してこう言って来た。

「ミカヤさん！僕もね、欲しいもんがあるんです。具体的に形に出来るものじゃないですけど！」

そう言いながら、屑ヤミーの一体を斬り捨てるナーノ。

「もうドッロドロの欲望まみれなんですよ、僕！でもね、一個決めてるんです！」

訝しげな顔で自分を見つめるミカヤに対して、ナーノは笑みを浮かべて自分が抱く絶対の掟を口にする。

「“自分の欲望は、万里一空出来ることからちょっとずつ”！」

「！」

ユーノはその言葉を聞くと、感心した顔を浮かべる。

「ただし、あともうひとつ！」

屑ヤミーを殴りつけたあと、ナーノは最も大事だと思っている事を口にした。

「“絶対に自分を泣かせることをしない”！」

「自分を・・・？」

「そう、他の誰でもなく自分。それだけ、言っておこうと思いまし

て♪」

ナーノの言葉を聞いた後、ミカヤは意を決したように満身創痍な体であることなど気にもしない様子で、落ちていた自分の刀を握りしめると一目散にその場から飛び出した。

ヴィヴィオは、ストライクアーツで屑ヤミーと応戦しながら走り去っていくミカヤを呼び止めようとする。

「ミカヤさん！」

「行かせてあげてよ、ヴィヴィオ姉ちゃん！」

「でも・・・！」

すると、それを聞いていたユーノもまたナーノの意見に賛同する。

「僕からもお願い。あの子は・・・――自分を助けに行ったんだ。」

「自分を助けに・・・」

「そう言う事♪」

ナーノはそう言った直後、腰の刀に手を触れると、魔力を集中させてから一気にそれを抜きだし屑ヤミーを一掃する。

〈Ｖｉｏｌｅｔ　ｓｃｒａｔｃｈ〉

屑ヤミーを一掃し終えると、ユーノスはナーノに大会が開かれてい

る場所を尋ねる。

「ナーノ。その大会が開かれている場所は分っているのか？」

「当然♪ヤミーが行くのは間違いないですし」

「だったら、大会を壊される前に早くに行かないとな」

「はい♪」

「みんなは取り敢えず、六課で待ってて。僕とナーノでケリをつけてくる」

「うん。じゃあ、ナーノの事はお願いね。ユーノ君」

「はは。まぁ僕が見てなくてもこのチート息子は心配ないと思うよ」

ユーノがそう言った後、なのはを始め一同は苦笑いを浮かべる。

「た、確かにそれは・・・」

「ユーノ先生2号って感じですしね・・・」

「う・・・姉としてのポテンシャルが急に無くなりかけているんだけど・・・」

ヴィヴィオは弟の実力の高さに急に自信を無くすと、その場にしゃがみ込んで暗い雰囲気を醸し出すと、見ていたナーノは心配になって近寄った。

「あああ！！ヴィヴィオ姉ちゃん沈まないで！！もっとスマイル♪スマイル♪」

前線メンバーは、こうも性格の変貌が激しいナーノと言う存在に、自分たちでもよく分からなくなっていた。

「このギャップは何なんだろうね・・・」

「まったくこのシスコン&ロリコン野郎が・・・！」

一方、その頃先に大会の会場へと向かって全力疾走をしていたミカヤはと言うと、抱いてしまった欲望と、そんな自分を罵倒する。

「（私は・・・・・大馬鹿だ！強くなれば、誰もが私を本当の剣士だと認めてくれるかもと。）」

『お前たちが全国大会で優勝したら、名のある天瞳流の剣士として育っていけるな！』

ミカヤの脳裏に蘇る師範テンドウの言葉と、ミカヤ自身が抱いた自惚れ。

「（師範は分っていたのだ・・・！強さばかりに捕われ、一番大切な事を見落としが違った自惚れた私を・・・！）」

ミカヤは会場に向かう途中、近道として森の中へと入り込むと、急な斜面を下って行き、あの時ナーノが自分に向けて言ってくれた言葉を思い返す。

「く・・・！」

『“絶対に自分を泣かせることをしない”』

その間にも、その森の中を同じように移動して大会会場へと向かうクワガタヤミーと、ミカヤの到着を待ち続けるテンドウと門下生たち。

「師範！あと１０分です！試合が始まります！！」

「（ミカヤ・・・――――）」

テンドウは時間を気にしつつ、彼女が試合に間に合うことを祈るばかりであった。

そして、一足先にクワガタヤミーが会場近くまで足を運ぶ。

「壊す・・・メチャクチャに・・・」

と、その時だ。

クワガタヤミーの目の前に晴嵐を構えたミカヤが現れる。

「ダメだ！行ってはならぬ！」

「ぐあああ！」

クワガタヤミーは反抗的な態度で唸り声をあげ、ミカヤはそんなクワガタヤミーを見据えながら刀を構える。

「こんなこと、自分を許せなくなるだけだ！ずっと！おおおおおお

おお！！！！」

ミカヤは体中の魔力を晴嵐に集中させると、クワガタヤミー目掛けて天瞳流の奥義を叩きこむ。

「“天月・霞”！！」

だがしかし、それを受けても硬い外骨格に覆われたクワガタヤミーの前では何の意味も持たず、簡単に太刀筋を止められてしまうミカヤ。

「！」

そして、クワガタヤミーはミカヤの手を掴むと勢いよく放り投げる。

「ぐあああ！」

追い詰められたミカヤの元に徐に歩み寄るクワガタヤミー。

ミカヤは後ずさりをしながら覚悟を決め込む。

「（ここまでか・・・！）」

だが、クワガタヤミーがミカヤに攻撃を加えようとした直後、不意に飛んで来た銃弾を受けると、クワガタヤミーは後ろに倒れる。

「がああ！」

「！」

その光景に目を疑いながら飛んで来た銃弾の方向に目を向けると、そこ居たのはユーノ達と共に現場へと駆けつけたライジングハートを刀剣から銃へと変形させたナーノであった。

ナーノは間一髪のところでミカヤを助けることに成功し、安どの息を付きながら徐に近づいて来た。

「危なかったですね。ちゃんと自分を助けられました？」

「お前は・・・・・・ああ」

「へへ♪あとは任せといてよ、剣術小町」

そう言うと、ナーノはバックルを装備し、ミカヤを会場に向かわせると、ユーノと共にクワガタヤミーへと目を向け、ユーノは結界印を受け取る。

「ユーノ！来るぞ！」

「はい！」

そして、ナーノもまたパスを取出し変身準備を始める。

「さーて、始めてもいい？答えは聞かないけど」

二人はそれぞれのポーズをとってから、声を合わせて変身する。

「「変身！」」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

ナーノは変身を終えると、銃を構えてクワガタヤミーを狙い撃つ。

「お仕事開始だ」

〈Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｔ〉

ナーノが射撃による中距離攻撃でクワガタヤミーを追い込む傍ら、ユーノは逆刃刀を取り出し近接戦闘によるダメージを与えていく。

時を超えて今一つの時代に居合わせた過去と未来の親子。

そのコンビネーションは時を隔てようとも、一切衰えることなく正に絶対的とも言えるものであった。

それでもクワガタヤミーも負けずに二本の角から雷を発生させ、二人に攻撃を仕掛ける。

ユーノとナーノはその攻撃をどうにか躱すと、再び親子そろってクワガタヤミーに突っ込んでいく。

「「はああ！」」

二人の攻撃がクワガタヤミーに仕掛けられる中、気の上でその様子を窺っていたユーノスは不意にユーノの背後より飛んで来た怪人体のウヴァの姿を捕える。

「おおおお！」

「ユーノ！後ろだ！」

ユーノが振り返った瞬間、ウヴァの攻撃がクリーンヒットし、ユーノはその場に転げ回る。

「ぐああ！」

「お父さん！」

ナーノがユーノの事を気遣う中、ウヴァは鋭い爪を構える。

「邪魔をするなと言わなかったか？」

ウヴァの乱入により、戦闘は更に激しさを増していく。

◇

〈カリＳｉｄｅ〉

一方、別世界。

カリ・ユガファウンデーション会長カリ・ユガの方はと言えば、ユーノ達の戦闘の様子をモニターで窺っていたのだが、そこへちょうど春休みから戻って来たスカリエッティがプレシアと共に彼のオフィスに遊びに来ていた。

スカリエッティはカリに目を向けると、異様にテンションの高い様子でこう言って来た。

「ミスターカリ！エイプリルハッピバースデー！」

カリは真顔を浮かべながら、肩に乗せた人形に目を合わせて返事を返す。

「これはドクタースカリエッティ。随分と春休みを満喫されたようで」

「素晴らしかったよ。前々からの目的も果たせたしね。」

「これは私達からのささやかなお土産よ」

そう言うと、プレシアは手見上げとして持ってきた異世界のトーテムポールを彼の机の上に置き、カリは無言の見上げの品を一瞥してからまたモニターの方に目を向ける。

「・・・・・・」

すると、そんなカリに不敵な笑みを浮かべながらスカリエッティはユーノと戦う、竜神の寵児、ナーノのことを尋ねる。

「で。例の竜神の寵児はどうだい？もとい、ユーノ・スクライアの息子、ナーノ・T・スクライア君は？」

「現在戦闘中です」

スカリエッティはモニター画面に映って来るウヴァとクワガタヤミーと交戦中のナーノの姿に目を輝かせ、歓喜する。

「素晴らしいじゃないか！やはり同じアンゴルモアの力の余波を体

に受け継ぎ、次元世界最強と謳われるユーノ・スクライアの息子は、他とは出来が違うよ！君の予言は正解だったようだ！」

「さあ、それは。とりあえず、昨年失ったセルメダル５０００枚の補填をしなくてはなりませんから。」

「そのとおり！絆の完現術士ユーノ・スクライア。竜神の寵児ナーノ・Ｔ・スクライア。万全だよ」

事あるごとに意味深な言葉を残すスカリエッティ。

果たして、スカリエッティの真の狙いである欲望の破壊と再生が意味する事とは、その為にユーノやナーノ達がどう利用されてしまうのか・・・今から非常に心配である。

◇

〈ウヴァＳｉｄｅ〉

一方でグリードの一体であるウヴァは、新たに加わった未来からの使者であり、ユーノの実の息子であるナーノの登場に戸惑いを見せながらも、そんなナーノと交戦中であった。

「また妙なやつがあらわれたもんだな」

ウヴァの攻撃を得意のダンスで避けながら、ナーノは少し距離を置く。

「よろしく♪」

〈Ｄｒａｇｏｎ　ｌｅｇｓ〉

そして、脚部に魔力を集めると、その途端ナーノの脚は竜のそれを象ったような重厚なフォルムへと変貌し、ナーノは驚くウヴァに向かってその足を使った蹴り技を仕掛ける。

「は！」

「ぐう！」

「おらあ！」

「があ！」

ナーノはドラゴンレッグによる攻撃で、ウヴァの体を構成する大量のセルメダルを放出しては足に着けていき、更にそこから加速をつけると、銃口からバリアブルシュートの連射を叩きこむ。

〈Ｖａｒｉａｂｌｅ　ｓｈｏｏｔ〉

「おんどらあ！」

「ぐおおお！」

ウヴァは見た目によらず激しい攻撃を容赦なく仕掛けるナーノの力に圧されながら、大量セルメダルを放出させていき、うっすらと見えた彼のコアメダルを見たナーノはきょとんとした顔を浮かべる。

「あらっ？まっ、いっか♪」

ナーノは地面に落ちていたメダルと、両足のメダルを全て後ろにあるメダルタンクへと放り込むと、セルメダルは勢いよくタンクの中へと吸収されていき、入り損ねたものはゴリラカンが拾っては入れていく。

木の上でその様子を見ていたユーノスは、グリードでさえ一切動じることなく自分のペースで戦い続けるナーノの図太さとその強さに感服する。

「なるほど。竜神とはよく言ったものだ。あの強さは並みじゃない」

対するウヴァもまた、先ほどの攻撃がいい刺激になったのか、闘志を燃やす。

「おもしろい」

ウヴァはナーノの鎧目掛けて鋭い爪で攻撃し、ナーノは思わず声を上げる。

「があ！」

だが、それでもナーノも負けずにウヴァに戦いを挑んでいき、その二人の戦闘の隣ではユーノとクワガタヤミーの一騎打ちが行われており、ユーノスはこの機会に新たなコアメダルの力の発動を促した。

「ユーノ！防護服の中にあるカニコアを使ってみろ！」

「カニ？でも大丈夫なんですか？」

「あれはまだ俺にもよく分からぬ。だからこそここで使う価値があ

る！」

「了解！」

ユーノはユーノスの言葉を信じると、クワガタヤミーから少し離れ、防護服に収納されている黒のコアメダルのうち、カニのコアメダルの魂を引き出す。

〈Ｃｒａｂ　Ｓｃｉｓｓｏｒｓ〉

すると、ユーノの両腕に装着される重厚なカニのハサミを模した武器・シザーズハンド。

ユーノは装備したシザーズハンドを武器にし、硬い外骨格で覆われたクワガタヤミーの体を切り裂いていく。

「はっ！」

「ぐああ！」

クワガタヤミーの体をも切り裂くユーノの新たな力に、ユーノスやナーノも嬉々とした表情を浮かべ、ナーノは隙を突いてウヴァと距離を置くと、クワガタヤミーと戦うユーノにこう言った。

「お父さん！一発デカいの決めるから、ちょっと時間稼ぎお願いね♪」

「よし。任されよう」

ユーノは息子からの願いを聞き入れると、向かって来るクワガタヤ

ミーと引き続きハサミで戦い続け、ナーノはその隙に木の陰に隠れて準備を始める。

「逃げるな！」

ウヴァはナーノの元に走っていくが、それを見たユーノスがチェーンバインドを伸ばす。

「そうはさせるか！」

ユーノスがウヴァの足止めをしている間に、ナーノは体の中に流れる魔力を胸部に集中させ、新たな武器を構築させる。

〈Ｃｏｓｍｏｌｉｇｈｔ　ｃａｎｎｏｎ〉

すると、ナーノの胸部に構築される竜の顔を模した巨大な大砲。

「ライジングハート。準備開始！」

〈Ｃｏｓｍｏ　Ｂｕｒｓｔ〉

ナーノは懐に忍ばせていた大量の特殊カートリッジを胸部に装填していき、魔力エネルギーをチャージし始める。

ユーノはその間に、ウヴァとクワガタヤミーの二体を相手にシザーズハンドで対抗し、ナーノの言われた通り時間稼ぎに専念していた。

ユーノが貴重な時間を作っている間に、ナーノは只管にありったけのマガジンを組み込んではエネルギーをチャージし、ユーノスはそんなナーノの行動に目を向ける。

「（なにやってるんだ。あいつは？）」

マガジンを装填するたびに聞こえるライジングハートの機械音。

〈Ｃｏｓｍｏ　Ｂｕｒｓｔ〉

ユーノは少々時間のかかり過ぎているナーノの行動に焦りを覚え始め、ナーノに言葉をぶつける。

「ちょっと！まだなの？！」

「もうちょい」

平然とした様子でそう言ったナーノは、マガジンを組み込みエネルギーを溜めこんでいく。

〈Ｃｏｓｍｏ　Ｂｕｒｓｔ〉

エネルギーが集束されるごとにコスモライトキャノンの砲門に紫色に輝く魔力が凝縮されていくが、ユーノもそろそろ押さえつけているにも限界に達していた。

「ナーノ！」

ユーノがそう言った直後、とうとうナーノは最後のマガジンを組み込む事を完了し、すべての魔力エネルギーの充填が完了する。

〈Ｃｏｓｍｏ　Ｂｕｒｓｔ〉

「おっしゃー！充填完了！」

ナーノは充填されたその巨大な魔力砲撃を発射するために、ウヴァとクワガタヤミーの方へと振り返ると、胸部から竜の口を模した砲門より強力なエネルギーを放出する必殺の「コスモライトシュート」で止めを促す。

〈Ｆｉｒｅ〉

「うらあああああ！」

ビームが飛んでくると、ユーノは危険を感じて素早くその場から離脱し、ウヴァも一目散に飛び去っていくと、残ったクワガタヤミーにその一撃がヒットし、クワガタヤミーは声を上げて爆発する。

「ぐあああああああ！！」

爆発したクワガタヤミーは大量のセルメダルとなって飛散する。

「よ～し！」

ナーノは早速クラインの壺で飛散したセルメダルの回収を行い、戦闘を終えたユーノはユーノスと共に安どのため息をついた。

「ふう。一時はどうなるかと思った」

そして、この戦いが終わった直後。

ミカヤもまた試合開始一分前と言うギリギリの時刻で到着し、道場に通う門下生や師範であるテンドウの前に現れた。

「師範！ミカヤ師範代が来ました！」

「そうか」

ミカヤの到着を耳にし、ひと段落と言った表情を浮かべるテンドウ。

門下の者達に連れられ、息を荒げながらミカヤはテンドウの元へと到着し、真っ先に頭を下げた。

「は、は、は、は、は・・・遅くなりました！申し訳ありません！」

テンドウはそんな彼女の律儀な態度に笑みを浮かべると、彼女の肩に手を乗せる。

「私は信じていたさ。必ず、お前が答えを見つけ出し、もう一度舞い戻って来ると」

「師範・・・」

「その瞳を見る限り、答えは見つかったようだな」

「――――はい」

清々しい顔でテンドウの質問に答えるミカヤ。

テンドウ自身も漸くこれで一つの荷を下すことが出来た。

「よし。ならば自信を持って行って来い。お前は我が天瞳流の柱だ！」

テンドウからの激励を受けると、ミカヤは真剣な眼差しでフィールドに舞い上がり、自分の手に握られた晴嵐を見ながら、ナーノが教えてくれた言葉を思い出す。

「（自分の握る剣に怯えぬ者に剣を握る資格はない――――――全く以てその通りだな！）」

そう思った直後、審判が試合開始の礼を促す。

「両者、礼！」

ミカヤは新たな覚悟と取り戻した剣士の真髄を胸に抱き、この試合に臨むのであった。

それから数時間後の機動六課。

ヤミーとの戦闘を終えたナーノはロビーのソファーで寛ぎながらヘッドホンで音楽を聞いていると、傍らでそれを見ていたフォワード陣はナーノの事に関してこう口にする。

「ねぇ・・・ナーノって・・・凄いのか型破りなのかよく分からないんだけど」

「少なくとも、強いことは確かね」

「それに、言うこともユーノ先生みたいですし」

すると、そんなナーノの元に父であるユーノが近づいて来た。

「ナーノ。今日はお手柄だったよ」

「へへ。こういう経験は、結構前からしてるしね。そうだ・・・お父さん」

「ん」

「お父さんは”自分を泣かすタイプ”だってことは、分かってるよね？」

「えっ？そうかな？」

「気づいてない振りするのが今も昔も変わらないな。ま、僕の勘も含むけど。」

ナーノはユーノにそう言った後、徐に立ち上がり肩を回しながら外の方へと歩き出す。

「そんじゃ、僕はラーメン食べに行ってくるから♪」

ナーノがラーメンを食べに行くと言って六課から姿を消した後、残されたユーノはユーノスに向かって思わずこう言った。

「なんかナーノって、ヴィヴィオとは正反対ですね♪」

「というか、お前の現身だな」

そして、今回そんなナーノによって最も救われであろうミカヤ・シェベルは、今日の大会で優勝した証であるトロフィーを道場に飾ると、今一度剣を構えて素振りを始める。

その最中、心の中で彼女は大事な事を気づかせてくれたナーノに感謝の意を表した。

「（ありがとう・・・――ナーノ）」

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

破壊と恐れとカニバサミ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はナーノの技・第一弾を紹介していこう♪」

「先ずはバイオレットバレット。紫色に輝く魔力弾を複数の敵にぶつける。その威力はかなりものだ。次に無数のディバインバスターを瞬く間に撃ち続けるディバイン・メトラバスター。最後に超広範囲に渡って集束した魔力を撃ち出し敵を一網打尽にするコスモライトブレイカー」

一「どれも規格外と言うか無茶苦茶と言うか・・・本当にこいつの実力はお前と一緒で半端ねェな」

ナ「へへ♪一護さんにそう言ってもらえると照れますね♪」

な「だけど、そんなに強い癖して基本射撃があなの！？お母さん絶対認めないんだから！大体誰なの、ナーノに射撃教えたのって！？」

ナ「今はまだ秘密。そのうち判るから。お母さんも僕のやり方にケチをつけないで」

なのはに対してはどうもドライと言うか余所余所しい言動のナーノ。

なのははユーノにこう言った。

な「ユーノ君・・・ヴィヴィオにはあんなに好かれるのに実の息子

はどうして私には冷たいのかな？」

ユ「僕としても、この歳頃の子供を持った経験がないから・・・第一男だしね」

一「気にするなってなのは。俺も大体あんな感じだったしよ」

な「ですけど・・・ちょっと寂しいです・・・」

不満が募るなのはであった。

魔導師図鑑ハイパー！

ナーノは、基本的に本を読むのが嫌いだ。

そのため、嫌いゆえの独特の症状を起こしたりする。

ヴィ「ナーノは子供のころ、本当に本とか読まなかったの？」

ナ「ヴィヴィオ姉ちゃんやお父さんから読み聞かせはしてもらったけど、自主的に読んだ事は無かったよ。大体、本なんて手に取るだけで僕駄目だったし」

ヴィ「え～～～本面白いよ。だったら、試にこれ読んでみたら。小説だけど」

ヴィヴィオは無限書庫から借りて来た一冊の本をナーノに手渡そうとする。

ナーノは躊躇した様子で仕方なくそれを受け取ろうとするが。

ナ「はぁ・・・僕こう言う活字ばっかりの本って言うのは・・・ぐおお！」

手に取った瞬間、頭に重く何かがのしかかる錯覚に陥るナーノ。

ナ「手に取った瞬間・・・頭がくらくらして・・・で・・・ページを開くと、熱が出て・・・二・三ページで・・・・・・・・・意識不明・・・・・・・・・が！！」

ナーノは本を手に取ったまま、後ろにひっくり返り目を回した。

ヴィ「だ、大丈夫なの！？しっかりして！」

ナ「う・・・！！本は勘弁願います・・・お姉さま・・・／／／」

切実なナーノの心境であった。

次回予告

両「みんな、元気か！わしは両津勘吉、公園前派出所の警察官だ！」

「派出所の大原部長が一人で蟹を喰いやがって！だがそのお蔭で部長が何の因果か知らないが変な怪物になっちまいやがった！」

「いよいよ次回は、こち亀とユーノ・スクライア外伝とのコラボだ！絶対見逃すなのよ！」

ユ・一「次回、ユーノ・スクライア外伝『橙のメダルとお巡りと甲殻類ヤミー』」

両「よろしくな！」

登場人物

ミカヤ・シェベル

声：　豊口めぐみ

２０才。ミッドチルダ南部にある抜刀術天瞳流第４道場の師範代。自分に向かって投擲された大型バスを、居合い抜きだけで真っ二つに切断できるほどの腕前を誇る。ＤＳＡＡインターミドルに過去７回参加しており、最高戦績は都市本戦３位入賞。チームナカジマ全員とスパーしており「凄い子達」と評価している。ノーヴェの事を「ナカジマちゃん」と呼んでいる一方で、ノーヴェからは「ミカヤちゃん」と呼ばれている。インターミドル選手からは慕われ尊敬されている。師範であるテンドウが試合に出させてくれないことに焦燥を抱いた彼女は内に秘めた「認められたい」という願望のもとで、「強さ」と「大会の破壊」という二つの欲望を抱いてしまうが、結果的にナーノに剣への恐怖を気づかされ、大会に出場し見事優勝を果たす。

使用魔法

水月

天瞳流抜刀術居合で、刀を居合いのように払って攻撃を繰り出す。

水月・二連

天瞳流抜刀居合の構えから斬り払って相手の水月を狙い、　さらに上から相手の水月に斬りつける。

月輪

天瞳流抜刀居合の１つ。

天月・霞

天瞳流抜刀居合の技で、刀を振るうことによって　大型バスでさえ一刀両断にしてしまう。　作中では奥義と語っている。魔力をほとんど使用せず威力が高いのは、刀の鋭さと重さがあるからこそである。

テンドウ・ガルバルディ

声：　森川智之

抜刀術天瞳流第４道場の師範であり、ミカヤの実の師匠。技術だけに捕われ世間から持て囃されるミカヤが剣への恐怖を忘れていたことに危惧を覚え、彼女を敢えて大会に出さないと突き放す一方で、本当は誰よりも彼女の事を信頼し、出場手当を用意しその時を待っていた。

登場ヤミー

クワガタヤミー

声：檜山修之

身長　２０５？　体重　１０９？

特色／力：硬い外骨格

ミカヤ・シェベルの内に秘められていたもう一つの欲望によって、カブトヤミーから分離して生まれた。カブトヤミーと同様、身体が硬い外骨格で覆われており、高い防御力を誇る。ミカヤの欲望に従い、道場の師範である橋本の結婚式を襲撃しようとするが、ユーノとナーノによって防がれる。その後、戦いに加わったウヴァと共にユーノとナーノを苦しめるも、連係攻撃によって倒される。

橙のメダルとお巡りと甲殻類ヤミー（前書き）

両「人間まちがいとキチガイはどこにでもあるもんだ」

橙のメダルとお巡りと甲殻類ヤミー

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

次元世界最強の男・ユーノ・スクライアの意志と強さを引き継ぎし
未来からやって来たナーノ・T・スクライア。

謎の声より与えられた使命を果たすため、ナーノはユーノ達と協力
しグリーとヤミーの脅威に立ち向かう。

巨大な欲望の器を持つのは、グリードか?それともユーノか?ある
いは、ナーノなのか?

運命は徐々に加速し始める。

〈Ｆｉｒｅ〉

ナ「うらあああああ!」

クヤ「ぐあああああああ!!」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈鬼太郎Ｓｉｄｅ〉

ある日の真夜中。

スクライア商店従業員、桃谷鬼太郎は月明かりに照らされながら酒を酌み交わしていた。

「ふう～～～」

酒を少しずつ飲んでは深い息を漏らす鬼太郎。

その時、不意に背中から感じた身体を貫く感覚に違和感を覚え、徐に体を見てみると、何者かが自分の背後から刀を突き刺し、命を狙って来たのだ。

鬼太郎は口から吐血すると、薄れゆく意識の中で隠された敵の覆面をはがそうとした。

「ぐ・・・がは・・・て・・・てめぇは・・・・・・」

鬼太郎が倒れる間際にその覆面をはがすと、姿を露わにしたのは真

顔で自分に目を向けていたユーノの息子、ナーノであった。

ナーノは鬼太郎を殺害すると、刀を構えて徐にこう言った。

「――――――モモタロスの死体が４０１６体」

そ・これはナーノの夢なのである。

ナーノは夢であり、安眠の為に数える対象でもある鬼太郎と言う鬼太郎を自分が思い描く方法で次々と斬り殺してはその数をカウントし、鬼太郎はその都度血を流して声を上げる。

「ぐおおあああ！」

「モモタロスのバカの死体が４０１７体。」

「いえええええ！！！」

「モモタロスのボケの死体が４０１８体。モモタロスのアホウの死体が４０１９体。」

「がああああ！」

「モモタロスの案畜生の死体が４０２０体」

そんなことを繰り返し必死で眠ろうとするナーノだったが、次の数を数えようとした時には既に朝を迎えていることに気づかされる。

「モモタロスのクソッタレの死体が・・・」

ベッドの中でそう数えようとした直後、ナーノの事を態々起こしに来た本物の鬼太郎が解放した烈火を振り上げ今にもナーノを殺したいと言わんばかりの表情でこう言って来た。

「ひ・つ・じを数えろ!!」

「あれ?もう朝か・・・全然眠れなかったチクショー」

「眠れるわけねーだろ!んなグロテスクなもん数えて!」

「なに?わざわざ起こしに来てくれたのかい、４０２１号」

「誰が４０２１号だ!!」

ナーノは眠気が覚めない様子で目を擦りながら鬼太郎を罵倒し、鬼太郎のストレスメーターが上昇し続けるが、そこは大人な鬼太郎。学習を積んでナーノの罵倒にも我慢を覚えると、烈火を鞘に納め少々不機嫌な態度でこう言った。

「さっさと面洗って着替えろ。店長の御呼出しだ。」

「お父さんが?」

ナーノは訝しげな顔を浮かべると、パジャマを脱ぎ洗面所で洗顔と歯磨きを澄まし、鬼太郎に言われた通りユーノの元へ向かうのであった。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

その頃、春休みから戻って来た広域次元犯罪者「ジェイル・スカリエッティ」はアルハザードの研究室にて、アリシアと破面魔導虚リヴァイアサンに注視されながら、休暇を利用して持ち帰ってきた小箱を取り出す。

「ねぇねぇ、ドクター。それな～に？」

「ふふ。これはね、春休みを利用した異世界旅行で持ち帰った貴重な代物だよ。アスモデウスの入念な調査でようやく手に入れることが出来たんだ」

そう言うと、スカリエッティは早速小箱の中を開け、そこに入っていたものを二人に見せる。

アリシアとリヴァイアサンは中に入っていた代物に目を疑う中、顔を見合わせ口を開く。

「これって・・・コアメダル！？」

スカリエッティが持ち帰ってきた代物・・・それは彼らが今まで一度も来たことがない橙色に輝くコブラ・カメ・ワニのエンブレムが象られたコアメダルであった。

リヴァイアサンは疑心暗鬼な様子でスカリエッティに質問。

「しかしドクター。コアメダルは全部で５種類だけの筈では・・・」

そう問い質そうとした直後、三人の元にプレシアが戻って来、彼女

は研究所の方へと呼び出したグリードの一体、アンクの到着を報告。

「ジェイル。アンクが来たわ」

「おおそうか。」

スカリエッティは不気味な笑顔を浮かべながら、アンクが姿を現すのを心待ちにし、暫くすると呼び出しを喰らったアンクが彼の元へと歩み寄ってきた。

「俺を呼び出すとは、それ相応のことなんだろうな・・・・・・でなきゃわざわざこんなことろへは来ないぞ」

「ふふ。そう血走った顔をすることはないよ。今日は君にお土産を渡そうと思ってね。」

「土産？」

スカリエッティは怪訝そうな顔のアンクを見ながら、小箱に入っていた橙のコアメダルのうち一枚を取出し、それを彼に手渡した。

「君へのお土産だ。異世界旅行の」

アンクは渡されたコアメダルを目にした途端、目を見開きその存在に疑問を抱かざるを得なくなった。

「何！？」

スカリエッティはそんなアンクの顔を覗きながら徐に呟く。

「封印されていた第８のコアメダルだ。」

「第８のコアメダルだと・・・――」

スカリエッティが意味するこの言葉の意味とは何なのか？

この後、コアメダル誕生とそれに纏わる王の存在が明らかとなる。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

アンクが未知なるコアメダルをスカリエッティから渡された同時刻の機動六課。

ユーノ・スクライアの師匠であり伝説の死神代行の黒崎一護が、妻の織姫と紺を引き連れ機動六課へと遊びに来ていた。

一護はユーノから、自分の息子であるナーノの存在を赤裸々に三人に暴露すると、多少の驚きは合ったものの、三人は笑顔を浮かべ、一護に至っては弟子の門出を祝うかのように満足げな笑いを浮かべた。

「ははははは！！！！そうか、そうか！そりゃめでたいな！お前もようやく本当の意味での父親か。しかも結婚初夜でやるとは、流石は淫獣フェレット！」

ユーノは顔を赤く染め上げながら、気恥ずかしそうに一護達に弁解する。

「褒めてるようで貶さないで下さいよ／／／僕だって未だに信じられないというか・・・なんかこう・・・実感わかないんです／／／」

「そりゃそうだよな。お前ってホント晩生だからよ。それでよくキスが出来るもんだ。いやホント大したもんだ！」

「う／／／／／」

確かに、ユーノもなのはも双方超がつくほどの晩生同士であり、なぜ今までの間ラブラブオーラを醸し出しながら平然と幼馴染と名乗ってこれたのかが不思議なぐらいで、恋人と言う風に進展し、手をつないだりキスを出来るようにはなったものの、はっきり言わせて貰えばまだまだ晩生だった。

すると、ここで織姫が輝かしい笑顔を向けながらユーノに尋ねる。

「で・ユーノさん。なのはさんとの結婚式はいつで？やっぱりジューンブライド♪」

「お、織姫さんまで止して下さい／／／まだ僕となのはも心の準備と言うか・・・それに万が一そう言う流れになった場合、海鳴の士郎さんと百合女（フェイト）がどういう反応をするか」

敢えてフェイトの事は、百合女と表記していることから解る様に、作者重要はユーノを蔑し、ユーノからなのはを奪い、なのはに絽ってばかりいる金髪女の事が昔から嫌いなのであった。

「ああ。士郎さんは昔気質なところあるからな。ありゃ相当めんどくさいことになるな。」

「問題なのはフェイト姐さんか・・・いい加減百合百合言うのは止めればいいのにな」

「別に一般的にそう言われる訳じゃありませんが、作者の重要さんが異常なまでにフェイトが嫌いなだけですから。ほら、あの人根っからの純情派だし、何よりその声優の水樹奈々が嫌いですから」

「声優同士で百合百合言いやがって。たく近頃の顔出し声優はこれだからいけねー。都築も都築で、ユーノの事蔑にしやがってったく・・・！」

リリカルなのはの作者である都築の描く現実的でありながらファンタジー風味の混ざった世界観は大変よろしいのであるが、その作者が考える同性愛や百合を中心とするアンバランスな男女比率を始め、恋愛要素を排した作風もまた重要大事から言わせれば異端と呼べるべき要素であった。

だからこそこの小説では、排除されがちなそれらの要素を取り入れこうしてユーノを主人公にし、チート設定ながらもバランスを重視して物語を展開しているのである。

と、ここで話の流れを聞いていたコンが大声を上げて切実な訴えを起こす。

「おおい！だったら俺だって久保帯人に無視されてるぞ原作！！！」

各々がそんな談笑で盛り上がりを見せていると、四人の元に呼び出しを受けた竜神の寵児こと、ナーノ・T・スクライアが登場しこう言って来た。

「何の討論会やってるのさ、みんなして？」

「あ・ナーノ♪来たか」

ユーノがナーノの到着を確認すると、一護達は早速その目で初めて見るナーノの姿を注視し、二人の息子であることを証明する要素である紫と緑のオッドアイ、更にはなのはの髪の色と同じ茶髪の髪を持つ少年の姿に目を丸くする。

「こいつが・・・お前の息子！？」

「はい。初めまして、２６歳の一護さん♪ユーノ・スクライアの息子のナーノ・Ｔ・スクライアです。過去でも未来でもお父さんからはお話は伺っていますし、何より何度か対戦したこともあります。いや～～～伝説の死神代行にこうして過去でも遭えるなんて光栄だな♪」

ナーノはそう言葉を交わしながら一護の手を握りしめると、一護はナーノからべた褒めを受けた事で機嫌をよくしたのか、ナーノの頭をなでながらこう返す。

「お、そうか。なんだよ意外とこいつ可愛いじゃねぇか～♪」

織姫はそんな一護の姿を微笑ましく覗き込み、コンは舌打ちをする。

「ははは。あなたったら機嫌よくしちゃってる♪」

「け！現金な奴だ」

ナーノは一護の機嫌を獲得することに成功すると、気になっていた

ことを尋ねた。

「わざわざ遠路はるばるミッドまで、今日は何の用ですか？」

「お前の事ユーノに聞いてな、ちょっくら愛弟子の様子見と一緒にナーノにも会ってみたくなったんだ」

「そうですか。ああ・・・ちょっと失礼します！」

「？」

ナーノは懐からくしを取り出すと、手鏡片手に自分の寝癖を入念に直し始めた。

「いや～～～起きたばっかで寝癖が直っていなくて。ははは♪」

飄々としながらもその真意の掴みようが見えにくいナーノを、一護達は呆然として伺い、ユーノの方へと振り向くと同じく呆然とするユーノに尋ねる。

「なぁユーノ。お前とはどうも性格的な面からして似てるとは思えないんだが・・・なのはもこんなんじゃねぇだろ？」

「う～～～ん、一体誰に似たらこうなるのでしょうか？」

未来の息子の性格ばかりは、今のユーノでも何とも言えないものであった。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

さて、アルハザードのスカリエッティの元へ呼び出しを受け、橙色のコアメダルを授かったアンクは鼻で笑いながら、スカリエッティに鋭い目を向ける。

「は。やっぱりな。無くなったコアメダル・・・――――そいつはお前が持ってたんだな？」

スカリエッティはそれを聞くと、徐に席から離れる。

「その件について、今ここで全てを説明する気はない」

「ち。おいそれよりも・・・・・どういう意味だ。その第８のコアメダルってのは？俺もそんな事実は初耳だが」

アンクは、これまで一度も目にしたこのない謎のコアメダルと、スカリエッティが口にした意味深な言葉の意味を問いただそうとすると、スカリエッティは背中に手を組むと、次のように語り出す。

「やはりそうか。君達グリードが作られたのは今から９５０年前だが・・・――――それ以前にプロトタイプ的にコアメダルが作られたということまでは知らなかったようだね」

「俺達が作られる以前にだと？」

「――――コアメダルが作られた９５０年前。所謂古代ベルカの時代、ミッドチルダにはその名を馳せた三人の王がいた。武技において最強と称された私の夢の一つだった“聖王のゆりかご”の聖王、『オリヴィエ・ゼーゲブレヒト』。“シュトゥラの覇王”と言われた『

クラウス・Ｇ・Ｓ・インクヴァルト』。マリア―ジュの核を体内から無限に生成する能力を秘めていた“ガレアの冥王”、『イクスヴェリア』。」

彼らの詳細に関しては、『魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄ』並びに、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳサウンドステージＸ』を参考にしてください。

「で、何が言いたい？」

「世間にその名の知られているこの三人の王たちだが、もう一人・・・ミッドチルダには非常に欲望の深い王がいたのだよ。その王こそが、君達グリードを作り出した張本人でもあることは、知っているだろうアンク君！」

「！まさか・・・」

アンクの表情がスカリエッティの言葉で一変する。

スカリエッティは不敵な笑みを浮かべると、グリードをこの世に誕生させ、欲望の王とさえ異名をとったその人物の事を語り出す。

「そう。その王は、魔法千城の異名をとる『マラケシュ』において、“欲王”と呼称され、古い文献を調べると・・・――今挙げた三人の王の力を以てしても敵わなかったという伝説の英傑が！その王の名は――――『デュード・ガリカニスム』。９５０年前、君たちのコアメダルよりも前に、科学者たちが創り出した旧式のコア三種を封印した・そして・・・初めて君たちのコアメダルの力を使いオーズとなったもの！」

「・・・――――ち」

アンクは自分が封印された当初の事を思い出すと、思わず舌打ちをし、スカリエッティはアンクに目を合わせるとその手に握られたコアメダルのことで次のように提案する。

「アンク君。君ならこの状況が分かるはずだ。グリードが減ったからと言って安心はできない。彼らは欲望で進化する！第二のオーズであるユーノ・スクライアも、絆の力で更なる進化を遂げる筈だ！君の方も、そのコアメダルの力を使い、進化するのだよ！君の欲望である“強い体”の為に」

アンクはスカリエッティの話を裡に留めると、残りのコアメダル二枚も手に掴み、背中を向けながらこう言い貸す。

「・・・――――――まぁ。くれるって言うなら、貰ってやらんこともないが・・・話がうますぎる気もするな」

「疑っているようだね。無理もない。何しろ、我々は共通目的のための“同志”ではあっても、“仲間”ではないからね」

「は。当然だ。いずれ隙を見付けて、残りのコアメダルもアンゴルモアも全部奪ってやるよ。じゃあな」

アンクは受け取った三枚のコアメダルを右腕の中に取り込むと、スカリエッティの前から早々に立ち去って行く。

アンクがいなくなった後、スカリエッティは不敵な笑みを浮かべ声高に叫ぶ。

「ふふふ。面白いよ。君は本当に・・・面白い。素晴らしい！！」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

さて、グリードとヤミーの脅威がいついかなる場所で起きるか分からないこの次元世界全体ではあるが、多くの世界が春の初めを告げる４月の半ばを平和に暮らしている中、一護達の世界でもある地球にもこうして何も知らずに日常を送る者がいた。

東京都葛飾区亀有に位置する公園前派出所。

世間でも名の知られたこの派出所に勤める一人の警察官がいた。

男の名は、両津勘吉。

公園前派出所の巡査部長であり、今回ユーノ達とひょんなことが切っ掛けで知り合い、同時にヤミー騒動に巻き込まれる男である。

両津は派出所に勤務する同僚であり後輩の中川圭一、秋本・カトリーヌ・麗子、そして寺井洋一の三人に自慢げにあるものを見せびらかせていた。

「ははは！！どうだお前達！」

「「「おお！！」」」

三人が目の辺りにしたもの、それは両津が懸賞で幸運にも入手した福井県近海で獲れた新鮮な越前ガニがまるまる一匹、発泡スチロー

ルの中に収められていたのだ。

「凄いですね、先輩！どうしたんですかこのカニ？」

「万年金欠の両ちゃんがこんな高級なものどうして？」

「万年金欠は余計だ！実はよ、懸賞の応募はがきを出してたのをすっかり忘れていたんだが、その中の一通が当たったんだよ！」

「それでその懸賞の品が送られてきたと」

「ああ。見ろ見ろ、この光輝く越前ガニの甲羅！そしてこの八本に生えた足！中にはぎっしりと身が詰まってることは間違いないぞ！」

両津は嬉々とした顔で顔を埋め浮くす程にまで成長した越前ガニを手に取る。

「いいですね。早速今夜はカニパーティーですね」

「へへ。それまで少し腹をすかしておく必要がありそうだ。極限の空腹状態で食べるカニは想像を超えた美味さだ」

「変な事には頭が働くんだから」

麗子は両津の考えていることにいつも通りのツッコミを入れると、直後公園前派出所に肩で息をした様子で、一人のトラック運転手が走ってきた。

「お巡りさん！大変だ！トラックが電柱に激突して！」

「何！？」

「直ぐに行きましょう！」

「こっちです！」

両津たちは総出で現場へと急行し、派出所は一時もぬけの殻となった。

彼ら四人が派出所を離れて数分後、ここにこの派出所の巡査部長を務める両津の上司であり、同時に最も苦手とする存在・・・大原大次郎がやって来た。

「おはようみんな・・・ん？」

大原はいつも通りに挨拶を交わしたはずが、派出所の中には誰一人残っていない。

「なんだ誰もないのか？両津！中川。寺井。麗子君もいないのか？」

気になった大原は奥の方へと進み、休憩室の方を除くもやはり誰もいない。

と、その時大原は給湯室の方に置かれていた例の発泡スチロールに目を向ける。

「お？これは・・・・・・」

蓋を開けると、目の前には両津が懸賞で宛てたカニが収められていた。

「これは！カニじゃないか！？一体どうしてこんな高級な・・・・・・はは～んそうかそうか。先日のゴルフコンペの時の副賞だな。いや～それにしてはカニとは随分太っ腹な！あ！両津に見つかるとまずいからな・・・・・・誰にも見られずこっそりと――――――」

この時大原は、このカニがあろうことが自分のゴルフコンペで優勝した際の副賞であると勘違いしてしまい、両津に先を越されないうちにこのカニを食してしまおうと考え、年にそぐわない食欲でこのカニを全て食べつくしてしまったのだ。

カニを食べ、両津たちが戻るまでの間派出所内で通常勤務に従事していた大原が時計を気にしながら彼らが戻って来るのを待っていると、自分がここに来てから2時間後、漸く両津たちが現場から戻って来た。

「ふう。一時はどうなるかと思ったな」

「でも、トラックの運転手も軽い怪我で済んでよかったですね。」

「ホントついてたのね」

大原は戻って来た四人の話し声を聞くと、安心した様子で声をかける。

「おう、みんなしてどうした？」

「あ・部長さん」

「ちょうど路地裏の方でトラックが電柱と激突して、みんなで現場

に行ってたんです」

「そうか。で、どうだった？」

「運転手側も命に関わる怪我はしていませんでした。」

「そうか、それなら良かった良かった。」

と、そんな時だった。

公園前派出所の前に、一台の運送業者のトラックが停車し、中から降りてきた運転手が積み荷を持って派出所内に入ってきた。

「ちわ～！大原大次郎さん。御届け物です」

「何？部長にだと？」

訝しげな表情で大原を始め、両津たちもその荷物に目を向け、気になった大原が早速中身を確認すると、それは衝撃的なものであった。

「これは！」

大原が目にしたのは、なんと先日のゴルフコンペの副賞である北海道産の乳牛からとれた父を加工して作った特製のチーズであった。

中川はそれを見ると、苦い顔を浮かべる大原に横でこう言った。

「ああ。先日のゴルフコンペで部長が優勝した時の副賞品ですね。北海道さんの牛からとれたミルクを加工したチーズだなんて、いいですね」

それを聞くと、両津は更にこう言った。

「はは。大したことないな。儂なんかもっともっと高級なカニだからな！」

両津の発言を聞いた瞬間、大原は柄にもない動揺を見せる。

「な！カニだと！？」

「ん？どうして部長がそんなに動揺してるんですか？」

「あ、いや！何でもない！！」

大原はこの時、自分が両津の代物であったカニを自分の物だと勘違いし、一人で食してしまったことを深刻にとらえる。

「（なんだと・・・ということはあのカニは儂のじゃなくて、両津の！？え・・・てことはこっちが儂のだということは・・・儂は両津のカニを喰ってしまったということに！！！）」

すると、その時両津の腹が頃合いを迎えてなり始めると、何も知らない両津はお腹をさすりながら徐に給湯室の方へと向かう。

「へへ。さぁてさて・・・そろそろ頃合いだから、カニちゃんの脚をチューチューと吸いながら一杯いこうかな・・・・・・・・・・あああああああ！！！！！」

給湯室に向かった両津はこの世の終わりとも言える絶叫を上げ、思わず中川たちは耳を疑った。

「せ、先輩!?」

「両ちゃんどうしたの?」

大原以外の三人が両津の元へ向かうと、大原は青ざめた表情で冷や汗を浮かべる。

「い、いかん!!バレたか!」

大原はあとで待ち受ける両津のしかしを想定し、足早に派出所から姿を消してしまう。

そんな部長の仕業だとは露知らずの両津の方はと言えば、ムンク作『叫び』にも似た絶叫を醸し出す表情で目の前に映る中身だけが綺麗に食い尽くされた無残なカニの姿を目の当たりにする。

「ない!!!!!!!!!!!!!!わしのカニちゃんが・・・カニちゃんが・・・!!!!」

「ホントだ。綺麗に全部食べられてるね。」

「しかし誰なんですかね。こんなことするの?」

すると、両津の野生の勘が鋭く一人の男にターゲットを絞る。

「は!まさか・・・部長!!わしのカニを・・・――――!!」

両津が急いで大原の元に向かうと、派出所の中には既に部長の姿は何処にも見受けられなかったのだ。

「なあ!?部長の奴!!!やっぱり一人で喰いやがったな!!」

両津の甲高い叫び声を外の方で聞きながら、夕暮れの道を年にそぐわぬ走りで駆け抜ける大原は、もう必死であった。

「いい、いかんいかん!!両津の奴!完全に儂を恨んどるぞ!!あいつの食べ物に対する恨みは並み一通りじゃない!!」

大原はそう言いながら、ただ只管に両津の魔の手から逃れるために亀有の道を爆走する。

だが、この時そんな大原に目を付けた一体の謎のグリードがカニの意匠を持つセルメダルを手に取りながら、建物の背後より彼を狙っているなどこの時・・・誰も気づいてなどいなかった。

「――――――同族・・・増やす」

果たして、このグリードの正体は!?

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

やがて夕方を迎えた次元世界の一つ、第一世界ミッドチルダ。

機動六課で通常教導と内勤を終えたなのはは忽然と姿を消したユーノとナーノの事が気になって、はやてのもとに相談に行くと、はやては二人が一護に連れられて食事に出かけて事を伝えた。

「え？ユーノ君、ナーノと一緒に一護さんと？」

「いや～～～すっかり話しが盛り上がっちゃったみたいでな、三人して地球の方まで飲みに行ったで。あ・勿論ナーノは未成年やからお酒飲む心配はあらへんよ♪」

「そうなんだ。それにしてもナーノったら・・・また私の訓練サボって。こっちに来てから一度も訓練場に来たことないんだよ～～～！」

ナーノは相変わらず母親のなのはに対しては消極的かつ余所余所しい態度で臨んでおり、これまでいくらなのはが呼びかけてもナーノは一度もフォワード陣との訓練に参加した覚えはなく、一人自主トレに励んでいる。

なのはにとっては、この現状は非常によろしくないものであった。

そんななのはの不満を聞き、はやてはナーノの事でこう言った。

「珍しいもんやな。なのはちゃんの訓練に参加したがらない魔導師ってのも。いや、なのはちゃんに否定的な子供っていう感じか・・・」

「ねぇ。私・・・なんとなくだけど、ナーノから凄く距離を置かれてるような気がするんだ。あの子・・・ユーノ君やヴィヴィオの前じゃ気さくなのに、私の前だと人が違ったように冷たい視線で見るというか、余所余所しいというか・・・」

「・・・――――」

徐々に曇りゆくなのはの顔を真摯に見つめながら、はやてはその後もなのはの話に耳を傾ける。

「未来で何があったのかはまだよく分からないけど、少なくとも私って・・・ナーノにとっては母親でありながら、母親として見られてないってことかな？」

話しを聞き終えると、はやてはなのはに微笑みかけ自分の考えを口にする。

「・・・それは考え過ぎやでなのはちゃん。あの年頃の男の子いうんは、ちょっと母親の小言が口うるさく感じる時なんよ。」

「そうかな。私口うるさいほどナーノと喋ったことまだないけど・・・実際、ナーノは私の前にはあんまり姿見せないし」

「いずれにせよ、気ばかり焦ってもしゃーないで。根気よく、ゆっくりとな。大丈夫や。ヴィヴィオの事、しっかり育てられるんやから、安心していつも通りや！」

はやての激励を受けると、なのはも少し気持ちが楽になり、笑顔を浮かべる。

「ありがとう。それ聞いたら、ちょっと気持ちが楽になったよ」

「そう言ってもらえると、友達としては嬉しい限りや。」

しかし、この時なのははまだ気づいていなかった。

こんな自分に対してナーノがどう思っているかなどと言うことに―

―――――

◇

〈地球Ｓｉｄｅ〉

では、そのナーノの方は今どこで何をしているのかと言えば、先ほどの発言から合った通り、ユーノと一護に連れられ地球にある一護の行きつけの焼き鳥屋に飲みに来ていたのだ。

ナーノはこういう雰囲気にも慣れていたのか、あまり動揺を醸し出さずにカウンターの席で、注文の品が出されるのを待っていると、店主であり一護とユーノの知り合いの常さんが出来たての焼き鳥をナーノに出した。

「はい、お待ちどうさま」

「わっは！ありがとうございます。じゃあ、いただきまーす♪」

ナーノは嬉々とした顔を浮かべ、早速目の前の焼き鳥を被りつき、その味を絶賛する。

そして、そんなナーノの隣ではビール片手に一護とユーノがグラスを手に取り乾杯。

「まぁ、偶には一緒に呑まないとな」

「そうですね。しかし僕の場合、いくら呑んでも呑まれない・・・全然酔えないんですよね」

「お前はホントあの時から酒強いもんな。ウィースキーなんて、軽くボトル一本開けてもまるで酔いつぶれないしな」

「昔から、スクライアは遺跡発掘をする生業上、そう言った毒に対する体制は幼少のころから嫌でも鍛えるものですから・・・でも酔えないと酔えないで他の人の管に付き合うのが面倒なんですよね。なのはなんか、もともとそんなに強くないですから、ちょっと飲んだだけで泥酔ですよ。それで酔った勢いで僕を押し倒したり、顔嘗めてきたりと・・・大変でした」

こう見えて、既に２４を迎えているユーノはなのはと一緒に何度か夜のデートで酒場に足を運び、カクテルなどを飲んだことはあるが、なのはの場合は一杯だけならまだしも、それが起爆剤となって二杯・三杯と続くと完全に良いが全身に回ってしまい、口では言えないようなことを平気でユーノにしてきたことも多々あったらしい。

ユーノはその都度、嬉しさと同時に多少の嫌気も覚えたことがあった。

そんな話を聞くと、一護はビールを口に注ぎながらその絶え間ない苦労を背負うユーノの性格に労いの言葉をかける。

「いろいろ苦労してるんだな、今も昔も。お疲れ」

「はは。なのはなら可愛いからいいですよ。でも流石に目の前で吐かれそうになったときは焦りました。もろ汚物が口先から出かかってましたし・・・」

「そりゃキツイよな・・・・・・取りあえず、今日は久しぶりに師弟同士飲もうや！ナーノとも、もっと親睦深めたいしな！」

一護はそう言いながら、自分の隣に座って焼き鳥を貪るナーノの肩に手を乗せ、ナーノも笑顔を浮かべる。

「はい♪今日はわざわざありがとうございます！」

三人はその後も談笑を繰り返し、話を盛り上げる。

そんな三人とは対照的に、偶然にも同じ店に飲みに来ていた両津はすっかり酔いつぶれた様子で、大原に食されてしまったカニの事を考えながら涙を流していた。

「チクショー！！部長の奴～～～わしの・・・わしのカニ・・・うううう／／／／／」

両津の管につき合わされながら、同僚である本田速人・ボルボ西郷・左近寺竜之助の三人は苦い表情を浮かべ、本田は机に突っ伏す両津を慰めの言葉をかける。

「先輩そんなに泣かないで下さい。」

「うるせー！！お前には下町の小市民のロマンなんざ・・・一生分からねぇんだよ！！！！！ううううう／／／／わしのカニ／／／／／／／」

「両津。食われてしまったカニの事はどうしようもないだろう。さ、今日は呑んで忘れようや」

「く～～～／／／／すまねぇ～～～／／／／」

ボルボから慰めの言葉と酒を貰うと、両津はグラスの中の酒を一気飲みし、すべての憂さを晴らすつもりで飲み続けるのであった。

一方、そんな両津のカニを食べてしまい罪悪感を覚えていた大原の方はと言えば、帰宅途中亀有商店街を立ち寄り一人真剣に考えていた。

「ふう。儂としたことが・・・なんとも恥ずかしいことをしてしまった。今回に限っては、非があるのは儂だな・・・・・・」

基本性根が真面目な大原は、何とかして両津の機嫌と恨みを晴らして貰おうとあれこれ思考を巡らせていると、そんな時偶然にも大原の目にある光景が映ってきた。

「さぁいかかですか！今ならお安くなってますよ！」

大原の目に映って来たのは、地元の客を相手に季節もののカニを売ろうとしている魚屋の店主の言葉と、一万九千八百円と書かれたカニであった。

大原はそれを見ると、ほくそ笑みこれを償いの品として購入することを考えた。

「まぁ。偶にはあいつにもいい思いをさせてやらんとな。儂自身の償いもかねて」

大原は早速カニを購入しようと店に近づいて行くが、そんな大原の事を付け狙っていた謎のグリードが建物の背後より彼の後頭部目掛けてセルメダルを一枚放り投げる。

「同族・・・増やす」

投げられたセルメダルは真っ直ぐな軌道を描いて、大原の頭に出現した投入口に投下され、大原はその直後違和感を感じて声を上げる。

「ぐあ！」

そして、身体から感じた胸を引き裂くような痛みに胸を押さえ膝をつく。

「な・・・なんだ・・・これは・・・！！おおお！！オオオオオオオオオアアアアアア！！！！！」

大原は商店街の中心で大声を上げると、市民の眼差しを一身に受けながらその姿を白ヤミーの姿へと変貌させていき、一人の女性が変わり果てた大原の姿に悲鳴を上げる。

「キャー！！」

この通報はのちに亀有署を始め、葛飾区内の警察署すべてに通報されることになるが、取り敢えず今は両津の方を先に見ていこう。

すっかり良いが全身に回り、次から次へと酒を胃の中に入れていた両津はすっかりカニの事など忘れた様子で、酔いつぶれ寸前の状態でほろ酔い気分の残りの三人にこう言って来た。

「ぶっは～～～！さぁて、ぼちぼちラーメンでも食って帰るか。」

「先輩、いいですねラーメン！」

「おーい、おやじラーメンはないか？」

両津がそう尋ねると、申し訳なさそうに常が言う。

「すいやせん、ラーメンはちょっと・・・」

「あるわけねぇだろうが。」

「河岸かえようぜ、両津」

すると、この時偶然にも両津の声を聞いたユーノは後ろを振り返る。

「あれ？」

「どうした？」

「ねぇ一護さん。あの人たち・・・なんか見覚えありません」

「え？」

一護はユーノにそう言われると、ユーノと同じ目線に合わせて顔を赤くする両津たちの姿を目の当たりにし、意外そうな顔を浮かべた。

「あ・・・そう言われればどっかで・・・――」

二人が両津の顔を見、頭の中で引っかかるもやもやを解決しようと腕組みをしていると、不意にナーノが両津たちの元へと近づいて行きこう話しかけてきた。

「ふふ♪お巡りさん」

「ん？」

「僕がラーメン作ってあげようか？」

「え？」

一瞬目を丸くする両津たち。

そして、ナーノの言葉を耳にし、驚きの表情を見せるユーノ達。

「な、ナーノ！？」

「お、おいナーノ・・・」

「僕もラーメン食べたいと思ってたんだ。」

あたふたする二人を余所にナーノがそう言うと、両津はナーノを見ながら徐に尋ねる。

「お前、料理人か？」

「いやそうじゃないけど、ラーメンならかなりのもんを作ります。お父さん、僕がお金出すから近くのコンビニでインスタントラーメンを買って来て。」

「なぬ！？」

ユーノは思わず声が裏返り、聞いていた両津たちは甚だ可笑しくなってしまう。

「けっ。何だよインスタントかよ。」

「それならオレでも作れるぜ！」

「まぁそう言わずに食べてみなよ、僕のおごりだから。常さん少し調理場貸してくれません？」

「へ・・・へぇ・・・」

常はナーノの要求に圧されるかのように素直に許可してしまい、更には両津たちもナーノのおごるという言葉に機嫌をよくしてきた。

「おごりだって？」

「だったらインスタントでも文句ないや！」

笑いを浮かべる酔いが回った両津たちとは対照的に、いたって冷静な一護とユーノは念話越しにこう言った。

「（おいユーノ。何のつもりだあれ？）」

「（僕に言われましても・・・まだナーノの考えてることはよく分からいですから）」

ユーノはそう言いながら、調理場で着々と準備を進めるナーノの様子を見ながら、当初言われた通りコンビニでラーメンを買ってき、ナーノはそれを受け取ると、手際よく調理を始めた。

数分後、ナーノの作り上げた特製のラーメンが出来、一見するとそ

れはラーメン屋のラーメンに披見を取らない仕上がりで、両津たちも思わず感心した。

「へぇ・・・インスタントには見えねぇな。」

「蕎麦屋のラーメンはかつおだしなんだ。それをイメージしてこの店の食材を使って僕なりにアレンジしてみたんだ。」

ナーノは仁王立ちでそう言い、一護とユーノはそんなナーノの手際のよい様子に共通の見解を抱く。

「「（随分と手慣れてるんだな、ナーノ・・・・・・）」」

両津は見た目はそうだが、味はインスタント思いつつゆっくりとラーメンを啜り出す。

「でも所詮味は・・・ん?・・・おー、うまいぞこれ・・・!」

両津はあまりの美味さに箸が止まる事は無く、本田や左近寺、ボルボもまた夢中でナーノが作ったラーメンに被りつく。

「ほんとだ!」

「うめぇー!!」

ナーノは自分の作ったラーメンに魅了される両津たちの姿に満足げな顔を浮かべる。

「へへ。そうでしょ、そうでしょ♪」

これには、一護とユーノもほくそ笑んだ。

「あいつやりやがる！」

「知らなかったな。良く出来る子だとは思っていたけど、まさか料理の特技があったなんて！」

やがて両津たち四人はユーノ達と意気投合し、談笑を交えながら綺麗にラーメンを完食し、満足げな様子であった。

やがて帰り支度を始めると、カウンター席のナーノの方へと両津が近づいて来た。

「ありがとうよ、ナーノ。本当にうまかったぜ。」

「それはどうも。」

一護は両津の姿をもう一度よく見ながら、ユーノと共に笑みを浮かべこう言った。

「しかしあんたがあの有名な両さんなんて、こんなことあるんだな！」

「なんだ。まるで儂の事をどこかで知っているような言い方にも聞こえるぞ」

「あはは・・・（いや実際知ってるんですけど・・・て言うか本田さんって、カトゥーンによって呼び出された単なる漫画キャラじゃなかったんだ・・・）」

ユーノは一年前のカトゥーン事件で召喚された漫画キャラの本田速人の事を思い出してしまうと、面と向かって本田に目を合わすことが出来なかった。

と、その時店のドアが勢いよく開けられると、血相を変えた中川が両津に声を上げてきた。

「先輩！大変です！」

「どうした中川。肩で息して？」

「たった今、亀有商店街に怪物が出たと通報がありまして！」

「「「！」」」

怪物と言う単語を耳にし、ユーノ達三人は目の色を変え、両津達もまた同様の反応を見せる。

「か、怪物！？」

「どういうことだそれは？」

「兎に角早く現場に来てください！僕達の力じゃ、手におえないんです！」

「わ、わかった！行くぞ、本田！左近寺！ボルボ！」

「「「はい（おう）！」」」

両津たちは勘定を手短に済ませると、中川と共に急いで現場へと向

かい、彼らがいなくなった後、ユーノは眉間に皺を寄せながら一護とナーノに向かって言う。

「一護さん。怪物ってまさか・・・」

「虚なら霊感のある奴にか見えねェ。だとしたらヤミー・・・！」

「！その確率は９０パーセント以上だね」

そう言うと、ナーノは懐からゴリラカンを取出し、ゴリラカンは自動変形すると両腕を大きく振り回し始める。

「じゃあ、やっぱり・・・」

「行くぞ」

ユーノ達もまた、両津たち同様ヤミーの出現に乗じて店から飛び出すと、現場へと急行する。

では、白ヤミーが出現した亀有商店街の方はどうなっているのかと言えば、白ヤミーは欲望に従い理由もなく暴れ続け、その際に何人かの者が被害を受けてしまっていた。

「きゃあああ！」

「うわああ！！」

現場に居合わせた葛飾区内の警察官は総出で白ヤミーを抑えつける。

「大人しくするんだ！」

だが、白ヤミーはそんな警察官たちを圧倒的なパワーを以て吹き飛ばす。

「グオオオオ！！！」

「「うわあああああ！」」」

白ヤミーを抑えようとしていた寺井は麗子の足元まで吹き飛ばされ、麗子は背中をぶつけた寺井を気遣った。

「寺井さん！」

「いたた・・・な、何て力してるの！？」

「一体これって・・・」

そう思った矢先、後ろから現場に駆け付けた両津たちが到着する。

「麗子！寺井！」

「両ちゃん！」

両津は現場に到着すると、すぐさま目の前に映って来た白ヤミーの姿に目を疑った。

「うわっ！何だあれは！？」

「ミイラっすか！？」

「手が付けられないのよ。両ちゃんのバカ力でなんとか！」

「ようし！」

両津は腕まくりをすると、果敢に白ヤミーの元へと近づいて行き、暴れる白ヤミーを叱りつける。

「コラ！商店街で暴れるんじゃない！」

すると、白ヤミーは両津の腕を掴むと両津をも上回る力で彼を投げ飛ばす。

「うわああーー！」

「先輩！」

両津は勢いよく地面に叩きつけられ、白ヤミーはそんな両津の元へとゆっくりと近づいて行く。

「両津！待ってろ直ぐに俺が！」

危惧の念を抱いたボルボは懐に忍ばさせていたミサイルを取出し、白ヤミーに照準を合わせるとトリガーを引く。

「発射！」

ボルボの放ったミサイルが白ヤミーに激突し、爆炎が立ち込めるが、白ヤミーはその攻撃を受けても傷一つ負わない様子で平然と煙の中より姿を現す。

「何!?」

「重火器が通じないだと!」

思わずその光景に目を疑う両津たち。

「だったら!俺の柔道で!うおおおおおおおおおお!!」

見かねたタンクトップ姿の左近寺が、勢いよく白ヤミーに向かって技を仕掛けようとするが、逆に白ヤミーに腕を掴まれ投げ飛ばされてしまう。

「いやあああああ〜〜〜!!!!沙織〜〜〜!!!!」

「左近寺さん!」

左近寺を容易に投げ飛ばす程の力を前に、両津たちは唖然とする。

「な、何て怪力だ!おまけに頑丈過ぎるぞ・・・!」

両津たちが白ヤミーの力に四苦八苦していると、遅れて現場に駆け付けたユーノ達三人がミッドから駆けつけたユーノスと合流を果たす。

「ユーノ!」

「ユーノス元帥」

ユーノは走ってきたユーノスを自分の肩に乗せる。

「ヤミーの気配を感じて来てみたが・・・」

「ええ。あれですね」

「両さん達がいるぜ」

「人目が多いな。僕が結界を張るよ」

「頼むよ、ナーノ」

「ライジングハート」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ〉

ナーノは時間軸をずらす封時結界を展開すると、半径３キロ圏内の人々を結界の外へとずらし、白ヤミーと両津だけを残して結界を張り、両津は突然の現象と忽然と姿を消した仲間の姿に目を疑った。

「ん?!なんだ・・・これは!お前達!何処へ消えた!」

一護達はこの現状にこけそうになりながら、ナーノに問い詰める。

「って!なんで両さんは残してんだよ!?」

「あの怪力はいざって時に役に立ちそうだと思いまして」

「いや確かにあの人怪力だけど・・・それでも危険だって・・・!」

「この際仕方ない。さっさとヤミーを潰すぞ」

「了解。一護さん、ナーノも行くよ」

「「おお（はい♪）」」

ユーノはユーノスから結界印を受け取り、一護もナーノもそれぞれ代行証とライジングハートを準備すると、戦闘態勢となる。

「「変身！」」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

「久しぶりにこれ使うか」

〈Ｔｗｉｎ　ｂｌａｄｅ〉

ユーノはツインブレイドを装備すると、ナーノの共に白ヤミーへと向かっていく。

「は！」

両津はユーノの姿を目の辺りにした瞬間、思わず目を疑う。

「な！お前は・・・ユーノ！？」

すると、そこへ今度は死覇装姿の一護がやって来る。

「両さん！大丈夫か！？」

「なあ！！一護・・・！貴様こそなんだその格好は！？」

一護の姿は完現術の力と融合しているため、霊体の姿以外にもこうした生身の状態で使用することが出来る。

「悪いな。説明してる暇はあんましねぇ。一先ずここは俺達に任せて、下がっててくれ」

一護がそう言うと、その肩に乗っていたユーノスも便乗する。

「黒崎の言う通りだ。良いというまでは待機だ」

「ひえええ～～～！！ネズミが口を利いた！！！」

「ネズミではない・・・フェレットだ」

冷静に両津の言葉に突っ込みを入れるユーノスであった。

ナーノはダンスを交えた得意の戦法で近づいては自分のリーチに合わせて銃撃を続け最中、目の前の成長途中の白ヤミーを見ながら呟く。

「まだ成長途中だけど、人命最優先♪」

ナーノはそう考えると、ユーノの攻撃の隙を作りやすくするために銃弾を連射し、白ヤミーが怯んだ瞬間、ユーノが斬撃を加える。

「はああ！」

ユーノの斬撃をまともに受けた白ヤミーは後ろにひっくり返るも、

徐に起き上がり咆哮を上げる。

「ぐ・・・グオオオオオオオ！！！」

白ヤミーが咆哮を上げると、全身に現れる無数のセルメダルが形を構築させていき、構築されたその姿を目の当たりにしたユーノ達は目を丸くした。

「「「「え！」」」」

成長を遂げた白ヤミーの姿は、硬い甲羅と両腕に特徴的な巨大なハサミを持つ、所謂カニの姿をしたヤミーであった。

「な・・・！あれは・・・！？」

両津も両津で成長したカニヤミーを凝視すると、ユーノスはこれまで見た事のない、気配すらも他とは一線を画すヤミーの姿に目を擦る。

「なんだあのヤミー・・・見たことがないぞ！」

「何！？じゃあ、あれは一体・・・」

すると、カニヤミーは譫言の様にこう呟く。

「同族・・・増やす・・・！」

「来るぞ！」

ユーノとナーノは向かって来たカニヤミーの攻撃を躱しながら反撃

を繰り出すが、ユーノのツインブレイドもナーノの放った銃撃も、容易に跳ね返してしまう。

「こいつ・・・なんて硬さだ！」

「この前の昆虫二匹とは、また硬度が違うね。おまけに、このハサミ・・・！」

そう言った瞬間、カニヤミーは凄まじい破壊力を秘めたその腕のハサミで二人の体を斬りつけた。

「「うわあ！」」

二人はその攻撃を受けると、一護達の元へ吹き飛んだ。

「大丈夫か！？」

「はい。しかし何ですか一体。こんなタイプのヤミーは初めてです・・・」

「見た目からしてカニだが・・・メズールのか？」

「いや。それにしては気配が違いすぎる。成長の過程にしてもだ。どうしてこんなことが・・・・・・」

ユーノスが頭を悩ませていると、一緒に居た両津は焦燥に満ちた顔で声を荒げる。

「おい！なんとかならんのか！？」

「そう言われてもよ。俺達だって初めての経験だし・・・！」

「やるしかないなら、やるだけです！」

そう言うと、ユーノは立ち上がり逆刃刀をその手に握ると、カニヤミーに向かって果敢に向かっていく。

「はあああ！」

硬い甲羅で斬撃を受け流すカニヤミーの攻撃を、皮一枚のところで躱しながらユーノはカニヤミーの背後へと回り込み仕掛けを施し、何も知らずにカニヤミーが再び向かって来るのを見計らってユーノは指を鳴らす。

〈Ｔｉｍｅ　ｔｅｌｌｓ　ｆｌａｍｅ〉

すると、カニヤミーの甲羅に仕掛けられたユーノの炎が爆発を起こす。

「ぐおおお！」

「ナイスお父さん♪僕も行くよ・・・ふん！」

ナーノはこれに触発されると、アクロバティックな動きから来る嵐のような銃撃を繰り出し、カニヤミーを攻撃し、一護も一護で凄まじい威力の斬撃を叩きこむ。

「序でにこれも喰らえ。月牙天衝ッ！！」

一護の放った月牙は地面を抉りながらカニヤミーに直撃する。

カニヤミーは月牙の威力に圧されて数十メートル先へと吹き飛ぶ。
両津は人間離れした能力を持つユーノ達の技に目を疑いこう呟いた。
「な、何だあの技は・・・！まるで少年ジャンプのバトル漫画の様ではないか！？」
「お前もジャンプキャラであろう・・・――」
ユーノスは呆れながらもジャンプの大先輩である両津にそうツッコミを入れ、その間に三人が土煙の方へと近づいて行く。
すると、煙の中より出て来たカニヤミーが自身の口より大量の泡を吐き出した。
「「「！」」」
思わずその光景を目を奪われるユーノ達を余所に、吐き出された泡が弾け飛ぶと、そこからは小さなカニが飛び出してき、ユーノ達の足元より襲い掛かる。
「なにこれ！？」
「カニの大軍が・・・！」
「この！！足元でうろちょろするな！」
カニの大軍は三人の足元に際限なく広がっていき、足の踏み場を奪う中、一護は斬月でそれを払いのけると、二人にこう言った。

「ち。ユーノ！ナーノ！ちょっと退いてろ！」

ユーノとナーノはそれを聞くと、足元のカニを払いのけ空へと回避すると、一護は斬月の刃を地面に突き刺し、月牙天衝を流し込む。

「月牙八式兵法七式――――――陥落月牙！」

地面に流れ込んでいく月牙天衝によって、カニの大軍は一掃され、ユーノ達も安どのため息をつく。

「ふう～～～助かった。」

「流石は伝説の死神代行で、お父さんのお師匠さん。伊達じゃないよね♪」

「このまま叩みかけるぞ！」

「はい」

すると、ナーノは左腕に魔力を供給させ、そこから自分の仮面の頭部を模した武器で、右腕にはめて使用するドラゴンバスターを装備する。

〈Ｄｒａｇｏｎ　ｂｕｓｔｅｒ〉

「竜神の寵児を敵に回すと、痛い目見るよ」

砲門を向けると、ナーノは紫色に輝く砲弾を発射し、カニヤミーを攻撃。

「ぐああ！」

「まだまだ！」

ナーノは効果のあるこの攻撃で、カニヤミーを徹底的に痛めつけてダメージを加え、疲労が見え始めたところでユーノが逆刃刀を使って大技を仕掛ける。

「飛天御剣流――――――九頭龍閃！」

一瞬のうちに前進の急所九つに加えられる凄まじい威力の斬撃。

カニヤミーがその攻撃を受け膝をつくと、ここで更に一護の繰り出し阿修羅月牙が直撃。

「阿修羅月牙！」

二人の怒涛の攻撃の嵐にカニヤミーは満身創痍となってセルメダルをところどころまき散らし、両津も嬉々とした表情で拳を握る。

「よし。これなら！」

だが、直後ユーノスは不意に感じた強い気配に声を上げる。

「！三人とも、上だ！」

「「「！」」」

三人が顔を上げると、その瞬間目に映って来たのは・・・頭部がサ

ソリの頭部を模した顔と後頭部に生えた尾・カニのハサミ・外骨格・エビの丸みを帯びた殻に覆われたボディを持つ新種のグリードであった。

「邪魔・・・するな！」

以後、名前が判明するまで甲殻類グリードと名付けさせてもらうことにして、甲殻類グリードは両腕のハサミを使ってユーノ達を攻撃する。

「「「ぐあああ！」」」

凄まじいハサミの威力と、一緒に飛び出す水流の圧力に押されてユーノ達は後ろへと吹き飛び、ユーノスと両津は声を荒げる。

「ユーノ！」

「一護！ナーノ！」

甲殻類グリードは片言の単語を交えながら、自分が作りだしたカニヤミーを労わるようにこう言う。

「僕の・・・仲間・・・壊さないで」

「なんだあいつは・・・！」

「この感じ・・・まさかグリード！？」

「だけどあのグリードって・・・！」

「仲間を・・・コロス奴・・・殺す」

甲殻類グリードはハサミの先から高圧水流を噴射すると、その対象となってしまったナーノは大きく吹き飛び、更にはハサミによる連続攻撃を受けてしまう。

「ぐあああ！があ！」

「ナーノ！」

「くそっ！」

一護は地面の斬月を拾い上げると、一気に駆け出し甲殻類グリードの体に斬月の刃を振り下す。

「ほおおおお！」

だが、甲殻類グリードの体はまるでそんな攻撃ものともせずに容易に受け止めてしまい、一護やユーノ達は目を疑う。

「な・・・！」

「そんな！」

「斬月の刃を受け止めるなんて・・・！」

そして、甲殻類グリードは自慢のハサミで一護の体を吹き飛ばす。

「ぐあああ」

ユーノや両津たちは負傷した一護とナーノの元に近づく。

「おい！一護！ナーノ！しっかりしろ！くそ。あのカニと言い、あいつといい・・・何なんだ！」

「殺す・・・殺す」

甲殻類グリードは何度もその言葉を連呼すると、カニヤミーと一緒にユーノ達の元へ向かって行き、ユーノ・一護・ナーノの三人は眉間に皺を寄せながら二体の元へと向かって行きそれぞれ応戦をするが、未知なる力を秘めた二体のグリードとヤミー相手に思うようにいかず、結果圧し負けてしまった。

「「「ぐあああああ！！」」」

地面に倒れる三人にゆっくりと近づいて行く甲殻類グリード。

甲殻類グリードは三人に狙いを定めると、ハサミを広げて高圧水流を叩き込もうとする。

「バイバイ」

高圧水流が向けられた瞬間、ユーノは二人のを庇ってその攻撃を一人で受けてしまうと、勢いよく吹き飛んでいき強制的に変身が解除された。

「うわあああああ！」

「ユーノ！！」

「お父さん！！」

ユーノが変身を解除されると、結界印の中から今まで集めたコアメダルが飛び出してしまい、ユーノはそれを見て急いで回収しようとする。

「コアメダルが・・・！」

拾い集めようとしているユーノを一瞥しながら、甲殻類グリードは自分と同じ意匠の黒のコアメダルに目を向ける。

「コアメダル・・・――――僕の」

徐に甲殻類グリードが黒いコアメダルに目を剥けようとすると、その瞬間背後から襲ってくる両津のトイレサンダル打撃。

「おおおおおお！！！　喰らえ！！！！！」

「ぐあ！」

甲殻類グリードは地味に痛かった両津の馬鹿力に後頭部を抑える。

「両さん！」

「お前・・・！」

「葛飾で好き勝手やりやがって！貴様ら怪物にこれ以上儂の庭を蹂躙されてたまるか！！」

と、その時。

両津の声を聞いた瞬間、唐突にカニヤミーの意識が両津に向けられ聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「リョ・・・・・・リョウツ・・・・・・」

「？」

「リョウツ・・・・・・リョウツ・・・」

カニヤミーが両津と言う単語を連呼すると、ユーノ達は耳を疑った。

「何だと？」

「あのヤミー・・・なんで両さんの名前を・・・」

すると、それを聞いた両津は表情を一変させる。

「まさか・・・――――この声って・・・！」

両津がカニヤミーに目を向けた瞬間、カニヤミーはその姿をもう一つの姿へと変貌させる。

そして、両津たちの前に現れるヤミーの体内に取り込まれていた筈の大原大次郎。

大原は多量の汗をかきながら、両津の方へを目を向ける。

「りょ・・・両津・・・」

「！」

「な！」

「うそ！」

「こんな・・・！」

想定外な光景に目を疑うばかりのユーノ達と、カニヤミーと言う異形の姿に変わり果ててしまい、街で大暴れをしていた者の正体が大原であることを知った両津は大声を上げた。

「ぶ・・・・・部長！！！！！！！」

未知なるグリード、未知なるヤミーの出現はユーノ達の運命をどう狂わせてしまうのであろうか？！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

橙のメダルとお巡りと甲殻類ヤミー（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はジャンプ漫画の大御所、『こち亀』についてだ♪」

「『こちら葛飾区亀有公園前派出所』は、秋本治による日本の漫画作品。『週刊少年ジャンプ』（集英社）において１９７６年４２号より現在まで連載中で、『週刊少年ジャンプ』の最長連載作品である。単行本は２０１１年８月現在１７６巻まで刊行しているんだ。」

「警視庁新葛飾警察署の亀有公園前派出所に勤務する中年の警察官である主人公の両津勘吉（りょうつかんきち）巡査長と、その同僚や周辺の人物が繰り広げるギャグ漫画。お年寄りから小さい子供まで幅広く人気を博している♪」

一「ついに両さんまでが参戦か。いや～～～今回は予想外だったな。」

ユ「しかし部長さんがヤミーにされちゃうとは、おまけにあのグリードも何なんですかね？」

一「硬いし強いし、まるで手におえなかったな。でも両さんならなんとかなるんじゃないのか？ほら、あの人フリーザの攻撃受けても全然平気だったじゃねぇか」

ナ「と言うことは、お母さんのバカ魔砲受けても平気って事ですね？」

な「バカ魔砲って言い方は・・・！そんなに言うならやってみようか。両さんに向けて」

それを聞いた瞬間、両さんは血相を変えた。

両「なにーーー！！おい、女！儂をどこぞのチートキャラと一緒にするな！」

しかし、そう言った時にはなのはは既に魔力を集束させており、スターライトを両さん目掛けて発射する。

な「全力・・・全開！」

両「こら！！儂を狙うな！！人の話を聞け！！」

な「スターライト・・・ブレイカー！！」

両「ひえええええええ！！！」

両さんは悲鳴を上げながら、風の谷のナウシカの一コマ並みの破壊力を有したスターライトに直撃するが、直後彼はボロボロになりながらも普通に復活する。

両「こ・・・このやろう～～～・・・！ムチャクチャしやがって・・・・・！！」

なのは達はこれを見た瞬間、目を見開き驚愕の声を上げた。

全「ぎゃ、ギャクだ！！！」

と言う訳で、『こち亀』３５周年おめでとうございます！

魔導師図鑑ハイパー！

ＢＬＥＡＣＨは以前、こち亀とのコラボを成し遂げたことがある。

しかし、一護はその漫画の内容に些かの不満があった。

一「う～～ん」

ユ「なに難しい顔してるんです？」

一「いや。俺も前にこち亀とコラボったことあるけどよ・・・なんかイマイチ俺的にはどうなんだって感じなんだよ。ほら、これ見ろ」

一護は自分が見ていたそのコラボ漫画、『超こち亀』の中身をユーノに見せる。

ユーノはそれを見ながら漫画の中身を読んでいく。

卍解した一護が久保帯人なりに書かれた両さんと向き合う。

両「それじゃあ・・・次はこっちからいくぜ・・・」

両さんはマジな顔で懐から拳銃を取出し――――――

両「卍・解」

漫画の中の一護は唖然とした表情を浮かべる。

一「ちょっ・・・ちょっと待った・・・」

両「待たん！卍解！」

一「イヤ卍解しゃねーよ。拳銃だよソレ」

両「拳銃じゃない！卍解だ！バンっていうぞ！！」

一「俺の知ってる卍解はどれもバンっていわないんスけど・・・」

漫画を読み終えたユーノは苦笑いを浮かべながら一護の顔を見る。

一「なんで拳銃で卍解なんだろうな・・・・・・」

ユ「確かに・・・卍解って・・・それはないでしょう・・・」

両さんのやることなすことが、二人には奇想天外なものだったのかもしれない。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ユーノス「部長はヤミーに完全に意識を乗っ取られている」

な「まま事教導って・・・」

両「部長は何が何でも助け出す！」

一「あいつは――――――俺がこの手で守る！」

ユ「何時どんな時でも、僕と一護さんは繋がってる」

第172話　部長と綺麗事と死神コンボ

部長と綺麗事と死神コンボ（前書き）

大「人生の目標を定めてレールを引いていくのが普通なのに、お前はぶつかると曲がるおもちゃの車と同じだ。いい年をして進む方向が定まらんだろうが。」

「お前はただ楽な方楽な方なりゆきまかせに転がってるだけだろ。」

部長と綺麗事と死神コンボ

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、謎の橙のコアメダルが新たに出現。

二つ、ユーノ達は、亀有公園前派出所の巡査長・両津勘吉と遭遇。
直後、謎の甲殻類ヤミーが商店街で騒動を起こす。

そして、三つ。甲殻類ヤミーの正体は、両津の上司・大原大次郎であった。

大「りょ・・・両津・・・」

ユ「！」

一「な！」

ナ「うそ！」

ユーノス「こんな・・・！」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ一枚　エビ一枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈両津Ｓｉｄｅ〉

「ぶ・・・・・部長！！！！！！」

両津は目の前の光景が信じられなかった。

何故なら、今自分たちが目の前にしていたカニヤミーの正体が、あろうことが自分の上司である大原だったのだから。

ユーノ達も両津以上にこの驚愕の事実に目を疑う。

「どういう事だよ・・・なんで両さんの上司が!?」

「まさか・・・部長がカニヤミーの親!?」

「だとしたら、あのヤミーはカザリの!だけどカニって・・・!」

「その通りだ。猫系のグリードであるカザリが、甲殻類系のヤミーを作り出せるはずはない。あれは紛れもなくあのグリードが生み出したものだろう」

ユーノスはそう言うと、両津のトイレサンダルによる攻撃を受け、頭を押さえている片言の口調で話す謎の甲殻類グリードを見据え、甲殻類グリードはユーノ達を睨み付ける。

「く・・・」

一方で両津は、カニヤミーに変貌していた大原に尋ねる。

「部長!!なんでこんなこと!?」

「両津・・・儂から・・・早く離れるんだ・・・・・・・・ううう!!!」

両津にそう言った直後、大原の体は再びカニヤミーの力によって浸食され始め、両津はそんな大原の元に近づく。

「部長！！」

両津が目の前で自分を心配しているのを見ると、大原は険しい表情を浮かべながら謝罪をしてきた。

「両津・・・すまなかった・・・」

「え？」

「あの時のカニ・・・あれは儂が食べてしまった・・・ゴルフコンペの副賞だと勘違いしたばかりに・・・！」

「今はそんなことどうでもいいですよ！それよりも部長の方が！！」

と、そう言った瞬間・・・大原の体がセルメダルで覆い尽くされていく。

「グ・・・ガアアアアアアアア！！！！」

「部長！！」

「両さん、離れて！！」

ユーノは両津をその場から退避させると、その瞬間大原は完全に意識を乗っ取られてしまい、再びカニヤミーとなって咆哮を上げる。

「グオオオオオオオオオオオ！！！！」

「部長！！！」

両津はいても経ってもいられずカニヤミーと化した大原の元に近づいて行くが、その瞬間カニヤミーは両津目掛けて高圧水流を発射する。

「危ない！」

ユーノはそれを見ると、完現光を駆使して水圧に当たる寸前で両津をその場から引き離すことに成功。

「ユーノ！」

「無茶しないで下さい、ジャンプの大先輩さん！」

すると、ここでナーノと一護がカニヤミーに攻撃を仕掛ける。

「この！」

ナーノは銃弾を連射してカニヤミーに取り込まれている部長を分離させようとし、同じく一護もまた鬼道による攻撃で同様の事を狙っていた。

「破道の三十三『赤火砲』！」

止めどなく爆発が起こると、カニヤミーは甲殻類グリードの元へと戻って来、甲殻類ヤミーは悔しそうな様子でこう言い残した。

「僕のコアメダル・・・・・必ず取り返す」

甲殻類ヤミーはカニヤミーと共に、天高く駆け抜けていき、結界を

突き破ってその場から脱出を果たした。

「待て！」

そう叫んだ時には既に、二体のグリードとヤミーは何処へなりとも姿を眩ませてしまった。

ユーノは部長ごと連れ去って行った甲殻類グリードに悔しさを覚え舌打ちをする。

「ち。逃げ足の早い奴だ」

「ああ。だが部長が――――――」

三人は一先ずユーノスの元へと歩み寄ると、渋い顔のユーノスに尋ねる。

「ユーノス元帥。あのヤミーとグリードは」

「ああ。黒のコアメダルを狙ったということは、もしかしてあれはそのグリード。」

「どうやら俺達の知らないところで、途方もない影が蠢いてるようだな」

「――――――・・・」

両津は険しい顔を浮かべながら、居なくなってしまったカニヤミー・・・もとい上司である大原の身を案じ、一先ず三人とユーノスを引き連れ派出所まで同行させることにした。

三人は派出所に到着すると、中川・麗子・寺井の三人に事の重大さと、部長がカニヤミーとなってしまったことを赤裸々に告白し、三人はその事実に度胆をぬいた。

「「「えええ！部長が！」」」

「ああ。あのカニのバケモノの正体は、紛れもなく部長だった。」

後押しをするように両津も腕組みをしながらそう言うと、三人は顔を見合わせ未だ信じられない様子であった。

「でも、なんでまた部長さんが？」

「儂に聞くな！事情はこいつらの方が知ってる！」

「そう言えば、この人たちは・・・」

中川が一緒にこの場に居合わせたユーノ達三人の姿を見てから両津に顔を向けると、両津は真剣な表情を浮かべて説明する。

「あの怪物、ヤミーとかいう奴の退治を専門にしてるハンターだそうだ」

「あ・どうも初めまして」

ユーノは中川たちに帽子を取って挨拶を交わし、その最中一護は念話でユーノとハンターと言うざっくりとした説明をしたことの是非について問い質す。

「（ハンターって・・・あながち間違いじゃないけど、どうなんだ）」

「（この際仕方なかったんですよ）」

ユーノは両津たちにもわかる様に、ところどころ注釈を加えながら、ヤミーとグリードの事を説明し、その誕生の仕組みを話した。

「怪人グリードは、欲望によって世界を喰らおうとしているんです。そして、その為の手足として自分の分身であるヤミーを使って、人の欲望を暴走させるんです。」

「それじゃああの姿は部長の欲望が？」

「そう考えるのが定石なのだが・・・どうも今回は事情が違う」

「事情が違うって？」

ナーノがそう尋ねると、ユーノスは次のように語り出す。

「これまで確認されたグリードが作り出すヤミーは、特徴はあるものの、そのすべてが親の欲望から作り出されたものが形を変えたもので、忠実に親の欲望に従う。が、あの部長の場合は根本たる欲望がまるで分らない。」

「欲望が無いくせして、ヤミーに取り込まれたって事かよ？」

「そんなことって・・・」

「じゃあ、部長はどうしてあの怪物に？」

両津の問答を受けると、ユーノスは一度目を閉じてから次のような仮説を立てる。

「仮説だが、甲殻類ヤミーを作り出したであろう新種のグリードとヤミーは戦闘の最中、『同族を増やす』と言う言葉を連呼していた。つまり、それが今回の欲望だとしたら――――――」

「部長が怪物にされたのも、そのグリードが仲間を増やしたいって言う欲望からだって言うのか?!」

「可能性は高い」

話しを聞き終えると、ユーノ達全員は呆然とした表情を浮かべてしまう。

「そんな・・・!」

「こんなのってあり・・・!?」

すると、聞いていた両津はユーノの胸ぐらを掴むと顔を近づけ今にも爆発しそうな様子でユーノに問い詰める。

「おい!何とか言えよ!部長はどうなるんだ!あのまま怪物になっちまってしまいか!!」

「りょ、両さん!落ち着けってっ!」

一護や寺井が止めようとするも、両津はユーノの胸ぐらを掴み続ける。

「これが落ち着いてられるか！あの頑固おやじ！儂のカニを一人で喰いやがったんぞ！おまけにその所為でカニになっちまったんだ！」

「怒る焦点が間違ってるとは思うけど、兎に角落ち着いて！」

「そうよ両ちゃん！この人に八つ当たりしないの！」

「く・・・！」

一護や麗子に諭され、漸く冷静を取り戻した両津はユーノの胸ぐらから手を離す。

ユーノは安堵のため息をつくと、申し訳なさそうな表情で悔しそうに拳を握りしめる両津を見つめ、その後中川からの労いの言葉を受ける。

「あの、大丈夫ですか？」

「ええ・・・」

ナーノは一度重い空気を払しょくするために出されたお茶を口にし、その後にユーノにこの後の対応を尋ねる。

「これからどうするお父さん？」

「いずれにしても早いところ部長さんを見つけ出して、ヤミーと分離させないと」

「しかし難しい話だ。部長はヤミーに完全に意識を乗っ取られてい

る。たとえ見つけ出したとしても、俺達だけの力であれを止められるか・・・況しては今回のヤミーは初めてのタイプだ。どう対応すればいいか――――――」

と、そんな言葉を耳にすると両津は鼻で笑いだす。

「は。そんな弱音なんぞ儂は聞きたくないぞ」

「？」

「部長を助けられないかもだと？そんなこと断じて許さん！お前たちが助けられないなら、儂が部長を連れ戻してやる！」

両津はユーノ達の弱音を聞くと、あろうことか自分が大原を助け出そうという決意を見出し、それを耳にしたユーノ達は目の色を変え直ぐに言い返す。

「せ、先輩何言ってるですか！？部長と言っても、今は怪物なんですよ！」

「そうだよ両さん！いくらなんでも危険すぎる・・・」

が、直後両津の一喝が派出所内に響き渡る。

「うるさーい！！つべこべ言うな！！これは儂のプライドの問題なんだ！絶対に部長は何が何でも助け出す！」

「両さん・・・」

「やっぱ。本物ってのは、威厳と言うか何と言うか・・・色んなも

んが違うな」

ユーノや一護を始めとする面々は、今改めてこの長きに渡りジャンプにその名を轟かせる主人公、両津勘吉の凄さを実感し、いかに自分たちが青いかどうかを思い知らされるであった。

◇

〈カザリＳｉｄｅ〉

その頃、カリ・ユガと結託しアンゴルモア集めとコアメダルの奪還に向け暗躍を続ける猫系のグリード、カザリの方はと言えば、カリの部屋で地球で目撃された甲殻類系の新グリードとそのヤミーの情報を聞かされていた。

「甲殻類のグリードとヤミー？」

カリはカザリの言葉を耳に入れながら、マルチタクスを行う。

「君も初めてになるでしょうな。たった今、管理外世界の９７番でその両方の反応が確認されました。恐らくそれが私の予言にあった三種の欲望の一つでしょう」

「僕達以外にグリードがいたって事？」

「ドクタースカリエッティは先日の休暇を利用し、異世界のある遺跡で二種類のコアメダルを持ち帰ったと聞いています。本当はもう一種類あったそうなのですが、そのうちの一つは数か月前に行方が分からなくなっていました。ところが、先日の昆虫ヤミーとの戦いでユーノ・スクライアが――――――」

そう言うと、カリは先日のクワガタヤミー戦でユーノが初めて使用した、カニのコアメダルの力を具現化した映像を公開する。

〈Ｃｒａｂ　Ｓｃｉｓｓｏｒｓ〉

『はっ！』

カザリはそれを見ると、鼻で笑いながらカリの机に腰を下ろす。

「そうなんだ。じゃあ、やっぱりそいつが今度の・・・」

「あの時てっきりグリードが減ったとばかり思ってましたが、君や私の知らないところで着実に何かが起ころうとしているのかもしれません。」

「なんでそうなったのかな？」

あからさまにカザリがそう尋ねると、カリは人形に目を向けてからこう言った。

「自ずと察しが付く筈です。聞きたいなら、“君の胸”に直接聞いてみてはいかがでしょう」

それを聞くと、カザリは怪人体の姿となって自分の胸に埋め込まれている心臓と同じ働きをしている自身のアンゴルモア核を気にしながら、徐に手を当て笑みを浮かべる。

「ふふ。そうだね」

この二人は今後どのような動きを見せるのか？
注目すべき対象でもある。

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

その頃、派出所から自宅へと戻って来た一護はリビングのソファーで一人コーヒーを飲みながら、物思いにこう呟いていた。

「甲殻類のヤミーか・・・――」

テレビの音も何もない静かな部屋で何時にも況して眉間に皺を寄せる一護。

すると、そんな一護の事を心配して織姫が横に座ってきた。

「あなた、大丈夫？ずっと難しい顔してるけど」

「ああ。大丈夫だよ。悪いな気遣わせて」

「眉間に皺を寄せるのはもう見慣れた事だからいいけど、何か心配事を醸し出すあなたの顔色見ると、ほっとけなくて」

「織姫・・・」

一護は何気ない事で自分の事を気遣ってくれる織姫の優しが大好きだった。

それはまるで自分が心から愛していた母である真咲を彷彿とさせるからであろう。

一護は織姫の肩を掴んで自分の方にさり気なく寄せると、織姫にこう言って来た。

「なぁ織姫。ユーノの事で、ちょっと考えてたんだ」

「うん」

「俺とあいつの考える守るべきものは、大体似てるけど・・・決定的な違いが一個あるんだ」

「何？」

「俺がルキアから死神の力を貰って、虚とかいろんなものから守るために戦ってるのは、一重に“俺の同類を作りたくない”からだ。だから、虚でもなんでも・・・悲しい想いを他人にさせるのは俺は嫌いだ。ユーノもその気持ちは同じだ。だけど・・・・・俺が戦う理由が“人を守りたい”って欲望から来るものに対して、ユーノはただそこに“守らなきゃならい”って義務なのか使命か、そんな鎖に繋がれちまって・・・見てるこっちが辛くなるんだ」

それを聞くと、話を聞いていた織姫もまた一護と同じ気持ちとなってこう言い返す。

「――――あなただけじゃないよ。私も・・・そしてなのはさん達も同じだから。分かるよ、その気持ち」

すると、一護は以前ユーノに尋ねたユーノ自身の夢について、些か

悲しそうな表情でこう言いだした。

「前に聞いたことがあるんだ。お前の夢ってなんだ、って？ユーノはそう言われると、“まぁそのうち”って返したけど、多分それって――――――自分に諦めてるからそう言ったんじゃないのかって、聞いた途端思っちまってよ」

「自分に諦める？」

「立場や職種は全然違うけど、俺達死神も・・・なのは達魔導師も、みんな何か大切なものを守ろうと必死になって戦ってる。中には俺みたいに、自分と周りがキツい目に遭って・・・辛い想いをした奴も沢山いる。そんなのがもう見たくねぇから、俺達は戦ってるんだ。」

「だけどユーノさんは・・・――――」

織姫がそう口を挟んだ後、一護は目の前に置かれたコーヒーを眺めながら更に愛弟子であるユーノに関してこう言う。

「あいつは誰よりも人間の常識を超えた辛い目にあってるんだ。今も昔もこれからもきっと・・・！俺もなのはもあいつらも、スーパーマンじゃないから・・・世界中の人を守るなんてデケーことは言えねぇけど、両手で抱えられるだけの人を守ればそれでいい・何て言えるほど控えめな人間じゃねぇ。俺達は、山ほどの人を守りたいんだ。」

「あなた・・・――――」

「ユーノだって同じだったはずなんだ。だけど、あの事故以来――

――――あいつはそれを諦めて、目の前の事だけにしか目を向けなくなった・・・！欲望を枯らして、奴隷のように只管に目の前で困ってる奴の為にしか戦わなくなった・・・！で、おまけに誰かを失いたくないって気持ちだけが日増しに大きくなって、周りの誰かに荷を分けることが出来なくなった・・・・・・！！」

一護は拳を強く握りしめながら、うっすらとその瞳に涙を宿し、織姫はそんな夫の涙を軽く手で拭うと自分もまたこう言って来た。

「そう・・・――――出逢ったころからそうだったよね。ユーノさんは、辛いことも悲しいことも全部全部・・・一人で背負い込んじゃうんだよね」

一護はこのままではいけない、何とかユーノを救ってやりたいという気持ちを一層強く抱くと、次のように語った。

「このままじゃいけないんだ。あいつはもっと自分の欲望に素直になるべきなんだ。いや、欲望を取り戻させないとならねェ。欲しがる気持ちを忘れたら、そいつはもう人間じゃねェ！俺はあいつを・・・――――このまま他人のエゴを引き受けるだけの、都合のいい神様になんかにさせねぇ。あいつは――――――俺がこの手で守る！」

そう言って自分の拳を先ほどよりも強く握りしめ、ユーノの純真無垢な笑みを思い浮かべる一護。

すると、そんな一護の事を包み込むような眼差しを向けながら、織姫が一護の手を包み込んできた。

「？」

そして、意外そうな顔を浮かべる一護の胸元に顔を当て、夫を励ます。

「大丈夫。あなたならきっと出来るよ。それで、もしも力が必要になったら、遠慮なく――――――私達に言って。ね」

「織姫――――――ああ。ありがとう」

一護は織姫の顎を手に当てると、自分の顔に妻の顔を近づけ唇を交わした。

そうして、黒崎家の夜は静かに過ぎ去っていく――――――

◇

〈ナーノSide〉

一方で、ユーノからの指示を受け先に六課へと戻って来たナーノはと言うと・・・

「ただいま～～～」

何事も無かったかのように正面玄関から入って来ると、ナーノの姿を目撃した姉のヴィヴィオが笑顔で出迎える。

「あ、おかえりナーノ！」

ナーノはそれを見るなり態度を改め、ヴィヴィオの正面に立ち膝をついて座ると、彼女の手を軽くとりこう言って来た。

「は！ただいま帰りました、姉上。ご心配をおかけいたしましたことを心からお詫び申し上げます！」

「は・・・はあ・・・」

ヴィヴィオは未だに今は年上であるナーノからこのような扱いをされることに戸惑いを見せてしまう。

と、そんな二人の姿、もといナーノの姿を目撃したなのはやスバル達が一様に近づいて来、一緒にいる筈のユーノがいないことを指摘した。

「あれナーノ？ユーノ君は」

「こち亀の両さんと一緒に逃げたヤミーの追跡調査。僕はお父さんの指示に従って、帰りが遅くなるとお母さんたちが心配するから先に帰ってろって。ヤミーが出たらすぐに戻るつもり」

「そうなんだ。でもこち亀って・・・まさか・・・！」

なのはが信じられない様子で顔を歪めると、ナーノは不敵な笑みを浮かべるだけ。

「ふふ♪さて、久しぶりに夜間訓練でもやろうかな」

ナーノがそう言うと、聞いていたなのは達は一様に顔を見合わせる。

「夜間訓練？」

「あんた、訓練とかするの？」

「失礼だな。僕だって腕が鈍らないよう自主練習だけはしっかりやってます」

「自習練習はね。じゃあなんでなのはさんの訓練には参加しないのさ」

スバルがそのように言うと、ナーノは相変わらずの様子で返事を返す。

「だ・か・ら。一重にお母さんの訓練がめんどくさくて、疲れるからですよ」

「う・・・私の訓練そんなに面倒なのかな？そりゃ、ナーノみたいな出来る子から見れば、私の訓練なんて効率の悪いようにも見えなくもないけど」

「なのはさん。自分でそんなこと言うことないですよ。」

「そうだよ。なのはの訓練は教導隊でもトップクラスなんだよ」

ティアナとフェイトがそう言ってなのはの事を元気づけようとすると、それを聞いていたナーノは渇いた声で言って来た。

「教導隊・・・ではでしょ？」

「？」

ナーノはそう言ってからなのはに背を向けると、非情にも聞こえる痛烈な批判を行う。

「はっきり言わせてもらうけど――――――お母さんの訓練なんて、自分の手を汚した事の無い甘ちゃんの綺麗事だよ。」

「！」

なのはは実の息子からの痛烈な指摘に一瞬耳を疑い、同じように傍らで聞いていたスバル達は驚愕の表情を浮かべながら直ぐにナーノに弁解する。

「な、ナーノ！あんた何言ってるのよ！？実の母親に向かって・・・！」

「本当のこと言って何が悪いんですか？それに実の母親って言っても、この時代じゃまだ生まれもいないんですよ僕は。」

「だからって・・・あの言い方はなんなのよ！ナーノがどれだけ強いかなんてのは、この前の模擬戦で何となくだけでよく分かったけど・・・でも自分を基準にしてなのはさんの訓練を悪く言うのなんて間違ってるよ！」

「ナーノ！ママに謝って！」

ヴィヴィオからもなのは用語の発言が飛び交うと、ナーノは思わず振り返ざるを得なくなってしまう。

「う・・・ヴィヴィオ姉ちゃんにそう言われるとちょっと手厳しい・・・だけど僕は別にお母さんの訓練を罵倒した訳じゃないんだ。ただお母さんの考えてることが、僕は甘ちゃんだって言ってるの。もっと言えば“まま事教導”って感じ」

「まま事教導って・・・なんでそんなこと!!一度も私の訓練受けた事のないナーノに、どうしてそこまで言われないといけないの!?ねぇ、どうして!どうしてナーノはそこまで私に冷たいの!?なんで私の目を見て話そうとしないの!今は先の事のなのかもしれないけど・・・私達“親子”なんでしょ!だったら・・・・・母親の顔ぐらい、ちゃんと見て話してほしいよ・・・／／／」

涙を浮かべながら、なのはは正面の方で自分に対して一切目を剥けようとしないあまりに余所余所しい様子の息子にそう訴えかけるが、ナーノはため息をつくと、再び背を向け外の方へと歩き出す。

「――――――ふう」

「あ!ナーノ!」

エリオがナーノを呼び止めようとすると、ナーノは不意に立ち止まってから背中越しに言って来た。

「着いて来たらわかるよ。」

「え」

「お母さんのやってることが、いかに綺麗事なのか――――――」

ナーノはそう言いながら、徐に後ろに振り返ると、なのはに対してまるでそのすべてを否定するかのような冷たい目線を向け、見たいたなのはやスバル達は戸惑いの表情を見せた。

「ナーノ・・・・・」

果たして、ナーノが言うことの意味とは何なのか？

そしてこの後なのははは、実の息子からの冷徹な現実追求に自分の理想を軽く踏み砕かれそうになるのであった。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、ユーノスと共に地球に留まり、両津と共にカニヤミーの出現を待つことにしたユーノは両津が寝泊まりしているニコニコ寮にやって来、彼の自室へとお邪魔していた。

部屋の中は中年の男の一人暮らしを彷彿とされる家具や着替えやら、色んなものが散乱しており、布団は常に万年床。

そして棚のあちこちには両津が作ったプラモが並べられていた。

「へ～～～随分プラモがいっぱいなんですね」

「昔からの趣味だからな。ま・汚い場所だがゆっくりしてけよ」

「ありがとうございます。大丈夫ですよ。僕も狭い部屋の方が落ち着くので」

「狭くて悪かったな」

両津はそう言うと、コンビニで帰ってきた日本酒一升瓶を取出し、ユーノとユーノスのコップと皿に注ぐと、自分もまたコップに酒を

注ぎ始める。

「それで、部長の方はどうだ？」

「まだ反応は感じられない。何処かに身を潜めているのだろう」

「そうか――――――」

両津はいつになく物寂しそうな顔を浮かべながら、コップに注いだ酒を手に取る。

ユーノはそんな両津の顔を窺いながら、徐にこう尋ねる。

「ねぇ、両さん。部長さんとは付き合いかなり長いの？」

「ん。ああ・・・長いと言えば長いかもな。」

両津はその質問に対し、先ほど同様自分の顔を酒に覗かせ、部長との出逢いから根治にまでの事を脳裏に思い浮かべる。

「儂が警察官になって初めて配属されたのがあの派出所だった――――」

ここからは両津の回想シーンであるが、書くとダラダラと長くなってしまうので、ここは読む側の想像力に任せて話を続けたいと思います。

「で・その時儂のお目付け役と言うか何と言うか、あの部長がな。これがまた一筋縄じゃいかないほど頑固おやじなんだ。ちょっと目を盗んで儂がプラモとか作ってたりすると、蛇みたいな目で睨み付

けてガラスが吹き飛ぶぐらいの声で怒鳴りつけやがるんだ。あれで何度鼓膜が破れそうになったかしれん。おまけにな、見かけによらず食い意地が張ってて、儂の事言えないぐらいゲームに嵌ったりとそりゃ無茶苦茶さ。だが・・・――どうしてだろうな。こうして付き合いが長い所為か、儂と部長は切っても切れない何かに結ばれてる、そんな気がしてよ」

「「・・・――」」

両津はしみじみとした様子でコップの中の酒を一気飲み。

顔を染めながら次の酒を注ぎ始める。

「ぷっはー！！顔に似合わず、意外と茶目っ気があったりな。あと、儂がいないと叱る相手がいなくて張り合いないとかぬかしてやがった。まぁなんだ・・・・・そんなこんなで、儂って奴は結局のところ、部長がいないと調子が狂っちまうんだな。いるのが当たり前のようになってたから、変にいなくなったりすると――な」

「両さん・・・」

ユーノは何処か同じ匂いを醸し出す両津の畏まった態度に変に自分の胸がくすぐったくなるを感じ、両津自身もユーノに笑みを浮かべながら言う。

「へへ。顔に似合わずこんな湿っぽい事抜かすからびっくりしたろ。ささ、今日の所は朝まで飲もうぜ！」

「・・・――」

ユーノは両津から酒を注いでもらうと、それをじっと見つめながら自分の口の中に運んでいき、両津もまた一升瓶ごと口をつけ酒を入れていく。

「ぷっは～～～！それにしてもユーノ。お前も若いのに苦労してんだな。なんだ・・・異世界に散らばった危険な欠片を集めてる・・・だったか？」

「ええ」

「お前は、異世界の事を信じるのか？」

ユーノスが少々驚いた様子で両津に尋ねると、両津は割と平気な様子で自分の体験を踏まえた奇想天外な事を語り出す。

「こちとら、天国やらにも知り合いがいるしな。今更んな事じゃおどろかねぇよ」

「そうですか」

ユーノはそれを聞くと、再び酒を口に運んでいき、ユーノスも一緒に皿の中の酒を舐めていく。

と、ここで両津が徐にユーノに尋ねてきた。

「そう言えば、お前も一護も互い付き合い長いのか？」

「まぁ。大体６年ぐらいになりますかね」

「お前らはどういう関係なんだ？」

「僕にとって、一護さんは命の恩人であるとともに、かけがえのない師匠なんです。」

「師弟って奴か」

「単なる師弟とはまたちょっと違う気もしますけど。初めてあの人に遭った時、僕はボロボロの状態で・・・それを一護さんが助けてくれて。」

ユーノは一護との出逢いから現在に至るまでの軌跡をダイジェストに両津に語りながら、師匠・一護に対して抱く感謝しても感謝しきれないぐらいの恩を胸に抱く。

「あの頃――――――僕は一重に孤独で、自分自身に諦めを感じていたんです。僕には心から守りたいと思う人がいて、だけど僕にはその為の力が無くて・・・隣にはいつも彼女の大好きな女性がいて・・・僕は悔しかった!子供の時みたく、彼女の側に居られなくなった事への・・・そして何より、そんな彼女の隣に立つフェイトが憎かった!死ぬほど恨んだ!なんでなのはの隣は僕じゃなくて、君なんだって・・・!!だけど・・・・・・そんなこと、直ぐに子供染みてるって思い知らされて・・・――――なのはが事故で瀕死の重傷を負ったとき、僕は直ぐに彼女の元に駆けつけることも、側に居て励ますことも出来なかった・・・!だから僕は諦めた。自分自身に。そして結論付けた――――――僕はなのはの隣に立つ資格はないって」

「それで、自分の身を引いてなのはの為に裏方に回ったと」

聞いていたユーノスがそう言うと、ユーノは帽子を深く被り直す。

「ええ。でも心のどこかでは諦めきれなくて・・・だから欲しかったんだ。“なのはを守るための力”が。彼女の笑顔と、彼女の守りたいものを守れる力・・・――それを叶えくれたのは、他ならぬ一護さんでした。」

話しを終えると、ユーノは懐からあるものを取り出した。

それは、翡翠の魔導死神として自分が修行をしていた頃に、一護から授かった一護とお揃いのアクセサリーで、尸魂界でも貴重で数少ない鉱石『月光石（げっこうせき）』から作られた“月形（つきがた）”と呼ばれるものだった。

〈回想シーン〉

翡翠の魔導死神として一護のもとで修業を積んでいたユーノは、一護や織姫、コンに見守られる中、死覇装姿に身を包み、その手に現在は失っている力である斬魄刀「晩翠」を握りしめ、流れゆく滝壺目掛けて精神を統一してから翡翠斬を放つ。

『――輝け、晩翠ッ！！！』

晩翠の刀身より放たれる綺麗な翡翠に輝く斬撃が滝壺に流れる水流を切り裂く。

一護達は技の成功を目の当たりにすると、嬉々とした表情を浮かべてユーノに近づいた。

『やった！』

『すげーぞ、ユーノ！』

『ああ。よくやったな、ユーノ！』

ユーノ自身も地道な努力を続けて為し得た自分の技の精度に満足げな様子であった。

『はい！僕・・・できました！』

一護はそんなユーノの笑顔を見ると、自分もまた笑顔を浮かべる。

『よし！今日の修業はこの辺にして、技の完成祝いに飯でも食いに行くか！』

『わーい！賛成賛成♪』

『今日は俺のおごりだ。お前も遠慮なく食っていいぞ！』

『ありがとうございます。しかしいいんですか？』

『遠慮なんかいらねぇって。これは俺がそうしたいんだからよ』

『あはは。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらうとしますか♪』

一護の言葉を素直に聞き入れると、ユーノは刀を収めて元の姿に戻る。

すると、その時思い出したかのように一護は懐を漁り出す。

『あ、そうだ・・・――ユーノ。翡翠斬撃てるようになったご褒美って訳じゃねぇけど・・・・・これ』

『？』

一護は訝しげな顔を浮かべるユーノの手の中に、自分とお揃いのアクセサリーである例の月形を収めた。

『俺たちの絆の証だ。そいつを持ってれば、どんな時でも俺が側にいるって思えるようにな。ちょっと臭い気もするが、貰ってくれるか？』

『一護さん・・・・・はい／／／ありがとうございます――――』

ユーノは一瞬涙ぐんだ目を浮かべるが、直ぐに笑顔で一護にそう返すと、手の中に収められている月形を強く握りしめるのであった。

〈回想シーン終了〉

話しを聞いていた両津は、清々しい顔を浮かべながらこう言った。

「成程ね。絆か――――――やっぱいいもんだよな。」

ユーノは師匠であり自分が嘗て抱いた欲望を叶えてくれた男、黒崎一護の事を考えながら自分が胸に抱く素直な感情を赤裸々に暴露する。

「何時どんな時でも、僕と一護さんは繋がってる――――――こんなものが無くても、僕とあの人は遠く離れても、ずっとずっと――――――だから僕は迷わず真っ直ぐに向かって行ける。今の自分の欲望はなくしちゃったけど、それでも僕は――――――あの人のお

陰で戦えるんです」

「ユーノ」

両津はユーノスと一緒に顔を見合わせユーノを見つめると、ユーノはコップの中の酒を一気に飲み干し、両津に顔を向ける。

「両さん。必ず部長さんを連れ戻します。だから、一緒にがんばりましょう」

「――ああ。儂もそのつもりだ」

何時になく真剣な表情を浮かべて両津がそう言うと、両津は連れて行かれた部長の身を案じながら、心の中で呟いた。

「（部長・・・・・奥さんや孫残して、先に一人だけおっ死んなんてことはさせませんよ。）」

◇

〈ナーノＳｉｄｅ〉

さて、そんなユーノ達とは違い息子であるナーノはなのは達フォワードメンバーを引き連れて、機動六課の隊舎からは大分離れた場所に位置する明かりも碌に入らない林の中へと足を進める。

ティアナはみんなの気持ちを代弁して、目の前で直進するナーノに声をかける。

「ちょっと、まだなの」

「もうちょっとです」

「この辺なんて、電灯も碌に無いし況して星明りも入らない場所だよ。まさかこんな暗がりの中で訓練するつもりじゃ？」

冗談気味にスバルがそう言うと、ナーノはあっさりと肯定の返事を返す。

「その通りですよ。この暗闇でないと、訓練は出来ませんから」

「え」

「どういう意味？」

訝しげな表情を浮かべながらなのは達は顔を見合わせる。

そして、機動六課から数十分歩いた場所にある真っ暗やみな林の奥に到着した一同は、持ってきた懐中電灯で自分達の位置を確かめながら、闇夜に身を隠すナーノの体を照らし、ナーノは持ってきた訓練用具を地面に置いた。

「よいしょっと」

ナーノは未だなのは達が何をするつもりなのかと判断がつかないでいることもお構いなしに、持ってきた訓練用具をセットし始め、準備が終わるとなのは達の方へと振り返り言って来た。

「さて質問です。この暗がりの中で何処からともなく向かって来る標的を全て撃墜させることは出来るでしょうか？」

一同はナーノの言葉を耳にすると、一瞬耳を疑い動揺を隠し切れなくなる。

「この暗がりで！そ、そんなの無理だよ！だって何も見えないのに敵を撃つなんてこと私やティアナでも・・・！」

なのはがそう言おうとした瞬間、ナーノは鋭い目つきを浮かべながら一瞬のうちにライジングハートを銃形態へと変化させると、なのはの背後から自分を狙っている標的目がけて銃弾を発射し、なのはは自分の頬を掠るナーノの銃弾に目を見開いた。

「！」

「え・・・・・・」

フェイトやスバル達フォワード陣、更にはヴィヴィオも一瞬何が起こったのか全く分からないでいた。

ナーノは銃弾を撃ち終え、闇夜に姿を隠し、気配すら感じさせない繊細な動きをするターゲットの一体を撃墜させると、徐にこう語り出す。

「これがガンモードの主力武器だってことは、もう分りきってるとは思うけど。これぐらいできないと、はっきり言って一流の射撃手とは言えないな。」

そう言った直後、ナーノは周囲より感じとった見えないターゲットの位置を正確に判断すると、アクロバティックな動きをしながらの他では真似出来ようのない銃捌きでターゲットを正確無比なコント

ロールで撃墜させていく。

「ふん！」

なのはを始めとする一同はここまでの暗がりの中で、全くと言っていいほど夜目の利かない場所で空中を回転したり、銃だけを器用に持ち替え闇夜から唐突に襲ってくるターゲットを造作もなく撃ち落とすナーノの戦いぶりに開いた口が塞がらなかった。

「う・・・うそ・・・！？」

「何も見えないのに、全弾命中させている！」

「こんなことって・・・！」

なのは達はナーノの訓練が終わると、一度懐中電灯で足元を照らしてみた。

そこには、ナーノが正確無比なコントロールで撃ち落としたターゲットが全弾同じポイントで貫通されていた。

ナーノは寸分たがわぬコントロールの良さで、あらゆる方向から飛んでくるターゲットの攻撃を受け流し、すべて同じ場所に撃って撃墜させるという神業をやってのけたのだ。

唖然とするなのは達を余所に、ナーノは徐に言う。

「僕に射撃を教えてくれた人は言ってました。いついかなるときに敵が襲って来るかはわからない。相手は自分の都合に合わせてはくれない。確実に仕留めるためには、状況に関係なしに敵を撃ち抜け

る技量が無いとダメだって。だから僕はその為の訓練として、その人から暗がりでも物が撃てるように鍛えられた。どの角度からも。どの射程からも。イチイチ制止して物を撃つなんてことは――――――本物の銃戦を知らない甘ちゃんの言う台詞だよ」

「う・・・！」

なのはは痛烈な言葉で自分の教導と射撃のスキルを否定するナーノの言葉に返す言葉が見つからないでいると、ナーノは更にこう尋ねた。

「聞きますが、お母さんもティアナさん、それに他のメンバーは今の標的を目で捉えられました？」

「そ・・・それは・・・」

「無理だよ・・・だって・・・・！」

「当然目じゃ追えませんよね。頼りになるのは長年の勘と研ぎ澄まされた反射神経のみ。だけどそれが出来なかったということは、少なからずお母さんたちのやってる訓練じゃ全然足りないって事」

「なっ・・・・！」

「それでも僕に何か言うつもりがあるなら、一度撃ってみると良いよ」

「え・・・」

ナーノの言葉に一瞬きょとんとした顔を浮かべたなのはだが、ナー

ノはそんななのはの元へと近づいて行くと、徐に自分がその手に握っていたライジングハート・ガンモードを手渡そうとする。

なのははそれを見ながら、自分に対してそっぽを向けるナーノの言葉を耳にする。

「先に言っとくけど、ガンモードは確かに使い勝手はいいが、反動は半端ないよ」

ナーノが母親の教導に関して、一貫して甘ちゃんだと豪語しているその頃、地球に出現しその後逃げていった甲殻類グリードと、そのグリードが生み出したカニヤミーは森の奥に身を潜め、時期を見計らっていた。

「ウウウオオオオオオ！！！」

カニヤミーは森の中で咆哮を上げ続け、その傍ら甲殻類グリードは拳を握りしめながら呟く。

「僕の・・・仲間・・・・・・コアメダル・・・・・・」

この時、カニヤミーによって意識を乗っ取られていた大原の方はと言えば、限りなく限界に近い状態である中、脳裏に浮かべるのは真っ先に両津の顔だった。

「（りょ、両津・・・・・儂は・・・！！）」

両津の顔を思い浮かべた大原も、ついに精神をカニヤミーの方に乗っ取られてしまうと、カニヤミーは月夜に向かって大声で叫び続ける。

「グアアアアアア！！！」

そして甲殻類ヤミーの方も自分の欲望を膨らましていく。

「僕の仲間を・・・もっと・・・もっと・・・！」

この時、二体の姿を気の陰から窺っていたのはカザリであった。

「へぇ～～～あれか。ミスターの言ってた新しいグリードって・・・（黒いコアメダルと甲殻類のヤミー・・・・・なんだかこれからが面白くなって来たかな。ふふ）」

そう思った直後、カニヤミーは大原の精神を乗っ取り咆哮を上げながら両津の名を叫ぶ。

「ウオオオオオオオオオオ！！！！リョウツ！！！！！！！！」

その咆哮は両津のいるニコニコ寮まで飛んできたかはさておき、両津は不意に感じた嫌な悪寒に酒を零しそうになる。

「うお！？」

「両さん、どうかした？」

「いや・・・なんか部長の声が聞こえたような気がしたんだが・・・気のせいか」

「来る可能性はあります。」

「そうか・・・・・まぁその時は部長を助け出すまでだ。で！儂のカニを喰ったことの恨み・・・この手で晴らしてやる！！」

「本性はそっちか・・・」

ユーノスが呆れた様子でそう言うと、ユーノもまたため息をついてしまい、直後両津は二人に詰め寄りこう言った。

「だってよ！部長の奴・・・今頃儂がありつくはずだった高級なカニを一人で喰っちまったんぞ！しかも部下がいる身でありながらまるで分け前もなしとはどういう事だ！？部長がそんな卑しい人間だとは思わなかったよ！」

「さっきまでとはまるで違いますね」

「ユーノ。貴様にもわかるだろ！貧乏人の気持ちが！！」

「えっ・・・！」

「貴様は許せるか！自分が食うはずだったものを、知らないうちに他人に食われた時の悔しさを！！儂は何が何でもそこだけが納得いかん！！」

困惑した顔を浮かべるユーノとユーノスは、苦笑をしながらこう言うしかなかった。

「いや・・・食べちゃったものはもうしかない事ですし・・・」

「そうだな。それを取り返す術などありはせぬ」

すると、それを聞いた両津は台所から包丁を持ち出し畳に突き刺してユーノ達を驚かせると、鬼のような形相で言った。

「だったら脅迫でも何でもして、部長の自腹切ってでもカニを取り返す!!!食べ物の恨みは怖いんだぞ!!!!」

二人は圧倒的なジャンプキャラの迫力に思わず腰が抜けてしまう。

「あ・・・ははは」

「やれやれ・・・恐ろしいな」

地球でユーノ達が両津と共に一夜を過ごしている間、ミッドチルダに戻って夜間訓練に没頭していたナーノは母親であるなのはに自分の銃を手渡そうとする。

「やってみたら?」

「私がこれで・・・」

なのはは自分の杖以外での射撃をすることに戸惑いを感じていたが、それをフェイト達が後押しする。

「なのは、やってみたら」

「そうだよ。ママならこんな事造作もないでしょ」

「いやそんなことないけど・・・でも・・・」

「あ~あ・・・いいから撃ってみ!」

ナーノは呆れた様子で母親の手の中に銃を入れようとし、スバル達も期待を寄せた眼差しでなのはに言葉を向ける。

「なのはさん」

「・・・・・・」

なのはは特にスバルやヴィヴィオからの期待を寄せられると、教導官としてのプライドに火がついたのか、ナーノが渡してきた銃を徐に手を取る。

が、その直後なのははその銃が見た目とは裏腹にあまりに重かったため、思わず銃を地面に落としそうになってしまった。

「う・・・何これ！重っ！」

「え？」

「持ってるのだけで・・・キツイ・・・！」

「そ、そんなに！？」

「いやでも！ナーノは普通に・・・」

一同が驚きを隠し切れないでいると、目の前で銃を持つことさえもままならい母、なのはに向かってナーノは余所余所しく言った。

「普段の筋トレが足りないんじゃないの。教えるばっかりで、根本的に自分の体のこと・・・魔力に頼りっぱなしなんだ。」

「う・・・いつぞやのドラさんに言われたような一言・・・」

未だ持ち上げることが困難ななのはに見かけたフェイトが近づく。

「大丈夫なのは？」

「大丈夫だよ・・・これぐらい・・・撃ってみせる・・・じゃないと・・・私の・・・教導官としての、プライドが・・・・・・・！！」

なのはは何とか自力で銃を持ち上げようとするが、ナーノはプライドなるものに自分を縛り付けるなのはの考えが気に入らなかったのか、こんな事も言って来た。

「プライドね。そんな下らないもののために、虚栄を張るのもどうかと思うけどね」

「ナーノ！」

ヴィヴィオが甲高い声でナーノを叱りつけると、人が変わったかのようにナーノはヴィヴィオに向かって土下座をしてきた。

「ご、ごめんなさいお姉ちゃん！！」

「だからなんでよ？！」

思わずそうツッコんでしまうティアナであった。

その間になのはは心の中でこんな風に呟いていた。

「（う・・・ああは言ったけど、ほんとにこれ何キロあるの・・・ユーノ君は普段からあんな重たい羽織を着て身軽に動いてるけど・・・私はその点なんなんだろう・・・スバル達の前じゃ普通のように見せてるけど、ホントは根本的な体力面は何一つ変わってないなんて・・・言えないよね・・・／／／）」

いくら訓練校や教導隊での筋肉トレーニングを積んでいるなのはであっても、ここには既に人間の体力の常識を超えた持ち主がごまんと集まってきており、なのは自身自分の体力の無さを周りに悟られないよう、ここ最近では専ら魔力で誤魔化すこともしばしばであった。

ナーノはそんな情けない様子のなのはに真顔を浮かべる。

「ほら。早く撃ちなって」

「いま・・・撃つから・・・！」

なのはもなのはで意地になって銃をどうにか所定に位置まで持ってくると、全員が注目する中、なのはは両手でしっかりと銃を握りしめ照準を合わせると、ターゲット目掛けてトリガーを引いた。

が、その瞬間。

「うわああっ！！」

なのははあまりの反動に圧し負けてしまい、勢いよく後ろに吹っ飛んでしまった。

「なのはさん！」

「ママ！？」

見ていたスバル達は急いで後ろに倒れてしまったなのはの元へと近づき彼女の体を起こそうとすると、ナーノは一人笑いを浮かべる。

「ははははは。わかったでしょ？」

「う・・・・・・」

なのはは険しい表情を浮かべながらそのナーノの笑いを耳にし、フェイト達はなのはに対してあまりに否定的な息子、ナーノに苛立ちを感じながらなのはの身を案じた。

「大丈夫、なのは？」

「う・・・うん」

ナーノは落ちていた自分の銃を拾い上げると、先ほどの出来事を信じられないでいるなのはに対してこう言った。

「こいつ使うには、今までのお母さんのような鍛え方じゃだめなのよ。自分の手を汚さない綺麗事を並べたお母さんの教導じゃ、残酷無慈悲な戦場じゃ一切通じないんだよ。」

「そ・・・そんな・・・」

「戦いの根底にあるのは、『生きるか死ぬか』。模擬戦なんてものは、本当の覚悟を知らない者がする都合のいい“ごっこ遊び”だ。僕はそんなもの・・・死んでも受けるつもりはないね。いずれお母

さんのやり方が通用しなくなったとき、お母さんはどうやってその手の魔法で大切なものを守るの？どうやってお父さんの事助けるって言うの？」

「！」

ユーノの事を話題に出してきた瞬間、なのはの目が大きく見開く。

「僕は最初から、お母さんみたいな綺麗事を言うつもりはないよ。僕自身、魔法なんてものは人を守るための単なる手段の一つとしか考えてないから。詰まる話、僕はお母さんのそう言う一途で真っ直ぐすぎる理想が昔から――――――嫌いだから」

「！！！」

なのははその言葉を耳にした瞬間、息子の言葉によって自分の理想も何もかも否定された、そんな感覚に陥り、ナーノはなのはに背を向けると一人後片付けを始めた。

他の前線メンバーにとっても、ここまで現実的で人間認識において悲観的な少年、ナーノ・T・スクライアの存在はあまりに異端であった。

果たして、なのはとナーノの間に生まれているこの途方もないぐらいの隔たりと根本的な思考の食い違いは、今後どのような方向に向かうか？

そして、夜が更けていくうちに地球の最乗の中で身を潜めていたカニヤミーがついに暴走臨界点に達すると、咆哮を上げながら黒い煙を発した。

「オオオオオオオオ！！！」

カザリをそれを見ると、不敵な笑みを浮かべる。

「はじまった。暴走だ」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

やがて、夜明けを迎えた地球。

自宅のソファーの上で織姫と一緒に熟睡していた一護は、机の上に置かれたユーノから渡されたゴリラカンの音で目を覚ます。

「お！」

一護が目を覚ますと、織姫もまた目を覚まし、それにつられて奥の部屋からコンが飛び起きて来た。

「一護！」

「あなた！」

「ああ。朝っぱらから出てきやがったか」

一護は二人を連れて、ヤミーが現れた場所へと急行する。

同じころ、ミッドの方でゴリラカンの反応を受け目を覚ましたナー

ノも目を擦りながら現場に向かおうとしていた。

「ふあ～～～さて行くか」

二人が現場へと向かおうとしていると、暴走臨界に達したカニヤミーとそれを作り出した甲殻類グリードは街へと駆り出していく。

「ウオオオオオオオオ！！！」

「僕の・・・仲間・・・コアメダル・・・全部全部・・・」

二人が街へと向かうと、窺っていたカザリは不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「いっといで。好きなだけ暴れてきなよ。」

「「！」」

「ぐが～～～！！」

カニヤミーが咆哮を上げながら街へと向かったことは、ニコニコ寮で一夜を共にしたユーノとユーノスの元にも行き届き、目を覚ますとユーノは酒便を抱き寄せて眠る両津を起こそうとした。

「両さん！起きて両さん！ヤミーだ！」

「な・・・何だと！？」

両津はその言葉で一瞬にして目を覚ます。

「行きましょう！」

「おう！」

両津は制服に着替えると、ユーノと共に外へと飛び出して行き、廊下で朝早くから掃除をしていた寮のおばさんが両津の姿を目撃する。

「あれ両さん？今日は遅番じゃなかったの？」

「今はそれどころじゃねぇんだ！部長がヤバいんだよ！」

ユーノとユーノスはおばさんを見かけると、懇切丁寧にあいさつを交わす。

「あ・どうも。おはようございます」

「失礼する」

ユーノ達が駆け出していくと、何も知らないおばさんは頬に手を当て唖然とする。

「・・・はて・・・」

ニコニコ寮から飛び出した両津は全速力で走りながら、隣を走りユーノに向かって質問する。

「なぁユーノ。あんな化け物相手に、どうやって戦う気だよ？」

「方法なんてもの、ないですよ」

「何？じゃあお前は・・・！」

「方法はなくとも、そこにヤミーがいるのならどんなやり方だろうと倒すまで。人が助けを求めているのなら助ける。僕はそれで充分なんです。」

「お前・・・・・・」

「・・・――」

一護とは違い、欲望が枯れ山ほどの人間を助ける事より、目の前で困っている人を助ける道を選んだ現在のユーノ・スクライア。

そのユーノの話を聞き、胸が締め付けられる思いの二人であったが、直後ユーノはこうも言って来た。

「それに別に一人で戦うつもりじゃないですから。ナーノも両さんだっているし、何より――――――僕の師匠だっている」

「――――――は。そうだったな」

「急ぐぞ。部長を切り離して、今度こそヤミーをメダルに両替する」

「はい」

ユーノ達は胸に抱いた決意の元、カニヤミーの殲滅と大原救出の為に行動を開始する。

同じころ、ナーノは六課の転送ポートを使って地球に移動しようとしていると、それを偶然訓練場に向かおうとするなのはに目撃され、

なのははそれを見るなりナーノに言う。

「！ナーノ、まさかヤミーを！？」

「だったら何？まさか行くなって言うつもり？」

「そうじゃないけど・・・・・・」

暗い顔を浮かべるなのはを見、ナーノはなのはの考えていることに予測を立てこう言った。

「お父さんの事なら心配ないよ。お母さんが思ってる以上に、お父さんは恵まれてるし力もある。ただ、何でもかんでも自分一人で背負い込もうとするのは変わってないけど――――――だからこそ、息子である僕や一護さんがついてないといけないんだ」

「私は・・・――――」

「お父さんの事本気で助けてやりたいって思ってるなら・・・・・・先ずは何事にも負けない力を身に付けることだね。魔法でも何でも・・・ま。それが出来ないなら、この先は無理さ」

「・・・！」

「そんじゃ、お父さんの事助けてくるから」

余所余所しい言動で今までの話を何事も無いように口にしたナーノは、転送ポートに乗ってカニヤミーが出現したポイントへと急行する。

ナーノがいなくなった後、なのはは急に打ちひしがれた様子で膝をつき、胸の中のユーノのペンダントを握りしめながらすすり泣き始めた。

「・・・・・う・・・／／／」

では、早速カニヤミーの様子を窺う事にしよう。

「ウオオオオオオオ！！！！」

カニヤミーは港付近にある市街地に現れると、咆哮を上げながらハサミの先より高圧水流を発射し、建物から人に至るまで手当たり次第に破壊していく。

「きゃあああ！！！」

「うわあああ！」

暴走状態であるが故に、本来の欲望を果たすつもりが全く見受けられないカニヤミーは声高に両津の名前を叫ぶ。

「リョウツ！！！！！！！」

そして、また手当たり次第に攻撃を始めて逃げ惑う人々のうちの一人に高圧水流が向けられた瞬間、前方に向かって織姫の盾が張られる。

「三天結盾！」

間一髪のところで難を逃れることに成功すると、織姫は三天結盾を

解いて、呆然とする一般人に言う。

「早く逃げて！」

「はい！」

一般人は足早にその場から逃げていくと、織姫に狙いを定めて向かって来た。

「グオオオオオオ！」

ハサミが織姫の盾へと振り下された瞬間、織姫は更なる能力を発揮する。

「四天抗盾（してんこうしゅん）！」

織姫は、防御・迎撃術である爆発反応装甲と同等の効果を持つ四天抗盾を発動させ、三角錐状の盾で防いだカニヤミー攻撃の衝撃を盾の爆発で拡散し、同時に自動的に椿鬼による反射攻撃を加えてカニヤミーを後退させる。

「グアア！」

織姫が迎撃に成功すると、一護が織姫の元へと近づき、その後ろからユーノと両津が走ってきた。

「部長！」

「一護さん！織姫さん！」

ユーノ達が到着すると、一護は代行証を取り出しユーノに促す。

「ああ。行くぜ」

「はい！」

ユーノスはユーノに結界印を手渡し、ユーノと一護は目に出ると各々完現術を発動させた。

「変身！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

二人がスレイヤーモード、死神化を完了させると、一護は背中の斬月を取出し織姫と紺に対して、両さんの安全確保を指示する。

「織姫、コン。両さんと一緒に離れてろ」

「うん」

「よし！イッケー！」

ユーノは一護と並び立つと、自分もまた逆刃刀に手をかけ、一護と同時に向かって行った。

「「はあああああ！」」

二人は息の合った動きで互いに斬撃を加えながらカニヤミーの中に取り込まれた部長を急襲しようと試み、一護は空へと飛び上がると空中からの斬撃をお見舞いしようとする。

「月牙・・・！」

だがその時、両津は不意に背後から飛んで来た甲殻類グリードの姿を捕え目を見張る。

「待て！一護！」

「！」

「僕の仲間！！」

甲殻類グリードは一護目掛けてハサミによる攻撃を仕掛ける。

「ぐああ！」

「一護さん！」

一護は甲殻類グリードの攻撃を受け、激しく地面に叩きつけられる。

ユーノスは思わぬ敵の登場に舌打ちをする。

「ち。あのグリードか・・・」

「僕の・・・仲間・・・」

甲殻類グリードはカニヤミーを守るかのような態度を見せ、一護を睨み付ける。

一護は斬月を杖側にし、徐に起き上がる。

「くそ・・・」

ユーノは負傷した一護の事を労う。

「大丈夫ですか?」

「ああ。しかしどうするよ・・・早く部長を助けないといけないのに・・・」

そう思った矢先、カニヤミーが二人目掛けて高圧水流を発射する。

「「ぐあああ!」」

二人は勢いよく吹き飛ばされ、機会を伺っていた甲殻類グリードはユーノ達に向かって勢いよく近づいて行く。

「僕の!!」

その時、見かねた両津が履いていたトイレサンダルを某妖怪漫画に出てくる主人公の技に即して勢いよく飛ばしてきた。

「リモコン下駄!!」

「ぐあ!」

甲殻類グリードはまたしても両津の放った攻撃を頭に受けると、地面に膝をついて後頭部を押さえつける。

「両さん!」

「浅草のガキ大将だった儂を舐めるな！とう！！」

両津はそのまま生身の身でありながら効果来るヤミーの元へと飛び出すと、ゴリラ並みの怪力で甲殻類グリードにパンチを繰り出す。

「せりゃあああ！」

怒涛の両津の拳が甲殻類グリードに叩き込まれる中、不意に背後からカニヤミーが両津の服を掴み、両津を勢いよく投げ飛ばしてしまう。

「うわあああ！」

「「両さん！」」

しかし、両津が地面に叩きつけられそうになった寸前、ナーノが仕掛けたホールディングネットが展開される。

〈Ｈｏｌｄｉｎｇ　ｎｅｔ〉

「おっと！」

両津の体はバウンドし、現れたナーノはユーノ達に笑みを浮かべる。

「へへ」

「ナーノ！」

「お待たせ。さーて、いきますか」

ナーノはライジングハートを起動させると、パスを取出し変身する。

「変身！」

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

「よっしゃー！」

ナーノは変身を遂げると、カニヤミーの元へ近づき銃を撃ちながらカニヤミーを翻弄すると、近くにいた両津に避難を促す。

「両さん！仕事の邪魔になるから退いててください！」

「誰が！儂だって部長を助けたいんだ！」

「じゃあ勝手にしてくださいね」

両津の我儘を受け入れると、ナーノは自分のペースに合わせてカニヤミーと戦闘を続けていき、距離を保ちながらナーノは魔力を左腕に供給し、ユニットを展開。

〈Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　Ｖｕｌｃａｎ〉

ユニットが展開されると、ナーノの左腕に特注の魔導機関砲であるインフィニティ―バルカンが装備される。

「よし！」

ナーノはカニヤミーに狙いを定めると、一気に怒涛の魔力機関砲を

その名の通り、無限に連射し始める。

「おらああ！」

「グアアア！」

ナーノの攻撃をその身に受けたカニヤミーは全身から大量のセルメダルを放出し、機会を伺っていた両津は勢いよく走り出すと止めの必殺技を叩きこむ。

「もう一つおまけだ！喰らえ必殺・・・！」

両津はそう言いながら、カニヤミーの股間目掛けて世にも恐ろしい技を仕掛ける。

「金的ケリ！！！」

「グオオオオオ！！！」

カニヤミーはあまりの痛さに意識が分裂すると、それと同時に体の中に取り込んでいた大原の体を分離させてしまった。

ユーノ達はこの光景に思わず目を疑った。

「部長が！」

「おいおいマジかよ・・・！」

「こんなことがあるのか」

信じられないでいるユーノ達を余所に、ナーノは両津と手を取り合い部長を無事に救出できたことに満足げなようすだった。

「ハハ。やりましたね」

「でははは！見たか、下町のお巡りさんの力！」

だが、その直後分離したカニヤミーは弱まるどころか更に力を増大させ、咆哮を上げる。

「グオオオオオオ！！！！」

「「「！」」」

これを見て危機感を感じたユーノスは三人に退避命令を下す。

「マズイ！離れろ！」

「ガアアアア！」

すると、カニヤミーは目の前のナーノに向かってハサミによる強烈な攻撃を浴びせる。

「ぐあああ！」

「ナーノ君！」

ナーノは地面に転げりまわると、凄まじい威力のカニヤミーの攻撃に驚愕する。

「な、何だよあの力・・・！」

と、ここで今度は甲殻類グリードの方も一緒になって動き出す。

「僕の仲間・・・傷つけるな！！」

甲殻類グリードは黒いオーラを発すると、ユーノ・一護・ナーノの三人目掛けて想像を超えた苦しみを分け与える。

「ぐあああああ！」

「のあああああ！」

「がああ！」

「ユーノ！」

「「「あなた（一護）！！」」」

声を荒げる織姫達。

満身創痍な三人だったが、ここで更にカニヤミーの追い討ちが加わる。

カニヤミーは口から気泡を吐くと、そこから大量の小型カニを生み出しユーノ達の足元へと向けた。

「なんだこりゃ！？」

一護達は足元に現れる大量のカニを追い払おうとするが、その直後

カニは一斉に爆発を起こして三人に大ダメージを与える。

「「「ぐあああああ！」」」

織姫は思わず目をつぶってしまい、ユーノスは険しい顔を浮かべる。

「やばいな」

「あなた！」

「おい！何とかならんのか！」

両津はユーノスの体を鷲掴みにしながらそう言うも、ユーノスは苦い顔を浮かべるばかり。

「く・・・この状況は・・・！」

ユーノは当たり所が悪かったのか、一護とナーノ以上に酷い損傷を受ける。

「く！」

「ユーノ！しっかりしろ！」

「すみません！」

ナーノはそんな父の仇と言わんばかりに、足元のカニ目掛けて銃弾を連射する。

「オラオラオラオラ！」

一護もまた、ナーノと同じように月牙天衝でカニヤミーと甲殻類グリードに対抗する。

「月牙天嵐！！」

だが、そんな抵抗もむなしくカニヤミーの攻撃が二人を襲う。

「オオオオオオ！！！！！」

「「ぐあああ！」」

ユーノは目の前で傷ついていく二人の姿に、見ていられなくなると大声を上げる。

「止めろ！！！！おおおおおお！！」

そんなユーノの強い想いに応えたのか、唐突にユーノの懐と一護の懐が光り始めた。

「「！」」

「これは・・・！」

「まさか・・・・・・」

一同がこの不可解な現象に目を奪われる中、ユーノと一護は互に光それを取り出すと、光っていたのは紛れもなく月形のアクセサリーだった。

二人はアクセサリーを通じて感じてくる師弟同士の魂の共鳴に驚愕していた。

「俺とユーノの魂が・・・」

「共鳴してる・・・！」

コンはこの光景を見ると、ユーノスと顔を見合わせる。

「おい。ひょっとしてもしかすると！」

ユーノは月形を握りながら、一護に向かって声を上げる。

「一護さん・・・！」

「・・・ああ！やるんだ！俺とお前の絆の力で！」

「はい！」

ユーノは意を決すると、月形に秘められた師・黒崎一護の魂を完現術させる。

〈Ｂｌａｃｋ　ｍｏｏｎ　ｒｉｓｉｎｇ〉

「オオオオオオ！！！！」

その瞬間、ユーノの全身を多い尽くす赤みがかった漆黒の霊圧。

霊圧の嵐のすさまじさを目の当たりにし、両津は思わず後ずさる。

「な、なんだ！」

「完現術コンボ・・・！黒崎の魂がユーノの！？」

そして、嵐が収まり中から出て来た一護の魂を完現術させたユーノ・スクライア。

「は！」

その時のユーノの姿は、一護の斬魄刀「斬月」と全く同じものを手に取り、頭は一護のモノとほぼ変わらないもので、全身を多い尽くすロングコートのような漆黒の衣装はまさしく斬月を彷彿とさせるものだった。

一護達は第６の完現術コンボを完成させたユーノの姿に目を奪われる。

「あれは」

「ユーノ・・・」

「行くぜ」

一護のような口調で鋭い目つきを浮かべたユーノは斬月を大きく振りかざすと、そこから凄まじい剣圧を放ち、カニヤミーと甲殻類グリードを退かせる。

「「グアアア！」」

ナーノは一護と共に避難をすると、その凄まじさに驚嘆する。

「おお・・・凄いや」

後退した甲殻類グリードは剣圧に当てられると、身体から二枚のコアメダルを放出し、ユーノスはそれを素早く手に奪い盗り笑みを浮かべる。

「ふん。こいつは儲けたな」

「く・・・僕のメダル・・・！」

甲殻類グリードはメダルを奪われると、カニヤミーを放置して逸早くその場から離脱した。

その間に、ユーノは斬月の巻布を使ってカニヤミーに向かって遠心力を加えた攻撃を仕掛ける

〈Ｄｅａｄｌｙ　ｄａｒｔｓ〉

「ハアアアアア！！！」

カニヤミーはその威力に圧倒させると、全身から多量のセルメダルを放出し、一護はユーノ隣に立つと、ユーノと顔を見合わせる。

「一護さん」

「ああ。これで決めるぜ」

〈Ｇｅｔｓｕｇａ　ｔｅｎｓｈｏ〉

二人は同じ愛刀・・・斬月に霊圧を極限まで溜めていくと、目の前に倒れるカニヤミーに向かって絆の斬撃、月牙天衝を放つ。

「「月牙――――――天衝ッ！！！」」

カニヤミーは二人が放った月牙天衝をまともに受けると、悲鳴を上げながら爆散し、そのすべてがセルメダルとなって飛散した。

「おお。大漁だなぁ！」

ナーノは早速これを見るなりメダルタンクを取り出し回収する。

ユーノス達も戦いが終わり、安どの表情を見せる。

やがて、ユーノは変身を解除すると一護に顔を向ける。

「やったな」

「はい♪」

と、その時・・・ちょうど大原が意識を取り戻し、現状を確認する。

「う・・・・・うお？儂はどうしてこんな場所で・・・」

すると、そんな大原の元へ歩み寄る恨みつらみを乗せた両津。

「お目覚めの様ですね部長――――――」

「げ！りょ、両津！？」

両津は怯える大原に形相を向けると、カニを独り占めした事への恨みをぶつける。

「よくも儂のカニを喰ってくれましたね！！」

「ひいい！！わ、悪かった！その件に関してはちゃんと！！」

「じゃあ早速償ってもらいましょうか！！部長の自腹で！！！」

「ひえええ！！！」

大原は怖くなってその場から逃げ出すと、両津はそれを執拗に追い続けるのであった。

「待てコノヤロウ！！！儂のカニ返せ！！！」

ユーノ達はこんな二人のやり取りを、実に平和的な視点で窺っていた。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

早朝からの激しい戦いが無事に終わると、ユーノは織姫の治療を受けてからユーノス、ナーノを連れて六課へと戻って来た。

「ふう・・・朝から疲れちゃったな――――――お」

その時、散歩をしていたユーノの目に飛び込んできたのは意気消沈とした様子で体育図割りをするなのはの姿であった。

「なのは？」

気になってなのはの元へと近づくユーノ。

その間に、なのはは一人ナーノに昨夜と今日の朝に言われた言葉を思い返していた。

『今までのお母さんのような鍛え方じゃだめなのよ。自分の手を汚さない綺麗事を並べたお母さんの教導じゃ・・・・・・お父さんの事本気で助けてやりたいって思ってるなら・・・・・・先ずは何事にも負けない力を身に付けることだね。』

深く考え込むなのはは、自分のやり方ではユーノを助けられないと思いがちになってしまい、自信を無くそうとしていた。

「（私じゃ・・・・・・ユーノ君の事助けられないの・・・・・・）」

そう思っていた矢先、ユーノが後ろから声をかけていた。

「なのは。どうしたのそんな暗い顔して？」

「！ユーノ君。帰ってたんだ」

「うん。何かあった？」

ユーノがなのはの隣に座ると、なのはは暗い表情で言う。

「ちょっと・・・ナーノに叱られちゃってね」

「ナーノに？」

「私の訓練は自分の手を汚した事のない人が言う甘ったれた綺麗事だって言われてね。綺麗事が何時までも通じる訳ないとも指摘されちゃって・・・」

「・・・・・・」

「ユーノ君・・・・・・私の訓練・・・私のやって来たこと・・・・・・そんなに間違ってるのかな？やっぱり私じゃ・・・ユーノ君みたいに人にものを教えることなんて出来ないのかな・・・／／／」

何時になく自分を否定的に捕えるなのは。

ユーノは一度ため息をついてから落ち着いた様子でこう言って来た。

「ふう。まぁナーノの言うことも分らない訳じゃないね。確かになのはの言ってる事、やってる事は、一度も己の手を汚した事がない者が言う、甘っちょろい綺麗事かな」

「ユーノ君・・・・・・」

なのははユーノにさえ、自分のやり方を否定されたことにちょっくを隠し切れなくなるが、その直後ユーノは優しく微笑みかけ、意外な事を言って来た。

「けれども僕はそんな現実的な指摘よりも、なのはのやる甘っちょろい綺麗事の方が好きだよ」

「！」

その一言に驚くなのは。

ユーノはなのはを自分の元へと抱き寄せると、不安な気持ちでいっぱいななのはに優しく言葉をかける。

「大丈夫。君は自分のやり方に自信を持っていいんだよ。ナーノは途方もないぐらいの性悪説を唱えて、悲観的にものを見てるけど、君がそれに合わせることもないと思うんだ。だから、自分を信じて真っ直ぐいればそれでいいんだよ。僕はその為の、君の味方なんだから」

聞いていたなのはは、涙目でユーノの胸板に顔を当てると、すすり泣く声でユーノに感謝の言葉を口にした。

「・・・うん・・・．／／／ありがとう・・・ユーノ君。なんか・・・また甘えちゃったね」

二人の絆の糸は、どこまでどこまでも――――――伸び続けるのだろう。

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

部長と綺麗事と死神コンボ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は両さんのプロフィールを紹介しよう♪」

「基本的に両さんと言えば、お金に関して執着が強いってイメージだよね。では実際のところどうなのか説明するとこうだ。作品の中では独力もしくは多少の中川の援助で多数の事業を興している。具体的にはポケベル、日本酒、石鹸、鯉、テレビ番組、ラジオ番組、ケーキ、動物プロダクション、老人音楽プロダクション、アイドルファンクラブ、占い、プラモデル、ＯＳ、パソコン、地域通貨、警備会社、都市型リゾート、気球やはしご車によるデリバリーサービスなど多種多様」

「事業成功の要因として、まず、経営コンサルタントとして類い稀な才能を持っていて、客の入らない店や潰れかけた店を大繁盛店に導いていたり、自らイベントを開催し大成功させたりしている。また、誰とでも仲良くなれる性格から、営業マンとしても類稀な才能を持っていて、（本来は禁止されているが）アルバイトでトップセールスマンになったことも度々ある。」

一「こうして見ると、両さんってホントスゲーよな。」

両「ここまでの道のりも決して楽なものではなかったぞ。大体事あるごとに儂の成功は何時も部長に邪魔されて頓挫してしまうんだ！く～～～部長が儂の邪魔をしなければ儂は今頃億万長者！！」

と、それを聞いた大原は鬼のような形相とオーラを醸し出し彼らの

前に姿を現し、ユーノと一護はそれを見て一目散に逃げ出した。

ユ・一「そ、それじゃあ僕らはこれで！！！」

両「ん？おい！どうした。儂の後ろに何か立っているの・・・・・ひ！！」

両津が後ろに振り返った瞬間、大原の怒りは大爆発。

大「バッカモーン！！！！貴様！！普段儂の事をそんな目で見ていたのか！！！」

両「うわあああ！！！すいません部長！！！ひえええええええ！！！」

両さん、これからも頑張ってください。

応援しています。

魔導師図鑑ハイパー！

一護と織姫、コンの三人は定休日の午後、久しぶりに映画館に来ていた。

一「こうして映画見るのも久しぶりだな」

織「最近はこう色々バタバタしてたからね。ささ、早速中に入りましょう♪」

三人は中に入ると、その映画を鑑賞する。

今回鑑賞しているのは、『猿の惑星創世記』である。
織姫はポップコーンを食べながら、他の観客と一緒に楽しく見ている。

織「うわははは！見てみてあなた！あの猿すご～い！よくあんなこと出来るね～～！」

一方の一護とコンは目を点にして織姫が指摘する猿を見ていた。

一「おいコン・・・・・あれ誰に見える？」

コ「んなもん俺に言わなくても分るだろう・・・・・・」

二人がそう言う猿の正体とは・・・――――

猿『ぐわあああ！！金だ！！！！儂に金をくれ！！！！！』

明らかに両津勘吉の姿であった。

一・コ「（なんで両さんがスクリーンの中にいるの！？）」

織「わははは！！！オッカシーネ、ほんと♪」

それでも気にせず大笑いの織姫は、やはりただものではなかった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ア「我々は、『ミクロアース』から宇宙の平和を守るためにやって来た、ミクロマン。」

ヴィ「はやても笑うなよ！！結構恥ずかしいんだぞこの姿！！」

恋「つうかお前の声って俺とそっくりだな。」

ア「マグネパワー！！！！！全開！！！！！！！」

第１７３話　ミクロと恋次と暴走自動車

こち亀篇

登場人物

両津勘吉

声：ラサール石井

公園前派出所に勤める警察官で、階級は巡査長である巡査。角刈り、大きな目、体毛が濃く、左右つながった極太の一本眉毛が特徴で、年中素足でサンダルを履き、腕捲りをしている。常人以上の体力と生命力を持っているほか、手先が器用で多数の資格や免許を持つ。金銭に対する欲望が深く、詐欺まがいな行動も多いが、困っている

者を手助けする事も多いため、下町の住民からの人望も厚く、また人脈も広い。浅草一郎と言うもう一つの名前を持つ。様々な事業を始めることが多いものの、一時的には大儲けをしても最後には大失敗して莫大な借金を抱える結末が多い。また、警察官としての実力があり、葛飾署での検挙率は常に一位。そのため多々の不祥事を起こしても減給などに留められている。

中川圭一

声：宮本充

世界でもトップレベルの大企業「中川コンツェルン」の御曹司。美形で長身、多才で何でもこなす。物腰穏やかで落ち着いた男性だが射撃と逮捕術は天才的な腕を持つ。幅広い知識を持ってはいるが、かなり世間知らずな部分がある。両津の破天荒さに半ば呆れながらも、両津の長所も知っている為、先輩として慕っている。

秋本・カトリーヌ・麗子

声：森尾由美

秋本麗子と表記されることが多い。世界有数の巨大企業「秋本貿易」の令嬢で、パリ生まれの帰国子女。容姿端麗でありながらも男勝りの強さを持つほか、料理やピアノ、射撃など多彩な才能を持っている。中川と同様、両津を慕っており、両津の部下でありながら「両ちゃん」と呼んでいる。

大原大次郎

声：佐山陽規

葛飾区亀有公園前派出所勤務で、両津の上司にあたる巡査部長を務めている。頑固者で問題児の両津に対しては厳しく、両津との対立

が多いように思えるが、根は優しく両津を息子みたいに思っており、可愛いがっていると同時に、親身になって心配している。意外な面では愛煙家でありマイルドセブンを好んで吸う。両津の留守中にカニを一人で食べてしまったことが切っ掛けで、甲殻類ヤミーの標的となってしまいセルメダルを投下され、カニヤミーと化してしまった・。

寺井洋一

声：　林家こぶ平

葛飾区亀有公園前派出所に勤務する警官。個性的な派出所メンバーの中では最も平凡な警官。

その他の登場人物

本田速人

声：家中宏

「アンゴルモア・銀魂篇　漫画もいいけど、新聞の社説も読んでおこう・幹部戦闘員」を参照。

ボルボ西郷

声：岸祐二

葛飾署に勤務する警官。鹿児島県出身。誕生日は１２月３１日。身長１８２ｃｍ、体重９５ｋｇ。血液型はＡ型。ゴルゴ１３のオマージュ（ゴルゴ→ボルボ、デューク東郷→西郷）と思われる。かつてアメリカ合衆国でＦＢＩの射撃術をマスター、傭兵・グリーンベレーとして５年間世界の戦場を渡り歩いた経験を持ち、ニューヨーク市警察に勤務していたこともある。そのため常に全身にあらゆる武器を身につけているが、実際は臆病なため、武器を全部取られると

気が弱くなる。サバゲーが大好きで、誘われるとどんなに遠くにいても駆けつける。登場したころは身の危険を感じたり、物音に過剰に反応したりすると無差別に発砲してしまう癖があったが、今ではだいぶ落ち着いた。

左近寺竜之介

声：岩崎征実

葛飾署に勤務する警官。埼玉県出身。誕生日は１２月３１日、身長１８２ｃｍ、体重９５ｋｇ。血液型はＡ型。胸囲は１８０ｃｍ、ウエストは７８ｃｍ。趣味はテレビゲームとフィギュア収集。ゲーム嫌いの弟がいるらしいが未登場。体育会系に属する人物で、あらゆる格闘技（特に柔道）に対して優れた技能を持っている。柔道のほか、合気道、空手、テコンドーの師範証を持っている。元々は格闘技ゲーマーで、両津や後輩らと対戦するが、熱くなりすぎて実際の対戦相手を殴り飛ばしてしまうこともしばしば。その体型に合う制服がないため有事の際を除き私服（タンクトップ）で勤務をしている。ある時偶然「どきどきメモリアル」（「ときめきメモリアル」のパロディー）のキャラクターに自分の名前を呼ばれたのをきっかけに、その種のギャルゲーにもはまりだす。ボルボとセットでの登場が多い。３人共、体力は並外れており、１００ｍの崖の縄梯子を昇り降りするのに僅か１５秒しかかからない。女嫌いになった理由は小学生時のトラウマからになったことになっている。当時、沙織にそっくりな少女に一目惚れをしたのだが、柔道の大会でその少女と対決することになり、試合前に緊張してトイレに行くのを忘れ、試合の最中に漏らしてしまい、皆に笑われてしまった。それ以来、左近寺は極度の女嫌いになった。「どきメモ」をプレイし始めてから女嫌いは少しずつ直っていったが、「どきメモ」で告白に失敗し、そのショックで女嫌いはさらに酷くなった。しかし、女性に対して興味を持つ描写もある。また、「沙織～！！」と叫ぶ口癖、沙織の人形の乳首を触り

興奮する癖（フィギュアのサイズによって反応が大きく異なる）や悲しい時に失禁する癖が追加された。

登場ヤミー

カニヤミー

声：佐山陽規

身長　２２４？　体重　１６５？

特色／力：硬い甲羅による高い防御、強靭なハサミと水圧による攻撃、小型カニを操る。

突如地球にその姿を現した黒のコアメダルを持つグリードの欲望の糧として、大原大次郎がセルメダルを入れられ姿を変えたもの。硬い甲羅によってユーノ達の攻撃を容易に受け止めるだけでなく、強靭な威力を秘めた大型のハサミによって建物を始めとする大型のものを切断し、刃先からは高圧水流を発射する。そして、吹いた気泡から生み出す小型のカニを使って敵を追い詰める。未知なる能力と高い防御性能でユーノ達を追い込むも、黯月の死神の完現術コンボを発動させたユーノと一護の攻撃を受け倒される。

ミクロと恋次と暴走自動車（前書き）

君たちは知っているか？

全宇宙の支配を企む巨大な悪の力が、次元世界に忍び寄っていることを。

だが、その宇宙侵略を阻止すべく、小さな体に限りない勇気とパワーを秘めた五人のヒーローが降り立った。

彼らの名は――――――

ミクロと恋次と暴走自動車

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

４月もそろそろ下旬を迎えようとしている今日この頃。

市内へと買い出しに出ていた恋次、ルキア、吉良の三人はその帰路で、休憩がてら恋次の遊びに付き合っていた。

恋次は下り坂を利用して、スケートボードに乗ると加速をつけ、段差のある丘を空を飛ぶように駆け抜ける。

「おっしゃああ！！」

吉良とルキアはそんな子供っぽくもあるが、何よりも楽しそうな様子の恋次を微笑ましく見つめながら、彼の応援をする。

「イケー、阿散井君」

「その調子だぞ」

二人の応援を受け、このまま体制を保ちつつ丘を下って行こうとする恋次。

と、その時恋次の瞳にあるものが映る。

「ぬ！？」

それを見た恋次は、気を抜いてしまいバランスを崩しスケボーごと丘の上に落ちていく。

「うわあああああ！！！」

恋次が豪快に丘の上へと落ちていくと、その上で見ていた吉良とルキアも慌てて駆け寄る。

「あ、阿散井君！？」

「何をやってるのだ貴様は――――」

「いててて・・・派手にやっちまったぜチクショー」

恋次は一体何を見たのか？

それを教える前に、今度はユーノの方を見てみることにしよう。

ユーノは今日は、珍しく色んな部署からの応援要請を受けており、人がいいユーノは断ることもなくすべての部署に顔を出しては最速で仕事を終わらせ、その帰り道であった。

「いや～～～学会と本局・地上部隊の武装隊、更には無限書庫の手伝いという四股は流石に疲れたな。と言っても、僕の場合は四束の草鞋どころか何足も履いてるよな♪」

そう思いながら、ユーノが道を歩いていると、偶然にもは彼は信号機を渡ろうとしている重い荷物を背負った老人を見かける。

「お？」

老人は辛そうな顔でその荷物を一人背負ってゆっくりと道を歩いて

行くが、見かねたユーノは老人の方へと近づき、荷物を持ってあげる。

「おばあさん。手伝います。」

「ありがとうね。助かるよ。」

老人の荷物を持ち、横断歩道を無事に渡ることが出来ると、ユーノも安どの表情を浮かべ、老人はそんなユーノに感謝の意を表する。

「ありがとう。本当に助かったよ。」

「いえ。じゃあ、気を付けてくださいね。僕はこれで♪」

「あ、ちょっと待ちなさい。これほんの気持ちに。」

老人はそう言うと、その荷物の中からお茶請け用のお菓子の箱を一つ取り出しユーノに渡そうとする。

「いいですよ、お礼なんて。」

「いいから、いいから。気持ちだからさ。」

「そうですか。じゃあ、ありがとうございます。」

ユーノは遠慮がちに老人からの行為を受け入れると、お菓子の箱を手に取った。

そんなユーノのやり取りを建物の物陰からずっと伺っていた小さなもの達の会話が聞こえてくる。

「あれが魔法使い？」

「然様であ～る。あの者からは、普通の人間にはない凄まじい強い力を感じる。」

「確かに、過去のデータにも人間・・・子供の協力は残っているが・・・魔法使いの協力とはまた勝手が違うぞ。大丈夫なのか？」

「俺達が本来の力を発揮するには、誰かの協力が必要だぜ。」

「地球でなら兎も角、少なくともこの世界の人間・・・魔導師ならば異世界からの訪問者に関して、別段抵抗することなく受け入れてくれるはずだ。」

「アーサー。協力を要請するなら、彼らしかあるまい。」

「・・・――――」

その男、アーサーは意を決すると、仲間の申し入れを聞き入れある決断を下す。

そんな彼らの話し声など全く聞こえている筈もない様子のユーノは、そのまま真っ直ぐ六課へと向けて歩きつづけた。

さて、そんなユーノとは違い、恋次達一行は何をしているのかと言えば、ルキアは恋次がバランスを崩したその理由が、彼の指先に留まった一匹の虫であることにあったと判別した。

「おお。コガネムシか。珍しいな～この世界にもいたのだな。貴様

はこれを踏まないようにしてああなったのか」

「仕方ねぇだろ。虫でも、生きてる分には違いねぇだろ」

「阿散井君にしては、良い言葉だね。」

「どういう意味だよ！」

少々吉良の言葉に苛立ちを怯えながらも、恋次は指先に留まったコガネムシを空へと帰してやった。

微笑ましくその光景を見守る三人。

すると、そんな三人を偶然にも見かけた帰路のユーノが声をかけてくる。

「あ、恋次さん♪みなさんも」

「ユーノさん」

「おお。ちょうどいいタイミングだ。俺達もそろそろ帰るか」

恋次はスケートボードを手に取ると、ルキア達と共にユーノの元へと上がっていく。

「泥だらけですけど、どうしたんです？」

「ちょっと、派手にな」

四人は談笑をしながら六課の道を歩いて行くが、丁度この時六課の

ユーノ宛てに、ある個積みが届けられており、それが今回のアンゴルモア騒動の幕開けになるとは思いもよらなかったのだ――――――

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

数分後。

我が家のようなものとしてユーノ達が機動六課が見えてくると、ユーノは先ほどのことを踏まえてこんな事を言って来た。

「いや～～～いいことするって気持ちがいいものだすね♪戦いで殺しばかりやってるから、こういうこともしないと、“奴ら”が死後に黙っちゃいないからな・・・」

ユーノが言う奴らとは、他でもない地獄の番人クシャナーダである。

地獄の呪いと言う普通じゃ考えられないような苦痛をその体に刻んだユーノに取って、現世にある自分に降りかかる痛み・辛み・不幸はすべて地獄が与えたユーノへの生き地獄であり、ユーノが言うように殺人のような大罪を犯せば犯すだけ、地獄はユーノを死後永遠の苦しみを与えることになる。

それを傍らで聞いていた恋次達は苦い顔を浮かべ、恋次は悲観的なユーノの言葉にこう返す。

「おいおい。まだ確定した訳じゃねーんだ。あんまし悲観的に考えるのは止そうぜ」

「ははは。そう言ってもらえるだけで、僕は十分幸せですけどね♪」

そんな事を語っているうちに、一同は六課へとたどり着く。

「ただいま♪おやつ貰って帰ってきたよ。」

ユーノが戻って来ると、ユーノスが彼に近づきこう言って来た。

「お、ユーノ。帰ったか。ちょうどいい。お前に小包が届いているぞ。」

「小包？誰だろう。」

そう思いながらなのは達が待つロビーに行くと、ロビーの上の机には封を解かれた本一冊分の大きさ程の箱がポツンと置かれていた。

ユーノをはじめ多くのものがこの箱を怪訝そうにのぞき込む。

「宅配便みたいだね。見たことないマークだけど？」

「何が入ってるんだ、それ？」

「割と軽そうだし、タオルとか？」

「さて、何でしょうかね・・・」

ユーノは早速箱の中身を確認しようとスライド式のそれを開くと、中から出て来たのは精巧につくられた人形とそれに同伴された腕時計が五つだった。

ユーノ達は意外な箱の中身に目を丸くした。

「人形だ。それに腕時計も一緒。」

「何でまたお前にこんなもの送りつけたんだ!?」

「子供なら兎も角、ユーノ先生に送るには不自然ですよね・・・」

「送り間違えかな?もしそうなら、後で返品しないと。」

ユーノは高い確率でそう思いながら、宅配業者に連絡を取ろうとし、その間に恋次は赤いボディーが特徴的な人形を手に取りその出来栄えに感心する。

「しっかし、最近の人形って言うのは随分と精密に出来てるんだな。」

そう口にした直後、彼の耳に身に覚えのない声が聞こえる。

『ははは。止めてくれ。くすぐったい。』

「!?おい、吉良か?今の声。」

「え?僕は何も言ってないけど。」

「今変な声がしたぜ。」

「空耳ではないのか、貴様の?」

しかし直後、恋次が聞いた声と全く同じ声が今度はユーノ達全員の

耳に聞こえてきた。

『君たちに聞こえているのは、私の声だ。』

「「「「「!?」」」」」

その声を聞くと、全員は耳を疑い顔を青ざめる。

「ふ、不審者か・・・誰かいます!!」

「だ、誰だ!?」

全員は六課に勤める局員以外の人間が自分たちの知らないうちに忍び込んでいるという事実に驚愕しながら、一か所に集まり臨戦態勢となる。

「おい、ユーノ!ここのセキュリティはどうなってんだ!?お前が管理してんだろ!?」

「いや、ちょっとやそっとじゃ破れない筈だけど・・・!」

ヴィータの問いに対してユーノもなんとも言えない様子でそう返事を返すと、全員はまたしても先ほど聞いた不審な声を耳にする。

『どこを見てるんだい。こっちだよ。その男性の手の中だ。』

「あ?まさか俺・・・」

恋次やユーノ達は彼の手の中に握られた人形に目を向けると、その瞬間人形の顔が動き始め、おまけに口や手足が動きだし、笑みを浮

かべて来た。

「やぁ。やっと気づいてくれたか。」

ユーノ達はそれをこの目で見た途端、全身が凍りつくと同時に思わず絶叫する。

「「「「「「ひ！あああああああああああああ！！！！！！」」」」」」

「「「「のあああああああ！！！！」」」」

「「「「「「ひえええええええええ！！！！！！！！」」」」」」

奇想天外な出来事に度胆をぬく一同だったが、その時たまたまこの現場に居合わせていなかったフェイトが外回りに出かけることを伝えようとロビーにやって来る。

「はやて。私そろそろ――――――どうしたの？」

フェイトは唖然とした表情でその場に固まっている一同を見てそう言うと、その時恋次が声を上げた拍子に放り投げた例の人形がフェイトの手の中に収まる。

「あれ？」

キョトンとした顔で人形を見つめるフェイトに、ナーノは言う。

「フェイトさん、気を付けて！その人形喋るんだ！」

「この人形が・・・・・こんにちは。何か喋ってみてください。」

丁寧な言葉遣いで人形に話しかけるフェイト。

しかし人形はその問いかけに対して何一つ返事を返すどころか、ぴくりとも動かない。

フェイトは人形を訝しげに見つめながら、人形をユーノに渡してから子供染みた事を言って来たナーノや一同を優しく諌める。

「う～ん・・・今日はもう喋らないみたいだね。もう・・・なのはもユーノもナーノをからかったりしちゃ駄目だよ。」

「ち、違うよフェイトちゃん！本当にその人形が・・・！」

「そうだよ、フェイト！僕達見たんだ！」

「「「「「うんうん！！」」」」」

必死でフェイトに先ほどの事実を訴えかけるユーノ達だが、それでもフェイトは信じられない様子で更に一蹴する。

「何言ってるの。みんなして変な事ばっかり言って。あ、そうだはやて。これからシグナムと聖王教会の方に外回りに行ってくるから、留守にするね。」

「あ、うん・・・了解したよ・・・」

フェイトは現実的に物事を捕えるが、ここで兄であるクロノが食い下がってくる。

「なぁ、フェイト。僕も見たんだ・・・！兄の言う事なら信じてくれるだろう？」

「クロノのまで変な事言って。嘘つくならもっと・・・――」

若干呆れた様子で返事を返そうとすると、一緒に外回りに出かけることになっていたシグナムが声をかけて来た。

「テスタロッサ、何をしている？そろそろ行くぞ。」

「あ、はい！今行きますね。じゃあ、ちょっと留守にするけどみんなも変なことで取り乱したら駄目だよ。」

「い、いってらっしゃい。フェイトさん。」

フェイトは結局ユーノ達の話を軽く受け流すと、自分の車に乗ってシグナムを連れて外回りへと出かけてしまった。

二人が出かけて行ったあと、ユーノ達は今一度人形を見つめる。

「おかしいですね？」

「見間違えだったんでしょうか？」

「人騒がせな荷物だぜ。」

と、その時キャロは周りを見渡した際、箱に入っていた筈の他の人形が忽然と姿を消していることに驚きを隠せなかった。

「あ！見てください！他の人形がなくなってます！！」

一同が箱の中身を確認すると、確かに近くにそれらしきものは一切見当たらないでいた。

「何処に行ったの!?」

「確かに箱の中に・・・!」

と、そんな時に限ってまたしてもユーノ達の耳に聞きなれない声が聞こえてきた。

「何と!これはデータにないぞ!」

「よし。慎重に調査しよう。」

ユーノ達が気になって顔を向けると、そこで彼らが目にした光景とは、忽然と姿を消した白・青・緑・黒を基調とするボディーの人形が机の上に置かれていたプリンやスプーンを触っているという奇怪なものだった。

これを見た一同は先ほどにも増して甲高い声を上げる。

「「「「「ああああああ!!!!!!」」」」」

人形はまるで本物の人間の様に手足を動かし、言葉を使い行動をしており、そのうちの一体である青い体の人形はプリンの上に乗ってその感触に驚いていた。

「何だこりゃ!?プニプニして体が飛び跳ねちま・・・ぎゃあああ!!」

勢い余って青の人形・・・いや既に生きているのだから人形と言う言い方は語弊があるので、男と表記する事にしよう。

青の男は勢い余ってプリンの上から飛び跳ねて地面へと落下し、鬼太郎は自分のプリンが好き放題されたことに苛立ちを覚える。

「のあああああああ!!俺のプリンちゃんで何してんだよてめぇ!!!!」

鬼太郎が叫び声を上げる中、それを余所に青の男は対照的に、白・緑・黒の男たちは目の前のお菓子を口にし、調査を進めている。

「ふ～む。美味。これはこの世界の食料のようだ。」

「これがですか?」

あまりに奇怪な現象を前にし、彼らに向けて指を向ける。

「に、人形が普通に喋って動いてるぞ・・・!!」

「これは・・・夢・・・それとも新しく確立した魔法・・・!?」

目を擦ってしまうなのは。

と、その時恋次の手の中の赤い男が一同に声をかけて来た。

「驚かせて済まない。」

「わあああ!!!!出た!!!!」

鼓膜が破れそうなほどの大声を上げる恋次とは裏腹に、その手の中の男は冷静に話を進める。

「そう驚かないでくれ。我々は、決して君たちに危害を加えるものではない。」

「じゃあ、一体あなた方は何者なんだ?名前くらい名乗ってくれてもらわない分には・・・」

ユーノがそう尋ねると、恋次の中の男は体を宙に浮かび上がらせるように身軽に回転し、残り四人がいる場所へと降り立つと、六課メンバーを見据えて自分たちをこう名乗る。

「我々は、『ミクロアース』から宇宙の平和を守るためにやって来た、ミクロマン。」

ミクロマンと名乗る五人は横一列に並ぶと、唖然とユーノ達を見据えて堂々とした様子で立ち尽くす。

ユーノ達は互に顔を見合わせてから、徐に先ほどの集団名を復唱する。

「ミクロアースから来たって・・・!?」

「ミクロマン・・・!?」

「じゃあ、あなた方も宇宙の彼方からミッドに・・・?その理由は何ですか?」

「ああ。我々の母星、『ミクロアース』で突如正体不明の事件が勃発したことがそもそもの始まりだった。原因も全く以て不明。被害は瞬く間に広がり、僅か数日でミクロアース全体に波及し、世界そのものが食い尽くされそうになっている。」

「何だって!?」

「本当かよ!」

「間違いない。おまけに、我々の星だけでなく人間の目に見えない所で邪悪な陰謀が蠢動を始めている。その根本にあるのが、君達が集めているアンゴルモアとかいう危険な物質だ。」

発明家のような容姿をした緑の男がアンゴルモアと言う単語を口にすると、ユーノ達は驚き返り表情を一変させる。

「アンゴルモアが・・・ミクロアースやこの世界の見えない所で・・・!?」

「こいつは詳しく聞かないとな。」

「えっと、アンゴルモアのことはこちらから説明しますので、一先ず今何か分かってることを詳細に話してほしいのですが?」

ユーノがそう言うと、先ほどの緑の男が快く返事をする。

「勿論であ~る。実は先ほどから、この世界で我々の星で起こった原因不明の事件と同じ異常なパルスを僕のコンピューターが捕えているのであ~る。恐らく、既に何かが起こり始めているぞ。」

そう言うと、緑の男は左腕に出現した端末を操作する。

すると、六課のテレビモニター画面が映し出され、そこでユーノ達は奇妙な臨時速報を目の当たりにする。

『ここで、臨時ニュースをお伝えします。先ほどから、首都クラナガン周辺で連続して起きている謎の自動車暴走事故ですが、時間を追うごとに増え続け、分かっているだけでも既に百四十件。現在、首都近郊の交通はマヒ状態です。』

予想だにしていなかった出来事に、六課メンバーは空いた口が塞がらないでいた。

「ま・・・まさかこれが・・・！？」

「見えない所で起き始めた邪悪なる陰謀なのか・・・！？」

恋次がそう言うと、その恋次と非常に声色がそっくりなミクロマンのリーダーである赤い男が答える。

「ああ。こんなことになったのはそのアンゴルモアの仕業とみて間違いない。どうやら、自動車を暴走させる特殊パルスを発生させているのだろう。」

それに便乗して、今度は青い男が言う。

「このまま放っておけば、自動車に限らずそのまま世界中の機械なんかが暴走して、それこそ途轍もない犠牲者が出ちまうぜ。管理局の魔導師さんよ。」

「そんな・・・！」

「それは確かにマズイな。」

「解決方法は、暴走パルス発生装置を見つけ出し破壊する。そして、その根本的な原因であるアンゴルモアを君たちが回収する事だ。勿論敵方が握っている可能性が高いのだが、そのためにも我々と戦ってほしいのだ。」

「戦うって！？あなた方が・・・！」

スバルが信じらないような眼つきでミクロマンにそう言うと、黒い体の文字通り褐色の男が落ち着いた様子で答える。

「勿論、君たちのような魔法は使えないが、こう見えても戦闘のプロフェッショナルだ。ただ、この世界の生命体でない我々がここで本来のパワーを発揮するには、君たち人間から同伴の腕時計を通して無数の情報を受けねばならない。」

「これか！」

恋次が箱に入っていた同伴の腕時計を取り出すと、緑色の男が自分の顔を引っ張りながら次のように説明する。

「我々の科学力は、人間の遺伝子レベルの情報を読み取り、我々自身の体もこの世界に適用した構造に変化させているのである！」

「ま、あんたらの正義の心が俺達に力を与えてくれるって考えてくれよ。」

それを聞いて、一先ず納得の表情を浮かべるユーノ達だが、やはり何と言っても彼らのサイズが自分たちは明らかに違うことを指摘する必要があった。

「成程。大体わかりましたが・・・・・この体の大きさの違いは、一体どうやって解消するつもりですか？」

「リィンやアギトのように、サイズを変化させることが出来るんですか？」

「いや。我々が君たちに合わせるのではなく、君たちが我々に合わせるのだ。」

「え？」

「説明すんのも面倒だから、その腕時計をつけて右側の上のボタンを押してみてくれ。」

青い男がそう言うと、恋次を始め、ルキア・スバル・ヴィータ・そして浦太郎の五人は腕時計を身に着けると、横のボタンを言われた通りに押してみた。

「ほい。」

ボタンを押すと、腕時計は眩いばかりの光を発し始め、五人はその眩しさと驚きを同時に表現する。

「「「「「うわあああああああ！！！！！」」」」」

「な！スバル！！」

「恋次さん！！」

「亀！ルキア！ヴィータも！！」

「何が起こったんだ！？」

全員がそう思いながら恋次達五人を見つめると、恋次達はその直後、ミクロマン並みの大きさまでに体が縮み始め、気が付くと五人は手のひらサイズの大きさとなっていた。

スバルは目の前を見、眼前と広がってくる巨大な大きさのギンガ達に仰天する。

「あ！これは・・・！ティアとギン姉がおっきく・・・いや、私達がちっちゃくなってる！！」

スバルの言葉を聞くと、恋次たち四人も自分たちの現状を確認し、中にはショックのあまり開いた口が塞がらないものもいた。

「おい、大丈夫か？」

机の上から恋次達を見下ろすミクロマンの声を聞くと、恋次は自分とルキアの頬をつねって夢でないことを確認する。

「おいおいこれってマジでか・・・！？」

「嘘みたい・・・！」

「こんなことがあり得るのか・・・！？」

現場に信じられない様子の五人に少し大きさが異なるリィンが近づくと、手のひらサイズほどにヴィータを見るなり、勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ヴィータちゃん。私とアギトよりも小っちゃくなったです！」

「うっせーな！！お前に言われたくねぇんだよ！！つうかどうすんだよ、この体！？」

「兄様に何と説明すればよいのだ、この醜態！？」

ルキアがそう言うと、ミクロマンの五人は恋次達の元へと降り来、こう言った。

「心配するなよ。元に戻る方法もある。それじゃ、自己紹介しておこうか。」

そう言うと、青い男から順に、白・緑・黒の男が名前が名乗り出す。

「俺の名はウォルト！」

「イザムです。」

「大発明家のエジソンであ～る。」

「オーディーンだ。」

四人が自己紹介を終えると、最後にミクロマンのリーダーを務める恋次と似た声色を持つ爽やかな二枚目のこの男が名乗ってきた。

「そして、私がリーダーのアーサーだ。よろしく。」

恋次と取り合ったアーサーに、恋次は非常にたじたじだった。

「いやよろしくって言われてもな・・・つうかお前の声って俺とそっくりだな。」

「そうか？」

と、そんな時。

エジソンの端末に暴走パルスの反応が見受けられた。

「お！暴走パルスが質力を増したようである。地図は・・・――出た！」

ディスプレイを展開し、首都クラナガン近郊の地図を広げると、エジソンは真剣な眼差しを浮かべる。

「発信源のおおよその位置が分かりそうだぞ。」

「本当か！？」

アーサーはそれを聞くと、直ぐに出発を促す。

「よし、出発だ！」

「出発って、この体で戦えって言うのかよ俺達！？」

「ハンデが大きすぎるのではないか！？」

「心配することはない。敵も我々と同程度の大きさだ。」

「ならいいけどな・・・」

心配がぬぐいきれない恋次達だったが、はやてや他のメンバーは小さくなった五人を見ながらそれぞれ言う。

「ほんと小っちゃくなったなヴィータ・・・くくくく！！！」

「は、はやても笑うなよ！！結構恥ずかしいんだぞこの姿！！」

「お似合いだよ、ヴィータちゃん♪」

「なのは！！てめぇもぶん殴るぞ！！」

「たく・・・何で俺がこんな目に遭わないとならねぇんだ！？」

「それは僕だって同じですよ、恋次さん。」

自分の体のサイズを直視し、深いため息をつく男・恋次と浦太郎。

と、そんな時エリオは隊舎の方に止めていたフェイトの車が消えていることを確認すると、表情を一変させる。

「あ！みなさん、そう言えばフェイトさんとシグナム副隊長・・・車で外回りに出かけたんじゃ・・・！？」

「そうだ！フェイトちゃんの車がなくなってる！」

「じゃあ、フェイトさんの車も暴走しちゃうの！？」

アーサーは話を聞くと、窓の外を見る。

「可能性は高い。急ごう、恋次。」

「って呼び捨てかよ！」

すると、出発の前にユーノがこんな事を言って来た。

「あ、ちょっと待って。その体で長距離を移動するのは大変だろう。ちょうどいいものがあるからこれを使いなよ♪」

ユーノは机の上に乗っていたカンドロイドを手に取ると、早速それを起動させる。

〈Ｔａｋｏｋａｎ〉

〈Ｔａｋａｋａｎ〉

タカカンとタコカンが起動し、宙を舞う姿を見て、エジソンは興味津々な眼差しを向ける。

「何と！？これは摩訶不思議な・・・！」

「ついでこれもサービスね♪」

〈Ｋｕｚｙａｋｕ〉

すると、ユーノは懐から新しく開発したカンドロイドを手に取り、プルタブを引くとそれはオレンジを基調としたクジャクへと変化し、クジャクの尾羽状のカッターが展開し、空中を飛行する。

ウォルトはユーノの厚い行為に感謝の意を表する。

「助かったぜ！ありがとな、兄ちゃん！」

「相変わらずよくもまぁ～こないなもん作ってしまうもんやなユーノくんは」

「ほんと。私もう～びっくり」

はやてやなのはは短期間の間にいつの間にか、新たなカンドロイドを作り出してしまうユーノの技術力の高さに感服するばかりだ。

ミクロマン一行は、恋次達を引き連れカンドロイド、タカ・クジャク・タコの背中に乗る。

「よし。行くぞ！」

アーサー以外のミクロマン四人はそれぞれヘルメットを着用すると、半ば強引に恋次達をカンドロイドの背中に乗せて現地へと飛び立っていった。

「「「「「うわああ！！！」」」」」

小さな体となって空を駆け抜けていく恋次達の姿を見送りながら、なのは達はこれからの事を話しあう。

「ユーノ君。どうするの？」

「先ずはフェイト達にこのことを伝えよう。それから僕らの方で彼らのバックアップを。」

「そうだな――――――――！？」

と、その時突然六課の緊急警報が鳴り響く。

「どうしたんや！？」

原因を調べると、グリフィスは報告する。

「大変です！何者かにジャミングされて、通信妨害が！」

「何だって！」

「この非常時にまさか・・・！」

ユーノはディスプレイを展開すると、高速タッチで詳しく調べていくと、その妨害が並み一折ではないことを突き止める。

「かなりの腕だな。一筋縄じゃ解除することは不可能だ。」

「お父さん。」

「ユーノ」

ナーノとユーノスが顔を合わせてくると、ユーノは首肯する。

「ああ。ユーノス元帥とナーノは僕のサポートを！ジャミングを解除します！」

「「ああ（了解）！」」

そう言うと、二人はそれぞれの持ち場に着くと自分の周りにいくつもの並列モニターを展開し、ユーノ並みの演算速度でタッチパネルを操作していき、ユーノ自身もなのは達が唖然としてしまうほどの速度でジャミング解除の為に頭をフル回転させる。

「さてと、少々僕も本気を出させてもらうかな――――――」

果たしてユーノ達は、この正体不明のジャミングを解除し、通信妨害と並行して起きている念話妨害を食い止めることが出来るのであろうか？

◇

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

その頃、ユーノ達が六課で頑張っている間、カンドロイドに乗ってミクロマンたちと共にパルス反応が確認された地区を目指す恋次達一行。

街中のいたるところで自動車暴走事故の報道が聞こえてくる。

『管理局地上本部は事態を重く見て、２４番区画周辺より交通規制をかけ、運転しているドライバーに一刻も早く停車するよう呼びかけています。』

ヴィータはそのニュースを聞くと、シグナム達の事が気にかかった。

「シグナム達、平気だろうか？」

「案ずるな。これだけニュースをやってるのだ。何処かで聞いて車を止めてるはずだ。」

「パルス反応が大きくなっているのであ～る！」

「このまま直進！」

「分かった！」

エジソンとウォルトの報告を聞き、先頭を飛んでいた恋次が返事を返すと、その恋次と同じカンドロイドに乗っていたアーサーがあるものを発見する。

「恋次、あれは？」

恋次が目を向けると、見えてきたのはクラナガンの中央に位置するテレビ塔だった。

「ああ。確か、首都クラナガンで一番規模のデカいテレビ塔だ。」

「・・・・・・」

アーサーはそれを聞くと、そのテレビ塔を凝視しながら直進を続ける。

さて、その頃聖王教会での用事を済ませ、外回りを終わらせた直後

のフェイトとシグナムの二人はと言うと、ルキアの予想とは違いテレビのニュースを全く聞いていない様子で車を走らせていた。

「騎士カリムの淹れてくれる紅茶はいつ飲んでも美味しかったですね。」

「ああ。少し遅くなったな。早めに戻らねば、みんなが心配する。」

「そうですね。それにしても道がやけに空いてますね・・・・・・あれ？」

と、その時車を運転していたフェイトが前方に見えてきた交通規制に目を向ける。

「交通規制のようだな・・・しかし何でまた・・・」

シグナムも訝しげな顔でそれを見つめていると、ブレーキを踏もうとしたフェイトは驚愕の表情を浮かべる。

「え！？」

「どうした、テスタロッサ？」

「ブレーキが・・・効かない！」

シグナムは助手席でその衝撃的な発言を聞くと、前方に見えてくる交通規制を前に声を上げる。

「テスタロッサ！前！！」

フェイトの車は制御が効かなくなると、そのままのスピードで前を直進。

交通規制を行っていた者にぶつかりそうになる。

「オー・・・・・・うわあ！！」

係の者はなんとかそれを回避することが出来たが、フェイトの車は停車する事は無く、只管に直進を続ける。

そんなフェイト達の事を気に掛けながら、パルス反応を追ってテレビ塔のある方向に進み続けていた恋次達は、真下に広がってくる車と言う車が横転し、ガードレールなどにぶつかっている様に目を見張る。

「酷い・・・！」

「パルスの発信源だからして、それだけ被害も大きいのである。」

そして、一同はパルス反応が最も大きい場所、即ち発信源を特定すると、ついた先はアーサーが睨んだ通り、クラナガンのテレビ塔だった。

テレビ塔の入り口付近もまた、大量の車が積み上げられた状態で応援していた。

「やはりここから送信されているのか。だとしたら、この近くにパルスの発信装置がある筈だ。」

「乗り込むしかないね。」

恋次達一行は体が小さいことを利点に、塞がれた入口の隙間から侵入することに成功し、発信装置の特定の為に奥へと進み続ける。

恋次は先導を歩きながら、全身から感じる気配を頼りに階段を下りていき、アーサーたちを誘導する。

「こっちが怪しいぜ！」

「分かるのか？」

「死神は、魔導師や普通の人間と違って鋭い危険察知能力を持っている・・・データ通りだな。」

「頼んだぞ！」

何処でミクロマンのメンバーが死神の事を調べたかは別として、彼らは恋次の能力を信用して後ろについて行く。

そして、階段を下りた先・・・恋次は目の前に広がってくるものの光景に目を向ける。

「おう！ここだ！！」

アーサーたちが同じように目を向けると、そこは発信装置があるとはとても思えないテレビ塔で働く者が利用する中華屋の看板だった。

「「「「「「「「「「だあああああ！！！！！」」」」」」」」」」

一同は呆気にとられてその場にこけてしまう。

「何だ匂いに釣られて来ただけじゃねぇか！！」

「とんだ買い被りだったな。」

「恋次の判断に任せた私が莫迦だった。」

「右に同じ。」

「ってうるせーぞ、てめぇら！」

一斉に恋次の事を罵倒する面々に、恋次は声を荒げる。

と、その時オーディーンが現場近くである物音を探知する。

「いや、待て！」

アーサーが耳を澄ますと、それが自分達へと接近していることに気づき、恋次達に身を低くすることを指示。

「！伏せろ！」

「何だよ！？」

「あそこだ！」

アーサーがそう言うと、恋次達は中華屋のドアの隙間から出てくる一体のロボット兵を発見する。

恋次は徐に出て来たロボットについて尋ねる。

「あのへっぽこロボットは？」

「あれは・・・・・・“アクロイヤー”の戦闘ロボット兵だ！」

「アクロイヤー？」

「何なのだそれは？」

すると、ミクロマンたちは険しい表情を浮かべながら徐にこう返してきた。

「嘗て、我々が倒したはずだった悪の組織だ」

「何だって！？」

「アクロイヤーはこれまでも、数多くの星を侵略し、その生命を滅ぼしてきた。恐らく、何らかの形で生き残ったアクロイヤーの残党がアンゴルモアを手に入れ、加速度的に力を増したことが・・・今回の事件の原因なのだろう」

「そう言う事か・・・・・・だったら！そのアクロイヤーをぶっ潰せば、話は早えー！」

恋次がそう言うと、聞いていた他のメンバーも全員首を縦に振り、浦太郎は意を決して巡回中のアクロイヤーのロボット兵に近づいて行くと、そのロボット兵の肩に指をつついてきた。

ロボット兵が振り返ると、浦太郎はフィッシャーマン片手に笑顔を浮かべる。

「僕に釣られてみる？」

ロボット兵が驚き返る中、その隙に乗じてオーディーンが接近し、ロボット兵の顔面を素手で殴りつける。

「たああ！」

ロボット兵はオーディンのパンチで倒されると、浦太郎は恋次達にピースをする。

「イエイ♪」

「よし。行くぞ」

「「「「「「「おう！」」」」」」」

恋次達は中華屋の中へと入っていくと、パルスの発信装置と中にいるアクロイヤーを迎え撃ちに行くのであった。

その頃、恋次達が行動を起こし始めている間のフェイトとシグナムの方はと言えば、パルス発生装置によって車を停車させることはおろか、更にスピードを上げて市内を爆走中だった。

シグナムは運転席のフェイトに車を止めるように呼びかける。

「くう！！どうにかならんか、テスタロッサ！？スピードが更に上がってるぞ！」

「私は、ずっとブレーキを踏んでるんですよ！！」

シグナムにそう撃った掛けた直後、フェイト達の前方左脇よりトラックが横切ろうとしてきた。

「あああああ！！！」

「うわあああ・・・！」

声を上げながら、フェイトは車のハンドルを何とか振り切り、衝突を回避するとさらに市内を爆走させる。

そのフェイト達を一刻を早く救おうとパルス発信装置を探し求めて真っ暗な中華屋の中を進んでいく恋次達一行はと言うと――――――

「何だここは？」

「中華料理店の厨房みたいだな。」

ヴィータがそう説明すると、聞いていたウォルトは歩きながら目に映って来る卵や肉などを始めとした食材を見ながら意外な事を呟く。

「へぇ～～～地球以外にも中華料理なんてもんがあるんだな。」

「地球の事を知ってるのか？」

「昔ちょっとな！」

「無駄な話は止めましょう。ここが敵のアジトかもしれないんだ。」

「ちぇ。」

イサムにそう一蹴され、ウォルトは舌打ちをする。

と、その時アーサーとが何かを発見しエジソンが反応を捕えた。

「し！」

「ん！近いぞ！！」

一行が慎重に暗い厨房の中を進んでいくと、目の前に広がってくる奇妙な光景を目の当たりにする。

恋次はアーサーの隣から、自分の目に映って来る蛇のような尻尾を胴体に持つアクロイヤーのロボットらしき者の姿を捕える。

「誰だ、あいつは？」

「アクロイヤーの幹部戦闘員だ。」

その幹部戦闘員、コブラージはテレビのリモコンを枕代わりにして居眠りをしていると、スバルはそのコブラージが手に持っているあるものを指摘する。

「ねぇ、あれ！」

そう・・・それこそが自分たちが探し求めていたパルス装置であった。

「ああ。しかしパルス発生装置を抱えたまま昼寝とは、相変わらず呑気な奴だ。」

恋次はこの機を逃しまいと、アーサーに言う。

「俺に行かせろ、アーサー。俺なら、気づかれずに奴に近づける。早くフェイトとシグナムの野郎を助けたいんだ。」

「分かった。援護する。」

恋次は瞬歩でコブラージの元へと近づき、目的の発生装置を発見すると、ゆっくりと手を伸ばそうとするが、その時コブラージが寝言を言ってくる。

「キャサリン・・・」

「げ！」

一瞬気づかれたのかと思った恋次だが、直ぐにコブラージが静かになったので、寝言であると判断できため息をつく。

「ふう～～～おどかしやがって・・・」

気を取り直して、恋次は再びコブラージの手の中の装置に手を伸ばす。

土鍋の陰からそれを窺っていた一同の表情が綻び始める。

「よし・・・もう少しだ！」

そして、ついに恋次は発生装置をコブラージから奪い取ることに成功し、急いでその場から離れようとした瞬間、偶然にもコブラージ

の腕がテレビのリモコンに触れ、その所為で消音にしていた音量が復活する。

『繰り返しお伝えします。本日クラナガン周辺で多発していました、自動車暴走事故はその後拡大の一途をたどり――――――』

「げ！！」

恋次は思わず硬直し、コブラージは音量が聞こえるや否や目を覚まし、寝ぼけた表情で恋次を見つめる。

「あれ？何で人間がちっさくなってる訳？」

「やべ！」

恋次は発信機を持って逃げ出すと、コブラージは目の色を変えた。

「ああ！！発信機が！！こら待て！！！」

コブラージはコブラの顔をした武器で逃げていく恋次を捕えようとし、恋次は発信機を抱えたまま只管に逃げていく。

「何であのタイミングで音が出るんだよ！！」

恋次の後頭部目掛けて、コブラージの攻撃が当たりそうになった直後、間一髪のところで援護してきたのはアーサーで、アーサーは手に取ったスプーンでコブラージの攻撃を受け止める。

「く！」

「アーサー！」

「大丈夫か？！」

「ああ！」

コブラージは武器を一旦手元に戻すと、一度見かけたことがあるミクロマン五人の姿に驚愕する。

「な！お、おめぇらは！？」

コブラージが目を丸くしてミクロマンを凝視すると、そのミクロマン五人はヒーローの如くそれぞれが直り始める。

「お前達アクロイヤーから、この宇宙の危機を救うためにやって来た・・・――ミクロマン！アーサー！」

「イザム！」

「ウォルト！」

「エジソン！」

「オーディーン！」

ミクロマンが名乗り終えると、今度はそれに便乗して恋次達も名乗り恥じめる。

「そして、特定遺失物管理部機動六課の前線部隊――――――阿散井恋次！」

「朽木ルキア！」

「ヴィータ！」

「スバル・ナカジマ！」

「亀井浦太郎！」

ここでもしユーノ達が見ていたらどういう反応をするかは大方見当がついていると思うが、敢えて受け流すことにしておこう。

コブラージはミクロマンと恋次達の登場に癇癪を起こしながら、アクロイヤーロボット兵を総動員させる。

「きゃあ！かっこつけやがって！だがアクロイヤー戦闘隊長のコブラージ様が、その鼻っぱしさへし折ってやるからな！ああ、ん！」

コブラージは狙いをミクロマンと恋次達に定めると、アクロイヤーロボット兵全員に命令を下す。

「アクロ戦闘体、行けってばよ！！！」

コブラージの命を受けると、忠実なロボット兵は一斉に彼らに向かって行き、恋次とアーサーは声を揃えて気合を入れるように声を上げる。

「「はあああああああ！！！！！！」」

そして、今ここにミクロマン五人と機動六課前線メンバーによる共

同戦線が始まるのであった。

先ず初めにミクロマン陣営から。

ミクロマンきっての剣豪、イザムは特殊武器「超磁力ソード」を取り出すと、それを使ってロボット兵を切り刻む。

「はああ！！」

また、俊敏な動きと高い身体能力を駆使して闘うウォルトもまた、イザムに負けず劣らずの勢いでロボットたちを倒していく。

「てい！はっ！たあああ！！！」

それから、パワータイプであるオーディーンは圧倒的な怪力を使った戦法を得意とし、アクロロボット兵二体を衝突させては豪快に投げ飛ばす。

「うおおおお！！！！！」

最後に発明家でありトリッキーな戦法を駆使するエジソンの方はと言うと、向かって来たロボット兵を前に電磁棒に似たものを取出しロボットたちを痺れさせていく。

ミクロマンが順調にロボット兵を相手にしている間、六課メンバーも負けてはいない。

ヴィータは得意の破壊と粉砕の戦法を思う存分発揮し、鉄球を複数取り出すと前方のロボット兵目掛けて飛ばしていく。

「ぶっ壊れちまえ！！！」

その横で、スバルが一がトップスピードで接近し、リボルバーナックルのスピナーを回転させて技を叩きこむ。

「リボルバー・・・キャノン！」

更にその周囲で複数のロボットに囲まれている浦太郎の方はと言えば、フィッシャーマンにカートリッジをロードさせ、水流魔法を展開する。

「大物いただき！」

ロボットが水しぶきによって吹き飛ぶと、今度はルキアが袖白雪を使って攻撃を加える。

「初の舞・月白」

周囲のロボットが一か所の円の中で凍りつき、やがて氷解する。

そして、最後になるがミクロマンリーダーのアーサーと恋次が同時攻撃を加える

「咆えろ、蛇尾丸！！」

「たあああ！！！！」

彼らの驚異的な戦闘力を前に、コブラージのロボット兵はあっという間に全滅を果たし、コブラージ自身も目を疑った。

「ひやああ・・・！！オラの戦闘隊が・・・・！？」

アーサーたちはコブラージを見据えて言う。

「さぁ、次はお前の番だ。コブラージ！」

『ははははは！！ははははは！！！！』

と、その時不意に全員の耳に何処からともなく笑い声が聞こえてきた。

コブラージはこの声を聞くと、思わず表情を青ざめる。

「げ！まさか・・・！」

恋次達が眉間に皺を寄せながらその笑い声を警戒していると、突如として亜空間が現れ、その中より全身を黒の鎧でコーティングしたコブラージの上司であり、同時に現在のアクロイヤーの最高権力者が姿を現した。

『ミクロマン。漸くこの世界までたどり着いたか。態々無駄な努力をするために。』

「誰だ！？」

恋次がそう言うと、現れたその男が自らをこう名乗る。

「我は、デモン三大幹部の魂を受け継ぐし邪悪なる化身・・・アクロイヤー全宇宙侵略総司令官・・・デモンブラック！」

「「デモン・・・ブラック！？」」

声を揃えてデモンブラックと言う単語を復唱する恋次とアーサー。

ルキア達もまた驚愕のミクロマンたちを一瞥しながらデモンブラックを見据える。

「何なのだ、あいつは！？」

「あれがミクロアースに元凶をもたらしたデモン三大幹部の集合体・・・デモンブラックか！？」

すると、その時ヴィータが全身から感じてきたアンゴルモアの気配を感じ取る。

「！おい、あいつからアンゴルモアの反応を感じるぞ！」

「成程。アンゴルモアを取り込んだことで、計り知れない力を手にしたと言う訳か。」

デモンブラックはコブラージに目を向けると、躊躇した様子のコブラージを一喝。

「コブラージよ。何をしている！真の姿に変身して、奴らを葬るのだ！」

「は！今そうしようかなと思ってたところでしてすみませんね・・・」

やる気があるのかそうでないのかと言いたくなるような態度でコブ

ラージはそう言うと、身体を一回転させてから真の姿へと変身する。

「フィンター！」

すると、コブラージは自らの体を真の姿である凶暴なコブラの姿へと変形させる。

アーサーはミクロマン四人に下がるよう指示を出すと、更にこう言った。

「こいつは私が引き受ける。恋次達と発信機を破壊してくれ！」

「任せた！」

「よし。アーサー。破壊したらすぐに援護に向かう！」

恋次はこの場をアーサーに任せると、先に発信装置を破壊するためにその場から退避し、アーサーは一人コブラージと向かい合う。

「来い！！」

コブラージは下を伸ばすと、アーサーの両腕を掴んで動きを封じる。

恋次達はその間に、発信装置を持って外へと向かう。

「今のうちに、発信機を外に運ぶのであ～る！」

「ああ！」

が、そう思った直後・・・彼らの前方にデモンブラックが現れた」。

「「「「「「「！？」」」」」」」

「はははは。」

不敵な笑みを浮かべながら自分たちを見据えるデモンブラックに、ウォルトは攻撃を仕掛ける。

「てやあああ！！！」

が、デモンブラックは造作もなくそれを回避し、ウォルトを嘲笑う。

「「はあああああ！！！」」

それを見て、今度はオーディーンとスバルがツートップでデモンブラックに接近する。

しかし、デモンブラックは赤子の手を捻る様に二人の攻撃を受け止め、反撃を食らわせる。

「「ぐあ！！」」

「はははははは！！！！」

足元に張り付かせた二人に狙いを定め、砲弾を発射しようとするデモンブラック。

ルキアとイザム、それにヴィータと恋次は一斉に飛び出しそれを食い止める。

「「は！」」

「ぶち抜け！！」

「咆えろ！！」

土煙が発生し、デモンブラックの姿が見えなくなる。

デモンブラックは舞を舞うかのような動きで恋次達を翻弄する。

「野郎・・・！」

「ふふふふ」

同じ様に、コブラージと対戦中のアーサー自身もまた、アンゴルモアの余波を受け以前に増してパワーアップを遂げたコブラージの力に苦戦していた。

「くそ！！」

コブラージはアーサーに接近すると、大きく口を開けてアーサー事飲み込もうとする。

「ふふ！お前ぐらいのパワーなんぞ、今の俺様の敵じゃねぇ！ラジオ体操で鍛えたこの顎の力・・・篤と思い知るか！？」

「この！！」

どちらとも八方ふさがりな状態の双方だったが、その時真っ暗だったはずの厨房が突然明かりが灯る。

「ふふふ・・・何!?」

デモンブラックは想定外の出来事に驚き返る中、厨房に現れたのは厨房のコックであった。

小さくなった恋次達は粉末状のものの中から体を出すと、現れたコックの姿に目を奪われる。

「おい、コックじゃねぇか?」

コックは厨房で行われている小さな戦闘など気にする様子もなく、コンロの火をつけ調理を始める。

「こんな時に人間め!」

デモンブラックはコックに砲門を向けるが、すぐさまイザムと浦太郎が止めにかかる。

「「させるか!」」

すると、コックは徐に恋次・ヴィータ・スバルが入っていた入れ物を手に取ってきた。

「何だ!?」

「って!これってまさか・・・!!」

すると、コックはボウルの中の入っていた水を勢いよく流し込んできた。

「「「のあああああ！！！」」」

「恋次！ヴィータ！スバル！」

「三人が大変なのであ～る！」

三人は体に付着したべたべたした感覚からして、自分たちが何の中にいたのかを理解する。

「天ぷら粉ですよ、これ！」

「天ぷらだと！？」

コックは恋次達の声など聞こえない様子で、油の中に箸を入れ火加減を確かめる。

「私らをこのまま唐揚げにする気か！？」

「早く逃げるぞ！」

アーサーはこの三人の危機を前に、コブラージの力から抜け出せずにいた。

「恋次・・・！スバル・・・！ヴィータ・・・！」

絶望的とも思われたその時、不意にコックの耳元に外で待機していた三体のカンドロイドの物音が聞こえてくる。

「何の音だ一体・・・？」

コックは気になって恋次達を棚に置いて外へと向かう。

「カンドロイドの物音だ！」

「今のうち彼らを！」

エジソンたちはこの機に乗じて恋次達を救出に向かう。

と、そんな時コブラージと対峙していたアーサーの胸が突然、眩いばかりの光を放つ。

「く・・・おおおおお！！！！！」

同じ様に、恋次達が身に着けていた腕時計もそれに反応し光り始める。

「何ですか、この光！？」

「はあああああああ！！！！！」

アーサーは胸の光が強くなると、その力でコブラージのパーを圧倒する。

デモンブラックはこの途轍もない力を発揮したアーサーに危惧を覚える。

「何！？アンゴルモアの余波を受けたコブラージのパワーを上回るだと！？」

「はあああああ！！！！！！マグネパワー！！！！！！全開！！！！！！！」

アーサーは全身に漲る無限の力を左腕に集中させると、左腕を金色のガントレット上の武器、マグネアームへと変化させる。

恋次達はそれを見て目を光らせる。

「おい！アーサーの腕が！？」

「解説しよう。我々ミクロマンチームは、それぞれ特別な能力を持つのである。あれこそアーサーの必殺技！そして、このとき最も君たち人間の潜在能力のバックアップが活用されるのだ！」

エジソンが熱くそう語っていると、アーサーの顔と胸の球体が銀メッキの様に変化し、アーサーはコブラージに狙いを定めると、勢いよく駆け出した。

「ふん！」

速力を開けながら、アーサーは自身の必殺技を宣言する。

「おおおお！！！！！！超磁力ブレイク！！！！！」

一切ずれることのない一直線の軌道を駆け抜ける超高速のアーサー。

「てあああああ！！！！！」

アーサーはその直線状にそびえるコブラージの体を超磁力ブレイクによって貫通すると、その勢いでコブラージを吹き飛ばし、恋次達は驚異的な威力に唖然とした。

「すげえ！！」

「結構痛いよ！！！！」

豪快に飛んで行ったコブラージは油の中へと真っ逆さまに落下し、デモンブラックはこの現状に悔しそうな顔を浮かべる。

「くう！！！」

やがて、コブラージが涙目になりながら真っ赤になった身体で油の中より浮いてきた。

「キャサリン・・・今夜は帰れないかも・・・」

デモンブラックはこんな惨めな姿のコブラージを回収すると、アーサーたちの前から退散しようとする。

「待て！デモンブラック！」

「逃げる気かコノヤロウ！！」

「ミクロマン、アーサー！それに機動六課前線メンバー！次はこうはいかんぞ！」

デモンブラックはコブラージを連れて、亜空間の中へと逃げていく。

「くそ！」

アーサーは恋次達の元へと近づき安否を気遣う。

「大丈夫か、五人とも！？」

「ああ。それより早くこいつを！」

「よし！」

アーサーが恋次から発信装置を受けると、直ぐにエジソンが口を挟む。

「暫く！ここで破壊してはいかん。爆破するぞ！」

「「「「何！？」」」」

「よし。みんな、ビルの屋上に上がるんだ！」

アーサーは恋次達を連れて、ビルの屋上へと急いで上がる。

と、その時ちょうどヴィータが下の方に見えてきた暴走するフェイトの車を発見する。

「あ、シグナム達の車だぞ！」

「え！？まさか・・・」

恋次達が顔を覗かせると、フェイトの車は真っ直ぐにビルへと直進し、今にもぶつかりそうになっていた。

フェイトは絶望的な様子でハンドルを握りながら声を上げる。

「もう駄目だ・・・！！なのは！！エリオ！キャロ！」

「まずいよ！アーサー、早く！！」

スバルがそう促すと、アーサーは軽くうなずきエジソンが銃を構える。

「準備オッケイであ～る！」

アーサーはそれに合わせて茜色に染まる太陽に向かって発信装置を投げ捨てる。

「ふん！」

フェイト達の車は既にビルの入り口付近へと接近し、シグナムは険しい表情で諦めを感じる。

「ここまでか・・・！」

「「「「「ああ！！」」」」」

全員が緊迫した様子で見守る中、エジソンはトリガーを引いて発信装置を爆破させ破壊することに成功する。

発信装置が破壊されると、フェイトの車のブレーキがようやく作動し、衝突すれすれと言うところでフェイトの車は停車し、二人は命からがら助かった。

車が停車すると、フェイトとシグナムは安堵のため息をついた。

「・・・と・・・止まった・・・・！」

「た、助かったぞ・・・！」

恋次達も同じく深いため息をついて一安心。

「「「「「ふう～～～」」」」」

事件が解決したその日の夜。

機動六課へと戻って来たフェイトとシグナムの安全を確かめると、なのは達は笑顔を浮かべる。

「シグナム！！よかった、ほんま良かったわ無事で！！」

「あ、いえ・・・不覚にもご心配をおかけしてしまい申し訳ありません。」

「フェイトちゃんも無事でよかった。」

「ごめんね、なのは。みんなも心配かけちゃって。でもまさか、本当に人形が生きてるとは思ってなかったから、びっくりしちゃった。」

「ま、私は取りあえず元の大きさに戻れてよかったぜ。それより、あのデモンブラックって奴は逃がしちまったけど、あいつかなり強いぜ。」

「そうだな。だが、必ず俺達ミクロマンでぶっ倒すさ。勿論、お前達の協力もあったほうが心強いけどな。」

「本当にすっごかったんだから！私、世界があんなに大きいとは思わなかったよ！！」

「はいはい。その話はもういいから」

スバル達がミクロマンたちと談笑をしている中、ユーノと恋次はアーサーとしみじみとした様子でこんな会話をしていた。

「何だか信じられねぇな。こんな小さな連中と一緒に戦ったなんてよ。」

「でしょうね♪あ、ところで一つ聞いていいかな？何故君たちがこの機動六課に来たんだい？それも僕宛ての小包なんかで？」

すると、アーサーはユーノに顔を向けるとこう言って来た。

「君や恋次がとても命も大切にする人間だったからさ。」

「え？」

「何？」

「あの時、困っていたおばあさんや、小さな虫を助ける姿を見て・・・君やここのみんななら私たちの仲間になってくれる・・・そして、一緒に戦ってくれるって何故かそう思ったんだ。現に、恋次は一緒に戦ってくれたよ。今日は本当にありがとう。」

「へへ。お礼なんて別にいいさ。」

「はは♪必ず、奴の野望を阻止してみせよう。」

「「ああ。」」

ユーノ達はそう胸に誓いを立てると、次なるアンゴルモアを秘めし小さな敵・・・アクロイヤーのデモンブラックを倒す為、このミクロマンたちと短い間ながらも一緒に過ごすことになったのだ。

果たして、デモンブラックは一体どんな手を使って恐ろしい作戦を展開するのであろうか？

ミクロと恋次と暴走自動車（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はミクロマンについてだ♪」

「ミクロマンは、株式会社タカラ（現・タカラトミー）から発売されていたミクロマンシリーズの１９７４年からのラインナップが発祥で、今回のは主に１９９８年から２０００年までのミクロマン・マグネパワーズおよびレッドパワーズを参考して作られたテレビアニメがモチーフになっている」

「テレビアニメとしては、テレビ東京系列にて、１９９９年1月４日から１２月２７日に全５２話放送され、正式タイトルは、『小さな巨人　ミクロマン』となっている♪」

恋「今回は俺に焦点を当てた話だが、やっぱり声が被ってることが気になるんだが・・・」

ア「仕方ないじゃないか。同じ声優同士なんだからさ」

ユ「声優で言えば、ミクロマンメンバーの声って結構ＢＬＥＡＣＨで被ってる人が多いですよね」

ユーノがそう言うと、ミクロマンメンバーが一斉に出て来、声優紹介を始める。

イ「私は恋次の斬魄刀『蛇尾丸』の人間体である蛇の方を担当しました」

ウォ「俺様はコン様の声だ！！」

エ「私はバウント篇で活躍した蔵人の声を担当させてもらいました！スバりそれでしょう！」

オ「俺はそのバウントの中の、古賀と言う役をやった」

恋次はこうも親近感のあるキャラクター陣に呆然とした。

恋「お前ら・・・結構身近なキャラだったんだな・・・」

ア「ははは。一番身近なのは、私と君だろ？」

魔導師図鑑ハイパー！

命からがら助かったフェイトはスバル達が小さくなるのに使った腕時計を見つめる。

フェ「こんな腕時計であんな小さくなれるんだ・・・」

ス「ホントにすごいんですよ！世界が広がるって言うか、今まで出来ないようなことが普通に出来るんです！」

フェ「今まで出来ないようなことが普通に・・・・・・あ！」

その時、フェイトはある禁断の発想が思いつく。

そして、何故か知らないが急に顔を赤くし鼻血を出し始める。

フェ「ふふふ・・・そうなんだ・・・じゃあ私は・・・」

その日の夜。

なのはがベッドに戻ろうとすると、いる筈のフェイトがいなかった。

な「あれ?フェイトちゃん。何処―?」

フェ「ここだよなのは」

布団の中より聞こえてくるフェイトの声に反応し、布団を捲り上げるなのは。

すると、フェイトは腕時計の力で小さくなると、何かを期待するような眼つきでなのはを見つめる。

な「ふぇ・・・えっと・・・何をしてるのかなフェイトちゃん?」

フェ「な・・・なのは・・・その・・・よければ私を・・・・・・／／／／なのはの胸に入れてサンドイッチ・・・・・／／／／」

が、それを聞いた瞬間何処からともなく紫色の弾丸が飛んで来、フェイトを撃ち抜いた。

フェ「がああああ!!!」

な「ふぇ、フェイトちゃん!?」

窓の外を見ると、フェイトを狙い撃ちにしたのは父親の血を色濃く

受け継ぎ、なのはとユーノの仲を取り持つ息子、ナーノであった。

ナ「まったく・・・油断も隙もない百合加減だな」

次回予告

ア「宇宙侵略を企む悪の組織、アクロイヤーを復活させたデモンブラック」

「奴は、次元世界に生きる全ての生命を滅ぼそうと、管理世界『マクロス』のコンピューターシステムを狂わせ、機械反乱を起こした。」

「次々と襲いかかってくる機械の軍団に、我々は悪戦苦闘するなか、デモンブラックはとうとう核爆弾をも発射させようとしている！」

恋「そんなことは何があっても俺達が許すか！絶対に止めてやる！」

ア「次回、『機械と核と命の尊厳』」

恋「ほおおおおお！マグネパワー！全開！！」

ア「それは私の台詞だよ！」

機械と核と命の尊厳（前書き）

アクロイヤーの魔の手から宇宙侵略を阻止するため、機動六課と共に戦う五人のヒーロー。

小さな体に限りない勇気とパワーを秘めた彼らの名は、ミクロマン。

宇宙の平和の為に、今日も彼らは戦い続ける！

機械と核と命の尊厳

〈デモンブラックＳｉｄｅ〉

宇宙侵略を企てる悪の組織、アクロイヤーを復活させたアクロ三大幹部の悪しき集合体、デモンブラックは、己の体に宿るアクロイヤーの絶対的支配者、その名もアンゴルモアの声を訊いていた。

〈宇宙を征服する偉大なる組織アクロイヤーと、選ばれたる大幹部の集合体デモンブラックよ。〉

「宇宙を征服する偉大なる組織アルロイヤーの、絶対なる支配者アンゴルモア様」

〈我らの偉大なる野望は、この宇宙一切の征服なり。さればこの宇宙の塵一つに至るまで、我らアクロイヤーの名のもとに奪い取るのだ〉

声を訊いたデモンブラックは、主人格であるデモンレッドと並列して意思疎通を図るデモンブルーとデモングリーンに対してミクロマンが現れた事を口にする。

「ミクロマンが現れた。」

それを訊くと、実体を持たない意志だけの存在であるデモンブルー、デモングリーンの二体は各々こう言った。

『何を言われるかと思えば、それはもとより予想されていた。』

〈嬉しいわね。敵がいないんじゃ張り合いが出ないもの〉

「何とでも言うがいい。しかし何故アンゴルモア様の力を受けた私とコブラージの力を、ミクロマンごときが・・・・・あの力は一体――――――」

デモンレッドを主人格とするデモンブラックは、最初の時の戦闘でコブラージを圧倒したアーサーの驚くべき力を目の当たりにし、警戒心を抱いていた。

デモンブルーとデモングリーンの二人はここの中で言って来た。

『いずれにしても、あの時の屈辱を一度ならず二度も味わうなどと言うことは断じて避けたいものだな。』

〈憎きミクロマン連中、そのミクロマンに組する魔導師とやらは僕らアクロイヤーが抹消する〉

「分かっている。既に作戦は出来ている。ミクロマンもこの次元世界に存在する宇宙生命も、一匹残らず根絶やしにする。フフ」

一体デモンブラックの次なる作戦はなんなのか？

それは嘗てないほどに恐ろしいものであるのか。

◇

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

暴走自動車パニックから二日経った朝。

隊舎寮にて爆睡中だった恋次を起こしに吉良は部屋を訪れた。

ちなみにあの後、ミクロマンの五人はこの恋次の部屋に居座ることになった。

「阿散井君、起きなよ。練習に間に合わないよ」

「うるせーな・・・大丈夫だよ。貰った腕時計に昨日ちゃんとタイマーしとい・・・」

が、そう言った恋次が自分の左腕を見ると、ミクロマンから貰った腕時計がいつの間にか消えていることに目を見張る。

「のあああああ!!!ねぇ!!時計がねぇ!!」

「あ・ほんとだ」

すると、恋次の声を訊いたアーサーが彼の部屋の引き出しの中から飛び出した。

「どうしたんだい、恋次?」

「どうしたもこうしたもあるか!時計が、あの時計がねぇんだよ!」

「時計・・・ああそのことか。それなら」

アーサーが理由を説明しようとしたその時、突然シャマルの叫び声が響き渡ってきた。

「アアアアアアア!!!」

「「「?」」」

「キャアアアア!!!!ゴキブリ!!!!誰か来て!!!!」

「シャマルさんの声ですね」

恋次達を初め、練習場にいたなのはや他のメンバーもその叫び声を聞くと、直ちに現場に向かう。

駆けつけた恋次の肩に乗っていたエジソンは体を小刻みに振るわせるシャマルに尋ねる。

「何の騒ぎであ～る？」

「もう何してるの！早く来てよ！！」

シャマルはいつになく挙動不審な様子で医務室にあるもの一切合切をメチャクチャにしており、これを見た一同は唖然としながら部屋を見渡した。

「ありゃりゃ～～～シャマルはテンパると何しでかすかアカンな」

「う～～～ごめんなさい／／／」

「それで肝心のゴキブリは？」

すると、この煩雑した空間の中でゴキブリらしき影が動き、シャマルはその瞬間声を上げる。

「キャアアア！！！！そこそこ！！！」

ナーノは耳を押さえながら、冷静にこう言って来た。

「もうちょっと声量下げてくれません。ゴキブリぐらいで怯えていたら、ツチグモとかカマキリのバケモノとか見た瞬間、ぶっ倒れますよ」

「えっと・・・ナーノの基準で考えるとちょっとまずい気が・・・」

エリオは思わずそう思ってしまい、ユーノ達は苦い顔を浮かべる。

「一体旅先で何を相手にしてきたんだろう」

と、またここでゴキブリらしき影が足元を移動する。

「アアアア!!また動いた!」

すると、その影を見た瞬間アーサーはあることに気付く。

「!恋次。」

「あ?」

「実は――――――」

アーサーは分ったことを恋次の耳元で説明する。

「ほんとかそれ?」

「何ですか?」

「アーサーがゴキブリの正体を知ってるんだとよ」

「そうか。ではここはお前に任せよう」

シグナムがそう言った後、アーサーは恋次の肩の上でそのゴキブリのような物陰に声をかけた。

「いつまで隠れてるんだ。さぁ、出て来なさい」

すると、物陰から現れたのは恋次がつけていた腕時計が変形した実に可愛らしい動きをするロボットだった。

ロボットは照れた様子でユーノ達を見つめ、それを見た一同はロボットを凝視する。

「「「「「「ああ！時計が動いてる！」」」」」」

「しかも可愛いです～♪」

ユーノ達はゴキブリと勘違いしたシャマルがメチャクチャにした医務室に合ったものを全員で整理を行い、ユーノはシャマルが壊したものを元通りに復元する。

「よし♪こんなもんだろう」

「ほう～僕と同じで器用であるな」

エジソンはユーノの技術に関心た様子であった。

そんな彼の隣で恋次はアーサーから自分の腕に戻った時計を見ながら説明を受けていた。

「これがロボット？」

「そう。我々のアシスタントメカとして改造された自立行動型のロボット『ミクロッチ』なんだ。呼べばちゃんと戻ってくる。」

「あんまり世話やかすなよ」

ミクロッチは自分の頭を書きながら恋次に申し訳ないと言っていた。

そんな折、エリオはエジソンに尋ねてきた。

「あの思ったんですけど、ミクロアースの科学水準って僕らの世界と比較するとどっちが？」

「一概にどちらが優れているか、劣っているとは言い切れんさ。ただ、我々の科学力の根本たるは、ミクロジウムと呼ばれる特別なエネルギーが基準となっている。ミクロマンチームの体に埋め込まれたこのミクロジウムが全身にエネルギーを供給し、思考・行動における重要な要素なのだ。その他にも、このミクロジウムは君たち人間の想いの力によって爆発的に高められる」

「あの時のアーサーがそうだってことか」

「「「「「そう言うこと」」」」」

未知なる物質、ミクロジウムの力と人間の想いによって無限の力を解放する宇宙生命体、ミクロマン。

そして今、このミクロマンと機動六課のメンバーが待ち受ける世界規模の大事件がもうすぐ始まろうとしていた。

◇

〈デモンブラックＳｉｄｅ〉

その日の夜のことだ。

宇宙の彼方より第２２２管理世界「マクロリス」に降り注ぐ流星群に乗って、それらとは全く異なる光が地上に落ちてきた。

落ちてきた二つの光はクモ型とアリジゴク型の二体のロボット、チェーンスパイダーとジゴクピンチに変形んすると、待っていたコブラージと合流を果たし、人間たちが寝静まっている時を見計らって綿密な作戦のもと準備を推し進める。

そして、作戦の手筈が整うとそれをアクロイヤーのリーダー、デモンブラックに報告する。

「「「デモンブラック様、万事手配整えているでござーます」」」

「うむ」

デモンブラックは腕組みをしながら、目の前に映って来るマクロリスの科学力の水位が結集されたマクロリス空軍基地を見つめながら呟く。

「全宇宙を支配するアクロイヤーの手にかかれば、人間など敵ではない。さぁ・・・人類滅亡のカウントダウンだ！」

「「「は！」」」

デモンブラックが実行しようとする次なる作戦。
一体それはどのようなものなのであろうか？

◇

〈ミクロマンＳｉｄｅ〉

一夜明け、アクロイヤーがその作戦の為に行動を映し始めていることにまだ気づいていない様子のミクロマンは、機動六課の恋次のオフィスにて昨晩観測されたマクロリスでの流星群の事で話し合っていた。

「エジソン。この流星群がどうかしたのか？」

「いや。それは昨年銀河系を通過した彗星の軌道近くに管理世界２２２番の惑星『マクロリス』が来ているため、彗星が残していった塵が流れ星になっているだけである。ただ・・・」

「ただ？」

「その中に、それらとは明らかに違う動きをするものを捕えたのだ。」

「まさか、アクロイヤーが何かを送り込んできたとでも？」

「分からないが、かなりの高エネルギー反応だよ。僕らの仲間なら既に通信が入ってるはずだし」

「敵だと考えた方がいいな」

「なぁ～に。どんな野郎が現れようと、この俺様がギッタギタにしてやるぜ。なぁイザム。お前もそう・・・あれ？」

ウォルトが振り返ると、先ほどまでいた筈のイザムの姿が見当たらなかった。

「おかしいな。さっきまでその辺に居たのに？」

そう思って外の方に目を向けると、意外な光景が広がってきた。

シャーリー達管制官三人がイザムのある行動を見て魅了されていたのだ。

「「「ほお～～～」」」

魅了される三人を後ろに、イザムは目を瞑り植物と自分の力を同調させると、目の前の鉢に植えた故郷の種を開花させ、美しい花を咲かせた。

花が咲くと、イザムはそれを見て微笑む。

「美しい。俺の故郷の植物の種が、こんなにも美しい花をつけるなんて」

そう言うと、聞いていたシャーリーが口を挟む。

「うふふ♪美しいのはそういうあなたの方じゃなくて～～～イザム？」

イザムはそれを聞いて微笑み返すと、掌の中に種子を握りしめ、開花したばかりの鼻を触りながらこう言った。

「この星にも、まだ豊かな自然が十分残っている。大切にしたいものだ」

「はい！私達もそう思います！」

アルトもルキノもすっかりイザムに魅了されており、それを見ていたウォルトはため息を漏らす。

「なんだよあいつ。また女口説いてんのかよ。け。こりねーな」

「そう思ってるのはお前だけだ」

オーディーンの低い声が何ともまたシュールに思えたのは作者だけであったか。

すると、唐突にオフィスのドアが開かれ入ってきたのは大慌ての恋次だった。

「やっべー！！急がねぇと！！ああ！！これじゃない！！」

恋次は自分の机の中を漁り始めると、気になったアーサーが尋ねた。

「恋次。どうしたんだい。そんなに慌てて。君のテンてこ振りは今日に始まったことじゃないが」

「大きなお世話だ！こっちは急いでるんだよ」

「何か用事か？」

「これからちょっと、第２２２管理世界『マクロリス』の方に行かないとならねぇ。」

「『マクロリス』って・・・あの？」

「そ。流星群が観測されたあのな。そこの中央管理政府が秘密裏に開発した新型ホストコンピューターの全面稼働に関して警備に呼ばれて・・・」

と、話を聞いていたミクロマンはこれに食いつて来た。

「警備？」

「あ・・・いや。別に俺は何にも・・・」

「新型ホストコンピューター！？」

「へへ！」

ミクロマン四人は恋次の方に目を向けて何かを訴えるような表情を浮かべると、恋次は苦い買いを作りながら体裁を繕う。

「な、何だよ？」

「冷たいんじゃないの阿散井隊長？そんな面白いとこ行くんだったら、俺達も連れてってくれよ」

「異世界の機械技術と言うものも、見学しておきたいのだ」

「それに、アクロイヤーが出た時は私達がいなければ。万が一そのコンピュータが暴走して、核ミサイルでも発射されたら人類は滅亡するぞ！昨日のテレビでも見たしな。」

「核ミサイル・・・昨日・・・？」

恋次はアーサーの言葉を訝しげな表情を浮かべながら訊くと、話題に出てきた昨日の事を思い浮かべる。

昨夜、恋次は自室で借りて来た映画をミクロマンの五人と一緒に干渉していた。

その映画の設定では、コンピューターの異常が機械を狂わせ、人間を恐怖のどん底に突き落とし、最終的には世界に核ミサイルが振り落とされるというものであった。

『Ｉ，ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋ.』

印象的な登場人部の台詞からもわかる通り、ミクロマンは映画と現実の区別が出来ていなかったようだ。

恋次は無知なミクロマンにこう言った。

「あれは映画の中の設定だろ！！フィクションだ！」

しかし、それを聞いた直後ミクロマンの回答はこうだった。

「知ってるよ。当たり前じゃないか」

「ぐ！」

拍子抜けした恋次はその場にこけると、飄々とするミクロマンに鋭い眼光を向ける。

「てめぇら俺様をおちょくったのか？」

「まままま。兎も角僕らは見学・調査・探索が大好きなのだ。連れて行くのであ～る」

「・・・たく。分かったよ」

ウォルトは恋次の了承を聞くと、シャーリー達に取り囲まれているイザムにもその旨を伝える。

「おい、イザム。お前も行くだろ？」

「そうだな。可能性がなくはない。行ってみる価値はありそうだ」

「何でもいいから早く行くぞ。連中待たせちまってるんだ！」

すると、ちょうどその時ルキアが準備の整っていない恋次に通信を入れて来た。

『何をしている恋次！まだか？』

「今行くよ！おら、肩乗れ」

恋次はミクロマン五人を自分の肩に乗せると、前線メンバーが待つ

ヘリポーへと向かい、メンバーがそろうと警備に呼ばれた前線メンバーは第２２２管理世界「マクロリス」を目指して飛び立った。

その頃、先にマクロリスにて活動を始めていたアクロイヤーのデモンブラックは、民間のネットワーク回線からアクセスを行い、マクロリスの中央政府が開発したホストコンピューターの内部へとハッキング。

不敵な笑みを浮かべて作戦が開始されるその時を待っていた。

「ふふふ。全宇宙の生命がいよいよ抹消させるときがきた。新型ホストコンピューター、スターネットとこの基地の設備は大いに活用させてもらうぞ」

デモンブラックはそう言うと、今一度目の前に広がるマクロリス空軍基地及び中央政府当局を見下ろした。

さて、その一方で中央政府当局に警備に呼ばれた前線メンバー、部隊長のはやて、スターズ・ライトニング・死神部隊・そしてユーノと好奇心で着いてきたミクロマン一行は基地の中でエリートの意識の高い政府局員に説明を受けていた。

「以上が、建物内部の詳細と避難経路となっている。ま、この基地の整備は管理局員でもそう簡単に破ることは出来ぬ代物だ。先に言っておくが、あまりこそこそ嗅ぎ回ることの内容に警備してくれたまえ。」

それを聞いていた恋次は、後ろを向いて立ち去って行く局員を睨み付けるように見据えて、完全にいなくなってから不満を外に漏らした。

「け。どこぞのお偉いさんだか知らね―が、聞いてて鼻につくぜ」

「仕方ないですよ。それが組織社会の表れと言うものです」

「しかし見れば見るほど凄いでぁ～る。これほどの機械技術はそうあるものではないな」

「ミクロアースでも、ここまで大規模な研究施設はそうないからな」

「そう言えば、恋次。斬魄刀はどうしたんだい？」

アーサー達は見つからないように恋次の懐に潜りこんでいたため、恋次が何時も台頭しているはずの蛇尾丸がなくなっていることに気付かなかった。

恋次は尋ねられると、こう説明する。

「建物の中に入る前に預けたんだよ。俺だけじゃねェ。ユーノもなのはもそれぞれにデバイスとかは持ち込み禁止なんでな」

「そうなのか」

「へへ。ほんなら、敵の襲撃も十分考えられることを念頭に、前線一同気合いを入れてな」

「「「「「はい」」」」」

はやての指揮の元、前線一同はそれぞれの持ち場を確認すると、基地の中を移動する。

今回、同じ警備場所を担当することになったユーノと恋次、そしてミクロマンの五人は局員たちの邪魔にならない程度の場所で寛いでいた。

そんな中で、恋次は不意にユーノに尋ねてきた。

「あのさユーノ、この基地で開発したって言うホストコンピューターって・・・具体的にどういうもんなんだ？」

「マクロリス中央政府及び空軍の共同開発で極秘裏に、サイバー・リサーチ・システムズ、略称ＣＲＳと呼ばれる自立兵器手段を作り上げました。」

「ＣＲＳ？」

「その中の一つに無人の戦略防衛ＡＩプログラムとしてこの基地を統括する空軍中将のロバート・ブリュースターを筆頭に新型ホストコンピューターである『スターネット』が開発されました」

「どっかで聞いたことあるような無いような・・・」

恋次がユーノの話を聞いてふとそんな風に考えてしまう中、ウォルトはユーノの事で彼の息子であるナーノがこの場に来ていないことを指摘してきた。

「あれ？兄ちゃん。あのオッドアイの息子はどうした？」

「ナーノですか。あいつはですね――――――」

ユーノは何も知らないミクロマンにナーノがこの場にいない理由を次のように説明してきた。

〈回想シーン〉

遡ること数時間前。

マクロリスに出発する直前、ユーノ達はナーノにも同行を頼もうとしたのだが、ナーノはきっぱりと拒否の姿勢を向けて来た。

「僕はいいよ。仕事だってあるし」

ナーノは自分の机に戻ると、父譲りの高速マルチタクスでタッチパネルを複数にわたって操作・展開し、事務処理を機械的に行っていくと、顔を見合わせたフェイトやはやてが説得に応じる。

「そんなこと言わずに・・・ねぇ」

「ナーノがいる方が色々と心強いやけどな。どや?言うこと聞いてくれたらお給料も上げるし、なのはちゃんの教導への強制もせえへんから」

二人がそう頼んでくると、ナーノはマルチタクスを行いつつ事務的に返事をする。

「お金なら明日食べる分さえあれば十分ですし、何より僕は組織の歯車にされるのが嫌いなんです。ここの部隊長とは言え、僕を縛り付けることは僕自身が許しません。何と言っても動きませんから。仮に留守中にヤミーとかが出たりしたら、お父さん以外で対抗手段を持ってるのは僕だけでしょ?」

「う・・・やぁそれもそうなんだけど・・・」

はやてがナーノの鋭い指摘に戸惑いを見せると、今度は母親であるなのはが説得に応じて来た。

「ナーノ。八神部隊長がこんなになって頼んでるだし、協力してくれないかな。お母さんからもお願い。もし言うこと聞いてくれたら、私が腕によりをかけてナーノの大好きなラーメン作ってあげるから♪』

すると、それを聞いたナーノはドライな感じでこう言った。

『だったら尚更ヤダよ。僕ラーメンに関してはお母さんの介入は一切認めないから』

『ぐっさ!』

なのはは自分に向けられた否定の言葉を聞いた瞬間、身体に鋭い刃が刺さったような感覚に陥りその場に倒れ込む。

『なのはさん!?』

『今のきつかっただろうな』

ナーノは今までの話を聞くと、一度手を止めてから真顔を向けて更にこう言って来た。

『大体そんな場所に行ったところで、頑固な軍人さんの上から目線なお話とおじさんの薄くなった頭しか見れないでしょ。興味もわか

ないよ』

ナーノのある意味では正解な一言に、ユーノ達も返す言葉が浮かばなくなる。

ユーノは傷つき涙を流すなのはに目を向けると、ナーノの事に関して疑いの気持ちを持った様子で呟いた。

「ははは・・・ホントにこいつは僕らの息子なのかな・・・」

「ううう／／／ヴィヴィオと違って扱いづらいよ～～～／／／」

〈回想シーン〉

その一連の話をユーノはミクロマンの五人に説明してあげた。

「ってな感じで・・・」

「そう言われると、俺も選択を間違ったかな」

「コラコラ。イザムまでそんな事を言うな」

「心配ないですよ。万が一何かあってもこの基地の設備で十分乗り越えられますよ。アクロイヤーなら話は別ですが・・・」

「狙われる可能性はやっぱあるのか？」

恋次がそう言って来ると、ユーノは難しい顔を浮かべる。

「・・・実を言うとスターネットはブリュースター将軍自身も積極

的な稼働を進めてる訳ではありません。万が一外部から新種のコンピュータウィルスによってネットワークに大規模な異常が発生した場合、それを『ハエを退治するのにバズーカを使うのと同じ』とスターネットの稼動には否定的なようですから」

「な、成程・・・」

「この基地にはスターネット以外に何かあるのか？」

「内部事情ですが、さっきこっそりと基地のコンピューターにアクセスして調べたんですが、おもしろいものを発見できました」

ユーノは基地のシステムにハッキングした結果得られた極秘情報をディスプレイに表示すると、恋次を始めミクロマンたちも食いついて来た。

「これは？」

「ＣＲＳでは人間が操縦する既存兵器とは異なる、スターネットないしは個体のＡＩプログラムが制御するロボット兵器としてこのようなものが開発されていたようです」

「おいおい。質量兵器保有は禁止されてるじゃんなかったのか？」

恋次が思わずそう口にすると、聞きなれない言葉に首をかしげるウォルトは声に出してきた。

「質量兵器？」

エジソンは無知なウォルトに事前に調べ上げた質量兵器に関する説

明を簡単にしてあげた。

「時空管理局法で定められた管理世界における質量物質、即ち魔力を使わない物理兵器で、質量兵器保有の禁止とは即ちそれを認めないことなのである。僕のデータによれば、魔法絶対主義を唱える管理局側としては、これらの製造はおろか所有すら認められていないようであ～る」

「魔法絶対主義とは・・・随分な理想だな」

オーディーンが低い声で管理局の壮大な理想にそう意見してくると、ユーノもまた大人になったことで抱くようになった管理局への不信を赤裸々に暴露した。

「ええ。僕も昔は肯定的であったかもしれませんが、無限書庫で働き管理局の裏事情を知ってからはそれも変わりました。子供の時の様に、根っこから管理局を信用できなくなりましたし、僕自身も悪意があったかどうかは別として管理局にずっと利用されてきましたから」

それを訊くと、恋次は思い出したようにこう口を挟む。

「ジュエルシード事件のときとかにな」

ここで恋次が指摘してきたのは、事件解決の為になのはとユーノを自らの意志で協力するという趣旨の元でアースラーに搭乗させたリンディのことである。

ユーノは複雑な顔を浮かべながらも恋次に言って来た。

「リンディさんを責めないで下さい。カトゥーン事件の後でリンディさん・・・その事やこれまでの事で僕に頭下げて涙も流して謝って来たんですから・・・」

「へぇ～そりゃ意外だな」

「けどそんな陰で何やってるか分らねェ組織に、なんで今更になって・・・」

気になってウォルトが尋ねる。

「利用されているのは重々承知です。今の管理局上層部が寧ろＪＳ事件を引き金に抜本的な改革以前に、本局の方から腐敗していることも知ってる。ただ、それでもそんな奴らの魔の手や、理不尽な痛みから目の前で苦しみ人、そしてなのは達を守れさえできれば僕は何とも思っちゃいないよ。例え自分が目の敵にされようと――――」

「ユーノ・・・」

「「「「「・・・――――」」」」」

何とも気持ち的に、ユーノに対してどう言葉をかけていいか分からなくなってしまう恋次とミクロマン達であった。

◇

〈アクロイヤーＳｉｄｅ〉

その頃、デモンブラックの配下であるコブラージと、応援に駆け付

けたチェーンスパイダー、ジゴクピンチの三人は集まると肩を組み合い互いに鼓舞し合った。

「よしおめぇら。手筈通りだ。失敗したら俺達の首がこうだぞ！」

「「おう！」」

三人は息を合わせて掛け声をすると、それぞれの持ち場へと戻っていき、そのうちの一人であるジゴクピンチは基地設置されたコンピューター回線に特殊パルス発生装置を取り付ける。

「ガチっとな。ふふふ・・・この装置。コンピューターに人間の技術では解明できない未知なるウィルスを流し込むことで、感染したコンピューターシステムを通じて世界中のプログラム機能を狂わせる優れもんだ！途轍もない速さでデータを書き換えコンピューターそのものが進化する。ふふふふ！」

ジゴクピンチは誰も聞いてそんな事訊いていないのにも拘らず、独り言を楽しそうに話していた。

そんなある種可愛そうなジゴクピンチを見かけたチェーンスパイダーは呆れた様子で彼に言って来た。

「ジゴクピンチ。誰に向かって喋ってるんだ？」

ジゴクピンチはチェーンスパイダーの指摘を受けると、肩を落として意気消沈の態度を見せる。

「・・・そうだよな。なに独り言なんか言ってるんだろう俺・・・この頃ちょっぴりさびしがりやだな」

「そう思うなら、先ず仕事仕事！」

「首が飛ぶのだけは嫌だもんな！」

二人は特殊パルス発生装置を取り付けると、駆け足で次の持ち場へと移動を開始し、この世にも恐ろしい恐怖の作戦が始まるのも時間の問題であった。

◇

〈ミクロマンＳｉｄｅ〉

特殊パルス発生装置が設置されると、それをいち早くエジソンのソナーが感知し、エジソンは表情を一変させる。

「！これは？」

「どうした？」

「僕のソナーが、アクロイヤーのものと思われる異常パルスを感知したのだ」

「何だって！」

それを聞いたアーサー達は顔を見合わせ、ユーノもまた驚き返る恋次に何かを言おうとしてきた。

「恋次さん」

「どうした？」

「どうやら何か起こり始めてるらしいです」

恋次はユーノと同じ方向に目を向けると、目の前に映って来たのはこの基地の総括を行う空軍中将でありスターネット開発の責任者でもあるロバート・ブリュースターを始めとする複数の管制官だった。

「あれは・・・――」

気になったユーノ達を余所に、ロバートたちは廊下を歩きながら現在起こり始めている不測の事態に苦慮を強いられていた。

「何かの間違いだ。午後１時００分の時点でシステムは正常だった」

「感染したのは民間のインターネットや、交通電力システムだけでしたが、少し前から軍事誘導コンピューターが使えなくなって・・・」

「通信エラーかと思いましたがウィルスのようです」

「アリドアーもシステムがダウン」

「何！？」

「半数の衛星からのシグナルは解読不能！」

「ミサイル格納庫や潜水艦は？」

「・・・通信が途絶えました」

ブリュースター将軍は足を止めると、少し青攻めた顔で自分たちの世界が直面している問題を冷静に分析し言葉にする。

「――では我が世界は攻撃に対して全くの無防備と言う訳か」

「すでに攻撃は始まってるとも言えます」

「誰の仕業だ?どこの世界だ?あるいは何処かのガレージに居るハッカーか?まさか・・・管理局が我が世界の内情を!」

「ウィルスの発生源が辿れないので特定はできません」

「こんなのはこれまで見たことがない。次々と変化してまるで自分の意志であるようです」

「こんなことあり得ん。」

と、ここで管制官の一人がこの事態に関してブリュースターに話を聞こうとする時空管理局本局議会、ポール・アルクィン議長からの連絡を告げる。

「管理局本局議会から連絡です・・・ポール議長です」

ブリュースターは渋い顔を浮かべると、自分のオフィスへの道を辿りながら返事を返す。

「・・・分かった」

バッタカンでその一連の話を聞いていたユーノ達は眉間にしわを寄

せ、ミクロマンアーサーはこの事に関してユーノに言って来た。

「ユーノ。我々は恋次と一緒にこの基地の探索を行う。君はこのことをみんなに」

「俺も行くのか！？」

アーサーの言葉に耳を疑う恋次と冷静に対応を取るユーノ。

「分かった。なのは達にも直ぐに連絡を取るよ」

「そんじゃ、俺達は行くぜ」

アーサー達五人は恋次の肩から降りると、地面に降り立ち駆け足で建物の内部を移動し、恋次は声を掛けようとする。

「おい！お前ら勝手に行くんじゃ・・・！」

しかし、ミクロマンは恋次の呼び止めを聞き流して先へと進んでいく。

「ったく。これだからミクロな人間は・・・」

「恋次さん。見失うとマズイ。ひとまず彼らを」

「分かったよ。じゃ、あとでな」

恋次は不審がられない程度に人目を気にしながらミクロマン達を追っていく。

ユーノは恋次の姿が見えなくなってから、なのは達に連絡を入れる前に機動六課で待機している息子のナーノと、いつもは肩に乗せている七大元帥ユーノスに連絡を入れた。

「ナーノ。ユーノス元帥。応答して」

すると、機動六課のナーノとユーノスが通信画面に映って来た。

『はいはい。お父さん、どうしたの？』

「ちょっとしたトラブルと言うか、その兆しが起こったようなんだ。悪いけど今から送るデータを解析して欲しいんだ。もしからしたら二人の力が必要になるかもしれない」

『分かった。すぐ解析に当たろう』

ユーノは基地内部で入手した極秘データと、マクロリスで起こっている現行のトラブルに関する詳細な情報を二人に送った。

そんなユーノとは打って変わって、オフィスに戻ったブリュースター将軍はディスプレイを表示させ、本局議会議長のポールと対談する。

「ブリュースターです」

『解決法はあるんだろう？どうなんだ？』

「仰りたいことは分りますが、スターネットの全面接続はまだ無理です」

『君の下で働いている民間スタッフの意見は違ったぞ。スターネットでウィルスを食い止められると聞いた。君たち現場はいざという時に二の足を踏んでいるのかもしれないが、スターネット全システムにプラグインをすれば、ウィルスは虫のように捻り潰され、軍が我々の手に戻るという話じゃないか。』

時空管理局にとっても、今回のマクロリス政府が開発したスターネットは、これまで以上の情報を高速で各世界に届けることが可能なだけではなく、自立行動型であるＡＩ機能付きの自己防衛プラグラムによって、各世界からのシステムへの攻撃を未然に防ぐことが出来ることが懸念されている。

それを分かっているが故に議長であるプーマはスターネットの稼働を促そうとするが、ハイリターンを求める故にハイリスクを忘れがちな彼に予てよりスターネットの稼働に危惧を唱えてきたブリュースターが言う。

「プーマ議長殿。はっきりと申し上げておきます。今、アップリンクしたら我が世界、強いては全管理世界がスターネットの管理下に」

『ではスターネットを管理するのは・・・――君だろう?』

「・・・その通りです」

『ではやるんだ。それからなブリュースター。これが上手くいったら、君に望み通りの予算を与える。』

「・・・イエッサー」

ブリュースターは資金提供に限らず、今後の予算も検討してくれる

という本局側の言葉に押し負けると、スターネットの稼働を決心し準備を推し進める。

胸の中に沸き起こった欲望が直後に降りかかる危機への懸念を黒く塗りつぶして――――――

◇

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

ブリュースター達がスターネットの全面稼働の為に準備を始めている間、ミクロマン達を追って基地の中を移動していた恋次はと言うと、周りの目を気にしながらもアーサー達の捜索を続けていた。

「アーサー。おい、アーサーいるか？全く・・・何処行きやがったんだ・・・」

すると、ちょうどその時足元からアーサーの声が聞こえてきた。

「恋次」

ミクロマンの五人が恋次の足元に集まると、恋次は足元に顔を向ける。

「お前らな。俺の立場考えろって」

「すまない。でも急がねばならない。こっちだ」

アーサーは恋次にそう促してから移動を始め、恋次は辺りを確認するとアーサー達を追ってすばやく移動を始める。

「誰にも見つかりませんように――――――」

恋次達がその場から移動した直後、ミクロマン達の様子を先ほどから窺っていたデモンブラックは姿を見せると、腕組みがてら不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふ――――――」

同じころ、ブリュースター将軍はいよいよ全面稼働を迎えようとしているホストコンピューター、スターネットの起動を前にいつも以上に顔をしかめていた。

「・・・・・・」

無言のまま立ち尽くす将軍を目の当たりにしながら、管制官の一人が声をかける。

「将軍。いいですか？」

将軍はそれを訊くと、振り返り管制官の元へと歩み寄る。

「待て。私の仕事だ」

意を決し、ブリュースター将軍はついにスターネットの起動スイッチを押す。

「接続」

スイッチを押すと、中央のモニター画面を始め、管制室全体のディ

スプレイにスターネットの全面稼働を表示する文字が羅列し、機械音声が響き渡る。

〈The Starnet defensive system operated. Please stop use of a main system until there are directions. It repeats. The Starnet defensive system operated. All the accesses should follow a person's in charge directions.（スターネット防衛システムが作動されました。指示があるまで、メインシステムの使用を中止してください。繰り返します。スターネット防衛システムが作動されました。全てのアクセスは責任者の指示に従ってください。）〉

「ファイヤーウォール通過。自動防衛ネット、大陸完弾道弾。潜水艦」

「スターネット全面稼働。毎秒60テラフロットでシステムを処理中」

「ウィルスは一分以内に除去されます」

ブリュースターはもう後には引けない様子で、ウィルスの完全駆除を神の意向に任せるのであった。

「成功を神に祈ろう」

〈The starnet defensive system was started. Future・・・（スターネット防

衛システムが起動されました。今後――――――）〉

と、その時突然・・・中央のモニターと管制室全部のシステムが機能を停止し、一同は驚愕する。

「？！」

「停電か？」

「違う。なんだろう、分らない？」

ブリュースターは不測の事態を前にし、この以上の原因を問いただしてきた。

「トニー。これはどうなってるんだ？！」

尋ねられた管制官は険しい表情を浮かべてお手上げ状態と化していたが、その時・・・またしても唐突に中央のモニターと各所のシステムが復旧し始めるが、どうも先ほどとは様子がおかしかった。

不安の拭いきれない様子のブリュースター将軍だったが、その時彼ら何処からともなく聞こえてきた銃声とそれに呼応するかのような悲鳴を耳にする。

「あああああああ！」

「！！」

「グアアアアア！！！」

ブリュースター達が物音気を聞き、振り返ると彼らの目に映って来たのは自分達が極秘裏に開発を試みた新型の魔導機械の軍勢で、そのうちの一体が銃で射殺したと思われる人物をローラーで引きずって返り血を浴びた様子で機械的に自分たちに接近するというものだった。

ブリュースターはこれを見ると、直ぐに声を上げて退避を命じた。

「みんな逃げろ!!」

すると、その瞬間魔導機械が付属のマシンガンで将軍を始め、管制室の人間をターゲットに銃弾を乱射する。

殺傷能力のある弾丸を何発も体に受けた将軍と管制官の多くが血を吹きだし、命を奪われる。

デモンブラックはこの光景を見ながら、高らかに笑い上げる。

「ははははは!!!さぁ、始めようぞ!ははははは!!!」

一体の魔導機械が作動すると、当然のことながら格納庫にしまわれていた何百と言う数の魔導機械が一斉に人間を標的に行動を始め、基地内を動き始めた。

コブラージは魔導機械に乗りながら逃げ惑う人々を確認する。

「行け!機械兵ども!思いのままに暴れろ!にゃはははは!!!」

基地内部で機械による人間狩りが行われ始めると、その事は直ぐに警備に当たっていたなのは達にも知らされることになる。

「何？」

「この銃声は・・・！」

不意に聞こえてきた爆音と銃声に警戒心を抱いていると、警備中の前線メンバーの前に文字通りの殺戮マシーンと化した機械兵がマシンガンを構えて前進をしてきた。

「「「「な！」」」」

「なんだありゃ・・・」

「こっちに来ます！」

なのは達は集合場所で落ちあい何とか危機を脱しようとするも、基地内のほとんどで魔導機械が通路を塞いでしまっており、逃げ場のなくなったなのは達はとうとう追い詰められてしまった。

そして、デバイスと斬魄刀を外で預けたままの前線メンバーは完全に無防備状態と化し、魔導機械たちが一斉に銃口を向けて来た。

「あ！」

と、その時そんな魔導機械たちに向かって天井を突き破ってユーノ・スクライアが現れる。

ユーノはクワガタコアの力で一度記憶した電気の力を有効に活用し、掌に電気で形作った槍を生成すると、勢いをつけて機械に投げつけた。

「ふん！」

魔導機械はユーノの電気槍を受けると、連鎖反応を起こして爆発をしていき、なのは達は難を逃れ、ユーノはなのは達を気遣った。

「大丈夫？」

「ユーノ君！来てくれたんだ」

安堵のため息をついた後、フェイトは恐る恐る尋ねる。

「ユーノ。あれは・・・」

「アクロイヤーの仕業だよ。恋次さんとミクロマンが原因を」

「何だって？」

「気を付けて。この基地の中にはマクロリス政府が極秘裏に開発を進めていた魔導機械が僕ら人間を対象に駆逐を始めている。」

「駆逐って・・・私達を殺すって事ですか！？」

「どうして！」

「アクロイヤーの目的が全宇宙の征服と人類抹殺にあるのならば、自ずと分かる。さぁみんな。ここから早く離れるんだ。急いでデバイスと斬魄刀を取りに行こう」

「うん！」

「ほんなら、急ごうか。敵の数も知れたもののやないし」

前線メンバー一同は、ユーノの指示に従って基地内の通路を進んでいく。

ユーノはところどころ完現術の力を使って魔導機械を破壊していく。

そして、その間にティアナは魔導機械の攻撃の性質を分析。

「敵の攻撃は、完全なる致死性！一発でも当たればお陀仏です！」

「通信妨害がキツイ・・・ロングアーチ！」

ヴィータはロングアーチに連絡を入れようとするが、聞こえてくるのはジャミングによって何の音かも全く分からない雑音ばかり。

「ダメだ。まるで通信も繋がらない。」

「檻の中に閉じ込められたというべきか」

「阿散井君は・・・ミクロマンは！？」

「この事に気づいているとは思うが・・・大丈夫だろうか」

ユーノ達は一抹の不安を掲げながら、恋次とミクロマンの五人を心配する。

では、その恋次とミクロマンの方はどうかと言うと。

「つらあああ！」

恋次は次々と襲いかかってくる魔導機械を相手に斬魄刀がないにもかかわらず、日ごろの鍛錬で培った高い身体能力と少しはマシに使えるようになった鬼道の力でミクロマンを守りながらパルスの発信源を目指していた。

「くそ！どうなってるんだ！？」

「恐らく、アクロイヤーが仕掛けた特殊なパルスが魔導機械の制御を奪っているのだ。」

「一刻も早くパルスの発信源を突き止めなければ・・・！」

と、その時ミクロマンの背後から魔導機械が壁を突き破って襲い掛かってくる。

「な！」

「ち！赤火砲！」

恋次は咄嗟に赤火砲を放って魔導機械を撃破し、アーサーを守った。

「すまない」

「礼は後にしろ。一先ずこっちだ」

恋次はアーサー達を肩に乗せると、魔導機械の動きに注意を払いながらパルスの発信源を目指して行った。

恋次達がパルス発生源に足を進める中、ユーノ達一行はデバイスと斬魄刀を取りに入口の方へと向かっていたが、道を進めば進むだけ、魔導機械によって無残にも殺害された血塗れの人間たちが横に転がっており、なのは達は思わず顔を青ざめる。

「酷い・・・こんなに・・・／／／」

「もうじき出口だ。それまでの辛抱だよ」

だが、出口が見えたと思って外に出た途端、ユーノ達の前にこの基地で製造された魔導機械に交じってあらゆる世界から集められた自立行動型の機械が包囲してきたのだ。

「「何！」」

「そんな・・・！」

「ち」

ユーノ達は完全に機械の兵団に周りを囲まれると、そこから一歩も動けなくなってしまい、まさに絶体絶命の危機に直面する。

だが、そんな時・・・彼方より見慣れた紫色の閃光がユーノ達を取り囲む機械兵を次々と駆逐する光景が広がってきた。

「「「！」」」

一瞬の出来事であったが、機械兵は紫の閃光によって一体残らず塵と化した。

徐にユーノ達が振り返ると、彼らの前に現れた意外な人物・・・それは。

「ふう～～～間一髪だったね。」

竜神の寵児、ナーノ・T・スクライアとその肩に乗った七大元帥ユーノス・スレイアだった。

「ナーノ！」

「ユーノス元帥も！」

「どうしてここに？」

驚きを隠せないユーノ以外の前線メンバー。

ナーノは銃形態であるライジングハートを回転させながら徐に近づいて行く。

「お父さんが送ってくれたデータの解析が終わったから届けようとしたんだけど、妙な悪寒を感じて来てみたんだ。それにしても・・・・・この状況。どっかのハリウッド映画か？」

ナーノは目の前に広がってくる魔導機械によって無残にも殺害された基地内の人々を始め、街中から聞こえる悲鳴と爆音に思わずそう呟くと、肩の上のユーノスがユーノの方へと移動し、更に言って来た。

「事態は深刻だ。アクロイヤーの仕業と判断づけていい結果が出た。これを見てくれ」

ユーノスはユーノから送られてきたデータを詳細に解析したある結果を表示させ、一同がそれを真剣な眼差しで見詰める中、ナーノが具体的な説明を始める。

「民間の一般回線から軍の専用回線にまで拡大したシステム異常は、スターネット自らの稼動操作を行うことでネットワークの異常を解決したかに見えたが、それこそがアクロイヤーの狙いだった。つまり、ここのお偉いさんたちはコンピュータウィルスがスターネットを汚染したと考えていたが、実はウィルスがスターネットそのもので、スターネットの稼動は問題の解決どころかむしろスターネットを檻から完全に解き放って被害を拡大するだけでしかなかった。」

「て言うことは、これは完全なるコンピューターによる報復テロ！？」

「そんなバカな話が・・・！？」

「中枢は・・・コンピューターの中枢にあるアクロイヤーの特殊パルスを破壊できれば！」

はやてがそう考えて口にすると、聞いていたユーノは直ぐに否定的な見解を抱く。

「いや。その線は限りなく難しいと言える」

「どうしてですか？」

「話を聞く分じゃ、スターネットがウィルスそのものであるということは・・・コンピュータではなくプログラムであるスターネット

に中枢というものは存在しない。即ち。事実上の破壊は不可能だよ。」

「「「な！」」」

「そんな！」

「だけどそうは言っても、このままじゃ！」

「分かってる。だからこそナーノがここに来たんじゃないの？」

「え」

ユーノの言葉にきょとんとするなのは達とは違い、ナーノ自身は不敵な笑みを浮かべながらこう言って来た。

「ふふ。ご名答♪流石は僕のお父さん。こんなこともあろうかと・・・・お父さんが送ってくれた軍の極秘データにアクセスをして、こんなものを用意しておきました♪」

そう言うと、ナーノは懐から一枚のデータチップを取り出す。

「それは？」

「ウィルスであるスターネットをマイナスの極性と考え、それに対して逆の特性・・・即ちプラスの特性を秘めたワクチンプログラム。こいつをアクセスすることでウィルスの特性を逆にし、暴走したプログラムを制止させることが出来ます。こう見えて僕、備えは十分にしていますから♪」

飄々とした笑顔でとても１６歳とは思えない用意周到さと先見性を兼ね揃えたような態度をとるナーノに、隊長陣やフォワード面々は空いた口が塞がらなかった。

「そ・・・そうなんだ・・・」

「おい・・・ホントにこいつ１６だよな？抜け目なさすぎるだろ」

「た、確かに・・・ひょっとしたら私よりも総指揮能力高いんちゃうやろうか・・・」

「それと、これみんなのデバイス」

ナーノは驚き返る一同に押収してきた前線メンバーの愛機全てを取出し、手元に戻した。

「レイジングハート！よかった！」

ユーノもユーノスから結界印を受け取ると、それを握りしめ指示を出した。

「兎に角、急がないとマズイ。ナーノはフォワードのみんなとこの基地のの管制室に行って。僕らが周りのロボットたちを片付けている間に、ワクチンプログラムを組み込んだ」

「わかった。」

「恋次達は？」

「勿論、根本的な原因であるアクロイヤーを倒さない限り事態の解

決は否めません。信じましょう。恋次さんとミクロマンを」

◇

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

ユーノ達が恋次とミクロマンを信用する中、早速事態の解決に当たって行動を起こしていたその頃、ミクロ化した恋次はミクロマンと共にパルス発生源で蛆虫のように大量発生したアクロ戦闘員と死闘を繰り広げていた。

「くそ！」

恋次は鬼道と徒手空拳だけの力でアクロ戦闘員を駆逐し、ミクロマン達も数に物を言わせて向かって来るアクロイヤーを全力で捻り潰していく。

「はあああ！！」

「ウォーターホイッパー！」

少々疲労が見え始めていた恋次を気遣い、アーサーは声をかける。

「大丈夫か？」

「ああ。だが蛇尾丸がないってのは調子がでなくていけねぇ」

すると、エジソンは先ほどよりも強さを増したパルスの反応を捕える。

「パルスはこの辺りから強さを増しているであ～る！」

「では、この辺りに・・・」

そう思い、恋次が奥へと進もうとした・・・その時だった。

「！危ない！」

アーサーは不意に暗がりから飛んでくる敵の攻撃に気付くと、恋次をその攻撃から守り抜き声を上げた。

「誰だ！」

すると、それを聞いた敵は不敵な笑みを浮かべながらゆっくりと足音を立てて近づいてくる。

「ふふふ・・・毎度のことながらご苦労なこった」

「全くでげす。ミクロマンってのはどこまでも暇人なようだ」

「その声は！」

恋次がそう言って暗がりの中目を光らせると、現れたのはアーサーの必殺技で一度敗北したデモンブラックの部下、コブラージと新たに応援に駆け付けたチェーンスパイダー、そしてジゴクピンチの三人だった。

「なっはははは！！また会ったな。ミクロマン。」

「コブラージ！」

「そしてこの俺、チェーンスパイダー！」

「同じく、ジゴクピンチ！」

「ち。また変なのが増えやがった」

「コンピューターの異常は、やはりお前たちの仕業か！？」

「いかにも。俺達が仕掛けたこいつによってこの基地を始め、世界中のコンピューターが自立意志を持った凶暴は殺戮兵器へと変わり、人間を敵として忠実に抹殺を行う恐怖のマシーンと化したのだ。人間は自らの作り上げた電子機械に蹂躙され、為す術もなく死に絶える。」

ジゴクピンチを始め、三人は手の中に収められた特殊パルス発生装置を彼らの前に見せつける。

恋次はそんな三人を睨み付けながら怒りを燃やす。

「そんな事、俺がゼッテー許させねぇ！」

「我々ミクロマンも、お前たちの悪事を黙っているわけにはいられない！行くぞ！」

恋次とアーサー達ミクロマンは三人に向かって一斉に攻撃を仕掛けようと飛んでいく。

「「「「「ほおおおおおお！！」」」」」

だが、その直後不敵な笑みを浮かべたコブラージの後ろから、赤い光弾が向けられる。

「ふん！」

ミクロマンと恋次は凄まじい威力を秘めた光弾に直撃し、大きく吹き飛ばされる。

「「「「「ぐあああ！」」」」」

地面に叩きつけられ、深手を負う恋次達が前を向くと、そこに現れたのは事の黒幕でありミクロマンの宿敵、デモンブラックだ。

「性懲りもない。既に作戦は最終段階に入ろうとしている」

「貴様は・・・デモンブラック！」

「ミクロマンアーサー。それに赤毛の死神。一つ私から朗報を訊かせてやろう」

「朗報・・・だと？」

「自立意志を持ったスターネットは、管理世界を起点として全世界のコンピューターを狂わせシステムを変化させていっている。ウィルスの拡大は加速度的に早まり、ついにはこのような場所にでさえ、容易に入り込めるようになった」

そう言うと、デモンブラックは徐にディスプレイを表示させ、あからさまに恋次とミクロマンの五人に見せつけた。

六人はこれを見た瞬間、事の恐ろしさを理解して見の毛が凍りつく。

「な・・・お前・・・まさか！」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

恋次達がデモンブラックと対峙していた丁度その時、魔導機械の駆逐に精を出していたユーノ達だったが、不意にユーノは懐から鳴り響く緊急信号に目を見開いた。

「！」

気になったなのは達が防御を展開しながら、ユーノの元へと集まる。

「ユーノ君。一体？」

「どうしたユーノ？」

「緊急信号をキャッチしました。」

ユーノはタッチパネルを操作し、目の前にＡＲＥＡＲＴと表示された緊急信号を表示させると、その中身を確認し更に驚く。

「大変だ！マクロリスの国防総省と管理局中央司令部が次元世界全てに緊急信号を出してる」

「え！」

それを訊かされ、一瞬耳を疑うなのは達だったが、不意に聞こえてきた機械音声を聞き、事の重大さを思い知らされる。

〈Ｎｏｗ，ｔｈｅ ｄｉｓｃｈａｒｇｅ ｂｕｔｔｏｎ ｏｆ ｔｈｅ ｎｕｃｌｅａｒ ｍｉｓｓｉｌｅ ｂａｓｅ ｉｎ ｔｈｅ ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ ｗｏｒｌｄ ｏｆ ａｌｌ ｔｈｅ Ｍａｃｒｏｒｉｓ ｗａｓ ｐｕｓｈｅｄ．Ｉｔ ｉｓ ３００ ｍｏｒｅ ｓｅｃｏｎｄｓ ｔｏ ｄｉｓｃｈａｒｇｅ．Ｔｈｅ ｃａｕｓｅ ｃｏｎｓｉｄｅｒｅｄ ｉｓ ｉｎｖａｓｉｏｎ ｔｏ ｔｈｅ ｓｙｓｔｅｍ ｃｏｍｐｕｔｅｒ ｔｗｉｓｔｅｄ ｆｏｒ ｗｈｅｔｈｅｒ ｂｅｉｎｇ ｗｈｏｍ．Ａｎ ｉｎｖａｓｉｏｎ ｃｏｕｒｓｅ ｉｓ ｕｎｋｎｏｗｎ．Ｉｆ ｄｉｓｃｈａｒｇｅｄ，ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ ｗｏｒｌｄ ａｌｌ ｍａｎｋｉｎｄ'ｓ ｓｕｒｖｉｖａｌ ｐｒｏｂａｂｉｌｉｔｙ ｗｉｌｌ ｂｅ ０．００１８％．Ｔｏ ｄｉｓｃｈａｒｇｅ，ｉｔ ｉｓ ｔｈｅ ｂａｃｋ．．．２９０ ｓｅｃｏｎｄｓ．２８９ ｓｅｃｏｎｄｓ．２８８ ｓｅｃｏｎｄｓ・・・・（ただいま、全マクロリスの、次元世界の核ミサイル基地の発射ボタンが押されました。発射まであと３００秒。考えられる原因は、何者かによるシステムコンピューターへの侵入。侵入経路は不明。発射されれば、次元世界全人類の生存確率は０．００１８パーセント。発射まで、あと・・・２９０秒。２８９秒。２８８秒――――――）〉

あろうことに、管理世界指定を受けているはずのマクロリス政府は管理局法で保有を禁じられている核ミサイル弾を地獄の防衛の為にと、密かに隠し持っていたのだ。

そして、その核ミサイルの全てが残り２分足らずの間に発射されようとしているということを聞かされたユーノ達は、衝撃のあまり絶

句するが、ヴィータはその直後原因がデモンブラックにあることを口にする。

「あいつだ。あいつしかいねぇ！デモンブラックが、システムをクラッキングしたんだ！」

「くそ！とんでもないことを！」

「発射されれば、もうゴーサインは解除できない！」

「ええ。だからこそ急がないと」

ユーノはそう考えると、基地内にスバル達フォワード陣と共に潜入したナーノの事を気に掛けた。

ナーノはスバル達と共に基地の管制室へと目指して邁進。

襲い掛かる魔導機械たちを粉砕しながら前を目指していると、不意にナーノの背後を狙って来た一体の魔導機械が銃口を向けて来た。

それに気づいてキャロが声を上げる。

「！ナーノ！後ろ！」

すると、なんとナーノは前を走りながら銃だけを後ろに向けて魔導機械の気配だけを頼りに銃弾を発射し、魔導機械を爆破させる。

神業とも言うべき信じられない光景に開いた口が塞がらないスバル達に、ナーノは振り返り微笑む。

「大丈夫。見えてますよ。さ、行きましょう」

ナーノは特に気にすることもなく目的地を目指すが、スバル達は一度立ち止まり各人が次のように口にする。

「・・・ねぇ・・・ティア・・・何も見ないで銃って撃てるものなの・・・・」

「無理よ・・・目が後ろにある訳でもない限り・・・」

「本当に・・・なんて強さと技術を持ってるのかしら・・・」

「僕らって・・・ナーノの先輩なのに、全然そう思えませんよね」

「私に至っては背丈がこれだし・・・／／／」

キャロに至っては、背丈の方を気にしてしまいがちだった。

こんな面子で本当に間に合うのか？

◇

〈ミクロマンＳｉｄｅ〉

残り時間が5分を切ってしまい、核ミサイル発射時間が差し迫る中、ミクロ化した恋次達とミクロマンの五人はデモンブラックとの最後の戦いに挑んでいた。

イザムは己の武器である超磁力ソードを構えて、マグネパワーを全開にする。

「超磁力ソード！ドラゴンフェノメナン！はあああああああ！！」

イザムは竜を模したエネルギーを纏った斬撃をデモンブラックに叩き込むが、デモンブラックは何の事は無くそれを受け止めてしまう。

「な！」

「なんだその剣は？それで斬ったつもりか！」

そう言うと、デモンブラックは至近距離から砲撃を発射し、イザムを吹き飛ばす。

「ぐああ！」

「イザム！コノヤロウ！」

仲間を傷つけらえた怒りから、ウォルトとオーディーンはデモンブラックに向かっていく。

「タックルオブファイア！」

オーディーンの必殺技、タックルオブファイアとウォルトのウォーターホイッパーが混ざり合った合体技だが、それを前にしてもデモンブラックの態度は変わらない。

「無駄だ」

デモンブラックは攻撃が当たる直前でその軌道を二人の方へと変更

し、ウォルトとオーディーンは自分たちの放った技に圧倒される。

「「のあああ！」」

「何と言う力だ！これがアンゴルモア化による戦闘力の上昇！」

「くそ！早くあれを破壊しないと、ミサイルが発射されちまう！」

思う通りに攻撃が通らない状況に焦りが募る恋次達。

デモンブラックはそんな彼らを嘲笑う。

「ははは！どうしたどうした！そんなものか貴様らミクロマンの力は？」

「く・・・」

険しい顔を浮かべるアーサー。

と、ここで超磁力ソードを杖代わりにして起き上がった満身創痍のイザムが次のように言って来た。

「俺は・・・俺は許さない！俺の故郷を、草木の育たない死の星に変えた貴様らアクロイヤーを！」

「ふん」

デモンブラックは悪びれる様子もなく、イザムの言葉を聞き流す。

アーサーはイザムの言葉を受けると、仲間たちを気遣いつつ更に言

って来た。

「もう二度と、美しい自然を破壊させはしない！次元世界に住まう全ての命は我々ミクロマンが守って見せる！」

「おっと。俺様もいるんだぜ」

恋次はアーサーと顔を見わせると、互いに笑みを浮かべるが、デモンブラックはまるで動じる気配を見せない。

「愚かなことを。コブラージ。チェーンスパイダー。ジゴクピンチ。」

「「「「は！」」」」

デモンブラックは部下であるコブラージを自分の元へと集めると、全身のアンゴルモアエネルギーを全開にして、三人を取り込み始める。

「何だ？」

デモンブラックの行動に目を奪われる六人だが、その直後四人はその姿を一つに結集させる。

「「「「アクロイヤー融合！」」」」

空間がねじれるように四人は渦の中に取り込まれていく。

そして、再びその渦から現れたのはデモンブラックをベースにコブラージ、チェーンスパイダー、ジゴクピンチの特性を併せ持ったミ

クロマン達を上回る大きさとなったＡＭ３０の姿だった。

「ははははは！！！！」

「バカな・・・！融合など！？」

「アンゴルモアによる力が、アクロイヤーの邪悪な魂と同調することで通常ではありない奇跡を起こしてしまったのだ！」

「もうじき世界は終わる。そして我がアクロイヤーこそが、宇宙を支配するのだ。世界の終末を見届ける前に、貴様らはここで死ぬがいい！」

ＡＭ体と化したデモンブラックは、ミクロマン達に銃口を合わせると、これまでの物とは威力がまるで桁違いな砲撃を発射し、それを受けたミクロマンは恋次を余所にその場から吹き飛んでいく。

「「「「「「がああああ！！」」」」」」

「アーサー！！」

「ふふふはははははは！！！」

世界の終末が・・・近づいていく。

◇

〈ナーノＳｉｄｅ〉

残り時間も３分弱となってしまっている中、管制室を目指していた

ナーノを始めフォワード一同は道を塞いでくる魔導機械を破壊しながら懸命に前進を続ける。

「うりゃあああ！」

「シュート！」

ナーノもナーノでスバル達の援護を受けながら、使い勝手のいいガンモードで魔導機械を制圧し、道順を確認すると近道と言うことであいた天井裏を見付けると、スバル達を誘導する。

「みなさん。ここを通って！」

ナーノはそう言うと、先導して天井裏に上って行き、スバル達もまたその指示に従って移動を続ける。

天井裏を這いつくばる様に移動するナーノ達。

と、不意にナーノが表情を一変させ制止を宣言。

「止まって！」

驚き返るスバル達だったが、ナーノは下から感じた殺気を受けると、天井を突き破って通路へと降りていき、真下で待ち受けていた魔導機械の堂に回り込むと、前方に佇む同じ魔導機械に銃弾を発射する。

「うおおおおおお！！」

魔導機械はその攻撃を受けると、無造作に破壊され、最後に攻撃に使った魔導機械のケーブルを切断したナーノはスバル達に合図を送

る。

「今です！」

ナーノは管制室へ目指して走り去っていく中、天井裏の五人は唖然とした表情を浮かべるばかり。

「随分手馴れてますね・・・」

「伊達に世界中飛び回ってただけはあるわね」

そして、漸く六人は問題の管制室へと到着する。

「ここが基地の管制室！」

辺りに転がっている血塗れの人間をなるべく見ないように中央のモニターに目を向けた五人はプログラムを用意し、さっそく準備に取り掛かるナーノに尋ねる。

「どうするの？」

「プログラムそのものであるスターネットは、新暦００８１年現在すべてのコンピューターシステムに適用するよう組み替えられています。これはその影響を受けない旧式のプログラムが組み込まれていて、これを送り込むことでスターネットに気付かれずにアクセスが出来ます。少々時間はかかりますが、これしか方法はありません。」

ナーノはユーノが言いそうな理屈を並べて高速のタッチパネル操作をしていき、スバル達は顔を見合わせその光景に目を見張る。

「な、ナーノって・・・本当に凄いね」

「活字嫌いって言う癖して・・・こういう事にはユーノ先生顔負けですし」

すると、そんな時ナーノの元にユーノからの連絡が届く。

『ナーノ。』

「お父さん!?」

「どうしたんですか一体?」

『スターネットに感染した空軍のミサイル基地から核ミサイルが全世界に発射されようとしている。』

「「「「「え!」」」」」

フォワード陣はそこで初めて聞かされる衝撃的な内容に耳を疑い、ナーノも険しい表情を浮かべる。

『今、管制室か?』

「うん。と言うことは、序に僕らでゴーサインを解除しろと。」

『やれるかい?』

ユーノの言葉を聞き、少し考えてからナーノはいつも通りの笑顔を父に向けて、親指を立てる。

「当然♪任せてといてよ！」

ユーノはそれを聞くと、安どした様子でほくそ笑み通信を切った。

ナーノはスバル達の方へと振り返ると、真剣な眼差しを浮かべて指示を出した。

「みなさん！僕の指示に従って、これからゴーサインの解除を行います！」

「「「了解！」」」

残り時間2分足らずの中、果たして彼らは間に合うのか！！

◇

〈恋次Ｓｉｄｅ〉

その頃、デモンブラックとの戦闘で絶望的な状況に立たされていた恋次は、目の前で虫の息となったかのように倒れる変わり果てたアーサー達に懸命に呼びかけを行う。

「おいアーサー！しっかりしろ！アーサー！！」

「・・・・・・」

しかしアーサーを始め、ミクロマンチームはまるで息一つしていなかった。

愕然とする恋次に、ＡＭ体のデモンブラックはこう言って来た。

「無駄だ。そいつは既に死んだ。ミクロマンが我らアクロイヤーに敗北したのだ」

「・・・――」

「武器の無い今の貴様では、我ら四人の力に適う訳もない。大人しく降伏を認めることだ。ふふはははは！！」

高笑いを浮かべるデモンブラック。

すると、恋次は顔を沈めた状態から低い声で言って来た。

「・・・何が・・・降伏だ」

「？」

恋次はこれまでにないほどの剣幕を浮かべて訝しげな表情のデモンブラックを見据えるように立ち上がると、自分の思いの丈を声高に口にした。

「さっきから聞いてりゃいい気になりやがって・・・・・・何がアクロイヤーだ。何が宇宙の支配だ。笑わせんじゃねーよ！」

「何だと？」

「命を・・・命を何だと思ってるんだ！！確かに世の中には、正直腐ってる奴がそこら中にいるかもしれねぇ！中には生きる事さえ否定された連中だっている！俺もそうだった！流魂街にいた時、俺は

そんな掃き溜めみたいな場所で、それでも死に物狂いで生きようとした！だからこそわかるんだ・・・・・命の尊さってのが」

「命・・・だと」

恋次は自分の拳を見つめながら、アーサー達を一瞥し、再びでをんぶらっくに対して言葉を向けて来た。

「知らねェなら教えてやるよ。俺達死神も、人間も、草も虫も動物も・・・神様が生きてていいって言うから生きてんだ。しゃんと背伸ばして生きろって言われたから生きてんだよ！どんな場所だろうが、境遇だろうがよ・・・生きてちゃいけネェなんてことはねぇんだ。義務で生きるなんて言わせねェ。生きる権利があるから俺達は息吸って二本脚で立ってんだよ。そんなことも分らねェテメーらアクロイヤーに、世界を終わらせはしねぇ！！」

恋次の魂の叫びが、瀕死の重傷を負ったアーサーの耳にもしっかりと届き、アーサーは虚ろな瞳を向けながら恋次を見つめる。

「れ・・・んじ・・・」

「俺は、てめーらは許さねぇ！」

そう思った直後・・・恋次とミクロマンに奇跡が起こる。

「！」

なんと、恋次の腕に付けられたミクロッチとアーサー達の体が突然これまでにない光を発し始めたのだ。

「ぬお！？ぬおおおおおおおおおお！！！！この光は！！」

デモンブラックは思わずその光の眩しさに驚愕し、恋次は全身から伝わる未知なる鼓動に目を見開いた。

「こいつは・・・何が起こった！？」

と、その時――――恋次の耳に信じられない声が聞こえてきた。

「恋次。実に感動する話だったよ」

その声を訊いて、恋次が後ろを振り向くと、そこに立っていたのは先ほどまで虫の息と化していた筈のアーサーを始めとするミクロマン五人だった。

「！アーサー！お前らも！」

「バカな！どういうことだ！？」

デモンブラックは正直目を疑うばかりだったが、ミクロマンは理解に苦しむこの奇跡を次のように説明した。

「恋次の命を想う気持ちが、我々に奇跡を起こしたのだ。」

「ミクロジウムの燃焼率が僕の計算を大きく上回っているのである！」

「俺達はその想いがあれば、何度でも甦るさ！」

「これ以上、お前たちの好きにはさせない！」

「みんな！阿散井に我ら全員の力を集中させるぞ！」

「「「「おう！」」」」

オーディーンの言葉を聞くと、アーサー達はマグネアームに体中から湧き上がる全てのマグネパワーを恋次に向けて結集させる。

「おおおおおおおおおお！！！マグネパワー！！！！全開！！！」

「「「「はあああああ！！！！全開！！！！」」」」

ミクロマン五人から放出された金色に輝くマグネパワーが恋次の頭上に降り注ぐと、そのあまりに巨大な力に圧倒されたデモンブラックは後ずさりする。

「のおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」

そして、徐に目の前を見据えると、そこに立っていたのはミクロマンのマグネパワーを全身に纏い、その力で作られた特殊な斬魄刀を装備した威圧感溢れる恋次の姿だった。

「まさか・・・！！」

「行くぜ。卍解！！」

恋次は己の体に流れ込んだマグネパワーを卍解という形で全開する。

マグネパワーによる磁気の嵐が収まると、現れたのはマグネパワーによってこれまでにない姿となった恋次の斬魄刀、蛇尾丸の姿で、

彼はそれをこう名付けた。

「『磁力王蛇尾丸』！！」

驚愕するデモンブラックを余所に、恋次はこの一撃に全てを掛ける！

さて、いよいよタイムリミットが一分を切った状況に置いて、管制室のナーノは自分の為すべきことをやりつつ、スバル達フォワード陣にゴーサインの解読を並行して指示していた。

「次右です！」

「えっと・・・これだ！」

「スバルさん左！ティアナさんは上を！」

「えっとこれ！」

「次にこれを！」

ナーノの的確な指示で粗方の操作が完了すると、ナーノは最後に頭上を見据えて声を上げる。

「最後は・・・あの緑のランプを！！」

「エリオ君！飛んで！」

キャロの言葉を合図に、この中では最も背丈の高いエリオが大きくジャンプする。

「でやあああああ！！」

エリオがモニター画面のタイムを見据えながらランプを勢いよく押した直後、デモンブラックと対峙していた恋次にアーサー達は止めの攻撃を促す。

「行け！！恋次！！」

「俺達の力をあいつに叩き込め！！」

「つらあああああああああああ！！！」

恋次はミクロマンの言葉を合図にデモンブラックへと突っ込んだ。

「とんだこけおどしが！！！！」

デモンブラックは圧倒的な力で恋次を迎え撃とうとするが、恋次と磁力王蛇尾丸が纏った無限のマグネパワーのオーラが悉くデモンブラックの攻撃を弾き返す。

「何！」

「ほおおおおお！！！！超磁力インパクト！！！！」

恋次は爆発的にマグネパワーの燃焼率を高めると、蛇尾丸の口腔内にエネルギー砲を生成し、狒骨大砲の要領でデモンブラックに叩き込む。

「はあああああ！」

デモンブラックは向けられた超磁力インパクトをダイレクトに受けると、自分の全てを上回る恋次の渾身の一撃に圧倒される。

「ぐあああああああああああ！！！！！！！！こんな・・・こんなバカな！！！！ヌアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

デモンブラックは交戦に飲み込まれると、その邪悪なる意識は取り込んだアンゴルモアと一緒に消滅し、コブラージ達三人の幹部たちは全身を黒焦げにした状態で彼方へ飛んでいく。

「「「やっぱりこう言う役で終わるんですね僕ら！！！」」」

恋次がデモンブラックを消滅させたその瞬間、管制室のエリオ達はタイマーを確認する。

「タイマーは！！」

緊迫した様子でナーノ達や外で戦っていたユーノ達が注目する中、モニター画面に表示されたタイマーのカウントは・・・・・０分０１秒で止まっていた。

エリオはそれを見ると、嬉々とした表情を浮かべて作戦の成功を喜んだ。

「あ・・・やった・・・やった！！」

「やった！やったよ！！！」

声を上げるナーノ達は落ちてきたエリオをそのまま胴上げし、ユー

ノもまたなのはと抱き合いなのはを掲げると、喜びを覆後に出して表現する。

「やった!!やったぞーーー!!!」

デモンブラックが倒され、それに伴い三つの異常パルス発生装置が破壊された結果、魔導機械の反乱と、システムの異常は無事に解決し、ウィルスと化していたスターネットはワクチンプログラムとなって自動復旧を始めた。

そして、今回最も活躍を見せた死神の阿散井恋次はマグネパワーを使い果たすと、疲労困憊の様子でその場に手を付いた。

「は、は、は、は、は、は、は」

「恋次!」

「大丈夫であるか!」

アーサー達は大健闘の恋次に近づき彼を労う。

「へへ・・・ちいとばかし無理しちまったけどな・・・奴はどうなった?」

「消滅したようだ。パルス発生装置と一緒に。」

恋次が倒したデモンブラックの残骸に目を向けると、デモンブラックの正体であるアンゴルモアは粉々に砕け散っていた。

「アンゴルモアは・・・もどきだったのか」

と、その時恋次のもとにユーノからの通信が入る。

『恋次さん！』

「ユーノ！お前らも無事か！？」

『ええ。聞いてください。暴れていた機械兵と核ミサイルのゴーサインが解除されました』

「本当かそれ！？」

「やったな、恋次！」

「お手柄だったぞ」

「へへ。ま、俺様にかかればこんなもんだ！だはははははは！！！」

恋次は何時もの調子で高らかに笑みを浮かべ、それに便乗したアーサー達も嬉しさを噛みしめるように元気よく笑い声をあげた。

◇

〈ミクロマンＳｉｄｅ〉

そして、アクロイヤーの脅威がなくなり、傷の癒えたミクロマン達がユーノ達の元を離れる時がやってきた。

アーサーはユーノ達の方へと向かい合い、真摯な眼差しを浮かべる。

「アクロイヤーの脅威は去ったが、我々にはやるべき使命が残されている。ミクロアースに戻って、一刻も早い復興をせねばならない」

「ああ。短い間だったが、色々と面白かったぜ」

「お暇があれば、いつでもこっちに来てくださいね。その時は大歓迎いたします」

「ありがとう。君たちなら、きっと今後どのような危機が待ち受けていようと、その命を大切にしようとする気持ちがある限り、乗り越えられるはずだ。」

「へへ♪」

アーサーは恋次と向き合うと、一度恋次の肩に乗ってから彼の腕に付けられたミクロッチを一瞥し、こう言って来た。

「恋次。そのミクロッチは君が持っていてくれ」

「アーサー・・・」

「我々と君、この機動六課で過ごした思い出としてな」

「――ああ。分かったよ」

恋次はアーサーの言葉を受けると、最後に小さな掌のアーサーと握手を交わし、やがてミクロマンは当初に乗ってきた宇宙船でミクロアースへと帰還し、ユーノ達はその姿を見えなくなるまで目で追った。

今回の事で人間との絆を一層深めることが出来たアーサーは、六課での思い出を胸に抱きながら切に思った様子で心の中で呟いた。

「（ありがとう・・・機動六課のみんな。ありがとう・・・恋次。忘れるな。この宇宙にどうでもいい命なんてありはしないんだ――――）」

機械と核と命の尊厳（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はミクロマンの必殺技についてだ♪」

「先ずはリーダーのアーサー。マグネパワーを全開にしてマグネアームを拳に纏わせ、超高速で相手を攻撃する『超磁力ブレイク』。イザムは超磁力ソードの刀身からドラゴンを模したエネルギーを放つ『ドラゴンフェノメナン』。ウォルトはマグネアームから激流を放つ『ウォーターホイッパー』。そして、マグネアームから放たれる火炎放射『タッグルオブファイア』を操るのがオーディーンだ♪」

エ「ちょっと待つであ～る！僕の必殺技がまだであるぞ！」

ユ「え・・・そうは言ってもエジソンってあんまり戦う描写がないから正直どれが必殺技か分からないんだけど」

エ「失礼であるな。では僕自らが必殺技を紹介しよう」

エジソンは武器であるマグネスティックを取り出すと、説明を始めた。

エ「おっほん！では説明しよう。僕の必殺技はこのマグネスティックを使ったもので、普通はそう使う事は無いのだが、今日は特別にお披露目しよう。」

そう言うと、エジソンはマグネパワーを全開にする。

エ「マグネパワー全開！おおおおおおおおお！！！」

ユーノ達が注目する中、エジソンはマグネスティックを掲げ――

エ「うおおおおおおおおお！！！！！必殺！！！！！」

と、その時急にエジソンがあることを思い出し技の発動を中断する。

エ「あ」

恋「ぐ！なんだよ！？やらねぇのかよ！」

エ「あはははは♪重大な事実に気付いたのであ～る」

ア「重大な事実？」

エ「僕の必殺技・・・名前を考えてなかった♪」

全「ズコーン！！！」

訊いた一同はあからさまにこけるしかなかった。

魔導師図鑑ハイパー！

ナーノは一見するとちゃらちゃらした感じにも思えるが、中身はユーノ同様非常に切れもので、多くの経験と知識、ノウハウを駆使して戦場を生き残っている。

フォワード陣はそんなナーノから話を聞かされていた。

ナ「実際、世界は限りなく広いものですよ。でもその都度見た事のない世界が広がってきて、胸の奥から興奮が湧き上がるんですよね～♪」

ギ「へぇ。ユーノ先生と同じでアクティブなのね」

エ「どうりで色々と僕達のそれよりも手慣れてる訳だ」

キャ「異世界を飛びまわってると、危険も多かったの？」

ナ「危険も危険。獰猛な生物が生息するジャングルなんかを歩き回ってると、いつ襲って来るかもわからない恐怖に駆り立てられますし」

ス「どうもな生物って・・・例えば？」

恐る恐るスバルが尋ねると、ナーノは一同に衝撃的な事を口にする。

ナ「最近だったら・・・体長3メートルを超える巨大なアナコンダとか♪」

ティ「あ、アナコンダ！？」

ス「ギャアアアアアア！！！！私ヘビは苦手なんだって！！！！」

スバルは恐怖に震えあがると、大泣きしながら机の下に潜りこみ頭を押さえて丸くなる。

ギ「す、スバル大丈夫だから！」

ナ「この前もウナギとヘビを勘違いしてましたけど・・・何かトラウマがあるんですか？」

ティ「その件に関しては後日話してあげるわ・・・」

何か気になるんですけど！！

スバルのヘビ嫌いの理由は後日物語の中で話します！

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

な「ドラさんが六課に遊びに来る！！！！！！？？？？？」

ド「てめぇが言ってんじゃねぇか！！！！！」

ユーノス「またしても甲殻類系の・・・！」

ユ「アレスターチェーン！」

ド「軽くウォーミングアップと行こうか。」

第１７５話　蠍とチョコとドラリターンズ

ミクロマン篇

登場人物

ミクロマン

アーサー

声：伊藤健太郎

正義感に富むミクロマンのリーダー。青みがかった黒髪で、ミクロマンの中で唯一銀メッキの顔は人間と同じ顔をしていた。デザインモチーフは騎士、名前の由来もアーサー王から採られた。真面目で聡明な性格だが、酒に弱い。必殺技は、マグネパワーを全開にしてマグネアームを拳に纏わせ、超高速で相手を攻撃する「超磁力ブレイク」。これを発動する際、顔の色彩がメッキ調のメタリック単色になる。

イザム

声：斎賀みつき

チーム最年少の美少年。金色の短髪。穏やかな口調だが、その容姿から度々いじられることもあり、素顔に反して、ややガラが悪い。両親を幼いころにを失っている。超磁力ソードという剣を武器としていて、普段はマグネアームの中に収納している。必殺技は超磁力ソードの刀身からドラゴンを模したエネルギーを放つ「ドラゴンフェノメナン」。また、植物と同調することで種の成長を促進させたり、自分の意のままに操ることができる。

ウォルト

声：真殿光昭
楽天家の陽気な戦士。マグネパワーで水を自在に操ることができ、戦場が深海でも戦闘能力が低下しない唯一のメンバー。訓練嫌いで普段は遊んでばかりいるが、ここ一番では抜群の勝負勘を見せる。デザインモチーフは鷹や鷲、隼を思わせる猛禽類。必殺技はマグネアームから激流を放つ「ウォーターホイッパー」。

エジソン

声：飛田展男
学者肌の発明家でチームのブレーン。「である」または「なのだ」の語尾が口癖。身体能力は低いため、メンバーの中では後方支援に回ることが多いが、射撃の名手でもある。様々なメカを開発、戦力強化の要として活躍する。デザインモチーフはカマキリ。武器はマグネパワーを電気に変換して攻撃する棒・「マグネスティック」。

オーディーン

声：古澤徹
５人の中では最年長の戦士でチームのまとめ役。軍師としても一流でアーサー不在時は主に彼が指揮を執る。平時にあって有事を忘れず、日夜鍛錬を欠かさない。チーム一の怪力と炎を操る能力を持つ。デザインモチーフはジャガーでフルフェイス型。必殺技はマグネアームから放たれる火炎放射「タックルオブファイア」。

アクロイヤー

デモンブラック／ＡＭ３０

声：中田和宏〈デモンレッド〉・山崎たくみ（デモンブルー）・塩沢兼人〈デモングリーン〉

全宇宙の支配を企む結社、アクロイヤーのリーダー。アンゴルモアの力によって一度ミクロマンに倒された筈のデモンレッド・デモンブルー・デモングリーンの三体の怨念が融合した姿。アーサーには強烈なライバル心を抱いており、玄米茶を好み、新聞の星占いのチェックは欠かさない。乙女座らしい。基本精神はデモンレッドであるが、その中にはデモンブルーとグリーンの人格も共有され、時折話に加わる。特殊パルス発生装置によって自動車を暴走させたり、マクロリスのコンピューターを狂わせたりと、緻密な作戦によって次元世界の生命を滅ぼそうとしたが、ミクロマンと恋次達の活躍によって阻止され、マグネパワーによって変身した恋次によって倒され最期を迎えた。

デモンブラックの部下

コブラージ

声：千葉繁

元はデモンレッドの部下で、コブラに変身する。キャサリンなる妻がいるらしい。

チェーンスパイダー

声：稲葉実

元はデモンブルーの部下で、クモに変身することが出来る。

ジゴクピンチ

声：鈴木勝美

元はデモングリーンの部下で、アリジゴクに変身することが出来る。
寂しがりやな性格。

蠍とチョコとドラリターンズ（前書き）

ド「常識なんて、何の意味もない。常識とは、人間が進歩を止めて諦めを付けたときの都合のいい言い訳だ。」

「この世界に最初から常識も、普通も存在しない。普通なんて言葉自体、使う方がよっぽど間違っているんだ」

蠍とチョコとドラリターンズ

＞i33239―709＜

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

欲望からつくられた、未知なる力・コアメダル。

そしてユーノ達の前に現れた、甲殻類に属する新グリードとそのヤミー。

ユーノ・スクライアは戦いの中で、師・黒崎一護から授かった月形に宿る彼の魂を引き出し、第六の完現術コンボ『黯月の死神』へと変身した。

ユ・一「「月牙――――――――天衝ッ！！！」」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈ユーノＳｉｄｅ〉

絆――それはユーノにとって何よりも大切にしている言葉だ。

そして、その絆によって彼はこれまで数々の絆の輪を広げて来、支えられてきた。

元々が天涯孤独のユーノからすれば、これこそが現在の彼の存在を証明する一つのものとなっているのだ。

で、その絆によって紡いだ友達の一人とユーノは現在通信中だった。

「ははははは！！！！そうですか！それはまた可笑しな話ですね！！」

『そうでしょ、そうでしょ！！長官ったらあの時の顔は傑作だったな！！！ではははははは！！！！』

こんなにも底ぬけた笑いを上げるユーノも珍しいのだが、一体誰と話しているのかと言えば、アンゴルモア任務の時にユーノを始めなのは達三人娘を恐怖で震え上がらせた見た目はドラえもんなネコ型ロボット、サムライ・ドラであった。

ドラは通信画面の向こうのユーノに自分の身辺で起こった最近の出来事をただ報告しているだけなのに、こんなにも笑みを浮かべるのは珍しかった。

ユーノは少々変わり者のドラだが、何故か心が通じ合うらしくこうして通信をし合う仲で、何時しか見えない絆で結ばれた親しき友人の一人となっていた。

「しかし、相変わらずドラさんの周りは面白い人が一杯ですね♪話を聞いてても飽きずに楽しめますよ。」

『ま、我が強いと言うか何と言うか・・・みんな個性が顕著に表現出来た連中ですからね。偶には普通の人間を見てみたいですよ・・・』

「いないんですか?普通の人間は?」

『オイラの周りには少なくとも・・・』

「ははは・・・それもそうですね・・・」

すると、話の中でドラがナーノの話題を上げてきた。

『そう言えば、未来から来たって言うユーノさんの息子の事ですが・

・・なんかなのはに対して異常に余所余所しいって言ってましたね』

「ええ。僕やヴィヴィオの前では気さくなんですが、なのはの前だと人が違うというか何と言うか・・・わざと距離を置いているようにも見えるんですよね。まるで、なのはが自分に対して干渉できないようにと。おまけに、痛烈的になのはの理想とする教導を真っ向から批判する現実主義で、途方もないほどの悲観主義者なものでして・・・」

『16歳とは思えないほどのペシミストなんですね。ナーノって言うのは――――――まぁでも最近の人間って言うのは、どいつもこいつも現実と理想の乖離が激しいですから。そう言う点では凄くたくましい子ではあるんじゃないですかね。』

「成程。ドラさんはそう思いますか。それならそれで僕は構いませんが、なのは自身はどう思っているのやら。」

『なのはにとってはこれほどまでに相手にし辛い子供はいないでしょうね。ユーノさんと自分の間に生まれた息子っていうだけならまだしも、自分に対して批判的な考えを持つ子を相手にするのは初めてじゃないですか？』

「そう言えば、僕もあそこまで捻くれた子供を見るのは久しぶりかも。なのはや六課のみんなは基本的にいい人ばっかりで、管理局が規律に厳しい組織社会だからこそ、ああいう自由で自分本位な性格の人間には戸惑いが出ちゃうんでしょうね」

確かに、ユーノやドラの指摘は正しいものがあった。

管理局はその仰々しいほどの規律社会から、命令違反や自分本位な

行動の人間の存在を決して許さない。

なのは達も自然とそのような厳しい規律によって一定の事を守らなければならい義務があり、その所為で大事な局面であるにもかかわらず即行動に移せないと言ったこともしばしばだが、ユーノやナーノと言った嘱託扱いの魔導師や恋次達一部の死神はここぞという時は一人の例外もなく自分の心の命ずるままに動く者達だ。

これが現在におけるユーノとなのは達との決定的な違いでもあった。

と、ここでドラが不意にこんな尋ねる。

『ああ・・・ところで、ユーノさん。話は変わるんですけど・・・明日暇ですか?』

「明日?別に、これと言って六課の方でも緊急時以外に用事や任務は無いと思いますけど・・・」

『そうですか!そりゃよかった。いや、実はオイラも明日から二日間のオフシフトで偶には一人で何所かに行こうと思ってたんですけど、そちらの都合が良ければユーノさんが滞在している機動六課に遊びに行ってもいいですか?』

ユーノはドラの提案を聞くと、目を見開く。

「六課にですか!?ぼ、僕はいいとしてはやて達は・・・?」

『大丈夫、大丈夫!!あんなタヌキ娘のことなんて全然屁でもないですから!!頼みますよ、ユーノさん!』

ドラの願いを聞くと、ユーノは一度背を向けて唸りながら考える。

「う～～ん・・・・・ま、いっかな♪」

『本当ですか!?』

呆気ないユーノの返事だったが、ドラは大いに喜ぶ。

そして、ユーノはドラと向き合い微笑みを向ける。

「はやてとクロノ達には僕らから言っておきます。出迎えはこちらが行きますから。」

『ありがとうございます、ユーノさん!じゃ、早速明日の１１時『ＥＡＲＴＨ』の小樽駅前で待ってますから!』

「はいはい。それじゃ、今日はこの辺で♪」

『おやすみなさい』

ドラと挨拶を交わした後、通信を閉じたユーノはアドバイザー室に入ってきたユーノスに尋ねられる。

「なんだ。明日は客が来るのか?」

「ユーノス元帥。ええ。ちょっと前の任務で知り合った友人が」

「ほう。お前の友人か。色んなところに友達が多いと、心が豊かになるだろう」

「ええ。まぁ・・・ドラさんの場合、僕はいいとして、なのは達からすれば一癖もふた癖もある変わった人ですから。」

そう言うと、ユーノは先に部屋に戻ることを促すと、ドラの事を説明するために夜勤の為、部隊長室で仕事をしているはやての元へと歩いて行く。

部隊長室の前までやってくると、ユーノは入る前に腕組みをする。

「さて、何て言えばいいかな・・・・・・」

意を決し、ユーノは部屋のブザーを鳴らす。

部屋のブザーが鳴る直前、はやては報告書の作成や本局や聖王教会からの資料に目を通しており、机の上は書類で溢れかえっていた。

そして、一区切りを付けてコーヒーを淹れようとした時だった。

「よし。これで大丈夫かな・・・・・・お?どうぞ!」

ユーノがブザーを鳴らして神妙な様子で中に入ってきた。

「はやて。ちょっと話があるんだけどいいかな?」

「何やユーノくんか。どうしたんや、そんな神妙な顔せんでもいいのに。」

何も知らないでいるはやては何時もの調子でユーノを出迎えると、コーヒー片手に自分の机へと戻り、ユーノはそんなはやてに言う。

「実はさ、明日異世界から僕の友人が一人六課の方に遊びに来るんだけどさ・・・いいかな？」

「ユーノくんのお友達？私は別に構わんよ。お友達は大歓迎や。ヤミーとかが出るならまだしも、それ以外で別段忙しいって訳でもあらへんしな。で、その友達はどんな人なんや？」

軽い気持ちでそう尋ねたはやてはコーヒーを啜りだし、ユーノは罰の悪そうな表情を浮かべながら真実を口にする。

「人じゃないよ・・・・・・ドラさんだよ。」

「ぐっほ！！！」

ドラと言う単語を聞いた瞬間、本能的に恐怖を感じたはやては豪快に口の中のコーヒーを吐きだし、机の上に乗っていた書類に拭きかかる。

「は、はやて！？」

様子がおかしくなったはやてに戸惑うユーノを余所に、はやてはまるで何かから逃れるような足取りで部隊長室を出ようとする。

「ゆ、ユーノくん・・・ちょっと失礼するで・・・」

はやてはそう言うと、全速力で女子寮へと向かって走り出し、ユーノは尋常ないほどに冷静さを欠いたはやてを見ると、苦笑いを浮かべる。

「失言だったかな・・・」

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

はやてが血相を変えて向かったのは、言うまでもなくなのはとフェイトが共同で使っている寝室で、夜も更ける中基本的にユーノと同じで仕事中毒な高町なのはは今後の訓練メニューの作成に従事しており、それを心配してフェイトが行ってくる。

「なのは。そろそろ寝ないとダメだよ。」

「うん。ごめんね、これだけやっちゃいたいんだ」

「仕事熱心なのは感心だけど、あんまりやり過ぎるとユーノが心配するからね」

「うん。そうだね。大丈夫大丈夫♪ユーノ君には心配かけない程度にちゃんと休むから。ね」

「ホントに？なのははそう言ってる割りに、結構根詰めること多いよ」

「にゃはは。フェイトちゃんにそれ言われると、ちょっと反省♪」

何気ない親友同士の会話をしていた二人だったが、その時突然部屋の扉が開き、中に入ってきたのは全身汗だくの様子のはやてであった。

はやてはなのはとフェイトに向かって大声を上げた。

「なのはちゃん！！！フェイトちゃん！！！」

「？はやてちゃん。」

「は、は、は、は、は」

はやては柄にもないぐらいの荒い息を上げながら二人の元まで歩み寄ってくる。

フェイトは尋常ではないはやての様子を心配する。

「はやて。どうしたの、肩で息して？」

「は、は、は、は！！な、なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・一大事や！！」

「「！！」」

一大事と言う単語を聞き、二人は何かを事件性を考慮し、はやての話を聞くことになったのだが、聞かされた内容は一般的な事件性ではなくなのは達三人娘にとってのきわめて大きな事件性の内容だった。

「「えええええええ！！！！！！！！！」」

なのはとフェイトはこれまた柄にもなく大声を上げると、全身から冷や汗を流し身体を小刻みに振るわせ、恐怖におののく。

「ドラさんが六課に遊びに来る！！！！！？？？？」

「し、しかも明日!!!!!!!?????」

二人は驚愕の話を聞かされ、脳裏に思い浮かべる自分たちを容赦なく理不尽な言葉の暴力とバカみたいな訓練を強制させたドラの悪意に満ちた笑み。

はやてはすっかり狼狽し、部隊長としての毅然さも何もかも失くしていた。

「どないしよう!?私ら前にドラさんにこっぴどく扱かれてしもうたし、おまけにドラさん怒らせるととんでもなく怖いし・・・!!あ～～～あああああ!!!!!ほんま何でユーノくんあないな人、いやネコと友達やねん!!!!!」

「でも、どうする!?明日って明日だよね!?」

「何アホなこと言うてるの!?」

「どうする!?もし、ドラさんが六課内をうろつかれたりしたら・・・・・」

「きゃあああああ!!!!!まるで査察されてる気分やわ!!!!!!」

「今のうちに、フォワードのみんなにもきっちりこの事を話しておこう!」

「ドラさんに見られても恥ずかしくないように、綺麗にしておかないと!」

三人はかなり慌てた様子で明日のドラの出迎えの為の話し合いを始めると、外まで響く三人の話し声を外で聞いていたユーノは、思わず複雑な気持ちとなる。

「・・・あの三人・・・ドラさんを悪魔か何かと思ってるのかな・・・」

「なになに。明日ドラさんが来るの♪」

すると、ユーノの元に息子のナーノが歩み寄ってき、ユーノはナーノがドラの事を知っていることに意外そうな顔を浮かべる。

「ナーノ。ドラさんを知ってるんだ」

「うん♪小さい頃に、結構相手になってもらったし、同じ現実主義者だから気が合うんだよ。」

「なるほど。じゃあこの時代のドラさんもナーノとは仲良くなれそうだな」

「しかし三人娘があの様子じゃ・・・――明日は一体どういう展開を迎えるのか、見当もつかないよね。」

「全くだよ・・・」

息子と共に、明日のドらとの接触が六課全体にどのような影響を及ぼすのか、真剣に考えるユーノであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

そして、次の日の朝。

ドラを迎えにユーノが『ＥＡＲＴＨ』へと向かって居る間の出来事。

グリードの一体と手を組む世界の終末を目論むカリ・ユガファウンデーション会長、カリ・ユガはある処へと向かったカザリの帰りを車の中で待っていた。

肌身離さず持ち歩く人形に車のハンドルを握らせ時間を潰していると、思ったよりも早くカザリが帰ってきた。

車に乗り込んだ人間体のカザリに、カリは目線を合わせず口にする。

「早かったですね。」

「あんたに調べてもらった例のグリード、直ぐ見つかったから・・・・・さて、どんなヤミーを作るのかな?」

不敵な笑みを浮かべるカザリと、それを横で聞くカリ。

カザリが何を考えているかは別として、ミッドチルダに住まう人間がまたしてもヤミー騒動に巻き込まれようとしていた。

「ら～ら～～～ら～～～！」

鼻歌を歌いながら庭先へと向かう一人の男。

別にこれと言って取り上げる人間ではないので名前は紹介しないが、

彼の趣味はペットして帰っている様々なサソリの世話であった。

「サソリはサソリはらんらんらん♪」

毎日欠かさず行っている合計２０種類にも及ぶサソリの餌やりに精を出す男は、一匹のサソリが入っているケースにピンセットで餌を入れていく。

「は～い。餌の時間ですよ。たくさん食べてね」

男はそんな作業を他のサソリにも同様に続け、終始笑顔を絶やさない。

「へへ。」

そんなサソリ好きの男に目を付けたのは、先日地球で出現したばかりの謎の多い甲殻類グリードであった。

甲殻類グリードはセルメダルを取り出すと、男に狙いを定めてセルメダルを投下する。

「僕の・・・仲間・・・・・・同族――――――」

セルメダルは男の身体に現れた投入口に入れられると、男は体を乗っ取ろうとする今まで味わったことのない苦しみに声を上げる。

「ぐ！グアアアアアアアアア！！！！！！」

男はセルメダルを入れられたことにより、甲殻類グリードの欲望を忠実に全うする白ヤミーへと姿を変え、誕生した白ヤミーの元に甲

殻類グリードが近づく。

「僕の・・・僕の・・・仲間」

甲殻類グリードが本能に従いヤミーを作り出すことはカザリやカリも予期しており、それを知った上でカザリは様子見に効果来るグリードの元へと赴き、調査が終わるとカリの元に戻って来た。

車の中でカザリは暴走グリードと化して飛散したメズールとガメルのコアを手に取りながらカリに話を続ける。

「多分同じ欲望で動くと思うよ。あの甲殻類のグリード・・・名前は知らないけど」

「ええ。それよりも君の方こそどうなんですかね？自分以外のコアを取り込むその意味？」

「うん。何だか前よりも満たされた気分だよ。僕は進化するんだ」

「メダルの器として、君自身がメダルを取りこむ事でその力は増大し、上手くいけば第二のオーズであるユーノ・スクライアを超えることが出来るでしょう」

そう言うと、カリは人形を特注の席へと座らせると、エンストを起こしながら車を発進させ、人形が振り落とされないかを気にしつつ話を続ける。

「しかしまだ、ほんの入り口です。先ずは早く君のコアメダルを９枚揃えなくては」

「分かってる。でも慌てる事は無いよ。じっくりと行かなくちゃ。焦って暴走したりしても碌な事にはならいしねーーーーーー」

果たしてカザリは、今後カリと言う強力な後ろ盾を味方に何を企んでいるのか？

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

その頃機動六課では、ドラを迎えに行ったユーノがいないうちに、はやてが前線メンバー全員を集めてかなり改まった様子でドらを出迎えるための今日の全体の話をしていた。

「ほんなら、本日の流れをおさらいや！」

はやてを始め、なのはとフェイトも険しい表情を浮かべながらいつにない雰囲気を醸し出すと、見ていたフォワードメンバーや恋次達はキョトンした顔を浮かべる。

「（ティア・・・何でユーノ先生のお友達が来るだけなのにこんなに厳戒態勢なの？）」

「（さぁ・・・何でも八神部隊長が言うには、相手はとんでもなく凶暴なネコでなのはさん達を戦かせた凄い人らしいわ。）」

「（たく、何でこんな面倒くせーことになってんだよ・・・）」

「（ま、どんな人ぐらいはしっかりと見定めないとね。）」

「（しかし、幾らなんでもこの格好は流石に・・・おかしいであろう！？）」

白鳥は心の中でそう思いながら、はやてに強制されて身に纏っていた何処で取り寄せたかは知らない西洋の悪魔祓い、エクソシストの格好に窮屈感を感じながら、他の者も同様に苦い表情を浮かべていた。

「と、以上が全体の流れや！全員心して事態に当たって欲しい！！」

「「「「「は、はい！」」」」」

すると、敢えてギンガ・ナカジマ陸曹が自分たちが来ている格好に関して質問をしてきた。

「あ、あの八神部隊長・・・何で私達まで悪魔祓いのような格好をしないとならないんでしょうか？」

「これは基本装備や。実際はもっと恐ろしいから、気休め程度と考えてくれへんかな。」

「何の気休めなんだろう・・・」

ふとそんな事を吉良が思ったその時・・・転送ポートから光が発し、マリアは逸早くそれに気づいて声を発する。

「あ、転送ポートからユーノ様が戻ってきますわ。」

「「「！！」」」

それを訊くと、なのは達三人娘は全く同一の動きを見せると、今日のこの時を見込んで設置していたバリケードの後ろへと隠れ、それを見たヴィータやザフィーラは目を奪われた。

「（凄げーーーはやてもなのはもフェイトも全く同じ動きだった・・・）」

「（一体どんな奴なのだ?そのサムライ・ドラというネコは?）」

徐々にドラに関して興味が出始める六課メンバー。

やがて、転送ポートの光が収まるとドラを迎えに行ったユーノが戻って来、全員に言ってきた。

「ただいま♪それではご紹介しましょう。僕の友人で、ＴＢＴ特殊先行部隊隊長・・・・・・サムライ・ドラさんです♪」

ユーノの紹介を受けると、後ろの方に隠れていたドラがゆっくりと顔を出す。

ドラの姿を目の当たりにすると、なのは達は身震いし、初見のスバルや恋次達は某有名アニメキャラと容姿がそっくりなドラの姿に思わず空いた口が塞がらなくなった。

「「「な!」」」

「「「え!!」」」

「「「「「ああ!!!」」」」」

「「「「これは！！」」」」

「おお、来た来た♪」

ナーノ一人だけがドラの事を分かっていたため、他とは違う反応を見せる中、機動六課に足を踏み入れた異世界の友人、サムライ・ドラは目の前の光景に嬉々とした声を上げる。

「うっほ！！！こりゃ壮観だな！本物の阿散井恋次に朽木ルキア、吉良イヅル・・・そして懐かしきフォワードの面々。それとあそこに居るのはユーノさんのとこの従業員と息子さんだな。」

ドラがスバル達を目の当たりにしてそのような事を口にすると、前線メンバーは愕然とした様子でドラの容姿をじっと伺う。

「う・・・うそ・・・！？」

「ユーノ先生の友達って・・・ま、まさか・・・！？」

「ドラ・・・」

恋次が口を滑らせドラえもんと言いそうになると、すかさずなのは達三人娘が止めにかかった。

「「「ストップ！！！」」」

「ふごごおごごごご！？」

恋次の口を押えて窒息させるか否かの状態にまで追い込みながら、なのは達は必死になってこう言って来た。

「恋次さん!!それは言っちゃダメです!!」

「死に急ぐ真似は止めてください!」

「せや!いいかみんな、ドラさんの前で“ドラえもん”なんてワード口にしちゃ・・・」

ここではやてがうっかり口を滑らせると、聞いた瞬間ドラは刀を抜きだし、腰につけていた鞘をブーメランの要領ではやてに投げつけた。

「てめぇが言ってんじゃねぇか!!!!!」

「ぐっほ!!!」

「は、はやて!?」

案の定ドラの制裁を受けてしまったはやてはドラの一撃を受けると、作られたバリケードへと飛び込む形で目を回して倒れ込む。

はやての後頭部に出来た特大のたんこぶに驚きながらヴォルケンリッターの面々やスバル達が安否を気遣う。

「大丈夫ですか!?」

「貴様!!主はやてに何たる事を!!」

シグナムが当然の如く怒りを露わにドラを睨み付けると、ドラはシグナムの怒りをかき消すかのような形相を浮かべて理不尽な啖呵を

切ってきた。

「ああ！！！何だとオラ！！！！！マシンガンで全身蜂の巣にして魚の餌にして釣りしてやろうかゴラ！！！！！！！」

世にも恐ろしい形相と凄まじい殺気を孕んだ鬼気を浴びせられた瞬間、ユーノとナーノ以外の面々は背筋を凍らせ、委縮し態度を改める。

「「「あ・・・いや・・・えっと・・・すみませんでした・・・／／／」」」

完全にドラに対しては頭が上がらないでいる涙目の三人娘を一瞥すると、ユーノは思わずユーノスと共に笑みを浮かべる。

「ははは。意外だなこれは」

「あはははは♪相変わらず三人はドラさんが苦手な様だね♪」

「だ、だって！！あんな怖い思い出が鮮明に残ってるんだもん！仕方ないよ！」

なのはがそのようにユーノに訴えかけると、聞いていたドラが刀を鞘に戻してなのはに歩み寄ってくる。

「そうなったのはお前が軟だからよ。スバル達を鍛える前に先ず己の精神とユーノさんのような基礎がしっかりした体を鍛えろっつーの。」

「で、ですが・・・！？」

なのはが躊躇した表情を浮かべると、それを見たドラはまたしても鬼のような形相を浮かべて白い魔王のなのはを屈服させる。

「返事は“はい”でいいんだよ・・・さっさと言え!!!!!」

「は、はい!!!!すみませんでした!!!!!」

なのはは素でドラの事が怖かったために、下手な言動は却ってドラを怒らせるだけだと悟った上で、只管に涙目ながらに頭を下げるしかなかった。

あまりに違いすぎるなのはの一方的にしばきあげられる光景を目の当たりにし、ルキアや吉良は目を疑った。

「な・・・何なのだこのネコは・・・!?なのはを一喝した上に怯えあがらせた!」

「それに、あの格好は僕らと同じ死覇装・・・!?彼は何者なんだ!?」

「確か亀・・・前に言ってた猫型ロボットってあいつのことか?」

「多分ね。でもまさか、こんなこともあるんだね。」

「見かけはどうあれ、店長が見込んだ兵ですぞ。」

「これはまた面白い客が来たであるな。」

すると、ここでドラをよく知る者の一人であるナーノがステップを

踏みながら近づいてきた。

「ドラさん♪」

声を訊いたドラは、笑顔で自分を見つめるユーノの息子に目を向ける。

「おお。君がナーノ君か」

ドラは初見のナーノと握手を交わす。

「未来では何度か会ってるんですよね♪僕がナーノ・T・スクライア。ユーノ・スクライアと高町なのはの息子の」

「うんうん、聞いてる聞いてる。何でも物凄い現実主義でペシミストなんだって？」

「へへ♪物事を楽観的に捕えるよりも現実的に捕える方が性に合ってるというか何と言うか。あとは理想よりも目の前の事実を優先させる主義なんですよはい」

「一緒一緒！いるんだよね。途方もない理想ばっかり描いて結局それが絵に描いた餅になって頓挫する人って。夢を抱くなとは言わないけど、実現できないような理想は描くなって言いたよホント」

「全くですね。僕、一途で真っ直ぐな人を相手にするのが一番苦手というか。疲れるんですよ話聞いてるだけでも」

恋次は聞いてて沈みそう内容の二人の話にツッコまずにはいられなかった。

「なんて会話してんだ!!聞いてるこっちがネガティブになるだろうが!!」

また一方で、ドラと意気投合するナーノの姿になのは達は目を奪われ、愕然としてしまった。

「・・・ナーノ・・・ドラさんと意気投合してる・・・」

「どうして・・・なんでなの・・・」

「親子そろって・・・おかしいで・・・」

自分達とは違い全てをつつき込みありのままに受け止める存在、ユーノとそのユーノの血を受け継ぐナーノの二人はなのは達の理解の外に位置することは間違いなかった。

やがて、ひと段落がついてからドラは過去に経験した自分の事と恋次達死神を熟知する理由を概ね話してやると、聞いていた恋次達も取り敢えずの所納得した様子を見せる。

「成程・・・そう言うことか。だから、俺達のことは勿論こいつらのことも熟知してる訳か?」

「その通り。しっかし、何かまだ足りない気がするんだけど・・・・・・あ、そうだ!あの腹黒気障は何所です!?」

「腹黒気障・・・・・・まさか!?」

「クロノ君・・・のことですか!?」

苦い表情を浮かべながらそう尋ね返すと、ドラは手を叩いてから更にこう言った。

「そうそう！！それそれ！！！あの気障は初めて遭った時から気に入らなかったんだよ！！」

ドラがクロノの事を酷評すると、同じくクロノ嫌いなユーノが反応し、笑わずに入れなくなると、腹を抱えて笑い始める。

「ははははははは！！！！！！！！それナイスですよ、ドラさん！！！僕も毎朝顔合わせる度に大安から仏滅みたいな気分になりますから！！！はははははは！！！！！」

「でははははははははは！！！！！確かにそうですね！！！！でははははははは！！！！！！」

ドラもユーノに便乗して大笑いを浮かべると、はやては心の中でクロノの事を哀れに思い始めた。

「（うわ・・・クロノくんめっちゃ言われたい放題や・・・いや・・・わからんでもないような気も・・・）」

「ま、時間の許す限りではありますがゆっくりしてってくださいね♪」

「どうもどうも！」

「では、私達でよければ隊舎の中を案内致します。」

「お、気が利くね。」

ドラはティアナの提案を聞くと、スバル達に連れられ隊舎内を案内してもらった。

先ず五人がドラに見せたのはいつも使っている訓練場だった。

「ここが、私達が何時も訓練している六課自慢の訓練所です。」

ドラは脳裏に蘇る2年前の記憶をたどりながら、しみじみとした表情を浮かべ、その鋭い洞察力から何かを感じ取ってこう尋ねる。

「前に見たときとあんまり変ってないようだけど、ひょっとして何か地下に隠してたりする?」

「よく分かりましたね!実は地下にはユーノ先生の造った母艦が隠されているんですよ。」

「母艦!?そりゃまたスンゴイもん造ったな、ユーノさんも!」

驚くドラが次に案内されたのはそのユーノがこれまでに作り上げた数々のハイパーマシーンが収められた格納庫だった。

「ここはハイパーマシーン格納庫です。ユーノ先生が造り上げた数々の災害救助マシーンや戦闘メカを収容しています。本局や地上部隊の方にも時々お貸ししているんですが、これがかなりの高評価で。」

説明を聞きながら、ユーノが実際に作り上げたメカを凝視するドラ。

「ま、ユーノさんの技術力を以ってすれば当然じゃないかな？何しろあの人超が付くほどの天才だからね。本人は断じてそう思ってないと思うけど。」

口々にユーノの事を自分たちが思っている状に理解している様子のドラに、スバル達は唖然とする。

「ユーノ先生のこと、よく知ってるんですね・・・ドラさん。」

「違う形であれ、同じ時間を一緒に過ごした身だからね。それに、通信でもよく喋ってるし。」

そして、一通りの案内が終わりドラが最後に向かったのは機動六課宿舎だった。

「最後は私達の宿舎です。こっちが男性用です。」

本来ならば男女ともに異性への寮の立ち入りは認められないのだが、部隊長がはやてだけにそう言ったことが案外テキトウで、なのはも平気でユーノの部屋に忍び込むこともあったりする。

ドラは五人に連れられ男性用局員が寝泊まりする取捨の中を見て回り、やはりしみじみとした雰囲気を醸し出す。

「懐かしいな・・・このむさ苦しい男の汗臭い臭いが混じった感じ。」

「う・・・た、確かに汗臭いかな・・・」

五人の中で唯一の男であるエリオは一瞬自分の臭いを気にすると、

そんなエリオの言葉を聞いたキャロがフォローのつもりで言う。

「あ、私は好きだよ！エリオ君の匂い！！」

エリオはそれを聞くと、顔を赤く染めて湯気をだし、これを見たティアナたちは苦笑する。

「フォローになってるのかしら？」

「あはは・・・どうだろう」

と、ここでドラが不意に立ち止まりある人物の部屋の前に立つ。

「ん？」

「あ、ここは恋次さんの部屋ですよ。」

ドラはそう聞くと、ドアの隙間から返事の部屋の中の様子を伺い、整理整頓された恋次の部屋に違和感を覚えると、過度の方に目を向け眉間にしわを寄せる。

「あの・・・どうしたんですか？」

緊張した様子でスバルが尋ねると、ドラはドアの角に溜まった埃を手に取ると、五人が度胆をぬく発言を口にした。

「妙に綺麗過ぎる・・・・・・しかもこの隅にたまった埃からして・・・・・昨日の夜遅くにはやてに言われて無理矢理掃除した感じが丸見えだな・・・」

「「「「「え！」」」」」

ドラの途轍もない洞察力の高さを目の当たりにした五人の頭に雷が落ちる。

「（凄い・・・埃見ただけでそこまで見抜いてる・・・！？）」

「（何て洞察力なの！？）」

「（やっぱり、侮れない・・・！）」

サムライ・ドラの知られざる実力の高さは正に未知と言うもので、この度の訪問はそんなドラの隠れた技能を発揮する機会となることになる。

◇

〈はやてＳｉｄｅ〉

ドラが六課を訪問して数時間後。

昼食をとっていたはやて達だったが、当のはやてはいつも以上に緊張の糸を張り巡らせていたせいか既に疲労困憊の様子でテーブルに突っ伏していた。

「はぁ～～～何や疲れるわ～～～」

「落ち着かないよね全然・・・・・・」

「心が晴れないのは・・・・・・どうしてだろう・・・・・・」

はやてに共感してなのはやフェイトも同様の気持ちを抱く中、ユーノは笑みを浮かべながらなのは達に言う。

「みんな誤解しすぎだって。ドラさん、すっごくいい人じゃないの？」

「ま、格好や見た目はどうあれ悪い奴じゃなさそうだしな。」

「怒ると凄い怖いけどね・・・」

力なくなのはがそう言うと、ユーノの隣の席でラーメンを食べていたナーノや鬼太郎が口を挟む。

「て言うかお母さんたちがびりびり過ぎなんだって」

「はやても災難だよな。あんなネコの尻に敷かれて。」

「そ、それは言わんといて下さいよ鬼太郎さん！」

はやてはドラの訪問で完全に自分のペースを崩されており、いじる分には容易いものだった。

と、そんなときアギトがシグナムの姿が見えないことを気に掛ける。

「あれ？そう言えばシグナムの奴どこ行ったんだよ？」

「え・・・あ、ひょっとして・・・」

「にゃはは・・・多分そうだろうね・・・」

ユーノとなのはが苦笑をしながら顔を合わせると、彼らの耳にシグナムにしつこくバトルを要求され逃げ惑うドラの声が聞こえてきた。

「ちょっと勘弁してよ!!このバトルオタク!!!」

「いいではないか!!!一本勝負だけだ!!!」

ユーノ達の目の前を、困惑した様子のドラと血気盛んなシグナムが走り去っていく。

「興味ありません!!!オイラは戦い嫌いです!!!」

「嫌いでもこの通り頼む!!!」

「しつこいんだよ、お前は!!!」

この光景を目の当たりにすると、全員は心の中で共通してこう呟く。

「「「「「「「「「「(やっぱり・・・・・・)」」」」」」」」」」

その後、どうにかシグナムを説得したドラはため息をつきながらユーノの隣に座り愚痴をこぼし始める。

「全く・・・血の気の多い奴は苦手だ・・・ほんと面倒臭いよ!」

「シグナムさんのあれは今に始まったことじゃないですからね・・・」

「ほんますみませんな。主の私から心からお詫び致します。」

「ふん！お前の口からきつく言っておきなよ。偶には戦わないことも必要だってね！あん！！」

ドラは不機嫌な様子で、気分直しに懐から板チョコを取出し豪快に一齧り。

これを見てユーノはつい疑問を抱く。

「あれ？ドラさん・・・チョコレートなんて食べましたっけ？」

ドラはユーノが知る限り、甘いものが大嫌いであり、チョコレートなど決して食べる筈はないと思っていた。

そんなユーノの言葉を聞くと、ドラは食べるのを中断し答える。

「え？ああ・・・これは前に言ってたあれですよ。」

「あれ・・・あ、はいはい！！特性のブラックチョコですね♪」

「特性のブラックチョコ？」

聞いていたなのはがキョトンした表情を浮かべ首をかしげる。

「だけど、チョコには変りないんじゃ？」

「じゃあ、食べてみる？」

ドラは徐に食べていたチョコの欠片をなのは、フェイト、はやての

三人に指し出し三人はドラの意外な行動に驚きつつも素直に喜ぶ。

「何や優しいじゃないですか。じゃあ、戴きます♪」

三人が笑顔を浮かべてチョコの欠片を手に取ると、それを見たユーノはこんな忠告をしてきた。

「食べるのはいいけど、三人ともあとで後悔しないことを祈るよ。」

「何言ってるのユーノ君♪ただのチョコでしょ？」

「チョコレートで後悔はしないよ。」

「ほんなら、御賞味しますかな！」

この時、愚かなる三人娘のなのは・フェイト・はやてはドラから貰ったチョコの一欠けらを何の疑いもなく口に運び、チョコの味を味わいました。

そう・・・それが悪魔のような味とは知らずに・・・・・・

「「「「！！」」」」

暫く口の中で味わった瞬間・・・三人の顔が突然青ざめ、口を押えながら悶え苦しむように声を上げながら一目散にトイレへと向かって行った。

「「「「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！！」」」」

ユーノとナーノ以外のものは状況が全く掴めず呆然としていた。

「な、何があったんだ!?」

「あ～あ・・・やっぱり後悔しちゃちゃったな・・・」

「ふん。軟弱共め。」

哀れみを抱くユーノやナーノを余所に、ドラは平然とそのチョコを食べ続ける。

やがて、戻ってきたなのは・フェイト・はやては涙を流しながらドラに文句を言い始めた。

「何やねんあのチョコは!!!人間の食い物か!!??」

「そうですよ!!!チョコなのに全然甘くないじゃないですか!!!寧ろ苦味しかしないし!!」

「あんなもの食べさせて、舌が変になったらどうするんですか!!!」

三人はそう言いながら真っ青に染まった自分の舌を気にしながら、その下にこびりついた尋常ないチョコレートの苦みに涙を浮かべていると、ドラは苦すぎるチョコを齧ると悪びれる様子もなくこう返事を返す。

「前に同じ台詞をパラレルワールドで聞いたけど、だからなんだよ？安易に人から貰ったものを食すほうが悪い！」

「せやかて、食べていいって言ったのはドラさんやないですか！？」

「“食べてみる”とは言ったが“食べていいよ”とは言ったつもりはない。」

「う！確かに・・・そうですけど・・・！」

論理的に正しいことを口にするドラの言葉にこれ以上何も言えなくなる三人を尻目に、ナーノがドラの持っていたチョコに興味を示してきた。

「僕にも一ついいですか？」

「おお！いいよ。」

ドラはナーノにチョコの一欠けらを手渡し、序にユーノスにもおすそ分けをする。

ナーノはチョコを口に入れしっかりとその苦みを味わうと、あろうことかそれが殊のほか気に入った様子で言って来た。

「うん！苦くて美味い♪」

一方のユーノスは一齧りしただけでその苦みに堪えられず、悶え苦しみだした。

ユーノが心配して声をかける。

「だ、大丈夫ですか！？」

「む・・・無理だ・・・／／／」

ユーノスをも昏倒させかねる強烈な苦みを秘めた悪魔のチョコレートだったが、気になったはやてがドラに問い詰める。

「大体何なんですかこのチョコ！？」

「カカオ豆１００パーセント、糖類０のブラックチョコさ。オイラは苦党だからこれしか食べれないんだよ、チョコは。」

「苦党って・・・どうしてくれんですか！！この舌！！！」

「ユーノ君からも何か言ってよ！！舌が苦味でどうにかなりそうなの！！」

涙目で訴えるなのはだったが、ユーノと息子のナーノはあっさりと答える。

「食べたものは仕方ないよ。諦めて治るのを待つことだね。」

「そうそう。」

「ユーノくんやナーノまでドラさんの肩持つ気なんか！？」

「疑わずに手を出したのはお母さんたちのほうだからね。自業自得だって。」

そう言うと、ナーノに共感したドラが次のように三人娘を一喝する。

「全くだな。大体お前ら三人は人を疑うって事を知らないのか！？

“疑心”って言葉ぐらい頭に入れた上で行動しろよな、例え友人でも！！分かったか・・・“タヌキ娘”・“白き魔王”・“なのはをユーノさんに盗られて内心嫉妬してる主題歌も起用して貰えてない過保護な髪金”。」

「「「ガーン！！！！！」」」

本人が最も気にしている事を容赦なく理不尽に叩きつけられた結果、なのは・フェイト・はやての三人はショックのあまり石化し、一人残らず崩壊した。

「お、石になって砕けたぞ。」

「本人が一番気にしていることを明確に当てられたからな。」

「フェイトちゃんに至っては再起不可能だろうね・・・今日取り敢えずは。」

フォワード五人はこの光景を遠目から見ていたため、今でも模擬戦で勝利するのに相当苦労するなのは達をこう容易く玉砕するドラの力には目を疑うばかりだった。

「あの無敵の隊長陣を簡単に粉砕するなんて・・・ホント恐ろしい人、て言うかネコよね・・・」

「流石はユーノ先生の友達って感じ・・・？」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

ドラが六課において好き勝手と言うか、普段から思い上がりや甘い考えを抱く三人娘を厳しく諫めている間、ミッド市街地に突如として甲殻類グリードが創り出した白ヤミーが出現し、住民を襲い始めた。

「キャー！」

「何！あれ！！」

「仲間・・・仲間・・・」

住民を無差別に襲う白ヤミーは体に巻かれた包帯を伸ばすと、一遍に逃げ惑う人を絡め取る。

「「「わあああああ！」」」

そして、大方の人間を襲った後・・・白ヤミーは脱皮の要領で成長を遂げ、その姿をサソリヤミーへと変貌させる。

住民は成長したサソリヤミーを目の当たりにすると、恐怖に怯えながら必死で逃げ惑う。

「サソリのバケモノだ！！」

サソリヤミーは両手のハサミと背中の尾で人々を戦かせながら、只管に仲間を増やそうとする欲望の為に街中を徘徊する。

「仲間・・・――――」

サソリヤミーが出現すると、ユーノとユーノスのヤミーセンサー、ナーノが持つゴリラカンにも反応が確認される。

「「！」」

「お」

ユーノの表情が一変すると、ドラは訝しげな顔を浮かべる。

「ユーノさん？」

「ヤミーだ！」

「え！」

ショックで立ち直ることもままならかったなのは達も、ヤミーと言う単語を聞くと元の状態へと戻り、ドラも真剣な眼差しを浮かべながら尋ねる。

「それって・・・欲望から出来てるっていう？」

「ええ。全くこんな日にも当たり前のように出るのかね――」

「行くぞ。現場は近い」

ユーノスはそう言うと、ユーノとナーノを連れて現場へと急行する。

「じゃあ、僕らちょっくら行って来るから」

「うん。二人とも気を付けるんだよ」

ユーノは外に出ると、止めていたグリーンラベルに乗り込み、ナーノも自動販売機の形をとっていたライドベンダーにセルメダルを入れて、バイクモードへと変形させ、サソリヤミーの元へと急いだ。

一抹の不安を抱えるなのは達だったが、その時いつの間にか先ほどまでいた筈のドラがいなくなっていることに気付いた。

「あ、あれ!?ドラさんがいない・・・!」

「え!あれーーー!!」

「何処行ったんや!?」

「ま、まさか・・・ユーノ君達と!」

「えええ!」

一同はなのはの言葉を聞くと、驚かない訳にはいかなかった。

「そんな!幾ら無敵のドラさんでもヤミー相手に戦うなんて!?」

「と、兎に角追いかけるぞ!」

ドラの事が気になったなのは達は急いでドラを探しに外へと飛び出した。

ちょうどその頃、街中に出没したサソリヤミーはセルメダルの枚数を増やしながら無差別に人を選別し包帯を巻きつける。

「やめろ！！！」

「ぐあああ！」

あちこちに広がる包帯で全身を絡め取られた人々の姿を、バイクに乗って駆けつけたユーノ達が目撃する。

「あれは！」

「サソリ！？」

「ち。またしても甲殻類系の・・・！」

ユーノスは未だ慣れないでいる甲殻類ヤミーに舌打ちをする。

ユーノとナーノはバイクから降車し、それぞれ結界印とライジングハートを準備する。

「兎に角、早く倒さないと」

「いっちょ行こうか」

ユーノは結界印の蓋を開封し、ナーノもベルトにパスを翳す。

「「変身！」」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

二人はそれぞれスレイヤーブレイドと銃を手に取ると、サソリヤミーの方へと走って行き、ナーノが銃弾を向ける。

「ぶっぱすけど、いいよね！」

ナーノの銃弾に当たり、サソリヤミーの注意がナーノに向いた瞬間、頭上よりユーノが斬撃を叩き込みこう言った。

「答えは聞かないんだろ！」

ユーノの鋭い斬撃がサソリヤミーの身体に叩き込まれ、サソリヤミーはそれなりのダメージを負う。

「グアア！」

〈Ｔｗｉｎ　ｂｌａｄｅ〉

〈Ｖｉｏｌｅｔ　ｂａｒｒｅｌ〉

「はっ」

ユーノはここでツインブレイドに切り替えると、接近戦に持ち込み頑丈な殻を持つサソリヤミーの中でもとりわけ薄い皮膚を狙って体を切りつけ、ナーノは中距離から魔力弾を連射する。

「それそれ♪」

かなりのダメージを負ったサソリヤミーは後ろに転がりまわり、徐に立ち上がると、叫び声をあげ、空間を切り裂く鋭い斬撃を二人に飛ばしてきた。

「グアアアア！」

「「わあ！」」

二人は突然のサソリヤミーの攻撃を喰らうと、勢いよく後ろに飛ばされ、ユーノスは二人の事を気にしつつ甲殻類グリードの登場を警戒する。

「（サソリのヤミー・・・つまり甲殻類系のグリードが・・・だとしたらまた何処かに？）」

ユーノスがそう考えている間に、二人は立ち上がりサソリヤミーを見据える。

「ち。甲殻類だけあって頑丈だし攻撃も強力だよ」

「正確には、サソリは甲殻類じゃないけどね」

ユーノが息子にそう言った直後、それに共感してこの男・・・いやネコが便乗してきた。

「その通り！」

「「「！」」」

一瞬耳を疑った三人だが、その直後ユーノスの後ろより物陰が飛んでくると、その物陰の正体であるサムライ・ドラはサソリヤミー目掛けて剣を振りかざす。

「人侍剣力流――――――」

「あれは！」

「圧振閃！！」

ドラは刀身に剣気と全神経を集中させた必殺の一撃を、サソリヤミーのハサミに叩き込むと、サソリヤミーはハサミから全身へと伝ってくる超振動に内側からダメージを受けると、その衝撃で後方へと飛ばされ、ユーノ達は目を奪われる。

「ドラさん！」

「何だと！？」

「へへ。来ちゃいましたよ」

駆けつけてきたドラがユーノ達に笑みを浮かべながら愛刀を肩に乗せると、ヤミーに対抗できる力を秘めたドラの力に思わず疑問を抱く。

「どうして？」

「お前、ヤミーにダメージを！？」

「ああ・・・ヤミーに傷をつけられるのは、ユーノさんの完現術かナーノの魔法だけでしたっけ？だけど例外だっているんでしょ。こち亀の両さんとか」

「いやあれは特別というか・・・」

「細かい考察は後回しにしましょう。今はこのサソリ野郎をぶっ倒すのが先です」

ドラはそう言うと、徐に体を起こして自分を睨み付けて来たサソリヤミーと向かい合い、ユーノ達も眉間にしわを寄せる。

「ですが気を付けてください。甲殻類系のヤミーは、生み出したグリードの欲望を忠実に他者に宿らせることで、憑依した人間ごとヤミーに変えているんです」

「だったら、先ずは本体を取り出すのが先って訳ですね！」

ドラはユーノからの忠告を聞くと、刀を構え直す。

と、そんなドラを探し出す為車で捜索を続けていたなのは・金太郎・鬼太郎・キャロ・恋次の五人が到着する。

「いたぞ！」

「ドラさん！」

と、その時ドラが不意に刀を天に翳すように振り上げると、自分の肩なの名前を声高に叫ぶ。

「敵を斬れ、『ドラ佐ェ門』！」

次の瞬間――・・・突如雲を突き破って天空からドラの刀に向って雷が注がれる。

刀は雷を帯びると更に強く輝きを増してサソリヤミーの目を眩ませる。

ユーノやなのはなど一部を除くものはドラの刀に起こった突然の時代に後ずさりをする。

「な、なんだ・・・」

「一体・・・！」

恋次達が戸惑いを見せていると、ドラは解放した自身の刀の姿を披露し、空気を切り裂くように刀を軽く振る。

「ふん！」

解放したドラの刀の特徴を簡単に説明すると、鍔はいつものひし形のものではなくなり、ドラの顔と酷似した意匠が施され、さらに刀身の長さも以前のものよりも若干長くなり、極めつけは顔飾りの下に添えられた突起のある赤い飾り。

ナーノは子供の時以来、お目にかかるドラの真の刀の姿に目を輝かせる。

「おお。あれはドラさんの刀の真の姿――――！」

「そんなことまで知ってたのか、ナーノは」

息子の発言に最早驚くことも億劫なユーノに対し、恋次達死神はドラの形が変わったことに思わず目を奪われ絶句しかける。

「な、何だと！？」

「あれは――――斬魄刀か？」

「いえ。ドラさんの刀はちょっと異質なんです。ですけど、能力は凄いんです」

見間違えそうな様子でいると、横でなのはが説明する。

そして、ドラ佐ェ門と言う本来の姿を解放したドラは本能的に恐れおののく様子のサソリヤミーに不敵な笑みを浮かべると、刀身を向けて言う。

「よし。じゃあ先ずは軽くウォーミングアップと行こうか。」

ドラは強靭な脚力で一瞬で相手の懐に忍び込む歩法「縮地」を発動させると、サソリヤミーに人侍剣力流の技を仕掛ける。

「人侍剣力流――――――壊滅斬閃！」

人侍剣力流の中でも、物質破壊に特化したこの技をその身に受けたサソリヤミーは、自慢の硬い殻をも破壊するドラの渾身の一撃によって、大ダメージを与えられ、ユーノ達は目を見張る。

「おお！」

「凄～い♪」

「何と言う・・・ヤミー相手に、傷を負わせるなど・・・あれもあれで特別という事か」

ユーノスはまたしても特別な能力を秘めたるドラの能力に感嘆していると、満身創痍なサソリヤミーをドラは挑発する。

「へへ。こんなもんじゃ食い足りたいね。掛かって来いよ。」

「グオオオオオ！」

サソリヤミーはそれを訊くと、怒りを露わにハサミから空間をも切り裂く強烈な斬撃をドラへと向け、ドラはそれを難なく躱すと愛刀ドラ佐ェ門に命ずる。

「ドラ佐ェ門。魂魄兵装」

すると、ドラの意匠の鍔の目が光り出し、その瞬間ドラの刀に集められる周囲を飛び交っていたあらゆる魂という魂。

やがて集めた魂を刀身に凝縮すると、ドラは一気にそれをサソリヤミーに吹っ飛ばす。

「魂魄弾！」

「ガアアアア！」

サソリヤミーは巨大な上に逃げることもままならないほどの速度で迫ってきたドラの攻撃を回避しきれず、直撃を受けるとセルメダルを放出する。

と、ここでナーノが連射攻撃を仕掛ける。

「オラオラオラ！！！」

ドラの攻撃に後にくるナーノの容赦ない銃弾はサソリヤミーにとっては地獄そのものであり、最後はユーノがカニコアの魂を引き出しシザーハンドを装備し飛び込んでくる。

〈Ｃｒａｂ　ｓｃｉｓｓｏｒｓ〉

「はあああ！セイヤー！！！」

ユーノが仕掛けたカニバサミを受けると、サソリヤミーは悲鳴を上げながら大量のセルメダルと一緒に取り込んでいた人間と分離する。

なのは達はこれを見て安どの顔を浮かべる。

「やった！」

ナーノが素早く意識を失た人間を退避させると、限界に近づいていたサソリヤミーを見据える。

「よし。止めだ」

「はい・・・ん？」

と、そう思った次の瞬間三人に真上から甲殻類グリードが襲い掛かってきた。

「ほあ！」

「危ない！」

ドラは咄嗟にナーノ目掛けて攻撃を仕掛けてくる甲殻類グリードの攻撃をナーノを庇う形で回避する。

「ドラさん！」

ドラはナーノの無事を確認してから、徐に不意に現れた効果来るグリードを目の当たりにする。

「な・・・何だこいつ！？」

甲殻類グリードはヤミーを傷つけられたこと、コアメダルの喪失と言う二つの事柄から先日よりも殺気立った様子でユーノ達を睨み付ける。

「僕の仲間・・・・仲間！！」

ドラはこの異形の姿をした存在を直ぐにグリードだと判断する。

「ユーノさん。こいつ――――――ひょっとしてグリード？」

「鋭いですね。はい。紛れもなく」

ユーノスは一度ユーノ達の方へと近づくと、甲殻類グリードを警戒し忠告する。

「気をつけろ。コアメダルも失ってかなり殺気立ってる。」

「はい」

甲殻類グリードはサソリヤミーを愛おしそうに気遣いながら、怒りを露わにサソリヤミーと共に三人に襲撃を仕掛ける。

激しい抗争を繰り広げるユーノ達を見ていた鬼太郎やキャロは拳を握りしめながら言う。

「俺達は見てるだけかよ！？」

「そんなの・・・嫌です！」

「私達もいこう。」

「うん！」

戦うことを決め込んだなのは達はユーノ達の援護へと回り込む。

甲殻類グリードはその間に強力な攻撃の数々でユーノ達を苦戦させ、次なる攻撃を仕掛けようとしていた。

「僕の仲間・・・コアメダル！」

「来るぞ！」

「ち」

ドラは舌打ちをしてから、再び魂を刀に集めて魂魄弾を飛ばし、ナーノは紫色に輝く弾丸をぶつける。

「魂魄弾！」

「ライジングハート」

〈Ｖａｒｉａｂｌｅ　ｓｈｏｏｔ〉

甲殻類グリードは持ち前の防御力の高さから二人の攻撃を受け流すと、ハサミを地面に突き刺し震動を起こしてユーノ達を攻撃してくると、なのは達が戦いに参入する。

「ユーノ君！今助けるから！」

参入してきたなのは達はそれぞれのポイントから甲殻類グリードとサソリヤミーを狙い撃つ。

「はあああああ！」

「フリード！」

「ダイナミックストーム！」

恋次・キャロ・金太郎の攻撃が二体の動きを怯ませると、なのは達はユーノの元へ集まり、ユーノは次のように指示を出す。

「なのは。奴の動きを捕えるから、一気に大火力で」

「うん」

ユーノは掌に魔力素を使役させると、十八番であるチェーンバインドの発展系、アレスターチェーンを発動させる。

「捕えて固めろ。アレスターチェーン！」

二体の怪人は複数のチェーンバインドに体を絡め取られると、身動きを封じられ、更にユーノスがストロングバインドで補強する。

「ネギ付だ」

ユーノスのストロングバインドでがっちりと固められたサソリヤミーと甲殻類グリードを伺うと、ドラが声をかける。

「ようし！一気に行くぞ！」

「ブラストレイ！」

「俺の必殺技・・・パート2！」

「グレイトリッパー！」

「「ディバイン・・・バスター！」」

「鎌鼬・サムライ・ドラ流！！」

「破道の三十二『黄火閃』！」

各々の必殺技に近い一斉攻撃が二体に仕掛けられ、直撃を喰らうと思われたその時、想わぬ事態が発生する。

「ふん！」

なんと、甲殻類グリードとサソリヤミーの間に怪人体のカザリが乱入し、カザリは竜巻を起こして彼らの一斉攻撃を容易く跳ね返した。

「「「！」」」

「あれは・・・」

「まさか・・・！」

思わず目を疑うユーノ達を余所に、飄々とした様子でカザリが挨拶をしてきた。

「フフ。やあ、元気そうだね。」

「カザリ！」

「カザリ・・・あれもグリードか」

ドラは同じ猫系として、カザリの容姿を凝視する。

カザリはアレスターチェーンを斬り捨てると、挙動不審な態度をとりながらサソリヤミーを庇おうとする甲殻類グリードを一瞥する。

「へぇ。随分と熱心なんだね。仲間集めに」

ユーノスはカザリに鋭い視線を向けて尋ねる。

「何の用だ？コアメダルなら渡すつもりはないぞ」

「別にいいよ。まとめて全部奪うから。だけど今日はコアをとりに来たわけじゃないよ」

「だったら何だ！？」

「ちょっとね。この新しい力を試しに」

「え」

一瞬耳を疑うユーノ達だったが、カザリは直ぐにこう言って腕を前に出してきた。

「受けてみて。僕の新しい力――――――ふん！」

すると、カザリは掌から竜巻では高圧水流を放出してきた。

「みんな下がって！！」

ユーノは咄嗟になのは達を下がらせカザリの攻撃を一人で受け止めると、強力な高圧水流に圧倒されたユーノは大きく飛ばされる。

「ぐあああ！」

「ユーノ君！」

「「ユーノさん（お父さん）！」」

「ぐあああ・・・！」

ユーノはカザリの力に圧倒されると、直撃した身体の部位に手を当て険しい表情を浮かべ、ユーノスは先ほどの攻撃を見ると、愕然とした顔を浮かべて徐に尋ねた。

「カザリ・・・その力・・・まさかメズールの力を!?」

「そ。全部じゃないけど。僕の体には、メズールのコアが入ってる。今までの僕とは違うって事、分かってでしょ?」

カザリは自分のコア六枚に加えて、持っていたメズールのシャチ・ウナギ・タコの三枚のコアメダルを取り込んでいた。

ユーノはカザリの力に険しい表情を浮かべながら、なのは達に気遣われる。

「く・・・」

「ユーノ君、しっかり。大丈夫?」

「うん。それにしても何てパワーだ」

「僕はまた進化した。そう――――――――ユーノ・スクライア以上にね」

すると、天狗になっているカザリの発言にこの猫が物申す。

「欲望の塊のくせに、ぺらぺらと喋る奴だ!」

カザリが声の下方に目を向けると、頭上よりドラが高速で移動し残像を作りカザリがそれに気を取られている隙に魂魄でコーティングした刀で背中に『卍』の文字の傷を与える特殊技を仕掛ける。

「卍落とし!」

ドラが刀でカザリの背中に一撃を加えようとした瞬間、カザリは素早くドラの気配に反応し鉤爪で斬撃を受け止める。

「ドラさん！」

ドラは睨み付けるようにカザリを見据えながら、自身の攻撃を容易く受け止めるカザリの力を確かに感じていた。

「へぇ・・・また面白いのが増えたね」

「（こいつ・・・解放状態のドラ佐ェ門の太刀筋を受け止めやがった――――――確かに普通じゃないかな。この強さ）」

「邪魔しないでよ」

そう言うと、カザリは反対側の手から竜巻を起こしてドラを吹き飛ばす。

「ぐうううう！」

「ドラさん！」

ドラは何とか体制を持ち直すと、ユーノに向かって言う。

「大丈夫です。それよりヤミーを！」

が、それを訊くとカザリが意外な事を口にした。

「悪いけど、序にこっちにも用があるんだ。」

「何？」

「ミスターがさ。ちょっと調べたいって」

「ミスター？」

「訳わかんねぇこと、ぬかしてんじゃね！！」

恋次は鬼太郎と共にカザリに斬撃を叩き込もうとするが難なく捌かれてしまう。

それを見て、今度はナーノがカートリッジをロードし、分離ヤミー戦で使用したあのインチキ技を発動させる。

〈Ｄｉｖｉｎｅ　ｍｅｔｒａ　ｂｕｓｔｅｒ〉

「喰らえ！」

カザリに向けて発射される止めどない無数のディバインバスターの嵐。

なのははその圧倒的であり、信じられない光景に声を漏らす。

「ふぇ！！何あれ！？」

「ああ・・・なのはは見るの初めてだっけ・・・」

カザリは飛んでくるナーノの砲撃をメズールのコアと融合した水流の竜巻で掻き消してしまうと、ドラが再び技を仕掛ける。

「神速衝閃！」

文字通り神速から仕掛けるドラの強力な剣技だが、カザリは叩きこまれる前にドラの動きを予測して水流波を放出。

「残念」

ドラは水流波を受けても尚、持ち前の多夫さで持ち堪える。

「く・・・！」

ユーノ達全員がカザリに攻撃に苦慮して一か所に集まると、カザリは頃合いをつけ止めの一撃を仕掛ける。

「そろそろお暇させてもらうよ。バイバイ」

最高圧の水圧と竜巻の融合技を受け、ユーノ達は一人残ら吹き飛ばされてしまう。

「「「「「「「「「「ぐあああああああ！」」」」」」」」」」

変身が解除されたユーノ達を余所に、カザリは傍らで見ていた甲殻類グリードとサソリヤミーの元へ近づいて行く。

「僕の仲間・・・」

不安げな甲殻類グリードに、カザリは手を差し伸べる。

「大丈夫。怖い事なんてないよ。僕と一緒について来て」

カザリは二体を手に取ると、その場から退散しカリの元へと向かった。

進化したカザリの攻撃を受け敗北を喫したユーノは重い体を起こすと、その場に倒れているなのは達を気遣った。

「いてて・・・なのは。みんなも大丈夫？」

「うん。なんとか・・・」

「カザリの奴・・・ここまでとは」

「あの猫野郎！同じ猫の端くれのくせして何ちゅう力だ！」

各々がカザリの力に色々な事を想う中、ユーノは今回の飾りの行動に奇妙な違和感を覚える。

「・・・――――カザリ」

◇

〈カザリＳｉｄｅ〉

さて、ユーノ達との戦闘を終えたカザリはカリの待つ財団へと帰って来ると、人形に目を向けてカリに人間体の姿で笑みを浮かべる。

「フフ。ミスター。」

「・・・連れてきましたか」

「フフ。恥ずかしがり屋さんなんだ。ホラ。こっちだよ」

カザリがそう言うと、恐る恐るドアの向こう側から甲殻類グリードが入ってくる。

「・・・・・僕の・・・」

カリは甲殻類グリードの姿を真顔で見詰めると、人形を肩に乗せてこう返す。

「君の欲望は、忠実に同族を増やしたいですか。成程それも悪くないでしょう」

すると、ここでカザリが自分の進化の事を仮に問うてきた。

「ねぇミスター。どうだった?僕の進化は」

「なかなか順調です。もっとメダルがあれば、君のメダルの器としての進化もそう遠くないでしょう」

「そうだね。この力があれば、ユーノスからも他のグリードからも、きっとメダルを集められる。」

カザリは狡猾でありながら計算高く事を運ぼうとしている。

甲殻類グリードをも味方につけようとしているそんなカザリの思惑にユーノ達はどう立ち向かうのか?

さて、カリ・ユガを出資者として迎えるアルハザードを拠点としてメダル争奪戦とアンゴルモア争奪戦を企て、ユーノをオーズの器と

して付け狙う変人科学者スカリエッティはプレシアからこんな話を持ちかけられていた。

「ねぇジェイル。アリシアにもそろそろ教育係が必要だと思うんだけど、誰かいい子はいないかしら？」

スカリエッティはケーキの焼き加減を見ながらその問いに答える。

「そうだね。リリスは彼等の監視で忙しいし、リヴァイアサンに至っては子供を相手にするのが苦手だからね」

「アスモデウスは――――――論外だわ」

困り果てるプレシアを一瞥し、ケーキの生地が焼きがあるとスカリエッティは次のように提案してきた。

「では、こうしようじゃないか。この素晴らしきアルハザードの技術を使い、黄泉の淵より君にとっては馴染みのあるものを一人復活させようか」

「！まさか・・・――――あの子を？」

「ふふ。序に彼女には、ミスターカリの事も頼もうと思っている。」

そう言うと、スカリエッティはプレシアと共に自身の研究室よりもさらに奥にある黄泉の泉へと向かい、早急に準備を進めると、プレシアが複雑な顔を浮かべて言って来た。

「ふう～～～本当にやるつもりなの？私的にはあんまり気は進まないけど」

「彼女は大魔導師である君が作った素晴らしい使い魔だろ？君自身が否定的に捕えているのなら仕方ない。アリシア君には別の破面魔導虚を頼んでもいいんだ。尤も、それでアリシア君の気がおかしくなっても、私の所為にしないでくれたまえ」

「――――分かったわ。やって頂戴」

「ふふ。物わかりがいいよ。では始めよう！」

スカリエッティは諦めのついたプレシアを見て不気味な笑みを浮かべると、アルハザードで獲得した技術を使い黄泉の泉の中より失われた生命体をここに顕現させた。

泉の中より現れたのは、嘗てのプレシアの使い魔でありフェイトの養育係でもあった山猫を素体にした存在、リニスであった。

リニスは死んだとばかり思っていた自分がこうして再び命を与えられ、読みがったことに驚きながら目の前に佇む険しい顔のプレシアと不敵な笑みのスカリエッティを見つめる。

「――――私は・・・・・・」

「黄泉の淵よりよくぞ舞い戻った。使い魔リニス。君にはアリシア君の教育係、そしてミスターカリのお目付け役を命ずるよ」

「お任せください。ドクタースカリエッティ。そして――――――」

リニスはそう言うと、本来の主であるプレシアに顔を合わせて破顔一笑。

「我が主、プレシア」

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

蠍とチョコとドラリターンズ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は甲殻類について説明しよう♪」

「甲殻類と言うと、どうもサソリも同じじゃないかと思う人がいるみたいけど、サソリは正確には甲殻類ではなく、鋏角目クモ形類というクモ類の仲間であり、符節や脚部の構造にも、そういったクモ類との共通点が見られる。」

「甲殻類とは、分類学上では甲殻亜門（こうかくあもん）と呼ばれて、エビ、カニ、オキアミ、フジツボ、ミジンコなどを含むグループなんだ。深海から海岸、河川、湿地まで、あらゆる水環境に分布するが、主に海で多様化していて、陸上の生活に完全に適応しているのはワラジムシ類など僅かなんだ♪」

な「へぇ～～～ワラジムシは分るけど、ミジンコもそうだったんだ」

ナ「て言うか、じゃあなんであのグリードは甲殻類のくせして正確にはクモ類のサソリなんて作り出したわけ？」

ド「案外その辺の設定っていい加減ですよね。意外と多いんだよな。そう言う正確なリサーチもなしにネタだけ考えてあとから『あれ、これ違わねー！』みたいなパターン」

ユ「ははは。それ言ったらお終いな気もしますけど・・・確かにそうですよね」

な「あんまり現実的な発言が多いと嫌われますよ」

ド「いいもん別に。本当に分かってくれる人がいれば十分！」

ナ「さっすがドラさん♪万人友達主義のお母さんとは違うね」

な「え！私そんな思想ないけど！？」

魔導師図鑑ハイパー！

今ここに、奇跡的なコラボが誕生する。

読者の方より予てより言われていた、ユーノ・ドラ・浦原の三人がタッグを組んだ。

浦「いや～～～光栄っすね♪私達が一緒にコラボするなんて♪」

ド「出来そうで出来なかったですからね。オイラも楽しみにしてますよ！」

ユ「では具体的に何をするか考えましょうか。」

三人は円卓を持ってくると、お茶を啜りながらコラボ内容について話し合う。

ユ「相会さんからの要望じゃ、僕ら三人がタッグを組んで戦ったらマジ最強なんじゃないかってありましたけど」

ド「多分それに近い状態にはなるでしょうね。」

浦「いやいや。私なんてお二人に比べればもう全然っすよ♪」

ユ「何言ってるんですか。シグナムさん相手にものともしてなかった人が」

ド「と言うか、オイラたちの実力を考えれば、なのは達魔導師組なんて最初から相手にならない気がするんですよね」

浦「実際、ジャンルが全然違いますからね。」

ユ「せめてなのは達でもついてこれるような一方的なチートじゃない何かを考えないといけませんね。」

ド「となるとやっぱりここはスポーツか。あるいは・・・」

浦「色々悩むっすね～～～」

三人は次回のこのコーナーが始まるまでの間、ずっと唸りつづけるのであった。

つづく

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

カ「君がいればきっとユーノ・スクライアとユーノス・スレイアを倒せそうだ。」

サヤ「同族・・・俺の・・・」

ド「過去も未来も切り離してユーノさんは厳然たる“いま”を生きてるんだ。」

ユ「推定体長１２０ｍ・・・ってところか」

ド「じゃあ、とっておきの使うか！」

第１７６話　いまとイジメと侍王ドラ佐ェ門

いまとイジメと侍王ドラ佐ェ門（前書き）

ド「進化の幅は、欲望だけじゃないさ。」

「想う気持ちこそが、人に進化を齎すのさ」

いまとイジメと侍王ドラ佐ェ門

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、サムライ・ドラが六課にやって来る。

二つ、甲殻類系のグリードが、新たにヤミーを誕生させる。

そして、三つ。その戦いに、カザリが乱入した。

カ「バイバイ」

全「「「「「「「「「「ぐあああああああ！」」」」」」」」」」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈六課Ｓｉｄｅ〉

サソリヤミー、甲殻類グリード共々を連れ去ったカザリとの戦闘を終えたユーノ達一行は、帰還するとシャマルとマリアによる治療を受けていた。

そんな折、元は遊びに来ただけであったが成り行き上戦いに参加していたサムライ・ドラはカザリの圧倒的な強さにこう言葉を漏らす。

「てててて・・・たくあの猫野郎・・・舐めた事を」

「お前も猫じゃねぇーかよ」

「ネコ型ロボット。正確には」

「しかし誤算だった。まさかカザリが自分以外のコアを取り込むとは――――――」

ユーノスは険しい表情でそう言うと、あの時のカザリの力を思い返す。

『受けてみて。僕の新しい力』

『僕はまた進化した。ユーノ・スクライア以上にね』

そんなユーノスの言葉を聞き、ユーノやなのは達は苦い顔を作り、それぞれが言葉を漏らす。

「自分以外のコアメダルを取り込むと、あんなに強くなるんですか？」

「ただでさえ、グリードが想像以上の強さだったのに、更に進化するなんて」

しかし不安を抱く一同を余所に、話を聞いていたナーノが真顔を浮かべながら答える。

「だけど所詮は欲望の塊。コアメダルを幾ら集めたところで、決して満たされる事は無いんだよ」

「え」

「ナーノ？」

ナーノの意味深な発言を耳に、ユーノ達が一様に顔を向けると、ナーノはライジングハートの手入れをしながら紫に輝く宝石部分を磨く。

その後で、ユーノがみんなに言って来た。

「兎に角、カザリの問題は後回し。今は逃げちゃったサソリ探すのが先決だって」

「ああ。全くその通りだ」

ユーノはドラの方へと顔を向け、今度の事を申し訳なそうに言って来た。

「なんかすみませんねドラさん。休暇で来たつもりがこんな事に巻き込んじゃって。」

「いいですよ別に。オイラ全然慣れっこですから。大体、大切な友人が何か大変な目に遭っているのに、それを見す見す黙っているなんてことは、オイラの心が許さないんで」

「ドラさん・・・」

ドラの言葉に胸打たれるユーノと、そんなユーノに笑顔を向けてから次のように発案するドラ。

「あのサソリヤミーもそうだし、甲殻類グリードにしても、未だは

っきりしていないことが多いなら、これを機会にもっと詳しく知るべきだと思うんだ。あと他に言うことがあれば、ここ機動六課の主力たる前線メンバーひとりひとりの力を伸ばす必要があります。」

ドラの尤もな話を聞くと、なのは達も納得の表情を浮かべる。

「確かに・・・・・・この現状を前に、私達自身がもっと力をつけないと・・・」

「ユーノやナーノに、負担が大きくなる一方だ」

「だけど具体的にどうすれば？」

「俺達も限定解除許可がもう少し簡単に出せれば事態はそこまで悪い方には傾かないんだが・・・」

「生憎尸魂界側としても、不容易な霊的干渉は避けたいという上層部の考えが罷り通ってる以上、並々なものではない」

腕組みをしながら恋次やルキアが渋い顔でそう言うと、聞いていたドラやは思わずため息をついてしまう。

「はぁ～。これだから権力に飲まれた組織は嫌なんだ。いざって時に使えない力なんて、宝の持ち腐れもいいところだ」

「悔しいけど、あなたの言う通りです」

吉良は煮え渡るような湧き上がる悔しさを拳に凝縮させ、ドラにそう言うと、便乗してナーノが答える。

「だから僕はこんな心を殺す場所、死んでも就きたくなかったんだ」

それを聞いた途端、キャロとエリオは苦笑する。

「う・・・必ずしも心を殺すばかりじゃないと思うけど・・・」

「本当にナーノは、僕らとは真逆なんだね・・・」

「少なくともここにはペシミストなんていないからな。ナーノみたいな存在が異常に見えなくもないけど、オイラは見慣れてるから全然平気。寧ろ、ここにいる六課メンバーの方が楽観的すぎる」

「！」

ドラもまたナーノ同様現実的なものの見方で、楽観論を唱える、若しくは理想を掲げ現実と言うものをきちんと捕えきれていない魔導師組の在り方をさも当たり前のように批判すると、それを聞いたなのはは前回のナーノと気と同じ感覚に陥り、他の者もまた暗い顔を浮かべる。

ドラはその光景を目の当たりにし、自分でもちょっときつかったという反省を抱きつつ、話の話題を変えて来た。

「さて、変に湿っぽい話は取り敢えずこれぐらいにして。オイラ、今日はここに泊まるから」

ドラの衝撃発言を聞いた瞬間、なのは・フェイト・はやての三人娘は石化し、その石化が解けた瞬間甲高い声を上げた。

「「「ええええ！！！」」」

隊舎に響き渡る三人娘の声に誰もが耳を塞ぐ中、おっかなびっくりな様子ではやてはドラに尋ね直す。

「う、うちにお泊りするつもりなん！？」

「ダメかい？駄目ならダメで外にテント張って寝るから別にいいけど」

「あ、いや。誰もそこまでは言ってませんが」

「ホント！じゃあ、お世話になるかな！」

「いやでも・・・」

「お世話になるから・・・ね！」

ドラは最後にパンチを聞かせたいつもの形相で強引に三人娘を恐怖で震え上がらせ屈服させる。

フォワードメンバーは理不尽であるが、確かな実力と頭の切れを携えたこの恐るべしネコ型ロボット、ドラえ・・・違う！

サムライ・ドラを目の当たりに唖然とした様子で見てとった。

「う・・・強引に泊まることを持ち込んだ・・・」

「恐るべし・・・」

と、ここでドラが宿泊するということを聞いて白鳥が言う。

「しかしお主。一体どの部屋を使う気であるか？」

「俺の部屋には来るなよ！なんか俺の何かが閉塞的になりそうだ！」

鬼太郎が完全拒否の姿勢を見せると、意外にもドラは次のように言う。

「心配しなくても、ナーノが泊めてくれるそうなんだ！」

「はい♪ドラさんとこうして話すのって久しぶりだし、普段は出来ないような現実トークでもして一夜を過ごそうと思って」

「現実トークってなんだよ！？お前らの性根は一体どういう風になってるんだ！」

またしてもツッコまない訳には居られなくなる恋次と、苦笑するユーノに親指を突き立ててくるドラ。

「ユーノさん。こんな変な野郎ですが、いっちょ今夜はよろしくお願いします！」

「あはは・・・はい。僕の方こそ息子をよろしく」

なんか色んなことにメンドさくなりかけていたユーノだった。

◇

〈カザリＳｉｄｅ〉

一方、ユーノ達に新たな力を見せつけ、謎の甲殻類グリードを連れ帰ったカザリは、何処か戸惑った様子の甲殻類グリード。

カザリはそんな甲殻類ヤミーに笑みを浮かべる。

「フフ」

そして、徐に怪人の姿から人間の姿へと変わり、甲殻類グリードは声を漏らす。

「あっ」

「やってみなよ。こうしとかないとうるさいから」

カザリの勧めを聞き、甲殻類グリードは夜の街を歩いて行く人混みの雑踏を見つめ、そこでちょうどいい素体の人間を発見する。

「あ」

甲殻類グリードが目を付けたのは、中学生あたりのハードメタル系な格好をした少年だった。

甲殻類グリードは早速、その人間を素体としてカザリ同様人間体の姿となった。

上手く甲殻類グリードが人間の姿へと変わると、カザリは笑みを浮かべて言って来た。

「いい子だね。君がいればきっとユーノ・スクライアとユーノス・スレイアを倒せそうだ。君だって欲しいんだろ。自分のコアメダル

と仲間が」

「仲間・・・コア・・・僕の・・・」

「フフ。」

◇

〈なのはＳｉｄｅ〉

ドラが宿泊することが決まったその日の夜。

なのはは些かの不安を抱きつつ、一人訓練場の方で明日の早朝訓練のメニューを作るため準備を進めていた。

なのはが真剣な表情でメニューを打ちこんでいると、それを見かけたドラが徐に近づいて声をかけて来た。

「こんな夜遅くまで、随分と御熱心な事だな」

「あ。ドラさん」

ドラが近づいてきたことに一瞬驚くなのはだが、ドラが直ぐにこう言って来た。

「今日の戦闘データでも、分析してる訳？」

「それもありますけど、スバル達とか他の部隊の教導のスケジュールも組んでいるんです」

「よくやるね、そこまで・・・」

「戦技教導が私の仕事ですから」

「ま、それもそうだ。」

そう言うと、ドラはなのはの隣に立って星空を見上げ、なのはは徐に尋ねる。

「ナーノは一緒じゃないんですか？」

「今はバスタイム。なんかユーノさんの背中流すんだって張り切ってた」

「はぁ。あ、でもだったらドラさんも一緒に入ればよかったんじゃないですか？」

「野暮なことはしたくないんだ。親子水入らずの時間に他人は干渉しちゃいかん」

「そうですかね。ユーノ君やナーノなら気にしないと思うんですけど」

「オイラが気にするんだよ。それに、オイラ自身も今はこうして一人になりたかったんだ」

「――――――」

口を籠らせたなのはを一瞥したドラは、星空を見上げると更に語り始める。

「いつの時代でも、星って言うのは何処も同じなんだな」

「そうですね。」

ドラに相槌を打った後、なのはは一瞬迷った末にドラに前々から尋ねようと思っていた彼の出生とそれに関わることを聞いてきた。

「あの。前に茜ちゃんから聞いた話なんですが、ドラさんは元々が三毛猫で、ある人との出逢いが自分を変えてくれて・・・だけどその人が死んじゃって一人ぼっちになって・・・鋼鉄の絆のみんなと会うまでの間・・・切ないって思ったことあるんですか？」

「ん？」

予想だにしていなかったなのはの質問に一瞬キョトンとした顔を浮かべるドラを見て、なのはは慌てて取り繕ったように言って来た。

「あ、いや！変なこと聞いちゃったら謝ります！プライバシーも気にせず何言ってるんだろうな私！」

すると、ドラはなのはの顔を伺ってから星空の方へと顔を向け、いたって平静とした態度で答えた。

「別に気にしてないよ。確かに、幸吉郎たちと会うまでの間・・・オイラはずっとひとりだったな。だけどそんなの野生の世界じゃ当たり前の事だし、何より猫は群れをつくらない。どいつもこいつも一匹の狼の裏切り者で、都合が悪くなると直ぐに逃げ出して・・・性根から言えばオイラもそうだよ」

「私はそんな風には思えないんですけど」

「どう見ようが人の勝手だからね。いいんじゃないのそれはそれで。」

「にゃはは・・・なんかドラさんの言う事って哲学的というか何と言うか・・・」

「お前の歳不相応な9歳の言動に比べれば、オイラのなんか自然だって」

「う・・・」

まぁ、そう言われても仕方ない。

なのはを始め、フェイトやはやても年に似合わず大人な発言をすることが多かった。

恐らくは家庭環境が複雑だったり、元々頭の出来がよかったりなどと色々と要因はあると思うが、結果的に行きつくのは多分家庭なのだろうと、重要大事は推測する。

なんせ作者が9歳の頃と言ったら、普通に幼稚な言動を周囲にさも当たり前のように言いふらし、その辺の虫などの命を見境なく気に入らなければ潰していたのだから。

そうして、歳不相応な言動を口にしていた少女は今や大人の女性へと成長し、こうして故郷を離れて遠い異世界で職業魔導師をしているのだが、なのはは暫くの前を置いたのち、もう一つ、どうしても気になった事を尋ねた。

「あの・・・もう一つ聞いてもいいですか？」

「何だ？」

「ドラさんは・・・――――どうしてＴＢＴって職に就いたんです？同じ世界を守る職種の人間として、ちょっと気になって」

それを訊くと、ドラは渇いた声ではっきりと言う。

「――――別に。給料がよかったから。それだけ」

「え・・・本当にそれだけ？」

ドラから返ってきたあまりに現実的で夢も理想も何ひとつ伺えない回答に一瞬の戸惑いを見せるなのはに、現実主義者のドラは独白する。

「ああ。それ以外にオイラがあんな組織に与する理由は無いよ。大体オイラは野生の猫だったんだぞ。なのになんで誰かの命令で動くような場所で生きなきゃならない？そいつは一重に人間社会に順応し、一日を喰っていくためには食い扶持の良い職に就くのが手っ取り早かったからだ。なのは達のように、純真な理想なんぞ最初（はな）から持ち合わせちゃいないんだよ・・・」

「ドラさん・・・――――」

「ただこれだけは言っておく。当初の目的こそはそれにあったかもしれないが、もう一つ理由があるとすれば、今の自分の時間を失いたくないからかもしれない」

「今の・・・？」

「幸吉郎がいて、R君がいて、写ノ神や茜ちゃん、龍樹さんや壌・・・大馬鹿な長官がいるあの空間が凄く愛おしいんだ。本当に心地いいんだ。多分それは、こっちのユーノさんも同じだと思うよ」

「！」

ユーノの名前が出されると、なのはは無意識のうちに反応し、なのはの事を伺いながらドラはユーノが自身の欲望を失ったことに関して語り出す。

「聞いてるよ。ユーノさんの事――――――アフリカの内戦に巻き込まれて、それで欲望を失くしたんだって――――――キツかっただろうね。苦しかっただろうね。」

ユーノの事をまるで身内の様に心の底から心配する異世界の友人、ドラ。

なのははドラの口から語られる今でも自分の胸に突き刺さるユーノの悲しき過去の出来事を考えると、思わずレイジングハートとロケットを一緒に握りしめ、声を押し殺すように言い始める。

「ユーノ君は・・・・・ユーノ君はこのままどうなるんでしょう。ただそこにやらなきゃならないことがあって、縛りつけられた奴隷のように・・・ずっとずっと・・・苦しむ以外にないんでしょうか。どうすればユーノ君の心を縛り付けてる頑丈な鎖を解き放つことが出来るんでしょうか・・・／／／過去の記憶に憑りつかれ、未来に夢を抱くことを禁じられて・・・一体ユーノ君はそんな前も後ろも

ない場所で何がしたいって言うんですか！？」

自然となのはの瞳に涙が灯り、それがところどころで地面に落ちていく様をドラは伺ないながら、そん返答として次のように言って来た。

「――――前も後ろもない場所。そうかもしれないけど、なのはがそう言う価値観で悲観的に捕えるなら、オイラは寧ろ救いを見据えて楽観的に捕えるけど」

「え！」

聞き違えではないかとさえ思ったなのはであったが、ドラは徐に顔を綻ばせると意味深な言葉を残す。

「大丈夫だよ。ユーノさんは――――――――だってあの人はちゃんと“空（うえ）を向いて生きてる”るんだ。」

「上を向いて？」

「“うえ”って言うのは“上”じゃなくて“空”って書いて空（うえ）。オイラの口癖なんだ。なのは達からすれば、今のユーノさんは欲望も何もかも失くして、どっちに行ったらいいか分からなくなってると思いがちだけど、過去も未来も切り離してユーノさんは厳然たる“いま”を生きてるんだ。『いま』という一瞬一瞬の中で、あの人はちゃんと前を見て歩いてる。時間は流れるだけが全てじゃない。その人にとっての一瞬一瞬が、絶対値を含んだ価値あるものだ、とオイラは思ってる」

「いま・・・時間・・・」

「それから、オイラの主観であれなんだけど――――――ユーノさん、きっとなのは達が思ってる以上に貪欲だよ。お前なんかのそれとは比べ物にならないぐらい」

「ユーノ君が・・・・・・」

「で、あの人が欲しかったものって言うのは、気づいてないだけで本当は随分前から手に入れてるんだよ。」

「え！何なんですか、それって！？ユーノ君は何を欲して・・・！」

なのはは血相を変えてドラにそれを聞き出そうとするが、ドラはほくそ笑むとなのはの前から立ち去って行き、背中越しに言って来た。

「それは自分で考えな。オイラがここで言ったところで、何の意味もない。それでユーノさん自身の解決法になるとも思えないし」

そう言って、ドラは寮へとつづく道をまっすぐに歩いて行き、なのはは彼の後姿をじっと見つめる。

「ドラさん・・・・・・」

ドラは一体ユーノの何処までを理解しているのかは定かではないが、少なくとも同じ両親の愛情を受けず、仲間や絆を重んじる彼もまたユーノと似た者同士だったのだろう。

◇

〈リリスＳｉｄｅ〉

同じころ、破面魔導虚のリリスはカザリ達のユーノ達だけでなく、高い確率で今後の脅威になりかねないカザリと、それと同行する甲殻類グリード、そのヤミーであるサソリヤミーを監視していた。

「同族・・・俺の・・・同族・・・」

リリスが暗闇の中目を光らせると、甲殻類グリードが自らの欲望によってつくりだし、寄生主を失ったサソリヤミーは自我を失い声を張り上げる。

「オオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「あらあら。またなんか変なのが出て来たものだわね。（ドクターの言ってた失われた三種のコアメダルの一つ・・・甲殻類系のコアをもとに作られたヤミー。その欲望は“同族増殖”・・・・・・それってつまり、グリードの思想に影響してるって事よね。）」

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」

リリスは逐一スカリエッティの元にこの事を報告する中、今回現れた甲殻類系のグリードと、自分達虚が抱える満たされない渇きについて考えた。

「でもいくら欲しても、それを満たされる喜びを味わえないってのは私達虚となんら変わりないじゃないの。ほんと・・・グリードも虚もこれだから嫌になるのよ。あら？なんか人間みたいな事言ってるわね、私」

思わずそう呟くリリスであったが、そんなリリスを陰ながら見守る

彼女とは対を成す存在である破面魔導虚アスモデウスは無表情を浮かべ、心の中で口にした。

「（リリス。どうやらお前は俺には無いモノを持っている。俺はそんなお前が愚かしくも見える反面・・・何故だかとても羨ましい。）」

次の日の朝。

早朝からカザリを呼びつけたカリは、車の中でカザリにあるものを手渡した。

それは一般的なものが誰でも所持している携帯電話で、訝しげな表情でそれを受け取ったカザリは真顔のカリにこう言われた。

「暫く財団へは近づかないで下さい。」

「？」

「人の出入りが多くなりましてね。グリードの君がいるとマズいんです」

それを訊くと、カザリは昨日カリの元を訪れていたある女性の事を思い出し、徐に聞き返した。

「ああ。あんたのところの変態科学者が甦らせた・・・・・・リニス、だっけ？」

カリはその名を聞くと険しい表情を浮かべる。

で、スカリエッティがカリのお目付け役としてわざわざアルハードから派遣させたプレシアの使い魔、リニスは何をしているのかと言えば――――

「ふふ。ようし、出来た♪」

カリの留守を見計らって殺風景だった会長室を自分の趣味に合わせて模様替えをし、雰囲気を一変させる。

不安一色のカリであったが、そんな折車の窓ガラスに唐突にカラスの糞が落ちてくる。

神経質なカリはそれを見ると、直ぐにワイパーを作動させ水で洗いながらしながら拭き取り、その傍らこんな事を呟いた。

「！！私なら・・・黄泉の淵から死んだものを生き返らせることも、終わった人生をやり直すなどと言う事などもさせませんが・・・少しはドクタースカリエッティから怪しまれないよう芝居をしなければ・・・・・・しかし全く以てナンセンスですよ。私から言わせれば」

「ふ～ん」

「直に破面魔導虚も整えられ、リニス君の方も君たちの邪魔をするかもしれませんが・・・私には止められません」

それを聞くと、カザリはカリの車から降りて不敵に笑いかける。

「いいけど・・・倒しちゃうよ」

「また作るでしょう。ドクタースカリエッティが」

「フフ」

カザリは用事を済ませると、カリの前から立ち去って行く。

と、カザリがいなくなった直後、カリの頭上からまたしてもカラスの糞が落ちてくる。

カリは真顔を浮かべながら自分の顔に着いたカラスの糞を手に取り仰天する。

「！！」

だが、横を振り向いた時、カリの肩に乗っていた人形の頭にも糞がついており、カリにとってはこれほどまでの一大事はなかった。

「ふあ！！！！！！！」

ミスターカリ、早朝の悲劇であった。

◇

〈ドラＳｉｄｅ〉

神経質なカリが大変な目に合っている間、こちらもまた大変な目に合っていた。

機動六課の早朝訓練。

そこにあの猫が姿を現し、教導官であるはずのなのははジャージに着替えさせられユーノの横で涙を流していた。

唖然とする一同を代表して、スバルは苦笑しながら不気味な笑みのドラに尋ねる。

「あ・・・えっと・・・これはどういう事ですかね・・・」

「ひひひ。折角早朝練習に参加するんだ。今日はオイラがこの軟弱に変わって、みんなをビシビシ鍛えようと思ってる！」

「う～～～／／／」

なのはは事前にドラに脅されており、おまけに本日の訓練メニューを全てドラにダメ出しをされ、強制的にドラが書き換えてしまったのだ。

辛い様子のなのはの気持ちを熟知した上で、同じくジャージ姿のユーノは優しく問いかける。

「なのは。大丈夫？」

「大丈夫じゃないよ／／／せっかく昨日の夜考えた私のスケジュールと訓練メニューが全部却下されるなんて・・・理不尽なイジメ・・・／／／」

「イジメなもんか。大体そっちこそあの訓練メニューはなんだ？自分の事殆どプログラムに入ってないじゃないか？しかも体力づくりにしても、あれじゃ緩すぎるって」

「ドラさんの言う通りだよ。あんなの僕だってやってるだけで欠伸が出るよ」

ドラに便乗してナーノまでもがそう言うと、フォワード陣やヴィータ、更には恋次達は顔を引きつってしまう。

「あんたね・・・私達でさえ結構息上がるハードトレーニングを、欠伸が出るって・・・」

「修行の相手がこいつらじゃ、欠伸が出てもおかしくねぇんじゃねぇのか？」

「それじゃなんですか・・・僕とナーノは魔王を通り越して怪物ですか？」

と、ここでドラが全員に号令をかける。

「はいはい。お話はこれぐらいにして、都合よくお話は進めることにしよう。今日の訓練はなのはの訓練にオイラが大幅に加筆修正を加えた体力中心のトレーニングに設定したから、全員デバイスは預けて」

「デバイス使わないんですか？」

「うむ。使うのは己の肉体と忍耐力。勿論この戦技教官にも魔法なしで参加してもらうけど」

それを聞くと、根っからの運動嫌いで重要大事の小説の設定では魔法なしでの運動は大の苦手となっているなのはは慌ててドラに言ってくる。

「ちょ！待ってくださいドラさん！！私は・・・！！」

だが、ドラはそんななのはの要求など絶対に許さなかった。

「やるよな・・・な！」

魔王をも屈服させるサムライ・ドラ稀少スキル「魔猫の形相」は何ものをも恐怖で震え上がらせ、当然のことながらなのはは涙を流して肯定の返事をするばかり。

「は・・・はい／／／／／／」

「恐ろしい・・・この形相・・・／／／」

隣に立っていたフェイトもまた、自然とドラの形相に恐怖を感じる。

「最初のトレーニングは基礎体力を十分につけるために持久走をする。時間はオイラの気分次第だから、何時間でも走らせる。魔法なんかいざって時に役に立たないからな。最終的に頼れるのは己の体力だけだってことを、この甘ちゃんに思い知ってもらう必要がある。」

「う・・・これ完全に私をイジメたいだけだよね！？」

なのはがドラに涙ながらに顔を向けると、教導仲間のヴィータやスバルはなのはの肩を持って激励する。

「偶にはいいじゃねぇか。それに原作じゃ、割と走り込みしても息切れ一つしてなかっただろ？」

「そうですよなのはさん。Ｖｉｖｉｄの時のハードトレーニング、息一つ上げてなかったじゃないですか！」

が、それを真っ向から否定するのは都築嫌いな作者が創り出したドラの発言。

「それは都築がそう言う風に描いてるからだよ。本当はこいつセコイ事に自分の魔力で息が上がらないよう誤魔化してただけで、実際は隠れてゼーハーゼーハーしてたに決まってる」

なのはは都築でさえ書こうとしなかったファンを幻滅させかねない禁断の描写をドラが知っていたことに心底驚く。

「な！何故そこまでの事を・・・あ！」

なのはは口を滑らせてしまった。

慌てて口を塞ごうとするも、既にスバル達の耳にはしっかりと入っており、些か哀れむかのような表情でなのはを見つめてくると、なのはは冷や汗をかき、またユーノとナーノがなのはの肩に手を当ててくる。

「なのは・・・」

「インチキはダメだよ、教導官」

なのはは恥ずかしさのあまり顔を沸騰させる。

「う～～～！！！だってだって～～～普通に走り込みしても私直ぐ

ばてちゃうんだよもん～～～！！」

赤面し、パニくったなのはを見て苦笑するスバル達は、そんななのはを掌でもてあそぶサムライ・ドラのずば抜けた洞察力に愕然とした。

「鋭いどいよねドラさんって・・・」

「と言うより何故そこまでして都築に対して批判的なのだ？」

「作者がそうだからだろ・・・」

まぁ、重要大事の都築嫌いは別として、ついに始まってしまったサムライ・ドラの地獄のハードトレーニング・体力作り篇。

持久走と題して、訓練場を走り続けるなのは達であったが、既に開始から2時間を迎えようとしているにも関わらず、ドラは一向に止める気配を見せず只管に走り続ける。

既にユーノやナーノ、恋次達以外の前線メンバーは限界に達してきており、強制的に魔力を使うことを禁じられたなのはに至っては虫の息に近い状態で息を上げていた。

「は、は、は、は、は」

一緒になってなのはの隣で全く息を上げずに走っていたバカみたいな体力のユーノが声をかける。

「なのは。かなり息上がってるけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫・・・じゃない・・・！」

そんななのはと一週早く先頭を走っていた、やはり息を上げていないドラとナーノはため息をついてこう言う。

「相変わらずの無体力だな。それでよく陸士訓練校を卒業出来たね。あそこって普通に腕立て伏せやら背筋がある筈だろ？」

すると、この件に関してそのなのはの隣でなのはよりはマシだが疲労困憊のフェイトが陸士訓練校時代のなのはの事を語ってきた。

「その件に関してなんですが・・・なのははそれで随分と泣かされて事がるんですよね一時期・・・」

「ああ！！言わないでよフェイトちゃん！！！親友だと思ってたのに！！！」

なのはは赤面させると、親友であると自分の中では思っていたフェイトにこの時だけは純粋な怒りを覚える。

なのはは確かに魔法による戦闘は天才と呼べるべき素質のお陰で得意と自負しているが、一般的な運動は救いようのないほどのもので、基礎体力に至ってはフェイトよりも下。

訓練校に入りたての頃は、ちょっとミスをした際のペナルティがなのはにとっての命取りで、腕立て２０回だけで何十分も割いたと、当時のファーン・コラード第四陸士訓練校学長が口にしていた。

これを訊くと、普段から逆っぽい扱いをされている恋次が腹を抱えて大笑い。

「ははははは！！！情けねェな。そっちの訓練校がどれだけのものかは知らねぇが、死神の受ける戦闘訓練に比べれば屁でもねぇよ！俺なんか、十一番隊にいた時は腕立て・背筋・腹筋とそれぞれ１万回やらされたもんだ」

「１万回も！！！」

驚かずにはいられなくなるなのはだが、それを聞いたユーノもまた恐ろしいことを言って来た。

「ああ。だったら僕も同じぐらい一護さん達に扱かれたよ。それに今だってそれぐらいの量は平気でやってるよ。何しろ完現術は生身で使うものだからね。バカみたいな体力がないとやっていけないんだよ」

人間の常識を逸脱した出鱈目な体力作りをしているユーノ達の話を聞いて開いた口が塞がらなくなる常識の範囲内にいるスバル達と、魔法では常識を逸しているがそれ以外ではいたって平凡なのはは言う。

「う～～～！！！みんなしてどうかしてるよ～～～！！！体力バカはみんなのほうだよ～～～！！！」

なのははこの時、都築の描く強い自分が全くこの小説では描かれていない事実に涙を流し、フェイトは同じように百合路線を排除している重要大事を恨んだそうな。

そして、さらに１時間を加えた計３時間の持久走は漸く終わりを迎え、なのはを始めフォワードメンバー全員とフェイト、そしてヴィ

ータは普段の自分達でも決してしないような途轍もない運動力にこの時点でのぼせあがっていた。

「「「「「「「「「は、は、は、は、は、は、は!」」」」」」」」」」

一方で、この手の運動をしても基本的に体のつくりが違っている恋次達死神や、元々の基礎体力があるユーノとスクライア商店メンバー、更には息子のナーノは清々しい表情で汗を拭いていた。

「ふう～～～いい汗かいたぜ。」

「なんか久しぶりに体力使ったって感じだよね♪」

「うむ。なかなかにいいウォーミングアップになった」

「これで!!私達もう限界なんですけど・・・!」

「私も・・・体力には自信あるんですが・・・流石にちょっと・・・」

「限界値を突破してると言うか・・・」

災害救助などで現場に出ることが多いスバルや、育ち盛りなエリオもこれには腕から足までもが軋む一方だった。

すると、簡単に息を上げるなのは達を見たドラは呆れた様子でユーノ達を指さし言ってくる。

「なんだなんだ。情けないぞ魔導師組。死神組はケロッとしてるぞ。それにユーノさんとナーノなんか、息一つ上げてないじゃないか?」

ドラがそう言うと、ナーノはスポーツドリンクを飲みながら横で苦笑するユーノと次のように言う。

「あれくらいのランニングでばてるなんて、やっぱり日ごろの訓練が温かったんですよ」

「まぁ一護さん達との修行に比べれば」

その二人の発言とケロッとした様子を見て、なのは達は絶句しかねる。

「ホントに・・・親子そろってどういう体の構造してるの・・・？」

すると、ここでフェイトがユーノの体力に関して邪推を口にした。

「そっか！ユーノは淫獣だから、なのはに夜這いをかけるための体力が・・・！！！」

それを聞いた瞬間、ユーノ・ナーノ、そしてドラの三人はフェイトの顔面に強烈な拳を叩きこむ。

「「「どういう虚妄を膨らませてるんだ百合女！！」」」

「ぐあああああ！」

結局のところ、この小説におけるフェイト・T・ハラオウンは一生重要大事の前ではいい役など貰えず、クロノ同様ユーノを引き立てるための駒とされるのがオチだった。

「ささささ。まだまだ続くぞ。次は腕立て伏せ１００回を５セットだ」

ドラのハードトレーニングはこれでもかとばかりに前線メンバーに追い打ちをかける。

特に、腕立て伏せを始めこのような基礎トレーニングが大嫌いで大の苦手ななのはにとっては、まさしく生き地獄であり、他のメンバーがとっくに終わらせた中、ただ一人残りの数を全うするためやり続けていた。

「ひゃ・・・ひゃ・・・ひゃ・・・」

「頑張ってください！」

「ファイトです、なのはさん♪」

邪な気持ちを抱かず純粋になのはを応援するスバル達や、悪意に満ちた笑みで彼女を伺う恋次や鬼太郎、そしてなのはの恋人のユーノと息子のナーノに見守られる中、なのははついに百回目のコールを口にした。

「ひゃ～～～・・・・・・く！！！」

顔中から流れ落ちる滝のような汗に塗れたなのはは、まるで子供が駄々をこねる時の様にひっくり返り、周りの視線を気にせず自分の気持ちを口にする。

「無理！！も――――ムリ！！もうやりたくなーい！！」

と、このなのはの発言を聞いてある意味最強なネコであるドラが真

顔を向けて来た。

「何だよ。もうギブアップか？不屈のエースオブエースなんだろ？」

「もうギブアップもないですよ！！腕立て１００回を何セットやらせるつもりですか！？」

「アホか。まだ2セット目だ。お前だけが周回遅れで終わってないんだよ」

「2セット目！？うそだ！！絶対ウソです！！これ以上やったら明日の教導が出来ないじゃないですか！？」

狼狽し焦りを感じるなのは。

それを見たナーノはドラの横に立つと、同じく真顔で言って来た。

「2セットぐらいでギャーギャー騒がないの、お母さん。僕なんか未来で、ナーノって名前にちなんでお父さんに腕立て１００回を７９セットもやらされたんだから」

「何それ！！そんなことしたら腕が？げちゃうよ！」

ナーノの話に信憑性を抱かないなのはだが、ユーノはその横でこうも言ってくる。

「そんなことないよ。僕なんかこの７５キロの羽織りつけた状態で、１２時間ずっとやらされた記憶あるけど」

「それも絶対おかしい！！ユーノ君もナーノもなんなの！？私だけ

が変なの!?それとも二人が超越してるの!?」

「明らかに後者だろうが」

呆れながらに鬼太郎がそう言うと、先に腕立てを終わらせていたティアナは顔を引きつり、一方のマリアは妙に嬉しそうな様子でユーノの隣に立ち、意図的に近づく。

「あはは・・・こんななのはさん、見るの初めてかも・・・」

「神は二物を当てないって言うのは、本当だったみたいですわね♪」

「なんか小鳥遊さんがユーノ君の隣で笑ってるのがすごくムカつくんだけど!!!」

なのはが本性をむき出しにしてマリアを叱咤すると、すかさず今度はドラの叱咤が飛んでくる。

「ぶつくさ言ってないでさっさとやれ!不完全女!!」

「ああ~ん!!!なのはさん完全神話を壊すような発言は止して下さい!!」

結局のところ、なのははドラの前だと本来の力が全く出せなくなってしまうのだ。

強制的に鬼教官と化したドラに厳しく指導されながら、なのはは残りの３００回を涙ながらにやり始める。

ユーノはユーノスを肩に乗せると、そのユーノスが耳元で言って来

た。

「いいのか、このままで？」

「なのはにはいい薬かもしれませんね♪そっと見守りましょう」

やれやれ・・・なのはにとって、今日ほど厄日は無いのかもしれないな――

◇

〈カリＳｉｄｅ〉

なのはにとっては厄日なこの日に於いて、この男・・・ミスターカリことカリ・ユガにとっても今日は相当な厄日であった。

大切な人形に鳥の糞を落とされ、急いで汚れをふき取り挙動不審な様子で持ち帰ってきたカリだったが、会長室の扉を開けた途端、違う意味で仰天する。

「！」

彼の目の前に広がってきたのは、留守中にリニスによって模様替えされた女性の趣向が取り入れられた暖かい空間であった。

で、部屋の中には勿論リニスがおり、彼女は持ち込んだ道具と材料を使ってカリの為にハッシュドビーフを作って帰りを待っていたのだ。

「あら、ミスターカリ。お帰りなさいませ。ちょうど食事の用意が

出来ましたので、一緒にどうでしょう？」

カリはリニスの顔を見ないように自分の机に戻ると、人形の服が収められている小さなクローゼットを開いて服を選びだす。

「リニス君・・・・・ここは会長室ですよ・・・／／／」

「ええ。存じておりますよ。ところで大変申し訳ありませんが、この部屋はどうも殺風景なものでしたので、勝手ながらちょっと模様替えをさせていただきました。あと、これも余計なお世話かもしれませんが、ミスターカリはちゃんと栄養のあるものを食べないと身体が持ちませんよ。それと、私今日からアリシアの教育係と掛け持ちでここに勤めることになりました」

「！そ、そうですか・・・」

カリはこの突然の報告に驚きながら、人形の服を着せ変えようとし、リニスはそんなカリに更にこんな事を聞いてきた。

「あの・・・大変厚かましいことを申し上げますが、御給料日はいつに？いえ催促しているわけではないのですが、この部屋の模様替えをした代金ぐらいは」

「・・・うちの財団は基本的に自給１０００円で、秘書ともなればさらにその2倍から3倍の額となります。月末には財団に・・・・・・」

飽く迄もリニスには顔を向けず人形に向かって話しかけるカリであったが、それを見ていたリニスは教育係の立場上、改善しようとカリの顔に手を当てる。

「人と話すときはこっちを見ましょう。ね？」

「月末に財団の方から・・・！」

「話はこっちを見ましょう！こっちを見てください！」

「放しなさい！放しなさい！」

二人は互いに一歩も譲らず口論を続けるが、不意にリニスがカリの人形に興味を持った。

「あ、そうだ。この人形前々から気になってるんですかどうしてこんなに怖いんでしょうか？」

リニスが人形に手を触れてくると、カリは声色を変えて拒絶反応を見せる。

「や～～～め～～～ろ～～～！！は～～～な～～～せ～～～～！！！」

「ちょっとぐらいいいじゃないです・・・」

人形が二人の手の中で激しく揺れ動くと、そのうちに人形が手の中より飛び出し人形が円を抱きながらある場所へと飛んでいく。

「あ～～～！！！」

カリが表情を一変させ目を向けると、人形はリニスが作ったハッシュドビーフの中へと豪快にダイブする。

あまりの衝撃にカリは絶望の叫びをあげる。

「ノオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！」

カリは沈んでいく人形を取り出そうと取り乱した様子でおたまを持ち、リニスは呆然としながらも人形よか、ハッシュドビーフの心配をする。

「あ～～～もったいない。今出しますから」

「止めろ！！！！」

リニスの手を払って完全拒否の姿勢を見せる中、リニスがカリの机の上に乗せていたカンドロイドが起動すると、カリお手製の人形の服と言う服がハッシュドビーフの中へと放り投げられる。

「あああああああああああ！！！！！」

カリはまたしても柄にもない声を張り上げ、リニスは時間を確認するとあっさりとした様子で言って来た。

「あら？もうこんな時間ですか。では、私はアリシアの講義の時間ですので、この辺で。ちゃんと食べてくださいよ」

悪びれる様子もなくリニスはカリにそう告げると、アリシアの元へと戻って行った。

「う／／／／／」

傍目から見れば、今回のカリは完全なる被害者であった。

◇

〈ドラＳｉｄｅ〉

さて、機動六課の方で地獄の特訓を受けていたなのはの方はどうなったのかと言えば――

「よ――――――し！５セット目終了！」

およそ腕立てだけにかかった時間は２時間と３８分。

なのはは全身汗まみれになると、スターライトを使ったわけでもないのに体力を使い切ってしまい、声を上げる事さえままなら位ほどにまで追い詰め地面に突っ伏した。

「は――――っ・・・・・・・は――――っ・・・・・・・は――――っ・・・・・」

このなのはを見て、唯一彼女を不完全女と豪語した鬼教官ドラは徐に口にする。

「何だ？静かだな。文句とは言わないのか？じゃあ、お前だけ特別にもう１セットやっとくか？」

「・・・・・・・・・・・・・・」

なのはは言い返す為の気力さえなかった。

傍らでなのはがへばる様子を窺っていたヴィータは顔引きつりなが

ら、あれだけのトレーニングをやりながら平然と立ち尽くし、更にはなのはを牛耳るドラにユーノ以来の根源的な恐怖を肌に感じる。

「こ・・・言葉すら話せないほどなのはを疲労困憊に追い詰めるとは、こいつ顔に似合わず相当やべーぜ・・・／／／」

「ああ。かなりのやり手だな」

他のメンバーも同様の事を抱く中、愛弟子のスバルは心配になって倒れるなのはに近づく。

「なのはさん・・・大丈夫ですか？」

「・・・・・・・・・ムリ」

力失く答えるなのはの言葉を聞き、誰もが苦笑いとなった。

「これでは、当分の間戦闘訓練はおろか立つ事も出来んな？」

「どうしましょうか？」

すると、ここでユーノがこんな提案をする。

「だったら、ドラさんがやればいいんじゃないですか？」

「オイラが？」

「結構面白そうな訓練になると思いますよ。ドラさん自身も、スキルアップの為に」

「う～～ん・・・ユーノさんがそこまで言うんならやってもいいですかね。わかった！じゃあ、オイラが代わりに相手になってやるよ。誰かやりたい人は？」

そう言うと、真っ先に立候補してきたのはシグナムだった。

「私がやろう！」

レバンティンを携え、闘志を燃やすシグナムだったが、ドラは敢えてそれを無視して次に立候補してきたスバルの方へと歩み寄る。

「よし。じゃあスバルと白鳥さん。それに吉良イヅルの三人で最初に相手をするよ」

「私を無視するな！！！」

「「・・・」」

完全無視の態度をとるドラに怒りを露わにするシグナムと、そんなシグナムを呆然と見つめるヴィータとアギト。

そして、訓練場の設置が完了すると、ついに始まるスバル・吉良・白鳥Ｖｓサムライ・ドラによる壮絶な模擬戦闘。

「ぬおおおりゃあああああ！！！」

スバルはウィングロードを突き進み、足の裏に仕掛けられたジェットエンジンで空中を浮遊するドラに向かって突進すると、戦闘機人としての自分の固有スキルである振動拳をお見舞いする。

「振・動・拳！！！」

電子部品などに絶大な威力をほこり、エクシード状態のなのはの防御をも破壊した振動拳が向けられると、ドラはそれに対抗するために剣技を発動。

「圧振閃！！」

ドラの渾身の一撃が振動拳と衝突すると、スバルとドラの技が互いに威力を掻き消し、振動拳は唯の拳打へとなり下がる。

「な！」

思わず目を疑うスバルに対して、ドラは笑みを浮かべてがら空きとなっているスバルの腹部に強烈な足蹴りを食らわせる。

「ぐっは！」

スバルはウィングロードから落ちていくと、それを見た吉良が吊星で受け止め、侘助片手にドラへと接近。

「侘助！」

ドラは吉良の斬撃をもう片方の手から抜いた腰の鞘で受け止め、吉良に顔を近づけ不敵な笑みを浮かべ、吉良自身も苦い顔となる。

「ぐ！」

すると、そのドラの背後から隙を伺った白鳥が琴線斬で仕掛ける。

「琴線・・・！」

しかし、その直後ドラは両足のジェットエンジンの推進力を上手いこと利用して、その状態から駒の要領で高速回転を始める。

「大回転・・・旋風斬！！」

竜巻の如く勢いで回り始めたドラ。

「「のあああ！」」

懐に飛び込んでいた吉良と白鳥はその回転技に圧倒されると、スバル同様吊星の中へと落下していく。

戦闘の様子を窺っていた前線メンバーは目を見開いてドラの確かな強さを焼き付ける。

「何あれ！？滅茶苦茶強い！」

「ただ戦闘力が高いんじゃない。読みの速さが尋常じゃないんだ。」

「おまけに、身体に似合わずすばしっこい上に、身体の何処を狙えば少ないアクションで昏倒させることが出来るかを熟知している・・・！」

「あの猫は本当に何者なんだ？」

同じ様に、ユーノやフェイトに看病されていた既に全身筋肉痛で動くこともままならなかったなのはもまた、唖然とした表情で先ほどの戦闘の様子を伺った。

「す・・・凄い」

「大したもんだな。ありゃ俺達も結構手こずるな」

「だけど砲撃とか鬼道を駆使すればなんとか・・・」

すると、ユーノはフェイトの疑問に対してユーノスと一緒にこう答える。

「いや。ドラさんはそんなもん眼中にないよ。何しろあの人はパラレルワールドとは言え、僕らの魔法を実際に体験し、その攻略法も知ってる。いかに強力な砲撃魔法があったとしても、それを躱されてしまえば全ては水の泡と消える。」

「ああ。だからこそ砲撃魔導師は、俺やユーノのような後方支援に特化した結界魔導師とペアを組むことで、その攻撃性能を最大に発揮できる。単身では隙だらけもいいところだ」

「成程。」

ユーノスのもっともな指摘を耳にすると、聞いていた他のメンバーも納得した様子でこう言って来た。

「だからなのはさんはユーノ先生と長年コンビを」

「いや。今のなのはのコンビはフェイトだから。僕はとっくに席を譲ってる」

「そ、そんなことないってユーノ。だってなのはは今でもユーノの

事背中を預けられる唯一のパートナーって言ってるんだよ。私からすればこの上もなく羨ましいよ」

と、フェイトが言うのに対してユーノは物寂しげな表情でこう返す。

「・・・僕はそんななのはと常に一緒いられた君の方がよほど羨ましかったけど」

「・・・！」

「ユーノ君・・・」

話しを聞いていたなのはとフェイトは互に悲しそうな顔を浮かべ、心のどこかでユーノの事を置き去りにしたことへの罪悪感が芽生える。

さて、その間にも模擬戦は続いており、ドラを追い詰めるために吉良が縛道を仕掛ける。

「縛道の三十『嘴突三閃』！」

吉良の放った嘴突三閃がドラの身体を捕え、ドラは壁に突き刺さる。

「お」

ドラはそれほど驚く様子もなく前を見ると、スバルが右手に魔力を凝縮させ、白鳥が琴線斬を構えて同時攻撃を行って来た。

「琴線斬『裂音』！」

「ディバイン・・・バスター！」

白鳥の裂音に乗ったスバルのディバインバスターがドラに向けられ、流石の二人もこれでは躱すことも出来ないと確信していると、ドラは全身の力を絞り上げると、右手に握った刀で壁を破壊する。

「ふん」

そうして、嘴突三閃の効果を打ち破り、向けられた二人の攻撃を自慢の愛刀で真っ二つに切り裂いた。

「どらあああああ！」

ものの見事に綺麗に切り裂かれた二人の魔法と死神の力。

「「え（な）！」」

当然、驚かずにはいられなくなるスバルと白鳥。

ドラはそんな二人や後ろで愕然とする吉良に刀を構えると、徐に低い声を発する。

「人侍剣力流・・・――――」

その瞬間、ドラが忽然と姿を消した。

「何！」

ドラが姿を消すと思わず目で追うとする三人だが、一瞬の気配を感じた吉良が何かを言おうとすると、スバル・白鳥・吉良の三人は一

瞬の間に吹き飛んでしまった。

「「「うわあああ」」」

ドラは吹き飛ばした三人に対して徐に刀を鞘に戻すと、技の名を口にする。

「刹那乱閃」

三人がこの技の威力に圧倒されると、戦闘を窺っていた前線メンバーは目を疑う。

「スバル！」

「おいマジかよ！？」

仰天する一同と、激闘の末にドラに打ち負かされた三人。

「いててて・・・」

ドラは打った箇所を押さえているスバルや吉良達に近づき破顔一笑。

「勝負ありだね」

「う・・・悔しいけど我々の完敗である」

「く。限定解除許可さえ出ればもう少し・・・」

「そうだね。もう少しけちょんけちょんにオイラを倒せたかもね」

ドラの戦いを見届け、ナーノは憧れの様な眼差しを向ける。

「やっぱり強いやドラさんは。僕でさえ一度も勝ったことないんだ」

「へぇ。未来でもその実力たるは健在か」

ユーノがそう言ったとき、事態が動き出す。

「「「！」」」

ユーノ達のヤミーセンサーに唐突に反応が起こる。

「これは・・・まさか！」

「ヤミー！」

「ユーノス元帥。」

「ああ。ようやく出て来たか。行くぞ」

ユーノは首肯し、自分の傍らで横に為っているなのはに声をかける。

「なのは。ちょっと行って来るね」

「う～～～～～うん・・・・・・・気を付けて・・・・・・・」

なのはは痛みのため、真面な会話すらも困難な状況であり、ユーノ達はそれを見て苦笑すると、バイクに跨りこう言い残す。

「なのはも、無理しないようにね。身体しっかり休めるんだよ」

そう言って、ユーノを含めドラや恋次達もまた何人かが出動し、ヤミー退治へと出かけた。

なのははシャマルやマリアの看病の元、涙目で筋肉痛の為に動けないでいる自分に情けなさと不甲斐なさを覚え、去りゆくユーノに手を伸ばす。

「う～～～～～ユーノ君／／／／／」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ユーノ達が出動して間もない頃、再び市内に出現したサソリヤミーは寄生主の人間を失ったことで完全なる暴走状態と化して只管に暴拳を繰り返す。

「グオオオオオ！！！」

「キャーーー！！」

「なんだありゃ！？」

サソリヤミーの暴拳に怯え、市民は逃げ惑う中、サソリヤミーはハサミから空気を切り裂く斬撃を飛ばしてビルなどを手当たり次第に破壊していく。

「同族！！同族！！！俺の！！！」

サソリヤミーはその言葉を連呼しながら、いたるとこに斬撃を飛ばし、更に暴走を加速させる。

と、ここで漸くユーノ達が逃げ惑う市民の中を掻い潜ってサソリヤミーの元へとたどり着く。

「いたぞ」

「寄生主がいなくなったらいなくなっただけでこれだ。一番始末の悪いことしてるよ。」

「兎に角、早く倒しましょう」

一同が武器を構えてサソリヤミーを見据えると、ユーノスはサソリヤミーが昨日の戦闘よりも大きさが増していることを指摘。

「気をつけろ。昨日見たよりもデカくなってる」

「確かに。ありゃまだ成長するんじゃない？」

「だったら、そうなる前にメダルに両替だ」

ユーノはそう言うと、結界印を手に取りナーノと共に変身。

「「変身」」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

変身を終えた二人は洞爺湖木刀とライジングハートの銃形態を携え、大きさを増したサソリヤミーの元へと向かっていく。

「「は！」」

二人が果敢に向かっていくと、一緒に駆けつけていたドラや他のメンバーも一様に武器をとって行動に移す。

「オイラ達も行くぞ！」

「はい」

ユーノ達が攻撃を始めると、恋次とルキアは斬魄刀を解放。

「蛇尾丸！！」

「袖白雪！」

二人の同時攻撃が直撃し、動きが怯んだところを吉良が補助デバイスで強化した侘助の斬撃を振り下す。

「十段斬り。くおおおお！」

十段斬りを受けたサソリヤミーはダメージ計算はされないものの、重さだけは一気に増加し、地面に沈み込む形で倒れ込む。

「ナイスです、吉良さん♪」

ユーノは吉良にそう言うと、ナーノと共に反撃に移る。

「へへーーん♪そら！」

ナーノは得意の中距離射撃で動けないサソリヤミーに苛烈な魔力弾の嵐を叩き込み、ユーノは懐に飛び込むと洞爺湖木刀で急所を狙う。

「銀さん木刀の一太刀、受けて見よ！」

渾身の一振りが綺麗に入り込むと、サソリヤミーは体を宙に浮かせて吹き飛んだ。

「まだまだ行くわよ！」

と、これで攻撃が中断するわけではなく、待機していたティアナ・エリオ・フェイト・キャロ・そしてドラが追い打ちをかける。

〈Ｂａｌｌｅｔ　ｓｈｏｏｔ〉

「サンダースピア！」

「「ファイア！」」

「敵を斬れ。ドラ佐ェ門」

ドラは四人の攻撃に続く形で、解放したドラ佐ェ門を満身創痍のサソリヤミーに向け、解放状態でのみ発動を許された奥義を仕掛ける。

「“神斬撃（しんきげき）”・・・これで終わりだ・・・！」

ドラはユーノの九頭龍閃に酷似した斬撃を一瞬のうちに的確に叩き込み、魂で刀身をコーティングした必殺の一撃によりサソリヤミー

の硬い殻を切り裂いた。

ユーノ達が技の威力に圧倒される中、一撃必殺とも言えるこの技を受けたサソリヤミーは体を地面に叩きつけられてから、それでも尚起き上がりついには暴走を果たす。

サソリヤミーは突然大声を上げると思いきや、中に蓄えられていたセルメダルを爆発的に燃焼させ、それを欲望のエネルギーへと変換させ、全身から気を放ち目の前のドラやユーノ達を後ずさりさせる。

「ぐあああ！」

「何！？」

「グオオオオオオオオ！！！！！！！！」

サソリヤミーは暴走した欲望のエネルギーによって、体格を大きく変貌させる。

そして、ユーノ達の前に姿を現す体長１２０ｍにも及ぶ巨大なハサミと毒のある尾を備えた正に化け物と呼ぶにふさわしいサソリの怪物。

一同はそれを見ると、思わず目を見開き硬直する。

「こいつ・・・欲望が暴走してやがる！？」

「何処にでもあるんだよな。こう言う巨大化設定って」

「言ってる場合か！」

「推定体長１２０ｍ・・・ってところか」

見ただけで正確な予想を付けてしまうユーノの空間把握能力は大したものだが、ドラはそれを聞いて更にサソリにとって最も特徴的な尾を凝視する。

「おまけに尾っぽの毒には要注意ですね」

「来るぞ」

ユーノスが眉間にしわを寄せてそう言うと、巨大化したサソリヤミーは尾を豪快に振り下して攻撃を始め、ユーノ達は一旦散開し様子を伺うと、尾から流れる毒によって突き刺さった場所から腐敗が始まる。

思わず息を飲むティアナやキャロ。

それに対してナーノは果敢にも攻撃を始める。

「『無限装弾神聖砲』！」

ナーノは威力を2割から3割に変更した無数のディバインバスターでサソリヤミーに集中砲撃を仕掛けるが、爆風が晴れた後に見えてきたのはほぼ無傷と言うべきサソリヤミーの姿だった。

「え！」

「あのナーノの攻撃を弾くなんて！？」

驚きを隠せなくなるユーノ達。

その後で、今度は恋次とフェイトが共に斬撃を叩きこむ。

「「はあああ！！」」

サソリヤミーは向けられてきた二人の斬撃をハサミで容易に受け止めてしまい、二人は一旦離れると険しい表情を浮かべる。

「蛇尾丸とバルディッシュのザンバーも効果なしだ」

「これじゃあこいつを・・・」

ユーノスは一度考えてから、ユーノに顔を合わせる

「やむを終えんか。ユーノ」

「ええ。下がっててみんな。僕が完現術コンボで」

ユーノはそう言って懐からアイテムを取り出そうとするが、直後、ユーノに対してドラが横から口を出してきた。

「ちょっと失礼」

「え？」

「その前に、オイラが少し時間稼ぎしてあげますよ」

「時間稼ぎって・・・何を？」

「この刀。ドラ佐ェ門には色々と特殊能力が備わっていまして・・・
曰くつきの妖刀ですが、長年連れ添って来た相棒には違いありませ
ん。ここはオイラとドラ佐ェ門があのサソリのバケモノに目にもの
見せてやりますよ」

「ドラさん・・・」

「おい・・・一体を何を!?」

「ひひ。じゃあ、とっておきの使うか!」

ドラの発言に訝しげな表情を浮かべ、戸惑いを見せるユーノ達を余
所に、ドラはサソリヤミーの前へと出てくると、全神経を愛刀であ
るドラ佐ェ門に集中させ、大声でこう叫ぶ。

「“覚醒(ブラストソウル)”!!」

すると、ドラの顔を模した鍔の意匠が突然光だし、更にはドラ自身
からも尋常ではないほどの霊圧の嵐が発生すると、傍で窺っていた
ユーノ達は思わず身構える。

「な・・・何だ・・・これは!」

と、その時恋次がドラの背後から浮かんでくる光景に目を向けた。

「おい・・・あれは!」

「え!」

恋次の言葉を聞いてドラの背後を伺った一同は、そこで信じられな

い光景を目の当たりにし、愕然とした様子で呟く。

「ば・・・バカな・・・」

なんと、ドラの背後からは山のような大きさをしたドラと容姿が酷似しているもう一人のドラ、即ち刀に宿っていたドラ佐ェ門の魂が具現化してきたのだ。

ドラは召喚したこの巨大なネコ侍の事をこう呼称した。

「『侍王ドラ佐ェ門』！！」

「「「「「「「「「「ええええええええええ！！！！！！！！！」」」」」」」」」」

ユーノ達が見当違いな能力を発揮してきたドラの力に誰しもがそのように叫ぶ中、ドラは侍王ドラ佐ェ門と動きを連動させて目の前で対峙していたサソリヤミーに刀を振り下す。

「オラアアアアア！！！」

ドラが刀を振り下すと、彼の動きに連動して背後の侍王ドラ佐ェ門が刀を振りおろし、サソリヤミーのハサミの片方を吹き飛ばす。

「ほらあああ！」

ドラは更にその状態から刀の方向を変えて、もう片方のハサミを切り下す。

「まだまだ！！！！」

そして、ドラはハサミを切り下した後で最も危険な部位であるサソリヤミーの尾を切断し、サソリヤミーは完全なる無防備状態と化す。

ユーノ達はこの豪快な戦いを披露するドラの圧倒的な見せ物に開いた口が塞がらない。

「なになになに!?あれなんなの!?」

「僕も知らないよ!ナーノは見たことないの!?」

「いや・・・!全然!まったくありません!!」

すると、ここでサソリヤミーを豪快な一撃で一気に追いつめたドラがユーノに止めを促してきた。

「ユーノさん、今です!」

「あ、了解!」

ユーノはドラの言葉を聞くと、懐から一護から授かった月形を取出し、先日のカニヤミーとの戦いで手に入れたばかりの第六の完現術コンボを発動する。

「一護さん。僕に力を!」

〈Ｂｌａｃｋ　ｍｏｏｎ　ｒｉｓｉｎｇ〉

「オオオオオオオオオオ!!!」

月形に宿る魂を極限まで引き出した瞬間、ユーノの周りを赤みがかった黒い霊圧が多い隠し、その中より出てきた斬月を手に取り漆黒の衣服に身を包んだユーノ。

恋次達はこの時のユーノの姿に見入られた。

「ユーノ！」

「一護の完現術コンボか！？」

「行くぜ・・・」

ユーノは一護の様に眉間にしわを寄せて低い声でそう言うと、その場に十字を描くように斬月を動かしていき、その場に黒に染まった霊圧の塊を作り出す。

〈ｋｏｋｕｇｅｔｕｔｏｕｋａ〉

「黯月――――――刀架」

ユーノは狙いを定めると、十字に固まった黒い霊圧をサソリヤミーに飛ばすと、サソリヤミーはそれに直撃し、十字架に貼り付けられるようにして廃棄区画都市のビルへと激突し、爆発を伴い大量のセルメダルとなって飛散した。

圧倒的な破壊力を秘めた一護の完現術コンボを目の当たりにした恋次達はドラの時同様、開いた口が塞がらず、率直な感想を述べるだけであった。

「う・・・おおお・・・凄い」

「お見事・・・」

ナーノは飛散したセルメダルを収拾するために、急いでその場から駆け出して行き、メダルタンクの中へと吸収する。

「ふう。こりゃ回収するのが大変だ。」

一方で、ユーノは変身を解くと少々の疲れを見せながら同じくブラストソウルを発動させたドラの元へと近づいて行く。

「ドラさん。さっきのは・・・？」

「ドラ佐ェ門の真の姿です。侍王ドラ佐ェ門は、オイラの魂と共鳴させることにより、背後にオイラの容姿そっくりな奴自身を出現させ、動きそのものをシンクロさせることでオイラの手足となる。もっとも、向こうが傷を負えばこっちも傷が転写されるのが難点ですが」

それを訊くと、恋次は吉良やルキアと顔を見合わせ懐疑的な表情でこう言った。

「あのさ・・・それって狛村隊長のパクリとかじゃねぇだろうな？」

「それはオイラじゃなくて作者に聞いてくれ」

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

サソリヤミーを撃破したドラはもう一日六課に滞在し、二日間の連休を過ごすと、その次の日の朝、ユーノ達に見送られ元の世界に戻る時がやってきた。

ユーノは全員を代表してドラにこの度の事を感謝する。

「今回は色々とお世話様です」

「いやいや、いいんですよ別に♪困ったときはいつでも駆けつけますから、友達なんだし遠慮なく相談でも何でも言ってくださいね」

「はい。ありがとうございます♪」

と、不意にシグナムがあの後一度もドラと剣を交えず戦えなかったことを悔やむ形で険しい顔を浮かべる。

「く・・・結局一度も剣を交えぬことができなかったか」

ヴィータはそれを訊くと、真顔を浮かべて呟く。

「アホが・・・」

そして、ドラにこの世界で購入したミッドチルダのお土産を渡した折り、マリアはこの場になのはがいないことを指摘する。

「あれ?そう言えばなのはさんは?」

「ひひ。それがやな♪」

面白そうにはやてが笑いながらそう言うと、一同ははやてに連れら

れなのはが現在いる場所へとやってきた。

そこは、何時も利用している六課の医務室だった。

医務室のドアを開けると、中には全身筋肉痛の為に声を上げながら苦しむなのはとそれを見守るヴィヴィオが座っていた。

「ううううううう！！！！いったたたたたた！！！！！！！！」

「大丈夫ママ？」

「全然大丈夫じゃない／／／／また全身筋肉痛に・・・／／／／」

この情けない姿のなのはにスバル達フォワード陣が唖然とする中、恋次や鬼太郎、更にはドラの三人が腹で茶を沸かす。

「だははは！！！！やっぱりこうなったか！！！だからお前は不完全女だって言うんだよ！それじゃ、折角のエースオブエースと最強のママの称号はお預けかな？」

「ははっは！！！いっそのこと、しんちゃんの母ちゃんにでも渡した方がいいって！」

「しんちゃんのお母さんって何！？色々危ない発言は止めて！！う・・・いたあああああああい！！！！！！腰に響く！！！！！！」

大声を上げただけで最も程度の酷い腰の筋肉に激痛が走るなのは。

ユーノはそんななのはの元へと近づき、ヴィヴィオと顔を合わせて

破顔一笑すると、徐に言ってきた。

「はは。なのは。いい加減魔法で体力誤魔化すのは止めた方がいいよ？あ、そうだ。今度一緒にジョギングに行こうよ。ここから一時間ほど先の公園までさ♪」

「えええええ！！！無理だよそんなの！！！私の体力の無さ知ってるでしょユーノ君！！お願いだから私に対してイジメをしないで！！！！作者さん！！！！！！」

切なる想いを作者重要大事に赤裸々に暴露するなのは。

と、ここで作者の心情を理解していた今回の話の主役とも言える存在、サムライ・ドラが締めくくりにこう言って来た。

「良い子のみんな。こんな上っ面な強さで虚栄を張る人間を最強とかエースとかって言わないんだよ。都築も、なのはは最強じゃないんだからいい加減ＦＯＲＣＥのごつい展開とか止めてくんない？あとＶｉｖｉｄにもユーノさんを出せや！百合漫画が好きなのかてめぇは！と、重要さんの切なる想いでした♪」

都築よ・・・・・・偶には普通の異性恋愛書いてみろ！！！！

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

いまとイジメと侍王ドラ佐ェ門（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は侍王ドラ佐ェ門についてだ♪」

「ドラ佐ェ門は元々、ドラさんのいる時代からおよそ５０００年前の戦国時代、足軽の理不尽な攻撃で命を落とした猫の魂その足軽の刀に憑依したもので、この名前自体はドラさんが勝手につけたもので、本名は獅子王獣太郎左衛門と言うらしい。」

「で、そのドラ佐ェ門の力を一気に解放することによって、ドラさんの背後に山のようなもう一人のドラさんを召喚するものこそが、覚醒発動時における侍王ドラ佐ェ門の力の姿。ドラさんの動きとシンクロしていて、その威力は狛村隊長の卍解に匹敵するほど」

一「なんか色んなところパクッたような感じがしてならねぇような」

ド「いやいや。そんなことないって。狛村隊長のはもうちょっとがたいが硬いしちょっといかつい感じだけど、オイラのは同じような顔の奴が後ろにあらわれるんだよ。見ろよこの何とも情けな～い威厳も何もない顔」

ドラは自分の力であり相棒であるドラ佐ェ門の容姿を見て毒舌を吐く。

一「自分でそれ言うのもどうかと思うけどな」

ユ「やっぱり、顔にコンプレックスがあるんですか？」

ド「ぐうう～～～／／／この顔の所為で、普段オイラが周りからどんなふうに見られているのかわからない訳ないでしょ～～～／／／オイラだってね、こんな筈じゃない人生を送ってるの～～～くうう～～～」

切なくなって涙を流すドラの姿に、一護とユーノは心の中で呟く。

ユ・一「（お気の毒に・・・）」

魔導師図鑑ハイパー！

前回のつづき。

威力のコラボを成し遂げたユーノ・ドラ・浦原の三人は話し合った結果、次のようなものでのタッグを組むことになった。

ユ・ド・浦「ドッチボール最強タッグ結成！」」」

一「って！なんだドッチボールなんだよ！！」

浦「いや～いろいろ考えたんっすけどね、アタシら基本的に能力全般が高すぎて何をやっても一人でこなせちゃうんですよね」

ユ「それで、悩んだ末に団体競技って形で落ち着く話になって」

ド「そしたら偶々ドッチボールって言うのが浮かんできたからそれにしようって」

恋「テキトー過ぎるだろう、それ！？」

浦「細かいことはこの際無しにしましょう♪ささ、早速始めましょう」

では、この三人のタッグに挑む愚か者を発表しよう。

なのは・フェイト・はやての三人娘である。

な・フェ・は「ちょっと待って!!!!!なんで私達なのーーー!!!」

ユ「なのは達が相手だそうですね」

ド「ひひひひ・・・そうかそうか。じゃあ思い切りぶちのめしていいって訳だ」

な「あああああ!!!ドラさんが怖い目でにらんでる!!!」

フェ「ユーノ!お願いだから手加減してよ!ドラさんがいるときの私達の扱いがあまりに理不尽過ぎるよ!」

は「私ら一応健全な女の子なわけやし、な・な・な!!」

ユ「そうは言われても・・・一応競技だから」

浦「手加減できないんですよ・・・」

ド「そう言う訳だから。安心して死ねや」

な・フェ・は「いま死ねって言った!!!明らかに死ねって言った

！！！！」

三人娘はドラに目をつけられると、本来ならば動き回って当たらないようにするはずが、恐怖のあまり身体が凍りついてしまい、動けなくなる。

ド「ひひひひ！お～～～ら、死ね！！！！」

な・フェ・は「ヤダ！！！！！！！！！！！！！！！！」

結局この日の三人はドラにこっ酷い目に遭ってしまうのであった。

この小説では飽く迄も、ユーノが主人公であって、彼女たちの扱いは割と悪い方のネタにされてしまいがちになるである。

次回予告

ヴィ「恋次さん！」

恋「ヴィヴィオ」

ヴィ「水道が破裂しました！」

恋「あああああ！！おい！てめぇら早く下がれ！！下がれ！！」

「あちゃあちゃちゃちゃちゃちゃ！！！！！！！！」

ユ「ＡＭ３１が、管理世界の水道局システムを襲ったとき、水が危険な塩酸に変わった。」

「機動六課は、人間の生命維持に不可欠な水を取り戻すことが出来るのか？」

「次回、ユーノ・スクライア外伝『水と酸と地底怪獣』。お楽しみに」

登場ヤミー

サソリヤミー／巨大サソリヤミー暴走態

声：関智一

身長　２１９？　体重　１４２？（通常態）

体長　１２０ｍ　体重　１７０ｔ（暴走態）

特色／力：硬い甲羅による高い防御、強靭なハサミと水圧による攻撃、小型カニを操る。

サソリの餌付けを趣味とする男を寄生主として、甲殻類系グリードがセルメダルを投下して生み出したヤミー。毒を持った尾で触れたものを腐敗させるだけでなく、空間をも切り裂くほどの威力の斬撃を自在に飛ばすことが出来る。最初の戦いでユーノ達に寄生主を取り除かれたことにより、自我を失い、欲望を制御できずに暴走を果たし成長を繰り返した挙句、巨大なサソリの怪物へと変貌を遂げる。群を抜いて高い防御力と攻撃力で恋次達の攻撃を圧倒するが、真の力を解放したサムライ・ドラの力によってハサミと尾を切り裂かれ、最後にユーノの完現術コンボの攻撃を受けて爆発。大漁のセルメダ

ルとなって四散した。

サムライ・ドラ技集

人侍剣力流

開発者であるネコ型ロボット・サムライ・ドラとユーノ・スクライアが操る、実戦本位の独自流剣術。作中に登場した使い手はこの２人のみだが、ナーノも少なからずこれによく似た技を使用することが出来る。人侍剣力流は「人」が強く持つ寛大さと慈愛、「侍」が強く持つ忠義と勝利への追求。この二つを組み合わせ剣術としたもので、ドラがこれを完成させたのがＴＢＴ特殊先行部隊隊長に就任した直後で、自らをサムライ・ドラと言う様になったのもこの頃。その真髄は、「無為自然の元に、己の心の刃で邪を絶ち斬る」を流派の理としていて、ドラとユーノはこれを使うときはその理に従って剣を振るっている。

技

刹那乱閃

ドラの十八番とまで言われる技であり、『人侍剣力流』を編み出した際に一番最初に作り出したもの。ロボットとして生まれ変わったことで可能となった人間離れの強靭な脚力でいきなり最高の速さに達する足の運び、『縮地』を駆使して一瞬のうちに相手の間合いを

侵略してその隙に超高速の斬撃を相手の身体中に叩き込む技。加減をして峰打ちしても、その衝撃は容易に大男一人を気絶させるほどの威力がある。

天翔絶攻

刀の刀身ないしは峰の部分を使い、相手を天空へと突き上げる技。技の特性は飛天御剣流の龍翔閃と同じ、ドラによる多少のアレンジが加えられている。このとき、相手を天空へ突き上げる際には相当の力を必要とするが、ロボットとしての強靭な腕力を持ち合わせるドラだからこそ可能。

瀧上（たきのぼり）

解放状態のドラの刀、『ドラ佐ェ門』のときに使用可能な特殊技。刀身の表面をこの世に散在する魑魅魍魎の魂たちを薄くコーティングし、剣撃の威力を通常の倍にし、人間の目では捉えられないほどの速さで上向きの一閃を入れる。斬られた相手は必ずまるで瀧を上るかの如く血が上向きに吹き出る。一種の完現術とも言える。

卍落し

同じく解放状態で使用可能な特殊技。ドラ自身が天高く飛び上がり、相手の視覚を惑わすと同時に、高速で移動し残像を作り相手がそれに気を取られている隙に魂魄でコーティングした刀で背中に『卍』の文字の傷を与える。

神斬撃

特殊技（たけ）の一つ。九頭龍閃同様、剣術に於ける九つの斬撃の種類、唐（から）

竹・袈裟斬り・逆袈裟・右薙・左薙・右切上・左切上・逆風・刺突を魂魄の斬撃でもって同時に仕掛けるもの。基本的にこの技は魂魄の消費が激しく扱いも難しい。そのため、使用するのは稀有なことである。

土流浄閃（どりゅうじょうせん）

地面や周りの土砂と水を組み合わせて相手に攻撃を仕掛けるもの。本来この技は、雨などでぬかるんだ土砂があるときに使うのが通例。飛んでくる土砂はいずれも角ばったものが多く、直撃すれば気絶はしなくても、暫くはその痛みで生き地獄を味わう。

壊滅斬閃

人侍剣力流の中でも、物質破壊に特化した技。ドラの剣気と全神経を刀身に集中させ、渾身の一撃であらゆるものを粉砕する。今まで破壊したものの中には、岩・廃車・廃屋などがある。

瞬殺斬閃（しゅんさつざんせん）

刹那乱閃同様、縮地を駆使して相手の間合いを侵略し相手に斬撃を与える技。但し、刹那乱閃はその名の通り乱撃を与えるものに対し、瞬殺斬閃は斬撃と刺突を同時に仕掛けることで、より効果的に相手にダメージを負わすことが出来る。

居合

古の剣客、林崎甚助重信の考案したもの。刀剣の刃を鞘内ではしらせ抜き放つことによって剣速を二倍、三倍に加速させ相手に攻撃の間を与えずに切り伏せる一撃必殺の大技。流派によっては、「抜刀

術」、「鞘の内の剣技」または「抜き」とも言う。

圧振閃

刀身に剣気と全神経を集中させ、相手の武器などに一撃を喰らわすことで相手に超振動を与える技。その衝撃で何メートルも飛ばされるものもいれば、強い衝撃を受けたことで四肢の神経伝達に異常をもたらす効果がある。

神速衝閃

刀を両手でしっかり持った後、縮地を最大限駆使して相手に攻撃を与える技。この技は一撃必殺にかなり近いもので、その衝撃の規模は建物一つ容易に粉々にするほど巨大。縮地の瞬間最高速度は時速３００キロにも及ぶ。

魂魄弾

特殊技の一つ。散在する大量の魂魄をドラ佐ェ門そのものが糧として喰らい、喰らった分の魂魄エネルギーを巨大な光り輝く斬撃へと変貌させ相手にぶつけるもの。こうすることで、ドラ佐ェ門によって喰われた魂魄は本当の意味での解放を得る。

武器・刀

刀の名は『ドラ佐ェ門』。
解放と共にドラの顔を模した平らな形の鍔へと形を変え、細部には突起状の赤い装飾が付属され若干刀身の長さが増したものへと変化する。完現術のように、周囲にある様々な魂を使役し、己の力として発現する能力に加え、任意に選んだ生き物を刀の中へと吸収し、

吸収したものが持つ特殊能力を自在に操る『魂魄兵装』という特殊能力が備わっている。解号は「敵を斬れ『ドラ佐ェ門』（かたきをきれ『〜』）」。

覚醒（ブラストソウル）

ドラの生命エネルギーと魂を爆発的に燃焼させ、ドラ佐ェ門に宿る本来の魂を具現化させる能力。死神における卍解と同等の位にあるドラの刀の二段階目の解放。戦闘能力は絶大だが、その分ドラ自身の魂の疲労が大きく、使うことは滅多にない。正しく戦闘における最後の切り札としての最終奥義とされている。また、卍解修得者は、斬魄刀の名を呼ぶ事なく始解することも可能。卍解に至るのは才能のある者でも１０年以上の鍛錬が必要とされ、卍解修得者は例外なく尸魂界の歴史に永遠にその名を刻まれる。その威力故にドラでも長時間保つことは難しい。発言の際、ドラは「覚醒！」と口にしている。

【覚醒】時の刀の名前は、『侍王ドラ佐ェ門』。

能力解放と共に、自身の動きに連動して動くドラとそっくりな容姿の刀より実体化し山のような巨躯のドラ佐ェ門を召喚する（僅かな違いとして、頭に髷が付けられている）。その巨体を生かした攻撃力は強大であり、硬い骨格に覆われユーノ達でさえ傷をつけることもままならなかった暴走状態のサソリヤミーにダメージを当てるほどの威力を持つ。しかしリンクの度合いが非常に強いため、ドラ佐ェ門が傷つけられるとドラの同じ部位にまで傷がつくというデメリットがある。

水と酸と地底怪獣（前書き）

水清ければ魚棲まず

ＢＹ孔子家語入管篇。

水と酸と地底怪獣

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

４月もあと少しで終わりを迎えようとしている今日この頃、午後からのオフシフトを満喫していた浦太郎や恋次、そしてナーノの三人は本屋を訪れていた。

活字嫌いなナーノと言っても、雑誌や新聞などは人並みに読めるのであって、そこは補足的に説明を加えておくことにしよう。

店内をぶらついていると、浦太郎は前々から目をつけていたとある雑誌を手に取る。

「あったあった♪参考書参考書♪」

浦太郎は中身を確かめるために輝かしい目でその中身を確かめ、鼻の下を伸ばす。

恋次とナーノはその浦太郎を見て、ふと疑問に思った。

「おい？浦太郎。参考書買うんじゃなかったのか？」

「いいんですよこれで♪」

そう言って浦太郎が見せて来たのは、参考書とは程遠い女性のグラビア写真集だった。

ナーノは思わず苦い顔で呟く。

「か、亀さん・・・参考書ってただの雑誌だよね・・・それもグラビア写真・・・」

「はぁ・・・このエロガッパ、もといエロ亀が・・・」

恋次もそろって浦太郎の趣向に呆れ顔。

やがて目的の物を購入した浦太郎は二人と共に六課へとつづく道を歩きながら、真剣に女性の体を見つめる。

「へへ♪成程・・・こう言う仕組みになってたんだ・・・♪」

「どういう感想の仕方だよそれ・・・」

「こう言う感想♪」

「亀さんにとっての参考書は、そう言う本なんですよね・・・」

と、そんな談笑をしている時だった。

浦太郎と恋次は呑み終えたジュース缶を何のためらいもなく近くの川へと放り投げた。

同じ様にジュースを飲んでいたナーノは衝撃を受け、すかさず二人を叱咤する。

「あっ！何するんですか二人とも！」

「「え？」」

訝しげな表情を浮かべる二人がナーノに顔を向けると、ナーノは眉間にしわを寄せながら橋の下に広がる不法投棄された粗大ごみや恋次達が投げ込んだ空き缶などで汚染されたミッドチルダを流れる川

の現状を指摘する。

「見てくださいよ！あんた達みたいなのがいるから、川がどんどん汚れていくんですよ！」

それを聞くと、浦太郎自身も反省の色を見せる。

「あ・ごめん。無意識に捨てちゃった・・・」

「無意識にやることがこの星も、いや次元世界全ての自然を傷つけるんですよ。分かってないんですから！」

「かっかするなよ！元々汚れてる川じゃねぇかよ」

恋次が悪びれる様子もなくそう言うと、ナーノは完全に呆れ顔。

「信じられない・・・恥ずかしいと思わないんですかもう！」

ナーノは二人に愛想を尽かした様子で歩き去っていくと、空き缶をゴミ箱が設置されている場所へときちんと持っていき、恋次や浦太郎はナーノの態度にそれぞれ呟く。

「たく。面倒臭せえ奴だぜ。ああいうところは何つーか、ユーノよりもなのはに似てるよな。」

「多分どっちも言うと思うけど・・・でもナーノの言ってること正しいですよ。僕らも少しは反省しましょう」

「ち。分かってるよ」

二人はナーノから受けた叱咤で、自分たちがしでかした大変人間として恥ずかしい行為に反省を抱きつつ、六課への道を戻っていくのであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

さて、色々な世界でも水を汚したり、或いは遊びに使ったりするものは数知れない。

一人の一人の認識の甘さや杜撰さが、やがて今回の世にも恐ろしい事件を引き起こすとは夢にも思わなかったのだ。

第３２管理世界「ハイドロ」。

ここは管理世界の中でも水の整備が大変進んでおり、ミッドチルダを含む管理世界の水道システムを統括するところでもある。

そんな世界に住まう一人の中校生がいた。

中学2年生のトウドウ少年は、学校の帰り喉が渇いたために近くの公園へと立ち寄った。

公園に立ち寄り水飲み場に近づいて行くと、そこには小学生の男の子三人が集まって、勢いよく水を噴射して悪戯をしていた。

そんな折、誤って噴射していた水がトウドウの顔へと向けられた。

トウドウはびしょ濡れとなった顔を拭うと、水飲み場で遊ぶ子供を

注意する。

「コラァ！」

子どもは一喝を受け、恐れおののくように体を硬直させると、徐に近づいてくるトウドウに更に言われた。

「ここは水飲み場だ・・・・・・遊び場じゃない！」

「「「うわああ！！！！」」」

子ども三人はトウドウの一喝を受けると、一目散に逃げ出した。

トウドウは呆れながら勢いよく吹き出す水飲み場へと近づく。

「全く。躾の悪い奴らめ・・・・・・」

水飲み場の水の勢いを抑えて、自分の飲みやすい位置へと持ってくると、トウドウは水を飲み始める。

しかし、直後彼はあまりの味に口から水を吐き出す。

「うっぺ！何だこの水は・・・・・・！不味い！」

そう・・・この世界を始めとする水の多くが所謂消毒された水であり、その消毒には地球でもよく使われている塩素を用いている。

何故魔法を使わないかと言えば、管理局法の中に「水の浄化に関しては、一定限度の基準を超えた汚染水に関しての消毒は、消毒性の強い塩素を用いる」と言うなおかしなものがあり、管理世界の多く

が基準を超えた汚染水の為に一概に塩素で消毒を行っている。

しかし、塩素を使う故に飲み水の多くはカルキ臭いものへと変わってしまい、飲んでいて余り心地のいいものではない。

それを今回の事で理解したトウドウはうちに帰る前に、スーパーマーケットへと立ち寄り、大量のミネラルウォーターを購入した。

購入してきた清涼飲料水を備蓄し、トウドウは笑みを浮かべる。

「ふふ。」

すると、そんなトウドウに対して話しかけて来たのは彼の心の悪に付け込んだアンゴルモアによって現出した実体を持たない思念体だった。

思念体はトウドウの心に呼びかけるように、こう言って来た。

〈トウドウよ。何をしている？〉

トウドウはその声を訊くと、分り切っていたようにその声に対して返事を返す。

「飲料水の確保さ。これだけあれば暫く大丈夫だろう」

〈飲料水？〉

「僕達人間は・・・水なしでは生きていけない・・・なのに、水道の水が僕の体質に合わないんだ！」

〈水は人間の生命線と言う訳か〉

「ああ。その水を管理しているのが――――――」

トウドウはそう言うと、ディスプレイに管理世界全ての水を統括し、管理しているフォートナックス水道管理局の映像を出す。

「管理世界指定を受けているすべての水道システムを司るフォートナックス水道管理局だ。ここで川や貯水池から集めた水を消毒して、管理世界中に供給しているんだ」

アンゴルモアの思念体はそれを聞くと、自分本位な欲望を抱くトウドウに目をつけ、次のような事を言って来た。

〈成程・・・・・なら、そこを襲ってみてはどうだ?〉

「え!」

トウドウは聞き違えではないかと思ったが、アンゴルモアの思念体は戸惑うトウドウに悪しき力を与える。

〈愚かな人間どもに、恐怖のプレゼントを送りつけてやるのだ。ふはははははは!!!!!〉

アンゴルモアの思念体はそう言うと、トウドウの体の中へと入り込み、強い力を与えるのであった。

「うわあああああああああ!!!」

トウドウはその力を受けると、眩いばかりの不気味な青紫色の光に包まれ、その光景を外の方から窺っていた人間体のウヴァ、そして別の場所のアンクは笑みを浮かべる。

「コアメダルも大切だが、俺もいい加減アンゴルモアに目をつけないとな・・・」

「は。欲望に憑りついたか。さて、今度はどういう姿に身を変えるのか・・・拝見させてもらうか」

二体のグリードがアンゴルモアに目を付けた時、トウドウ少年は果たしてどうなってしまうのか？

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

トウドウがアンゴルモアによる力をその身に受けた頃、反応が確認されていないために事の重要さに気付いていない様子の六課メンバーは平時の勤務を全うしており、その中の一人の鬼太郎は仕事の合間を縫って、珍しく隊舎の周りに水をまいていた。

「なっはははは！！お待たせしましたみなさん！喰らえ俺の必殺豪快シャワー！！！」

鬼太郎は今年で２７歳を迎えるとはとても思えないような子供染みた遊びを展開し、ホースから流れる水を噴射すると、傍らそれを見ていたユーノスが唖然とした様子で言って来た。

「・・・はぁ。鬼太郎。水の無駄遣いと遊びは止めといたほうがい

いぞ。ユーノにばれたらことだ」

「心配スンナって！暑い日は内水が一番なんだよ！」

「まだ春先だぞ」

と、そんな時用事を済まして外から戻って来た浦太郎が鬼太郎の様子を伺うと、ある悪戯を思いつき鬼太郎に見つからないようにと近づく。

「ひひ。先輩見てろ・・・」

浦太郎は水撒きをする鬼太郎が手に持つホースを足で踏みつけ、水の流れを止める。

ユーノスと鬼太郎は唐突に水が流れてこなくなったことに訝しげな顔を浮かべる。

「？」

「あれ？おかしいな・・・断水か？」

鬼太郎がホースの先を覗き込んだその瞬間、浦太郎はホースから足を外して、何も知らない鬼太郎に豪快な水のシャワーをプレゼントする。

「だあああああ！」

鬼太郎は顔面に向かって来た水のシャワーに驚きながらホースを離すと、話したホースがユーノスの身体へと吹きかかり、ユーノスは

とばっちりを受けてびしょ濡れとなる。

「う」

と、そんな二人の元に悪戯の犯人である浦太郎が近づく。

「はは。水も滴るいい男になったね先輩♪」

「てめぇ亀公よくも!!!!!」

鬼太郎は仕返しの為に、浦太郎に先ほどよりも威力を強めた水を浴びせる。

「うわあああ!!!止めてよ先輩!!冷たいって!!!」

「・・・・・俺も冷たい・・・・・・」

浦太郎が鬼太郎の復讐を受ける傍ら、何もしていないにもかかわらず被害を受けているユーノスは切に呟く。

すると、ちょうどその時学校から帰宅してきたヴィヴィオが彼らの姿を見かけて近づいてきた。

「あれ?鬼太郎さん、浦太郎さんも何して・・・きゃあああ!!!冷たい!!!」

ヴィヴィオが近づいたその瞬間、二人がばら撒いた水がヴィヴィオにもまき散らされてしまい、そんな事もお構いなしに鬼太郎と浦太郎の争いはヒートアップする。

「コノヤロウ！！！！」

「やったなぁあ！」

いつまでもこの子供染みた喧嘩が続くかに見えたその時・・・彼らの暴走を抑え込むことが出来る男の鉄拳が二人の頭に直撃。

「「痛い！」」

二人が頭を押さえて前を向くと、そこには血管を浮かび上がらせ怒りに満ちた様子の最恐の男、ユーノ・スクライアが立ち尽くしていた。

「お前ら何やってるんだ！さっさと水を止めろ！」

「て・・・店長、僕が出したんじゃないですよ？」

「いいから早く止める！水だって、タダじゃないんだから」

ユーノにそう言われると、浦太郎な後の事が怖くなって渋々ホースの水を止め、ユーノと一緒に歩いてきたナーノと、たまたま現場を目撃した母親のなのはがびしょ濡れのヴィヴィオへと近づく。

「ヴィヴィオ姉ちゃん！大丈夫！？」

「ああ、ヴィヴィオどうしたの？びしょ濡れだよ」

「う・・・とばっちり受けちゃった」

二人がヴィヴィオの心配をするように、ユーノもユーノスの事を気

に掛ける。

「ユーノス元帥も大丈夫ですか？」

「ああ・・・この通り全身水浸しだ」

二人がとんだはた迷惑を受けると、ユーノとナーノの怒りは頂点に達する。

「モモタロス・・・亀さん・・・！！！」

「お前ら・・・・・よくもユーノス元帥とヴィヴィオをびしょ濡れにしてくれたな・・・！」

「「ひい！！」」

二人は恐怖に怯え、その場に硬直すると、世にも恐ろしいユーノとナーノによるお仕置きを受けることになってしまい、それはそれは見ているだけで鳥肌が立つものだった。

そんなお仕置き劇を見ないように、なのははヴィヴィオに言う。

「取りあえずヴィヴィオはこのままお風呂に直行かな？」

「はぁい。あ♪ユーノス元帥もよかったら一緒に入りません？」

「な！お、俺は別にいい／／／」

ユーノスが顔を赤くしてそう言うと、なのはは悪戯っぽく言ってくる。

「とか何とか言って、本当は入りたいんじゃないですか♪」

「断じてそんな事はありえん／／／」

そして、数分後。

ユーノとナーノのお仕置きから解放された鬼太郎と浦太郎は全身傷だらけとなりながら、脱衣所へと向かった。

「「いててて・・・／／／」」

ユーノはため息をつきながら、二人から濡れた服を受け取り洗濯機の蓋を開ける。

「たく・・・僕より二つ年上のくせして、やることは本当子どもなんだから・・・ほら。脱いだものは洗濯機に入れて。たく風邪でも引いたらどうするんだよ・・・！」

まるで手を焼かせる中学生の子供を持つ母親のような態度を見せるユーノ。

鬼太郎と浦太郎が風呂場へと向かうと、目の前に飛び込んできたのはお湯が溢れかった風呂場の光景だった。

「溢れてるよ、店長。お湯」

「あ～あ、勿体ないっすね」

「あらら！大変だ！！忘れちゃったよもう・・・」

ユーノは慌てて風呂の湯を止めると、足早に次の作業に移ろうとする。

「僕は忙しいんだからね色々と」

それを聞くと、二人はついこんな事を言ってしまう。

「自分の事棚に上げちゃってるぜ、店長」

「同感。“何事も無駄遣いはいけないって言ってるだろ?”ってね♪」

それを聞くと、ユーノは眉間にしわを寄せて反論する。

「鬼太郎とか浦太郎と違って、無駄にはしないよ僕は・・・!余ったお湯は、洗濯に使うとか有効活用することが出来るんだからね。」

「主婦みたいなこと言いますね」

「これぐらい常識だろうが。て言うか店長、そう言うの言い訳って言うんじゃないっすか?」

「素直じゃないよね店長も」

「・・・全くもう二つ年上だからって人のこと馬鹿にして・・・!いいよ。そう言うこと言うんなら、今日はハーゲンダッツもプリンもなしだ!」

「「ええ!!そんな!!」」

「序でに給料も減額するからね！」

「ほ、本気じゃないでしょ店長！？」

「本気も本気！」

ユーノは二人を躾けるつもりで厳しい態度に臨むのであった。

さて、二人がユーノと言う男に厳しい指導を受ける中、何故か男湯の方に姿が見えなかったユーノスの方はと言うと――――――

「ひいいいいい／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

あのまま、ヴィヴィオに連れ去られてしまい、彼は女湯の方へと入っていたのだ。

心境的には第一期のユーノみたいな扱いを受けているのだが、ヴィヴィオは服を脱ぎながら後ろ向きで尻尾を尖らせるユーノスに話しかける。

「ユーノス元帥。女の人とお風呂に入ったことあります？」

「いや・・・／／／／一度だけ・・・無理矢理入れられたことがある・・・／／／／」

「あはは♪そんなに恥ずかしがることじゃないですよ。何事も、裸のお付き合いってものが大切なんですから」

「いや！俺は始めから遠慮すると言っていた筈だが！！ヴィヴィオ、

ここはやはり俺も鬼太郎達と一緒に男湯の方へ・・・・・・」

そう言おうと前を振り向い瞬間飛び込んできたのは、ちょうど全裸になったばかりにヴィヴィオの色白い体であった。

「だああああああ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ユーノスはそれを見ると、全身の毛を尖らせたのち、力なくその場に萎れこむ。

「う・・・ヴィヴィオ・・・その／／／やはり俺も鬼太郎達と一緒に男湯の方へ／／／」

「ええ～？良いじゃないですか、一緒に入りましょうよ」

ヴィヴィオはリボンを解きながら不満げにそう言うと、ユーノスは力なく体を小刻みに動かしユーノに助けを請う。

「あ・・・は・・・ユーノ・・・助けてくれ・・・／／／」

それでだ・・・ユーノスとヴィヴィオが風呂に入ると知って黙って要らない男がいることを忘れてはならない。

ヴィヴィオを溺愛し、何時の時代でも彼女が大好きなシスコン男こと、ナーノ・T・スクライアはマシンガン片手にユーノスの写真を撃ち貫く。

「おおおおおおおおおお！！！！！！！！死ねやユーノス・スレイア！！！！！！！！」

マシンガンでユーノスの顔を撃ち貫くナーノを見て、スバル達は止めにかかる。

「ちょ！落ち着きなってナーノ！」

「いいじゃないの、これぐらい許してあげなさいよ！」

「ウルセー！！！よくもよくも淫獣風情がヴィヴィオ姉ちゃんと・・・ヴィヴィオ姉ちゃんとお風呂なんて！！！！僕だって最近見てないんだぞお姉ちゃんの裸！！！！！」

「この歳にもなって何言ってるのさ、ナーノは！」

「でも気持ちわかるよ！私もエリオ君とのお風呂、最近全然入れてないもん！」

「キャロ／／／お願いだからそう言う発言も止めて／／／」

「おおおおおおお！！！！淫獣がああああ！！！ヴィヴィオ姉ちゃんとお風呂なんて！！！！！！」

暴走状態のナーノを止めるだけでも骨の折れる事だったが、傍らでそれを窺っていたなのはやリィンは苦い顔を浮かべる。

「なのはさん・・・あんなキャラだったんですねナーノは・・・」

「にゃはは・・・えっと・・・ヴィヴィオの前だと過剰になっちゃうみたいだね・・・」

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

その頃、アンゴルモアの思念体に憑りつかれたトウドウは念入りな調査の元、管理世界の水を統括する水道局でどのように水が消毒されているのかを調べ上げ、解析データを参照すると笑みを浮かべる。

「やっぱりそうか・・・管理世界の水を消毒するのに、塩素を使ってる。そうだ。水に含まれてる水素と合成させれば・・・・・・」

トウドウはアイディアを思いつくと、化学式からも分る様に、水分子と塩素を化合させることによって出来る物質、塩化水素・・・即ち塩酸の構図を導き出す。

アンゴルモアの思念体はトウドウの体の中で、彼に呼びかける。

〈どうだ？良い知恵は出たか？〉

「ああ。ふふふ・・・・次元世界に恐怖をプレゼントしてやる・・・・」

トウドウは一体どんな手を使って、我々に恐怖を与えるというのであろうか？

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

トウドウによる作戦が実行される前、何も知らないでいるユーノは先ほどの鬼太郎と浦太郎の言葉を気にして不機嫌そうに格納庫前で立ち尽くしていると、自分の車とバイクを洗浄していたフェイトとヴァイスが話しかけてきた。

「ユーノ。何も水不足って訳でもないんだし、そんなに怒らなくてもいいんじゃないの？」

「そっすよ。あんましかっかしない方がいいですって。血圧が上がりますぜ！」

「まだそんな年じゃないよ僕は。ああ悔しい～～～大体あの二人ときたらちょっと人の揚げ足取るとすぐ調子に乗る～～～本当生意気なんだから！」

「ユーノにとって、ヴィヴィオやナーノ以上に手のかかる子供って感じなのかな浦太郎さんと鬼太郎さんは？」

「本当子どもだよ！ヴィヴィオとナーノが大人に見えてしかたない・・・！」

すると、そんなユーノを見て破顔一笑するフェイトやヴァイスに、ユーノの理不尽な怒りがぶつけられる。

「大体何なんだよ、二人してそんなニヤニヤした顔！僕は機嫌が悪いんだよ！」

「ゆ、ユーノ先生勘弁してくださいよ俺達に飛び火をするのは・・・／／／」

「ユーノ・・・最近怒りっぽくなってない・・・普段の穏便を忘れないで／／／」

以前にもまして、怒ることが多くなったユーノに戸惑いを隠せないでいるフェイト達だったが、そんな折、何事もなかったかのように鬼太郎がユーノに歩み寄ってきた。

「店長！俺のプリンは！？」

「さっきダメって言っただろうが」

「そんなこと言わずに♪」

「駄目だ」

ユーノに一蹴された鬼太郎は詳しそうに舌打ちをする。

「ちぇ。」

「鬼太郎の旦那。さっさと謝っちまえばいいんすよ」

「お前みたいにか？」

「う！その言葉は一言余計っすよ！」

「鬼太郎さん。ヴァイスの言う通り、謝りましょう。ユーノだって、本当はその言葉をずっと待ってるんですから」

フェイトやヴァイスは鬼太郎に素直に謝ることを進めるが、ユーノはその二人がホースから水を出し続けていたことを厳しく叱咤する。

「コラ、フェイト！ヴァイス！二人揃って水を無駄にしてる！」

「「あ！ごめんなさい（すみません）・・・！」」

ユーノに叱咤された二人は水を弱めて洗浄の続きを始め、一方の鬼太郎もユーノに機嫌を直して貰おうと謝罪をしてきた。

「店長・・・俺反省してるっす。これから、店長が何をしても笑わないって誓います！尊敬してるんっすから俺！」

「本当かな♪」

「本当っすよ！店長がオナラなんかしても、笑わないっすよ」

「／／／な、何言うんだよ・・・！僕はおならなんかしてないって・・・／／／」

気恥ずかしそうにユーノが言うと、鬼太郎は満面の笑みで更に言う。

「よく言うッすよ。この間なんか昼寝しながらブハッーってやったっすよ。あの音は尊敬もんだったす！」

すると、それを傍で聞いていたヴァイスとフェイトは堪えきれずに笑い出す。

「ぷふふふ／／／ははははは！！！！」

「オナラ・・・ユーノがオナラ・・・／／／」

ユーノは二人の笑う様子を伺うと、赤面し鬼太郎に叱咤する。

「／／／お前！！！やっぱり僕の事馬鹿にして／／／！！！」

「してないっすよ！」

「駄目だ。プリンは出さないからね！！」

鬼太郎は機嫌を直すどころか、ユーノを逆に怒らせてしまい、ユーノは不機嫌そうに隊舎の方へと戻って行った。

作戦が失敗した鬼太郎は頭を抱え、ヴァイスはそんな鬼太郎に口にした。

「鬼太郎の旦那、言っちゃ悪いっすけどバカっすね」

「ああ。俺もそう思う」

「認めるんですか・・・」

フェイトもこの時の鬼太郎の言葉は予想外だったそうな・・・――――

◇

〈トウドウＳｉｄｅ〉

それから時間がたった頃、トウドウは綿密な作戦を立てたのち、襲撃地であるフォートナックス水道局を訪れ、不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふ・・・愚かな人間め。僕の力を思い知るがいい。」

〈そうだ。それでいい・・・で、どうする？〉

「先ずはここのシステムの中に侵入して、シリコンの中に潜りこみ、システムを組み替える。そして、恐怖の液体を作るシステムを構築するんだ」

〈よし。ならばお前に力を当てる！思うがままに暴れるのだ！〉

すると、トウドウの身体は光の粒子となって水道局のシステムへと侵入していき、基盤で埋め作られたコンピューターワールドへとたどり着くと、自らの身体は怪獣の姿へと作り変える。

その姿はカブトムシのような甲殻昆虫に類似したフォルムを持つ怪獣で、角から破壊光線を出し、口からは塩酸ガスを吐き出す特性を秘めている。

身も心もＡＭ体と化したトウドウは、コンピューターワールドの中で破壊の限りを尽くす！

◇

〈浦太郎Ｓｉｄｅ〉

そのトウドウによる破壊活動が行われる直前、六課の食堂の方で一人浦太郎が珍しいことに、皿洗いをしていた。

おやつを作ろうと、調理場へと向かったなのははあまりに奇妙な光景に目を見張る。

「あれ？浦太郎さん何してるんですか？」

「ん？ああ・・・店長に怒れちゃったし、少しは真面目に何かしないと神様も店長も機嫌直さないんじゃないかと思ってね♪」

「うふふ。随分殊勝な心がけですね」

「神様はいいとして、店長赦してくれるかな？」

「大丈夫ですよ。ユーノ君も鬼じゃないですし、根は凄く優しい人だってことは知ってるじゃないですか♪」

「だよね♪」

「きっと許してくれますよ」

「へへ♪だといいな」

そう言いながら、浦太郎は皿を洗い終えると洗い残しと勘違いして鍋の中に入っていた油を捨てようとするが、なのははそれを見て止めにかかる。

「あ！何やってるんですか！？」

「え？ああ・・・本当だ。何やってるんだろう自分！？」

浦太郎は中に入っていたものが油だと理解すると、慌てて鍋を戻し、なのはは安堵した様子でこう言って来た。

「気を付けてくださいよ。流しに無暗に油を流すなんて真似は。海

や川が汚れますからね。海が汚れたら魚も食べられなくなりますし、川が汚れたら水も飲めなくなるかもしれませんから。今どき幼稚園児でも知ってるんですから・・・」

「あはは・・・そうなんだ。僕は幼稚園児以下の脳みそか・・・・・・あ」

と、その時浦太郎の頭に数時間前の自分の行動を思い出す。

「（そう言えば・・・）」

浦太郎は恋次と共に、無意識のうちに川に空き缶を捨ててしまったことを考えると、神妙な表情を浮かべる。

なのはは急に黙り込んでしまった浦太郎を気にかける。

「どうしたんですか？」

「いや。何でもないよ・・・♪」

「そうですか。あ、そうだ♪ヴィヴィオ探してきてくれませんか？今日のおやつはヴィヴィオの好きなキャラメルミルクとホットケーキですから。序に、ユーノ君に会ったら素直に謝ることをお勧めします」

「は～い♪」

浦太郎は明るく返事を返すと、ヴィヴィオを探しに外へと出かけ、なのはは早速おやつの作成に取り掛かり鍋を取り出す。

「さてと。ようし！美味しいの作るぞ！」

なのはは気合いを入れて調理に取り掛かろうとするが、このタイミングでコンピューターワールドのＡＭ３１が活動を始め、角から破壊光線を発射して、消毒の際に必要不可欠な塩素の濃度を操作した。

その結果、なのはが鍋に水を張ろうとした瞬間、蛇口より勢い余った濃塩酸が吹きだし、なのはを襲った。

「きゃあああああ！！！」

なのはは突然蛇口から出てきた塩酸と、塩酸ガスに咽びきながら、ユーノを呼びつける。

「げっほ！！げっほ！！助けて！！げっほげっほ！！！ゆ、ゆ、ユーノ・・・君！！」

すると、なのはの呼びかけに答えたユーノが現れる。

「なのは。どうかした・・・うわ！っげほ！げっほ！！何だこれえ！！！」

「わかんないよげっほげっほ！！早く何とかしてげっほげっほ！！」

「わ、分かったげっほげっほ！！！」

ユーノはなのはを下がらせると、吹き出す塩酸とそのガスを直接吸わないように口を押えながら水を止めにかかる。

この元凶を作ったＡＭ３１は、口から吹き出す塩酸ガスで基盤を溶

かすと、床るんだ足場を掘り進む形で基盤の中に潜り始めた。

地底へと潜りこんだＡＭ３１は中で破壊活動を活発にすると、水道局のコンピューターシステムを次々と破壊し、更には塩酸ガスをまき散らす。

ＡＭ３１による破壊活動が深刻な事態を生もうとしているその頃、ヴィヴィオを探しに街へと出かけた浦太郎は市内のあちこちを歩き回っていた。

「何処行ったのかな、ヴィヴィオは？」

すると、そんな折外回りの為に同じように市内を歩いていた吉良と、ちょっとした用事を足しに出かけていた恋次と出くわした。

「あれ、浦太郎君。」

「おう浦太郎。何してるんだ？」

「あ。二人とも。ヴィヴィオ探してるんだよ」

「それなら多分公園の方じゃないかな。ストライクアーツの練習してるんだよ」

吉良にそう言われると、浦太郎も納得して二人と一緒に最寄りの公園へと向かう。

吉良が予想を立てた通り、ヴィヴィオはノーヴェを始めとする面々といつも通りストライクアーツを始めとする訓練に明け暮れていた。

「はあああ！！」

「よし！もっとわきを締めて来い！」

「はい！」

傍から見れば非常に和やかな光景ではあるのだが、そんな時に限ってよ壮大にしなかった出来事が起こる。

なんと、公園に設置された水飲み場から突如として塩酸が噴き出したのだ。

「「「「「「！」」」」」」

練習を中断し、この予期せぬ事態に驚愕するヴィヴィオ達。

ヴィヴィオは近くを通りかかった浦太郎達を発見すると、三人に駆け足で近づいた。

「恋次さん！吉良さん！浦太郎さん！」

「ヴィヴィオ」

「いたいた。て言うかどうしたのそんな顔で？」

「大変です！水道が破裂しました！」

「「え？」」

「何？」

怪訝そうな顔を浮かべながら三人を公園の中へと案内するヴィヴィオは、勢い余って塩酸とガスを吹き出す状況を指さした。

「ほら！」

三人はその光景を見ると、思わず目を擦り、恋次は危険を感じて近くで呆然と立ち尽くすコロナたちの元へと駆け寄った。

「あああああ！！おい！てめぇら早く下がれ！！下がれ！！」

と、恋次が言っていた時、地面を伝って塩酸が恋次の靴に付着し、恋次は猛烈な暑さを伴う塩酸の威力に狼狽する。

「あちゃあちゃちゃちゃちゃちゃ！！！！！！！！！」

吉良は恋次のもとに近寄った。

「大丈夫かい、阿散井君？！」

「大丈夫な訳ねぇだろ！兎に角ここは危険だ！避難だ避難！！」

恋次の聡明な判断を耳にし、ヴィヴィオを始めノーヴェ達は避難の為にその場から離れ、それぞれの自宅へと帰って行った。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

さて、不測の事態が街中で発生していることを知った部隊長のはや

ては１０８部隊から帰ってくると、六課の調理場で起きた先ほどの事例や恋次達のを踏まえて、穴の開いた鍋の底を見るなり言葉を漏らす。

「ありゃありゃりゃ・・・酷いもんや・・・二人とも怪我はないんか？」

はやてが心配になってなのはとユーノにそう言うと、二人は割と平気な様子であった。

「私達は平気」

「うん。心配には及ばないよ」

だが、二人がこうして平気であるのに対して、ここに被害を受けた男が一人。

そう・・・恋次は塩酸を靴に浴びたことによって足の皮膚が炎症を起こしてしまい、今は冷水の中で冷やしている最中だ。

「俺は酷い目に遭ったんだぞ！」

「まぁまぁ」

吉良やルキアが宥める中、ヴィヴィオはこの事態をユーノに問い質す。

「ねぇユーノパパ。これってどういう事だろう？」

「う～～ん、いやぁね・・・水道局に問い合わせたんだけど、原

因不明の事態で苦情が殺到してるみたいなんだ」

「そうか・・・しかし何やろうなこれ？」

はやては鍋を持ちつつ、流しの方へと鼻を近づける。

「くんくん・・・酸みたいな臭いや・・・」

「酸？」

「危ないから近づかない方がいいよ」

「そやな」

すると、そんな時ユーノスの首を絞めていた未だ怒りの収まらないでいたナーノが、忽然と姿を消した鬼太郎の事を気に掛けた。

「あれ？モモタロス、何処行ったんだろ？」

「そう言えば、姿が見えないな」

「トイレでも行ったんじゃないですか？」

「トイレ――――――あ！」

ユーノを始め、この場にいる全員が重大な事に勘付くと、男どもは急いでトイレの方へと直行する。

案の定、鬼太郎はトイレの方で用を足している最中で、本日の快便を確かめるように便器の中を覗き込む。

「おうし！今日も元気だな！」

鬼太郎が水を流そうとした直前、間に合った様子で白鳥や吉良達がドアをノックしてきた。

「ピーチ！便であるか！？」

「ダメだ鬼太郎君！水を流すな！」

「そうだよ！爆発しちゃうよトイレが！！」

ナーノが必死でそう訴えかけると、不意にトイレの扉が開き、鬼太郎は力なく男たちの方へと倒れ込んできた。

「あ！先輩・・・」

浦太郎が鬼太郎を抱えると、恋次達は目を回す鬼太郎を見てとった。

「何だよこいつ気絶しちまってるぜ」

「あ、大丈夫流してない・・・でも臭い！！」

一同は悪臭漂うトイレの中から気を失った鬼太郎を運び込み、ユーノスはユーノの肩に乗ると事の事態を尋ねてきた。

「ユーノ。これは？」

「はい・・・恐らくアンゴルモアによる影響で間違いないと思います。」

「となると、グリードもいずれ・・・」

ユーノ達は早速この原因を調べるために、司令室へと戻る。

管理世界各地で同時多発的に発生したこの現象は、テレビの報道を通して全世界に通達される。

『ええ・・・事態を重く見たフォートナックス水道局は原因究明のため、管理世界全ての水道の本管を封鎖。人民への水の供給が断たれました。』

アンゴルモアを狙って32管理世界「ハイドロ」を訪れていたウヴァやアンクは、不敵な笑みを浮かべながらそれぞれ次のように呟いた。

「面白い。欲望のままにアンゴルモアがここまでの力を与えるとは・・・俺もそのうちに」

「成程。どうやら今度の騒ぎはなかなかに面倒な事になってるみたいだな。ま、人間が滅ぼうが俺には知ったことじゃないが・・・完全復活の前にある程度の欲望は残ってないとメダルが稼げないしな」

アンクはそう言うと、翼を羽ばたかせて移動を始め、ウヴァもまた怪人体の姿に化けるとバッタの脚力で以て飛び跳ねていく。

グリードが動き始めた丁度その頃、六課の司令室へと集まった前線メンバーな真剣な眼差しを浮かべながら、これから開始されるユーノと金太郎の調査を見守った。

二人は厳重にマスクを装着し、塩酸と化した水を見ながら金太郎が合図を送る。

「店長参りますぞ」

「オッケイ」

金太郎は早速水の中へと正極、負極のコードを入れ始め、ユーノはそこから伝わってくる情報をもとに解析を始めると、その原因が判明し声を上げる。

「分かったぞ。濃塩酸だ！」

「なっ！濃塩酸だと！？」

「それもかなり高い濃度だ。」

一応補足として説明しておくと、濃塩酸とは塩化水素の３７質量％＝１２ｍｏｌｄｍ－３水溶液が一般的で、４０質量％を越える溶液も調製可能だが、塩化水素の揮発が早く（蒸気圧が高く）、保管・使用に際して温度や圧力などに特別の注意を要する。

日本では毒物及び劇物取締法により塩化水素原体および１０％を超える製剤が劇物に指定されている。

一同が濃塩酸と言う事実を突き付けられ騒然とする中、ユーノスは別の事を調べていたナーノに問いかける。

「ナーノも何か分かったか？」

「ええ。管理世界の水道システムを統括しているのが、管理世界の37番『ハイドロ』にあるフォートナックス水道局なんですが、案の定消毒に塩素を使っていますね」

「だけどそれと塩酸が関係あるのか？」

何も知らないでいる無知なアギトがそう言うと、ナーノは呆れた様子でこう言った。

「そんなことありえる訳ないでしょうが。塩素を使ってるから水道の水が飲めるようになってるんだから。大体恋次さんや亀さんみたいな川を大切にしない奴がいるから、消毒しないとならないんですよ！」

ナーノが鋭い目つきで恋次や浦太郎を睨み付けると、聞いていた他の者達も一様に二人を睨み付け、恋次と浦太郎は気まずくなって反省の態度を見せる。

「あ・・・あの事か・・・悪かったよ。」

「僕も反省してます・・・」

二人が反省の態度を見せた後、ヴィヴィオが更に言ってくる。

「どっちにしても水道がこのまま駄目になったら私達は生きていけないよ！」

「ヴィヴィオ姉ちゃんの言う通りだ。お父さん、早く事態を解決したいからさ、僕に行かせてくれない？」

「分かった。じゃ、鬼太郎と浦太郎もついて行ってやってくれないか？」

「な！俺がこの小僧とまた！！」

鬼太郎がナーノを指さしながらそう訴えると、ナーノは不機嫌そうな顔を浮かべる。

「またって言い方は止してよ。僕だってこんなトイレで気絶するような腰抜けと一緒に行くのなんて、不本意なんだから」

「んだと！！！」

鬼太郎がナーノの一言に大声を上げると、その瞬間金太郎の拳が放り込まれる。

「ぬおおお！！」

「文句は・・・言わせぬぞ」

金太郎の形相に、鬼太郎は顔を強張らせ、素直に言うことを聞く。

「は・・・はい／／／」

と、言う訳で機動六課はナーノを始め、鬼太郎と浦太郎の三人を現地に送り込むと、その原因を作り出しているフォートナックス水道局へとやってきた。

現地にやってきた三人はアンゴルモアの反応を確認しながら、周囲を散策する。

「あれおかしいね？何処にもそれっぽいものは見当たらないけど・・・」

「ひょっとして空振りだったか？」

「そんな訳ないでしょ。表に出てないってことは、多分地下とかそう言う場所に身を隠してるんだよ」

ナーノはそう言うと、センサーの真下からアンゴルモア反応が強くなっていることを確認し、その場に立ち止る。

「ここです」

「でも地下に潜んでるって・・・一体どんな・・・」

浦太郎がそう思った、次の瞬間だ。

不意に彼らの背後から火球が飛んできたのだ。

ナーノはそれに気づく、ラウンドシールドを展開。

「！危ない！」

「「うおおお！」」

驚き返る二人であったが、頭上を仰ぎ見ると現れたのはアンクだった。

「は！何処に行っても目障りな奴だな」

「アンク！」

「く。やっぱり来ちゃったわけね。」

「オモしれ？！相手になってやる！」

鬼太郎はそう言うと、変身ベルトを巻きつけパスを翳す。

「変身！」

〈Ｓｗｏｒｄ　ｆｏｒｍ〉

赤い甲冑に身を包み、烈火を持った鬼太郎はアンクへと向かう。

「俺参上！行くぜ行くぜ行くぜ！！」

鬼太郎がアンクに向かっていくと、浦太郎とナーノも甲冑モードに身を包む。

「変身♪」

〈Ｒｏｄ　ｆｏｒｍ〉

「変身」

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

三人掛かりでアンクを相手に激闘を繰り広げる中、不意に地面が揺れ始めるが、その事には気づかず浦太郎は地面に降りると、フィッ

シャーマンを掲げる。

〈Ｗａｔｅｒ　Ｗｈｉｐｅｒ〉

「ウォーター・・・ホイッパー！！」

フィッシャーマンの杖の先から激流の鞭となった浦太郎の魔法がアンクを直撃し、水とは相性最悪なアンクは険しい顔を浮かべて地面に降りる。

「ち。舐めた真似を」

と、その時アンクの背後から何処からともなく雷が向けられると、その雷は浦太郎へと直撃する。

「ぐあああ！」

「亀！」

「亀さん！」

「これは・・・」

アンクが見覚えのある技にはっとした表情を浮かべると、バッタの跳躍で背後からウヴァが勢いよく飛んできたのだ。

「ほおおお！」

ウヴァは鬼太郎とナーノを攻撃した後、浦太郎に更なる一撃を加える。

「ぐあああ」

浦太郎は攻撃を受けると、地面を転がりまわる。

「おい亀！しっかりしろ！」

鬼太郎とナーノが浦太郎を気遣う一方、アンクはウヴァと睨み合う。

「ウヴァ！お前の虫頭でよくここが分かったな」

「ふん。俺もいい加減この時代になじんできたんだ。お前やカザリだけが特別だと思わないことだ。」

「言うようになったな。は！」

アンクはウヴァに向けて火球を放つと、ウヴァはアンクの炎に大きなダメージを負う。

「う！」

アンクは更に翼を羽ばたかせると、ウヴァに怒涛のような攻撃を加える一方、負けじとウヴァも雷を付の体してアンクを落とそうとする。

ナーノ達はグリード同士の争いに乗じて、一気にメダルを奪おうと画策。

「僕が二人に攻撃するから、モモタロスと亀さんは隙を見て」

「おし。やってやるぜ」

「チャンスは一度だけ。行くよ」

三人は分れると、それぞれの持ち場へと着き、ナーノは二丁拳銃に切り替えると、アンクとウヴァに狙いを定めてディバインバスターを発射。

「へへ。喰らえ！」

「「ぐあああああ！」」

アンクはディバインバスターに直撃すると、空中から墜落。

ウヴァもセルメダルを放出する。

そして、ナーノが待機していた二人に掛け声を出す。

「今です！」

「「うおおおおおおおおおお！！！」」

鬼太郎と浦太郎がそれぞれの武器を大きく構えて二人に突っ込んで行った・・・その時だった。

突然地面が大きくひび割れを起こしてしまい、ナーノ達を始めグリードの二体も重力に従って落ちていく。

「「「「「うわあああああああ！！」」」」」

地面に引きずりおろされたナーノ達が強く打ちつけた個所を抑えていると、不意に自分たちの影を覆い隠す程の陰に包まれ、目の前を振り向いてみると、そこに現れたのはカブトムシのような姿をした地下に身を潜めていたＡＭ３１であった。

「げ！まさかこれが・・・！」

「アンゴルモア反応確認。間違いない、こいつだよ！」

「だけどこれって・・・どう見てもカブトムシじゃない！」

浦太郎がＡＭ３１の姿を見ながらウヴァを一瞥すると、ウヴァは小馬鹿にされたことに腹を立てる。

「貴様！よくも比較してくれたな！」

「ははは！！これは傑作だな、ウヴァ！」

「アンク！貴様まで！」

と、言い争う間もなくＡＭ３１がナーノ達に向かって塩酸ガスを吐き出す。

ナーノ達はそれを回避することに成功するが、言い争いをしていた二体はその直撃を受けてしまい、それが切っ掛けで大きなダメージを負ってしまう。

「「のおおおお！」」

二体は致命傷には至らなかったものの、真面に戦うことが出来ない

ほどに追い詰められると、やむなくアンゴルモアを諦めることにした。

「ち。引くしかないか！」

「く・・・アンク！貴様らも覚えてろ！」

二体が戦線を離脱すると、鬼太郎は鼻で笑いながらこう言った。

「は！あいつらが勝手にやられて勝手に逃げ出したくせに、覚えろだとよ！」

「笑っちゃうよね♪」

「呑気に言ってる暇ないですよ。ほらまた来ます」

呆れた様子でナーノが二人にそう言うと、案の定ＡＭ３１は塩酸ガスをまき散らして三人を攻撃する。

三人は狭い空間の中で万遍なくまき散らされる塩酸ガスをその身に受けると、高い強度を秘めた甲冑にさえその影響が及ぶ。

「「「ぐううう！！」」」

苦戦を強いられる三人を見かねて、司令室のユーノはアシストウェポンとして、ハイパーマシーン格納庫から、地底を動き回ることが可能なジェベリンと飛行ユニットのファルコンを転送する。

「待ってろ三人とも。直ぐに助けてあげるからね。」

機動準備を整えると、ユーノはなのはと一緒に転送ボタンを押す。

「「ジャベリン、ファルコン。転送！」」

ボタンを押すと、格納庫の中のジャベリンとファルコンはユーノの転送魔法陣によって現地へと転送される。

現地に送られた二つのメカを目の当たりにしたナーノ達は嬉々とした表情を浮かべる。

「お父さんのだ！」

「ふう。助かった！」

ユーノはなのはにコントローラーを手渡すと、ジェベリンの操縦を委託する。

「なのは。ジェベリンの操縦を」

「うん！ジェベリン発進！」

なのははコントローラーを操り、地上に降下したジェベリンを稼働させ、地底の中へと潜りこませる。

「僕はファルコンの操縦をするよ。いくよ・・・作戦開始！」

ユーノはそう言ってファルコンの操縦を始めると、地面の割れ目から顔を覗かせるナーノ達に合図を送り、ＡＭ３１にミサイル攻撃を始める。

ミサイル攻撃を受けたＡＭ３１がファルコンに気をとられている間に、ジェベリンを操縦していたなのははその背後へと回り込む。

「ユーノ君。ＡＭ体の後ろに回り込んで攻撃するよ。地上まで追い出す」

「オッケイ。タイミング合わせて」

ユーノとなのはは互に呼吸を合わせて画面上を覗き込み、機会を伺うと、なのはは意を決してＡＭ３１の背後から攻撃する。

「ツインレーザー、発射！」

なのはがボタンを押すと、ジェベリンのドリルの先端からレーザー光線が発射され、それを受けたＡＭ３１は地上へと這い上がる。

地上に追い出すことに成功すると、今度は空中に控えていたユーノが操縦するファルコンがＡＭ３１を攻撃する。

「怪獣め。その角を破壊してやる！ミサイル発射！」

ユーノは照準を定めると、ミサイルをＡＭ３１の角へと発射。

「まだまだ！喰らえ！」

ユーノはその後も怒涛の連続攻撃を浴びせてＡＭ３１を攻撃する。

その隙に、ジェベリンを操縦していたなのはがナーノ達を激励。

『ユーノ君が気を引いてるうちに、早く止めを！』

「わかった。亀さん、モモタロス。集束砲で一気にやっつけるから、お父さんと」

「「おお！」」

ナーノの言葉を聞き入れ、二人はユーノと共にＡＭ体に攻撃を仕掛ける。

「烈火大斬撃・炎熱嵐！」

「ドルフィンドライブ！」

二人の同時攻撃がＡＭ体の皮膚を傷つけ、ＡＭ３１は悶え苦しみ、その後に続いてユーノとなのはがＡＭ３１の口を狙い撃ち。

「「はああ！」」

同時にボタンを押した二人の攻撃が瞬時に合わさると、強烈なレーザー光線がＡＭ体の口に入り込み、口の中で爆発が起こるとＡＭ体は得意の塩酸ガスによる攻撃できなくなった。

そして、このタイミングを見計らって集束作業が完了したナーノが銃口をＡＭ３１へと向け、掛け声を合わせる。

「行きます。全力・・・否定！」

〈Ｃｏｓｍｏｌｉｇｈｔ　ｂｒｅａｋｅｒ〉

「コスモライト・・・・・・・・・・ブレイカー！！！！！！

！」

ナーノが放ったコスモライトブレイカーは二階建ての建物に相当する大きさのＡＭ３１の体格をも簡単に呑み込んでいき、悲鳴を上げながらＡＭ３１は元の人間の姿へと分離し、その諸悪の根源だったアンゴルモアは砕け散る。

戦いが終わり、鬼太郎達と六課のユーノとなのはは笑みを浮かべる。

「やった！」

「おうし！」

「なのは！」

「ユーノ君♪」

二人は思わずハイタッチを躱し、見ていた他の面々は微笑ましく見守った。

やがて、アンゴルモアもどきではあったものの事件に巻き込まれた少年、トウドウはナーノ達に保護されたのち、普通の生活へと戻ることが出来、ユーノの強力のもと、水道局のシステム異常も早期に復旧し、水は元の綺麗さを取り戻した。

そして、今回の事件を体験して少しは水の大切さを理解した浦太郎と恋次は先日空き缶を放り投げた川へと赴き、ナーノと共にゴミ拾いをすることにした。

その現場を目撃した吉良や鬼太郎、ルキアの三人は声をかける。

「あ。やってるみたいだね」

「おーい亀。間違っても金落とすなよ！」

「恋次。見直したぞ。お前にも人並みの良心はあったのだな」

「うるせーよ！おめぇらもそこで見てないで手伝え！」

「そうそう僕らを見習いなって♪」

と、ここでゴミを拾っていたナーノが川の中である生き物を発見する。

「あ♪見てください、ザリガニ！」

「お！マジか！」

「どれどれ見せて♪」

三人がザリガニを見付けて無邪気な笑みを浮かべると、それを見ていたルキア達もまた心が晴れ渡り、いつの間にか川の掃除を手伝っていた。

無意識に自然を汚してしまう、僕らもまた・・・・・自然の敵となりうるかもしれない、と思うナーノ達であった。

水と酸と地底怪獣（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は塩素の働きについて教えよう♪」

「塩素は水道水の消毒に使用されており、水道法の規定で、各家庭の蛇口で1リットル当たり0．1　mg以上の濃度を保つように規定されている。一方、有機物と塩素が反応することにより、塩素臭（カルキ臭）が発生するほか発癌性が疑われるトリハロメタンを生成するといわれ、同様に塩素で汚水処理を行うと水路に塩素化有機物が流れ出てしまうのではないかという懸念の声もある。」

「ただし、コレラなどの病気がほとんどの国で駆逐されたのは塩素を含んだ水道水のおかげでもある。近年は水道水の高度処理が進み、塩素臭は以前に比べて弱まっている。ただ、誰かが間違って塩素の濃度を間違えると、魂界みたいなことが起こりえないかもしれないね」

と、ここでナーノが旅先での塩酸に関わる話をし始める。

ナ「前にさ、間違って僕のボランティアのところの奴が体に塩素を浴びちゃったことがあってさ・・・あの時は本当に焦ってたな」

ユ「へぇ。大丈夫だったのかいその人？」

ナ「僕が適切な対処法を教えたから大事には至らなかったよ。みんなは、間違って塩素を浴びてしまった場合、直ちにその場から離れ、着ていた衣服を脱ぎ、毛布に包まるなどして体を温めなければなら

ないよ♪」

ナーノが分かり切った様子でそう言うと、ヴィヴィオは不意にある疑問を投げかける。

ヴィ「ねぇ。前から思ってたんだけど、ナーノってどうしてそんなに色んなことに詳しいわけ？普通の１６歳とはとても思えないほど幅広く知ってるでしょ？」

ナ「うんとね♪その件に関した次回の最初に話そうと思うんだ♪僕がどうしてこう色んなことに関してこと細かく歳不相応に知っているのか♪」

果たして、その理由は何なのか？

次回の冒頭で！

魔導師図鑑ハイパー！

特別企画・キャラクター交流会！！

読者である夜御倉龍元の要望に応えて、今回はキャラクター交流会と題してメッセージを送ろうと思います。

ユ「どうも、ユーノ・スクライアです♪」

一「その師匠の黒崎一護だ」

ナ「で、僕が息子のナーノ・Ｔ・スクライア♪始まりましたよ～～～この企画！いよいよ本格的に動き出しました！」

一「ああ。さて、この短い時間の間にまず何を言えばいいんだろうな？ユーノ、何か伝えておきたいことはあるか？」

ユ「そうですね。取りあえず作者重要大事さんからの質問をベースにこれだけはマズイっておきましょう」

そう言うと、ユーノは作者の気になった点をまとめたメモを取出し、順に読み始める。

ユ「重要大事よりの質問。一、龍元にとってユーノ君とはどういう人ですか？また、この小説のユーノ君は気に入ってもらってますでしょうか？あればその理由と具体的に気に入ってる場所、話などを教えてください。二、龍児さんに質問です。先日の話で書いてサムライ・ドラを高く評して如月隊長とかいう人と雰囲気的に似てるとフェイトさんが言ってましたが、他にもどう似ているのかを教えてください。三、みなさんに質問。ナーノとなのはの間にはどんなすれ違いあると思いますか？」

一「返事は後日、換装や活動コメントに送ってください」

ナ「お返事、待ってマース！」

ユ「次回は、衝撃の爬虫類ヤミーの登場です！」

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

ス「ナーノってさ、今さらだけど学校とかは行ってたの？」

ス「いよいよ、爬虫類グリードの能力が見られるよ」

リィ「そんな・・・バカな・・・！」

ユ「こんなことが・・・！？」

ク「どうして父さんがここにいるんだ！！！」

第１７８話　クロノとコブラと黄泉の父

登場人物

トウドウ・ゼラストック

声：菅原剛

第３２管理世界「ハイドロ」の中学校に通う中学生。水道水が自分の体質に合わないことに腹を立て、それに付け込んだアンゴルモアの思念体に憑りつかれて地底怪獣テラガイヤー（ＡＭ３１）となり、水道水を利用して人々を混乱させた。

地底怪獣テラガイヤー／ＡＭ３１

身長：８９メートル

体重：６万２千トン

地底（基板のシリコン）に潜り込んで物を破壊する怪獣でカブトムシのような甲殻昆虫に類似したフォルムを持つ。角から破壊光線を出し、口からは塩酸ガスを吐き出す。コンピューターシステムに忍び込むことが出来、その能力を使ってフォートナックス水道局のコンピュータを襲撃。システムを組み換え、水を危険な濃塩酸に変化させた。ナーノ達が到着するのを見計らって現実世界で実体化し、事前に地下に潜って罠を張り巡らせナーノ達を捕らえ、地底からの塩酸攻撃で苦戦させるが、ファルコンとジェベリンが登場した事により形勢逆転。地上でファルコンと鬼太郎達の相手をしている隙にナーノにコスモライトブレイカーの発動を許してしまい、最後はその攻撃で倒された。

クロノとコブラと黄泉の父　（前書き）

ク「世界は、いつだって・・・こんなはずじゃないことばっかりだ」

「それに逃げるも立ち向かうのも人の自由だが、自分の不幸に他人を巻き込んでいいはずはないんだ」

クロノとコブラと黄泉の父

これまでの、ユーノ・スクライア外伝

未知なる力を秘めた「コアメダル」。

そして欲望を暴走させる禁忌の物質「アンゴルモア」。

これを狙うのは、欲望の怪人・・・ウヴァ・カザリ・アンク。

そこに割り込んで使命を果たそうとする男、竜神の寵児こと、ナーノ・T・スクライア。

激化する争奪戦に巻き込まれた人々。

彼等に救いの手を差し伸べるのは、第二のオーズと呼ばれる絆の完現術士こと、ユーノ・スクライアと機動六課。

戦いの果ては、いまだ見えない。

〈ｋｏｋｕｇｅｔｕｔｏｕｋａ〉

ユ「黯月――――――――刀架」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

〈ヴィヴィオSide〉

中等部にもだいぶ慣れ始めた春先の出来事。

ヴィヴィオ達仲良し五人組は授業が終わり、真っ直ぐに家路を目指していると、そんな中、バウラだけは先ほどからため息ばかりをついて項垂れた様子だった。

「はぁ・・・」

いつものバウラの元気がないのを心配し、ヴィヴィオ達が声をかける。

「どうしたのさ、バウラ。学校が終わってからずっと元気ないけど？」

「もしかして、今日の小テストの点が良くなかったとか？」

リオの一言を耳にし、バウラの心にそれが深く突き刺さる。

そして、バウラは鞄の中から忌まわしい答案用紙を取り出す。

「ほれ・・・見ろよこの有様！」

ヴィヴィオ達が答案用紙を受け取り中を拝見すると、それは所謂赤点で、それが指し示す意味は「オチコボレ」であった。

「あちゃ～～～３０点はいたいや～～～」

思わずリオがそう呟くと、バウラは小刻みに体を震わせ声を上げる。

「やべぇよ！俺、帰ったら母ちゃんに殺されるんだけど！！中等部

に入ってから勉強急に難しくなりやがって～～～！！チクショー！！」

「そうですか。私はそこまで難しいとは」

「私も」

初等部の頃から学年トップをひた走るコロナや、ユーノとなのはの影響からよく本を読み、高い演算能力を持つヴィヴィオにとってはそれほどの事ではない問題も、バウラにとっては大問題であった。

そんなバウラにうっかりミツオが口を滑らせる。

「バウラがバカなだけだって！」

「んだとミツオ！！」

「ひいいいい！！！！！」

バウラは自分を馬鹿にしてきたミツオを追い回すと、ヴィヴィオ達が見ていない場所でこっ酷い仕置きを始め、一方でヴィヴィオ達三人は別の話題で盛り上がる。

「まぁでも。実際初等部の頃と比べれば高得点がとり辛くなってるのは確かかな」

「うんうん。私も文系科目は得意だけど、理数科目は油断すると一気に分らなくなるからね」

「勉強をおろそかにせず、スポーツを両立させるのは至難の業です

わね」

「その点で言えばヴィヴィオのお父さんは凄いよね！ほら、運動できるし勉強と言うか何でも知ってるしさ！」

「ユーノパパは特別だから。私達とは出来が違うんだよ・・・――――あ。出来が違うって言うなら、ナーノもそうかも」

ヴィヴィオが不意にナーノの事を話題に出すと、それに食いつくコロナとリオ。

「ナーノって・・・もしかして未来から来たって言う例の弟！」

「うん。パパを助けることとグリードを倒すのが使命だって言ってて、向こうではボランティア魔導師って仕事をしてたんだって」

「ボランティアで魔導師・・・ですか」

すると、これに興味を持ったバウラが満身創痍のミツオを引きずりながら近づいて来た。

「へぇ。こっちじゃ魔導師の多くが管理局とかに入ったりするのに、ヴィヴィオの弟はボランティアか。」

「でも、それと出来が違うのとどう関係が・・・／／／」

「うんと・・・あんまり自分の事話したりしないんだけど、ナーノって本とか活字が嫌いだって言う割に、新聞とかは読むし、組織社会の事とかパパ並みの高い知識を持ってるし、初めての経験にも全然驚かないんだ。おまけに、戦いを趣味とか遊びでやるものじゃな

いって割り切ってて、あのミカヤさん相手に完全に圧倒しちゃうほどの強さだし」

「ミカヤさんを!?」

コロナたちはインターミドル、都市本戦3位の実力者であり、自分たちも尊敬する天瞳流師範代のミカヤ・シェベルの名前を耳にし、更にナーノに興味を抱く。

「へぇ～～ナーノってヴィヴィオのお父さんと同じぐらい強いんだね」

「あはは・・・あれは強いって言うより、超越してるって言った方がいいかも・・・それにナーノは強くなりたいって一度も思ったこともないらしいし」

「ますます興味深い話だね」

「一度でいいから見てみたいですわ、ナーノというあなたの弟に」

そう言いながら、五人が公園の前を通りかかった時だった。

バウラが不意に奇妙な物音を耳にする。

「お?」

「どうしたの?」

「なんか変な音聞こえねぇか?」

バウラがそう言うと、ヴィヴィオ達も耳を澄ませて音を聞くと、ヴィヴィオはその聞き覚えのある音楽に表情を一変させる。

「あれ・・・これってもしかして・・・」

ヴィヴィオは音の聞こえてきた方に向かってひた走る。

「ヴィヴィオ!?」

「おい、どうしたんだよ?」

急に眼もくれず走り出したヴィヴィオの後ろを追いかけるコロナたち。

そして、ヴィヴィオとコロナたちは公園の中に入っていくと、そこで目の当たりにしたのはあまりにも意外な人物であった。

「あ!」

「あれは・・・」

なんと、目の前にいたのは先ほど自分たちが噂をしていたナーノその人であり、ナーノは現在ヴィヴィオ達の目の前で独自のブレイクダンスを披露していた。

「ナーノ!」

「え!あれが!?」

コロナ達は自分たちの予想とは大きく異なるヴィヴィオの弟、ナー

ノの姿に目を丸くし、踊りに集中していたナーノもヴィヴィオ達の存在に気づき、ヘッドホンをとって近づいて来た。

「やぁ♪ヴィヴィオ姉ちゃん、奇遇だね♪」

「「「「ヴィヴィオ姉ちゃん？」」」」

背丈も雰囲気もまるで大人なナーノから発せられるヴィヴィオに対する呼び方に誰もが声を揃えてそう言うと、ナーノは目の前で驚くコロナ達を見てこう言った。

「あれ？バウラさんにコロナさん。リオさんとミツオさんまで！」

ヴィヴィオ達はナーノの発言を聞き、意外そうな顔を浮かべる。

「ナーノ、みんなのこと知ってるんだ。」

「まぁね♪それより学校帰りだよね。」

「うん。ナーノは何してたの？踊ってたみたいだけど？」

「僕さ、ブレイクダンスはこう言う広い場所で伸び伸びやるのが好きなんだ♪何の束縛もない中で体を動かすと、開放感に満ち溢れるって感じで♪」

そう言うと、ナーノは指を鳴らして周囲からバックダンサーを呼び集める。

そして、唖然とするヴィヴィオ達の前で自分のテーマ曲に合わせた自由奔放な動きが特徴の非常に切れのあるブレイクダンスを始めた。

傍目から見ても、それは最早芸術と呼んでもいいような完成度の高いもので、ヴィヴィオを含めコロナ達も抜群の身体能力とリズム感で踊り散らすナーノに思わず言葉を漏らす。

「す・・・凄いキレのある動き・・・」

「あれだけの動きを短い踊りの間でよく・・・！」

「だけどあれがヴィヴィオの弟だとは正直思えねぇな」

「うん。なんか期待してたのと全然違ってたし」

「へへ。それは私もだよ。でも間違いなくナーノはママとパパの息子だよ。なんだけど・・・」

「けど？」

コロナが聞き返すと、ヴィヴィオは複雑な表情を浮かべながらナーノとなのはの間に出来ている溝を気にして困ったようにつぶやいた。

「何て言うか・・・ナーノって、ママには凄く冷たいんだよね・・・」

姉として、一人の娘として、ヴィヴィオはなのはとナーノも自分と同じぐらい仲良く接してもらいたいと切に思ってしまうのであった。

◇

〈スカリエッティＳｉｄｅ〉

一方で、アルハザードを拠点とし、欲望のメダルであるコアメダルとその生命体であるグリードを陰で手引きする広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティの方はと言うと、先日蘇らせたばかりのリニスから近況報告を聞いていた。

「リニス君。どうだね、アリシア君の方は？」

「上々ですよ。まぁ、年頃の娘と言うこともあってやる気が抜けることもありますが、流石はプレシアの娘ですね。素質は申し分ありません」

「ふふふ。成程。面白いね。」

「それに引き替え、ミスターカリは何を考えているのやら？何度注意しても人形の方ばかりに目を向けて話す始末で、食生活も杜撰です。しかし！私は必ずやあの方の心を説き伏せてみせますわ！」

リニスは教育者としての誇りを胸に抱き、カリの更生に全力を注ぐ意向をスカリエッティに示すと、スカリエッティは笑みを浮かべる。

「ふふ。君の教育熱心なところ・・・私は嫌いじゃないよ。」

「そうですか。ありがとうございます」

「ふふふ。ところでリニス君。話は変わるが、君は一度契約満了により死んでいるが、こうして私とアルハザードの技術を以て再び命を受けた訳だ。」

「ええ」

スカリエッティは机から離れ、徐に腕を組みながら辺りを徐に歩きだし、リニスにとっては非常に意味深な言葉を呟いてきた。

「だがしかし、“死者を蘇らせる”ことが出来るのは、果たしてアルハザードの技術だけなのかね？」

「え・・・何を・・・」

リニスはスカリエッティの言葉を耳にし、一瞬の戸惑いを見せる中、スカリエッティはリニスの方へと振り返り、嬉々とした表情で言って来た。

「私は見つけ出したんだよ。全く別の形で死者を蘇らせ、その欲望を解放する力を・・・ふふふはははは！」

甲高い笑いを上げるスカリエッティとは対照的に、そのスカリエッティと手を組み、アンゴルモアとコアメダル集めに精を出す欲望の怪人、アンクは彼がお土産と称して自分に与えた詳細不明の橙のコアメダル三枚を木の上で凝視する。

「（貰ったものはいいが・・・一体このコアメダル・・・どういう力を秘めてる？）」

アンクはそのコアメダル三枚を覗きながら、そこに描かれている生物の意匠を確認。

「（コブラに・・・カメ。それにワニ、か――――――）」

と、そんな時・・・不意にアンクの身体に奇妙な気配が走った。

「！」

アンクがその気配に藩王して条件反射的に振り返ると、周りには何の姿も見えなかった。

「なんだ今のは・・・気のせいか・・・――」

アンクは気のせいだと判断すると、翼を広げて場所を移動する。

しかし、その時アンクガ気のせいだと思っていたものの正体は直ぐに近くに潜んでおり、そのものは茂みから徐に姿を見せる。

茂みから現れたのは黒いローブのようなマントに身を包んだ左目に刀傷を負った黒髪の男で、その男の瞳はユーノとユーノスと同じ翡翠色。

「・・・・・・・・」

男は無言のままミッドチルダのとある場所へ向かう。

彼が向かったのは、死者の魂が眠る場所――――――墓地である。

墓地にやってきたその男が中を散策していると、そとで彼が目に付けたのは、『クライド・ハラオウン』と名が刻まれた墓標であり、墓標には家族が備えたであろう遺留品のペンダントが起こされていた。

すると、それを見た男は袖口からセルメダルを一枚取出し、その遺留品であるペンダントに向けてセルメダルを投げながらこう言った。

「失われしその欲望――――――――――いまここに、解放せん」

セルメダルが投げられると、ペンダントに突如として出現する投入口。

投入口にセルメダルが投下されると、眩いばかりの光が生み出され、欲望の力より誕生したのヤミー・・・ではなく、一人の男であった。

その男は、クロノによく似た容姿を持ち、傍らに立っていた墓標に書かれた自分の名前、「クライド・ハラオウン」を確認すると、生前愛したもの達の名前を口にする。

「――――――クロノ。リンディ」

そして、クライドは二人の事を追い求めるかのように墓地の外へと歩き始め、いつの間にか彼を生み出した翡翠の瞳の男は消えていた。

◇

〈クロノＳｉｄｅ〉

その前に、ここでちょっとしたおさらい。

クロノ・ハラオウン　３０歳。

時空管理局本局・次元航行部隊提督、艦船「クラウディア」艦長。

現在は機動六課に出向の身で、全隊長陣のリミッター解除を出せる存在であり、フェイトの義兄。

そして、絆の完現術士ユーノ・スクライアの悪友である。

平時こそは冷静沈着で、魔導師としての実力も加齢を感じさせぬほどの一級の実力を保持する彼だが、今日はそんな彼の夢の中を覗くことから始めようと思う。

クロノが見ているのは、幼き頃の自分と今は亡き父である時空管理局提督、艦船艦長だったクライド・ハラオウンと戯れる記憶である。

二人は久しぶりに過ごす家での休暇を堪能していた。

『ははははは！』

『そら。クロノ』

『わぁーい！』

幼きクロノはクライドからボールを受けると、無邪気な笑みを浮かべながら彼に向かってボールを投げつける。

『行くよ。それー！』

クライドは投げられたクロノのボールを受け取ると、以前よりも強さを増したことに気づき、驚いた様子だった。

『おっと』

クライドはボールを受け取った後、息子の元へと近づき笑みを浮かべて頭を撫でる。

『クロノ。随分と強く投げられるようになったな。』

『へへ。』

と、そんな時、家の中から現在よりも大分若かかった時のリンディがエプロン姿で声をかけて来た。

『あなた。クロノ。ご飯ですよ』

『ああ』

『はーい！』

リンディに呼ばれた二人は家の中へと入ると、家族団らんの時間を穏やかに笑って過ごした。

『『『ははははは』』』

そんな穏やかな時間を過ごすことが非常に稀有であったハラオウン家。

今日もクライドは管理局の提督として、重要な任務の為に長期家を空けることを余儀なくされ、名残惜しくクロノとリンディに見送られる。

『それじぁ、留守を頼むよ。リンディ』

『体には気を付けてね。帰ったらうんと美味しいモノ作ってあげる♪』

『ああ。楽しみにしてるよ』

クライドがトランクに鍵をかけると、クロノがリンディの横で話しかける。

『お父さん。出張、結構かかる？』

『そうだな。今回のロストロギアはそれなりに危険なものなんだ。一カ月ぐらいはかかるかもしれない』

『そっか・・・』

少し寂しげな顔を浮かべるクロノを見て、クライドは一度考えると、懐から何かを取り出しつつこう言って来た。

『心配するな。お父さんはクロノや母さんを残して何処かり行ったりしないさ。あ、そうだ。念の為、これを渡しておくぞ』

そう言って、クライドはクロノの手の中に秘かに購入していた星のペンダント二つを入れる。

『これって・・・』

『お守りだ。これで、父さんもお前も何があっても大丈夫だ。クロノ。母さんにもしものことがあったら、その時は・・・お前が母さんを守ってやるんだぞ』

『・・・うん！』

力強く父の言葉を聞き入れ返事をするクロノ。

クライドはそれを見て破顔一笑すると、トランクの鍵をしっかり締めて、徐に玄関のドアを開ける。

『じゃ、行ってくる』

『いってらっしゃーい』

リンディが笑顔で夫の姿を見送った後、クロノは外へと飛び出し、自分たちから遠く離れて行く父に向かって大声で見送った。

『お父さーん！いってらっしゃーい！いってらっしゃーい！』

『ああ！』

クライドは、親指を突き立てクロノの言葉に応答する。

そして現実と言うものは残酷で、この言葉を最後にクライド・ハラオウンは闇の書の暴走に巻き込まれ、艦船「エスティア」と共に人生に幕を下ろすこととなった――――――

クロノがそんな夢を見ていると、不意に暗闇から今の自分にとっては非常に聞きなれた女性の声が聞こえてきた。

「・・・ノ。ロノ・・・・・・・クロノ。」

「う・・・・・・」

珍しく机に突っ伏して居眠りをしていたクロノが目を覚ました時、目の前に飛び込んできたのは義妹であるフェイトの顔だった。

「起きた？」

「フェイトか・・・――――僕は・・・」

「眠ってたみたい。珍しいね。仕事中にクロノが居眠りなんて」

「・・・・・・」

クロノは自分でも驚くぐらいに深く寝入っていたらしく、窓の外を見ると、既に夕暮れ時で時刻も６時を遠に過ぎていた。

フェイトはそんなクロノに笑みを浮かべながら徐に声をかける。

「どうしたの？なにか懐かしい夢でも見たとか？」

「・・・まぁ、そんなところだ」

「眠ってる間に、簡単だったから机の上の書類は私が出しておいたから。」

「そうか。すまないな」

「お礼を言われるほどじゃないって。さぁ、もうすぐ夕飯の時間だ

からさ。早めに来てね」

フェイトは笑顔でそう言うと、先に部屋を出て、食堂の方へと向かった。

クロノはフェイトが部屋から出て行ったあと、神妙な表情を浮かべながら椅子に深く背を垂れながら、先ほどの自分の夢の事を思い出す。

「・・・――――いつ以来だろうか。夢でも、父さんの声を訊いたのは」

そう言うと、クロノは懐に仕舞い込んでいた亡き父が出発前に残して行った肩身のペンダントのうちの一つを取り出し、心の中でこう呟いた。

「（結局、父さんはあの後、僕と母さんのところには戻ってこなかった。父さんの最期の任務・・・それは皮肉にも闇の書の護送だった。封印された闇の書は、父さんが乗っていたエスティアの艦船コントロールを奪い、結果的にグレアム提督の判断もあって、アルカンシェルによって蒸発した。）」

クロノはその事を思い出すと、ペンダントを強く握りしめる。

「僕はあのあと、父さんが死んでしまったことを直ぐには受け入れられなかった。母さんも・・・泣いてるばかりの僕をずっと慰めていたけど、夫を亡くして平気でいられる訳もなかった」

クライド・ハラオウンの殉職を受け、幼かったクロノは父の死を前に悲しみに打ちひしがれていたが、それを必死に慰め全てを受け止

めたのがリンディだった。

しかしクロノは知っていた。

そのリンディがクロノが見ていない場所で声を張り上げてクライドの喪失に打ちひしがれていたことを。

クライドの死が切っ掛けとなり、クロノ・ハラオウンは自分の突き進むための道を決め込んだ。

それこそが、時空管理局員としての人を救える道だった。

「（だからこそ僕は決めたんだ。こんな筈じゃないことばかりの世界で、こんな悲しい想いを他の人にはさせない。僕や母さんのような、被害者を生み出さないと・・・この道を選んだ。だが――――――）」

と、ここでクロノに一つの葛藤のような複雑な感情が生まれると同時に、ある人物の言葉が脳裏に蘇る。

それは、同じ人を救う道をひた走る身でありながら、組織に迎合することなく無償で救いの手を差し伸べる男、悪友でもあり親友でもあるユーノの言葉だった。

『手が届くのに手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ。』

『僕は今やられることをやるだけ。それだけで十分なんだ』

ユーノの前向きでありながら、決して欲を見せない言葉に思わずた

め息をつくクロノ。

「ふう。あいつと違って、僕は本当に何かをやれてきたのか・・・手を伸ばせる状況で手を伸ばしてきたのか。失くしてしまった過去は――――――二度と変えることが出来ない」

クロノは淋しげな表情でそう呟くと、脳裏に蘇る父の笑顔を思い出しながら、天井を仰ぎ見こう言った。

「父さん――――――僕は本当に、為すべきことをしているのでしょうか」

◇

〈ナーノＳｉｄｅ〉

クロノが父の事を考え物思いに考え込んでいるその頃、先に食堂に戻ったフェイト達前線メンバーの多くが夕食にありついており、ナーノはフォワード五人の席に座ると、純和風のメニューをお盆いっぱいに広げて箸を二つに割る。

「いっただきまーす♪」

ナーノは嬉々とした様子で、お椀の中に入っていた納豆に醤油をかけ、それを慣れた手つきでよくかき回す。

ティアナは見慣れない納豆の見た目と独特の臭いに思わず険しい顔を浮かべる。

「う・・・ナーノ・・・あんたよくそんなものを・・・／／／」

「え?納豆ですよ。日本人にとってのソウルフード。」

「日本人じゃないよね、ナーノは」

「ティアナさんは苦手ですかこう言うネバネバした食べ物♪」

ナーノは飄々とした笑みを浮かべながらワザとにティアナに納豆を近づけると、ティアナは納豆忌み嫌った様子で目を瞑る。

「ちょっと!それ近づけないでよ!あああも臭っ!!」

「この臭いのがまた美味しいのに・・・あん!うん!美味い!!」

ナーノは納豆を口に運んで味を確かめると、それを豪快に山盛りのご飯の上に乗せてこれまた豪快に口の中へと流し込む。

スバルやギンガはこれを見て、笑みを浮かべながら言って来た。

「あはは。お父さんの先祖も地球の出身だから、そう言うのは多分好きだと思うな」

「私だって、結構好きよ納豆♪」

「私は絶対無理です・・・／／／」

ティアナは完全に納豆に拒否反応を示す。

と、ここでそんなナーノの元へ歩み寄ってくるユーノ、なのは、そしてヴィヴィオの三人。

「お。夕飯は納豆なんだ♪」

「お父さん♪ヴィヴィオ姉ちゃんに・・・お母さん。」

「へぇ。ナーノも和食が好きなんだ」

「まぁね。」

なのはがそう尋ねると、ナーノは余所余所しく声の調子を下げてそう答え、再び納豆を食べ始めると、なのはは相変わらず自分に対して冷たいナーノに戸惑いを感じる。

「う・・・なんかユーノ君と態度違わない？」

「気の所為だって」

「気のせいじゃないって・・・なんかトーン落ちてるもん」

なのはがそれを気にして意気消沈とするのを見て、スバル達は食事中のナーノに言う。

「ナーノ。なのはさんがちょっと悲しそうだよ。」

「大丈夫ですって。お母さん強い人ですから。このぐらいの事、気にもしませんって」

「あの・・・結構気にしてるんだけどな・・・」

なのはがかなり気にした様子で暗い顔を浮かべるのを見て、ヴィヴ

ィオはユーノに耳打ちで話しかける。

「パパ。どうしてナーノってこうもママにはあれなのかな」

「う～～ん・・・謎だね」

そう思いながら、ナーノの近くの席へと座る高町・及びスクライア家三人。

未だ気にした様子でなのはが悲しそうな顔で食事をしていると、思わず見ていられなくなったユーノやヴィヴィオはスバル達に合図を送り、受け取ったキャロはあからさまにこう言って来た。

「あ、そうだ。ちょっと気分転換に話でも変えましょうか」

「それがいいよ、キャロ。」

「だったらここはナーノに今まで聞いてなかったこととか聞いてみない？」

「僕にですか？なるべく未来の事は答えたくないんですけど・・・」

「どうして？」

「万が一僕の発言が時空連続体に影響を及ぼしたりしたら、大変な事になるじゃないですか」

それを聞いた瞬間、ユーノなど一部を除くもの以外の誰しもが目を点にする。

「何その時空連続体って・・・」

「そんな難しい言葉何処で覚えたの？」

と、ここでどうしても気になった様子でスバルがナーノに次の質問を聞いてきた。

「ねぇ。ナーノってさ、今さらだけど学校とかは行ってたの？」

「そりゃまぁ、人並みに」

「１６歳ってことを踏まえると、中等部を卒業してから真っ直ぐ訓練校に入ったって感じかしら？」

ティアナが大方の予想をつけてナーノにそう言うと、ナーノは真顔を浮かべ、みそ汁を啜りながら衝撃的な事を暴露する。

「いえ。僕の最終学歴“大学”ですけど」

「「「「ぐげええ！！」」」」

「「「「「ずこーん！！！」」」」」

「「「「「「「「「「でえええええ！！！！」」」」」」」」」」

爆弾発言を口にされた瞬間、ユーノ達一同は度胆を抜かれて盛大なリアクションをとった。

そして、信じられない様子でなのはやヴィヴィオが若干硬直した様

子でナーノに指を向得て声を上げてきた。

「えええええええ！！！」

「だだだだだだだ、大学！！うそーー！！」

「ホントだよ、ヴィヴィオ姉ちゃん♪」

ナーノがねこなで声でそう訴えかけると、すぐさま鬼太郎が飛び出し反論する。

「おい小僧！嘘ならもう少し真面なのをつけ！そんな出鱈目誰が！」

「そんなに言うなら、これ見りゃわかるでしょ。」

「あ？」

ナーノは訝しげな鬼太郎や他のメンバーが注目する中、懐から大学の学士課程を修了したことを現す、所謂卒業証書を取出し全員に公開する。

「これ。大学を卒業する時にもらった学士課程の修了証書。僕８歳で卒業したんだ♪」

「「「が・・・！」」」

なのは・フェイト・はやてはその言葉を耳にした瞬間、頭上より巨大な岩が降り注ぐ。

また、スバル達や他の前線メンバーも驚愕の表情を浮かべて動揺を

隠し切れなくなった。

「は、８歳で大学を！？」

「しかもこの大学・・・アルハンブラナスル魔法大学って言ったら、ミッドの最高学府の中のトップで、店長の母校だよ！」

「そう言えばユーノ君、そこの大学院を私と出会う前に卒業したって言ってたような・・・！」

「う、うん・・・一応そこの博士号も持ってるし・・・」

顔を引きつった様子のなのはの横でユーノがそう言うと、肩に乗っていたユーノスも苦笑をしながらナーノのこれまでの類まれなる才能に納得する。

「脈々とユーノの血は色濃く息子に伝承したという訳か。ん？じゃあお前が訓練校に入ったのは！？」

「大学に入学したのが６歳で、それから２年ぐらい後なって、大学と一緒に飛び級で卒業しました♪しかも期間は１年の首席で」

「１年！！しかも首席！！」

ナーノが入学した訓練校は、偶然にもスバルとティアナの母校であり、ナーノは未来でその訓練校に於いて、稀代の才能を発揮し僅か一年と言う短い期間で卒業してしまったのだ。

最早言葉すら失いかけるユーノ達にナーノは飄々とした様子で次のように言って来た。

「いや～～なんていうか、ホント訓練校の訓練ってバカバカしいの一言というか生ぬるいというか・・・お父さんや一護さんたちにしばきあげられることのほうがよっぽど辛かったですよ。ははははは♪」

その言葉を聞き、唖然とする中、恋次やヴィータはこう呟いた。

「そ・・・そうか・・・こいつの考え方が酷く冷めてて、色んなことが出来過ぎる理由はそう言うことにあったのか・・・」

「親子そろって末恐ろしいな・・・」

すると、ナーノの天才ぶりを聞かされた瞬間、自称「平凡な成長をひた走る」と宣っているヴィヴィオは酷く沈み込んでしまった。

「う・・・急にまた姉としてのポテンシャルが・・・・・・があああ！」

「ヴィヴィオ！？」

ヴィヴィオはショックのあまり目を回してその場に倒れ込むと、これを見たナーノは絶望にも似た声を上げる。

「あああああ！！！ヴィヴィオ姉ちゃん！！！しっかりして！！！！」

「誰のせいでそうなったと思ってるんだよ」

思わずそう呟いてしまう鬼太郎であった。

それから数分後、気を取り戻したヴィヴィオであったが、完全に自分の才能とナーノの超越した才能を比較してしまい、ネガティブオーラを全開にして壁の隅で体育座りを決め込んだ。

「はぁ～～どうせ私はナーノと違ってレベル低くて平凡で不真面目な聖王のクローンですよ・・・」

「ヴィヴィオ姉ちゃんしっかりしてよ！僕はそんなヴィヴィオ姉ちゃん見たくないって！」

「どうせ私なんか・・・私なんか・・・／／／」

ナーノは弟して、こんな悲観的なヴィヴィオを見たくない様子で必死に慰めようとしていた。

周りの大人たちはここまで落ち込んでしまったヴィヴィオに哀れみを抱く。

「あ～あ。完全にネガティブサイクルに入り込んでしもうたな・・・」

「ああなったら、当分は直らないですね」

「しかし8歳で大学卒業って・・・どんだけ生まれながらの天才だったんだ！？」

と、ここでヴィータの一言にすかさずナーノが反応する。

「ちょっと。人の事天才って呼ぶの止めてくれません。聞くだけで

虫唾が走るんですから！」

「お、おお・・・悪りー」

これを聞くと、なのははユーノの隣でこう言って来た。

「あはは・・・完全にユーノ君よりだよね、ナーノって。性格の９割がたがもうユーノ君だもん」

「そ、そうかな・・・僕ナーノ程悲観的じゃないけど」

それから暫くして、ヴィヴィオのネガティブサイクルが深いところまで入り込んだことに気付いたナーノはため息をつきながら姉を陥れてしまった自分に罪悪感を感じる。

「はぁ～～～駄目だ。ヴィヴィオ姉ちゃん、すっかりあの暗闇のサイクルから抜け出せなくなっちゃった。あああああ！！！僕の所為だ！！！」

ナーノは絶望を大声で表現しながら、自分の顔を壁に激しく打ち付ける。

一同はそんなナーノの態度を見ながら苦笑を決め込む。

「ホント悲観的だよな・・・お前って」

「あははは。そうだ、ナーノ。もう一つ気になることがあったから聞いてみてもいい？大変厚かましくてあれだけど」

スバルが自分でも厚かましいと思いながらそう言うと、ナーノは額

から血を流した状態で徐に振り返り、ヴィヴィオを傷つけてしまった自分を憎み涙を流しながら返事をする。

「う・・・別に・・・別にいいですよ・・・／／／どうせ僕なんか・・・／／／」

「「・・・・・・・」」

一応は未来の両親と言うことになっているユーノとなのはは顔を見合わせ苦い顔を浮かべつつ、スバルの質問に便乗する。

「ナーノって、未来で一体どんなボランティアしてたの？」

「あ！僕もそう言えば前々から気になってたんだ♪もしナーノがよかったらでいいから、教えてくれないかな♪」

「ぐす・・・いいよ・・・別にそれぐらいの事なら・・・／／／」

「私なんか・・・・・・私なんか／／／」

二人の特殊な息子と娘が悲観的になってこのような態度を見せると、ユーノスは深いため息をついて呆れながらにこう言った。

「お前達・・・いい加減にしないか」

◇

〈リンディＳｉｄｅ〉

それから数時間後の午後９時。

時空管理局本局に所属する機動六課を始めとするあらゆる部署を統括する統括官の役職についているクロノの実母、リンディ・ハラオウンは地球にある自宅へと帰宅するが、その時彼女はべろんべろんになるまでの飲酒をしていた。

「たっだいまー♪」

意気揚々とした様子でリンディがお土産片手に帰宅すると、玄関先で出迎えるのはクロノの妻であるリンディと、フェイトの使い魔アルフ。

「あ・おかえりなさい母さん。」

「エイミィ～～～♪いい子にしてた～～～♪」

リンディは酔いがすっかり全身に回った様子でまるで子供の様にエイミィの胸の中に飛び込むと、エイミィとアルフも苦笑する。

「あはは。飲み過ぎたんだね。今、水持ってくるから。アルフ、お水持ってきて。」

「はいよ。」

アルフは水を汲みに台所に行くと、リンディは床に突っ伏し真っ赤な顔で言って来た。

「ひっく♪へへへ～～～飲み過ぎてなんかいないですよ～～～だ♪」

エイミィは苦笑いをしながら、アルフが持ってきたコップ一杯の水

をリンディに差し出す。

「はい、お水」

「あら～ありがとう♪」

リンディはコップの中の水を一気に飲み干すと、千鳥足ではあるがエイミィとアルフに抱えられ、リビングへと移動する。

リビングに移動すると、リンディは熱った顔を浮かべながらソファーへと深く座り込み、エイミィもアルフも横に座ると非常に珍しい様子のリンディに思わず尋ねた。

「でも珍しくない？お母さんがべろんべろんに酔って帰って来るなんて」

「あら♪偶にはいいじゃないの、こういう日があっても♪今日はなんかいつもよりも酔いたくなったのよね～～～どうしてかしら♪」

「何かいいことあったの？」

「分かった！宝くじでいい当たり引いたとか！」

「あははは♪それならそれでみんなで美味しい物でも食べに行くわよ♪クロノにエイミィ。アルフにカレルとリエラ。それから～～～♪」

リンディはそう言いながら熱った顔をある人物が映る写真盾へと目を向ける。

その写真の中に映る人物、夫であったクライドの姿を見た瞬間、彼女の酔いが一気に醒める。

「・・・クライドさん・・・」

「「！」」

エイミィとアルフは思わずその言葉に耳を疑い顔を見合わせると、リンディはクライドの写真を胸に抱きながら床に伏せ、唐突に涙を流す。

「ぐっす・・・」

「お母さん・・・？」

アルフが訝しげな様子で涙を流すリンディを伺うと、エイミィが何かを思い出した様子でこう言って来た。

「そっか・・・今日はクロノ君の・・・お母さんの夫のクライド提督が闇の書の事故に巻き込まれて・・・艦船のエスティアごとアルカンシェルで蒸発して殉職した日・・・・・・」

そう・・・偶然にも今日クロノが父の夢を見た子の日こそ、クライドがエスティアと最期を共にし、殉職した日だったのだ。

アルフはそれを聞かされると、申し訳なさそうにリンディに近づき謝罪の言葉を投げかける。

「ごめんよお母さん！私・・・／／／」

すると、リンディは顔を向けアルフの頭に手を乗せる。

「・・・いいのよ。何も悪いことなんて言ってないわ」

「お母さん・・・」

リンディは涙を拭うと、夫の写真を元の場所に戻して強い気持ちでこう言って来た。

「もう２０年も前の話な訳だし。とっくに吹っ切れてるわよ。」

「「・・・・・・」」

そう言った直後、リンディは何処か吹っ切れていないような気持ちを醸し出す、そんな表情を浮かべて胸に抱く決して叶わない切望を口にする。

「ただ・・・ちょっとだけ・・・欲を言えばね・・・・・・もう一度だけ・・・・・・クライドさんと私達家族三人で――――――笑っていたかったかも」

◇

〈クロノＳｉｄｅ〉

リンディが死んだ夫の面影を忘れられないでいるのと同じように、息子であるクロノもまた命日である今日はいつもの雰囲気とはまた違った様子で一人ロビーで過ごしていた。

「・・・・・・」

命日である今日は、仕事の合間を縫って父の墓標を訪れていたクロノだが、やはり尊敬の的であった父・クライドの偉功と今の自分のそれをどうしても比較し、卑下したくなる気持ちの方が強かった。

そんな複雑な顔を浮かべるクロノを見かけて、ユーノが歩み寄ってきた。

「何だよ潮らしくしちゃって。ほら、フェレットもどきとかって言ってみたらどうだ?」

「ユーノ・・・」

ユーノはクロノにほくそ笑むと、懐から酒瓶を一本を取出す。

「飲む?ウイスキーだけど」

「ああ」

ユーノはグラスに二人分のウィスキーを注ぎ、先ず自分の酒をゆっくりと啜り始め、クロノもまたこの日の事を想いながら徐に飲み始める。

そして、ユーノが一杯目を飲み終えると、彼はクロノに言って来た。

「今日だったな――――――クロノのお父さん。クライド提督の命日」

「・・・・・」

「何で今日に限ってそんなにしょげた顔してるのさ?僕から言わせれば、気持ち悪いぐらいだ」

「ああ・・・そうだな」

「何だよ。調子狂うんだけど!?」

「・・・すまない」

クロノのいつになく潮らしい態度にユーノ自身も困惑してしまう。

何時もの二人ならば、罵詈雑言が飛び交い、時として子供のような張り合いを見せているのだから――――――

そんなユーノから言わせれば異常とも呼べる今のクロノは、不意にその手の中に父の残したペンダントを握りしめ、それを見てユーノは言う。

「それ、形見かなんか?」

「闇の書の護送任務に出かける前に、父さんが残していったものだ。」

「・・・そうなんだ」

ユーノは返事をすると、ウィスキーを手に取りグラスに注ぎ始める。

と、ここでクロノが徐に悪友であるユーノに言って来た。

「なぁユーノ。僕はお前と違って、自分の心に頑丈に鎖をかけてし

まっている。だから、いざと言う時になって、保守的な本能から自分ばかりを守ろうとして・・・お前のように素直に心に従うことが出来ないでいる」

「・・・・・・」

ユーノはその言葉を隣で聞きながらグラスの中を覗きこむ。

「僕は・・・――父さんが残してくれた意志をちゃんと引き継げているのか。あるいは・・・・・僕が目指してきたものは、全く意味の無いモノなのか・・・」

そう言って、自分に自信を無くしかけているクロノはグラスの中の酒を一気に飲み干す。

ユーノは本当に自分の中では異常なクロノの話を聞き終えると、さり気なくこんな風に言って上げた。

「・・・意味があるとかないとか以前に、クロノは自分で選んでここまで上って来たんだろ?だったら、先ずはそれで十分じゃないかな。深く考えるのもいいけど、大切なのは自分とどう向き合うかだ。ひん曲がっても、自分に自信が持てなくても、全部自分なりに受け止めていけばいいよ。」

「・・・・・・」

一瞬の驚きを覚えるクロノ。

ユーノはそんな彼の顔を見て、微笑みかける。

「零れそうになったら誰かが拾ってあげるから。自信を持てよ、クロノ・ハラオウン」

「ユーノ・・・・・・ふん。そうか」

ユーノはクロノの顔を見て少し安心すると、ウィスキーのボトルを手に取り、クロノのグラスに注いだ。

「今日は久しぶりに飲もうよ。たっぷりとお前の悪口を肴にしてな」

「ふん。それはそれは・・・いい度胸だな。このフェレットもどきが」

◇

〈リニスＳｉｄｅ〉

悪友同士が互いの罵倒を肴に酒を酌み交わしていたちょうどその頃、アルハザードのスカリエッティの研究所から自宅へ戻ろうとしていたリニスは、帰り際にスカリエッティが言っていた言葉を思い返していた。

「あの言葉は・・・どういう意味だったのかしら」

『“死者を蘇らせる”ことが出来るのは、果たしてアルハザードの技術だけなのかね？』

「（死者を蘇らせることが出来るのは・・・アルハザードの技術だけではない・・・・・・だとしたら他にも死んでしまった者の命を・・・？）」

そう思いながら廊下を歩いていると、不意に話しかけて来たのはこの女性だった。

「気になるのね」

「？」

「ドクターの言う事って、結構意味深でしょ？」

そう言ってリニスに話しかけて来たのは、名前の響きが非常に似ていることから最近では間違えられるのではないかと内心不安に思っている破面魔導虚、リリスだった。

「あなたは・・・リリス」

「ええ。」

リリスはリニスの元へ歩み寄っていく。

「あなたは知っているのですか？アルハザードの技術以外で、死人を蘇らせる方法を？」

「さぁどうかしら。ただ、死んだ人間って言うのは死んでも尚欲望を抱く罪な存在だってことは、始めに言っておきましょうか？」

「え」

「死んでも尚そのうちに留める欲望は、器を失くしたところで消える事は無い。その魂が在る限り、何度でも甦る。」

「・・・・・・」

その言葉に、リニスがますます深く考え込んでしまうと、リニスは不敵な笑みを浮かべてリニスの前から立ち去って行く。

一方でスカリエッティの元に残っていたプレシアはモニター画面で確認が見受けられた新たなヤミーとそのグリードの反応を見、不敵な笑みを浮かべるスカリエッティに報告。

「ジェイル」

「ふふふふふ。プレシア・・・私はこの時を待ち望んでいたよ」

「そうね」

スカリエッティは狂喜乱舞した様子で椅子の上から立ち上がると、目を見開いた様子で両手を掲げこう言って来た。

「あ～～～！いよいよ、爬虫類グリードの能力（ちから）が見られるよ。ふふふふはははははは！！素晴らしいよ！！！！」

スカリエッティの甲高い笑い声がアルハザードへと響き渡る。

一体爬虫類グリードと言う言葉の指し示す意味は何なのか？

・・・――――

午前０時３０分。

時空管理局本局　艦船停泊所。

２４時間体制に及ぶ厳重な見張りが行われている次元航行船の巣窟に於いて、一人の男がクロノの母艦である「クラウディア」をまじまじと見つめていた。

その男の名は、クライド・ハラオウン――――――

「クロノ。リンディ・・・――」

クライドが物寂しげな様子で艦船を見上げていると、彼を不審人物だと判断した警備員が近づいて来た。

「オイ貴様！」

「！」

「そこで何をしている？ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

「私は・・・・・う！」

と、その時。

クライドは突然自分の体から込み上がる力に飲み込まれる様子でうずくまり始めた。

警備員が急変したクライドを心配して側に近づこうとすると、クライドは険しい表情を浮かべて声を張り上げて来た。

「ぐおおおおおおおおお！！！！」

クライドが声を上げたその時、クライドの身体を覆い隠すセルメダル。

そして、セルメダルが彼の身体を多い尽くした時、その姿を白ヤミーへと変貌させる。

「わあああ！！！」

警備は恐怖のあまり腰が抜け、その場に懐中電灯を落とした。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

白ヤミーが本局に現れたことは、酒を酌み交わしていたユーノの元にすぐに伝わることになり、気配を感じるや否やユーノは表情を一変。

「！」

「どうした？」

「ヤミーだ」

「何？」

クロノが驚きの表情を浮かべると、直後ユーノを呼び出しに来たユーノスとナーノが現れる。

「ユーノ！」

「お父さん、お仕事！」

「ああ」

ユーノはクロノに顔を合わせて首を頷くと、直ぐに現場に直行しようとしたが、その時クロノの元に外部通信が届く。

「？」

クロノが画面を開くと、相手は実母であり上司でもあったリンディからだった。

リンディは真剣な眼差しでクロノを見つめる。

「リンディ提督？」

「え？リンディさん」

『クロノ。大変よ』

「どうかなさいましたか？」

『停泊中のクラウディアにヤミーが！』

「え！」

「何だって・・・それじゃ本局に！？」

「そうなんだ。だから急がなければ」

すると、ことの重要大を理解したクラウディア艦船艦長、クロノ・ハラオウンは意を決した様子でユーノに言って来た。

「く。ユーノ！僕を連れていけ。クラウディアの艦長として、この事態は見過ごすわけにはいかない」

「よし。行こう」

ユーノは同行を認めると、転送ポートを使って急いで本局の次元航行船停泊所へと急行する。

さて、本局の方では出現した白ヤミーが突如として暴れ出し、局員を無差別に襲っていた。

「ぐあああああ！」

「のおあああ！」

「魔導師隊、撃て！」

白ヤミーに向けて本局屈指の魔導師隊が魔力弾を一斉射撃するも、白ヤミーはその弾丸を全て弾き返してしまい、包帯を伸ばして返り討ちをする。

「おおおおおお！」

「「「うわああ！」」」

リンディはクラウディアの事が気になって、クロノ同様様子を見に本局を訪れており、エイミィはその付添いで来ていたのだが、事態は思った以上に深刻だった。

「これって・・・！」

「一体どういう事なの？」

白ヤミーは目の前に立ち塞がる局員を昏倒させると、何かを求めるように声を張り上げる。

と、その時タイミングよくユーノ達四人が駆けつけてくる。

「リンディさん！」

「リンディ提督！」

「クロノ！」

「ユーノ君も。それにナーノ君、だっけ？」

「はい。その節はどうも」

ナーノはエイミィに笑みを浮かべて挨拶をした後、ユーノ達と共に白ヤミーの方を見据える。

白ヤミーは現れたユーノ達を睨み付けるように立ち尽くす。

「ぐうううううう」

「まさか本局にヤミーが現れるとは、夢にも思わなかったが、倒すしかないよね」

「うん。さて、お仕事お仕事」

「リンディ提督。エイミィや他の局員を連れて安全な場所まで」

「ええ」

「クロノ君、気を付けて」

「ああ」

クロノにエールを送ると、リンディ達は白ヤミーの攻撃を逃れた局員を引き連れ安全亜場所まで退避する。

そして、人がいなくなった後で、ユーノはユーノスから結界印を要求。

「ユーノス元帥、結界印を」

ユーノスは離れた場所から結界印を投擲。

投擲された変身アイテムを手に取ったユーノは、ナーノと共に戦闘態勢となる。

「「変身」」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

クロノもバリアジャケットを見に纏い、ＳＵ2を取り出す。

「行きますか♪」

三人は白ヤミーに向かって突っ込もうとすると、その直後白ヤミーが橙色に輝くオーラを発してきた。

「「「！」」」

ユーノスはそんな白ヤミーを見ながら、その体から新たな姿を見せようとする事に気づいて、ユーノ達に言う。

「見ろ。成長するぞ」

「さて・・・どんな虫やら猫やら鳥が出るのやら――――――」

クロノがそんな風に言いながら杖を構え直し、ユーノ達も身構えた時、白ヤミーは素の姿を変貌させ成長した姿を露わにする。

が、その姿を目の当たりにしたユーノ達は見当違いな姿に目を疑った。

「「「「え」」」」

現れた成長ヤミーは、これまで登場した猫系・鳥系・昆虫系・水棲系・重力系、そして新たに登場した甲殻類とは全く違う、コブラの姿をした爬虫類に属するヤミーだったのだ。

一同は初めてお目にするコブラヤミーの姿に言葉を詰まらせる。

「な・・・なん・・・だと」

「あれって・・・・・・まさか！」

「こ、コブラ！？ヘビだって！」

「どういう事だ・・・甲殻類系のヤミーが現れたと思ったら、今度は・・・爬虫類だと！」

「と言うことは、新種のヤミーってことですか？」

ユーノスはメズールとガメルの消滅以後、まるでその穴を埋めるかのように増えた新種のヤミーとそのグリードの存在に険しい表情を浮かべる。

ユーノ達も初めての敵を前に大いに動きづらい様子でいると、コブラヤミーが先制攻撃を仕掛けてきた。

「！来るよ！」

コブラヤミーは長いヘビの腕を伸ばしてユーノ達を攻撃しようとする。

「おっと」

ユーノ達は辛うじてその攻撃を回避することに成功すると、ナーノはライジングハートに魔力を供給させる。

〈Ｖｉｏｌｅｔ　ｂａｒｒｅｌ〉

「ふん！」

ナーノの撃った弾丸が真っ直ぐにコブラヤミーに向かっていくが、コブラヤミーは向けられたナーノの弾丸を体を多い尽くす鱗によって軌道をずらし、弾丸を弾いた。

「なっ。弾丸を弾いたよ！」

「あの鱗の所為だ。あれが、弾丸の軌道をずらしてしまうのだろう」

「ち。厄介な相手が出て来たものだ。どうしますか？」

ユーノが舌打ちがてらそう言うと、ユーノスはコブラヤミーの特徴を掴んで冷静に言って来た。

「確かに奴の鱗は少々面倒かもしれぬが、懐に飛び込んで至近距離から斬り込めば、ダメージを与えられるはずだ」

「だったら、僕もそっちで行かせて貰うか」

〈Ｂｌａｄｅ　ｃｈａｎｇｅ〉

ナーノは甲冑装備だけを維持させると、持っていた銃形態のライジングハートを手動で切り替え、自分の真髄である剣を握りしめる。

ナーノは同じくスレイヤーブレイドを構えたユーノの横に並ぶと、クロノに援護を要請する。

「腹黒さん。援護お願いします」

「よし。行くぞ・・・って！僕は腹黒じゃない！」

クロノがナーノの発言にそう言うと、その前に二人はコブラヤミーの方へと走り出し、ユーノはコブラヤミーの長い腕の攻撃を躱しながら懐に飛び込む。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｂｌａｄｅ〉

「はあああ！」

ユーノが懐に飛び込んで体を切り裂こうとすると、コブラヤミーはそれを窺って皮一枚でそれを回避すると、頭上から毒液をまき散らそうとする。

と、コブラヤミーの動きを読んだナーノが背後より近づき刀を構える。

「やらせないよ！」

〈Ｖｉｏｌｅｔ　ｓｃｒａｔｃｈ〉

「は！」

ナーノは刀身から魔力を圧縮させた斬撃をコブラヤミーに向けて飛ばす。

コブラヤミーは地面に叩きつけられ、徐に立ち上がろうとすると、今度はクロノの援護射撃が飛んでくる。

「こっちだ」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

ブレイズキャノンをお見舞いしたクロノは、そのままコブラヤミーの注意を自分に向けつつ、ユーノ達の攻撃の隙を作る。

コブラヤミーはクロノに毒液を吐き捨てたり腕を伸ばして攻撃をし、クロノの杖を握りしめるとクロノをゆっくりと自分の元へと引き寄せる。

「ぐ」

クロノは徐々に引き寄せながらコブラヤミーに接近する。

「今だ！」

と、クロノが合図を送ると、ユーノがクロノの背後から飛んで来、逆刃刀を振りかざす。

「飛天御剣流・・・龍昇閃！」

ユーノは厄介なコブラヤミーの鱗を削りながら逆刃刀の刃を突き立てコブラヤミーの腕を引きちぎる。

「やっ・・・！」

と、ナーノが嬉々とした表情を浮かべた直後、ユーノスははっとした表情を浮かべる。

「待て！」

全員がコブラヤミーの方へと目を向けると、あろうことか腕を切断されたコブラヤミーはその断面から新たに自分の腕を再生させてきたのだ。

「「「何！」」」

ユーノ達はあまりの光景に絶句する。

「バカな・・・再生しただと！？」

「うそ！こんな能力聞いてないって！」

ユーノ達を始め、離れた場所で闘いの様子を窺っていたリンディ達も度胆をぬいてしまうと、コブラヤミーはクロノに向けて復活した腕を伸ばして彼を締め付けて来た。

「ぐおおお！」

クロノはコブラヤミーの腕の中に捕われると、頭上へと持ち上げられる。

「クロノ！」

「クロノ君！」

「ぐ・・・貴様・・・！」

クロノはSU2を引き出そうとしながら険しい表情でコブラヤミーを見つめると、コブラヤミーは懐かしそうにクロノを見つめながら彼の名前を口にする。

「クロノ・・・」

「何?」

一瞬耳を疑うクロノだったが、直後にユーノが逆刃刀を手に取り掴まったクロノを助け出そうと飛翔してきた。

「はあああああ!」

ユーノはコブラヤミーの腕を切り裂き、クロノを解放する。

コブラヤミーは斬られた箇所を再生し、ユーノ達を見据える。

「クロノ、大丈夫?」

「ああ・・・助かった。しかし・・・」

「?」

ユーノは先ほどからじっとクロノの事ばかりを窺うコブラヤミーに訝しげな顔を浮かべると、またしてもコブラヤミーがクロノ名前を連呼する。

「クロノ・・・クロノ・・・」

「え!」

これを聞き、ユーノもそうだしナーノもまた驚きを隠し切れなくなる。

「どういう事？なんでヤミーが腹黒さんの事を・・・」

「・・・・・・」

ユーノスは眉間にしわを寄せながらクロノ名前を口にするコブラヤミーを見据えていると、そのコブラヤミーは先ほどまで寡黙だったのを一変し、まるで自分の子供に対して話しかけるようにクロノを懐かしく思う。

「クロノ・・・ああ、間違いない。クロノなんだな。」

「お前。どういうことだ？何故僕の事を・・・」

「――――そうか。この姿だと分らないだろう。無理もない。お前と最後に顔を合わせたのは、もう２０年前も前の話なんだからな――――――」

「え・・・」

「２０年も前・・・？」

聞いていたのはクロノだけではなく、リンディも同じであった。

どうして気になってリンディやエイミィがユーノ達の元へと駆け寄って来ると、コブラヤミーは柔かい声で言う。

「私だよ――――――」

すると、コブラヤミーはその姿を別なものへと変貌させる。

「な・・・」

「「え・・・」」

「あ・・・・・・・！」

「まさか・・・・・・」

コブラヤミーがその姿を変えた瞬間、クロノやリンディを始め、ユーノ達も本来ならばあり得ない筈の人物が今目の前にいることに衝撃を覚える。

そして何よりも驚いているのは、クロノ自身だろう。

その人物の正体――――――それこそがクロノ父親であり、２０年前に殉職したはずだった男、クライド・ハラオウンだったのだから。

クライドは２０年ぶりに再会を果たす息子と妻に笑みを浮かべる。

「――――久しぶりだな。リンディ。クロノ。二人とも、元気そうでなによりだ」

「そんな・・・バカな・・・！」

「こんなことが・・・！？」

「？ユーノ。あの男は・・・――――」

何も知らないユーノスはユーノの肩に乗って事情を窺おうとすると、クロノが小刻みに手を震わせながら口にする。

「父さん・・・」

「！」

「何で・・・・・・何で・・・何で・・・・・・・・！！」

クロノは目の前に立ち尽くす穏やかな表情のクライドに疑いを持ちながら、湧き上がる感情を大声で表現し、目の前の父に対してこう言った。

「どうして父さんがここにいるんだ！！！」

クロノの甲高い声が本局中に響き渡る中、その光景を陰で窺っていたクライドを蘇らせ、コブラヤミーを作り出した張本人の左目に彼方傷を負った黒髪の男は呟く。

「死してなおも、人の欲望は消えない――――――――」

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

クロノとコブラと黄泉の父　（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は、ヘビの生態についてだ♪」

「ヘビ（蛇）は、爬虫綱有鱗目ヘビ亜目（Ｓｅｒｐｅｎｔｅｓ）に分類される爬虫類の総称。体が細長く、四肢がないのが特徴。ただし、同様の形の動物は他群にも存在する。」

「森林、草原、砂漠、川、海等の様々な環境に生息していて、環境に応じて地表棲種、樹上棲種、地中棲種、水棲種等、多様性に富んでいる。変温動物なので、極端な暑さ寒さの環境下では休眠を行なう。」

「食性は全てが動物食で、主食はシロアリ、ミミズ、カタツムリ、カエル、ネズミ、魚類、鳥類など種類によって異なる。大型の種類ではシカやワニ、ヒト等を捕食することがあるが、変温動物で体温を保つ必要がないため、食事の間隔は数日から数週間ほどだ♪」

と、今回の話題が蛇であった当初からスバル・ナカジマは震え上がっていた。

ス「ううううう／／／ヘビは苦手なんですよ！！！！ううううう／／／」

いつもの元気すぎるぐらいの元気がないスバルを見て、ユーノ達は戸惑いを隠せない。

ユ「ギンガ。どうしてスバル、こんなにもヘビが嫌いなんだい？」

ギ「実はですね・・・――」

そう言うと、ギンガはスバルの過去に起こった出来事を話し出す。

ギ「１３歳の春の事です。ピクニックに出かけた私たち家族でしたが、スバルが草陰の中で毒性のない一匹の蛇を見付けたんですが・・・」

話しによると、スバルはその時、顔を覗かせた瞬間そのヘビ顔を舐められたうえ、ズボンの隙間から体へと入り込んできたらしい。

ス「あああああああああああ！！！！！！」

スバルはその事が原因で、蛇が苦手となり以後トラウマを抱えているらしい。

ギ「と言う訳でして」

ユ「そうなんだ・・・御気の毒に・・・」

ス「ううううう／／／ヘビなんて・・・ヘビなんて・・・／／／」

魔導師図鑑ハイパー！

で、書き忘れていたがナーノのボランティアについて話そうと思います。

ナ「まぁ、僕らグルマディアは素人の集まりじゃなくて、ちゃんと

した専門知識を持って世界中飛び回っていたから」

ユ「つまりは、プロボラって訳か」

補足しよう・・・プロボラとは、プロフェッショナル・ボランティアの略で、医師や教師、法律家をはじめ、各分野の専門家がそれぞれの高度な技能を生かしてボランティア活動を行うこともあるのだ。

ナ「地味なものもあれば結構大変なものもあったよ。災害救助ボランティアもそうだし、タンカーからの原油流出事故で汚染された海岸の清掃ボランティア、それから過疎化によって高齢者ばかりが増えてしまった地域に新しいビジネスを持ち込んで、立て直しをはかったりともう色々♪それからね、それからね♪」

ナーノはその後もこれまで体験してきた多種多様なボランティアをマシンガンのように紹介し、聞いていたユーノ達はその多さと16歳とは思えないほどの濃い経験に、開いた口が塞がらなかった。

ヴィ「な・・・ナーノって・・・本当に私よりも年下の弟？なんか逆だと思うんだけど？」

ナ「そんなことないって♪ヴィヴィオ姉ちゃんは、今も昔も僕の愛しのエンジェル、なんだから？」

ヴィ「う／／／／／／」

鬼「俺はただのロリコンのオタク男にしか見えないけどな！」

一緒に過ごすようになってからも、鬼太郎とナーノの仲は依然としてよくならないのであった。

次回予告

次回、ユーノ・スクライア外伝は

クライド「立派になったものだ、クロノ」

ク「父さんは死んだんだ！！！！」

ア「死んだ人間の欲望をヤミーに！？」

ク「あれは父さんなんだ・・・お前にわかる訳が無い。」

ユ「死んだ人間は、生き返ったりしないんだ！」

第１７９話　死人と涙と吸血鬼コンボ

死人と涙と吸血鬼コンボ（前書き）

死者にたいする最高の手向けは、悲しみではなく感謝だ。

Ｂｙレーントン・ワイルダー

死人と涙と吸血鬼コンボ

ユーノ・スクライア外伝、前回の三つの出来事。

一つ、クロノが亡き父の面影を心のうちに切望。

二つ、管理局本局に正体不明・謎の爬虫類ヤミーが現れた。

そして、三つ。そのヤミーの正体は、死んだはずのクロノの父・クライドだった！

クライド「――久しぶりだな。リンディ。クロノ。二人とも、元気そうでなによりだ」

リ「そんな・・・バカな・・・！」

ク「父さん・・・」

カウント・ザ・メダルズ

現在、ユーノとユーノスが所持しているメダルは？

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚

ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

“人生は素晴らしいが、人生の終わりは死である。　これは、いかなる人の望みの究極でもある”

そう言って言葉を残したヴィクトリア朝のイングランドの詩人、アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーンの言葉からもわかる通り、人は生まれたその日から死に向かって生きていき、やがては肉片となって魂は体から抜け落ちる。

誰しもがこの永久不変の原理を生まれながらに理解しており、死を乗り越える、またはそれを超越するなどと言う発想は死を恐れるあまり人間が無意識に死に対して壁を作った証拠なのだろう。

だが時として、死を迎えたはずの者の魂は人間の限界認識の枠を飛び越え、我々の思考を脅かすことがあるのだ――――――

〈クロノＳｉｄｅ〉

その限界認識を現在、時空管理局本局にて脅かされているものがここに一人いる。

「何で・・・・・何で・・・何で・・・・・・・！！」

クロノ・ハラオウンはその原因とも言える、目の前に立ち尽くす穏やかな表情の亡き父・クライドに疑いを持ちながら、湧き上がる感

情を大声で表現し、目の前の父に対してこう言った。

「どうして父さんがここにいるんだ！！！」

クロノはユーノやナーノ同様、現実主義者であり、オカルトを始めとする非科学的な現象を忌み嫌い、特に死者の蘇生やそれに関わる根も葉もない噂は嫌悪感を覚えるほどだ。

霊魂の存在に関しても、死神と言うものの存在を認知してからは多少なりとも理解を示すようになってはいたが、それでも“死者がこの世に蘇る”などと言うことは絶対にありえないと述懐していた――筈だった。

が、現にこうしてクロノの目の前に立っているのは２０年以上も前に自分と母であるリンディを残してこの世を去ったはずの父、クライド・ハラオウンなのだ。

クロノはいつになく動揺した表情を浮かべながら、手に持つストレージデバイス、ＳＵ２を尋常じゃない震え方で持ち続けるが、ユーノはこんなクロノを今まで見たことが無かった。

勿論、クロノだけが動揺しているのではない。

その後ろでリンディは目を見開き愕然としながら、瞳に映る最愛の夫をまるで求めるかのようにゆっくりと足を前に出しながら柔かい表情を向けてくるクライドに言葉を投げかける。

「クライド・・・さん・・・本当に・・・クライドさん・・・なの！？」

「ああ。そうだよ。リンディ・・・・・・本当に久しぶりだ」

「／／／／／」

リンディは見間違えではないかとさえ思ってしまうほど、あまりにそっくりなクライドの柔かい表情に思わず力が抜けてしまう。

「か、母さん！」

エイミィが気を失ってしまいそうなリンディに付き添うと、クライドはエイミィを一瞥してから黒の方に目を向ける。

「クロノ。いつの間にあんな綺麗な奥さんを貰ったんだ。２０年と言う時間の間に、お前はどうやら本当に立派になったものだ、クロノ」

「・・・！！」

クロノは父の姿・面影・そして臭いや雰囲気に至るまで、何もかもが自分が知っている父のそれに酷似した目の前の男に激しく動揺しながら、まるで何かを怯えるように一歩ずつ後ずさる。

クライドは挙動不審なクロノに向かって怪訝そうにつぶやく。

「どうしたんだ、クロノ。私だ。父さんだよ」

だがしかし、その一方でクロノは湧き上がる感情を抑えきれない様子で声を漏らす。

「・・・黙れ・・・」

「？」

「クロノ？」

「腹黒さん！？」

ユーノとナーノがクロノに目を向けると、クロノは普段は絶対に人前では見せない涙を浮かばせながらＳＵ２を構え、目の前のクライドに突きつけると声を押し殺し言って来た。

「黙れ黙れ黙れ！！お前は父さんなんかじゃない！！何者だ！なんだって父さんの姿でいるんだ！答えろ！！」

「クロノ・・・――」

「お前が僕の父さんである訳が無い・・・父さんがヤミーな訳が無い・・・父さんが、次元世界の平和の為に身命を賭した誇り高き男が本局を襲う訳が無い・・・！僕が・・・母さんや他の誰もが・・・心から敬愛したクライド・ハラオウンはもう・・・この世界に存在するなど、断じて無い・・・！」

クロノは張り裂けそうな想いで目の前の虚像にそう言うのに対して、聞いていたクライドはそんな言葉を聞かされてもクロノに笑みを浮かべる。

「待つんだ、クロノ。何を言いだすんだ。私はクライド――――――」

と、その直後クロノ感情が爆発した。

「その名を二度と口にするな！！！！父さんは父さんは死んだんだ！！！！！」

〈Ｂｌａｚｅ　ｃａｎｎｏｎ〉

クロノは感情が爆発した状態で魔力を練り上げ、ＳＵ２の先端から魔力弾を放出。

クライドはそれを避けるも、クロノは感情に身も心も任せて目の前の虚像をこの世から廃除しようとする。

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！」

〈Ｂｒｅａｋ　ｉｍｐｕｌｓｅ〉

ユーノ達は怒りや悲しみ、あらゆる感情に身を任せて完全に普段の冷静さを欠いているクロノに警告を促す。

「待てクロノ！！落ち着け！！」

「クロノ君！駄目！！」

「おおおおおおおおおおおおお！！！！」

クロノは渾身の想いを杖の先に乗せたブレイクインパルスをクライドに叩き込むと、その瞬間土煙が覆われ、クライドの姿が見えなくなる。

「何処だ！出て来い！！」

「やれやれ・・・――前に言わなかったか？怒りは絶望を忘れさせるが――」

「！」

クロノがクライドに声に反応して土煙の中を振り向いた瞬間、再びコブラヤミーと化したクライドがＳＵ２ごとクロノの腹部を右腕で貫通させる。

「が・・・・・」

クロノは折れたＳＵ２を持ちながら、腹部に刺さってコブラヤミーの腕に付着した自分の血液に目を向けながら、絶望に満ちた表情を浮かべる。

ユーノ達はこの光景を目の当たりにし、思わず声を張り上げる。

「クロノ！！！！」

「クロノ君／／／／／／」

そして、コブラヤミーは腕をクロノの腹から抜きだし、血塗れとなった腕を下で拭いながら姿をクライドの者へと変え、その場に跪くクロノにこう言った。

「ごめんな――――――」

クライドはそう言うと、転移魔法によってユーノ達の前から姿を消そうとする。

「待て！！」

ナーノは直ぐにライジングハートを銃形態に変形させ、逃げようとするクライドに銃弾を向けたが、撃った瞬間に転移魔法が発動し、クライドは姿を消した。

「くそ！」

悔しがるナーノを余所に、ユーノやユーノス、更にはリンディ達は負傷したクロノの元へと駆け寄った。

「クロノ！しっかりしろ！！」

「クロノ！クロノ！！」

リンディが涙目ながらに血塗れのクロノに声をかけるも、クロノは涙目となって完全に意識を失っている様子であった。

ユーノスは直ぐにクロノの心臓に耳を当て、ユーノはクロノの脈を測る。

「マズイ・・・心臓の鼓動が弱まっている。」

「脈もかなり危険な度合いです・・・！大至急措置をしないと・・・ナーノ！本局（ここ）の医療スタッフを急いで連れて来て！」

「わ、分かった！」

ユーノの指示を受け、ナーノは変身を解くとエイミィと一緒に本局

の医療スタッフを呼びに局内を駆け抜ける。

その間に、クロノはユーノとユーノスの応急手当てを受けつつ、リンディは大粒の涙を流しながら息子の手を強く握りしめる。

「クロノ！クロノしっかりしなさいよ！母さんを・・・母さんを一人にしないで／／／クロノ！！！！！」

リンディの一滴一滴の涙がクロノの顔に零れ落ちる。

ユーノとユーノスは目の前で目を閉ざすクロノに必死で治癒魔法を施し続け、彼が再び目を覚ますことを信じて自分たちの出来ることを懸命に行うのであった。

そんな彼らの様子を本局に忍び込んで窺っていた、爬虫類ヤミーの生みの親たる翡翠の瞳の男は黒マントを靡かせながらその場を後にする。

で、この光景を窺っていたスカリエッティは密かにアンクを呼びつけ、新たにこの世界に誕生した爬虫類ヤミーの特徴を見せつけ、アンクは愕然とした様子で映像に見入っていた。

「ふふふ。見たかね、アンク君。これが爬虫類ヤミーの力なんだよ。素晴らしいだろ！」

「バカな・・・死んだ人間の欲望をヤミーに！？」

「そうだ。まぁ正確に言えば・・・爬虫類のヤミーは死んでしまった人間の亡骸を始め、形見などに宿る魂を媒介としてセルメダルを投下することで、この世界に欲望を解放するや否や失った命をも取

り戻す。そして生まれたヤミーは例外なく、再生能力に富んでいるのだよ！」

「再生・・・・・だと？」

アンクはその言葉を聞くと、自分の右腕から取り込んでいた三枚の橙のメダルを取出し、スカリエッティに問い詰める。

「おい！じゃあ、こいつは俺の身体を再生できるって事か？」

「ふふふ」

「答えろ！！」

何時になく必死な様子のアンクに、スカリエッティは不敵な笑みを浮かべるばかりだが、不意に立ち上がってワインボトルを取出しグラスに注ぎ始めると、意味深な言動で更にアンクの心を揺すり出す。

「君は他のグリードと違って、何故か“右腕”しかまともに復活できていない・・・だからこそ君は復活の際、死人同然であった人間の体を乗っ取り行動を続けているが・・・・・君に渡したその橙のコアメダルがあれば、元の身体を・・・或いはそれ以上の身体を手に入れることが出来るかもしれないね」

「だったら、今すぐ残りのメダルよこせ！」

「それはムリな話だ。残りのメダルは既に彼が所持している。」

「彼？」

アンクがその言葉に敏感に反応すると、スカリエッティはワインを一飲みしてから返事を返す。

「いずれ分かるさ。どちらにしても、これでグリードは先日の甲殻類系を含めて元の五体となった。ふふふ実に面白いよ・・・全てが面白い・・・ふふふはははは!!!!!はははは!!!!」

スカリエッティは高笑いを浮かべながら、テーブルの上に乗っていた「爬虫類グリード&ヤミー」と書かれたネームのケーキを掲げながら狂喜乱舞する。

「またこの世界に新しい命が誕生した!ハッピーバースデー!!!!はははははは!!!!!」

「・・・・・・」

アンクは未だその真意がはっきりとは掴めないでいるスカリエッティに警戒心を強めながら、橙のコアメダルを握りしめ、研究室から出て行った。

◇

〈本局Ｓｉｄｅ〉

時空管理局本局　医療施設。

昨晩の衝撃的な襲撃から一夜明けた今日、死んだはずのクライドと対峙したクロノはコブラヤミーと化した父の攻撃をその身に受け重傷を負う。

ユーノやユーノスの早急な治療、本局医療スタッフの治療の甲斐あって、命を取り留めたクロノは現在、第８病棟にて絶対安静の状態で静かな眠りについていた。

リンディやエイミィ、そして妹のフェイトはクロノの側から片時も離れず側についていた。

そんな中で、ナーノもユーノスと一緒に病室の外で待機していると、不意にユーノが声をかけて来た。

「ナーノ。いい加減お前も休め。昨日の夜から一睡もしてないじゃないか。まだ１６なんだから、休まないともたないよ」

「だけど・・・」

「ほら、僕と交代。寝て来たから僕」

すると、その言葉を聞いたナーノはユーノの顔を見るなり真顔で指摘する。

「・・・隈」

ユーノの目の下には紫色の濃い隈が浮かんでいたが、ユーノはその指摘を受けてるとこう返した。

「メイクだこれは」

意地を張った様子でユーノはナーノの隣に腰を掛けると、ユーノスを肩に乗せてから三人で夜中に現れた爬虫類ヤミーの事で話を進める。

「ねぇ・・・あのコブラのヤミー・・・爬虫類ってのは初めてだけど、それがどうして腹黒さんのお父さんに・・・――――」

「――――――」

ユーノはそれを聞くと、一度口を籠らせ眉間にしわを寄せる。

ユーノスはそのユーノの表情を窺いながら、次のように言い始める。

「爬虫類と言うは実に厄介だ。古来より、蛇や亀と言った生物は不老不死の対象されることがあってな、数多くの言い伝えがあるんだ。」

「ああ。前に大学の卒業論文の参考資料で何度かその手の本は読んだことあるな。不本意だったけど・・・・・地球の神話の中にも、ワニを神聖視する例もまた多くあるし、世界中にワニの姿をした神だっている。古代エジプトじゃ、ワニは豊穣や、ナイル川そのものを象徴し、テーベではワニの頭部を持つセベク神の信仰が盛んだったそうだし・・・」

「それだけじゃない。ヘビは足を持たない長い体や毒をもつこと、脱皮をすることから『死と再生』を連想させること、長い間餌を食べなくても生きている生命力などにより、古来より『神の使い』などとして各地でヘビを崇める風習が発生していた。」

「本来ならば幸福、あるいは再生を意味する爬虫類の代表格が・・・まさか死者を蘇らせ、この世界に欲望と言う災いをもたらすとは――――――」

と、それを聞いた瞬間、ユーノは即座に口を挟む。

「死んだ人間は蘇ったりしませんよ」

「！」

「お父さん・・・――――」

ユーノ自身、これまで幾度となく死の経験を乗り越えている身である中で、絶対に譲ることのできない不変の法則。

二人はそれを聞いた後、しばらく沈黙を保ち、徐にヤミーが生まれた背景を推測し始める。

「問題はさ・・・どうやってあのヤミーが生まれたかだよ。あれって・・・何の欲望から出来たって言うさ・・・」

「はっきりとは分からぬが、少なくとも爬虫類に属するグリードが何らかの方法で死人の欲望を解放したのか、それとも・・・」

「死人の欲望と言うと・・・クロノのお父さんが生前に思い残したこととかでしょうか？」

「他にもいくつか考えられる。例えば、生前そのものを愛していた人間が抱いていた欲望、何か思い入れのあるものに宿った強い想い・・・」

「もの・・・それならちょっと考えられることがありますね。クロノのお父さんであるクライド提督は、２０年前の闇の書の護送で艦船エスティアと最期を共にしています。」

「ああ。リンディ達か聞いたよ」

「つまり、亡骸なんてものは始めから存在しない訳ですが、もしもセルメダルの力でクライド提督の思い入れのあるもの・・・形見なんかを器にしてその欲望を解放させるって事も、出来るんじゃないでしょうか？」

「形見・・・あ！あれのこと？」

ナーノは思い出したかのように、偶然目にしたクロノが懐から時折取り出す星形のペンダントの事を口にする。

「うん。ま、飽く迄も仮説だけど――――――」

「いや。それは十分に考えられることだ。だとしたら、ヤミーでありクライド提督の現身であるあれの欲望は一体――――――」

深く考えれば考えるほど、ユーノ達は益々分らなくなってしまうと同時に、その場の雰囲気が非常に重苦しいモノへと変わって行く。

そんなユーノ達とは遠く離れた場所に、昨日本局に襲撃を仕掛けた男である、クライド・ハラオウンは自分を作り出した翡翠の男と共にミッドチルダの街並みを眺めていた。

物寂しげな様子で景色を眺めるクライドに、翡翠の男は次のように言ってくる。

「何を躊躇う。何故自分の欲望にそうも後ろ向きになること必要があるのだ？もう一度家族の元に行けばいい」

「私は・・・私は本当ならば死んでいるのだ・・・！既に亡骸もない私が、自分の欲望の為にこれ以上・・・周りを・・・クロノに辛い思いをさせたくはない！死んだ人間は・・・この世界に蘇ってはならないのだ！」

「人間として生きていた時の喜びを思い出せ。家族と笑い合い、過ごした時間を取り戻したくはないのか？」

「！」

クライドはその一言を聞くと、脳裏に蘇ってくるのはクロノとリンディと共に家族三人で楽しく笑って過ごしていた幸福だったころの時間。

反芻し響き渡るのはクロノ、そしてリンディの笑い声。

『ははは。お父さーん！』

『あなたー♪』

クライドの心が大きく揺れ動く中、翡翠の男は止めの一言を口にする。

「この世に悔いを残して再び死ぬか、欲望を全うして死ぬか・・・どちらかを選べ。お前の唯一、最大の欲望だ」

それが起爆剤となると、クライドは悩んだ末に後者を選択し、意を決して自分の欲望を優先させる。

「私は・・・・・・家族を・・・クロノに会いたい！」

◇

〈クロノＳｉｄｅ〉

クロノは今、懐かしき夢を見ていた。

それは――――――父、クライドと共に訪れた野山での出来事。

クロノはリーゼ達から本格的な指導を受ける以前に、クライドから魔法の基礎を習っていた。

・・・――――

「おーい、クロノ。まだ上って来れないのか？」

「は、は、は、は。ま、待ってよお父さん・・・ちょっとペース早いって！」

幼き頃のクロノは小さな体を引きずり父の後を追い続けるも、クライドはペースをクロノを突き放すように先へ先へと昇って行く。

「ははは。まだまだこんなもんじゃないぞ。そら、もう少しだから頑張れ」

「は、はーい！」

クライドはクロノの意思を尊重し、敢えてクロノには手を差し伸べず彼が後ろをついてくることを信じて野山を昇って行く。

そして、漸く頂上付近へとたどり着いたクライドは一休みを挟んでから、クロノに魔法の基礎と簡単な近接戦闘を享受する。

クロノは夢中になって年相応の子供らしく、一生懸命に取り組んだ。

「いや！は！えい！えい！！」

「いいぞ。さっきよりも集中が増している。いいか、その呼吸を忘れるなよ」

「うん！やあああ！」

簡単な組手を踏まえた父と息子の貴重な時間を堪能するクライド、そしてクロノ。

やがてクロノが体力を使い切ってその場に仰向けで倒れ込むと、クライドはそんなクロノに笑みを浮かべて弁当箱を取り出す。

「昼食にするか。今日は母さん、お前の好きなものばっかり入れてくれたぞ！」

「本当！やったー！！」

クロノがそれを聞いた大はしゃぎをすると、クライドは切り替えの早い子供のクロノに満面の笑みを浮かべる。

本当にクライドは、息子が大好きであった。

そんなクライドだが、仕事上滅多な事では家に帰れることが無いた

め、息子とのこうした時間は非常に価値あるものである。

クロノがリンディが作ってくれた好物のおかずを夢中でかぶりついている様子を見ながら、クライドは水筒の中のお茶を啜り、徐にクロノに話しかける。

「なぁ、クロノ。最近勉強の方はどうだ？管理局の魔導師を目指すなら、それなりの量をやらなきゃらないからな」

「うん！大丈夫大丈夫！僕、お父さんとお母さんと一緒で、頭の方はばっちりだから！」

「ははは！それは頼もしいな。でもな、一つ間違えがあるぞ。父さんはこう見えて・・・昔学校じゃオチコボレだったもんだ」

「え？そうなの！？」

「ああ。よく落第点を取って、将来本当に大丈夫かと両親からも心配されたものだ。」

「ははは！！お父さんって結構バカ！」

「ははははは！！ああ、バカだよ！本当に！ははははは！！」

クライドは赤裸々に、そして素のままにクロノに自分の事を話してやると、クロノもそんな父の話に思わず笑いを浮かべ、傍目から見れば何とも和やかな光景であった。

そして、暫くしてからクロノがクライドに向けて質問をしてきた。

「ねぇお父さん。お父さんが守りたいものって、何？」

「おう。難しいことを聞いて来たな」

「ねぇ、何？答えられないものなの？」

「そんなに気になるか？」

「うん！すっごく！だって最近、お父さん殆ど家に帰ってきてなかったから、こうやってまともに話すことも出来なかったし！」

「ははは。確かにそうだな。よし・・・じゃあ、話してやるか」

クライドはそう言うと、徐に寝せていた体を起こしてクロノの方に目を向け、柔かい顔を浮かべながらクロノの肩に手を当てる。

「？」

「父さんの守りたいものはな――――――先ずはお前だ」

「僕？」

「ああ。父さんはな、お前や母さんの事が大好きだ。大好きな人を守りたい・・・先ずはその気持ちが一番なんだ。それで、その大好き人が住むこの世界を、そしてその世界に暮らす多くの人を守りたいんだ」

「世界の人を・・・」

「まぁ、実現性の極めて低い理想なんて思ったりそうでなかったり

と・・・いろいろ考えることはある。けど、これだけは絶対に忘れちゃならないことが一つあるんだ」

「何？」

すると、クライドは真剣な眼差しを向け、クロノも条件反射で同じように真剣な顔を浮かべると、クライドは次のように呟いた。

「――――だ」

と、その前にここでクロノの夢はここで途切れることになる。

・・・――――

夢から覚めた時、クロノが目を開けると、自分の目の前に広がってきたのは母であるリンディ、妻のエイミィや子供達、そして妹のフェイトを始めとするこれまで自分が深くかかわった者達全員。

クロノが目を覚ますと、全員は嬉々とした表情を浮かべる。

「クロノ！」

「クロノ君！」

「おう！ようやく目覚めたか。たく心配させやがって」

周りの反応を耳にしたクロノは徐に起き上がり、第一声を発する。

「母さん・・・エイミィ。それにフェイト達も・・・わざわざ来てくれたのか」

「わざわざなんて言い方は止してよ。家族なんだから、心配して当然だよ」

フェイトがそのように口にすると、聞いていたリンディやエイミィ、更にはなのは達も首を縦に振ってきた。

「みんな・・・・・ああ。すまないな」

と、その時病室のドアが開いたと思えば、中に入ってきたのはユーノとユーノス、そしてナーノの三人だった。

「よ。悪い夢からは目が覚めたか、腹黒中年男」

「ユーノ・・・」

ユーノはなのはが持ってきた椅子の上に座ると、クロノを見据えながら、覚悟した様子のクロノにこう言った。

「あのヤミーは、お前のお父さんじゃない」

「！」

「え！」

「「「！？」」」

一同はユーノの発言を聞いた瞬間、クロノやリンディなど一部を覗いては、全員がきょとんとした顔を浮かべ、クロノは戸惑いを見せ始める。

「・・・／／／」

ナーノはユーノの横でバナナを剥きはじめ、一口を食べてから徐にクライドに関するデータと一緒に昨夜のコブラヤミーの事を伝える。

「クライド・ハラオウン・・・享年２６歳。２７年前、艦隊として『闇の書』を護送中、闇の書の防衛プログラムが暴走し、自分の艦である『エスティア』のコントロールをジャックされてしまい、クルーを全員脱出させたのち、『エスティア』と運命を共にした。で、あのコブラヤミーの事ですけど・・・お父さんの言う通り、死んだ人間が生き返るはずはありません。たとえ姿・形がよく似ていても、その魂は全くの別物・・・」

「・・・・・・」

クロノが渋い顔を浮かべながら両手に力を込める様子を窺いながら、フェイトは全員の気持ちを代表してユーノに尋ねる。

「ねぇユーノ・・・何の話？どうしてクロノのお父さんとヤミーが関係して？」

すると、ユーノは別のモニターを表示させる。

それは昨夜の本局の襲撃の様子を捕えた一部始終であり、全員がその映像に目を向けると、映って来たのは生きた様子でクロノに話しかける死人、クライドと彼がコブラヤミーに姿を変える様子。

「え！」

「そんな！」

「これって・・・一体！」

誰もが度胆をぬいて目を疑う中、リンディは堪えきれなくなったのが突然手に顔を当てて泣き始める。

「あああああ！！！！！！ああああああああああ／／／／／／／／／／」

「母さん・・・」

エイミィは子供たちと共に泣き叫ぶリンディを連れて一旦病室から出ていくと、病室の中は重苦しい雰囲気で覆われる。

話しを撃ち出すことが非常に気まずい状況下において、ユーノやクロノ以外の者が顔を見合わせていると、重い沈黙を打ち破る様にユーノはクロノに言って来た。

「・・・急時にこそ、冷静さが最大の友・・・グレアム提督の教えを忠実に守っていた筈のお前が、死んだ父親の前ではあんなに取り乱すとは・・・」

「・・・今は・・・父さんの話は止めてくれ・・・」

クロノが渇いた声でそう言うのに対して、ユーノはワザとにクライドの話へと進める。

「クライド提督の事はグレアム提督とか管理局の名簿で詳しく調べたよ。クロノと違って、人望に熱くて正義感に溢れた優秀な指揮官

だったらしいね」

「やめろって言ってるんだ！！！！！！」

クロノは甲高い声を上げてユーノにそう言うと、この場にいるユーノ以外の誰もがクロノの叫びに身震いし、ユーノは真顔を浮かべて沈黙する。

そして、小刻みに肩を震わせながらクロノはユーノに言って来た。

「・・・何が言いたいんだお前は・・・僕と・・・僕と父さんの事が何だって言うんだ・・・確かに、あれは父さんじゃないのかもしれない・・・だけど、あれは紛れもなく父さんだ・・・！他の誰が何と言っても、あれは父さんなんだ・・・お前にわかる訳が無い。流石の無限の知識男も、身内の事までは分らないようだな・・・」

「クロノ君・・・」

なのはが自分の知るクロノとは明らかに様子の違う目の前に彼を見ながらそう呟くと、ユーノは悲しげな表情を浮かべると、一度鼻で笑ってこう言った。

「・・・やっぱりお前・・・まだ傷が治ってないんだ。思考がおかしくなってる。疲れてんだろう・・・寝ろ」

「軽蔑でもしたか？」

「・・・寝ろ」

「・・・そうか。そうだよな・・・父親の顔すら見た事のないお前

には僕の気持ちなんてわかる訳もないんだよな」

と、クロノがそう言った瞬間、ユーノはベッドの中で座っていたクロノの胸ぐらを想い気掴んで形相を浮かべながら拳を突き立てる。

なのは達は態度を豹変させたユーノの様子に思わず絶句した。

「ゆ、ユーノ君!?」

「おい、ユーノ!止せって!!」

「スクライア。兎に角落ち着け!」

なのは達がそう言ってユーノを宥めようとする中、ユーノは形相を浮かべたままクロノの事を睨み付け、クロノはそんなユーノに向けて不敵な笑みを浮かべる。

と、このタイミングで病室に駆け込んできたものがいた。

「フェイト!!」

「え・・・アルフ?」

それは、フェイトの使い魔であるアルフであった。

アルフは肩で息をした状態で、病室の中にいるもの全員に衝撃の言葉を口にする。

「は、は、は、は、は。た、大変なんだよ・・・!クロノのお父さんが・・・お母さんたちの所に!」

「！」

「な！」

それを聞いた瞬間、ユーノはクロノの胸ぐらを放し、クロノは耳を疑いたくなるような言葉に絶句する。

その頃、先に病室を出ていたリンディ達は偶然にも、昨夜現れたコブラヤミー・・・もといクライドと遭遇し、リンディやエイミィは目を見開き絶句する。

「・・・・・・クライドさん・・・・／／／」

「リンディ。私は、もう一度家族三人・・・いや、君たちと一緒に幸せを取り戻したい」

「クライド提督・・・・・・」

と、その直後、クライドの侵入に駆けつけてきた本局武装隊の魔導師達が一斉に杖を構えてクライドを包囲する。

「大人しく投稿しろ！貴様は完全に包囲されている！」

クライドはその光景を見渡し、溜息をつくとその姿をコブラヤミーへと変貌させる。

「「うわあああ！！」」

クロノの息子と娘、カレルとリエラは人間の姿から一変、異形の姿

へと変貌したクライドに恐怖しエイミィの陰に隠れる。

「すまぬな。私も自分の欲望を優先したい・・・――――だから、ここはひとつ退いて欲しい」

クライドは穏やかな口調でそう言うと、武装局員に対して右腕を伸ばして来、その攻撃を受けた武装局員は次々になぎ倒される。

「「「うわあああああああ！」」」

リンディは変り果ててしまった夫の姿に涙ながらに声を上げる。

「クライドさん／／／／／／」

コブラヤミーが昨夜に続いて本局に現れた事は直ぐにユーノ達にも伝えられ、病室の中にいた前線メンバー騒然となる。

「そんな・・・じゃあまたクロノ提督のお父さんが！？」

「だけど・・・本当にその人が・・・ヤミー！」

「クロノ君。クロノ君！何とか言ってよ！」

なのはが呆然とするクロノに声をかけると、クロノはこの状況にただただ疑問を抱くしかなかった。

「（なんで・・・・・なんでだ・・・・・・・！）く！父さん・・・！」

クロノはいても経ってもいられなくなると、負傷した身体を引きず

ってでもクライドの元へ行こうとするが、直ぐにフェイトやはやてが止めにかかる。

「あ！クロノ！」

「あかん、クロノくん！そんな怪我して！」

二人は外に向かおうとするクロノの腕を抑えるが、それでもクロノは前に出ようとする。

「あれは僕の父さんなんだ！僕が行かなきゃ・・・！」

と、そう言った直後クロノの胸ぐらをまたしてもユーノが掴んできた。

「！？」

ユーノは驚いた様子のクロノを見ずに、低い声で言って来た。

「お前は動くな。」

「ゆ、ユーノ・・・」

「そんな傷で何が出来るって言うんだ？冷静になってよく考えろ。その体じゃお前は足手纏いもいいところだ。心に迷いのある奴は死ぬ――――――」

「お前を・・・ユーノやナーノを信じろと言うのか・・・冗談は止せ。僕はどんな形でもいいからもう一度父さんと面と向かって話さないとならない・・・グリードがどんな方法で父さんを蘇らせたは

か知らないが、息子である以上・・・怪物でも何でも・・・父親には会いたいものなんだ・・・お前の様に・・・生まれた時から両親の顔も見た事のない奴には親を失う悲しみ何て分らないんだ・・・！だからこればっかりはどうしても譲る訳にはいか・・・――」

と、そう言いかけた次の瞬間、ユーノは何のためらいもなく全力全開の拳をクロノの顔面に叩きつけて来た。

「ぶっほ！！！」

「あ！」

「クロノ提督！」

「クロノ！」

クロノはユーノの拳を受けると、左頬に傷をつけながらドアの方へと激突する。

「ぐっは！！」

全員はクロノの事を気遣いながら、ユーノの突然の行動に愕然とする。

「ユーノ君！？なんで！！」

「ユーノ！！！一体どういうつもり！？」

「せや！！いきなり、クロノくんを・・・グーで思い切り殴るなんて・・・！？」

クロノは自分を殴りつけて来たユーノに不敵な笑みを浮かべながら血で染まった頬に手を当てる。

「ふふふ・・・全く・・・どうしてこうも僕に対しては手厳しいんだろうな・・・ユーノは」

「それはお前がガキだからだ。なのはだろうがナーノだろうが、今のお前と同じこと言ったら僕は迷いなく殴ったよ。」

「え！」

なのははその言葉を聞くと、一瞬耳を疑うが、ユーノはその後にクロノに近づき胸ぐらを掴んでくると、不抜けた様子のクロノに喝を入れた。

「いい加減目覚ましやがれボケ！！！！」

「！」

「ゆ、ユーノ君！？」

「お父さん・・・」

誰しもが顔を見合わせ戸惑いを見せる中、ユーノは唖然とするクロノに更に言う。

「お前が一番わかってる筈だろ。死んだ人間は、生き返ったりしないんだ！」

「！！」

「どんな綺麗ごとや理屈並べたところで、死んだらそれでお終いなんだ・・・絶対何があっても死んだら生き返らない！そんなの・・・そんなの誰だって知ってることだろうが！！お前はそんなことも忘れたのか、バカクロ助！！！」

「ユーノ・・・」

ユーノはその事を伝えると、クロノを解放し、複雑な感情を抱きながらこうも言って来た。

「考えてみろ。世の中にどうして食物連鎖なんて言うものが成り立ってると思う？この世界に、生き物が増えすぎないようにするためだからだ。どんな境遇にしろ、運命にしろ、死んだらそれがその人の終着なんだ。世界は常に不可逆的にしか進まないんだ。」

「・・・・・」

クロノはそれを聞かされると、思わず顔を項垂れ、ユーノは視線をそらさず赤く染まった自分の利き腕に手を当てながらこう言った。

「今のお前は酷くひん曲がってたよ・・・だから僕がぶん殴って目覚ませようとした。分かるか？僕らは昔からそんな仲だっただろ？片方がねじ曲がったときは、片方がそいつを殴って元に戻してきた。だからこそ僕達は曲がらない！ずっと真っ直ぐ生きていける。てめぇが勝手に作った変なプライドも何もかも、僕は知らねぇよ！そんなもん、何度でも飛び越えてって、何度でもてめぇをぶん殴りに行ってやる！」

「・・・！」

悪友からのその言葉を聞き、クロノは思わず目を見開きユーノを凝視し、なのは達はこの二人のやり取りに目を奪われる。

「ユーノ・・・君・・・」

「――ふん、いいやがるな。」

そして、ユーノは柔かい表情を浮かべると、自分がクロノと出逢えたことをこのように言って感謝してきた。

「そんな奴――長い人生でそうそう会えるもんじゃないんだよ。僕達は幸せ者だよ。そんな最高の悪友を人生で早くに得ることが出来たんだ」

それを聞かされると、クロノは驚愕のあまり言葉を失った。

そして、話の頃合いがついたところでユーノスが肩に乗ってきた。

「ユーノ」

ユーノは首肯すると、病室のドアを開いて外へと向かい、廊下を歩きながら最後、クロノに向かって次のように言って来た。

「――クロノ。もしも僕が曲がっちゃったときは、その時は・・・・・今度はお前が僕を殴ってくれよな」

ユーノはそれだけを言い残すと、コブラヤミーとの決着の為に現場へと向かった。

クロノはフェイトに気遣われながら体を起こすと、先ほどのユーノの言葉が深く自分の胸に食い込み、沈黙を保つ。

と、そんなクロノを一瞥し、不意にナーノがこう言って来た。

「腹黒さんだって、本当は分ってたはずでしょ？この世界に、自分が愛した父親がとっくにこの世に居ないなんてことは。ただ・・・本物だろうが偽物だろうが、自分が心のうちに切に求めていた父親の面影は、ずっとその中で生きている。自分がそれを忘れない限り、今も昔も自分の敬愛した父の姿がそこにある――――――生き続けている」

「・・・／／／」

「お父さんはね――――――腹黒さんにはずっと気障で憎たらしくて、だけでそれでいて陰で自分を気遣ってくれるそんな悪友のあなたでいて欲しいだけなんですよ。で、間違った道を行こうとするあなたはお父さんは放っておくことなんてできない。どこまでもお人好しなんだ・・・昔から。でもだからこそお父さんは心のどこかで――――――自分を生んでくれた親の面影を追い求めているのかもしれません」

ナーノが意味深な発言で場を沈黙させると、クロノはその話を聞いている内に自然と涙が零れ落ちてくる。

フェイトは人前でありながら決して涙を見せたことが無かったクロノが自分たちの前で涙を流す光景に度胆を抜かれながら、彼が零す涙一滴一滴を優しく拭ってやった。

そして、頃合いを見たナーノが椅子から立ち上がると、クロノに手を差し伸べて驚いた様子のクロノに促した。

「お父さんには死ぬと言われましたが、自分の今の想いを燻らせたまま、このまま靄を吹っ切るなんて真似、したくないでしょう？あなたの事は僕が守る・・・だから、自分の想いはしっかり――――伝えてやりましょう」

「ナーノ・・・・・・ああ」

クロノはナーノの言葉を聞くと、ナーノが差し出して来た手を握りしめ、覚悟を決めて戦いの現場へと向かっていく。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

その頃、先に戦いの現場へと向かって行ったユーノは既にコブラヤミーと熾烈な争いを繰り広げており、ユーノスはリンディ達を結界で守りながら戦いのいく末を窺う。

「はあああああ！！！」

ユーノは逆刃刀と洞爺湖木刀による二段構えでコブラヤミーを切りつけるが、いくら切りつけてもコブラヤミーは再生能力によって、傷ついた箇所を瞬く間に治癒する。

「く・・・これまでの中で一番相手にし辛いかも」

愚痴をこぼすユーノを見据えながら、コブラヤミーこと、クライド

は言って来た。

「君がクロノの友人か・・・成程、あいつにとってこれほど頼りになる子はそうはいないだろう。色々と、クロノが迷惑をかけているんじゃないのか？」

「ええ。迷惑も何も、あいつは本当に人の事・・・道具の様にしか思ってない節が強くてですね、人使いは荒いは、フェレットもどきなんて言って小ばかにしてきたりと、もう憂さなら嫌と言うほど溜まってますよ！ただ――――――」

ユーノは神妙な表情を浮かべてコブラヤミーに凛とした瞳を向けると、その一瞬の沈黙を破ってこう言った。

「あいつの・・・クロノに迷いがあるなら、僕はそれを放っておくことは出来ない。あいつが何か困ったとき、それを見過ごすなんてこと僕にはできない。悪友だろうが何だろうが、僕はあいつの――――クロノの事を助けられるなら、何だってする」

「・・・――――そうか。」

コブラヤミーはユーノの言葉を聞き終えると、再びユーノと向き合い感謝の気持ちを込めてこう言って来た。

「安心したよ。クロノは・・・――――君みたいな悪友を持てたことを、死ぬときにも誇れるはずだ！」

クライドはその言葉を自分の自我を完全に失い、コブラヤミーに乗っ取られると、コブラヤミーはユーノに毒液を吐いてくる。

ユーノは飛行魔法で飛びながら懐に飛び込もうとするも、コブラヤミーは腕を伸縮時代に伸ばして、彼の反撃の隙を与えまいとする。

これには流石のユーノも困惑した表情を浮かべる。

そんな時、ちょうど現場へと到着するナーノに連れられてやってきたクロノ。

クロノは、コブラヤミーであるクライドの姿を目の当たりにしながら、そんなコブラヤミーと向き合い、傷つきながらも自分の代わりに彼と向き合おうとする悪友ユーノ・スクライアを見据える。

「ユーノ・・・」

「・・・・・・」

ナーノはクロノの顔を横で一瞥すると、万が一の時に備えてライジングハートを起動させる。

と、その直後コブラヤミーの腕が今度は両腕から延びてくる。

ユーノはそれを躱そうと後ろに足を持っていった瞬間、地面に付着していたコブラヤミーの毒液に触れてしまい、塩酸のように自分の脚を溶かす強烈な痛みに膠着する。

「ぐ！！」

「ユーノ！避けろ！」

ユーノスがそう言ったときには、もう遅い。

コブラヤミーの両腕が伸びてくると、ユーノの身体を蛇の身体で巻きつける。

「ぐあああ！」

「「「ユーノ（お父さん）！」」」

「「ユーノ君！」」

リンディやエイミィ達もコブラヤミーに捕われたユーノに思わず声を上げる。

「ぐ・・・くそ・・・っ」

ユーノは徐々に力を強めて自分の骨をへし折ろうとするコブラヤミーの攻撃に必死に抵抗を見せようとするも、想うように力が入らずそれどころかコブラヤミーの力は強さを増すばかり。

「ぐあああああああ！！！！」

強烈な痛みが体中に響き渡り、ユーノは一瞬もう駄目かとさえ思ってしまう。

が、そんな時・・・不意にユーノの胸元から金色に輝く途轍もない力が解放されると、コブラヤミーはその力に圧倒され、ユーノを放してしまう。

「ぐ！」

地面に叩きつけられたユーノはその後も胸元から金色の光を放ち続け、ユーノス達はその光に目を逸らしながら訝しげな顔を浮かべる。

「こ・・・この光は！」

「何が起こってると言うの、ユーノ君に！？」

ユーノ自身も自分の中から感じられる途轍もない力に驚きながら、感じる力にある種の懐かしさのようなものを覚える。

「これは・・・なんか前に何処かで・・・」

と、その直後だ。

『もう一人の僕』

「！」

不意にユーノの見ている景色が真っ暗に染まり出すと、ユーノはこれを見て、完現術コンボの発動の為の兆しであることを理解し、声のする方に目を向けると、彼に話しかけて来たのはレジェンドルガ事件をきっかけに知り合った、並行世界に住まうもう一人のユーノであった。

『やぁ、元気だった』

「もう一人の・・・僕。じゃあ・・・」

『うん。君の友達を想う気持ちには心底感服するよ。だからこそ、僕もそんな大切な友達である君の力になってあげたい。あの時君が

僕を助けた様に、今度は僕が君を助ける』

そう言うと、もう一人のユーノは金色に輝く特別なホイッスル上のアイテム、『ロードフエッスル』を取出しユーノに手渡した。

「これは？」

『それには僕の魂が込められている。それを使って、あれを倒して。そして――――――クロノに自分の正直な気持ちを伝えさせてほしい――――――』

完現術コンボに必要なアイテムを手渡し、もう一人のユーノは暗闇の中から消えていき、現実の世界へと連れ戻された瞬間、ユーノはその手に握ったロードフエッスルを見据えて徐に立ち上がる。

「――――ありがとう、もう一人の僕。分かったよ。僕の手で、あいつを・・・クライドさんにクロノの正直な気持ちを伝えさせるんだ」

そう固く決意したユーノはコブラヤミーに向き合うと、徐に手の中のロードフエッスルを口元に持っていき、それを力強く吹いた。

すると、その笛の男を聞いた結界印が第七の完現術コンボの発動を承認する。

〈Ｌｏｒｄ　ｏｆ　ｖａｍｐｉｒｅ〉

すると、ユーノの全身を覆い尽くす金色の霊圧の嵐。

一同はその光景を見ると、それが新たな完現術コンボの発動であることを予期する。

「この霊圧は・・・ひょっとして！」

「ああ・・・ユーノの完現術コンボだ・・・！」

これまでにないほどの輝きを放つ新たな完現術コンボの発動に注目する中、霊圧の嵐が収まりその中より姿を現すユーノ・スクライア。

ユーノス達が目の辺りにした新たなユーノの完現術コンボの姿は、もう一人のユーノが変身するキバ・エンペラーフォームをモチーフにした金色のマントと金と赤を基調とする甲冑に身を包んだ、固有能力「魔皇力」を全身から溢れさせるものだった。

リンディちエイミィは最もユーノらしい表情を保ちながら、これほどまでの巨大な力・・・キバの継承者の身が持つことを許された魔力を凌駕する力「魔皇力」を金色のオーラに載せて解放する力強いユーノの姿に魅了される。

「あれが・・・フェイト達が言っていたユーノ君の力・・・」

「絆の完現術士のユーノ君の力は、何処までも進化を続けるみたいだね」

コブラヤミーはユーノが発する巨大な力に恐れを抱きながらも、臨戦態勢を見せると、期黄金色のヴァンパイアの王となったユーノはコブラヤミーに魔皇力の波導をぶつける。

「は！」

魔皇力の波導は一瞬のうちにコブラヤミーに向けられると、コブラ

ヤミーは圧倒的な力に押されて後方へと飛んでいく。

そして、波導によって大きなダメージを当てたユーノは最強の魔剣・魔皇剣ザンバットソードを手の中に出現させ、止めの必殺技を仕掛ける。

〈Ｚａｎｂａｔ　ｅｍｐｅｒｏｒ〉

ユーノはザンバットソードに魔皇力を注入していくと、満身創痍となり、動くこともままならないほどに追い詰められたコブラヤミーに最強の一撃をお見舞いする。

「はあああああああああああ！！！」

ユーノが飛ばした魔皇力の斬撃はコブラヤミーを飲み込んでいき、コブラヤミーは絶叫を上げながらその意識を完全に破壊され、攻撃が決まった瞬間爆発が起こる。

クロノ達が爆発を目の当たりし、一瞬愕然とした表情を浮かべるが、直ぐに爆発の中より見えてきた見覚えのある面影に目を向ける。

「！」

クロノはその面影が間違いなくクライドであることを確認すると、病み上がりともいえないほどの体を引きずって、リンディと共に倒れ伏すクライドへと駆け寄った。

「父さん！」

「クライドさん！」

ユーノは変身を解くと、ユーノスとナーノの元へと近づき、クロノ達の光景を遠くから見守った。

「父さん・・・父さん！」

クロノが実に複雑な心境を抱きながら自分の腕の中で眠る父、クライドに呼びかけをすると、クライドは全身ボロボロの状態でゆっくりと目を覚まし、クロノとリンディに微笑みかけてきた。

「クロノ・・・リンディ・・・・・・漸く、家族三人・・・また集まったな・・・」

「・・・クライドさん・・・／／／」

「父さん・・・・・・なんで・・・・・・なんで僕らを残して・・・・・・一人で死んでしまったんだ・・・！なんで・・・・・・あの時の約束・・・・・・破ったりしたんだよ／／／」

「クロノ・・・・・・すまない。私は・・・碌でもない父親だ・・・結局・・・欲望に身を任せて、クロノやリンディ・・・それと周りの幸せを壊してきたのは・・・私だった・・・」

「何を言ってるんだ父さん！父さんは・・・父さんは・・・／／／」

クロノはヤミーであるとは言え、本物であると錯覚するほど亡き父にそっくりな目の前のクライドに涙を浮かべ、それ以上何かを言おうとしてもうまく言葉に出来なかった。

クライドは淋しげな表情でクロノを見つめていると、不意にリンデ

ィがもうじき消滅を迎えようとしているクライドの手を握りしめる。

「りん・・・ディ・・・」

「いいのよ・・・クライドさん。あなたはちゃんと・・・私達に幸せを届けてくれた・・・・・本当に・・・――数えきれないほどの幸せを、あなたから貰ってわ／／／」

「リンディ・・・・・お前には・・・・・・迷惑ばかり・・・かけて、何ひとつ幸せにしてあげれなかった・・・・・本当に、罪な夫だったな――――――」

「いいえ。クライドさんから貰った幸せがあるからこそ、クロノもこうして立派に育ってくれたわ。だから謝ることなんてないの。私は今とっても幸せよ――――――この広い次元世界で、クライドさんと出逢えて、クロノが生まれて、家族が増えて――――――こうしてまた、私の愛した夫にまた会えたんですもの・・・／／／」

「・・・・・／／／」

クライドはそれを聞くと、自然と瞳から涙を流す。

そんなクライドを見据えながら、クロノは意を決して自分の正直な想いをぶつける。

「父さん――――――あなたは確かに本物の父さんじゃないのかもしれない。だけど、僕は偽物だろうが本物だろうが関係ない。ただ、父さんが目の前にいるのなら、ちゃんと自分の気持ちは伝えておかないと――――――」

「・・・ああ。言ってくれないか」

「・・・――――僕は・・・ずっと父さんに憧れてた。強くて、優しくて、僕の背中をずっと押してくれた父さんの大きな背中が僕の目標でもあった。だから、早く父さんに追いつきたくて・・・だけど父さんは僕らを残して先に逝ってしまった／／／僕は目標を見失って――――ずっと不安で仕方なかった。だから・・・・・・もう二度とこんな辛い目は御免だと思った。父さんが教えてくれたことを胸に抱いて、自分の決めた道を進んできたけど――――僕はどうしても自分に自信が持てなかった。だから、もう一度でいいから・・・もう一度だけ・・・父さんに言って欲しかった――――“一度決めたことは、絶対に振り返ったりするな”って・・・／／／」

「・・・・・ああ。そうだな」

クライドは、幼き頃のクロノに自分が心に決めていた言葉を呟くあの時の情景を思い出すと、今目の前で自分を見つめる最愛の妻と息子に手を握られながら、最期を看取ってもらうにふさわしい言葉を残す。

「――――私も幸せだったよ・・・二人のような素敵な妻と息子に出逢えて・・・・・本当に・・・よかった・・・――ありがとう・・・・・・漸く・・・・・・満たされそう・・・だ――――」

クライドはその言葉を最後に、自らの体をセルメダルへと還元させる。

クロノとリンディはセルメダルとなったクライドの亡骸に、些かの

悔しさと寂しさを覚えながら、これでもかとばかりに咽頭を上げる。

「「ウアアアアアアアアアアアア／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」」

ユーノ達は泣き叫ぶ、クロノ達の光景を遠くで見守りながら、黙ってその場で立ち尽くし、エイミィは涙で視界が見えなくなっており、ユーノ自身も帽子を深々と被り直して沈黙を保ち続ける。

そして、その隣で最後まで状況を見守っていたナーノは、使命の一つであるはずのセルメダル回収を行わずに、静かに後にしようとする。

ユーノスはそんなナーノに言ってくる。

「いいのか？」

「・・・それじゃいくらなんでも無神経すぎるでしょう」

ナーノは背中越しにそう返事をすると、徐にその場から立ち去って行き、ユーノス自身も納得した様子で呟いた。

「―――そうだな」

爬虫類ヤミー・・・それは死者が生前に残した欲望を失った亡骸と共に蘇らせ、それを暴走させる――――――

だが決して忘れてはならないのは、死んだ人間は二度と蘇ったりはしない。

どんなに祈りを捧げようと、どれだけの物を注ごうとも、神はこの決まりだけは決して犯す事は無いのである――――――

所有メダル

タカ二枚　バッタ一枚　カマキリ一枚　クワガタ一枚　トラ一枚
ライオン一枚　チーター一枚　サソリ一枚　カニ二枚　エビ二枚
ゴリラ一枚　ウナギ一枚

死人と涙と吸血鬼コンボ（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「ちょっと今回はかなり重みのある内容だったけど、気を取り直して今日は吸血鬼について教えよう♪」

「ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』、シェリダン・レ・ファニュの『カーミラ』など、多くの創作において登場してきた生と死を超えた者、または生と死の狭間に存在する者、不死者の王とされる。凶悪な犯罪者の通称としても使われ、ヴァンパイヤとも言われるね」

「一般に吸血鬼は、一度死んだ人間がなんらかの理由により不死者として蘇ったものと考えられている。現代の吸血鬼・ヴァンパイアのイメージは、ヨーロッパの伝承に起源をもつものが強く、吸血鬼の伝承は世界各地で見られ、東ヨーロッパのヴァンパイアに加え、アラビアのグール、中国のキョンシー等がある。」

「語源については諸説有るが、１７３０年代における英語の出版物に『Ｖａｍｐｉｒｅ（Ｖａｍｐｙｒｅ）』の文字があるため、それ以前の時期から使われていた語とされている。一般的にはリトアニア語の「Ｗｅｍｐｔｉ（飲む）」由来とされる他、トルコ語の『Ｕｂｅｒ（魔女）』セルビア・クロアチア語の「Ｐｉｒａｔｉ（吹く）」も提唱される。」

ナ「ほんと・・・今日の話はこれまでにないぐらい重い内容のものだったよね。僕自身、こう言うシリアス系は苦手なんだけど」

フェ「ぐっす／／／クロノ・・・母さんも辛いよね・・・／／／」

ユ「ああ・・・なんか今回に限っては、クロノの事を貶すのはご法度に思えてきた。だから、今回だけは見過ごそうと思う」

と、そんなユーノの発言を聞き、駆けつけるクロノ。

ク「ちょっと待て。お前今回だけはといったな・・・今回だけはと!?つまりこの話が終わったら僕はまたお前のあれか!?僕の事なんだと持ってるんだ一体!」

ユ「何って、“人を淫獣フェレットもどき呼ばわりして、物みたいに扱う無限書庫ブラックリストナンバーワンの小市民ダメ亭主、腹黒で友達のいないクロノ”だろ?」

ク「もっと短いところで切ろ!!!流石に聞いててイラッとするわ!!!!」

まぁ、結局のところクロノはこう言う役の方がユーノ的には一番扱いやすいらしい。

やっぱ潮らしいのは似合わないな。

魔導師図鑑ハイパー!

特別企画・キャラクター交流会!!

第二段目として、また夜御倉さんにメッセージを送りたいと思います。

ユ「どうもどうも♪またまたユーノ・スクライアです♪」

一「で、師匠の黒崎一護だ！」

ナ「ついでに、息子のナーノです♪と言う訳で第二弾を迎えましたが、心境はどうですかお二人とも？」

ユ「やっぱり嬉しいものだよね。お互いにこうして交流が交わせるって言うのは♪」

一「これこそ、この小説のタイトルの絆って感じだな。さて、今回もまたこちらから質問をしようと思ってる訳だが、今回は俺達三人からです。」

ユ「先ずは僕から龍元さんに。“ユーノ・スクライア外伝の話の中には、時おり社会的な事や現実の在り方を皮肉ったもの、更には何かを訴えかけるようなものがありますが、これまでの話の中で一番ぐっときたそう言う話は何ですか？”」

一「二つ目に俺から龍児に。“お前ってと死ぬ似合わない大人な発言をすることが多いが、子どもっぽいところとかあるのか？あったらこっそりと教えてくれよ♪”」

ナ「最後は僕からみなさんに。“僕が８歳で大学を卒業して、プロボラとしての道を切り開いていくことを聞かされた時、正直どう思いましたか？また、僕が超がつくほどのエリート息子のくせして、割と周りを強引に自分のペースに持っていくことにどう感じましたか？”です♪」

一「解答は前回と同じ要領でお願いします！」

ユ「次回は、いよいよ死神・魔導師・・・そしてマフィアとの長編コラボ開始です！」

ナ「僕の銃の師匠も登場だよ！」

特報・及び次回予告

新暦００８１年　地球

今ここに、世界を揺るがす巨大な欲望が目を覚ます。

ボンゴレファミリー・・・――――１００００近い組織を傘下に置く、二枚貝を意味するボンゴレを象徴とするマフィアである。

死神・マフィア・そして魔導師が、ここに会い見える！

ユーノ・スクライア外伝、１８０回記念長編ストーリー

ユーノ・スクライア外伝・絆　アンゴルモア・リボーン篇

ツナ「信じてもらえるかどうか分らないけど・・・俺はマフィアのボスなんだ」

ユ「ひょっとして、奈々さんの息子さん！？」

京「私達、これからどうなるんだろう」

鬼「マズイぜ・・・！」

外伝史上最大の事件、勃発。

ユ「スパジオファミリー？」

管理局を乗っ取った、マフィアの脅威がユーノ達を襲う！

ツ「地獄から迷い出たか」

ケ「僕は、次元世界の超越者だよ」

ユ・ナ「変身！」

今始まる、次元世界マフィア「スパジオファミリー」の恐ろしき野望！

ケ「貰うよ。君の魔法♪」

な「（力が・・・消えていく・・・！）」

ユ「なのは！！！」

奪われるエースオブエースの力――――――！

ケ『地獄を楽しんじゃいなよ♪』

主題歌：Ｔｉｍｅ　ｊｕｄｇｅｄ　ａｌｌ　ユーノ・スクライア＆
沢田綱吉

最強の敵の前に、次元世界壊滅の危機！

ツ「君に何が分かる！」

ユ「ツナ君・・・」

それぞれの宿命を胸に、いよいよ最終決戦が始まる。

山「困ったときは助け合いだろ？」

ユ「じゃあ行きますか」

一「死ぬなよ」

京「負けないで・・・ツっ君。」

ユ「なのはの魔法は、お前には渡さない！！」

ケ「終わりだよ。過去の忌まわしき記憶」

ユ・ツ「ぐあああああああああ！！！」

ユーノ・スクライア外伝・絆　アンゴルモア・リボーン篇

声の出演

ユーノ・スクライア：水橋かおり　沢田綱吉：　國分由香里　黒崎一護：森田成一
高町なのは：田村ゆかり　沢田京子：稲村優奈　リボーン：ニーコ
ユーノス・スレイア：浪川大輔　ナーノ・T・スクライア：鈴村健一　阿散井恋次：伊藤健太郎　他

〈ＧＩＮ　ＧＩＮ　ＧＩＮ　ＧＩＧＡ　ＳＣＡＮ〉

ユ「ホオオオオオオオオオオ！！！！！！」

ツ「ＸＸ　ＢＵＲＮＥＲ！！」

近日、更新予定！

ユ「次回、『次元を乗り越えし者』」

登場人物

クライド・ハラオウン

声：中田譲治
クロノの父親であり、リンディの夫。故人。２７年前、艦隊として「闇の書」を護送中、闇の書の防衛プログラムが暴走。自分の艦である「エスティア」のコントロールをジャックされてしまう。クル

ーを全員脱出させたのち、艦隊司令のグレアムに嘆願し「エスティア」と運命を共にした。それから27年の歳月を経て、爬虫類ヤミーとして墓地にあるクロノが持つペンダントは別のものからセルメダルを投下され、実体化。クロノやリンディと家族三人で過ごしたいという欲望の元、ユーノ達と会い見える。コブラヤミーと化してユーノ達を追い詰めるも、ユーノの完現術コンボの力に圧倒され、最後はリンディと見届けられながら、感謝の言葉を残してセルメダルとなった消滅する。

登場ヤミー

コブラヤミー

声：中田譲治
身長　２４０？　体重　１８９？
特色／力：ヘビ状の腕を伸ばした攻撃、毒液で触れたものを腐食させる、再生能力
ミッドチルダにある墓地にある「クライド・ハラオウン」の墓標に供えられた形見のペンダントに宿るクライドの欲望から生み出されたもの。全身をナーノの弾丸を持弾く鱗で覆い、伸縮自在なヘビ状の腕で敵を攻撃する他、毒液を吐いて触れた物質を腐食させる恐るべき能力を秘める。それはクライド自身であると同時に、それ自体が欲望の塊。家族と共に過ごしたいというクライドの欲望の元、時空管理局本局を訪れ、ユーノ達と対峙したのち、クロノやリンディと再会を果たす。一度はクロノに傷を負わせて逃走を図るも、コブラヤミーの意識に徐々に侵食される中で自我を保ち、もう一度だけ本局を訪れるも、結果的にコブラヤミーに意識を乗っ取られユーノを窮地に追い込む。だが、ユーノが新たに「黄金の吸血王」の完現術コンボを発動したことで形勢逆転。ザンバットエンペラーをその身に受け、コブラヤミーの意識は完全に消滅し、最後はクライドの

姿と意識で力尽きセルメダルと化した。

次元を乗り越えし者（前書き）

リ「ちゃおっす。いよいよ始まる、ユーノ・スクライア外伝・絆アンゴルモア・リボーン篇の司会進行を務める家庭教師ヒットマンのリボーンだ。俺の登場は当面先になるとは思うが、ミニコーナーや次回予告のナレーションはばっちりやってやる。ほんじゃ・・・スタート！」

次元を乗り越えし者

＞i33764—709＜

マフィア――――――それは、１９世紀より本拠地シチリア島から恐喝や暴力により勢力を拡大、市民生活にまで影響を及ぼす存在。

その起源は古く、サルデーニャ王国の国王を務めていたヴィットーリオ・エマヌエーレ2世がイタリア王国の初代国王と君臨してからシチリアが統合されたことが、その変換点ともなった。

王国とは言え、政権に集まった人間の中身は右翼から左翼までばらばらであり、伝統的に中道である大地主は不信感を抱いた。

さらにシチリアの住民たちは、それまでの数世紀にわたるシチリア王国や両シチリア王国での、フランス人やスペイン人といった外国人支配者による政治的な圧迫の記憶から、政治や政府そのものに対して強い不信感があり、住民同士での互助組織を通じてその時々の外国人支配者に対して抵抗していた。

これらのことから中央政府に対する反発が強まり、大地主、保守的な宗教勢力、勃興する労働運動、さらにファシストによる混迷が生まれ、マフィアの躍進する素地が出来ていったのだ・・・・・・――wikipedia参照。

そして、その発祥の地・・・イタリアにおけるマフィアの中でも、伝統・格式・規模・勢力すべてにおいて別格といわれる最大手マフィアグループが存在する。

ボンゴレファミリー・・・――――１００００近い組織を傘下に置く、二枚貝を意味するボンゴレを象徴とするマフィアである。

元々は市民を守る自警団であるため、ファミリーや地域住民を大切にする意識が強く、初代ボスであるボンゴレ?世(プリーモ)は歴代最強と謳われた実力者であると同時に、その性格から全ての色に染まりつつ、全てを飲み込み抱擁する『大空』と謳われた。

彼がそのボンゴレを創設して数百年・・・現在のボンゴレファミリーは彼の来孫である顔が瓜二つの青年がボスとして纏め上げている。

しかし、まさかこのボンゴレと・・・・・この次元世界に、嘗てない危機が迫りくるとは、誰も思ってなどいなかった――――――

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

イタリア　シチリア島深部。

辺りは爆炎に包まれ、地面には恐らく抗争によって死んだと思われる多数のマフィア関係者を始め、多くの人間が横たわっていた。

何とか難を逃れた者も、その多くは人質とされてしまい、生き残ったのは彼等・・・ボンゴレを軸とする同盟ファミリーだけであった。

一体この地で何が起こったのか――――――それを端的に説明する状況が眼前と広がっている。

死ぬ気の炎と呼ばれる特殊な炎をグローブに宿し、額にはオレンジ色に輝く澄んだ同じ色の炎を灯す男・・・この男こそ、ボンゴレファミリー十代目ボスにして、のちにユーノと絆を紡ぐこととなる青年、沢田綱吉である。

「は、は、は、は、は」

綱吉、周りからはボス、気心知れたものからはツナと親しみを持って呼ばれるこの男は今、人生における戦いの中で、最大の窮地を迎えていた。

険しい表情を浮かべながら、ツナは大空に君臨する不気味な青紫色に輝くリングをつけ、自分たちボンゴレと同盟ファミリーを見下ろす不敵な笑みの男を見上げる。

ツナがその敵の姿を見上げていると、その周りにいる彼を守護する七人、嵐の守護者「獄寺隼人」、雨の守護者「山本武」、晴の守護者「笹川了平」、雷の守護者「ランボ」、雲の守護者「雲雀恭弥」、そして霧の守護者「六道骸とクローム髑髏」も満身創痍な体を何とか起こす。

「「「は、は、は、は、は」」」

「く・・・」

「こ・・・ここまでとは・・・・・・これは最早、人間の力ではありませんね――――――」

骸が嘗てないほどの敵の力に純粋に恐怖を覚えると、それを聞いていたボンゴレの陰を司る独立暗殺部隊「ヴァリアー」のボス、ＸＡ(ザ)ＮＸＵＳ(ンザス)は思わずつぶやく。

「か、カスが・・・・・・！」

同じ様に、ボンゴレと同盟を組むキャバンローネファミリーボス、

「ディーノ」やシモンファミリーのボスでツナの親友「古里炎魔（こざとえんま）」、そして・・・ボンゴレと同等の歴史を持つジッリョレノファミリー屈指の実力者で、嘗てはツナたち若きボンゴレをつぶし、世界を乗っ取ろうと画策した男、「白蘭（びゃくらん）」は苦い顔を浮かべながら体を起こし、そのうちの白蘭は自分の嘗ての記憶と辿って、それと全く同じことをしようとしている敵に向かってこう言った。

「へぇ・・・まさか君、昔の僕じゃないけど・・・世界の統率者にでもなるつもり？」

すると、それを聞いたツナたちボンゴレが敵対する男・・・新進気鋭のマフィア「スパジオファミリー」を束ねる謎の人物、ケリー・バーンズは不敵な顔で言ってくる。

「――――そうだね。夢の一つはそれだけど、先ずは君たちボンゴレを潰すのが先かな。ボンゴレ十代目ファミリーの君たちが死ねば、文字通りここ地球にあるマフィアは壊滅したようなものだよ。あとは――――――」

そう言うと、ケリーは空中に浮かんだ状態から指にはめたリングに青紫色に輝く光を放ちはじめ、不気味な笑顔でツナたちを見つめる。

「過去のわだかまりを消せばすべて事がつく」

「過去の・・・わだかまりだと・・・」

ツナが意味深な言葉を向けるケリーにそう返すと、ケリーは光をさらに大きくし、太陽球とも見間違えるほどの大きさに膨れ上がらせたエネルギー発光体を掲げて笑顔を向ける。

「そ♪じゃ、終わりにしようか♪」

止めを差そうとする飄々とした笑顔のケリー。

と、それを遠くから見ていたツナの妻であり、晴の守護者の了平が妹、京子は夫や仲間の危機を見るや否や一目散に飛び出した。

「ツっ君／／／ダメ！！！」

京子が飛び出すと、彼女の親友であり獄寺隼人の妻、ハルも同時に飛び出し追いかける。

「京子ちゃん！駄目です！」

二人が飛び出してくると、ツナの右腕の獄寺や了平が血相を変える。

「ハル・・・！十代目！奥方が！」

「京子！来るな！」

二人の言葉を聞き、ツナが後ろを振り返ると、京子が涙目になりながら自分の方へと向かって来るのが目に見える。

「待て！京子！！」

ツナも咄嗟に京子に向かって声を荒げるが、その直後・・・ケリーの一撃が向けられる。

「じゃあね♪黒い歴史の団塊達・・・――――」

太陽球の如く一撃がツナたちに向けられると、ツナは咄嗟に妻である京子を庇うように背を向け、他の者達も一様に身構えると、放たれた一撃は凄まじい衝撃を生んでツナたちボンゴレ十代目ファミリーを包み込む。

「「「「「「「うわあああああああああ！！！」」」」」」」」

「「「「きゃあああああああ！！！」」」」

「ツナ君！」

「綱吉君！」

「ツナ！！」

同盟ファミリーである炎魔、白蘭、そしてディーノ三人が思わず声を荒げる中、光に包まれたツナは京子を守りながら絶叫を続ける。

「うわあああああああああああああ！！！！！」

「ははははははは♪どうせ死ぬなら、地獄を楽しんでから死のうよ♪ハハハハハハハ♪」

ケリーはそう言うと、自分が放った一撃が創り出した時空間の歪みの中に、ヒカリの中に包み込んだボンゴレ十代目ファミリーとその関係者の一部を放り込むと、唖然とする同盟ファミリーを余所に不敵な笑みを浮かべて忽然と姿を消した。

シチリア島における地球規模でのマフィアの闘争は・・・――――次元を超えて波乱の展開を迎えることになるのであった。

◇

ユーノ・スクライア外伝・絆　アンゴルモア・リボーン篇

君たちは知っているか？

次元世界最強と畏怖される生きる伝説の男とその相棒の事を？

では改めて紹介しよう！

嘗て、『翡翠の魔導死神』として次元世界を救い、その後は1年間のブランクを置いてから、『絆の完現術士』と呼ばれるようになった心優しき天才・・・ユーノ・スクライア。

時空管理局の創設者の一人にして、１５０年の時を超え現代に蘇っ

た七大元帥最強の結界魔導師で、現在はフェレットの姿として活動する・・・ユーノス・スレイア。

この二人を中心とする機動六課とその仲間たちが、欲望で世界を喰らおうと画策する怪人・グリードとアンゴルモア事件に立ち向かっていく謎と戦いの物語である！

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

5月の初旬。

春の暖かさが包み込み、人々の心も思わず弾みそうになるこの季節だが、そんな四季や状況に関係なしに脅威は突然やって来る。

このミッドチルダはあらゆる次元犯罪の巣窟であり、同時にここは奇怪な現象が多数目撃される管理世界である。

今ここに、その奇怪な現象と言うべき謎の生命体が市内で目撃された。

ビルの上に佇むその生命体の名は、ヤミー。

「ウッハハハハ。ウワッハハハ！！」

メダルの怪人であるグリードが自分の手足として造り出したもので、これはその中でも鳥のグリードであるアンクが作りだした赤いオウムヤミーである。

オウムヤミーは笑いを上げながら市内に向けて火炎弾を放出すると、その直後空へと飛翔し、眼下を走行する一台のトラックを追いかける。

そして、オウムヤミーは迷いなくトラックを攻撃しはじめ、トラックはその襲撃を受けながらも車を走らせ、暫くしてから何処からともなく飛んできた鳥のグリード、アンクが不敵な笑みを浮かべる。

「は。アンゴルモアの輸送とは・・・何とも好都合な事をしてくれるな。ちょうどいい。根こそぎ俺が奪ってやる」

「ウワハハハ！」

アンクとオウムヤミーは同時にトラックに火炎弾を発射し、トラックを追い詰める。

このトラックの中には、中央のラボから地方のラボへと貸し出されるこれまでユーノ達機動六課が回収したアンゴルモア１０個が収められており、それを知ったアンクはヤミーを作りだし、襲撃を敢行。

グリードとヤミーが市内に出現した報告は、すぐさまユーノ達へと伝えられる。

『緊急連絡！緊急連絡！ロストロギア『アンゴルモア』の輸送中、ヤミーと思われる怪人の襲撃を受けました！その上鳥のグリードによる攻撃も受けています！至急応援頼む！』

その事を聞くと、ユーノとその相棒であるユーノス、そして未来からやってきた息子のナーノは外へと飛び出し、グリーンラベルとライドベンダーを走らせ現地へ急行。

「ワッハハハハ！！ワハハハ！！」

オウムヤミーはその後も必死で逃げ続けるトラックに向けて攻撃を課し、トラックを運転する局員は険しい表情を浮かべながら使命を全うすべく、運転を続行。

「く！」

「おら！逃げんな！」

しかし、これに対してアンクは怒り心頭な様子で容赦のない攻撃を課していき、二体の同時攻撃にそろそろ限界を感じ始めていた局員は思わず本音を漏らしてしまう。

「誰か！早く助けて！！」

そう願った時だった。

サイドミラーに映って来たのは、ライドベンダーに跨り、ライジングハートのガンモードを起動させたナーノの姿だった。

ナーノはヘルメット越しに見えてくる頭上のオウムヤミーに向かって銃弾を発射。

「それ♪」

「ぐあああ！」

オウムヤミーは翼を撃ち抜かれて撃墜される。

「何！？」

アンクがそれに驚き真下の方へと目を向けると、ナーノは飄々と笑みを浮かべながらアンクにも銃口を向ける。

「撃ち落とすけどいいよね♪答えは聞かないけど♪」

ナーノはそう言うと、引き金を引き、オウムヤミー同様アンクの翼を撃ち抜いた。

「のあ！」

アンクは地面に落下すると、険しい顔を浮かべて徐に立ち上がる。

と、そこでタイミングよくグリーンラベルに乗って駆けつけたユーノとユーノス、そしてナーノと鉢合わせる。

ユーノはヘルメットをとり、ユーノスとナーノと一緒にアンクとオウムヤミーを見据える。

「アンク。性懲りもなくアンゴルモア集めに精を出すとは・・・」

「お前にあれを渡す訳にはいかない。」

「全力でぶちのめすから、そのつもりで♪」

「は。出来るモノならやってみろ。お前らのコアメダルもまとめていただきだ！」

アンクはそう言うと、怪人体の右腕を三人に向け、オウムヤミーと並びあう。

ユーノスは結界印を取り出しユーノに手渡す。

「ユーノ。ウナギムチで行け。」

「了解」

「じゃ、お仕事始めようか♪」

ナーノもバックル上のライジングハートを腰に巻きつけ、パスを取り出すと父であるユーノと一緒に戦闘態勢となる。

「「変身！」」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

〈Ｇｕｎ　ｆｏｒｍ〉

変身を完了させたユーノ、ナーノはそれぞれアンク、及びオウムヤミーと戦闘を回避する。

「ふん！」

「おらああ！」

ナーノは得意のステップを利かせた動きでアンクの攻撃を避けながら、ダンスを取り入れた変則的な銃撃を叩き込み、アンクは以前の事もあってかナーノに対して非常に恨みを持っていた。

その為、攻撃に関して言えばかなり苛烈なものとなっていた。

二人が熱戦を繰り広げていると同時並行して、ユーノは陽気に笑いを上げるオウムヤミーと対峙。

〈Ｖｏｌｔａｒｍ　ｗｈｉｐ〉

ユーノはウナギコアの魂を引き出し使役すると、両腕に電気ムチとして使えるボルタームウィップを生成、オウムヤミーに効果的なダメージを与える。

「はっ」

「ぐおおお！」

オウムヤミーは電気を帯びた鞭を多数受けると、笑うこともままならなくなっていく。

ユーノが優勢となってオウムヤミーと対峙している間、ナーノは怒髪天を衝くアンクを相手に彼を票初する態度をとり続ける。

「へへ～ん♪こっちこっち♪」

「お前、舐めてんのか！」

アンクは火炎弾を放ってナーノを攻撃するも、ナーノはアクロバティックで、全く以て無駄のない動きでその攻撃を悉くかわしていくと、ナーノは魔力を左腕に供給しユニットを装着。

〈Ｉｎｆｉｎｉｔｙ　ｖｕｌｃａｎ〉

竜の口を模したバルカン砲を装備したナーノはアンク目掛けて銃弾を連射する。

「ほおおおおお！！」

「ぐうううう！！！」

アンクはその攻撃を何とか凌ごうと両翼を広げるが、威力は更に激しさを増していき、アンクは次第に後退する。

すると、ここでナーノが前に出て更に接近してきた。

「オラオラオラ！！！！」

ナーノの攻撃を徐々に近い距離で受けるアンクは更に表情を一層険しくしていき、ナーノは隙を見ると、足に装備したドラゴンレッグでアンクの右腕を蹴りつける。

すると、アンクの腕から採取したセルメダルが大量に絡め取られる。

アンクは自分の右腕を押さえながら、ナーノを睨み付ける。

「く・・・お前・・・！」

「へへ。大量大量♪序でに、コアメダルも貰おうかな」

「ふざけんな！！」

アンクはコアメダルまでも奪おうとするナーノにこれまでにない怒りを覚えると、右上から可能な限りの回数で火炎弾を叩きこむ。

ナーノはそれを躱しながら、オウムヤミーと対峙していたユーノへと近づき提案する。

「お父さん！まとめて一気にやっちゃおう！」

「分かった。だったら、この間手に入れたこれで」

そう言うと、ユーノは先日のコブラヤミーとの戦闘で入手した、キ

バのユーノが授けた完現術コンボアイテムである『ロードフエッスル』を取り出す。

「もう一人の僕の力、見せてやる」

そう言うと、ユーノは黄金に輝くロードフエッスルを口に咥えて吹き鳴らす。

〈Ｌｏｒｄ　ｏｆ　ｖａｍｐｉｒｅ〉

すると、ユーノの身体が黄金色の霊圧に包み込まれ、中から現れるのは黄金の甲冑とマントに身を包んだ魔皇力を全開にしたユーノであった。

「おおおおおおおお！！！！」

ユーノが放出する魔皇力に圧倒されたオウムヤミーとアンクは足場を保つのも一苦労だった。

「くううう！！」

「何！また新たな進化だと・・・！」

アンクがユーノの無限の進化に愕然とする中、ユーノは二体を一気にまとめて相手にするため、最も効果的な武器として『魔海銃バッシャーマグナム』を召喚。

「バッシャーマグナム！」

バッシャーマグナムはユーノの呼びかけに答えて、亜空間より出現

し、ユーノの右手に収められ、ユーノは魔皇力を銃に注ぎ込むと、アンクとオウムヤミーに狙いを定める。

〈Ｂｕｓｈｅｒ　ｅｍｐｅｒｏｒ　Ｔｏｒｎａｄｏ〉

「はあああああああ・・・・・・」

アクアフィールドから竜巻を起こし、その中に撃ち込んでパワーアップさせた弾丸により敵を撃ち抜くこの技を発動させる為、ユーノは全神経を集中させる。

アンクはこれを見て一大事だと判断し、オウムヤミーと一緒に飛び去ろうとする。

「くそ！」

「させるか！」

だが、ここですかさずユーノとナーノがストラグルバインドで二体の動きを絡め取り、飛翔を出来なくさせる。

「「！」」

飛翔能力を奪われた二体はストラグルバインドの効果により、一時的に身動きを封じられ、ユーノはその隙を見て魔皇力で強化した弾丸を二体に向けて叩きこむ。

「セイヤー！！！」

ユーノの弾丸が撃ち抜かれた直後、ナーノもまたパスを翳してドラ

ゴンジャムからのエネルギーを供給して作りだした弾丸を銃口から放つ。

〈Ｗｉｌｄ　ｓｈｏｔ〉

「どりゃあああ！！」

親子が放つ強力な一撃が似たに浴びせられると、爆発を伴い絶叫を上げる。

「「ぐあああああ！！」」

オウムヤミーは威力に負けてしまい、そのままセルメダルとなって飛散し、アンクが右腕から自分のコアメダル一枚を放出。

ユーノスは目の色を変えると、これを奪い盗る事に成功する。

アンクはしまったと言わんばかりの表情でユーノスを凝視すると、ユーノスは不敵な笑みを浮かべて奪い盗ったコンドルのコアメダルを裏返す。

「は。こいつは儲けたな」

「く・・・くそ・・・」

ナーノもナーノでセルメダルをタンクの中へと入れていき、ユーノは完現術コンボを解くと、アンクを睨み付ける。

アンクは敗色濃厚なこの状況で勝ち目はないと判断すると、悔しそうな表情を浮かべて翼らを広げ、天へと舞い上がる。

「ユーノ・スクライア！ユーノス！それに竜神の寵児！次はこうはいかないぞ！」

そう言って、アンクは傷を癒すために何処かへと飛んでいく。

アンクを退散させることが出来たユーノ達は変身を解き、奪ったコンドルコアを確認する。

「へへ。負け惜しみ言ってるよ」

「好きなだけ言わせておけ。どの道あの攻撃を受けて、平気な筈はない」

「一先ず、グリーとヤミーからはアンゴルモアは守れたし、コアも手に入れましたし、一石二鳥ですかな♪」

「「ああ（うん♪）」」

三人はさしあたっての任務を終えると、自分のバイクに跨り機動六課へと戻っていく。

が、この時彼らはまだ気づいていなかった。

ミッドチルダの上空に奇妙な亀裂のようなものが出来始めていたなどと言うことに――――――

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

六課へと戻って来たユーノ達は早速前線メンバーにアンクから失敬したコンドルコアを披露する。

「と言う訳で、アンクから奪ってきました、これがコンドルコア♪」

「「「おおお！」」」

スクライア商店の三人は感心した様子でユーノが手に取ったコンドルのコアメダルを凝視し、ユーノはほくそ笑んでからユーノスの結界印へとそれを収める。

ユーノスはこれまでの現状をもう一度振り返ってみる。

「これで集めたコアメダルは現在１５枚。そのうちの黒のコアメダルはあの甲殻類ヤミーものだ。まだまだ謎の多いものだが、全部回収するまでは気を抜けん」

「そうですね。だけど、今更だけどちょっと不思議なんだよね」

「不思議って、なにがだい？」

なのはの言葉を聞き思わずそう尋ねるユーノ。

すると、なのははそんなユーノに次のように尋ねる。

「ほら。コアメダルも立派なロストロギアな訳でしょ。そんな危険な力を内包してるそれを、戦いの間際ユーノ君は状況に合わせて使ってるじゃない？よく暴走しないで平気でいられるなって・・・」

「ははは。その事なら、前にもう一人の僕が話したんじゃないかな。僕がブランク・オブ・デザイアだから、その魂を引き出しても欲望が空っぽな故に暴走を免れる異様な体質だからって♪」

それを聞くと、恋次達は欲望が無いと自負するユーノの思わず苦い顔を浮かべる。

「だから自分で欲望が無いなんて言うなよ・・・なんかこっちの方が息苦しくなる・・・」

「考えてみれば、ユーノはスカリエッティとは真逆の立ち位置なんだよな」

と、ここでスカリエッティの名前が出てくると、彼を長年追いかけてきたスカリエッティの技術によって作りだされたフェイト・T・ハラオウンは神妙な顔を浮かべながらこう言って来た。

「ジェイル・スカリエッティ・・・――無限の欲望？アンリミテッド・デザイア？と自負するほど、決して満たされることのないほどの巨大な欲望を抱いたあらゆる生命をもてあそぶ次元犯罪者史上最悪の男――――――現在全く消息がつかめないでいるけど、本当に何処に身を隠しているんだ」

「フェイトさん・・・」

「テスタロッサ・・・」

思わずフェイトの言葉に胸が締め付けられるような感覚に陥るエリオやシグナム、そしてユーノ達前線メンバー。

暫くの間が辺りを支配した後、不意にヴィータはスカリエッティが意図的に姿を見せなくなったことに違和感を覚えてこう言って来た。

「確かに妙だよな。ここ二年近く、あいつはアンゴルモアに全く手を出してきてねェ。前に出てきた例の破面魔導虚も、あれきり姿を見せないしな」

「でも、そのスカリエッティとは対照的に、今度はグリードがアンゴルモアを狙い始めた・・・これって一体・・・」

すると、その疑問を聞いてユーノは帽子をかぶり直すとこんなこと口にする。

「案外、グリードとスカリエッティが手を組んでいるのかもしれないね」

「！」

「な！」

ユーノの恐ろしい一言に誰もが目を見開き絶句する。

と、ここで例外的に沈黙を保っているのは未来からやってきた息子のナーノだけだと言うことは補足しておこう。

「お、おい・・・ユーノ。まさかそんな・・・！」

「飽く迄も可能性。本当かどうかも、分かったものじゃない。ただ、そう言うことも十分考えられるから、一応用心はしておくべきだよ」

「――そうだな」

「万が一スカリエッティがグリードと手を組んで、アンゴルモアと一緒にコアメダルを集めているとすれば、その目的は一体」

「あいつが集める理由なんて、碌でもねぇことしかねぇだろ。それこそ、欲望に飲まれた性根の腐った野郎なんだ」

一同はスカリエッティとグリードの線を念頭に入れた上で、今後も引き続きアンゴルモア捜索とコアメダル回収の為に職務を全うしていくが、ユーノ達が知らない陰でそのスカリエッティとグリードはユーノの思惑通り、互いに手を組み暗躍を続けているのであった。

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

それから数時間後。

すっかり陽もくれた午後８時前後。

ヴィヴィオの親友でありクラスメイトでもあるコロナ・ティミルが住まう屋敷に、同じく親友のリオ・ウェズリーが遊びに来ていた。

二人は談笑を交えながら春の夜長をのんびりとコロナの自室で寛いでいた。

「ふう～～～平和だよね～～～！」

「平和ですわね～～～」

「ついこの間、魔導虚事件とかオグドモン事件みたいな大惨事が起きたことがまるで嘘みたい。出来ればもう少しこの平穏が続くと良いよね。」

「ですわね～～～」

コロナが相槌を打ちながら紅茶を啜っていると、リオが思い出したように言ってくる。

「あ、そうだ！シュークリーム食べる？来る前に買ってきたんだ！」

「いいですわね。では頂きましょう！」

リオはそう言うと、屋敷を訪れる前に買って来た地元でも有名な洋菓子店特製のシュークリームを取出し、更に盛り付けると、コロナは微笑みかけながら空となったリオのカップに紅茶を注ぎ始める。

すると、ここでリオが次のような事を口にしだす。

「そう言えば・・・昨日さ、帰り際ヴィヴィオから聞いた話なんだけどね・・・え～と・・・ほら、コロナん家が休暇でよく行くって言う第９７管理外世界・・・名前はえ～と・・・」

「地球ですわ。」

「そうそう！それ！！その地球でさ・・・どうも酷い事件が世界同時多発的で起こったらしんだってさ。」

「あら・・・怖いですわね。今度の休暇は両親と一緒に地球のイタ

リア半島の方へ旅行に行こうと思っていたのですがね。」

「あ、イタリアはやめた方がいいよ。あそこが一番酷い状況なんだって。あそこって、凶悪なマフィアの巣窟なんでしょ?下手したら殺されるかもしれないよ。」

「あはは。リオ、何も裏の世界に行くわけではありませんわ。何もそこまでとは・・・あら?」

と、その時話の途中でコロナがあるものを目撃する。

「?どうしたの?」

「あれ・・・何ですか!?」

リオがそれを聞いて、訝しげな表情を浮かべながら窓の外を覗いてみると、二人の目の前に映って来る空に出来た奇妙な亀裂。

亀裂は徐々に広がりを見せると、その瞬間亀裂の中より流星の如く光が屋敷の外へと落下してきたのだ。

「わっ!!こっちに落ちてきた!!」

二人は突然のこの事態に驚き返りながら光の落ちる方角へ目を向けると、光は真っ直ぐに屋敷の中庭へと落下していった。

「家の中庭のほうですわ!!」

「行こう!」

二人は急いで部屋を飛び出し中庭の方へと向かった。

そして、駆けつけた時二人が目撃したのは――――――

「「あ！」」

目撃したのは、満身創痍の状態でところどころ生地が破れていることが伺える黒いスーツに身を包んだツンツン頭の茶髪の青年ツナ、そして彼に守られる要領で気を失っていたロングヘアーの女性京子が横たわっていた。

コロナとリオは目の前の人物を見ると、思わず驚愕した様子で顔を見合わせる。

「人が・・・倒れていますわ・・・！」

「女の人もいる・・・怪我してるみたいだよ!?」

「直ぐに運びましょう。誰か、ちょっと手伝ってくださる!?一大事なんです！」

コロナが屋敷の者に呼びかけを行うと、屋敷に使える執事とその従者の者が中庭に集まってきた。

「お嬢様、如何なさいました？」

「怪我人が倒れています。直ぐに救護室に運んでください。」

「承知いたしました。」

執事と数人の従者たちは気を失ったツナと京子を担ぎ出して家の中へと運び出す。

その後二人は家に入ってコロナが二人の容体を執事から窺い、部屋の外で待っていたリオは直ぐに問い詰める。

「どうだった？」

「大丈夫です。怪我は大した事無いそうです。暫く休めばそのうち目を覚まします。」

「・・・そっか。ならいいや！」

「しかし、何だったんでしょうかさっきの歪みは？小規模ではありましたが、次元震だったのでしょうか？」

「う～ん・・・そこら辺はよく分からないな。管理局の人に任せるしかないね。」

「ですね・・・」

偶然にもツナと京子を助け出したコロナ達であるが、目を覚ました時、ツナと京子は嘗ての遠い記憶を思い出すと同時に、今回の凄惨な事件に否応なく巻き込まれていくのである。

◇

〈ツナＳｉｄｅ〉

さて、運よくコロナ達に助けられたツナの方はと言うと、現在あの

時・・・ケリーによる一撃を受けた状況を悪夢として見ていた。

『じゃあね♪』

『『『『『『うわあああああああああ！！！』』』』』』

『『『きゃあああああ！！！』』』

『ははははは♪ハハハハハハ♪』

思い出したくもない情景が夢として蘇って来、ツナはそれをリアルに思い浮かべながら険しい表情を浮かべる。

「（う・・・京子ちゃん・・・みんな・・・・・・／／／／／／）」

そんな時、自分の耳元から最も愛でる癒しの声が聞こえてきた。

「っ君・・・ツっ君・・・ツっ君。起きて、大丈夫？」

徐に目を開けると、映って来たのは最愛の妻である京子であった。

「ん・・・ん・・・あ・・・京子ちゃん・・・」

「ほぉ～よかった。無事だったみたいで。」

京子はほっとし、安どのため息をつくと、ツナは徐にベッドから起き上がり、京子の事を気遣った。

「うん・・・俺は何とかね。京子ちゃんは怪我とかしてない？」

「私のほうは大丈夫。大分魘されてたけど、本当に大丈夫？」

「平気。ちょっと・・・いやかなり悪い夢だったけど、命に別状はないよ」

「それよりツっ君・・・どうも私達は、見たところ誰かに助けられたみたい。」

「え！？」

それを聞くと、ツナは改めて周りを見渡した。

確かに、京子の言う通りここは屋敷の室内の一室と思われる場所で、ところどころ見覚えの無いものが飾られており、ツナは一瞬唖然とした。

そして何より、自分の受けた傷がいつの間にか手当てをされている事にも驚いていた。

「ほんとだ・・・痛みがなくなってる・・・誰かが俺達を手当てしてくれたんだ。それに、この部屋は一体――――――そうだ！！獄寺君達はどうしたの！？通信は！！」

ツナは思い出したように、ファミリーである獄寺たちの事を尋ねる。

すると、京子は苦い表情を浮かべて首を振る。

「駄目・・・さっきから連絡しようとしてるんだけど、ちっとも応答が無いの。お兄ちゃんに、ハルちゃんの方も全然・・・私達はあの時の衝撃で、バラバラに別れてしまったみたい。」

「そんな・・・じゃあ皆は・・・」

ツナは酷な話を聞かされ、力なく項垂れる。

京子はそれを気にして、彼を元気づけようとする。

「あまり辛い顔しないで、ツっ君。お兄ちゃん達ならきっと大丈夫だよ。今は、この先どうするのかを考えよう。」

「うん・・・それもそうだね。ところで、具体的には此処は何所なんだろうね？屋敷の中って感じだけど。」

「部屋の外を見てみたんだけど、どうも地球じゃないようなモノばかりが立ち並んでるの。」

「地球じゃないモノ・・・！？」

ツナは京子の一言に疑問符を浮かべた後、徐にベッドから抜け出し、カーテンを開けてくれた京子の元へと歩み寄る。

「ほら。」

そして、カーテンの外を目の当たりにした瞬間、ツナは人生で初めて伺う異世界、ミッドチルダの街並みに度胆をぬいた。

「何だ、あれ！？あんな建物今迄見たこともない・・・それに、空に惑星（ほし）が浮いている・・・！？本当にどうなってるんだ！？」

二人が思わず顔を見合わせ言葉を失っていると、そんな折、部屋の

外からノックをする音が聞こえてきた。

「え・・・あ、はーい。」

ツナが驚きながらもそう言うと、部屋を開けて入ってきたのは食事を台に乗せて二人の様子を窺いに来たコロナであった。

「あら、お目覚めのようですね。良かったですわ」

京子はツナと一緒にコロナを見つめた後、徐に尋ねる。

「あなたが・・・私達を助けてくれたの?」

「ええ。正確には私の執事とその従者数名がお二人の手当てをしましたが。私はコロナ・ティミル。この屋敷に住んでいる者です。見たところ、あなた方はご夫婦のようですが・・・」

「あ、うん。俺は沢田綱吉。こっちは妻の京子ちゃん。」

「よろしくね、コロナちゃん。」

「ご丁寧にどうも。それにしても、昨夜は驚きました。突然空から人が降ってきたんですから。」

「そうだ!確か俺達はあの時・・・・・・」

「うん・・・!」

二人はその事を聞かされ、思い出したように自分たちの境遇を確認すると、とても口には言えないような心境に陥り互い口を閉ざす。

コロナはそんな二人を窺うと、深入りは野暮と判断。

「何か複雑な事情をお持ちのようですわね。まぁ、こういう事を他人が無闇に問い詰めるのも野暮とは思いますけど、沢田さんでしたわね・・・名前の響きからして地球の人ですね？」

「!?地球の人・・・何言ってるの君？」

「あ、そうでしたわね！あなた方は未だ此処のことを何一つ知らないんでしたわね。」

「此処のことって？」

「はい。外の景色を見たら此処が地球ではないということが直ぐに分かったはずです。」

「え!?じゃあ・・・本当に此処は地球じゃないの!?一体何所なの、此処は!?」

コロナから聞かされた衝撃の事実に改めて驚くツナと京子。

すると、コロナはカーテンを全開にしてから降り注ぐ対応公を部屋いっぱいに取り込みながら二人に説明をする。

「此処は第一管理世界ミッドチルダ。貴方達が元居た世界・・・現地惑星名『地球』は管理局法に基づき、第９７管理外世界と呼称されています。あの中央に位置する巨大な建物は、管理局地上本部。時空管理局と呼ばれる異世界の平和と秩序を守るために設けられた地上の要ですよ。」

「「・・・・・・」」

二人はミッドチルダ、果ては時空管理局と言う単語を聞いた瞬間、普通ならば唖然としてしまうところ、何故だか昔聞いたような錯覚に陥る。

コロナはそんな神妙な二人を気にして声をかける。

「あの、どうかなさいましたか？」

「時空管理局・・・待てよ・・・何所かで聞いたことがある響きだ・・・」

「うん・・・昔・・・何だか聞いた覚えがあるような・・・」

「え？」

「何だったかな・・・？本当に聞いたことあるんだよ・・・え～と・・・う～～～ん！！」

ツナは必死に頭の悪いと自負する自分の脳みそをフルに回転させ、昔の記憶をたどり始める。

と、その時昔の記憶を辿って行くうちにツナは嘗て自分が一護やなのは達と一緒に重大は事件に遭遇したことを思い出し、そこでようやく理解した。

「あ！そうだ！！京子ちゃん、十年前に同じことを聞いたんだよ！」

「そうだよ！確かあの時は、変な事件に巻き込まれて色々大変だったんだよね。はっ！だったらツっ君！もしかしたら、あの人たちも此処に居るんじゃない！？」

「あの人たちって・・・まさか、なのはさん達のこと！？」

ツナがなのはと言う名前を口にした瞬間、コロナは目を見開いた。

「え・・・ちょっと待って下さい・・・お二人とも。どうして次元漂流者のあなた方がヴィヴィオの母親、もとい機動六課の高町なのは一等空尉のことをご存知で？」

「機動六課・・・え！？それって大分前に解散したって・・・！？」

「はい、一度は解散しましたけど・・・本局の要請で再び結成されたんですよ。およそ二年ほど前に脱獄した、ジェイル・スカリエッティの逮捕に対応するために。」

「「・・・・・・――――――」」

二人は思いもよらない場所と時間で、嘗ての記憶とリンクさせることになった。

そして、もうじき魔導師と死神、マフィアと言う異色のコラボが実現しようとしていた――――――

尚、ツナたちの活躍を描いた重要大事の処女作「次元の破壊者～死神とマフィアと魔導師～」を見てからこの小説を見ると、より理解が深まるだろう。

しかし、そちらの方がまだ小説と完結していないのにどうしてこれを書いたのだと疑問に思う方は、無理してこの章を読まないでいただきたい。

◇

〈ケリーＳｉｄｅ〉

その頃、ミッドチルダに流れ着いたツナたちとは対照的に、地球のアメリカ・ニューヨークにオフィスを構え、そこを拠点にマフィアの世界を牛耳ることに成功したスパジオファミリーボス、ケリー・バーンズは自分の指にはめられたリングを見ながら意味深な発言を呟く。

「う～～～ん・・・思わぬ感じにことが上手い方に傾いちゃったみたいだな。まさかボンゴレの墓場となる場所が、僕が最も忌み嫌うあの魔法の世界だったとは――――――ひょっとして、これもこのリングのお陰かな」

すると、唐突に部屋をノックする音が聞こえ、中に入ってきたのはケリーの側近の者であった。

「失礼します、ケリー様。分かりました、ボンゴレ十代目ファミリー、ボスである沢田綱吉とその妻・沢田京子の二名は第一世界ミッドチルダに飛ばされた模様です。」

「う～ん、知ってるよ。態々ありがとう・・・まぁ下手に動くと管理局が五月蝿いからな。でも・・・綱吉君が生きていたとなると放置する訳にもいかないし。どうせ管理局も何もかも、僕が全部ぶっ壊しちゃんだしね」

そう言うと、ケリーは机の上に置かれた黒いバラを一本取り、それを触れた瞬間に枯らすと、驚き返る側近に向かって指示を出す。

「あのさ～～～部隊の指折りの人連れてミッドに向ってよ。この際手段は選ばないからさ、綱吉君とその奥さんの首を最優先に頼むね。それと、他の守護者たちも」

「りょ、了解しました！」

側近はケリーの命を受けると、直ぐに部屋を飛び出して行った。

彼がいなくなった後、何処からともなく部屋へと侵入してきた無数のセルメダルが形を作ると、そこに現れたのは人間の姿に化けたカザリであった。

カザリは心底ケリーの欲望を気に入った様子で、不敵な笑みを浮かべる。

「フフ。君のその欲望は、僕が見てきた中で一番大きいかも」

「そっか。でも当然だよ。だって僕は、欲望の為に作られた化物だから♪」

「僕達グリードを前に、それはないんじゃないのかな？」

「ははは。バケモノって言っても、僕と君は同類だよ。同じ欲望の塊なわけだし」

「フフ。確かにそうだね」

カザリが自嘲した様子で笑みを浮かべると、ケリーも笑みを浮かべながらミラービル越しに映って来る今のところ平穏な世界を見定めながら呟く。

「さ～て・・・楽しいゲームの始まりだよ・・・綱吉君。そして・・・僕を作りだした腐った管理局・・・」

ケリーの言葉意味する者とは一体何なのか！？

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

ケリーが不穏な動きを見せ始める中、ツナたちと出逢う以前のユーノ・スクライアは定期的に現世の一護に報告を行っていた。

「と、こんな感じですかねこっちの方は」

『そうか。でもよかったじゃねぇか。コアメダルも一枚取り返せてわけだし』

「だけど油断ならないですよ、アンクは。一体何処で何時狙って来るかもわかりませんし。何より、アンクと同じで狡猾なカザリに至っては、違う種類のコアを取り込んで更なる進化を遂げましたから――――――」

『ああ。まぁでも、お前やここの連中なら何とかなるはずだ。勿論俺も協力するが。あんまし詰め込まねぇように気をつけろ』

「はい。分かってますよ♪」

『ふん。あ、そうだユーノ。序にちょっとこっちの事で話しておくことがあるんだが』

「何ですか？」

『前に並盛に用があって出かけた時なんだが・・・どうも様子がおかしかったんだ。』

「様子がおかしい？」

ユーノが復唱した後、モニター画面の一護は神妙な顔を浮かべながらコーヒーを飲み干し、徐に話してきた。

『黒ずくめの格好をしたガラの悪い男どもが街中に散らばっていて、何か血眼になって誰かを探してる感じだった。おまけに、奈々さんの所に挨拶に行っても、全然家の中には人の気配が見受けられなかった。まるで・・・――もぬけの殻だった』

「奈々さんが・・・・・いやたまたまじゃないですか？」

『俺もそう思って一昨日も昨日も行ってみたんだよ。そしたら、うちの周りをその黒ずくめの連中がうろついてたんだ。俺は不審に思って辺りを窺ってたんだが、丁度俺を見付けた毒サソリビアンキと、フウ太の奴に連れられて・・・事情を聞かされた』

「え」

『どうやら今地球の・・・マフィアの世界でとんでもない抗争が世

界規模で起きてるらしいんだ。おまけに、奈々さんは息子の所に会いに行ったきり、息子共々連絡がつかないでいるらしい――――――』

「そんな・・・どうして・・・」

『でだな。もっと悪い話をするとだな――――――マフィアの闘争が苛烈を極めるイタリアのシチリア島近辺で――――――アンゴルモアと思わしき反応が確認された』

「！」

ユーノはその事を聞かされると、思わず耳を疑ってしまう。

一護は眉間にしわを寄せながらユーノを見つめると、途方もない悪寒を抱きながら口にする。

『どうも嫌な予感がビンビンするんだ。ユーノ・・・・・・』

「・・・アンゴルモアが・・・・・・」

ユーノはこの時思ってもいなかった。

まさか自分たちを始め、この事件と時空管理局があのような悲劇を迎えてしまう事などと言うことに――――――

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

同時刻。

ミッドチルダの海上に昨日と同じ空間の亀裂が生まれる。

そして、その亀裂がこじ開けられると、現れたのはスパジオファミリーの精鋭二名、巨躯のクオーク、その舎弟で対を成すような小柄のアラタだった。

二人は空中でありながら、ブーツの底より噴射される死ぬ気の炎で自由に滑空することが出来るため、墜落する心配は免れていた。

二人がミッドチルダにやってきたのは他ならぬツナと京子の抹殺のためだった。

「へへ。兄貴・・・どうするぜ」

「ただボンゴレ十代目を殺すだけじゃ、ちっとも面白くもねぇ。ここは、奴の性格を考えて、じっくりじわじわと苦痛を味あわせてから殺すってのはどうだ？」

「流石兄貴！この性悪！」

「ははははは！伊達にスパジオファミリーの精鋭に違いねぇからな！」

「ほんじゃ、先ずは適当に街中から攻めていこうか！」

「ああ。この世界を地獄に陥れるのは、俺達『スパジオファミリー』だ！」

そう言うと、二人は腰に携えたサイコロ状の匣に出来た穴に向かって、自分の指にはめているリングから生成された死ぬ気の炎を注入すると、死神の鎌のような武器を取出し街中へと飛んでいく。

この危険人物二名が街中に駆り出して行ったちょうどその頃、ツナと京子はコロナの自宅で食事を済ませた後、そのコロナの車に乗って有力な情報源を入手するため、なのは達が職場とする機動六課へと向かっていた。

コロナは助手席に座りながら、後ろの二人に向かってこう話しかける。

「しかし驚きましたね。沢田さん達が管理局のエース・オブ・エースのことや、ヴィヴィオのことをご存知だなんて。どう言う事ですの？」

「う～～んと・・・話せば長くなるから敢えて言わないでおくけど、取り合えず機動六課に送ってくれることは感謝するよ。」

「ありがとう、コロナちゃん。」

「ふふ。困ったときはお互い様って、人間としては当然ですよ。」

「はは、そうだね。」

「でも十年ぶりの再会だもんね。あれ？そうなると、ヴィヴィオちゃんって２０歳くらいのはずだから・・・え！？コロナちゃんってヴィヴィオちゃんの同級生だよね？」

京子はそう思ってコロナに話しかけると、聞いていたコロナはきょ

とんとした顔を浮かべて、その後薄ら笑いを浮かべる。

「そうですけど。と言うか、ヴィヴィオが２０歳な訳ないですよ。私がまだ１２歳な訳ですしね！」

「「え！？」」

「ふふ。もうお二人とも、御冗談は止して下さいよ♪」

コロナは笑ってその場を済ませたが、当の二人はその事実を聞かされた後、コロナには聞こえない小声で互いに話し合う。

「どうなってるんだろう？俺達が過ごしてきた時間とこっちの時間では大分違いがあるのかな？」

「浦島太郎になった気分だね・・・」

ますます訳が分からなくなり始める二人であったが、コロナが窓の外を見た時、目的地である機動六課が目の前に映って来たことをツナと京子に伝える。

「あ、着きましたよ。此処が機動六課です。」

車を止めた後、二人は執事の者がドアを開けてから外へと出ていき、眼前に映って来る機動六課の隊舎を仰ぎ見ながら息を飲む。

「ここが・・・」

「なのはさん達の・・・」

二人は隊舎を仰ぎ見ながら、思わず硬い表情を浮かべる。

「何だか緊張するね・・・」

「事情を話せば、分かってくれるよね。」

「大丈夫だよ。なのはさん達はいい人だもん。コロナちゃん、今日は本当に有難う。何もお礼が出来ないけど・・・」

「いいですよ、別に。私も少しの間でしたがお二人と一緒にいれて楽しかったですわ。それでは、私はこれで。これからバイオリン教室の時間ですので。」

「ありがとう、コロナ！」

「じゃあね、コロナちゃん！」

二人が感謝の意を表してそう言うと、コロナは助手席で笑顔を浮かべながらその場を後にする。

「ごきげんよう」

コロナが車を走らせ、機動六課を後にすると、二人は互にその場に立ち尽くす。

ツナと京子が正にこの機動六課に到着したその頃、中の方では前線メンバー一同がユーノに召集を受け、そこで訊かされる内容に耳を疑った。

「え。地球でアンゴルモアが？」

「うん。何でも一護さんの話じゃ、僕と一護さんの知り合いの奈々さんが息子さんに会うために遠出してから消息がつかめなくて、おまけに息子さんも息子さんで全然連絡がつかないって、ビアンキさんが言ってた」

「そうなんだ・・・」

全員がその話に思わず険しい表情を浮かべる中、恋次はビアンキと言う言葉を聞かされたあと、以前の休暇で見た彼女の得意料理を思い浮かべながら尋ねる。

「おい。そのビアンキって、作ったもんが全部毒になるってあれか・・・」

「ええ。あれはポイズンクッキングという、ビアンキさんの生まれ持っての才能でしてね、あれで結構な小悪党を抹消したと聞いてます♪」

笑顔で親指を突き立てるユーノ。

一同は恐ろしくなって顔を青ざめる。

「そこは笑顔で言うところじゃないから!!」

「ユーノ君、なんか最近怖いこと笑顔で言う機会増えた!!」

「あまりみなをからかうのは止した方がいいぞ・・・!」

「へへ♪散々昔はからかわれてきましたからね。ちょっとした仕返

しですよ」

「だとしら謝るから、笑顔で怖いこと言うのは止めようよ／／／」

なのはがそう言った直後だった。

突然、何の前触れもなく隊舎全体に響き渡る警戒アラート。

「「「「！」」」」

「これは・・・！」

「どうしたんや！？」

すると、状況を説明するため、管制室のグリフィスがモニター越しに伝える。

『はい。緊急事態です。海外線から正体不明の航空戦力が出現。第七海岸区画を始め、周囲の住民区画まで入り込み、無差別破壊活動を開始しました！』

「なんだって！」

「どういう事だよ！？」

『現場の指揮を執る１７６部隊からも、詳しくはよく分かっていないとの報告が。ただ、敵戦力が予想をはるかに超えた強さだということは確かです。武装局員が悉く倒されてると！』

「そんな！」

「マジかよ・・・」

前線メンバー全員は互に信じられない様子で顔を見合わせた後、ルキアが言ってくる。

「放ってはおけぬな。私とスバルが様子を見てくる。みんなは、他に敵がいないかどうかを確認してから合流を」

全員はそれを聞くと、首を縦に振り、ユーノはルキアに顔を合わせる。

「わかりました。念の為、言っておきます。油断はしないで下さい」

「承知しました。行くぞ、スバル！」

「はい！では、いってきます！」

二人はデバイスと斬魄刀を携えると、現場へと急行する。

二人が現場へと向かう直前、外の方で待機していたツナと京子は意を決して中に入ろうとしていた。

「よし・・・じゃあ、中に入ろうか。」

「うん・・・」

と、そう言って一歩足を踏み出した瞬間、先ほどの警戒アラートが外の方まで響き渡って来、二人はそれを聞くと足を止める。

「「え！？」」

『緊急事態発生！ミッドチルダ第七海岸区画で正体不明の戦力による破壊活動行為が発生！陸士部隊は敵の攻撃を受け既に壊滅寸前！至急急行せよ！』

「ツ、ツっ君・・・これって・・・」

「敵って・・・一体何が・・・！？」

そう持った直後、ツナたちを横切るルキアとスバルの姿が目に映って来た。

「！」

ツナが驚いたかのように振り返ると、ルキアは特殊な義外に身を包み死覇装の格好となった空を駆け抜けていき、スバルもＩＰカートリッジで飛行能力が加わったマッハキャリバーで滑空していた。

ツナは東夷昔の記憶を思い返し、それが紛れもなくルキアとスバルであることを確かめると、目を丸くした。

「（あの二人――――――まさか！）」

と、その時唐突に市街地から爆発が起こる。

「ツっ君！」

「！？」

「あの爆発！」

京子がそう指摘をすると、ツナはルキア達が心配になってじっとしてはいられなくなる。

「行ってみよう！」

ツナは危険を重々承知の上で、妻の京子を連れて市街地を目指して走り出す。

一方で先に現場へと向かったルキアとスバルは暫くしてから市街地で破壊活動を行うスパジオファミリーのクオークとアラタが鎌を構えて次々と武装局員を手に掛けていた。

「見えました！」

「あれか・・・」

ルキアは改めて二人の姿を確認すると、彼らの使っている武器、そして靴の底から噴射される炎を目の当たりにし、眉間にしわを寄せる。

「なんだ奴らは・・・見た事のないなりをしているが・・・」

「魔力反応が見当たらない・・・どうやって空中を！？」

「兎に角、直ぐに奴らの凶行を止めるぞ！」

「はい！」

二人は武装局員が倒れる現場へと入り込み、破壊活動を行う二人を止めるために戦闘に踏み入っていく。

二人による戦闘が開始されてからおよそ15分後、ツナと京子は見慣れない市街地を駆け抜けながら現場へと向かって居た。

この時、道に迷わなかったのかと言えば、ツナには常人を遥かに超えた超直感と呼ばれるものが備わっており、それが功を奏して道に迷わずに済んでいるのであった。

「は、は、は、は」

京子はツナに手を引かれながら息を少し荒げていた。

ツナはその事を気に掛けながら、目の前に映って来る死ぬ気の炎による爆発に目を向ける。

「あれだ！大丈夫、京子ちゃん！？」

「私は平気。急ごう、ツっ君！」

「うん」

二人は全速力で現場へと接近していくと、京子は頭上に浮かんでくる人影を見るなりツナに声を上げる。

「あ！ツっ君！！上を見て！！」

「あっ！」

ツナが頭上を見上げると、そこには確かに自分たちを苦しめて来たスパジオファミリーのボス、ケリーが送り込んだ精鋭二名が鎌を持って構えていた。

「スパジオファミリーの尖兵だ！でも、どうして奴らが此処に！？それに・・・・・・」

ツナは更に言うと、そんなスパジオファミリーに苦戦し、あちこち傷ついた様子のルキアとスバルの二人を凝視する。

「何でルキアさんとスバルが戦ってるの！？」

京子も京子でこの状況には全く理解が出来ないでいる。

と、そんな時、空中で待機していたアラタが一瞬のすきを見せたルキアに向かって鎌を携え突進してきた。

「そこの影！首、頂き！！」

「くっ！舞え、袖白雪！」

ルキアは咄嗟に袖白雪を解放。

「お！？」

アラタは斬魄刀を解放したルキアに興味が湧いたように見つめていると、ルキアは袖白雪を持ち、日本舞踊を舞うような動きをしながら新たな技を発動させようとしていた。

「伍の舞・・・――――」

それを見たクオークが声を上げる。

「離れろ、アラタ！」

「！」

その瞬間、鋭い瞳を浮かべたルキアの袖白雪が無数に分かれるかと思えば、その瞬間猛烈な冷気が勢いよくアラタへと向けられる。

「ぐあああああ！！！！」

「『牙気白雹（がきはくひょう）』！」

アラタは咄嗟に赤々と輝く嵐属性の炎を灯して難を回避すると、ルキアは舌打ちをしながら空中に逃げたアラタを見上げる。

「ち。浅いか。」

アラタは凍りつき、裂け目が出来た自分の一張羅を台無しにしたルキアに怒りを覚えんがら、自分達とは全く違う方法で攻撃を仕掛けるルキアに斬魄刀の能力に目を見張る。

「痛たああ！！あっぶねえ～～～！！何だよあれは！？ボックスでもないのに、氷結の技を出せるなんて・・・！？」

「聞いたことがある。今、この世界の希望とかいう機動六課には補充戦力として死神と呼ばれる連中が居るらしい。そいつらは斬魄刀という特殊な刀の解放によって、その特殊能力を引き出すそうだ。」

クオークがそのように説明をすると、スバルは少し疲労が見え始めるルキアに駆け寄り彼女の身を案じる。

「ルキアさん！大丈夫ですか！？」

「ああ・・・私は何ともない。」

「てめぇ！！よくも俺の一張羅破いてくれたな！！ぶちのめす！！！」

アラタは嵐属性の炎を纏った鎌の一振りをルキアに向けると、スバルは前に飛び出しルキアを守ろうとする。

「させない！！リボルバー・・・シュート！！！！」

スバルの放ったリボルバーシュートがアラタの攻撃を弾き飛ばしたその時、偶然にもその攻撃は近くで立ち尽くしていたツナと京子の元へと向けられ、スバルとルキアはこれを見て目を見開いた。

「あっ！！あんなところに未だ一般人が・・・！！」

「（マズイ！）逃げろ！！！！」

アラタの攻撃が向かって来ると、京子は思わず頭を押さえて屈んでしまう。

「きゃあ！！」

すると、その京子の前に立っていたツナが眉間にしわを寄せながら指にはめていた自分のリングのうちの一つにオレンジ色に輝く澄ん

だ炎を灯し、それを全開にすると向けられたアラタの攻撃を掻き消してしまった。

「「え!?」」

「なっ!?」

「大空属性のバリア・・・!?」

ツナは大空の炎による防壁で京子を守った後、鋭い目線でスパジオファミリーの二人を見据え、一方でスバルとルキアは見たこともない方法で自分たちが苦戦する相手の攻撃を容易に凌ぐツナの力に驚いた。

「す、凄い!」

「あれは・・・あの炎は?」

「京子ちゃん、少し退がって。」

「うん。気をつけてね。」

京子を下がらせたツナは、右手の中指に付けている長めの指輪状で、そこから鎖が伸びて小指にも小型のリングがついている大空のボンゴレギアと呼ばれるものから自分の相棒を呼び出す。

「ナッツ、頼む。」

すると、それに応えたツナの相棒が指輪の中から姿を現し、ツナの方に乗ったのは十年以上戦いを共にしてきた大空属性の炎を鬣とし

て纏った天空ライオンＶｅｒ．Ｘ（レオネ・ディ・チェーリ　バージョンイクス）こと、ナッツを呼び出した。

「ガオ！！」

召喚されたナッツがツナの方に乗ると、それを見たスバルとルキアは目を丸くした。

「何だ、あれは！？」

「ライオンの・・・子供・・・！？」

「あのボックス兵器・・・もといあのボンゴレギアは・・・！」

クオークが召喚されたナッツに警戒心を抱いていると、徐にナッツは頭上に浮かぶアラタ目掛けて咆哮を上げる。

「ガオオオオオオオオオ！！！！！！！！！」

すると、その咆哮を浴びた瞬間、アラタの身体が石化を始める。

「なっ！？ヤベ！！固まってきた！！！」

「せ、石化していく！？」

「如何なっておるのだ、一体・・・！？」

愕然とする様子のルキア達を対照的に、咄嗟に難を逃れたクオークはツナとナッツの方に目を向ける。

「・・・やはりあいつは・・・ボンゴレの十代目ボスだ。」

「のあああああああ！！！！！！」

アラタは石化が全身にまで及ぶと、全く動けなくなると同時に重力に従って地面へと落下する。

スバル達は完全に動きを封じるどころか、石化まで及ぼすツナのライオンの力に度胆をぬいてしまう。

「す・・・凄い・・・！」

「あの男の動きを完全に封じた・・・！？（何者なのだ・・・あの男は・・・？）」

ここで敢えて言っておくと、ルキアは当然のことながらツナの事を知らない。

しかしツナと京子は過去の経験から彼らの事を少なからず知っている。

そんな中で、石化した新たに舌を撃ちをしながらクオークがツナを見据えて言ってくる。

「ほう。アラタの動きを完全に封じたか・・・流石はボンゴレ十代目と言ったところか。だが、俺はアラタのようには・・・いかない！」

そう言うと、クオークは指にはめられた不気味な形をしたリングを掲げる。

ツナと京子はこれを見ると、直ぐにそれが危険なものだと判断する。

「！（ヘルリングか！？）」

「ツっ君！ナッツ君！」

「行くぜ・・・ほおおおおおおおおお！！！！！！！」

クオークは自分の精神をリングに食わせると、その姿を異形の者へと変えていく。

藍色の霧で自分の姿を覆い隠したクオークを警戒する中、ツナたちの前に現れたのは頭には王冠、手にはブレスレットを着け、ボロボロのコートを纏った西洋の死神を思わせる骸骨の姿と化したクオークだった。

全員が異形の姿となったクオークに目を見開く中、クオークは自分の事をこう名乗る。

「“霧の暴君（ティラノ・ネッビオソ）”」

「何！！姿が変わった！？」

「ひいいいいい！！！！！気持ち悪い！！！」

スバル達が自然と驚きを隠せないでいると、リングに精神を喰わせ異形の姿と変わり果てたクオークは声を張り上げる。

「うあああああああ！！！！！！！フルパワーだ！！！！！！！力が

何倍にも膨れ上がる！！！！！これが俺様の持つ“野望（アンビッツィオーネ）のヘルリング”の力だ！！！！！」

ツナはこの状況を目の当たりにし、思わず目を細める。

「くっ・・・――――！」

「喰らえ！！“無限の欲望（アビティッタ・インフィニタ）”！」

「（来る！）」

ツナがそう思い、懐から自分の武器を取り出そうとした直後、ルキアが異形の姿と化したクオークに向けて鬼道を放つ。

「破道の三十三　『蒼火墜（そうかつい）』！」

「！ルキアさん！」

ツナが思わずルキアの行為に目を開くと、今度はスバルがウィングロードの上を走ってクオークに接近。

「リボルバー・・・キャノン！！」

スバルの渾身の拳がクオークに叩き込まれようとしたが、クオークは霧属性の炎の力で唐突に実態を消してしまう。

「消えた！？」

驚き返るスバルやルキアだったが、ツナは直ぐに超直感でクオークの位置を察知する。

「違う！霧の幻覚になっているだけだ。ほら、そこだよ！！」

ツナがそう言うと、スバルとルキアの背後の方に現れる本体。

二人は向けられた攻撃を上手いこと交わした後、ツナの近くまで寄って行き、彼の存在と察知能力に驚き返る。

「貴様・・・奴の場所が分かるのか！？一体何者なのだ！？」

ルキアがそう言うと、それを聞いたツナは一瞬聞き違いかと思った。

「（！俺を知らない・・・？どう言う事だ。ルキアさんは十年前に、あの事件を共に解決した一人のはず。なのに今の口調からは、俺を全く知らないでいる・・・・・・はっ！まさかここは！！）」

ツナが何かに気付い様子で表情を一変させた直後、再びクオークの襲撃が始まると、スバルは攻撃を回避し空に浮かぶクオークに拳を叩きこむ。

「うりゃあああ！！！！！」

クオークは霧の幻覚で実体を消したり表したりを繰り返しながら、目障りなスバルの存在に嫌気がさしてきた。

「ええい！！！五月蝿い小娘だ！！貴様に用は無い！！」

そう言うと、クオークは懐から別の小箱を取出し、穴の中にヘルリングに灯った藍色に輝く霧属性の炎を注入。

すると、匣の中より召喚されるのは霧属性の炎を纏った無数のヘビであった。

「“霧ヘビ（セルペ・ネッビア）”」

「ぎゃあああああああああ！！！ヘビ！！！！！ヘビ嫌！！！！！！」

無数のヘビが召喚されると、大のヘビ嫌いなスバルはこの場においては非常にシュールと言える叫び声を上げる。

そして、召喚されたヘビたちはスバルの身体に絡み付け、彼女の体を締め付ける。

「ぐっ！！この・・・放せ！！！」

「スバル！！」

「「スバル（ちゃん）！」」

「ははははははは！！！！！！霧ヘビの牙を食らえ！！」

クオークがそう言うと、指示を受けた彼のヘビの一匹が噛み付きスバルの体に毒を流し込む。

「ぐあああああああ！！！！！！！！」

スバルは体に入ってきた毒を受けると、力なく地面に落下していき、ルキアは咄嗟に落ちてくる方角へと走って行き、間一髪で彼女を受け止める。

「スバル！スバル！！・・・・・おのれ！！！よくもスバルを！！！！袖白雪！！！」

ルキアは怒りを露わに白骨の暴君と化したクオークへと向かって行くが、ツナは子のルキアの行為に危機感を感じる。

「駄目だ、ルキアさん！不容易に近付いたら！！！」

「ボンゴレの言う通りだ。貴様は既に俺の術中だ！」

すると、クオークの元へと向かったルキアの視界が突如として暗くなる。

「な！？」

思わぬ事態に驚き返るルキアだが、直後彼女の目に映って来たのは闇が支配する音も気配も一切感じぬことのできない強力な幻覚空間だった。

「こ・・・これは・・・幻覚空間か・・・しかもかなり強力な！？」

ルキアが霧属性の炎の性質「構築」によって作りだした強力な幻覚空間に閉じ込められたことを理解したツナは、苦い顔を浮かべながら頭上に浮かぶ立方体を見上げる。

ルキアが敵の攻撃に警戒していると、外の方からこれを仕掛けたクオークの声が聞こえた。

『ふふ。生憎お前ら管理局の連中に構ってる時間は無いんでな。何

れ再び交えることとなるが、今はボンゴレの殲滅が優先事項だ。』

「ボンゴレ・・・！？」

聞きなれぬ言葉に訝しげな顔を浮かべるルキア。

そんな折、クオークが非情な言葉と共に止めを促してくる。

『これから死ぬ逝く命に知る必要はない・・・消えろ。悪夢の独裁（オートクラッジア・デル・インクード）！』

「！」

その瞬間、幻覚空間に閉じ込められたルキアの周囲が急激に狭まり始め、ルキアはそのまま崩壊する空間から抜け出す暇もなく圧縮されていく。

そして、幻覚空間が圧潰したことを外で窺ったクオークは勝利を確信する。

「ふん・・・ジ・エンド・・・ん！？」

だが、ようく目の前の光景を凝視すると、そこには幻覚空間から間一髪のところで抜け出すことに成功し、袖白雪を構えたルキアが立ち尽くしていた。

「ば、莫迦な！？」

クオークは自分が作りだす最高精度の幻覚を打ち破ったルキアと、自分の技が簡単に破られ事にショックを覚える。

「（あり得ん・・・俺の悪夢の独裁を直撃して、無事なはずが無い。如何に死神が人知を超えた力を有していようと、直撃を受けて尚傷一つ負わないはずは無い・・・何故だ・・・一体何が起きた・・・な!?あれは!!）」

するとその時、ルキアの周りに施されている大空属性の超高密度の薄い膜を見るなり、クオークは眼下のツナの方へと目を向ける。

「く・・・まさか!?」

すると、ツナはオレンジ色が基調の小箱、ボックス兵器と呼ばれる自分たちが使う汎用アイテムを手に取り、ルキアに施されていた膜を収納する。

「『大空の膜（フィミル・ディ・チェーロ）』。悪いが、お前の攻撃はそいつが全て無効化させてもらった。」

「くっ・・・大空属性の調和による能力で、俺の悪夢の独裁を消滅させたというのか・・・!?おのれ、ボンゴレ!!!許さん!!」

標的をツナへと変更したクオークはツナの元へと突進するが、直後ルキアが目の前に飛び出してくる。

「なっ!!」

「二度目はさせぬ!」

そう言うと、ルキアは鬼道でクオークの動きを捕える。

「縛道の六十一　『六杖光牢』」

クオークはその直後、六つの光に身動きを封じられてしまう。

「ぐっ！！何だ・・・体の自由が利かない・・・！？」

「終わりだ」

ルキアは鋭い視線を向けてそう言うと、斬魄刀「袖白雪」を掲げて、渾身の一撃を振り下した。

「ぐあああああああああ！！！！！！！！」

クオークはルキアによる一撃を直撃すると、ヘリリングを使った副作用もあって、精神崩壊を起こすと同時にこの世界から抹消され霧散していった。

陰で戦いの行方を窺っていた京子は歓喜の声を上げる。

「やった！！」

戦いが終わると、ルキアは直ぐに全身から多量の汗をかく、毒を受けたスバルの元へと駆け寄る。

「おい、スバル！しっかりしろ、スバル！！」

ルキアがいくら呼びかけても、当のスバルはまるで返事もできない状態にまで追い詰められている。

苦い顔を浮かべるルキアだったが、直後彼女の耳にツナと京子の声

が聞こえてきた。

「ルキアさん！！」

「スバルちゃん！」

ルキアが振り返って駆け寄ってきた二人を凝視すると、自分の事やスバルの名前まで熟知している奇妙な二人の言動に目を見開いた。

「貴様たちは・・・！？何故私とスバルの名を知っている！？」

「え？ルキアさん・・・何言ってる・・・？」

京子が思わず首をかしげると、ツナは冷静に口を挟む。

「京子ちゃん。その話は一旦あと。一度六課の隊舎に行ってから事情を話すから。あの・・・俺達も一緒にいいですか？」

「お願いします！」

二人はルキアに頭を垂れて懇願すると、ルキアも事が事だけに背に腹は変えられなかった。

「ああ。分かった・・・貴様には助けてもらったからな。変わった力を有していたようだし、六課で詳しく話を聞かせてもらうぞ。」

そう言うと、ルキアは負傷し、霧ヘビの毒を浴びたスバルを抱えると、ツナたちと共に機動六課へと帰還していった。

その最中、スバルは心の中で未だ彼らの存在に疑心暗鬼を抱きつづ

けた。

「（しかし・・・どうして六課の事といい、私達の事を――――――こやつらは何者なのだ！？）」

死神・マフィア・魔導師・・・そして次元世界最強の男が、次回会い見える！！

次元を乗り越えし者（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はリボーンについてだ♪」

「『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！』は、天野明による日本の少年漫画作品。『週刊少年ジャンプ』（集英社）２００４年２６号より連載中。２０１１年１０月現在、単行本第３６巻まで刊行。」

「タイトルの『家庭教師』は『かてきょー』と読む。『かていきょうし』の読みは誤りです♪」

「運動も勉強もダメで何事もすぐに諦めてしまう、うだつのあがらない少年・沢田綱吉（通称ダメツナ）の前に家庭教師として現れたスーツ姿の赤ん坊、リボーンとがツナをイタリアンマフィア・ボンゴレファミリーの１０代目ボスとして立派に育て上げることを目的としたバトル漫画だ♪」

と、ここで話をしていたユーノの前にリボーンが現れる。

リ「ちゃおっす。本編にまだ当分登場する機会はないが、主役のリボーンだ」

ユ「これはこれはようこそいらっしゃい♪一度会って見たかったんだ。何しろ処女作次元の破壊者じゃ僕だけ登場してなかったわけだし」

リ「仕方ねーだろ。その頃はまだ、作者も駆け出しで、なのはを見

始めたばかりでお前の事なんてこれっぽちも見てなかったしな」

ユ「そう思うとよくこの小説書く気になったと思うよな。あと、今更だけどこれって次元の破壊者を読んでないと少なからず分らない箇所があるんだよね。なんでそれなのにこれ書いたんだろう・・・」

リ「ふん。ネタが思いつかなくて頭中で挫折した次元の破壊者の罪滅ぼしだろうぜ」

ユ「あ～やっぱりそうか・・・作者さん。ドンマイですよ・・・」

重要大事・・・これからも精進致します！

魔導師図鑑ハイパー！

キャラクター交流会・第三弾！！

ユ「どうも、この物語の主人公で、世間からは淫獣呼ばわりされて煙たがれています、ユーノ・スクライアです♪」

一「で、そんな可愛そうな愛弟子をいつも気に掛けている黒崎一護だ」

ナ「そして、そんなお父さんを助けるため、未来からやってきた大馬鹿息子でシスコン言われてます、僕がナーノ・T・スクライア♪」

一「今回からいよいよリボーン篇に突入だ。挿絵の方は随分前に描いてたらしんだが、なかなか話を書く機会がなくてずっと保留だったみたいだな」

ユ「だからこそ、漸くですよ♪いや～～～僕と一護さんが格好いいな♪」

ナ「へへ。自分で言ってるね♪では、早速質問コーナー」

ユ「先ずは作者重要大事さんから龍元さんに。“そっちの世界のユーノ君はなのはと結ばれるのですが、それとも原作同様家族的な絆のままで終わるのですか?あと、ユーノ君がなんかこの後とんでもない事件に巻き込まれたりはするのですか”です♪」

一「次はバトルオタクのシグナムから龍児への質問・・・て言うか果たし状か。今度の日曜日に私と模擬戦をしてくれ。来なかった暁は一生果たし状を送り続けてやる。来たら来た時もよき戦友関係を続けていこう・・・って何だこりゃ！！」

ナ「はは。バトルマニアらしいね♪では最後に僕からスバルさんに♪ぶっちゃけ・・・僕のどの辺が好きなの～♪素直に聞いてみたいです♪あ、それと前に応えてなかった死にかけた時ですが、もちろんお父さんと戦っていた時です。本気の覚悟で♪」

リ「次回は本格的にツナが機動六課の連中と顔を合わせる。そらから、新コーナーとして俺様とあの女が司会を務めるあのコーナーが復活だ」

ユ・一・ナ「みんな！応援よろしくな！」

次回予告

リ「魔法文明の発祥の地、ミッドチルダへと飛ばされちまったツナと京子は、偶然にもスパジオファミリーと対峙し、スバルとルキア

を窮地から救った」

「こうして、スパジオファミリーの追ってから逃れたツナたちはいよいよ、なのは達との運命的な再会を果たす。」

「そして、ツナ自身が口にする過去で起こった境遇と現在の状況」

「絆の完現術士ユーノ・スクライアは、ツナたちの突然の来訪をどう受け止めるのか？」

「次回、ユーノ・スクライア外伝・絆・・・『大空の青年』。みんな、死ぬ気で見ろよ」

登場ヤミー

オウムヤミー（赤）

声：坪井智浩

身長　２０６？　体重　１０６？

特色／力：火炎弾、高速飛行能力

生み出された経緯や、元となった欲望等が一切不明の謎のヤミー。以前に出現した青いオウムヤミーとほぼ同等の能力を持ち、突如街に現れアンゴルモアを輸送するトラックをアンクと共に襲い始めたが、その後、ユーノとナーノが現場へ到着し、交戦となる。最終的にはユーノとナーノユーノの必殺技を喰らい倒される。

大空の青年（前書き）

一週間ぶりの投稿です。

遅れた事、誠に申し訳ありませんでした。

こんなんで良ければどうぞ・・・

大空の青年

＞i34094―709＜

前回のおさらい。

アンゴルモアの輸送中、鳥のグリードであるアンクがオウムヤミーと共に襲撃を仕掛けるが、それを未然に防ぐことに成功したユーノとナーノは戦いの末、アンクからコンドルコアを奪取する。

それと時同じくして、地球のイタリア・シチリア島で抗争を激化させていたマフィア、ボンゴレファミリーを牽引する十代目ボス、沢田綱吉は圧倒的な力を秘めたスパジオファミリーボス、ケリー・バーンズの手にかかり妻の京子と共にミッドチルダへと飛ばされてきた。

そして、ツナたちの命を狙って・・・次元を超え、スパジオファミリーの尖兵がミッドチルダにやって来、ツナを誘き寄せるために市街地で無差別な破壊活動を始めた。

破壊活動を止めるべく、出動したスバルとルキアであったが、死ぬ気の炎と言う勝手の違う敵の戦術に大いに苦戦を強いられ、挙句スバルは敵の攻撃を受け全身に毒が回る始末。

だが、そこへ救助に駆けつけてたツナが二人を助け、スパジオファミリーの脅威を退ける。

今ここに、死神とマフィア、魔導師の壮大な物語が始まろうとしていた――――――

〈六課Ｓｉｄｅ〉

ヴァイスのヘリに乗り込んだルキアはツナと京子、そして重傷を負ったスバルを運び込み六課へと急いでいたが、その一方でスバルが受けた霧ヘビの毒が徐々に体を蝕み始める。

「うっ！！！く！！」

「しっかりして、スバル！！」

「スバル！！しっかりしなさいよ！！私達の声が聞こえないの！！」

「スバル！！」

一緒にヘリに乗り込んでいたなのは、ティアナ、そしてギンガの三人は険しい表情のスバルに呼びかけるも、スバルの容体は悪くなるばかり。

恋次はスバルの身体を検査するシャマルや小鳥遊に尋ねる。

「シャマル。小鳥遊。お前らの能力（ちから）でどうにかならないのかよ！？」

「それが、どうやら魔法とは勝手が違うものらしくて・・・上手くいかないんです」

「それにこの藍色に光るこれは一体・・・？」

小鳥遊が注目したのは、スバルの傷口付近にごく僅かに付着していた藍色に燃える火の粉だった。

シャマルも魔法で調べようとするも、未知数な力を秘めた炎の高密

度エネルギーや魔法そのものとは勝手の違う性質に難色を浮かべていると、これに口を挟んできたのはツナだった。

「霧属性の死ぬ気の炎ですよ」

「え」

全員は一度真剣な眼差しで自分たちを見つめるツナと今日に顔を向ける。

「あなたは・・・」

ルキアは先ほどの戦闘の件を思い出し、ツナに具に聞いてきた。

「そう言えば、貴様も同種の力で奴等と対等以上に渡りあっていたが・・・スバルの身に何が起こっているのかわかるのか？」

「ええ。スバルはさっきの敵、スパジオファミリーの尖兵が仕掛けた霧ヘビの毒と炎を一緒に浴びたんだ。毒は徐々に侵食していき、あと数時間もしないうちに全身に回って取り返しのつかないことになる・・・！」

「そんな！」

「だけど安心してください。そんなこと、俺達が絶対にさせません。」

すると、そう言ったツナの言葉に後に京子が言って来た。

「あの、ここは私に任せてもらえませんか？死ぬ気の炎で受けた傷

は死ぬ気の炎で治療するのが最適です。」

「やれる・・・京子ちゃん？」

「うん。大丈夫。」

全員はそれを聞くと、他に最適な方法も見つからず黙っているよりは死ぬ気の炎に関して専門知識を秘めた彼ら二人に治療を一任することにした。

「・・・分かりました。お願いします！」

「妹を・・・スバルを助けてください！」

「勿論です。」

京子はそう言うと、服の下に手を入れ、首からかけていた雌のライオンの意匠と一緒にハープが象られたネックレスを取り出した。

「ネックレス！？」

「お願いね、『ココ』！」

京子はそう言ってネックレスを手に取ると、唐突にネックレスが光だし、ライオンの意匠からツナのナッツ同様に、京子のボックスアニマルである晴属性の炎を帯びた雌のライオンの子供が出現する。

「“晴ライオンＶｅｒ．Ｘ（レオネ・ディ・セレーノ・バージョンイクス）”」

「ガオ♪」

ライオンが登場すると、これを見た小鳥遊は思わず頬を染める。

「まぁ、可愛いらしい！！」

「同じライオンの兵器か・・・」

このライオン、ココが出現した後にツナも自分のリングからナッツを呼び出し、京子と顔を見合わせる。

「京子ちゃん。ナッツと一緒に」

「オッケイ。お願いね、ココ。ナッツ君。」

「「ガオ♪」」

二匹は容体が著しく悪化の一途をたどるスバルの元へと近づき、彼女の身体に乗るとツナと京子の掛け声を待ち、二人はタイミングを合わせて同時に言う。

「“癒しの咆哮（ルッジート・デイ・クーラ）”」

「“調和の咆哮（ルッジート・デイ・アルモニア）”」

二匹が晴属性と大空属性と言う抜群の組み合わせである癒しと調和の咆哮をスバルに向けると、その瞬間なのは達は驚くべき光景を目の当たりにする。

「「「あ！」」」

「「「「おお！！」」」」

二匹の咆哮によって、スバルの全身に火のこのように散らばっていた藍色の炎が次々と消えていき、同時に紫を帯びた毒気が浄化され、更には受けた傷をも治癒されていきスバルの表情が和らぎ始める。

「見て！藍色の炎が・・・どんどん・・・消えていってるわ！？」

「それだけじゃない。全身に回ろうとしていた毒気も一緒に浄化されている！」

「凄い治癒能力だ・・・！」

「一体どうなってるの！？」

驚愕に目を見開く一同。

ツナと京子はほくそ笑んでから次のように説明した。

「俺の大空属性の炎の特徴は『調和』。矛盾や綻びが無いようにあらゆるものの調子を整えたり、戦闘で使うなら石化させて敵の動きを封じたりすることが出来ます」

「そして、私の晴の炎の特徴は『活性』。瞬時に細胞を復元させたり、身体能力を高める力を秘めているんです。私のボックス兵器、もといボンゴレギア『太陽のネックレス』と融合した晴ライオンＶｅｒ．Ｘの咆哮を聞いたものは目に見えない晴属性の炎によって、瞬時に怪我を治して壊れた細胞を復元させることが出来るんです。」

「えっと・・・なんかいろいろ分かんないねぇことはあるが・・・

取りあえずスゲー・・・！」

「しかしオレンジ色の炎に、黄色の炎・・・これは炎色反応の実験か？」

ルキアがそう言うと、ツナと京子は思わず苦笑いを浮かべた。

「あはは・・・言えなくもないですね」

二人の治癒を受けた後、改めてシャマルと小鳥遊がスバルのバイタルを測定すると、先ほどまで危険レベルに達していたスバルの調子が二匹の咆哮一つで一気に安全圏にまで回復した。

「うん。バイタルが正常値まで戻ったわ。これなら、少し休ませれば大丈夫よ」

「ふう。良かった」

「スバル」

安堵のため息を吐き、表情を和らげるなのは達はツナと京子の方へと振り向き頭を下げる。

「ありがとうございます。二人のお陰で、助かりました！」

「いえ。俺達は当たり前の事をしたまでで・・・なのはさんや恋次さん達とこうしてまた違う形であれ再会できたことは俺達も驚いていますし」

「！違う形で・・・？」

「それにどうして俺達の事を!?」

ツナの衝撃的な発言を聞かされ、また違う意味で動揺する全員。

二人は苦笑いを浮かべながら全員に言う。

「えっと・・・その話は全員が揃ってからまとめてしようと思います。」

「だから、今は一先ず目的地に着くまでそうっとしておいてくれませんか?」

「う～ん・・・二人がそう言うなら、私は構いません」

「はい。では、六課にご到着次第お話を」

こうして何とか話をまとめたツナと京子はなのは達と共に機動六課への帰路を飛んでいく。

そして、もうじきツナは絆の完現術士であるユーノ・スクライアと運命的な再会を果たすことになるのだ。

◇

〈六課Ｓｉｄｅ〉

六課に戻って来たなのは達は、スバルを一旦シャマルに任せてから、ツナと京子から話を伺うために彼らを前線メンバーが集まる司令室へと案内する。

「さぁ、どうぞ奥へ」

ツナと京子は辺りを見渡し、初めてお目にかかる六課の内部を物珍しそうに窺う。

「ここが機動六課・・・」

「大きいね・・・」

そうして歩いている内に、あっという間に二人はなのは達に連れられ司令室の前へとやってきた。

「こちらに前線メンバーが集まっています。中で話を」

「あ、はい」

そうして、自動ドアが開かれ中の様子が見えてくると、なのは達の帰りを待っていたユーノがユーノスを肩に乗せ近づいてくる。

「おかえり。なのは、スバルは？」

「うん。大丈夫だよユーノ君。この人たちが治療してくれたから」

なのははそう言ってツナと京子をユーノに紹介しようとすると、ユーノとツナは顔を見合わせお互いに怪訝そうな表情となる。

「？・・・あれ？」

「え・・・？」

「ツっ君？」

「ユーノ君も？」

両者の反応になのはと京子がそう言った直後、二人は少しの間をおいてから以前の記憶を思い出し、その瞬間指を指して甲高い声を上げる。

「「あああああ！！！！！！」」

二人の大声に思わず耳を塞ぐ前線メンバー。

「な、何だよ大声出しやがって？！」

「ユーノよ、ひょっとして知り合いなのか？」

「知り合いも何も、この人・・・！元日の朝道ですれ違った！」

「そうだよ！あの時の・・・！え・・・！ひょっとしてなのはさん達の知り合いだったわけ！？」

もうお分かりの通り、ツナとユーノは以前のアンゴルモア・デジモン篇の最初の回において、既に顔を見合わせているのだ。

そして、両者はあろうことかこのような事件で運命的な再会を果たすなどとは夢にも思っていなかったであろう。

で、納得した二人はともかくとして、なのは達には全く状況が理解できないでいた。

「どういう事だ一体？」

「話がイマイチ読めませんね」

「ツっ君。その事も含めて、ちゃんと話そうか」

「う、うん」

京子に諭され、ツナは一先ず案内された席へと移動するが、その傍らツナはとそのツナを見て奇妙な引っ掛かりを覚えたナーノが心の中でそれぞれこう呟く。

「（こんな偶然が・・・・・だけどこの人は何者なんだろう？）」

「（あれ？なんだっけ・・・どっかで見たことあるような顔してるけど――――――）」

驚くことは多々あるものの、ユーノとツナはひとまず落ち着きを取り戻してから面と向かい合い、咳払いをしてからユーノは徐にツナの名前を尋ねた。

「えっと・・・取り合えず名前を教えてくれるかな？」

「あ、はい。俺は沢田綱吉。こっちは妻の京子ちゃん。」

「初めまして」

と、この時ユーノの側で京子の容姿をじっと伺っていたのは、なのはを始め美人な女性には目が無い変態行動が目立つ亀井浦太郎だ。

浦太郎の眼にはこの時、京子の姿が何ものよりも眩しき光って見えたそうな。

「（可愛いな～～～この娘（こ）？なのはちゃんとはまた違った魅力のもっこり純情娘～～～～？）」

と、その時ツナの名前に違和感を感じたユーノは一瞬考え、そして直ぐにこう言う。

「沢田綱吉・・・あれ待てよひょっとして、君・・・奈々さんの息子さんかい？」

「え！？母さんを知ってるんですか！？」

「でも、どうして！？」

異世界の見知らぬ男が自分の身うちの名前を知っていたことは、当たり前のことながら驚きを隠せない。

狼狽する様子のツナと京子に、ユーノは慌てて言う。

「あ、ごめんごめん。実は奈々さんとはちょっとしたことが切欠で四年ぐらい前に知り合ってね。そうか・・・奈々さんがよく口にしてた京子って君の奥さんだったんだね♪」

「はぁ・・・でも正直びっくりしたよ。俺や京子ちゃんのことを間接的とは言え知っている人が居たなんて・・・あなたは何者ですか？」

「僕はユーノ・スクライア。この機動六課の特別エグゼクティブアドバイザーをしていて、高町なのはの恋人♪」

「そう言う事♪」

なのはもそう言ってユーノの首に甘えるように腕を巻きつけてくると、ツナは自分たちの知っているなのはには無かった恋愛要素に一瞬戸惑う。

「恋人？だけどなのはさんには娘さんがいたんじゃ・・・」

「ヴィヴィオの事も知ってるのかお前！？一体どうして！」

「あ、待て待て！ちゃんと話すから！一旦顔引いてくれる！」

ツナがそう言うと、彼の顔にドアップで接近していた鬼太郎は徐に後ろに身を引き、その後で部隊長であるはやてが真摯な眼差しを向ける。

「ほんなら改めて、私らにツナくん達のこと聞かせて貰うかな？」

「あ・・・うん・・・えっとだね・・・」

職務質問・・・それはツナにとって最も言いたくないものである。

言葉を詰まらせ返答の仕方を考えるツナを見たヴィータは言う。

「何だよ？あんましおいそれと言いたくねぇって顔してんじゃねぇか？」

「ツっ君・・・大丈夫？」

「うん・・・大丈夫だよ。」

ユーノはこの様子を見ると、柔かい表情を浮かべて不安を抱くツナに優しくこう言う。

「安心しなよ。僕らはこれでもそこら辺の頭の堅い局員とは違うから、正直に話してみなよ。ここにいる以上は、君達は責任もって僕らが護るから。」

ツナと京子はユーノの言葉を聞くと、何故だかは知らないがまるで実家に帰った時のような安心感を覚え、彼やここにいるメンバーを信じて正直に打ち明ける決心をする。

「・・・分かったよ。じゃあ、話すね・・・」

ツナは多少の細かいことは省きながらも、自分がマフィアのボスで、死ぬ気の炎やボックス兵器と言った人知を超えた武器を使って戦うことなどで赤裸々に彼らに話した。

ツナがこうして話せたのは一重に、ユーノ達を信頼するに足りると自分の超直感が冴えわたったからなのだ。

話しを聞き終えた後、呆然とするものや開いた口が塞がらない者もいるが、ユーノは大方の事を理解し腕を組んだ。

「うん・・・話は大体分かりました。君たち二人が持っている特殊な武器、ボックスやリング、死ぬ気の炎と言った未知なる力のこと。更にはツナ君がイタリアの最大マフィア・・・ボンゴレファミリー

の十代目ボスであることも。」

「マフィアとは・・・随分と物騒な話だな。」

「あまり良いイメージはもたないからね。」

横でそのような会話が聞こえてくると、ツナは罰の悪そうな顔を浮かべる。

「それ言われると・・・改めて自分が恥ずかしくなってきますよ・・・」

「元気出して、ツっ君。あなたが暗い顔すると私も悲しいから」

「あ。ごめんね京子ちゃん・・・」

と、ここでユーノがボンゴレファミリーの名を聞いてから、不意にこんな事を思い出した。

「ボンゴレファミリー・・・か。そう言えば、前にイタリア旅行に行った際にそんなマフィアのことを地元の人から聞いたな。」

「イタリアにも行ったことがあるんだ・・・ユーノ」

「地球の遺跡遺産は興味深いものが多いからね。」

ユーノは果てしなく探究心に溢れた青年なのだが、現在は無欲の塊と評されるほどにあらゆる自分の欲望から遠ざかっており、趣味の遺跡発掘でさえ自分の意志で行くことが極力少なくなった。

こんなロボット的な一面ばかりが顕著に目立つユーノの隣で、ルキアが核心的な事を尋ねてきた。

「ところで、先刻から気になっていたのだが・・・何故私とスバルの名前は勿論・・・ここにいる殆どのメンバーの名を知っているのだ？」

「えっと・・・きちんと説明できるかどうか分からないんですけど・・・俺達は十年前になのはさんやルキアさんとある事件が切っ掛けで遭った事があるんですよ。でも、俺達の遭遇したなのはさん達は・・・――――此処とは違う世界のなのはさん達のようでしたけど・・・」

「何！？」

「「え！？」」

「・・・――――」

「え・・・じゃあ、ツっ君！？此処に居るなのはさん達は、なのはさんであってそうじゃないなのはさんってこと！？」

「多分・・・ルキアさんの言動で直感した・・・俺達が前にあったなのささんと今此処にいるなのはさんはパラレルワールドなんだって。」

「（パラレルワールド！）」

ユーノはその言葉に目を見開き、なのはも同様の事を以前にドラが口にしていたことを思い出す。

「それって、ドラさんも前に同じことを言っていたような・・・」

「いいかい、今からちょっと長くなるけど話すよ。一言一句、ちゃんと聞いてほしい・・・」

「ああ」

ツナは十年前に起こったとある事件、次元世界全てを破壊しようとした存在・・・通称次元の破壊者に事に関する概要をこの場にいる全員に説明した。

そしてその後で、自分たちが大人になりイタリアに生活と仕事の拠点を移してから今日に至るまでの出来事を加味した上で、この度の大事件を暴露する。

「俺達の世界、つまり・・・なのはさんが暮らしていた『地球』の裏側で、ある時からアメリカのニューヨークを拠点とする新興のマフィアが急激に勢力を伸ばし、世界中に散らばる主要なマフィアに宣戦布告をしてきた。裏の世界を牛耳るマフィアと言うマフィアは、そのファミリー・・・スパジオファミリーのボス、ケリー・バーンズを中心とする数名の幹部達によって次々と圧倒された。残ったのは、イタリアに本部を置く俺達ボンゴレと世界中に散らばる同盟ファミリーのキャバッローネ、ジッリョレノを含め僅かとなった古くから友好関係を築くファミリーだけとなった。」

「何だか血生臭い話だな・・・流石はマフィアって感じだぜ・・・！」

「けど、それとツナ達が飛ばされたことと何の関係が？」

「うん・・・俺は守護者のみんなや残ったボンゴレ同盟ファミリーと共に、一般人をも巻き込みながら只管に勢力を拡大させていく奴らの凶行を止めるために連合軍を結成して、シチリア島で最後の戦いに挑んだ。だけど、俺や守護者の皆・・・その場に居合わせた京子ちゃんや守護者の家族はケリーの持つ未知なるリングの力によって、散り散りに飛ばされたんだ。俺は何とか京子ちゃんを守ろうとして・・・気付いたらミッドチルダに居て、コロナって女の子に助けられた。」

「そっか。コロナちゃんが」

「コロナちゃんは、ヴィヴィオのお友達なんだ。」

「うん。本人から聞いたよ」

「お陰で私もツっ君もすっかり介抱受けちゃったしね」

「しかしリングの力だけで・・・次元空間をも操る力を有しているとなると」

「店長、どう思う?」

「う~ん・・・実は昨夜、異世界のいたるところで小規模な次元震が起こってる。ツナ君達の話を聞くと、恐らくはケリーが持つリングの力・・・即ち第一級のロストロギアである可能性が高い。最悪の場合、それが加工されたアンゴルモアであったときには、厄介なことだ。」

「ん?アンゴルモアって・・・何ですか?」

ツナと京子は訝しげな表情を浮かべてユーノの言葉に耳を傾けた。

「あ、そやったね。今、私ら機動六課が探してる超一級指定のロストロギアのことや。崩玉って言う恋次さん達死神さんが昔壊したと思ってたものなんやけどね。」

「え?それって・・・一護さんが前に言ってた・・・!?」

「そうか。お前は一護のことも知ってるんだったな。パラレルワールドでの出来事がどうなのかはよく分からないが、こっちの世界ではかなり入り組んだ深刻な事態にまで発展しちまってるんだ。」

「そうなんですか・・・」

ツナは話を聞かされ、これまた違った戸惑いを見せる一方で、キャロがツナが嵌めていたリング、そしてベルトに付属したボックス兵器を凝視しながらこんな事を聞いてきた。

「でも、何でマフィアさんの武器がリングとそのボックスっていうものなんでしょうか?」

「元々リングって言うのは、俺達マフィアや闇の世界で生きる人間の象徴とされてきた代物なんだ。だけど、“沈黙の掟(オメルタ)”と言うものに守られてきたリングには・・・人知を超えた力が宿っていたんだ。それこそが、俺達の戦いの鍵となる物質・・・死ぬ気の炎なんだ。」

「死ぬ気の炎・・・」

「実際に見せた方が早いね。」

ツナはそう言うと、オートマモンチェーンカバーと呼ばれるリングの力を常時封印するカバーを外し、自分の本命のリングである大空のリングを持って来、全員の注目を集める。

「いいかい。これが死ぬ気の炎って奴だよ」

ツナがそう言って手に力を入れると、不意にリングに灯る濁り気のない高純度のオレンジ色に輝く炎。

一同はこれを見た瞬間度胆をぬいてしまう。

「凄い・・・リングから炎が・・・!?」

「しかも何このエネルギー密度!?」

シャーリーは一度計測器を持って来、リングから発せられる波導をデータ解析に回そうとするが、その瞬間にシステムが全てオーバーロードを起こしてしまい、速敵が出来なくなる。

「大変です。計測しようとした途端、全ての回路がリソースして、オーバーロードを起こしています!それだけ巨大なエネルギーが内包されている模様です!」

「マジでか・・・!」

ユーノはこの炎の出力を考え、眉間にしわを寄せながら徐に尋ねる。

「ツナ君。ひょっとしてだけど、君のそのリングは普通のリングとは些か・・・いや、かなり違うんじゃない?」

「あはは・・・やっぱり分かっちゃった。うん。俺達ボンゴレの持つボンゴレギア・・・元を正せばボンゴレリングは“７の３乗（トゥリニセッテ）”の一角を担う特別なものだからね。」

「“７の３乗”？」

「何ですか、それは？」

「私達の世界を形作ったという原石から作られたものなんだって。“アルコバレーノの七つのおしゃぶり”。“七つのマーレリング”。そしてツっ君達が持つ“七つのボンゴレリング”の計２１個で『７の３乗』。」

「お、おしゃぶりが・・・世界を形作ったんですか・・・」

「しかも２１個・・・何だかジュエルシードみたいだね・・・」

「そうだね・・・・・・」

補足的にこのトゥリニセッテの情報を付随しておこう。

これら２１個の物質の精製度ランクは全てＡ以上・究極権力の鍵とされており、これらを集めることが次元世界の覇者となれるとも呼べる代物とされ、ミルフィオーレファミリーボスであり、現在はジッリョネロファミリーに属している白蘭の野望でもあった。

これを聞くと、すぐさま危険な代物と考え、ロストロギアと認定しまうのが根本から管理局の保守的思考に浸っていたクロノ・ハラオウンである。

「だが、世界を造ったと言う事実は兎も角として・・・よもや地球にそのような秘匿急なロストロギアがあったということは見過ごすわけにはいかんな」

「・・・・・・」

ユーノはその言葉を聞くと、思わず渋い顔を浮かべる。

「それが万が一アンゴルモアと同等かそれ以上の力を秘めている危険な物質なら、管理局としてもそれ相応の措置をとらせてもらう。」

「つまり・・・“回収する”って言いたいの？」

「そう言うことになるな。」

クロノがツナと面と向かってそう言うと、これを聞いていたアンチ管理局主義に走るユーノの息子、ナーノと管理局の元となる結社を作り上げその基礎を築き上げた七大元帥のユーノスでさえ呆れ顔を浮かべる。

「はぁ～～～（これだから根っからの管理局主義は・・・）」

「（俺も少々、この態度には嫌気がさすな。）」

すると、そんなクロノの発言に水を差したのはユーノだった。

「――――クロノ。今回ばかりはそれは止めておくべきだと思うよ。」

「？何故だ、ユーノ？」

「聞く所によると、ツナ君達の言っている7の3乗が仮に僕らの干渉で無くなったとする。そしたら、なのは達の故郷はどうなると思う？世界の礎がなくなれば、均衡が崩れ地球そのものが消えてしまうかもしれない。」

「「！」」

「そ、そんな！？」

なのは達は一瞬身震いをし、途方もないぐらいの恐ろしいことを口にしたユーノを凝視すると、ツナもそのユーノの発言に便乗してきた。

「うん。ユーノ君の言ってることは正しいよ。ボンゴレリングとマーレリング、そしてアルコバレーノのおしゃぶりのどれか一つでも欠ければ、時間や空間にも大きな影響が出てくる。それに、例え管理局がこれを獲ろうと動き出しても・・・これだけは譲れない。これは俺達が引き継いできた罪であり覚悟の証だから。」

「ツっ君・・・」

京子は覚悟の籠った瞳を浮かべ、目の前のクロノにそう断言するツナの言葉に思わず複雑な表情を作り、ツナはその後でほくそ笑み自分の師である最強の赤ん坊、アルコバレーの一人であるリボーンの事を口にしてきた。

「それに、そうならないようにその監視のための最強の赤ん坊・・・アルコバレーノがいるんだから。あの七人・・・特に俺の師でもある晴れのアルコバレーノ、リボーンを屈服させるのは一筋縄じゃい

かないと思うよ。あいつの口八丁振りと実力は残念ながら俺以上だ。」

すると、リボーンと言う単語を口にした瞬間、ナーノが今までツナに関して抱いていた引っ掛かりに光が差し込み重大な事実を思い出した。

「リボーン・・・・・あ！そっか！思い出したよ！！」

「？ナーノ」

「そっかそっか！あなたですよね！！リボーン師匠の言っていたダメツナって！」

「へっ？」

「り、“リボーン師匠”！！」

全員はナーノの予想外な発言に耳を疑い、その中でも特に驚いているのが、ナーノに詰め寄られたツナの方であった。

「ちょ、ちょっと待ってよ君！なんであいつの事知ってる・・・！？て言うかリボーン師匠って何なの！？」

「な、ナーノ。お前がどうして沢田の師匠の事を？」

ユーノスがそう尋ねると、ナーノはツナから身を引き、胸を張った様子である意外な事を口にしてきた。

「えっへん！だって僕は未来で、お父さんから剣とか魔法を学んだ

ように、銃に関してはリボーン師匠から教えてもらったんですもん♪」

「「え」」

「「ふぇ」」

一瞬の間、目を点にするツナやユーノ、そしてなのはや京子であったが、直後ナーノが初めて六課に来た時同様の驚愕の叫び声が六課中に響き渡った。

「「「「「「「「「「「「「「えええええええええええええええええええええええええ!!!!!!!!!!!!!!!」」」」」」」」」」」」」」

ツナは自分でも人生においてこれ程までに出したことのないと自負するほどの大声を上げた後、挙動不審な態度でナーノがリボーンの弟子あることを訊かされ耳を疑いたくなった。

「な!!!リボーンがナーノの銃の師匠!!!!」

「そ、それじゃナーノは世界最強のヒットマンから直々に銃を教わったって言うの!!」

「へへ♪今でも思い出すな。リボーン師匠との修行・・・あの人お父さんや一護さん並みに超スパルタで、銃の使い方教えるだけなのに崖に連れていかれていきなり後ろから蹴られて落とされるわ、そりゃもう~~~大変だったな」

「が、崖から突き落とされた!!」

「（うわぁ～～～いかにもリボーンらしい～～～／／／）」

ツナはリボーンとの口には言えないようなえぐい修行を思い出し、思わず身震いをする中で、ナーノはどこか懐かしい様子でしみじみと語り出す。

「ま・でもお蔭で僕は精神的にも肉体的にも丈夫になれたわけだし、リボーン師匠には感謝の限りだ。あ、そう言えばリボーン師匠が言ってましたね。“俺の元・生徒のダメツナって奴は今でこそそれなりになっちゃいるが、俺が来た時にはチワワワにさえビビっちまう超ヘタレだった”って、言ってはいたけど・・・まさかそのダメツナって言うのがツナさんだったとは」

「な！！未来のリボーンの奴！！何人の恥ずかしいこと暴露してんだ／／／」

未来のリボーンに激しい憤りを覚えるツナは恥ずかしさのあまり顔を沸騰させる。

そして、衝撃的な事実を聞かされたユーノは苦笑いを浮かべる。

「あはは・・・そうか。だからあれだけの技量を持つにいたると言う訳か。教導隊で射撃の基礎を教えるなのはと、世界各地で実際にヒットマンとして活躍するその人じゃ、まさに天と地にも隔たっているね」

「う・・・私の技術ってそこまでレベルが低いのかな・・・／／／」

なのはは自分の射撃の技術と世界最強と謳われるリボーンの銃の技

術を見事に継承し、その理念をも忠実に守るナーノのそれを比較すると、深く落ち込んでしまい、それを見たマリアは意外そうな顔を浮かべる。

「あらら。思わず本当の事を聞いて酷く落ち込んでしまいましたわ」

「普段から甘ちゃんですからね。これが現実の厳しさって奴ですよ」

「本当にあんたって・・・なのはさんには何処までも冷たいのね・・・」

ナーノの痛烈なのは批判に、ティアナはそのように突っ込んでしまうのであった。

やがて、なのはが正常な状態にまで回帰し、話を進められる雰囲気が出てくると、ツナが改めて自分から話を進める。

「で、話を先に進めることにして・・・俺と京子ちゃん以外の他の守護者の事で。」

「ああ。連絡がつかないでいるんだよね」

「うん・・・獄寺君やハルちゃん、それにお兄ちゃんやクロームちゃん・・・みんなは一体何処に行っちゃったんだろう・・・」

「助けたいのはやまやまだけど・・・俺達二人の力じゃどうにもならないし・・・今は唯無事であることを祈ってる」

「ツナさん・・・京子さんも」

「・・・・・・」

渋い顔を浮かべ、ひたすらに仲間の事を気に掛ける心優しき二人の男女。

そんな男女に救いの手を差し伸べるのは、分りきってはいるがこの男・・・ユーノであった。

ユーノはほくそ笑んだ後、徐にこう言って来た。

「そう言う事か――――なら話は簡単だ♪」

「え？」

一瞬耳を疑うツナと京子の前に座っていたユーノが徐に立ち上がる。

「だったら僕ら機動六課がその行方不明となっている君らの仲間の消息を突き止めればいいことだ。」

「ほ、本当に！？でもどうやって！」

「そうだな・・・ツナ君が持つボンゴレリングから同波長のエネルギーを記録して、それを使った探知機でも作れば探し出せないことは無い。」

「大丈夫♪ユーノ君なら何とかしてくれるよ」

「ちょっと時間は掛かるかもしれないけど・・・取り合えず、ツナ君。君のボンゴレギアの波長を一度記録したいから、ちょっと奥まで着いてきてほしいんだ。一晩で完成させてみせるよ・・・ボンゴ

レリング探査装置を。」

ユーノはそう言って自信に満ちた笑みをツナに向けると、ツナは赤の他人である自分たちにこれほどまでに暖かい手を差し伸べて来たユーノに感謝の念を抱く。

「ユーノ君・・・ありがとう／／／」

「良かったね、ツっ君」

「うん」

思わず涙がこみ上げるツナを見て、なのは達は如何にユーノが困っている人間にやさしい人物であるかを確認した上で、その行き過ぎたお人好しが自分の身を破滅に導くかもしれないという危惧の念を同時に抱く。

◇

〈ツナＳｉｄｅ〉

その日の夜。

ユーノの仕事場であるアドバイザー室で、ボンゴレリングの波長を記録したツナはより詳しい話をユーノとした後、徐にロビーの方へと戻って来、少々疲れた様子で今日と共にソファーの上に沈み込みため息をついた。

「ふう～～～」

「疲れちゃった？」

「まぁそれなり。しかし驚いたな・・・まさかなのはが未来ではユーノ君と結婚していて、おまけにその息子が未来からやってくるなんて・・・思わず十年バズーカを思い出しそうだ」

「ふふ。子供の頃は、よくそれでランボ君が悪戯してたもんね。それに今でも間違って使っちゃうこともあるし」

「はは。でもそのお陰で折角のお楽しみが邪魔されたこともしばしばだし・・・」

「うん。あ・ナーノ君で思い出したけど、リボーン君がナーノ君のお師匠さんだって聞いたときはびっくりしたね」

「そうなんだよね～～～あいつが未来でそんなことしてるとは思ってもなかったし、驚きすぎてどうリアクションをとっていいのやら～～～・・・いや・・・俺は個人的にだけど目の前でフェレットが人間の言葉で話してきたことの方がびっくりしたかも・・・」

ツナはそう言いながら、先ほどのユーノとの会話の中で肩に乗っていた今は変身魔法でフェレットの姿に化けているユーノスが時折相槌を挟んでいたことを思い出し、一種のカルチャーショックを受けていると、京子は至って平然とした様子で笑みを浮かべた。

「そうかな？私は全然。だって、リィンちゃんやアギトちゃんだって傍目から見れば妖精さんな訳だし、言葉を話すフェレットさんがいても不思議じゃないと思うんだ。うふふ♪」

ツナはそんな妻を横で見ながら、唖然とした様子で思わず口にする。

「・・・やっぱ京子ちゃん・・・ただものじゃない・・・」

その後で、京子はなのは達の厚意で一緒に風呂に入ることとなった。

で、大方の予想はつくとは思うがこの機会を見計らって京子の事を狙っていた男が一人・・・そう、もっこり男と呼称させてもらうほどの女好き、亀井浦太郎であった。

浦太郎は同じく京子に一目ぼれした鬼太郎を連れて、女湯にこっそりと侵入し、誰もいないことを確認した上で人間として恥ずべき行動をとり始める。

いわゆる、“物色”だ。

浦太郎と鬼太郎は京子の服を漁っていくうちに見つかった彼女の下着を手に取り、思わず鼻血をたらす。

「「うほおおおおお～～～！！！！」」

彼等は既に羞恥心も何もかもを捨て去り、完全に下着漁りと成り果てていた。

「すげーよ亀！あの顔でこの際どさ！マジ半端ねぇよ京子たん♪」

「うんうん！！いや～～～言っちゃ悪いけどツナ君にはもったいぐらいの美人だよね～～なのはちゃんとかフェイトちゃんと違って扱いやすそうだし、何よりあの天然がまた可愛さをひきつける要素なんだよね～～～？」

「おい。今のうちにずらかろうぜ。見つかったらことだ！」

「うん！」

二人はこっそりと京子の下着を懐に仕舞い込み、女湯を後にしようとするが、その時・・・彼らの行動に気付いたのは京子の夫であるツナとその相棒のナッツであった。

「何処に行こうとしているのかな二人とも？」

「「！」」

恐る恐る声がした方に振り返る二人。

二人が目の当たりにしたのは、ユーノがなのは一筋なように京子一筋なツナであり、ツナは殺気を孕んだ笑顔を浮かべながら二人を見つめ、その肩に乗ったナッツは威嚇をしていた。

「浦太郎さん・・・鬼太郎さん・・・今懐に仕舞い込んだのは何ですか？京子ちゃんの下着じゃないでしょうね・・・」

「グルルルルル！！！！！」

二人は顔を見合わせ、全身から冷や汗をかきながら笑ってごまかそうとする。

「な、何の事かなツナ君／／／僕らはただ見守りを／／／」

「そそそそっそうだぜ／／／断じて下着を盗もうなどと言うやましい考えはだな・・・／／／」

「ば、バカ先輩／／／それ言っちゃ／／／」

「あ！！！」

と、慌てて鬼太郎が口をふさぐも、この事も含めてツナは予め超直感から二人の行動に予測をつけていた。

その為、分りきった様子で彼らの後をこっそりと着けていた。

ツナは両手を鳴らしながらニコヤカナ眼差しを向けて来、同時に凄まじい殺気を二人にぶつけ、完全に圧倒した浦太郎と鬼太郎はユーノに睨まれたときのように体が硬直する。

「俺の超直感をあんまり舐めないで下さいね・・・・・・・さてナッツ。どうやってお仕置きしようか・・・石化させた後で恥ずかしい場所に放置するか、或いは死ぬ気の炎で消す墨にするか・・・」

「ガル～～～」

「「あ・・・・・・ああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」」

正に自業自得とはこの事。

結局、二人はこの後ツナとナッツによるこっ酷いお仕置きを受けてしまう羽目となり、全身を黒焦げに染め上げ、一糸まとわぬ姿となってロビーに放置され、後で女性局員からは大変恥ずかしい視線で見られてしまったのであった。

◇

〈ツナ・京子Ｓｉｄｅ〉

風呂から上がった京子は、外での事情をツナに問い質し、ツナは平然とした表情で何事もなかったかのように演出し、京子を落ち着かせた後で彼らは昼間敵の攻撃を受け思わぬ深手を負ったスバルの事が気にかかり、医務室へと赴いた。

医務室のドアを開けると、中にいたのはスバルだけで、スバルは既にシャマルから事の事情を聞かされていたため、それほど驚く事は無かった。

ツナと京子は不安げな様子で徐に彼女の容体を聞いてきた。

「どうスバル？身体の調子は？」

「はい！もうすっかり回復です！」

「ははは。そりゃよかったよ」

「うん。私達もこれで一安心かな」

「へへ。本当に、お二人には何とお礼を言ったらいいか・・・ありがとうございます！」

元気よく二人に頭を下げお礼を口にするスバルに、思わず笑みを浮かべるツナ。

「いいってお礼なんて。まぁでも一先ず今日一日はゆっくりするん

だ。明日の朝練に出られるように、早めに寝なね」

「はい！じゃ、お言葉に甘えてお休みなさい！お二人の方も、今日はココを我が家と思って休んでくださいね！」

「うん。ありがとう」

二人は用事を果たし、医務の室から出ていきユーノ達からあてがわられた部屋を目指して廊下を歩きはじめる。

「ふふ。元気になって本当に良かった。スバルちゃんを見てると、十年前の事件でお兄ちゃんや茶渡さんと一緒に泥まみれになって修行をしていた時を思い出すな」

「うん。お兄さん、随分茶渡さんの事尊敬してたもんね。俺もあの時から・・・一護さんの事は尊敬の的で見ているけど」

「リボーン君が聞いたら、焼きもち妬くかもね」

「はは。その前に蹴り技が飛んで来るかも」

昔の事を思い出しながら、今の時間を過ごす沢田夫妻。

そうして、夜が更けていき今日市内で起こった事件が何事もなかったかのように静まり返る中、一人部屋で黙々と作業を続けている男が一人。

絆の完現術士のユーノはユーノスが見守る中、データを打ちこみ、急ピッチでボンゴレリング探索装置の作成に精を出していた。

「ふう～～～」

全神経を集中させ、作業に追われるユーノを気に掛け、籠の中で見守っていたユーノスは彼の机に飛び乗り側で言って来た。

「ユーノ。あまり根を詰めるな。また疲労で倒れるぞ」

「平気です。これぐらい日常茶飯事ですから」

「お前・・・どうしてそこまでの事を。手が届く人間に手を差し伸べるのはお前のもっとうかもしれぬが、何故自分よりも他人ばかりを気遣う?俺の時にしてもそうだ。もう少し、自分を守ろうとして欲しい」

それを聞くと、ユーノは一旦作業を中断しユーノスに顔を向ける。

「ユーノス元帥・・・お気持ちは凄く嬉しいのですが、困ってる人や目の前で辛い目に遭ってる人を見す見す放っておくなんてこと、僕には絶対に出来ないんです。見返りとか感謝されることは想定していません。ただ目に映る人が笑ってくれさえいれば、それでいいんです。人にとっては小さなことでも、僕にとっては大きな事なんです」

「それで欲望が無いなどと言われてもか?」

ユーノスが予てよりヤミーやグリードとの戦闘、されには破面魔導虚リリスが口にするユーノの欲望が無いこと、即ちブランク・オブ・デザイアを指摘すると、ユーノは複雑な表情を浮かべながら作業を再開し、一言返事を返す。

「――――――ええ」

ユーノスをその言葉を聞くと、思わずため息をつきながらもそんな彼に惹かれる自分矢なのは立の事を想定しこう言う。

「・・・・・ふう。全く困った奴だ。だが、そんなお前だからこそなんだろうな。俺やあいつらが大切に思うのは」

「え」

聞き違えではないかと思ったユーノだったが、ユーノスは笑みを浮かべた後ユーノが作ろうとしていた作業パーツを手に取り、言って来た。

「俺も手伝おう」

「しかし」

「人に頼らないってことは、強いことじゃないんだぞ。」

「・・・ユーノス元帥。はい・・・ありがとうございます」

「さぁ、二人で完成させるんだ」

「ええ」

夜が更けていく中で、似た者同士であるユーノとユーノスは寝る間を惜しんで作業に没頭する。

果たして、本当に一晩で装置は完成するのであろうか？

そんな心配を抱いているのはここ機動六課の保護を受けたツナと京子であった。

同じベッドの中で、二人は一糸まとわぬ姿で横になっているが、ツナはどうしてもユーノの事やそれ以上にかけがえのない仲間である守護者の事を考え神妙な表情を浮かべる。

「・・・・・・――――――」

すると、それを見た京子がツナの首に手を回しながら言ってくる。

「気になるの、みんなのこと？」

「うん・・・獄寺君たちのことだから、やられてはいないとは思うけど・・・無事で居てほしいよ。ハルだって、本当はこんなことを望んでいなかったはずなのに・・・」

「ハルちゃんだって、自分で選んで獄寺君と一緒になったんだもん。後悔はしていないと思うよ。私がツっ君の傍に居ることを選んだみたいに・・・」

「京子ちゃん・・・」

「私的には、奈々さんの方が心配・・・連絡が取れなくなってるって話だし」

「母さん・・・」

遠い異国の地まで自分を求めて足を運んだ最愛の母親が行方不明だ

ということを聞かされたツナにとって、不安は消えることが無かった。

思わず切なくなり拳を握りしめながら一粒の涙を浮かべるツナ。

京子はそんな彼の涙を拭うと、彼の身体にぺったりと合わさり微笑みかける。

「大丈夫だよ。きっと大丈夫だから」

「京子ちゃん――――――そうだね。」

最愛の妻からの励ましの言葉を貰い、ツナは愛おしそうに彼女を自分の元へと抱き寄せる。

「あ」

そして、互いに唇を合わせ深い深い愛の渦に溺れながら、ツナは京子に面と向かって誓いを立てる。

「君は必ず俺が守るよ・・・そして、一緒にみんなで帰ろう・・・」

「うん・・・」

二人は互に求め合い、引き寄せながら異世界での甘い夜を過ごす。

と、こんなラブシーンでこの話を終えるのはちょっとどうなのかと思いながらも、文字数が多くなってもあれなので区切りよくここで終わりを迎えたいと思います。

次回はツナとフォワードメンバーによる模擬戦と、ユーノが作成した装置を使った守護者探しが幕を開ける！

大空の青年（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「どうもみなさん、お待たせいたしました♪１０月中に募集をしていた感動した話の集計が終わりましたので、今回はその結果発表と参ります♪」

一「いよいよだな。さて、何の話がランクインしてんだろうな」

な「今回は作者さんがベスト６位から１位までをダイジェストで発表していきます」

ヴィ「それでは早速発表に参ります！ナーノ、お願いね♪」

ナ「任せておいてよ、ヴィヴィオ姉ちゃん！じゃあ発表です！第６位！」

第６位：『師弟の絆』　獲得ポイント９点

ユ「来ました来ました♪僕と一護さんとの絆を象徴する回！」

一「ああ。これは俺的にも凄く気に入ってる話の一つだからな！よっし！それじゃこの回をもう一度振り返ってみてみよう！」

カトゥーンキャッスルでのテトラカトゥーン、孫悟空との一騎打ち、一護はボロボロになりながらもユーノを守ろうと懸命に立ち向かっていった。

悟「どうしてそんなに必死になる？人間もこの世界の全ても、みんな取るに足りない物質の断片に過ぎねェ。そんな儚くて脆いものの為にどうしてそこまで血を流す？何が大事で守ろうとする？」

一「脆くても・・・儚くても・・・そんなもんは関係ねぇ・・・！俺は・・・あいつと・・・ユーノと約束した・・・！！“ユーノが俺や俺達の事を守ってくれるなら、俺はユーノとユーノの守りたいものを守る”って・・・！ぐ・・・！！くっ・・・！！！」

「欲望が枯れちまって・・・自分への執着がなくなっちまったあいつは・・・目の前で苦しんでる奴を放っておくことが出来なくなっちまった・・・だけどその分あいつは誰よりも苦しんで、誰よりも自分を責めて、そして誰よりも誰かを助けようとしている・・・！不安で、怖くて、辛いユーノの気持ちの全てを理解出来る訳じぇ・・・けど・・・！それでも俺はユーノの事を守るって・・・・俺の・・・・・・・・俺の魂に誓ったんだあああ！！！！！！！！！！！！！」

悟「！」

中略

一「待って・・・ろ・・・ユー・・・ノ・・・・・・今・・・行く・・・・・・・・！」

ユ「ここで、作者が選んだお気に入りの回も一緒に見ていきましょう♪」

な「それでは発表します。作者さんが選んだお気に入りの話はこちら！」

『辛い時、そんな時は横でも見てください』

ヴィ「うんうん／／／この話は本当に泣けたよね／／／」

恋「不覚にも、ポロリと来ちまったぜ・・・」

一「ああ。空白の四年で起こったユーノの悲惨な過去・・・他人の欲望に翻弄され、自分の善意を管理局の汚い手回しにより美談にしたてあげられたユーノは自分の欲望を失ってしまった・・・厳然たる使命感や責任感、罪悪感の元に自分の手の届く距離にいるモノに手を伸ばすだけとなったあいつに、銀さんをはじめ多くの仲間が声をかけたな」

な「それじゃ、その感動的なシーンを振り返ってみましょう・・・／／／」

満身創痍のユーノを気遣い、多くの者が心配する中で、なのはや次元漂流者の坂田銀時はこう語りかける。

な「ユーノ君・・・私・・・ユーノ君の気持ちが分かるなんて言えないけど・・・でも手を伸ばすことは出来ると思う！ユーノ君が辛いときは、私がユーノ君の手を掴む！だからお願い・・・！！これ以上、自分を傷つけないでよ・・・！一人で・・・背負わないでよ・・・！！！」

ユ「・・・！」

中略

銀「ユーノ。おめぇが何を抱えて苦しんできたか・・・俺達はユーノ・スクライアじゃねぇからよく分からねぇ。が、“他人に迷惑をかけることは悪いこと”だと決めつけちまうのは些か早とちりじゃねぇのか？」

ユ「え？！」

銀「悲しい事や辛い事がたくさん起こって、前向きになんてなれないこともある・・・そん時は気負わず横でも向いてみろ。おめぇの周りにはいろんなもんがついてるぜ。なのはも。恋次も。俺も。だから俺達みんなで前に進めばいいじゃんか。一人で歩いていても、つまんないもんだぜ。」

中略

ユ「・・・・・なのは・・・銀さん・・・みんな・・・ありが・・・と・・・」

と言う訳で、今回はここまで。

ユ「次回はいよいよ後半戦♪」

一「楽しみに待ってろよ！」

ナ「気になる作品は何位にランクインしてるのかな♪」

ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活（リ・ボーン）

ハ「はい！なんと、まさかまさかの大復活です！！ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活のコーナーがやってまいりました

！」

この女性は沢田綱吉の右腕、獄寺隼人の妻で獄寺ハルである。

自慢のドレスに身を積んでこのコーナーを進行する彼女だが、そんな彼女に突っ込みを入れるのはこの赤ん坊、リボーンである。

リ「その歳で何がハルハルなんだよ。このコーナー、アニメの終了と一緒に終わったはずだろうが。」

ハ「ハヒ！それは言わない約束ですよ、リボーンちゃん！そ、それでは早速記念すべき第一回目のゲストを御呼びしましょう。この小説の主人公にして、なのはさんの未来のハズバンド・・・絆の完現術士ユーノ・スクライアさんです！！」

ハルが紹介をすると、ゴンドラに乗ったユーノが天井から降りてくる。

ユ「どうも♪言わずと知れた淫獣・・・じゃなかった！絆の完現術士事、ユーノ・スクライアです♪いや～～～まさかこのコーナーに出れるなんて夢のようですよ！」

ハ「今日は、ユーノさんの知られざること何もかもをハルがデンジャラスに暴いて見せます！！」

リ「そこでデンジャラスを使うのは変だろうが。ところで、おめぇとは初対面だったな。なのはとはどんな関係なんだ？」

ハ「あ、そうでした！ハル達はあの時ユーノさんのことは全然聞いていませんでしたからね。そこのところ詳しくお願いします！」

ユ「そうだな・・・なのはとは9歳の頃からの幼馴染で唯一心から理解できる間柄の関係だったんだけど、それが昇華して今は晴れて恋人同士♪毎日が楽しいよ。周りからはバッカプルがって言われるけどそんなこと知ったことじゃないね♪」

リ「・・・ち・・・おめぇらもツナと京子と同類かよ・・・」

ハ「いいじゃないですか、リボーンちゃん！愛する者同士が愛し合うのは素晴らしいことです！！京子ちゃんは羨ましいですね～～～ツナさんのような優しくて気が利いて強くてナイスガイな夫がいて。ウチの獄寺さんはハルにちっとも優しくしてくれないんですよ！！！」

ユ「ハルちゃん・・・愚痴を零すのは結構だけど時間圧してるから先に進んでくれない」

ハ「ハヒ！す、すみませんでした！！え、では次の質問です！ユーノさんの最近の悩みの種はありますか？」

ユ「悩みの種ね・・・あるとすればあれだ。最近、考古学の論文の作成と新しいアイテムの開発で忙しい事に咥えて、ヤミーとかグリードとの度重なる戦闘の所為か疲労がピークでさ・・・そんな時に限ってクロノの顔を見たりするともう最悪だね！！」

リ「クロノって・・・ボンゴレギアを回収しようとしたバカだろ？」

ユ「バカなんてもんじゃないよ。あれはクソだね。」

ハ「ハヒ！何もそこまで言う必要はないかと・・・！！」

すると、二人の話を聞いていたクロノが我慢できずに飛び出してきた。

ク「ユーノ！！お前、さっきから何根も葉もないことを！！！」

ユ「あ、こいつだよ。クソ提督のクソノは♪」

ク「ク・ロ・ノだ！！クソノってなんだ！」

リ「成程。確かに賢そうじゃねぇな。」

ク「何だと！！赤ん坊の癖に年上をバカにする・・・ぐっほ！！」

リボーンに詰め寄った瞬間、至近距離からリボーンの銃弾を頭に受け、物の見事に頭を禿げ散らかし気絶するクロノ。

リ「てめぇはうぜぇからそこで寝てろ。」

ユ「あらら・・・見事なまでにハゲちゃったな。」

ハ「ぎゃあああああ！！！！クロノさん！！！！しっかりしてください！！ひ、非常事態につき今日のハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活はここまでといたします！！！誰か、救急車！！！でんじゃらすなクロノさんをキャリーしてください！！！」

ユ「次回は誰が出るかな♪」

波乱の満ちた第一回であった。

次回予告

リ「機動六課に保護されたツナと京子。相変わらずの甘々モードを全開にしやがって・・・まぁそれはさておき、ツナはなのは達に頼まれ模擬戦を任されることになったようだ」

「十年を通して培った奴の強さは半端じゃねェ。久々にツナのハイパー化が見ものだな」

「そして、ついに完成したボンゴレリング探査装置を使って・・・いよいよ始まる異世界に散らばった守護者探し・・・波乱の満ちた展開になりそうだ」

「次回、ユーノ・スクライア外伝・絆・・・『守護者探しｉｎ　異世界』。みんな、死ぬ気で見ろよ」

守護者探しｉｎ　異世界（前書き）

ツ「ケリーとの死闘の果て、ミッドチルダへと飛ばされた俺と京子ちゃん。こっちの世界について束の間、そこで俺達二人は嘗て一緒に戦った異世界の住人、魔導師スバル・ナカジマ、死神・朽木ルキアがスパジオファミリーと対峙している状況に出くわした」

「辛うじてスパジオファミリーを退けた俺達は、機動六課へ赴き、俺達が知っているなのはさんとは違うなのはさんと、ユーノ・スクライアと言う人に出逢った。」

「そして、俺と京子ちゃんはユーノ君達の計らいで機動六課に身を寄せることにし、異世界に散らばった俺達の仲間を探すことになった」

「一体この先どうなるのか？ケリーはどうしてあんな人知を超えた力を手にしてしまったのか・・・そして、奴の本当の目的とは何なのか？」

守護者探しｉｎ　異世界

〈ツナＳｉｄｅ〉

機動六課に保護された翌日の朝。

午前６時という時間でありながら、なかなか寝付けず早起きをしたツナと京子は服に着替えると、暇つぶしの為に隊舎の廊下を歩いていた。

ツナは京子の隣で歩きながら寝不足気味なのか、大あくびをかく。

「ふぁ～～～」

「なんか、あんまり寝つけなかったね。」

「うん。やっぱり慣れない環境、しかも地球じゃない異世界だとどうもね・・・」

と、ここで京子がある事を思い出し次のように提案する。

「あ・そうだ。折角早起きした事だし、なのはちゃん達の朝練、見に行ってみようか」

「そうだね。ちょうど、時間的にもいい感じだし行ってみようか」

そうして、二人は一度外の方へと歩きだし、なのは達の訓練を見に行くが、行く途中ツナが不意にユーノの事が気にかかった。

「それにしても大丈夫かな？」

「？」

「いやね・・・昨日の夜から、ユーノ君はずっと部屋に閉じこもって装置造りに没頭してる・・・無理してないといいんだけど・・・」

「うん・・・かれこれもう１５時間以上は経ってるしね・・・お腹空かないのかな？」

「でもどうしてだろう。なんで赤の他人の俺達の為にそこまでしてくれるのかな・・・何だかちょっとだけ気味が悪い気もする」

「え、そうかな？私は特にそんな風には思わないけど」

「何ていうか、俺の勘だけど――――――ユーノ君って、何ていうかまるで誰かを助けなきゃって言う衝動に駆られているって感じなんだよね」

ツナの超直感は見事なまでにユーノの心理を見抜いていた。

ユーノ自身、現在の彼は欲望の空白状態で、助けなければならないという思いだけが埋め合わせをするように膨らんでしまい、周りからすれば非常に危険な状態に陥っている。

今後、彼の子の無茶癖と欲望の無い衝動をどう解決していくが大きな課題だろう。

そんなユーノの話で盛り上がるのもいいが、一先ず二人は訓練場にやってい来ると、なのは達の模擬戦の様子をビルの上でじっと見物

をしていた。

早朝でありながら激しい戦いを繰り広げるなのはと前線メンバー、そこに乱入する恋次た死神組やスクライア商店組など、色彩鮮やかな衝突が繰り返される。

そんな折、ツナはため息をつきながら柔かい表情で呟く。

「ふう～それにしても・・・」

「？何、ツっ君」

「なのはもスバル達も朝から元気がいいね。盛が出るよ全く・・・」

今更だとは思うが、年が近いためにツナと京子はなのは達の事を溜め口で話している。

このツナの言葉を聞くと、京子は思わず微笑みんだ。

「うふふ。何だか爺臭いよ、ツっ君。」

「うん。俺もそう思った♪」

妻の言葉にそう返した後、二人は笑顔で向き合い華やかな雰囲気を醸し出す。

「「ははははははははははははは♪」」

と、朝から全力全開の愛を表現するバッカプルの前に、この女性が声をかけて来た。

「あ、居た居た！」

「「ん？」」

桃色オーラを発していたその声に気づき顔を向けると、やってきたのははやえだった。

「あ、はやてちゃん。」

「俺達に何か用？」

「用があるのはツナくんのほうや。ちょっと、なのはちゃん達から言伝頼まれてな。“フォワードメンバーにツナくんの強さを体験させて欲しい”って言うな。」

「え！？つまり、俺がフォワードのみんなと模擬戦しろってこと！？勘弁してよ・・・俺一応次元漂流者扱いなんでしょ？いいのかよ、そんなことしても・・・！？」

顔を引きつりながら嫌そうな様子で手を前に出すツナだが、はやてはそんなツナに顔を鼻が触れるか否かまで近づき圧していく。

「これは、機動六課の戦力強化には必要なことや。それに、ツナくん達の相手がそれほどまでに強力な敵なら、私らがツナくん達を助けなあかん。頼むよ・・・お願い！」

ツナは身を引きながら京子に顔を向ける。

「・・・う～ん・・・京子ちゃん、どうすればいいと思う？」

「やってあげて、ツっ君。はやてちゃんがこんなになって頼んでいるんだし、スバルちゃん達の為にもなると思うよ。」

京子がそう言ってくると、ツナは渋い顔を浮かべつつ、意を決してその頼みを聞き入れる。

「分かった。いいよ、俺で良ければ模擬戦引き受ける。」

「ホンマか!?いや～～～助かるで!」

はやては安堵の表情を浮かべ胸をなでおろすと、ビルの手すりに手を触れ、顔を前に突出し下にいるなのは達に声をかける。

「なのはちゃん。許可取れたで!直ぐに開始出来そう!?」

「うん。フォワードメンバーはとっくに完全武装だよ。」

下にいたなのは達もそれを聞くと、意気揚々とした様子で闘志をみなぎらせ、こうなる事を予測していつも以上にアップを済ませていた。

ちなみに言うと先ほどの模擬戦こそが、ツナとの戦いを想定した上でのアップ運動だったのだ。

ツナは超直感で何となくこうなる事を予測していたのか、非常に複雑な心境となってしまう。

「（俺・・・何か複雑な気持ちになってきた・・・）」

◇

〈ツナＳｉｄｅ〉

その後、下に降りて行ったツナは模擬戦を終えたスバル達と向き合い、慣れない事に少し緊張した様子で挨拶をする。

「え～と・・・その・・・と、取り合えずよろしく・・・かな？」

「「「「「はい！よろしくお願いします！」」」」」

スバルを始めとする熱意溢れるフォワードメンバーは威勢のいい返事を返し反面、１６歳と言う若さでありながら向上心の欠片も見受けられないナーノはなのはの隣で大あくびをかき、耳の穴をほじくる。

なのははそんな息子の姿と目の前のフォワードメンバーをついつい比較し、戸惑いを見せたりもした。

そして、直後恋次やヴィータからフォワードの五人に激励の言葉が送られる。

「気合入ってるじゃねえか！よーし、てめぇら！！全力ぶちのめして行け！！」

「こんなひ弱そうな奴、一発でぶちのめしてやれ！」

「（うわぁ・・・恋次さんもヴィータも、相変わらずだ・・・！）」

心の中でそう呟くツナだったが、なのははふと京子の隣でツナの手

元にボックス兵器以外の武器が無いことに気づきこう尋ねる。

「ところで、ツナ君はどうやって戦うの？あのライオンさん以外に武器はあるの？」

「ああ。ナッツはあくまでサブウェポンだからね。俺の本当の武器は違うものさ・・・」

そう言ってツナがスーツの下から取り出したのは、十年来使い続けているツナの戦いにおける主力武器、と言っても外見上は「２７」と刺繍が書かれた毛糸のミトンだった。

あまりにシュールな光景に、なのは達は目を点にする。

「け、毛糸の手袋！？」

「はは・・・冗談キツイで、ツナくん・・・そんなもんで戦えるはず無いやろ？」

「うふふ。さて、それはどうでしょうか？」

「「「？」」」

ただ一人、ツナの事を熟知している京子だけは何も知らない一同にそう言って笑みを浮かべ、ツナ自身も最初は笑みを浮かべながら柔かい雰囲気を醸し出していた。

「あはは・・・まぁ、見た目はただのミトンにしか見えなくても不思議じゃないけど・・・」

ツナは徐に取り出したミトンを手に嵌める。

そして、その瞬間ツナの額に浮かび上がる混じり気のない純粋な大空属性のオレンジの炎と、ミトンの形状が変化しの手の甲部分にボンゴレの紋章とその上にXの紋章が入った赤色の特殊なグローブへ変わり果て、先ほどまでとは全く雰囲気も闘気も違うツナの姿に一同は唖然。

「「「「「なっ!?」」」」」

「「「え!?」」」

「こ・・・これは・・・!?」

「わぁお♪」

ナーノに至っては、のちに登場するボンゴレ雲の守護者のような口癖で雰囲気の変わったツナに興味を抱き、ツナは拳を軽く握りしめながら大空のリングからナッツを召喚。

戦闘態勢となると、澄んだオレンジ色の瞳でフォワード陣を見つめ、低い声で言う。

「――――――始めるぞ。」

間近でツナの姿を見ていたはやては心の中で思わずつぶやく。

「(何や・・・この威圧感・・・!?他を恐れさせる絶対的な気迫と、それを象徴するかのような額に浮かぶ緋色の炎・・・そして、あの何所か悲しげに歪められた眉間の皺・・・全てを見透かすよう

な瞳・・・！？）」

はやてがそう感じるように、過保護なフェイトはツナの額に浮かぶ炎を心配して京子に尋ねる。

「京子・・・どうなってるの！？何でツナの額と手袋から炎が・・・！？てか、手袋がグローブになってるんだけど！？」

「ツっ君は、ボンゴレの初代ボスの血を受け継ぐ直系の来孫なの。初代のボス、ボンゴレ？世も額から炎を灯し、グローブを武器にして戦ったと聞いています。」

それを聞くと、恋次達は唖然としながらも各々呟く。

「よもや、地球にこのような体質の人間がいたとはな・・・」

「俺達の世界って言うのは、まだまだ広いってことか・・・」

「それにしても、口調や態度まで一変するとは・・・」

「へへ。リボーン師匠が言ってた通りかな♪」

まぁ、ナーノだけはツナの事はある程度の事をリボーンから聞いていたようだが。

一方で、スバル達は完全装備でありながらも、口調も雰囲気もまるで違う歴戦の猛者の姿に自然と身体が膠着してしまい、口を開けながら立ち尽くしていると、ツナがグローブに炎を灯しながら徐に尋ねる。

「・・・どうした、お前達？俺が怖いか？」

「・・・う・・・！（この気迫・・・まるで本気のユーノ先生と同じかそれ以上・・・！？一瞬でも気を抜けば・・・やられる！）」

ティアナはユーノ並みに尋常じゃない力と気を発するツナの前に、冷静に分析をかけると、若干後ずさり気味な他の四人に話しかける。

「全員・・・戦えそう・・・？」

「うん・・・どうにか・・・」

「僕も」

「私もです！」

「今回の相手は、ユーノ先生や一護さん並に厄介な人になりそうね・・・」

五人は深呼吸をしてから、どうにか平常心を保つと持ち場へと着き、ツナと距離を置く。

ツナもツナで額に炎を灯しながら間隔を広げていく。

そして、双方の準備が整ったところで離れた場所に立つなのは達のサインが発せられる。

「それじゃあ、準備が整ったところで・・・レディー・・・ゴー！」

「全員、絶対回避！ツナさんの正面には回らないこと！」

「「「「おう!!」」」」

合図が出されるや否や、ティアナは先ず全員にそう伝え、各々はツナの先手の前にそれぞれに別れて散らばった。

「さて、奴はどうでる?」

鬼太郎がそう言うと、早速なのは達はじっとツナの様子を窺う。

「・・・・・・――――――」

ツナは攻撃は行わず、五人の出方を待ってその場に立ち尽くしている。

と、その直後にツナの背後からウィングロードの上を駆け抜けるスバルが攻撃を仕掛けに突撃をしてきた。

「おおおお!!!!!」

「(幻覚か・・・)」

ツナは超直感から背後から迫るスバルをティアナの作りだした幻覚だと判断すると、両手のグローブを地面に向け、噴き出る死ぬ気の炎を推進力にして空へと舞い上がる。

なのは達は炎を使って空を滑空するツナの航空ショーに目を奪われる。

「!飛んだ!!」

「グローブの炎を推進力にすることで、空中での滑空戦を可能にしているという訳か。」

ツナは空を飛び回りながら、ビルの内部を窺い、十年間で培った自分の戦闘勘を頼りにスバルの気配を見つけ出し、ビルの中へと突撃。

「そこだ。」

そして、ツナはその瞬間グローブの炎を大きくし、スバル諸共死ぬ気の炎でビルを吹き飛ばす。

「ぐあああああ!!!!!!!!」

スバルは体勢を崩しながらもウィングロードの上に着地する。

が、ツナの攻撃をまともに食らったことでバリアジャケットのあちこちが焦げ付き息を上げる。

各所に散らばっていた残りの四人や隊長陣は容易く幻覚を見破ると同時に、ビルをも吹き飛ばすツナの驚異的な力の前に言葉を失いかけた。

「あのティアナの幻覚を・・・簡単に破った!?」

「それだけじゃなく、スバルの本体を察知してビルをも吹き飛ばすなんて・・・!?」

「どうなっているんだよ、あの男・・・!?」

すると、ツナの戦い方に関して適宜解説を行うのが妻の京子である。

「ツっ君には“超直感”が備わっていますから、幻覚ぐらいどうってことないよ。」

「超直感？」

「ボンゴレの血筋だけが持つ、全てを見透かす力のことです。」

スバルはその後、ウィングロードの上を走りながら何度も何度もツナへと向かって攻撃を仕掛けるも、ツナはそれを受け流す。

別のビルに隠れて戦闘の様子を窺っていた司令塔のティアナは眉間にしわを寄せながらこの状況に深刻さを感じていた。

「（私の幻覚を破り、本体であるスバルを容易く見つけ出した・・・あの人・・・相当戦い慣れしている・・・！）」

と、ここでスバルの相手をしていたツナが徐に呟く。

「こんなものか？」

「ぐっ！！リボルバー・・・・・・！！！！」

スバルはついその言葉に過敏に反応してしまい、向きになるとティアナの言葉を忘れ、安易にツナへと向かっていく。

下でこの様子を見ていた副隊長のヴィータは思わず声を荒げる。

「馬鹿、スバル！真正面から突っ込むんじゃねえ！！！」

しかしスバルの耳とは届かず、右腕のリボルバーナックルから渾身の勢いで魔力弾を放つ。

「シュート！！！！！」

スバルの青白い魔力弾が向けられると、ツナは冷静を欠かずに左手のグローブを前に突出し、死ぬ気の炎の壁を作って魔力弾を防御する。

「！死ぬ気の炎で！？」

思わずその光景に目を疑うスバル。

そして、攻撃を凌いだツナは炎の推進力を活かした超加速でスバルへと接近し、一瞬のうちにスバルの身体に重い拳を叩きこむ。

「ふん！」

「きゃあああああああ！！！！！！」

スバルはウィングロードの上から真っ逆さまに転落。

地面へと叩きつけられ目を回して気を失う。

「「スバル！」」

「「スバルさん！」」

「たくあの子は・・・ギンガさん！作戦変更、ツートップで行きま

すよ！」

「了解！」

ティアナはスバルがやられると、頭を抱えながらも直ぐに状況に合わせて作戦を切り替え、ギンガとのツートップでツナに攻撃を仕掛ける。

「クロスファイアー・・・シュート！！」

ティアナは幻覚をところどころ作りつつ、自慢の精密射撃でビルの陰からツナに攻撃を仕掛けるも、ツナもツナで長年の実戦から積んだ誘導射撃に対する回避能力は群を抜いており、飛んでくる全ての弾丸を宙を舞って避けていく。

「華麗な避け方であるな。」

「超直感とやらで、動きが手に取るように把握できているのでしょうな。」

と、ティアナのクロスファイアーに気をとられていたツナは、背後から近づくもう一人の気配に気づかなかった。

「！」

「はあああああああああ！！！！」

ギンガ・ナカジマ陸曹がスバル同様ウィングロードの上を駆け抜け、勢いよくツナへと向かって接近してきたのだ。

ツナは辛うじてギンガの攻撃が当たる前に炎を逆噴射させて退避するも、ギンガは決して綱を逃がさない。

「逃がさないわ！」

ギンガはウィングロードを伸ばして執拗にツナを狙って行き、それに被せる形でティアナがサイドから大量の魔力誘導弾を飛ばす。

「シュート！！！！」

すると、何時の間にやらツナの周囲にはティアナの放ったオレンジ色の魔力弾で埋め尽くされており、ツナは完全に取り囲まれてしまった。

「どう！この数なら避けきれないでしょう！」

そう思い、ティアナは自信を持って指を鳴らし、一斉に攻撃を仕掛ける。

すると、ツナはグローブの炎を更に燃焼させ、大技を発動。

「・・・フレイムランブル・・・」

すると、グローブに埋め込まれたエンブレムが光だし、ツナの身体は全身煌々と燃え上がる炎の球体で覆われる。

「「！？」」

その炎は飛んでくるティアナの魔力弾を次々と無効化し、一切を灰と化してしまう。

これには恋次達も目を見開き唖然とする。

「お！スゲー！！何だよ、ありゃ・・・！？」

「周囲から飛んでくる攻撃の全てを、大空の炎で灰にする技・・・フレイムランブル。ツっ君の編み出した絶対防御です。」

ティアナの仕掛けた大量の魔力弾はこの技の前に呆気なく敗れ去ると、幻覚との併用で多大な魔力を消費してしまったティアナは些か汗を浮かべてしまう。

エリオはこれに気付くと、キャロに合図を送る。

「マズイ！キャロ、バックスの方お願い！」

「うん！」

エリオはギンガの方へと出向き、キャロは魔力を消費し、疲労を見せるティアナの方へと急ぐ。

「ふん！」

その間、ツナはギンガとタイマンでの勝負に持ちかけており、ギンガは同じ徒手空拳でありながら、死ぬ気の炎と言う未知数の力で向かって来るツナの拳を受けながら険しい表情を浮かべる。

「くっ！！（この打撃・・・一発一発がかなり重い・・・！それなら！）」

ギンガは一旦ツナから退き距離をとると、トライアルカートリッジを取出し、リボルバーナックルに装填。

「トライアルカートリッジ、セットアップ！」

〈Ｔｒｉａｌ〉

ギンガはバリアジャケットをトライアルモードへと変化させ、一切の無駄を排した最低限の軽装と、それによって手に入れた最速の速さでツナに向かっていく。

「！」

ツナは目にも止まらぬ速さに加速し、自身を翻弄するギンガの速さに目を見開き、その様子を窺っていた隊長陣はこの光景をじっと眺める。

「ギンガの奴・・・本気（マジ）だな・・・」

「さてさて、この行動が吉と出るか凶と出るか・・・」

「一気に行くわ」

ギンガは超高速でツナの懐に飛び込むと、ツナの身体に風を纏った拳を叩きこむ。

「ハリケーン・・・シュート！！！！」

「ナッツ。」

「ガオオオオオオ！！！」

ツナは咄嗟に、肩に乗せていた相棒のナッツの咆哮でギンガを退かせようとし、ギンガは咆哮を受ける寸前でウィングロードの上へと飛び移る。

先にリタイアしていたスバルは姐が石化していないかどうかを心配する。

「ギン姉！」

「大丈夫よ！まだまだ！」

ギンガは再び加速し、ツナに眼にも止まらぬ蹴り技を仕掛けていくと、ツナもそれに対応する傍ら眉間にしわを寄せ、ギンガに対抗するための秘策を用意する。

「なら――――――」

ツナはギンガの蹴りを受け流し、一度空へと舞い上がると、腰元にぶら下げていた金色の装飾が施されたボンゴレの意匠が特徴的なボックス兵器を取出し、リングの炎を注入する。

「Ⅰ世ボックス、開匣（かいこう）」

開匣するや否や、ボックス内部から取り出された武器がツナの右腕に装備される。

「！？」

「え！？」

驚き返るギンガ達を余所に、ツナは右腕に装備された独特の装飾で他を戦かせるその武器・・・死ぬ気の炎を纏った手甲の名を告げる。

「“Ｉ世のガントレット（ミテーナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）”」

「何・・・あれ！？」

思わず呆気にとられながらツナの武器に目を奪われていると、ギンガに向かってツナは炎圧を集束させたパンチを仕掛ける。

「『ビックバンアクセル』」

その瞬間、凄まじい炎圧によってギンガは瞬く間に吹き飛ばされる。

「きゃあああああああああああ！！！！！！！！！」

「ギンガさん！」

ギンガもまた、スバル同様に地面に叩きつけられると、目を回して戦闘不能となってしまい、他の者は気絶するギンガを見つつ、頭上に浮かぶ特殊なガントレットを装備したツナに目を向ける。

「どうなってるんだ一体？あのボックスは何だ？」

「あれはＩ世ボックスって言って、ボンゴレＩ世が使った武器をボックス兵器にしたボンゴレが独自に改造したものなんです」

実はこれ、本来のボンゴレボックスの機能を別個に分けて作り上げたものであり、ツナの場合はナッツの進化に伴い初代の武器が喪失された為に、先を見越して独自に研究・開発を進めていたのがこれである。

管理局のエース級魔導師、ストライカークラスも圧倒するツナの戦闘力は単純に言っても超一流の者で、それは正しく彼らの必要とする戦力として実に喉から手が出るほど欲しい逸材である。

同時に、それを極限まで高めるボンゴレの技術力の高さもまた馬鹿には出来なかった。

「へぇ。ボンゴレって本当にすごいんだね。」

「はは。ある意味管理局に欲しいぐらいや」

「くっ！ストラーダ、行くよ！」

〈Ｏｋ．　Ｂｕｒｓｔ　ａｘｅｌ〉

と、ここでやられたギンガに変わって今度はエリオが前に飛び出す。

エリオはセカンドモード時におけるストラーダの最大噴射力を活かして、一気に空中に浮かぶツナへと向かって飛んでいく。

「うおおおおおおお！！！！！！！」

「防衛モード（モードディフェーザー）」

すると、ツナは飛んでくるエリオの攻撃に備えて、右腕に装備して

いたガントレットを今度は左腕に装備する。

その瞬間、今までガントレット上の形態が一瞬のうちに変化し、ストラードの先端を受け止めたのは大空の炎を纏った漆黒のマントだった。

「！ま、マント！？」

京子はこのマントを仰ぎ見ながら、次のように説明する。

「あれは向かって来る敵の攻撃を弾き、調和による大空属性の炎で石化させ動きを封じるⅠ世のマント（マンテッロ・ディ・ボンゴレ・プリーモ）」

ストラーダの先端は徐々に京子が説明した通り、調和による炎で石化が進行し、エリオは思わず声を失うと、ツナが隙だらけのエリオに言ってくる。

「惜しかった。だが、幕引きだ」

ツナは空いている右腕でエリオの肩を掴むと、ボンゴレⅠ世が生み出した伝説の奥義と呼ばれる技を発動する。

「零地点突破・初代（ファースト）エディション」

すると、ツナが掴んだ場所からエリオの身体が徐々に凍り付いて行く。

「「「は！」」」

「「「な!?」」」

「嘘だろ・・・!?エリオの身体が凍り付いていく・・・!?」

エリオは凍り漬けとなっていく自身の身体を見ながら目を見らき絶句していると、京子は少々かわいそうと思いつつ、ツナを信じた様子でこの氷の意味を説明。

「死ぬ気の炎とは、それ自体がエネルギーを持った超圧縮エネルギーのことです。あの技は、その死ぬ気の炎の逆の境地で・・・あらゆる死ぬ気の炎と物質を凍らせることが出来る・・・零地点突破・初代エディション。」

「そ・・・そんな!?」

エリオは動けなくなった体をどうすることも出来ず、石化したストラーダと共に重力に従って地面へと落下していった。

「ぐあああああ!!!!」

エリオもまた、スバルとギンガと同じ道を歩むこととなり、気を失ったエリオの姿がティアナとキャロの目に映って来る。

「エリオ君!!」

「つ、強い・・・!?」

ティアナはキャロと一緒にビルの中からその状況を窺いつつ、ツナを凝視し、主力戦力である三人を容易に圧倒するツナの実力に心底驚愕していた。

ツナは二人の気配に気づいた様子で目を向けて来、言葉を投げかける。

「どうした？何時までも隠れていては、俺にダメージは与えられないぜ。」

「くっ！（確かに、ツナさんの言ってることも一理ある・・・だけど、下手に動けば此方が圧倒的に不利になるのは自明の理。キャロと私だけで・・・あの人に傷を負わすことは出来るだろうか・・・こうなったら、やってみるしかない！）」

ティアナは、この土壇場に於いて自分でも正直成功するか分からないような成功率の低いかけを試みることにした。

「キャロ、やってくれる？」

「はい！頑張ります！」

「よし。じゃあ、これで決めるわよ！」

そう言うと、ティアナは一度キャロから離れてビルの中を移動する。

ツナはティアナの動きを警戒して広く見渡せるよう空中で待機していると、そんなツナの目に映って来たのは驚くべき光景だった。

「！？」

なんと、ビルの中から現れるキャロの補助を受け大量の魔力を消費することが難点なティアナの幻覚が１００人と言う数で出現する。

これには隊長陣も驚きを隠せない。

「ここに来て幻覚・・・？しかもこの数は・・・！？」

「効率悪くねえか？あれって只でさえ、半端じゃない量の魔力消費する筈だろ？」

「キャロの補助魔法が付いているとは言え、ツナくんの前では意味が無いことはスバルの例で分かってるのに・・・」

「いや。ティアナさんにもそれなりの作戦はあると思いますけど」

と、そんな大人たちの意見に口を挟んでくるナーノ。

ナーノの言葉を聞き、一同は顔を見合わせもう一度目の前の光景を見つめていると、１００人の幻覚としてツナの前に現れたティアナは魔力弾を発射する。

しかしツナは幻覚だとわかった上で敢えて攻撃を躱さず一気に向かっていく。

「幻覚を幾ら作り出して、俺には通じない・・・」

ツナはグローブの炎圧を高めると、掌に大きめの火球を作りだしそれを地面に向けて投げつける。

「フレイムインフェルノ」

ツナが放った火球は地面に叩きつけられるや否や、死ぬ気の炎が爆

散し、ティアナの幻覚を悉く炎で包み込んでいく灰と化す。

その一方で、ツナに気付かれないよう射程圏内ギリギリの場所で幻覚を操っていたティアナは苦しそうな表情でキャロに呼びかける。

「（キャロ・・・まだ・・・！？）」

すると、キャロ自身は漸くこの状況を一気に覆すのに必要な魔法の発動の際に必要な詠唱を終え、離れた場所にいるティアナに力を分け与える。

「我が乞うは、灼熱の業火。若き銃士に、貫く戦慄の弾丸を！」

〈Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ　ｓｈｏｏｔ　ｐｏｗｅｒ〉

その瞬間、ティアナに向かって送られるキャロの支援魔法が彼女の愛機に力を与える。

「今です、ティアさん！」

「よっし！クロスミラージュ！」

〈ＩＰ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　ｓｅｔ〉

ティアナはキャロから受けと立った支援魔法と一緒に、持ちうるすべての力を発揮するため、ＩＰカートリッジを取出し形状を変化させると、ツナの前へと現れ銃口を構える。

「！これは・・・！？」

ツナは目の前から現れた本物のティアナが自身に向けてくる強大な魔力エネルギーに本能的な危機感を覚える中、ティアナは銃口に集束されていく特大の魔力弾でツナを撃ち抜こうとし、引き金を引く。

「一撃・・・必中！！！！！フレアバースト・・・シュート！！！！」

隊長陣はこの技を前にし、思わず顔を綻ばせる。

「おお！あいつは確か！？」

「そう。キャロの魔法によって追加されたティアナの火炎砲弾魔法。ニアＳクラス相当の強力な中距離砲撃です。」

隊長陣が注目する中、ティアナは照準を合わせてすべての魔力を注ぎ込んだスターライトに匹敵する最大砲撃をツナに発射。

それを見て、ツナはその砲弾に合わせて手を構え不敵な笑みを浮かべる。

「・・・ふん・・・」

そして、ツナに向けて発射された砲弾が直撃し、空中に広がる爆炎を見て、京子は一瞬夫の敗北を疑った。

「ツっ君・・・！」

「さて、どうなったよ・・・？」

「煙で未だ何も見えない・・・勝者はティアナか・・・それとも・・

・？」

一同も注目する中、煙の真下の方で肩で息をする魔力が枯渇した様子のティアナ。

「はっ！はっ！はっ！はっ！や、やった・・・！！」

勝負が喫すると、向こう側からキャロが飛び出し駆け寄ってきた。

「ティアさん！大丈夫ですか！？」

「ま、まぁね・・・！ちょっと魔力食いすぎただけよ・・・あはは・・・あ・・・！？」

引きつった顔で笑いながら煙の方に目を向けた次の瞬間、二人の目の前に飛び込んできた光景は衝撃的なものだった。

「零地点突破・改」

なんと、あれだけの大威力砲撃を直撃していながらツナは傷一つ付いておらず、その代わりに右手の手の平と左手の手の甲を相手に向けて組み合わせ、四角形を作る独自の構えが特徴のこの技、零地点突破・改を使ってティアナの攻撃を吸収してしまったのだ。

信じられない様子でティアナとキャロは目を疑い、隊長陣も同様のリアクションをとった。

「「う、嘘・・・！？」」

「まさか・・・あのエネルギーを全て吸収したのか！？」

「信じられない！」

「うふ。やっぱり。ツっ君がそう簡単にやられる訳ないと思ってたから♪」

京子はツナが無事であることに安堵すると同時に、一番近くで長年ツナの戦いを見てきた自分だからこそ、その強さを誰よりも理解していることから来る信頼が彼女を裏切らなかった。

そして、ツナは唖然とするティアナとキャロにほくそ笑むと、再びⅠ世のガントレットを装備し、先ほどよりも炎圧を高めて止めを促そうとする。

「おい！！何かするつもりだぞ！！」

ツナは膠着状態の二人目掛けて、最大威力の炎をぶつける。

「バーニングアクセル！」

「「キャあああああああああ！！！！！」」

二人は動けない状態でツナが放ったビックバンアクセルの強化版、バーニングアクセルをその身に受け、二人揃って吹き飛びバリアジャケットを焦がして呆気なく気を失った。

前線メンバー全員がツナに倒されると、なのははここで試合終了を宣言。

「はい、そこまで♪」

「あらら～～～大方予想はついていたけど、こうなっちゃったか」

「ツナくんの完全勝利やな。しかし、京子ちゃんの旦那さんは随分規格外な強さやな」

「うふふ。そんなことないよ。ツっ君はただ、誰よりも覚悟が強いだけだから。」

そう言っていると、ボロボロになった五人と一緒に空中から降りて来、元の状態に戻ったツナが近づいてくる。

シグナムは腕組みをしながら、闘志を燃やしツナに語りかける。

「ふむ。中々面白いものを見せてもらったぞ。沢田、仲間を探すしてやる代わりに、明日辺りに私と一度戦わないか？」

「え!？いや・・・遠慮しときます・・・!!（そう言えば忘れてた・・・この人は雲雀さん並のバトルマニアだったんだ・・・）」

全力でシグナムとの勝負を否定するツナの傍ら、ヴィータは呆れかえり、主であるはやては苦笑いを浮かべる。

「シグナムも相変わらずだな。」

「ほんま。偶には温泉でも行って戦いのこと忘れればええやないの？」

「はぁ・・・しかし、私だけそれでいいのでしょうか？」

「シグナムだって、戦い付けじゃ身体が参りますよ。」

彼女の体を心配し、そう言葉を投げかける自分と同じで戦い好きなフェイトを一瞥し、シグナムは意外そうな顔で言う。

「お前にそんなことを言われるとは、思っていなかったな・・・テスタロッサ。」

「う!?そ、それはちょっと心外ですよ・・・!」

気恥ずかしそうにフェイトが頬を染めると、なのは達も思わず笑みを浮かべる。

これにはフェイトも羞恥心を感じた。

「み、みんなも笑わないでよ!!」

と、その後でツナが満身創痍で疲労困憊な様子のスバル達を見て、恐る恐る尋ねる。

「えっと、みんな・・・大丈夫?」

「「「「「あ・・・はい・・・・・・」」」」」

完全に脱力モードで先ほどの元気が嘘のように疲れた様子の五人に言葉を詰まらせながらツナは両手を合わせる。

「ご、ごめんね!なんか朝からキツイ目に遭わせて」

「いえ。こちらの経験不足と詰めの甘さが招いた結果ですし、気に

してませんよ」

「いい感じに模擬戦が終わったところで、朝ご飯にしようか。ちゃんと身体の泥を落とすんだよ」

フォワード一同は寮へ戻り、シャワーで綺麗に体の泥を落とした後、食堂の方へと出向いて仲良く朝ごはんを戴いていた。

ツナと京子はなのはとヴィヴィオと談笑を交えながら楽しく語り合っていると、不意にその場には居ないユーノとユーノスの事が気にかかり、ツナは口を開く。

「ところで、ユーノ君とユーノス元帥はどうしたのかな？」

「あ、そうだ！ユーノ君のことだ・・・また食事も取らないで作業してるんだ。ヴィヴィオ、一緒に朝食届けてあげようか？」

「うん。分かった！」

二人は一度席を立つと、ユーノとユーノスの食事をお盆に乗せて彼の自室へと朝食を運んでいく。

その後で、ツナは京子と顔を見合わせフェイトとはやてに十年前の記憶にはほとんどと言っていいほど情報が無いユーノの事で尋ねる。

「そう言えば、フェイトちゃん？私達、あまりユーノ君のこと知らないんだけど・・・なのはちゃんとは恋人同士ってだって言ったけど、それ以外は何なの？」

「あ・・・ユーノはなのはの魔法の先生で、魔法や私達と出会う切

っ掛けを齎した全ての始まりって感じかな・・・？六年前までは無限書庫で司書長として働いていたんだけど、今は管理局を辞めて独自の立場から機動六課の特別エグゼクティブアドバイザーとして勤務してるの。」

「それで、嘗てのユーノくんは『翡翠の魔導死神』って呼ばれて、今は『絆の完現術士』言われておってな、一護さんを師としてみっちり鍛え上げられたうちの切り札、と言うか救世主であり、次元世界最強の男や。まぁ、なのはちゃんとは色々紆余曲折はあったものの、今は晴れて恋人同士な訳やし、将来的には結婚も間近に控えておる・・・バッカプル街道爆走中や！」

「僕と言う息子の存在もあるしね♪」

はやてが親指を突き立てそう言った後、話を聞いていたナーノも親指を突き立てる。

「へぇ～そうなんだ。（ユーノ君が一護さんの弟子か・・・・・・何だかちょっと羨ましいな・・・）」

と、心の中で一護の愛弟子であるユーノに羨望感を抱く中、その隣のテーブルで朝食をとっていた恋次が箸を折るか否かのギリギリの力加減で込み上がる怒りを抑えながらツナに話しかけて来る。

「なぁ・・・一ついいか、ツナ。」

「え？何ですか、恋次さん？」

「さっきからこのライオン二匹がいちゃついてムカつくんだが・・・！」

恋次がそう言って指摘したのは、何故かいやがらせと言わんばかりに自分の足元で皿に盛られた餌を二人で仲良く分け合いながら、ワザとらしく頬を擦りつけて相思相愛をアピールするツナと京子のボックスアニマル、ナッツとココだ。

「「ガオ～～～？」」

桃色オーラを全開にする二匹のライオン。

ツナと京子はそんな二匹を見ながら当たり前のようにこう言い返す。

「ああ。ナッツとココは俺と京子ちゃんの性格そのものを反映させたボックス兵器ですからね、お互いに大好きなんですよ。」

「うん！私とツっ君みたいにね！」

そう言うと、二人は手を取り合い笑顔で桃色オーラを全開にする。

「「ね～～～♪」」

ある意味ではなのはとユーノをも上回る最強のバカップルな訳だが、極めて殺傷率の高い甘い雰囲気で男どもが血を吐く中、恋次だけは箸をへし折り怒りだけを込み上がる。

「（畜生・・・何で俺の周りにはこうもバカップルばかりが居るんだ・・・鬱陶しい・・・！！！）」

恋次のバカップルに対する免疫は徐々に強くなっていく・・・まぁどうでもいい話だが。

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

それからしばらく時間がたった後、司令室に集まっていたなのはやツナたちの前に、ついにユーノとユーノスが姿を現すも・・・

「ふぁ～～～」

「・・・・・お早う・・・・・・みんな・・・・・・」

一同はユーノとユーノスの瞼の下に出来た濃い隈を見ると、顔を引きつってしまいツナも思わず声を上げ、なのはに至っては顔を赤くしながら癇癪を起す。

「ど、どうしたのユーノ君!?その隈・・・!?」

「もう!!ユーノ君、昨日の夜も朝食届けた時もあれだけ厳重注意したのに!!!ちゃんと寝なかったんでしょ!!!」

「寝ようとはしたんだよ・・・でも・・・どうしても眠れなくてさ、気が付いたら作業をしたまま朝を迎えていたよ・・・」

「俺もその手伝いをしていた・・・」

「う～～～!!!!二人揃ってもう～～～!そう言うときは無理にでも寝るの!!!意地でも寝ないと駄目なの!!!!」

「「はい・・・・・すみませんでした・・・・・」」

今回に至っては完全になのはの尻に敷かれるユーノとユーノスは素直に頭を下げ、前線メンバーの中で気心知れた者は既に呆れを通り越した段階にまで至っていた。

「全く。てめぇと言いユーノスと言い、お前らの無茶癖は死んでも治りそうにないな・・・」

「ほっといてくださいよ・・・それより、何とか装置が出来たんで今から作動させます。」

「え！本当に作っちゃったわけ！？」

「凄い・・・！ジャンニーニさんみたい」

ツナと京子は自分達ボンゴレ側の天才メカニックであるジャンニーニの事を思い浮かべながら、有言実行の言葉通りに装置を作り上げたユーノに驚きを隠し切れないでいると、ナーノがそんな二人に補足説明を加える。

「こう見えて僕のお父さん、８歳でミッドでトップの大学院を卒業して、その上博士号とかもとっていますから♪」

「な！８歳で大学院・・・！！それってどんだけーーー！！」

「ま・普通の人間ならそう言うリアクションをとるわな・・・」

ツナのリアクションを見、この場にいる誰もがさも当たり前の態度をとるのだが、これがリボーンの世界の常識だと大分違ったりもする。

そして、その後改めてユーノが真剣な表情を浮かべて全員に装置の解説を始める。

「ボンゴレリングの持つ独特の波動をシグナルに変換して、それと同波長のものを感知する仕組みになっています。今この隊舎の中で示されているのが、ツナ君のボンゴレリングが発する波長。これを次元世界レベルでレンジを張り巡らせると・・・」

ユーノはユーノスと共同して作り上げた装置を自分の机の上のアダプターに接続し、起動させると中央のスクリーンに異世界に散らばった六人の守護者が持つボンゴレリングの波導を映し出す。

「ビンゴ！この六つの異世界で確認されたこれらの信号が守護者たち、つまりはツナ君の仲間の居所だよ。」

「本当に・・・！だとしたら、直ぐに助けに行かないと！！」

「クロノくん。」

「ああ。それではこれより、これらのポイントに合わせて六グループに分かれて捜索をしてもらう。一班はスバルとティアナにナーノ。二班はフェイト、エリオとキャロとフリード。三班はギンガとルキアさんと白鳥さん。四班は恋次さんと吉良さん、マリアさん。五班はヴィータとシグナムに金太郎さん。六班は・・・なのはとユーノ、ユーノス元帥が向ってくれ。」

「「「「「「「「「「「「「了解〈だ〉（ああ）（おまかせください）」」」」」」」」」」」」」

と、ここでツナが京子と一緒に自分たちの同行を申し立てる。

「あ、あの！俺達も一緒に良いですか！？」

「しかしな・・・」

「お願いします！みんなの無事な姿をこの眼で確かめたいんです！」

クロノは頭を下げて懇願してくる二人を見てから腕組みをし、これから先の事を考えつつ、二人の気持ちを汲んで返事を返す。

「分かりました。では、ユーノ達と一緒に行ってください。」

「「ありがとうございます！」」

「ほんなら、守護者探し・・・開始や！」

「「「「「「「「「「了解！」」」」」」」」」」

今始まる、守護者探し・・・果たして異世界で待ち受けるものは何なのか？

◇

〈ケリーＳｉｄｅ〉

その頃、ニューヨークに本部を持つスパジオファミリーのボス、ケリー・バーンズは広い自室でバラの花を不敵な表情で眺めていると、不意にある男から通信が入る。

通信画面を開くと、映って来たのはなんとアルハザードを拠点とし、現在管理局から完全に行方を暗ませているあのスカリエッティであった。

双方は互に顔を見合わせると、不敵な笑みを浮かべて話し出す。

『やぁ。久しぶりだね、ケリー君』

「ほんと久しぶりだね。こうして顔を会わせるのは何年振りだろうね・・・ジェイル」

「かれこれ、２０年ちょっとといったところか。いやしかし驚いたよ。まさか出来損ないの君がここまで上り詰めるとは、世の中と言うのは不思議だよ。いや、だからこそ面白いのだが・・・ふふふははは。素晴らしい！素晴らしいよ！」

「相変わらず考えてることは限りなしの欲望の事ばっかりって感じか。流石は血みどろの犯罪組織、時空管理局の最高評議会が生み出した欲望のバケモノ。コードネーム――アンリミテッド・デザイア“無限の欲望”。」

「君も私とは似たようなものだ。異母兄弟と言うべきなのかな――開発コードネーム、マイセルフ・デザイア。“我欲”のケリー」

「はは。そんな古い名前をまだ憶えていたんだ。流石は異形の天才児は違うや。だけど、同じく君も管理局なんていう鎖に支配されている世界をリセットしたいという欲望は抱いてるんだろう？」

『まぁね。その為の手段として、私は第二のオーズであるユーノ・スクライアの力を使うことに決めた！欲望から作られし未知なる力・

コアメダルと無限の力を内包した究極のロストロギア・アンゴルモアを集中させ、彼を器に世界を破壊し再生する!!』

「そっか。噂には聞いたけど、やっぱり凄いんだねそのユーノって。だけど残念だな。生憎君が世界を破壊する前に、僕が全部壊すから。」

そう言うと、ケリーは通信画面のスカリエッティに自分の右手に嵌めている青紫色に輝くアンゴルモアを加工して作られた特別なリングを見せる。

スカリエッティもそれを分かった上で、更にこう語りかける。

『ほう。出来損ないの君がそれほどまでの事を言うようになったか。やはや感服するな――欲望の成長こそ、世界の運命を変える!素晴らしいことだ!新たな君の誕生を祝って早速ケーキを作らねばならぬ!』

「ああ。そうして欲しいよ。出来上がったら是非僕のとこまで送ってくれないかな?甘いものは好物なんだ」

『いいだろう。では、御機嫌よう』

スカリエッティは話を終えると、大変満足した様子で通信を切って来、ケリーは笑みを浮かべながら徐に椅子の上から立ち上がる。

「ふふ。ジェイルはオーズを使おうとしているのか。だけど僕は違う。」

ケリーはミラービルがあちこちに点在する街並みを覗きながら、再

びアンゴルモアリングを掲げて太陽に透かすようにひとり呟く。

「このリングの力で、僕を作りだした管理局・・・そしてこんな世界も滅茶苦茶に壊してやるんだ。僕から全てを奪ったあの忌々しい世界とボンゴレを根絶やしに――――――」

と、そんなケリーの背後から話を伺っていたのは人間態としていつの間にか壁に寄しかかっていたカザリと、彼が連れてきたヘビメタ系の格好をしてホイップキャンディーを手に取る謎の効果来るグリードだった。

カザリは髪をいじりながら、徐にケリーに尋ねる。

「一つ聞いてもいい？なんでそんなに管理局が嫌いな訳？」

「ん」

「君の欲望が管理局を潰したいって言うのは分るけど、それとマフィアの殲滅とどう関係がる訳？イマイチ理解できないな」

「はは。なんだ、話聞いてたんだ。こそこそ泥棒猫みたいに隠れてないで、堂々聞いていればいいのに」

「そう。」

「おまけに、君の友達も一緒みたいだね」

ケリーは後ろを振り返った後、新しくカザリが連れてきた甲殻類グリードへと近づき、親交を深めようと手を差し伸べて来た。

「初めまして。よろしく」

「・・・・・・」

しかし、甲殻類グリードはそれには応じず、ケリーを一瞥してから何事もなかったようにホイップキャンディーを舐めはじめる。

「あらら」

一蹴されてしまったケリーは思わず言葉を漏らす。

「まだ慣れてないんだよ。色んなことに」

「ふ～ん。ま、いいけど。ゆっくりしてきなって」

ケリーはそう言って自分の席へと戻ると、カザリに目を向けこんな事を話しを持ちかけてきた。

「でさ、物は相談なんだけどいいかな？」

「僕らにとって得する事なら聞いてもいいけど」

「それならきっと得する事だ。僕の知人がさ、ユーノ・スクライアって奴に凄く興味関心を抱いていて、君らグリードのコアメダルに関してもよく知ってる」

カザリは一瞬コアメダルと言う単語に耳を疑うが、飽く迄平静を装った態度で臨む。

「へぇ～」

「で、ここからが重要。そのユーノ・スクライアって奴の所にボンゴレの人間が接触したって言う話を聞いてね。ちょっと君に協力してほしいんだ。うちの精鋭の欲望でヤミーを作って欲しいんだ。てっとり早くボンゴレ側の人間を捕まえる手段として。上手くいけば、君の欲しがってるコアメダルもきっと手に入る。僕はボンゴレを捻り潰せる。君はコアメダルを手に入れる。悪くない話とは思わない？」

ケリーの話を聞き、懐疑的な様子で背中を向け一度考えるカザリ。

慎重に考え、この男を自らの目的達成の為に利用できると判断すると、ケリーの方へと振り返り、不敵な笑みを浮かべて来た。

「・・・そうだね。コアメダルはどっちにしろ必要だし」

「決まりだね」

交渉が成立すると、二人は互いに手を取り合い握手を交わす。

今ここに、最も危険な欲望の怪物同士が手を組んだ――――――

◇

〈ユーノチームＳｉｄｅ〉

一方、守護者の捜索のため六か所のポイントを目指して異世界へと捜査に乗り出した２０名のうち、ユーノ達４人と１匹は広大なジャングルが目の前に第６６９無人世界「フリップス」へと到着。

初めて体験する次元転送にツナは多少の酔いを感じる中、京子はまるでそんなそぶりは見せずにケロってしていた。

「さぁ、着いたよ」

「足場が安定しないから、気を付けて二人とも」

「う、うん」

二人は改めて辺りを見渡すと、頭上には猛禽類と思われる鳥がジャングルの上を旋回し、太陽が燦々と照りつける。

「ここって・・・ジャングル？」

「第６６９無人世界『フリップス』。世界のほとんどが海と熱帯雨林に覆われ、天然記念物が住むには絶好の環境となっている。で、熱帯雨林がほとんどなわけだが・・・ハズレの方にはそれこそ何処までも地平線の如く広がる砂漠があるそうだ」

ユーノスがユーノの肩の上でこの世界に関する情報を二人に提供すると、ユーノはなのは達を引き連れ移動を開始する。

「よし。行こう」

「うん」

ツナたちを意を決して、ジャングルの中を歩きはじめる。

万が一の時を備えて、ユーノスは全員に見えないバリアを張って用心し、ユーノとなのはも何時戦闘が起きてもいいように常に自分の

愛機と刀を手に触れていた。

ツナも自分の後ろからくっついて歩く京子を守り抜く為、懐に仕舞い込んだXグローブはいつでも取り出せるようにしていた。

そして、暫くの間広大なジャングルを歩いていると、ユーノが後ろのツナに次のように言葉を投げかける。

「装置を作りながら、ユーノス元帥と話してたんだけどさ・・・ツナ君。端的に言って、ボンゴレ側の守護者の中での即戦力、つまりは一番強い人って誰なのかな?」

「ああ。それなら間違いなく雲雀さんだよ」

「ヒバリ?」

ヒバリと言う言葉に思わず首をかしげるなのは。

ツナはそんななのはやユーノ達にボンゴレ側の最強の実力を有する雲の守護者、雲雀恭弥について語り出す。

「ボンゴレ十代目ファミリー雲の守護者にして、最強の男・・・雲雀恭弥。ボスである俺をも凌駕する戦闘力を持っていて、すっごく好戦的な性格な上に群れるモノが大嫌いなんだ・・・」

「群れるのが嫌い・・・となると、六課は先ずアウトだな」

「えっと・・・だけどそんな人が何で守護者の一人なの?」

引きつった顔でなのはがそう言うと、ツナの代わりに京子が言葉を

返す。

「雲の守護者の立ち位置と言うか、あり方に反省されるからかな？雲雀さんのポジション、雲の守護者の使命は“何ものにも捕われず、我が道を行く浮雲”。独自の立場からファミリーを守ることを体現しているの」

「ふ～～～ん。なかなかに深いね～～～」

「独自の立場と言うと、ある意味ではナーノも同種の人間かもしれないな。」

「確かに、あの子の強さはユーノ君のそれと匹敵してるし、何より周りの事よりも自分本位に物事を考えてる事が多いから。実際、はやてちゃんの命令でも聞く耳持たないことも多いし」

「だけど、リボーンが師匠なんだよね・・・」

ツナが改めてその事を口にすると、聞いていた三人は苦い顔を浮かべる。

「はぁ～。なんでよりによってヒットマンから銃を教わったんだろう・・・」

「ひょっとして未来のユーノが推薦したのではないか？」

「え！ま、まさか・・・！？だとしたら未来の僕は何を考えているんだ・・・」

思わずユーノ達の反応に顔を見合わせ、苦笑する沢田夫妻。

と、ここで今度はツナの方からユーノに質問をぶつける。

「あ、あのさユーノ君。俺もちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「別にいいけど♪答えられる範疇なら答えるよ」

「じゃあ早速・・・ユーノ君って聞いた話、一護さんの弟子・・・なんだよね？」

「そうだよ♪僕に死神としての戦いを教えてくれた恩師であり、僕が唯一越えられない存在とでも言おうか」

「それがどうかしたのか？」

「いや・・・俺的にはちょっと羨ましいかなって・・・」

「羨ましい？」

「ツっ君、十年前のあの事件の時からずっと一護さんには憧れを抱いていたものだから」

「だって、一護さんは俺と違って男っぽくて強くて凛とした覚悟があって、一人で何でも背負い込もうとする人や、自棄になって周りが見えなくなってる人を励ましたり、時として殴りつけて叱ってくれたり・・・ホント。俺にはない真っ直ぐな魂（もの）を持ってるから」

十年前に降りかかった奇跡的な時間を思い出しながら、自棄になり自分を全力で殴りつけ叱ってくれた一護に感謝の念を抱くツナの表

情がどことなく柔かかった。

ツナの独白を聞くと、ユーノもユーノで恩師・一護の事で便乗し言ってくる。

「はは。成程。確かにそうだね――――――僕もその真っ直ぐなもののお陰で、随分と救われてきたものだ。だからこそなんだよね・・・・・一護さんには遠く及ばないって思っちゃうのは。」

「それは単純な強さ云々の問題じゃないって事かな？」

「うん。心だよ――――――あの人の心は、本当に強いんだ。ただ強いわけじゃない・・・・・自分の弱さを素直に認めている。その上で人に救いの手を差し伸べるんだ」

「自分の・・・弱さ・・・」

なのはは自分とは対極を為す“弱さを認める”ということに一瞬の驚きを感じながら、反芻させるようにその言葉を呟くと、ユーノの隣で彼女は自分を嘲笑うかのようにこう言って来た。

「一護さんもユーノ君も、強くなりたいって公言したりはしないけど、その理由がそれにあるって言うなら、納得かな。私には到底たどり着けない境地かも」

「え？どうして」

「だって、私もそうだけど・・・機動六課にいる人のほとんどが自分の弱さを素直に認められなくて、それで反発して強くなりたいって想いばかりが大きくなっちゃって・・・ユーノ君や一護さん、そ

れにその息子が持つ価値観って言うのが不思議で、だけど凄く憧れちゃうの」

「そんなものかな」

「そう言うものだよ。私にとっても、ユーノ君はずっと越えられない背中だから」

「飛んでいけばすぐにこえられるよ、僕の背中なんて♪」

「にゃはは。相変わらず機知が上手いというか、口八丁なんだから♪」

隣で歩く二人は自然と笑みを浮かべながら楽しげな様子で語り合っていると、この二人の後姿を見ていたツナと京子も思わず笑みを浮かべ、心の中でこう呟く。

「（なんだろう・・・なんかこの二人って・・・）」

「（きっと、私達には想像もつかないような強い絆で結ばれてるんだろうな）」

「「ははははは」」

徐々にいいムードとなっていくユーノとなのはだが、ユーノス自身はユーノの肩に乗る傍ら、溜息を吐き未だに恋人止まりとなっている二人の事がさぞかし疑問に思う。

「（これでどうして未だ結婚にまで至らぬのかが不思議だ・・・）」

その後、ユーノ達はジャングルを歩きながら自分達がこれまで経験して来たことを気心知れた仲の様に暴露し合った。

ユーノとなのはは、ツナたちが１４歳と言う若さで経験して来た非常に血生臭いマフィアとの戦いや未来に言って世界の命運をかけて戦ったことなどに関して疑問を感じていた。

「それにしても、俄かには信じられないことが良く続いたものだね」

「うんうん。リング争奪戦とか、未来での戦いとか・・・あはは。なんで気づかなかったのかな私達・・・」

「俺も今にして思えば何でだろう思ってる」

「あの頃って、ツっ君もまだまだボンゴレの事とかには後ろ向きで、絶対マフィアのボスになんかならないぞって言ってたもんね」

「そして十年後・・・図らずも俺はリボーンの言う通りにマフィアのボスになってしまった・・・はぁ～～～俺って不憫」

「でも、そのおかけで京子ちゃんと結婚できたんだし、良いこともあったんじゃない？」

「そうだよ。私はどんな形であれ、ツっ君と出逢えたことを後悔なんてしてないよ。マフィアのボスでも普通のサラリーマンでも、私は今凄く幸せなんだよ」

「京子ちゃん・・・うん。俺もだ！」

二人は手を取り合い、またしても人目をはばからず桃色オーラを全

開にする。

「ツっ君・・・」

「京子ちゃん・・・」

と、この二人の雰囲気に人の事とは言えないほど、同じくバカップルなユーなのコンビも少々照れた様子となり、ユーノが気恥ずかしそうに咳払いをする。

「えっへん！！ちょっと控えて貰えないかな・・・二人とも。」

「にゃはは・・・流石にそれはちょっと・・・」

「人のこと言えた口か、お前達・・・」

ユーノスの痛烈な鋭いツッコミが二人の胸に突き刺さる。

と、そうこうしている内にユーノ達はジャングルを抜け、リングの反応が確認されたポイントへと到着する。

「お！何時の間にやら、ポイント地点に到着だ。」

ジャングルを抜けると、目の前に広がって来るのは見渡す限り砂漠の丘が永遠と連ねる地形で、地平線の彼方まで広大な砂漠が広がっていた。

「何だか・・・鳥取砂丘にいるみたいだ・・・」

「この辺は昔から古い遺跡とか、古代の遺産が数多く出土している

場所でもあるんだ。周りは見ての通り砂だらけ。物好きでもない限り、こんな場所に近付く人はほとんどいないね。」

「反応はこの辺りだと思うけど・・・？」

と、その時ユーノスが眼前に映って来た人影に目を向ける。

「ん！」

「ユーノス元帥、どうしました？」

「見ろ。人影が」

ユーノスの言葉を聞き、ユーノ達が目の前に注目すると、砂嵐の向こうから二人の人影がゆっくりと前進をしてくるのが分かった。

「あ！誰か歩いてきた！！」

「反応も強くなってる・・・間違いない、あの二人だ！」

ユーノはそう言うと、ファイバースコープを取出しツナと共に二人の人影が誰なのかを確認する。

スコープ越しに映って来たのは、銀髪の整った顔で彼方此方を負傷している日系イタリア人の男と、それに付き添うショートカットの黒髪の女性。

彼ら二人こそ、嵐の守護者である獄寺隼人と妻のハルであった。

「うっ・・・！！」

「あ、隼人さん！」

負傷した獄寺の身を案じるハル。

「心配すんじゃねえよ・・・これぐらいどうってことない・・・！」

「何言ってるんですか！！ボロボロじゃないですか！！」

「だあも！！お前はいちいち五月蝿いんだよ！！！・・・あっ痛！」

ツナと京子は人影の正体が判明すると、思わず声を上げる。

「あれは・・・獄寺君だ！！」

「それにハルちゃん！！！良かった。二人とも無事みたい！！」

「それじゃああの二人が！？」

「うん。ボンゴレ嵐の守護者で、俺の右腕の獄寺君。」

「で、隣の女性がその奥さんで私の親友のハルちゃん」

それを聞くと、なのはとユーノは顔を見合わせる。

「ユーノ君」

「よし、直ぐに行こう」

ユーノ達は全速力で彼方の方で疲労困憊の様子でいる獄寺達の元へ

と急ぐ中、まだツナたちの気配にすら気づいていない様子の獄寺はここが辺境の異世界であることも分らず、焦りばかりが募ってしまう。

「くそ！早く、十代目と奥方のところに行かねぇといけねぇのに・・・身体が痛みで思うように動かせねぇ・・・！」

「無理な移動は止めて、一先ず休みましょう。ツナさんも京子ちゃんもきっと無事ですから。」

「仕方ねぇ。一先ず体を休めてからにする・・・ん！？」

「どうしました？」

「おい・・・あれは・・・」

そう言って獄寺がハルと一緒に目の前に視線を向けると、砂嵐の彼方より脳裏に焼き付いている絶対の忠義を誓ったボンゴレを統べる者とその妻、ツナと京子が自分たちの名を口にしながら駆け寄ってきたのだ。

「獄寺君！！」

「ハルちゃん！！」

「十代目・・・奥方！？」

「ハヒ！ツナさんに京子ちゃん！こんなことって・・・！！」

思わず目を疑いたくなる二人であったが、同時に心の底から安堵の

表情を浮かべる。

ツナと京子は息を荒げながら、二人の安否を確かめる。

「大丈夫、二人とも!?」

「十代目。」

「ツナさん・・・京子ちゃんも。無事だったんですね／／／」

「うん。それより獄寺君、怪我の方は?」

「はい・・・どうにか。多少の傷はありますが・・・」

京子は獄寺の怪我の具合を確かめると、胸元からネックレスを取出す。

「待ってて。直ぐに治療してあげるから。」

「お願いしますね、京子ちゃん!」

「ココ。」

京子が呼びかけると、太陽のネックレスから晴ライオンのココが現れる。

「ガオ!」

そうして、ココは険しい顔の獄寺に癒しの咆哮を向け、治療を始める。

治療の最中、ハルが当然のように次の言葉を投げかける。

「ツナさん、一先ずここが何所なのか教えてくれませんか？」

「ああ。そのことなんだけどさ・・・・・地球じゃないって言っても信じてもらえるかな？」

「「！」」

ツナの言葉を聞いた二人は一瞬聞き違いか何かの冗談かと思ったが、長年一緒に時を過ごしてきたツナが自分たちに嘘をつくとは思えない気持ちが強い反面、何処かで疑いを持ってしまう。

「あの十代目・・・仰ってる意味がよく分からないのですが？」

「地球じゃないって・・・そんなおかしな話がある訳ないじゃないですか？」

「いいえ。ここは地球ではありません。」

「え・・・な！？」

「は、ハヒ！」

二人は何処かで聞いたことのあるような声に懐かしさを感じながら声の下方向に振り向くと、目の前に映って来たのは嘗て短いながらも世界を守る戦いに尽力した魔導師で、この小説のヒロインを務める高町なのはだった。

その隣には、主人公のユーノと相棒・ユーノスが肩に乗っている。
獄寺とハルは目を見開きながら半信半疑な様子で尋ねる。
「その顔・・・・・お前確か十年前・・・あの事件で一緒だった・・・！」
「もしかして・・・なのはさん・・・ですか!?」
「はい。時空管理局本局機動六課の高町なのは一等空尉です。事の経緯はツナ君と京子ちゃんから全て聞いています。それと、こちら機動六課特別エグゼクティブアドバイザーのユーノ・スクライアさん。そして、その傍らサポートするユーノス・スレイア元帥。貴方方の捜索に尽力してくれたんです。」
「初めまして。ユーノ・スクライアです。」
「同じく、ユーノス・スレイアだ」
ユーノ達が挨拶を躱すと、獄寺とハルはツナたちの首肯を一瞥してから、自分たちの名前も語り出す。
「ああ・・・十代目の右腕を務めてる嵐の守護者・獄寺隼人だ。こっちのが俺の女房の・・・」
「ハルです。気軽にハルって呼んで下さい。」
「うん。獄寺君と、ハルちゃんね。不束者だけど、よろしく」
「ところで、十代目。一つ聞いても宜しいでしょうか?」

「何？」

「俺達が前にあった高町なのはだとすれば、十年も経ってるのにまるで歳を取った形跡が見受けらないのですが・・・？」

流石が獄寺隼人・非常に観察力が鋭い。

ツナはその事も踏まえてゆっくりと説明をしようと思い立っていた。

「ああ。実はそのことなんだけど・・・」

そう思った矢先、事態は急変を迎えるのがバトル漫画の定番だ。

「ボンゴレ見つけた！！」

「「「「「「「「！」」」」」」」」

甲高い声に思わず耳を立てるツナとユーノ達が頭上を見上げると、そこに現れたのは死ぬ気の炎を纏ったブーツで宙に浮いているスパジオファミリーの制服に身を包んだ大柄な男であった。

その男・ドンベイは左腕に付けられた鉤爪を舐めながらゆっくりと地面へと降りてくる。

「へへ。おまけに嵐の守護者も一緒にいるぜ！今日はついてる！！」

「あいつは・・・！！」

「スパジオファミリーか！！？」

「それにこの気配・・・まさか！」

「え？」

ユーノスが渋い顔でそう言うと、聞いていたなのははそんな言葉を漏らすが、直後目の前に現れたドンベイの様子が急変する。

「ふふふふ・・・おおおお！！！！」

ドンベイは呻り声を上げながら、全身がセルメダルで覆われていき、その姿を彼の欲望を具現化したライオンを素体するクラゲのような独特の触手を持つライオンクラゲヤミーであった。

ユーノ達は勿論、ヤミーの存在を知らないでいるツナたちは大いに驚き絶句する。

「な！なんだ！？」

「ハヒ！ライオンとクラゲのアンビリーバボーな怪物に！！」

「ヤミーだ！」

「ヤミー？」

「１５０年前の眠りから蘇った欲望の怪人、グリードが生み出した怪物。ユーノ君とナーノがいま専門に戦ってるの」

「しかしあのヤミー・・・半分はメズールの？まさか・・・カザリの奴が！」

「と言うことは、スパジオファミリーとグリードが結託してるってことですか！」

世にも恐ろしい事態にまで発展していた今回の事件。

ライオンクラゲヤミーはこれまで確認されたどのヤミーよりも強い気を発しながら、力をまるで誇示するかのように雄叫びを上げる。

「おおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

ユーノ達は雄叫びだけからも、この凄まじい力には思わず身構える。

「く！この状況でこんな奴が出るなんて・・・思った以上に厄介だ。」

「十代目。戦いましょう・・・う！」

「隼人さん！無茶ですよ！！」

「まだ治療中なんだから、動いちゃダメだよ。」

「しかし、十代目一人に戦わせるなんて俺には・・・！」

自分が負傷しているため、満足に戦えないことに悔しさを感じる獄寺。

すると、そんな獄寺やツナたちに向かってこの二人が言って来た。

「その心配はないよ。」

「何？」

ツナたちが前に注目すると、そこには自信に満ちた顔を浮かべるユーノとなのはが立っていた。

「ここは私達に任せて。」

「ツナ君達のことは、僕らがしっかりと守ってあげるよ」

「お前ら・・・」

「ユーノ君・・・なのは・・・大丈夫なの？」

「当然だよ。私とユーノ君のコンビネーションのよさは９歳の頃から健在だもん！」

「それに、ヤミーが出て来た以上、嫌でも僕が相手にならないといけない訳だし、ちょうどいい機会だ。見せてあげる――――――元・翡翠の魔導死神で今は絆の完現術士ユーノ・スクライアの実力を。」

「絆の・・・？」

「完現術士・・・ですか？」

「あとで説明するよ。じゃ、お願いしてもいいかな？」

「「勿論。」」

二人はそう言ってライオンクラゲヤミーの方へと近づいて行くが、

京子は二人の身を案じてこう言ってきた。

「あの、無理だけはしないでね。」

一瞬その言葉に振り返る二人。

そして、直ぐにほくそ笑んでから返事を返す。

「分かってるって、京子ちゃん。さて、なのは。久々のコンビネーションだけど、やれるかい？」

「大丈夫♪ユーノ君となら、どんな状況でも１００パーセントの力で力を発揮できるもん！」

「はは。ありがとう。」

ユーノスはツナたちに結界を施すと、亜空間から結界印を取出しユーノに投擲。

「ユーノ！」

ユーノはそれをキャッチすると、レイジングハートを握りしめたなのはと顔を見合わせてから合図を掛ける。

「それじゃ、行きますかな」

「全力全開で行こう」

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ〉

「レイジングハート、セーットアップ！」

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｍｏｄｅ〉

「変身！」

二人は互に変身を完了させ、バリアジャケットと武器を手に取ると、咆哮を上げて威嚇してくるライオンクラゲヤミーに向かって左腕と右腕をそれぞれ向けて同じ言葉を口にする。

「「さぁ、お前の欲望を数えろ！」」

次元世界最強の夫婦コンビが、いま合成ヤミーと相対する！

教えて、ユーノ先生！

ユ「どうもみなさん、前回と同じく感動した話ランキングの発表と参ります♪」

一「今日は、いよいよ上位の発表だ。一体どんな話がランクインしてるんだろうな？」

ナ「ではでは、早速発表に行きましょう！第２位はなんとなんと・・・四つの話が同時にランクインです！」

な「その作品は、こちらです」

第２位：『友達だから』
『剣と心を賭して築き上げる絆』
『帰ってきたとき、ただいまを言おう』
『また遭う時はきっと笑い合おう』　獲得ポイント１０点

ユ「と言う訳で、四つも一遍に入りました♪」

な「アンゴルモア・銀魂篇はやっぱりいい話がいっぱいだもんね。だけど個人的にすごいのは、さくらさんとカードさんとの絆を描いたこの『友達だから』もいいよね」

ヴィ「では、その素晴らしき話の内容をもう一度振り返ってみましょう！」

友達だから

さ「・・・カードさん達も・・・ウィンディーも・・・ケロちゃんや月さんも・・・形は違えど・・・みんなみ・・・みんな・・・私の大切な・・・・・大切なお友達だよ！！！」

剣と心を賭して築き上げる絆

ユ「たとえか細い蝋燭の火でも・・・集まれば闇も照らせる・・・たとえ火が消されても・・・一本でも火が残っていれば・・・また火を灯せる・・・！お前には・・・・・・僕や銀さん・・・一護さんやなのは達の火は消せないよ・・・・・お前なんぞに、僕達の絆は消せはしない・・・！」

帰ってきたとき、ただいまを言おう

な「（それでもユーノ君は微笑ってくれる。いっぱいの優しの中にほんの少し悲しみを隠したいつもの笑顔で・・・ユーノ君の人生を代ることは出来ないけれど、せめて側で支えたい――――――・・・ずっと側で支えていたい――――――）」

また遭う時はきっと笑い合おう

銀「“次会ったとき、もしもお前が今回みたいに困ってたら、俺達がお前の事助けてやる”。お前が俺達の事を命懸けで助けてくれたように、今度は俺やあいつらがそうしてやる。」

ユ「・・・銀さん・・・ありがとうございます・・・！」

◇

ユ「そして・・・そして！いよいよ待ちに待ったベスト１の発表―！！！！！！」

一「ユーノ・スクライア外伝を読んでくれている読者から圧倒的な指示を受けた作品の発表だが果たして、何がランクインされているのか？」

な「その作品は・・・その作品は・・・これです！」

第１位：『なのはの涙』　獲得ポイント２８，５点

ユ・な「バンザーイ！バンザーイ！堂々の一位だ！！」

フェ「おめでとうなのは。ユーノ。やっぱりこの話が一番だったね」

は「私らも何となくは予想着いてたけど、これに勝る感動話はあらへんな」

ナ「んじゃ、そんなお父さんとお母さんが互いに本当の気持ちを伝えあったあの感動話をダイジェストに振り返ってみましょう！」

突然となのはの前から立ち去ったユーノ。

心の内に秘めていたユーノへの秘かな想いと、変わってしまう関係に恐れを抱いていたなのは。

四年と言う歳月の末、ついに二人は自分の想いを正直に曝け出す。

な「・・・私・・・高町なのはは・・・世界中のどんなに素敵な男

性にプロポーズされようと・・・元無限書庫司書長・・・“ユーノ・スクライア”を除いてそれを受け入れるつもりはありません・・・ユーノ君がこんな私のことどう思うとも構わない・・・別にそれでユーノ君が傷ついたりする訳でもない・・・でも・・・私のこの想いだけはちゃんと伝えたかった!!!もし良かったら・・・返事・・・聞かせてくれる・・・ユーノ君・・・」

ユ「・・・・・そんなもの・・・・・・今更言おうがそうでなかろうが関係ないのに・・・だって・・・僕のなのはへの気持ちは昔から変わってないよ・・・・・・この僕・・・ユーノ・スクライアは・・・この世界に生きている限り・・・どの世界の女性よりも・・・・・・“高町なのは”という女性を・・・この魂に誓っても・・・愛してるってことを・・・」

・・・

ユ「と言う訳で、以上が感動した話ランキングでした♪」

な「たくさんの投票、ありがとうございます!」

一「次に企画してるのは、人気キャラ投票オリジナル版だ!これまでに出てきたオリジナルキャラの中で、一番好きなキャラを投票してくれ!」

ユ「それじゃ、またね♪」

ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活

ハ「はい!今回もみなさんお待ちかねの、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活のコーナーです!」

リ「おい。まだやるつもりか？このコーナー前回で終わったんじゃねぇのか？」

ハ「ハヒ！復活したばかりなのにお終いにしないでくださいよ、リボーンちゃん・・・もう。では、今日のゲストはユーノさんのお師匠さんでツナさんの憧れるこの小説のもう一人の主人公・・・死神代行・黒崎一護さんです！」

ハルが紹介をすると、前回と同じ要領で一護がゴンドラに乗って上から降りてくる。

一護が多少面倒臭そうな表情で口を開く。

一「何でこんな檻の中に入れられて俺がこんなことしないとなんねぇんだよ・・・」

ハ「でんじゃらすなんだから仕方ありません！」

一「理由になってねぇよ。」

リ「ふん。こっちの世界の一護は十年前とあんまし変ってねぇみてぇだな。多少の皺がある程度ってところだな。」

一「お前が噂のリボーンか。確かにユーノの言ってた通り、抜け目なさそうだな。」

ハ「では、そんな一護さんに早速インタビューです！一護さんはお医者さんをお仕事としていますが、それになろうと思った切欠はなんですか？」

一「えっと・・・つっても、俺も何となく医大行ってこれになってたからな・・・切欠って言う切欠もねぇな。」

今更ながら、自分でも目指した理由が曖昧な一護であった。

すると、リボーンがふとこんな風に尋ねる。

リ「そう言や、お前の親も確か医者じゃねぇのか?」

一「ああ。だけど、医者としての威厳なんてまるでねぇよ。ありゃただのウザイ親父だ。」

ハ「そう言えば、一護さんのお父さんはどんな人なんですか?」

一「年がら年中ハツラツとした奴でよ、俺がガキの頃は当たり前のように毎朝とび蹴りで起しに来たんだぜ・・・今にして思えば懐かしいぜ。」

ハ「ハヒ!それはまたデンジャラスなお父さんです!!」

一「しかも、俺達息子娘が呆れるくらいの愛妻家でよ・・・死んだお袋の遺影が超特大サイズで茶の間に飾られてるんだ。ことあるごとにお袋の名前を叫んでは・・・・・・」

と、言おうとした矢先一護の父親、黒崎一心が元気溌剌に割り込んでくる。

一心「真咲!!!!父さんは永遠に愛してるぞ!!!!!」

一・ハ「うあああああ!!!!!!でたあああああ!!!!!!」

突然の出来事に思わず声を翻す一護とハル。

リボーンは愛妻かな一心を見て、思わずツナの父である沢田家光を思い出す。

リ「こいつがおめぇの親父か。まるで家光みたいな奴だな。」

と、言ってる側から作業服に身を包みヘルメットをかぶったツナの父、家光が現れ愛妻の名を叫ぶ。

家「奈々!!!俺もお前を愛してるぞ!!!!!」

ハ「ハヒ!!ツナさんのお父さんまで出てきました!!」

一「おい、親父!!!何でてめぇが此処に居るんだよ!?」

一心「細かいことでにゃあにゃあ言うなよ、一護。偶にはこう言う機会で出て来てもいいだろう!?」

一「どういう機会だよ!!」

と、その時一心の肩を強く握りしめてくる家光。

家「おい・・・ちょっとアンタ・・・さっきから聞いてれば随分と女房の名前をデカデカと口にしやがるな。」

ハ「ハヒ!?」

一「何だ・・・！？」

家「どうだい？どっちが女房をより愛してるか俺と差しで勝負・・・しねぇか？」

家光が不敵な笑みを浮かべて額に死ぬ気の炎を灯すと、それを見た一心も死神化する。

一心「面白れ・・・この黒崎一心に差しで勝負を挑んできたことを後悔させてやる。」

そうして、対極を為す二人が向かいどんな勝負が始まるか思えば・・・

一心「女房を誰よりも愛してるのは俺だ！！！」

家「いいや、俺だ！！！」

一心「俺は真咲にたばこ吸ってるときの手が格好いいって褒められたことがあるんだぞ！！」

家「俺なんかな、奈々に泥まみれになって働いてる姿が素敵♪って褒められたんぞ！！！」

リ「結局ただの口げんかじゃねぇかよ・・・」

呆れかえる三人と、それを偶然にも舞台下から窺っていたツナは慌ててステージに上がる。

綱「な！？と、父さんやめてよ！！！見てるこっちが恥ずかしいか

ら！！！」

一「何しに俺はここへ来たんだよ？」

ハ「え～と・・・何だかぐだぐだになってきたところで、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活はまた次回！シーユー、アッゲインです！！！」

一「まだ続くのかよ、これ・・・」

一心・家「俺だ！！！！！！」

結局収録時間もお構いなく、この二人の愛妻合戦は続けられるのであった。

次回予告

リ「獄寺とハルを見付けたツナたちは、スパジオファミリーと遭遇。おまけにそいつはカザリが仕掛けた憑依型のヤミーだった」

「ツナたちを守るため、ユーノとなのはは共同戦線を張ってヤミーに対抗するが、二つの力を併せ持つ合成系の新ヤミーにどう対応するのか？」

「一方、ナーノ達の方は超能力兵士の力の前に窮地に立たされる中、戦いに乱入してきたのは――――――」

「次回、ユーノ・スクライア外伝・絆・・・『最強の夫婦コンビ』。みんな、死ぬ気で見ろよ」

最強の夫婦コンビ（前書き）

ほんとに申し訳ありません・・・おそよ一カ月ぶりの更新です。

リュミエール篇を書いていて、こっちのアイディアが全然まとまらなかったのもありますし、日常篇を書く方が簡単と言うか・・・と、言い訳ばかり並べても仕方ないので、分量は何時もよりも短いですが、ユーなの夫婦コンビの愛と絆の戦いの記録をご覧下さい。

最強の夫婦コンビ

〈ナーノチームＳｉｄｅ〉

ユーノ達が、突如現れた合成型のヤミー、ライオンクラゲヤミーと戦闘に入ろうとしているその頃、ナーノ・スバル・ティアナの三人には同じく守護者探しの命の元、第２３管理世界「ルヴェラ」へと立ち寄った。

ここはなのはＦｏｒｃｅの世界に於いては、非常に意味を成す世界ではあるが、本作品では直接に関わってくる訳ではないことを補足しておくことにして、三人の視点に目を向けてみよう。

現場へとやってきた三人は、捜索範囲を広げながら、奇妙なほどに静まり返った辺りに散策し、事前に渡された六人の守護者の写真を確認していた。

「サーチャーの反応だと、この辺りのほうだとは思うんだけど・・・目標も移動してるから特定がしにくいですね。」

「せめて、この写真の誰かが現れればズバッと解決できるんだけどな」

「そうね・・・――――あら？」

と、スバルに相槌を打ったとき、ティアナは前方から見えてきたある光景に目を奪われ、スバルとナーノは不思議に思い尋ねる。

「ティア・・・？」

「何かあったんですかい？」

「あれは・・・」

「「え？」」

三人が一様に前を向くと、前方の方から人影と思われるものが千鳥足で歩いてくる。

「何？・・・」

首を傾げるナーノ。

他の二人も同様にその人影に注目していると、まるで三人に助けを求めるかのようにおぼつかない足取りで近づいてくる現地の住民と思われる男性だった。

「Ａ・・・――」

前に手を伸ばして三人に救いの手を求めるその男の様子を見て、三人は顔を見合わせて困惑し、スバルが徐に尋ねる。

「あの、どうかしたんですか？」

「Ｈｅｌｐ　ｍｅ・・・！」

「え！」

「ちょっと、大丈夫ですか!?」

思わずそう言ってしまうナーノ。

と、その瞬間・・・その男の背後から唐突に衝撃波にも似た今まで感じたことのない強い念動力を三人は体感する。

「GA・・・!」

「「「う!」」」

思わず体を身構える三人。

そして、念動力をその体に受けた男は内部組織を破壊され、白目にした状態で倒れ込み、唖然とする三人を余所に静かに息を引き取った。

「うそ・・・!?」

「今の何・・・死んだの・・・!?」

三人は信じられないとばかりに徐に男の元へと近づき、ナーノは脈を確かめ、男が確かに死亡していることに目を見開いた。

「・・・――脈は無いです。ほとんど外傷が無いということはつまり・・・――内部をぐちゃぐちゃにされたということですね」

「そんな・・・だけどどうやって・・・!?」

すると、そう言った直後にティアナが男を殺害した犯人と思われる人物を睨み付けるように凝視する。

「その答えなら、向こう側から来たようね」

「「！」」

スバルとナーノはその言葉を聞くと、ティアナと同じように前方から徐に近づいてくる残酷な殺人鬼の姿を凝視する。

現れたのは、ツナたちボンゴレファミリーの最大の宿敵であり、同時に今回の事件の根幹を担っているマフィア、スパジオファミリーの制服に身を包んだ二人の女性と一人の男であった。

「「「ふふふふふ」」」

不敵な笑みを浮かべながら三人の元へと近づく三人。

スバルは格好から、その人物が以前に襲って来た人間の同種の部類の者だと判断する。

「あの格好っ！私とルキアさんを襲った奴らと一緒！」

「と言うことは、あれがスパジオファミリーね。」

二人が身構えていると、ナーノは既にバリアジャケットを見に纏い、ヤミーとの戦いでは使わない接近戦に特化した紫の陣羽織のような格好のブレイドフォームとなり、ライジングハートを刀剣の形に変化させる。

「デバイス起動させといた方がよさそうですよ。何をしてくるかわかりません」

「そうみたいだね」

「行くわよ」

ナーノの言葉に促され、二人もマッハキャリバーとクロスミラージュを構築させ、防護服を身にまとうと、不敵な笑みを浮かべて一定の距離で立ち尽くすスパジオファミリーの兵士たちにティアナは銃口を向けて言って来た。

「管理局執務官、ティアナ・ランスターよ。ちょっとお尋ねしたいことがあるけど、いいかしら？」

「ふん」

すると、真ん中に佇む比較的色白な女性がティアナの顔を凝視、力んだ眼差しを向ける。

その途端、ティアナの身体は宙に浮くや否や後ろの方へと飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「え・・・！」

「「！」」

一瞬何が起こったのか分らなくなるティアナと、それを間近で見ていたナーノとスバル。

と、その直後に再び念動力が向けられ、今度はスバルが宙に浮かび出した。

「え！うわあああああああ！！」

「スバル！」

スバルは訳も分からないとばかり動揺を見せ、念動力を自在に操るその女性は不敵な笑みを浮かべると、スバルの身体を先端がとがった瓦礫へと投げ飛ばそうとする。

「！危ない！」

「うわあああ！！」

危うしスバル！

だが、ここで間一髪スバルはナーノが施した防壁によって、串刺しは免れる。

「ナーノ！」

ナーノの機転に笑みを浮かべるスバルと、安どした様子でため息を漏らすティアナ。

「ふふ・・・」

その一方で、超常現象を次々と引き起こす三人の兵士は笑みを崩さず余裕さえうかがわせるような態度をとる。

ティアナは体を起こすと、そんな三人を毅然とした表情で睨み付け銃口を向ける。

「問答は無用ってことね・・・――流石はマフィアってとこ。ツナさん達とは大違いなようだけど、局員に手を挙げた以上、逮捕は免れないわよ」

〈Ｂａｒｒｅｌ　ｓｈｏｔ〉

ティアナは銃口にオレンジ色の魔力弾を形成し照準を合わせる。

「悪いけど、ちょっとご同行願おうかしら」

そう言って、管理局魔導師の得意とする非殺傷設定の魔力弾が撃ち出され、三人の元へと飛んで行くが、途端先ほどの女が超能力を引き出し、撃たれた弾丸を寸でのところで止めてしまい、あろうことかそれを撃った本人であるティアナの元へとそっくり返した。

「ぐう・・・あああああああ！」

複数に撃たれた弾丸はティアナの足元へと被弾し、皮肉にも自分の撃った弾の所為で要らぬ損傷を受けることとなった。

「ティア！！」

彼女の身を案ずる相棒のスバル。

ティアナは先ほどの現象を目の当たりにし、険しい表情で口にする。

「う・・・これは・・・超能力兵士！？」

そう口にした後で、ナーノとスバルが傷を負った彼女の元へと駆け寄ってくる。

「ティアナさん！」

「ティア、大丈夫？」

「かすり傷よ。それよりあいつら強いわ。おまけに・・・ムカつくほどの美白だし」

そう言いながら、ティアナは銃弾を跳ね返してきたその女性の肌に嫉妬心を抱きながら冗談交じりにそう口にする。

「ふふ」

その女、超能力兵士のミーナは相変わらずの笑みを浮かべながら、まるでティアナや他の二人を見下した風に見てくる。

スバルは拳を握りしめると、大切なパートナーや無関係な人間を傷つけたミーナや残りの二人、ロイドとシオンに憤りを覚える。

「ティアや一般市民を傷つけるなんて許せない！かかって来なさい！」

「あらそう。じゃあ遠慮なく♪」

そう言うと、ミーナは超常能力の一つである炎を発生させる力、パイロキネシスによって何の変哲もない瓦礫から何処からともなく炎を巻き上げ、それをスバルに対してぶつけて来た。

スバルは目の前から迫ってくる唐突な炎に思わず体を硬直させる。

「う、うそ！！」

「スバル！」

炎の鬣がスバルに激突しようとする中、ナーノはラウンドシールドを展開し、咄嗟にその攻撃からスバルを守り抜いた。

「「ナーノ！」」

「うかつに挑発しないで下さい。こいつら、ただの超能力兵士じゃないですよ。」

「え？」

「どういう事よ？」

「旅の途中でこの手の突然変異とは戦闘になることがあるんですが、これは見たことがある・・・――“クオークス”です。」

「クオークス？」

ナーノがそう言って来ると、クオークスの一人、サイコキネシスに絶対の自信を持つ女性、シオンが不敵な笑みを浮かべて言って来た。

「よく御存じね。そう・・・我らは『クオークス』。超常能力を増幅させる細胞処置を受けた究極の戦士。お前ら管理局の魔導師とは訳が違う・・・」

それを聞くと、スバルとティアナの眉が引き締まり、ナーノが口をそれに応える。

「言ってくれるな。だが、大きすぎる力には必ず弱点が伴うのが世の常だよ。一回の超能力に要する精神エネルギーは、使用者の体感以上の負荷を体に蓄積させる。特に、パイロキネシス、サイコキネシスやサイコメトリーといった強力な念動力はね。その点、僕らは多夫だ。伊達にアンゴルモアや、それ以外の事件に立ち向かって来てる訳じゃない」

「うん！」

「スパジオファミリーだがクオークスだが知らないけど、あまり舐めないでほしいモノね・・・私達魔導師の力を」

三人は武器と携え構えを取ってクオークスと対峙するが、クオークスの三人は余裕の笑みを崩さず、シオンに至っては次のように返した。

「ふふ。舐めていないわ。事実じゃない」

すると、シオンは得意のサイコキネシス能力を発動し、ティアナに向けて強力なサイコパワーをぶつけて来た。

「うわああ！！！！」

自分たちの扱う魔力とはまた異なる超自然的な力に押され、思わず体制を崩してしまうティアナ。

更に今度はクオークス唯一の男であるロイドが、スバルとナーノに向けてパイロキネシスを放つ。

「燃えちまいな」

発動の瞬間、激情を露わにロイドはパイロキネシスを使いこなし、スバルとナーノは足元から発生した大威力のパイロキネシスの炎を浴びてしまう。

「「ぐあああああ！！！」」

守護者探しの為に異世界へと調査にやってきた三人であったが、スパジオファミリーが誇る超強力な戦闘兵士の力を前に、圧倒的に不利な状況に立たされてしまった。

超能力兵士クオークスを前に、ナーノ達はどう立ち向かっていくのか？

◇

〈一護Ｓｉｄｅ〉

異世界での魔導師とマフィアの戦いが激化を増そうとしているその頃、地球の空座町・黒崎医院兼住まいでもある一護の自宅では、此度のマフィア界での抗争から難を逃れ、ボンゴレ十代目ファミリーの連絡役として仰せ仕った毒蠍ビアンキと、フウ太は顔見知りでもある一護と織姫の家に匿ってもらい、現時点における身辺の状況を確認することにした。

織姫は神妙な顔つきのビアンキとフウ太に紅茶を出してやった。

「はい、どうぞ」

「ありがとう、織姫姉」

「急に押しかけちゃって、なんだか悪いわね」

ビアンキが柄にもなく湿っぽいことを言って来ると、それを聞いた一護や織姫、更にはコンの三人はほくそ笑み、一護はソファーに腰かけ返事をする。

「気にすんなよ。厄介ごとにはもう慣れっこなんでな。何しろマフィアの知り合い以前に、死神の連中や魔導師の愛弟子がいるぐらいだからな」

「ユーノ兄達だね。みんな元気にしてる？」

「一応はな。ただ、今回の件があいつらの追っている事件と深くかかわって来るって話なら、心配は尽きネェ」

「そうだね・・・」

フウ太は眉間にしわを寄せながら、織姫が出してくれた紅茶を啜り始め、ビアンキはその間に掌を組み物思いに考える。

と、ここでこの二人に話を持ち出したのは織姫の膝に乗っていたコンだった。

「しかし、ボンゴレが壊滅とはな。一体何があった？」

すると、それを聞かれて二人は渋い顔を浮かべながら意を決し、一護達三人に次のように語り出した。

「あいつは・・・スパジオファミリーは、ある日突然、ボンゴレと世界中に点在するマフィアと言うマフィアを襲って来たんだ。」

この話を聞かされ、一護達の表情が一気に渋くなる。

ビアンキはあまり思い出したくないのか、複雑な思いを胸に更に詳しいことを口にする。

「スパジオファミリーは、リングとボックスの力以外にも、世界中からあらゆる分野の戦闘のエキスパートたちを集めて、傭兵として雇い、主力のボンゴレを始め、裏社会を牛耳るマフィアと言うマフィアを圧倒したわ。」

俄かには信じられない話に一護の眉の皺が一層深くなるが、冷静に話を聞いた上で、相槌を打つ。

「奴らはそれだけの戦力を用意してたって訳だな」

「ええ。私達ボンゴレ十代目直属の門外顧問チームが、十代目ファミリーの救出に向かったが・・・」

「行った時には消息を絶った、か」

「「・・・・・」」

その言葉を一護の口から聞くと、ビアンキとフウ太は意気消沈とした表情を浮かべ、間を置いたのちにフウ太が言ってくる。

「ツナ兄・・・十代目ボス、並びにファミリー共々、行方不明だよ・・・・・」

話しを聞くと、織姫はコンと顔を見合わせてから罰の悪そうな顔で返事をする。

「そうなんだ・・・なんか、辛いこと聞いちゃってごめんね」

「いいのよ。あなた達が気にする事じゃないわ」

ビアンキがそう返してくると、コンは思い切って核心的な事を突いてくる。

「で、奴らの狙いは何なんだ？」

「分からない。ただ、ボンゴレファミリーとそれらすべてのマフィアの全滅を狙っているのは確かなんだ」

「すべてのマフィアの全滅・・・」

途轍もない野望を秘めたスパジオファミリーの目的を聞き、呆然とした様子となる一護達三人。

と、その直後・・・この話を天井裏から聞いていたある人物の声がこの場の雰囲気を一変させる。

「――――そいつは、流石に無茶苦茶だぞ」

「「「！」」」

「な！！」

「この声・・・まさか・・・！」

聞きなれない高い声に驚き返る一護達と、数年ぶりに耳にした懐かしい声に敏感に反応するビアンキとフウ太。

すると、天井裏から降りて来たのは、傍から見ればただの赤ん坊のようにしかみえないが、その実情は未だ知らないところも多い、マフィア界最強の赤ん坊・・・アルコバレーノの一人でもあるスーツ姿にハットをかぶったヒットマン・・・リボーンの姿があった。

「ビアンキ。フウ太。その話、もうちょっと詳しく聞かせろ」

「お、お前は・・・」

一護は初めて窺うこの世界最強のヒットマンの姿に目を奪われ、リボーンは十年来の知人との再会に思わず笑みを浮かべた。

「ふん」

いよいよ、現世の方でも何らかの動きが見られるようになってきたようだ――・・・

◇

〈ユーノSide〉

さて、サブタイトルにもあったように、そろそろ最強の夫婦コンビ

と作者が銘打つユーノ・スクライアと高町なのはの戦いの様子を見ていくことにしよう。

今現在、ユーノとなのははそれぞれ能力を発動させ、グリード・カザリが作りだしたこれまで確認されてきたヤミーの中でもとりわけ特異な存在である合成型ヤミー・・・ライオンとクラゲの能力を併せ持つライオンクラゲヤミーの動きを警戒しながら、戦闘態勢となり、そんな二人をツナたち四人は些か不安げな表情で見守る。

「ユーノス元帥。ツナ君達を守ってくださいね」

「ああ。任せろ」

ユーノからその言葉を貰うと、ユーノスは指を鳴らしてツナたち四人をあらゆる攻撃から守るための結界を展開する。

獄寺とハルは周りに施された結界を見ると、些か驚いた表情を浮かべる。

「これは・・・」

「結界です・・・！」

その間に、自分たちを守るために戦うユーノとなのはの姿をツナと京子は見つめる。

「ユーノ君・・・なのは・・・」

「頑張って・・・」

一方でユーノとなのはは、目の前で咆哮を上げながらこちらの攻撃を待ち望んでるかのように動かないでいるライオンクラゲヤミーの容姿と、考えられる能力を危惧し、ユーノが徐に口にする。

「前にカザリがメズールのコアを取り込んだことは実際この目で見てるが、ヤミーにまでその影響が出たということは、一筋縄じゃいかないか」

「どうするの？ここはやっぱり慎重に行くべきかな」

「そうだね。先ずは僕から行くよ。なのははタイミングを見計らって攻めに来て」

「うん」

ユーノの指示を受け、なのはは一先ずユーノに任せると、ユーノは前に出て両手にカマキリコアの魂を引き出すことで生成される両手剣、ツインブレイドを装備する。

〈Ｔｗｉｎ　Ｂｌａｄｅ〉

「さて、行きますか」

「ウオオオオオ！！！」

ユーノは咆哮を上げて挑発するライオンクラゲヤミーの懐へと飛び込んでいき、両手に持った鋭い剣による斬撃を叩きこむ。

「は！」

ライオンクラゲヤミーはユーノの鋭い斬撃を受けても、二つの力を併せ持ったことにより生じる凄まじいパワーを武器に、まるでものともしない様子でユーノに攻撃を仕掛け、ユーノは四苦八苦しながらも攻め続ける姿勢を貫く。

そんな攻防を凝視する傍ら、ユーノスは何故カザリがケリー・バーンズと言うマフィアと結託をしたのか、その理由を考える。

「（しかしカザリの奴・・・どうしてマフィアなんかと・・・――――）」

「はああ！」

激しい攻防が繰り広げられる中、ユーノはライオンクラゲヤミーの恐るべきパワーを身を以て体験すると、一度距離を取ってから冷静に分析する。

「こいつ、思った以上にパワーがある。合成ヤミーを相手にするのは初めてだけど」

「オオオオオオ！！！」

「倒せない訳じゃない！」

そう言うと、ユーノは再度ライオンクラゲヤミーに猛烈なアタックを仕掛け、両手に持ったツインブレイドの刃で頑丈な体をしたライオンクラゲヤミーの身体を切り裂き、ライオンクラゲヤミーが背を向けた一瞬の隙に首筋に手を当て炎を仕掛ける。

〈Ｔｉｍｅ　ｔｅｌｌｓ　ｆｌａｍｅ〉

すると、その瞬間唐突にライオンクラゲヤミーの首元が爆発し、想像を絶する痛みに耐えきれずライオンクラゲヤミーは声を荒げる。

「ウオオオオ！」

「なんだ!?炎が・・・！」

「あれがユーノ君の力なんだ」

ユーノの力に感心した様子のツナと驚きに満ち溢れる獄寺。

「チェーンバインド！」

そして更にユーノは大気中の魔力素の魂を引き出し、彼の十八番であるチェーンバインドでライオンクラゲヤミーの動きを封じて来た。

複雑に絡みつくライオンクラゲヤミーの全身に巻きついた数本の鎖。

しっかりと鎖を握りしめ、身動きを封じるユーノは待機していたなのはに合図を送る。

「よし。なのは！」

合図を受けたなのはは首を縦に振ると、空の上からライオンクラゲヤミーの足元目掛けて照準を合わせ、物質加速型射撃魔法であり、地面に一撃して作った小石などを、魔法で加速させて対象に猛スピードで激突させるスターダストフォールを発動。

〈Ｓｔａｒｄｕｓｔ　Ｆａｌｌ〉

「スターダストフォール！！」

熟練であるなのはのそれは、通常の魔導師が行うものとは比較にもならないほどの精度を秘めた魔法で、ライオンクラゲヤミーは足元にぶつけられた射撃魔法によって舞い上がる大量の砂埃に隠れるように姿を消し、その間砂嵐のような衝撃が襲う。

その影響は観戦中のツナたちにも及び、結界に守られてるとは言え、十年ぶりにお目にかかったなのはの魔法には大人になった獄寺や京子も素直に驚いてしまう。

「う・・・！あの女・・・やっぱとんでもねぇ魔力してやがる・・・！」

「うん。流石はなのはさんだね」

「でもいい感じですよ、あの二人。息なんかピッタリです！」

ハルがそう指摘をするように、確かにユーノとなのはは誰が見ても息の合ったコンビネーションでライオンクラゲヤミーを相手に対等以上の力で渡り合っている。

砂嵐から出てきたところをユーノが接近、斬撃によるダメージを負わせてから、隙を見てなのはが大威力の砲撃、または誘導弾を駆使した戦法で着実に蓄積ダメージを負わせる。

実に安定した生きのいいコンビネーションを無意識のうちに発揮するこの二人に、ユーノスが次のような解説を行う。

「元々結界魔導師と砲撃魔導師と言う特殊な部類に入る二人は、互いに自分の利点を活かすためにもコンビを組むべきなのだ。大威力砲撃や誘導弾を得意とするなのはと、正確な状況分析能力と相手の動きを封じるのに特化したユーノ。それだけも十分なベストコンビだが、あいつらの場合は幼い頃からの深い絆で結ばれている間柄。これぐらいは当然だろう」

と、雄弁にユーノスがツナの肩でそう口にすると、まるで未知との遭遇を果たしときのような様子の愕然とした獄寺が思わず言ってしまう。

「十代目・・・何故フェレットがこんなにも饒舌なんでしょうか・・・もしや、新種のＵＭＡですか！！」

あ～あ・・・言っちゃったよこの男。

こう見えても獄寺隼人は、整った顔立ちとは裏腹に、ＵＭＡを始めとする未確認生物オタクで、この歳になってもネッシーやＵＦＯの存在を本気で信じているほどだ。

そんなある意味ではおめでたい、または気の毒な彼の言葉を聞いたツナは、複雑な肝を抱えながら返事を返す。

「多分・・・違うと思う」

と、ここでまた獄寺はそんな冗談と思ってしまいそうな本気の一言を口にした後で、改めてユーノ・スクライアの戦い方を冷静に見つめ、特に魔法の発動に関することでなのはとのはっきりとした相違点に着目した。

「（それにしてもあの男・・・――確か、前になのは達から聞いた話じゃ・・・効率よく魔法を使うには演算能力の高いデバイスってもんが必要だって聞いたはずだが、あの男・・・まるでデバイスなんて使ってる形跡がねぇ・・・つう事は、あいつの頭の中で魔法構成から何もかもをやってるっていうのかよ！？）」

鋭い観察眼からすぐさまユーノがデバイスなしでも魔法を自由に扱える結界魔導師、もとい完現術士であることを見抜いた獄寺もさすがだが、そんな獄寺の予想を遥かに上回る演算能力を瞬時に頭の中で処理対応するユーノも当然のことながら流石と言うべきだろう。

「は！」

ユーノはライオンクラゲヤミーの懐に飛び込み二連撃を叩き込み。

「シュート！」

その後でなのはが複数の誘導弾をぶつけ斬撃のダメージに付加を与える。

そして、確実にライオンクラゲヤミーが追い詰められていき、ユーノがツインブレイドを構え直して更なる一撃を右肩部分に叩き込む。

すると、その瞬間にクラゲの形をした右肩の部位から小型のクラゲが分離し始める。

「「！」」

一瞬その光景に目を奪われるユーノとなのは。

なのはは分裂したクラゲを撃ち落とそうと誘導弾をぶつけるが、その都度小型クラゲは分裂を起こして際限なく数を増やしていく。

「なにこれ！」

思わず困惑してしまうなのは。

ユーノは増えたクラゲを仰ぎ見ながら、なのはに注意を呼びかける。

「なのは。そいつに攻撃しちゃだめだ。無数に増え続けるよ」

だが、そうは言ってもクラゲの数は増え続けていき、二人は小型クラゲが放つ電撃を受けながら対応に追われ、何とか状況を打破しようと躍起になっていた。

「この！もう鬱陶しい！」

ハルは状況の急激な変化を目の当たりにし、危機感を覚える。

「ハヒ！二人がピンチです！」

「マズイな。ユーノ、先にそのじめじめした方を片付けろ！」

「はい。成程ね」

ユーノはユーノスからの指示を受けると、一旦クラゲを一掃するために、風を完現術させ猛烈な突風を巻き起こしてクラゲを追い払い、ユーノスの言葉を同じく耳にしていた京子は怪訝そうに尋ねる。

「何をするんです？」

「まぁ見てろ。あれが絆の完現術士ユーノ・スクライアの能力だ。」

ユーノはこれ以上クラゲが増えないうちに、なのはに次のように呼びかける。

「なのは、一先ず上昇。眩しいから目を閉じてて」

「オッケイ！」

なのはは言われた通り、クラゲが浮かんでこない位置まで上昇し、ユーノはメズールの弱点でもある強烈な光を伴う熱波を発することが出来るライオンコアの魂を引き出すスレイヤーフラッシュで対抗。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｆｌａｓｈ〉

ユーノはその瞬間、髪の毛を光らせ猛烈な熱波を伴った金色色に輝く光をライオンクラゲヤミーに仕掛けた。

「はあああああああああああ！！！！！！！！！」

「「きゃあ！」

この上もないほどの光の輝きに、京子やハルは声を上げ、ツナと獄寺は全身からひしひしと伝わる力に自然と身構え目を押さえる。

「うわああ！眩しい！！」

「こいつは効きますね・・・！」

だが、スレイヤーフラッシュをその身に受けておきながら、肝心のライオンクラゲヤミーは二種類の力を併せ持つことから、その攻撃を受け止めて・・・

「ううう・・・ホオオオオオオ！！！！！！」

「うわああ！」

なんと、スレイヤーフラッシュの力をそっくりユーノの方へと返してしまったのだ。

ユーノはダメージを受けて後ろに倒れ込み、目を瞑って光を遠ざけていたなのははその光景に目を疑う。

「え！なんで！？」

「ウオオオオオオオ！！！！！」

ライオンクラゲヤミーが咆哮を上げる中、ユーノスはこの状況を見、舌打ちをする。

「く。ヤミーが二種類いるのと一緒か。」

「いてえ・・・――――くそ。そう簡単に倒させてはくれないか。」

身体を起こし、目の前の敵の力に少々顔を歪めるユーノ。

と、そんなユーノを心配してなのはが空から降りてきた。

「ユーノ君。大丈夫？」

「うん。」

「ウオオオオオオオオオ！！！」

まるで二人を威嚇するかのように、咆哮を上げ続けるライオンクラゲヤミー。

二人はそんな敵の力を改めて確認すると、互いに頷き、なのはは杖を握りしめ、ユーノは腰元の逆刃刀を抜きだし剣を構える。

「・・・少々本気出さないとな」

「だね」

そう言って、なのははこれまで以上に数を増やした誘導弾でライオンクラゲヤミーに攻撃を仕掛けて隙を作ると、その隙を活かすためにユーノが懐に飛び込んでくる。

ライオンクラゲヤミーは飛び込んできたユーノに鋭い爪で攻撃をしようとすると、ユーノは体を捻らせ逆刃刀の刃に魂をコーティングさせた一撃を叩きこむ。

「飛天御剣流、龍巻閃！」

返し技として最も優位性を発揮する龍巻閃をまともに受けたライオンクラゲヤミーはまたしても激痛に伴い声を上げる。

「グオオオ！！」

そして、一撃を喰わせたユーノはその場から飛び上がって距離を置くと、上空からなのはが大威力砲撃で攻撃。

「ストレイト・・・バスターッツ！」

ライオンクラゲヤミーは桜色の砲撃をその身に受けて砂埃と共に舞い上がり地面に叩きつけられる。

ユーノはこの機会を見計らって再度攻めに行き、腰元に差していた二本の刀、洞爺湖木刀を抜くと二本の刀にクワガタコアからの電気エネルギーを蓄積させる。

「御庭番式小太刀二刀流・・・」

「（二刀流！？）」

獄寺の目が見開きその技に注目する中、ユーノは二本の刀を交差させ、ライオンクラゲヤミーの身体に電撃を帯びた刃を叩き込む。

「陰陽交叉（クワガタ付与）！」

ライオンクラゲヤミーは鋭い痛みが全身に走るとその場に倒れた状態で悶絶する。

再びユーノ達の方に形成が傾いてくると、ツナたちの表情が綻び獄寺もこう口にする。

「あのもやし野郎・・・思った以上にやるっすね」

と、獄寺がユーノの容姿からそのような失言をしてしまうと、ユーノの事に関しては非常に地獄耳なのはがこれに反応し、すぐさま咎めて来た。

「ああ！ちょっとそこの銀髪の人！ユーノ君の事“もやし”って言った！！」

なのはが癇癪を起して獄寺に叱咤して来ると、見ていた京子も柔かくではあるが獄寺を叱咤する。

「駄目だよ、獄寺君。ユーノ君、なのはちゃんの恋人さんだよ」

「な・・・！す、すみません奥方・・・！そんな事だとは露知らず！！」

と、獄寺は京子に対して深々と頭を下げるが、ツナはこの対応に関してツッコミを入れる。

「謝るのは京子ちゃんじゃなくて、なのはとユーノ君にじゃないの？」

そんな中、戦闘は未だ続いており、ライオンクラゲヤミーは強力なユーノの電撃が付与された斬撃となのはの砲撃を受け続けながらもしぶとく立ち上がる。

「ウウウウオオオオ！！！」

ライオンクラゲヤミーは咆哮を上げながらカザリ、そしてメズールの力を同時に波導に乗せて二人にぶつけてくると、ユーノとなのははその威力に耐え忍びながら構えを崩さない。

「く・・・たくしぶとい奴だ。」

「一気に片を付けよう。ユーノ君、力を貸してくれる？」

「当然。よし、僕の霊圧を君の砲撃に混ぜよう」

「うん！ありがとう♪」

満面の笑顔でなのはが答えると、ユーノはなのはのレイジングハートに手を乗せ、自身の身体に駆け巡る霊圧を注ぎ込み、ヤミーに決定打を与える力をなのは個人の魔法に付与させる。

そして、力を受け取ったなのははは空に浮かび上がってからライオンクラゲヤミーとの距離を測り、マガジンに組み込まれたカートリッジを三発ロードする。

〈Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ〉

そして、自身の稀少スキルである魔力集束を最大に活かすことで発揮する彼女たらしめた必殺の一撃・・・スターライトに匹敵する威力を秘めた中距離砲撃魔法、エクセリオンバスターを放とうとする。

「受けて見て。私とユーノ君の愛と絆の一撃を・・・・・・エクセリオン・・・！！」

と、なのはがライオンクラゲヤミーの方ばかりに目を向けていた次の瞬間、ツナはそんななのはの頭上に浮かぶ太陽に隠れて奇襲を仕掛けるもう一体の敵の気配を感じとり、警戒を呼び掛ける。

「！上を見て！」

「「え！」」

ユーノとなのはが挙って上を見上げると、その瞬間シャムネコの姿をした同じ猫系のヤミーがメス状の爪で攻撃を仕掛けに来た。

「きゃああ！」

なのははメス状の爪で防護服を斬りつけられると、体勢を崩して地面へと落ちてしまう。

「なのは！」

ユーノは落ちて来たなのはをキャッチして、事なきを得たが、ユーノスを始めツナたちはライオンクラゲヤミーの他に現れたシャムネコヤミーの姿に目を疑った。

「何！？」

「ハヒ！シャムネコのお化けです！！」

「二体目のヤミー？！」

愕然とした表情のツナたち。

一方でユーノは切断攻撃を受けて渋い顔を浮かべるなのはの身を案じて呼びかける。

「なのは！なのは！しっかり！」

ユーノが呼びかけると、目を瞑っていた苦々しい表情のなのはが瞳を開けて答えて来た。

「う・・・ごめんユーノ君・・・油断しちゃった」

「僕の方こそ御免。怪我は？」

「大丈夫だよ。大したことないから」

そう言って、なのはは傷ついた防護服の埃を払ってから今一度起き上がり、ユーノ自身も突如として乱入してきたシャムネコヤミーに険しい顔を浮かべる。

すると、そのシャムネコヤミーとライオンクラゲヤミーが共闘し、二体同時にユーノとなのはに向かって襲い掛かって来た。

思ってもいなかった敵の参戦に苦悶するユーノとなのは。

二人を信じ、戦いが終わるのを待ち続けるツナと京子だが、この状況を前の辺りにするとどうも心が揺れ動き出す。

「ユーノ君！」

「なのはちゃん！」

ユーノはライオンクラゲヤミーとシャムネコヤミーの俊敏な動きを活かした鋭い爪により攻撃を避けながら距離を取り、なのはと肩を並べて状況を再分析。

「どっちもカザリのヤミーだ。合成ヤミーだけでも手一杯なのに、更にもう一体乱入なんて、ホント・・・どこかの腹黒の口癖じゃないけど、世界はこんな筈じゃない事ばっかりだ」

「来るぞ、ユーノ！なのは！」

「ゴオオオオオオ！！！！！！」

ライオンクラゲヤミーは咆哮を上げると、先ほど同様の二種類の波導を二人にぶつけて来、ユーノは結界でその波導を受け止めながら、なのはと役割分担を決める。

「僕が合成を相手にするから、なのははシャムネコを手なずけて！」

「任せて！」

結界を解除し、ユーノはライオンクラゲヤミーの方へと飛び込んでいき、もう一匹のシャムネコヤミーにはなのはが対峙することになる。

レイジングハートの先端をシャムネコヤミーに向けながら、なのははお決まりの台詞を口にする。

「お痛をする悪い子は、頭冷やしてあげるの！」

「「ブルル～～～／／／／／／」」

この台詞を耳にした瞬間、ツナと獄寺は挙って身震いを起こす。

「ハヒ？どうしたんですか」

「いや・・・なんでもない」

「ただ何となく条件反射って言うか・・・」

「？」

京子とハルは二人の夫の反応に、首をかしげてしまうのであった。

まぁ、男どもの反応も分らない訳じゃないが・・・なのはって言うのはこうした意味では敵味方から恐れられても不思議じゃないのかもしれない。

◇

〈ナーノチームＳｉｄｅ〉

夫婦コンビが二体のやみー相手に奮戦するその頃、第２３管理世界「ルヴェラ」において、スパ塩ファミリーに雇われた超能力兵士「クオークス」と激闘を繰り広げるナーノたちはというと・・・

「うりゃあああああああ！！」

スバルは加速と同時にクオークス、ミーナの懐へと飛び込み、彼女の得意とする最古パワーを打ち破るつもりで渾身の一撃を叩き込むが、ミーナはスバルの圧しの力をまるで受け付けず、寸でのところで止めてしまう。

「ふん！」

そして、サイコメトリーを使ってスバルの腹部を強烈な力で握りしめた時と同じような感覚に陥りさせる。

「が・・・ぐううう！！！」

腹部を強く握られた時のような激痛に表情を一変させるスバルは、抵抗などできるわけもなく空中へと浮遊し、ミーナは頃合を見計らってスバルを撃墜させてくる。

「落ちなさい」

ミーナは勢いよくスバルを地面にたたきつける。

「がっ！」

その瞬間、鍛え上げたからだとはいえ体感重量１００キロを超す衝撃にスバルの体もダメージを負ってしまい、吐血を吐く。

その一方で、スバルはパイロキネシスの使い手、ロイドと激突。

「クロスファイア・・・シュート！！」

周囲に浮かび上がった複数の魔力スフィアを一斉に放ち、ロイドを昏倒させようとするティアナ。

ロイドは飛んできた魔力スフィアを前に、不敵な笑みを浮かべると右耳のイヤリングに軽く手を触れ、口にする。

「無駄だ」

激情を露わにした瞬間、パイロキネシスが発生。

ティアナ自慢の技が悉く燃やし尽くされてしまう。

「！」

そして、炎は鬣のような形となると、唖然とするティアナの元へと飛来する。

だがその直後に、ナーノが前に割り込みティアナを庇って身を挺する。

「ライジングハート！」

〈Ｉｔ　ｄｅｆｅｎｄｓ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｄｅａｔｈ　ｗｉｔｈ　ｍｉｇｈｔ　ａｎｄ　ｍａｉｎ．（全力で死守します）〉

そうして、ナーノは飛来してきたパイロキネシスによる炎をすべてその華奢な体で受け止めてる。

「ホオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「何！？」

思わず目を見開いてしまうロイド。

ナーノは、パイロキネシスをまるで寄せ付けないといわんばかりに、膨大な魔力を武器に自身を盾とし、炎を弾き飛ばす。

スバルとティアナは唖然としながらも焼け焦げ一つ残っていないナ

ーノの体を見ながら、平然とした表情で自分たちの安否を気遣ってくる彼を見つめる。

「大丈夫ですかい？」

「え、ええ・・・凄いわね」

「伊達にお父さんたちに扱かれて来たわけじゃないですからね。」

「く・・・生意気な！」

ロイドは歯を食いしばると、シオン・ミーナーと共闘してナーノに一斉にサイコキネシスを仕掛け、ナーノは強烈なサイコパワーに膝をつく。

「う！！！！」

「「ナーノ！」」

「お前一人で何処まで耐えきれるかな？」

と、シオンが不敵な笑みをでそう口にするが、ナーノは一瞬だけ体を低くしていたものの、すぐさま体をあげてき、不敵な笑みを浮かべながら常人には耐えきれないサイコパワーを前にこう言ってくる。

「へへ・・・堪えて見せるさ・・・こんなもん・・・お父さんやリボーン師匠のそれに比べれば・・・くすぐったいものだよ！」

そうして、ナーノはリンカーコアの魔力を爆発的に燃焼させ、三人のサイコパワーをはねつけるほどの膨大な魔力を発する。

「ハアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

「「う！」」

スバルとティアナはなのはのそれを遥かに上回るというよりも、濃度も練度もまるで別格なナーノの魔力に充てられながら険しい顔を浮かべる。

そして、ナーノはクオークス三人のサイコパワーを圧倒するだけの魔力を放ち、無事にこの危機を回避し、ロイドは思わず目を疑った。

「バカな！あれだけのサイコキネシスを受けながら・・・！？」

「うへ～～～マジで・・・」

「よくもまぁここまで・・・」

スバル、ティアナの二人もついそんな言葉が飛び交う中、ナーノは再び刀を構えると、軽い調子で言ってくる。

「竜神の寵児・・・グルマディア団長、ナーノ・T・スクライア。全力で生きています♪」

「ならば、これならどうだ！」

すると、ミーナはサイコキネシスによって周囲に散らばっていたいくつもの瓦礫や廃車、廃屋などを浮かび上がらせ、一遍にナーノたちのほうへと投げつけてくる。

「「あ！」」

避ける暇もなく容赦なく仕掛けられる常軌を逸した離れ業にスバルとティアナは目を疑う中、ナーノは鋭い視線を向けながら刀を鞘に納め、父譲りの超高速の抜刀術を披露。

「羽衣！」

刹那の如くその一瞬、飛んできた廃屋・廃車、瓦礫の山はものの見事に切り裂かれ、三人は事なきを得る。

開いた口がふさがらないクオークスのシオンやロイド。

反撃の隙を窺ったスバルとティアナはこの機を逃がしまいと、顔を見わせタイミングを計って魔力弾を拳と銃口に圧縮。

「リボルバー・・・！」

「バリアブル・・・！」

クオークスの三人に狙いを定め、二人は一撃を放つ。

「「シューーート！」」

二人が攻撃を放った瞬間、あたり一面土煙で覆われ、それが晴れた時にはクオークスの三人は姿を眩ませていた。

「あれ？何処行ったの？！」

と、スバルが疑問に思った直後。

「ここだ」

三人の頭上からクオークス、ロイドの声が聞こえき、ミーナとシオンの二人も不敵な笑みを浮かべて空中に立ち止まっていた。

「そ、空飛ぶのってあり！？」

「私達が飛べないのを知ってて！」

「僕飛べますけど」

と、ナーノが相槌を打つと、ティアナは癇癪を起こす。

「ウッサイわね！“天才児”は黙ってなさい！」

これがいけなかった。

ナーノはこの言葉を一番嫌悪する。

そのため、ナーノの導火線に火がつくや否や、ティアナの顔面に怒りのナーノの右ストレートが直撃！

「人の事天才児って言うな！！！」

「ぐおおお！」

「なんで！？どうしてそうなるの！？」

思わずツッコんでしまう涙目のスバル。

そんな事をしている隙に、ミーナがサイコメトリーで攻撃を行う。

「ふふふ・・・はっ！」

三人はサイコメトリーをその身に受け、さらにはその後に飛んできたパイロキネシスの直撃を受けると、大ダメージを負って体を捻らせ吹き飛んでしまう。

「「「ぐあああああ！」」」

まったく何をしているのだお前たちは！

と、思わずツッコみを入れたくなる作者ではあるが、この戦闘の様子をモニターで楽しそうに観覧している男がいた。

それこそ、クオークスを傭兵として雇い、マフィア狩りを推し進める謎多き欲望の遺児・マイセルフデザイアこと、スパジオファミリーボス・・・ケリー・バーンズであった。

「ははは。見て見なよ。流石はクオークスってとこだね」

子供のように無邪気な笑みで戦いの様子を観覧するケリーと、その彼と結託しユーノからコアメダルを奪還しようと画策するグリード、カザリ。

「魔導師相手に、ここまでやるなんて大したもんだ♪」

「そうだね。だけどどうやって集めてきたの？ここまでの兵をさ」

「うちのね、スポンサーが優秀なんだよ。クオークスも元々はそのスポンサーからの勧めなんだ。尤も、彼らにとってクオークスは投資対象から外れた骨董品らしいけど、骨董品として放置するには、勿体ない気がしてね」

と、カザリや昼寝を決め込む甲殻類グリードの子供に向けてそう言うと、直後別のモニター画面に部下からの知らせが届く。

『ケリー様。財団Xの方がお見えになりました』

「あ・そう。わかった。直ぐに行くからお茶請けのお菓子と美味しい紅茶を用意しといてくれるかな♪」

『畏まりました』

部下との通信を終えると、ケリーはカザリにも会合に出席するように進めてくる。

「君も会って見る？うちのスポンサー・・・多分興味がわくんじゃないかな」

ケリーは何かと意味深な言葉を多く残して、自室から出て行った。

カザリは一度グリード態の姿に戻ると、不敵な笑みを浮かべて鬣をかく。

「・・・・・・――――ふふ」

スパジオファミリーを陰で支える謎のスポンサー・・・それは、かつてユーノたちが非公式の場で対面した因縁の敵であることなど、

このとき誰も予想していなかった――――――

◇

〈ユーノＳｉｄｅ〉

一方、二体のヤミーを相手に奮闘するユーノとなのはの戦況はどうなっているのかと言えば、徐々に体力と魔力を削られていき二人の背後には配色の雰囲気が漂い始めていた。

〈Ｓｌａｙｅｒ　ｇａｕｎｔｌｅｔ〉

ユーノはライオンクラゲやミーが全身から放つ二種類の波動に耐えるため、咄嗟にゴリラコアの魂から作り出すゴリバゴーンで受け止める。

「くううう！！！！」

しかし、波動の強さは戦う中で徐々に強まっていき、ユーノはその波動の余波を顔に受けると、頬が切れて出血を起こす。

なのはもなのはでシャムネコやミーの俊敏な動きに翻弄され、自慢の誘導弾が悉く躱されることに焦燥を滲み出している。

懸命に闘う二人を目の当たりにしながら、ユーノスとツナたち四人は危惧の念を抱き始める。

「この力・・・並み一通りではないな・・・！」

「結界の中にいるのに、肌でひしひしと感じる・・・！」

「大丈夫なんすかね？」

傷口を押さえながら獄寺がそう口にすると、ツナは二人のことを信頼し返事を返す。

「俺は、二人を信じてる――――・・・絶対に大丈夫のはずだよ」

ツナはユーノ本人とは知り合ってまだ日は浅いが、なのはたちと同様に彼のことを心から信じることを決め込み、京子もまた手を握り締め只管に二人の勝利を願う。

「うおおおおおお！」

と、ここでユーノが波動を受けきることに成功すると、逆刃刀を手に取ると、神速を発揮させてライオンクラゲやミーの懐に飛び込み。

「九頭龍閃！」

九つの斬撃全てが一撃必殺の威力を秘めた九頭龍閃を的確にヒットさせる。

「グオオオオオオオ！」

ライオンクラゲヤミーはこの必殺の一撃を食らうと、セルメダルを大量に飛散させながら後ろへと倒れこむ。

「シールドユニット分散！」

〈Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　Ｍａｓｔｅｒ〉

「対象ユニット分割。チャフ散布！」

その間、なのははエクストリームカノンを発動させ、独立したレイジングハートとの連携によってシャムネコヤミーに攻撃を仕掛け、俊敏なヤミーの動きを捕えることに成功すると、槍のように尖った先端を向けて砲撃を放つ。

「エクサランスカノン　フルバースト！」

大威力のエクサランスカノンをその身に受けたシャムネコヤミーは、ユーノのようにセルメダルを吹き出すわけではないが、大きなダメージを受けるとライオンクラゲヤミーの元まで飛ばされる。

ユーノとなのはは肩を並べると、気を緩めず二体の動きを警戒する。

すると、ライオンクラゲヤミーの様子が急変する。

「ウオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！」

「なんだ？」

「また何かやるつもりか・・・・・・！？」

「グオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！」

ツナたちが眉間にしわを寄せて動きに注目する中、ライオンクラゲヤミーは力を制御することができなくなると、その場に倒れていたシャムネコヤミーを、なんと寄生主ごと食らい始めたではないか。

「「え！」」

「これって・・・そんな！」

ユーノたちはその生々しく、むごすぎる光景に目を疑い、京子とハルに至っては目をそむけてしまう。

そして、シャムネコヤミーを食らった直後、ライオンクラゲヤミーが急速に巨大化をはじめ、姿形もより動物に近いものから怪物と言っても過言ではない姿へと変貌する。

巨大化したライオンクラゲヤミーの暴走体を仰ぎ見、ユーノとなのはは愕然とする。

「おいおい・・・聞いてないぞ、ここまで欲望が膨れ上がるなんて！？」

「ユーノ君！どうしよう！」

と、動揺を露わにした瞬間、暴走状態のライオンクラゲヤミーが獰猛な爪先を突き立て二人に攻撃を仕掛けにきた。

「危ないっ！」

思わず声を上げて叫ぶツナ。

〈〈Ｗｉｄｅ　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉〉

二人は同時に広域防御を張って攻撃を凌ごうとするが、その凄まじさは二人の想像を絶するほどのものだった。

「ぐう・・・！」

「なんなの・・・この力・・・！」

険しい表情を浮かべながら必死に耐える二人。

と、徐々に防御に亀裂が入ってくるの窺うと、ツナはいてもたってもいられず決壊の中から出ようとする。

「マズイ、二人が！」

イクスグローブを取り出すツナだが、ユーノスは彼の行動を止める。

「今外に出るのは危険だ。ここにいるんだ」

「でも！見す見す目の前で！」

ツナの言葉を聞き、ユーノスは四人に対して苦々しい顔で次のように答える。

「ヤミーとは、普通の人間の力を受け付けないのだ。ユーノの完現術とナーノの魔法以外の全ての攻撃が、奴らの決定打にならない・・・たとえなのはの魔法でもな」

「そんな・・・」

「マジかよ・・・！」

その言葉を耳にし、もはや言葉さえ失う四人。

と、ここで二人の防御が破られてしまい、二人は空に上がって緊急回避。

ユーノは逆刃刀を振りかざすと、刀身に例圧を凝縮し始め――――――

「く・・・月牙――――――――!!天衝っ――――――!!」

師匠譲りの魂の斬撃・月牙天衝を暴走体へと放ち、これを見たツナたちは目を疑ってしまった。

「月牙天衝!?」

「あれって・・・一護さんの!」

暴走体はその一撃を受けると、咆哮をあげて痛みに悶える。

なのははこの隙に、頑丈にバインドと縛道の二つの力で動きを封じにかかる。

「チェーンバインドッ!」

先ずは、なのはがユーノ直伝のバインド・チェーンバインドで悶える暴走体の体を縛り付け、次にユーノが完現術による縛道を使用する。

「縛道の六十三、鎖条鎖縛!」

チェーンバインドに酷似した鎖状の物体が更に体に巻きつき、その

直後にユーノは念入りに詠唱破棄で別の鬼道を発動する。

「縛道の七十五、五柱鉄貫！」

この時、ユーノ自身気づいているのかは定かではないが、完現術による鬼道がこの世界にあるありとあらゆる魂を使役することによって成り立つものだということは承知の事だが、中には現実の完現術による魂の使役では発動できないものも数多い。

しかしユーノは五柱鉄貫を使用する際、身体の奥底に眠っていた限りなく小さなユーノの死神の力と、一護の完現術コンボによる力が同時に働きかけることによってこの技を可能とした。

長々と回りくどい説明が長かったが、とどのつまり五柱鉄貫の発動に成功すると、暴走態の頭上から巨大な五本の柱が落下し、暴走態はその下敷きとなった。

これを見て、獄寺は昔の記憶を辿っていき、嘗てツナが同じ技に掛けられたことを思い出す。

「あれは・・・十代目が虚化したときに銀髪の死神の餓鬼が使った・・・」

「（？虚化・・・だと！？）」

ユーノスはこの時の獄寺の言葉を聞き洩らさなかった。

ツナの虚化についての詳しい中身だが、これは重要大事の処女作「次元の破壊者」、または亀鳥虎龍さんの同タイトルの小説の中身をご覧いただきたい。

それで話を元に戻すが、五柱鉄貫を受けたライオンクラゲヤミーの暴走態はまるで動く気配すら見せず、ユーノとなのはは頭上から窺いながら額に汗を浮かばせる。

「沈んじゃった？」

「どうだろう。気休め程度にしかならいな。今のうちに一気に叩こう」

「よし。それじゃ・・・行くよ！」

〈Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

なのはは止めを差す為、最大最強の必殺技、スターライトブレイカーを放つため、残っている魔力と大気中の魔力素を集束し始める。

「全力・・・全開！！」

同じ様にユーノも残りの霊力全てと、待機中の霊子を完現術させ、掌に巨大な砲撃を溜め始める。

「破道の八十八・・・！！」

これで何もかも決着がつくと思われたが、その直後ツナが五柱鉄貫に亀裂が生じ始めたことに勘付き、二人に警戒を促す。

「！二人とも、避けて！！」

と、そう叫んだ次の瞬間、五柱鉄貫と頑丈なのはとユーノの捕縛

術を打ち破ったライオンクラゲヤミーの暴走態が技を発動しようとしている二人に向かって強力な火炎弾を撃ってきた。

「「ぐあああああああ！」」

二人は完全な無防備状態と化していた為、咄嗟に防御を施すことが出来ず、火炎弾の直撃を受けて各々遠くへと飛ばされる。

「ユーノ君！なのはちゃん！！」

「しまった・・・！」

ユーノスは一度結界を解くと、ツナたちを引き連れ二人が飛んで行った場所へ駆け足で近づいて行った。

すると、ツナたちが目撃したのは巨大なクレーターのような陥没に叩きつけられた様子の満身創痍ななのはで、ユーノの姿は見受けられなかった。

なのはは深手を負ったことで、身体を起き上がらせることも非常に困難な状況であり、そのなのはに狙いを定めたライオンクラゲヤミーの暴走態がゆっくりと近づいて来た。

「あ！」

「ハヒ！危ないです！！」

「なのはちゃん／／／／／／」

ツナはすぐさまハイパー化をして飛んで行こうとしたが、暴走態が

その瞬間に二種類の波導を放って彼らの妨害をしてきたため、なのはは正に絶体絶命の危機に瀕してしまう。

なのはは思うように動けない体で何とか杖だけを構えて暴走態に立ち向かおうとするが、同時に恐怖で手が震えていることも確か。

暴走態が口を広げてなのはの身体を捕食しようと近づいてくると、なのはは目を瞑り、心の中でユーノに助けを求める。

「（ユーノ君・・・！）」

〈Ｂｌａｃｋ　ｍｏｏｎ　ｒｉｓｉｎｇ〉

と、その願い通じたか・・・彼方より赤みを帯びた漆黒の霊圧が塔の様に舞い上がる。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「！」

「「「「な・・・！」」」」

その一瞬の出来事に誰もが目を奪われる中、なのはは捕食される寸前に何者かに救出され、恐る恐る身を縮ませた状態で目を開ける。

「う・・・・・は！」

目を開けた瞬間、なのはとツナたちの目に飛び込んできたのは、黒崎一護の完現術コンボを発動させた、背中に斬月、死覇装と一護の髪の様に毛質が変化したユーノ・スクライアの姿だった。

なのはは間一髪、ユーノによって助けられ、状態としてはお姫様抱っこ状態であった。

「ユーノ・・・君・・・」

ユーノは眉間にしわを寄せながらも、なのはの無事な姿を見るなり、顔を綻ばせる。

そして何より、ユーノの姿を目の当たりにしたツナや京子たちは十年前の記憶に蘇ってくる一護の姿を思い浮かべながら現実の光景を直視する。

「あれって・・・ユーノ君?」

「だけど、あの姿・・・あの格好は・・・一護さん?!」

嘗てないほどの不可解な現象に戸惑いを隠し切れないツナたちだが、ユーノスは冷静にこのように口にする。

「――――完現術コンボを使ったか」

「何?」

「――――完現術コンボ。物質に宿る元々の所有者の魂を引き出し、己の身体に纏わせ絶大な力を発揮する、他の完現術者にはないユーノだけが持つ固有スキル。あの姿は、師匠である黒崎一護の魂を纏った完現術コンボ・・・『黯月の死神』」

「ブラックムーン・・・ライジング・・・一護さんの・・・完現術

コンボ！？」

ツナは思わずその言葉を復唱しながら、今一度一護の姿と瓜二つな今のユーノの姿を凝視する。

と、そのユーノの方はと言うと、立ち上がってなのはを安全な場所へと下した後、背中の斬月を取出し暴走態の方へと眼差しを向ける。

「ユーノ君・・・あの・・・」

困惑しながらも声をかけるなのは。

ユーノは背中越しに低い声で言って来た。

「下がってろ」

それを聞くと、なのははそう言う雰囲気であることを悟って言うことを聞き入れる。

「はい・・・」

なのはが安全な場所まで下がると、暴走態と向かい合っていたユーノは手にした斬月を前に出して構えると、霊圧を急激に上昇させ？

――・・・

「卍解！！」

その単語を口にした瞬間、先ほどよりも強い漆黒の霊圧の嵐がユーノの全身を包み込み、なのはとツナたちはその余波に当てられる。

「卍解って・・・まさか！」

信じられない様子で、ツナが徐に霊圧の先のユーノを凝視すると、ユーノの持つ斬月は漆黒の刀身を持つ日本刀の姿へと変わり、死覇装もまた微妙な変化が加えられていた。

「俺もこの姿を見るのは初めてだが・・・ユーノ・・・」

ユーノスは、完現術コンボの状態で卍解を使ったユーノを初めて見る中、些かの不安を感じてしまう。

と、その時ユーノが漆黒の刀身から赤みを帯びた霊圧色の月牙天衝を放つ。

「ふん！」

暴走態はその攻撃を受けると、激痛に悶え、咆哮を上げる。

「ほおおおおおおおおおおお！！！！！」

ユーノは暴走態の懐に超高速で接近すると、巨体の為に小回りが利かない暴走態の全身を天鎖斬月の刃で切りつける。

と、何度も何度も体を切り裂かれる暴走態だが、ここで火がついたのか、強引にユーノと距離を置くと、口腔内から先ほどの火炎弾とは比較にもならないほどの高エネルギーを集め始める。

「十代目・・・！奴の口に！？」

ツナ達は暴走態の中に集まる巨大なエネルギーに目を向け、なのは

は危機感を覚える。

「集束型のエネルギーが・・・ユーノ君っ！離れて！！」

だが、そう言った直後・・・暴走態は集めたエネルギーを全て一直線上のユーノの元へと放つのであった。

「グオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

砲撃を受けたユーノの周りは巨大なクレーターのような陥没が出来、足元の砂埃は多量に舞い上がり、ツナたちの頭上から降り注ぐ。

そして、視界が晴れる以前にツナ達はユーノの明暗を決めつけてしまう。

「そ・・・そんな・・・」

「ユーノ君が・・・・・・・」

「うそだろ・・・・・・」

なのははユーノに攻撃が直撃するのをその目で確かめると、自然と涙が零れ落ち、多量の砂が辺りを覆っている中、悲しみに打ちひしがれる。

「ユーノ・・・君・・・ユーノ君・・・／／／ユーノ君っ！！！！！！！イヤアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

だが、このなのはの泣き叫ぶ声を訊いたユーノ・スクライアが徐に返事をする。

「泣くのはまだ早いよ、なのは」

「！」

一瞬耳を疑うなのはだったが、視界が晴れちゃ直後に目の前に映って来たのは・・・

「あ！」

「あれは！！」

全員の目に映って来たのは、暴走態の攻撃を凌ぎ切り、その為に一護の力の一端である虚化を発動し、虚の仮面を顔に纏ったユーノの姿がそこにはあった。

「虚の・・・仮面！？」

「そうか・・・黒崎の魂を完現術させるということは・・・奴の持っている死神としての力を自分も同じように使えるということだ。」

「そっか。だからユーノ君は敢えて！」

一同が納得した様子となる中、虚化した状態のユーノはそのまま後ろへと振り返り、なのはの顔をじっと見る。

「・・・・・／／／」

虚の仮面を纏っているユーノに一瞬だけ、恐怖を覚えてしまうなのは。

だが、それでもユーノは何時もの優しい口調で次のように言ってくる。

「・・・ごめんね。怖いでしょ。この姿で安心しろって言うのも難しいだろうけど・・・・・・でも言わせてくれるかい。安心して。すぐに、終わらせるから」

このユーノの力強い言葉を耳に入れると、なのはは自然と涙を乾かし、彼を信じて笑顔で答える。

「・・・うん／／／」

ユーノはその笑顔を見届けると、目の前に振り返って暴走態に目を向ける。

「・・・行くぜ」

そう口にすると、ユーノの首元に装甲らしきものが現れ、それまで至って普通の刀の形をしていた天鎖斬月の刃もより洗練された鋭いモノへと変化する。

そして、虚化を解いたユーノはその変化した刀の一振りを暴走態へと向ける。

次の瞬間、辺り一面が衝撃によって多量の砂埃が勢いよく舞い上がる。

「！！」

「きゃあああ！」

「「「「うわあああああ！！！」」」」

その想像を絶する凄まじさに身をすくめるなのは、そしてツナ達。

暴走態はその一撃を喰らうと、全身から溢れるばかりのセルメダルを放出し、最早立っていることもままならない状態へと追いつめられる。

獄寺はその状況を確認した直後、ユーノに呼びかける。

「何つー威力だ・・・月牙天衝一つでこれだけかよ・・・だが威力は上がったが、肝心の敵はまだ生きてやがる！こんなもんじゃ奴は殺せねーぞ！」

と、それを聞いたユーノはここで耳を疑うような言葉を吐き捨てる。

「・・・違うよ。今のは“月牙天衝”じゃない・・・――“剣圧”さ」

「な・・・に・・・」

思わず耳を疑ってしまう獄寺。

と、その時ユーノは斬月を構えると神経を集中させ、これまでなのはやツナ達が感じたことのないほどに濃厚で、尚且つ巨大すぎる霊圧の斬撃を溜めこみ始める。

溜めこむだけで、大地と空気は大きく振動し、この場にいるすべて

の生き物が純粋なる恐怖を覚える。

「・・・何だ・・・・・・・・・・」

「この霊圧・・・・・・・・・・！！！！」

すると、ここで暴走態が恐怖のあまりその場から逃げ出してしまう。

「あ！逃げる！」

「逃がすかよ」

ユーノは咄嗟にストラグルバインドによって暴走態の動きを食い止め、逃げ場のなくなった暴走態は身動き一つとれない状態となる。

そして、狙いを定めてユーノは渾身の一撃を目の前の敵に放つ。

「―――――月牙天衝」

その瞬間、斬月の刀身からあまりに巨大すぎる漆黒の霊圧色の斬撃が飛ばされ、暴走態はこれが決定打となり、巨大な霊圧に飲み込まれながら絶叫する。

「グアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！」

宿主諸共、ライオンクラゲヤミーの暴走態は大爆発を伴い、山のようなセルメダルに還元されて消滅を果たす。

セルメダルの雨が降り注ぐ中、ツナ達は愕然とした様子で目の前の光景と、ユーノの力に言葉を失いかけ、同時に敵が倒されたことを

再確認する。

「や・・・やった・・・」

「まさか・・・――」

そう口にしながら、獄寺を始めとする四人が直径１０キロ相当にまで広がって巨大なクレーターを凝視しながら、恐るべきパワーを秘めたユーノの完現術コンボの力に恐れ入ってしまう。

「最後の一撃が、ここまでかよ・・・――バケモノか！？」

思わずそう呟いてしまう獄寺であった。

と、戦いが終わりユーノは完現術コンボを解き、元の姿に戻ってから深いため息をつく。

「ふ～～～う」

安定した状態で使える数少ない完現術コンボ、黯月の死神の力に深い感謝を抱くユーノ。

すると、そのユーノの元になのはが駆け寄ってきた。

「ユーノ君、やってね！」

「うん。なのはが一緒だったから、不思議とやれそうな気がしたんだ」

「ありがとう・・・――だけどごめんね。私、肝心な時にいつも

守られてばっかりで、ユーノ君の役に立てなくて・・・／／／」

「なのは・・・・・・僕の方こそ」

そう言いながら、ユーノはなのはの肩に手を触れそっと自分の元へと抱き寄せる。

「／／／」

顔を赤く染めるなのははユーノの胸元で、彼の心臓の音を片方の耳で聞き、もう片方の耳でユーノの声を訊く。

「君を心配させる事ばかりで、本当に申し訳ない。そればかりか・・・――出来る過ぎる自分であることにも、最近は苛立ちを覚えている。」

「え」

「なのはは、僕が何でも出来ることが嫌なんでしょ。攻撃も防御も・・・全部できるようになったら、私は何をすればいいんだって・・・思ってない？」

「・・・・・・」

「隠さなくていいよ。だけど、僕はやっぱり・・・――僕は我儘なんだ」

ユーノが素直にそのように口にすると、なのははそれを聞くと、的確に自分が思っていたことを言い充てられたことにほんの少しだけ悔しさを感じながら、いつも自分を気遣い心の底から心配してくれ

る優しい彼氏の言葉が嬉しくてたまらなかった。

「・・・――うん・・・・・・知ってる・・・・・・・知ってるからこそ、ユーノ君の事守ってあげたいのに・・・・・本当に神様って、イジワルだよね・・・」

その後、なのははユーノと見つめ合い更にこう口にする。

「ユーノ君・・・・・我儘でいいから・・・私も十分すぎるぐらい我儘言って来たから・・・・・・・・今度は自分のその我儘を大事して。せめて、その我儘の中に私を側に置いて欲しい・・・ユーノ君の隣に・・・私はいる？」

「勿論だよ・・・――ちゃんといるよ。僕の隣は、なのはだ」

「ユーノ君・・・／／／」

「なのは・・・／／／」

完全に二人だけの世界に入り込んでしまうと、周りの事など気にもしなくなる。

ユーノとなのははは互に頬を染めながらゆっくりと顔を近づけお決まりのＫＩＳＳを人目を憚らずに行おうとするが・・・この二人の行動を止めて来たのはツナであった。

「ストーップ／／／／／」

「「！」」

ツナの言葉に思わず反応する二人。

ツナを始め、獄寺やハル、ユーノスは気恥ずかしそうに頬を染め、京子は些か困ったようにも見える笑みで二人を見つめる。

「二人とも、俺らに言ったこと憶えてる／／／」

「仲がいいのは分るけど、ここはやっぱり控えようっか♪」

「そう言うことだ。一先ずそれは、お預けだ」

ツナ・京子・ユーノスの三人に指摘をされ、ユーノとなのはは顔から湯気を出しながら反省の色を見せる。

「「あはは・・・／／／／／／はい」」

こうして、ユーノチームは敵を倒し、嵐の守護者である獄寺隼人とその妻・ハルの救出に成功するのであった。

◇

〈ナーノチームＳｉｄｅ〉

二人が無事にユーノ達に救出されたその頃、クオークスと死闘を繰り広げていたナーノ達三人は肩で息をしながらクオークスの超能力に苦戦していた。・

クオークスの三人も、ここまでしぶとく生き残る敵と対峙したのはこれが初めてで、彼ら自身も秘湯が溜まり始めていた。

「本当にしぶとい奴らだ・・・」

「でもそろそろ限界のようね・・・」

「は、は、は、は」

「う・・・はぁ、はぁ」

「っぺ！」

ナーノは切れた唇から血を吐き捨て、諦めの悪い目つきで刀を握りしめ、スバルとティアナも同様に武器を構える。

「ふふ。思い残しの無いよう・・・塵一つ残らないように綺麗に燃やしてやるよ」

ロイドはそう言って、パイロキネシスによる止めの一撃を加えようと徐に距離を近づけてくる中、ナーノ達三人はいよいよ後がなくなってしまう。

「く・・・どうする？」

「これじゃ・・・」

そう思いながら、ナーノが何気なく頭上を仰ぎ見たその時だった。

「！」

頭上に浮かんでいたのは、青色に輝く死ぬ気の炎を帯びた燕で、ナーノは死ぬ気の炎の特徴をとらえて目を疑う。

「（あのツバメは・・・・・・雨属性の！？）」

と、その時だった。

その雨燕の背後から唐突に人影が飛んで来、人影は刀を振りかざして雨属性の炎と一緒に地面に衝撃波を送り込む。

「「「！！」」」

すると、その瞬間クオークスの三人は身動きが取れなくなり、体の動きが著しく鈍くなってしまう。

「え！」

突然の出来事に目を疑うスバルとティアナ、そしてナーノの三人。

そんな三人とクオークスの前に現れたその人影が次のように言ってくる。

「“鮫衝撃（アタッコ・ディ・スクアーロ）”。こいつで一分は稼げる筈だ」

その人物の姿を目の当たりにした瞬間、この場に居合わせた六人の表情が一変する。

「あ・・・」

「あなたは・・・」

「・・・へへ。これは何ともいいタイミング♪」

驚きに満ち溢れる中、その人物・・・スーツ姿に愛刀「時雨金時」を携えた、ボンゴレ雨の守護者・・・山本武はスバルとティアナの姿を今一度目で確かめながらほくそ笑む。

「まさかとは思ったが、こんなことがあるんだな・・・」

「お、お前は・・・！」

ミーナが睨み付けるようにそう尋ねると、山本武は不敵な笑みを浮かべながら口にする。

「助っ人登場」

ボンゴレ雨の守護者、山本武の参戦！

この後、戦局はどのように覆るのか・・・！？

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日はツナ君の能力について教えよう♪」

「先ずツナ君の死ぬ気の炎だが、これは代々ボンゴレのボスに見られる大空属性の炎で、色は橙色をしていて、特性は『調和』。」

「次にハイパー化と言う、ツナ君の純戦闘モードだが、これは凄まじい戦闘力を秘めていて、スバル達が束になってもまるで歯が立たなかったことからもわかる通り、チートレベルだね～～で、そのツナ君が愛用しているのが、イクスグローブという死ぬ気の炎を灯せる特殊な武器と、ボックス兵器の天空ライオンこと、ナッツ君だね」

「あ、あとは必殺技だけど、最大の威力を秘めているのがＸ　ＢＵＲＮＥＲって言うらしいけど、それはもうちょい先にかかるそうなんだ」

綱「それにしてもユーノ君のあの完現術コンボには正直言葉を失ったね・・・月牙天衝一つであそこまでって・・・」

ユ「はは♪別に僕が凄いんじゃなくて、その師匠の一護さんが凄いだけだよ。だって、一護さん普段は極端に霊力を抑えていて、本当なら5倍近い力を出せるんだ」

な「えええ！じゃあ、今までのは２０パーセントぐらいしか出してなかったの！？」

ユ「そうだよ。その証拠に、首根っこに完現術を会得した時に見られた装甲が無いし、斬月の形ももうちょっと洗練されているしね♪」

それを聞くと、なのはは愕然とし、ツナは一護に対して更に興奮を覚える。

綱「うわ～～～やっぱすごいんだな、一護さんって！超格好いい！！」

ユ「でしょ♪」

な「う・・・・・なのはさん最強神話は、この小説の中じゃ通用しないんだな・・・くしゅん／／／／／／」

一人いじけるなのはなのであった。

ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活

ハ「はい！みなさまお待ちかねの、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活のコーナーです！」

リ「前回のあのグダグダは、流石に問題だったぞ。今回はテンポよく頼むって、重要から要請があったぞ」

ハ「はひ！とは言ってもこれを書いているのは他ならぬあの人ですよね・・・それって責任転嫁と言う奴ですよ・・・／／／」

暗いオーラを全身から放つハル。

リボーンはそれを気にせず話を進めようと催促。

リ「時間がねぇンだろ。とっとゲストを呼びやがれ」

ハ「はひ！！そうでした！！では、今日のゲストをご紹介です！ユーノさんの恋人で、不屈のエースオブエースの高町なのはさんです！！」

ハルがそう言うと、礼によってゴンドラに乗って降りてくるなのは。

なのはは初めてのチビキャラ体験に緊張しながら、笑顔を振りまく。

な「にゃはは♪お呼びいただきありがとう。ユーノ君の恋人で、ヒロインの高町なのはです♪」

リ「ふん。だがその笑顔の裏じゃ、顔に似合わずえぐいことしてんだろ白き魔王・・・」

な「う！り、リボーン君・・・・・ちょっとそう言う発言は控えてくれるかな・・・頭冷やされたくなかったら・・・！！」

なのはは歳の所為か、最近ストレスがたまりやすくなっており、すぐさま暴力で何もかもを否定しようとし、レイジングハートを起動させる。

ハ「はひ！！だ、駄目ですよなのはさん！そんなことしたら会場が壊れます！！リボーンちゃんも駄目じゃないですか、人の悪口を言っちゃ！」

リ「本当のこと言って何が悪いんだ?それに白き魔王如きじゃ、俺は倒せネェ。何しろ俺は世界最強のヒットマンで、未来じゃナーノの師匠なんだろ・・・・・その台詞、二度とはけねーように俺が脳天ぶち抜いてやろうか・・・」

すごんだ声でそう言われると、なのははユーノに似た強い恐怖を感じて杖を収めてしまう。

な「ひい／／／ご、ごめんなさい／／／もう暴力を振るったりはしないから、殺さないで／／／」

リ「ふん。所詮は甘ちゃんだな。マフィアの世界じゃお前みたいな軟なやつほど直ぐ殺されるんだぞ。よくそんなんで生き残って来れたな」

な「う～～～／／／」

悔しい上に、何も言い返せない自分が悲しくなるなのはは呻るしかなかった。

ハルは思わず口を開けたまま悔し涙を流すなのはを凝視する。

ハ「え・・・えっと・・・なんだか変な流れになって来ましたが、時間も押しているのでインタビューに入らせてもらいます。なのはさんは、来たばかりの京子ちゃんとは随分親しく打ち解けているようですが、ズバリ!ハルのベストフレンドの京子ちゃんの心象はどうでしょう?」

な「うん。凄く優しくて仲間おもいな人だなって思ったよ。私とユーノ君がヤミーと戦う時も、無茶しないでって心配してくれたし。

何よりそのなんだろう・・・ほんわかして、笑顔が凄く素敵だなって」

リ「京子は昔からあの笑顔は変わんねーからな。いまじゃボンゴレにとっちゃ、あの笑顔一つで男どもの士気が上がるぐらいだからな」

な「え?そうなの?」

リ「ああ。ボンゴレ十代目ファミリーを影で支える正に太陽・・・大空の傍らで常に太陽は輝いてるもんだ。実際、ツナなんか京子の前じゃ骨抜きもいいとこだ。仕事そっちのけでいちゃつきやがって・・・」

ハ「え～～それぐらいいいじゃないですか。ツナさんと京子ちゃんにとっては、貴重な時間なんですよ。」

な「わかるわかる。あの二人って本当にどこでもラブラブってオーラがにじみ出てるしね。ま・私とユーノ君ほどじゃないけど♪」

リ「どっちも甘ったるいバッカプルだろうが」

と、冷たいツッコミが返って来ると、なのはの表情が凍りつく。

な「が・・・」

ハ「あはは・・・流石がリボーンちゃん。コールドなツッコミでした・・・あ、ハヒ!!大変ですもう時間が来てしまいました!ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活
はこの辺で失礼します!なのはさん、しっかりしてください!なのはさん!」

な「が・・・・・・」

リ「本当のこと言われただけでここまでダメージ負うとはな・・・やっぱ甘ちゃんだなこいつ」

ハ「リボーンちゃん！駄目ですよ、人の悪口を言っちゃ！なのはさん！しっかりしてください！なのはさん！な・の・はさ～～～ん！！！」

呼びかけても結局なのはは小一時間、全く動かない状態で石化してしまったそうな。

次回予告

リ「ナーノ達の前に現れた助っ人・・・そいつは捜索中のボンゴレ雨の守護者、山本武だった。」

「頼りになる助っ人が加わったことで、ナーノ達三人の士気が一気に高まったようだ。超強力なサイコパワーを秘めたクオークスの三人相手に、ナーノ達は果たして勝つことが出来るのか？そして、ナーノが見せる超ド派手な必殺技とは・・・」

「次回、ユーノ・スクライア外伝・絆・・・『雨降って竜が舞う』。みんな、死ぬ気で見ろよ」

登場ヤミー

ライオンクラゲヤミー

声：土平ドンペイ

身長：２１４？　体重：１２０？

特色／力：俊敏な動き、電撃と竜巻の混合技、小型クラゲを操る。

スパジオファミリーの尖兵・ルビウスにカザリがセルメダルを投与し、その欲望から生み出された。カザリがメズールのコアメダルを自身の体内に取り込んだことで、２つの力を併せ持ったヤミーへと成長を遂げる。俊敏な動きで相手を翻弄するだけでなく、クラゲの部位から強力な電撃を放つ。クラゲの部位に攻撃を受けると、その度小型クラゲを分離する特性を持っている。守護者探しの為にユーノ達と一緒に同行していたツナたちの前に現れ、コンビを組んだユーノとなのはの連係攻撃によって追い詰められる中、シャムネコヤミーを喰らって暴走状態となる。

ライオンクラゲヤミー暴走態

身長　３８ｍ　体重　２１０ｔ

特色／力：巨躯を活かした力圧し、鋭い鉤爪により攻撃、口腔内から火炎弾などのエネルギー波を放つ。

暴走したライオンクラゲヤミーがシャムネコヤミーを、捕食したことによって成長を遂げた姿。棒物の姿とはかけ離れた正しく化け物に近い外観で、目に映るもの全てを貪り尽くし捕食する。ガメルとメズールの時と同様、力を制御できない暴走状態で、通常の攻撃が通じない程の巨大さと、凄まじいパワーと口腔内から生成するエネルギー波でユーノとなのはを苦しめるも、最後は一護の完現術コンボを発動させたユーノの月牙天衝を受け、多量のセルメダルとなって飛散する。

シャムネコヤミー

声：吉岡さくら
身長：１７６？　体重：７２？
特色／力：鋭いメス状の指（爪）を使った切断攻撃
ライオンクラゲヤミーと戦っていたユーノとなのはの前に突如現れた猫系のヤミー。素早い動きと、メス状の鋭い刃を持った指先から繰り出すことで相手を切り裂く。止めを差されそうになるライオンクラゲヤミーの援護に何処からともなく乱入し、ユーノ達と戦闘となる。その後、ライオンクラゲヤミーが暴走を果たし、ライオンクラゲヤミーによって捕食され寄生主諸共無残な消滅を迎える。

ツ「異世界に飛ばされた守護者を探す為、ユーノ君に作ってもらった装置を頼りに、ユーノ君達六課のみんなと一緒に俺と京子ちゃんは捜索に出かけた」

「偶然にも、ユーノ君達と一緒に行った異世界の砂漠で、獄寺君とハルを発見した。しかし、直後スパジオファミリーの追手が現れ、おまけにユーノ君が専門に戦っているというヤミーと言う怪物に変身した」

「応戦したユーノ君となのはは、息の合ったコンビネーションと一護さんの完現術コンボの力でヤミーを退けることが出来、二人を保護することに成功した」

「同じころ、ナーノ達の危機に駆けつけたのは・・・山本だった。超能力兵士の力を前に、山本とナーノ達はどう立ち向かうんだろう？」

雨降って竜が舞う

〈ナーノチームＳｉｄｅ〉

クオークスと激闘を繰り広げていたナーノ達を救ったのは、今まさに彼らが捜索中であったボンゴレ雨の守護者、山本武その人だった。

スバルとティアナは唖然とした表情で目の前でほくそ笑む山本を覗き込む。

「あ・・・あなたは・・・！？」

「まさか・・・ひょっとして！？」

と、その時そんな二人の容姿を見ていた山本が不意に訝しげな顔となる。

「あれ？やっぱ悪い冗談じゃ、ねぇよな・・・？目が覚めてその辺を歩き回ってたら爆音が聞こえてきて。何事かって来てみたら、あんたらまでって。ん？でも十年経つのに成長してねェな・・・縮んだか・・・幻？妖怪か？」

山本武のこうした言動は山本節と呼ばれており、スバルとティアナは調子を狂わされたように困惑した様子で、心の中共通の台詞を吐いたそうな。

「「（な、何言ってるんだろう・・・この人・・・）」」

と、そんな困惑気味の二人とは違って、ナーノは薄ら笑いながら言ってくる。

「あはは♪山本武さんですよね、ボンゴレ雨の守護者の？」

「ん。そう言うお前は？」

「スバルさんとティアナさんの関係者で、ナーノって言います♪ツナさん達と一緒に異世界に散らばった守護者の捜索でこの世界に野暮用が」

「え！ツナが！？あ、そっか！あいつ・・・無事だったんだな。あれ、て言うか異世界って・・・じゃあここは地球じゃなかったんだな」

ツナの安否をその耳で確かめ安堵の笑みを浮かべた直後、山本は自分達がいる場所が間違いなく地球ではないという事実を聞かされると、改めて驚いた様子だった。

「はい。詳しくは後ほど伺いますので、取り敢えずもう一度身元の確認を」

「ああ。そっちの小僧が言った通り、俺がボンゴレ雨の守護者の山本武だ。そんで、こっちが雨燕の小次郎だ」

山本は、空中を待っていた雨の炎を帯びた雨燕こと、小次郎を自分の指に乗せる。

と、その時だった。

唐突にパイロキネシスの炎が山本目掛けて飛んで来、山本はそれに気づくや否や時雨金時の刀身に雨の炎を纏わせ攻撃を受け止める。

目を見開くスバル達。

その理由の一つは山本の表情が鋭くなり、パイロキネシスを刀だけで受け止めた事、もう一つはクオークスが山本の技を喰らっているとはいえ、こんなにも早く攻撃が出来るようになったことだった。

「ボンゴレ雨の守護者・・・貴様・・・！」

「おっとそうだったな。忘れちゃならねェ奴らがいたっけ」

「ふふふ・・・噂には聞いていましたが、成程侮れないようですね。まさか衝撃波だけでここまでとは」

シオンはそう言うと、未だ小刻みに震える自分の手を見つめ、山本自身も些か眉間にしわを寄せながらこう呟く。

「雨属性の炎を混ぜた鮫特攻を受けて、こんなにも早く動けるようになんのか・・・その制服、見た感じスパジオファミリーの傭兵ってとこか」

「クオークスだ。貴様ら出来損ないの人間とは次元を異にしている存在・・・」

すると、三種類の超能力を使いこなすクオークス、ミーナが強力なパイロキネシスの炎を再び山本目掛けて仕掛ける。

「は！」

「山本さん！」

「危ない！」

すると、山本は咄嗟に懐から別の匣を取出し、雨系のリングに炎を灯すと、開匣してから、「渦転斬（カテンザ）」という大量の水を噴出して水のバリアを張り、相手の炎の攻撃を打ち消す技を使い、ミーナのパイロキネシスを防いだ。

「何！？」

「水のバリア！」

スバル達三人もそうだが、クオークスの三人もまた山本の出す技を目の当たりにし、驚きに満ちた表情となる。

山本は匣を元に戻すと、クオークスに対して笑みを浮かべて口にする。

「ボックスもなしに、どっからそんな攻撃が出せるんだ？一瞬焦ったぜ」

「凄い・・・！」

「これが・・・ボンゴレ雨の守護者・・・？！」

スバルとティアナがそう呟くと、山本は振り返り三人の怪我の容体を確かめる。

「お前達、怪我は大丈夫か？」

「は、はい！これぐらいじゃどうにかなりません」

「同じくです」

「て言うか、僕としてはウォーミングアップって感じですよ♪」

「ははは！気に入ったぜ、小僧。ようし、そんじゃここから一発逆転ホームランと行こうや！」

「「「はい！」」」

山本武の言葉は、ここに来て一気にナーノ達の士気を高めるのに至った。

三人は愛機を構え戦いの眼差しとなり、山本自身も時雨金時を握りしめて敵対するクオークスを凝視する中、クオークスのリーダーであるロイドは険しい表情を浮かべる。

「く・・・（ボンゴレ雨の守護者め・・・こうも容易く奴らの士気を高めるとは・・・・・・忌々しい）」

と、ここで山本が攻撃の前に嘗ての異世界での色濃い戦いの日々を思い出した様子でふとこう呟いた。

「それにしても懐かしいな・・・十年ぶりか。こうして見知らぬ異世界で、またお前ら魔導師と共闘する日が来るなんてな。思ってもいなかったぜ」

それを聞くと、パラレルワールドでの出来事の為直接かかわってはいないスバルとティアナは困惑した顔を浮かべる。

「あはは。えっと・・・この場合、なんて答えればいいのかな？」

「と、取り敢えずお互い全力を尽くしましょう・・・でいいのかしら」

「それが正解♪山本さん、行きましょう」

「よし。九回の裏、ツーアウト満塁からプレイボールだ」

彼は元々、プロ野球選手になることが夢であったが、ツナや獄寺達と共に今はボンゴレ側の人間として身を置いている。

しかし昔と変わらず、野球を愛する心と情熱までは消え失せてはおらず、何かしろ物事を野球に例えることが多いのもまた事実であった。

そんな山本節が飛び交う中、ロイドとシオンは歯を食いしばりながら四人に言葉を荒げる。

「は！ホームランなど打たせませんよ」

「貴様らまとめてゲームセットだ！」

「燃えろ！！」

二人の言葉の直後、最強の超能力者ミーナが特大のパイロキネシス

を向けて攻撃を開始してきた。

炎が飛んでくると、四人は一様に回避し、山本は空中に飛び上がった状態から時雨金時に雨の炎を灯し、シオンの足元に着地をすると低い声で口にする。

「行くぜ・・・時雨蒼燕流・・・八の型」

「！」

シオンは咄嗟に危険を感じて空に逃げようとした瞬間、山本武の時雨金時がシオンの懐に飛び込み鋭い斬撃で突き上げてきた。

「ぎゃあああああああ！」

「“篠突く雨”」

山本は最も得意とする斬撃の感触をこう口にする。

「浅いか」

シオンは皮一枚のところで回避し、制服が切れる程度の傷で済むと、空の上から悔しそうに山本を見つめる。

「く・・・貴様よくも・・・！」

シオンは山本に狙いを定めてサイコキネシスで攻撃をしようとするが、直後その頭上より声が聞こえてくる。

「余所見してんじゃないよ」

「何！？」

シオンが声に気付いて空を見上げると、太陽光に姿を暗ましたナーノがライジングハートの刀身に魔力を溜め、紫色の斬撃を飛ばしてきた。

〈Ｖｉｏｌｅｔ　ｓｃｒａｔｃｈ〉

「それっ♪」

ナーノの非殺傷設定の斬撃を受けたシオンは、勢いよく地面へと叩きつけられる。

「がっは・・・！」

これが決定打となり、シオンは気を失い戦闘不能となる。

山本は降りてきたナーノに笑みを浮かべて言ってくる。

「ナイスだ、小僧！」

「ブイ♪」

ナーノはブイサインを送って、山本に笑みを振りまいた。

「燃えろ！！」

すると、ここでロイドが激情を露わにするとともに、高位力のパイロキネシスで二人を狙って来ると、山本は残りの二人に合図を送る。

「ティアナ！スバル！」

「「はい！」」

スバルとティアナがほぼ同時に二人の後ろから飛んでくると、スバルが向かって来る炎の中へと何のためらいもなく飛び込んでいく。

「うおおおおおおお！！」

恐れを知らない防災士長スバル・ナカジマの判断に、ロイドは目を見開いた。

「な！炎の中に飛び込んだだと・・・！？」

「良い判断だ。下手に躱すより、ああする方が怪我も少なく済む」

山本もこのスバルの判断は正解だと述べ、そのスバルはカートリッジをロードすると、ロイドの顔面目掛けて拳を突き立て・・・

「リボルバー・・・・・・キャノン！！」

渾身の拳を彼の顔面へと叩きこんだ。

「がっは・・・！」

この一撃を受けたロイドは顔を変形させながら、口の中から抜け落ちた奥歯を吐き捨て、その場に倒れ込んだ。

「ロイド！シオン！」

ミーナが倒された二人の安否を気遣って声を荒げると、その途端にオレンジ色に輝く粒子が彼女の周囲を囲み始める。

〈Ｒｅｓｔｒｉｃｔ　ｒｏｃｋ〉

「きゃ！」

ミーナはティアナが仕掛けていたレストリクトロックに捕縛され、身動きを封じられる。

ティアナはミーナを確保すると、銃口を向けたまま勝ち誇ったように口にする。

「美白美人は大人しくじっとしてなさい。事情聴取の時にでも、その美容の秘訣教えてくれるかしら？」

「く・・・こんなもの・・・！」

ミーナは焦燥を滲み出しながら何とか超能力でバインドを解こうとするが、直後山本が背後に現れ首元で言ってくる。

「止めとけ」

そう口にした瞬間、山本は時雨金時の柄頭でミーナの首根っこを叩く。

「ぐ」

ミーナは意識を飛ばされ、膝をついて崩れ落ちる。

山本を始め、ナーノ達三人は即席とは言えそれを全く感じさせないコンビネーションによって強力な超能力兵士クオークスを倒すことに成功した。

山本は刀を肩に乗せながら、三人の方に顔を向けてくる。

「ふん。ゲームセットだ」

「ふう～～～やった」

「やりましたね・・・」

「ああ。お前たちの連携も良かったぜ。小僧も、よくやった」

山本は同じ剣士であり若干１６歳とは思えないほどの力を持ったナーノを特に気に入った様子で、彼の頭を軽く撫でてくる。

「へへ♪大したほどじゃないですよこれぐらい♪」

「満更でもないって顔しちゃって」

「ははは！そうだね♪」

と、山本に褒められ気恥ずかしそうにも見えながらも純粋な笑みを浮かべるナーノを見て、スバルとティアナも思わずほくそ笑む。

すると、そんな四人の笑い声を耳にし、クオークスのリーダーであるロイドは満身創痍になりながらも手を動かし、動けなくなった二人とは違って唯一人抵抗の意志を見せて立ち上がってくる。

「く・・・・・まだだ・・・まだ終わりませんよ・・・・・・・！」

「？」

山本がそれに気づいて徐に振り返ると、ロイドは先ほどとはまるで人が違ったかのような眼つきで自分たち四人の方を凝視ている。

「へへへ・・・」

山本を含め、ナーノ達は武器を徐に構えながらロイドの方へ顔を向ける。

「まだやる気かよ?その体じゃ、自慢の超能力も碌に使えネェと思うがな」

「大人しく投降した方が身のためだって」

そう言う山本とナーノだが、ロイドは未だ諦めていない態度で次のように言って来た。

「超能力だけが全てではありませんよ・・・・・・不本意ではありますがね・・・我々にも一応、あなた方マフィアと同じことが出来るんです・・・――――」

ロイドは意味深な言葉を口にしながら、左手の薬指に嵌めたあるものを見せる。

「あれは！」

山本が特に驚きを見せたもの・・・それは紛れもなく、自分達マフィアが戦闘で使用しているリングと呼ばれるもので、その中でもロイドが嵌めていたのは紫の炎が特徴の「雲属性」のリングだった。

「（雲属性のリング！？）」

「あいつも死ぬ気の炎を使うって言うの！？」

スバル達も思わず唖然としてしまう中、ロイドは更に驚くべきものを見せようと、次のように言ってくる。

「さぁ・・・・・ここからです。延長戦と行こうじゃありませんか！」

ロイドは来ていた上着に手をかけると、四人に信じられないものを目の当たりにさせる。

「「「な！」」」

「あれは・・・！」

四人の眼前に映って来るもの・・・それはロイドの胸部に埋め込まれたツナや山本が使っている匣兵器そのものであった。

「胸に匣が埋まってる！？」

山本はこれを見た直後、険しい表情を浮かべてこう言った。

「まさか・・・修羅開匣か！！」

「ザッツグレイト・・・」

ロイドが不敵な笑みで返事を返すと、彼は左手に嵌めたリングに雲属性の炎を灯し、それを胸部に埋め込まれた匣の穴に注入する。

すると、その瞬間事態は一変する。

ロイドの周りは凄まじい紫の波導の嵐に包まれ、四人は想像を絶する凄まじさに体を保つこともやっとな状態であった。

「「「「う！！」」」」

猛烈な波導と突風が四人に襲い掛かる中、嵐の向こうからは快楽に満ちたと言っても過言ではないロイドの甲高い笑い声が聞こえてくる。

「ははははは！！！！ハハハハハハ！！！！」

スバルとティアナはこの笑い声を聞きながら、山本に先ほどの言葉の意味を尋ねようとする。

「しゅ、修羅開匣って・・・なんですか！？」

「一体何が出てくるの・・・？！」

と、その時だった。

目の前の嵐が徐々に収まりを見せ、ロイドの面影が見えようとしていた。

「あれは・・・」

凝視する四人。

そして、面影を現したロイドが四人に向かって自信に満ちた冷静な声色で言ってくる。

「・・・――――さぁ、延長戦の始まりですよ」

「！！」

「「えっ！」」

山本、スバルとティアナの三人は度胆をぬいた。

なんと、姿を見せたのは・・・明らかに人間のそれとは完全に逸脱した全身が大樹のような木目模様となり、四肢に至っては完全に蔓が集まったものとかした雲の炎を帯びたロイドであったのだから。

ロイドは唖然とする四人を前に不敵な笑みを浮かべてくる。

「十回の表、攻撃はこちらからです」

「うぇえ！！！何あれ！！木目！！」

「まさか・・・これが修羅開匣・・・！」

山本は、修羅開匣を初めて見たスバルとティアナの反応を見ると、直ぐに彼女たち二人が自分の知っているスバルとティアナではないことを理解する。

「その反応じゃ・・・前に俺らが遭ったスバルとティアナとは全く違う方って事か。確か、こういうのをパラレルワールドって呼ぶんだったか」

「はい。その通りです」

ナーノが相槌を打ってそう返した後、スバルは恐る恐るもう一度修羅開匣について山本に問い質す。

「あ、あの山本さん・・・修羅開匣って・・・何なんですか?!」

「修羅開匣・・・――肉体に埋め込まれたボックスの開匣により、肉体そのものを最終兵器に変える事を言う」

それを聞き、ティアナが推論を立てて言ってくる。

「つまり、ボックス兵器の能力と人間本来の力が掛け合わされてる、ってことでいいんですか」

「ああ。そう言うことだ。しかも厄介な事に、奴の属性は『雲』だ。気をつけろお前達・・・一瞬でも気を抜けばやられるぞ」

「は、はい!」

スバルとティアナは山本の忠告を聞き、改めて修羅開匣の力を発動させたロイドに対して視線を向ける。

その一方、ナーノは同じように敵の攻撃に備える傍ら、心の中でこんな事を呟く。

「（奴も僕と同じ属性・・・――こりゃとんだ偶然だな。まぁ、いい機会だ・・・この際出し惜しみは無しにしよう。）」

そう心の中で呟いたナーノは、懐に収められている未来で授かった、銃撃の師匠であるアルコバレーノ・リボーンが誕生日に贈ってくれたプレゼントを気にして再び心の中で言う。

「（使わせてもらいますよ、リボーン師匠）」

と、次の瞬間ロイドが動き出した。

「参ります」

ロイドが指を鳴らした瞬間、蔓が折り重なった足が地面に浸透し、ロイドはゆっくりと宙へと舞い上がり、そして彼自身の腕からは実のようなものが生えてくる。

生えて来た実は忽ち雲の炎を帯びて成長し、まるで人間のような姿に変えていく。

「これは・・・！」

四人はこの木目人間が次々と増殖していく様子に、目を見開く。

「人数が増えてる！？」

「雲属性の死ぬ気の炎の特徴は、『増殖』だ。本体を倒さない限り永遠に増え続けるぞ」

「倒せますか？この数を相手に」

ロイドが神にでもなったかのようにそう言ってくる中、四人は不敵な笑みを浮かべてから一歩前進し、各々武器を構える。

「ティア。面白そうだよ」

「面白がってるんじゃないわよ。これでもれっきとした戦いなのよ」

「兎に角、やるしかないってことです」

「そう言うことだ。行くぜ！」

山本の掛け声とともに、四人は一斉に走り出す。

時雨金時を構えた山本は、雨燕を前衛に構え、水をえぐるように巻き上げながら突進していく。

「時雨蒼燕流、特式十の型『燕特攻（スコントロ・ディ・ローンディネ）』！」

燕特攻をその身に受け、木目人間は体を切り裂かれる。

「クロスファイアー・・・フルバーストッツ！！」

ティアナは得意の中距離射撃で一気に数を減らしていき、スバルは向かって来る木目人間に対して地面に向かって振動拳を送り込む。

「振・動・拳！！」

振動拳によって地面が捲り上がり、木目人間はその勢いによって翻

っていく。

「羽衣！」

そして、ナーノは高速の抜刀術を駆使して木目人間を一網打尽としていく。

だが、雲属性の炎を帯びた木目人間たちは消滅を果たすどころか、倒せば倒すだけ猛烈な勢いで数を分裂させ増殖を繰り返す。

ロイドはこの状況を頭上で仰ぎ見ながら悠々と口にする。

「ははははは！！どうしました？そんなものじゃ私は倒せませんよ」

それを聞き、四人は苦い顔を浮かべながら目の前の異常なまで増えていく木目人間に手を焼く。

「なんて増殖スピードなの・・・この数・・・異常だわ！」

「これが修羅開匣の恐ろしさって奴だ。いや・・・恐ろしいのは別なのか」

山本がそう危惧する理由は、修羅開匣による単純な能力の増大ではなく、彼が持つ本来のクオークスとしての超能力の方であった。

すると、そんな危惧がよぎる中、ロイドがここで攻めに出てくる。

「ふふ。さぁて・・・私本来の能力と修羅開匣の能力を掛け合わせたとき、どうなるか見せてあげましょう」

ロイドはそう口にすると、左手を突き上げる。

「来るぞ！」

「地獄の業火を受けろ！！」

そして、突き上げた左手から得意のパイロキネシスの炎を発生させ、木目人間もロイドの手の動きに合わせて同じように炎を呼び出し、一斉に四人に向けて放ってきた。

想像を絶する光景を目の当たりにする一方で、ナーノは山本たちの盾となって防御を展開。

「ライジングハート！」

〈Ｗｉｄｅ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〉

正しく地獄の業火と言っても過言ではないロイドと百体を超える木目人間からのパイロキネシスにナーノ自身も苦い顔を浮かべる中、ロイドは更に彼を追い詰めようとする。

「まだまだこんなものじゃない！」

すると、ロイドは右手に力を込めていき、サイコメトリーをナーノに集中させて流し込んでいく。

ナーノはサイコメトリーが体に流れ込んでくると、全身を刺すような痛みが襲い掛かる。

「ぐうううううおおおおおおお！！！」

「小僧！」

「「ナーノ！」」

強烈なサイコメトリーの力を全身に受けながら、持ち前の精神力でどうにかこの場を凌ぎ切り、パイロキネシスによる攻撃にも堪えたナーノだったが、その表情は誰が見ても苦しそうなもので、多量の汗が流れ落ちていた。

「は、は、は、は」

三人はナーノに近づき、彼の安否を気遣う。

「大丈夫か？」

「ええ・・・しかし、こいつは半端ないですね」

ティアナは不審に思いながら、一度山本に確かめてくる。

「彼等は、幻覚じゃないんですよね？」

「そうだ。雲属性の特性で増殖した紛れもない実体。だがまさか、サイコパワーすらも分裂させるとは・・・夢にも思ってなかったぜ」

山本自身、これまであり得ないような戦いをツナ達と共に経験し、乗り越えてきたとはいえ、それでもクオークスの力に修羅開匣の力が掛け合わされたロイドの力には言葉さえ失いかける。

「ふふふふ。延長戦はまだ始まったばかりですよ。もっと楽しんで

いきましょう」

すると、ロイドと木目人間たちは周囲に散らばる瓦礫の破片などをサイコパワーで宙に浮かばせ、それを一様に四人に向けて高速で投げつける。

「ち。特式十一の型“燕の嘴（ベッカタ・ディ・ローンディネ）”！」

山本は咄嗟に雨の炎を纏った時雨金時で、連続で鋭い突きを放つ「燕の嘴」で飛来してきた瓦礫などの破片を対処し、その後でスバルが前に出ていき木目人間に振動拳の連撃を叩きこむ。

「うらうらうらうら！！」

〈Ｓｎｉｐｅ　ｓｈｏｔ〉

ティアナも負けじとクロスミラージュの二丁で木目人間を討伐。

「でやあああああ！！」

そして、ナーノは最も四人の中ではダメージ蓄積が多い身でありながら、剣を手に取り前に出ると、羽衣を一段階発展させた超高速の連続居合い、「龍閃花」をお見舞いする。

「龍閃花！」

龍のような魔力光を伴うことからこの名がついたが、木目人間はその技を受けると悉く切り裂かれ、普通ならば数が減るところだが、ロイドが存在している以上無限に増殖を繰りかえるばかり。

次第に攻撃に対処しきれなくなるだけの数に増えると、四人の表情が曇り始め、息を切らし始める。

「は、は、は、は。まるで減ってる気がしない・・・」

「こんなの・・・ありですか・・・っ」

「戦いなんてものは不条理なものですよ。」

「まぁな。」

これ程までに追い詰められた四人を勝ち誇った様子で頭上から見下ろすロイドは、敢えてこう尋ねる。

「ふふふ。もう限界ですか?」

「誰が!」

「ふふ。ぞくぞくしますね・・・その威勢。しかし、既に体力も魔力も底を尽きようとしている中、私に勝ち目はありません。」

「やってみなきゃ分かんねぇだろ」

山本も諦めを見せずに最後の最後まで戦い抜く姿勢を貫こうとすると、ロイドは呆れた様子でこう言ってくる。

「ふう〜〜〜諦めの悪い方々だ。なら、決定的な力の差を思い知らせてあげましょう」

そう言うと、ロイドは両手を広げて己の身体に自然界に散布するサ

イコパワーを吸収していき、木目人間も同様の事をし始める。

そして、ロイドと木目人間全体が一斉に目を開いて四人にサイコパワーを送り始めると、四人は一様に体の異変を感じた。

「「「「！」」」」

「ぐちゃぐちゃにしてあげます」

サイコパワーを送り込むロイド。

山本は持っていた時雨金時をその場に落とすと、心臓を抑えた状態でもがき苦しみ出す。

「ぐおおおおおお・・・！！！」

同じ様に、ティアナとスバル、そしてナーノの三人がその場に沈み込むと、辛そうな表情を浮かべながら頭を抱え始める。

「くううう！！！！！！があああああああ！！」

「あ、頭が！！！！！！！！」

「・・・く・・・」

サイコパワーの襲撃に最早手も足も出ない四人に、ロイドは勝ち誇った笑みを見せる。

「これだけの数で、これだけのサイコメトリーを受ければ、脳髄や心臓がそれに堪えきれず破裂を起こすのは必至。宛ら、今のあなた

方の脳内には急激な情報が一度に入ってきているときのような感覚でしょう」

「ぐ・・・！！頭が割れそうに痛い・・・！！」

「ユーノ先生の気持ちが・・・よく分かる！！」

「やってくれるな・・・！！」

山本が不敵な笑みを浮かべるロイドを険しい表情で睨み付けると、ロイドは一度地上に降りて来、スバル達の様子を見ながら衝撃的な言葉を口にした。

「良い手土産だ。雨の守護者諸共、あなた方四人の首をケリー様に献上すれば、クオークスの優位性を再評価してもらえるかもしれない。そうすれば、嘗て我らを見限った“財団X”の連中も考えを改める筈！」

「財団X！？」

「ま、まさか・・・あいつらが・・・！！」

スバルとティアナは聞き覚えのある言葉に思わず目を見開き、愕然とする一方、何も知らない山本は心臓を押さえながら問い質す。

「お前達・・・知ってるのか・・・そいつらの事！？」

と、ここでただ一人違う反応を見せているのはナーノ。

ナーノは全てを知っている様子で何も語らず心の中で呟き納得する。

「（やっぱりそうか・・・――――道理でこんな奴らまで）」

「さぁ、そろそろ本当のゲームセットと行きましょうか」

ロイドは四人に止めを差そうと、一気にサイコパワーを上昇させていき、木目人間達も一様に強さの度合いを高めていくと、四人は今にも破裂してしまいそうな脳と心臓の痛みに絶叫する。

「「「「ぐあああああああああああ！！！！！！！！！」」」」

「さようなら。愚かな管理局の魔導師と、ボンゴレの雨の守護者」

この勝負、このまま四人の敗北で終わってしまうのか？！

◇

〈ケリーＳｉｄｅ〉

一方、カザリを連れていたスパジオファミリーのケリーはというと、予てよりスポンサーとして関係深い財団Ｘの幹部との接見のため、応接室へと向かった。

部屋を空けると、中には白い制服に身を包んだスパジオファミリー担当のエージェンシー、加藤順が無表情で立ちつくしていた。

ケリーは加藤の姿を確認し、無邪気な笑みで話しかける。

「やぁ、加藤ちゃん。元気そうだね♪」

ケリーが声をかけてくると、口元をゆるめ加藤は返事を返す。

「・・・ご機嫌いかがですか、ケリーさん。」

「うん。もう絶好調だよ。気分がいいったらありゃしない」

「それはそれは・・・――おや?そちらは」

加藤はケリーの隣で不敵な笑みを浮かべる人間態のカザリに気付く。

「ああ・・・彼は君のところで投資対象にしてるロストロギアが集まってできたメダルの生き物だよ」

「コアメダルですか・・・――ということは、カリ・ユガの?」

加藤がそう口にすると、カザリは訝しげな顔を浮かべながら問いただす。

「あれ?あんた・・・ミスターのこと知ってるんだ」

「彼は元・財団Xの人間です・・・――独立して、自分の財団を組織しましたが」

「・・・へぇ・・・意外なこと聞いちゃった」

「ところで加藤ちゃん。君らのところで紹介してくれたクオークスだけど、あれはなかなかにいい捨て駒だよ♪データ集めにはもってこいだ」

そう言いながら、ケリーは現在の戦闘の様子をモニターに映し、加

藤はそれを見ながら不敵な笑みを浮かべる。

「匣兵器を掛け合わせましたか・・・なかなかに興味深いですね」

「ふふ。まぁそれでも・・・ボンゴレ雨の守護者と竜神の寵児を相手にしてる以上、勝ち目はないけどね」

すると、カザリは竜神の寵児であるナーノのことが少なからず気になり、その理由を尋ねる。

「竜神の寵児って・・・ユーノ・スクライアの息子だっけ？確かにただの人間ではないと思うけど、僕的にはそこまで警戒することないと思うけど・・・」

「わかってないな、君は♪あの竜神の寵児の怖いところは、父親であるユーノ・スクライアと一緒で戦いの中で”無限に進化”するってとこなんだ。“竜神”とは、アルザスの古い言葉で“この世で最も強い人間”に与えられる称号・・・次元世界最強の男であるユーノ・スクライアのことを広い意味では定義し、その寵愛を受けた彼はまさしく竜神の寵児さ」

「はい・・・――そして何より、彼には常人を遥かに凌ぐ進化の波導が流れているのです。決して侮れる相手ではないでしょう――――もっとも、彼自身には強くあろうともそれを求めるという欲望もないのですがね」

「・・・ふ～ん・・・――」

この意味深な会話は果たして、何を意味しているのか？

◇

〈ナーノチームＳｉｄｅ〉

第２３管理世界「ルヴェラ」。

クオークスとナーノ達による激しい死闘が繰り広げら、結果として勝利を収めたのは・・・残念な事に修羅開匣によって超能力と増殖する木目人間を駆使してナーノ達を追い詰めたクオークスのロイドであった。

ロイドは、眼前に倒れている息絶えた四人の見詰めながら徐に口にする。

「ふふふ・・・――――死にましたか」

四人が死ぬと、彼はその証拠としての首を確保すべく、徐に歩み寄っていく。

「クオークスの力の前では、いかにボンゴレや管理局の魔導師と言えども、この程度ですか」

そして、まず手始めにボンゴレ雨の守護者である山本武の首からもぎ取ろうと、ナイフの様に尖らせた蔓上の腕を構える。

「戴きましょうか。」

と、口にした直後だ。

『それはこっちの台詞だよ』

倒れていた筈の山本の顔が龍の顔へと変化し、首が伸びロイドに襲い掛かって来た。

「！」

突然の事に驚きを隠せないロイドは辛うじて攻撃を回避するが、直後足元から手が伸びて来、彼の動きを奪った。

「は！」

そして、地面の中からこの機を窺っていた様子のナーノが拳を突き立てロイドの下顎を突き上げて来た。

「ぐあああああああああ！！」

ロイドはナーノの一撃を受けると勢いよく吹き飛び、吐血を吐く。

そして、改めて目の前を確認すると、ナーノを始め山本、スバル、ティアナの三人が平然とした様子で立ち尽くしていた。

「ば、バカな！？」

思わず目を疑ってしまう光景にロイドはそう口にする中、四人は不敵な笑みを浮かべながらロイドの前に立ち尽くす。

「どういう事だ・・・――――貴様ら！？」

と、当然そう尋ねてくるロイドを挑発するかのように、ナーノが飄々とした口調で言ってくる。

「へへ。答えが知りたい奴はどこのどいつ？お前？」

「く！」

「答えは教えないけど♪」

「ふざけるなっ！ガキが！！」

ロイドは激情を露わに、ナーノへパイロキネシスを仕掛ける。

だが、その直後先ほどまで眼前に立ち尽くしたはずのナーノと残りの三人は一瞬のうちに霧のように霧散する。

「！？（幻覚！？）」

そう判断した次の瞬間、ダガーモードに変化させたクロスミラージュを持つティアナと、時雨金時の山本が頭上から攻撃を仕掛けてくる。

「何！」

「はあああ！！」

「五月雨！」

二人の鋭い斬撃がロイドの身体を切り裂いた。

「ぐあああ！」

大ダメージを受けるロイドだが、更にここで待ち伏せをしていたスバル・ナカジマの拳が飛んで行く方向に見てくる。

タイミングを計って、スバルはカートリッジを装填し、スピナーを回転させる。

「リボルバー・・・！」

「は！」

「シュートッツ！！」

高速スピナーの回転数を最大にして放つリボルバーシュートをその身に受け、ロイドは粉塵と共に空へと舞い上がる。

「ぶっは・・・」

そして、勢いよく地面へと叩きつけられる。

「う・・・・・」

立つ事もままなら位ほどに大きな深手を負ってしまった彼は、何とか視線だけを本体である四人の方へと移し、ほくそ笑んでロイドを見つめる山本たちの言葉に注目する。

「いや～～～マジで焦ったぜ。だが、まんまと引っかかってくれて何よりだ」

「引っかかっただと？」

「そうよ。あの時、あんたはナーノの作ったこれにまんまと騙されてたって訳」

ティアナがそう言って来ると、ナーノは無邪気そうな笑みを浮かべながら、後ろに倒れている偽物の自分達の身体を指さし、徐に指を鳴らす。

すると、倒れていたニセの四人の身体は藍色の炎が特徴の霧となって霧散する。

「な・・・！霧の幻覚・・・！？」

夢にも思っていなかった事態に思わず絶句しそうになるロイド。

何と、ナーノは今回の最大のピンチを今まで隠してた特殊な戦法・・・即ち、死ぬ気の炎を使った幻術によって窮地をチャンスへと好転させたのだ。

「そ言う事。でもナーノ。死ぬ気の炎が使えるなら、なんでもうちょっと早く使わないのさ？」

「へへ。切り札は最後までとっておくものですよ」

「けど、小僧が霧の炎を使えるとは俺も流石に思ってなかったぜ。誰に貰ったんだ、それ？」

山本はそう尋ねながら、ナーノが右手に嵌めている霧系のリングに着目すると、ナーノはリボーンであることは敢えて伏せたままこう返す。

「あなた方のよく知るアルコバレーノからですよ♪」

そんな中、他の三人とは一線を画すナーノの存在に疑念を感じ始めるロイド。

「（このガキ・・・ただの魔導師ではない・・・我らと同じ死ぬ気の炎を使いこなし、霧の幻覚を操る・・・・・・何者だ!?）」

と、ここでそんなロイドを凝視しながらナーノが笑みを浮かべて言ってくる。

「さぁ～てと・・・――――十回の裏の攻撃だ。僕らの反撃って訳だな」

ロイドは眉を顰めながら、身体を起こし鼻で笑ってこう返す。

「はっ。死ぬ気の炎を使えたぐらいで図に乗るなよ。その程度の炎、その程度の付け焼刃、修羅開匣とクオークスの力の前では何も変わらない」

と、そんな言葉が向けられると、ナーノは口元を緩める。

「付け焼刃・・・――――本当にそう思う?」

「?」

「よもやお前・・・僕が“霧”の炎と霧の幻覚だけを使える魔導師、とでも思っていたのかい?」

すると、ナーノは懐から長方形型のホルダーを取出し、蓋を取って

からロイドと他の三人に驚くべきものを公開する。

「何!!」

「ナーノ・・・あんた!?」

「それって・・・ひょっとして!」

四人が注目するもの・・・それはリボーンがナーノの誕生日プレゼントとして彼に送ったいくつもの雲系と霧系のリングがびっしりと納められたリングホルダーであった。

ナーノはそのうち雲系のリングを一つ取り出し徐に中指に嵌める。

「実を言うと、僕の本当の属性は・・・・・・こっちなんですよ」

その後で、ナーノは更に内ポケットに収められた山本が使うものと全く同じ、紫を基調とする彼のイニシャルが刻まれた専用の匣兵器を取り出した。

「雲属性の匣兵器!?」

山本は一瞬目を疑ってしまうが、紛れもなくそれは自分達がよく知る匣そのものだった。

「ええ。僕は生まれながらに雲と霧の二つの属性を扱える体質なんです。」

そう言って、ナーノは雲属性のリングに覚悟を具現化させた紫色の炎を容易く灯すと、ボックスを構えてロイドと向き合う。

「さぁ、こっからが勝負だ♪」

「ませガキが・・・調子に乗るなっ！！」

ロイドは木目人間を操りナーノに攻撃を仕掛ける。

その瞬間、ナーノは灯した雲の死ぬ気の炎をボックスに注ぎ込み、ボックスアニマルを召喚する。

「カモーン♪リュウタロス♪」

ナーノがボックスを開匣した瞬間、雲属性の炎を帯びて召喚されたのは、スバル達が度胆をぬくような信じられない生き物だった。

「ふえええええ！！！」

「これって！」

「おいおい・・・こいつはぶっ魂消た。白蘭と同じで、龍の匣兵器か！？」

そう・・・ナーノ・T・スクライアのボックスアニマルは、ミッドチルダや他の異世界ならいざ知らず、地球上ではその存在は伝説と化している龍そのもので、雲属性の炎を帯びているこの龍は正式名称を『紫炎龍』といい、ナーノは『リュウタロス』と呼称している模様だ。

リュウタロスは召喚されるや否や、向かって来る数十体の木目人間を凄まじいパワーで受け止め、ロイドも思わず目を見張る。

「龍の匣兵器とは驚いた・・・恐るべきパワーだ・・・しかし、驚くところはそこではない。」

そう言いながら、ロイドが注目したのは匣兵器を使う際、ナーノが使ったリングの方であった。

「これだけの匣ムーブメントを、よくもそんな“三流リング”で動かせる」

ナーノが指にはめているリング、それは精製度と呼ばれるリングのランクに置いてCランク以下に相当する所謂使い物にならないものであり、ナーノはそんなリングを使いながらも強力な力を有する自らの匣兵器を扱っているのだ。

「僕はお前達“不出来な人間”とは、生き物としての性能が違うんでね」

ナーノはクオークスであるロイドを、自分の力ではなく細胞増殖を受けて強化した人間と言う点から不出来な人間と皮肉り、その直後彼が嵌めていた雲のリングがナーノの身体を流れる波導に堪えきれずに粉々に砕け散る。

これを見て、山本は眉を細めながら心の中で呟く。

「（波導に堪えきれず、リングが砕けた・・・こいつ、雲雀みたいな奴だな）」

ナーノは別のリングを用意しようと、今一度先ほどのホルダーを取り出す。

「あ～あ。砕けちゃった・・・ま・いっか。まだまだ沢山持ってるし」

そう言いながら、ランダムに選んだ雲系リングを指嵌め、雲の炎を灯したナーノは、それをライジングハートの刀身へと注ぎ込み、刀身には雲の炎が灯った。

スバルとティアナはこの光景に思わず目を見張る。

「刀身に炎が・・・！」

「ナーノは、死ぬ気の炎の使い方を熟知してる・・・！？」

「おまけに、リングを使い捨てにするとこも大したもんだぜ」

と、山本がほくそ笑みながらそのように便乗する。

完全にナーノの方に形勢が傾き始める中、ロイドは歯を食いしばりながら蔓上の腕を鋭い剣のような形へと変形させる。

「言ってくれたな。だがクオークスの力は、お前のようなガキの力では倒すことは出来ん！！」

ロイドとナーノは向かい合い、お互いに距離を取りながら、タイミングを見計らって壮絶な鍔迫り合いを始める。

二人の頭上では、ナーノが召喚した紫炎龍のリュウタロスが木目人間の動きを食い止めており、その間にも二人の立ち合いは鋭さを増し続ける。

山本はこの状況を第三者視点で捉えながら、スバルとティアナとは明らかに一線を画す恐るべき戦闘力を秘めたナーノの力と剣捌き、体捌きに目を疑う。

「（澄んだ太刀筋だ。相当戦い慣れしてやがる・・・だが、あの小僧は本当に何者だ・・・）」

スバルも思わず息を飲んでその光景を見つめていると、ここでティアナが我に返って次のように言ってくる。

「スバル！山本さんも。今のうちに、増殖体を！」

「あ、おう！」

「そいつもそうだな。そんじゃ、俺も少々本気出させてもらうぜ」

三人はナーノが本体との戦闘に集中している間、増殖した木目人間の処理に当たるため前に飛び出し、山本は懐から初代雨の守護者が使用した武器が収められている匣を取り出す。

「朝利雨月、力を貸してもらうぜ」

そうして、雨の炎を流し込み匣から取り出すのは、三本の小刀であった。

「「はあああああ！！！」」

スバルとティアナはいつものコンビプレーで、数に物を言わせる木目人間の大軍を消耗しているとは思わせないほどの気迫と粘りで圧

倒する。

「九頭・川崩れ！」

そして、山本は空中に飛び上がってから取り出した三本の小刀に雨の炎を纏わせ敵に向かって投げつけると、その炎は竜の姿となって木目人間を飲み込んでいく。

ナーノはこの状況を確認し、山本たちに深い感謝の念を抱きながら満身創痍のロイドに無邪気な笑みを見せつける。

「へへ♪人生の先輩方が頑張ってくれてるおかげで、僕も本気で遣り合えるって訳だ」

「く・・・おのれ！」

ロイドは心底悔しがった様子で再度ナーノの懐に飛び込み激しい鍔迫り合いとなる。

一瞬の油断も許されない戦いの中で、ナーノが隙を見てロイドの懐に飛び込んでくる。

「ち！」

ロイドは精製度Ａのリングから純度の高い雲の炎を出して防御を張ろうとするが、ナーノはその行為をこう言ってくる。

「甘いよ」

すると、ナーノは腰に差している鞘を取出しそれにも雲属性の炎を

纏わせると、精製度では圧倒的に勝るはずのロイドのリングから出た炎をいとも容易く打ち破り、彼の顔面を叩きつける。

「ぐあああ・・・（精製度Aランクの俺の雲の炎を・・・三流リングの雲の炎で破っただと!?）」

地面に叩きつけられ粉塵が舞う中、ナーノは不敵な笑みを浮かべながら挑発するかのように言ってくる。

「立ちなよ」

「う・・・」

「上手くダメージを逃がしたね。」

ロイドは、年齢にそぐわず高すぎる戦闘力を誇り、つかみどころのない隙を生じさせない攻撃で攻めてくる魔導師であるはずのナーノに恐ろしさを覚え始める。

「く・・・お前・・・本当に管理局の魔導師なのか・・・これだけの力・・・これだけの炎・・・それがどうして?!」

「僕は管理局の魔導師じゃないよ。ボランティア魔導師、グルマディア団長・・・そして、ユーノ・スクライアの息子で、ナーノ・T・スクライアさ」

「ふふ・・・いいですね。面白くなってきた!」

そう言うと、ロイドはパイロキネシスの炎を性懲りもなくナーノへと仕掛け、ナーノはその一撃を見切って回避するが、直後彼の周辺

を覆い囲むようなギリギリの軌道で炎が乱雑に飛び交う。

「おっと」

ナーノはその炎の軌道に直撃しないよう一歩さがった状態で、不敵な笑みを向けるロイドの言葉に耳を傾ける。

「生憎この炎の軌道には、人が生きられるだけの隙間は無いんだよ」

「へぇ～」

と、あまり関心のないような態度で呟いたナーノは、忠告を受けているにもかかわらず躊躇もなく真っ直ぐに前進を始めた。

スバルと山本はこれを見て、一種の焦りを感じた。

「ナーノ！」

「マズイな。助けるか？」

しかし、ティアナは直ぐにこうも言って来た。

「待ってください。どうもあの子の様子が・・・」

ティアナがそう言って来た理由は、一重にナーノが敵の懐に飛び込んでいく様子にある。

彼はこの状況に及んで、嬉しそうに口元を緩めていたのだ。

これにはスバルと山本も目を見張ってしまう。

「笑ってる・・・？」

「小僧の奴、この状況を・・・楽しんでるって言うのか」

そうして顔を見合わせてから、もう一度ナーノの方に視線を向けると、ナーノは刀と鞘に炎を灯し、軌道を正確に読んで前進を続け、ロイドの懐に一撃を淹れようとするが、直後にロイドの複雑な動きをする炎がナーノに襲い掛かる。

「断罪の炎！」

一直線上に飛び込む炎を目の当たりにしたナーノは、左手の鞘を盾代わりに炎を受け止める。

「く！」

「は！ビンゴだ」

「確かに、全てを避けきれそうにはないかな。だから当たるのはこの一発だけって決めたのさ」

それを聞くと、ロイドは目を細める。

「ぬ！（一瞬にして、最低限のダメージで済むルートを見切ったのか・・・道理で最初から左手に防御の炎を集中させているわけだ・・・なんて子供（ガキ）だ）」

ナーノは懐に飛び込んでくると、刀を構えてロイドに攻撃を仕掛けようとする。

「もう逃がさないよ」

「ふん。それとこれとは話は別だ」

ロイドは超能力で空中へと舞い上がり、ナーノの攻撃を回避する。

「あ！」

と、思わずそんな言葉を漏らすスバルと、上空からナーノを見下ろすロイド。

「残念だな」

だが、ナーノは何故か一人口を閉ざして顔を伏せた状態のまま動こうとはしなかった。

不審に思いながらナーノを見つめていたロイドだが、直後背中に鋭くとがったものが突き刺さり、彼の顔がゆがんだ。

「！！な・・・」

「あれは・・・」

山本を始めスバルとティアナが上空を見上げた時、ロイドの背後には驚くべき光景が広がっており、険しい表情で体を貫いたものを一瞥し、ロイドは徐に後ろに目を向ける。

「な・・・なんだ・・・これは・・・！？」

後ろに振りかえった時、ロイドが目撃したのは・・・ナーノが召喚した紫炎龍のリュウタロスが自身が生み出した木目人間の炎を元に増殖させた爪によって木目人間諸共自身の身体を串刺しにしているというものであった。

ナーノは苦悶するロイドを足元から声をかける。

「言ったハズだよ。逃がさないって」

「あの・・・・・・龍か・・・・・・・」

「そう。お前が無暗に増やした増殖体の炎をもとに、リュウタロスがこれだけの爪を発生させたのさ。それはまるで、雲が大気中の塵を元に発生して、広がるようにね――――――」

「バカな・・・・・いくら雲属性の炎の特性が増殖に遭ったとしても、修羅開匣でもない・・・ましてやそんな三流リングの炎の力だけで、こんな量の有機物を増殖させられるなんて・・・・・どうかしてるぞ・・・！それとも、天才って言うべきなのか？」

と、ロイドが口にした最後の言葉を耳にした直後、ナーノは眉間にしわを寄せながらこんなことを言ってくる。

「ナンセンスだね。どいつもこいつも人の事天才、天才って。虫唾が走るったらないよ。僕は小さい頃から大学や訓練校でも、“流石は高町なのはの息子だから天才”だとか、“エースオブエースの血は息子に引き継がれた”とか、色々言われてきたけど・・・――――全く以てうざったかったよ。どうして、もっとお父さんの事を言ってくれないんだ・・・それに、僕の事を褒めるなら、“よく頑張った”。もしくは“努力が報われたね”って言わないと」

「小僧・・・」

「ナーノ・・・」

「あの子、そんな風に思って・・・」

山本を除く二人は、今までナーノが一重に天才と言う言葉を嫌う理由がそのようなことにあったとは夢にも思わず、不審に思っていたが、今ようやくその謎が明中になったと同時に、彼がエースオブエースと称される母のなのはを必要以上に嫌煙していることにも複雑な心境となる。

「さぁ、終わるよ。」

ナーノはそう言うと、霧系のリングに藍色に輝く炎を灯し始める。

「ここで霧の炎を灯したってことは・・・!?」

と、山本が口にした瞬間、ナーノは不敵な笑みを浮かべながら高速で分身体を作りだす。

「ナーノが分身した!」

「しかもこれ、全部実体よ!」

そう、ティアナが口にした通り、ナーノは霧属性の炎によってすべての分身を幻影から実体を持つものに形を変えているのだ。

「霧の炎の特徴は『構築』。残像や幻影にリアルティーを持たせる

！」

「見せてあげるよ。竜神の寵児・・・ナーノ・T・スクライアの取って置きの必殺技を」

すると、本体であるナーノを始め実体を持った分身体が一様に構えを取ると、次のように詠唱する。

「“天地を統べし覇たる力、その身に受け、鮮血を散らせ”」

凄まじい闘気と魔力が全身から溢れかえる様を見、山本はすぐさまスバルとティアナに警告する。

「離れるぞ！」

「「え！」」

そして、まさにその直後だ。

ナーノ達はロイドに向かって走り出すと、ユーノの友人で異世界「リュミエール」の世界国家騎士団・夜御倉龍児から直々に教わった龍人族に伝わる四つの秘奥義の一つを発動する。

覇龍と呼ばれる龍の力を宿した剣術で、ナーノ達は一斉に飛び上がると縦横無尽にロイドを斬り刻み、血を吹き出すロイドを最後は本体であるナーノが膨大な闘気と魔力、そして雲の死ぬ気の炎を刃に込めて斬り上げる。

「「「「「覇龍・砕桜剣！！！！！」」」」」

それによりロイドは魂を砕かれ鮮血を虚空に散らし、まるで魂の欠片が真っ赤に染まった桜の花びらのように舞う光景となってとどめを刺される。

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！」

ナーノの絶大な威力を秘めた一撃必殺の剣をその身に受け、ロイドは地面にたたきつけられる同時に、出血多量となって間もなく息を引き取った。

三人はこの光景を目の当たりにし、思わず目を疑い同時に技の凄まじさに絶句する。

「な・・・」

「う・・・そ・・・・」

「あの子は・・・・・・」

ロイドをこの手にかけたナーノは、罪の意識を多少なりとも感じながらも、仲間と自分自身を生かすために殺傷をやむなしと判断を下し、このような結果で勝負に幕を閉じる。

雲と霧のリングが砕け散り、ナーノは血で染まったライジングハートを元の鞘に納め、目の前の死体に向かってこう言った。

「悪いね。僕はスバルさん達と違って、甘くはないんでね」

現実主義者、竜神の寵児「ナーノ・T・スクライア」。

その強さは生半可なものではなかった！

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は嵐の守護者の獄寺君についてだ♪」

「イタリア人と日本人の血を四分の一受け継ぐクオーターな獄寺君は、ボンゴレ十代目ファミリー嵐の守護者で、ツナ君の右上だ」

「ダイナマイトを使った中距離戦闘を得意とし、それ以外にも冷静な判断力と頭脳明晰さから常にボスの傍らで幾度となく危機を回避してきた」

獄「十代目の右腕として、御側にお仕えして来て早十年・・・俺は死ぬまで十代目の側にお仕えするぜ！」

ユ「と、高い忠誠心の彼ですが、実は隠れた珍獣マニアと言う噂です」

獄「な！誰が珍獣マニアだ！？そんな陳腐な言い方をするな！」

ユ「じゃあ何て呼んだらいいんだい？ムツゴロウさん？それとも千石先生？」

獄「へ！俺の事は・・・“不思議ハンター”と呼べ！！」

その瞬間、場の空気が一気にしらける。

これには、獄寺も戸惑いを隠せなくなる。

獄「お、おい・・・何とか言えよ!!なんか気まずいだろうが!!」

ユ「（ツナ君も・・・いろいろと大変そうだな・・・）」

と、心の中でツナの苦労を労うユーノであった。

ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活

ハ「はい！みなさまお待ちかねの、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活のコーナーです！」

リ「いつも無駄に元気だな、ハル」

ハ「はい！ハルは今も昔も元気がチャームポイントですから」

リ「元気だけな・・・」

ハ「何か言いましたか？」

リ「なんでもねぇよ」

ハ「そうですか・・・それでは、今日のゲストもまたとっても元気な人に来てもらいました。一護さんの好敵手、三番隊隊長の死神さん。阿散井恋次さんです！」

紹介をすると、ゴンドラに乗った恋次が高笑いを浮かべて登場する。

恋「なははははは!!!ようおめぇら!ちゃんと三食喰ってるか？朝飯抜いてるようじゃ、力がでねぇぞ」

リ「松岡修三みたいな台詞だな。十年もすると一段と暑苦しさが増した気がするな」

恋「な！俺はそこまで暑苦しくなんかねェぞ。大体、赤ん坊のてめーにんなこと言われたくもねぇよ」

ハ「ほらほら、お二人とも喧嘩は止めてくださいね。では、気を取り直して・・・恋次さん自らによる自己ピーアルをしてもらいます」

恋「うおおおおおおお！！俺様の名は阿散井恋次だ！護廷十三隊三番隊隊長を務める粋な男だ！俺の目標は、朽木隊長を超える事！！！なははははは！！！！」

あまりに元気な恋次にたじたじとなるハル。

ハ「ほ、本当にいつもパワフルですね・・・恋次さんには、弱点なんかなさそうですね」

すると、それを聞いたリボーンがこう言ってくる。

恋「あるぞ。恋次の弱点」

ハ「はひ？本当ですか？」

恋「バカ言ってんじゃねぇよ。俺に怖いものも弱いところもあるかってんだ！ははははは！！」

リ「一護から聞いたぞ。お前、辛い物が苦手なんだろ？」

恋「な！・・・何を言ってる・・・辛い物ぐらいどうってことないつーの／／／」

顔を引きつりながら恋次が合えてそう言うと、それを幕下で聞いていたチビキャラの一護が激辛おにぎりを持ってくる。

一「だったら、こいつを喰って美味いって言ってみろよ。辛い物、苦手じゃないんだろ・・・」

暗いオーラを出しながら不敵な笑みを浮かべる一護。

恋次がおにぎりを受け取ると、平静を保って言ってくる。

恋「たりめーだ！いいぜ、食ってやるよこんなもんの一つや二つ！」

と、恋次は緊張した状態で徐に握りしめたおにぎりを一口。

その瞬間、恋次の顔が真っ赤となり、火を吹き走り回る。

恋「のおおおおおおあああああああああああ！！！かれええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」

ハ「はひ！！恋次さんの口からファイアーが飛び出してます！！」

リ「やっぱ辛いもんが苦手だったか」

一「たくだらしねェ奴だ」

ハ「なんだか大変なことになってきましたが、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活のコーナーはまた次回！シーユー、ア

ッゲインです！！！」

恋「おおおおおおおおおお！！！！！カレー！！！！！！！！！！！！！」

と、恋次は暫くの間一人で暴走をしていたそうな。

次回予告

リ「山本が加わったこの闘いは、ドチートなナーノの必殺技によって幕を閉じた。現実主義者であり時として容赦のない態度をとるナーノに戸惑いを見せるスバル達。」

「一方、別の異世界で捜索を続けるフェイト達は、あの腰抜けなアホ牛と遭遇を果たす・・・ある意味気の毒な奴らだ・・・」

「次回、ユーノ・スクライア外伝・絆・・・『アホ牛と雷』。みんな、死ぬ気で見ろよ」

登場人物

ロイド

声：富田翔
炎の属性　：　雲
所持リング　：　雲系リング（精製度Ａ）
所持匣　：　雲カラマツ
事実上のクオークスのリーダー的存在であるメンバー唯一の男。普段は冷静さを装っているが、戦闘時には激情を露わにパイロキネシスを使いこなす。右耳のドリームキャッチャー型のイヤリングを指

で弾く癖を持つ。埋め込まれた匣兵器はカラマツで、全身が木目模様となり、手足が蔓の絡まったような形となっている。傭兵としてケリーに雇われ入るが、本当のところはそのケリーと結託している財団Xに再び頭を下げさせることが目的にあった。ルヴェラにおけるナーノ達との戦いで追い詰められたところ、修羅開匣を発動し、圧倒的な力の差を見せつけが、それはすべてナーノが仕組んだものであり、霧と雲の死ぬ気の炎を駆使したナーノと一対一の攻防を繰り広げた末、最後はナーノの覇龍・砕桜剣の前に倒され息を引き取る。

雲カラマツ（ラード・ジャッポーネス・ヌーヴォラ）

クオークスのロイドの左胸に埋め込まれており、修羅開匣することで全身が木目模様へと変化し、四肢が蔓の絡まった形へと変化する。蔓上の脚を地面に差し、養分を吸うことによって枝状の腕から実を生やす。その実から無限に増殖する木目模様の兵士を生み出す能力を持つ。また、蔓を硬化させることで剣のような形にすることが出来る。

ミーナ

声：高梨臨

超能力兵士「クオークス」の女性。ただ一人パイロキネシス・サイコキネシス・サイコメトリーの三種の超能力を使いこなせるため、非常に戦闘力が高いが、その分肉体的にはひ弱な体質。自慢の超能力を駆使して、ナーノ達を追い詰めるが、途中で割り込んできた山本によって昏倒させられる。

シオン

声：人見早苗

クオークスの女性。クオークスこそ進化した新たな人類であると絶対の自信を持つ、サイコキネシスの使い手。ルヴェラにおけるナーノ達との戦いで山本とナーノの斬撃を受けて倒された。

用語

クオークス

超常能力を増幅する細胞処置を受けた超能力兵士。パイロキネシス、サイコキネシス、サイコメトリーといった様々な超能力を使いこなす。嘗ての財団Ｘの投資対象でもあったが、現在は投資を打ち切られ、ケリーや財団Ｘの使者からは骨董品と呼ばれ、データ集めのための捨て駒として扱われた。

修羅開匣

体に埋め込まれた匣を開匣することで自らの肉体と匣兵器を合体させること。修羅開匣は匣アニマル（匣プラント）の持つ特殊能力を人間自身の死ぬ気の炎の力で発動することで、匣アニマルの特殊能力をより強力に使用することができる。

アホ牛と雷（前書き）

リ「ちゃおっす。束の間の平和を過ごしていたユーノ達の前にやってきた、ボンゴレ十代目ファミリーのボスであるツナと妻の京子。そして、ボンゴレを狙って次元世界に繰り出してきたスパジオファミリー」

「異世界に飛び散った守護者たちを捜索するため、動き出すユーノ達だが、敵も本格的に動き始め一触即発の状態だ」

「そして、陰で糸を引く財団Xとケリーと手を組んだグリードのカザリ。不敵な笑みを浮かべながら、ケリーは何を企んでいやがる？」

「その真意はまだはっきりしねぇが、俺達は否応なく戦いの渦に巻き込まれていく運命にあるようだ・・・――」

アホ牛と雷

〈ケリーＳｉｄｅ〉

機動六課とスパジオファミリーとの異世界における本格衝突の数時間前、ケリーは今回の戦闘を想定し、自分直属の部隊のうち、第８部隊の隊長を務める男の元へと訪れる。

カザリが壁に寄しかかって待機する傍ら、ケリーは真意の掴めない笑みを浮かべながら扉を開く。

「邪魔するよ♪」

中に入ると、数本の酒瓶が無造作に転がっている。

と、その時。

「誰だ？」

薄暗い部屋の奥から聞こえてくる若干声量の高い男の声。

ケリーはこの部屋の主の声を訊き、笑みを浮かべながら返事を返す。

「僕だよ。警戒しないで、アクセル君」

すると、部屋の主である第8部隊隊長・アクセルが酒瓶を置くと、薄暗い部屋の奥からケリーの元へと歩み寄ってきた。

「・・・ケリーか。何か用か？」

訝しげな表情でじっとケリーの顔を見つめるアクセルと、真意を掴ませない笑みでアクセルを凝視するケリー。

「ちょっと、頼みがあるんだけど・・・いいかな？」

「報酬次第によるな。」

「ふふ。勿論。たんまりと弾むつもりだから」

まるで鎌をかけるのではないかと、アクセルはその不気味なまでの底の見えない笑みにそう感じるが、暫くの前を置いたのち頭をかきながら返事をする。

「そうかい。いいだろう、聞いてやるよ」

「ありがとう。まぁ、踊る火の風のアクセル君だからこそ頼める重要な仕事なんだけど・・・ちょっと、データ集めの為に異世界まで飛んでもらえないかな？」

「データ？」

「そ。汚れた公認犯罪組織・時空管理局自慢の部隊、機動六課の魔導師に関する詳しいデータが欲しいんだ。」

「ああ。お前が必要以上に忌み嫌うあの組織のね」

「これが上手くいった暁には、特別報酬として・・・これぐらいは出すつもりだよ♪」

ケリーは右手の中指と親指の先端を当てて金額の大きさを示し、アクセルも納得した様子ではあるが、腑に落ちない部分もあった。

「悪かねぇが、どうも腑に落ちネェ。データが欲しいなら、俺じゃなくても他の部隊の奴等でも事足りると思うがな」

「君を信頼しているからこその頼みなんだ。お願いだよ、アクセル君」

またしてもアクセルが必要以上に警戒する底知れぬ笑みでそう言ってくるケリー。

アクセルは眉間にしわを寄せながら、暫くの間ケリーのその笑みを凝視し、そして観念したかのように溜息を吐く。

「・・・はぁ～わーったよ。折角のボーナスもあるしな・・・」

「ふふ♪じゃ、後は任せるよ」

ケリーは頼みを聞いてくれたアクセルにそう言うと、背を向け徐に部屋の外へと出て行った。

部屋から出てきたケリーを一瞥し、カザリは不敵な笑みを浮かべて尋ねる。

「どうするの、一体？」

「ふふ♪まぁそのうち判るよ」

ケリーはカザリ同様不敵な笑みで返した後、自分の部屋へと続く廊下を歩いて行った。

さて、ケリーが部屋からいなくなった後で、頼みを聞いたアクセルはどうしているのかと言えば・・・

「ふん」

鼻で笑い、部屋の奥へと歩いて行き、敢えてカーテンによって閉ざしていた空間を解放し、明かりを取り込む。

カーテンの向こう側には、アクセルを慕う部下達数名が待機しており、アクセルが酒を飲み始めると、一人の部下がケリーに関してこう言って来た。

「相変わらず何を考えてるのか、わかったもんじゃねぇな・・・ケリーの奴は」

「仕方ねぇさ。俺たちとは生まれ方も全く異なった人ならざる存在なんだ。マイセルフデザイア・・・時空管理局と言うバカげた組織の都合で作られ、無碍にされ挙句“失敗作”と称され破棄された人造生命・・・哀れな男だぜ」

と、別の部下が便乗し言って来ると、聞いていたアクセルは瓶を口から話し、こう言ってくる。

「同情は止せよ。奴に同情の言葉をかけるくらいなら、溝川の水を

かける方がましだ。」

そうして、アクセルは空となった酒瓶を放り投げ、徐に立ち上がる。

部下たちは些かの不安を抱きながらアクセルに尋ねる。

「本当にやるんですか、アクセル隊長」

「暇つぶしがてら、あいつが忌み嫌う組織に属する魔導師って奴の力が見て見たくなってよ。それに、良い小遣い稼ぎにもなるしな」

「なら、早々に支度をしようじゃありませんか。獲物が遠くへ行く前に」

「そう焦るなって・・・――楽しくやろうぜ」

すると、アクセルは指を鳴らしてから、自分の周りに円を描くように地面から炎を発火し、その炎に囲まれながら不敵な笑みを浮かべる。

「殺そうが殺されようが、所詮は暇つぶしだろう？」

アクセルと言うこの男、一体この後どんな動きを見せるのか？

◇

〈ナーノチームＳｉｄｅ〉

それから数時間後の異世界での戦いにおいて、第２３管理世界「ルヴェラ」で激闘を繰り広げたナーノチーム。

超能力兵士クオークスのリーダーで、身体に埋め込まれた雲カラマツを修羅開匣をしたロイドを打ち破ったのは、若干１６歳と言う年齢でありながらその戦闘力は規格外な男、ナーノ・Ｔ・スクライアその人だった。

ナーノはロイドを斃した事を確認すると、空に浮かんでいた自分の匣兵器である紫炎龍「リュウタロス」を匣へと収納し、懐に仕舞い込む。

そして、血塗れとなって息絶えているロイドの方へと歩み寄り、ぴくりとも動かないその体を凝視する。

「・・・・・ふん」

スバル達は顔を見合わせながら、余りに無表情なナーノに戸惑いを隠し切れない様子だった。

「ナーノ？――・・・」

と、ここでナーノが徐にしゃがむと、死体のロイドが指にはめている精製度Ａランクの雲系リングを押収する。

「戦利品としてもらっておくよ」

ナーノはリングを押収すると、それをホルダーの中へと仕舞い込み、今一度血で染まった刀を舐めるように波紋を凝視する。

この時、山本武は心の中でナーノのあまりに強すぎる戦闘力とマフィア顔負けの残酷さにこう呟いた。

「（信じられねぇ・・・――――修羅開匣を使った超能力兵士を・・・精製度じゃ圧倒的に不利なリングでぶち破った・・・おまけに・・・――――）」

と、山本はナーノの側に転がるロイドの死体を凝視し、険しい表情を浮かべる。

その時、ティアナが恐る恐るナーノに対して声をかける。

「ナーノ・・・あんた・・・殺しちゃったの？」

ナーノはティアナのその問いを聞くと、無表情に顔を斜めにした状態で口を開く。

「――――修羅開匣をした時点で、あの男が死ぬつもりであったことは明白でした。それに、この場にいる自分とあなた方の命を延命するために、デリートは止む無しと、このような判断で臨みました。それより、他のクオークスの女性は？」

「え・・・？あ、うん・・・大丈夫。気絶してるだけだから・・・」

冷静なまでに淡々と言葉を並べるナーノの問いかけに、スバルは戸惑いながら煮え切らない様子で気絶するクオークスの二人に顔を向ける。

ナーノはこの時のスバルの態度を見、更にこんな風に言ってくる。

「そうですか。だったらもう少し嬉しそうな顔をしたらどうです・・・――――“生きてるん”でしょ？」

「そりゃそうだけど・・・だけど！だけど！！」

「言いたいことは分りますよ。だからって“何故殺す必要があったんだ”、でしょ？」

スバルは思わず口ごもらせ複雑な表情を浮かべる。

ティアナはスバルの気持ちと一緒に、冷静にナーノに問いかける。

「分かってるなら、どうしてよ？確かにそいつらはマフィアで、罪もない人達を沢山殺してきたことに違いなけど・・・それでも、罪を裁くのは法律よ。殺していい道理なんてないわ！」

「正論ですね。“戦場以外”でしたら」

「え？」

「・・・――――」

ティアナはその声妙に対して怪訝そうな顔を浮かべ、一方で山本は複雑な想いを孕んだような顔つきでナーノの話に耳を傾ける。

「いいですか？戦場じゃ、小奇麗なルールなんか何の意味もありませんよ。勝つか負けるか、生きるか死ぬか。二つに一つです。」

それを聞くと、ティアナはこの上もなく身も蓋もない発言に耳を疑いかねる。

「あんた・・・それじゃ身も蓋もなさすぎるじゃない・・・！」

「それが世の中ですよ。“生きるとは、何らかの形で相手に害悪を与え、自分に利益をもたらす”ってことなんです。山本さんもそうでしょ？自身と仲間の身を生かす為に、時として非情になることも多いはずですが・・・」

ナーノの問いかけに対し、山本は手にしていた時雨金時を強く握りしめ、低い声で肯定の言葉を返す。

「・・・ああ」

「山本さん・・・」

煮え切らない様子でいるスバルとティアナ。

生き方の違いや生きてきた環境に大きな違いはあるにせよ、若干１６歳と言う若さでこのような思慮にたどり着くものなどそうはいない。

二人からすれば、ナーノ・Ｔ・スクライアと言う男はあまりに異常だった。

と、そんな二人と山本を一瞥しながらナーノは刀に飛び散ったロイドの血を払うと、背を向けこんな風に言ってくる。

「・・・良い子になろうなんてしないでください。どんな理由があろうと、状況であろうと、戦争なんて始めた瞬間から――――――――――どっちも『悪』ですから」

「「――――！」」

最期に言い放った「悪」という言葉を聞き、二人は思わず愕然とした。

「小僧・・・――」

山本自身、これには心底意外な顔を浮かべる。

若干１６歳の少年が戦いにおいて非常にシビアに敵味方関係なしに「悪」と言う風に決めつけているとは思わなかったからだ。

そして、その言葉を言い放ったナーノは徐に歩きはじめ、心の中で先ほどのような考えに至る様になった切っ掛けとなった二人の男の名前を呟く。

「（そうさ・・・戦いなんて、やるからにはみんな悪さ。そうでしょ・・・――上条さん。一方通行（アクセラレート）さん・・・――）」

その二人の男、上条当麻と一方通行こそが、ナーノの人格形成の一端を担ったとは、この時ユーノ達も思ってなどいなかった――

◇

〈三人称Ｓｉｄｅ〉

さて、これで残す捜索師弟のボンゴレの守護者は雷・晴・雲・霧の四人となったが、そのうちの雷の守護者の方に動きが見られた。

第１６管理世界「リベルタ」・・・――ヴァンデイン・コーポレ

ーションと呼ばれる財団Xお抱えのデバイスメーカー兼ガイアメモリ製造会社があるこの世界で、ボンゴレ雷の守護者とその幼馴染が確認された。

その幼馴染、辮髪を結わえカンフー服を着用した15歳の少女、イーピンは自分達を探しているスパジオファミリーの追手を警戒しつつ、樹の陰から草陰に身を潜める雷の守護者に声をかける。

「・・・ランボ。ランボ」

と、イーピンが声をかけているにもかかわらず、彼女と同い年で乳牛柄模様が特徴な服を身に着けた天然パーマの男、ツナからも心の中ではヘタレと称されるほどの泣き虫、雷の守護者ランボは泣きべそをかいたまま頭を押さている。

「うううううう／／／／／／」

イーピンは相変わらずなランボの態度に呆れながら、必死で励まそうとする。

「もう・・・しっかりしてよ、ランボ！きっと大丈夫だから」

「もう無理だよイーピン／／／／／／こんな訳の分からないところで、俺達みんな死ぬんだ・・・／／／／」

と、あまりに弱腰なランボの言葉を耳にすると、温厚なイーピンもさすがに我慢の限界を迎え、ランボの胸ぐらを掴んで言って来た。

「あんた！それでも男の子！？いつまでもべそかいてると、関節技で私が望み通りあの世に逝かせてあげる！」

こう見えて、イーピンは嘗て中国拳法と暗殺技を得意とする凄腕のヒットマンで、現在は稼業を辞めて大学進学の為に日本に滞在しているが、その実力はいまだ健在である。

「ひい～～～／／／それはそれで勘弁して／／／」

思わずランボも顔を真っ青に染めて弁解する。

「じゃあ、諦めずにこの場を乗り切るよ。必ず沢田さん達が助けに来てくれる」

「う、うん・・・／／／」

イーピンは、この情けないランボを連れて、スパジオファミリーの追手を上手く切り抜け移動を開始する。

一方、同じくこの世界へと調査にやってきたフェイト達ライトニング隊の三人も、タイミングとしてはあまり好ましくなく、周囲は既にスパジオファミリーの人間が至る所に散らばっており、迂闊には進めない状況が続いていた。

フェイトはエリオとキャロ、フリードと共に物陰に隠れながら、スパジオファミリーの追手を警戒し身を潜める。

「ここら一帯は、みんなそうですね・・・」

「ツナから聞いた話だと、スパジオファミリーは自由に異次元を行き来できる力を持ってるそうだから、多分私達と同じで、ボンゴレの守護者たちを探し出して殺そうとしているんだ」

「だとしたら、私達の方が早くに見つけ出さないと、守護者さん達が・・・！」

「うん。遠回りして、ここは退けよう。」

「「はい」」

フェイト達は迂回ルートを決定し、上手く包囲網を抜けて走り出す。

さて、この世界に捜索の足を伸ばしていたのは、アクセル率いる第８部隊のものだった。

工場跡付近に拠点を構え、待機するアクセルの元に、部下からの報告が届いた。

「アクセル隊長！」

アクセルの元へ走ってきた部下は早速入手した情報をアクセルに伝達。

「ほう～～そいつは朗報だ。すぐに向かうわ」

「はっ！」

報告を終えた部下は別の場所へと向かい、アクセルは一人ほくそ笑み首を鳴らし始める。

気になったアクセルの忠臣がアクセルに尋ねる。

「どうしましたか、アクセル隊長？」

「ウサギが網にかかったらしい」

「俺達も行きますか？」

「いや、俺一人で十分だ。別命あるまで、現状維持」

そう言うと、アクセルは靴底から嵐属性の炎を噴射させ、空へと舞い上がる。

勢いよく舞い上がる粉塵に目をやられないようにしながら、忠臣は頭上に浮かぶアクセルに声を上げる。

「隊長！？」

すると、アクセルは不敵な笑みを見せてこう返す。

「こういう時は、他のウサギもかかりやすい」

アクセルが動き始めた頃、一先ず人気のいない公園へと立ち寄り、フェイトはエリオとキャロを林の中で待機させ、暫くしてから二人の元へと戻ってくる。

エリオは戻って来たフェイトに外の様子を尋ねる。

「フェイトさん。どうでした？」

「うん。やっぱり守護者の人は、まだ見つかってないようだ」

「そうですか」

「ただ、これほどの監視の中、見つかっていないとすると・・・一体」

眉間にしわを寄せながら深く考えるフェイト。

と、その時。

「キュク～！」

フリードが空を見上げた時、何かの存在に気付いた。

「フリード、どうしたの？」

「は！二人とも、隠れて！」

すると、フェイトは直後に殺気を感じて二人と共に物陰に隠れて身を潜め、頭上の方へと注目する。

三人が空を見上げた時、見えてきたのは嵐属性の炎を灯して空中を飛んで行く、黒いフードで全身を覆った赤い髪の毛が特徴のアクセルだった。

「あれって・・・死ぬ気の炎・・・？！」

「もしかして、スパジオファミリーの！」

「何か見つけたんでしょうか？」

三人はアクセルが飛んで行く方向に目を向ける。

と、その時持っていたリングセンサーが強い反応を見せ始め、これを見たエリオが思わず目を見開いた。

「フェイトさん！」

「この反応・・・と言うことはまさか！？」

虫の知らせを感じた三人は、すぐさまこの場を離れてアクセルが飛んで行った方向へと走り出し、リングの反応を追った。

その頃、そのリングこと、雷のヘルムと言うものを所持する守護者であるランボとイーピンはと言うと、追っ手を撒いて林の中で一息をついていた。

「はぁ～～～ここまでくれば、何とか・・・」

ランボはその場に座り込み、安どのため息をつくがイーピンの方は警戒を緩めず辺りを窺う。

「油断しちゃ駄目。まだ安心はできないよ」

「ふう～～～俺もう～くたくたで疲れたもんね・・・――――お腹も空いて来たし・・・もう最悪～ねぇ。イーピンはお腹空かないの？」

腹の虫がおさまらないでいるランボ。

イーピンはその言葉を耳にしながら素っ気なく返事を返す。

「今はそんなこと気にしてる暇ないわ。ランボも少しは緊張感ぐらい持って」

「はいはい・・・分かってますよ」

とは言っても、ランボの腹の虫は一向に収まるところを知らず、徐々に癇に障るぐらいにまで音を大きくしてくると、イーピンは呆れながら懐に手を伸ばす。

「ランボ」

「？」

「はい、これ」

そう言って、イーピンが手渡したのは特製の中華まんが入った包みだった。

ランボは彼女が食べ物を恵んでくれたことに大いに目を輝かせる。

「え！いいの♪」

「お腹、空いてるんでしょ？私は平気だから」

「やったぁ～～～！！イーピン、君は神様だよ！！」

そう言いながら、ランボは中華まんを夢中で頬張り始め、イーピンはそんな幼さが残るランボの事をまるで母親のような視点で見詰める。

「もう・・・ランボは大袈裟なんだから」

すると、ランボは中華まんを食べながら、イーピンにこんなことを言ってくる。

「あ、そうだ。もし敵が攻めてきたら何でも言いなよ。俺様が君の事を守ってあげよう。君も一様、女の子だからね」

「一応ってなにさ?洟垂れ小僧のアンタなんかに守れるの?」

「失礼なこと言うな。俺様もこう見えて、ボンゴレ雷の守護者。いざと言う時は、女の子の一人や二人ぐらいどうって・・・」

と、自信に満ちた気障ったらしい笑みを浮かべながらそう話していたランボだが、直後にイーピンが愕然とした声を上げて来た。

「あっ!」

「あっ、て何・・・?」

ランボが怪訝そうな顔でイーピンと同じく頭上を見上げてみると、そこには嵐属性の炎を帯びた鎌を構えるスパジオファミリーの尖兵がいたのだ。

「ひいいいいい!!!」

「スパジオファミリー!」

泣き叫ぶランボと立ち向かう姿勢のイーピン。

と、ここで尖兵の一人が嵐属性の炎を帯びた鎌から一撃を放つ。

「つらああ！」

「逃げるよ！」

イーピンは咄嗟にランボの手を握って飛んできた炎を回避し、その場から走り出す。

追っ手は攻撃の手を緩めず空中から先ほど同様炎を飛ばしてくる中、またしてもランボが弱腰な態度で泣き叫び出す。

「ひいいい！！やっぱり俺様には無理／／／／／／」

「もう！さっきまでの威勢は何処に行ったの！？私ランボのそう言う性格が嫌いなんだけど！」

「ひいい～～～／／／殺される～～～／／／／」

昔から泣き虫であったこの男だが、大人になっても根本的なところは何一つ変わっておらず、よくこんなんでボンゴレの守護者が務まるかとさえ陰口を叩く者さえいる。

ランボとイーピンが果たしの中に隠れようとすると、尖兵は炎を纏った一撃を飛ばそうとする。

「そこかっ！」

「ランボ、離れて！」

「何するの！？」

すると、イーピンはランボから離れると、身体能力を活かして木の幹を蹴って行き、空中へと舞い上がる。

「アイヤー！！」

そして、高く舞い上がったその瞬間、イーピンは強烈な蹴りを尖兵の顔面に叩き込んだ。

「ぐおお！」

イーピンの蹴り技を受けて撃墜される仲間の様子に目を疑うもう一人の仲間。

「何！」

「はっ！」

イーピンは続けざまにもう一人の尖兵の元へと飛び乗り技をかけ始める。

「白（ハク）・撥（ハッ）・中（チュン）！」

暗殺技の一つでもある「白（ハク）」の掛け声と共に相手の首に足を掛け、「撥（ハッ）」の掛け声で相手の片腕に足を、「中（チュン）」の掛け声で相手の腕に背中を預け、最後に技名と共に相手の両腕と首を一気に圧し折る技がかかる。

「高三元（ハイサンゲン）！！」

「ぐおおおお！！」

その技を受け、文字通り関節をやられた尖兵は武器と共に地面へと撃墜していき、ランボは勝利を確信して拳を握りしめる。

「よし！これなら」

が、その直後にランボを背後から狙っていたもう一人の尖兵が鎌を振り上げて甲高い声を発してきた。

「ハハハハハハ！！！！！」

「うひゃあああああ～～～！！」

「ランボ！」

絶体絶命のランボ。

「早く！逃げ・・・！」

イーピンが駆け出してもこの距離からは間に合わない。

「貰った！！」

「あいや～～～／／／／／／」

ランボは自分のこれまでの人生を走馬灯のように振り返りながら情けない声で泣き叫ぶ。

と、その時だった。

「はあああああ！」

「「！」」

唐突に声を上げながら飛んできた金色の閃光が攻撃を繰り出そうとするスパジオファミリーの尖兵を撃墜したのだ。

「ぐおおお！」

呆気なくその場に倒れる尖兵の姿に、思わず目を疑うランボとイーピン。

だが、もっと驚かされるのはこの後だった。

その金色の閃光から姿を現したのは、ザンバーフォーム形態でバリアジャケットに身を包んだフェイトと、一緒に駆けつけたエリオとキャロだった。

「ふう～～～間に合った」

「大丈夫ですか？」

「あ・・・あなた達は・・・」

イーピンは摩訶不思議と言わんばかりの表情でまじまじと三人の姿と白い竜であるフリードを見つめる。

と、その時ランボが何かに気付いた様子で表情を一変。

「な！も、もしやあなた方は・・・！！」

ランボの反応を窺い、予めこうなる事は分っていた三人は苦笑いを浮かべ、エリオがランボに尋ねる。

「えっと・・・僕達の事、ひょっとして分りますか？」

「間違いない・・・魔導師のフェイト氏に・・・エリオ氏・・・キャロ氏・・・それに」

「キュク～」

「フリードっ！うおおおおお！！！」

ランボは十年ぶりの再会となる三人とフリードの姿に歓喜の声を上げる同時に、そのフリードを自分の胸元へと抱き寄せきつく締め上げる。

苦しむ様子のフリードを心配する傍ら、イーピンとキャロは感激のあまり我を忘れているランボに問いかける。

「ら、ランボ！？あんた大丈夫？」

「あ、あの。兎に角落ち着いてください」

すると、フェイトが一度冷静に二人の身元を確認する。

「ボンゴレの雷の守護者さんと、お連れの方でよろしいですか？」

「え・・・どうして私達の事？」

「それを話すと、かくかく云々・・・――」

エリオは二人にもわかる様に、これまでの経緯と及びツナ達との出逢いを話し、ほどなくして二人は話を理解し納得の表情を浮かべた。

「ボンゴレが俺たちを探してる？」

「じゃあ、沢田さんと京子さんはあなた方のところで」

「はい。ですから、私達がその要請を受けてリングの波長を追って異世界に捜索に来たんです。そしたら予想以上に敵が多くて、探すのに苦労しました」

「そうでしたか・・・遠いところからありがとうございます。ランボの幼馴染で、私イーピンいいます」

「ボンゴレ雷の守護者で、ランボです。しかし驚きました・・・――あの時出逢った方々と、またこうして違う形で巡りあえるとは。懐かしい・・・本当に懐かしいです」

ランボは懐古主義に走ったような眼差しで三人を見つめると、思わず三人もほくそ笑む。

「へへ♪なんか、照れちゃうねエリオ君」

「そうだね」

「さぁ、こんなところにいるのは危険だから、六課に行こう。ツナ

達も一緒だから。色々と話しておかないこともあるから」

「は、はい！」

「わかりました」

ランボとイーピンはフェイト達の指示に従い、この場から離れて六課へ戻ろうと決め込むが、その直後彼女たちを発見したあの男の声が耳に入った来た。

「やっふ～～～」

「「「「「！」」」」」

フェイト達が頭上を見上げると、現れたのは嵐の炎を足元に灯した第８部隊隊長、アクセルだった。

「ボンゴレの守護者って言うのは、腰を抜かして方々へ逃げたって聞いたが、これはまた可愛いのが来たね。おまけに、エリート雰囲気漂う魔導師の美人も一緒か」

「あれは・・・！」

「嘘だろ！？」

アクセルの姿を視認し、思わず目を疑うランボとイーピン。

「雷の守護者には間違いないようだが・・・なんだよ写真で見るよりガキじゃねぇか。」

アクセルはそう言うと、警戒するフェイト達と恐れおののき青ざめた顔を浮かべるランボとイーピンに視線を向けたまま、徐に地面へと着地する。

「つくづくボンゴレってのは、変わってるよね～～こんなガキんちょを戦場に立たせるなんて。人権もクソもないな・・・・・あ・それはオタクら管理局も一緒か。９歳の子供なんて、次元世界を揺るがしかねない年端もいかないガキを殺し合いの現場によ」

「く！」

あからさまに管理局アンチの言葉を向けてくるアクセルの態度に険しい表情を浮かべるフェイトと、気持ち的には全く一緒のエリオとキャロはそれぞれ構える。

三人がアクセルに敵意を向ける中、当のアクセルは余裕の笑みを崩さず淡々と話を続ける。

「まぁいい。だが、お前らと殺り合うと“戦闘”って言うより、“お仕置き”になっちまいそうだな。子供と女相手に大人げないが」

「誰ですかね、あれは？」

「分からない・・・だけど、この殺気・・・気を抜けばやられるっ！」

「「！」」

エリオとキャロはフェイトでさえ冷や汗をかいてしまうほどの男の殺気を肌でひしひしと感じながら、改めてその事を聞かされ表情を

強張らせる。

と、直後にランボが徐に口を開いた。

「アクセル・・・！」

「アクセル？」

キャロが尋ねてくると、今度はイーピンが説明をしてくる。

「スパジオファミリーの実行部隊の一つ、第８部隊の隊長です。“踊る火の風アクセル”・・・名のあるヒットマンやマフィア幹部を何人も葬ったほどの凄腕の男です・・・！」

そう言うと、聞いていたフェイト達は不敵な笑みのアクセルの顔を凝視し、警戒心を強め、ランボに至っては唾を飲み込みこう口にする。

「奴に潰された組織は、両手の指にでも足りない・・・／／／」

「そんなに・・・怖い人が・・・／／／」

と、その時フェイトがエリオとキャロの二人に次のように指示を出す。

「エリオ。キャロ。二人を連れて下がって。私が相手になる」

「フェイトさん！」

「大丈夫。そう簡単にやられないよ。急いで」

そう言って、フェイトはサイズフォームのバルディッシュをハーケンフォームへと変形させ、エリオは彼女の事を信じてランボ達を下がらせる。

「わかりました。ランボ、イーピン。キャロも下がるよ」

「わ、わかりました・・・」

「あの、気つけて。容赦ないですからそいつ！」

イーピンが補足的にいそう言って来ると、フェイトは笑みを浮かべて感謝の言葉を口にする。

「うん。ありがとう」

そして、改めてフェイトは戦いの眼差しとなり、余裕綽々とばかりに立ち尽くすアクセルに対して武器を構える。

「お～。先ずは金髪のお姉ちゃんが相手か。いいね～～～鼻の下が伸びるわ」

「時空管理局執務官。フェイト・T・ハラオウン。今すぐにこちら側への投降を要求する。抵抗する場合、こちらも相応の処置で臨む」

「ふう～～～おっかね～～～」

強い口調でフェイトはアクセルに投降を求めつつ、後ろにいるエリオ達四人を気にして心の中でこう呟く。

「（戦闘はなるべく避けて、今はランボたちを保護するのが先決だ。隙を見て、この場を脱出する。この男・・・見た目は軽薄そうだけど、中身は私達が持ってる以上に残忍だろう・・・でなきゃ、命を懸けた戦いで平然と笑っていられるはずがない）」

一滴の汗を額に浮かばせるフェイトの顔が徐々に険しくなると、笑みを崩すことのないアクセルが逆に質問する。

「どうした？かかって来ないのか。こっちの攻撃を警戒してるようなら、先に言っとくわ。男の方から女に手を上げるのは失礼極まりないことだ。あんたが何もしない限り、こっちから手を出すつもりはない」

「そうか。なら、行かせてもらう」

〈Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ〉

フェイトは全力でアクセルを叩きのめす気で、始めから最速の動きを発揮させ、一瞬にしてアクセルの目の前から姿を消し、アクセルは絶えず不敵な笑みを浮かべる。

「へへ」

と、刹那の一時だった。

高速移動したフェイトがアクセルの頭上から、複数の魔力スフィアを構えて一斉に放ってきた。

〈Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ〉

「はっ！」

アクセルは粉塵が上がると同時に、余裕の様子でフェイトの攻撃を回避し、初めて見た魔法と言うものに関心を覚える。

「ほう～」

と、後退するアクセルの背後にフェイトが再び高速移動をしてきた。

「逃げ道はない」

〈Ｆｉｒｅ〉

フェイトはバルディッシュをアクセルに向けると、フォトンランサーの電撃による一撃を発射する。

「悪いけど、終わりだ」

アクセルは不敵な笑みを浮かべたまま、フェイトの放つ電撃を避けるそぶりさえ見せず、そのまま攻撃を受ける。

攻撃の瞬間、粉塵が舞い上がり辺りは何も見えなくなった。

果たして、この勝負の行方とアクセルの実力のほどは如何に！？

◇

〈ユーノチームＳｉｄｅ〉

アクセル対フェイトによる戦いが始まったほぼ同じころ、完現術コ

ンボの力で暴走したライオンクラゲヤミーを撃退したユーノは、なのは達と発見した獄寺を連れて元の転送ポートまで歩きはじめていた。

ツナが負傷した獄寺を担いで移動する傍ら、ユーノは厳戒態勢で辺りを見渡し先頭を歩き続ける。

なのはや京子、ハルと言った女性陣三人は獄寺の怪我を心配し、ツナ自身も改めて容態を聞いてみた。

「大丈夫、獄寺君？」

「はい。奥方の治療のお陰で、大分痛みが引きました」

「本当にありがとうございます、京子ちゃん」

獄寺とハルは京子に感謝の意を表し、京子はそんな二人に笑みを浮かべる。

「うんうん。これぐらいなんでもないよ」

「これで嵐の守護者の保護は完了・・・っと。一先ず、追っても無いようだから、今のうちに六課に戻ろう」

「そうだね。他の班の方はどうしてるだろう？」

「連絡が無いということは、捜索が難航しているか、或いは戦闘中か・・・」

ユーノスがそう口にしてくると、全員の表情が曇り始め、ユーノは

徐に口を開く。

「後者の方は、出来るだけ考えたくないですね」

「うん。スパジオファミリーは、今までのマフィアとはまるで別格の強さを持った新進気鋭の組織なんだ。俺達の主要な武器である死ぬ気の炎や匣兵器を始め、世界中から傭兵として集めたその道のスペシャリストが数多く集まってる。」

「そして、ケリー・バーンズ直属の１３ある部隊の隊長格は、どいつもこいつも人間離れした戦闘力を秘めた、猛者ばかり。中でも、第８部隊・踊る火の風アクセルと１２部隊・非情の姫君の異名をとるラクシーノは、ボンゴレ独立暗殺部隊のヴァリアーの連中でさえ、人目置くほどの手練れだ」

ツナと獄寺の説明を耳にし、ユーノとなのは、ユーノスの三人は顔を見合わせ耳を疑いたくなった。

「そんな奴らと戦闘にでもなったら・・・」

「ひとたまりもないだろうな・・・」

「みんな・・・大丈夫かな？」

不安げな様子でなのはがユーノに尋ねると、ユーノ自身も不安を拭えない顔を浮かべるばかりだ。

「わからない。だけどここは信じよう。そんな危ない状況に遭遇していないことを信じて、早いところ六課に戻ろう。上手くいけば、応援にも駆けつけられる」

「そうだな」

全員の無事を信じて、ユーノ達は来た道を戻っていく。

しかしそれは後に、管理局崩壊へと導く歯車の一つでなかったと思い知らされることになるのだから――――――

◇

〈フェイトチーム〉

さて、ユーノ達が危惧する中、ツナ達ボンゴレの幹部達でさえ恐れおののく人間離れした戦闘力を秘めた第８部隊のアクセルと交戦状態となったフェイトはと言うと、電撃を放ってアクセルに一撃を加える。

粉塵でアクセルの姿が窺えない中、フェイトは確かな手ごたえを感じていた。

「（手応えはあった・・・）」

そう感じながら、立ち込める粉塵を凝視していると、粉塵が晴れていき物陰が映り始める。

そして、煙が完全に晴れてから姿を現す、不敵な笑みを浮かべるアクセル。

「――――なかなか」

「なに?!」

「効いてない!」

フェイトを始め、隠れていた四人は思わず驚愕の表情を浮かべる。

と、ここでアクセルが愕然とするフェイトに自分の名前を名乗り出す。

「ふん。そういや、自己紹介がまだだったな。俺はスパジオファミリー第8部隊隊長のアクセルってんだ。よろしくな」

「く・・・」

「今の攻撃、魔力エネルギーを電気に変換したものだな?成程、確かにあんたら自慢の魔法ってのは・・・実戦じゃ使い物にならないガラクタだな」

「何!」

魔法を否定してくるアクセルの態度に思わず癇癪を起すフェイト。

「俺を殺さなかったのは、誤りだったな。悪いが、俺達(マフィア)の戦いはあんたらが考えてる以上に非情なものだぜ」

それを聞き、フェイトはバルディッシュを強く握りしめると、強い口調で言ってくる。

「非情が恐ろしくて、戦いなんか出来る訳が無い。お前はここで、逮捕する」

「じゃ、俺がその前にあんたを火炙りの刑にしてとっちめるとするか」

一触即発・・・いや、既に戦いのゴングを鳴らしている対照的な考えの二人。

彼女の秘蔵っ子でもあり部下であるエリオとキャロは心底彼女の事を心配する。

「フェイトさん・・・」

同じ様に、イーピンとランボもこの上もない不安を抱く。

「あの人、一人でアクセルと遣り合うなんて・・・無謀だわ！」

「え？それって・・・」

「まぁ、一人はおろか、俺たち全員が束になっても勝てるかどうかわからない・・・そう言う実力の相手なんですよ、アクセルはっ・・・！」

「そんな・・・・・！」

二人の告白に、最早言葉を返すことも出来なくなるエリオとキャロは、じっと前の方に立ちつくしアクセルと対峙するフェイトを見つめるのであった。

と、ここでアクセルが肩を回しながら徐にフェイトに声をかけてくる。

「さてと。じゃ、遠慮なくいかせてもらおうか」

「もうとっくに戦いは始まっているがな」

「ああ、分かってる。だが、この手は・・・諄いな」

と、アクセルが口にした直後、フェイトがあらかじめ仕掛けていたフォトンランサーの連撃がアクセルの死角より飛んでくる。

〈Ｐｈｏｔｏｎ　ｌａｎｃｅｒ〉

複数の魔力スフィアが一斉に打ちこまれ、多量の粉塵が昇る中、アクセルは粉塵の中より飛び上がると、不敵な笑みを浮かべて言ってくる。

「なんとかの一つ覚えか？」

「どうかな」

そう言って、フェイトは性懲りもなく数に物を言わせたフォトンランサーを空中のアクセルに撃ち込む。

「ふん。こんなのは着弾する前に弾き返せる」

アクセルは武器も何も使わず素手でフェイトの攻撃を悉く撃ち落としていくが、フェイトは怒涛の連続攻撃を仕掛ける。

「そんな余裕はない！プラズマスマッシャーッツ！！！」

フェイトは地上から凄まじい威力の直線型の砲撃を発射し、軌道上に浮かぶフォトンランサーを誘爆させて威力を増していく。

「（ほう・・・光弾を誘爆させて、威力倍増か・・・）」

多少関心したアクセルだったが、彼にとっては何ら脅威にはなりえず、砲撃を回避しながら指にはめていた精製度Ａランクを誇る嵐属性のリングから死ぬ気の炎を出し、彼女自慢の魔法を容易に防ぐ。

「はは。」

「炎の障壁!?リングそのものの力なの・・・!?」

フェイトが驚きながらそう尋ねてくると、アクセルはこう返してくる。

「それほど驚くこともないだろ?なんだよなんだよ。ケリーが言う魔導師ってのがどれだけのものか試してみりゃ、てんで話にならないぜこれじゃ」

「く!」

「言っとくが俺に“心”はねぇ。何をしようが別に何とも思わねェンだ。自分にとってのことでもな」

「何?」

「あいつ、一体何を言って・・・」

言葉の意味が分からず怪訝そうな顔を浮かべる五人。

そして、アクセルはフェイトを本気と殺り合うつもりで両手を左右に突き出す。

「じゃそろそろ――――」

唐突にアクセルの掌に集められる死ぬ気の炎とは別のアクセル本来の力から生み出す煌々と燃え上がる赤い炎。

炎が出現し、彼の両手に握られるのは専用のチャクラム。

「しめていくぜ」

「亜空間から武器を・・・！」

「炎を帯びたチャクラム?!」

「あの人は一体・・・！」

死ぬ気の炎以外の別の力を宿したアクセルの能力に唖然とするエリオ達や対峙するフェイトを余所に、アクセルは不敵な笑みを浮かべてチャクラムを構える。

「そう簡単に、やられるなよ」

アクセルは構えを取ると、持っていたチャクラムを地面に投げつけ、フェイトはそれに警戒する。

「なんだ?」

すると、何かに気付いた様子でランボが声を荒げる。

「フェイト氏！気を付けて！」

と、忠告した時、フェイトの足元からアクセルのチャクラムから送り込んだ彼自身が持つ炎と混ざった嵐属性の赤い炎が昇り上がり、フェイトはその炎の中で絶叫する。

「ぐうううう！あああああ！！」

「「フェイトさん！」」

「いけない！」

アクセルは苦しむ姿のフェイトを頭上で窺いながら、右肩と左肩を順に回す。

「どうだい？ブレイズフィールドの御味は――――天国の扉は見えたか？」

そう言って、アクセルは指を鳴らしてブレイズフィールドを解除する。

「うっ・・・」

フェイトは絶大な威力を秘めたブレイズフィールドの一撃を受け、バリアジャケットを焦がした状態でその場に倒れる。

「フェイトさん！！」

「へへ」

アクセルは笑みを浮かべながら、地面に突き刺さったチャクラムを手元に戻し、うつ伏せとなって倒れるフェイトの方をじっと見つめる。

すると、先ほどまで倒れていたフェイトが傷ついた体でゆっくりと起き上り始め、険しい顔でアクセルに尋ねる。

「地面に向けて流し込んだ炎を・・・地表で発火させたのか・・・!?」

「正確には、俺自身が生み出すノーバディの力に嵐の死ぬ気の炎を混ぜたものだがな」

「ノーバディの・・・力・・・?!」

「そっちの方は詳しく言うことはできねぇが、嵐属性の死ぬ気の炎の特徴は『分解』って言ってな、有機物の細胞を崩壊させる作用がある。その分じゃ、傷の治りも遅いだろうな」

「く・・・お前・・・・!」

「そこんとこ味わって、死ぬ一時まで俺の名前・・・記憶しておけよ」

アクセルは再びチャクラムを構えると、フェイトの足元目掛けて投げつける。

「（く。何度も喰らうものか!）」

と、思った直後だ。

「ストラーダ！」

〈Ｓｐｉｒｅ　ｓｔｏｒｍ〉

待機していたエリオが前に飛び出し、電気を帯びたストラーダの先端を地面に突き刺し、スパークをさせると飛んでくるアクセルのチャクラムをそれによって吹き飛ばし、更にはあの腰抜けと称されるランボが武器である牛の角を頭に付けて、電撃を帯びたそれでアクセルの方へと飛び上がる。

「電撃角（エレットゥリコ・コルナータ）！」

１００万Ｖと自称する凄まじい電圧を秘めたランボの角が向けられると、アクセルは容易くそれを回避し、チャクラムを回収する。

フェイトはこの二人の援護に思わず唖然とする。

「エリオ！ランボも！」

「エリオ君！」

「ランボもダメ！危険だよ！」

キャロとイーピンも同様の事を口にするが、二人の意志は固かった。

「悪いけどイーピン。女性ばかりに戦いを任せるのは、男として恥ずべき行為だと思うんだよね」

「僕達がフェイトさんを守ります！」

「へぇ～泣かせるね」

アクセルがそう言いながら二人の厚い行為に笑みを浮かべると、エリオとランボは前に出て来、アクセルに顔を向ける。

「選手交代だ。ここからは僕らがお前の相手になる」

「これ以上、女性への横暴を見ているのは、どうにも腹の虫がおさまらないんでね」

「はは。いや～～～中々に甘ったるいぜ。俺は好きだけどな・・・そりゃ、若い頃は有無を言わさず瞬殺決めて来たけどな・・・歳を取ると相手の話を聞くのも悪くないと思えてくる。じゃねぇと、殺った相手の顔を忘れちまうだろ？」

「（余裕のつもりか・・・？！）」

「（やはりこの男の相手をするのは、一筋縄じゃいかない・・・！）」

二人の顔が一掃険しくなる中、アクセルはチャクラムを構える。

「お前たちの事は忘れないと良いな。精々、この闘いが終わるまで記憶しておくぜ」

「行くよ、ランボ！」

「じゃ、決めますか」

二人が決め込んだ直後、アクセルは構えたチャクラムから炎を発生させ、それを二人に向けてぶつけてくる。

エリオとランボは一先ずその炎を回避し、先ずはエリオが高く飛び上がって槍を構える。

「（ほう。お前の武器は槍か）」

「ストラーダ！」

〈Ｓｅｃｏｎｄ　ｍｏｄｅ〉

ストラーダのセカンドモードを発動させ、一気に加速しアクセルの元まで飛び上がったエリオは更にカートリッジを消費し、電気を帯びた先端から斬撃を飛ばす。

「でやあああああああ！」

エリオの電撃の斬撃がアクセルに向けられると、アクセルは笑みを浮かべながら右手のチャクラを高速回転させて攻撃を凌ぐ。

「先端に電気を溜めこんでそいつを斬撃にして飛ばすか。なかなかに良い攻撃だ」

と、その時もう一人の雷の男、ランボが頭にセットした角に雷を帯電させる。

「サンダーセット！」

その瞬間、頭上から角へと降り注ぐ雷鳴。
雷を帯びたランボの角を一瞥し、アクセルは彼の動きを捕える。
「喰らえ！電撃角！！」
「なんだよ。今日は電気ばかりが飛んで来るな。天気予報じゃ、晴だって言ってたんだけどな」
アクセルは咄嗟にもう片方のチャクラムでランボごとその雷撃を受け止める。
「何！？」
「リーチが短すぎんだよ」
そう言って、アクセルは蹴り技でランボを撃墜させる。
「ぐああ！」
「ランボ！」
「危ない！」
このままではランボは数百キロにも及ぶ反動を受けて再起不能となりかねない。
すると、これを見たキャロがホールディングネットを展開。

〈Ｈｏｌｄｉｎｇ　ｎｅｔ〉

ランボは落下地点に施されたホールディングネットのお陰で、大事には至らずに済んだ。

「ふう～～～」

アクセルは未だ余裕の笑みを崩さずエリオを凝視する。

と、ここで復活したフェイトがザンバーフォームで切りかかってくる。

「はあああああ！」

向かって来るフェイトの斬撃を、アクセルは他愛もなくチャクラムで受け止める。

「甘いね。甘すぎてゲロ吐きそうだ」

もう片方のチャクラムを甘い考えのフェイトの身体に叩き込む。

「がああ！」

急所は外したものの、腹部を切りつけられ負傷するフェイト。

エリオはフェイトの仇を取らんとばかりにアクセルの頭上から電気を帯びた拳を振り下す。

「紫電一閃！」

「無駄だ」

直後、アクセルが嵌めていた嵐のリングから真っ赤な炎が飛び出し、彼はその炎の一撃を受けて撃墜される。

「ぐっは・・・！」

二人が次々と手にかけられると、キャロとイーピンが前に飛び出し攻撃を繰り出す。

「ウィングシューター！」

「あいやーーー！！」

「全員参加か。そいつも悪くネェな。」

そう言って、両方のチャクラムをブーメランの要領で飛ばすアクセル。

「「うわああ！」」

「どっち道、結果は同じだけどな」

二人はチャクラムの一撃受け、呆気なく倒される。

「まだまだっ！！」

だがしかし、ランボはこの圧倒的な敵の力を前に一人果敢に立ち向かおうと、アクセルの元へと走り出す。

「ランボ！」

ランボは地面に降り立ったアクセルに躊躇なく、それこそ牡牛の様に突進する。

「そいつは勇気とは言わねぇ。無謀ってもんだ・・・雷の守護者。お前の攻撃は効かないんだぜ」

「減らず口が何時までも、利くと思うな！牛丼！」

ランボはまるで四次元ポケットの様になんでも収納できる髪の毛から雷のヘルムを取出し着用すると、ボンゴレのエンブレムから雷属性の炎を帯びた巨大な牡牛、雷牛Ｖｅｒ．Ｘ（ブーファロ・フールミネ　バージョン・イクス）を召喚する。

「！（雷属性の匣アニマル・・・）」

「うおおおおおおお！！！」

ランボは牛丼と共に雷を帯びた角を携え突進し、アクセルはその無謀行為に声を荒げる。

「効かねぇって言ってるだろ！」

チャクラムから炎を発生させてランボに仕掛けるアクセル。

ランボは炎を恐れずただ只管に突っ込んで行く。

「ランボ様を舐めるなっ！」

そして、牛丼とシンクロさせたランボの電撃がアクセルに向けられる。

咄嗟に嵐の炎で防御するアクセルも、これほどまでに鋭く硬い性質の雷の炎と正面からぶつかり合ったのは初めてだった。

「く・・・！（凄まじい電撃だ・・・思った以上に堪えるぜ）」

このランボの勇猛果敢な姿と技の威力には、フェイトやイーピンも驚きを見せる。

「す、凄い・・・！」

「ランボ・・・」

「今です！エリオ氏！」

「うん！」

ランボからの合図を受け、エリオはカートリッジを二発ロードする。

〈Ｌｉｇｈｔｉｎｇ　ｔｏｒｎａｄｏ　ｓｐｉｒｅ〉

「喰らえっ！ライトニング・・・！」

ストラーダの先端に溜められる先ほどよりもずっと高位力で切れのある雷の魔力。

「！」

「トルネードスピア！！」

アクセルの懐に飛び込んだエリオは至近距離から、キレのあるその一撃を容赦なく叩き込み、アクセルを切り伏せる。

「のあああ！」

切り伏せられたアクセルは宙を舞い、放物線を描きながら地面へと落下する。

アクセルがエリオの一撃によって倒されると、呆然としながらキャロやイーピンは歓喜の笑みを浮かべる。

「や・・・やった！」

「うそ！？あのアクセルを・・・！」

二人は勇猛果敢に立ち向かった二人の男の元へと駆け寄り、フェイトはその傍らまた一段と強く逞しくなったエリオを温かく見守る。

「エリオ・・・（本当に、この子はどこまでも強くなった・・・いや。もっともっと）」

ランボは焦げた顔を気にしながら、息の合ったコンビネーションでアクセルを昏倒させたエリオと握手を交わす。

「やりましたね、エリオ氏」

「うん。ちょっと、焦ったけどね」

「ランボ凄い！私見直しちゃった！」

「ま、俺様の手にかかればなんてことはないさ。アクセルを倒したって言えば、ボンゴレもさぞ腰を抜かすと思うけど」

と、自慢げな顔を浮かべるランボだったが、その時キャロが信じられないとばかりの愕然とした表情を浮かべて目を見開いた。

「！」

「キャロ？」

「危ない！伏せて！！」

キャロはエリオ達を守ろうと突き放したが、その直後に足元から上がる凄まじい炎に彼女は絶叫する。

「きゃあああああ！！」

「キャロ！！！」

「何！？」

「これは・・・！」

訝しげな顔を浮かべるフェイトとイーピン。

と、その直後に彼女たちの足元からもまた炎が立ち上り、二人は火の車に包まれる。

「「がああああ！！」」

「フェイトさん！」

「イーピン！」

炎による一撃を受け、二人はキャロと共にその場に倒れ伏す。

「「が・・・」」

エリオとランボは唖然としながら、大切な人達が力なく倒れていく様子に涙目となりながら膝をつく。

「ふぇ、フェイトさん・・・キャロ・・・！」

「そんな・・・どうして？」

そう思ったとき、夢にも思っていなかった声が聞こえてくる。

「正解だったぜ。普通の奴に対してならな」

二人が耳を傾け振り返った瞬間、飛び込んできたのは無傷の様子で立ち尽くすアクセルだった。

「アクセル！？」

「（そ、そんな・・・何故！？）」

未だ信じられないでいる二人に、アクセルは不敵な笑みを浮かべて言ってくる。

「名乗った直後にやられちまうほど、俺はマヌケじゃないってことさ」

「試したってことか？」

「そいつも正解。合格だよ、エリオ。お前には力がある。運命を切り開き未来を変える力が」

「どういう意味だ？！」

「そう喧騒を浮かべるな。楽しくやろうぜ」

そう言って、アクセルが指を鳴らすと、エリオの背後から炎を帯びたチャクラムが飛んで来、ランボは声を上げる。

「エリオ氏！！」

エリオがそれに気づいて振り返った瞬間、チャクラムの一撃がエリオの身体に突き刺さる。

「があああああ！！」

「エリオ氏っつ！！」

「おっと、余所見はするなよ」

すると、もう片方のチャクラムがランボの元へと投げつけられ、ランボは回避不可能なその一撃をまともに食らってしまう。

「だあああああ！」

二人を圧倒し、この場にいる魔導師とマフィア関係者を手に掛けたアクセルは、チャクラムを手に戻してから、余裕の笑みで言ってくる。

「つっても、その運命の先に待っているのは結局のところ・・・死だ」

「う・・・」

「ここまでか・・・」

「最期だ。死ぬ一時まで俺の頭に記憶しておくぜ」

アクセルはそう言うと、女性陣には手を付けず、エリオとランボだけを標的とし、徐に歩み寄ると、チャクラムから炎を巻き上げそれを竜巻状にして二人に仕掛ける。

「「ぐあああああ！！」」

二人の絶叫を耳にし、意識を取り戻した三人が涙目で声を上げる。

「「エリオ（君）／／／／」」

「ランボ！！」

二人は炎に包まれ爆発を伴うとそのまま宙を舞っていくが、その時偶然にもランボの髪の毛から紫色のバズーカらしきものが飛び出し、それは二人が地面に叩きつけられると同時に暴発し、辺りは煙に包

まれる。

「ふふ・・・――」

不敵な笑みを浮かべながら煙の方へと目を向けるアクセルと、フェイト達。

と、その時・・・その煙が晴れていくとともに、これまで感じたことのない威圧感と共に、只ならぬ電気を帯びた二つの物陰が見えてきた。

「ん？」

「なんだ・・・この只ならぬ威圧感・・・何が起きてるの？」

イーピンは見えてくる二人の物陰を見ながら、呆気にとられた声を上げる。

「あれは・・・まさか・・・・・・！」

そして、アクセルもまたその二人の物陰に対して声をかける。

「おいおい。何の冗談だよ？誰だよ・・・お前ら？」

「（ランボとエリオさんが十年バズーカを使った・・・と言うことは、あの二人は！？）」

イーピンが確信を持った様子で明確に見えてきたその二人に目を向けると、煙の向こう側から姿を見せたのは、ランボとエリオには違いないが現在とは比べ物にならないほどのただならぬ威圧感に満ち

た男となっており、容姿や身長もまたより大人となった全身に雷を帯びている二人組だ。

「「――――・・・」」

全員が現れた二人に注目する中、ただならぬ威圧感を纏わせる二人は辺りを見渡し、その後で徐に低い声で声を発する。

「――――やれやれ。この現象・・・夢でないとすれば、随分久しぶりに十年バズーカで過去へ来たようだ」

「そのようだな。もっとも、僕の方はこれが初めての経験だけど」

二人は目の前で立ち尽くすチャクラムを肩に乗せるアクセルを見据え、フェイトとキャロに至っては目を点した状態で二人を見つめていた。

「もしかしてあれって・・・」

「エリオ・・・!?それにあれはランボ・・・・・・・なんか、逞しいけど・・・何が起こったの?」

「十年バズーカを使ったんです」

「十年バズーカ?」

「ランボが持ってる、今の自分と十年後の自分を五分間だけ入れ替える道具・・・そして、あそこにいる二人が、十年後のランボとエリオさんです!」

「「え・・・えええええ！！！」」

これには流石の二人も声を上げて素直に驚き返る。

と、フェイトとキャロの甲高い声を耳に入れると、十年の年月を得て大人となったエリオとランボが振り返り顔を綻ばせる。

「何て懐かしい光景だ。泣きそうになる」

「ああ。それに、子供時代のハニーもどうやら元気そうだ」

「え／／／／／／」

大人エリオの思わぬ一言を耳にした瞬間、キャロは顔中を赤く染め上げる。

「だが、感傷に浸ってるのは後回しだ。野蛮そうなのが、目の前に立っている」

「そうだな――――」

二人が今一度アクセルの方へと見据えると、アクセルはかなり興味を持った様子で二人に不敵な身を浮かべてくる。

「はっ。誰でもいいさ、この際。この殺し合い――――――――もう少し楽しませてくれよ」

今ここに起こった二つの奇跡。

大人ランボ&大人エリオの参戦で、この闘いはどんな結末を迎えるのか！？

次回を待て！！

アホ牛と雷（後書き）

教えて、ユーノ先生！

ユ「今日は雨の守護者の山本武についてだ♪」

「時雨蒼燕流という古流剣術の後継者であり、アルコバレーノ・リボーンからは生まれながらのヒットマンと称されるほどの戦闘センスを持っていて、ボンゴレ守護者の中でも指折りを数えるほどの手練れだ」

「連れている匣アニマルは雨燕と秋田県の次郎こと、雨犬。戦いを清算し全てを洗い流すという意味では正に雨の守護者としての体現を成しているね」

山「ははは。つっても、お前が紹介したような大層なもんじゃねェさ。鎮魂歌の雨なんて聞こえはいいが、実際は血の雨そのものだからな・・・」

ユ「う・・・なんか山本さんにしては随分と暗い話題ですね・・・ほら！どうせなら野球の話しましょうよ♪」

山「お、それもそうだな。いや実はさ、最近のプロ野球を見てて思うんだけどな・・・」

と、ユーノのこの発言に火がついたのか、山本は一人で野球についての独断を始め、気がつけば既に既定の時間をオーバーし、それでも飽き足らず彼は延々と話を続ける。

山「でな、そこでホームランをバボーンッとな！」

ユ「すみませんが、その辺で勘弁してくれるかい・・・」

ユーノ自身、顔がげっそりとしてしまうのであった。

ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活

ハ「はい！みなさまお待ちかねの、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活のコーナーです！」

リ「今日は見なくてもいいぞ。見てるだけで辛気臭くなっちまう」

ハ「そんな風に決めつけるのはよくないですよ、リボーンちゃん。では、本日のゲストは恋次さんの副官で霊術院時代の同級生でもある三番隊副隊長、吉良イヅルさんです」

ハルの紹介と共に、ゴンドラに乗った吉良が下りてくる。

吉「あ、どうも・・・初めまして」

少々緊張気味の吉良だが、リボーンはそんな彼の第一印象をこう表現する。

リ「きのこよりもじめじめした奴だな。恋次とはまるで正反対奴だ」

ハ「ハヒ！いくらなんでもその評価はシビアですよ、リボーンちゃん！？」

吉「ああ・・・いや別に気にしてないから。性格が暗いのは生まれ

つきだし・・・」

と、吉良が何かを口にするたびに暗いオーラが漂うと、リボーンとハルのテンションも徐々に下がっていく。

リ「う・・・急にテンションが落ちてきやがったぞ・・・」

ハ「は、ハヒ・・・どうしてでしょう・・・何か悪いことをしたわけでもないのに悲しい気持ちになります・・・／／／」

吉「すみません・・・僕って自然とそう言うオーラ出しちゃうんですよね・・・」

話しが進まなくなりそうなので、ここで助っ人登場。

ユ「やれやれ。ここは僕の出番かな」

リ「お・まともな奴が来てくれたぞ」

ハ「ハヒ！ナイス助っ人ですユーノさん。この暗い雰囲気を調和できるユーノさんの御力をハル達にレントしてください！」

ユ「はは。こんな僕なんかでいいなら・・・じゃ、これは恋次さんからの質問。『お前はなんでそこまで暗いイメージなんだろうな？』ですって」

吉「酷いこと言うな阿散井君も・・・僕だって好きでこんな風に見られてる訳じゃないんだ。問題なのは声優の喋り方だと思うんだ。」

リ「確かにそれは言えてるかもな。同じ声でも、金色のガッシュベ

ルとじゃえらい違いだからな」

ハ「えっと・・・どれくらい違うんですか？」

吉「吉良イヅルの声だと・・・ああ・・・／／／とため息が多い感じがするでしょ。これを高峰清麿の声にすると・・・ガッシュ！！！てめぇ何やってんだ！！！！って感じになる」

ハ「ハヒ！！まるでキャラクターが違ってます！ちょっと心臓にビビッド来ました！」

リ「ビビッドって擬音で思い出したが、ユーノとヴィヴィオは同じ声なんだろ？その顔でヴィヴィオの声やったらどうなるんだ？」

ユ「え！いや・・・／／／それは流石にちょっと抵抗があるような・・・／／／」

吉「折角なんですから、やってくださいよ。僕だってやったんですから♪」

ハ「聞きたいです！ユーノさんの声で言うヴィヴィオちゃんの声！」

ユ「う・・・・・まぁそこまで言うなら仕方ない。一度きりだから聞き逃さないように注意して聞いてください／／／／／／」

ハル達はそれを聞き、拍手を送るとユーノの第一声に注目する。

ユーノは照れ隠しをしながら、咳払いをし声を上げる。

ユ「『なのはママ！！！大好き！！！』」

と、それを口にした瞬間、なのはが弾丸のように飛びついてきた。

な「ヴィヴィオ!!私も大好き!!!」

ユ「ぐおおお!!」

ユーノはその勢いに圧倒され、腰を痛める。

ハ「ハヒ!ロケットが飛んで来ました!?」

リ「んな訳ねぇだろ。それに見合うほどの勢いではあったがな」

吉「ある意味殺人的な言葉だった・・・」

ハ「は、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす・復活、また次回!シーユー、アッゲインですー!」

ユ「ぐおおお・・・腰が・・・」

な「にゃはは???」

次回予告

リ「絶体絶命と思われた時、十年バズーカから現れたのは、十年後のランボと同じく十年後のエリオだった」

「十年の月日を経て、洗練された技と力でアクセルに立ち向かう二人。そして、ヴォルケンの連中もまた、スパジオファミリーの連中と戦闘に入ったようだが、逆境を跳ね返す男はエリオとランボだけ

じゃなかった。

「次回、ユーノ・スクライア外伝・絆・・・『二十年目の反撃』。
みんな、死ぬ気で見ろよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7097x/

ユーノ・スクライア外伝・絆

2011年12月18日14時55分発行